岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 724 集

高根（こうね）遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊）
本文編

２０２１

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

高根遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊）

本文編

遺跡遠景

北尾根上の土坑群　（東から）

出土遺物集合写真

Ⅲ群土器

Ⅳ群土器

SK80 一括出土土器

SK105 一括出土土器

SK229 一括出土土器

SK471 一括出土土器

北陸系土器

石棒

石皿・台石類

玉類

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設に関連して、平成 26・27・28 年度に発掘調査を実施した高根遺跡の成果をまとめたものです。

これまでの調査とあわせてみると、縄文時代中期を中心とする時期の大規模な集落が存在したことが明らかになりました。とくに急な斜面に作られた貯蔵穴は 440 基を超え、近年まれに見る規模の遺構数となっています。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省三陸国道事務所や宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和３年３月

公益財団法人岩手県文化振興事業団

理 事 長　高 橋　嘉 行

例　　言

1　本報告書は、岩手県宮古市山口 11 地割内に所存する高根遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は「三陸沿岸道路」建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺産登録台帳におおける遺跡コード、遺跡略号は次のとおりである。

遺跡コード：LG23-1253　遺跡略号：KN-14、KN-15、KN-16

4　発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。

【平成 26 年度】　調査機関：平成 26 年４月９日～平成 26 年 11 月 14 日　面積 2,690 ㎡
担 当 者：西澤正晴・光井文行・中島康佑・久保友咲

【平成 27 年度】　調査機関：平成 27 年４月 17 日～平成 27 年 12 月 11 日　面積 5,470 ㎡
担 当 者：西澤正晴・河本純一・中島康佑・佐藤　剛・菊池貴広・白戸このみ・米田　寛・中村隼人・高橋静歩・久保友咲・近藤行仁・酒井野々子

【平成 28 年度】　調査機関：平成 28 年４月７日～平成 28 年 10 月 17 日　面積 2,300 ㎡
担 当 者：西澤正晴・河本純一・中島康佑・野中裕貴・松政里奈・高木晃・村木　敬・米田　寛・溜　浩二郎・立花雄太郎・佐藤奈津季・佐々木昭太・佐々木正樹

5　室内整理期間・担当者は次のとおりである。

【平成 26 年度】　調査機関：平成 26 年 11 月１日～平成 27 年３月 31 日
担 当 者：西澤正晴・光井文行・中島康佑・久保友咲

【平成 27 年度】　調査機関：平成 27 年５月１日～平成 28 年３月 31 日
担 当 者：西澤正晴・河本純一・佐藤　剛・中島康佑・近藤行仁

【平成 28 年度】　調査機関：平成 28 年４月１日～平成 29 年３月 31 日
担 当 者：西澤正晴・河本純一・中島康佑

【平成 29 年度】　調査機関：平成 29 年４月１日～平成 30 年３月 31 日
担 当 者：丸山直美

【平成 30 年度】　調査機関：平成 30 年４月１日～平成 31 年３月 31 日
担 当 者：丸山直美

【平成 31/ 令和元年度】　調査機関：平成 31 年 / 令和元年４月１日～令和２年３月 31 日
担 当 者：西澤正晴

【令和２年度】　調査機関：令和２年４月１日～10 月 30 日
担 当 者：西澤正晴

6　本書は４分冊の構成で、内訳は以下の通りである。

第１分冊・・・本文　　第２分冊・・・遺構図版

第３分冊・・・遺物図版・観察表　　第４分冊・・・写真図版

7　本書の執筆は下記の通りである。編集は西澤が行った。

Ⅰ：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

Ⅱ～Ⅲ：西澤

Ⅳ：各分担執筆者（光井・河本・丸山・中島・久保・佐藤・西澤・野中)、文末に明記

Ⅵ：各分析機関

Ⅴ・Ⅶ・上記以外：西澤

8　野外調査・室内整理に関わる一部の業務は以下の機関に委託した。

基準点設置　・・・・・・・・・・（株）鈴木測量設計

航空写真　・・・・・・・・・・東邦航空株式会社

遺構平面図（野外調査）・・・・株式会社岩手測器社

石器・石製品の石材鑑定　・・・花崗岩研究会

土器実測の一部（PEAKIT）・・・（株）ラング

石器・石製品の実測　・・・・・（株）ラング

土器洗浄　・・・・・・・・・・（公財）奥州市埋蔵文化財調査センター

骨・貝類の分析　・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素年代測定　・・・・・株式会社加速器分析研究所

土壌分析（軟Ｘ線）・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

鉄滓分析　・・・・・・・・・・株式会社古環境研究所

種子分析　・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

9　遺物番号は、種別にかかわらず連番を付している。写真図版に記した番号は本文中の遺物番号に対応する。

10　現地調査にあたっては、世界測地系　平面直角座標系Ｘを基準に準拠した。本書で用いる方位は国土座標に基づく座標北を示す。標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。

11　土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

12　本文や図版に関わる凡例については、第Ⅲ章第２項（３）に記載している。

13　調査にあたり、下記の方々及び機関のご教示・協力を得た（敬称略・五十音順、所属は当時)。

宮古市教育委員会　高田和徳（一戸町教育委員会）　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）　岡村道雄　八木勝枝・丸山浩治・川又晋・羽柴直人（岩手県立博物館）　斉藤慶吏（青森県教育委員会）　長沼　孝（北海道埋蔵文化財センター）　高橋憲太郎・竹下将男・鎌田祐二・安原　誠・江口邦泰（宮古市教育委員会）　伊藤正人（当時宮古市教育委員会へ派遣　名古屋市教育委員会）　梶原義実（名古屋大学）　岩田貴之（北上市教育委員会）　加藤修司（千葉県現代産業博物館）　村山好文（前香取郡市埋蔵文化財センター）　山本直人（名古屋大学）

14　調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

15　今回の調査に関わる成果についてはこれまで公表された資料がいくつかあるが本書が優先する。

目　次（第１分冊）本文編

巻頭カラー
序
例　　言

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
1　遺跡の位置と概観 …… 2
2　周辺の地理・地形的環境 …… 2
3　周 辺 の 遺 跡 …… 5
4　これまでの調査 …… 9

Ⅲ　調査と整理の方法 …… 11
1　野　外　調　査 …… 11
2　室　内　整　理 …… 18

Ⅳ　検　出　遺　構 …… 26
1　検出遺構の概要 …… 26
2　基　本　層　序 …… 27
3　縄文時代の遺構 …… 29
4　縄文時代以降の遺構 …… 204

Ⅴ　出　土　遺　物 …… 207
1　出土遺物の概要 …… 207
2　遺 物 の 分 類 …… 207
3　縄　文　土　器 …… 217
4　石器・石製品 …… 274
5　縄文時代の土製品 …… 283
6　縄文時代の貝製品・骨角器 …… 285
7　中世以降の遺物 …… 286

Ⅵ　自然科学分析 …… 288
1　分析の概要 …… 288
2　高根遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） …… 291
3　高根遺跡出土の琥珀産地同定 …… 298
4　高根遺跡出土ヒスイ化学分析 …… 304
5　高根遺跡出土炭化種実同定 …… 309
6　高根遺跡出土の動物遺存体・貝類について …… 329
7　高根遺跡の黒曜石産地推定 …… 356
8　高根遺跡の炭化材同定 …… 363
9　高根遺跡における堆積物の微細形態分析 …… 365
10　高根遺跡出土鉄滓等遺物化学分析 …… 374

Ⅶ　総　　括 …… 397
1　出土土器について …… 397
2　遺構について …… 442

報告書抄録 …… 460

（第２分冊）遺構図版編

（第３分冊）遺物図版・遺物観察表編

（第４分冊）写真図版編

図 版 目 次

第１図　遺跡の位置１ …… 1
第２図　遺跡の位置２ …… 3
第３図　地形分類図 …… 4
第４図　調査区の位置と周辺地形 …… 6
第５図　調査区の地形 …… 7
第６図　周辺の遺跡 …… 8
第７図　グリッド配置 …… 11
第８図　2015 年度重機稼働 …… 12
第９図　遺構検出作業１ …… 12
第10図　遺構検出作業２ …… 13
第11図　包含層の調査 …… 13
第12図　包含層土器出土状況 …… 14
第13図　測量風景１ …… 14
第14図　測量風景２ …… 15
第15図　2014 年度風景１ …… 15
第16図　2014 年度風景２ …… 16
第17図　2015 年度風景 …… 16
第18図　2015 年度ベルコン設置 …… 17
第19図　2015 年度足場設置状況 …… 17
第20図　2016 年度作業風景１ …… 18
第21図　2016 年度作業風景２ …… 18
第22図　遺構配置図 …… 24・25
第23図　基本土層 …… 28
第24図　土坑断面の分類模式図 …… 74
第25図　器形分類図 …… 208
第26図　暦年較正グラフ（１） …… 295
第27図　暦年較正グラフ（２） …… 296
第28図　暦年較正グラフ（３） …… 297
第29図　高根遺跡琥珀写真 …… 298
第30図　Si-Al 図 …… 301
第31図　Ｓ-Si 図 …… 301
第32図　Ｋ-Ca 図 …… 302
第33図　Ｔ－１　琥珀遺物 …… 302
第34図　Ｔ－２　琥珀遺物 …… 303
第35図　Ｔ－３　琥珀遺物 …… 303
第36図　2480　包含層３出土 …… 304
第37図　2477　SI22A・B・C 出土 …… 304
第38図　2479　包含層２出土 …… 304
第39図　ヒスイ輝石参考データ …… 305
第40図　高根遺跡石製品（2480） …… 306
第41図　高根遺跡石製品（2474） …… 307
第42図　高根遺跡石製品淡緑色部分（2477） …… 308
第43図　炭化種実（１） …… 327
第44図　炭化種実（２） …… 328
第45図　ウマ骨格各部の名称 …… 330
第46図　SK60 出土イソシジミ・ヤマトシジミの殻長・殻高分布 …… 344
第47図　SK60 貝類出現頻度 …… 350
第48図　ウニ綱・腹足綱 …… 351
第49図　二枚貝綱・顎脚綱 …… 352
第50図　硬骨魚綱（１） …… 353
第51図　硬骨魚綱（２）・両生綱・爬虫類綱・鳥綱 …… 354
第52図　哺乳綱 …… 355
第53図　黒曜石産地一覧（淡色の産地は今回の判定対象外の地域） …… 358
第54図　黒曜石産地推定結果（１） …… 360
第55図　黒曜石産地推定結果（２） …… 361
第56図　木材 …… 364
第57図　調査地点および試料採取位置 …… 370
第58図　試料断面の主な孔隙・間隙 …… 371
第59図　試料およびＸ線写真（１） …… 372
第60図　試料およびＸ線写真（２） …… 373
第61図　鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の顕微鏡組織 …… 377
第62図　Ｘ線回折結果（TKN-１、TKN-２） …… 378
第63図　鉄塊系遺物・流動滓の顕微鏡組織 …… 382
第64図　Ｘ線回折結果（TKN-３、TKN-４） …… 383
第65図　炉内滓・炉壁（含鉄）の顕微鏡組織 …… 385
第66図　Ｘ線回折結果（TKN-５、TKN-６） …… 386
第67図　流動滓の顕微鏡組織 …… 388
第68図　Ｘ線回折結果（TKN-７、TKN-８） …… 389
第69図　炉壁の顕微鏡組織 …… 391
第70図　Ｘ線回折結果（TKN-９、TKN-10） …… 392
第71図　炉壁・鉄塊系遺物の顕微鏡組織 …… 394
第72図　Ｘ線回折結果（TKN-11、TKN-12） …… 395
第73図　縄文土器集成図（１）　Ⅱ群１類 …… 408
第74図　縄文土器集成図（２）　Ⅱ群２類 …… 409
第75図　縄文土器集成図（３）　Ⅱ群２類 …… 410
第76図　縄文土器集成図（４）　Ⅱ群２類 …… 411
第77図　縄文土器集成図（５）　Ⅱ群２類 …… 412
第78図　縄文土器集成図（６）　Ⅱ群１類・２類 … 413
第79図　縄文土器集成図（７）　Ⅱ群３類／Ⅲ群１類 …… 414
第80図　縄文土器集成図（８）　Ⅲ群１類 …… 415
第81図　縄文土器集成図（９）　Ⅲ群２類 …… 416
第82図　縄文土器集成図（10）　Ⅲ群３類 …… 417

第83図　縄文土器集成図（11）　Ⅲ群３類 …… 418
第84図　縄文土器集成図（12）　Ⅲ群３類 …… 419
第85図　縄文土器集成図（13）　Ⅲ群３類 …… 420
第86図　縄文土器集成図（14）　Ⅲ群３類 …… 421
第87図　縄文土器集成図（15）　Ⅲ群３類 …… 422
第88図　縄文土器集成図（16）　Ⅲ群３類 …… 423
第89図　縄文土器集成図（17）　Ⅲ群４類 …… 424
第90図　縄文土器集成図（18）　Ⅲ群４類 …… 425
第91図　縄文土器集成図（19）　Ⅲ群４類 …… 426
第92図　縄文土器集成図（20）　Ⅲ群５類 …… 427
第93図　縄文土器集成図（21）　Ⅳ群１類 …… 428
第94図　縄文土器集成図（22）　Ⅳ群２類 …… 429
第95図　縄文土器集成図（23）　Ⅳ群３類 …… 430
第96図　縄文土器集成図（24）　Ⅳ群３類 …… 431
第97図　縄文土器集成図（25）　Ⅳ群３類 …… 432
第98図　縄文土器集成図（26）　Ⅳ群３類 …… 433
第99図　縄文土器集成図（27）　Ⅳ群３類 …… 434
第100図　縄文土器集成図（28）　Ⅳ群３類 …… 435
第101図　縄文土器集成図（29）　Ⅳ群３・４類 …… 436
第102図　縄文土器集成図（30）　Ⅴ群１・２類 …… 437
第103図　縄文土器集成図（31）　Ⅴ群２類 …… 438
第104図　縄文土器集成図（32）　Ⅴ群３類 …… 439
第105図　縄文土器集成図（33）　Ⅴ群３・４類 …… 440
第106図　縄文土器集成図（34）　Ⅴ群１・２・３類 …… 441
第107図　底面積分布 …… 451
第108図　堆積状況の推類 …… 452
第109図　時期別変遷図１ …… 455
第110図　時期別変遷図２ …… 456
第111図　高根遺跡の空間利用想定図 …… 457

表　目　次

第１表　ピット計測表 …… 200
第２表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値） …… 291
第３表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代） …… 293
第４表　琥珀元素化学分析表 …… 299
第５表　炭化種実同定結果 …… 314
第６表　炭化種実出土状況 …… 324
第７表　主な炭化種実の計測値 …… 326
第８表　検出分類群一覧 …… 331
第９表　動物遺存体・貝類同定結果 …… 332
第10表　SK60 出土イソシジミ計測結果 …… 342
第11表　SK60 出土ヤマトシジミ計測結果 …… 343
第12表　遺構別貝類最小個体数 …… 345
第13表　遺構別貝類以外の最小個体数 …… 347
第14表　黒曜石原産地試料一覧 …… 357
第15表　スペクトル強度と判別指標値 …… 359
第16表　黒曜石判定結果 …… 359
第17表　樹種同定結果 …… 363
第18表　供試材の履歴と調査項目 …… 374
第19表　供試材の化学組成 …… 379
第20表　出土遺物の調査結果のまとめ …… 380
第21表　文様の組み合わせ一覧 …… 399
第22表　竪穴建物一覧表 …… 444
第23表　土坑（貯蔵穴）一覧表 …… 445

Ⅰ　調査に至る経過

1　発掘調査に至る経過

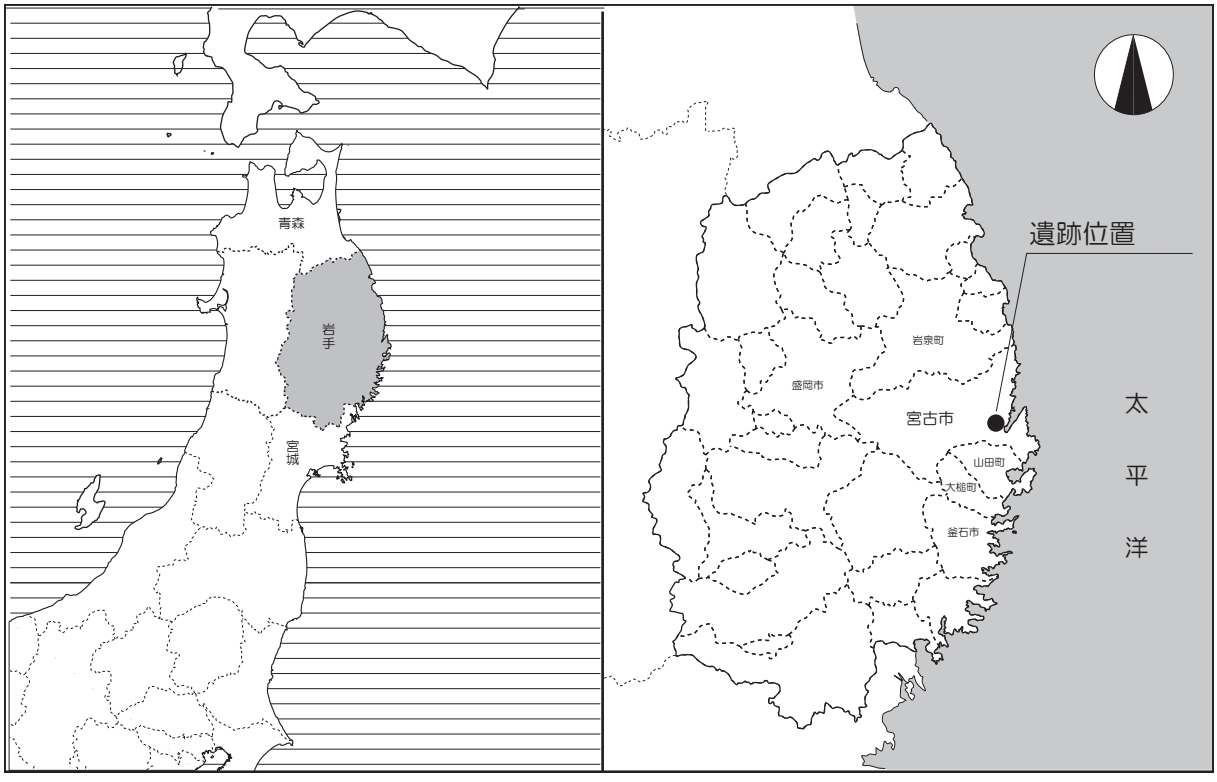
高根遺跡は、一般国道 45 号三陸沿岸道路事業（宮古中央～田老）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長 359 ㎞の自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成 23 年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成 25 年９月９日付け国東整陸一調第 56 号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成 25 年９月 25 日～９月 26 日にわたり試掘調査を行い、平成 25 年 10 月２日付け教生第 977 号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成 26 年４月１日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）



第１図　遺跡の位置１

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置と概観

高根遺跡は、岩手県宮古市山口 11 地割ほかに所在する。JR 山田線宮古駅の北西約 2.5 ㎞の位置にある。国土地理院発行の５万分の１地形図「宮古」および２万５千分の１地形図「宮古」の図幅中に含まれ、調査区の緯度・経度上の位置は、北緯 39 度 39 分 32 秒、東経 141 度 55 分 47 秒付近である。

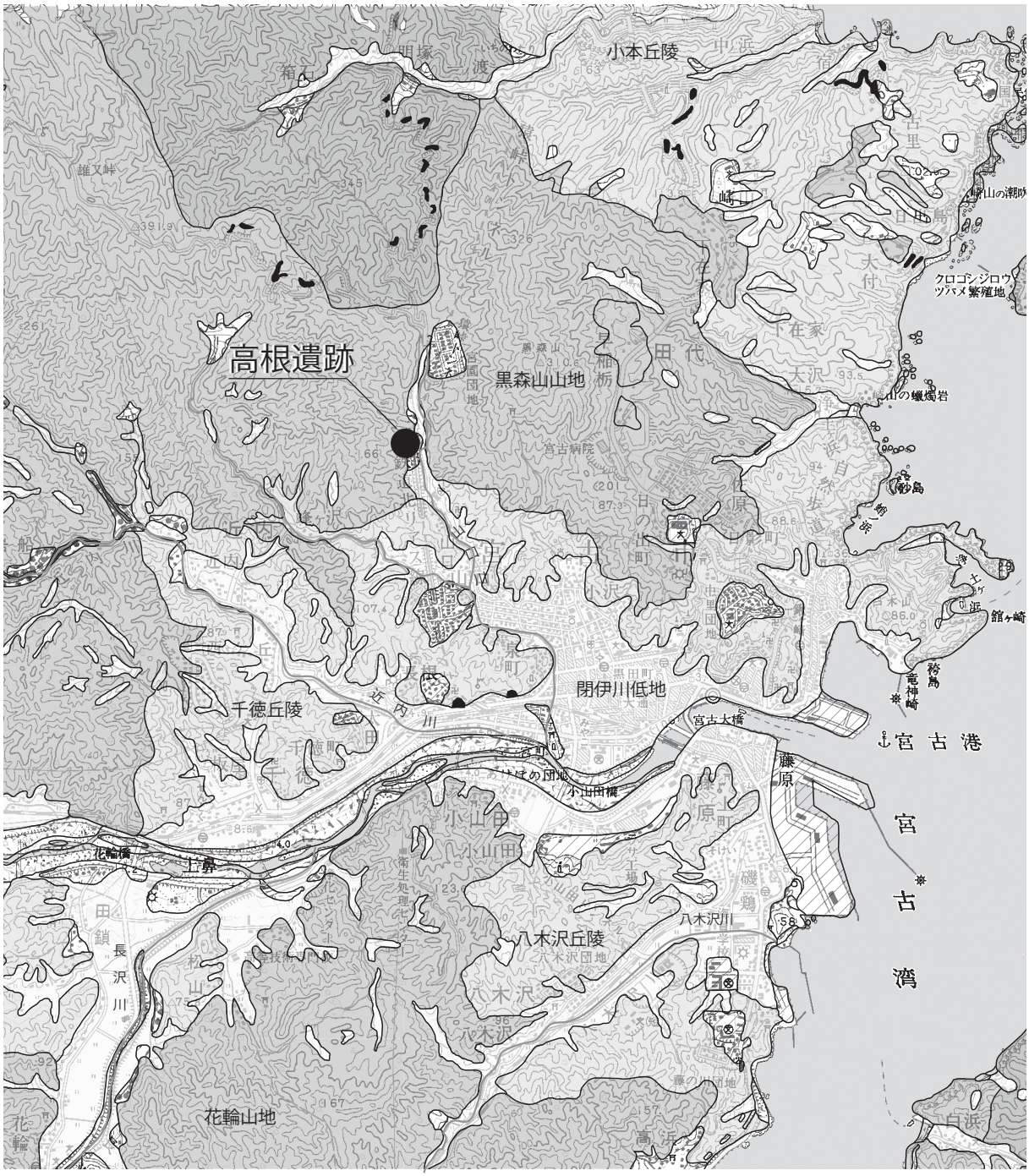
遺跡の所在する宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置する。東は太平洋に面しており、魹ヶ崎は本州最東端でもある。宮古市は、平成 17 年に田老町、新里村と、平成 22 年には川井村と広域合併し、新生の宮古市となり現在に至っている。市域は、北は岩泉町、西は盛岡市、南は遠野市、山田町と接する広大なもので、面積は 1259.89 ㎢となり、これは県内第１位の規模である。人口は約 5.8 万人（平成 25 年 10 月現在）を抱えるなど、閉伊地方の中心的な市である。

高根遺跡は、市の北西部にあり、山口川を望む西岸の山地に立地する。この山口川流域は市街地に入るまで、川幅も狭く山地帯を削るある程度の急流となっており、小規模な崖錐性扇状地や細長い低地帯を形成している。それと山地帯との境界付近は傾斜も比較的緩やかであり、高根遺跡をはじめとする遺跡が立地している。

2　周辺の地理・地形的環境

宮古市の地理と地形（第２・３図）　宮古市は、東側を太平洋に面し、西側には早池峰山を最高峰とする北上山地の山々が連なっている。周辺の海岸には浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に様相を異にする。釜石市を中心とした南部は、湾と岬が入り組んだリアス式の海岸に対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となり、高さ 100 ｍを超える海蝕崖が続く箇所もある。このような三陸海岸は山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域の狭い範囲に限定される。宮古市内を流れる河川には、市街地が立地する沖積平野を形成する閉伊川（源は区境峠付近）、その支流で市街地を流れる近内川・長沢川・山口川、南には八木沢川、宮古湾に注ぐ津軽石川などがあり、それぞれの流域には低地を形成する。閉伊川と山口川との合流付近は市内においては比較的広い氾濫平野を形成しており、市街地が発達している。市内の地形は、上述のような地形の中で、おもに山地、丘陵地、低地によって構成される。丘陵地は、低地と山地の間や海岸に沿ってみられる。閉伊川の北側では板屋付近から東に山地と低地に挟まれるように帯状に延び、その間を近内川や山口川によって開析されている。南側では長沢川との合流付近や磯鶏の八木沢川沿いの低地と山地の間に分布し、八木沢丘陵とも呼ばれる。海岸沿いでは山地に挟まれて南北に帯状に延びて存在する。山地は各丘陵地の背後に広がっている。第３図の図幅に含まれる市街地周辺では、起伏量の比較的少ない小起伏山地、中起伏山地である。閉伊川の北側で、宮古市街地の北東側の山地は宮古市北西端に位置する峠ノ上山（1,230 ｍ）、亀ヶ森（1,112 ｍ）から南東に延びる山地の縁辺に相当する。これらの山地は標高 300 ｍ前後以下の比較的低い山地である。一方、市街地の南西側の山地は、大笠山（612 ｍ）から北東に延びる山地の縁辺で、標高は 100～200 ｍ前後である。なお、市街地周辺の丘陵地や山地には、ニュータウンとして造成された人口改変地が増加している。

第２図　高根遺跡の位置



『1/50,000土地分類基本調査（地形分類図）「宮古・鮭ヶ先」「田老」岩手県（1974）』を元に作図

中起伏山地　小起伏山地　山麓地・他の緩斜面　丘陵地Ⅰ　谷底平野・氾濫平野　砂礫段丘Ⅰ　砂礫段丘Ⅲ　崖錐性扇状地

扇状地　自然堤防　旧河道　浜及び河原　磯　人工改変地　崖　海・河川

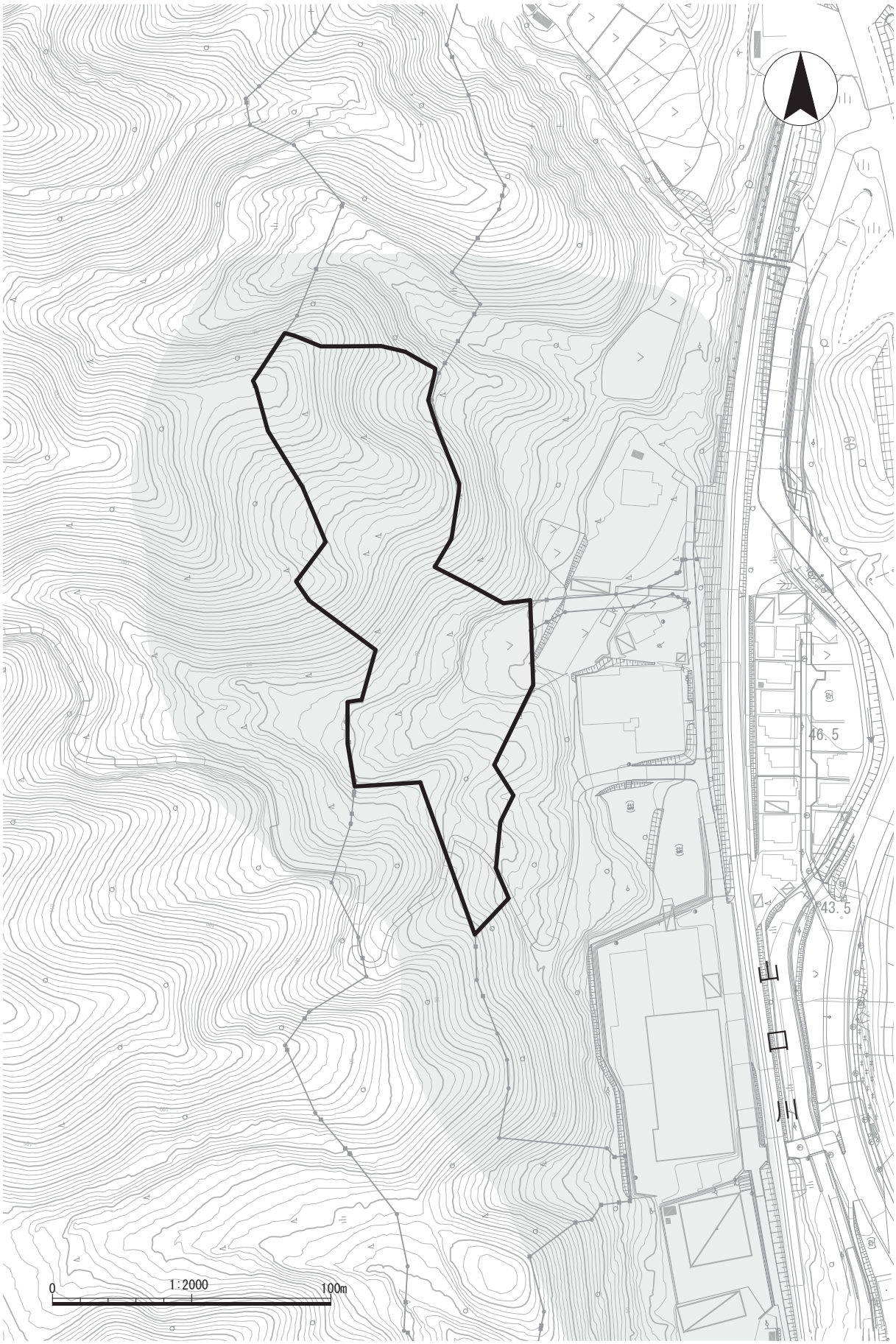
第３図　地形分類図

遺跡周辺の地形（第４図）　遺跡周辺の地形は、山口川が山地を開析した小さな開析谷が中心にあり、わずかな低地が広がっている。その両岸はなだらかな緩斜面を形成しており、地形分類上は、小起伏山地（黒森山地）から崖錐性扇状地で構成される。海岸より直線距離で、３～４㎞離れており、現在の市街地の最奥部ともいえる位置である。

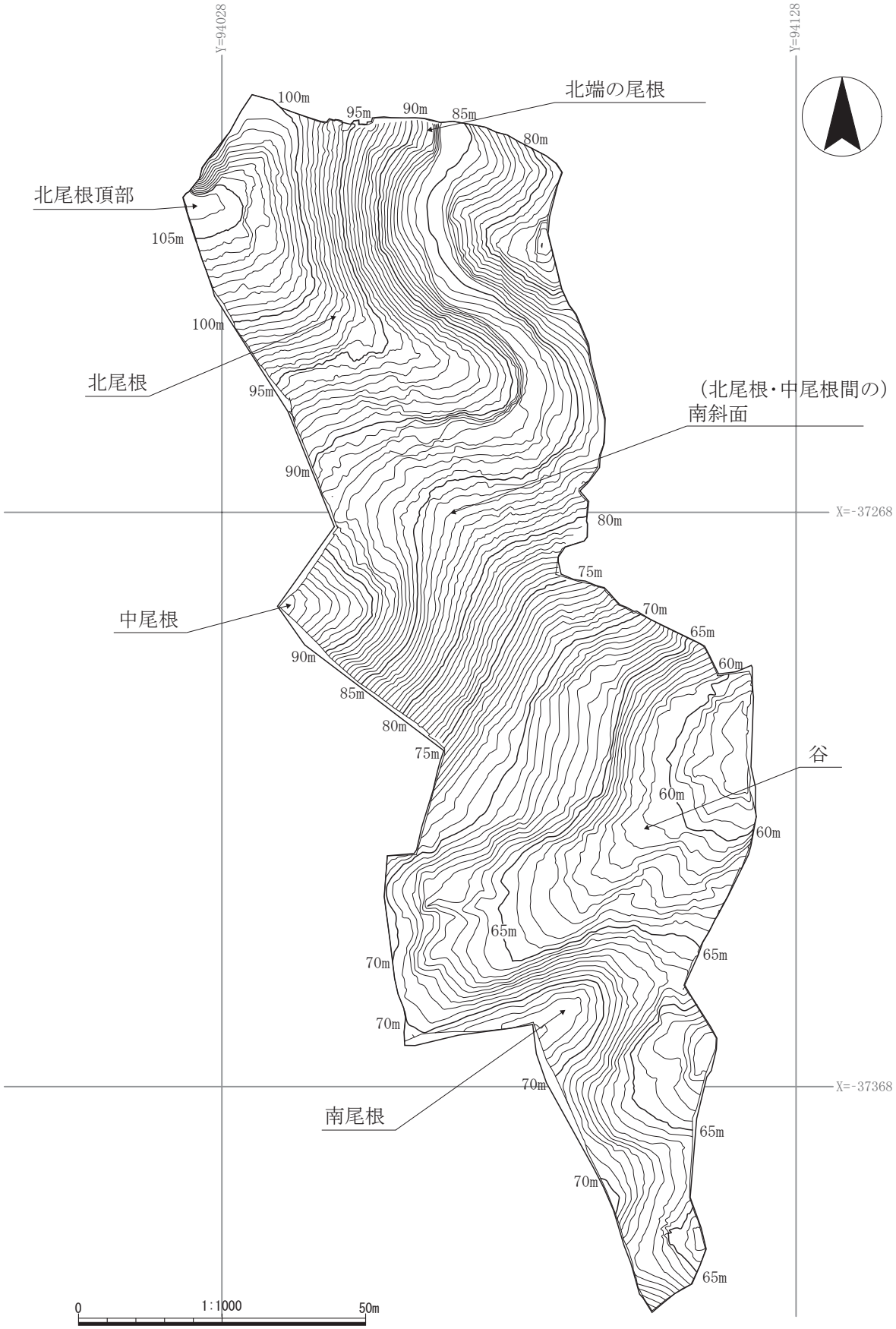
遺跡（調査区内）の地形（第５図）　調査区内の地形は、おもに山口川に向かって西から東に延びる南北３本の尾根とその間にある谷から構成される。調査区内における標高は、北側尾根上で 105 m、中尾根上で 94 m、谷部では 58 m前後であり、高低差約 40 mもある。北側の尾根（北尾根と呼称する）は幅広く調査区北西端で頂部平場状になる。この地点が今回の調査区内でもっとも標高の高い地点となる（標高 105 m）。北尾根は頂部平場から南東方向に伸びるが、調査区北端側（北東方向）にも細い尾根（北端の尾根）が延びるようであるが調査区外となる。北尾根の南側には東西方向に延びる尾根の先端がわずかに存在する（中尾根と呼称する）。北尾根と中尾根の中央付近には沢状の窪みがある。おそらく埋没した沢と想定する（黒色～黒褐色系のシルト層が堆積）。この北尾根と中尾根の間の南斜面は、遺構がもっとも集中する区域であり、今回の調査では主体となる区域である。これらの尾根上と南斜面に多数の遺構が立地する状況は、同じような地形がつづく調査区外（とくに西側）に広がっていることが予想される。この南斜面の傾斜度は 18°～33°であり、とくに中尾根の南斜面はかなり急な斜面となっている。遺構がとくに集中する埋没沢を通るラインでは、25°～27°である。北尾根と中尾根の南斜面と南側の尾根（南尾根と呼称）の間は大きな谷がある。調査前はわさびが栽培されるなど耕作地として利用されていた。西側の標高は 70 m、東側の標高は 58 m（今回の調査区ではもっとも低い）であり、東に向かって傾斜している。谷部の幅は約 15 mであるが、東側は広くなっており、幅約 26 mである。何度も土砂流出に見舞われた痕跡が確認できる。遺構は、谷幅の広い東側に集中しているが、土砂流出の痕跡が確認できることから本来はさらに広い範囲で遺構が存在していた可能性がある。谷の南側は南尾根であり、尾根上の標高は東側が 66 m、西側が 72 m前後であり、西から東に向かって高低差がある。また、谷との高低差は６m～12 mあり、傾斜角は 20°～30°である。尾根上を中心に遺構が集中する。南尾根のさらに南側には尾根と沢がそれぞれ２箇所確認できるが、遺構がほとんど存在せず、また一部しか調査区内に存在しないため適当な呼称をあたえていない。ただし、この調査区南端付近の沢からも一定量の土器の出土があることから、この周辺（調査区外）には遺構の存在が予想される。なお、この付近は山中に侵入するための道路が存在していたようで、削平等地形の改変が行われているようである。このように、今回の調査区は、計画された道路の幅に沿って南北に細長いが、かなり起伏に富んだ地形を呈しており、それらを利用して縄文時代の集落が営まれている。また、基盤層がマサ土であること傾斜度が大きいことなど地形的にみて、中央の谷には遺構の集中する北・中尾根とその南向き斜面や南尾根からの流出土が堆積しやすい状況である。もっともこの谷に堆積した土砂もさらに東側（下位側）に流出しやすい。

３　周 辺 の 遺 跡

宮古市には、国指定史跡である崎山貝塚をはじめとする縄文時代の遺跡が数多くあり、岩手県遺跡情報検索システム（平成 26 年度版）によると、これまで 669 箇所の遺跡が確認されている。このうち、高根遺跡近隣の山口川上～中流域の遺跡について、簡単に触れておこう。この流域には 10 数箇所の遺跡の存在が知られている（第６図）。多くは高根遺跡と同様に山口川に面した東西両岸の山地～丘陵上に立地している。山口川西岸には、北から牛沢遺跡、高根遺跡、赤畑遺跡、天神山遺跡があ



第４図　調査区の位置と周辺地形


Y=94028
Y=94128
北端の尾根
北尾根頂部
北尾根
（北尾根・中尾根間の）
南斜面
中尾根
谷
南尾根
X=-37268
X=-37368
100m
95m
90m
85m
80m
105m
75m
70m
65m
60m
0
1:1000
50m

第５図　調査区の地形

国土地理院発行 25000 分 1 地形図『宮古』を 250%拡大

第６図　周辺の遺跡

り、西から合流する支流沿いには山口駒込Ⅰ遺跡、山口駒込Ⅱ遺跡などがある。調査が行われ内容がある程度判明する遺跡を順にふれておく。牛沢遺跡は、高根遺跡の北側の尾根に位置（北尾根２の次の尾根）し、平成 17 年度に行われた調査では、縄文時代中期末頃の竪穴建物跡６棟、フラスコ形土坑をはじめとする土坑７基などが検出されている（文献 11)。遺物には、遺構と同時期のもの以外に縄文時代後期の土器も出土している。赤畑遺跡では、縄文時代の遺構は検出されていないが、中期から晩期にかけての遺物が出土しており、集落が近接して存在していることが予想されている。また、弥生時代後期に併行する後北式土器の出土や中世の竪穴建物跡なども発見されている（文献６)。天神山遺跡は、丘陵頂部に立地し、縄文時代と推定される陥し穴状遺構のほか、弥生時代後期の土器片が出土している。山口駒込Ⅰ遺跡はこれまで本格的な調査が行われていなかったが、平成 27・28 年度に当センターで調査を行った。その結果、縄文時代中期中葉を中心とする竪穴建物跡や遺物包含層、平安時代の竪穴建物跡などが検出されている。山口駒込Ⅱ遺跡も同様に調査が行われていないが、鉄滓の出土がある。東岸には北から小平Ⅲ、小平Ⅱ、小平Ⅰ、赤畑東、山口館遺跡、黒森町Ⅰ遺跡などがある。小平Ⅰ遺跡では、縄文時代中期中葉から末葉の竪穴住居跡が 19 棟検出され、該期の集落が周辺にかけて広がっていることが明らかとなっている。調査ではほかに、縄文時代早期から晩期にかけての遺物も出土している。山口館跡は、黒森山から南に延びる丘陵に立地する遺跡である。これまで数回の調査が行われている。それによると、中世後期（15～16 世紀）の城館跡であり、内部には堀、竪穴建物跡や工房跡などの遺構が存在していたことが判明している。このほか古代の遺構や遺物も出土しており、とくに 10 世紀の密教法具（錫杖・三鈷鐃・鐘鈴）の出土は特筆される（文献７～10 など)。黒森町Ⅰ遺跡は、丘陵の先端に位置し、標高は比較的低い場所である。江戸時代の墓壙や鋳造炉などが発見されている（文献４)。

このようにみると遺跡周辺の山口川の上～中流域の遺跡では、高根遺跡と同様の時期の遺跡が近接して位置していることがわかる。また、中世城館や近世の遺跡など縄文期以降も継続して利用されていた地域でもある。この地域より上流域には遺跡がほとんど確認されておらず、山口川流域としては最奥部の場所といえよう。

４　これまでの調査

高根遺跡の最初の調査は昭和 63 年に行われた（１次調査)。老人保健施設（現宮古介護老人保健施設　桜ヶ丘）建設に伴う緊急調査であり、面積は約 1,500 ㎡である。調査区は遺跡推定範囲の南側に相当する（今回調査の南尾根延長上)。調査の結果、斜面上部から貯蔵穴と考えられるフラスコ形土坑が、斜面下部の緩斜面部からは墓と考えられる土壙（土壙墓）が多数発見された。後者は小規模な集石を伴うものや土器を埋設しているものなどがある。いずれも、直径が１ｍ前後で、平面形は円形から楕円形を呈する点で共通する。これらは立石を伴うものも含まれることなどから墓壙と想定され、時期は中期前葉から中葉（大木７～８式期）とされる（文献３)。

２次調査は平成３年度に行われた。社会福祉法人わかたけ学園（現 SELP わかたけ）建設に伴う緊急調査であり、調査面積は 1,500 ㎡である。調査地は１次調査の北側約 100 ｍの場所に位置する。３次調査の南尾根の延長上（同一尾根）にある。調査では７棟の竪穴建物跡や柱穴群、土砂流出跡などが検出された。竪穴建物跡のうち１棟は中期前葉（大木 7b 式期）のものである（文献５)。遺物は、大半が中期の土器や石器で、中期前葉～中葉（大木７～８式期）を主体とする。そのほか、少数ながら前期に属する土器や中期後葉（大木９式）の土器が出土している。また、土製円盤や斧状土製品な

どの土製品なども出土している。

これまでの調査からみると、斜面の上方には竪穴住居跡やフラスコ状土坑のような居住域や貯蔵域が営まれ、低い位置には墓域が存在していたことが判明してきた。時期は、大木７式から８式期を中心とするものであり、一部大木９式や前期の土器も出土しており、これらの時期における遺構の存在が予想される。

今回の調査は３次調査となるが、これまでの調査区よりもさらに北西側に位置し、従来の遺跡推定範囲よりも大きく西側（山側）に外れた場所に相当する（平成 25 年度に範囲拡大、平成 26 年度さらに拡大、文献 12・13)。従来の遺跡範囲は山口川沿いの比較的傾斜の緩やかな地点を想定していたが、今回の調査からさらに斜面上方（西側・北側）に大きく広がることが明らかとなった。

【文献一覧】＊岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第〇集→岩埋文第〇集に略、年代順

1　宮古市教育委員会　1985『宮古市遺跡分布図』宮古市埋蔵文化財調査報告書９

2　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1988『赤畑遺跡発掘調査報告書』岩埋文第 142 集

3　宮古市教育委員会　1989『高根遺跡－昭和 63 年度発掘調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 19

4　宮古市教育委員会　1992『黒森町Ⅰ遺跡－平成３年度発掘調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 32

5　宮古市教育委員会　1992『高根遺跡－平成３年度発掘調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 33

6　宮古市教育委員会　1998『赤畑遺跡・天神山遺跡・山口館跡　北部環状線道路関係埋蔵文化財調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 51

7　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1999『山口館跡発掘調査報告書』岩埋文第 310 集

8　宮古市教育委員会　2002『山口館跡　北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書 57

9　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2006『山口館跡発掘調査報告書』岩埋文第 485 集

10　宮古市教育委員会　2007『山口館跡　－市道北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 70

11　宮古市教育委員会　2007『牛沢遺跡・大付遺跡第 11 次調査－市内遺跡発掘調査報告書７－』宮古市埋蔵文化財調査報告書 72

12　岩手県教育委員会　2015『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 25 年度　復興関係)』岩手県文化財調査報告書第 143 集

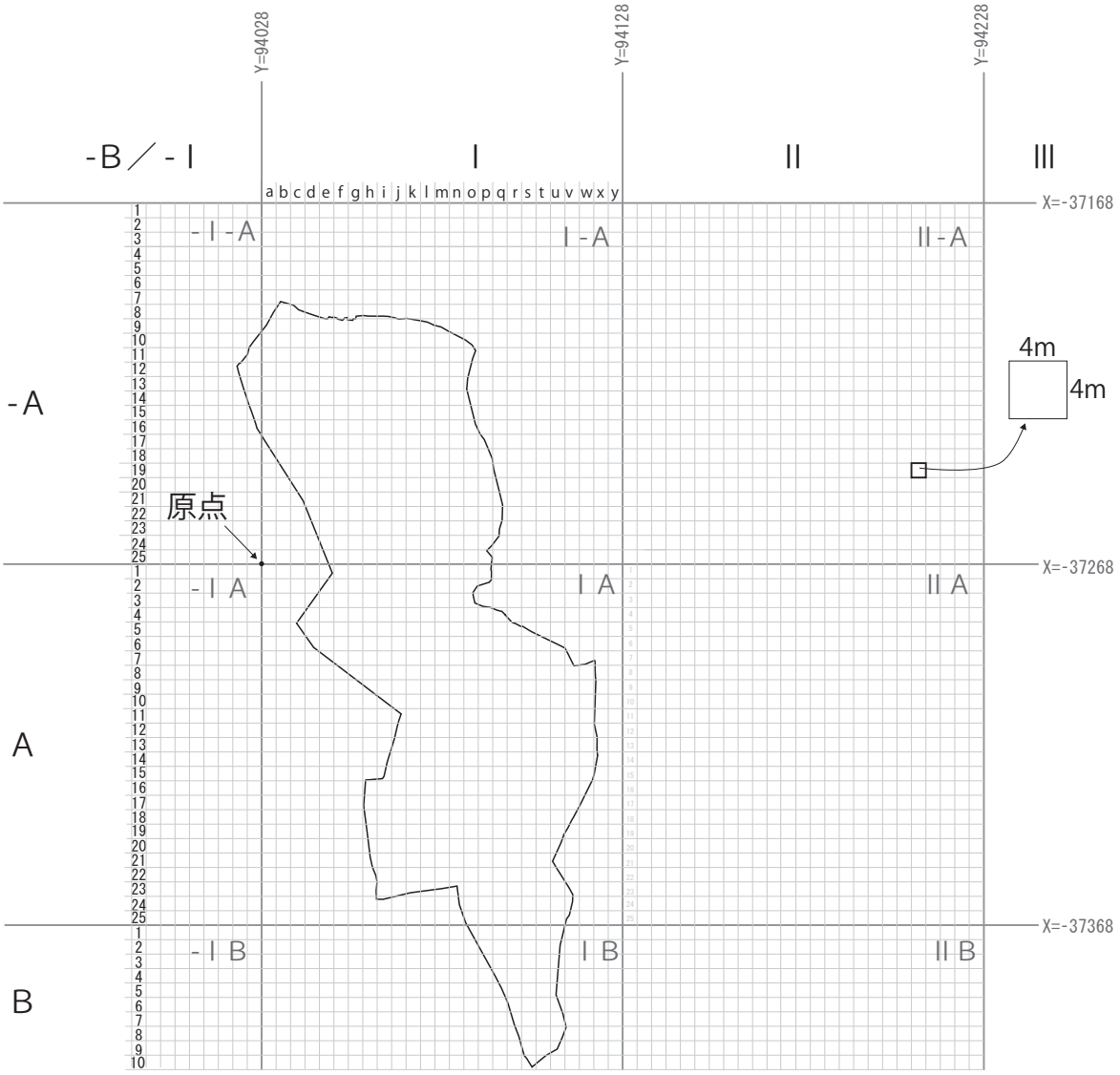
13　岩手県教育委員会　2016『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成 26 年度　復興関係)』岩手県文化財調査報告書第 146 集

Ⅲ　調査と整理の方法

1　野　外　調　査

（1）調　査　方　法

グリッド・測量　遺構の測量や遺物の取り上げなどの測量作業に際し基準としてグリッドを設定している。グリッドは広大な遺跡全体を覆うように設計した（第７図）。グリッド原点は、北西隅を起点とし、座標はＸ =−37268、Ｙ =94028 とした。設定に際し、年度ごとに、以下の３級基準点を打設し、それを基準補－１～補－４までの補助杭（４級相当）を設置した（委託）。その６本の杭を基準にして発掘調査の測量を行っている。なお、平面直角座標系（第Ⅸ系）を使用している。また、高さ（H値）については、標高（T.P.+）を使用している（直接水準値）。



第７図　グリッド配置

［平成 26 年度］

基１　X =−37282.826　Y =94082.089　H =76.119（直接水準）

基２　X =−37359.160　Y =94080.389　H =73.025（直接水準）

［平成 27 年度］

基１　X =−37216.765　Y =94031.530　H =105.177（直接水準）

基２　X =−37285.399　Y =94052.672　H =91.195（直接水準）

［平成 28 年度］

基１　X =−37320.164　Y =94080.712　H =69.120（直接水準）

基２　X =−37264.256　Y =94079.786　H =83.615（直接水準）

グリッドは 100 m四方の大グリッドを設定し、それを東西 25、南北 25 個の小グリッド（４m四方）に分割して使用している。グリッド名称は大グリッド（100 m四方）の東西を西からＡ・Ｂ・・・、南北を北からⅠ・Ⅱ・・・とし各グリッドの北西隅をそのグリッド名称とした。小グリッドは東西を西からａ・ｂ・・・ｔまで、南北を北から１・２・・・25 までとし、大小グリッドの名称を組み合わせて使用している（例．ⅠA1a など）。また、平成 27 年度調査区（KN-15）は、調査範囲が当初予定していた範囲よりも北方に拡張することとなった。そのため、当初のグリッド計画では北側まで覆うことができず、また原点を移動させると今後整理作業に混乱をきたすと予想されたため、原点をそのままに、従来の表記に－（マイナス）を付加してグリッドを拡張することにした。つまり、原点を中心に、北方向は、－Ⅰ、－Ⅱ・・・の順に、原点より南方向は、従来通りⅠ、Ⅱ・・の順に、原点より西方向は、－Ａ、－Ｂ・・・の順に、原点より東方向は従来通りＡ、Ｂ・・・の順に新たにグリッドを設定した（第７図）。グリッドはおもに野外調査時での遺物の取り上げに際し使用しており、適宜細分して使用した。室内整理作業段階ではそれを座標に置き換えて使用することもあり、本書では両者を併用している。なお、遺物包含層については、このグリッドには対応するものと、対応せずに地形に沿わせてそれぞれ独自のグリッドを設定している場合もある（第Ⅳ章を参照）。

表土掘削・遺構検出　表土掘削にあたっては、調査区は斜面や谷地形であったが、試掘トレンチを設定し、試掘を実施した。試掘トレンチは、遺構検出面までの深さの確認を主とし、あわせて遺構密度や出土遺物の量などを予想するためである。試掘の結果から表土（現耕作土）を除去すると、遺構検出面や遺物包含層の上面であることがわかり、この高さを基準にして、それより上位層を重機によって除去した。表土の除去にあたっては、バックホウを使用し、調査員の立会いのもと掘削を行ってい

第８図　2015 年度重機稼働

第９図　遺構検出作業

る。地形の凹凸が激しいことや、とくに傾斜面の掘削は困難を極めた。また、今回の調査では、調査区周辺に残土を仮置きすることは、流出の危険や場所の確保が難しかったため、全量をダンプトラックによって場外へ搬出している。平成 27 年度の調査においてもおおむね同様の状況であったが、調査の進行によって調査区内へ仮置き可能な地点も増えた。表土の除去後は、作業員によって鋤簾（ジョレン）などの道具を使用して遺構確認（検出）作業を行い、遺構を検出した。機械による表土除去後の残土排出については頭を悩ませることが多く、急斜面での調査ということもあり、なるべく作業員の移動距離を短くすることを目指した。そのため、いくつもの足場やベルトコンベヤを設置することとした。

足場・ベルトコンベヤの設置　今回の調査では、急斜面地であることから作業を行う場所に移動するだけでも困難を極めた。安全性を確保することもあり、斜面上にはいくつかの足場を設置し、移動し易くした。これらは作業の進捗に合わせて適宜移動・撤去を繰り返した。なお、設置には、業務委託により、重機業者が行った。また、斜面地の作業が中心であることから、一輪車による排土処理が行えないためベルトコンベヤを設置している。作業員の作業中の移動については、なるべく上下移動より横方向の移動になるよう作業工程を見直している。

遺構精査　検出作業によって確認された遺構については、半截や土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しながら掘削をおこなった。実測図や写真などの記録を行った後に完掘を行い、記録を追加した。多くの遺構は上下左右ともに重複するものが多く、遺物を個別に取り上げられず一括で取り上げてしまうことが多かった。また、炉などの焼土層やその前後の層については、可能な限り採取し、水洗選別を行った（第Ⅵ章参照）。

遺物包含層の精査　調査において検出した遺構以外にも遺物が出土している。原則的にこれらは、先述の小グリッドごと、層位ごとに取上げを行った。これらは遺物包含層として認識したが、とくに集中して遺物が出土する地点があり、遺構に準じる扱いとし精査と記録を行った。これらの土器集中箇所は、それぞれ異なる時期に形成した可能性や、地形的にそれぞれ区別できることから、包含層１～４の４つに分けている。遺物の取上げに際しては、先述のグリッドでは、地形に沿わないことから、包含層２～４に関してはそれぞれ４ｍ四方の独自のグリッドを採用して調査をおこなった（包含層１のみ先述のグリッドを使用）。包含層の精査は各グリッドに沿ったトレンチを先行していれ、土層確認後に、面的に進めた。どの包含層も基本的には、Ⅱ層とⅣ層の間にあることから、Ⅲ層とし、それをⅢａ～ｅ層までに細分した。遺物の取上も各層ごとに取り上げたが、多少上下層が混ざった可能性もある。

第 10 図　遺構検出作業２

第 11 図　包含層の調査

諸記録　平面図の実測は電子平板システム（「遺構くん」（株）キュービック製）を基本に、簡易遣り方法による実測を併用しながら行っている。また、平成27年度後半には、遺構実測の一部について（株）岩手測器社に委託した。写真については６×７判カメラ（モノクロ）、６×4.5判（H27年度より使用）とデジタルカメラ（Canon EOS5DMark Ⅱ、EOS6D）を中心に撮影を行った。調査区全景写真の撮影に際しては各調査年ともにセスナ機による撮影を委託している。６×７判フィルムについては現像して、アルバムに保管し、デジタル写真についてはRAW画像を当センターの写真専用HDD並びDVDに保管している。

遺構名称　野外調査時には、検出した順に、SI1（１号竪穴建物跡）、SK1（１号土坑）のように、遺構略号・番号の組み合わせで使用し、平面図の作成や遺物の取り上げを行った。使用した遺構略号は以下の通りである。

SI　竪穴建物跡、SK　土坑、SD　溝跡　SL　炉・焼土、SX　不明遺構、P　柱穴・小穴

本書においても、原則的にこの呼称を使用している。遺構番号は原則的に検出時に検出順で行った。そのため、精査を進めた段階で別の遺構となったものや遺構ではなかった場合などがあり、それをそれぞれ欠番としている。また、各年度とも複数のチームで調査を同時進行していたため、番号が重複しないように１から50までを斜面下チーム、51～100を斜面上チームなどと、ある程度の番号を分けて行った。想定よりも遺構数が多かったこともあり、この方式を繰り返すことになった。そのため隣り合う遺構でもかなり離れた番号を使用していることが多い。また使用しない番号も多々あった。このような要因で比較的多くの欠番が生じ、本来は整理段階で新たに振り揃える必要があったが、遺構数が多く、変更による混乱を避けるため、調査時の番号をそのまま使用している。本文中に欠番となった遺構名は、欠番と記載している。そのほか、建て替えなどの要因でほぼ同一地点での重複する竪穴建物跡は、検出時では１棟と認識していたが、調査時に複数に分かれた場合は、Ａ・Ｂ・・などの枝番号を付したものもある。

その他　本書は平成26・27・28年度の３カ年の調査をまとめた正式な報告書である。したがって、これまで公表した内容に齟齬がある場合は本書の記載が優先する。

（2）調　査　経　過

[平成26年度調査]

４月９日　調査開始。器材搬入、現場設営を行う。４月10日から、調査区内には樹木伐採後の雑物が散乱しており、委託者側の業者が作業を行っていたため試掘トレンチ等の作業は行えず、共同で

第12図　包含層土器出土状況

第13図　測量風景

雑木の撤去を行うこととした。４月 15 日から雑木撤去を行いつつ、空いた場所からトレンチを設定し、試掘を行う。以降しばらくこの作業が続く。４月 24 日には試掘が終了した場所から重機による土除去を開始する。委託者による立木の伐採や雑木撤去が４月末までに終了する見込みとなる。５月９日から北側を試掘、南側は重機による表土除去を併行して行う。この頃には試掘調査の内容がほぼ判明し、南側は遺構が薄く、北側の谷とそれを挟む両斜面には多量の土器と遺構が存在することを確認した。

５月中旬には谷部にある沢水の工事を行う。調査区の外側（東側）で、農作業のための沢水を利用できるよう工事を行うものである。試掘調査が終わり、表土除去が終わった南側から遺構検出作業を開始した。残土は、調査区内には仮置きできないため、三陸沿岸道路工事用の残土置き場である宮古市田老の青野滝地区まで搬出することになった。また、調査区には三陸鉄道の高架下を通らねばならないため、大型ダンプが使用できず４ｔダンプで搬出することになる。５月中旬よりダンプトラックによる残土搬出を開始する。残土置き場がたびたび変更になりながら以降 11 月まで搬出し続けることになる。５月下旬には、遺構検出作業が北側に移る。南側尾根には竪穴住居跡や土坑、遺物包含層が存在することを確認した。表土除去と検出は北側の斜面（北尾根の南斜面）に移る。

６月中旬頃は、引き続き重機による表土除去と遺構検出作業を併行して行う。残土搬出が追いつかず増加する一方である。また、作業員数が不足し、恒常的に人が集まらなくなる。

６月 18 日に重機による表土除去が終了する。一部残土の積み込み場所のみが残るが、搬出後に行うこととする。また、遺構数がほぼ判明し、精査を開始し始める。南尾根には、竪穴建物、土坑、包含層１箇所があり、北側斜面（北尾根南向き斜面）には、包含層２箇所、竪穴建物跡のプランが見えるのが 10 棟以上、製鉄炉が２箇所あることが判明した。また、竪穴建物跡は炉石の露出が確認できる箇所が複数あるが、プランが見えないためこれらは精査しながら確定することとしたため、遺構数はさらに増加する傾向にある。これらの斜面の間にある谷部には、大規模な包含層がさらに１箇所存在することが試掘から判明しているが、残土が残っているため、精査は最後に回すことにした。６月下旬ごろに遺構精査を本格的に開始する。南側尾根上の遺構から精査を進めることとした。精査が進むと予想以上にフラスコ状土坑が多いことが判明する。最終的には尾根の下段は足の踏み場のないくらい密集することになる。作業員の増員を行っている。７月上旬も引き続き南側尾根上の遺構精査を進める。フラスコ状土坑の精査と併行して、包含層１の精査も行う。出土土器の量が急激に増加していく。７月下旬　南側斜面上の遺構精査を進めているが、一部、北側斜面の包含層精査を行いはじめる。こちら側の包含層もかなり厚く、土器の出土量も多い。８月７日には、作業は引き続き同様であ

第 14 図　測量風景２

第 15 図　2014 年度風景１

るが、当センターのホームページ用の撮影が入る。あわせて包含層１の遺物出土状況写真撮影を行う。夏休み後の８月下旬は、南尾根の遺構精査が進む。北尾根南斜面の包含層２の精査も進みだす。月末頃には南尾根の精査の目途がたち、９月からは北尾根の南斜面部の精査が作業の中心になる。この斜面は、下方の緩斜面には包含層があり、上方の急斜面にはフラスコ形土坑や竪穴建物跡あり、このままでは安全面に問題がある。そのため、作業用足場を設置することとなり、業者に委託して設置を行った。９月中旬ごろには、南斜面（下位）の竪穴建物跡の精査も包含層と併行して行う。南斜面の東端付近を掘り下げたところ、包含層４の下にフラスコ状土坑が存在することが判明した。南尾根上と同様の状況である。９月下旬には、引き続き北尾根の南斜面の精査が中心である。南尾根の精査は一部残っていたが、９月中に終了した。また、谷部分は積み込み場所として残土の山となっていたが、ほぼ無くなったことから、重機による表土除去を再開した。

これまでの状況から、10 月９日生涯学習文化課、三陸国道事務所と協議。今後の調査方針、展開を協議した。あわせて部分終了（南側斜面）を行った。10 月中旬も北側斜面の精査を引き続き行っている。斜面下方の遺構精査を中心に作業を行っていたが、上方にも手をつけ始める。精査を行いながら検出を行ったところ、包含層の下にも遺構が存在し、大幅に遺構数が増えた。10 月下旬には、谷部の表土除去が終了し、包含層３のトレンチを入れはじめ、精査を開始した。作業員増員を行う。

11 月５日には委託者との再協議を行う。生涯学習文化課による試掘の結果、調査範囲が北側に延長することから、今年度の残りと合わせて来年度に継続することが決定した。あわせて、今年度は 11 月 14 日で終了し、他遺跡の調査の応援に向かうこととなった。11 月 14 日に次年度繰越の準備、養生、プレハブ撤去等を行って、今年度の作業を終了する。

［平成 27 年度調査］

４月 17 日より調査開始。器材搬入、現場設営、作業員の安全教育を行う。当初調査員４人、作業員 37 人で開始した。調査足場の組み立て作業も開始する。４月 21 日より新しく追加された調査区（約 5,000 ㎡分）にトレンチを入れ試掘を行う。あわせて、昨年度調査区については越冬用の土嚢やブルーシートの除去作業を行う。４月 27 日には試掘と併行して、重機による表土除去作業を開始する。５月上旬、谷部の調査を併行して行おうとしたが、上部に重機が作業しているため、安全のため作業を中断し試掘に合流した。以降、重機による表土除去作業と試掘トレンチ作業、表土除去が終了した範囲から遺構検出作業を行っていく。６月２日には試掘が終わり、重機による表土除去と人力による遺構検出作業を中心に作業を行うこととなる。重機による表土除去は急斜面での作業であるため、細心の注意と工夫しながら作業を進めた。７月上旬には、重機による表土除去、遺構検出が終了した。

第 16 図　2014 年度風景２

第 17 図　2015 年度風景

遺構は当初、昨年度調査区から続く南斜面を中心に分布すると予想していたが、検出作業の結果、すべての範囲で高密度に遺構が分布することが判明した。この時点での見積もりはフラスコ状土坑 300 基超、竪穴建物 50 棟以上であった。これ以降作業の中心は、遺構精査に移行していく。精査に当たっては、斜面地が多く、また大形の遺構が多いことから土量が多くかつ足場が悪いことから、安全対策（足場、階段、安全帯）を随時行いながら精査を進めたが、進行速度には自ずと限界があった。７月８日より谷部の包含層の精査を再開する。今年度追加した調査区は頂上部から順に下方へ調査を進めていくこととし、谷部の包含層を精査するチームと併せて２チームで併行して調査を行うこととする。調査が進むにつれ、排土量が著しく増加したため、何らかの措置を講じる必要に迫られた。排土はすべて場外搬出のため谷部まで運ぶしかなく、費用や安全面や設置可能条件などを勘案した結果、ベルトコンベアを南斜面に設置することを決めた。以降その準備を進めている。ようやく８月 18 日にベトコンベアを設置、三陸国道事務所の立ち会いや当センターの安全衛生委員会の許可の上、９月より運行開始した。その間も上方では、フラスコ状土坑群の精査を中心に、下方では包含層の精査を中心に作業を進めている。下方では、包含層中に住居が重複しながら存在することがわかり、難航しながらも進めた。あわせて遺物の出土も増加してきた。９月７日から調査員が合流。９月下旬には、谷部の包含層の精査も目処がたち、一部包含層２の精査を開始した。10 月 13 日には作業員を増員した。作業員の一日最大数は 83 人となる。精査も全域にわたり進めることが可能となる。上方の調査では、埋没沢付近の精査が中心となり、この区域は大形のフラスコ状土坑が多く、また密集しているため調査は難航した。10 月 27 日にはさらに調査員が合流し、調査員計９人体制で進行できることとなった。11 月 12 日に、三陸国道事務所、県教育委員会生涯学習文化課、当センター調査課長と現地協議を行い、南斜面（中～下位）については次年度継続すること、それ以外については今年度中に終了することが決定した。以降、今年度終了分の調査を優先して行った。12 月４日には調査員が室内作業へ入るなど調査員数が減少した。12 月８日に航空写真撮影を行い、11 日に今年度の作業をすべて終了した。

［平成 28 年度調査］

４月７日より器材搬入を行い、調査を開始する。以降、越冬のための養生撤去を行い、４月 12 日より、遺構検出作業を開始し、本格的に精査に入る。併行して、安全柵の再設置やベルトコンベアの設置を行う。14 日に、三陸国道事務所と当センターによりベルトコンベアの安全確認を行う。以降、ベルトコンベアを利用する。今年度も引き続き、精査は斜面の上と下に大きく２分して進行した。上チームは、昨年度の続きから、斜面上位から中位にかけてのフラスコ状土坑を中心とする精査で、下

第 18 図　2015 年度ベルコン設置

第 19 図　2015 年度足場設置状況

チームは、斜面下位に集中する竪穴建物跡や製鉄炉の精査が中心である。残土はベルトコンベアを使用して、下方へ排出し、包含層３があった谷部をかさ上げしながら整地した。５月には、上（頂上）チームは、フラスコの続きと住居の精査が中心で、下（谷）チームも昨年度の続きと、製鉄炉の調査が中心であった。６月になると、上や下チームとも遺構の重複が激しい範囲に突入し、困難な状態が続いた。重複遺構の精査を進めたが、精査のペースが遅く難航した。７月から８月にかけても、重複遺構や複雑な遺構の精査が続いていたが、ようやく先が見える段階になった。８月 20 日土曜日に現地説明会を行う。雨のため、参加者は約 70 名ほどであった。８月 30 日に台風 10 号が上陸した。調査区では隣接する畑等に土砂が流出し、大きな被害をもたらした。しばらく復旧作業に従事するものの、８日に再度大雨となり、再び土砂流出をもたらせた。９月 15 日には終了確認を行う。当初予定よりも１ヶ月半延長することになる。10 月 13 日に航空写真を撮影した。10 月 14 日に現場作業を終了し、17 日に機材搬出をもって全作業を終了した。

２　室　内　整　理

（１）室内整理の工程

室内整理作業は、平成 26 年度の室内整理は平成 26 年 11 月１日から開始し、令和２年 10 月 31 日まで、のべ 71 ヶ月間行った。整理作業は、野外調査と併行している平成 24 年度～26 年度にかけては、遺物は注記や接合などの基礎整理が、遺構は第２原図作成が中心である。野外調査が終了した平成 28 年度からは、遺物は実測作業・トレース・図版組など、遺構は検討作業、図版組、原稿執筆などの本格的な整理作業をはじめている。令和元年度からは、修正作業や原稿執筆、編集作業が中心となった。これらの遺構・遺物に関する作業については以下のように行っている。

遺構　平面図を中心に電子平板で作成したため、コンピューター上で合成→修正→第２原図作成→図版組の順に行った。原則的に遺構図は、各年度中に終了させたが、複数年度にわたる遺構については、２年にわたり第２原図を作成している。修正した遺構図は遺構全体図に合成したのち、それぞれ遺構図を切り抜いて図版作成を行っている。

遺物（土器）　水洗後に注記→接合→実測→トレース→写真撮影→図版作成の順で作業を行った。遺物の洗浄は野外作業の雨天時及び室内作業に入ってから行った。その後、遺物の種別ごとに仕分けしたのちに、取り上げた袋ごとに番号をふり（以下袋№とする）、重量を計測し台帳に記入した。注記は、遺構別に区分し全点に出土地点（袋№）の注記を行った上で接合作業に入っている。接合はある

第 20 図　2016 年度作業風景１

第 21 図　2016 年度作業風景２

程度離れた地点であっても試みたが、たとえば包含層１と包含層２などのように距離や地形を異にした遺構同士の接合については、出土量と整理期間の関係から、十分に行えなかった遺構もある。また、接合は原則的に年度ごとに行ったが、遺構が複数年度にまたがるものについては、次年度に一括して行うよう試みた。掲載する土器については、原則反転図化可能なものを選択したが、遺構内出土土器は小破片でも時期の判明するものについては掲載した。包含層出土土器については、完形・略完形品、口縁部資料、型式学的に重要と判断した胴部破片を中心に選択した。また、分類上同一種の資料が一定数存在する場合にも、掲載資料の比率が出土数全体をある程度反映できるよう留意した。遺物の実測については、従来通り、室内作業員による実測・拓本→ロットリングペンによるトレース→台紙上での図版組という方法で行っている。

遺物（石器）　野外調査から出土した石器については、洗浄後に器種分類し、器種分類ごとに全点登録し観察、計測をおこなった。また礫類については、洗浄後に自然礫と判断したものについては廃棄した。トゥール類は完形品を中心に掲載している。磨石等の礫石器類については、分類後に偏りがないように代表的なものを抽出して掲載している。土製品・金属製品については図化可能な遺物については極力図化を行った。石材鑑定は花崗岩研究会に委託し、各年度に行った。石器・石製品の図化は外注とし、（株）ラングに「物体表面の構造線の自動抽出システム」技術を用いた実測図作成を委託した。１点ごとのデジタルデータとして納品後、図版組をおこなった。

遺物（自然遺物）　獣骨、貝類、炭化種実などの自然遺物は、同定を行うため、各業者に委託した。とくに貝類や魚骨類については量が多いため、まず標本作製をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その標本を参考に、平成 27 年度に当センターの室内整理作業員が分類を行う予定であったが、想定よりも魚骨類、獣骨類が多く種類も豊富となったため、結果的に全量をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託することになった。

フローテーション　本遺跡では、竪穴建物跡内にある炉の焼土を可能な限り採取した。床面の土壌については、サンプリングを行っておらず、おもに炉内のみである。土壌は、野外調査時ではほぼ全量土嚢袋に入れて保管し、調査終了後埋文センターへ運搬した。センター内では、保管用のコンテナ内で水洗した。炭化浮遊物を 0.5 ㎜メッシュの掬いで回収する作業を数回行ったのち、沈殿物を最終的に１㎜メッシュのフルイで回収した。乾燥後に、炭化物と動物遺体などに分け、それぞれの遺構・層ごとにユニパックに入れて保管した。その後、サンプルをパリノ・サーヴェイ株式会社に同定依頼を行っている。結果は第Ⅵ章を参照。

遺物の登録番号　当センターの写真撮影記号に準じて下記の種別ごとに記号を振り分け、それに通し番号を付与した。

Ａ：土器類、Ｂ：土製品、Ｃ：陶磁器、Ｄ：石器類、Ｅ：石製品、Ｆ：金属製品、Ｇ：銭貨、Ｈ：木製品、Ｉ：植物遺存体、Ｊ：骨角器、Ｋ：動物遺存体、Ｌ：鞴羽口、Ｍ：炉壁、Ｎ：鉄滓、Ｏ：土壌サンプル、Ｐ：その他

調査や整理は複数年に渡るが、遺物の登録については、一括して行っている。そして、登録した遺物については、上記記号と番号を組み合わせて登録番号とした。土器の１番の場合、A001 とする。この番号で遺物を管理し、掲載遺物については本書にも掲載番号とあわせて掲載している。

写真撮影　遺物の撮影は、当センターの写真技師により、デジタル画像（CanonEOS1D で撮影）を中心として撮影を行っている。本書で使用するほか、保管用ディスクに保存している。

図版組・編集　遺構図については、おもに野外調査で手実測した断面図等も室内でデジタル化し、デジタルの平面図と合成している。したがって、遺構図版はデジタルで組版している。遺物については、

当センターのシステム上、トレースを人手に頼っているため、そのままレイアウト台紙上で組版し、そのまま入稿している。写真図版については、すべてデジタル組版である。ある程度種別ごとにまとめて編集し、入稿している。

（2）室内整理の経過

平成 26 年度（平成 26 年 11 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日まで）　この年度に調査した遺構図等の記録や遺物整理をおこなった。遺構については、野外調査が終了した 12 月下旬から担当調査員が点検後、第 2 原図の作成を中心に作業を行った。3 月までには第 2 原図を作成し、以降これをもとに原稿を執筆している。また、写真図版については、3 月に遺構分のみ作成を行った。遺物整理は、土器洗浄後、仕分け、重量計測、注記作業、接合作業までを行った。注記作業までは、1 月下旬に終了した。接合作業は 1 月下旬から 3 月までおこなったが、包含層分については、次年度も調査することや作業する期間を要するため、次年度に継続することにした。石器についてはは、一部を（株）ラングに外注し、残りは次年度外注予定とした。礫石器類については、登録作業までとして、実測作業は次年度の予定とした。

平成 27 年度（平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日まで）　昨年度の続きである包含層 1 の接合を 5 月から 8 月まで行った。5 月～12 月までは、野外調査と併行しての作業となっている。9 月以降については、それらから選別した土器の実測作業を 3 月まで行った。調査員の点検作業が行えず、点検・修正作業は 12 月の野外調査終了後に行っている。包含層 1 以外の遺物整理については、次年度以降行う予定となる。また、遺物洗浄の一部については奥州市埋蔵文化財調査センターに委託をした。

遺構については、昨年度と同様に、野外調査終了後 2 月末までに今年度調査が終了した遺構について、図面整理・修正・合成を行った。3 月は原稿執筆を中心に行ったが、併行して遺構分の写真図版を作成している。

平成 28 年度（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日まで）　未接合であった包含層 2・3 の接合作業を中心に作業を行っている。4 月から 10 月までは野外調査と併行しての作業である。11 月頃より、今年度新たに出土した遺物の仕分け・注記・接合作業を開始した。3 月までには、すべての遺構の接合作業が終了した。石器の一部は、（株）ラングに実測、製図を委託している。その他、整理中ではあるが、「発掘された日本列島展 2017」への出展準備などを行った。遺構は、第 2 原図作業までを中心に作業を行った。

平成 29 年度（平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日まで）　土器の復元作業からとなる。対象点数が 1,000 点を超えることもあり、新規に借りた広宮沢分室（矢巾町）に引っ越ししてからの作業となる。土器の復元作業は、予定よりも早くに終了し、以降土器実測作業を始めた。遺構に関しては図版レイアウトが中心であり、土坑の事実記載等の原稿も執筆している。

平成 30 年度（平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日まで）　昨年度から続く遺物実測を進めた。順調に進み、8 月頃には終了した。その後トレース作業に移行した。その間併行して、拓本作業やその他の遺物、拓本、土器破片の断面実測の作業を行っている。また礫石器を（株）ラングに委託した。観察表などの表類の作成も本格的に開始している。

平成 31 年・令和元年度（平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日まで）　4 月から 10 月までは調査員は野外調査と併行して整理作業を行った。この年度では、土器の追加実測とこれまで行った実測図（拓本も含む）の修正作業が中心となる。そのほか、遺物図版の仮レイアウト、遺構図版の作成・修

正、遺物写真の撮影、不掲載土器の分類などを行っている。

令和２年度（令和２年４月１日～令和２年 10 月 31 日まで）　整理作業の最終年度である。不掲載遺物の分類、遺物写真図版、編集、収納作業、遺物図版本貼り、遺物集合写真、原稿執筆作業を主な作業とした。併行しながら完成した図版や表類の修正作業を行った。10 月 31 日にすべての作業が終了した。

（３）図の掲載方法と表現方法・本文の記載項目

縮尺　本書に掲載する図の縮尺等ついては、数多くあるが原則的に下記の通りある程度統一した。

遺構　竪穴建物：土坑平面・断面図：1/60、竪穴建物の炉拡大図：平面・断面図：1/30、包含層など：1/50、1/100　上記や上記に該当しないものはスケールに縮尺を記載している。

遺物　土器立体・破片実測：1/3、大型土器：1/4、剥片石器：2/3、石器：1/3・1/4・1/6、土・石製品：1/2、金属製品：1/2　　なお写真図版については、縮尺は任意である。

実測図の表現方法　今回調査を行った高根遺跡は、急斜面に立地する遺構が多いこともあり、多くの遺構が重複する。最大では 10 段階の上下の重複関係が存在する（間接的な重複も含めて）。そのため、平面図の原則通りの方法では表現できないものあった。そのため、本書では原則は一般的な重複関係の表現方法を採用するが、それで表現できない場合は以下のような方法をおこなっている。

遺構全体図（第 22 図、第２分冊第１～22 図）については、一般的な重複関係の表現方法を採用しており、実際の重複関係を表現した図になっている。下位に重複する場合は、一点鎖線で表現している。なお、３段階以上の重複下位にある遺構は、場合によってはまったく表現されない。この際は、該当箇所に引き出し線に遺構名を付して表現した。

個別の遺構図　上位に重複する場合は、当該個別遺構の内側にある上位の重複遺構は表現しないこととした。通常は直接切り合っている場合、重複する箇所には新しい方の遺構があり、下位の古い遺構は破壊されて残っておらず表現できない。また、下位の遺構の痕跡が残っている場合は１点鎖線で表現するであろうが、さらに下位の場合は表現できない（２点や３点鎖線の使用、他の表現も考えられるが表現した場合煩雑になる）。このとき３段階目の遺構図を表現したい場合、上位にある遺構があると表現できないため、個別図の場合に限って、当該遺構の範囲内にある上位遺構は表現しないことにした。ただし、重複遺構の存在も明示したかったため、当該遺構の範囲外の部分については、上位遺構でも表現した。この場合、平面図の表現は、あたかも当該遺構が、上位遺構を切っているように見えるため注意が必要である。実際の重複関係は遺構全体図で確認して欲しい。一方で、遺構全体図等では表現されていない、表現できなかった線が個別図では表現されている場合がある。ただし、煩雑な図になる場合が多く、一部を省略した線もある。なお、左右や下位に重複する遺構は、周辺遺構として、アミ伏せの表現（グレー）しており、当該遺構と区別しやすいようにしている。周辺遺構の重複表現は一般的な表現方法である。

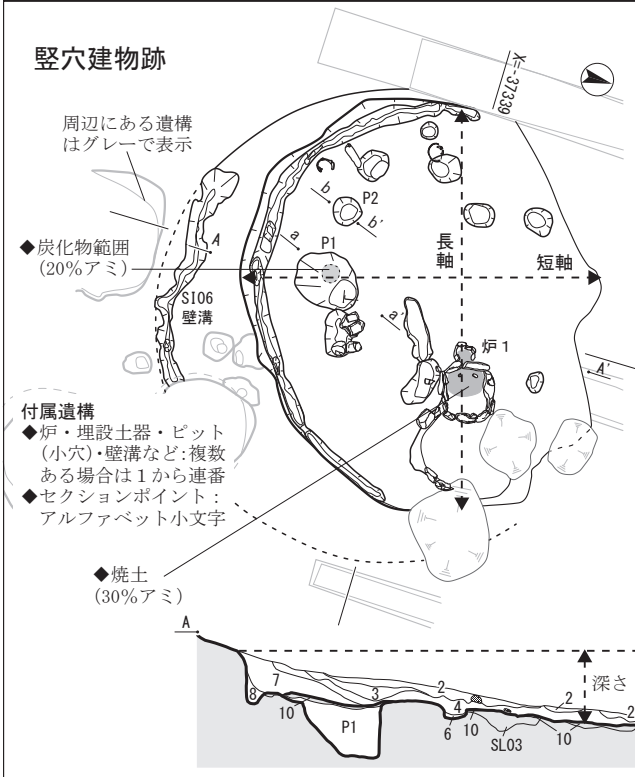
遺構の計測位置　代表的な遺構の計測位置については、凡例のように行った。また、焼土や炭化物の範囲についても、凡例のような網掛けの表現を用いている。

遺構・遺物の記載内容　本文中に記載する各種の遺構記載内容は、当該遺構の調査区における位置・重複関係・検出面（遺構確認面）・平面形・規模・深さ・断面形・床面の状況・堆積土の状況・付属施設（炉・ピットなど）・出土遺物・特記事項・時期の順に記載した。遺物については、遺構記載箇所には出土量のみを記載した。遺物の説明は、出土遺物の項でまとめて記載している。なお、縄文土器については、遺構ごとに記載しているが、その他の遺物（石器等）については、遺構別ではなく器

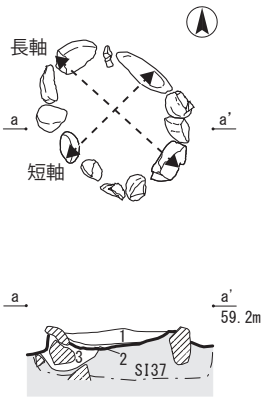
種ごとにまとめて説明している。図版もその仕組みで組版している。

不掲載土器の計測　本書に掲載していない膨大な土器片は、文様が施されている破片（B分類とする）と地文だけの胴部片（C分類とする）とに分けられる。無文土器（粗製土器）の口縁部片はB分類に含めている。B分類については、器形が不明なものが多いため文様を指標に可能な限り分類を行っている（第3分冊第11表に記載）。文様の属性については後述する（第Ⅴ章第2節）。また、文様の組み合わせによって分類を決定することが多いが、その組み合わせについては第21表を参照されたい。細片が多く、明確に判断できず他の分類と混同している可能性があるが、大まかな傾向は出せていると考えている。分類の合計は重量で行っている。そのため、大型土器が多い型式は出土率に偏りがある可能性がある。C分類については、地文の種類や施文方法によって分類可能であるが、今回は重量計測のみで分類から除外した。（西澤）

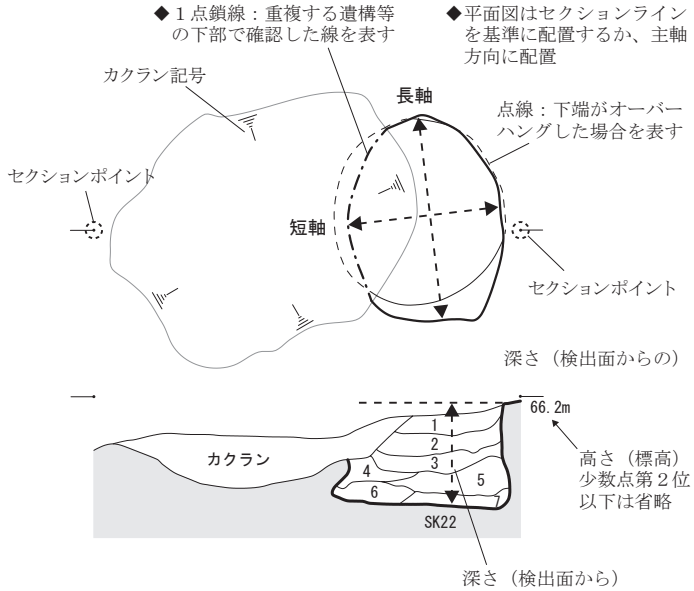
竪穴建物跡



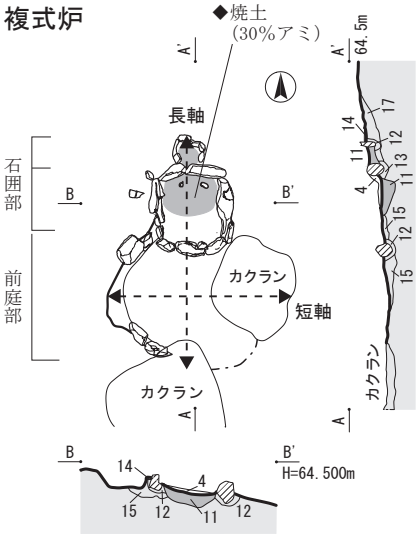
石囲炉



土坑



複式炉



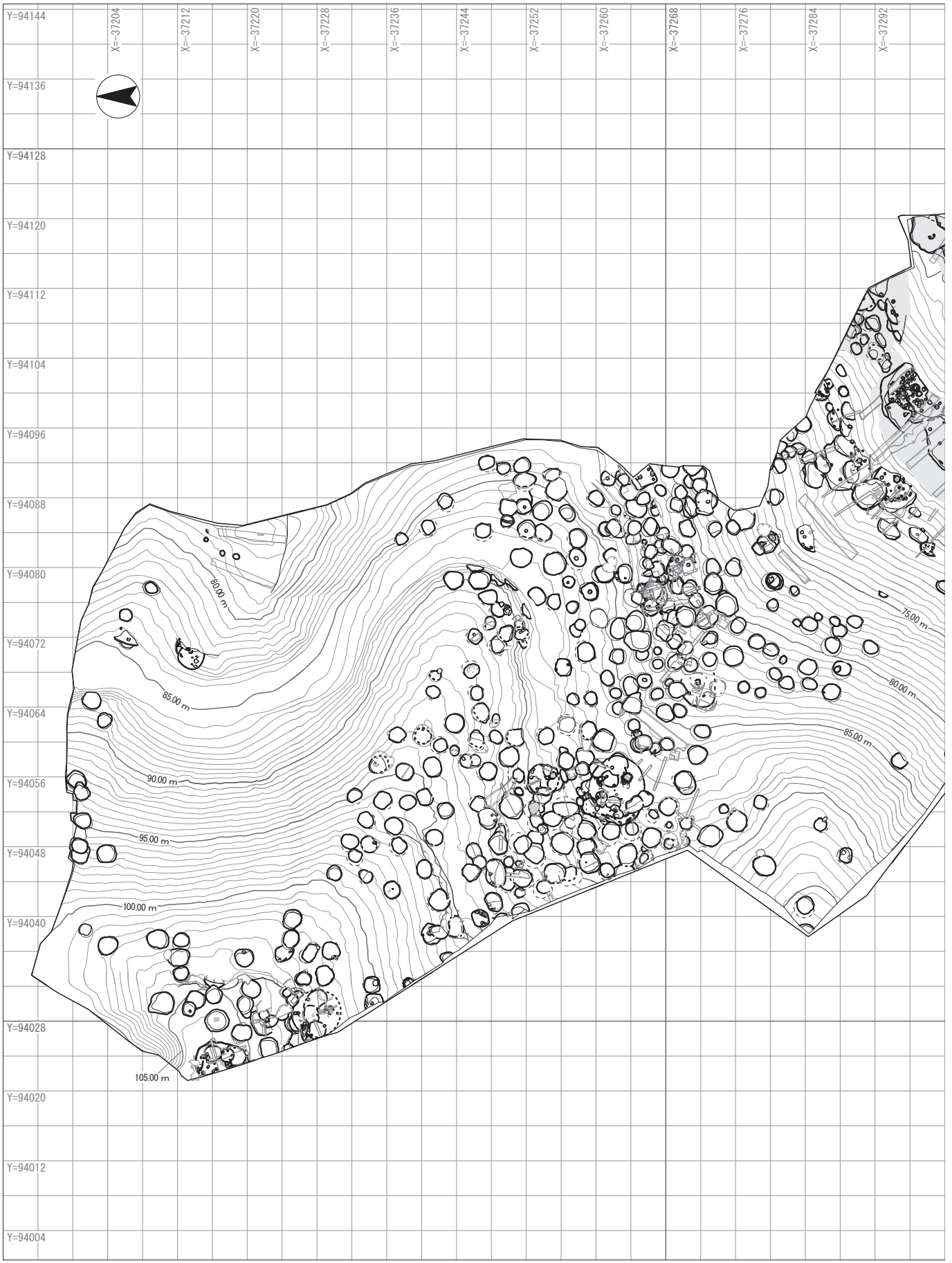
◆遺構によっては、炉の拡大図を掲載。縮尺は本体平面図の2倍（1/30）

遺物

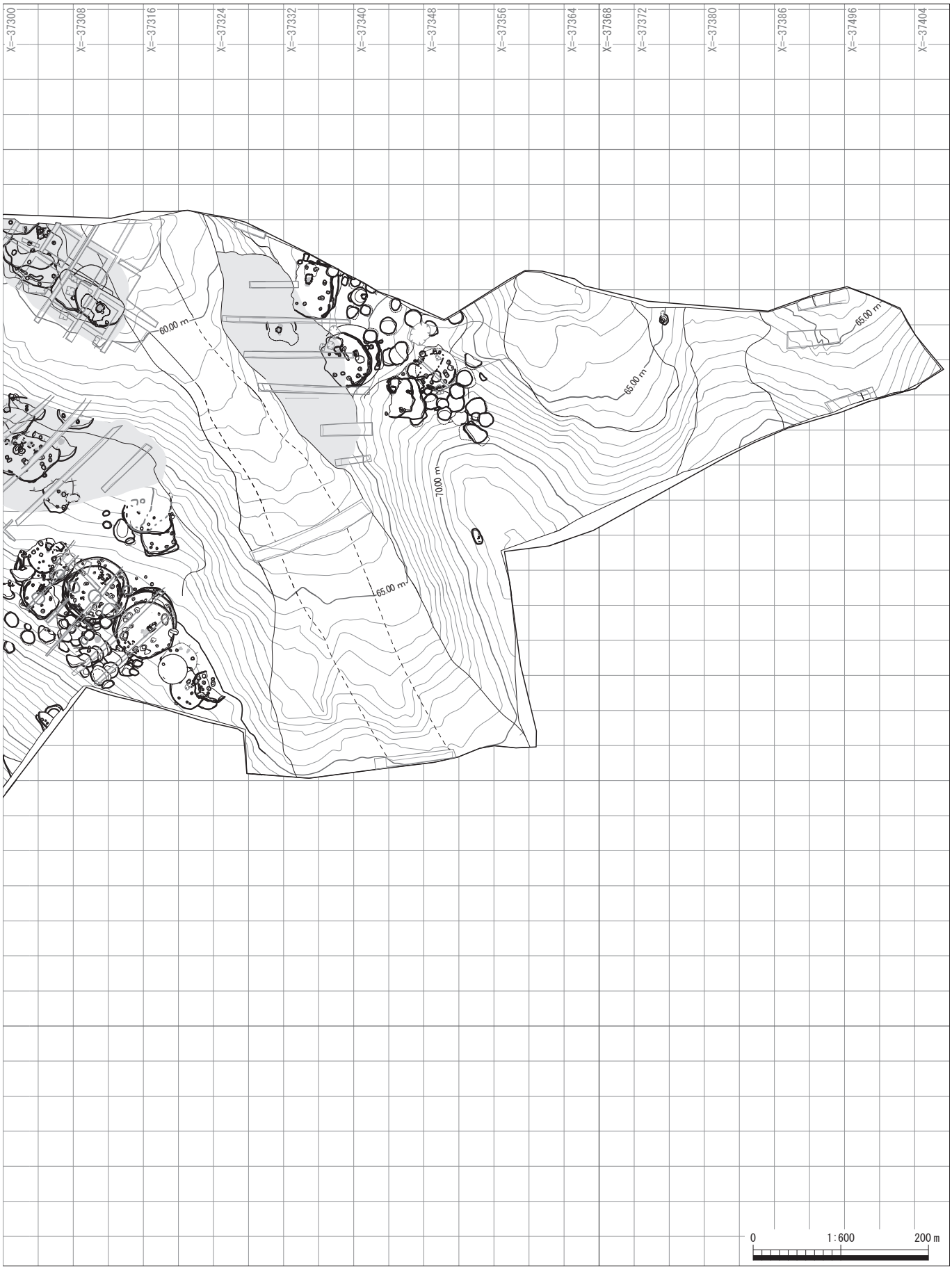
敲打痕　被熱　朱

磨面　付着物　羽口・鉄滓付着範囲

凡例


X=-37204
X=-37212
X=-37220
X=-37228
X=-37236
X=-37244
X=-37252
X=-37260
X=-37268
X=-37276
X=-37284
X=-37292
Y=94144
Y=94136
Y=94128
Y=94120
Y=94112
Y=94104
Y=94096
Y=94088
Y=94080
Y=94072
Y=94064
Y=94056
Y=94048
Y=94040
Y=94028
Y=94020
Y=94012
Y=94004
80.00 m
85.00 m
90.00 m
95.00 m
100.00 m
105.00 m
75.00 m
80.00 m
85.00 m

第 22 図　遺構配置図


X=-37300
X=-37308
X=-37316
X=-37324
X=-37332
X=-37340
X=-37348
X=-37356
X=-37364
X=-37368
X=-37372
X=-37380
X=-37386
X=-37496
X=-37404
60.00 m
65.00 m
65.00 m
65.00 m
70.00 m
0
1:600
200 m

Ⅳ　検　出　遺　構

1　検出遺構の概要

検出遺構　今回の調査で検出した遺構は以下の通りである。

竪穴建物跡・・・・・・・・・・97 棟（製鉄関連の２棟を含む）
土坑・・・・・・・・・・・・・508 基（このうちフラスコ状土坑 444 基）
炉・焼土・・・・・・・・・・・９基、
遺物包含層・・・・・・・・・・４箇所
製鉄炉・・・・・・・・・・・・２基

調査区　南北が細長いいびつな形状を呈する。三陸沿岸道路の路面となる範囲であるため、法面となる標高の高い範囲は広く、低い範囲は狭くなっている。当初（2014 年度）は調査区の中央谷部から南側が調査範囲であったが、その後遺構が北側（斜面上方）に広がることが判明したため、次の谷までの範囲が２年目に追加となった。

遺構の立地　先述のように調査区中央には大きな谷があり（第５図）、それを境に北半と南半に分ける。南尾根のさらに南側には小さな谷が２箇所あるが、遺構が存在しないため（削平か）、特定の名称は付していない。南半で遺構が集中するのが、谷部と南尾根上から北斜面にかけてである。南尾根上に遺構が集中するが、標高 70 m以上からは今回遺構を検出していない。そのため調査区外の西側に遺構が広がるか不明である。反対の東側は、宮古市教育委員会が行った第２次調査の結果から、遺構の広がりが想定できる。谷部の遺構は東側に集中する。遺物包含層のなかに竪穴建物跡が構築されている。遺物包含層は谷部を中心に南北にあり、大量の遺物を包含している。今回の土器に限ると全体のうち 65％が包含層出土である。これらの遺物は捨て場の可能性も残るが、多くは斜面上方から流出したものが溜まったものと推定される。谷部の中央から西側にかけては、近世以降の沢跡が確認できたのみである。この沢跡は谷部東側の遺構や遺物包含層の一部を破壊している。北半には中尾根、北尾根、北端の尾根と３つの尾根がおもに東西方向にのびるが、標高は北に向かうにつれ高くなる。最高地点（北尾根頂部）は標高 105.5 m前後である。最低地点は、谷部の東で 58.0 mである。調査区内では北尾根以外はわずかな範囲のみである。北尾根の南側と中尾根の間は沢跡があり、ゆるやかに窪んでいる。遺構が形成される時期には埋没しているが、その範囲にフラスコ状土坑を中心とする遺構が密集している。フラスコ状土坑は今回の調査の中心的な遺構で、合計 444 基を調査している。この北尾根と中尾根に挟まれた斜面を北尾根の南斜面と呼ぶ。この窪みは、さらに北西方向にのびているため、この遺構の集中域はさらに調査区外へ広がっていると推定される。中尾根は調査区内にはわずかに先端部分しかないが、この上にもフラスコ状土坑が立地していることから、中尾根上にも遺構が広がることが推定される。北尾根北側と北端の尾根の間にも谷部分があるが、急傾斜のためか遺構は確認できなかった。北端の尾根から北側は大きな谷となり、谷を挟んで北側の尾根は牛沢遺跡である。この山口川に面した付近の尾根は尾根単位で遺跡が立地するようである。

今回調査した遺構の多くは縄文時代中期が中心であり、そのほか中世に帰属する製鉄関連遺構（工房と想定する竪穴建物跡２棟、製鉄炉２基）がある。その間の長い期間の利用については、今回の調査からは明確な証拠が見つからなかった。以下では、これらの遺構ごとに記載していくが、出土遺物についてはおもに次章において触れる。

2　基　本　層　序

調査区内の基本層序については、地点によって異なる部分もあるが、おおむね下記の通りである。包含層２と３の堆積状況を基本としている（第 23 図）。

Ⅰ層　現表土である。遺跡全体を覆っているが、尾根上の堆積は薄い。谷部では、調査前は畑地であったため、その耕作層でもある。

Ⅱ層　黒褐色～黒色を呈するシルト層で、締まり粘性とも弱い。風化花崗岩粒、礫（径２～３㎝）を少量含んでいる。

Ⅲ層　Ⅲ層は、黒色を呈するⅡ層と基盤層（地山）であるⅣ層との間にある層を一括して含めた層である。尾根上に堆積するものを本層としたが、包含層がある斜面、谷部、埋没沢の範囲では、Ⅱ～Ⅳ層間には複数の層が存在する。これらは、斜面上方からの流出土や人為的に廃棄された層であると考えられる。層序的にⅢ層を以下のａ～ｇ層細分することになる。Ⅲ層が単層で存在する地点ではⅢｅ層が基盤となる。なお、本層を細分した層は各包含層間での対応関係は、一括（通し）の断面を観察していないため、不明である。

Ⅲａ層　暗褐色を呈する砂質シルト層で、締まりなく、粘性もない。炭化物や土器片を含む。

Ⅲｂ層　黒褐色を呈する砂質シルト層で、風化花崗岩粒を少量（５％程度）含む。

Ⅲｃ層　包含層１～４において、主要な構成層である。土器片を多く含むことが多い。断面の観察ではいずれも斜面上方からの流入が想定される。これらは、黒色系と黄色系が交互に堆積することからさらに３つに細分した。

Ⅲｃ- １層　黒褐色シルト層で、風化花崗岩粒５％、炭化物を１％含む。

Ⅲｃ- ２層　明黄褐色～黄灰色を呈する。砂質シルト層で、風化花崗岩粒を３％、黒褐色シルトブロックを３％、花崗岩礫５％を含む。

Ⅲｃ- ３層　黒褐色シルト層、風化花崗岩粒７％、土器片多量に含む。

Ⅲｄ層　黒褐色を呈する砂質シルト層で、Ⅲｃ層よりも下位にある層である。包含層２においては黒色系と黄色系が交互に、細かく堆積する。このため、人為的に廃棄された、あるいは意図的に積み上げた（盛土）層である可能性がある。包含層２については、以下の１～３にさらに細分する。

Ⅲｄ- １層　にぶい黄褐色砂質シルト層で、締まり粘性ともやや強い。含有物は、風化花崗岩粒５％、黒褐色シルトブロック（径１㎝）を１％含む。

Ⅲｄ- ２層　黒色シルト層で、風化花崗岩粒３％を含む。

Ⅲｄ- ３層　暗褐色砂質シルトで、粘性がやや強い。風化花崗岩粒が帯状に含むところがある。

Ⅲｅ層は、黒色シルト層で、層中に灰白色シルト（To-cu か）を含む箇所があることからⅢｆ・Ⅲｇ層を包含する層といえる。十和田中掫火山灰が広範囲に介在する場合（包含層１に顕著に確認）、それより上位がⅢｅ層、下位がⅢｇ層となる。

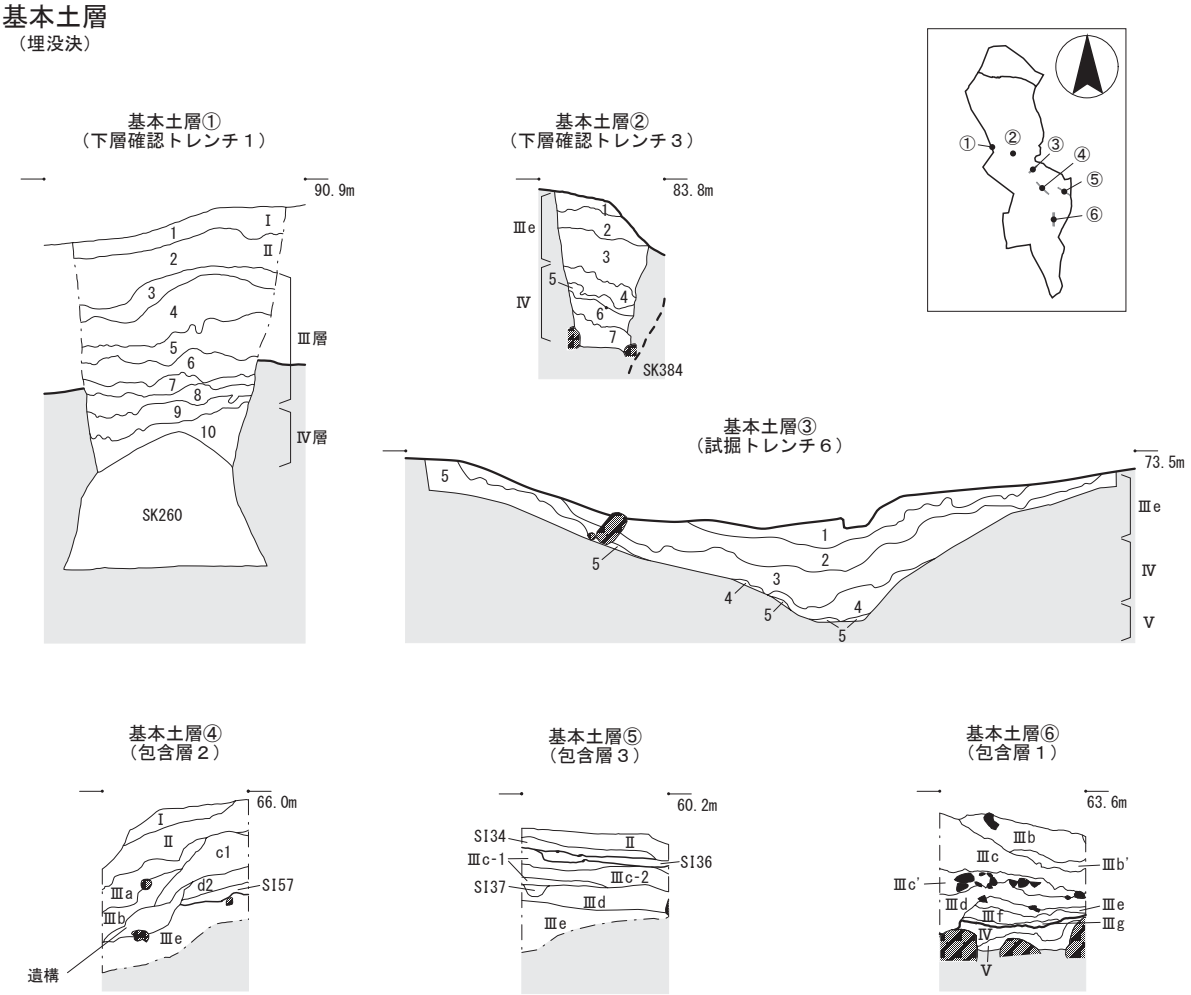
Ⅲｆ層　にぶい黄橙色シルト層で、上半部はにぶい黄褐色、下半部はにぶい黄橙色を呈するなど漸次的（グラデーション）に色が変化しており、水性堆積の状況を示す。十和田中掫火山灰の２次堆積層である。

Ⅲｇ層　中掫火山灰層の下位にある黒色砂質シルトである。

Ⅳ層　褐色シルトで、締まりが強く粘性がやや強い。風化花崗岩粒を全体的に 10%ほど含む。

Ⅴ層　風化花崗岩層で、層中に巨大な花崗岩を含んでおり、下位にある花崗岩の岩盤層から漸位的に

基本土層
（埋没決）



基本土層①（下層確認トレンチ１）
Ⅰ　1　10YR3/3 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を２％含む 植物擾乱を受ける
Ⅱ　2　10YR2/2 黒褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を２％含む 植物擾乱を受ける
Ⅲ　3　10YR6/6 明黄褐色シルト 黒褐色(10YR3/2)極細砂混じりシルトの混合層、２～５㎜大の花崗岩粒を２％含む
Ⅲ　4　10YR6/6 明黄褐色シルト　２～５㎜大の花崗岩粒を３％、１～３㎝大の黒褐色(10YR2/2)極細砂混じりシルトブロック土を５％含む
Ⅲ　5　10YR2/2 黒褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を３％、１～２㎝大の明黄褐色(10YR6/6)シルトブロック土を３％含む
Ⅲ　6　10YR3/3 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を３％、１～５㎝大の明黄褐色(10YR6/6)シルトブロック土を15％含む
Ⅲ　7　10YR4/4 褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を３％、１～５㎝大の明黄褐色(10YR6/6)シルトブロック土を10％含む
Ⅲ　8　10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を２％、１～５㎝大の明黄褐色(10YR6/6)シルトブロック土を10％含む
Ⅲ　9　10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂混じりシルト 明黄褐色(10YR6/6)シルトの混合層　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を１％含む
Ⅳ　10　10YR6/6 明黄褐色シルト　２～５㎜大の花崗岩粒を３％含む

基本土層②（下層確認トレンチ３）
Ⅲe　1　10YR2/2 黒褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を７％、５㎜大の炭粒を１％含む
Ⅲe　2　10YR3/3 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を７％、５～10㎜大の褐色(10YR4/4)極細砂混じりシルトブロック土を５％含む
Ⅲe　3　10YR3/4 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を10％、５㎜大の炭粒を１％、５～10㎜大の黄褐色(10YR5/6)極細砂混じりシルトブロック土を３％含む
Ⅳ　4　10YR4/4 褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を10％、５㎜大の炭粒を１％含む
Ⅳ　5　10YR6/6 明黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を７％、５㎜大の炭粒を２％含む
Ⅳ　6　10YR5/6 黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を７％、５㎜大の炭粒を３％、５～10㎜大の明黄褐色(10YR6/6)極細砂混じりシルトブロック土を５％含む
Ⅳ　7　10YR6/6 明黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を３％、５㎜大の炭粒を２％含む

基本土層③（下層確認トレンチ６）
Ⅲe　1　10YR3/3 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を13％含む
Ⅲe　2　10YR3/4 暗褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を15％、１～５㎝大の明黄褐色(10YR6/6)極細砂混じりシルトブロック土を５％含む
Ⅳ　3　10YR4/4 褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を15％含む
Ⅳ　4　10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を５％、５㎜大の炭粒を３％、１～３㎝大の明黄褐色(10YR6/6)極細砂混じりシルトブロック土を５％含む
Ⅴ　5　10YR6/6 明黄褐色極細砂混じりシルト　２～５㎜大の花崗岩粒を３％含む

第 23 図　基本土層

移行すると予想される。遺跡が立地する尾根の基盤層である。さらに風化し、土壌化すればⅣ層になると想定される。したがってⅣ層とＶ層の境界は漸次的である。

なお、北尾根と中尾根の間にある埋没沢については、Ⅲｅ層からⅣ層の間にも複数の層に細分できる（第 23 図基本土層①～③）が、トレンチで確認したところ、これから遺構・遺物は確認されなかった。

３　縄文時代の遺構

（１）竪 穴 建 物 跡

縄文時代の竪穴建物跡は今回の調査では、95 棟を調査した。それらの多くは横方向だけでなく、上下に重複している。そのため、建物の平面形など形状を良く残す遺構は少なかった。また、複数の遺構を同時に調査していたこともあり、とくに同じ場所で建て替えている建物については、遺物を一括で取り上げた場合もある。このような場合は、Ａ・Ｂ・・などの枝番号を付したものもある。遺構番号については、原則的に検出時の順番で行った。ただし、いくつかの欠番が生じたが、遺構数が多く、番号振り替えによる混乱を避けるため、調査時の番号をそのまま使用している。欠番となった遺構名は本文中に記載している。

本文中の記載項目は、遺構の位置、重複関係、検出面、平面形・規模、床面状況、断面、堆積土（埋土）、付属施設（炉やピットなど）、出土遺物、時期の順に記載している。なお、出土遺物については、ここでは総量や種類のみを示し、観察項目は次章にて述べることとする。なお、遺構の帰属時期については不明なものも多く、曖昧な点も残るものの、年代的な位置づけは発掘調査においては重要な点であることから、事実記載中であっても、出土遺物や切り合い等を証拠として考察・検討した結果を記載している。

SI1 竪穴建物跡（第２分冊第 23～25 図、第４分冊写真図版 26～28）　南尾根に位置している。Ⅳ層上面でにぶい黄橙色砂質シルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。重複関係は南側にある SI6 の大半を切っており、この遺構より新しい。斜面下方にある北側の部分が削平され、東側の一部が攪乱を受けている。残存する壁や複式炉の位置・主軸方位から、ほぼ円形の形状を呈し、径 640 ㎝前後の規模をもつものと推定される。床面は小さな凹凸があるがすごく堅くしまっている。ほぼ全体に褐色粘土質シルト（厚さ３～７㎝）で貼り床が施されている。床面は斜面と同じ北側に緩く傾斜している。深さは西壁で 41 ㎝、南壁で 73 ㎝、東壁で 36 ㎝である。堆積土は大きく２つに分けられる。主に上半部が浅皿状に堆積しマサ土起源の砂粒を多く含むにぶい黄橙色細砂質シルト、下半部がＵ字状に堆積する暗褐色砂質シルトで構成されている。壁際に灰褐色砂質シルトやにぶい黄褐色砂質シルトが三角状に堆積している。堆積土全体に炭化物、土器片が含まれているが、下半部により多くの土器片が含まれている。上半部と下半部との間、２層と３層との層離面に特に南側の部分に炭化物を多く含む黒褐色砂質シルト（層厚１㎝未満）が堆積している。付属施設には、炉、ピット（P1～11）、埋設土器、壁溝がある。炉は複式炉で、東壁寄りに設けられている。石囲部を２つもつ（石囲炉＋石囲炉＋前庭部）形態のものである。第１石囲部は形状が方形状を呈し径 33×35 ㎝の規模をもち、径 10～16 ㎝の亜角礫６個を埋めてつくられている。第２石囲部は東西がやや長い長方形の形状を呈し径 84×93 ㎝の規模をもち、長径 20～60 ㎝の細長い礫を中心にして 11 個を埋めてつくられている。前庭部はほぼ円形の形状を呈し、浅皿状に中央部が低くなるもので、縁辺部の一部に長径 20～30 ㎝の亜角礫を設置されている。抜き取り痕も認められることから、壁際を除く周囲に礫を回

らしていたと推定される。第１石囲部、第２石囲部で火熱による赤色変化した焼土がそれぞれ円形状に形成されている。その規模は第１石囲部で径 17×19 ㎝、厚さ７㎝、第２石囲炉で径 42×54 ㎝、厚さ 13 ㎝である。両石囲炉の使用面は浅皿状を呈し、硬くしまっている。前庭部の底面は非常に硬くしまっている。複式炉の掘方は、炉より一回り大きい規模で瓢箪形の形状を呈し断面形が浅皿状をなし前庭部側に傾斜している。さらに部分的に構成礫の大きさに合わせた掘り込みがみられる。構成礫の外側には貼り床（厚さ３㎝）が部分的に施されている。掘方の規模は長径 234 ㎝、短径 160 ㎝、深さ 24 ㎝である。堆積土は主に灰黄褐色砂質シルトで占められている。柱穴状ピットは９個検出されている。規模は P1（径 25 ㎝、深さ 49 ㎝）、P2（径 48 ㎝、深さ 72 ㎝）、P3（径 49 ㎝、深さ 54 ㎝）、P4（径 48 ㎝、深さ 30 ㎝）、P5（径 25 ㎝、深さ 26 ㎝）、P6（径 54 ㎝、深さ 64 ㎝）、P7（径 49 ㎝、深さ 54 ㎝）、P8（径 32 ㎝、深さ 29 ㎝）、P10（径 56×72 ㎝、深さ 42 ㎝）である。規模や位置から P1、P2、P3、P6、P7 が主柱穴の一部を構成していたと推定される。P1 は掘方をもつもので、その規模が径 85×108 ㎝で、柱を据えた後、周りに貼り床が施されている。溝状のピット P9（径 37×80 ㎝、深さ 12 ㎝）、P11（径 32×104 ㎝、深さ９㎝）が炉近くから検出されている。２つとも断面形が浅皿状を呈し堆積土が焼土粒、炭化物を多く含む灰黄褐色砂質シルトである。底面は硬くしまっている。P11 の底面直上より石棒が出土している。このほかに P10（径 56×72 ㎝、深さ 42 ㎝）が P1 の隣で検出されている。断面形はＵ字状を呈し堆積土が主に炭化物、土器片を含むにぶい黄褐色砂質シルトで占められている。この周囲に径８～26 ㎝の亜角礫が４個堆積している。複式炉と反対の西壁側に３個の埋設土器が出土している。埋設土器１は壁溝と P3 の間にあり床面を掘り込み、土器底部（底部径８㎝、残存高さ 25 ㎝）を斜位にして深さ 18 ㎝ほど埋め込まれている。土器内部の埋土からチャート系の剥片などが出土している。埋設土器２は P6 と接する位置にあり土器底部（底部径８㎝、残存高 15 ㎝）を垂直にして深さ７㎝程度埋め込まれている。埋設土器３は P5 の北側にあり底部下半（底部径 14 ㎝、残存高 14 ㎝）を斜位にして深さ 13 ㎝ほど埋められている。土器内部には貼床の土と類似する褐色シルトの塊が貯蔵されていた。検出された壁に沿うように壁溝が全体に回らされている。規模は幅９～24 ㎝、深さ６～18 ㎝である。断面形がＵ字形を呈し、堆積土が主ににぶい黄褐色砂質シルトで占められている。底面は凹凸があり深さも一定でない。南西壁側に石棒を縦にして斜位に立てかけるような状態で P3 に接する形で出土している。遺物は、縄文土器（22,092.2 ｇ）、土製品（16.3 ｇ）、石器（12,526 ｇ）、石製品（12,606 ｇ）が出土している。このうち土器 10 点（１～10）、土製品１点（2521）、石器 15 点（1887～1890・2004・2037・2079・2080・2114・2121・2221・2222・2335・2386・2387）、石製品３点（2435～2437）を掲載した。このほか、炉埋土と床面埋設土器内部の土壌を対象として炭化種実同定を実施し、オニグルミ・クリなどの堅果類が検出された。また、炉埋土を対象に骨・貝類同定を実施し、貝類・哺乳綱とみられる小片が検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉（大木 10 式併行期）前後の時期と想定する。　（光井）

SI2 竪穴建物跡（第２分冊第 26・27 図、第４分冊写真図版 29・30）　南尾根の北斜面に位置している。遺構の確認は、表土除去後のⅣ層～Ⅴ層面上で行っている。SI7 や SK23・24、SK14、SK56・76 と重複しており、切り合い関係から本遺構がいずれの遺構よりも新しい。北側（斜面下側）が崩落により欠失しているが、複式炉の位置などから、ややいびつではあるが、おおよそ方形を基調とする平面形を呈すると推定される。規模は、長軸 450 ㎝、短軸が残存規模で約 270 ㎝である。床面は、おおよそ平坦であり、南側の壁面はやや直立気味に立ち上がる形状である。確認面からの深さは南壁側で 50 ㎝である。堆積土は４つに区分でき、いずれも風化花崗岩粒（マサ土）を含んでいる。３層がいわゆる三角堆積であることから自然堆積の可能性がある。付属遺構には、床面中央から東壁側に複式

炉１基が、西側を中心にピット４基がある。複式炉は石囲部を１つ有し、前庭部を東壁に接するもので、主軸を東西方向にもつ。石囲部の外側（西側）には焼土が隣接しており、燃焼部と考えられる。複式炉全体の規模は、燃焼部も含めて、長軸 210 ㎝、短軸 150 ㎝である。外側の焼土の平面形は三角形状を呈し、一辺が 40～50 ㎝である。石囲部は、20～30 ㎝程度の亜角礫を使用して構成される。平面形は、一辺が約 80 ㎝の方形から台形状を呈する。西側に偏って焼土が形成される。端部は炉石の下部まで続くことから、焼土面と炉石には時期差がある。前庭部は、石囲部よりも若干下がり、楕円形状を呈する。縁辺に 30～40 ㎝の亜角礫や円礫を配するようであるが、多くは欠失している。底面には若干の貼床が施され補強されている箇所がある。そのほかピットは４個西側に集中して確認できる（P1～4)。規模は、P1 が径 28 ㎝、床面からの深さ（以下、単に深さとする）が 18 ㎝、P2 が径 37 ㎝、深さが 42 ㎝、P3 が 35×21 ㎝、深さが 31 ㎝、P4 が 39×30 ㎝、深さが 36 ㎝である。いずれも規模が小さく、柱痕跡も確認できないことから柱穴と判断できないものである。P4 は床面の残存範囲外にあるが、位置的に本遺構に所属すると考えた。遺物は、縄文土器（3,924.1 ｇ）、石器（2,612 ｇ）が出土している。このうち土器２点（11・12）を掲載した。帰属時期は、出土遺物のうち床面出土のものや重複関係から、縄文時代中期後葉（大木９式併行期）と想定する。　（西澤）

SI3 竪穴建物跡（第２分冊第 28・29 図、第４分冊写真図版 31）　南尾根の東側の緩斜面に位置する。遺構の確認は表土除去後のⅣ～Ⅴ層面上で行ったが、西側と北側（斜面側）の一部はⅢ層面上で確認した。重複関係は、本遺構とほぼ重なる SI5 や SK29 とである。新旧関係は、前者よりも新しく、後者よりも古い。平面形は、北側（斜面下側）が崩落により流出しているが、それ以外の各辺や複式炉の位置などから、東西にやや長い方形を基調とする。規模は、長軸 630 ㎝、短軸が残存範囲で 480 ㎝である。床面はほぼ平坦に構築されており、一部に薄く貼床が施される（５層)。深さは、斜面上方側（南壁側）で 60 ㎝と比較的深く掘り込まれているが、斜面下方側（北側）は上述のように流出している。堆積土は貼床を含めて５つに区分できるが、大半は１・２層である。１層はこの周辺にはめずらしく黒褐色を呈するシルト層で、土器を多量に包含していた。３・４層は初期の堆積層と考えられ、いわゆる三角堆積が観察される。付属施設には炉やピット（小穴・P1～9)、壁溝がある。炉は、前庭部を有する複式炉と想定しており、東西方向を主軸として東壁に接して配置される。石囲部の外側（西側）には楕円形に広がる焼土があり、燃焼部と考えられる。全体の規模は長軸 260 ㎝である。燃焼部は 55×40 ㎝の楕円形状であり、東側の一端が炉石の下部まで広がる。石囲部は長軸（東西方向）120 ㎝、短軸（南北方向）80 ㎝の規模で、東西に長い台形状を呈する。使用する石材は、長さ 40 ㎝程度の長方形状の亜角礫（多くは花崗岩）を使用するもので、間に小角礫を充填している。焼土は 70×50 ㎝の範囲で西側に偏って位置し、地下では石囲部の西側の焼土と接している。前庭部は、明確には確認できないが、P11 や P12 とした小穴は礫の抜き取り穴と判断したことや石囲部の位置、この付近に貼床が比較的多く施されることなどからその存在を推定している。ピットは９個が床面に位置している。配置状況から、P1～3・5～7 が主柱穴と想定される。これらの規模は、径 40～50 ㎝、深さ 30～50 ㎝の間にある。その他のピットは、これらよりも規模が小さいものである。壁溝は、南壁側と東壁側に断続的に確認できる。それぞれの幅は最大で 20 ㎝、深さが５㎝程度と浅い。遺物は、縄文土器（45,265.6 ｇ）、石器（7,676.3 ｇ）、石製品（9,855.7 ｇ）が出土している。このうち縄文土器 23 点（13～35)、石器８点（1891～1893・2038・2081・2122・2185・2186)、石製品２点（2438・2439）を掲載した。帰属時期は、掲載土器や不掲載土器の主体から、縄文時代中期中葉～後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。　（西澤）

SI4 竪穴建物跡（第２分冊第 30 図、第４分冊写真図版 32）　南尾根上に位置している。SI1 や２、３

などの建物跡とは異なり、斜面ではなく尾根上に位置するためか、大部分が削平を受けており、壁溝とピットなどを痕跡として確認している。検出は、表土除去後のⅤ層面である。重複はSK13、14、27、36とで確認でき、新旧関係はいずれの土坑より本遺構の方が新しい。平面形は、残存する壁溝（SD1～3）やピット（P1～12）の配置から円形を呈すると推定され、規模は直径約450㎝に復元した。付属施設には、壁溝とピットのほか焼土が確認できる。焼土は攪乱により一部のみ残存しているが、床面中央よりやや東寄りの位置にあり、残存規模は40㎝×20㎝である。壁溝は南西側に残存しており、深さは10～15㎝と浅い。ピットは12個あり、さらに壁溝と重複する小ピットが３個ある。これらは北東側を除きほぼ円形に配置される。大きさによって、30㎝前後のもの（P1・2・9・11）と50㎝前後のもの（P3・4・5・6・7・8・10・12）に分けられる。前者はより外側に、後者は内側に配置される。ピットの深さも外側のものが10～20㎝と浅いものが多く、後者は30～50㎝の間にありやや深い傾向にある。したがって後者は主柱穴の可能性が考えられよう。遺物は、縄文土器（58.4ｇ）が出土しているが、図示可能な遺物はない。時期決定に関わる証拠は重複関係以外にはなく、下位の土坑と同じかそれ以降とすると、帰属時期は、縄文時代中期中葉（大木8a～8b式併行）前後の可能性がある。（西澤）

SI5竪穴建物跡（第２分冊第28・29図、第４分冊写真図版31）　南尾根東側の北斜面に位置している。遺構の確認は表土除去後のⅣ～Ⅴ層面上で行った。他遺構との重複は、北側にあるSI3やSK34、SK29とであり、いずれの遺構よりも古い。平面形は南壁を参考にするとSI03と同様の形態を呈すると予想されるが、大部分が重複により破壊されているため全容は不明である。残存する範囲は、長さが380㎝、幅が60㎝分程度である。床面は、残存範囲では平坦であるが、その他の詳細は不明である。堆積土も１層のみ観察できるのみである。付属施設等も確認できない。遺物の出土はない。時期は、重複するSI3から、縄文時代中期中葉～後葉以前（大木8b～大木９式併行以前）に位置づけた。（西澤）

SI6竪穴建物跡（第２分冊第23～25図、第４分冊写真図版32）　南尾根の東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複関係は、北側の大半をSI1切られており、これらの遺構より古い。床面の部分が一部残存しているのみであるが、検出された壁溝から、平面形は、ほぼ円形な形状を呈し、径700㎝前後の規模をもつものであると推定される。床面はⅣ層を掘り込んでつくられている。床面は削平されているが一部暗褐色シルトで施された貼床がみられる。全体的に斜面下方の北側に傾斜している。付属施設には壁溝がある。壁溝は規模が幅７～42㎝、深さ36㎝、断面形がＵ字形を呈している。堆積土は主ににぶい黄褐色砂質シルトで占められている。ピット（小穴）などは検出されていない。遺物は縄文土器（60.6ｇ）が出土しているが図示したものはない。このほか、埋土の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミが少量検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複するSI1が縄文時代中期末葉（大木10式併行）と想定しているため、それ以前に位置づけた。（光井）

SI7竪穴建物跡（第２分冊第26・27図、第４分冊写真図版29）　南尾根の北側斜面に位置する竪穴建物跡である。遺構の確認は、表土除去後のⅣ層面で行った。重複は、SI2竪穴建物跡やSK23・24、SK14、SK27の貯蔵穴とである。新旧関係は、切り合い関係から、SI2よりは古く、後者の貯蔵穴よりは新しい。本遺構の大部分が、重複するSI2によって破壊されているため、南側の一部以外は残存していない。したがって、平面形は想定になるが、南辺や西辺の一部の形状から方形状を呈すると予想される。規模は、長軸が470㎝、短軸が残存範囲で150㎝となる。床面までの深さは確認面から30㎝である。堆積土は１層のみ確認でき、にぶい黄褐色を呈する砂質シルトである。付属施設とし

ては、ピット１個のみを確認している（P5）。P5 は、床面東側に位置するもので、範囲外にある可能性もあるが、本遺構に含めた。規模は、平面が 37×32 ㎝、深さが 40 ㎝である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。

（西澤）

SI8 竪穴建物跡（第２分冊第 31 図、第４分冊写真図版 33）　南尾根の北斜面に位置している。検出はⅢｂ層除去後、Ⅲｃ層上面で検出した。重複は他遺構とはないが、包含層１としたものを掘り込んで構築されている。この遺構の大部分はトレンチや包含層として精査したことや上層であるⅢｂ層によって削平を受けていることから、残存する範囲は非常に限られている。残された痕跡から推定すると、平面形は円形を呈し、規模は残存する長軸 340 ㎝、深さ 30 ㎝ほどであるが詳細は不明である。床面には部分的に貼床が施されている（２層）。堆積土は１層のみが確認でき、黒褐色を呈する砂質シルトで、土器片を多く含んでいる。付属施設には炉が１基のみ確認できる。炉は石囲炉で、径 70 ㎝の円形を呈し、20～40 ㎝の亜角礫から円礫状の礫で円形に囲んで構成される。焼土は、炉の内側中央と外側２箇所（西と東側）にある。遺物は、縄文土器（13,527.2 ｇ）、石器（311.1 ｇ）、石製品（171.4 ｇ）が出土している。このうち土器 19 点（36～54）、石器２点（1894・2356）を掲載した。帰属時期は、包含層１中のⅢｂ層とⅢｃ層の間にある遺構であることから遺物の混入が多く難しい。出土遺物の傾向から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）を想定する。　（西澤）

SI9 竪穴建物跡（第２分冊第 32 図、第４分冊写真図版 34・35）　北尾根の南斜面西端に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI10、97 と重複しており、切り合い関係から本遺構がこれらより古い。東側から南側（斜面下側）にかけて崩落により欠失しているが、おおよそ円形を基調とする平面形であると推定される。残存規模は、長軸 390 ㎝、短軸約 370 ㎝である。床面はおおよそ平坦であり、残存する北側の壁面は直立気味に立ち上がる。検出面からの深さは北壁側で 45 ㎝である。堆積土は新期に形成される SI97 の床面より下層の８つに区分できる。その内、本来の堆積土は上位に堆積する明黄褐色土より下層の６つであり、上層の焼土ブロックを含む黒褐色土及び明黄褐色土の２つは新期の遺構である SI97 の貼床に使用された人為堆積土と考えられる。本来の堆積土は、黒褐色シルトを主体としており、北壁には三角堆積の様相が認められることから自然堆積の可能性が考えられる。付属遺構には、焼土２箇所、ピット 11 個（P1～11）がある。焼土は両者共に南東側に位置している。平面形は不整形で、被熱し、若干の赤変が認められる。規模は、焼土１が約 50×26 ㎝、焼土２が約 42×32 ㎝である。焼土２の下層からは土器片が出土している。ピットは北側に分布の集中が認められるが、SI97 に伴うピットも混在している可能性が考えられる。配置状況から P1・2・7・10・11 が主柱穴と想定される。規模は、径 25～50 ㎝前後、深さ 10～30 ㎝前後である。堆積土は P11 のみ灰黄褐色砂質シルトを主体とし、それ以外は黒褐色シルトを主体とする。遺物は、縄文土器（9,272.6 ｇ）、石器（1,449 ｇ）が出土している。このうち土器６点（55～60）、石器２点（1895・2348）を掲載した。このほか埋土の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミが微量検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は出土遺物のうち、床面出土土器を重視して、縄文時代中期後葉～末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。　（野中）

SI10 竪穴建物跡（第２分冊第 33 図、第４分冊写真図版 36）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI9、11、12、97 と重複しており SI11・97 より古く、SI9・12 より新しい。北西から南西にかけての斜面上にあり、南東側は斜面になっており残っていない。炉と P1 の間には埋土から掘り込まれた攪乱があり、床面をわずかに掘り下げている。残存形状は短軸 370 ㎝、長軸 410 ㎝の略方形である。推定される元々の形状は 4.1 ㎡の略方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、

壁高は最大で約 67 ㎝である。床面はほぼ平らである。堆積土は、砂質シルトを主体とした６層で構成される。厚さは 10 ㎝から 30 ㎝程である。付属遺構は、炉が１基とピットが７基ある。炉は、遺構中央より南東に位置している。SI11 によって炉石の稜線と前庭部の上端が削られて平坦になっている。炉は、長軸が北西から南東にのびる複式炉で、規模は前庭部を含めた全体で短軸 57 ㎝、長軸 140 ㎝である。小石囲部分は、短軸 24 ㎝、長軸 28 ㎝の長方形で、大石囲部は短軸 46 ㎝、長軸 60 ㎝である。残存する前庭部は短軸 44 ㎝、長軸 53 ㎝の略円形である。ピット（P1～7）は、遺構の壁面近くに P2 から P5 が、遺構中心付近に P1、P7 が位置する。規模は径 15～25 ㎝が５基（P3～7）、径 30～40 ㎝が２基（P1・2）である。深さは 10～20 ㎝が２基（P1・5）、30～36 ㎝が３基（P2・4・6）、45～46 ㎝が２基（P3・7）となっている。遺物は、縄文土器（14,460.9 ｇ）、石器（2,558 ｇ）が出土している。このうち土器７点（61～67）、石器 10 点（1896～1898・2005・2039・2083・2088～2390・2268）を掲載した。このほか、SI11 と一括して取り上げた縄文土器（2,200 ｇ）、鉄滓（8.6 ｇ）がある。また焼土や直上の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリ・トチノキ等の堅果類が検出された（第Ⅵ章参照）。時期は、出土遺物がやや古いものの、重複関係から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。　（中島）

SI11 竪穴建物跡（第２分冊第 34 図、第４分冊写真図版 37）　北尾根の南斜面西端に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI10、12 と重複しており、一番新しい遺構である。南東側は斜面になっており残っていない。平面形は、南西から北東方向に長軸がのびる半円形で、規模は、短軸 180 ㎝、長軸 360 ㎝である。推定される元々の形状は同じ方向に長軸がのびる楕円形で、規模は、短軸 320 ㎝、長軸 420 ㎝である。SI10 と切り合っている箇所に扁平な巨石が露出している。壁は外反しながら立ち上がり、床面は東に向かってわずかに傾斜している。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とした７層で構成される。２層から６層にかけて焼土粒が含まれており、６層中には、20 ㎝程の炭化材が含まれている。付属遺構には、ピットが９基（P1～10、P5 は欠番）と壁溝がある。柱痕跡を残すピットが P2・3・8 である。規模は、P2 が径 40 ㎝程で、P3・8 が短軸 40 ㎝、長軸 50 ㎝となっており、深さは３基とも床面から 36 ㎝である。その他のピットの規模は P1・7 は短軸 25 ㎝、長軸約 30 ㎝、深さ約 40 ㎝。P4 は短軸 35 ㎝、長軸 40 ㎝、推定される床面からの深さが 54 ㎝。P6・10 は径 25 ㎝、深さ約 40 ㎝。P9 は短軸 40 ㎝、長軸 65 ㎝、深さ 38 ㎝となっている。壁溝は２種類あり、礫の西南側にぶつかる太い壁溝と礫の東側にある壁溝、太い壁溝と壁との間にあるものである。壁際の壁溝は太い壁溝より一段高い所に位置している。２本は床面に露出した礫の西側で重複しており、新旧関係は不明である。遺物は、縄文土器（6,260.6 ｇ）、石器（7.2 ｇ）が出土した。このうち土器２点（68・69）、石器１点（1899）を掲載した。このほか SI10 と一括で取り上げた出土遺物として縄文土器（2.200 ｇ）・鉄滓（8.6 ｇ）がある。帰属時期は、出土土器がやや古相を示すが、重複関係から縄文時代中期後葉～末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。　（中島）

SI12 竪穴建物跡（第２分冊第 33 図、第４分冊写真図版 38）　北尾根南斜面下位（西端）に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI10・11 と重複しており、両方に床面を壊されている一番古い遺構である。平面形は、現状では扇形で、規模は半径約 120 ㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約 15 ㎝である。床面は北西から南東に向かって傾斜している。堆積土は、黒褐色砂質シルトの単層である。付属施設は確認できない。遺物は、縄文土器（399.2 ｇ）が出土しているが、図化した遺物はない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。ただし、重複がもっとも古いことから中期中葉前半まで遡る可能性がある。　（中島）

SI13 竪穴建物跡（第２分冊第 35～37 図、第４分冊写真図版 39・41）　北尾根の南斜面下位に位置す

る竪穴建物跡である。検出面はⅣ層上面で、黒褐色砂質シルトの広がりがみられ遺構と確認されたものである。SI14・SI16・SI17・SI18 を切ってつくられており、これらの遺構より新しい。平面形は、斜面下方の東側は削平を受けているが、上方側にある壁などから、隅丸長方形の形状を呈し、長軸径（南北）540 ㎝前後の規模をもつものであると推定される。断面形は、壁が床面から緩く外反しながら立ち上がるものである。SI18 の堆積土上半部を切ってつくられている北側の床面は、部分的に褐色砂質シルトで貼り床が施され一部やや硬くしまっている。SI14 を切ってつくられている範囲の床面は部分にも暗褐色砂質シルトで貼り床（厚さ６～14 ㎝）が施され、しっかり硬くしまっている。SI18 と重複する部分は凹凸があるが、全体としてはやや東側に傾斜している。壁高は西壁で 62 ㎝、北壁で 40 ㎝、南壁で 46 ㎝である。堆積土は大きく３つに分けられる。上位が炭化物を含む黒色～黒褐色砂質シルト、中位が褐色砂質シルトのブロック、土器片を含む暗褐色砂質シルト、下位が炭化物、土器片を含む黒褐色砂質シルトで構成されている。上位の１～３層は浅皿状に堆積している。下位の６層と７層との層離面に土器片が多く集積し長径 10 ㎝の亜角礫と共に堆積している。堆積土は自然堆積の様相を呈していると推定される。堆積土中より楕円文に刺突が入った文様の土器片が出土している。付属施設は、炉が南東側から検出されている。炉の西側に細長い礫（径 10×17×24 ㎝）が１個ともなうものである。構成礫は 10 ㎝ほど埋め込まれている。火熱により赤色変化した炉の焼土は不整円形な形状を呈し、径 19×24 ㎝、厚さ６㎝の規模をもつものである。斜面下方にあたる東側が削平を受けていることから炉の形態についての詳細は不明であるが、石囲炉であった可能性も考えられる。ピット（小穴）が４個検出されている（P1～4）。平面形はほぼ円形を呈している。規模は、P1 が径 24 ㎝・深さ 15 ㎝、P2 が径 30 ㎝・深さ８㎝、P3 が径 25 ㎝・深さ 30 ㎝、P4 が径 26 ㎝・深さ８㎝である。柱穴配置は不明である。規模、位置から P3 は主柱穴を構成していた可能性がある。壁溝などの他の施設は検出されていない。遺物は、SI13 単独では、縄文土器（14,180.4 ｇ）、土製品（6.8 ｇ）、石器（1,441 ｇ）、鉄滓（108 ｇ）が出土している。このうち、土器 18 点（70～87）、土製品１点（2498）、石器 11 点（1900～1904・2006・2040・2041・2171・2187・2391・2392）を掲載した。そのほか、SI13・14（88 ～ 90）、SI13 ～ 15（91 ～ 98）、SI13 ～ 15・18（99 ～ 101）、SI13・14・18（102・103）、SI13・18（104～112）のまとまりで土器の出土があり、SI13・14・15 一括で取り上げた鉄滓（22.2 ｇ）も出土している。また、炉焼土の土壌を対象として炭化種実同定を実施した結果、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、出土遺物の割合が縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）と中期後葉（大木９式併行）に２分されるが、重複関係から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）位置づけた。（光井）

SI14 竪穴建物跡（第２分冊第 38・39 図、第４分冊写真図版 40）　北尾根南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。トレンチ調査で SI13 と一緒に検出されている。重複関係は SI13・18 に切られ、SI15、SI16 を切っていることから、SI13・18 より古く、SI15・16 より新しい。平面形は、残存する西壁と北壁の一部から、隅丸長方形の形状をもち、長軸径 540 ㎝前後、短軸径 400 ㎝程度の規模をもつものであったと推定される。断面形は、北壁の観察から、壁は底面から丸味を帯びて立ち上がり外反している。Ⅳ層を掘り込んでつくられ、斜面下方の東側の部分に暗褐色シルトで貼り床（厚さ 10～24 ㎝）が施されている。床面は硬くしまっており、全体的に幾分東側に傾斜している。壁高は最深の西壁中央部で 65 ㎝である。堆積土は、西壁側の土層観察用のベルト断面から、堆積土は大きく３つに分けられる。上位が炭化物を含む暗褐色～褐色砂質シルト、中位が炭化物、褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルト、下位が黄褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色シルトで構成されている。付属施設は、南東隅から礫を伴う炉が検出されている。炉は南東側にあり大きな巨石

の間かつほぼ直上につくられている。西側に細長い扁平な礫（14×16×32 ㎝）１個と北側に長径20 ㎝前後の礫２個を配置している。構成礫は６㎝ほど埋め込められている。火熱による赤色変化した焼土は不整円形な形状を呈し、径 48×72 ㎝、厚さ３㎝の規模である。両端にある２つの巨円礫も石囲部の機能を結果的に果たしていたと推定される。炉の掘方は形状が東西に長い不整な長方形を呈し、断面形が浅皿状をなしている。規模は長径 230 ㎝、短径 60 ㎝、深さ 10 ㎝である。炉を構築する位置に巨礫があり除去するにはかなりの労力が必要であるため、あえて巨石を利用して意識的に炉が構築されたとも考えられる。西側の構成礫の外側（西側）にも炉の現地性焼土が広がることや炉の掘方が構成礫の範囲より大きく掘られていることから、西側にもう一つの石囲部がもち、東側に前庭部をもつ複式炉の可能性もあると考えられる。ピット（小穴）が８個検出されている（P1～8)。形状はほぼ円形を呈している。規模は P1 が径 36 ㎝・深さ７㎝、P2 が径 43 ㎝・深さ 41 ㎝、P3 が径 42 ㎝・37 ㎝、P4 が径 24 ㎝・深さ 14 ㎝、P5 が径 27 ㎝・深さ 21 ㎝、P6 が径 31 ㎝・深さ 23 ㎝、P7 が径 38 ㎝・深さ 11 ㎝、P8 が径 24 ㎝・深さ７㎝である。柱穴配置は不明である。規模、位置などから、P2、P3、P5 が主柱穴の一部を構成していたと推定される。P2 の堆積土は主に暗褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトで構成され、P3 と P5 の堆積土は暗褐色砂質シルトで占められている。壁溝などのその他の施設は検出されていない。遺物は、重複する遺構を同時に調査したため、重複遺構の遺物が混在している。この遺構単独では、縄文土器（4,009.1 ｇ）、石器（1,942 ｇ）、鉄滓（18 ｇ）が出土している。このうち、土器４点（113～116)、石器５点（1905・2007・2188・2223・2393）を掲載した。このほか SI13・14（88～90)、SI13～15（91～98)、SI13～15・18（99～101）、SI13・14・18（102・103)、SI14・15（117～120）のまとまりで土器が出土している（詳細は次章)。また上述の SI13・14・15 一括で取り上げた鉄滓（22.2 ｇ）がある。帰属時期は、出土土器や重複関係と複式炉の可能性があることから、縄文時代中期中葉（大木９式期）に位置づけた。　（光井）

SI15 竪穴建物跡（第２分冊第 38・39 図、第４分冊写真図版 41・42）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複関係は SI14 に大半を切られていることから、この遺構より古い。平面形は、残存する西側の壁から、隅丸方形状を呈していたものと推定される。確認面での残存する壁の規模は西壁が 640 ㎝、北壁が 90 ㎝である。僅かに残る床面は硬くしまってはいない。壁高は西壁中央部で 70 ㎝である。堆積土は、西側に残る土層断面から、上位が炭化物、暗褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルト、中位が炭化物、褐色砂質シルト・黄褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルト、下位が炭化物、黄褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルトで構成されている。残存する部分が少ないため、付属施設は確認できない。遺物は、重複する遺構を同時に調査したため、重複遺構の遺物が混在している。SI15 単独で限定できる遺物はない。SI13～15（91～98)、SI13～15・18（99～101)、SI14・15（117～120）のまとまりでは出土しており、示した土器もある（詳細は次章)。土器以外では、石器（36 ｇ)、石製品（10.9 ｇ）が出土している。このうち石器２点（1906・2172)、石製品１点（2471）を掲載した。このほか上述の SI13・14・15 一括で取り上げた鉄滓がある。帰属時期は、SI14・15 のまとまりでは、出土土器や重複がもっとも古いことから、縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行期）に位置づけた。　（光井）

SI16 竪穴建物跡（第２分冊第 35～37 図、第４分冊写真図版 43）　北尾根南斜面下位に位置している。SI13 を精査している中で、石囲炉が検出され判明したものである。本遺構は SI13・14・18 と重複し、いずれの遺構より古い。斜面下方の西側の部分は削平されている。残存する西壁、周溝から、平面形は楕円形の形状を呈し 長径（東西）500 ㎝前後の規模をもつものであると推定される。床面は凹凸があるがほぼ平坦でしまりがある。一部南側を黒褐色砂質シルトのブロックを含む暗褐色砂質シルト

で貼り床が施されている。SI13 に切られていることから、堆積土についての詳細については不明である。僅かに残る南側の観察用土層断面から、堆積土の下部は炭化物、黄褐色シルトのブロックを含む暗褐色シルトで占められている。付属施設には、炉、ピット（小穴）、壁溝がある。炉は石囲炉で、斜面下方の東側に設けられている。長径 15～38 ㎝の花崗岩を中心に 12 個の構成礫を深さ５～18 ㎝程埋め込んでつくられている。ほぼ円形な形状を呈し、径 63×66 ㎝の規模をもつものである。炉内部の北側半分に火熱による赤色変化した形状が楕円形の焼土がみられる。規模は径 23×36 ㎝、厚さ６㎝である。ピットは、南壁側に３個検出されている（P1～5）。規模は、P1 が径 36 ㎝・深さ 16 ㎝、P2 が径 32 ㎝・深さ 18 ㎝、P3 が径 26 ㎝・深さ 26 ㎝である。柱穴配置は不明である。西壁の一部に壁溝が検出されている。規模は幅 12～18 ㎝、深さ５㎝、長さ 54 ㎝である。断面形はＵ字状を呈している。堆積土は炭化物、にぶい黄褐色砂質シルト・褐色砂質シルトのブロックを含む暗褐色砂質シルトで占められている。南側から不整な方形状の土坑状ピットが４個検出されている。規模は SK1（径 57×120 ㎝、深さ 16 ㎝）、SK2（径 57×79 ㎝、深さ 19 ㎝）、SK3（径 66×89 ㎝深さ７㎝）、SK4（径 72×90 ㎝、深さ７㎝）である。断面形はＵ字形状を呈し底面には幾分凹凸がある。SK1 は長方形状を呈し、SK2 を切り、住居外に延びていることから、本遺構より新しい可能性がある。SK3 は SK4 を切っている。堆積土は SK1 が黄褐色シルトのブロックを含む暗褐色粘土、SK2 が黄褐色粘土粒を含む暗褐色シルト、SK3 が黒褐色シルトのブロックを多く含む褐色シルト、SK4 が黒褐色シルトを多く含む褐色シルトとマサ土をふくむ黄褐色シルトである。これらの土坑の性格・機能などの詳細については不明であるが、炉脇のピットや炉の掘方であった可能性もある。遺物は、重複する遺構を同時に調査したため、重複遺構の遺物が混在している。SI16 単独では、縄文土器（442.1 ｇ）が出土しているが、図化したものはない。そのほか石器（468 ｇ）が出土しており、２点（1907・2357）を掲載した。また、SI16・17 一括で取り上げた石器（２ｇ）が出土しており、石器１点（1908）を掲載した。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉（大木 8a 式併行）に位置づけた。　（光井）

SI17 竪穴建物跡（第２分冊第 40 図、第４分冊写真図版 44）　北尾根南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面で、黒褐色砂質シルトの広がりがみられ遺構と判明したものである。重複は、西側を SK55、南側を SI18 に切られており、これらの遺構より古い。平面形は、南側がやや不整な楕円形を呈している。規模は長径 272 ㎝、短径 206 ㎝である。床面は、緩やかな凹凸があり段状をなしている。斜面上方が高く斜面下方の西側に傾斜している。壁高は西壁で 82 ㎝、東壁で 22 ㎝である。堆積土は、大きく４つに分けられる。上半部上位が炭化物、褐色～暗褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルト、その下位が暗褐色シルトのブロックを含む褐色砂質シルト、下半部の上位が炭化物、暗褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルト、その下位が褐色～暗褐色砂質シルトのブロックを含む黒色砂質シルトで構成されている。下半部上位の黒褐色砂質シルト層中にはラミナ状に堆積している部分がみられる。斜面に沿うように浅皿状に堆積しており、全体的に自然堆積の様相を呈している。そのほか付属施設は確認していない。竪穴建物跡と考える要素が少なく、住居跡状遺構または土坑とした方が良いのかもしれない。遺物は、縄文土器（102.4 ｇ）が出土しているが、図化した遺物はない。このほか先述のように SI16・17 から石器（２ｇ）が出土しており、１点（1908）を掲載した。帰属時期は、出土土器や重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行）に位置づけた。

（光井）

SI18 竪穴建物跡（第２分冊第 35～37 図、第４分冊写真図版 45）　北尾根南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI13 を精査する際に床面下から遺構が確認された。重複関係は SI13 に切られており、これより古い。SI14・16・17 を切っており、これらより新しい。斜面下方にあたる東

側が削平されている。平面形は、残存する壁や炉の位置から、隅丸長方形の形状を呈し、長径 460 ㎝前後、短径 300 ㎝程度の規模をもつものであると推定される。床面は、Ⅳ層を掘り込んでつくられ、緩い凹凸があるがしまっている。床面は一部暗褐色砂質シルトで貼床（厚さ６㎝）が施されている。全体として、斜面下方の東側に傾斜している。堆積土は炭化物、褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルトで占められている。付属施設には東端に礫を伴う炉やピット５個がある。炉は、南側に直線状に１列（長さ 84 ㎝）になる形で、長径 12～40 ㎝の礫を中心に５個使って深さ４㎝程埋め込んでつくられている。火熱による赤色変化した焼土はやや不整な円形の形状を呈し、長径 60 ㎝、短径 39 ㎝、厚さ 11 ㎝の規模をもつものである。炉全体の掘方は検出されていないが、構成礫を埋め込むため長径 18～30 ㎝程度の浅い小ピット状の掘方が５個見つかっている。炉が斜面下方にあり大きく削平されていることや炉を囲む礫が直線状に配置されていることから、「コ」の字形または「ロ」の字形に礫を配置した石囲炉であった可能性もある。ピットは５個検出されている（P1～5）。規模は P1（径 48 ㎝、深さ 14 ㎝）、P2（径 33 ㎝、深さ 30 ㎝）、P3（径 27 ㎝、深さ 35 ㎝）、P4（径 27 ㎝、深さ 34 ㎝）、P5（径 36 ㎝、深さ 42 ㎝）である。平面形はほぼ円形を呈している。柱穴配置は不明である。規模、位置などから、P3、P5 は主柱穴の一部を形成していたものと推定される。西壁際に直線状の壁溝（幅９～15 ㎝、深さ８㎝、長さ 108 ㎝）、北西壁に沿う弧状の壁溝（幅 12～21 ㎝、深さ８㎝、長さ 114 ㎝）が検出されている。両壁溝の断面形は「U」字状を呈している。堆積土はマサ土を含む褐色砂質シルトである。遺物は、重複する遺構を同時に調査したため、重複遺構の遺物が混在している。SI18 として限定できたものは、縄文土器（3,395.6 ｇ）、石器（1.6 ｇ）、鉄滓（4.1 ｇ）である。このうち土器３点（121～123）、石器１点（1909）を掲載した。このほか SI13～15・18（99～101）、SI13・14・18（102・103）、SI13・18（104～112）のまとまりで土器が出土している（詳細は次章）。また、炉焼土を対象として炭化種実同定と骨・貝類同定を実施している。その結果、炭化種実は未検出であったが、硬骨魚綱の焼骨片などが検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物や重複関係から、年代幅があるが縄文時代中期中葉前半から後葉（大木 8a～９式併行）に位置づけた。（光井）

SI19 竪穴建物跡（第２分冊第 40 図、第４分冊写真図版 46）　北尾根南斜面下位に位置している。遺構の確認は、西側をⅤ層、中央から東側をⅢ層中で行った。南斜面中央にある埋没沢から西側の岸部分の境界に相当する場所に位置している。重複は、複数の竪穴建物跡とで関係があり、新旧関係は、西側の SI90 よりは古く、底面より下位にある SI20A・B、SI70A・B・C よりは新しい。炉跡が床面の中心にあると仮定するならば、東側半分（斜面下方側）は崩落している。したがって、本来はほぼ円形を呈する平面形と推定されるが、現状では西側約半分（斜面上方側）が残存しているに過ぎない。現状での規模（残存規模）は、長軸（南北）方向に 290 ㎝、短軸（東西）方向に 160 ㎝である。炉跡が中心と考えると、径 300～400 ㎝前後の大きさが推定できる。床面までの深さは、検出面から 40 ㎝である。建物の主軸方向が不明確であるが、ここでは石囲炉の長軸側をそれと判断している。床面は東方向に向かって緩やかに傾斜しているものの炉跡付近は平坦である。斜面の傾斜方向や埋没沢の影響で東側は沈下している可能性が高い。堆積土は３つに区分した。黄褐色や暗灰黄色を呈する黄色基調の細礫混じりシルトを主体とする（１・２層）。４層は、黒褐色を呈する砂混じりシルト層で最下層と判断したが、１・２層とも色調を異にすることから下層にある SI20A・B の堆積土上部の可能性もある。これらの層はいずれも斜面上方から堆積している。付属施設には炉が１基ある。残存状況から石囲炉と判断したが、一部はみ出る礫があることや南側に位置する貼床の存在から複式炉の可能性も残す。南側には黄褐色土を基調とした貼床が確認できる。炉自体は花崗岩の角礫や円礫を中

心に配置され、平面形は南側がやや狭い方形を呈する。長軸方向は南北で、長さ 64 ㎝である。短軸方向は東西で、長さ 48 ㎝である。焼土は炉の中央から外側（北側）にかけて広がっている。そのほか柱穴やピット（小穴）は確認できなかった。遺物は、縄文土器（1,718.8 ｇ）が出土している。このうち土器１点（124）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種実の分析を行い、トチノキ、オニグルミ、クリや不明堅果類の種子が同定されている（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土遺物においては縄文時代中期中葉前半の土器の割合が大きいが重複関係を優先し、縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）に位置づけた。（西澤）

SI20A 竪穴建物跡（第２分冊第 41 図、第４分冊写真図版 47）　北尾根南斜面下位に位置している。遺構の確認は、おおむねⅤ層上面かつ SI90 の床面で行った。SI90 と SI19 の建物跡が上位にあり、SI70A・B・C、SI20B とはほぼ同位にある。新旧関係は、SI20B よりは新しく、他の竪穴建物跡よりも古い。大部分が重複する SI70A によって破壊されているため全容は不明である。残存する範囲から推定すると、平面形は円形から楕円形状を呈し、規模は推定で径 450 ㎝程である。検出面から床面までの深さは 60 ㎝であり、床面はほぼ平坦に構築されている（残存範囲が少い）。堆積土は２層に区分した。１層は褐灰色を呈する細礫混じりのシルト層であるが、SI70A にも確認できることから、比較的新しい堆積土と考えられる。２層は黒褐色を呈する細礫混じりのシルト層で、本来の堆積土であろう。付属施設には壁溝とピットが６個あり、炉は他遺構との重複のためか確認できなかった。壁溝は東側にのみ残存し、深さは最大で 46 ㎝であるが、平均すると 20 ㎝前後である。ピットは７個（P1 ～ 7）を確認したが、いずれも SI70A の床面上で確認した。これらは、おもに床面の推定範囲における配置状況や規模の点から SI20A に所属するピットと考えた。したがって、重複する別の遺構に付属する可能性もある。深さ（底面標高）からみると、おおむね次の３つに分けられる。① P4・5、② P3・6・7、③ P1・2 である。このうち①は、深さがもっとも深く主柱穴を構成する可能性がある。遺物は、調査は SI20A・B を同時に行ったため明確に分けておらず、分離できない。確実に SI20A から出土したのは石器（91.7 ｇ）のみである。それ以外では SI20A・B あわせて、縄文土器（2,127 ｇ）、土製品（38.1 ｇ）が出土している。このうち土器１点（125）、土製品１点（2499）を掲載した。帰属時期は、出土遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行）と推定される。（西澤）

SI20B 竪穴建物跡（第２分冊第 42 図、第４分冊写真図版 47）　北尾根南斜面下位に位置している。遺構の確認は、おおむねⅤ層上面付近および SI20A の床面で行った。重複は、SI90、SI19、SI20A（本遺構よりも上位に位置する）、SI70A・B・C（本遺構とほぼ同位）とである。新旧関係は、いずれの建物跡よりも本遺構の方が古い。SI20A と同様に大部分が重複する SI70A によって破壊されているため全容は不明である。残存する範囲から推定すると、平面形は円形を呈する。規模（床面）は、残存範囲から復元すると直径約 350 ㎝となる。ほぼ同位置で重複する SI20A よりは一回り小さい。床面は部分的にしか確認していないが、ほぼ平坦である。堆積土は１層のみ確認した。黄褐色を呈する細礫混じりのシルト層である。Ⅳ層を主体とし、黒褐色土ブロックも混合することから、SI20A 構築の際に人為的に整地された可能性や SI20A の貼床の可能性もある。付属施設にはピット３個がある（P1 ～ 3）。これらは、SI20B の残存範囲内の床面で検出した。P1 ～ P3 はいずれも長軸 40 ㎝～ 50 ㎝の規模で、底面標高は 69.50 ｍ前後と同規模である。それぞれの間隔も 140 ㎝、150 ㎝であり円形に配置されるなど統一的である。これらのことから主柱穴の可能性が高い。遺物は、調査を SI20A・B 同時に行ったため明確に分けておらず分離できない。上述のように SI20A・B あわせて、縄文土器（2,127 ｇ）、土製品（38.1 ｇ）が出土している。このうち土器１点（125）、土製品１点（2499）を掲載した。時期は重複関係や出土遺物から縄文時代中期中葉（大木 8a 式期）と推定される。（西澤）

SI21 欠番

SI22A 竪穴建物跡（第２分冊第 43～46 図、第４分冊写真図版 48～52）　北尾根南斜面下位に位置している。検出はⅣ層上面で行った。SI22B・SI22C、SK509・510・518 と重複し、どの遺構よりも新しい。平面形は略円形で、規模は長径 690 ㎝、短径 620 ㎝である。深さは掘方より上方の斜面の一部も含む可能性があるが最大 150 ㎝、主軸は炉１の長軸と炉２を結ぶＮ -40°－Ｅである。断面から、壁は床面から外傾してほぼ垂直に立ち上がり、床面は住居北西側が窪み中央から南東にかけてほぼ平坦であることがわかる。堆積土は６層に区分できる。１～４層まではブロックを含む人為堆積、５層は細かい互層で三角堆積を呈しており斜面上方からの自然堆積と考えられることから、埋没過程は廃絶後しばらくしてから埋め戻されたと考えられる。６層は堅く締まった粘質シルトの貼床で床面上に斑状に残存している。本遺構には炉２基、ピット 13 個（P1～13）、壁溝が付属している。炉１は残存する石囲部から複式炉であり、住居中央からやや南に位置している。検出時には炉内に巨礫が詰めてあり、廃絶時に詰めたと考えられる。南東から第一石囲部、第二石囲部があり、規模は炉石も含め長軸 130 ㎝、短軸 80 ㎝、前庭部は確認できなかったが、同遺跡内の複式炉の前庭部から第一石囲部の南東にあった可能性がある。炉外には、第二石囲部の北西側に焼土２箇所と、炭化材・灰の集中する範囲がある。炉内に赤色変化した箇所は無いが、堅く締まっている５層上面が焼土面と思われる。炉２は、残存する４点の炉石から石囲炉と考えられ、住居の北西壁際に位置している。推定される規模は、30×30 ㎝で平面形は不明である。炉外北西側に焼土がある。炉内と考えられる箇所に赤色変化は見られないが、断面での炉外の焼土との関係と堅く締まっている事から４層上面が焼土面と考えられる。複式炉と石囲炉は同じ床面上にあり、焼土が炉外に形成されることから SI22A 内で併用されていた可能性がある。ピットの平面形は全て略円形で、開口部の規模は、長径 19～46 ㎝のものが４個（P2・5・6・7）、54～86 ㎝が５個（P1・3・4・8・9・10・11）、115～130 ㎝が３個（P12・13）である。そのため、ピットの大きさは、おおよそ 50 ㎝以下、50～100 ㎝、100 ㎝以上の３種に分けられる。深さは、20～30 ㎝が４個（P5・6・7・11）、31～40 ㎝が４個（P2・3・9・10）、41 ㎝以上が５個（P1・4・8・12・13）である。埋土は、P1・12 以外は単層である。壁溝は、斜面上方と下方の壁際に残存し長さ 30～80 ㎝、幅 15～20 ㎝、深さは 10～20 ㎝、埋土は単層である。２地点に離れているが同一の溝と想定した。遺物は、遺構の調査を SI22B・C と同時に行ったため、これらと分離することが一部を除いて難しい。そのため、その多くの遺物は一括して取り上げた。SI22A として限定できたものは、縄文土器（768.3 ｇ）、石器（9.5 ｇ）、石製品（2,776 ｇ）である。このうち、土器３点（126～128）、石器１点（2082）、石製品１点（2440）を掲載した。このほか SI22A・B・C 一括で取りあげた縄文土器（43,268.8 ｇ）、土製品（7.9 ｇ）、石器（7,790.2 ｇ）、石製品（39.7 ｇ）がある。このうち土器 29 点（129～157）、土製品１点（2522）、石器４点（1910・2008・2174・2242）、石製品１点（2474）を掲載した。断面の状況からみると堆積土の大半を本遺構分で占めることから、一括した土器の多くは本遺構に属する可能性が高い。時期は、重複関係からみて最も新しいことや出土遺物から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）である。　（中島）

SI22B 竪穴建物跡（第２分冊第 47～50 図、第４分冊写真図版 47～52）　北尾根南斜面下位に位置している。検出は SI22A の床面で行った。SI22A・C、SI86 と重複し、SI22A・86 より古く、SI22C より新しい。平面形は略円形で、規模は長径 740 ㎝、短径 700 ㎝である。深さは斜面上方から 110 ㎝、主軸は炉の長軸を基準としたＮ -50°－Ｅである。断面から、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、床面は斜面際が窪み、他はほぼ平坦であることがわかる。堆積土は３層に区分できる。１・２層はブロックを含むため、人為堆積と考えられる。３層は堅く締まった粘質シルトの貼床で、床面上に斑状

に残存している。本遺構には炉１基、ピット 18 個（P1～18)、壁溝が付属している。炉は残存する石囲部から複式炉と考えられ、遺構中央より南東の住居際に位置している。壁際から前庭部、第一石囲部、第二石囲部があったと考えられる。礫があったと考えられる場所には抜取り跡が残っていることから、廃絶時か重複する SI22A を建てる際に壊されたと考えられる。推定される規模は前庭部を含め長軸 310 ㎝、短軸 140 ㎝、第一石囲部と第二石囲部の炉内と思われる箇所に焼土が形成されている。ピットの平面形は全て略円形で、開口部の規模は、長径 20～50 ㎝のものが８個（P2・4・6・7・8・14・15・17)、51～100 ㎝が８個（P1・3・5・10・11・13・16・18)、100 ㎝以上が２個（P9・12）である。深さは 10～30 ㎝が６個（P2・3・4・7・14・15)、31～40 ㎝が４個（P5・11・17・18)、41 ㎝以上が８個（P1・6・8・9・10・12・13・16）である。壁溝は住居の北と南にいくつかに分断されている。深さは 15～35 ㎝ほどである。遺物は、重複する SI22A・C と分離することが一部を除いて難しいこともありその多くを一括している。SI22B として限定できたものは、縄文土器（3,357.0 ｇ)、土製品（15.5 ｇ)、石器（7,604 ｇ)、石製品（2,719 ｇ）がある。このうち土器５点（158～162)、土製品１点（2523)、石器４点（2243・2269・2173・2394)、石製品１点（2441）を掲載した。それ以外にも上述の SI22A・B・C の一括した遺物がある。このほか、炉埋土を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリ・トチノキ等の堅果類が多量に検出された（第Ⅵ章参照)。帰属時期は、重複する３棟を分離することが難しいため、SI22A・C 同様に位置づける。すなわち縄文時代中期中後葉から末葉（大木９～10 式併行）の間に位置づけた。　（中島）

SI22C 竪穴建物跡（第２分冊第 51～54 図、第４分冊写真図版 48～52）　北尾根南斜面下位に位置している。検出は SI22B の床面で行った。SI22A・B と重複し、どちらよりも古い。平面形は略円形で、規模は長径 610 ㎝、短径 580 ㎝、深さは SI22B 床面からの残存値で最大 11 ㎝である。主軸は炉１の長軸を基準としたＮ-78° -Ｅである。断面から、残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦であることがわかる。堆積土は３層に区分できる。１・２層はブロックを含むことから自然堆積、３層上面のブロックは SI22C の貼床可能性がある事から住居掘方の埋土と考えられる。本遺構には炉３基、ピット 26 個（P1～26)、壁溝が付属する。炉１は残存する礫から石囲部と前庭部から成り、住居南東壁際に位置する。残存する礫から石囲炉と考えられるが、前庭部があり、壁際に寄っていることから複式炉の可能性もある。残存部と焼土から推定される平面形は方形で、規模は前庭部を含め長軸 170 ㎝、短軸 80 ㎝である。炉内と思われる箇所に焼土が形成されている。炉２は住居中央よりやや南に位置する。残存する礫から石囲炉と考えられる。礫と礫の抜取り跡から平面形は方形、規模は長軸 74 ㎝短軸 54 ㎝である。礫は、重複する SI22C の炉の構築の際に抜かれたと考えられる。炉内と考えられる箇所に焼土が形成されている。炉３は住居中央よりやや北東に位置する。SI22A のピットと重複し平面形、規模は不明である。ピットの平面形は全て略円形で、それぞれの開口部の規模は、長径を基準に３種に分けられる。長径 30 ㎝前後（18～45 ㎝）のものが 17 個（P1・2・5・8・9・10・11～17・19～22)、長径 50 ㎝前後（46～60 ㎝）のものが６個（P3・4・6・7・18・26)、長径 80 ㎝前後（70～100 ㎝）のものが３個（P23～25）である。深さを基準とすると、10～30 ㎝以下のものが 12 個（P4・5・9・11・12・13・14・16・17・19・20・25)、31～50 ㎝のものが９個（P1・7・8・10・15・18・23・24・26)、51 ㎝以上のものが５個（P2・3・6・21・22）である。壁溝は斜面下方に残存し、深さは 18～25 ㎝である。遺物は、重複する SI22A・B と分離することが一部を除いて難しいこともあり、その多くを一括している。総量や示した遺物については上述のとおりである。なお、SI22C として限定できた土器はない。それ以外にも上述の SI22A・B・C の一括した遺物がある。帰属時期は、重複関係がもっとも古いこと、出土土器から、縄文時代中期中葉～末葉の間に位置づけ

られよう。重複する３棟がいずれも複式炉を伴うことから、重複に時期差がないかもしれない。そのため重複する３棟を分離することが難しいため、SI22A・B と同様に位置づける。すなわち縄文時代中期中後葉から末葉（大木９～10 式併行）となる。（中島）

SI23 竪穴建物跡（第２分冊第 55 図、第４分冊写真図版 53）　北尾根南斜面に位置している。遺構の確認は、Ⅳ層上面で行った。重複する遺構に SI96 があり、新旧関係は本遺構の方が新しいと判断している。本遺構は南東部分が斜面下に崩落しており、全体の約半分が残存しているに過ぎず、全容が不明である。残存部分から判断すると、平面形は円形を呈し、規模は、石囲炉が床面の中心と仮定すると、直径 300 ㎝程度に復元できる。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められるがほぼ平坦に構築されている。深さは、検出面より 15 ㎝と浅く、斜面地に立地することを考慮すると、大部分が流出したと想定される。また、床面の北半分は調査時に掘り過ぎており、本来の状態を表していない。堆積土は最下層の１層のみを確認した。黒色を呈するシルト層で、焼土粒を含んでいる。付属施設には石囲炉、焼土がある。石囲炉はわずかに流出を免れたもので、西と南側の礫が残存しており、平面形は方形を呈すると推定される。残存規模は、長さ 52 ㎝、幅 30 ㎝である。構成される礫は、長さが 30～50 ㎝ほどの細長い円礫で、内側には焼土が形成される。遺物は、縄文土器（375 ｇ）のみが出土している。そのうち２点（163・164）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種実の分析を行ったが、同定可能なものは無かった（第Ⅵ章）。時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉～末葉（大木９～10 式併行）と推定される。（西澤）

SI24 竪穴建物跡（第２分冊第 55 図、第４分冊写真図版 54）　北尾根南斜面に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI28・106・116 があり、切り合い関係から本遺構がもっとも新しいと判断している。東側に隣接して SI25 があるが、直接切り合い関係にないが、距離が近いため同時存在は考えにくいであろう。本遺構の南側の大部分は斜面下に崩落し、また、西側の一部は調査開始当初の試掘トレンチによって破壊されており、全体の約 1/4 が残存しているに過ぎない。残存部分から判断すると、平面形は円形を呈し、規模は、石囲炉が床面の中心と仮定すると、直径 360 ㎝程度に復元できる。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、検出面より 70 ㎝（斜面際で計測）であり、比較的深く構築されている。堆積土は３層を確認した。１層は暗灰横色、２層が黒褐色、最下層が明黄褐色を呈するなど、黄色系と黒色系の風化花崗岩混じりのシルト層が交互に堆積するようである。いずれも斜面上方からの流入と考えられる。付属施設には石囲炉１基がある。石囲炉はわずかに流出を免れたもので、北側の一部の礫が残存するのみである。残存規模は、長さ 40 ㎝、幅 40 ㎝で、平面形は円形の可能性がある。構成される礫は、花崗岩が中心であり、長さが 20～30 ㎝ほどの扁平を呈する。内側には焼土が形成される。また、この炉の北側にも焼土があり、周辺には礫が数点散在している。旧期の炉の可能性もあるが、下位には SI116 の炉が存在していることもあり、どちらに所属するか判断つかなかった。遺物は、縄文土器（2,099.1 ｇ）、石器（1,680.3 ｇ）が出土している。このうち土器２点（165・166）、石器１点（2395）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種子の分析を行っており、オニグルミの破片と同定されている（第Ⅵ章）。帰属時期は、これらの遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）と推定される。（西澤）

SI25 竪穴建物跡（第２分冊第 56 図、第４分冊写真図版 55）　北尾根南斜面に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI28・106・116 があり、切り合い関係から本遺構がもっとも新しいと判断している。また、西に隣接して SI24 がある。直接切り合い関係にないが、距離が近いため同時存在は考えにくい。本遺構の南側の約半分は斜面下に崩落し、西壁の一部

は調査時に掘り過ぎている。平面形は、残存部分から推定すると円形を呈し、規模は、石囲炉が床面の中心と仮定すると、直径 320 ㎝程度に復元できる。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められるが、ほぼ平坦に構築されている。床面までの深さは、検出面より 45 ㎝（斜面際で計測）である。堆積土は３層に区分した。１～３層とも黄色系のシルト層で、斜面上方からの流入と考えられる。付属施設には石囲炉がある。石囲炉はわずかに流出を免れたもので、南側の一部が流出している。平面形は円形を呈し、残存規模は径 48 ㎝程度である。構成される礫は、花崗岩が中心であり、長さが 10～25 ㎝ほどの角形や楕円形、扁平な礫を組み合わせている。内側には焼土が形成される。遺物は、縄文土器（3,078.0 ｇ）、石器（0.6 ｇ）が出土している。そのうち土器７点（167～173）、石器１点（1911）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種子の分析を行ったが、同定可能なものは無かった（第Ⅵ章）。帰属時期は、これらの遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）と推定される。（西澤）

SI26 竪穴建物跡（第２分冊第 56 図、第４分冊写真図版 56）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI39 があり、切り合い関係から本遺構が新しい。平面図上は、SI40 とは重複しないが（SI40 の床面が崩落したため）、断面図上では重複し、本遺構の方が新しい。また、東に隣接して SK63 が位置している。直接切り合い関係にないが、距離が近いため同時存在は考えにくい。本遺構の南側の大部分は斜面下に崩落している。平面形は、残存部分から推定すると楕円形もしくは方形を呈する可能性がある。規模は、残存が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ 230 ㎝程度である。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、検出面より 26 ㎝（斜面際で計測）程度である。堆積土は１層のみで、暗灰黄色の砂質シルト層である。付属施設にはピット（小穴）４個があり（P1～4）、炉は確認できなかった。P1～3 は床面の壁際に位置し、長径が 18～30 ㎝の円形から楕円形を呈する。P4 は、床面より外れているが同一軸線上に並ぶことから本遺構に含めた。遺物は、縄文土器（59 ｇ）、石器（4,793.8 ｇ）が出土している。このうち石器１点（2396）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種子の分析を行ったが、同定可能なものは無かった（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土遺物が少なく決定しがたいが、重複関係や周囲の遺構との立地関係から、縄文時代中期中葉～後葉（大木 8b～９式併行）と推定される。（西澤）

SI27 竪穴建物跡（第２分冊第 57 図、第４分冊写真図版 57）　北尾根の南斜面に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI60、SK64 があり、切り合い関係から本遺構がもっとも新しい。南側の大部分は斜面下に崩落し、また東側は調査区外であるため全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、残存状態が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ 190 ㎝程度である。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、断面でみると 60 ㎝である。また、床面には褐色を呈するシルトで貼床が施されており、堅くしまっている。堆積土は貼床のほかに２つの層が確認できる。１層は表土直下の層で黒褐色シルト層、２層はにぶい黄褐色の砂質シルト層である。付属施設にはピット（小穴）３個と溝１条があり、炉は確認できなかった。ピット（P1～3）はいずれも径 27～30 ㎝ほどの円形を呈している。溝跡は壁際に確認できる。位置からみて壁溝であろう。P1 はこの溝と重複関係にある。遺物は、縄文土器（438.3 ｇ）が出土している。そのほか、SI60 と区別できない遺物があり、その内訳は縄文土器（355.2 ｇ）、石器１点（404.2 ｇ）である。このうち縄文土器２点（429・430）を掲載した。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）と推定される。

（西澤）

SI28 竪穴建物跡（第２分冊第 58 図、第４分冊写真図版 28）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構は多く、SI24・25 と SI29・30・94 が本遺構より上位にあり、SI116・106 は下位にある。したがって、新旧関係は、前者が本遺構よりも新しく、後者が古い遺構である。また、北側に近接する SK72・209 とは直接重複していないが、間にある複数の遺構を介して重複関係にあり、本遺構の方が古い遺構となる。南側の約半分は斜面下に崩落し、また、東側は調査時に掘り過ぎてしまった可能性がある。残存部分から判断すると、平面形は円形を基調とする。規模は、焼土が床面の中心にあると仮定すると、直径 440 ㎝程度に復元できる。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、検出面より 130 ㎝（斜面際で計測）であり、比較的深く構築されている。堆積土は流出土を除いて２つの層を確認した。１・２層とも黒褐色を基調とし、風化花崗岩粒の量で区別する。これらの層上にはＡ・Ｂ層とした層が堆積し、これらはこの遺構の範囲を超えて存在することから、斜面に堆積した流出土と考えた。遺構堆積土、流出土いずれも斜面上方からの流入と考えられる。付属施設には地床炉、ピット（小穴）がある。地床炉の平面形は、歪であるが円形を基調とし、規模は、長さ 95 ㎝、幅 75 ㎝の範囲で焼土が広がっている。ピットは２個（P1～2）が床面上に確認でき、いずれも楕円形の平面形で、規模は径 30～40 ㎝、深さ 50～60 ㎝である。遺物は、縄文土器（4,120.8 ｇ）、石器（1,190.7 ｇ）が出土している。そのうち土器４点（174～177）、石器２点（2115・2313）を掲載した。このほか SI28・116 一括で取り上げた縄文土器（143 ｇ）が出土している。また、炉内の焼土から採取した炭化種子の分析を行っており、オニグルミ、クリ、トチノキの種実片と同定されている（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土遺物や重複関係からみて、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）と推定される。（西澤）

SI29 竪穴建物跡（第２分冊第 59 図、第４分冊写真図版 59）　北尾根の南斜面に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI28・30・94、SK72・209 があり、切り合い関係から本遺構がもっとも新しい。南側に近接する SI28 との新旧関係は、直接切り合い関係にないが、他の遺構を介在すると本遺構の方が新しい。本遺構の南側は、炉の位置から南の大部分が斜面下に崩落しており、全体の約半分が残存しているに過ぎない。残存部分から判断すると、平面形は円形を呈し、規模は、石囲炉が床面の中心と仮定すると、直径 460 ㎝程度に復元できる。床面は、ほぼ平坦に構築されていると考えられるが、炉の位置付近では約 15 ㎝下がっている。床面までの深さは、検出面より 60 ㎝（斜面際）であり、比較的深く構築されている。部分的に貼床が確認できる。堆積土は５層を確認した。１層は暗褐色、２層がにぶい黄褐色、３層が褐色を呈し、褐色系と黄色系土層が互層となる。４層は石囲炉内に堆積し、６層は部分的に残存する貼床である。いずれも斜面上方からの流入と考えられる。付属施設には石囲炉がある。石囲炉はわずかに流出を免れたもので、一部の礫が残存している。残存規模は、長さ 40 ㎝、幅 35 ㎝で、平面形は円形の可能性がある。構成される礫は、花崗岩が中心であり、長さが 30 ㎝、厚さ 10 ㎝ほどの扁平な亜角礫である。掘方を伴う炉石もある。内側には焼土が形成される。また、この炉の北側にも焼土がある。遺物は、縄文土器（1,815.2 ｇ）、石器（14,061.8 ｇ）、石製品（989.7 ｇ）が出土している。そのうち、土器３点（178～180）、石製品１点（2442）を掲載した。また、炉内の土壌から採取した炭化種子の分析を行っており、オニグルミ、トチノキと同定されている（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器や重複関係が比較的新しいことから、縄文時代中期後葉（大木９式併行）と推定される。（西澤）

SI30 竪穴建物跡（第２分冊第 59 図、第４分冊写真図版 60）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI29・28・94、SK72・209 があり、切り合い関係からみると、SI94・28 よりは新しく、SI29、SK72・209 よりは古い。本遺構も南側の大部

分は斜面下に崩落しており、全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、もっとも残りのよい部分で長さ 210 ㎝、幅 140 ㎝程度である。残存する壁面（弧）から直径を復元すると 220～240 ㎝になる。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められる。床面までの深さは、検出面より 20 ㎝程度である。堆積土は１層のみで、暗灰黄色の砂質シルト層である。部分的に貼床が施されており、黄褐色を呈する粘土である。付属施設には地床炉がある。平面形は楕円形を呈し、規模は 50×35 ㎝程度である。遺物は、縄文土器（407.2 ｇ）、石器（536.1 ｇ）が出土している。このうち、石器２点（1912・2270）を掲載した。また、炉内の焼土のフローテーションからオニグルミ、クリが出土している（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器のうち文様が判別できる破片はあるが量が少なく決定し難たい。重複関係から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）を想定しておく。（西澤）

SI31 欠番

SI32 竪穴建物跡（第２分冊第 60～62 図、第４分冊写真図版 61～64）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｃ層除去後のⅢｅ層上面で確認した。これらの位置は、北尾根南斜面にある埋没沢上にある。重複関係は、SI57・58・59・54、SK207・208 とであり、SI58 以外は、いずれの遺構よりも本遺構の方が新しい。SI58 とは、本遺構の方が古い。また、包含層の主堆積層であるⅢｃ層よりは下層の遺構となる。遺構の南半は崩落により、北東端は攪乱（雨裂溝）により欠失し、上部は包含層２のⅢｃ層により削平されている。したがって、本来の形状は不明であるが、残存状態から推定すると楕円形を呈する平面形である。規模は残存範囲で、長軸 870 ㎝、短軸 530 ㎝である。確認できた床面までの深さは 30 ㎝程度である。床面は周囲の斜面と同様に南東側に緩やかに傾斜している。また、黄橙色粘土質シルトと黒褐色シルトとの混合土で貼床が部分的に施されている。建物跡内の堆積土としては２層が確認でき、黄灰色砂質シルトが主体となる。付属施設には、炉４基、焼土２基、土坑１基、ピット（小穴）15 個、壁溝、埋設土器２個がある。炉は４基と多く、他遺構の炉が混在している可能性があるが、同一面上に立地することからここでは本建物跡に伴うと捉えた。また、どの炉も完全に遺存するものはなく、新旧関係は不明である。炉１は北東部に位置し、円形を呈する石囲炉で、長軸 70 ㎝、短軸 50 ㎝の規模である。長さが 20～30 ㎝の亜角礫を使用し構成しているが、大部分の礫が失われている。焼土は炉内部にある。近接して北側に焼土１（30×20 ㎝）が、南側に焼土２（50×45 ㎝）が位置する。これらはあるいは一体を構成する可能性があるが、ここでは残存状況が悪く明確に判断できないことから、ここでは別と捉えた。炉２は床面中央部に位置する石囲炉である。長さ 20～30 ㎝の亜角礫を使用するが、多くが失われている。残存する規模は径 60 ㎝で、平面形は円形を呈すると推定される。内部には焼土がある。炉３は南西側に位置する石囲炉で、これも遺存状態は悪い。長さ 20 ㎝程の亜角礫や円礫で構成されるが、多くは失われている。平面形は方形を呈する可能性もあるが、不明である。規模は、残存範囲でみると、長軸 50 ㎝、短軸 44 ㎝である。内側には焼土が 40×30 ㎝の範囲で広がっている。炉４は、中央やや南西側にある石囲炉である。西側の炉石しか残存しないが、南東側の炉石の抜き取り痕や内側にある焼土範囲などから楕円形を呈する平面形と推定できる。内側には、焼土が 70×58 ㎝の範囲で広がっている。長軸側の南寄りの焼土内には、底部片であるが、土器１個正位の状態で埋設されている。埋設土器１は、床面の東側、炉２の北東側にある。深鉢を倒位状態で埋設しており、底部は穿孔している可能性がある。掘方は径が 48 ㎝の大きさで、床面を掘って構築されている。埋設土器２は、床面中央にあり、深鉢を倒位状態で埋設している。SK2 と重複しており、これよりも新しい。外底面は縁側のみ残存し、中央部分は破片がない。穿孔と捉えることがでるが、他の諸例よりも大きいため慎重とな

らざるを得ない。SK2は、長軸110㎝、短軸80㎝の楕円形を呈する平面形で、埋設土器２の掘方よりは一回り大きい。位置や形態の類似からあるいは別の埋設土器があった可能性もある。ピットは15個確認できる（P1～15）。大きさから30～45㎝のもの（P1・4～6・9・10・12・13・15）と45～70㎝のもの（P2・3・7・8・11・14）の２者に分けられる。深さはこれらとは相関せず、いずれもおおよそ30～55㎝の間に収まる。配置的には、P1（2）、P3（4）、P5、P14、P15が主柱穴と想定可能である。南西側にはもう１列柱穴が並ぶ可能性もある（P6～8、P13）遺物は、縄文土器（23,733.8ｇ）、土製品（17.2ｇ）、石器（4,307ｇ）が出土している。このうち土器10点（181～190）、土製品１点（2524）、石器２点（2134・2271）を掲載した。このほか、炉埋土を対象とした炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリ・トチノキなどの堅果類が多量に検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、埋設土器を根拠として、縄文時代中期中葉後半（大木8b式併行）に位置づけた。

（西澤）

SI33竪穴建物跡（第２分冊第63・64図、第４分冊写真図版65・66）　調査区中央から南東にある谷部（包含層３内）の西側に位置している。包含層３のⅡ層相当を掘り下げた際、炉を検出した。検出面はⅢｃ層上面にあたる。SI34・36と重複しており、切り合いは一番新しい。SI34の埋土・床面とSI36の埋土を掘り込んで作られている。包含層３のⅡ層によって南東側は削られているが、SI33の南側２グリッドを包含層３として先に掘り下げてしまったため、包含層３のベルト断面からの推定線で残存範囲を復元している。現状での平面形は、北東から南西方向が長軸の半円形で、規模は短軸360㎝、長軸590㎝である。上端と下端の状態からⅡ層による削平を受けていない全体を復元した規模は直径590㎝の円形と推定される。断面形は、壁面が床面から外傾し、そのまま真っ直ぐに立ち上がる。壁高は残りの良い北西側と南西側が30㎝である。床面は北から南に向かってわずかに傾斜し、貼床が炉の周辺に斑状に残っている。堆積土は砂質シルトを主体とした２層で構成される。１層は厚さが20㎝から50㎝程あり、住居全体に堆積し、Ⅱ層による攪乱を受けている。沢の埋土であるⅡ・Ⅱ’層よりも多くの風化花崗岩粒が混ざっている。２層は10㎝程の厚さで住居の一部、中央付近に堆積しており、層下位に炭化物を含んでいる。付属遺構は、炉と埋設土器が１基、ピットが２個と壁溝がある。炉は、遺構の残存部ではほぼ中央に、復元される範囲では中央よりやや西に位置している。石囲炉が２つ重複しており、炉石を配する炉を炉１、炉１の炉石が上に乗っている所を炉２とした。炉石同士の重なりから炉１が新しく炉２が古い炉である。炉１は、炉石まで含めて短軸90㎝、長軸110㎝の規模で、20㎝台の花崗岩の亜角礫を利用し、石の間が１㎝から10㎝程空いた楕円形になっている。焼土が２面あり、断面では４層と２層になっている。４層は、炉１の地山と作る際の構築土の一部が被熱したもので、２層は３層の一部が被熱したものである。炉２は、炉石と焼土の範囲で短軸60㎝、長軸70㎝程の規模であり、形状は残存する炉石で逆Ｌ字形になっており、元の形状は方形と推定される。炉石は花崗岩の亜角礫で、炉１の構築土の下の11層が焼土面で、11層の一部は４層に含まれている。炉１の南西側に重複する埋設土器１は、上位埋土に焼土が無いため炉の一部かは判断できないが、炉１の炉石によって土器が壊されていることから炉１より古いことがわかる。倒立で埋められている。掘方の規模は短軸40㎝、長軸45㎝で、形状は円形である。深さは検出面から約30㎝で、SI36の埋土とⅢｃ層を掘り込んでいる。埋土は土器内４層と掘方埋土１層の５層から構成される。以上から、本遺構に伴うと判断したが、下位のSI36や包含層３（Ⅲｃ層）に伴う可能性がある。西壁の近くに土器１がある。床面に倒立した状態で口縁が接地しており、口縁部と、頸部の一部が残存している。土器内の土はSI33の１層と同じものである。ピット（P1～2）は、P1の規模が短軸20㎝、長軸25㎝、深さ15㎝、P2の規模が短軸25㎝、長軸30㎝、深さ20㎝でどちらも底面

は硬くしまっている。埋土は黒褐色粘質シルトで単層である。壁溝は深さ５㎝程でSI33北西側の壁に沿うように残っている。埋土はピットと同じである。遺物は、縄文土器（47,998.9 ｇ）、土製品（17.1 ｇ）、石器（3,625 ｇ）、石製品（1,353.8 ｇ）、鉄滓（2.8 ｇ）が出土している。このうち土器23点（191～213）、土製品１点（2525）、石器３点（2123・2349・2397）、石製品１点（2443）を掲載した。このほかSI33・34一括して取り上げた縄文土器（605.1 ｇ）がある。また、埋土下層から出土した炭化物（試料名P05）を対象として放射性炭素年代測定（AMS測定）を実施している。その結果、暦年較正年代（１σ）で3333～3105calBCの間に４つの範囲で示される年代観が得られている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器の多くが縄文時代中期中葉前半のものだが、遺物が混在していること（斜面下の沢底に立地していることが要因であろう）や遺構の重複関係を優先して、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木8b～９式併行）とした。なお、AMS測定の年代は出土土器の多くを占める中期中葉前半の年代を示している可能性がある。（中島）

SI34竪穴建物跡（第２分冊第65図、第４分冊写真図版67）　谷部（包含層３内）に位置している。SI33の外側のⅢｃ層上面で、炉を検出した。SI33・SI36と重複しており、SI36の埋土を掘り込んで作られている。また、SI33と３つの攪乱によって一部を壊されていることをあわせると、SI36より新しく、SI33より古い。包含層３のⅡ層によって南東側は削られているが、遺構南東の２つのグリッドは先に掘り下げてしまったため、包含層３のベルト断面からの推定線で残存範囲を復元している残存形状は、短軸250㎝、長軸380㎝の略方形で、Ⅱ層による削平を受けていない全体の平面形は、上端下端の回り方から450㎝の略方形と推定される。壁の高さは20㎝程で外傾しながら立ち上がるが、床面との境は曖昧である。床面は南東に向かってわずかに傾斜している。床面には炉石以外にも花崗岩の亜角礫が露出している。堆積土は黒褐色粘質シルトの単層で、厚さ10㎝から20㎝程で遺構全体に堆積している。付属遺構は、炉が１基ある。SI34の中央より西に位置している。炉石まで含めて短軸35㎝、長軸50㎝の規模で、10㎝から25㎝程の花崗岩の亜角礫を回した楕円形である。埋土は１層の黒褐色粘質シルトと２層の暗褐色シルトに分けられる。焼土は無かったが、炭化物が多く含まれる２層の下が焼土面と考えられる。遺物は、縄文土器（9,690.5 ｇ）、石器（1,195 ｇ）が出土している。このうち土器７点（214～220）、石器１点（2358）を掲載した。このほか上述のSI33・34一括で取り上げた遺物がある。帰属時期は、出土土器が混在していること（斜面下の沢底に立地していることが要因であろう）から、遺構の重複関係を優先して、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木8b～９式併行）とした。（中島）

SI35竪穴建物跡（第２分冊第66・67図、第４分冊写真図版68）　谷部（包含層３内）の東側に位置している。包含層３のⅢｃ層を掘り下げた際に、炉を検出した。検出面はⅢｅ層上面にあたる。SI37と重複していて、SI37の埋土を掘り込んで作られているため、SI37より新しい。当初、SI37のほうを新しい遺構として掘り下げたため、SI35の南側半分を掘りすぎたと判断したが、断面図に見られるようにⅢｃ層によって多くを削り取られたため残ってなかったと考えられる。現状の平面形は、北東から南西方向が長径の半楕円形で、規模は短軸290㎝、長軸720㎝である。攪乱の影響を受けていない元の形状は短軸650㎝、長軸720㎝の楕円形と推定される。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がる形状である。壁高は残存箇所で床面もほぼ水平である。堆積土は、砂質シルトが主体の２層で構成される。Ⅲｃ層に殆どが壊されているが、10㎝から45㎝程の厚さで壁際に残っている。付属遺構は炉が１基見つかっている。北西壁に寄っており、規模は短軸50㎝、長軸69㎝で形状は楕円形である。炉石は殆どが花崗岩の亜角礫で、わずかに円礫を使っている。焼土は無いが、２層が炭化物を多く含んだ層になっているため、その下が焼土面と考えられる。遺物は縄文土器（9,575.9 ｇ）、石器

(1,252 g）が出土している。このうち、土器３点（221～223)、石器２点（2189・2244）を掲載した。帰属時期は、遺物が混在していること（斜面下の沢底に立地していることが要因であろう）から遺構の重複関係を優先して、縄文時代中期中葉後半以降、後葉以前（大木 8b～９式併行）とした。

（中島）

SI36 竪穴建物跡（第２分冊第 68・69 図、第４分冊写真図版 69・70） 谷部（包含層３内）の西側に位置している。SI33 の精査が終了し、その下を掘り下げた際に炉を検出した。検出面はⅢｃ層上面にあたる。SI33、34 と重複しており一番古いため上端は殆ど削られていた。床面の一部を攪乱と SI33 の窪みによって壊されている。現状の平面形は、北東から南西方向が長径の半円形で、規模は短軸 400 ㎝、長軸 720 ㎝である。上端の回り方と残存範囲から攪乱の影響を受けていない元の形状は、直径 720 ㎝の略円形と推定される。断面形は、壁がわずかに外反しながら立ち上がる形状である。床面もほぼ水平である。堆積土は砂質シルトの単層である。厚さは 10 ㎝から 20 ㎝程で、遺構全体を覆っている。付属遺構は炉を１基と埋設土器を４基、ピットが１個（P1）ある。炉は、SI36 の残存範囲のほぼ中央、推定される SI36 の中央より西に位置している。炉の形状は短径 50 ㎝、長径 60 ㎝の楕円形で、使用している礫は全て、約 10 ㎝から 20 ㎝の花崗岩の亜角礫である。焼土は炉の西側に寄っており、やや柔らかく粘性がある。厚さは５㎝程である。埋設土器１は、３層上面が焼土面になっている。堆積土から、炉と同時期に土器埋設炉として使用されたと考えられる。掘方の深さは、約 30 ㎝で壁面と底面は固くしまっている。４層は、埋設土器が上面で止まってしまうため、埋めなおして深さを調整した際の埋土と考えられる。埋設土器２・３は炉との掘方の切り合いから、炉を作成する前に埋めたものである。両方とも倒立の状態で設置してあり、土器は埋設土器２を壊して３を設置している。掘方は埋設土器２・３で１つになっている。埋設土器４は、床面で掘方が確認できず、SI36 完掘後にグリッドを掘り下げた際に見つけたものである。倒立した状態で設置してあり掘方も確認できたため、埋設土器と判断した。その面に帰属できる遺構が無く、土器の上部が検出面より 10 ㎝上にあること、SI36 の埋設土器１の掘方と隣接していることから SI36 に伴う埋設土器と判断した。掘方が埋設土器１の堀方に切られているため、埋設土器１よりも古い。P1 は、柱穴の平面形は短軸 20 ㎝、長軸 30 ㎝の楕円形で、長軸は南北とほぼ併行である。深さは約 25 ㎝で、１層が柱痕跡として残っている。柱痕跡の平面形は短軸 10 ㎝、長軸 15 ㎝の楕円形である。柱穴底面の柱痕跡の先には柱あたりも残っている。遺物は、縄文土器（23,751.4 g）、石器（４点・21,366 g）が出土している。このうち土器 15 点（224～238)、石器２点（2398・2399）を掲載した。帰属時期は、埋設土器や床面出土土器と重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～大木９式併行）と判断した。

（中島）

SI37 竪穴建物跡（第２分冊第 70～72 図、第４分冊写真図版 71～74） 包含層３内の東側に位置している。Ⅲｅ層上面で検出した。SI35、51 と切り合っており、３棟の中で一番古い竪穴建物である。現状の平面形は、扇形で、規模は半径約 600 ㎝である。推定される元々の平面形は径 1,200 ㎝の円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最大で 80 ㎝である。床面は南東に向かってわずかに傾斜している。全体が固くしまっており、一部には、黄褐色粘土で貼られた床も残っている。貼床が断面に掛かる箇所は、斑状になり、薄いため、断面図に反映していない。また、貼床とは別に斜面下方に厚さ 50 ㎝程の盛土が施されている。堆積土は、５層に細分される。広範囲にⅢｃ層流れ込んでいるため堆積土が残っていない所が多い。付属遺構は、炉が１基、埋設土器が７基、ピットが 12 個（P1～12）ある。炉は、推定される遺構の中心からやや北東寄りに位置している。炉の形状は短軸約 65 ㎝、長軸 150 ㎝の長方形である。炉石に使用されている礫は殆どが大きさ 10 ㎝から 25 ㎝程の花

崗岩の亜角礫で、わずかに凝灰岩の亜角礫も使用している。炉外南東隅から南に延びる礫３つは、掘方はないものの、床面からわずかに埋まった状態で検出したため図示している。炉内には、全面に灰が厚さ１㎝から５㎝程で堆積しており、その下に焼土面がある。焼土の形状は短軸 42 ㎝、長軸 78 ㎝の長方形で、炉の西側に寄っており、厚さは約 10 ㎝である。また、炉内には埋設土器が３基あり、炉内埋設土器１、２、３（以降１、２、３と記述する）とした。炉内埋設土器は、炉を作成する前に設置してあり、３基とも重複している。新旧関係は新しい順に１、２、３となっている。土器は全て倒位で設置されており、口縁から胴部の半分までが残っている。焼土面から、土器の一部が突き出ているのは、１と２だけである。３は土器が焼土面より上に出ておらず、埋設位置も大きく炉の外側に出ているため、炉と無関係の可能性もある。またこの炉内埋設土器３は、土器の出土状況の写真が無いため、平面図、断面図共に破線で図化している（なお、この土器はそのため特定できず図示できなかった)。それぞれの掘方の形状は、炉内埋設土器１が短軸 40 ㎝、長軸 50 ㎝の略方形で、深さは床面から 35 ㎝である。炉内埋設土器２は、径 60 ㎝の円形で、深さは 50 ㎝である。炉内埋設土器３は径 60 ㎝の円形で、深さは 40 ㎝である。埋設土器１～７は、SI37 の壁から離れた位置に設置されている。全て倒立で設置されており、底部が残っているものはない。埋設土器１は、口縁部から胴部にかけて 10 ㎝程が残っている。掘方の形状は短軸 45 ㎝、長軸 50 ㎝の略円形で、深さが 10 ㎝である。掘方の底面は、一部巨礫にぶつかっている。埋設土器２は、貼床を切って掘り込まれている。掘方の形状は短軸 46 ㎝、長軸 55 ㎝の略円形で、深さは 55 ㎝である。埋設土器３～７の掘方は、径 40 ㎝から 50 ㎝の略円形で、深さが 40 ㎝から 50 ㎝となっている。ピットの平面形は、略円形が８個（P1・2・5・7・8・10～12)、楕円形は４個（P3・6・4・9）である。規模は長径 28～45 ㎝が 10 個（P2・4～12)、60～70 ㎝が２個（P1・3）である。深さは、約 20 ㎝が３個（P3・4・5)、約 35 ㎝が５個(P2・6・8・9・12)、約 50 ㎝が２個（P10・11)、85 ㎝が１個（P1）である。壁溝の深さは５～10 ㎝である。遺物は、縄文土器（166,919.2 ｇ)、土製品（139.3 ｇ)、石器（19,740.5 ｇ)、石製品(4,584.7 ｇ）が出土している。このうち、土器 54 点（239～292)、土製品３点（2526・2527・2528)、石器 17 点（1913～1916・2084・2116・2117・2175・2190・2191・2272～2274・2336・2350・2359・2400)、石製品５点（2444～2446・2482・2483）を掲載した。このほか、炉内の土壌他を対象として炭化種実同定、骨・貝類同定を実施した。結果、オニグルミ・クリ・トチノキなど堅果類、および魚類・鳥類・カエル類・小型哺乳類等の骨片が検出されている。また、埋土下層出土の炭化物（試料名 P06）を対象として放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施した。その結果、暦年較正年代（１σ）で 2877～2700calBC の間に３つの範囲で示される年代観が得られている（第Ⅵ章参照)。時期は、出土土器のうち埋設土器の型式から、縄文時代中期中葉（大木 8b 式併行）に位置づけた。　　（中島）

SI38 欠番

SI39 竪穴建物跡（第２分冊第 73 図、第４分冊写真図版 75）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構には SI26・40 があり、切り合い関係からいずれの遺構よりも古い。本遺構も南側の大部分は斜面下に崩落しており、全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、残存が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ 210 ㎝程度である。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められる。床面までの深さは、検出面より 20～40 ㎝程度である。堆積土は１層のみで、褐色の砂質シルト層である。付属施設には石囲炉がある。石囲炉はわずかに流出を免れたもので、平面形は楕円形を呈し、残存規模は 50×40 ㎝程度である。構成される礫は、花崗岩であり、長さが 20～30 ㎝ほどの楕円形の礫を組み合わせている。内側と外側には焼土が形成されてる。遺物は、縄文土器（100.1 ｇ）

がわずかに出土しているのみである。また、炉内土壌のフローテーションからオニグルミ、トチノキなどが出土した（第Ⅵ章）。遺構の帰属時期は、出土遺物が少なく決定しがたいが、重複するSI26が縄文時代中期中葉後半から後葉（大木8b～９式併行）と推定されるため、重複があるがそれに近い時期と想定される。（西澤）

SI40竪穴建物跡（第２分冊第73図、第４分冊写真図版76）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層で行った。重複する遺構にはSI39があり、切り合い関係から本遺構が新しい。本遺構も南側の大部分は斜面下に崩落しており、全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、残存が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ230㎝程度である。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められるが、ほぼ平坦である。床面までの深さは、検出面より30㎝程である。堆積土は１層のみで、にぶい黄褐色を呈する砂質シルトである。付属施設は確認できなかった。炉は流出した可能性が高い。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係にあるSI26が縄文時代中期中葉～後葉（大木8b～９式併行）と推定されるため、重複があるが、それに近い時期と想定される。（西澤）

SI41竪穴建物跡（第２分冊第74図、第４分冊写真図版77）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出は、建物跡西半分は包含層２の検出時に、東半分は包含層２のⅢｃ層除去後に行った。したがって、この遺構はⅢｅ層上面とⅣ層面に構築されている。他遺構との重複はないが、包含層２の主要堆積層であるⅢｃ層によって建物跡の大部分が削平されていることから、Ⅲｃ層よりは古い遺構となる。南側は、斜面の崩落によって、東側はⅢｃ層によってそれぞれ破壊されており、遺構の全容は不明である。平面形は、現状から推定すると、楕円形状を呈し、規模は残存で長軸390㎝、短軸280㎝である。残存する深さは20㎝程度である。床面は周囲の地形と同様に、南にむかって緩やかに傾斜している。堆積土は１層のみが確認でき、暗褐色シルトで風化花崗岩粒をやや多く含んでいる。Ⅲｃ層との境界には多くの土器片が含まれていた。付属施設には、炉が１基、ピットが５個（P1～5）ある。炉は、残存範囲の南西寄りに位置する土器埋設炉である。深鉢を頸部から上を切断し、正位に設置したもので、直径50㎝前後の大きさである。焼土は埋設炉内部と北側および南東側に広がっている。ピットはP1～4が床面の端に沿って配置されているが、P5は中央付近に位置する。いずれも径30～40㎝の間にある円形を基調とする平面形である。深さも30～40㎝程度であるが、P4・5はやや浅い。遺物は、縄文土器（31,739.4ｇ）、石器（７点・1,761.3ｇ）が出土している。このうち土器21点（293～313）、石器２点（2401・2428）を掲載した。このほか、炉内焼土を対象として炭化種実同定、骨・貝類同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリなど堅果類や、硬骨魚綱の骨片等が検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木8b式古段階）に位置づけた。（西澤）

SI42欠番

SI43竪穴建物跡（第２分冊第75図、第４分冊写真図版78）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｃ層除去後のⅢｅ層上面で確認した。重複は、包含層２（Ⅲｃ層）、SI54竪穴建物跡とであり、それぞれ上下の重複である。新旧関係は、前者よりも古く、後者よりも新しい。斜面下側（南側）は流出しており、完全な形状を保っていない。したがって、平面形は不明であるが、残存状態から推定すると方形の可能性がある。規模は、残存で長軸310㎝、短軸250㎝、床面までの深さ35㎝である。床面はほぼ平坦であるが、やや南に傾斜している。貼床は確認できなかった。堆積土は２層が確認できるが、Ⅲｃ層によって削平を受けている。１層は黒褐色を、２層はにぶい黄色を呈する砂質シルトである。付属施設には、炉１基、ピット１個がある。炉は、床面のほ

ぼ中央に位置すると考えられる石囲炉である。この炉の平面形は長楕円形状を呈し、長さ 10 ㎝前後の比較的小さな亜角礫を使用して構成される。炉の規模は、長軸 54 ㎝、短軸 35 ㎝の小形のもので、内側には北寄りに 25×20 ㎝の範囲で焼土が広がっている。炉の掘方は、炉石の周辺中心に掘られた小規模なものである。また、炉の南東側に 314 が出土しており、床面出土の唯一の土器である。遺物は、縄文土器（2,626.8 ｇ）、石器（3,196.4 ｇ）が出土している。このうち土器１点（314）、石器２点（2245・2275）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。（西澤）

SI44 竪穴建物跡（第２分冊第 76 図、第４分冊写真図版 79）　谷部（包含層３内）の西側に位置している。SI36 下の包含層３を掘り下げた際に炉を検出した。検出面はⅢｅ層上面にあたる。先に南東側２グリッドを掘り下げてしまった箇所の残存範囲を断面図から推定線で作成した。推定される現状での平面形は、径 350 ㎝の略円形である。断面形は、壁が外傾しながら立ち上がる形状だが、Ⅲｃ層によって壊されており残存する壁高は 10 ㎝程である。床面は南東に向かって傾斜している。また床面には巨礫が露出している箇所が多い。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。厚さは６㎝から 36 ㎝で遺構の中心付近が最も厚くなっている。付属遺構は炉が１基あり、推定される遺構の中心から北西寄りに位置している。南東側のグリッドと跨がっているため半分は掘り下げており、残存形状は短軸 30 ㎝、長軸 50 ㎝の半円径である。元の形状は径 50 ㎝の円径と推定される。炉石に使用されている礫は、花崗岩の亜角礫が殆どで、短軸６から８㎝、長軸 16 から 26 ㎝の楕円形である。その他に花崗岩の扁平な亜角礫も使用している。焼土面はやや赤色化しており、面上にまばらに炭化物が散っている。規模は短軸 24 ㎝、長軸 30 ㎝の半円径で、厚さは１㎝から２㎝程である。遺物は、縄文土器（4,430.1 ｇ）が出土した。このうち土器（器台含む）５点（315～319）を掲載した。帰属時期は、包含層３内に位置することから、重複関係を優先して縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。したがって、図示した土器は本遺構の時期を表していない。　（中島）

SI45 竪穴建物跡（第２分冊第 76 図、第４分冊写真図版 80・81）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層４の範囲の中に存在し、包含層（Ⅲｃ～ｄ層）北尾根の南斜面最下位に位置する竪穴建物跡である。包含層４の範囲の中に存在し、包含層（Ⅲｃ～ｄ層）除去後のⅤ層上面で確認した。重複は、SK71、SK73 とであるが、削平が多く及んでいるため新旧関係は不明である。遺構の大部分が斜面下に流出していることから、全容が不明であるが、残存部から推定すると、平面形は円形を呈するであろう。残存部の規模は、長軸（東西方向）310 ㎝、短軸（南北方向 100 ㎝である。深さは斜面上方側で最大 40 ㎝である。床面はほぼ平坦である。堆積土は、黄灰色砂質シルトが１層分のみ残存している。付属施設にはピット３個（P1～3）、壁溝が一部のみが確認でき、炉は流出した可能性がある。ピットは床面の中央寄りの位置に配置されるが、数が少なく主柱穴を構成するものかは不明である。大きさも径 25～50 ㎝前後とばらつきがあり、深さも 12～45 ㎝と幅が大きい。壁溝は、北東側のみ確認した。直線距離で約 100 ㎝分が残存し、深さも 10 ㎝とわずかであり、暗灰黄色砂質シルトが堆積していた。遺物は、縄文土器（294.1 ｇ）、石器（498.6 ｇ）が出土している。このうち石器１点（2124）を掲載した。帰属時期は、土器が少なく決定し難い。文様が判別できる土器片は縄文時代中期後葉を示すが、包含層４の下層に位置することからそこまで新しくはないかもしれない。時期不明とする。（西澤）

SI46 竪穴建物跡（第２分冊第 77・78 図、第４分冊写真図版 81）　北尾根頂部に位置し、建物西側は調査区外にある。Ⅴ層上面で黒褐色およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK211、212、216 を切っており、これらの遺構より新しい。平面形は、ほぼ

円形を呈し、径610㎝前後の規模をもつ。断面形は、北～東側の壁面は床面から緩く外反し、南側の壁面は緩く斜方に立ち上がっていく。貼り床は認められなかった。床面は南に若干傾斜している。深さ51㎝。堆積土は、大きく３つに分けられる。上位が黒褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。中位の４層までは、後世の植物擾乱を受けており、本来自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。下位は滑らかさに欠く各層の堆積形状から人為堆積と推定される。付属施設は、建物中央やや南側で炉を検出した。焼土の周囲に被熱痕跡のある礫が集中して存在していることから、本来石囲炉であったと考えられるが、礫が焼土の全周を廻らないことや、焼土を削平するP16の存在などから、建物廃絶時には壊されていたものと考えられる。残存する焼土は不定形で、65×94㎝、厚さ８㎝の規模をもつ。ピット（小穴）として、P1～16の16個を検出した。このうち、50㎝以上の深さをもつ、P1については主柱穴の可能性が考えられる。その他のピットについては、深さ12～42㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝を建物北側で２条検出した。壁溝１は幅18～20㎝、深さ27㎝で、断面は浅皿状を呈する。壁溝２は幅８～12㎝、深さ30㎝で、断面はＵ字形を呈する。いずれの堆積土もにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。２条の異なる壁溝が存在することから、建て替えをおこなっていた可能性が考えられる。遺物は、縄文土器（2,115.1ｇ）、石器（6,245ｇ）が出土した。このうち土器３点（320～322）、石器２点（2085・2402）を掲載した。そのほかSI46～48を一括して取り上げた土器（329.7ｇ）がある。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉（大木8a～8b式併行）に位置づけた。（河本）

SI47竪穴建物跡（第２分冊79図、第４分冊写真図版82）　北尾根頂部に位置している。Ｖ層上面で、にぶい黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK231、232を切っており、これらの遺構より新しい。SK115とも重複するが、重複部分が極めて僅かであり、先後関係については判断できなかった。経年的な地表流出により、建物南側は失われてしまっていると考えられる。残存する平面形はやや歪な円形を呈し、径310㎝前後の規模をもつ。断面形は、北・西側の壁面は真っ直ぐに立ち上がる。東壁は攪乱によって、南壁は流出によって失われてしまっている。貼り床は認められなかった。床面は南に若干傾斜している。深さ16㎝。堆積土は、にぶい黄褐色極細砂混じりシルトを主体とする。そもそもの残存厚が薄く、植物擾乱の影響も受けているため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。付属施設は、建物中央やや南側で石囲炉を検出した。根による攪乱のために、本来東側に廻っていたと考えられる礫は失われてしまっている。残存する形状は方形を呈し、47×58㎝、深さ14㎝の規模をもつ。炉内部の北側には焼土が認められ、長径25㎝、短径14㎝、厚さ７㎝の規模をもつ。そのほか、建物北側にて、上部は失われてしまっているが、床面直上にあり比較的残りも良いことから、建物の廃絶直後に存在していたと考えられる土器が出土している（無文の土器で、もろく接合できず図示していない）。遺物は、縄文土器（1,017.2ｇ）石器（2,690.7ｇ）が出土しているが、図示した遺物は無い。このほか上述のSI46～48一括で取り上げた土器がある。帰属時期は、出土土器のほとんどが無文土器であり決定し難い。重複する遺構からも遺物は出土していない。そのため、付近にある遺構と近い時期と仮にしておく。ちなみに付近にあるSI46は縄文時代中期中葉である。（河本）

SI48竪穴建物跡（第２分冊第80・81図、第４分冊写真図版83）　北尾根頂部に位置している。Ｖ層上面で、にぶい黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK104、290、306、314、316、321を切っており、これらの遺構より新しい。SK96との先後関係については、平面検出時にSK96が切っていると判断したが、断面での観察をおこなっておらず、逆転する可能性

も考えられる。経年的な地表流出により、建物の南側は炉が残ったものの広く失われている。重複する土坑とはその埋土が似ているため、平面形を正確に判断することは難しいが、北西側で検出できた壁溝や北東側でわずかに検出できた住居壁面の形状からは、円形を呈し径 530～560 ㎝程度の規模をもつものと推定される。断面形は、壁の立ち上がり方は上記のような残存状況のため判断が難しいが、Ａ－Ａ′断面での４層と６層の床面付近にみられる層界の形状からは比較的真っ直ぐに立ち上がっていた可能性が考えられる。貼床は認められなかった。深さ 59 ㎝。堆積土は、大きく２つに分けられる。上位・下位ともににぶい黄橙色極細砂混じりシルトを主体とするが、下位には炭粒の混入が認められ、特に最下層の５層ではその存在が顕著である。ただし、その平面的な広がりは焼土２を中心とした限られた範囲のみであることから、焼失竪穴建物とはいえない。自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。付属施設は、建物中央やや南側で石囲炉・土器埋設炉・焼土を検出した。石囲炉は根による攪乱のために、本来南西側に廻っていたと考えられる礫は失われ、残存する礫も全てが正確に本来の位置を保っているものとは言えない。残存する形状はほぼ方形を呈し、110×81 ㎝、深さ 22 ㎝の規模をもつ。土器埋設炉は石囲炉に接してその北側で検出した。根による攪乱のために、特に南西部は本来の位置を正確に保っているものとは言えない。32～36 ㎝の規模をもつ。石囲炉内部から土器埋設炉の周囲にかけて、焼土が認められる（焼土１）。焼土１の形状は不定形で長径 142 ㎝、短径 86 ㎝、厚さ 26 ㎝の規模をもつ。建物中央で焼土２を検出した。不定形を呈し、長径 35 ㎝、短径 30 ㎝、厚さ４㎝の規模をもつ。ピット（小穴）として、P1～8 の８基を検出した。このうち、40 ㎝以上の深さをもつ、P1・4・6 については主柱穴の可能性が考えられる。その他のピットについては、深さ２～22 ㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。P1 の東側にて、磨製石斧が床面に刺しこまれた状況で出土した。壁溝を建物北西側で検出した。幅５～16 ㎝、深さ 11 ㎝で、断面はＵ字形を呈する。遺物は、縄文土器（10,014.4 ｇ）、石器（24,023.3 ｇ）が出土している。このうち土器３点（323～325）、石器６点（1917・2135・2192・2193・2403・2404）を掲載した。このほか上述の SI46～48 一括で取り上げた土器がある。また３層埋土出土の炭化物（試料名 P07）を対象として放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施している。その結果、暦年較正年代（１σ）で 2836～2573calBC の間に２つの範囲で示される年代観が得られている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物の大半が縄文時代中期中葉後半であるが、土器埋設炉で使用された土器を優先して、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づける。　（河本）

SI49 竪穴建物跡（第２分冊第 82・83 図、第４分冊写真図版 84）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で、灰黄褐色およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK324、330～335 を切っており、これらの遺構より新しい。経年的な地表流出により、建物南側は炉が残ったものの広く失われている。残存する形状はほぼ円形を呈し、径 370 ㎝程度の規模をもつ。断面形は、北側の壁面は真っ直ぐに立ち上がり、東側・西側の壁面は残りが悪く、立ち上がり方は分からない。貼り床は認められなかった。床面は南西に若干傾斜している。深さ 40 ㎝。堆積土は、にぶい黄褐色およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトを主体とする。ブロック土が存在しており、人為堆積の可能性が高い。付属施設は、建物中央やや南側で石囲炉を検出した。本来南西側に廻っていたと考えられる礫の一部は失われている。残存する形状は、ほぼ方形を呈し、97×78 ㎝、深さ 13 ㎝の規模をもつ。炉内部の北側には焼土が認められ、長径 53 ㎝、短径 45 ㎝、厚さ７㎝の規模をもつ。なお、周囲を縁取る礫には、石棒や磨石類など石器の転用も認められる。ピット（小穴）として、P1～6 の６個を検出した。このうち、25 ㎝前後の深さをもつ、P1・3・6 については主柱穴の可能性が考えられる。その他のピットについては、深さ７～11 ㎝と上屋部を支持するための柱を

据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝は検出できなかった。床面直上で土器がまとまって出土した。完形にはならないことから、建物廃絶時に投棄されたものと考えられる。建物北東側では、粘土と台石が並んだ状況で出土した。粘土は灰白色を呈し砂の含入量がすくなく、Ⅳ層など当遺跡に存在するシルト層とは別物の可能性が高い。遺物は、縄文土器（2,881.6 ｇ）、石器（9,922 ｇ）、石製品（2,583.8 ｇ）が出土している。このうち土器１点（326）、石器１点（2276）、石製品３点（2447・2448・E025（表のみ））を掲載した。このほか、埋土最下層の土壌を対象としてフローテーションを行い、取り上げた炭化物について炭化種実同定を実施している（コハク片も出土）。その結果、種類不明の堅果類片が１点検出された。また、３層埋土出土の炭化物（試料名 P09）を対象として放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施している。結果、暦年較正年代（１σ）で 2856～2624calBC の間に３つの範囲で示される年代観が得られている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物から決定し難く、また重複遺構からも遺物は出土せず、不明といわざるを得ない。ほかに時期を推定する証拠として石囲炉であること、周囲にある同立地の SI65 が縄文時代中期中葉であることから、同じ縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）前後の時期と仮定しておく。これは先述の AMS 測定の値と矛盾はないであろう。（河本）

SI50 竪穴建物跡（第２分冊第 84 図、第４分冊写真図版 85）　谷部（包含層３内）の東端に位置している。遺構の一部が調査区外にある。Ⅳ層上面で検出した。SI51 と重複している。新旧関係は SI50 のほうが古く、Ⅱ層と SI51 によって遺構の南東側が壊されている。残存形状は半円形で、規模は短軸 350 ㎝、長軸 510 ㎝である。推定される調査区外を含めた元の形状は短軸 490 ㎝、長軸 510 ㎝の略円形である。壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。床面は中央付近がやや凹み、わずかに南東に傾斜している。南東際には、貼床が５～10 ㎝程の厚さで残っている。堆積土は、暗灰色砂質シルトの単層である。付属遺構は炉が１基あり、遺構の中心からやや西寄りに位置している。床面より若干浮いているため、東側半分の炉石と礫の掘方、抜き取り跡は見つけられなかった。規模は短軸 50 ㎝、長軸 60 ㎝で、残存部を反転した形状は楕円形である。使用されている礫は花崗岩の亜角礫で、大きさは径 10 ㎝から短軸 24 ㎝、長軸 36 ㎝まであり、形状も一定しない。焼土面はわずかに赤色化しており、規模は短軸 28 ㎝、長軸 36 ㎝で、形状は略円形。焼土の厚さは５㎝ほどである。遺物は、縄文土器（9,865.2 ｇ）、石器（1,498.2 ｇ）が出土している。このうち土器 12 点（327～338）、石器２点（2176・2360）を掲載した。帰属時期は、重複関係を優先させて、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。（中島）

SI51 竪穴建物跡（第２分冊第 85 図、第４分冊写真図版 86）　谷部（包含層３内）の東端に位置している。遺構の半分が調査区外にあると推定される。Ⅲｃ層上面で検出した。SI37、SI50 と重複しており、調査区壁面に SI51 の断面が残っているため、一番新しい遺構である。平面形は半円形で、規模は短軸 170 ㎝、長軸 520 ㎝である。推定される調査区外を含めた元の形状は、短軸 440 ㎝、南北が長軸 550 ㎝の楕円形である。断面形は、壁はやや外反しながら立ち上がり、高さは 80 ㎝程ある。床面は南東にわずかに傾斜している。堆積土は３層で構成されており、最下層の３層は厚さ 60 ㎝程で遺構全体に堆積している。付属遺構には、埋設土器が１基と、ピットが１個、焼土が１つある。埋設土器は正位で設置されている。掘方の形状は略円形で、規模は径 41 ㎝、深さは 14 ㎝である。ピット（P1）の形状は略円形で、規模は径 35 ㎝、深さは 15 ㎝である。焼土は地山中の巨礫を跨がっており、形状は楕円形で、規模は短軸 55 ㎝、長軸 60 ㎝、厚さは５㎝である。遺物は、縄文土器（15,981.2 ｇ）、石器（822.5 ｇ）、石製品（18,360 ｇ）が出土している。このうち土器８点（339～346）、石器１点（2361）、石製品２点（2449・2450）を掲載した。このほか、埋土の土壌を対象とし

て炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリが検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複関係を優先させ、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。　（中島）

SI52 竪穴建物跡（第２分冊第 86 図、第４分冊写真図版 87）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層４の範囲の中に存在し、包含層（Ⅲｃ～ｄ層）除去後のⅤ層上面で確認した。重複は、包含層４、SK69 とであり、新旧関係は、包含層４よりは古く、SK69 よりは新しい遺構である。この建物跡は、上部が包含層４の各土層によって削平され、南半分が斜面下に流出し、東半分が調査区外につづく。そのため調査した範囲はごくわずかにとどまる。したがって、平面形は不明とせざるを得ない。現状での規模は、南北 200 ㎝、東西 150 ㎝である。確認できた床面までの深さは最大で 100 ㎝である。床面は、調査区境の断面（Ａ－Ａ’）では、平坦であるが、SK69 と重複している箇所は、それに影響されてかやや斜面下（南側）に傾斜している。堆積土は、にぶい黄褐色砂質シルトの単層のみ確認できる。付属施設は、限られた範囲のみの調査のため、ピットが１個（P1）のみである。ピットは残存部のほぼ中央に位置し、長軸が 27 ㎝、深さが 20 ㎝である。位置的には主柱穴ではないと考えられるが、多くが調査区外にあるため不明である。遺物は出土していない。重複関係からみると、SK69 よりも新しいことから、縄文時代中期中葉後半以降（大木 8b 式併行以降）に位置づけた。　（西澤）

SI53 竪穴建物跡（第２分冊第 86 図、第４分冊写真図版 87）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層４の範囲の中に存在し、包含層（Ⅲｃ～ｄ層）除去後のⅤ層上面で確認した。重複は、包含層４とであり、新旧関係は、包含層４よりは古い遺構となる。SI52 と同様に、上部を包含層４によって削平され、南半分が斜面下に流出し、東側が調査区外へつづく。したがって、調査した範囲はごくわずかにとどまり、平面形も不明である。現状での規模は、南北 190 ㎝、東西 200 ㎝である。深さは、最大で 130 ㎝である。床面は、断面でみるとほぼ平坦である。堆積土は３層が確認できる。いずれもにぶい黄褐色を呈する砂質シルトが主体である。付属施設は、ピットが１個（P1）のみ確認できる。P1 は、46×41 ㎝の規模で、深さは 20 ㎝である。遺物は、縄文土器（448.7 ｇ）が出土しているが、図示した遺物はない。帰属時期は、出土量が少ないが文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。　（西澤）

SI54 竪穴建物跡（第２分冊第 87～92 図、第４分冊写真図版 88・89）　北尾根の南斜面最下位に位置している。遺構の確認は、包含層２のⅢｃ層を除去後のⅢｅ～Ⅴ層面で行った。重複する遺構には SI43・59・32 があり、切り合い関係から SI43 よりは古く、SI32・59 よりは新しいと判断した。しかし、SI32 との切り合い関係は、調査が年度を違えたため直接その状況は確認していない。図面上での確認であり、そのため重複が逆転する可能性も残る。斜面上に立地する遺構であるため、南側の一部は斜面下側に流出することから全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。残存範囲は、長軸 735 ㎝、短軸 570 ㎝の範囲である。複数の建替の可能性も考えられるが、残存範囲から規模を推定すると、最大で直径 960 ㎝程度が想定される。床面は、壁際はほぼ平坦に構築されているものの、炉１付近からは斜面下方に最大で 20 ㎝程度低くなっている。他の遺構と同様に、沈下した可能性がある。床面までの深さは、壁際で 220 ㎝である。床面には部分的に貼床が施されている。堆積土は、包含層を構成する土層を除き、貼床を含め９層が確認できる。１層は、にぶい黄橙色の風化花崗岩主体の層で、２層は黒褐色を呈する砂質シルト層、３層はにぶい黄褐色を呈する黄色系砂質シルトが厚く堆積する。その下位である４～８層は、６層を除きいずれも褐色や暗褐色を呈する砂質シルトが主体である。６層はⅣ層由来の色調である。いずれも斜面上方からの流入と考えられる。初期の堆積は地山となるⅣ層を中心とした暗色系の堆積があり、途中Ⅴ層を起源とする斜面の堆積土（包含層）である３層が一度に流入したようである。３層より上位は、この褐

色系（暗色）と黄色系（明色）の層が交互に堆積する。斜面流土の土壌化と斜面を構成する風化花崗岩の崩れが交互に繰り返されている。Ⅴ層に由来する１・３層は、葉理状の堆積が観察できることからこの層について自然堆積の可能性が高い。その他の層についても顕著なブロック土が認められないため自然堆積の可能性がある。付属施設には、ピット（小穴）が 60 個、石囲炉１基、土器埋設炉２基、埋設土器１基、壁溝１条がある。ピット（P1～60）はおもに柱穴であるが、床面全体に多数存在することから、いくつかの異なる時期のものが混在している。平面図で図示した状況は、炉も複数あることから建替を含む複数時期の建物の集合体と考えられる。ここでは仮にピットの規模（大きさ・深さ）を基準に６つのグループに分け、その時期を５時期と復元した。もちろん、同規模のピットが必ず同一時期を示すとは限らず、ここで示すのはひとつの案に過ぎない。ピットの長軸が 65 ㎝以上（①）、45～60 ㎝（②・③）、30～45 ㎝（④・⑤）、15～30 ㎝（⑥）に分けた。45～60 ㎝・30～40 ㎝のグループはそれぞれその配置状況から２つに細分している。その結果が、第２分冊第 89 図である。この図を見ると想定した円上にピットがある程度配置されることがわかる。深さもそれぞれにまとまりがある。これらのことから、ピットの多くは柱穴として機能していたと考えられる。想定される柱配置の規模は、③・⑤がもっとも外側に配置され、直径はいずれも 470 ㎝である。①・②・④は直径 300 ㎝前後におさまる。⑥は最も規模の小さいグループであるが、配置に規則性が認められず、柱穴ではないかもしれない。ちなみに重複関係は、①→②→④、③→⑤に確認できる。おおむね①が古く、順に新しくなる。一部切り合いが逆転する箇所もある。付属施設のうち壁溝は、②か⑤に伴う可能性があるが、重複関係が逆転しており（①よりも古くなる）、別時期かもしれない。それ以外の付属遺構については、所属する段階は不明である。石囲炉は、残存床面の南端付近、P61 の上位に位置する。南側の炉石は流出のためか存在せず、全容は不明である。焼土の広がる範囲から見ると、炉石がこの部分にも存在していたことがわかる。平面形は方形の可能性があり、規模は、長さ 66 ㎝、幅 54 ㎝である。構成される礫は、花崗岩が中心であり、長さが 15～45 ㎝、厚さ８～10 ㎝ほどの扁平な角礫・円礫で構成される。内側には焼土が厚く形成される。土器埋設炉は２基隣接して床面の北寄りに位置する。土器埋設炉１は、２よりも古い炉で、深鉢胴部片を円筒状に設置する。規模は、径 30 ㎝程である。内側には 20×18 ㎝の範囲に焼土が広がっている。土器埋設炉２は、新期の炉で深鉢の頸部のみを設置している。規模は、径が 48 ㎝、土器の残存高は 18 ㎝である。内側から外側にかけて 52×48 ㎝の範囲で焼土が広がる。埋設土器は、石囲炉の北西側に隣接して位置する。残存状態が悪く、土器の約半分（径 35 ㎝前後）のみ検出である。土器は、深鉢で正位に埋設されている。掘方も浅く、土器も口縁と底部を失った状態であることから、土器埋設炉の可能性があるが焼土は確認できなかった。壁溝は、床面の北東側にわずかに確認できる。３つに分かれているが同一円上に並ぶことから１つの溝であろう。遺物は、堆積土を中心に多く出土している。縄文土器（90,020.8g）、石器（8,917.4 ｇ）・石製品（1,549.9 ｇ）、土製品（22.5 ｇ）が出土している。そのうち土器 52 点（347～398）、石器９点（2224・2246・2362・2405～2409・2429）、石製品３点（2451・2452・2484）を掲載した。このほか SI54・59 一括で取り上げた縄文土器（456.6 ｇ）、石器（1,877.7 ｇ）、鉄滓（49.5 ｇ）が出土している。この中から石器３点（2137・2277・2345）を掲載した。また、炉や埋設土器内焼土のフローテーションから、オニグルミ、クリ、トチノキが出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土遺物のうち、埋設土器、土器埋設炉として設置された土器から、縄文時代中期中葉（大木 8a 式新段階～大木 8b 式古段階併行）に位置づけた。（西澤）

SI55 竪穴建物跡（第２分冊第 93 図、第４分冊写真図版 90）　北尾根の南斜面再下位に位置している。斜面に立地する遺構であるため、斜面下側が流出している。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｄ層

除去後のⅢｅ層上面で確認した。重複は、Ⅲｄ層を挟んでSI59とである。新旧関係はSI59→Ⅲｄ層→SI55の順に古くなる。さらにSI59はSI32よりも古いことから、SI55→SI59→SI32順に新しいことになる。したがって、本遺構は包含層２付近にある竪穴建物の中ではもっとも古い遺構のひとつとなる。平面形は、円形を呈すると推定されるが、残存範囲が少なく詳細は不明である。規模はすべて残存で、長軸（北東から南西方向）460㎝、短軸（北西から南東方向）170㎝、深さは、最大で80㎝である。床面は、南東側にむかってやや傾斜している。顕著な貼床は確認できなかった。堆積土は３つが確認でき、黄褐色を呈するシルト層を挟んで上下に黒褐色シルト層が堆積する。付属施設にはピット３個（P1～3）、焼土１箇所がある。P1・2は中央付近に、P3は北東に位置する。大きさはいずれも、径30㎝前後、深さはP1が30㎝、それ以外は50㎝前後である。P1と3は主柱穴の可能性がある。焼土は、床面の北東方向に位置するが、大部分が斜面下に流出している。遺物は、縄文土器（3,812.7ｇ）、石器（585.4ｇ）が出土している。このうち土器９点（399～407）を掲載した。遺構の帰属時期は、重複関係が最も古いことと出土土器から、縄文時代中期前葉から中葉（大木7b～8a式古段階併行）に位置づけた。（西澤）

SI56竪穴建物跡（第２分冊第93図、第４分冊写真図版91）　北尾根の南斜面最下位に位置している。斜面に立地する遺構であるため、斜面下側が流出している。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲａ・ｂ層除去後のⅢｅ層上面で確認した。直接他遺構との重複はなく、斜面上方にあるSI57やSI32との関係もⅢｃ・Ⅲｄ層を間に介さないため不明である。平面形は、残存部から推定すると円形である。規模はすべて残存で、長軸420㎝、短軸170㎝、深さ最大で110㎝である。床面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦に構築されている。堆積土は、オリーブ褐色砂質シルトや黄灰色砂質シルトの２層がある。付属施設には、焼土、ピット（小穴）２個、を確認した。ピットは、いずれも径が45㎝前後、深さが75～90㎝であり、残存個数は少ないものの、位置や深さなどから主柱穴を構成する柱穴と考えられる。焼土は、床面の中央南側に位置する。40×20㎝の範囲で広がるが、斜面下側は流出している。遺物は、縄文土器（9,054.3ｇ）、石器（205.3ｇ）が出土している。このうち土器17点（408～424）、石器１点（2136）を掲載した。遺構の帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉（大木8a式併行）に位置づけたが、一部はⅣ群（大木8b式併行）に重なるかもしれない。（西澤）

SI57竪穴建物跡（第２分冊第94図、第４分冊写真図版92）　北尾根の南斜面最下位に位置している。斜面に立地する遺構であるため、斜面下側が流出し、また包含層によって削平されている。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｄ層除去後のⅢｅ層上面で確認した。重複は、SI32竪穴建物跡とであり、新旧関係は本遺構の方が古い。SI32やⅢｄ層によってかなり削平されているため残存部分は少ない。平面形は円形を呈すると推定できる。規模は、残存で長軸520㎝、短軸280㎝、深さ30㎝である。床面はやや凹凸があり、南東方向にやや傾斜している。堆積土は１層のみが確認でき、暗褐色を呈する砂質シルトである。付属施設には焼土１基、ピット３個がある。焼土は、床面中央やや南寄りに位置するもので、70×60㎝の範囲で広がっている。炉として使用されたと考えられるが、周囲の削平が大きく詳細は不明である。ピット（P1～3）は３個とも、床面の北東側に位置するもので、いずれも径35～45㎝、深さ15～30㎝前後のものである。位置的には主柱穴を構成すると考えられるが、削平が大きく明確に判断できない。遺物の出土はなかった。遺構の時期は、遺物が出土せず土器からは判断できないが、重複関係が近接するSI55・56と同様であることら、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）を想定する。（西澤）

SI58竪穴建物跡（第２分冊第94図、第４分冊写真図版92）　北尾根の南斜面最下位に位置している。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｃ層除去後のSI32の堆積土上で確認した。この遺構は当初SI32に

含まれると考えていたが、床面の高さがこれとは異なることから別の建物跡と判断した。重複はSI32とであり、これよりも新しい遺構である。包含層２の精査時に掘りすぎたこともあるが、Ⅲｃ層によって大部分が失われたと考えられる。したがって、残存範囲は炉周辺のごくわずかな範囲であり、詳細は全くの不明である。残存規模は、長軸160㎝、短軸60㎝である。床面は残存範囲でみるとほぼ平坦であり、炉の北西側に貼床が確認できる。付属施設には炉が１基確認できるが、約半分のみの残存となる。炉石は10～20㎝の亜角礫を使用して構成されると推定されるが、抜き取られた（流出した）ものもある。炉内側に焼土が存在する。遺物は、縄文土器（121.4ｇ）が出土した。このうち土器１点（425）を掲載した。このほか、堆積土を対象として炭化種実同定を実施し、オニグルミが微量検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器が少なく判断が難しいが、重複関係を優先して、縄文時代中期中葉後半（大木8b式併行）に位置づけた。（西澤）

SI59竪穴建物跡（第２分冊第95図、第４分冊写真図版93）　北尾根の南斜面最下位に位置している。斜面に立地する遺構であるため、斜面下側が流出し、また上部は包含層、東側は攪乱によって削平されている。包含層２の範囲の中に存在し、Ⅲｃ層除去後のⅢｅ層上面で確認した。重複は、SI32、包含層２（Ⅲｃ層）と、さらにⅢｄ層を介してSI55とである。新旧関係は、包含層２（Ⅲｃ層）、SI32よりも古く、SI55より新しい遺構である。平面形は、遺存状態が悪くほかの可能性もあるが、楕円形状を呈すると推定した。規模は、残存で長軸（南北方向）500㎝、短軸（東西方向）330㎝である。炉が床面の中央に仮定すると、復元径は600㎝前後である。深さは最大で50㎝である。床面は多少凹凸があるもののおおむね平坦であるが、炉周辺のみは斜面下に傾斜（沈下）している。また床面は、斜面上方Ⅲｅ層上に掘り込まれているが、斜面下側はⅢｄ層上にある。このことからⅢｄ層（Ⅲｄ-１～３層）は盛土として造成された可能性がある。堆積土は４層に分層できる。２層の黒褐色シルトを挟んで上下ににぶい黄褐色砂質シルトがある。最初の堆積層としては、暗褐色を呈する砂質シルトが壁面側から流入する。付属施設には炉が１基のみ確認できる。20～40㎝の亜角礫を方形に囲んで石囲炉で、東半分が斜面下に流出している。床面よりも炉の部分が深いため、沈下した可能性がある。内部には焼土が残存で60㎝以上の範囲で広がっている。遺物は、縄文土器（3,192.8ｇ）、石器（9,041.4ｇ）、鉄滓（65.2ｇ）が出土している。このうち土器３点（426～428）、石器２点（2009・2247）を掲載した。このほか、上述のようにSI54・59一括で取り上げた遺物がある。また、炉埋土を対象として炭化種実同定や骨・貝類同定を実施している。その結果、オニグルミとクリ、硬骨魚綱・哺乳綱の骨片が検出されている。帰属時期は、出土遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉（大木8a～8b式併行）に位置づけた。（西澤）

SI60竪穴建物跡（第２分冊第57図、第４分冊写真図版57）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構にはSI27があり、切り合い関係から本遺構が古い。南側の大部分は重複するSI27によって破壊され、また東側は調査区外であるため調査した範囲はわずかである。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、残存状態が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ90㎝程度である。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で70㎝である。堆積土は２つの層が確認できる。１層は表土直下の層で黒褐色シルト層、２層は壁際にいわゆる三角堆積をする灰黄褐色のシルト層である。いずれにも風化花崗岩の細粒多く含まれている。付属施設は調査範囲からは確認できなかった。遺物は、SI27と同時に調査したため混在し、両者を明確に区別できなかった。一括して取り上げた遺物は、縄文土器（355.2ｇ）、石器（404.2ｇ）がある。そのうち縄文土器２点（429・430）を掲載した。帰属時期は、出土遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉前後（大木8a～8b式併行）を想定する。

（西澤）

SI61 竪穴建物跡（第２分冊第 96 図、第４分冊写真図版 94）　北端の尾根の東斜面下位に位置している。Ⅲ層上面で暗褐色砂質シルトの広がりがみられ、遺構と判断した。SI62 の西側を大半切って重複し、この遺構より新しい。斜面下方の東側の一部は壁、床ともに流出し消失している。平面形は、残存する壁から、概ね円形を呈し、径 290 ㎝前後の規模であると推定される。断面形は深さ 10 ㎝前後の浅皿形で、東側の一部が消失している。床面は概ね平坦であり、壁はやや外傾しながら立ち上がる。堆積土は、暗褐色砂質シルトを主体として２層に分けられ、堆積土全体に真砂土がブロック状に混じる。付属遺構は、住居の中心よりやや東の位置で、一部の炉石を消失した石囲炉を検出した。Ｌ字型に炉石が残存しており、規模は 45×44 ㎝程で掘方の形状から概ね方形であったと推定される。炉の西側に長径 30 ㎝前後の礫が１つ、11～17 ㎝の礫が北側に１つ、南側に２つの計４つが残存し、斜面下方の東側の炉石は消失している。極暗褐色砂質シルトの堆積土と、その下のにぶい赤褐色の焼土も緩やかに斜面に沿って傾斜している。焼土は径 30 ㎝、厚さ６㎝の規模で円形を呈している。掘方は、焼土を中心に一周する溝の形状を呈し、15～24 ㎝の幅で、深さは６～10 ㎝の規模である。堆積土は暗褐色砂質シルトが主体となっている。ピット（小穴）は２個検出されている（P1～2）。P1 は炉の西側で規模は径 16 ㎝、深さ 20 ㎝。P2 は炉の西側に位置し、規模は径 15 ㎝、深さ 17 ㎝である。断面形は共に概ね方形で、堆積土は暗褐色砂質シルトである。遺物の出土状況は、炉の南東に、台石または石皿が３つ出土し、P1 の西隣に土器片が密集して出土した。いずれも床面から検出されている。遺物は、縄文土器（890.8 ｇ）、石器（25,500 ｇ）が出土している。このうち土器２点（431・432）を掲載した。このほか、石囲炉の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、炭化種実は未検出であった（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物から判断して、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（久保・佐藤）

SI62 竪穴建物跡（第２分冊第 96 図、第４分冊写真図版 95）　北端の尾根の東斜面下位に位置している。検出面はⅢ層上で、SI61 に西側の大半を切られている。SI61 より本遺構は古い。斜面下方にあたる東半分は床面、壁両方とも流出している。平面形は、残存している壁から、径 280 ㎝前後の円形の住居であったと推定される。断面形は浅皿形である。上部を SI61 に切られている西側は深さ 11 ㎝前後、重複のない北側は 18 ㎝前後である。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、床面は平坦である。堆積土は、暗褐色砂質シルトを主体に２層に分けられる。北側の壁際に風化花崗岩の混じるにぶい黄褐色砂質シルトが少量堆積している。付属施設は、住居の中心部からやや西寄りに、埋設土器を伴う石囲炉を検出した。径 10～18 ㎝の長方形の礫を７つ円形に配置している。南西側の炉石が消失している。北側の炉石の上に同一個体と思われる土器片が密集して出土した。焼土は径 31 ㎝、厚さ７㎝程の規模で概ね円形である。焼土のほぼ中央には埋設土器（底部径５㎝、高さ 15 ㎝）が 12 ㎝ほど埋め込まれている。炉の掘方は径 55 ㎝、深さは６㎝程の規模で浅皿の形状をなしている。埋設土器の掘方は、炉の掘方の面より更に３㎝程掘り込まれ埋設土器の底部がぴったり収まる規模である。堆積土は暗褐色砂質シルトである。ピット（小穴）は３個検出されている（P1～3）。P1 は炉の北、壁際に位置し径 24 ㎝、深さ 47 ㎝の規模である。P2 は炉の北西側で、径 21 ㎝、深さ 44 ㎝である。P3 は炉の北東側で径 16 ㎝、深さ 14 ㎝であり、このピットだけ斜面に位置している。遺物の出土状況は土器片が密集して出土している。特に炉石の上、P1 の西隣に多く密集し、それぞれは同一個体である。いずれも床面から検出されている。遺物は、縄文土器（4,898 ｇ）、石器（1.4 ｇ）が出土している。このうち土器３点（433～435）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から判断して縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（久保・佐藤）

SI63 竪穴建物跡（第２分冊第 97 図、第４分冊写真図版 96）　北端の尾根の東斜面下位に位置している。Ⅲ層上で、SK275 の輪郭と共に暗褐色砂質シルトの広がりで検出された。SK275 の上部を切っており、本遺構の方が新しい。長径 280 ㎝、短径 140 ㎝の三角形状の形で残存している。西側の一部の壁とわずかな床面、東側が流出した炉だけが残存し、本遺構の半分以上が流出してしまっている。断面形は浅皿形だが東側の大部分が流出している。西側の深さは 20 ㎝前後である。床面はほぼ平坦で、壁はわずかに外傾して立ちあがる。堆積土は、暗褐色砂質シルトを主体として６層に分けられる。暗赤褐色の焼土より上の層には、径１～８㎜ほどの炭化物が含まれている。付属施設は、残存している住居の中央よりやや北寄りの壁近くに炉が位置する。長径 17～21 ㎝の長方形の炉石が３つからなる石囲炉である。炉の東側は流出してしまい、炉石は残っていない。規模は長径 42 ㎝、短径 36 ㎝のほぼ円形を呈している。焼土も径 28 ㎝の円形で、深さは６㎝程である。ピット（小穴）は１個検出されている（P1）。P1 は炉の北東側の残存している床面からはずれた位置で検出された。規模は径 13 ㎝、深さ 37 ㎝である。遺物は出土していないが、石囲炉内部の土壌を対象として炭化種実同定を実施し、その結果、オニグルミ・クリが検出された（第Ⅵ章参照）。遺構の時期は、遺物が出土せず、重複関係からも不明である。周囲の遺構（SI61・62）と近接した時期であれば、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）を想定する。（久保・佐藤剛）

SI64 竪穴建物跡（第２分冊第 97 図、第４分冊写真図版 97）　北尾根の南斜面上位に位置しており、建物東側は調査区外にある。Ⅴ層上面で、黄褐色および褐色シルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。他の遺構と重複しない。平面形は、方形を呈し、一辺 270 ㎝の規模をもつ。断面形は、北・西側の壁面は真っ直ぐに立ち上がる。南壁は流出によって失われてしまっている。貼り床は認められなかった。床面は南に若干傾斜している。深さ 134 ㎝。堆積土は、大きく３つに分けられる。上位が褐色シルト、中位がにぶい黄褐色および褐色シルト、下位が黄褐色およびにぶい黄褐色シルト。自然堆積と考えられる。付属施設は、ピットとして、P1～5 の５個を検出した。このうち、柱痕跡の認められた P2～5 については主柱穴の可能性が考えられるが、近接しているピットもあるため、全てのピットが同時期に上屋部を支える機能を有していたとは考えられない。平面では壁溝を検出できなかったが、断面ではその可能性を考えられる深さ５㎝の凹みが観察された。遺物は、縄文土器（1,540 ｇ）、土製品（36.1 ｇ）が出土している。このうち土器３点（436～438）、土製品１点（2529）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。（河本）

SI65 竪穴建物跡（第２分冊第 98～101 図、第４分冊写真図版 98～100）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中およびⅣ層上面で、灰黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK329、341～344 に切られ、これらの遺構より古く、SK361～370 を切っており、これらの遺構より新しい。また、SK346、368、369、370、371、449 は検出当初土坑として扱ったが、配置や埋土の状況からこの竪穴建物跡の主柱穴と考えられる（呼称は変更していない。また、SK368～370 は上部のみが主柱穴で、下部は土坑である）。なお、上では SK303 と重なるが、切り合い関係は存在しない。経年的な地表流出により、建物南側は炉が残ったものの広く失われている。残存する平面形状は楕円形を呈し、北西側に床面より一段高い張り出し部もつ。680×740 ㎝程度の規模をもつ。北側の壁面は真っ直ぐに立ち上がる。東側・西側の壁面は残りが悪く、立ち上がり方は分からない。貼り床は認められなかった。床面はほぼ水平である。深さ 60 ㎝。堆積土は、大きく３つに分けられる。上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位が黒褐色ブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト。いずれも人為堆積と考えられる。付属施設として、建

物中央南東側で外に埋設土器を伴う石囲炉を検出した。二重に礫を廻らせ、方形を呈し、118×115 ㎝、深さ５㎝の規模をもつ。東側に長さ 72 ㎝ほどの石列を伴う。炉内部に焼土が認められ、長径 107 ㎝、短径 87 ㎝、厚さ 12 ㎝の規模をもつ。ピット（小穴）として、P1～16 の 16 個を検出した。このうち、40 ㎝程度の深さをもつ、P1・6・7 についても主柱穴の可能性が考えられる。その他のピットについては、深さ６～29 ㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝を建物北西側で２条検出した。外側の壁溝は幅４～14 ㎝、深さ 15 ㎝で、断面はU字状を呈する。内側の壁溝は幅９～30 ㎝、深さ 12 ㎝で、断面はU字形を呈する。いずれの埋土もにぶい灰黄褐色極細砂混じりシルトである。２条の異なる壁溝が存在することや近接する主柱穴の存在、炉内に見られる焼土の広がり方から、建て替えをおこなっていた可能性が考えられる。遺物の出土状況として、北側より２点の石製垂飾品を中に収めた深鉢が出土している。遺物は、縄文土器（10,804.5 ｇ）、石器（4,412.3 ｇ）、石製品（168.6 ｇ）が出土している。このうち土器６点（439～444）、石器８点（2125・2126・2138・2139・2158・2411・2248・2278）、石製品２点（2493・2494）を掲載した。このほか、石囲炉内部の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、クリが少量検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。重複がもっとも新しいこと、炉の形態が単純ではないこととも矛盾しないであろう。　（河本）

SI66 竪穴建物跡（第２分冊第 101～104 図、第４分冊写真図版 101～104）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出は SI86 埋土上面で行った。SI86 と重複し、本遺構が新しい。平面形は略円形で、規模は長径 640 ㎝、短径 610 ㎝、深さは斜面上方から最大 130 ㎝である。主軸は炉の長軸を基準としたＮ -54° － Ｅである。断面から、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は南東向きにわずかに傾斜している。堆積土は４層に区分できる。１～３層はブロックを含むため、人為堆積によるものと考えられる。４層は固く締まりブロックを含むため、住居掘方の埋土と考えられる。本遺構には炉１基、土坑１基、ピット 28 個（P1～28）、壁溝が付属する。炉は残存する礫から複式炉で、住居南東壁際に位置する。壁際から中央に向かって第一石囲部、第二石囲部があり、第二石囲部内外に焼土が形成されている。前庭部は確認できなかった。規模は石囲部で長軸 620 ㎝、短軸 78 ㎝である。土坑の平面形は略円形で規模は長径 75 ㎝、短径 58 ㎝、深さは 28 ㎝である。堆積土は２層に区分できブロックを含むことから人為堆積と考えられる。ピットの平面形は全て略円形で、それぞれの開口部の規模別に分けると、①長径 22～32 ㎝のもの（P6・9・11・12・14・17～20・23・25・26）、②長径 35～44 ㎝のもの（P7・8・13・15・16・21・24・37）、③長径 48～80 ㎝のもの（P1～5・10・22・28）の３グループに分けられる。深さは、① 10～30 ㎝が 11 個（P5・6・7・13・14・15・19・20・21・24・26）、② 31～40 ㎝が６個（P8・9・11・12・23・25）、③ 40 ㎝以上が 10 基個（P1・2・3・4・10・16・17・18・22・27）の３グループに分けられる。壁溝は壁際に１条（SD1）と、内側にも２条（SD2・3）あり、斜面上方を拡張した可能性がある。深さは SD1 が 10～30 ㎝、SD2 が 10～20 ㎝、SD3 が 18 ㎝である。ピットや壁溝が複数（少なくとも３時期）存在することから異なる時期の竪穴建物が重複している（拡張も含めて）ことがわかるが、この遺構では付属遺構を個別に分離する検討を行っていない。遺物は、縄文土器（33,885.1 ｇ）、土製品（12.4 ｇ）、石器（21,008.2 ｇ）、石製品（178 ｇ）、鉄滓（22.2 ｇ）が出土している。このうち土器 19 点（445～463）、土製品２点（2500・2501）、石器 14 点（1918～1926・2010・2011・2086・2087・2249）を掲載した。このほか、埋土の土壌のフローテーションの結果、オニグルミ・クリ・トチノキなどの堅果類が多量に検出された（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。　（中島）

SI67・68 第４節に記載

SI69 欠番

SI70A 竪穴建物跡（第２分冊第 105・106 図、第４分冊写真図版 106～108）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅳ・Ⅴ層～Ⅲｅ層面である。本遺構は同時に調査を行ったが、壁溝やピットの配置、炉の数などを考慮すると３時期の竪穴建物の重複と判断した。新しいほうから順に SI70A・B・C と名付けた。重複する遺構には、これら SI70B・C のほか、SI90、SI19、SI20A・B、SI86 がある。切り合い関係からみると、SI90・19 よりは古く、そのほかの遺構よりも新しい。東側の一部は斜面に立地していることから炉より先は崩落している。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性がある。規模は、残存状態が悪く明らかにできないが、残存範囲で長さ 650×500 ㎝程度である。ピットや壁溝の配置から規模を推定してみると、直径 600～650 ㎝前後となる。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で 85 ㎝である。堆積土は５つの層が確認できる。１層は褐灰色、２層は黒褐色、３層は暗オリーブ褐色、４層は暗灰黄色、５層は黒褐色で、いずれも暗色系で風化花崗岩の細礫が混じるシルト層である。SI70A よりも旧期である SI70B・70C の堆積土については確認できなかった。そのため新期である SI70A によって付属遺構以外は破壊されたと判断できる。付属施設には、複式炉１基、ピット（小穴）５個、壁溝１条がある。複式炉は計３基が確認でき、そのうち１基が SI70A に所属する（炉１）。炉１は、３基の内もっとも残りが良く、平面形は二等辺三角形状を呈する。前庭部は崩落により一部しか残存していない。残存する規模は、長軸 162 ㎝、短軸 102 ㎝である。第１石囲部の内側と外側、第２石囲部内に焼土が確認できる。断面では、これらの焼土は炉石の下位でつながっていることから、炉石の改修が行われた可能性がある。また、前庭部には貼床が検出された。炉石は花崗岩主体であり、大きさは長さ 40 ㎝、厚さ 10 ㎝程の扁平な礫や径 18 ㎝程の塊状の礫を組み合わせている。この複式炉は掘方をともなっており、規模は長軸 315 ㎝×短軸 205 ㎝であり、石組みよりも一回り大きい。ピットは、AP1～AP5 の５個で、平面形はいずれもいびつな楕円形を呈する。規模は、長径 57 ㎝～65 ㎝、短径 47×58 ㎝、深さは AP3 を除き 63.3～82.1 ㎝と大きい。これらは炉１を基点にほぼ円形に配置されることから SI70A を構成する主柱穴と考えられる。壁溝は、壁面側（床面西側）に直線距離が約 500 ㎝の範囲で存在する。幅は最も広い場所で 30 ㎝、深さが 20 ㎝である。そのほか、SI70A～C のいずれに所属するか不明のピットが６個ある（P2、P15、P17、P19、P23、P25）。これらはいずれも径が 25 ㎝以下の小型であり、配置にも規則性が認められないことから、柱穴とは異なる可能性がある。遺物は、３時期分同時に調査したため混在し、これらを区別できなかったが、堆積土から見るとほとんど（付属遺構以外）が SI70A に所属すると考えられる。SI70A・B・C 一括で取りあげた遺物には、縄文土器（12,829 ｇ）、石器（6,525.7 ｇ）、石製品（1,240.5 ｇ）、鉄滓（21.6 ｇ）が出土している。そのうち土器 12 点（464～475）、石器４点（1927・2088・2159・2194）を掲載した。また、炉や埋設土器内焼土のフローテーションから、オニグルミ、クリ、トチノキが出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（西澤）

SI70B 竪穴建物跡（第２分冊第 105・107 図、第４分冊写真図版 106・107・109）　北尾根の南斜面下位に位置しており、SI70A・70C と重複する遺構である。SI70A よりは古く、SI70C よりは新しい遺構である。壁面はすべて SI70A によって破壊されているため、全容は不明である。平面形・規模は、ピット（小穴）、壁溝の配置から、円形・直径 500 ㎝前後と推定できる。付属施設には、複式炉１基（炉２）、ピット 14 個、壁溝１条がある。炉２は、炉１に隣接して位置する複式炉である。東側の礫の多くが失われており、全容は不明である。暗灰黄色のシルト層で覆われている。この層は SI70A の貼床である。炉石範囲の残存長は、194 ㎝×90 ㎝である。炉石は、花崗岩が主体であり、長さは 30

～40 ㎝前後、厚さ 14～18 ㎝の扁平な礫や塊状の礫で組み合わされる。焼土は第１石囲部の内・外側を中心に確認できる。ピットは、複数のなかから、炉との位置関係やおおよそ円形に配置されることから、14 個（BP1～14）をこの遺構に所属すると判断した。平面形はいずれも楕円形を呈し、長径が 20 ㎝前後～30 ㎝の間におさまる。BP14 は、径が 50 ㎝以上と他よりも大きく、配置も異なるが、SI70C の炉３を切ることからこの時期に含めた。壁溝は、床面の北側に位置する。直線距離で 230 ㎝、幅は 15 ㎝である。遺物は、この遺構単独では出土していないが、先述の SI70A・B・C 一括で取り上げた遺物がある。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）を想定する。（西澤）

SI70C 竪穴建物跡（第２分冊第 105・108 図、第４分冊写真図版 106・107・110）　北尾根の南斜面下位に位置しており、SI70A・70B と重複する遺構である。SI70A・Ｂに切られ、３棟なかではもっとも古い段階の遺構である。壁面はすべて SI70A によって破壊されているため、全容は不明である。平面形・規模は、ピット（小穴）、壁溝の配置から、円形で、直径 410 ㎝前後と推定できる。付属施設には、炉１基（炉３）、ピット４個、壁溝１条がある。炉３は、炉２に隣接して位置し、ほとんどの炉石が失われているが、残存する礫や掘方の形状から複式炉と想定できる。残存する礫は、第２石囲部と前庭部との境の礫と推定でき、長さ 30 ㎝、厚さ 10 ㎝前後の花崗岩である。炉２と同様に SI70A の貼床と同様の暗灰黄色のシルト層で覆われている。炉掘方の残存長は、130 ㎝×120 ㎝である。焼土は、第１石囲部と推定される位置の前後に確認できる。もっとも古い時期の炉であるため、残存状況も最も悪い。ピットは、複数のなかから炉との位置関係やおおよそ円形に配置されることから、４個をこの遺構に所属すると判断した。平面形はいずれも楕円形を呈し、規模は長径が 19～22 ㎝前後、短径が 16～26 ㎝、深さは 23 ㎝～35.3 ㎝の間にある。壁溝は、床面西側に位置し、直線距離で 340 ㎝、幅は 15 ㎝である。遺物は、この遺構単独では出土していないが、先述の SI70A・B・C 一括で取り上げた遺物がある。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）を想定する。（西澤）

SI71 竪穴建物跡（第２分冊第 109 図、第４分冊写真図版 111）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で、褐色極細砂混じりシルトの広がりと石囲炉がみられ、遺構と判明したものである。SK384、388、389 を切っており、この遺構より新しい。SK274 との先後関係については、平面検出時に SK274 が切っていると判断したが、断面での観察をおこなっておらず、逆転する可能性も考えられる。経年的な地表流出により、建物東側は炉が残ったものの広く失われている。残存する形状はほぼ円形を呈し、径 400 ㎝程度の規模をもつものと考えられる。断面形は、南・西側の壁面は緩く斜方に立ち上がる。北壁は SK274 との重複によって、東壁は流出によって不明である。貼り床は認められなかった。床面は東に若干傾斜している。深さ 29 ㎝。堆積土は、褐色極細砂混じりシルトを主体とする。明確なブロック土は見られないが、偽礫状を呈するように見えることから、人為堆積したものと考える。付属施設は、建物中央東側で石囲炉を検出した。北東側に廻っていたと考えられる礫の一部は失われている。残存する形状はほぼ方形を呈し、67×60 ㎝、深さ 13 ㎝の規模をもつ。炉内部および西側に焼土が認められ、長径 76 ㎝、短径 45 ㎝、厚さ８㎝の規模をもつ。ピットとして、P1、2 の２個を検出した。それぞれ深さ 13 ㎝、４㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝は検出できなかった。遺物は、縄文土器（409.1 ｇ）が出土している。このうち土器１点（476）を掲載した。このほか、炉内土壌のフローテーションの結果、オニグルミ片が１点検出された（第Ⅵ章参照）。遺構の時期は、出土量が少ないが出土土器から縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。（河本）

SI72 竪穴建物跡（第２分冊第 110 図、第４分冊写真図版 112）　北尾根の南斜面中位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構には SK378・411・412 があり、切り合い関係から本遺構がもっとも新しい。斜面に立地するため南側の約半分は流出しており、そのため全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形あるいは方形を呈すると想定される。規模は、残存状態が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で東西 300 ㎝、南北 190 ㎝程度である。床面は、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で 70 ㎝である。堆積土は上下２つの層が確認できる。１層は暗褐色砂質シルト層、２層は褐色砂質シルト層である。いずれも風化花崗岩の細粒多く含まれており、また水平堆積に近い状況である。付属施設には石囲炉が１基、ピット（小穴）４個（P1～4）が確認できる。石囲炉は、床面のほぼ中央に位置すると想定され、平面形は楕円形を呈し規模は、長径 50 ㎝、短径 36 ㎝である。内側の中心に焼土が形成される。ピットは、いずれも壁際に位置し、平面形はほぼ円形である。規模は径が 15～20 ㎝であり、深さも P4 以外は 25 ㎝前後とまとまりがある。規模が小さいものの壁際に並ぶことから柱穴か、壁の土留め痕跡の可能性がある。遺物は、縄文土器（1,843.2 ｇ）、石器（1,475.3 ｇ）が出土している。そのうち縄文土器３点（477～479）、石器２点（2314・2363）を掲載した。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期中葉（大木 8b 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI73 竪穴建物跡（第２分冊第 110 図、第４分冊写真図版 113）　北尾根の南斜面中位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構はない。大部分が西側の調査区外にあることや斜面下側が流出することから、全容は不明である。平面形は、調査区内にはごく一部のみのため不明である。調査区内での検出規模は、東西 210 ㎝、南北も 210 ㎝である。床面は、急斜面に立地するにもかかわらず、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で 65 ㎝である。堆積土は３層が確認できる。１層は黒褐色砂質シルト層、２層は暗褐色砂質シルト層、３層はにぶい黄褐色砂質シルトで、斜面上方からの流入が考えられる。調査区内には付属施設を確認できない。遺物は出土しなかった。時期は出土遺物がなく、重複遺構もないことから不明である。（西澤）

SI74 竪穴建物跡（第２分冊第 111 図、第４分冊写真図版 113）　北尾根の南面上位に位置している。Ⅳ層中で、にぶい黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SL15 に切られ、この遺構より古く、SI75、SK397・398 を切っており、これらの遺構より新しい。経年的な地表流出により、建物北側の一部が残ったものの広く失われている。残存する形状はやや歪な円形を呈し、径 220 ㎝程度の規模をもつものと考えられる。断面形は、北・東・西側の壁面は緩く斜方に立ち上がる。南壁は流出によって不明である。貼り床は認められなかった。床面はほぼ水平である。深さ 30 ㎝。堆積土はにぶい黄褐色極細砂混じりシルトを主体とする。明確なブロック土は見られないが、偽礫状を呈するように見えることから、人為堆積したものと考える。付属施設は、ピット（小穴）として、P1、２の２個を検出した。それぞれ深さ 14 ㎝、９㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝は検出できなかった。遺物は、縄文土器（142 ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、遺物からは判断できず重複関係から判断し、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。（河本）

SI75 竪穴建物跡（第２分冊第 112 図、第４分冊写真図版 114）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層中～Ⅴ層上面で、にぶい黄色細砂～細礫の広がりがみられ、遺構と判明したものである。SI74、SK375、396、397 に切られ、これらの遺構より古く、SK360、398、475、515 を切っており、これらの遺構より新しい。経年的な地表流出により、建物南側の一部が失われている。残存する形状からはおよそ円形を呈し、径 300 ㎝程度の規模をもつものと考えられる。断面形は、北側の壁面は真っ直ぐ、

東側の壁面は緩く斜方に立ち上がる。南壁は流出により、西壁は地層観察用トレンチによる掘削のため、不明である。貼床は認められなかった。床面はほぼ水平である。深さ 51 ㎝。堆積土は、上位はにぶい黄色細砂～細礫を主体とし、下位はブロック土が顕著な暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト。ブロック土が顕著なことから、総じて人為堆積したものと考える。付属施設は、ピットとして、P1～2 の３個を検出した。いずれも深さ６～13 ㎝と上屋部を支持するための柱を据えるには浅く、主柱穴の可能性は低い。壁溝は検出できなかった。遺物は、縄文土器（212.2 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、北西側床面直上で粘土塊が出土した。また、埋土中位の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半本（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SI76 竪穴建物跡（第２分冊第 113 図、第４分冊写真図版 115）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層中で、黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。SK476、478、514 を切っており、これらの遺構より新しい。経年的な地表流出により、建物南西側の一部が失われている。残存する形状からはおよそ方形を呈し、一辺 230 ㎝程度の規模をもつものと考えられる。断面形は、北・東側の壁面は緩く斜方に立ち上がる。西・南壁は流出により、不明である。貼り床は認められなかった。床面はほぼ水平である。深さは６㎝である。堆積土は、ブロック土を含む黄褐色極細砂混じりシルトを主体とする。ブロック土を含むことから、人為堆積したものと考える。付属施設は、建物南側で内部に埋設土器を伴う石囲炉を検出した。周囲を廻っていたと考えられる礫の多くは流失しており、北側の一部が残るのみであるが、礫を廻らす際の掘り方は残存しており、およそ方形を呈し、49×48 ㎝、深さ 10 ㎝の規模をもつ。炉の内外に焼土が認められ、長径 60 ㎝、短径 50 ㎝の規模をもつが、厚さは１㎝以下と極めて薄い。また、ピット（小穴）として、P1 の１個を検出した。深さは 36 ㎝あるが、他に上屋部を支持するための柱穴が見られないため、当ピットについては主柱穴かどうか断定できない。壁溝を建物北・東側で検出した。幅 14～16 ㎝、深さ９～19 ㎝で、断面はU字形を呈する。遺物は、縄文土器（507.7 ｇ）が出土している。このうち土器１点（480）を掲載した。このほか、土器内の堆積土を対象として炭化種実同定を実施した。その結果、炭化種実は未検出であった。また、炉内埋設土器堆積土中の炭化物（試料名 P10）を対象として放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施している。結果、暦年較正年代（１σ）で 2581～2491calBC の間に２つの範囲で示される年代観が得られている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土が少なく判断する根拠が少ないが、出土土器から縄文時代中期後葉（大木９式併行）を想定した。AMS で示される年代観とも矛盾しないであろう。（河本）

SI77 竪穴建物跡（第２分冊第 114 図、第４分冊写真図版 116）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ層中～Ⅳ層上面で、黒褐色～黄褐色極細砂混じりシルトの広がりがみられ、遺構と判明したものである。炉や柱穴をもたないが、平面の形状や規模、検出面からの深さ等を勘案し、竪穴建物として扱うが、大きく浅い土坑の可能性もある。SK512 を切っており、この遺構より新しい。SK380 との先後関係は不明である。平面形は、楕円形を呈し、270×230 ㎝の規模をもつ。断面形は、壁面が緩く斜方に立ち上がる。貼り床は認められなかった。床面は若干南に傾斜している。深さ北側で 55 ㎝、南側で 18 ㎝。堆積土は、上位は黒褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、下位は暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト。人為堆積したものか自然堆積したものかの区別は難しい。付属施設である炉・ピット・壁溝は検出できなかった。遺物は出土していない。このほか、埋土中位の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、ウルシ属の核片が微量検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物が無く、重複する SK512 からも時期がわかる土器は出土せず、年代決定の根拠に乏し

い。したがって、時期不明とする。（河本）

SI78・79・80 欠番

SI81 竪穴建物跡（第２分冊第 115 図、第４分冊写真図版 117）　北尾根の南斜面中位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構にはSI82、SK530・534 がある。切り合い関係から、SK530・534 よりは新しく、SI82 よりは古い。調査した範囲は、遺構の大部分が西側の調査区外にあることや斜面立地による流出もあることから狭く、そのため全容は不明である。平面形は、推定するほどの範囲が確認できず不明である。残存規模は長さ 180 ㎝、幅 50 ㎝程度である。床面は、調査した狭い範囲では、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で 40 ㎝である。堆積土は１層のみが確認できる。１層は黒色シルト層で、風化花崗岩粒がブロック状に含まれている。付属施設は確認できない。遺物は、SI82 と同時に調査したため、遺構別に分離できるものは、縄文土器（123 ｇ）のみで図示したものはない。また、いずれかに分離できないものに縄文土器（409.6 ｇ）、鉄滓（46.2 ｇ）があり、そのうち縄文土器２点（481・482）を掲載した。帰属時期は、出土土器が少なく明確ではないが、出土遺物と重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI82 竪穴建物跡（第２分冊第 115 図、第４分冊写真図版 117）　北尾根の南斜面中位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構にはSI81、SK530・534 があり、新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも新しい。調査した範囲は、遺構の大部分が西側の調査区外にあることや斜面立地による流出もあることから狭く、そのため全容は不明である。平面形は、推定するほどの範囲が確認できず不明である。残存規模は長さ 180 ㎝、幅 130 ㎝程度である。床面は、調査した狭い範囲では、ほぼ平坦に構築されており、床面までの深さは、壁際で 40 ㎝である。堆積土は貼床を含めると３層が確認できる。１層が黒褐色シルト層、２層が暗灰黄色礫混じりシルト、３層の貼床がにぶい黄色細礫混じりシルトである。付属施設には、ピット（小穴）が３個ある（P1～3）。いずれも平面形は楕円形を呈し、規模は長径 19 ㎝～35 ㎝前後である。規模には統一感はなく、調査範囲が狭いこともあり用途は不明である。遺物は、SI81 と同時に調査したため、遺構別に分離できるものは縄文土器（300 ｇ）のみだが、図示したものはない。また、SI81・82 いずれかに分離できないものについては上述のとおりである。帰属時期は、出土土器が少なく明確に判断できないが、SI81 と同様に考えた場合、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）と想定される。（西澤）

SI83 竪穴建物跡（第２分冊第 116 図、第４分冊写真図版 118）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出はⅣ層上面で行った。SI89・99、SK500・503・519・520 と重複し、SI89、SK500・519 より新しく、SI99、SK503・520 より古い。残存する平面形は楕円形で、規模は長径 350 ㎝、短径 220 ㎝、深さは残存値で 43 ㎝である。主軸は焼土を手前にしたＮ-43°-Ｅである。堆積土は単層でブロックを含むため、人為堆積と考えられる。付属遺構には焼土１基、ピット２個がある（P1～2）。焼土は南東端に位置し、深さ７㎝まで赤色変化している。ピットの平面形は２基とも略円形で、それぞれの開口部の規模・深さは、P1 が長径 64 ㎝短径 57 ㎝、深さは 21 ㎝。P2 が長径 43 ㎝短径 33 ㎝、深さは 26 ㎝である。遺物はP1 埋土から 946.7 ｇ出土している。遺物は、縄文土器（997.6 ｇ）が出土している。このうち縄文土器３点（483～485）を掲載した。このほか、焼土を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリ・トチノキなどの堅果類が多く検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、無文土器の割合が多く判断する根拠が少ないため重複関係を優先し、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（中島）

SI84 欠番

SI85 竪穴建物跡（第２分冊第 116 図、第４分冊写真図版 119）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅳ層で行った。直接重複する遺構には SI90 があり、新旧関係は本遺構の方が古い。また、直接の切り合いを確認できなかったが、SI86 や SK496、529 などと接する。この付近（２段目西側→南向き斜面下位）の調査では、遺構の重複が激しく検出が困難であったため、遺構が認識できるまで少しずつ面を下げながら調査を行った。そのため低い位置での検出となり、本来あった新旧関係は不明になったと思われる。斜面下方は重複か流出により失われており、全容は不明である。平面形は、円形を基調とする可能性がある。残存規模は長軸 150 ㎝、短軸 120 ㎝程度である。壁面の残存弧から直径を推定すると約 250 ～ 300 ㎝前後である。床面は、調査した範囲では、斜面下方に向かってゆるく傾斜している。床面までの深さは、壁際で 20 ㎝である。堆積土は１層のみで、にぶい黄橙色を呈する風化花崗岩粒を含むシルト層である。付属施設には、ピット（小穴）が１個ある（P1）。平面形は楕円形を呈し、規模は長径 47 ㎝であり、床面積に対してやや大きい。遺物は、縄文土器（248 ｇ）のみが出土した。そのうち縄文土器１点（486）を掲載した。時期決定は、出土土器が少なく、また無文の土器の割合が高いため重複関係を優先した。したがって、帰属時期は、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～ 10 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI86 竪穴建物跡（第２分冊第 117 ～ 119 図、第４分冊写真図版 101・102）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出はⅣ層上面で行った。SI22B、SI66・70、SK495・520・527・529 と重複し、各土坑や SI22B より新しく SI66・70 より古い。平面形は略円形で、規模は長径 780 ㎝、短径 750 ㎝、深さは 85 ㎝である。主軸は埋設土器のある南東側を手前にしたＮ -53°－Ｅである。断面から、壁がほぼ垂直に立ち上がることがわかるが床面は重複する SI66 に切られているため中央の状態は不明、壁際にほぼ平坦な床面を確認できる。堆積土は単層でブロックを含むため人為堆積によるものと考えられる。本遺構には埋設土器１基、ピット（小穴）41 個（P1 ～ 41）、壁溝が２条（SD1・2）付属している。埋設土器は、住居中央より南東方向に位置する。土器を南北方向に横位に設置しており、掘方を含めた規模は長軸 120 ㎝、短軸 93 ㎝である。掘方埋土の一部が焼土となっている箇所があり、土器埋設炉の可能性もある。ピットの平面形は全て略円形である。開口部の長径を基準にして４つに分けると次のようである。①長径が 31 ㎝以下のもの（P9・10・11・19 ～ 21・23・24・26・29・30・33・35 ～ 37）、②長径が 35 ～ 43 ㎝のもの（P14 ～ 18・22・25・27・28・32・34・38 ～ 41）、③長径が 52 ～ 65 ㎝のもの（P1 ～ 4・7・8・12・13）、④長径が 70 ～ 80 ㎝のもの（P5・6・31）である。深さは３つに分けることができ、① 10 ～ 30 ㎝が 15 個（P3・8・10・11・13・15・16・20・21・22・33・35・36・38・40）、② 31 ～ 40 ㎝が 18 個（P4 ～ 6・12・14・17・19・24・26 ～ 31・34・37・39・41）、③ 41 ㎝以上が８個（P1・2・7・9・18・23・25・32）である。壁溝は壁際に１条（SD1）と内側に１条（SD2）あり、複数回建て替えがあった可能性がある。深さは SD1 が 10 ～ 40 ㎝、SD2 は 20 ㎝である。ピットや壁溝の在り方から複数棟が重複（拡張）していると考えられるが、個別に分離する検討は行っていない。遺物は、縄文土器（4,209 ｇ）、土製品（31.3 ｇ）、石製品（2,036.4 ｇ）が出土している。このうち、土器１点（487）、石製品１点（2453）を掲載した。出土土器の多くは無文土器が多いことから時期決定は重複関係を優先する。上位に重複する SI66 は縄文時代中期後葉であることから、それと同様かそれ以前の時期となる。したがって帰属時期は、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b ～９式併行）に位置づけた。（中島）

SI87 欠番

SI88 欠番

SI89 竪穴建物跡（第２分冊第 120 図、第４分冊写真図版 120）　北尾根の南斜面下位に位置している。

検出はⅣ層上面で行った。SI83、SK519・523と重複し、SI83、SK519より古く、SK523より新しい。残存する平面形は半円形で、規模は長軸220㎝、短軸140㎝、深さは残存値で11㎝である。主軸は炉と考えられる礫を基準にしたＮ-90°－Ｅである。堆積土は単層で、ブロックを含むため人為堆積と考えられる。遺構には炉１基、土坑１基（SK1）が付属している。炉は残存する礫と推定される住居の大きさから石囲炉と考えられる。残存部の規模は長軸28㎝、短軸21㎝である。焼土は確認できなかった。土坑の平面形は楕円形で、開口部の規模は長軸70㎝、短軸45㎝、深さは25㎝である。遺物は、縄文土器（737ｇ）、石器（5.7ｇ）が出土している。このうち土器１点（488）を掲載した。このほか、堆積土の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、炭化種実は未検出であった。時期は、出土土器が少なく重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）に位置づけた。（中島）

SI90竪穴建物跡（第２分冊第120・121図、第４分冊写真図版121・122）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅴ層で行った。重複する遺構にはSI19、SI20A・B、SI70A・B・C、SI85、SK506がある。新旧関係は、切り合い関係から、いずれの遺構よりも本遺構の方が新しい。この遺構も南側の一部は斜面下に崩落しており、全容は不明である。平面形は、方形を基調とする可能性があるが、東壁、南壁の状況が不明のため断定できない。規模は、残存範囲で東西480㎝前後、南北380㎝である。床面は、複式炉で一段低くなるが、ほぼ平坦に構築されている。床面までの深さは、検出面より120㎝である。堆積土は12層に区分される。１～３層は、黄色系の細礫混じり層、４層は黒色シルト層、５・６層は黄色系細礫混じり層、７層が黒色シルト層、８～10層は黄色系砂混じり層、11層は、黒褐色シルト層、12層は黄色系の細礫混じり層である。黄色系土層は、風化花崗岩層の崩落と考えられ、堆積状況も斜面上方からの流入が想定される。間層に黒色系のシルト層があり、黄色系と黒色系が交互に堆積している。付属施設には複式炉１基、石囲炉１基、ピット（小穴）12個（P1～12）、壁溝１条がある。複式炉は、床面の南東側に位置し、平面形は長細い台形状を呈する。規模は、長軸160㎝、短軸が120㎝（前庭部）である。構成される礫は、おもに花崗岩であり、長さが10～50㎝、厚さ15㎝前後の直方体状の礫が中心で、円礫を組み合わせている。第一石囲部内側には焼土が形成されてる。前庭部は、南東端が流出している。掘方は、炉全体にあり、一回り大きい。炉底面は、床面より10～30㎝ほど低い。石囲炉は複式炉の右側に接して構築されている。本来は重複関係にあった可能性があるが、連続した土層を確認できなかったため不明である。平面形は台形状を呈し、規模は長軸125㎝、短軸80㎝である。構成される礫は花崗岩であり、長さ15㎝～50㎝の直方体状、塊状の炉石を組み合わせている。ピット（小穴）は、いずれも円形から楕円形状を呈する平面形で、長径30㎝前後のもの（P2～8、12）と長径40前後のもの（P1・11）に分けられる。これらは、深さが統一的ではないが、配置状況から（P4・5・11を除いて）主柱穴を構成すると考えられる。また、P9･10は、壁面中に位置するため主柱穴ではないだろう。遺物は、縄文土器（3,924.8ｇ）、石器（1,523.7ｇ）、土製品（3.1ｇ）が出土している。そのうち縄文土器７点（489～495）、石器１点（2315）、土製品１点（2502）を掲載した。また、炉内焼土等のフローテーションを行った結果、オニグルミ、クリ、トチノキが出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、掲載土器や不掲載土器から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10式併行）に位置づけた。（西澤）

SI91竪穴建物跡（第２分冊第122図、第４分冊写真図版123～125）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面で行った。重複する遺構にはSI92・93・116がある。重複の最上位に位置することから、新旧関係は、いずれの遺構よりも新しい。この遺構も壁面は斜面上方側にしか残存しておらず、南側の一部は斜面下に崩落したと想定される。平面形は、残存部分から推定する

と、円形を基調とする可能性がある。規模は、残存範囲で長軸 340 ㎝、短軸 300 ㎝である。壁面の残存弧から直径を推定すると 370 ㎝前後である。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められるもののほぼ平坦に構築されている。床面までの深さは、検出面より 75 ㎝程度である。堆積土は４層に区分される。１層が黒褐色シルト、２層が褐色砂質シルト、３層がにぶい黄褐色砂質シルト、４層が黒褐色砂質シルトである。いずれの層も斜面上方からの流入であると観察できる。付属施設には焼土が２基ある。焼土１は、25×15 ㎝の規模で、床面の西側中央付近に位置する。焼土２は、焼土１の南側に位置し、85 ㎝×70 ㎝の規模である。他に炉がないことから地床炉と想定される。遺物は、縄文土器（4,429.5 ｇ）、石器（2,230.8 ｇ）が出土している。そのうち縄文土器５点（496～500）を掲載した。また、炉内焼土のフローテーションからオニグルミの核、クリ、トチノキの種子が出土した。とくに焼土２からは多量のオニグルミの核の破片が出土している（第Ⅵ章）。帰属時期は出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI92 竪穴建物跡（第２分冊第 123 図、第４分冊写真図版 123～125）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面で行った。重複する遺構には SI91・93・106・116 がある。新旧関係は、SI91 より古く、その他の遺構よりも新しい。この遺構も壁面は斜面上方側にしか残存しておらず、南側の一部は斜面下に崩落したと想定される。平面形は、残存部分（と建物下端）から推定すると、北西―南東方向に細長い楕円形を呈する可能性がある。規模は、残存範囲で長軸 410 ㎝、短軸 300 ㎝である。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められる。床面までの深さは、SI91 より下位で 25 ㎝である。床面には部分的に黄褐色粘土が確認できる。貼床の可能性があるが、非常に薄く範囲も限られることから断定できない。堆積土は２つに区分される。１・２層とも黒褐色シルトで、風化花崗岩を含有する。いずれの層も斜面上方からの流入であると観察できる。付属施設には石囲炉が１基ある。石囲炉の平面形は建物跡と同様の楕円形を呈し、規模は 50×40 ㎝である。構成される礫は、花崗岩が主体であり、長さ 14 ㎝前後の扁平な角礫を中心に組み合わされている。また、一部には深鉢の胴部片を炉石のように転用している箇所がある。補修にともなうものであろうか。遺物は、縄文土器（2,884.6 ｇ）、石器２点（3,300.3 ｇ）が出土している。そのうち縄文土器３点（501～503）、石器１点（1928）を掲載した。また、炉内焼土のフローテーションからオニグルミの核、クリ、トチノキの種子が出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI93 竪穴建物跡（第２分冊第 124～126 図、第４分冊写真図版 126～129）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面で行った。重複する遺構には SI91・92・106・116 がある。新旧関係は、SI91・92 より古く、SI106・116 とは直接切り合いを確認できない。この遺構も壁面は斜面上方側にしか残存しておらず、南東側の一部は斜面下に崩落したと想定される。平面形は、残存部分から推定すると、円形を呈する。規模は、直径 113 ㎝である。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められるものの、ほぼ平坦である。床面までの深さは、検出面より 125 ㎝である。堆積土は 15 層に区分される。褐色～暗褐色を呈する褐色系（１・12～14 層）と、黒褐色～黒色を呈する黒色系（２～４・９・15 層）と、にぶい黄褐色や灰黄褐色、浅黄橙色を呈する黄色系（５～８・10・11 層）の３つが交互に堆積している状況である。いずれの層も斜面上方からの流入であると観察できる。付属施設には石囲炉２基、焼土１基、埋設土器２基、ピット（小穴）21 個（P1～21）、壁溝１条（SD1）がある。炉１は、床面の北西側壁寄りに位置する。平面形は円形を呈し、規模は径 50 ㎝である。P21 よりも上位に位置する。炉石の主体は花崗岩であり、長さ 30 ㎝、厚さ 10 ㎝前後の礫を組み合わせている。内側には炭化物、焼土が形成される。炉２は、床面中央やや南東寄りに位置する。平面形は円

形で、規模は径 75 ㎝と炉１よりも一回り大きい。炉石の主体は花崗岩であり、長さ 10～50 ㎝、厚さ 10 ㎝前後の扁平な四角柱形や塊状の礫を組み合わせている。内側には炭化物、焼土が形成される。焼土は、炉１の南に位置する。長軸 109 ㎝、短軸 80 ㎝の範囲に焼土と炭化物が広がっている。焼土層の下位に台石が位置していた。ピットは、開口部の規模で分けると、①径 20 ㎝前後のもの（P8・9・12・13・15）、②径 25～30 ㎝前後のもの（P1・2・7・10・11・14・17～20）、③径 35～40 ㎝前後のもの（P3～6・16・21）の３つに分けられる。これらのまとまりは、それぞれある程度円形に配置されるようである。とくに③は、P16 を除き、半円形に配置される。深さもあることから、建物を構成する主柱穴と考えられる。これらのことから、この遺構は少なくとも３時期の重複か建替が行われた可能性がある。炉が複数あることからも裏付けられよう。埋設土器１は焼土の南東に位置する。深鉢（519）が倒位で埋設されていた。掘方の深さは 30 ㎝程で浅く、埋設された土器も下半を失っており、本来はより上位にあった可能性がある。その場合、別時期の建物が重複していた可能性がある。埋設土器２は、炉２の西側に位置する。深鉢 520 が倒位で埋設されている。完形で残存し底部には穿孔がある。内部は 2/3 程空洞であった。掘方（と判断したもの）は、長軸 105 ㎝、短軸 59 ㎝、深さ 50 ㎝の規模であり、埋設土器よりもかなり大きく、また埋設土器も端に寄っている。このため、埋設土器と別の土坑が重複していた可能性がある。壁溝（SD1）は、床面北東側、直線距離で約 180 ㎝分を検出している。遺物は、縄文土器（30,766.2 ｇ）、石器（19,910.9 ｇ）が出土している。そのうち縄文土器 37 点（504～540）、石器５点（2195・2000・2250・2316・2410）を掲載した。また、埋土下位層や炉焼土のフローテーションからオニグルミの核、クリ、キハダ種子、トチノキの種子が出土した。とくにオニグルミの核は大量に出土している（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器（埋設土器を含む）や重複関係（もっとも古い）から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式古段階併行）に位置づけた。（西澤）

SI94 竪穴建物跡（第２分冊第 127 図、第４分冊写真図版 130）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層上面、SI30 の下層で行った。重複する遺構には SI28・29・30、SK72・209 がある。新旧関係は、切り合い関係から、SI28 よりは本遺構の方が新しく、それ以外の遺構よりは古い。この遺構も南側の大部分は斜面下に崩落しており、全容は不明である。また、東側の一部はトレンチによって壊されている。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする可能性があるが、残存が一部のみのため不明である。規模は、残存が悪く明らかにできないが、もっとも残りのよい部分で長さ 200 ㎝程度である。石囲炉が床面の中心にあると仮定すると直径は 240 ㎝と復元できよう。床面は、斜面下側に若干の傾斜が認められる。床面までの深さは、検出面より 20 ㎝程度である。堆積土は１層のみで、暗灰黄色の砂質シルト層である。床面中央付近には貼床が部分的に確認でき、黄褐色を呈するシルト層で構成される。床面中央には土器が出土しており、原位置を保っている可能性がある。付属施設には石囲炉がある。石囲炉は流出を免れたもので、平面形は楕円形を呈し、規模は 45×40 ㎝程度である。構成される礫は、おもに花崗岩であり、長さが 20 ㎝、厚さ 10 ㎝程の直方体状の礫が中心で、円礫を組み合わせている。内側には焼土が形成されている。遺物は、縄文土器（1,001.9 ｇ）が出土しているのみである。そのうち１点（541）を掲載した。また、炉内土壌のフローテーションからクリが出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（西澤）

SI95 竪穴建物跡（第２分冊第 127 図、第４分冊写真図版 131）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層で行った。直接重複する遺構はないが、近接して西に SI23、東に SI93 がある。斜面下方は流出により失われており、全容は不明である。平面形は、円形を基調とする可能性がある。

残存規模は長軸 140 ㎝、短軸 90 ㎝程度である。床面は、調査した範囲では斜面下方に向かってゆるく傾斜している。床面までの深さは、壁際で 20 ㎝である。堆積土は１層のみで、灰黄褐色を呈する風化花崗岩粒を含むシルト層である。付属する施設はない。残存範囲が少ないため定かではないが、大きさからみても、竪穴建物より土坑の可能性がある。この遺構の周囲には土坑が存在せず、竪穴建物が集中することから竪穴建物とした。遺物は、縄文土器（1,092.1 ｇ）が出土している。そのうち縄文土器２点（542・543）を掲載した。遺構の時期は、出土土器から、すなわち縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI96 竪穴建物跡（第２分冊第 128 図、第４分冊写真図版 132）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層で行った。SI23 と重複し、それよりも古い遺構である。斜面下方は大部分が流出し、また北壁の一部は調査の際に掘り過ぎてしまったため、全容は不明である。平面形は、円形を基調とする可能性がある。残存規模は長軸 140 ㎝、短軸 90 ㎝程度である。床面は、調査した範囲では斜面下方に向かって傾斜している。遺構確認面から床面までの深さは、壁際で 10 ㎝である。堆積土は１層のみで、黒褐色を呈する風化花崗岩粒を含むシルト層である。床面全体には炭化材が広がっている。残りが悪いが、一部樹種を特定している（サワグルミ、クリなど）。これらの炭化材の広がりと出土土器の多さから焼失した可能性がある。付属施設に炉がある。炉は、わずかに流出を免れたもので、おそらく石囲炉と想定できる。わずかに長さ 20～30 ㎝の炉石が２個のみ残存する。炉石は、いずれも花崗岩である。遺物は、縄文土器（5,902.1 ｇ）が出土しており、そのうち縄文土器７点（544～550）を掲載した。遺構の残存具合に比して多く出土している。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）と判断した。（西澤）

SI97 竪穴建物跡（第２分冊第 128 図、第４分冊写真図版 133）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅱ層（黒褐色土）中で検出した。検出当初は、本遺構の存在に気付かず、斜面上部から SI9 まで至る南北方向のベルトを残して掘削を行った。その後、ベルト断面の観察を改めて行い、本遺構の床面及び壁の立ち上がりが確認できたため精査に切り替えた経緯がある。そのため、本遺構はベルト部分のみが残存しており、消失部分は推定ラインとして図示した。SI9・10 と重複しており、切り合い関係から本遺構が SI9・10 より新しい。推定規模は、ベルトの残存部分より 340 ㎝前後が想定できるものと考えられる。床面は、斜面下方に向かって緩やかに傾斜する。残存する北側の壁面は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは北壁側で 36 ㎝である。堆積土は２つに区分できる。黒褐色砂質シルトを主体としており、堆積状況から自然堆積の可能性が考えられる。床面より下層に堆積する焼土ブロックを含む黒褐色土及び明黄褐色土の２層は床を形成するための人為堆積土であると考えられる。このことから、SI9 の埋没の後に貼床し、本遺構を形成したものと考えられる。付属遺構には、焼土１箇所、埋設土器１基がある。尚、ピットに関しては SI9 の北側に分布が集中するピットの中に本遺構に伴うものが混在している可能性が考えられる。焼土は残存部分の中央部に位置するため本遺構のほぼ中央部に位置していたのではないかと考えられる。平面形は楕円形が推定される。被熱し、若干の赤変が認められる。推定規模は、21×11 ㎝である。埋設土器は東側に位置する。SI9 の精査の際に出土したが、発見時で SI9 の床面よりも 20 ㎝程高い場所に位置することから本遺構に伴うものと考えた。掘方を含めた規模は 34×26 ㎝で、土器は深鉢の胴部下半が床面に対してやや斜めに正位の状態で埋め込まれていた。堆積土は埋設土器内に堆積する２層と掘方堆積土の３つに区分できる。遺物は、縄文土器（2,879.1 ｇ）が出土したのみである。このうち土器１点（551）を掲載した。帰属時期は、出土遺物及び SI9 との重複関係から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。（野中）

SI98 竪穴建物跡（第２分冊第 129 図、第４分冊写真図版 134）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層で行った。重複する遺構はないが、近接して SI23、SI93 がある。斜面下方側の約半分が流出しており、全容は不明である。平面形は、円形を基調とする可能性がある。残存規模は長軸 295 ㎝、短軸 195 ㎝程度であり、直径 300 ㎝前後に復元できる。床面は、調査した範囲では斜面下方に向かってゆるやかに傾斜している。遺構確認面から床面までの深さは、壁際で 45 ㎝である。堆積土は２層のみで、黒褐色を呈する風化花崗岩粒を含むシルト層である。２層は炉の堆積土である。付属施設に炉がある。わずかに流出を免れたもので、約半分が残存する。残存規模は、長軸 50 ㎝、短軸 25 ㎝である。炉石は、花崗岩で長さ 20 ㎝程度の炉石が２個のみ残存する。遺物は、縄文土器（666.3 ｇ）、鉄滓（9.4 ｇ）が出土しており、そのうち縄文土器４点（552～555）を掲載した。遺構の残存具合に比して多く出土している。帰属時期は、出土土器からみると無文土器の割合が高く、文様が判別できるものは縄文時代中期中葉前半と中期後葉から末葉の土器に２分される。無文土器の割合が高い傾向にあるのは後者の特徴であることや周囲の同立地の遺構の時期から、後者を採用し縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式期）と判断した。（西澤）

SI99 竪穴建物跡（第２分冊第 129 図、第４分冊写真図版 135）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出はⅣ層上面で行った。SK491・520・530 と重複し、SK491 より新しく、SK520・530 より古い。床面に一定程度の平坦面が存在することから竪穴建物としたが、部分的にしか残存せず、土坑の可能性もある。残存する平面形は扇形で、規模は長軸 240 ㎝、短軸 140 ㎝、深さは 34 ㎝である。主軸は炉を基準に斜面下方を手前にしたＮ -43°－Ｅである。堆積土は３層に区分できる。２・３層がブロックを含むため、人為堆積で、１層も同原因による堆積と考えられる。遺構には炉が１基付属している。炉は石囲炉で、平面形は円形、規模は長軸 42 ㎝、短軸 35 ㎝である。炉内に焼土を形成し、焼土の深さは３㎝程である。遺物は、縄文土器（330.4 ｇ）がわずかに出土している。このうち１点（556）を掲載した。このほか炉内の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリが検出されている（第Ⅵ章）。帰属時期は、出土土器が少ないため重複関係を優先する。下位にある SI89 が縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）を主体とすることから、それ以降の時期に位置づけた。（中島）

SI100 欠番

SI101 竪穴建物跡（第２分冊第 130 図、第４分冊写真図版 136）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲｅ層上面（黒褐色土）で検出した。東側から南側（斜面下側）にかけて崩落により欠失している。平面形は残存部分の形状から円形もしくは楕円形であると推定される。残存規模は、280×180 ㎝で、残された壁から復元すると直径 250 ㎝前後の規模と推定する。床面は、おおよそ平坦であり、残存する北側の壁面は直立気味に立ち上がる。検出面からの深さは北壁側で 26 ㎝である。堆積土は２つに区分できる。灰黄褐色砂質シルトを主体としており、堆積状況から自然堆積の可能性が考えられる。付属遺構には、地床炉と考えられる焼土１箇所、ピット（小穴）４個（P1～4）、壁溝１条がある。地床炉と考えられる焼土は本遺構のほぼ中央部と推定される場所に位置する。平面形は不整形で、強く被熱し、硬化が認められる。規模は、約 43×36 ㎝である。ピットは北～西壁周辺に分布する。配置状況と規模から P1・4 が主柱穴と想定される。規模は径 30～40 ㎝前後、深さ 20～50 ㎝前後である。堆積土はいずれも黒褐色砂質シルトが主体である。壁溝は西壁にのみ１条確認できた。規模は幅９㎝、深さ 12 ㎝である。遺物は、縄文土器（1,374.2 ｇ）、石器（1,352 ｇ）が出土している。このうち土器は４点（557～560）を掲載した。帰属時期は、出土遺物が少なく重複遺構もないことから判断が難しいが、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（野中）

SI102～105 欠番

SI106 竪穴建物跡（第２分冊第 131 図、第４分冊写真図版 137）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層上面、SI116 の下層で行った。重複する遺構には SI24・25・116 があり、いずれの遺構よりも古い遺構となる。また、SI93 とは調査時ではわずかに接するのみであり、新旧関係は不明であるが、本来は重複していたと考えられる。その場合、より下位にあるのが SI93 であるため、もしかしたら本遺構の方が新しいかもしれない。この遺構は、ほぼ上位に重複する SI116 によって大部分が破壊されており、残存するのは石囲炉とその周辺の床面のみである。そのため全容は不明であるが、この重複の在り方から SI116 の建替前の可能性がある。平面形は、残存部分が少なく、壁が残存しないため不明である。規模は、現状では 430×230 ㎝の範囲が残存するに過ぎない。規模の目安として、石囲炉が床面の中心仮定し、そこからもっとも距離の長い残存範囲端を半径とするならば、直径が 540 ㎝に想定できる。この規模は上位に重複する SI116 と同様の規模であり、この点も本遺構が建替前の古段階の建物の可能性を示す。床面は、ほぼ平坦である。床面までの深さは、上位の SI116 床面から 10 ㎝にもみたない程度である。堆積土は１層のみで、にぶい黄褐色の粘土質シルト層で、貼床に使用されるような性質である。付属施設には石囲炉、ピット（小穴）６個がある（P1～6）。石囲炉は残存範囲の東寄りの位置にあり、平面形は楕円形状を呈し、規模は 74×55 ㎝程度である。構成される礫は、おもに花崗岩であり、長さが 10～30 ㎝、厚さ８㎝前後の扁平な礫や塊状の礫を中心に組み合わせている。炉石のいくつかは風化している。内側には焼土が形成されてる。ピット（小穴）は、いずれも平面形は楕円形を呈する。規模から、径が 40 ㎝前後の比較的大きなピット（P1・2・4）と径 20 ㎝以下の小型ピット（P3・5・6）に分けられる。また、P1・2 は、深さが 60 ㎝以上と他より深いが、全体の配置が不明のため主柱穴になるか不明である。遺物は、縄文土器（141.9 ｇ）、石器（2,072.5 ｇ）がわずかに出土しているが、図化した遺物はない。また、炉内の土壌のフローテーションからクリが出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（西澤）

SI107～115 欠番

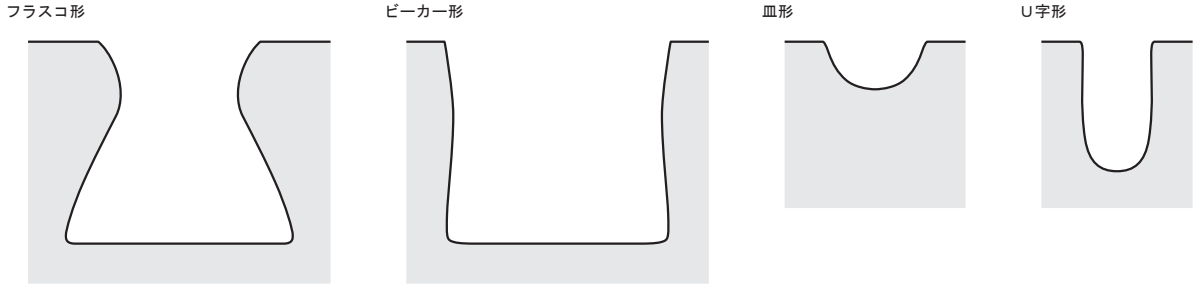
SI116 竪穴建物跡（第２分冊第 132・133 図、第４分冊写真図版 138・139）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ⅲｅ層上面～Ⅴ層上面、SI24・28 の下層で行った。重複する遺構には SI24・25・28・91・106 がある。新旧関係は、切り合い関係から、SI106 よりは本遺構の方が新しく、それ以外の遺構よりは古い。また、隣接して SI93 があるが、一部が接しているだけであり、新旧関係は不明である。ただし、本遺構の方が上位に位置することから、SI93 よりも新しい可能性がある。この遺構も南側の一部は斜面下に崩落しており、全容は不明である。平面形は、残存部分から推定すると円形を基調とする。規模は、石囲炉が床面のほぼ中心にあると仮定すると、直径は 540 ㎝と復元できよう。床面は、ほぼ平坦である。床面までの深さ（壁の高さ）は、60 ㎝程度である。堆積土は５層に区分され、１層が灰黄褐色、２層が暗褐色、３・４層が黒褐色、５層が灰黄褐色を呈する。いずれも風化花崗岩の細礫を混ぜるシルト層で、暗褐色・黒褐色の暗色系の層と１層のような黄色系のシルトが交互に堆積している。また２・３層は、斜面上方からの堆積状況を示している。付属施設には石囲炉、ピット（小穴）８個がある。石囲炉は床面のほぼ中央に位置すると推定され、平面形は楕円形を呈し、規模は 75×54 ㎝である。構成される礫は、おもに花崗岩であり、長さが 25～30 ㎝、厚さ 10～15 ㎝の直方体状の礫を７個から構成される。内側には焼土が形成されている。炉内からは、ほぼ完形の土器（565）が出土しているが、やや浮いた状態のため、炉に伴うかは不明である。ピット（小穴）は P1～8 までがあり、いずれも平面形は円形から楕円形状を呈する。規模からみると、

径が 20～30 ㎝前後、深さが 30～40 ㎝のもの（P1・2・5・7・8）と、径が同じで深さが 50～60 ㎝前後のもの（P3・4・6）の２者に分かれる。２時期あった可能性もあるが補強する他の証拠はない。遺物は、縄文土器（5,418.2 ｇ）、石器（758.2 ｇ）、石製品（6,940 ｇ）が出土している。このうち土器 13 点（561～573）、石器１点（2337）、石製品１点（2454）を掲載した。これらの遺物のうち、563・565・568・572・2454 は床面上からの出土であり、原位置を保っているか、あるいはそれに近い状況である。このほか SI28・116 一括で取りあげた縄文土器（143 ｇ）が出土している。また、炉内焼土のフローテーションからオニグルミ核が出土した（第Ⅵ章）。帰属時期は、重複関係や原位置を保つ出土遺物から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式期）に位置づけた。　（西澤）

SI117 竪穴建物跡（第２分冊第 133 図、第４分冊写真図版 140）　北尾根の南斜面下位に位置している。遺構の確認は、Ｖ層で行った。重複する遺構はないが、近接して、SI19、SI90、SK456 が位置する。斜面下方である南側は、約半分ほど流出しており、全容は不明である。平面形は、残存部から判断すると、円形を呈し、規模は、炉が床面の中心にあると仮定するならば、直径 360 ㎝に復元できる。床面までの深さは、検出面から 15 ㎝である。床面は斜面下方に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は２層あり、１層は灰黄褐色を呈する粗砂混じりシルトで、２層は黒色細砂混じりシルトで炉の堆積土である。付属施設には石囲炉が１基あり、南側の約半分が流出している。平面形は円形であり、残存規模は、径が 40 ㎝である。花崗岩が主体であり、長さ 20 ㎝前後の礫を組み合わせている。内側等に明確な焼土は確認できなかった。遺物は、縄文土器（80 ｇ）、石器（573 ｇ）が出土している。図化した遺物はない。時期を決定する証拠を欠くが、付近の遺構の時期や複式炉ではない点を考慮すると、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）を想定できるかもしれない。　（西澤）

（２）土　　坑

土坑は、今回調査した遺構のうち最も数が多く、遺跡を代表する遺構である。３カ年に渡る調査で検出した土坑は合計 508 基である（これ以外に SK を付与したもの３基あるが、竪穴建物（SI65）の柱穴に変更となった）。内訳は、いわゆるフラスコ状土坑 444 基、一般的な土坑 60 基（断面形不明の土坑を含める）、縄文時代以降の土坑４基である。ほとんどの土坑が、いわゆる貯蔵穴と呼ばれる遺構となる。遺物を出土する土坑が少なく、時期不明としたものが多い（仮に出土遺物があっても必ずしもそれが当該遺構の年代を示すとは限らないが、ほかに根拠の無いものはそれを重視せざるを得ない）。しかし、竪穴建物や包含層と位置や重複などからみると、それらとは時期的に強い関連があると考えられる。そのため、これらの遺構とほぼ同時期に対応すると想定し、以下の記載で時期不明とした多くの土坑は、およそ縄文時代中期前葉から後葉にかけて構築された遺構と考えている。掲載遺物以外の出土遺物の情報は第３分冊第 10・11 表を参照されたい。また、土坑の機能については様々であり、調査から特定できるものはないが、土坑の断面形のうちフラスコ形、ビーカー形については、



第 24 図　土坑断面の分類模式図

いわゆる貯蔵穴としての機能を想定している。なお、土坑の断面形の表記は、第24図に記したように、「フラスコ形」、「ビーカー形」、「U字形」、「浅（深）皿形」に分類し、統一している。前2者がいわゆる貯蔵穴と想定している。

SK1（第２分冊第134図、第４分冊写真図版141）　南尾根より南にある尾根の北斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形は東西がやや長い円形を呈している。規模は開口部で長軸120㎝、短軸96㎝、底部で長軸81㎝、短軸67㎝（底面積0.35㎡）、深さ上方で65㎝、下方で25㎝である。断面形はU字形を呈している。底面は中央が高い上げ底をなしている。堆積土は上半部が暗褐色粘土、下半部が黒褐色粘土で占められている。上半部に径45×40×20㎝の亜角礫が人為的に埋められている。土坑の上部に大きい礫をのせている例は、かつて調査された高根遺跡から検出されている。現遺跡の東側に位置しているところである。これらの土坑は土坑墓ではないかと考えられている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（光井）

SK2（第２分冊第134図、第４分冊写真図版141）　南尾根東部に位置している。Ⅳ層上面で検出されている。SK12を切っておりこの遺構より新しい。平面形は、東側上部が大きく崩壊しているが、ほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸155㎝、短軸140㎝、底部で長軸160㎝、短軸155㎝（底面積1.91㎡）、深さ156㎝である。ほぼ原形を留めている西壁から、断面形はフラスコ形を呈したと推定される。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は幾分凹凸が多くあるが平坦である。堆積土は黄褐色砂質シルトが主体を占め、最下部に褐色砂質シルトが堆積している。３～８層は混合土の堆積状況から、人為的な堆積の様相を呈している。遺物は、縄文土器（224.1ｇ）、石器（59.7ｇ）が出土している。このうち土器２点（574・575）、石器１点（2127）を掲載した。帰属時期は、遺物量が少なく判断が難しいが、出土土器の年代幅から縄文時代中期前葉から後葉（大木8a～９式併行）と想定する。（光井）

SK3（第２分冊第134図、第４分冊写真図版141）　南尾根の北斜面、中位東端に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。開口部上部の一部が崩壊しているが、平面形はほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸140、短軸102㎝、底部で長軸158㎝、短軸140㎝（底面積1.67㎡）、深さ134㎝である。断面形はフラスコ形を呈しており底面から内傾していき上部で外反しているものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり南側に傾斜している。堆積土は上位がにぶい黄褐色砂質シルト、中位上半が褐色砂質シルト、下半が黄褐色砂質シルト、下位上半が褐色～暗褐色砂質シルト、下半が黄褐色砂質シルトで構成されている。上位の１～３層の層理面、中位下半の９層中に帯状の褐色砂質シルトが堆積している。浅皿状に堆積しているなど、全体的に自然堆積の様相が強いと推定される。遺物は、縄文土器（148.9ｇ）が出土している。このうち土器１点（576）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木8a～8b式併行）の間に位置づけた。（光井）

SK4（第２分冊第134図、第４分冊写真図版141）　南尾根の北斜面の中位に位置している。Ⅳ層上面で検出された。重複関係はないが、すぐ北側50㎝のところに、本遺構より小さいSK20がある。平面形はほぼ円形である。規模は開口部で径190㎝、底部で径180㎝、深さが西側で172㎝、東側で198㎝である（底面積2.41㎡）。断面形は壁面が底面から真直ぐに立ち上がるビーカー形を呈している。中位が一部袋状に膨らむが、壁の崩壊によるものと推定される。底部はⅤ層まで掘り込んでつくられ、底面は凹凸があり、幾分東側に傾斜している。堆積土は上位が浅皿状に堆積している黄褐色砂質シルト、中位が明黄褐色砂質シルト、下位が褐色～黄褐色砂質シルトで主に構成されている。上位

の２・３層中には、明黄褐色砂質シルトや褐色砂質シルトがラミナ状、６層中に黄褐色砂質シルトが帯状に堆積している。全体的に自然堆積の様相を呈していると推定される。遺物は、縄文土器（652.5 ｇ）が出土している。このうち土器１点（577）を掲載した。帰属時期は、出土土器の割合の高さから、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（光井）

SK5（第２分冊第 135 図、第４分冊写真図版 142）　南尾根の西部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK11 の東側上部を切ってつくられており、この遺構より新しい。平面形はほぼ円形を呈し、確認面での規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 157 ㎝、底部で長軸 165 ㎝、短軸 158 ㎝、（底面積 2.09 ㎡）、深さ上方で 126 ㎝、下方で 96 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾しながら立ち上がるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられ、底面は凹凸があるが平坦である。堆積土は上半部が主に炭化物を含む褐色砂質シルト、下半部が黄褐色砂質シルトで占められている。上半部が浅皿状に堆積し、下半部に壁から崩壊した土が含まれていることから、全体的に自然堆積の様相を呈している。４層から土器片が出土している。遺物は、縄文土器（1,610.4 ｇ）、石器（1.5 ｇ）が出土している。このうち土器２点（578～579）、石器１点（1929）を掲載した。このほか埋土を対象に炭化種実同定を実施しが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、出土土器の年代幅が広くあまり限定できないが、重複遺構を考慮して、縄文時代中期中葉後半から末葉（大木 8b～10 式併行）に位置づけた。（光井）

SK6（第２分冊第 135 図、第４分冊写真図版 142）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK15 と下位で重複しているが、先後関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈する。規模は開口部で長軸 185 ㎝、短軸 170 ㎝、底部で長軸 245 ㎝、短軸 230 ㎝（底面積 4.31 ㎡）、深さ上方で 180 ㎝、下方で 142 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾しながら立ち上がり上部で外反するものである。底部はⅤ層まで掘り込んでつくられ、底面は凹凸があるが平坦である。堆積土は上位が暗褐色～褐色砂質シルト、中位がにぶい黄褐色砂質シルトと黄褐色シルトの互層の間に褐色砂質シルトをはさみ、下位が黄褐色シルトで構成されている。遺物は、縄文土器（6,192 ｇ）が出土している。このうち土器８点（580～587）を掲載した。帰属時期は、出土土器の割合の高さから、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK7（第２分冊第 135 図、第４分冊写真図版 142）　南尾根の中央に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複関係はない。平面形は不整円形を呈している。北側上部が崩壊しているが、ほぼ円形であったと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 120㎝、短軸 108 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 140 ㎝（底面積 1.45 ㎡）、深さ 108 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾し上部で真直ぐに立ち上がるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるが平坦である。堆積土は、上部が炭化物を多く含む褐色シルト、中位が主に黄褐色シルト、下位の上半が褐色砂質シルト、下半が黄褐色シルトで構成されている。３・４層との層離面から土器片が出土している。遺物は、縄文土器（914.3 ｇ）が出土している。このうち土器１点（588）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK8（第２分冊第 135 図、第４分冊写真図版 143）　南尾根の中央東端に位置している。検出面はⅣ層上面である。他遺構との重複関係はない。西側上部の一部が攪乱を受けているが、平面形はほぼ円形を呈していると推定される。確認面での規模は開口部で長軸 205 ㎝、短軸 195 ㎝、底部で長軸 210 ㎝、短軸 180 ㎝（底面積 2.95 ㎡）、深さ上方で 195 ㎝、下方で 85 ㎝である。断面形は底面からやや緩く内傾するフラスコ形を呈している。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土はおもににぶい黄褐色～黄褐色砂質シルトで占められている。８層を除くと、

自然堆積の様相を呈している推定される。遺物は、縄文土器（240.8 ｇ）が出土している。このうち土器２点（589・590）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK9（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 143）　南尾根に位置している。遺構の東側の一部は調査区域外に延びている。検出面はⅣ層上面である。SK28 に北側の一部が切られることからこれよりも古い。また SK10 に切られていると判断したが、断面での観察を行っておらず、先後関係が逆転する可能性がある。また、この SK10 と重複する部分に壁を補強する形で扁平な礫を積み重ねている。同様な事例が SK17 にもみられる。平面形はほぼ円形であると推定される。確認面での規模は開口部で径 106 ㎝、底部で径 175 ㎝（復元で底面積 2.21 ㎡）、深さ 155 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し底面から内傾しながら立ち上がるものである。底部はＶ層を掘り込んでつくられている。底面はほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～黄褐色砂質シルト、中位が暗褐色砂質シルトと褐色砂質シルトの互層、下位がにぶい黄褐色～黄褐色砂質シルトで構成されている。最下部 10 層の中央部に径 10～20 ㎝大の花崗岩がかたまって堆積している。浅皿状および三角状に堆積していることから、自然堆積の様相が強いと推定される。遺物は、縄文土器（1,526.9 ｇ）が出土している。このうち土器３点（591～593）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（光井）

SK10（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 144）　南尾根東部に位置している。暗褐色の円形プランとして検出した。SK45 と SL1 と重複し、本遺構は SL1 より旧期で、SK45 より新期である。また、東側に位置する SK9 と遺構下部で重複しており、その重複部分には貼り石が施されている。新旧関係は、出土土器から本遺構の方が新しいと判断したが、断面で検討していないため先後関係が逆転する可能性はある。平面形は略円形である。開口部の径は長軸 201 ㎝、短軸 170 ㎝である。底面は径 140 ㎝の円形で、底面までの深さは確認面から 150 ㎝程、底面はほぼ水平である（底面積 1.62 ㎡）。壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり外反しているが、SL1 と重複している箇所の開口部付近は、内傾している。堆積土は、暗褐色～明黄褐色の砂質シルトを主体とした 12 層で構成される。12 層がレンズ状に堆積していることから、フラスコ形の土坑と考えられる。５層下位から、１個体を構成する土器片がまとまって出土している。遺物は、縄文土器（5,931.3 ｇ）、石器（20.2 ｇ）が出土している。このうち土器１点（594）、石器１点（2042）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（中島）

SK11（第２分冊第 135 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根の北斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。東側を SK5、北側を SK2・SK12 に切られており、これらの遺構より古い。平面形はほぼ円形を呈したものと推定される。確認面での規模は、開口部で径 205 ㎝、底部で径 193 ㎝（復元で底面積 3.11 ㎡）、深さ上方で 37 ㎝、下方で 20 ㎝である。断面形は上方側の壁面がやや内傾していることから、フラスコ形を呈していたと考えられる。底部は、Ｖ層を掘り込んでつくられており、底面は凹凸がありやや東側に傾斜している。堆積土はおもに黄褐色砂質シルトで占められている。中位の層離面に層厚３㎝の褐色砂質シルトを挟んでいる。遺物は、縄文土器（121.4 ｇ）が出土している。このうち土器１点（595）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（光井）

SK12（第２分冊第 134 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根の北斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。西側を SK2 切られていることから、この遺構より古い。平面形は不整な円形を呈している。確認面での規模は開口部で長径 144 ㎝、短径 120 ㎝、底部で長径 120㎝、短径 105 ㎝（復元で底

面積 1.01 ㎡）、深さ 56 ㎝である。断面形は底面から幾分内傾気味に立ち上がるものでフラスコ形を呈していたとも考えられる。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土は、上部が炭化物を含む黄褐色砂質土、下部が径２～10 ㎝の亜角礫を含む褐色砂質土で占められている。遺物は、縄文土器（16.1 ｇ）が出土するが、図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構の年代から、縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a～９式併行）と年代幅がある時期を想定する。（光井）

SK13（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根の北斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。上部をすべて SK36 に切られており、この遺構より古い。平面形は東西の壁が崩壊しているため不整な円形を呈しているが、ほぼ円形であったと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 195 ㎝、短軸 165 ㎝、底部で長軸 176 ㎝、短軸 170㎝（底面積 2.06 ㎡）、深さ 61 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾して立ち上がり外反しているものである。底部はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり壁際が上がる浅皿状を呈している。堆積土は、上位が主に炭化物を含むにぶい黄色砂質シルト、中位が暗灰黄色砂質シルト、下位が灰黄色シルトで構成されている。５層より土器片が出土している。遺物は、縄文土器（1,582.7 ｇ）が出土している。このうち土器４点（596～599）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK14（第２分冊第 137 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根の北斜面に位置している。検出面はⅤ層で SI4 を精査している時に検出されたものである。SI4 との先後関係は不明である。周囲の土坑と同様であれば本遺構の方が古いと推定される。SK18 と底部で接しているが重複関係はない。平面形は不整円形を呈している。東壁上部が大きく崩壊していることから、元々はほぼ円形であったと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 127 ㎝、短軸 111 ㎝、底部で長軸 190 ㎝、短軸 176 ㎝（底面積 2.50 ㎡）、深さ上方で 223 ㎝、下方で 211 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から丸み帯びながら内傾して上部に延びるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられ、底面は幾分凹凸があるが平坦である。堆積土は上位が黒褐色シルトと浅黄色砂質シルト、中位が炭化物を含む灰黄色～暗灰黄色砂質シルト、下位がにぶい黄褐色砂質シルト・黄褐色シルトで構成されている。全体的に自然堆積の様相を呈していると推定される。遺物は、縄文土器（5,773.3 ｇ）、石器（2.6 ｇ）が出土している。このうち土器９点（600～608）を掲載した。帰属時期は、出土土器の年代幅が大きいため限定できず、その年代幅である、縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a～９式併行）を想定しておく。（光井）

SK15（第２分冊第 137 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根の北側斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK6 の下部を切ってつくられおり、この遺構より新しい。上半部が削平され西側下部しか残存していないが、平面形はほぼ円形を呈したと推定される。確認面での規模は、開口部で径 202 ㎝前後、底部で径 240 ㎝前後（復元で底面積 2.13 ㎡）、深さ 106 ㎝と推定される。断面形はフラスコ形を呈すると推定され、底面から内傾しながら立ち上がるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられ、底面は平坦である。堆積土は、上半部が明黄褐色シルト・褐色砂質シルト、下半部が黄褐色砂質シルト・黄褐色シルトで構成されている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK16（第２分冊第 137 図、第４分冊写真図版 145）　南尾根東端に位置している。東側半分は調査区域外へ延びている。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形であると推定される。確認面での規模は開口部で径 166 ㎝、底部で径 170 ㎝（復元で底面積 2.30 ㎡）、深さ上方で

41 ㎝、下方で 10 ㎝である。崩壊が少ない北壁面の観察から、断面形はフラスコ形を呈し、底面からやや緩く内傾するものである。底部はⅤ層を掘り込んでおり、底面は幾分凹凸があり南側にやや傾斜している。堆積土は、最上位に黒褐色シルトが堆積するが、大半は暗褐色砂質シルトで占められている。壁際下部に褐色砂質シルト、褐色シルトが堆積している。そのほか副穴などの付属施設は検出されていない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK17（第２分冊第 138 図、第４分冊写真図版 146）　南尾根東部に位置している。SI2 の精査時に検出されたものである。検出面はⅤ層上面である。SI2，SI7 より古いと推定される。また SK18 よりも新しい。平面形は南北に長い楕円形をなしているが、南側半分の開口部が大きく崩壊していることから、元々はほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 195 ㎝、短軸 125 ㎝、底部で長軸 180 ㎝、短軸 165 ㎝（底面積 1.9 ㎡）、深さが上方で 154 ㎝、下方で 145 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾しながら立ち上がるものである。底面は凹凸があるが平坦である。堆積土は、上位が主に黄褐色砂質シルトで間に褐色砂質シルトを挟み、中位が褐色砂質シルト、下位が黄褐色砂質シルトで構成されている。堆積土は浅皿状または三角状に堆積していることから、自然堆積の様相を呈していると考えられる。副穴などは検出されていない。重複している SK18 の壁側から扁平な礫で土止めが行われている。面を形成しているのが SK18 側であることから、SK17 側を古いと想定した。SK9 でも同じ施設が検出されている。遺物は、縄文土器（1,039.1 ｇ）が出土している。このうち土器２点（609・610）を掲載した。帰属時期は、重複がもっとも下位にあることや出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）を想定する。（光井）

SK18（第２分冊第 138 図、第４分冊写真図版 147）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK17 に北側の一部が切られており、この遺構より古い。平面形は不整円形であるが南側上部が崩壊しており、ほぼ円形だったと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 93 ㎝、短軸 76 ㎝、底部で長軸 192 ㎝、短軸 135 ㎝（復元で底面積 2.77 ㎡）、深さ上方で 146 ㎝、下方で 136 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面からやや鋭い角度で内傾していき上部で真直ぐに立ち上がっているものである。底部はⅤ層まで掘り込まれており、底面は平坦である。堆積土は、最上位が浅皿状に堆積している灰黄色シルト、上位がにぶい黄色砂質シルト、中位が浅黄橙色砂質シルト、下位がにぶい黄色～黄褐色砂質シルトで構成されている。上位の３層には径５㎝、中位の５層には径 20 ㎝の礫が含まれている。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（310.8 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器と、重複遺構から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前の時期を想定しておく。（光井）

SK19（第２分冊第 138 図、第４分冊写真図版 148）　南尾根の中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK21 より新しい。平面形は、南北に長い不整楕円形を呈している。確認面での規模は開口部で長軸 236 ㎝、短軸 210 ㎝、底部で長軸 260 ㎝、短軸 235 ㎝（底面積 3.48 ㎡）である。底面は階段を呈しており、深さは上段で 83 ㎝、下段で 151 ㎝である。低面は階段状を呈しており北側の底面の方が 70 ㎝前後高い。北壁の上部は崩壊しているが、断面形は、フラスコ形を呈しており、底面から内湾しながら立ち上がり上位でやや外反しているものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。高い方の底面は南側に傾斜している。低い方の底面は平坦である。堆積土は、上位がにぶい黄褐色～黄褐色砂質シルト、中位が浅黄色砂・明灰黄色砂質シルト、下位が主ににぶい黄褐色砂質シルト・暗灰黄色砂質シルトで構成されている。堆積土は浅皿状または三角状に堆積しており自然堆積の様相を呈している。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（3,229.7 ｇ）、石器

（7.1 g）が出土した。このうち土器９点（611～619）を掲載した。これらは不掲載土器も含め年代幅があり時期を限定できない。そのため出土土器の年代幅である縄文時代中期中葉から後葉（大木8b～９式併行）に位置づけた。（光井）

SK20（第２分冊第138図、第４分冊写真図版148）　南尾根の中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI6、SK30より新しい。形状はほぼ円形を呈している。規模は開口部で長軸150㎝、短軸135㎝、底部で長軸170㎝、短軸160㎝（底面積2.15㎡）である。深さは斜面上方で104㎝、下方で104㎝である。断面形は底面から内傾して立ち上がるフラスコ形を呈している。底面はⅤ層を掘り込んでつくられ、多少凹凸があるが平坦である。堆積土は、上位が明黄褐色～褐色砂質シルト、中位が黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルト、下位の８層が褐色粘土質シルトで占められている。上位の２・３層に径７～14㎝の礫が多く混じる。上位が自然堆積、中位・下位が人為的な堆積の様相を呈していると推定される。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（420.6 g）が出土している。このうち、土器２点（620・621）を掲載した。帰属時期は、特定する根拠があまりなく、出土土器の年代幅である縄文時代中期中葉から後葉（大木8a～９式併行）に位置づけた。（光井）

SK21（第２分冊第138図、第４分冊写真図版148）　南尾根の中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK19に南側を大きく切られていることからこの遺構より古い。平面形は、ほぼ円形を呈したと推定される。確認面での規模は開口部で径204㎝、底部で径185㎝（復元で底面積1.59㎡）、深さ77㎝である。開口部が大きく崩壊しているが、残りのいい北側壁面の観察から、断面形はほぼフラスコ形を呈していたと推定され、底面から緩く内傾する形で立ち上がるものである。Ⅴ層を掘り込んでつくられており、底面は壁際が上がる浅皿状を呈している。堆積土は、上半部が明黄褐色砂質シルト・浅黄色砂質シルト、下半部が主に黄橙色砂質シルトで占められている。柱穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（111.9 g）が少量出土しているが、図示した遺物はない。帰属時期は、文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）に位置づけた。（光井）

SK22（第２分冊第139図、第４分冊写真図版148）　南尾根東部に位置している。Ⅳ層上面で検出されている。他遺構との重複関係はない。北側の一部が攪乱を受け西側上部が崩壊しており、平面形はほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸178㎝、短軸136（推定）㎝、底部で長軸160㎝、短軸132㎝（底面積1.89㎡）、深さ92㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾しながら立ち上がり上部で真直ぐに立ち上がるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は平らで幾分南側に傾斜している。堆積土は、上位が灰黄色砂質シルト、中位がにぶい黄褐色～黄褐色砂質シルト、下位の上半が灰黄褐色砂質シルト、下半が暗灰黄褐色～黄褐色砂質シルトで構成されている。上位、中位が浅皿状、下位が三角状に堆積していることから、自然堆積の様相を呈していると推定される。２層から土器片が出土している。副穴等は検出されていない。遺物は、縄文土器（2,962 g）が出土している。このうち土器５点（622～626）を掲載した。このほか埋土上層出土の土器内土壌を対象に炭化種実同定、骨類同定を実施した。その結果、炭化種実については未検出、骨類については種類・部位ともに不明の焼骨片が微量検出されている。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木8b式併行）に位置づけた。（光井）

SK23（第２分冊第139図、第４分冊写真図版148）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK24を切ってつくられていることから、この遺構より新しい。検出面での平面形は、不整な楕円形を呈している。不整な形状をなしているのは重複している東側の部分が大幅に崩壊しているためと推定される。底部の形態からほぼ円形を呈していたものと考えられる。確認面での規模は開口部で長軸195㎝、短軸125㎝、底部で長軸150㎝、短軸137㎝（底面積1.66㎡）、深さ上方で180㎝、

下方で 95 ㎝である。西壁の断面から断面形はフラスコ形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がり中位で緩く内傾しているものと推定される。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土は、上位が明黄褐色～黄褐色砂質シルト、中位と下位が、その間に明黄褐色砂質シルトを挟んでいる褐色砂質シルトで構成されている。堆積の仕方が浅皿状または三角状に堆積しており、自然堆積の様相を呈している。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（120 ｇ）が出土しているが、図示できる遺物はない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）と想定する。（光井）

SK24（第２分冊第 139 図、第４分冊写真図版 148） 南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。西側を SK23 に切られ、SK25 を切っており、SK23 より古く、SK25 より新しい。平面形はほぼ円形を呈していると推定される。確認面での規模は開口部で長軸 222 ㎝、短軸 200 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 185 ㎝（復元で底面積 2.96 ㎡）、最深で 86 ㎝である。断面形は底面から幾分ゆるく外傾しながら立ち上がるのもので、ビーカー形を呈しているものと推定される。底部はⅤ層まで掘り込んでつくられている。底面はややゆるい凹凸があり、幾分西側に傾斜している。堆積土は、主に明黄褐色～黄褐色砂質シルトで占められ、中位に暗褐色シルトを挟んでいる。堆積の仕方が浅皿状または三角状に堆積していることから自然堆積の様相を呈している。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（60 ｇ）が出土しているが、図示可能な遺物はない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（光井）

SK25（第２分冊第 139 図、第４分冊写真図版 149） 南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK24 に西側を切られていることから、SI24 より古い。平面形は溝状の楕円形を呈しているものと推定される。確認面での規模は長軸 60 ㎝（残存部）、短軸 39 ㎝、深さ 15 ㎝である（残存の底面積 0.12 ㎡）。断面形は「U」字状を呈するものである。Ⅴ層まで掘り込んでつくられている。底面はやや凹凸があるが平坦である。堆積土は、黄褐色砂質シルトの単層で占められている。最下部にマサ土がラミナ状に堆積している。自然堆積の様相を呈している。副穴などは検出されていない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉以前（大木 8a～8b 式併行以前）を想定する。（光井）

SK26（第２分冊第 139 図、第４分冊写真図版 149・150） 南尾根の南東側のゆるい南斜面に位置している。他遺構との重複はない。斜面下方側が大きく削平を受けて僅かに残存しているものであるが、平面形はほぼ円形を呈したものと推定される。確認面での規模は径 102 ㎝、深さ 27 ㎝である（復元で底面積 0.72 ㎡）。断面形はフラスコ形を呈したものと推定され、底面から内傾するものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられ、底面は平坦である。堆積土は、黄褐色砂質シルトの単層で占められている。副穴などは検出されていない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（光井）

SK27（第２分冊第 139 図、第４分冊写真図版 149） 南尾根の中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK36 を切っており、この遺構より新しい。平面形は、南側が不整な円形を呈している。南壁が崩壊しており、元々はほぼ円形を呈していたものと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 152 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 206 ㎝、短軸 188 ㎝（底面積 2.93 ㎡）、深さ 76～80 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈している。底面から内傾しながら立ち上がり中位で外反するものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面はやや凹凸があり壁際が上がる浅皿状を呈している。堆積土は、上位が明黄褐色～黄褐色砂質シルト、中位が褐色～暗褐色シルト、下位が主に黄褐色砂質シルトで構成されている。堆積の仕方が三角状に堆積しており、自然堆積の様相を呈している。副穴な

どは検出されていない。遺物は、縄文土器（1,831.4 ｇ）が出土している。このうち土器３点（627～629）を掲載した。ほとんどが地文だけの破片であり図化したものはない。帰属時期は、文様が判明する破片から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）と想定しておく。（光井）

SK28（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 149） 南尾根の調査区際に位置している。Ⅳ層上面で黒褐色の半長楕円のプランとして検出した。SK9 と重複しており、本遺構が新期にあたる。調査区外へ跨がっているため、調査時点での平面形は半長楕円となっている。開口部の規模は長軸 110 ㎝、短軸 25 ㎝である。底面の規模は長軸 80 ㎝、短軸 20 ㎝（残存で底面積 0.09 ㎡）で、確認面から底面までの深さは 30 ㎝である。断面は皿形で、底面が緩やかに盛り上がっている。南壁は底面から外傾しながら立ち上がり、上部でほぼ垂直になる。堆積土は、黒褐色シルトの単層である。遺物は、縄文土器（７ｇ）がわずかに出土するのみで、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半以降（大木 8b 式併行以降）と想定される。（中島）

SK29（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 150） 南尾根東端に位置している。東側の一部は調査区域内に延びている。検出面はⅣ層上面である。SI3・SK34 を切っていることから SI3・SK34 のいずれよりも新しい。平面形は、ほぼ円形を呈しているものと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 129、短軸 121 ㎝、底部で長軸 129 ㎝、短軸 121 ㎝（復元で底面積 1.27 ㎡）、深さ 150 ㎝である。断面形は、フラスコ形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がり内傾していき上位で外反しているものである。底部はⅤ層まで掘り込んでつくられている。底面は凹凸が大きく平坦でなく北側にやや傾斜している。堆積土は、上位が暗褐色砂質シルト、中位が暗褐色砂質シルトを挟んで上部に黄褐色砂質シルト、下部ににぶい黄橙色砂質シルト、下位がにぶい黄褐色砂質シルト、にぶい黄橙色砂質シルトで構成されている。２・４・６層には葉理状の堆積がみられ、上位・中位が自然堆積の様相を呈していると推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉から後葉以降（大木 8b～９式併行以降）と想定する。（光井）

SK30（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 150） 南尾根中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK20 に切られており、この遺構より古い。平面形は、不整な楕円形であると推定される。確認面での規模は長軸 65 ㎝、短軸 30 ㎝（残存部）、深さ 15 ㎝である。底部はすぼまる形態をしており、底部径が 15 ㎝である（復元で底面積 0.02 ㎡）。断面形はＵ字形を呈している。底部はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり窄まっている。堆積土は上部がにぶい黄褐色シルト、下部が褐色砂質シルトで構成されている。ここでは別遺構と捉えたが、SI6 の床面上にあるため、この竪穴建物跡に伴うピット（小穴）あるいは土坑の可能性がある。遺物は、縄文土器（40 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、年代幅が広いものの縄文時代中期中葉前半から後葉（大木 8a～９式併行）を想定する。（光井）

SK31（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 150） 南尾根中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI1 に北側を切られており、この遺構より古い。平面形状は不整な円形を呈していたと推定される。規模は径 56 ㎝、深さ 16 ㎝である（底面積 0.02 ㎡）。断面形は、「Ｕ」字状を呈するものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり、南側に傾斜している。堆積土は、主ににぶい黄褐色砂質シルトで占められ、壁際に褐色砂質シルトが三角状に堆積している。ここでは別遺構と捉えたが、SI6 の床面上にあるため、この竪穴建物跡に伴うピット（小穴）あるいは土坑の可能性がある。遺物は、縄文土器（20 ｇ）が出土しているが図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期末葉以前（大木 10 式併行以前）と想定せざるを得ない。（光井）

SK32（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 150） 南尾根中央部に位置している。検出面はⅣ層上

面である。他遺構との重複関係はない。平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は長軸 51 ㎝、短軸 45 ㎝、深さ 54 ㎝である（底面積 0.03 ㎡）。断面形は、U字形を呈している。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底部が窄まる形態で、底面は平らである。堆積土は、主ににぶい黄褐色砂質シルトで占められ、壁際に褐色砂質シルトが堆積している。ここでは別遺構と捉えたが、SI6 の床面上にあるため、この竪穴建物跡に伴うピット（小穴）あるいは土坑の可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（光井）

SK33（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 151）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI04 の推定範囲と重複しているが、先後関係は不明である。平面形は、円形を呈し底部が東側によっているものである。規模は長軸 64 ㎝、短軸 55 ㎝、深さ 41 ㎝である（底面積 0.21 ㎡）。断面形は、「U」字状を呈している。東側に寄る底面は凹凸があり浅皿形をなしている。堆積土は、上部が褐色砂質シルト、下部がにぶい黄褐色シルトで占められている。この土坑は、SI4 の推定範囲内にあることから、SI4 に伴う附属遺構の可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（光井）

SK34（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 150）　南尾根東端に位置している。東側半分は調査区外にある。検出面はⅣ層上面である。北側を SK29 に切られておりこの遺構より古い。平面形はほぼ円形を呈していたと推定される。残存している開口部の規模は径 80 ㎝であるが、径 95 ㎝程度だったと推定される。現存する底部は径 110 ㎝である（残存で底面積 0.23 ㎡）。深さは確認面から 34 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がるものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり幾分北側に傾斜している。堆積土は、おもに黄褐色シルトのブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルトで占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉以降（大木 8b～９式併行以降）に位置づけた。（光井）

SK35（第２分冊第 140 図、第４分冊写真図版 151）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。北側で SI7、SK24 と、南側で SK12、SK44 とで重複しており、切り合い関係から SI7、SK12、SK24 より古く、SK44 より新しい。また、SK12 側に SK9 と同様の貼石が確認されたが、裏込めの状況から SK12 に伴うものと想定でき、したがって、本遺構の方が古いことがわかる。平面形は、ほぼ円形を呈していたと推定される。規模は、長軸 171 ㎝、短軸 165 ㎝、確認面からの深さ 42 ㎝である（復元で底面積 1.97 ㎡）。断面形はビーカー形を呈し、底面からゆるく外反しているものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は幾分凹凸があるが平坦である。堆積土はおもににぶい黄橙色シルトで占められ、壁際に最大径 20 ㎝の礫を含む褐色シルトが堆積している。遺物は、縄文土器（140 ｇ）が、わずかに出土しているが、すべて地文だけの破片であるため図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構が年代幅の広い時期を想定するため、本遺構の時期も同様に想定せざるを得ない。したがって、縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a～９式併行）に位置づけた。（光井）

SK36（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 151）　南尾根東部にしている。検出面はⅣ層上面である。SK13 の上部すべてを切り、SK27 に北側を切られていることから、本遺構は SK13 より新しく、SK27 より古い。平面形は、不整な楕円形を呈している。確認面での規模は長軸 387 ㎝、短軸 192 ㎝、深さ 23 ㎝である（復元で底面積 4.7 ㎡）。断面形は、壁がやや外反する皿形を呈している。底面は凹凸があり SK13 と重複する部分が窪む浅皿状を呈している。堆積土は、主に浅黄色砂質シルトで占められている。最下部中央、SK13 と重複する部分ににぶい黄色粘土質シルトが層厚３～５㎝で堆積している。遺物は、縄文土器（372.6 ｇ）、石器（201.6 ｇ）が出土している。このうち土器１点（630）、石器１点（2140）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位

置づけた。（光井）

SK37（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 151）　南尾根の中央部に位置している。検出面はⅣ層上面である。他の遺構との重複関係はない。平面形は、不整な円形である。規模は長軸 43 ㎝、短軸 32 ㎝（底面積 0.03 ㎡）、深さ 22 ㎝である。断面形は、「Ｕ」字状を呈している。Ｖ層を掘り込んでつくられている。底部は浅皿状を呈し窄んでいる。堆積土は黄褐色シルト単層で占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複もないことから不明とする。（光井）

SK38 ４節へ

SK39（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 151）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI3 を切っており、この遺構より新しい。平面形は、やや南北に長い隅丸方形を呈している。確認面での規模は長軸 49 ㎝、短軸 39 ㎝、深さ 22 ㎝である（底面積 0.10 ㎡）。断面形は皿形を呈し底面からほぼ真直ぐに立ち上がるものである。底面は凹凸がなく平らであるが、南側に傾斜している。堆積土は、上半部が明黄褐色砂のブロックを含む黒褐色シルト、下半部が黒褐色シルトのブロックをふくむ明黄褐色砂質シルトで構成されている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉以降（大木 8b ～９式併行以降）と想定した。（光井）

SK40（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 153）　南尾根より南東側の急な南斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK42 を切っておりこの遺構より新しい。平面形はほぼ円形を呈している。確認面での規模は開口部で長軸 164、短軸 152 ㎝、底部で長軸 170 ㎝、短軸 157 ㎝（底面積 2.24 ㎡）、深さ上方で 115 ㎝、下方で 27 ㎝である。断面形は、フラスコ形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がり上部で外傾しているものである。底部はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。堆積土は、上半部が中位に明黄褐色シルトを挟む褐色砂質シルト、下半部が黄褐色砂質シルトと褐色シルトの互層で構成されている。３・５層から径 30 ㎝、４層から径 10 ～ 20 ㎝の礫が含まれている。上半部のうち１・２層は自然堆積の様相、３層以下は人為的な堆積の様相を呈している。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土がなく、年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK41（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 153）　南尾根西部の南斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。西側を SK40・SK42 に切られていることから、これらの遺構より古い。平面形は、ほぼ円形を呈している。確認面での規模は開口部で長軸 230 ㎝、短軸 190 ㎝（現存部）、底部で長軸 230 ㎝、短軸 215 ㎝（底面積 3.99 ㎡）、深さ上方 102 ㎝、下方 45 ㎝である。断面形は、フラスコ形を呈し、底面から真直ぐに立ち上がった後、内傾し途中から外傾していくものである。底部はＶ層まで掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるが平坦である。堆積土は、最上位が褐色シルト、中位が黄橙色砂質シルト、最下位に灰黄褐色シルトで占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土がなく、年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK42（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 153）　南尾根より南東側の南斜面に位置している。検出面は、Ⅳ層上面である。SK41 を切り、SK40 に南側を切られていることから、SK41 より新しく SK40 より古い。平面形は、ほぼ円形を呈したと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 108 ㎝、短軸 99 ㎝、底部で長軸 116 ㎝、短軸 105 ㎝（復元で底面積 0.91 ㎡）、深さ上方で 86 ㎝、下方で 41 ㎝である。断面形は、西壁の断面観察から、フラスコ形を呈し、底面から内傾しながら立ち上がり、途中から幾分外反していくものである。底部はＶ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり幾分東側に傾斜している。堆積土は、上位が最上位に黒褐色シルトをのせ主に褐灰色シルト、中位が明黄褐色砂質シルト、下位が灰黄褐色シルトで構成されている。５層下部に径 20 ㎝の礫が堆積している。

遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土がなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK43（第２分冊第 142 図、第４分冊写真図版 153）　南尾根西部の南斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形は、開口部の崩壊が大きいが、底面の形状や残存壁からほぼ円形を呈したものと推定される。確認面での規模は開口部で径 156 ㎝（推定）、底部で径 186 ㎝（復元で底面積 2.74 ㎡）、深さ 68 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈している。底面より内傾して立ち上がっていくものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は壁際がやや深くなるところがあるが全体として平坦である。堆積土は、上位が最上位に褐色砂質シルトをのせた暗褐色シルト、中位が褐色シルト、下位が主に暗褐色シルト、暗褐色砂質シルトで構成されている。５層より縄文土器片が出土している。遺物は、縄文土器（611.6 ｇ）が出土している。このうち土器１点（631）を掲載した。帰属時期は、出土土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（光井）

SK44（第２分冊第 142 図、第４分冊写真図版 153）　南尾根西部に位置している。検出面はⅣ層上面である。東側を SK12、SK35 に切られており、これらの遺構より古い。平面形はほぼ円形を呈したと推定される。確認面での規模は径 63 ㎝、深さ北壁で 40 ㎝、南壁で 20 ㎝である（復元で底面積 0.24 ㎡）。断面形は皿形を呈している。Ⅴ層を掘り込んでつくられている。底面は北側の壁際が一部深くなるがほぼ平坦である。堆積土は、黄褐色砂質シルトで占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する２遺構とも年代幅が広いこともあり、本遺構の時期もあまり限定できないが、重複がもっとも古いこともあり土器群の年代幅の中でも相対的に古いであろう。したがって、遺構の帰属時期は、重複遺構と同様に縄文時代中葉前半から後葉（大木 8a ～９式併行）の間にあるものの、そのうち相対的に古い時期に含まれると想定する。（光井）

SK45（第２分冊第 136 図、第４分冊写真図版 144）　南尾根東部に位置している。Ⅳ層上面と SK10 のプランとの間で褐色の三日月形のプランとして検出した。SK10 と重複しており、本遺構が旧期にあたる。平面形は SK10 との重複のため正確な形状は残っていない。残存する開口部の径は長軸 110 ㎝、短軸 40 ㎝、底面は長軸 75 ㎝、短軸 40 ㎝で、確認面から底面までの深さは 40 ㎝である（残存で底面積 0.07 ㎡）。推定される平面形は南東から北西を長軸とした楕円形で、開口部は短軸 80 ㎝、長軸 110 ㎝、底面の径は短軸 45 ㎝、長軸 80 ㎝と考えられる。断面形は底面中央が少し盛り上がった形状である。断面で確認できる北壁は底面から緩やかに内反しながら立ち上がり、中位から僅かに外傾する。堆積土は明黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半から後半以前（大木 8a ～ 8b 式併行以前）を想定する。（中島）

SK46（第２分冊第 142 図、第４分冊写真図版 154）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。他遺構との重複関係はない。平面形は不整な円形を呈している。特に開口部東側半分が崩壊していると推定され、ほぼ円形を呈していたものと考えられる。確認面での規模は、開口部で長軸 137 ㎝、短軸 120 ㎝、底部で長軸 140 ㎝、短軸 120 ㎝（底面積 1.39 ㎡）、深さ上方で 110 ㎝。下方で 96 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し底面から外反気味に立ち上がり袋状に広がり、上部で真直ぐに立ち上がるものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は幾分凹凸があるが平坦である。堆積土は、上位の上半が褐色砂質シルト、下半が三角状に堆積している黄褐色砂質シルト、中位が炭化物を多く含む褐色シルトと黄褐色シルト、褐色砂質シルトと明黄褐色シルトである。上位１・２層中には、ラミナ状の堆積がみられる。全体的に自然堆積の様相を呈していると推定される。遺物は、縄文土器（245.9 ｇ）が出土しているが、図示した遺物はない。帰属時期は、文様が判別で

きる土器片から縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a ～ 9 式併行）に位置づけた。（光井）

SK47（第 2 分冊第 142 図、第 4 分冊写真図版 154）　南尾根東端に位置している。検出面は表土から 20 ㎝掘り下げたⅣ層上面である。他遺構との重複関係はない。東側半分は調査区域外に延びている。平面形はほぼ円形を呈しているものと推定される。確認面での規模は開口部で径 130 ㎝、底部で径 176 ㎝（復元で底面積 2.60 ㎡）、深さが上方で 63 ㎝、下方で 43 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がるものである。底部はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は平坦である。堆積土は、上位が暗褐色～褐色砂質シルト、中位が黄褐色シルト、下位が褐色砂質シルトで構成されている。中位の 4 ・ 5 層には、ラミナ状の堆積がみられる。遺物は、縄文土器（218.2 ｇ）が出土している。このうち土器 1 点（632）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（光井）

SK48（第 2 分冊第 143 図、第 4 分冊写真図版 154）　南尾根西部の南斜面に位置している。検出面はⅣ層上面である。SK49 の上部を切っていることより、この遺構より新しい。開口部が大きく削平または崩壊しているが、確認面での平面形は不整な楕円形を呈している。規模は開口部で長軸 271 ㎝、短軸 156 ㎝、底部で長軸 295 ㎝、短軸 136 ㎝（底面積 3.37 ㎡）、深さ上方で 96 ㎝、下方で 36 ㎝である。断面形はほぼ原形を保つ西壁からフラスコ形を呈していたと推定される。底面から内湾しながら立ち上がり外傾していくものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり、SK49 と重複する東側の部分は斜めに傾斜している。堆積土は、上位が最上位に褐色砂質シルトをのせる黄褐色砂質シルト、中位褐色砂質シルト、下位が明黄褐色砂質シルトで構成されている。 3 層～ 5 層には径 10 ～ 20 ㎝の角礫が含まれている。遺物は、SK49 と合わせて土器（136.7 ｇ）が出土している。このうち土器 1 点（633）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b ～ 9 式併行）に位置づけた。SK48・49 には重複があるが、この年代の幅の中に含まれる。（光井）

SK49（第 2 分冊第 143 図、第 4 分冊写真図版 154）　南尾根西部の南斜面に位置している。検出面はⅤ層上面である。南側上部を SK48 に切られ、この遺構より古い。SK43 との重複は不明である（接する）。平面形は不整な円形を呈しているが、底面形などからほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 191 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長軸 205 ㎝、短軸 190 ㎝（底面積 3.40 ㎡）、深さ 79 ㎝である。残存が良好な北壁から断面形はフラスコ形を呈し底面から内湾ないし外傾して立ち上がっていくものと推定される。断面でとった西壁は崩壊してしまったものである。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面は平坦である。堆積土は、主に上半部が黄褐色砂質シルト、下半部が明黄褐色砂質シルトで構成され、壁際に褐色砂質シルトが堆積している。遺物は、SK48 と一括で取り上げたものがあり、上述のとおりである。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b ～ 9 式併行）に位置づけた。SK48・49 には重複があるが、この年代の幅の中に含まれる。（光井）

SK50（第 2 分冊第 143 図、第 4 分冊写真図版 154）　南尾根東部に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形は隅丸長方形を呈している。確認面での規模は長軸 94 ㎝、短軸 64 ㎝、深さ 21 ㎝である（底面積 0.31 ㎡）。断面形は「U」字形を呈している。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は浅皿状を呈し幾分凹凸がある。堆積土はおもに暗褐色シルトで占められている。遺物は、縄文土器（10 ｇ）がわずか出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK51（第 2 分冊第 143 図、第 4 分冊写真図版 155）　南尾根東端に位置している。検出面はⅣ層上面

である。SI3 を切っておりこの遺構より新しい。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。規模は長軸 88 ㎝、短軸 50 ㎝、深さ６㎝である（底面積 0.27 ㎡）。断面形は浅皿形を呈している。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面はゆるい凹凸がある。堆積土は暗褐色シルトで占められている。本遺構と類似するものに SK50 がある。規模も方位も一致している。調査区際で検出されているため、調査区外に関連する遺構が延びている可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半から後葉以降（大木 8b ～９式併行以降）に位置づけた。（光井）

SK52（第２分冊第 143 図、第４分冊写真図版 155）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI18 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈している。規模は径 44 ㎝、深さ７㎝である（底面積 0.08 ㎡）。断面形は浅皿形を呈している。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は幾分凹凸がある。堆積土は、褐色砂質シルトのブロック（径３㎝大）を含む暗褐色砂質シルトで占められている。本来は、付近の竪穴建物に付属する可能性があるが、削平やその位置などから、所属が不明のため単独の遺構としたものである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）に位置づけた。（光井）

SK53（第２分冊第 143 図、第４分冊写真図版 155）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈している。規模は長軸 96 ㎝、短軸 80 ㎝、深さは上方で 66 ㎝、下方で 30 ㎝である（底面積 0.35 ㎡）。断面形は皿形を呈し、底面よりやや外傾しながら立ち上がるものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は凹凸があるが、ほぼ平坦である。堆積土は、上・中位がおもに黒褐色砂質シルト、下位が褐色～暗褐色砂質シルトで構成されている。遺物は、縄文土器がわずか 20 ｇ出土するに過ぎない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK54（第２分冊第 143 図、第４分冊写真図版 155）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形はやや南北が長い円形を呈している。規模は長軸 79 ㎝、短軸 57 ㎝、深さは上方で 31 ㎝、下方で５㎝である（底面積 0.24 ㎡）。断面形は皿形を呈し底面から真直ぐに立ち上がるものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面は平坦である。堆積土は、おもに褐色砂質シルトのブロックを含む黒色砂質シルトで占められている。遺物は、縄文土器（20 ｇ）がわずか出土するに過ぎない。図示した土器もない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK55（第２分冊第 144 図、第４分冊写真図版 155 図）　北尾根の南斜面下位の包含層２より西側に位置している。Ⅳ層上面と SI17 のプランとの間で黒褐色の小判形のプランとして検出した。SI17 と重複しており、本遺構が新規にあたる。平面形は南北を長軸とした小判形である。開口部の径は長軸 97 ㎝、短軸 60 ㎝、底面は長軸 120 ㎝、短軸 65 ㎝、（底面積 0.48 ㎡）で、確認面から底面までの深さは 45 ㎝である。底面は浅皿形である。断面で確認できる西壁は、底面から内反しながら立ち上がり、すぐに内傾する。西壁の開口部と底面との間には 20 ㎝のオーバーハングがある。堆積土は、黒褐色シルトを主体とした６層で構成される。遺物は、縄文土器（720.6 ｇ）が出土している。このうち縄文土器３点（634～636）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（中島）

SK56（第２分冊第 144 図、第４分冊写真図版 156）　南尾根の中央部に位置している。褐色～暗褐色の略円形のプランで検出した。SI2 の複式炉と SK76 と重複し、本遺構は SI02 の複式炉より旧期で、SK76 より新期にあたる。平面形は略円形である。開口部の径は、長軸 190 ㎝、短軸 180 ㎝である。底面は、SK76 との重複のため、西壁下の残存箇所と層境からの推定で、直径 170 ㎝の円形である（底

面積 2.35 ㎡)。確認面から底面まで、深いところで 55 ㎝である。断面は皿形で、底面は東から西に向かって下がる。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から外反する。堆積土は、褐色砂質シルト主体の８層で構成される。三角堆積が多いことからビーカー形の土坑と考えられる。SI2 の複式炉の燃焼部直下にあたる２・３層の一部が赤色変化している。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（中島）

SK57（第２分冊第 144 図、第４分冊写真図版 156）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形は、東西に長い不整な楕円形を呈している。規模は長軸 150 ㎝、短軸 87 ㎝、深さ上方で 51 ㎝、下方で 10 ㎝である（底面積㎡ 1.29)。断面形は中央が膨らむ皿形を呈し底面から内湾しながら立ち上がるものである。Ⅳ層まで掘り込んでつくられている。底面は中央が高い上げ底をなしている。堆積土は、上位が黒褐色シルトのブロックを含む褐色砂質シルト、中位が黄褐色砂質シルトのブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位が黄褐色砂質シルトのブロックを含む褐色砂質シルトで構成されている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK58（第２分冊第 144 図、第４分冊写真図版 156 図）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複は、SI18 を切っており、この遺構より新しい。平面形は不整な円形を呈している。規模は長軸 80 ㎝、短軸 71 ㎝、深さ上方 22 ㎝、下方 12 ㎝である（底面積 0.19 ㎡)。断面形は浅皿状を呈し底面から丸味をもちながら立ち上がり外反するものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面はやや凹凸がある。堆積土は、炭化物・褐色砂質シルトのブロックを含む黒褐色砂質シルトで占められている。遺物は、縄文土器（218.8 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）に位置づけた。（光井）

SK59（第２分冊第 145 図、第４分冊写真図版 156）　北尾根の南斜面下位に位置している。検出面はⅣ層上面である。他遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈している。規模は、長軸 130 ㎝、短軸 102 ㎝、深さ斜面上方で 51 ㎝、斜面下方で 10 ㎝である（底面積 0.76 ㎡)。断面形は中央が膨らむ皿形を呈し、底面から内湾しながら立ち上がるものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面はほぼ平坦である。また、底面中央に径 16 ㎝、深さ６㎝の規模の円形の形状を呈する副穴が検出されている。堆積土はおもに雲母が多く含むにぶい黄褐色砂質シルトで占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK60（第２分冊第 145 図、第４分冊写真図版 157）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出は、包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行った。他遺構との重複はないが、隣接して SK66、67 などがある。また、北側の一部が調査区外へつづく。平面形は、楕円形を呈し、規模は、開口部では長軸 130 ㎝、短軸 110 ㎝、深さ 170 ㎝である。底面では、おおよそ径 110 ㎝である（底面積 1.05 ㎡)。断面形は、途中で屈曲するビーカー形を呈する。とくに西側が開口部よりも奥に広がっている。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に区分でき、３層の黒褐色シルト層を挟んで、上層は（１・２層）はにぶい黄橙色砂質シルト、下層はにぶい黄色や灰黄褐色を呈する砂質シルトや砂など黄色系土層が堆積する。また、３層は貝層であり、獣骨や炭化物、土器片などを混在させている。廃棄層と捉えられよう。遺物は、縄文土器（7,453 ｇ)、石器（1,504 ｇ)、骨角器（1.6 ｇ）が出土している。このうち土器３点（637～639)、石器１点（2280)、骨角器２点（2558・2559）を掲載した。このほか３層（貝層）中の炭化種実同定、骨類同定を実施した。その結果、炭化種実についてはオニグルミの核が３点確認されている。骨・貝類については最も多量の試料が出土しており、中には被熱を受けているものも少量含まれる（詳細は第Ⅵ章参照)。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式

併行）に位置づけた。（西澤）

SK61（第２分冊第 145 図、第４分冊写真図版 158）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出面はⅤ層上面である。重複する遺構はない。急斜面上につくられ、斜面下方にあたる南側は削平されている。平面形はほぼ円形を呈していたと推定される。確認面での規模は開口部で長軸 135 ㎝、短軸 107 ㎝、底部で長軸 135 ㎝、短軸 130 ㎝（底面積 1.31 ㎡）、深さ上方で 157 ㎝、下方で 106 ㎝である。断面形は保存状況の良い東壁からフラスコ形を呈したものと推定される。底面から丸味をもって内傾しながら立ちあがっていくものである。底面は壁際が幾分上がるがほぼ平坦である。堆積土は、主に上半部がにぶい黄褐色砂質シルト、下半部の上部が灰黄褐色砂質シルト、下部が暗灰黄褐色砂質シルトで構成されている。特に上半部にⅤ層（マサ土）の再堆積層がみられる。６～８層から縄文土器片が出土している。７層から貝殻が検出されている。遺物は、縄文土器（1,610.2 ｇ）が出土している。このうち土器３点（640～642）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）とする。（光井）

SK62（第２分冊第 145 図、第４分冊写真図版 158）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK77 と重複しており、これより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 183 ㎝、短軸 169 ㎝、底部で長軸 122 ㎝、短軸 106 ㎝（底面積 1.04 ㎡）、深さは最深部で 186 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がり開口部に至る。底面はほぼ平坦で、南西側がやや低い浅皿状に掘り込まれる。堆積土は、８層で構成される。上位は風化花崗岩粒を微量に含むにぶい黄褐色砂質シルト、中位は炭化物を少量含むにぶい黄色～黄褐色砂質シルト、下位は多量の風化花崗岩粒を含むオリーブ褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（3,870.7 ｇ）が出土している。このうち土器１点（643）を掲載した。帰属時期は、出土土器の割合から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK63（第２分冊第 146 図、第４分冊写真図版 158）　調査区北側、南斜面下位の東端に位置している。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。南側が一部削平されているが、平面形は楕円形を呈したと推定される。規模は長軸 167 ㎝、短軸 78 ㎝、最深の上方で 36 ㎝である（底面積 0.46 ㎡）。断面形は皿形を呈して底面からほぼ真直ぐに立ち上がるものである。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。底面はやや緩やかな凹凸がありほぼ平坦である。堆積土は、斜面上方側が黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルト、下方側が褐色～暗褐色砂質シルトで占められている。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（光井）

SK64（第２分冊第 146 図、第４分冊写真図版 158）　北尾根の南側斜面下位東端に位置している。検出面はⅣ層上面である。SI27 に上部を切られており、この遺構より古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 112 ㎝、短軸〈94〉㎝、底部で長軸 98 ㎝、短軸〈92〉（残存で底面積 0.72 ㎡）、深さは最深部で 33 ㎝である。開口部・底部の短軸は残存値である。底面中央部から長軸 33 ㎝、短軸 24 ㎝、深さ 22 ㎝の副穴が１基確認されている。断面形はビーカー形で、底面から僅かに外傾して立ち上がる。南側は斜面の流出の為、残存しない。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で構成される。第１層はにぶい黄褐色シルトと褐色シルトが葉理状に堆積する。第２層には壁面崩落層とみられる風化花崗由来のにぶい黄褐色砂が堆積する。第３層は副穴堆積土である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半以前（大木 8b 式併行以前）と想定する。（丸山）

SK65（第２分冊第 146 図、第４分冊写真図版 159 図）　北尾根の南斜面下位東端に位置している。東側半分は調査区域外に延びている。検出面はⅣ層上面である。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈していると推定される。確認面での規模は開口部で径 180 ㎝、底部で径 202 ㎝（復元で底面積

2.96 ㎡）、深さは上方で 240 ㎝、下方で 122 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈していて底面から鈍い角度で内傾しながら立ち上がる。底部はⅤ層を掘り込んでつくられている。底面はゆるい凹凸があるが平坦である。堆積土は、上位が最上位ににぶい黄褐色砂質シルトをのせる褐色～暗褐色砂質シルト、中・下位がその間に褐色砂質シルトを挟むにぶい黄褐色砂質シルトで占められている。上・下位は「U」字状または三角状に堆積していることから自然堆積の様相を呈していると推定される。遺物は、縄文土器（144.6 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（光井）

SK66（第２分冊第 146 図、第４分冊写真図版 159）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK78 と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は、円形を呈している。規模は、開口部径 104 ㎝、底面で長軸 120 ㎝、短軸 100 ㎝（底面積 0.92 ㎡）、深さ 120 ㎝である。底面は楕円形状を呈し、開口部よりも北側に偏っている。断面形は、北西側に屈曲するが、概ねビーカー形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は上層（１～３層）と下層（４・５層）に大別できる。いずれも黄色系の色調を呈する砂質シルトで、３層を除き、風化花崗岩粒層が帯状にいくつも含まれることから自然堆積の可能性がある。３層は壁面の崩落土と考えられる。遺物は、縄文土器（733.9 ｇ）が出土している。このうち土器２点（644・645）を掲載した。帰属時期は、出土の土器から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）とする。（西澤）

SK67（第２分冊第 147 図、第４分冊写真図版 159）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK205 と上下で重複しており、本遺構の方が古い。平面形は、楕円形を呈しており、開口部で長軸 134 ㎝、短軸 120 ㎝、底面で長軸 177 ㎝、短軸 159 ㎝の規模である（底面積 2.02 ㎡）。深さは、SK67 単独では 98 ㎝であるが、重複する遺構を含めた検出面からの深さは 152 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、開口部の規模の方が底面よりも小さい。底面はほぼ平坦であるが、西側の方が若干高い。堆積土は上層（２層）と下層（３・４層）に大別でき、上層が褐灰色を呈するシルト層で、風化花崗岩ブロックを含んでいる。下層は暗灰黄色～黄灰色を呈する砂質シルトで、２層には薄いシルト層を互層に含んでいる。これらのことから、上層は人為堆積の、下層は自然堆積の可能性がある。遺物は、縄文土器（4,432 ｇ）、石器（954.8 ｇ）、骨角器（0.8 ｇ）が出土している。このうち土器４点（646～649）、石器１点（2364）、骨角器２点（2660・2561）を掲載した。このほか堆積土中の炭化種実同定、骨・貝類同定を実施している。その結果、炭化種実については堅果類（オニグルミ・クリ・トチノキ）が 77 点確認された。骨・貝類については貝類・魚類・鳥類をはじめとする試料が多量に出土している（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複遺構と出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（西澤）

SK68（第２分冊第 147 図、第４分冊写真図版 159）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK61 と空間的に重複しているが、開口部で切り合いがないため、先後関係は不明である。底面の高さは、SK61 よりも深い位置にある。平面形は楕円形状を呈するが、東側の一部が崩落により広がっている。開口部の規模は、長軸 122 ㎝、短軸 88 ㎝であり、深さは 140 ㎝である。底面での規模は 150×136 ㎝である（底面積 1.58 ㎡）。断面形は、いわゆるフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は、上層（１・２層）・中層（３～５層）・下層（６・７層）に大別できる。上層は明黄褐色や浅黄色の砂質シルトや砂で、中層はにぶい黄橙色や黄褐色、灰黄褐色を呈する砂質シルト、下層は褐色から褐灰色を呈するシルトや砂質シルトである。いずれの層も葉理状に風化花崗岩粒やシルト層を帯状に含んでいることから自然堆積と考えられる。また、５層のブロック土は壁面の崩落によるものと判断した。遺物は、縄文土器（4,889.1 ｇ）、石

器（362.3 ｇ）が出土している。このうち土器３点（650～652）を掲載した。帰属時期は、出土土器の割合の高さから、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（西澤）

SK69（第２分冊第 147 図、第４分冊写真図版 160）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SI52 と上下に重複しており、上部に SI52 が位置することから、本遺構の方が古い。平面形はいびつな楕円形を呈し、規模は、開口部で長軸 153 ㎝、短軸 120 ㎝、底面で長軸 166 ㎝、短軸 136 ㎝であり、深さは 170 ㎝である。断面形はおおむねフラスコ形を呈する。底面は、ほぼ平坦であるがやや凹凸がある。堆積土は上層（１～４層）と下層（５～７層）に大別できる。上層では、にぶい黄橙～黄褐色砂質シルト層と灰黄褐色砂質シルト層が交互に堆積する。下層では、褐灰色から灰黄褐色を呈する砂質シルトやシルト層が主体であり、風化花崗岩粒を帯状に含む。これらのことからいずれも自然堆積と考えられる。遺物は、縄文土器（1,401.4 ｇ）が出土している。このうち土器１点（653）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（西澤）

SK70（第２分冊第 147 図、第４分冊写真図版 161）　北尾根南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北半部は調査区域外にかかり、未調査である。重複する遺構には、SK200・201 があるが、いずれの遺構よりも古いと判断した。しかし、高低差のある重複であり、断面で確認したわけではないため正確ではないかもしれない。推定される開口部の元の平面形は略円形である。規模は開口部径 175 ㎝、底部径 153 ㎝（復元で底面積 1.74 ㎡）、深さは最深部で 110 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部が微かに窪む。堆積土は６層に細分される。上位は褐色シルト、中位は黒褐色シルト、下位は暗褐色シルト主体で構成される。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土はなく、時期は不明とせざるを得ない。（丸山）

SK71（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 160）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SI45 と重複しているが、残存部が少なく先後関係を判断できない。平面形は、楕円形を呈しているが、南半部は斜面下に崩落し欠損している。規模は、残存で長軸 126 ㎝、短軸 82 ㎝（残存で底面積 0.55 ㎡）、深さは斜面側で最大 54 ㎝である。断面形は、南半部の崩落も合わせて復元すると、ビーカー形を呈する可能性がある。堆積土は、３層のみ残存し、黄灰色と浅黄色の砂質シルトが交互に堆積する。残存状況が少なく、自然堆積か否かは判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、包含層４の下位にあることから縄文時代中期中葉後半から後葉以前（大木 8b～９式古段階併行以前）に位置づけた。（西澤）

SK72（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 162）　北尾根の南斜面下位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構には、SI29・30・94 があり、SI29 よりは古く、その他より新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 161 ㎝、短軸 155 ㎝、底部で長軸 207 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 2.70 ㎡）、深さは最深部で 215 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から直立気味に立ち上がり、中位でやや内傾したのち開口部付近で大きく開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は 10 層で構成される。上位はにぶい黄色細砂～黄褐色砂礫混じりシルト等が堆積する。中位は灰黄色細砂混じりシルト、下位は淡黄色細砂主体で構成される。第７層は壁面の崩落層である。遺物は、縄文土器（435.8 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b～９式併行）に位置づけた。さらに限定するなら重複の階層的には SK209 に近いと想定されるため縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）となる。（丸山）

SK73（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 160）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SI45 と重複しているが、残存部が少なく先後関係

を判断できない。平面形は、南半部が斜面下に崩落しており、本来の形状を留めていない。規模は、残存範囲で、長軸方向に 143 ㎝、短軸方向に 50 ㎝である（残存で底面積 0.39 ㎡）。深さは、断面側で 33 ㎝である。断面形も残存範囲が少なく、本来の形状は不明であるが、フラスコ形を呈する可能性がある。堆積土は１層のみ残存し、にぶい黄褐色シルトに風化花崗岩粒を多量に含んでいる。残存状況が悪く、自然堆積か否かは判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、包含層４の下位にあることから縄文時代中期中葉後半から後葉以前（大木 8b ～ ９式古段階併行以前）に位置づけた。（西澤）

SK74（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 160）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。他遺構との重複はないが、北に近接して SK62、東に SK205 がある。平面形は、南半が斜面下に流出のため全容は知れないが、残存状況から楕円形を呈すると推定される。規模は、長軸 177 ㎝、短軸 86 ㎝であり（残存で底面積 0.81 ㎡）、深さは最大で 87 ㎝である。断面形は、残存範囲が少ないが、ビーカー形を呈すると推定される。底面は、残存部分でみれば平坦である。堆積土は１層のみで、褐色を呈する砂である。残存状況が悪く、自然堆積か否か判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、包含層４の下位にあることから、縄文時代中期中葉後半から後葉以前（大木 8b ～ ９式古段階併行以前）に位置づけた。（西澤）

SK75（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 163）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。他遺構との重複はないが、北東に近接して SK73、東に SI45 がある。平面形は南半が斜面下に流出のため全容は知れないが、残存状態から周囲の土坑と同様に円形～楕円形を呈していると推定される。規模は、現状で長軸 128 ㎝、短軸 61 ㎝（復元で底面積 0.64 ㎡）、深さが 60 ㎝である。断面形は、一部しか残存していないが、本来はフラスコ形を呈していたと予想される。底面はほぼ平坦であるが、やや斜面下方へ傾斜している。堆積土は、１層のみ残存し、にぶい黄褐色シルトである。残存状況が悪く、自然堆積か否か判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、包含層４の下位にあることから、縄文時代中期中葉後半から後葉以前（大木 8b ～ ９式古段階併行以前）に位置づけた。（西澤）

SK76（第２分冊第 144 図、第４分冊写真図版 156）　南尾根のほぼ中央部に位置している。SI2、SK56 と本遺構上部で重複しており、SK56 の半裁に合わせて掘り下げたため、遺構の正確な使用面と平面形は不明である。本遺構は重複するいずれの遺構よりも古い。平面形は略円形である。開口部は SK56 底面の残存箇所からの推定で、直径 160 ㎝で、底面は長軸 200 ㎝、短軸 180 ㎝である（底面積 2.85 ㎡）。SK56 との層境から底面まで、深いところで 60 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面はほぼ水平である。壁は、外傾した後、内傾し、中位からほぼ垂直に開口部に向かう。堆積土は、褐色砂質シルト主体の９層で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）と想定する。（中島）

SK77（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 163）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK62 と SK206 と重複しており、先後関係は、SK62 よりは古く、SK206 よりは新しい。ただし、SK62 との関係は、開口部の崩落が大きく、現状が本来を表しているのか不明である。平面形はいびつな楕円形を呈するが、崩落による可能性が高く、本来は円形を基調としていたと推定される。規模は、現状での長軸は 153 ㎝、短軸 137 ㎝、深さ 142 ㎝である（底面積 0.73 ㎡）。断面形は、斜面側がＵ字形、斜面下方側がフラスコ形を呈している。底面は平坦である。堆積土は、２層のみが残存し、褐灰色シルトの上層と明黄褐色砂質シルトの下層である。残存状況が悪く、自然堆積か否か判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、

縄文時代中期中葉から後葉以前（大木 8a～8b 式併行以前）に位置づけた。なお、これは包含層４の下位にある遺構として時期的に矛盾はない。（西澤）

SK78（第２分冊第 149 図、第４分冊写真図版 163）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。調査区境にあるため東側の一部は調査区外にある。また、調査時に重複遺構を同時に精査したため、南側が残存していない。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK66 と上下に重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は、残存範囲が北側と西側の一部しかないため正確には不明である。残存部の規模は、長軸 98 ㎝、短軸 34 ㎝、深さ 72 ㎝である（復元で底面積 1.64 ㎡）。断面形はフラスコ形と想定でき、底面は平坦ではなく凹凸がある。堆積土は２層のみで、明黄褐色と黄橙色砂質シルトである。残存状況が悪いものの、１・２層ともに風化花崗岩粒を帯状に含むことから自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）を想定しておく。（西澤）

SK79（第２分冊第 149 図、第４分冊写真図版 163）　北尾根の南斜面中位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複は SK203 とであり、本遺構の方が新しい。また、SK200 とは接している。調査は分けて行ったため、本来重複関係にあったかは不明である。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 173 ㎝、短軸 131 ㎝、底部で長軸 168 ㎝、短軸 165 ㎝（底面積 3.03 ㎡）、深さは最深部で 220 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾して立ち上がり、中位で一旦括れたのち大きく外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦で、北東側に向かいやや低く傾斜する。堆積土は８層で構成される。上位～中位は風化花崗岩ブロックを少量含む黄灰色砂混じりシルト、下位は淡黄色シルトブロックを多量に含む黄色細礫が堆積する。遺物は、縄文土器（47.5 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）を想定する。（丸山）

SK80（第２分冊第 149 図、第４分冊写真図版 164）　北端の尾根の東斜面に位置している。Ⅳ層上面で検出した。他遺構との重複はない。開口部の平面形は長軸 200 ㎝、短軸 170 ㎝の略円形である。底面の平面形も開口部と同じ形状、規模である（底面積 2.63 ㎡）。深さは、斜面上方から底面まで 220 ㎝、下方で 150 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面は平らである。断面西側が 15 ㎝オーバーハングしている。堆積土は７層で構成される。遺物は、縄文土器（20,870.1 ｇ）が出土している。このうち土器７点（654～660）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（中島）

SK81（第２分冊第 149 図、第４分冊写真図版 164）　北端の尾根の東斜面に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK82 と重複し、遺構の東側を切られている。SK82 より古い。推定される開口部の元の平面形は長軸 230 ㎝、短軸 210 ㎝の略円形。底面の元の平面形は長軸 200 ㎝、短軸 180 ㎝の略円形である（復元で底面積 2.88 ㎡）。Ⅱ層との境から底面までの深さは 120 ㎝である。西側半分の断面形はフラスコ形で、底面は中央が盛り上がっている。断面西側が 15 ㎝オーバーハングしている。堆積土は黄褐色砂質シルトと砂が主体の４層で構成される。遺物の出土はない。帰属時期は、重複遺構から、縄文時代中期中葉後半以前（大木 8b 式併行以前）と想定しておく。（中島）

SK82（第２分冊第 149 図、第４分冊写真図版 164）　北端の尾根の東斜面に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK81 と重複しており、SK81 より新しい。開口部の平面形は、長軸 180 ㎝、短軸 160 ㎝の略円形で、底面の平面形も同じ規模、形状である（底面積 2.26 ㎡）。確認面から底面までは深さ 110 ㎝である。断面形はビーカー形で、床面はほぼ平らである。断面西側が６㎝オーバーハングしている。堆積土は８層で構成される。遺物は、縄文土器（239.7 ｇ）が出土している。このうち土器２

点（661・662）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（中島）

SK83（第２分冊第 150 図、第４分冊写真図版 164）　北端の尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸 155 ㎝、短軸 137 ㎝、底部で長軸 156 ㎝、短軸 144 ㎝（底面積 1.74 ㎡）、深さは南側で 140 ㎝、北側で 101 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が黄褐色およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。中位がラミナのみられる灰黄色極細砂～細砂。下位が３～５㎝大のⅤ層ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は埋め戻されずに放置され、小規模な壁面の崩落と風および水の営力による外部からの土の搬入により堆積が進行するが、下 1/3 が埋まった時点で、大雨などにより一度に大量の砂が流入することでラミナのみられる層が形成される。その後再び小規模な壁面の崩落と風および水の営力による外部からの土の搬入による堆積がすすみ、総じて自然堆積により埋没する。遺物は、SK83・SK99 で取り上げた（いずれか不明）縄文土器（48 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とせざるを得ない。（河本）

SK84（第２分冊第 150 図、第４分冊写真図版 164）　北尾根頂部の北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 313 ㎝、短軸 272 ㎝、底部で長軸 278 ㎝、短軸 233（底面積 4.40 ㎡）、深さ南側で 187 ㎝、北側で 120 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカー形を呈する。埋土下位に壁面の崩落により堆積したと考えられるⅤ層ブロック土が顕著に存在しており、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は、上位がにぶい黄色や黄褐色の極細砂混じりシルト、下位が黄褐色極細砂混じりシルトと灰白色真砂ブロック土の互層。廃絶当初は埋め戻されずに放置され、壁面の崩落と小規模な風および水の営力による外部からの土の搬入により堆積が進行するが、およそ半分が埋没した段階で、１個体の土器を投棄し、その後斜面下方の北側からの土の流入が見られることからも、人為的に埋め戻しているようである。埋土中位により土器が１個体出土している。遺物は、縄文土器（1,783.8 ｇ）が出土している。このうち土器１点（663）を掲載した。帰属時期は、出土土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK85（第２分冊第 150 図、第４分冊写真図版 165）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK86 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 176 ㎝、短軸 164 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 126 ㎝（底面積 1.3 ㎡）、深さ 90 ㎝である。断面形は北西側がゆるく内湾しながら立ち上がり、南東側がフラスコ形を呈する。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は、上位が明黄褐色シルトおよびにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰白色真砂ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位が明黄褐色極細砂混じりシルトである。下位については自然堆積の可能性もあるが、中位以上は人為堆積と考える。付属施設は、底面中央に 27×32 ㎝、深さ 12 ㎝の副穴が存在する。遺物は、縄文土器（SK86 と一括で取り上げた９ ｇ）、石器（5.3 ｇ）が出土している。このうち、石器１点（2043）を掲載した。帰属時期は、出土土器や重複遺構からは判断できないことから不明とする。（河本）

SK86（第２分冊第 150 図、第４分冊写真図版 165）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK85 に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で 214×243 ㎝、底部で長軸 201 ㎝、短軸 198（底面積 2.99 ㎡）、深さ 109 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中位から下位にかけて崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土が存在しており、当

初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦だが、南東側へ下がる傾斜を持つ。堆積土は、上位が明黄褐色極細砂混じりシルト。中位が灰白色真砂ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。下位が灰白色真砂ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は埋め戻されずに放置され、壁面の崩落と小規模な風および水の営力による外部からの土の搬入により堆積が進行するが、およそ半分が埋没した段階で人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、SK85と一括で取り上げた縄文土器（９ｇ）がわずかに出土している。帰属時期は、重複遺構からも出土遺物がほとんどないことから不明とする。（河本）

SK87（第２分冊第150図、第４分冊写真図版165）　北尾根頂部に位置している。検出は表土除去後のⅣ層上面で行っている。SK88と重複しており、先後関係は本遺構の方が新しい。平面形は、円形を基調としているが、東側が一部崩落によるためか膨らんでいる。開口部の規模は、長軸211㎝、短軸188㎝、深さ146㎝である。底面での規模は、長軸174㎝、短軸158㎝であり、開口部よりも若干小さい（底面積2.06㎡）。断面形は、ビーカー形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は７層に区分し、上層（１～３層）は褐色～黄褐色、明黄褐色を呈するシルトや砂質シルト層で、風化花崗岩のブロックを相対的に多く含む。中層（４～６層）はにぶい黄橙色や黄褐色、褐色を呈す砂質シルトである。下層（７層）は、灰黄褐色を呈する砂質シルト層で、風化花崗岩層と灰黄褐色シルト層が互層に堆積している。したがって、少なくとも下層は自然堆積の可能性がある。遺物は、縄文土器189.4ｇである。うち、土器１点（664）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）に位置づけた。（西澤）

SK88（第２分冊第150図、第４分冊写真図版165）　北尾根頂部に位置している。検出は表土除去後のⅤ層上面で行っている。SK87と重複しており、先後関係は本遺構の方が古い。東側の大部分が、立木伐採のための道路により破壊されている。そのため平面形は、円形を呈すると推定されるが正確ではない。残存部の規模は、長軸231㎝、短軸56㎝、深さ112㎝である（残存で底面積1.51㎡）。断面形は、残存する西側でみると、フラスコ形を呈する。床面は平坦につくられている。堆積土は、上下の２層に大別でき、上層（１～３層）は黄褐色やにぶい黄橙色のシルト層で、下層（４・５層）は、明褐色や黄褐色シルト層で、水平堆積を呈する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）に位置づけた。（西澤）

SK89（第２分冊第151図、第４分冊写真図版165）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK90に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸238㎝、短軸186、底部で長軸173㎝、短軸131㎝（残存で1.79㎡）、深さ125㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が真砂ブロック土を含む明黄褐色およびにぶい黄橙色のシルト～極細砂、中位が明黄褐色シルト～極細砂と灰白色真砂ブロック土の互層、下位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の崩落によるⅤ層ブロック土の堆積が主であったが、後に壁面の崩落および外部からの土の搬入が始まる。下1/3が埋まった段階で、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（39ｇ）がわずか出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複遺構からも土器の出土がないことから不明とする。（河本）

SK90（第２分冊第151図、第４分冊写真図版165）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK89を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸221㎝、短軸196、底部で長軸245㎝、短軸218㎝（復元で底面積3.89㎡）、深さ北西側で175㎝、南東側で141㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土

は、上位が明黄褐色シルト～極細砂、中位が真砂ブロック土を含む明黄褐色～灰黄色シルト～極細砂、下位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫。下位はⅤ層の風化による自然堆積と考えられるが、中位～上位については人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複するSK89も時期不明のため、本遺構の時期も不明ととせざるを得ない。（河本）

SK91（第２分冊第151図、第４分冊写真図版166）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK96を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸（89）㎝、短軸89㎝、底部で長軸132㎝、短軸（109）㎝（復元で底面積1.58㎡）、深さ南西側で39㎝、北東側で42㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦だが、やや南西側に下がる傾斜をもつ。堆積土は、上位がにぶい黄橙色シルトブロック土と灰黄褐色シルトブロック土の混合層、中位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色極細砂混じりシルトである。下位は自然堆積、中～上位は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も時期不明のため、本遺構も時期不明とせざるを得ない。（河本）

SK92（第２分冊第151図、第４分冊写真図版166）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層で検出した。SK231、341と重複する。平面での検出状況からはSK92が切っているように見えたが、埋土が比較的類似していることや、土層断面では観察できていないことから、先後関係は逆転する可能性もある。平面形は攪乱により東側が削平されているが、本来の平面形としては円形を呈していたものと推定される。規模は残存する開口部で長軸131㎝、短軸53㎝、底部は長軸137㎝、短軸42㎝（残存で底面積0.45㎡）、深さ北側で44㎝、南側で10㎝である。断面形は南側の残りが悪いためやや不確かだが、フラスコ形を呈すると推定される。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は、にぶい黄橙色極細砂混じりシルトが堆積する。壁面などに由来する堆積物が一切見られないことから、廃絶後すぐに人為的に埋められた可能性が高い。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK93（第２分冊第152図、第４分冊写真図版166）　北尾根頂部に位置している。検出は表土除去後のⅤ層上面で行っている。他遺構との重複はないが、北にSI46、南にSI47が近接する。開口部の北西側が一部崩落しているが、残存部の状況から平面形は楕円形を呈する。開口部の規模は長軸233㎝、短軸145㎝、深さ145㎝である。底面の規模は、長軸239㎝、短軸230㎝である（底面積4.04㎡）。断面形はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦に構築されている。堆積土は、６層あり、上層（１・２層）がにぶい黄褐色や黄褐色シルト、中層（３・４層）がにぶい黄橙～黄褐色シルトや砂質シルトで、３層には黄橙色や褐色のブロック土を含み、４層は風化花崗岩との互層である。下層（５・６層）は、褐灰色砂や黄褐色シルト層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（西澤）

SK94（第２分冊第152図、第４分冊写真図版166）　北尾根頂部に位置している。検出は表土除去後のⅤ層上面で行っている。他遺構との重複はないが、北にSI46、東にSI47が隣接する。また、西側の一部が調査区外にある。平面形は、楕円形を呈しており、開口部の規模は長軸200㎝、短軸195㎝以上、深さ173㎝である。底面の規模は、長軸172㎝以上、短軸211㎝で、北側と西側が開口部よりも外側に広がっている（復元で底面積3.78㎡）。断面形はフラスコ形を呈し、底面は平坦に構築されている。堆積土は、上層（１・２層）、中層（３・４層）、下層（５・６層）に大別できる。上層は、いわゆるレンズ状の堆積状況を示し、Ⅳ層起源と想定される黄褐色～にぶい黄褐色のシルト層である。中層はにぶい黄橙色や明黄褐色のシルトで、４層は風化花崗岩粒（灰白色細砂から中砂）を帯状かつ互層に含むことから自然堆積の可能性がある。下層は、にぶい黄橙色のシルト層で、６層には風化花

崗岩粒（灰白色細砂から中砂）を帯状に含むことから自然堆積の可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（西澤）

SK95（第２分冊第 152 図、第４分冊写真図版 167）　北尾根頂部に位置している。検出は表土や攪乱除去後のⅤ層上面で行っている。他遺構との重複はない。遺構の上半部が、立木伐採のための道路により破壊されている。平面形は、楕円形を呈し、規模は長軸 226 ㎝、短軸 201 ㎝、深さは現状で 145 ㎝である（底面積 2.69 ㎡）。断面形はビーカー形を呈し、底面は平坦に構築されている。堆積土は、いわゆるレンズ状堆積を示す上層（１～４層）と三角堆積を示す中層（５・６層）、水平堆積を示す下層（７～13 層）に大別できる。微妙な色調の差が認められるものの、Ⅳ層を起源とする褐色系のシルト層とⅤ層を起源とする灰黄色系の砂層が交互に堆積する。これらの堆積状況からいずれも自然堆積の可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複もないことから不明とする。（西澤）

SK96（第２分冊第 153 図、第４分冊写真図版 167）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK91 に切られており、この遺構より古く、SK104 を切っており、この遺構より新しい。SI48 との先後関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 145 ㎝、短軸 138 ㎝、底部で長軸 143 ㎝、短軸 111 ㎝（底面積 1.22 ㎡）、深さ北西側で 103 ㎝、南東側で 25 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられやや凹凸がみられる。堆積土は、上位は植物擾乱を受ける黒褐色極細砂混じりシルト、中位は灰黄色～黄灰色シルト混じり細砂、下位はにぶい黄褐色極細砂混じりシルト。下～中位は自然堆積、上位は人為的に埋め戻されたかもしれないが、植物擾乱を受けており明確な判断はできない。遺物は、縄文土器がわずか 19 ｇのみ出土しているが、文様を判別できる破片はない。帰属時期は、重複する遺構も時期不明のため、本遺構も同様に不明とする。（河本）

SK97（第２分冊第 152 図、第４分冊写真図版 167）　北尾根に位置している。検出は表土除去後のⅤ層上面で行っている。他遺構との重複はないが、西に隣接して SK122 がある。平面形はいびつながらも円形を呈し、開口部の規模は径 200 ㎝、深さ 171 ㎝である。底面での規模は長軸 175 ㎝、短軸 156 ㎝である（底面積 2.10 ㎡）。北側が開口部よりも奥に広がる。断面形はおおむねフラスコ形を呈するが、南側は開口部よりも内側にある。底面はほぼ平坦であるが、Ⅴ層中の花崗岩に影響されて、南側が若干高くなる。堆積土は、上層（１層）、中層（２・３層）、下層（４～６層）に大別できる。上層は、褐色を呈するⅣ層を由来とするシルト層で、いわゆるレンズ状堆積を示す。中層は明黄褐色を呈する砂質シルトで、風化花崗岩粒のブロックを含む層である。下層は、風化花崗岩（灰白色細砂～中砂）層と黄褐色シルトが互層になる層が主体である。少なくとも下層は自然堆積の可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複はないことから不明とする。（西澤）

SK98（第２分冊第 153 図、第４分冊写真図版 167）　北尾根頂部北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面図上では SK116 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 175 ㎝、短軸 167 ㎝、底部で長軸 187 ㎝、短軸 167 ㎝（底面積 2.51 ㎡）、深さ西側で 102 ㎝、東側で 83 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は、上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色真砂ブロック土を含む灰黄色極細砂混じりシルト、下位が黄褐色極細砂混じりシルトブロック土と灰白色真砂ブロック土の混合層である。下～中位にかけては壁面の崩落と風雨による流入により堆積が進み、上位は人為堆積の可能性が考えられる。付属施設は、平面精査では副穴を検出できなかったが、断面観察したところ底面中央に径 40 ㎝、深さ８㎝の副穴が存在する可能性が考えられる。遺

物は、縄文土器（６ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様を判別できる破片がなく重複遺構もないことから不明とする。（河本）

SK99（第２分冊第 153 図、第４分冊写真図版 168 図）　北端の尾根に位置している。検出は、表土除去後のⅣ層下位からＶ層面で行った。他遺構との重複はないが、北側に隣接して SK81、SK82 がある。平面形は楕円形を呈し、開口部の規模は長軸 236 ㎝、短軸 225 ㎝、深さが斜面上方側で 262 ㎝である。底面での規模は、長軸 193 ㎝、短軸 178 ㎝であり、ほぼ開口部よりも内側にある（底面積 2.89 ㎡）。断面形は、おおむねビーカー形を呈するが、上半部は崩落の可能性が高く、本来はフラスコ形かもしれない。底面は平坦に構築されている。堆積土は、上層（１層）、中層（２～５層）、下層（６～８層）に大別できる。上層はⅢ層を起源とするシルト層で、いわゆるレンズ状堆積を示す。中層は黄色系を呈するシルトで、径が５～10 ㎝程度の明黄褐色シルトのブロック土を相対的に多く含んでいる。また、壁面崩落土も含まれる。下層は黄灰色やにぶい黄橙色を呈するシルト層で、６層のみは砂層である。７層は橙色のシルト層を互層に含んでいる。最下層の８層は土壌化したシルト層で暗褐色から黒褐色を呈している。これらのことから少なくとも中層は人為堆積、下層は最下層も含め自然堆積の可能性がある。遺物は、縄文土器（31 ｇ）のみ出土しているが、図示したものはない。このほか、SK83／SK99（いずれか不明）で取り上げた縄文土器（4.8 ｇ）がある。帰属時期は、他遺構との重複もないことから不明とする。（西澤）

SK100（第２分冊第 154 図、第４分冊写真図版 168）　北端の尾根北側斜面に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 262 ㎝、短軸 215 ㎝、底部で長軸 226 ㎝、短軸 221 ㎝（底面積 3.74 ㎡）、深さ西側で 117 ㎝、東側で７㎝である。断面形は西側がフラスコ形を呈し、東側は流失により不明である。底面はＶ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は、上位がにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が真砂ブロック土を含む黄褐色極細砂混じりシルト、下位が黄褐色極細砂混じりシルトブロック土と灰白色真砂ブロック土の互層である。中～下位は壁面の崩落と風雨による流入により堆積し、上位は何らかの作用で堆積後、植物擾乱を受けているようである。遺物は、SK100 か SK116（いずれか不明）で縄文土器（355.8 ｇ）がわずかに出土しているが、図示可能な土器はない。帰属時期は、文様を判別できる破片から、縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a～９式併行）に間に位置づけた。（河本）

SK101（第２分冊第 154 図、第４分冊写真図版 168）　北尾根頂部に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 234 ㎝、短軸 212 ㎝、底部で長軸 242 ㎝、短軸 230 ㎝（底面積 3.96 ㎡）、深さ北側で 181 ㎝、南側で 77 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中位から下位にかけて崩落した壁面と考えられるＶ層ブロック土が存在しており、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はＶ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中～下位が灰白色真砂ブロック土と浅黄色極細砂混じりシルトブロック土の混合層、およびにぶい褐色極細砂混じりシルトである。下～中位にかけては崩落と風雨による流入が交互に生じて堆積したようだが、上位は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK102（第２分冊第 154 図、第４分冊写真図版 168）　北尾根に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 213 ㎝、短軸 205 ㎝、底部で長軸 197 ㎝、短軸 109 ㎝（復元で底面積 2.90 ㎡）、深さ北側で 166 ㎝、南側 88 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるＶ層ブロック土が存在しており、当初はフ

ラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～明黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトブロック土と黄灰色細砂～細礫ブロック土の混合層、下位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。下位は外部からの風・雨による流入により堆積し、その後壁面の崩落と流入が交互に生じることによる堆積が進む。上位は人為堆積の可能性もあるが、植物擾乱の可能性も考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK103（第２分冊第 154 図、第４分冊写真図版 169）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 215 ㎝、短軸 143 ㎝、底部で長軸 260 ㎝、短軸 178 ㎝（底面積 3.55 ㎡）、深さ北西側で 75 ㎝、南東側 72 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰白色真砂ブロック土を含むにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄褐色～暗灰黄色極細～細砂混じりシルト。廃絶初期の段階で斜面下方の南東側からの土の流入が見られることから、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK104（第２分冊第 153 図、第４分冊写真図版 169）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層で検出した。SI48、SK96 に切られており、これらの遺構より古い。平面形は、SK96 により北西側が削平されているが、本来の形状として円形を呈し、規模は開口部で長軸 124 ㎝、短軸（89）㎝、底部で長軸 242 ㎝、短軸 209 ㎝（底面積 3.82 ㎡）、深さ 77 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色細砂～細礫、中位が灰黄色細砂～粗砂、下位が暗灰黄色シルト混じり細砂～粗砂および淡赤橙色極細砂混じりシルトである。下位には壁面の崩落による堆積が見られ、その後は別の作用による堆積が進むが、人為堆積か自然堆積かは判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK105（第２分冊第 155 図、第４分冊写真図版 169）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 179 ㎝、短軸 170 ㎝、底部で長軸 144 ㎝、短軸 140 ㎝（底面積 1.58 ㎡）、深さ北西側で 154 ㎝、南東側で 86 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土や壁面が風化して堆積した細砂～細礫層が存在しており、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色～灰黄色細砂～細礫層を介在させるにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～にぶい黄色細砂～細礫、下位が黄灰色～黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶時からしばらくの間、土器を６個体程度底面に残したまま放置していたようだが、下 1/4 程度が埋まった段階で土器を４個体程度投棄している。その後はそれまでと堆積構造が変化し、小単位ずつ堆積している様子が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。底面より６個体、埋土中位より４個体土器が出土している（接合後は計８個体分）。遺物は、縄文土器（17,058.3 ｇ）が出土している。このうち土器８点（665～672）を掲載した。そのほかの土器破片が極めて少ないこと、埋土中位と底面に分けて取り上げたが、両者の多くは接合関係にあることから極めて一括性の高い土器群といえる。土坑の使用時期と土器の廃棄時期にどの程度の差があるか不明であるが、底面に接する土器もあることから、使用時期に限りなく近いと考えられる。したがって帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK106（第２分冊第 155 図、第４分冊写真図版 170）　北尾根に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、東半部のみを検出した。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 146 ㎝、短軸 81 ㎝、底部で長軸 110 ㎝、短軸 52 ㎝、（復元で底面積 0.89 ㎡）、深さ北西側で 140 ㎝、南東側で 84 ㎝である（※検出部のみ）。断面形は北西側がビーカー形、南東側がフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土は上位がにぶい褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色～灰黄色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色～黄灰色極細砂混じりシルトである。壁面の崩落や風化して堆積したものの存在が顕著ではなく、一定の厚みを持ちつつも小規模な堆積単位に分けられる層も存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土しておらず、重複する遺構もないことから時期は不明とする。　（河本）

SK107（第２分冊第 155 図、第４分冊写真図版 170）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK114 に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 252 ㎝、短軸 172㎝、底部で長軸 211 ㎝、短軸 152 ㎝（復元で底面積 2.91 ㎡）、深さ北側で 106 ㎝である。断面形は北側がビーカー形を呈し、南側は SK114 に削平されており不明である。埋土中位に、壁面が風化して堆積した可能性が考えられる層がみられることから、本来はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ浅い皿形のように凹む。堆積土は上位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫、下位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後主に壁面の風化により堆積する。埋土上位には巨礫があり、それまでの堆積物とは異なるものが一度に流入している様子から、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は、底面中央に長軸 56 ㎝、短軸 45 ㎝、深さ 23.5 ㎝の副穴が存在する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構からも土器の出土がないことから不明とする。　（河本）

SK108（第２分冊第 155 図、第４分冊写真図版 170）　北尾根に位置している。検出は、表土除去後のⅣ層下位からⅤ層面で行った。北側に近接して SK114 があるが、現状では直接の重複は確認できない。この遺構全体は、立木伐採のため重機道路のよって削平を受けており、残存部は少ない。平面形は長楕円形を呈し、開口部の規模は長軸 244 ㎝、短軸 182 ㎝、深さ 119 ㎝である。底面の規模は、長軸 228 ㎝、短軸 150 ㎝である（底面積 2.79 ㎡）。断面形は、残存状態が悪く明確に判断つかないが、ビーカー形を呈すると予想される。また、底面は平坦に構築されている。堆積土は、にぶい黄橙色（１層）や黄褐色（３層）の砂質シルトが主体であり、間に淡黄色砂層が堆積する（２層）。残存する堆積土が少なく、自然堆積か否か判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。　（西澤）

SK109（第２分冊第 156 図、第４分冊写真図版 170）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 250 ㎝、短軸 236 ㎝、底部で長軸 254 ㎝、短軸 244 ㎝（底面積 4.54 ㎡）、深さ北側で 158 ㎝、南側で 26 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形を呈し、南側は流失（立木伐採用の重機走路）により不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～明黄褐色極細砂混じりシルト、中位が真砂ブロック土を含む黄褐色～灰黄色極細砂混じりシルト、下位が灰黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。部分的に壁面の崩落による堆積が見られるが、廃絶初期の段階で斜面下方の南側からの土の流入が見られることから、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。　（河本）

SK110（第２分冊第 156 図、第４分冊写真図版 171）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。

重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 223 ㎝、短軸 180 ㎝、底部で長軸 216 ㎝、短軸 201 ㎝（底面積 3.13 ㎡）、深さ北側で 157 ㎝、南側で 93 ㎝である。断面形は北側がビーカー形、南側がフラスコ形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色シルトブロック土を含む灰白色細砂～細礫、下位がにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は明確な自然堆積層を介在させない同質の堆積物が厚みをもって存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK111（第２分冊第 156 図、第４分冊写真図版 171）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 207 ㎝、短軸 187 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 174 ㎝（底面積 2.73 ㎡）、深さ北西側で 222 ㎝、南東側で 140 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位はシルトブロック土が部分的に介在する黄灰色～灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫、下位が暗灰黄色極細砂混じりシルトと灰白色真砂ブロック土の互層および黄灰色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶時からしばらくの間、土器を１個体底面に残したまま放置しており、風雨による流入や崩落による堆積が進行する。下 1/3 が埋まった段階で、ブロック土や一定の厚みを持ちつつも小規模な堆積単位に分けられる層が存在することから、人為的に埋め戻され始める。完全には埋まり切らず、凹みが残っている時点で焼土が存在し、同一の高さで土器も出土していることから、この凹みを何らかの形で利用しているようである。その後、再び埋没するようであるが、それが人為堆積か自然堆積かは判断できない。床面および焼土形成面で土器が各１個体出土している。土坑の二次利用がみられる。遺物は、縄文土器（2,201.9 ｇ）、石器（489.1 ｇ）が出土している。このうち土器２点（673・674）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK112（第２分冊第 157 図、第４分冊写真図版 171）　北端の尾根北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 241 ㎝、短軸 205 ㎝、底部で長軸 226 ㎝、短軸 207 ㎝（底面積 3.44 ㎡）、深さ南西側 186 ㎝、北東側 130 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下位に崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土が存在しており、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位が暗灰黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルトブロック土と灰白色真砂ブロック土の混合層である。廃絶当初から壁面の崩落と外部からの風雨による流入により中位まで堆積が進む。上位は人為堆積か自然堆積かは判断できない。出土重量は出土土器（717 ｇ）である。うち、土器１点（675）を掲載した。帰属時期は、出土数が少ないものの掲載土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK113（第２分冊第 157 図、第４分冊写真図版 172）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は形を円呈し、規模は開口部で長軸 187 ㎝、短軸 170 ㎝、底部で長軸 225 ㎝、短軸 213 ㎝（底面積 3.54 ㎡）、深さ北西側で 128 ㎝、南東側で 80 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土の上位は暗灰黄色シルト混じり細砂、中位はにぶい黄橙色シルト混じり細砂や暗灰黄色細砂～粗砂と互層になるところもみられる、

灰白色～黄灰色細砂～細礫、下位は灰黄色シルト混じり細砂。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は人為堆積か自然堆積かは判断できない。遺物は、（縄文土器 2,646.4 ｇ）が出土している。うち、土器１点（676）を掲載した。帰属時期は、ほぼ掲載土器しか出土していないため、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK114（第２分冊第 157 図、第４分冊写真図版 172）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK107 を切っており、この遺構より新しい。平面形は、経年的な地表流出により、土坑南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 220 ㎝、短軸 148 ㎝、底部で長軸 197 ㎝、短軸 137 ㎝（残存で底面積 1.84 ㎡）、深さ北側で 34.5 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するようだが残りが悪くやや不明確である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が褐色極細砂混じりシルト、下位が黄灰色細砂～細礫である。壁面の崩落または風化による堆積が進行したのち、自然か人為か要因は断定できないが、主に外部からの流入によって堆積したようである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構からも土器の出土がないことから不明とする。（河本）

SK115（第２分冊第 157 図、第４分冊写真図版 172）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK89 に切られており、この遺構より古い。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 106 ㎝、短軸 98 ㎝、底部で長軸 94 ㎝、短軸 92 ㎝（底面積 0.65 ㎡）、深さ 63 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、主に明黄褐色シルト～極細砂と極細砂混じり極粗砂～細礫からなる。自然に堆積したものと思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も遺物が出土しないため、本遺構も同様に不明とする。（河本）

SK116（第２分冊第 158 図、第４分冊写真図版 172 図）　北端の尾根北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面図上では SK98・129 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 260 ㎝、短軸 206 ㎝、底部で長軸 233 ㎝、短軸 208 ㎝（底面積 3.53 ㎡）、深さ西側で 145 ㎝、東側で 86 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側が凹凸を持ちつつ斜め外方へ立ち上がる形を呈する。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が浅黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～にぶい黄橙色シルト混じり細砂～極粗砂、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層も存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は SK100 か SK116（いずれか不明）で取り上げた縄文土器（355.8 ｇ）が出土しているが図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構も遺物が出土せず時期不明のため、本遺構も同様とせざるを得ない。（河本）

SK117（第２分冊第 158 図、第４分冊写真図版 173）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 137 ㎝、底部で長軸 167 ㎝、短軸 144 ㎝（底面積 1.83 ㎡）、深さ北西側で 157 ㎝、南東側で 95 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位は灰黄色～黄灰色シルト混じり細砂～細礫および細砂～中砂、中位は灰白色～黄灰色細砂～細礫、下位は黄灰色シルト混じり細砂～細礫。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層も存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、

重複する遺構が時期不明のため、本遺構も同様に不明とする。（河本）

SK118（第２分冊第 158 図、第４分冊写真図版 173）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 159 ㎝、短軸 155 ㎝、底部で長軸 188 ㎝、短軸 167 ㎝（底面積 2.47 ㎡）、深さ北西側で 123 ㎝、南東側で 73 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側は凹凸の持ちつつ斜め外方へ立ち上がる形を呈するが、埋土中～下位に風化および崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫、中位が灰白色～黄灰色極細砂混じり細砂～細礫、下位が灰白色～暗灰黄色細砂～細礫である。全体的に壁面のⅤ層由来の堆積物で埋まっており、廃絶後、主に崩落や風化によって埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK119（第２分冊第 159 図、第４分冊写真図版 173）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 190 ㎝、短軸 160 ㎝、底部で長軸 213 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.98 ㎡）、深さ北西側で 136 ㎝、南東側で 93 ㎝である。断面形は北西側がビーカー形、南東側がフラスコ形を呈するが、埋土下位に崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が黄灰色～暗灰黄色シルト混じり細砂、中位が灰黄色～暗灰黄色極細砂混じりシルト、下位が灰白色極細砂混じり中砂～細礫および暗灰黄色～灰黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。なお、人為的に埋め戻す初期の段階に、土器を１個体投棄している。埋土中位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（1,547.3 ｇ）が出土している。このうち、土器１点（677）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）の間に位置づけた。（河本）

SK120（第２分冊第 159 図、第４分冊写真図版 174）　北尾根中腹に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 197 ㎝、短軸 159 ㎝、底部で長軸 186 ㎝、短軸 173 ㎝（底面積 2.41 ㎡）、深さ 83～89 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～上位に崩落した壁面と考えられるⅤ層ブロック土が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色真砂ブロック土を含む層もみられる灰黄色～灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂、中位が灰黄色～灰白色細砂～細礫、下位が褐灰色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK121（第２分冊第 159 図、第４分冊写真図版 174 図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 191 ㎝、底部で長軸 165 ㎝、短軸 145 ㎝（底面積 1.85 ㎡）、深さ北側で 126 ㎝、南側で 59 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色細砂～細礫、下位が灰黄褐色

極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層である。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（５ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、遺物が地文のみの土器片であることや重複する遺構がないことから不明とする。

（河本）

SK122（第２分冊第159図、第４分冊写真図版174）　北尾根に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、北東部のみを検出した。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸220㎝、短軸143㎝、底部で長軸155㎝、短軸75㎝（残存で底面積0.83㎡）、深さ北西側で54㎝、南東側で11㎝である（※検出部のみ）。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられ、やや南東側へ下がる傾斜をもつ。堆積土は上位が橙色極細砂混じりシルト、下位が灰黄色極細砂混じりシルトである。全体的に自然堆積の様相が強いように思えるが定かではない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。

（河本）

SK123（第２分冊第160図、第４分冊写真図版174）　北尾根に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、北東部のみを検出した。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸122㎝、短軸72㎝、底部で長軸66㎝、短軸56㎝（復元で底面積0.83㎡）、深さ北西側で108㎝、南東側で61㎝である（※検出部のみ）。断面形はU字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位が浅黄色極細砂混じりシルトおよび黄灰色細砂～細礫である。下位については埋土というより廃絶後に植物擾乱を受けて形成されたものである可能性がある。中～上位は人為堆積か自然堆積かは判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。

（河本）

SK124（第２分冊第160図、第４分冊写真図版174）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや角ばった円形を呈し、規模は開口部で長軸203㎝、短軸191㎝、底部で長軸191、短軸183㎝（底面積2.62㎡）、深さ北側で131㎝、南側で37㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカー形を呈するが、埋土下～上位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が灰白色～黄灰色の細砂～細礫をブロックまたは薄層状に含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黄灰色細砂～細礫、下位が黄灰色シルト混じり細砂～粗砂である。全体的に壁面のⅤ層由来の堆積物で埋まっており、廃絶後、主に崩落や風化によって埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。

（河本）

SK125（第２分冊第160図、第４分冊写真図版175）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK233を切っており、この遺構より新しい。そのほかSK233を介して間接的に７基の土坑と重複するが、いずれの遺構よりも新しい。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸215㎝、短軸204㎝、底部で長軸210㎝、短軸188㎝（底面積2.77㎡）、深さ北西側で133㎝、南東側で59㎝である。断面形はやや凹凸を持つビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦だが、南東側へ下がる傾斜を持つ。堆積土は上位が灰黄色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位がにぶい黄橙色～灰黄褐色

極細砂混じりシルトおよび灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶初期の段階から斜面下方の南東側からの土の流入が見られることから、埋没途中の段階に崩落による堆積も挟んでいるようだが、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、間接的に重複する遺構との関係から、縄文時代中期中葉前半以降（大木 8a 式併行以降）に位置づけた。　（河本）

SK126（第２分冊第 160 図、第４分冊写真図版 175）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 235 ㎝、短軸 182 ㎝、底部は西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 146 ㎝、短軸 105 ㎝（残存で底面積 1.29 ㎡）、深さ北側で 142 ㎝、南側で 85 ㎝である。断面形はやや凹凸をもつU字形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅣ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～褐灰色シルトおよび極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルト、下位が褐灰色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。　（河本）

SK127（第２分冊第 161 図、第４分冊写真図版 175）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK233 に切られており、この遺構より古く、SK279 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 319 ㎝、短軸 230 ㎝、底部は南半分を掘りすぎてしまいその残存部となるが、長軸 211 ㎝、短軸 123 ㎝（残存で底面積 2.15 ㎡）、深さ西側で 165 ㎝、東側で 146 ㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦だが、西半部は西側へやや上がる傾斜をもつ。堆積土は上位が明黄褐色～にぶい黄橙色シルト、中位がにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトと明黄褐色～にぶい黄橙色シルト、下位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は、底面中央に径約 75 ㎝、深さ 53 ㎝の副穴の可能性のある凹みがみられる。遺物は出土していない。帰属時期は、間接的に重複する遺構との関係から、縄文時代中期中葉前半以降（大木 8a 式併行以降）に位置づけた。　（河本）

SK128（第２分冊第 161 図、第４分冊写真図版 175）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 198 ㎝、短軸 183 ㎝、底部で長軸 213 ㎝、短軸 198 ㎝（底面積 3.22 ㎡）、深さ北西側で 82 ㎝、南東側で 70 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黒褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰白色～浅黄色細砂～細礫、中位が灰黄色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、下位が灰黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。　（河本）

SK129（第２分冊第 161 図、第４分冊写真図版 176 図）　北端の尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面上では SK116 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形は形を呈し、規模は開口部で長軸 184 ㎝、短軸 162 ㎝、底部で長軸 208 ㎝、短軸 195 ㎝（底面積

3.20 ㎡）、深さ西側で 172 ㎝、東側で 86 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色～灰白色シルト混じり細砂～細礫および灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が浅黄色～灰白色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶最初期に一度小規模な崩落により堆積し、その後すぐ斜面下方からの流入が見られること、および一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、その途中に崩落が生じつつも主に人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK130（第２分冊第 162 図、第４分冊写真図版 176）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 210 ㎝、短軸 204 ㎝、底部で長軸 236 ㎝、短軸 202 ㎝（底面積 3.64 ㎡）、深さ北側で 200 ㎝、南側で 139 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色および灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄色シルト混じり細砂～粗砂およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶最初期には壁面の風化による堆積が見られるが、その後斜面下方の南側からの土の流入が見られることから、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK131（第２分冊第 162 図、第４分冊写真図版 176）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや角のある円形を呈し、規模は開口部で長軸 212 ㎝、短軸 196 ㎝、底部で長軸 222 ㎝、短軸 207 ㎝（底面積 3.41 ㎡）、深さ 59～63 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が部分的に炭の薄層を介在させる灰白色細砂～細礫、中位が灰白色真砂ブロック土を含む黄灰色細砂～粗砂、下位が灰白色～暗灰黄色細砂～細礫である。全体的に壁面のⅤ層由来の堆積物で埋まっているが、外部から流入したと考えられる薄層も存在することから、廃絶後主に崩落や風化によって埋まりつつも、時折外部から風雨によって運ばれて来たものも堆積したと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK132（第２分冊第 162 図、第４分冊写真図版 176）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 216 ㎝、短軸 195 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 188 ㎝（底面積 2.84 ㎡）、深さ北西側で 88 ㎝、南東側で 70 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、初期堆積層の形状が三角形を呈することから、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色～灰黄色シルト混じり細砂～粗砂、中位が黄灰色シルト混じり細砂～粗砂、下位がにぶい黄色～暗灰黄色シルト混じり細砂～粗砂である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。なお、人為的に埋め戻す初期の段階に、土器を１個体投棄している。埋土上位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（3,160.7 ｇ）が出土している。このうち土器１点（678）を掲載した。埋土上位からの出土であるが、掲載土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK133（第２分冊第 163 図、第４分冊写真図版 177）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 239 ㎝、短軸 187 ㎝、底部で長軸 185 ㎝、短軸 184 ㎝（底面積 2.55 ㎡）、深さ南西側で 160 ㎝、北東側で 81 ㎝である。断

面形はややビーカー形に近いフラスコ形を呈するが、埋土下～中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてより明瞭なフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色シルト混じり細砂～粗砂と灰白色真砂ブロック土の混合層、下位がにぶい黄色シルト混じり細砂～粗砂である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。なお、一定程度埋め戻した段階で正位に土器を埋設している。土器内の埋土下方には強く黒色化した層が存在しており、何かしら有機質のものが中に入った状態で埋設された可能性が考えられる。埋土上位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（3,230.3 ｇ）が出土している。このうち土器１点（679）を掲載した。帰属時期は、出土土器が地文のみのため確証はないが、器形から縄文時代中期中葉前後（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK134（第２分冊第 163 図、第４分冊写真図版 177）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 198 ㎝、短軸 178 ㎝、底部で長軸 194 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 2.49 ㎡）、深さ南西側で 185 ㎝、北東側で 106 ㎝である。断面形はやや歪なビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてより明瞭なフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色～にぶい黄橙色シルト混じり細砂～細礫、中位が灰黄色シルト混じり細砂～粗砂ブロック土と灰白色真砂ブロック土の互層、下位が灰黄色細砂～細礫である。廃絶当初は小規模な崩落の後、壁面の風化による堆積が進行する。その後、壁面の崩落が平行して生じるようになり、崩落と風化の作用による堆積が進む。2/3 程度が埋まった段階で、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。なお、人為的に埋め戻す初期の段階に、土器を１個体投棄している。埋土上位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（512.8 ｇ）が出土している。このうち土器２点（680・681）を掲載した。帰属時期は、掲載する出土土器から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK135（第２分冊第 163 図、第４分冊写真図版 177）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 137 ㎝、短軸 95 ㎝、底部で長軸 129 ㎝、短軸 113 ㎝（復元で底面積 1.06 ㎡）、深さ北西側で 36 ㎝、南東側で 14 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄褐色シルト～細砂層を介在させる黄灰色細砂～細礫である。埋土下位が廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行したものと思われることから、総じて自然に堆積したものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK136（第２分冊第 164 図、第４分冊写真図版 178）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK137 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 252 ㎝、短軸 221 ㎝、底部で長軸 217 ㎝、短軸 205 ㎝（底面積 3.36 ㎡）、深さ北東側で 187 ㎝、南西側で 97 ㎝である。断面形はやや歪なビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落した壁面と考えられるⅣ・Ⅴ層由来の堆積物が存在しており、当初はフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰白色細砂～細礫、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、にぶい黄橙色極細砂混じりシル

ト、黄灰色細砂～細礫の混合層、下位が灰黄色褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は、主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複するSK137からも土器が出土しておらず、したがって時期は不明である。（河本）

SK137（第２分冊第164図、第４分冊写真図版178）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK136に切られており、この遺構より古い。平面形は、残存する形状は角張った楕円形を呈し、規模は開口部で長軸180㎝、短軸136㎝、底部で長軸190㎝、短軸181㎝（底面積2.54㎡）、深さ北東側で134㎝、南西側で100㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色細砂～細礫、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰白色シルト混じり細砂～細礫、下位がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は、主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後、斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK138（第２分冊第164図、第４分冊写真図版178図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸184㎝、短軸162㎝、底部で長軸181㎝、短軸175㎝（底面積2.40㎡）、深さ北西側で85㎝、南東側で14㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位を灰黄色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、中位を黄灰色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、下位を黄灰色細砂～細礫。廃絶初期の段階から斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。南半部を掘りすぎてしまったため、残存径となるが、底面中央に26×31㎝、深さ11㎝の副穴が存在する。遺物は、縄文土器（20ｇ）がわずかに出土しているのみで、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる土器片もなく、重複遺構もないことから不明とする。（河本）

SK139（第２分冊第164図、第４分冊写真図版178）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK140を切っており、この遺構より新しい。平面形は、やや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸223㎝、短軸171㎝、底部で長軸229㎝、短軸167㎝（底面積2.88㎡）、深さ西側で70㎝、東側で26㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位を灰黄色細砂～細礫、中位はにぶい黄色細砂～細礫、下位を灰黄色細砂～極粗砂で占める。廃絶初期の段階から斜面下方からの流入が見られることから、途中で壁面の崩落も生じているようだが、主に人為的に埋め戻されていると思われる。最上位については植物擾乱を受けている可能性が考えられる。副穴などは検出されていない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土がなく他に年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK140（第２分冊第164図、第４分冊写真図版179図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK139に切られており、この遺構より古い。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸182㎝、短軸176㎝、底部で長軸191㎝、短軸173㎝（底面積2.42㎡）、深さ136～143㎝である。断面形はやや凹凸を持つビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位はにぶい黄褐色～にぶい黄橙色シルト混じり細砂～細礫、中位は灰白色およびにぶい黄橙色細砂～細礫、下位はにぶい黄褐色シルト混じり細砂～細礫。廃絶当初は、主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来する

ブロック土も堆積するようになる。1/2 程度が埋没した段階から後は、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（30 ｇ）がわずか出土しているのみで、図示したものはなく、文様が判別できる破片はない。帰属時期は、重複遺構からも土器の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK141（第２分冊第 165 図、第４分冊写真図版 179）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 233 ㎝、短軸 210 ㎝、底部で長軸 215 ㎝、短軸 200 ㎝（底面積 3.32 ㎡）、深さ西側で 201 ㎝、東側で 100 ㎝である。断面形はやや凹凸を持つビーカー形を呈する。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫および灰黄色細砂～細礫、中位が灰黄色～暗灰黄色細砂～細礫および真砂ブロック土を含む黄灰色～黄色褐色細砂～細礫、下位が黄褐色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は、主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後、壁面の崩落も生じつつ、斜面下方からの流入が見られ、主たる自然の営力では運搬されないような巨礫も存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK142（第２分冊第 165 図、第４分冊写真図版 179）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 161 ㎝、短軸 150 ㎝、底部で長軸 193 ㎝、短軸 179 ㎝（底面積 2.69 ㎡）、深さ北側で 106 ㎝、南側で 76 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色～黄灰色シルト混じり細砂～細礫、中位が灰白色～黄灰色細砂～細礫および黄灰色極細砂混じりシルト、下位が灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化による堆積が進行し、その後壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行したものと思われる。上位については、中～下位までとは異なる土質のものが堆積していることより、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK143（第２分冊第 165 図、第４分冊写真図版 179・180）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 146 ㎝、底部で長軸 209 ㎝、短軸 206 ㎝（底面積 3.19 ㎡）、深さ北西側で 118 ㎝、南東側で 101 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落・風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～黄灰色真砂ブロック土を含む浅黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄色～黄灰色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。その後は人為的に埋め戻されていると思われる。なお、人為的に埋め戻す段階で、土器を１個体投棄している。遺物は、縄文土器（3,457.1 ｇ）が出土している。このうち土器３点（682～684）を掲載した。帰属時期は、数少ない文様が判別できる土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK144（第２分冊第 166 図、第４分冊写真図版 180）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 201 ㎝、短軸 163 ㎝、底部で長軸 209 ㎝、短軸 190 ㎝（底面積 3.16 ㎡）、深さ北西側で 137 ㎝、南東側で 71 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂

混じりシルトおよび灰黄色シルト混じり細砂～細礫、中位が灰黄色細砂～細礫ブロック土と灰白色真砂ブロック土の混合層、下位が中間に灰白色細砂～細礫層を挟む暗灰黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は崩落と外部からの風雨による堆積が進行し、一時的に壁面の風化による堆積が主となる時期もあるが、再び外部からの風雨による堆積が進行する。その後、壁面の崩落と外部からの風雨による堆積が再開する。崩落を伴う堆積が終了した後は、外部からの風雨による堆積が進行するようだが、上位は植物擾乱を受けているようであり、定かではない。遺物は、縄文土器（5,582.6 g）である。うち、土器３点（685～687）を掲載した。帰属時期は、出土土器が時期を限定できないものが多いため、縄文時代中期中葉から後葉（大木 8a 新段階～９式古段階併行）に位置づけた。（河本）

SK145（第２分冊第 166 図、第４分冊写真図版 180 図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。上では SK167 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形はやや角張った楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 256 ㎝、短軸 199 ㎝、底部で長軸 224 ㎝、短軸 213 ㎝（底面積 3.54 ㎡）、深さ西側で 140 ㎝、東側で 86 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落・風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰黄色～黄灰色細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～細礫と灰白色細砂～細礫の混合層および灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位が灰黄色細砂～粗砂である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、斜面下方からの流入が見られ、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われるが、その途中の段階において、壁面由来のⅤ層が顕著な層がみられることもあり、壁面の崩落も伴っているようである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明である。（河本）

SK146（第２分冊第 166 図、第４分冊写真図版 181）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南側が伐木用重機道の造成時に削平されている。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 219 ㎝、短軸 217 ㎝、底部で長軸 223 ㎝、短軸 213 ㎝（復元で底面積 3.65 ㎡）、深さ北側で 125 ㎝、南側で５㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落・風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色細砂～細礫と灰黄色細砂～粗砂の混合層および黒褐色極細砂混じりシルト、下位が灰白色細砂～細礫と灰黄褐色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、斜面下方からの流入が見られ、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われるが、その途中の段階において、壁面由来のⅤ層が顕著な層がみられることもあり、壁面の崩落も伴っているようである。なお、人為的に埋め戻す最初の段階で、巨礫を２個体並べて投棄している。遺物は、石器（2,265.9 g）のみが出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、時期が判明する土器の出土がなく重複する遺構もないことから、不明とする。（河本）

SK147（第２分冊第 167 図、第４分冊写真図版 181）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 278 ㎝、短軸 253 ㎝、底部で長軸 220 ㎝、短軸 202 ㎝（底面積 3.44 ㎡）、深さ北東側で 149 ㎝、南西側で 135 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落・風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色細砂～細礫、灰黄

色シルトブロック土が散見されるにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび灰白色細砂～細礫と灰黄色極細砂混じりシルトの混合層、下位が灰黄色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の混合層である。廃絶時に土器を３個体底面に残したまま放置しており、当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、ブロック土を顕著に含む層が存在することから、人為的に埋め戻されていると思われるが、その最初の段階において、壁面由来のⅤ層が顕著な層がみられることもあり、壁面の崩落も伴っているようである。一度ほぼ埋まり切ったであろう後、掘り返して水平面を作りだし、にぶい黄褐色土で整地し、その上面で焼土が形成されている（SL10）。床面直上層より３個体土器が出土している。土坑の二次利用がみられる。遺物は、縄文土器（1,453.3 ｇ）が出土している。うち、土器３点（688～690）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から判断して、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK148（第２分冊第 167 図、第４分冊写真図版 181）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。大部分が伐木用重機道の造成時に削平されており北西側の一部が残存するのみである。重複する遺構はない。残存範囲の平面形は歪な半円形を呈し、規模は開口部で長軸 189 ㎝、短軸 37 ㎝、底部で長軸 192 ㎝、短軸 54 ㎝（残存で底面積 0.71 ㎡）、深さ 78 ㎝である。残存範囲では、断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色細砂～細礫、中位が灰白色細砂～細礫と黄灰色細砂～粗砂の互層および灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化または崩落による堆積が進行し、その後壁面の風化と外部からの風雨による堆積が交互に進行したものと思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK149（第２分冊第 167 図、第４分冊写真図版 181）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。大部分が伐木用重機道の造成時に削平されており北西側の一部が残存するのみである。重複する遺構はない。残存範囲の平面形はやや歪な半円形を呈し、規模は開口部で長軸 188 ㎝、短軸 67 ㎝、底部で長軸 185 ㎝、短軸 82 ㎝（残存で底面積 1.08 ㎡）、深さ 109 ㎝である。残存範囲では、断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色細砂～中砂ブロック土と灰白色細砂～細礫ブロック土の混合層、中位が暗灰黄色極細砂混じりシルト、下位が黄灰色細砂～中砂ブロック土と灰白色細砂～細礫ブロック土の混合層である。廃絶当初は壁面の風化または崩落による堆積が進行し、その後外部からの風雨による堆積が進むが、再び、壁面の風化または崩落による堆積が進行するようである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK150（第２分冊第 167 図、第４分冊写真図版 182）　北尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 177 ㎝、短軸 156 ㎝、底部で長軸 188 ㎝、短軸 161 ㎝（底面積 2.33 ㎡）、深さ西側で 54 ㎝、東側で 23 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側が外側へ斜めに立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土は上位が橙色～にぶい黄橙色シルト、中位がにぶい黄色シルトブロック土と明褐灰色～灰黄色真砂ブロック土の混合層、下位が明褐灰色シルト～細砂である。廃絶当初は壁面の風化による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は外部からの流入を主とする堆積が進むようであり、全体的に自然堆積の様相が強いと推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK151（第２分冊第 168 図、第４分冊写真図版 182）　北尾根に位置している。Ⅴ層で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で

長軸 166 ㎝、短軸 152 ㎝（底面積 1.92 ㎡）、深さ南西側で 109 ㎝、北東側で 33 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形、北東側は斜め外方へ立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色～灰黄色細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～粗砂ブロック土と灰白色真砂ブロック土の混合層、下位が灰白色～灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶初期の段階から斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。上位については植物擾乱を受けている可能性が考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK152（第２分冊第 168 図、第４分冊写真図版 182）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。西半部は根による攪乱のため正確な平面形を把握することはできなかったが、検出範囲の形状としては半円形を呈し、規模は開口部で長軸 156 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 222 ㎝、短軸 186 ㎝（底面積 3.03 ㎡）、深さ北側で 160、南側で 97 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび淡黄色～浅黄色極細砂混じりシルト、中位が部分的に灰白色細砂～細礫をともなう灰黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が褐灰色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK153（第２分冊第 168 図、第４分冊写真図版 182）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 224 ㎝、短軸 221 ㎝、204×長軸 227 ㎝、短軸 204 ㎝（底面積 3.62 ㎡）、深さ北側で 160 ㎝、南側で 119 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土下～中位に崩落・風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位～中位にかけては、埋土は１～５㎝大の浅黄色シルトブロック土を含む暗灰黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび、灰白色細砂～細礫と浅黄色～黄灰色細砂～粗砂の混合層が交互にみられ、下位は灰黄色シルト混じり細砂～極粗砂である。廃絶当初は主に壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われるが、その途中の段階において、壁面由来のⅤ層が顕著な層がみられることもあり、壁面の崩落も伴っているようである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK154（第２分冊第 169 図、第４分冊写真図版 183）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK157 に切られており、この遺構より古く、SK156 を切っており、この遺構より新しい。そのほか間接的に 23 基の遺構と重複している。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 224 ㎝、短軸 205 ㎝、底部で長軸 275 ㎝、短軸 252 ㎝（底面積 5.31 ㎡）、深さ北東側で 227 ㎝、南西側で 186 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の散見される灰黄褐色～褐灰色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色極細砂混じりシルトと灰黄褐色または浅黄橙色シルトの互層、下位がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は壁面の風化または崩落による堆積が進行し、その後壁面の風化と外部からの風雨による堆積が交互に進行する。およそ 2/3 程度が埋まった段階から後は、堆積土中にブロック土が散見されることや、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思

われる。遺物は、縄文土器が１点（47.7 ｇ）のみ出土している。この土器１点（691）を掲載した。掲載土器は、この遺構の重複関係が相対的に新しいことから混入の可能性がある。よって帰属時期は、重複する多くの遺構が時期不明であることから、同様に不明とする。（河本）

SK155（第２分冊第 169 図、第４分冊写真図版 183 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK156 に切られており、この遺構より古く、SK158 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 301 ㎝、短軸 177 ㎝、底部で長軸 291 ㎝、短軸 227 ㎝（底面積 5.06 ㎡）、深さ西側で 185 ㎝、東側で 167 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が下方にブロック土が目立つにぶい黄橙色～黒褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色褐色、にぶい黄橙色、黒褐色の３種類の極細砂混じりシルトの混合層、下位がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は主に壁面の風化・崩落による堆積が進行する。1/4 程度が埋まってから後の埋土はブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、石器（6.8 ｇ）のみ出土しているが、図示したものはない。このほか埋土上位の土壌を対象に炭化種実同定を実施した。その結果、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、直接、間接に重複する各土坑とも時期不明のものが多いため、本遺構の時期も不明とならざるを得ない。（河本）

SK156（第２分冊第 169 図、第４分冊写真図版 183 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK154 に切られており、この遺構より古く、SK155 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 227 ㎝、短軸 182 ㎝、底部で長軸 233 ㎝、短軸 176 ㎝（底面積 3.11 ㎡）、深さ南西側で 142 ㎝、171 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの混合層、下位が黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初の段階から、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続しており、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（60 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片もなく重複する遺構からも土器の出土がないことから不明とする。（河本）

SK157（第２分冊第 170 図、第４分冊写真図版 183）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK174 に切られており、この遺構より古く、SK154 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 224 ㎝、短軸 199 ㎝、底部で長軸 219 ㎝、短軸 194 ㎝（底面積 3.17 ㎡）、深さ 206 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形を呈し、東側がビーカー形を呈する。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の存在が目立つ灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位も同様にブロック土の存在が目立つ黒褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層である。廃絶当初は主に壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物がほぼ出土していないことから、不明とする。（河本）

SK158（第２分冊第 171 図、第４分冊写真図版 183）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK155・160 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 235 ㎝、短軸 173 ㎝、底部で長軸 238 ㎝、短軸 215 ㎝（表面積 3.97 ㎡）、深さ北側で 121 ㎝、南側で 87 ㎝である。断面形はやや凹凸を持つビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風

化した壁面と考えられるⅢ、Ⅳ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの混合層、下位が浅黄橙色シルトである。廃絶後主に壁面の風化・崩落による堆積が進行する。上位については、植物による擾乱がなされており、自然堆積か人為堆積か判断できない。遺物は、縄文土器（30 g）、石器（725 g）が出土している。このうち石器１点（2317）を掲載した。帰属時期は、文様が判別できる土器片がなく、重複する遺構からも土器の出土がないため、不明とする。（河本）

SK159（第２分冊第 171 図、第４分冊写真図版 184）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 266 ㎝、短軸 250 ㎝、底部で長軸 272 ㎝、短軸 254 ㎝（底面積 5.18 ㎡）、深さ 221 ㎝である。断面形はやや凹凸を持つフラスコ形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅢ、Ⅳ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてより明瞭なフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土を含むにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色～灰黄色極細砂混じりシルト、下位が黒褐色極細砂混じりシルトと灰黄色極細砂混じりシルト、にぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初の段階から、壁面の崩落による堆積が進み、2/3 程度が埋まった段階から後は、ブロック土が目立つことから、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は、床面に何かしら径４㎝程度の棒状のものを床面に差し込んでいた痕跡がみられた。遺物は出土していない。重複する遺構もないことから、時期不明である。（河本）

SK160（第２分冊第 171 図、第４分冊写真図版 184）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK345 に切られており、この遺構より古い。SK158・325・328 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 174 ㎝、短軸 144 ㎝、底部で長軸 184 ㎝、短軸 171 ㎝（底面積 2.44 ㎡）、深さ北側で 100 ㎝、南側で 47 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～黒褐色極細砂混じりシルト、中位がブロック土を含むにぶい黄橙色～黒褐色極細砂混じりシルト、下位が浅黄橙色シルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進行するが、その後はブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する各遺構からも遺物の出土はなく年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK161（第２分冊第 172 図、第４分冊写真図版 184）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は、経年的な地表流出により、南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は円形を呈し、規模は開口部で長軸 88 ㎝、短軸 69 ㎝、底部で長軸 84 ㎝、短軸 66 ㎝（残存で底面積 0.45 ㎡）、深さ 25 ㎝である。残存する断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫、下位が灰黄褐色極細砂混じりシルトである。埋土の残りが悪いため、人為堆積か自然堆積かは判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も無いことから不明とする。（河本）

SK162（第２分冊第 172 図、第４分冊写真図版 184 図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 244 ㎝、短軸 227 ㎝、底部で長軸 232 ㎝、短軸 217 ㎝（底面積 3.81 ㎡）、深さ北側で 249 ㎝、南側で 150 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が

存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色、灰黄褐色および黒褐色極細砂混じりシルト、中位が黄灰色～灰白色シルト混じり細砂～細礫および浅黄色～にぶい黄色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層、下位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後壁面の崩落および壁面の風化と外部からの風雨による堆積が交互に進行する。約1/2まで埋まってから後は、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（30ｇ）が出土するが、地文のみのため図示していない。帰属時期は、重複する遺構も無いため不明とする。（河本）

SK163（第２分冊第172図、第４分冊写真図版185）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸237㎝、短軸201㎝、底部で長軸220㎝、短軸205㎝（底面積3.46㎡）、深さ北西側で69㎝、南東側で19㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土上～中位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層およびにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の混合層、下位が暗灰黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。総じて自然堆積したものと推定される。なお、廃絶時に土器を１個体床面に置いていたようである。床面直上層より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（920.3ｇ）が出土している。このうち土器１点（692）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）に位置づけた。（河本）

SK164（第２分冊第172図、第４分冊写真図版185）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸192㎝、短軸176㎝、底部で長軸202㎝、短軸196㎝（底面積2.95㎡）、深さ北側で113㎝、南側で69㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が褐灰色～黒褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～灰黄色細砂～細礫、下位が黒褐色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も無いため不明とする。（河本）

SK165（第２分冊第173図、第４分冊写真図版185）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK166に切られており、この遺構より古い。平面形は円形を呈し、残存する規模は開口部で長軸142㎝、短軸111㎝、底部で長軸135㎝、短軸127㎝（底面積1.27㎡）、深さ北側で67㎝、南側で46㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が暗灰黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が浅黄色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層、下位が灰白色～黄褐色細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は、底面中央に長軸52㎝、短軸35㎝、深さ６㎝の副穴が存在する。

遺物はSK166と一括で取り上げた、縄文土器（15ｇ）がわずかに出土しているが、図示した遺物はない。帰属時期は、出土土器には文様が判別できる破片がないため、不明とする。（河本）

SK166（第２分冊第173図、第４分冊写真図版185）　北尾根中位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK165を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸162㎝、短軸138㎝、底部で長軸177㎝、短軸142㎝（底面積1.79㎡）、深さ北側で84㎝、南側で21㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側が斜め上方へ立ち上がる形を呈する。底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、中位が灰黄褐色～暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび灰白色～黄灰色細砂～細礫、下位が灰白色シルト混じり細砂～細礫。主に壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積とみられ、総じて自然堆積したものと考えられる。遺物はSK165と一括して取り上げた土器があり、上述のとおりである。、帰属時期は、出土土器には文様が判別できる破片がないため、不明とする。（河本）

SK167（第２分冊第173図、第４分冊写真図版185・186図）　北尾根中位に位置している。Ｖ層上面で検出した。大部分が伐木用重機道の造成時に削平されており西側の一部が残存するのみである。上ではSK145と重なるが、切り合い関係は存在しない。残存範囲の平面形は半円形を呈し、規模は開口部で長軸195㎝、短軸53㎝、底部で長軸194㎝、短軸89㎝（残存で底面積1.35㎡）、深さ117㎝である。残存する断面形はフラスコ形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色細砂～細礫と灰黄色細砂～粗砂の混合層、下位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび黄灰色～灰黄褐色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。約10㎝程度が埋まった段階で土器を投棄し、人為的に埋め戻されていると思われるが、その途中の段階において、壁面由来のＶ層が顕著な層がみられることもあり、壁面の崩落も伴っているようである。約2/3程度埋まった段階で、再び土器を投棄し、再度人為的に埋め戻されていると思われる。なお、上位埋土から出土した土器内部の堆積土は下方が黒色化しており、何らかの有機物が納められた状態で投棄されたものと考えられる。埋土上位より１個体、埋土下位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（3,475.4ｇ）が出土している。うち、土器２点（693・694）を掲載した。このほか埋土上位から出土した埋設土器内土壌を対象に炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミが少量検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、掲載土器から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）に位置づけた。（河本）

SK168（第２分冊第173図、第４分冊写真図版186）　北尾根頂部に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK169に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸241㎝、短軸171㎝、底部で長軸206㎝、短軸181㎝（残存で底面積2.71㎡、復元で底面積2.80㎡）、深さ北西側で133㎝、南東側で106㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が明黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が暗灰黄色細砂～細礫と明黄褐色シルトブロック土の互層、下位が灰白色シルトブロック土と明黄褐色シルトブロック土の互層である。下～中位は互層状になっていることから自然に堆積し、上位は人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構から、縄文時代中期末葉以前（大木10式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK169（第２分冊第173図、第４分冊写真図版186図）　北尾根頂部に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK168を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸204㎝、短軸174㎝、底部で長軸227㎝、短軸200㎝（底面積3.50㎡）、深さ北西側で177㎝、南東

側で 116 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位は北西側が灰白色細砂～細礫およびにぶい橙色シルトブロック土、南東側は暗灰黄色極細砂混じりシルトと灰黄色細砂～粗砂の互層、下位は黄褐色ブロック土を含む黄灰色細砂～細礫である。廃絶初期の段階から、ブロック土を含む層や斜面下方からの流入が見られることから、一部壁面の崩落による堆積も認められるが、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。埋土上位より土器片が出土している。遺物は、縄文土器（296.7 ｇ）が出土するが、図示した遺物はない。帰属時期は、文様が判別する破片から、縄文時代中期末葉（大木 10 式併行）に位置づけた。（河本）

SK170（第２分冊第 174 図、第４分冊写真図版 186）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 240 ㎝、短軸 206 ㎝、底部で長軸 200 ㎝、短軸 185 ㎝（底面積 2.77 ㎡）、深さ南西側で 131 ㎝、北東側で 86 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形、北東側がビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層およびにぶい黄褐色ブロック土を含む黄灰色細砂～細礫、下位が暗灰黄色細砂～細礫である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後風化・崩落が伴うようになり壁面に由来するⅤ層と同質の土が主として堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから時期不明とする。（河本）

SK171（第２分冊第 174 図、第４分冊写真図版 187）　北尾根の中位平坦面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 121 ㎝、短軸 107 ㎝、底部は西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 94 ㎝、短軸 48 ㎝（復元で底面積 0.72 ㎡）、深さ北側で 89 ㎝、南側で 56 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色～暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび黄灰色シルト混じり細砂～細礫、中位が灰色～黄灰色細砂～細礫、下位が暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK172（第２分冊第 174 図、第４分冊写真図版 187）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 169 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長軸 163 ㎝、短軸 148 ㎝（底面積 1.86 ㎡）、深さ北西側で 129 ㎝、南東側で 83 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の散見されるにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位上部が黄灰色細砂～細礫およびにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位下部が灰黄色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、下位が灰黄色細砂～細礫およびにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後、崩落・風化も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。1/2 程度埋まってから後は、ブロック土を含む層が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄

文土器（３ｇ）がわずかに出土するのみで、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片もなく、重複遺構もないため不明とする。（河本）

SK173（第２分冊第 174 図、第４分冊写真図版 187）　中尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 195 ㎝、底部で長軸 238 ㎝、短軸 224 ㎝（底面積 4.10 ㎡）、深さ 140 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の散見されるにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰黄色～黄灰色細砂～細礫、中位が灰白色細砂～細礫、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後、風化・崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。1/2 程度埋まってから後は、ブロック土が散見され、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないことから不明とする。（河本）

SK174（第２分冊第 170 図、第４分冊写真図版 187 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK157 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 252 ㎝、短軸 235 ㎝、底部で長軸 245 ㎝、短軸 205 ㎝（底面積 3.70 ㎡）、深さ北西側で 150 ㎝、南東側で 104 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色・灰黄褐色およびにぶい黄橙色シルト～極細砂混じりシルトの混合層、下位がにぶい黄橙色シルトである。廃絶初期の段階から斜面下方からの流入が見られ、ブロック土も含まれることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は、副穴としては小さいが床面中央やや北側に、径約 12 ㎝、深さ 12 ㎝の何らか棒状のものが差し込まれたであろう痕跡が確認できた。遺物は、縄文土器（114 ｇ）が出土しているが、図示したものはなく、文様が判別できる破片はない。帰属時期は、重複がもっとも新しい遺構であるが、重複する各遺構からも出土遺物がほぼ無いことから不明とせざるを得ない。（河本）

SK175（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 188）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 164 ㎝、短軸 145 ㎝、底部で長軸 169 ㎝、短軸 153 ㎝（底面積 1.94 ㎡）、深さ 65 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈するが、埋土中位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてより明瞭なフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～黄灰色細砂～細礫、下位が黄褐色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色～灰色極細砂～粗砂である。廃絶当初の段階から、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、部分的に壁面が風化・崩落したところも認められるが、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。ただし、その土質をみるとブロックなどは見られないことから、自然堆積した可能性も考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も無いことから不明とする。（河本）

SK176（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 188）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南側が伐木用重機道の造成時に削平されており北側の一部が残存するのみである。SK177 に切られており、この遺構より古く、SK178 を切っており、この遺構より新しい。造成時の削平に加え、北側は根による攪乱を受けているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 150 ㎝と推定される。底部は長軸 173 ㎝、短軸 138 ㎝（底面積

1.97 ㎡）、深さ北東側で 135 ㎝、南西側で 92 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形を呈するが、北東側は SK177 による削平のため不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄色～暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、中位がブロック土を含む暗灰黄色～黄灰色極細砂混じりシルト、下位が黄灰色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層である。廃絶初期の段階からブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物が出土しないため、不明とする。（河本）

SK177（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 188）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK176 を切っており、この遺構より新しい。南側の壁面は脆く掘削時に自然と崩壊してしまい、また北側は根による攪乱を受けているため、正確な平面形を把握することは困難だが、断面や残存する輪郭から、およそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸約 90 ㎝、短軸約 75 ㎝と推定される。底部は長軸 138 ㎝、短軸 115 ㎝（復元で底面積 1.12 ㎡）、深さ 98 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形を呈するが北東側は攪乱のため不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄褐色シルトと灰白色細砂～細礫の互層、下位が灰黄褐色シルト混じり細砂～極粗砂および灰黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後ブロック土が顕著になることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物が出土しないため、不明とする。（河本）

SK178（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 188）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南側が伐木用重機道の造成時に削平されており北側の一部が残存するのみである。SK176 に切られており、この遺構より古い。造成時および SK176 による削平のため、正確な平面形を把握することは困難だが、断面や残存する輪郭から、およそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸約 115 ㎝、短軸約 70 ㎝と推定される。底部については削平が甚だしく規模は不明である。深さ 87 ㎝である。断面形は不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色細砂～細礫、中位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫、下位が黄灰色シルト混じり細砂～細礫と灰白色細砂～細礫の互層である。小規模な堆積単位に分かれるため、人為堆積の可能性が高いと思われるが、残りが悪いために断定できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物が出土しないため不明とする。（河本）

SK179（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 188）　中尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 168 ㎝、底部で長軸 173 ㎝、短軸 150 ㎝（底面積 1.99 ㎡）、深さ北西側 102 ㎝、南東側 28 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側が斜め外方へ立ち上がる形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～細礫とにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後の堆積物は壁面に見られるⅤ層由来の砂礫からなることから、主に壁面の風化・崩落により堆積したと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も無いことから不明とする。（河本）

SK180（第２分冊第 176 図、第４分冊写真図版 188）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK181 を切っており、この遺構より新しい。西半部は壁面が崩落してしまったため、正確な平面形は把握できなかったが、残存する輪郭や断面での検討から、円形を呈し、規模は開口部で径約 250 ㎝と

推定される。底部で長軸 235 ㎝、短軸 209 ㎝（底面積 3.76 ㎡）、深さ北側で 186 ㎝、南側で 167 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫の互層およびにぶい黄橙色シルトブロック土を含むにぶい黄橙色～黒褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、浅黄橙色極細砂混じりシルト、にぶい黄橙色シルトの互層である。ブロック土を含み一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、部分的に壁面の崩落も生じているようだが、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物が出土しないため、不明とする。（河本）

SK181（第２分冊第 176 図、第４分冊写真図版 189）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK180 に切られており、この遺構より古い。西半部は壁面が崩落し北側は SK180 に削平されているため、正確な平面形は把握できなかったが、残存する輪郭や断面での検討から、円形を呈し、規模は開口部で径約 175 ㎝と推定される。底部で長軸 268 ㎝、短軸 249 ㎝（底面積 4.98 ㎡）、深さ北側で 261 ㎝、南側で 213 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が浅黄橙色～にぶい黄橙色シルト、中位がにぶい黄褐色～黒褐色極細砂混じりシルトおよび浅黄橙色～にぶい黄橙色シルト、下位がにぶい黄橙色～黒褐色極細砂混じりシルトやにぶい黄橙色～黄橙色シルトの互層である。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むも、比較的早い段階でブロック土を含む層がみられることから、部分的には壁面の崩落が生じつつも、主に人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物が出土しないため、時期は不明とする。（河本）

SK182（第２分冊第 175 図、第４分冊写真図版 189 図）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 235 ㎝、短軸 161 ㎝、底部で長軸 208 ㎝、短軸 198 ㎝（底面積 3.21 ㎡）、深さ北側で 133 ㎝、南側で 84 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてより明瞭なフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色細砂～細礫ブロック土を含むにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黄灰色細砂～極粗砂と灰白色細砂～細礫の混合層、下位が灰黄色細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。一時的に堆積物の供給速度が弱まり生物擾乱の作用が強く反映されたためか、下位埋土の上部はやや暗色化している。その後、壁面の崩落・風化と外部からの風雨による堆積が進行する。1/2～2/3 程度埋まってから後は、ブロック土を含む層が堆積していることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（32 ｇ）がわずかに出土しているのみであり、文様が判別できる破片もないため図示した遺物はない。帰属時期は、重複する遺構も無いため不明とする。（河本）

SK183（第２分冊第 177 図、第４分冊写真図版 189）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。北側を掘りすぎてしまったが、残存する平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 147 ㎝、短軸 111 ㎝、底部で長軸 113 ㎝、短軸 103 ㎝（底面積 0.78 ㎡）、深さ北側で 59 ㎝、南側で 19 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色極細砂混じりシルトおよび灰白色細砂～細礫、中位が灰白色真砂ブロック土を含む黄灰色～灰黄色シルト混じり細砂～粗砂、下位が黄灰色～黒色極細砂混じりシルトである。最下層は黒色化が顕著であり、炭化種実が含まれていることから、廃絶当初は何らかの有機物が床面に放

置された状態であり、主に外部からの風雨による堆積が進行する。その後、崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。総じて自然堆積したものと推定される。遺物は出土していない。このほか、床面から採取した土壌を対象に炭化種実同定を実施している。その結果、炭化種実（オニグルミ・クリ・トチノキほか）が検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK184（第２分冊第 177 図、第４分冊写真図版 190）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。大部分が伐木用重機道の造成時に削平されており北西側の一部が残存するのみである。重複する遺構はない。残存範囲の平面形は歪な半円形を呈し、規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 53 ㎝、底部で長軸 180 ㎝、短軸 78 ㎝（残存で底面積 0.96 ㎡）、深さ 91 ㎝である。残存範囲では、断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色細砂～粗砂、中位が灰黄色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、下位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。下位は外部からの流入であるが、残りが悪く人為か自然かどちらの要因で堆積したかは判断できない。中～上位は壁面の風化または崩落と思われるⅤ層由来の土が堆積しており、自然に堆積した可能性が考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなくほかに年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK185（第２分冊第 177 図、第４分冊写真図版 190）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 335 ㎝、短軸 274 ㎝、底部で長軸 247 ㎝、短軸 177 ㎝（復元で底面積 5.14 ㎡）、深さ北東側で 133 ㎝、南西側で 99 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の散見される灰黄褐色～黒褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルトと黒褐色極細砂混じりシルトの互層、下位がにぶい黄橙色シルトである。下位はⅣ層に由来する均一なシルトが堆積するが、壁面にはⅤ層が露出していることから、人為的に埋められたものである可能性がある。なお、下位でもその上部は、生物擾乱を受けているようである。中位は多様な土質が薄層状に連続して堆積していることから、外部からの流入による自然堆積と考えられる。上位は中位とは堆積構造が異なっており、ブロック土が散見されることから、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は、縄文土器（824.9 ｇ）、石器（989.6 ｇ）が出土した。このうち、土器１点（695）、石器３点（1930・2196・2279）を掲載した。出土土器は、掲載不掲載を問わず文様が判別できる破片が無いため、時期は不明とする。（河本）

SK186（第２分冊第 178 図、第４分冊写真図版 190）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 111 ㎝、短軸 87 ㎝、底部で長軸 91 ㎝、短軸 68 ㎝（底面積 0.46 ㎡）、深さ南側で 13 ㎝、北側で 25 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が褐灰色極細砂混じりシルト、下位がにぶい褐色極細砂混じりシルト、自然に堆積したものと思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もないため、不明とする。（河本）

SK187（第２分冊第 178 図、第４分冊写真図版 190・191）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。上半部は掘りすぎてしまい、その平面形については推定となるが、およそ円形を呈し、規模は開口部で径約 185 ㎝、底部で長軸 204 ㎝、短軸 189 ㎝（底面積 3.11 ㎡）、深さ北西側で 116 ㎝、南東側で 79 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰白色～暗灰黄色細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～粗砂と灰

白色細砂～細礫の互層、下位が黄灰色シルト混じり細砂～極粗砂である。廃絶時には土器を２個体底面に残したまま放置していたようだが、下 1/4 程度が埋まった段階で土器を１個体投棄している。その後、壁面の崩落が生じているようだが、さらにその後に土器を１個体正位に埋設している。その後はそれまでと堆積構造が変化し、小単位ずつ堆積している様子が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。なお、正位に埋設された土器（700）内部の堆積土は下方が黒色化しており、何らかの有機物が納められた状態で埋設された可能性が考えられる。遺物は、縄文土器（9,897.1 ｇ）が出土している。このうち、土器５点（696～700）を掲載した。このほか埋土中位から出土した埋設土器内の土壌を対象とした放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施した（試料名 P11）。その結果、暦年較正年代（１σ）で 2469～2404calBC の間に２つの範囲で示される年代観が得られた（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a 式新段階～8b 式新段階併行）の間に位置づけた。（河本）

SK188（第２分冊第 178 図、第４分冊写真図版 191）　中尾根頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 149 ㎝、短軸 138 ㎝、底部で長軸 175 ㎝、短軸 146 ㎝（底面積 2.02 ㎡）、深さ北西側で 128 ㎝、南東側で 91 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫、中位が黄灰色細砂～細礫および暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫と黄灰色細砂～細礫、下位が灰黄色～黄灰色シルト混じり細砂～細礫である。ブロック土が認められず、埋土の多くが壁面にみられるⅤ層由来のものであることから、主として壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行するようである。上位については植物擾乱を受けている可能性が考えられる。遺物は出土していない。重複する遺構もないため、時期不明とする。（河本）

SK189（第２分冊第 178 図、第４分冊写真図版 191）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 223 ㎝、短軸 190 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 170 ㎝（底面積 2.49 ㎡）、深さ北側で 147 ㎝、南側で 81 ㎝である。断面形はやや凹凸のあるビーカー形を呈する。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルトを介在させるにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい褐色～黒褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複する遺構もないため、時期不明とする。（河本）

SK190（第２分冊第 179 図、第４分冊写真図版 192・200）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 207 ㎝、短軸 181 ㎝、底部で長軸 207 ㎝、短軸 203（底面積 3.08 ㎡）、深さ北西側で 91 ㎝、南東側で 19 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄灰色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、中位が灰白色細砂～細礫と灰黄色細砂～粗砂の互層、下位が灰黄色褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後の堆積物は壁面に見られるⅤ層由来の砂礫からなることから、主に壁面の風化・崩落により堆積したと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構も無いことから、不明とせざるを得ない。（河本）

SK191（第２分冊第 179 図、第４分冊写真図版 192）　北尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 198 ㎝、短軸 172 ㎝、底部で長軸 190 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.58 ㎡）、深さ北西側で 88 ㎝、南東側で 34 ㎝である。断面形

はビーカー形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土を含む暗灰黄色細砂～極粗砂、中位がブロック土を含む黄灰色細砂～極粗砂、下位が灰白色細砂～細礫と灰黄色細砂～粗砂の互層である。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。その後はブロック土が目立つことから、人為的に埋め戻されていると思われる。埋め戻す過程において、土器を１個体投棄している。土器内部の堆積土は下方が黒色化しており、何らかの有機物が納められた状態で投棄されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（2,299 ｇ）が出土している。このうち土器１点（701）を掲載した。帰属時期は出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK192（第２分冊第 179 図、第４分冊写真図版 192）　中尾根頂部に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、西側のみを検出した。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 152 ㎝、短軸 90 ㎝、底部で長軸 114 ㎝、短軸 72 ㎝（残存で底面積 0.66 ㎡）、深さ 63 ㎝である（※検出部のみ）。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位が黄褐色～暗灰黄色極細砂混じりシルト、中位が灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位が黄灰色細砂～細礫と黄褐色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。半分程度埋まった段階からは、それまでと堆積構造が変化し、小単位ずつ堆積している様子が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複する遺構がなく時期決定の証拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK193（第２分冊第 179 図、第４分冊写真図版 192）　中尾根の北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 271 ㎝、短軸 235 ㎝、底部で長軸 266 ㎝、短軸 212 ㎝（底面積 4.20 ㎡）、深さ南西側で 125 ㎝、北東側で 38 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形、北東側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が褐灰色極細砂混じりシルトおよび灰白色～浅黄色極細砂～極粗砂ブロック土を含む明黄褐色～にぶい黄橙色シルト、中位は南西側が灰白色細砂～細礫と明黄褐色シルトの互層、北東側が黄灰色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色～にぶい黄橙色シルト、下位は黄灰色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むも、比較的早い段階で斜面下方からの流入が見られブロック土も含まれることから、部分的には壁面の崩落が生じつつも、主に人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（河本）

SK194（第２分冊第 180 図、第４分冊写真図版 193）　中尾根の北斜面に位置している。Ⅴ層上面～Ⅳ層中にかけて検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 244 ㎝、短軸 238 ㎝、底部で長軸 266 ㎝、短軸 227 ㎝（底面積 4.28 ㎡）、深さ南西側で 200 ㎝、北東側で 115 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土を含むにぶい黄橙色～暗褐色極細砂混じりシルト、中位が灰白色～浅黄色細砂～細礫とにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位が浅黄色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後壁面の風化・崩落も併行して生じるようになりⅤ層に由来するブロック土も堆積するようになる。1/3 程度埋まってから後は、ブロック土が目立つようになるので、人為的に埋め戻されていると思われる。床面より土器片が１点出土している。遺物は、縄文土器（1,256.6 ｇ）が出土している。このうち土器２点（702・

703）を掲載した。帰属時期は、底面から出土した 703 から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK195（第２分冊第 180 図、第４分冊写真図版 193）　中尾根の北斜面に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 112 ㎝、短軸 108 ㎝、底部で長軸 99 ㎝、短軸 90 ㎝（底面積 0.69 ㎡）、深さ南西側で 32 ㎝、北東側で５㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄褐色シルト、中位がにぶい黄色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色シルトである。一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構がなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（河本）

SK196（第２分冊第 180 図、第４分冊写真図版 193）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。北側は掘りすぎてしまったため正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭や断面での観察からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 90 ㎝、底部は径約 80 ㎝（0.13 ㎡、※残存部）と推定される。深さ西側で 67 ㎝、東側で 38 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅢ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土はブロック土を含む暗褐色極細砂混じりシルトを主体とする。ブロック土が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構がなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（河本）

SK197（第２分冊第 181 図、第４分冊写真図版 193）　中尾根の北斜面に位置している。Ⅲ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 295 ㎝、短軸 242 ㎝、底部で長軸 283 ㎝、短軸 219 ㎝（底面積 4.54 ㎡）、深さ南西側で 253 ㎝、北東側で 173 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土を含むにぶい黄褐色～黒褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色極細砂混じりシルト、にぶい黄橙色～黄褐色シルト、黄灰色～暗灰黄色細砂～細礫の混合層。下位がにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫と黄灰色細砂～細礫の互層である。廃絶初期の段階から斜面下方からの流入が見られ、埋土にブロック状の堆積単位も見られることから、部分的に壁面の崩落も生じているようだが、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（河本）

SK198（第２分冊第 181 図、第４分冊写真図版 194）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。重複する遺構はない。南東側は掘りすぎてしまったため正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭や断面での観察からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 190 ㎝と推定される。底部は長軸 194 ㎝、短軸 181 ㎝（底面積 2.77 ㎡）、深さ南西側で 86 ㎝、北東側で 45 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅢ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黒褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色、暗灰黄色、黒褐色の３種の極細砂混じりシルトブロック土の混合層である。廃絶初期の段階からブロック土が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると考えられる。なお、埋め戻している作業の中で土器を１個体投棄している。出土遺物は、埋土上位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（4,390.8 ｇ）が出土した。このうち土器１点（704）を掲載した。このほか埋土上位出土の土器内土壌を対象として炭化材種実同定を実施している。結果、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）の可能性がある。（河本）

SK199（第２分冊第 181 図、第４分冊写真図版 194）　北尾根の南斜面上位に位置している。検出は、表土除去後のⅤ層面で行った。他遺構との重複はないが、周囲には北東から時計回りに SK235、210、281、227、215、217 が囲むように位置する。平面形は円形を呈し、開口部の規模は径 135 ㎝、深さ 67 ㎝である。底面の規模は、長軸 147 ㎝、短軸 135 ㎝である（底面積 1.46 ㎡）。断面形は、残存が少なく明確ではないが、フラスコ形を呈すると考えられる。底面は平坦に構築されており、ほぼ中央に副穴がある。規模は径 24 ㎝前後、深さ９㎝である。堆積土は上層（１～３層）と下層（４層）に大別できる。上層は明黄褐色から黄褐色を呈する砂質シルトで風化花崗岩粒が帯状に含まれる。壁面の崩落が中心で、自然堆積層と考えられる。下層は凸状に堆積するもので、にぶい黄褐色を呈する砂質シルトである。最下層の堆積状況から、開口部の下から堆積が開始されたと考えられ、自然堆積の可能性があるが断定できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（西澤）

SK200（第２分冊第 182 図、第４分冊写真図版 195）　北尾根の南斜面中位の東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側で SK70、南東側で SK201 と重複しこれより新しい。北側で SK79 と接するが重複関係にはない。平面形は不整な円形である。規模は開口部で長軸 102 ㎝、短軸 79 ㎝、底部で長軸 88 ㎝、短軸 80 ㎝、深さは最深部で 61 ㎝である（底面積 0.65 ㎡）。断面形はフラスコ形で、底面から深く内傾して立ち上がり、上位で僅かに外反しながら開口部に至る。底面は南東側に向かい低く傾斜する。堆積土は２層からなる。上位は風化花崗岩粒・炭化物粒を微量含む暗褐色シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SK70 や SK201 から出土遺物がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK201（第２分冊第 182 図、第４分冊写真図版 195）　北尾根の南斜面中位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SK200、東側で SK70、南東側で SK202 と重複する。前者より古く、後２者より新しい。平面形は不整な円形である。規模は開口部で長軸 140 ㎝、短軸 117 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 141 ㎝、深さは最深部で 178 ㎝である（底面積 1.56 ㎡）。断面形はフラスコ形で、北壁側は底面から内傾して立ち上がる。南壁側はやや内傾して立ち上がったのち、一旦中位で括れ、外反しながら開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は９層で構成される。全体的に風化花崗岩粒・炭化物粒を微量含むにぶい黄褐色シルト主体で構成される。中～下位にかけてにぶい黄褐色～褐色シルトが局所的に斑状に混じる状況から、人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SK70・200・202 からも遺物の出土なく年代、不明とする。（丸山）

SK202（第２分冊第 182 図、第４分冊写真図版 195）　北尾根の南斜面中位の東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SK201 と重複し、これにより切られる。平面形は不整な円形である。規模は開口部で長軸 163 ㎝、短軸 121 ㎝、底部で長軸 158 ㎝、短軸 106 ㎝、深さは最深部で 63 ㎝である（底面積 1.51 ㎡）。北側断面形はフラスコ形、南半部断面はおおむねビーカー形を呈する。底面は平坦である。堆積土は２層で構成される。上位は炭化物を微量含む暗褐色シルト、下位は暗褐色シルトを斑に含むにぶい黄褐色シルトが堆積する。全体に風化花崗岩粒を微量含む。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SK201 からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK203（第２分冊第 182 図、第４分冊写真図版 195）　北尾根の南斜面中位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南側で SK79 と重複し、これにより切られる。また、プランの大部分が北側の調査区外に掛かっているため、南端部以外は未調査である。残存する平面形は楕円形基調である。規模は

判明する開口部径 188 ㎝、深さは最深部で 199 ㎝である（残存で底面積 0.20 ㎡）。底面から壁面中位にかけて、新期の遺構掘削時に失われているため、立ち上がりや底面の様子については不明である。残存部の断面形はフラスコ形基調で、中位でやや括れ、上位で外反しながら開口部に至る。残存部の堆積土は６層からなる。上位は風化花崗岩細礫・粗砂ブロックを含む黒褐色シルト、中位はにぶい黄褐色ブロックを含む暗褐色シルト、下位は地山の崩落土・褐色シルトブロックを含む暗褐色シルトが堆積する。堆積土中に認められる右肩上がりの炭化物の堆積状況・ブロック土の堆積などから判断して人為的に埋め戻された土坑と考えられる。遺物は出土していない。重複する SK79 よりも古いため、帰属時期は縄文時代中期中葉（大木 8a ～ 8b 式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK204（第２分冊第 182 図、第４分冊写真図版 196 図）　北尾根の南斜面中位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側が調査区域外にかかる。重複する遺構はない。平面形は楕円形である。規模は開口部径 151 ㎝、底部径 152 ㎝、深さは最深部で 214 ㎝である（復元で底面積 0.79 ㎡）。断面形はフラスコ形で、北西側は底面からやや膨らみをもって内傾する。南東側は中位に一旦括れを持ち、その後外反して開口部に至る。底面はⅤ層を掘り込んでおり、ほぼ平坦である。堆積土は 10 層で構成される。上位は風化花崗岩粒を微量含む褐灰色～にぶい黄橙色シルト、中位は風化花崗岩粒を少量含む黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩を多く含むにぶい黄橙色砂質シルトが堆積する。埋土の半分ほどが斜面下方からの一方向堆積であり、埋土中に地山の再堆積土の混入が多く認められることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（652 ｇ）が出土しているが、文様が判別できる破片はなく、図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（丸山）

SK205（第２分冊第 147 図、第４分冊写真図版 196）　北尾根の南斜面最下位に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。SK67 と上下で重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は、いびつな楕円形を呈しているが、精査中に大きく崩落したことから本来の形態を示していない。崩落後の規模は、開口部で長軸 177 ㎝、短軸 159 ㎝、底部で長軸 172、短軸 107 ㎝の規模である（底面積 1.35 ㎡）。深さは 78 ㎝である。断面形は現状では深いＵ字形を呈するが、上述の通り、本来の形態を留めていない。底面はやや凹凸がある。堆積土は単層で、風化花崗岩粒を多く含む褐灰色砂質シルトである。単層のため自然堆積か否かは判断できない。深さがあることなどから、形態は崩れているものの、周囲の遺構と同様の遺構（貯蔵穴）と考えられる。遺物は、縄文土器（453.8 ｇ）が出土した。このうち土器１点（705）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式古段階併行）に位置づけた。（西澤）

SK206（第２分冊第 148 図、第４分冊写真図版 196 図）　北尾根の南斜面最下位東端に位置している。検出は包含層４の除去後、Ⅴ層上面で行っている。現状では、SK62 と SK77 と重複しており、いずれの遺構よりも古い。ただし、SK62 の開口部は崩落が大きく、本来は重複していない可能性がある。平面形は、残存範囲から推定すると楕円形を呈する。規模は、現状で長軸 93 ㎝、短軸 49 ㎝、深さ 60 ㎝である（残存で底面積 0.14 ㎡）。断面形は、残存範囲が少なく明確ではないが、Ｕ字形あるいはビーカー形を呈すると推定される。堆積土は、１層は暗褐色シルト、２層は褐色砂質シルトであるが、残存割合が少なく、人為か自然堆積かの判断はできない。遺物は、縄文土器（65.3 ｇ）が出土したが、文様が判別できる破片はない。したがって図示したものはない。帰属時期は、重複する SK77 から、縄文時代中期中葉（大木 8a ～ 8b 式併行）以前に位置づけた。（西澤）

SK207（第２分冊第 183 図、第４分冊写真図版 196）　北尾根の南斜面最下位中央に位置している。検出は、包含層２を構成するⅢｃ～ｄ層除去後で行っており、Ⅲｅ層を掘り込んで構築されている。重

複は、SI32 とであり、本遺構の方が古い。平面形はいびつな楕円形を呈し、開口部の規模は長軸 42 ㎝、短軸 38 ㎝、深さ 44 ㎝である（底面積 0.05 ㎡）。断面形は「U」字形を呈し、底面は緩やかである。堆積土は灰黄褐色シルトの単層であり、堆積状況は不明である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）より以前の時期を想定する。

（西澤）

SK208（第２分冊第 183 図、第４分冊写真図版 197）　北尾根の南斜面最下位中央に位置している。検出は、包含層２を構成するⅢｃ～ｄ層除去後で行っており、Ⅲｅ層を掘り込んで構築されている。重複は、SI32 とであり、本遺構の方が古い。平面形はいびつな楕円形を呈し、開口部の規模は長軸 101 ㎝、短軸 53 ㎝、深さ 57 ㎝である（底面積 0.13 ㎡）。断面形は「U」字形を呈し、底面は緩やかである。堆積土は黒褐色シルトの単層であり、堆積状況は不明である。遺物は、縄文土器（398.6 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる破片は、少量ながらⅡ～Ⅴ群まで多岐にわたる。包含層２の遺物が含まれているからであろう。このほか遺構堆積土を対象として骨・貝類同定を実施している。その結果、貝類の殻片・硬骨魚綱の鱗片などが検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器からは限定できないが、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前と想定する。

（西澤）

SK209（第２分冊第 183 図、第４分冊写真図版 197）　北尾根の南斜面中位東端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南東側で SI29・30 と重複し、前者より古く、後者より新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 187 ㎝、短軸 179 ㎝、底部で長軸 188 ㎝、短軸 173 ㎝、深さは最深部で 247 ㎝である（底面積 2.47 ㎡）。断面形は歪なフラスコ形で、北西側は底面から内傾して立ち上がる。南東側は外傾して立ち上がり、中程に段を持つ。底面はほぼ平坦である。堆積土は８層で構成される。上位は暗灰黄色ブロックを少量含む黄灰色細砂混じりシルト、中位は風化花崗岩をブロックと層状に含む黄灰色細砂混じりシルト、下位は風化花崗岩粒を帯状に含む黄橙色細礫混じりシルトが堆積する。全体的に地山の再堆積土をブロック・層・帯状に含み、その堆積状況にも偏りが見られること、ほぼ水平に埋まっていることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（2,049.2 ｇ）が出土している。このうち土器６点（706～711）を掲載した。帰属時期は、出土土器から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。

（丸山）

SK210（第２分冊第 183 図、第４分冊写真図版 197）　北尾根の南斜面上位中央に位置している。検出は表土除去後のⅤ層で行った。重複は SK301 とであり、先後関係は本遺構の方が新しい。平面形は、北東－南西方向にやや長い楕円形を呈し、開口部の規模は、長軸 223 ㎝、短軸 172 ㎝、深さ 148 ㎝である。底面の規模では、長軸 252 ㎝、短軸 217 ㎝で、開口部よりも大きく、さらに北と西側にふくらんでいる（底面積 4.02 ㎡）。したがって、断面形は、西側がフラスコ形を呈するが、東側がビーカー形に近い形状である。底面は平坦に構築されており、中央に副穴がある。規模は径 45～50 ㎝で、深さ９㎝である。堆積土は上層（１層）、中層（２・３層）、下層（４層）の３つに大別できる。上層は、褐色を呈する砂質シルトで、褐色シルトがブロックで含まれている。中層は、２層が壁面の崩落土の可能性が考えられる風化花崗岩層である。３層は、堆積方向から斜面下方から流入した可能性が高く、したがって、人為堆積と考えられる。下層は、風化花崗岩層に褐色シルトブロック層が交互に重なっているところも観察でき、人為堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも土器の出土がないことから不明とする。

（西澤）

SK211（第２分冊第 184 図、第４分冊写真図版 197）　北尾根頂部に位置している。SI46 床面で検出した。SK216 に切られており、この遺構より古い。西側の一部が調査区外におよび、北側は SK216 に削

平されているため不明な部分もあるが、平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 249 ㎝、短軸 205 ㎝と推定される。底部で長軸 205 ㎝、短軸 199 ㎝（底面積 2.96 ㎡）、深さ 46 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色シルト、中位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトと灰白色～黄灰色細砂～細礫の混合層、下位が黄灰色～灰黄色細砂～細礫およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）以前と想定するが、重複関係がもっとも古いことを考慮すると、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に限定できるかもしれない。（河本）

SK212（第２分冊第 184 図、第４分冊写真図版 198）　北尾根頂部に位置している。SI46 床面で検出した。SK216 を切っており、この遺構より新しい。平面形は北西部の壁面が崩落してしまったが、残存する輪郭からおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸約 200 ㎝、短軸約 180 ㎝と推定される。底部で長軸 213 ㎝、短軸 201 ㎝（底面積 3.17 ㎡）、深さ 90 ㎝である。断面形は東側がフラスコ形、西側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が橙色シルト、中位が黄灰色細砂～細礫ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄色極細砂混じりシルトブロック土を含む灰白色細砂～細礫である。廃絶初期の段階からブロック土が主として堆積しており、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）の間にあると想定する。（河本）

SK213（第２分冊第 185 図、第４分冊写真図版 198）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK214 を切っており、この遺構より新しい。平面形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 255 ㎝、短軸 218 ㎝、底部で長軸 244 ㎝、短軸 205 ㎝（底面積 3.85 ㎡）、深さ北西側で 159 ㎝、南東側で 117 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黄褐色極細砂混じりシルト、中位がブロック土を含む灰黄褐色～黒褐色シルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶初期の段階で壁面の崩落による堆積が生じている可能性があるが、その後はブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。副穴などは検出されず、遺物も出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK214（第２分冊第 185 図、第４分冊写真図版 198）　北尾根の南斜面上位に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、東半部のみを検出した。Ⅲ層中で検出した。SK213、SK320 に切られており、これらの遺構より古い。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 239 ㎝、短軸 109 ㎝、底部で長軸 212 ㎝、短軸 95 ㎝（残存で底面積 1.57 ㎡）、深さ 166 ㎝である（※検出部のみ）。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色シルトおよび灰黄褐色極細砂混じりシルトと浅黄橙色シルトの互層、中位がブロック土を含む黒褐色シルト、下位が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび浅黄橙色シルトである。廃絶初期の段階からブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻され

ていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK215（第２分冊第 186 図、第４分冊写真図版 198）　北尾根の南斜面上位中央に位置している。検出は表土除去後のⅤ層で行った。上部が大きく削平されており、残存部分は少ない。他遺構との重複はないが、周囲には、北から時計回りに SK217、SK199、SK227、SK228、SK223 があり、囲まれている。平面形は、楕円形を呈し、開口部の規模は、長軸 148 ㎝、短軸 132 ㎝、深さ 48 ㎝である。底面での規模は、長軸 132 ㎝、短軸 109 ㎝であり（底面積 1.14 ㎡）、開口部よりも一回り小さく、ほぼ開口部より内側にある。断面形はビーカー形と判断したが、残存状況が悪く、異なる可能性がある。床面は、ほぼ平坦に構築されている。堆積土は２層のみ残存し、１層が暗褐色砂質シルト、２層が明黄褐色砂質シルトである。この状態のため堆積状況の判断はできない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（西澤）

SK216（第２分冊第 184 図、第４分冊写真図版 199）　北尾根頂部に位置している。SI46 床面で検出した。SK212 に切られており、この遺構より古く、SK211 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 162 ㎝、短軸 152 ㎝、底部で長軸 213 ㎝、短軸 203 ㎝（底面積 1.50 ㎡）、深さ北側で 38 ㎝、南側で 32 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が浅黄色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルトと灰白色極細砂混じりシルトと黄灰色シルト混じり細砂～細礫の互層、下位がにぶい黄褐色シルトおよび灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進むようだが、その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）の間にあると想定する。（河本）

SK217（第２分冊第 186 図、第４分冊写真図版 199）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 180 ㎝、短軸 152 ㎝、底部で長軸 190 ㎝、短軸 168 ㎝、深さは最深部で 110 ㎝である（底面積 2.43 ㎡）。北側断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり、その後直立して開口部に至る。南側は断面ビーカー形を呈し、直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で構成される。第３層は風化花崗岩粒と黄褐色砂質シルトを主体とする互層を呈する。本層中より土器と礫が出土している。遺物は、縄文土器（59 ｇ）が出土しているが、文様が判別できる破片はなく、図示したものはない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の証拠がないため、不明とする。（丸山）

SK218（第２分冊第 186 図、第４分冊写真図版 199）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 145 ㎝、底部で長軸 226 ㎝、短軸 219 ㎝（底面積 3.82 ㎡）、深さ西側で 212 ㎝、東側で 173 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上～中位にかけては、褐灰色極細砂混じりシルトと浅黄橙色～にぶい黄橙色シルトが交互に堆積する。下位は褐灰色極細砂混じりシルトと浅黄橙色～にぶい黄橙色シルトの互層である。廃絶当初の段階から一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、部分的に壁面の崩落も生じているようだが、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、石器（297 ｇ）が出土している。このうち石器１点（2225）を掲載した。時期決定する根拠がなく、時期は不明とする。（河本）

SK219（第２分冊第 187 図、第４分冊写真図版 199）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK244 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 193 ㎝、

短軸 170 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 174 ㎝（底面積 2.46 ㎡）、深さ北側は 167 ㎝、南側は 122 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が褐灰色極細砂混じりシルトブロック土および灰黄色極細砂混じりシルトブロック土の混合層、中位（２～５層）がブロック土を含む灰白色～暗灰黄色細砂～細礫、下位（６～８層）は灰黄色細砂～粗砂と浅黄橙色シルトを間在させる灰白色細砂～細礫。下位は壁面にみられるⅤ層由来の土が顕著であり、主に壁面の崩落や風化により堆積したものと考えられる。中位以上は、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、部分的に崩落が生じているようだが、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、石器（1,213.9 ｇ）が出土している。このうち石器１点（2318）を掲載した。このほか、SK224 と一括して取り上げた縄文土器（2.5 ｇ）が出土している。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK220（第２分冊第 187 図、第４分冊写真図版 200）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。南東側を掘りすぎてしまったため正確な平面形を把握することはできなかったが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 115 ㎝と推定される。底部で長軸 178 ㎝、短軸 154 ㎝（1.99 ㎡）、深さ南西側で 218 ㎝、北東側で 202 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が黒褐色シルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの混合層、中位はその上部（２～４層）がにぶい黄橙色シルト、下部（５・６層）が灰黄褐色シルトブロック土とにぶい黄橙色シルトブロック土を含む黒色シルト、下位（７・８層）が浅黄橙色シルトおよび暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。下位についてはⅣ層由来の土であり、主として壁面の風化・崩落により堆積したものと考えられる。中位についてはⅢ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積しており、上位はブロック土が顕著であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。中位に見られる堆積状況から、おそらくは別の土坑を掘削した際の土によって埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK221（第２分冊第 187 図、第４分冊写真図版 200）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK257 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 225 ㎝、短軸 203 ㎝、底部で長軸 260 ㎝、短軸 227 ㎝（底面積 4.48 ㎡）、深さ 171 ㎝である。断面形はビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅢ・Ⅳ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が灰黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（４層）が黒褐色シルト、灰黄色褐色シルト、浅黄橙色極細砂混じりシルトの混合層、下位（５層）が黒褐色シルト、灰黄色褐色シルト、浅黄橙色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は壁面の風化および小規模な崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。1/3 程度が埋まった段階で大規模な壁面の崩落が生じ、Ⅲ・Ⅳ層由来の土が堆積する。その後の堆積については自然か人為か判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK222（第２分冊第 188 図、第４分冊写真図版 200）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK223 と重複し、遺構の南側を切られており、本遺構の方が古い。推定される開口部の元の平面形は略円形である。規模は開口部径 156 ㎝、底面径 137 ㎝（復元で底面積 1.58 ㎡）、深さは最深部で 50 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁は底面から内傾して立ち上がった後、外反して

開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層確認され、上位は風化花崗岩粒を含む明黄褐色砂質シルト、下位は褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK223（第２分冊第 188 図、第４分冊写真図版 200）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK222 と重複しており、これより新しい。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 131 ㎝、短軸 123 ㎝、底部で長軸 123 ㎝、短軸 114 ㎝、深さは最深部で 56 ㎝である（底面積 1.06 ㎡）。断面形はビーカー形で、底面から直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK224（第２分冊第 188 図、第４分冊写真図版 201 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 224 ㎝、短軸 213 ㎝、底面で長軸 257 ㎝、短軸 222 ㎝（底面積 4.38 ㎡）、深さは最深部で 179 ㎝である。南西側壁面下位で、横位に掘削された小ピットが１基確認されている。杭穴の可能性がある。北半部の断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾しながら立ち上がる。南半部は断面ビーカー形で、直立して立ち上がっている。底面は平坦である。堆積土は４層に細分され、風化花崗岩粒を含む明黄褐～褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（27.6 ｇ）が出土するが、図示したものはない。また、文様が判別できる破片はないため、時期は不明である。（丸山）

SK225（第２分冊第 188 図、第４分冊写真図版 201）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 216 ㎝、短軸 188 ㎝、底面で長軸 200 ㎝、短軸 186 ㎝（底面積 2.83 ㎡）、深さは最深部で 113 ㎝である。西側および南西側壁面下位で、横位に掘削された小ピットが２基確認されている。杭穴の可能性がある。北半部の断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾して立ち上がる。南半部は皿形で、外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平らで、北西・南東の壁際に２個１組の小ピットが１対確認されている。杭穴の可能性がある。また、底面にノミ痕状の工具痕跡が認められる。堆積土は４層に細分され、花崗岩粒と褐色砂質シルトの互層堆積が主体をなす。最底面に花崗岩粒を少量含む明黄褐色の砂質シルトの水平堆積が認められる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK226（第２分冊第 189 図、第４分冊写真図版 201）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 141 ㎝、短軸 125 ㎝、底面で長軸 167 ㎝、短軸 102 ㎝（底面積 1.40 ㎡）、深さは最深部で 97 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から一旦内傾した後、わずかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、花崗岩粒を含む明黄褐～褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK227（第２分冊第 189 図、第４分冊写真図版 201）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 208 ㎝、短軸 198 ㎝、底面で長軸 219 ㎝、短軸 186 ㎝（底面積 2.94 ㎡）、深さは最深部で 175 ㎝である。底面の中央部に長軸 47 ㎝、短軸 43 ㎝、深さ 15 ㎝の小ピットが掘削されている。北半部の断面形はフラスコ形で、底面からわずかに内傾しながら立ち上がる。南半部は直立して立ち上がった後、上部に至ってやや外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分され、花崗岩粒を含む明黄褐～褐色砂質シルト主体で構成される。第５層は中央部が厚く堆積しており、凸レンズ状の層相を成している。開

口部に蓋ないし上屋がある状態で埋没が開始された証左と考えらえる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK228（第２分冊第 189 図、第４分冊写真図版 202）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 249 ㎝、短軸 185 ㎝、底面で長軸 246 ㎝、短軸 189 ㎝（底面積 3.50 ㎡）、深さは最深部で 149 ㎝である。断面形は北半部の断面形はフラスコ形で、底面から一旦内傾しながら立ち上がり、中ほどで外反しながら開口部に至る。底面はやや凹凸しており南側に向かい低く傾斜する。堆積土は５層に細分され、花崗岩粒を含む明黄褐～褐色砂質シルト主体で構成される。４層は斜面上方からの崩落による一方向の堆積状況を示す。５層は中央部が厚く堆積するもので、凸レンズ状の堆積を成すものである。開口部に蓋ないし上屋がある状態で埋没が開始された証左と考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく時期決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK229（第２分冊第 190・191 図、第４分冊写真図版 202）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。南側で SK298・SK299 と重複しており、これらのうちで最も古い。平面形は楕円形を呈する。規模は残存する開口部で径 245 ㎝、底面で長軸 262 ㎝、短軸 229 ㎝（底面積 4.55 ㎡）、深さは最深部で 295 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北側は底面から内傾しながら立ち上がる。斜面下方にあたる南側は、一旦弱く内湾しながら立ち上がり、中ほどで外反して開くものである。南半部開口部付近は新期の土坑に切られ、欠失している。底面はほぼ平坦である。堆積土は６層に細分され、花崗岩粒を含むにぶい黄褐～褐色、暗褐色砂質シルト主体で構成される。２層より土器１個体分が横位で出土している。また、６層より土器３個体分が横位で出土している。遺物は、縄文土器（11,763.9 ｇ）、石器（522.5 ｇ）が出土している。このうち土器 10 点（712～721）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a 式新段階～8b 式古段階併行）に位置づけた。（丸山）

SK230（第２分冊第 189 図、第４分冊写真図版 202）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 175 ㎝、底面で長軸 170 ㎝、短軸 166 ㎝（底面積 2.21 ㎡）、深さは最深部で 220 ㎝である。断面形は北側がビーカー形、南側がフラスコ形を呈する。斜面下方にあたる南側は、内傾しながら立ち上がり、中ほどで一旦外傾した後、緩く内傾して開口部に至るものである。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、花崗岩粒を含む明黄褐～褐色、暗褐色砂質シルトの互層で占められている。１層は斜面上方から流入したと考えられる木根が多量に混入するものである。遺物は、縄文土器（1,346.7 ｇ）が出土し、このうち土器１点（722）を掲載した。時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK231（第２分冊第 192 図、第４分冊写真図版 203）　北尾根頂部に位置している。SI47 床面で検出した。SK232 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 168 ㎝、短軸 124 ㎝、底部で長軸 158 ㎝、短軸 118 ㎝（底面積 1.46 ㎡）、深さ南西側で 38 ㎝、北東側で 69 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～粗砂およびにぶい黄橙色シルト、中位（４層）が灰白色細砂～細礫とにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層、下位（５～７層）が浅黄橙色シルト、にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、黄灰色細砂～粗砂である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。総じて自然堆積したものと推定されるが、上位については人為堆積の可能性も考えられる。遺物は出

土していない。帰属時期は、重複する遺構から時期が判明する遺物が出土せず年代決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK232（第２分冊第 192 図、第４分冊写真図版 203）　北尾根頂部に位置している。SI47 床面で検出した。SK231 に切られており、この遺構より古い。北東側は攪乱を受け、南西側は SK231 に削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ方形を呈し、規模は開口部で径約 125 ㎝、底部で径約 100 ㎝（復元で底面積 0.91 ㎡）と推定される。深さ 27 ㎝である。断面形は皿形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、多少の凹凸があるが平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄橙色シルト、中位（２～４層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（５層）が黄灰色シルト混じり細砂～細礫である。一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、総じて人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複する遺構からは、時期が判明する遺物が出土せず年代決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK233（第２分冊第 192 図、第４分冊写真図版 203）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK125 に切られており、この遺構より古い。SK127、234 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 183 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 140 ㎝（底面積 1.54 ㎡）、深さ南西側で 90 ㎝、北東側で 124 ㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色シルト～極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色シルト～極細砂混じりシルト、下位が灰黄色細砂～粗砂とにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、間接的に重複する SK279 より、縄文時代中期中葉前半以降（大木 8a 式古段階併行以降）と想定される。（河本）

SK234（第２分冊第 192 図、第４分冊写真図版 203）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK233 に切られており、この遺構より古い。平面形は、南西側は SK233 により削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭から楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 181 ㎝以上、短軸 161 ㎝、底部で長軸 156 ㎝以上、短軸 146 ㎝（復元で底面積 1.99 ㎡）、深さ北東側で 85 ㎝、南西側で 68 ㎝である。断面形は北東側がフラスコ形を呈し、南西側は SK233 により削平されているため不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（２・３層）が灰黄色シルト混じり細砂～細礫とにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルトの互層、下位（４・５層）が灰黄色～灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶初期の段階で、崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後はブロック土が混合して堆積していることから、主に人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。本遺構は、７基の遺構が間接的に重複関係にあり、本遺構は５階層（５重複）あるうちの３階層目である。２階層目が縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式古段階併行）であることから、それ以降の時期を想定する。（河本）

SK235（第２分冊第 193 図、第４分冊写真図版 203）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 273 ㎝、短軸 254 ㎝、底面で長軸 275 ㎝、短軸 234 ㎝、深さは最深部で 77 ㎝である（底面積 5.03 ㎡）。北半部の断面形はフラスコ形で、底面から内傾しながら立ち上がり、壁面上部で外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に細分され、上位は花崗岩粒を含む明黄褐色砂質シルト、下位は黄褐色砂質シル

ト主体で構成される。遺物は、縄文土器（1,977.3 ｇ）である。このうち土器１点（723）を掲載した。このほか、埋土上位出土の土器内部土壌を対象に炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ？の核片が少量検出された。時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK236（第２分冊第 193 図、第４分冊写真図版 203）　中尾根の北斜面に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 163 ㎝、短軸 155 ㎝、底部で長軸 182 ㎝、短軸 160 ㎝（底面積 2.16 ㎡）、深さ南西側で 116 ㎝、北東側で 29 ㎝である。断面形は南西側がフラスコ形、北東側がビーカー形を呈するが、埋土上～中位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）がにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、灰黄色シルト混じり細砂～細礫および灰白色細砂～細礫、中位（６層）が黄灰色細砂～細礫、下位（７層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後壁面の風化・崩落によってⅤ層由来の砂礫が堆積する。1/4 程度が埋まってから後は、斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK237（第２分冊第 193 図、第４分冊写真図版 204）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK249 と重複しており、これより古い。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 225 ㎝、短軸 197 ㎝、底部で長軸 209 ㎝、短軸 199 ㎝（底面積 3.16 ㎡）、深さは最深部で 118 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁は底面から内傾しながら立ち上がり、上部で外反する。南壁は緩く内傾したのちほぼ直立して立ち上がる。底面はやや凹凸が認められる。堆積土は７層に細分され、風化花崗岩粒を含む明黄褐・褐色、暗褐色砂質シルト主体で構成される。最下位に褐色砂質シルトの水平堆積が認められる。第３～６層まではレンズ状の堆積状況を示さないことから、比較的短期間で埋没したと考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がないが、本遺構を含む遺構の重複は５階層（５段階の重複）が認められ、そのうち相対的な階層が SI65 と同じである（３階層目）。そのため、帰属時期はこれと同時期である縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）前後を想定することができるかもしれない。（丸山）

SK238（第２分冊第 193 図、第４分冊写真図版 204）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 183 ㎝、短軸 141 ㎝、底部で長軸 168 ㎝、短軸 159 ㎝（底面積 2.11 ㎡）、深さは最深部で 133 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南側にむかい僅かに低く傾斜する。堆積土は３層に細分される。２層は風化花崗岩粒を含む黄褐色砂質シルトと褐色砂質シルトのレンズ状の互層堆積である。３層は褐色砂質シルト主体の一次埋没層で水平堆積である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK239（第２分冊第 194 図、第４分冊写真図版 204）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 134 ㎝、短軸 116 ㎝、底部で長軸 173 ㎝、短軸 117 ㎝（底面積 1.59 ㎡）、深さは最深部で 89 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、北側がやや低く窪んでいる。堆積土は風化花崗岩粒を含む褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK240（第２分冊第 194 図、第４分冊写真図版 204）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は、開口部で長軸 150 ㎝、短軸 146 ㎝、底部で長軸 191 ㎝、短軸 155 ㎝（底面積 2.31 ㎡）、深さは最深部で 153 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は 11 層に細分される。２～９層は風化花崗岩粒を含む明黄褐・褐色砂質シルトの互層状を成すもので、同一層と見なし得るものである。よって短期間で埋没した可能性が高いと考えられる。11 層は凸レンズ状に堆積しており、開口部に蓋など遮蔽物があった状態で埋没が開始した可能性がある。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK241（第２分冊第 194 図、第４分冊写真図版 205）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側で SK254 と重複し、これより新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 195 ㎝、短軸 179 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 201 ㎝（底面積 3.35 ㎡）、深さは最深部で 135 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部が微かに窪む。堆積土は６層に細分され、いずれも風化花崗岩粒を含む明黄褐・褐色、暗褐色砂質シルト主体で構成される。３・６層は壁面崩落土層と判断している。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK242（第２分冊第 195 図、第４分冊写真図版 205）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK261 と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 256 ㎝、短軸 250 ㎝、底部で長軸 283 ㎝、短軸 231 ㎝（底面積 5.45 ㎡）、深さは最深部で 172 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は６層に細分され、いずれも風化花崗岩粒を含む明黄褐・褐色、暗褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、年代決定の根拠がないため時期不明とする。（丸山）

SK243（第２分冊第 195 図、第４分冊写真図版 205）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 195 ㎝、短軸 175 ㎝、底部で長軸 234 ㎝、短軸 217 ㎝（底面積 3.94 ㎡）、深さは最深部で 211 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は７層に細分され、いずれも風化花崗岩粒を含む明黄褐・褐色、暗褐色砂質シルト主体で構成される。６・７層はほぼ風化花崗岩のみの層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK244（第２分冊第 187 図、第４分冊写真図版 205）　北尾根中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK219 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 194 ㎝、短軸 157 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 182 ㎝（底面積 2.34 ㎡）、深さ北西側が 112 ㎝、南東側が 50 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）がにぶい黄橙色～灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトである。上位下部（４層）には厚さ１㎝の炭層が間在している。中位（５～８層）は灰白色細砂～細礫層および灰黄色～暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（９層）は灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化・崩落による堆積が進み、その後斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。なお、埋め戻す初期の段階に土器を１個体投棄している。遺物は、縄文土器（1,082.2 ｇ）が出土している。このうち土器１点（724）を掲載した。このほか、前述の SK219 と一括して取り上げた土器がある。帰属時期は、掲

載土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK245（第２分冊第 196 図、第４分冊写真図版 206）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅣ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 148 ㎝、短軸 121 ㎝、底部で長軸 167 ㎝、短軸 145 ㎝（底面積 1.97 ㎡）、深さは最深部で 122 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がり、上部がやや外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、風化花崗岩を含む黒褐・暗褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK246（第２分冊第 195 図、第４分冊写真図版 206）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅣ層上面で検出した。重複は SK271 とであり、本遺構の方が新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 160 ㎝、底部で長軸 222 ㎝、短軸 198 ㎝（底面積 3.23 ㎡）、深さは最深部で 168 ㎝である。底面の中央部に長軸 56 ㎝、短軸 39 ㎝、深さ９㎝の浅い窪みが確認された。断面形はフラスコ形で、北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がる。北壁上部はやや外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩を含む褐色・暗褐色砂質シルトが主体を占める。４層は一次埋没土で、底面に水平堆積している。５層は副穴堆積土である。遺物は出土していない。重複する遺構（SK271）が縄文時代中期中葉と後葉の土器が出土すること、重複が新しいことを考慮すると、帰属時期は、縄文時代中期後葉（大木９式併行）と想定することができるかもしれない。（丸山）

SK247（第２分冊第 196 図、第４分冊写真図版 206 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅢ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 212 ㎝、短軸で 180 ㎝、底部で長軸 249 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 3.17 ㎡）、深さは最深部で 226 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北西壁・南東壁とも底面から内傾して立ち上がり、上部でやや外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦であるが、中央部が緩く窪んでいる。堆積土は６層に細分され、風化花崗岩を殆ど含まない黒褐・暗褐色砂質シルト主体で構成される。堆積状況から自然堆積と判断している。遺物は、石器１点（967.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK248（第２分冊第 196 図、第４分冊写真図版 162・206）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅢ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長径 163 ㎝、短軸 162 ㎝（底面積 1.98 ㎡）、深さは最深部で 133 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北西壁・南東壁とも底面から内傾して立ち上がり、壁中央でやや外傾して開口部に至る。底面は南東側から中央部にかけて低く傾斜しているが、北西側はほぼ平坦である。堆積土は６層に細分され、風化花崗岩を殆ど含まない褐色・暗褐色～黄褐色の砂質シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（1,069.9 ｇ）が出土している。このうち土器２点（725・726）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK249（第２分冊第 196 図、第４分冊写真図版 207）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅣ層上面で検出した。東側で SK237 と重複し、これより新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 156 ㎝、短軸 155 ㎝、底部で長軸 166 ㎝、短軸で 46 ㎝（底面積 2.11 ㎡）、深さは最深部で 146 ㎝である。断面形は北半部がフラスコ形、南半部はビーカー形を呈する。北側壁面は 30 ㎝オーバーハングする。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩を含む明黄褐～褐色の砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。この遺構を含む周辺の遺構は、５階層（５段階）の重複が確認できる。本遺構は４階層目の遺構であることから、縄文時代中期中葉後半

（大木 8b 式併行）以降の時期が想定されるかもしれない。（丸山）

SK250（第２分冊第 197 図、第４分冊写真図版 207）　北尾根頂部に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、北東部のみを検出した。Ⅳ層上面で検出した。SK251 に切られており、この遺構より古く、SK290、314 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 143 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 138 ㎝（残存で底面積 2.27 ㎡）、深さ北西側で 119 ㎝、南東側で 60 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がブロック土を含むにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（４層）が灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行し、その後、ブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から決定せざるを得ない。本遺構は６階層（段階）にも及ぶ複雑な重複がある。相対的な階層としては SI48 と同様の階層となる。同じ階層が同時期である確証はないが、それに近接した時期の可能性がある。そのため、本遺構の時期を縄文時代中期後葉（大木９式併行）前後の時期としても大きな矛盾はないであろう。（河本）

SK251（第２分冊第 197 図、第４分冊写真図版 207）　北尾根頂部に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、北東部のみを検出した。Ⅳ層上面で検出した。SK250 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 105 ㎝、短軸 57 ㎝、底部で長軸 122 ㎝、短軸 55 ㎝（残存で底面積 0.52 ㎡）、深さ北西側で 93 ㎝、南東側で 62 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３層）が黄灰色細砂～細礫ブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（４層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶初期の段階から、ブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から求めなければならないが、重複する SK250 よりも新しいことから、縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）と想定することができる。重複がもっとも新しいこともこれを裏付けるかもしれない。（河本）

SK252（第２分冊第 197 図、第４分冊写真図版 207）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重機道になっており、原地形より３ｍ程削平しているため、SK252 は土坑の底面付近が残っているものと考えられる。重複する遺構はない。開口部の平面形は、長軸 250 ㎝、短軸 210 ㎝の略円形。底部の平面形は、長軸 230 ㎝、短軸 200 ㎝の略円形である（底面積 3.97 ㎡）。確認面から底面までは深さ 24 ㎝である。断面形は皿形で、南側は壁が立ち上がっており、底面は中央がわずかに凹んでいる。堆積土は黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（中島）

SK253（第２分冊第 197 図、第４分冊写真図版 207）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側は削平により一部プランが失われている。重複する遺構はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 216 ㎝、短軸 172 ㎝、底部で長軸 208 ㎝、短軸 157 ㎝（底面積 2.60 ㎡）、深さは最深部で 15 ㎝である。断面形は皿形で、南東側は底面から僅かに外傾して立ち上がる。西側壁の立ち上がりは削平のため不明である。底面は南東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は風化花崗岩粒を多量に含む黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代を決定する根拠がないため不明とする。（丸山）

SK254（第２分冊第 194 図、第４分冊写真図版 208 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上

面で検出した。SK241と重複しており、SK241より古い。推定される開口部の平面形は、短軸70㎝、長軸100㎝の略円形。底面の平面形は、短軸80㎝、長軸100㎝の略円形である（復元で底面積0.68㎡）。確認面から底面までは深さ17㎝である。残存部分の断面形は、皿形である。床面はほぼ平らである。堆積土は褐色と黄褐色の砂質シルトの２層で構成される。遺物は、縄文土器（23.1ｇ）がわずかに出土する。いずれも地文だけの破片であり、図化したものはない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（中島）

SK255（第２分冊第198図、第４分冊写真図版208）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸109㎝、短軸81㎝、底部で長軸170㎝、短軸152㎝（底面積1.91㎡）、深さ南西側で103㎝、北東側で96㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～７層）が、その上部については、にぶい黄橙色を主体として壁面側に黒褐色シルトおよび灰黄褐色極細砂混じりシルトが堆積し、その下部については、浅黄橙色シルトブロック土を含む暗灰黄色～黒褐色極細砂混じりシルトである。中位（８層）は黒褐色極細砂混じりシルトと暗灰黄色シルト混じり細砂～極粗砂の互層、下位（９層）は浅黄橙色シルトである。廃絶初期は小規模な壁面の崩落が生じているのかⅣ層由来の土が堆積し、その後は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が交互に進行する。1/4～1/3程度埋まってから後は、Ⅲ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積していることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK256（第２分冊第198図、第４分冊写真図版208）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で上面検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸71㎝、短軸67㎝、底部で長軸109㎝、短軸94㎝（底面積0.83㎡）、深さ南西側で84㎝、北東側で74㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が明黄褐色シルトブロック土を含む灰黄褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４層）が明黄褐色シルトブロック土を含む黒褐色極細砂混じりシルト、下位（５層）が明黄褐色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルトと黒褐色シルトの互層である。廃絶当初の段階から、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK257（第２分冊第187図、第４分冊写真図版208）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK221に切られておりこの遺構より古い。平面形状はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸74㎝、短軸65㎝、底部で長軸101㎝、短軸85㎝（復元で底面積0.63㎡）、深さ北西側で70㎝、南東側で59㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられほぼ平坦である。堆積土は上位が３～10㎝大の灰黄褐色シルトブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位が５～10㎜大の浅黄色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。上・中位はブロック土を顕著に含み、人為的に堆積したものと考える。下位は自然堆積と考える。副穴などは検出されず、遺物も出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の証拠がないため不明とする。（河本）

SK258（第２分冊第198図、第４分冊写真図版209）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。遺構南側半分はトレンチに底面近くまで切られている。推定される開口部の平面形は長軸160㎝、短軸120㎝の略円形。底面の平面形は、長軸190㎝、短軸150㎝の略円形である（底面積

2.28 ㎡）。確認面から底面までは深さ 160 ㎝である。断面形はフラスコ形である。壁は床面から鋭角に立ち上がり、中位でほぼ垂直になり、そこで断面両方向に 40 ㎝オーバーハングしている。床面はほぼ平らである。堆積土は７層で構成される。暗褐色のものが多いが、５層、７層は黄褐色である。遺物は、石器（700.2 ｇ）が出土した。このうち石器１点（2281）を掲載した。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（中島）

SK259（第２分冊第 198 図、第４分冊写真図版 209）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。開口部の平面形は、長軸 180 ㎝、短軸 150 ㎝の略円形。底面の平面形は長軸 240 ㎝、短軸 200 ㎝の略円形である（底面積 3.59 ㎡）。深さは、斜面上方から底面まで 210 ㎝、下方で 150 ㎝である。断面形は、フラスコ形である。オーバーハングは断面西側で 50 ㎝、東側で 15 ㎝となっている。床面はほぼ平らである。堆積土は３層で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（中島）

SK260（第２分冊第 199 図、第４分冊写真図版 209）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。平面上では SK257 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 123 ㎝、短軸 85 ㎝、底部で長軸 169 ㎝、短軸 148 ㎝（底面積 1.92 ㎡）、深さ西側で 113 ㎝、東側で 99 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトと褐灰色極細砂混じりシルトの混合層およびにぶい黄橙色シルト、中位（３層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層、下位（４層）がにぶい黄橙色シルトである。下位は土質としては壁面由来のⅣ層が堆積しているが、壁面だけから供給される量を大幅に超えており、他の場所から人為的に運ばれたものと考えられる。中位についてもブロック状の互層になることから、上位も含めて総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。副穴などは検出されていない。遺物は出土していない。このほか、床面上の土壌を対象に炭化種実同定を実施している。結果、炭化種実は検出されなかった。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK261（第２分冊第 199 図、第４分冊写真図版 209）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK242 と重複しており、本遺構はこの遺構よりも古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 207 ㎝、短軸 170 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 200 ㎝（底面積 3.30 ㎡）、深さは最深部で 115 ㎝である。北側の断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がって開口部に至る。南側の断面形はビーカー形を呈し、直立気味に立ち上がる。底面はやや凹凸が認められ、南側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は４層で構成される。１・３層は風化花崗岩粒を含む褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの互層主体である。２・４層は風化花崗岩粒を多量に含む明黄褐色砂質シルト主体で構成され、壁面崩落土の様相を呈する。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK262（第２分冊第 199 図、第４分冊写真図版 210）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK263 を切っており、この遺構より新しい。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 268 ㎝、短軸 215 ㎝、底部で長軸 223 ㎝、短軸 203 ㎝（底面積 3.47 ㎡）、深さ西側で 120 ㎝、東側で 73 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトと褐灰色シルト混じり細砂～細礫、中位（４・５層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層、下位（６・７層）がにぶい黄橙色細砂～細礫および浅黄橙色シルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落によって堆積が進行するようだが、その後は一定の厚みを持つも小

規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK263（第２分冊第 199 図、第４分冊写真図版 210 図）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK262 に切られており、この遺構より古い。平面上では SK136 と重なるが、切り合い関係は存在しない。西側は SK262 により削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 127 ㎝、短軸 120 ㎝、底部で径 180 ㎝、（底面積 2.33 ㎡）、深さ西側で 124 ㎝、東側で 110 ㎝である。断面形は東側がフラスコ形を呈し、西側は SK262 による削平のため不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）の下部がにぶい黄橙色シルトと混合する灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３～５層）がにぶい黄褐色～褐灰色極細砂混じりシルト、下位（６層）がにぶい黄橙色シルトである。下位は土質としては壁面由来のⅣ層が堆積しているが、壁面だけから供給される量を大幅に超えており、他の場所から人為的に運ばれたものと考えられる。中～上位は、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK264（第２分冊第 200 図、第４分冊写真図版 210）　北尾根に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、東半部のみを検出した。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は、検出範囲の形状としては半円形を呈し、規模は開口部で長軸 200 ㎝、短軸 111 ㎝、底部で長軸 175 ㎝、短軸 85 ㎝（復元で底面積 2.09 ㎡）、深さ北側は 212 ㎝、南側は 175 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカー形を呈するが、埋土中～下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅢ・Ⅳ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が明黄褐色および褐灰色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３～６層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトと褐灰色極細砂混じりシルト、明黄褐色シルトの混合層、下位（７・８層）が暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫および明黄褐色シルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落により堆積が進み、その後外部からの風雨による堆積が進む。1/5 程度が埋まってから後は、斜面下方からの流入が見られ、ブロック土が目立つようになることから、壁面の崩落を伴いつつも、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK265（第２分冊第 200 図、第４分冊写真図版 210）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 160 ㎝、短軸 130 ㎝、底部で長軸 205 ㎝、短軸 176 ㎝（底面積 2.91 ㎡）、深さ北西側で 86 ㎝、南東側で 60 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が褐灰色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～極粗砂の薄層を間在させるにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黄灰色細砂～極粗砂層を間在させるにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位が黒褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行するようだが、その後薄層の存在が認められることから、自然堆積した可能性も考えられる。ただし、薄層以外の部分については、一定の厚みを持ちつつも小規模な堆積単位に分けられる層も見られることから、人為的に埋め戻されている可能性も考えられる。遺物は出土していない。年代決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK266（第２分冊第 200 図、第４分冊写真図版 210）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK267、SK332 と重複しており、３基の中で一番新しい。開口部の平面形は、長軸 150 ㎝、

短軸 70 ㎝の楕円形。底面は長軸 140 ㎝、短軸 60 ㎝の楕円である（底面積 0.75 ㎡）。深さは斜面上方から底面まで 27 ㎝、下方で２㎝である。断面形は皿形で、床面はほぼ平らである。堆積土は褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。本遺構は８階層（段階）の複雑な重複関係にあるが、どの遺構からも時期決定を示す根拠をもたないため、時期は不明とする。（中島）

SK267（第２分冊第 200 図、第４分冊写真図版 211）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。北側で SK266 と重複し、SK266 より古い。南側は攪乱に切られている。推定される開口部の平面形は、長軸 140 ㎝、短軸 100 ㎝の略円形。底部は、長軸 130 ㎝、短軸 96 ㎝の略円形である（復元で底面積 1.09 ㎡）。深さは斜面上方から底面まで 20 ㎝である。断面形は皿形である。床面は攪乱に向かって傾斜している。堆積土は２層で構成される。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（中島）

SK268 欠番

SK269（第２分冊第 201 図、第４分冊写真図版 211）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK270 と重複しそれに切られると判断したが、断面で観察しておらず、先後関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 156 ㎝、短軸 87 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 184 ㎝（残存で底面積 2.81 ㎡、復元で底面積 3.05 ㎡）、深さ 100 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ～Ⅴ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄橙色シルトブロック土を含む黒褐色極細砂混じりシルト、中位（２～５層）が浅黄橙色～明黄褐色シルトおよび灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫、下位（６・７層）が灰白色シルト混じり細砂～細礫および灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土も堆積するが、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複関係が SK270 よりも古い場合は、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）以前と想定することができる。（河本）

SK270（第２分冊第 201 図、第４分冊写真図版 211）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。開口部の平面形は、長軸 250 ㎝、短軸 190 ㎝の不定形。底部の平面形は、長軸 230 ㎝、短軸 190 ㎝の略円形である（底面積 3.47 ㎡）。確認面から底面までの深さは 140 ㎝である。断面形はビーカー形だが、壁は、遺構下部でわずかにオーバーハングしている。底面はほぼ平らである。堆積土は５層で構成される。遺物は、縄文土器（106.2 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（中島）

SK271（第２分冊第 195 図、第４分冊写真図版 212）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK246 と重複しており、SK271 のほうが古い。開口部の平面形は、長軸 200 ㎝、短軸 170 ㎝の略円形。底部の平面形は長軸 250 ㎝、短軸 220 ㎝の略円形である（復元で底面積 4.11 ㎡）。深さは斜面上方から底部まで 150 ㎝、SK246 に切られている箇所で 100 ㎝である。断面形は、斜面上方がフラスコ形で 35 ㎝オーバーハングしており、斜面下方は SK246 に切られているため不明である。遺物は、縄文土器（323.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる破片は、縄文時代中期中葉前半と中期後葉に分けられる。重複関係を加味すると、古い本遺構は前者の時期の可能性がある。したがって、帰属時期は縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）と想定した。（中島）

SK272（第２分冊第 201 図、第４分冊写真図版 212）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面

で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 217 ㎝、短軸 162 ㎝、底部で長軸 175 ㎝、短軸 167 ㎝（底面積 2.50 ㎡）、深さは最深部で 198 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北側壁面は底面から直線的に内傾して立ち上がる。南側壁面は一旦内傾して立ち上がったのち、外反して開く。底面はほぼ平坦であるが、南側が若干高い。堆積土は４層に細分され、上位は褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を多量に含む明黄褐色砂質シルトで構成される。３・４層は水平な堆積状況を示す層である。遺物は、縄文土器（3,514.5 ｇ）が出土している。このうち土器２点（727・728）を掲載した。いずれも底面からの出土である。帰属時期は、底面の出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK273（第２分冊第 202 図、第４分冊写真図版 212）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK287 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 238 ㎝、底部で長軸 209 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.71 ㎡）、深さは最深部で 147 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北西側壁面は底面から直線的に内傾して立ち上がる。南側壁面は一旦内傾して立ち上がったのち、外反して開く。底面はほぼ平坦であるが、南側が若干高い。堆積土は４層に細分され、風化花崗岩粒を含む明黄褐～褐色の砂質シルト主体で構成される。３・４層で風化花崗岩粒の水平堆積が認められる。遺物は、縄文土器（48 ｇ）のみが出土しているが、図化したものはない。重複する遺構からも遺物の出土がないことから、時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK274（第２分冊第 202 図、第４分冊写真図版 213）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。北東側で SK284 と重複し、これより新しい。また、SI71 とも重複し、これよりも新しいと判断したが逆の可能性もある。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 220 ㎝、短軸 182 ㎝、底部で長軸 229 ㎝、短軸 226 ㎝（底面積 4.17 ㎡）、深さは最深部で 124 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。底面から丸みを持って内傾しながら立ち上がり、上部で外反して開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、底部に黒褐色砂質シルトの水平堆積が認められる。３層は褐色～暗褐色砂質シルトが互層をなす。遺物は、縄文土器（356 ｇ）が出土しているが、文様が判別できる破片もなく図化したものもない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b ～９式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK275（第２分冊第 202 図、第４分冊写真図版 213 図）　北端の尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。東半部で SI63 と重複し、これより古い。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 166 ㎝、短軸 127 ㎝、底部で長軸 184 ㎝、短軸 136 ㎝（底面積 2.21 ㎡）、深さは最深部で 174 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面からやや丸みを持って内湾しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、風化花崗岩粒を含む暗褐色～にぶい黄褐色の砂質シルトの互層で構成される。遺物は、縄文土器（77.5 ｇ）がわずかに出土するのみである。文様が判別できる破片がわずかに確認できるが、図化したものはない。帰属時期は、出土量が少ないが出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK276（第２分冊第 203 図、第４分冊写真図版 213 図）　北端の尾根に位置している。Ⅳ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 151 ㎝、短軸 141 ㎝、底部で長軸 146 ㎝、短軸 145 ㎝（底面積 1.77 ㎡）、深さは最深部で 117 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。西側は底面からやや丸みを持って内湾しながら立ち上がり、その後直立して開口部に至る。東側は外傾して立ち上がった後、外反して開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、風化花崗岩粒を含む暗褐色～にぶい黄褐色の砂質シルトの互層主体で構成される。遺物は、縄文土器

（288 ｇ）が出土したが、図化したものはない。時期決定に関する証拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK277（第２分冊第 203 図、第４分冊写真図版 213）　北端の尾根に位置している。Ⅳ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 152 ㎝、短軸 119 ㎝、底部で長軸 205 ㎝、短軸 158 ㎝（底面積 2.48 ㎡）、深さは最深部で 182 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北西側・南東側ともに底面からやや丸みを持って内湾しながら立ち上がり、その後緩やかに外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩粒を含む暗褐色～にぶい黄褐色の砂質シルトの互層主体で構成される。遺物は、縄文土器（134 ｇ）が出土するのみで、図示したものはない。帰属時期は、出土量が少ないもののこれから、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK278（第２分冊第 203 図、第４分冊写真図版 214）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK279 を切っており、この遺構より新しい。平面上では SK285 と重複するが、切り合い関係は存在しない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 252 ㎝、短軸 196 ㎝、底部で長軸 257 ㎝、短軸 241 ㎝（復元で底面積 4.67 ㎡）、深さ北側が 165 ㎝、南側が 103 ㎝である。断面形は北側がビーカー形、南側がフラスコ形を呈するが、埋土中位に崩落した壁面と考えられるⅢ、Ⅳ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～８層）が明黄褐色シルトブロック土を含む灰黄褐色～褐灰色極細砂混じりシルト、下位（９層）がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は主に壁面の風化により堆積が進むようだが、その後ブロック土が目立つようになるため、壁面の崩落を伴いつつも、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係より縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降に位置づけた。（河本）

SK279（第２分冊第 203 図、第４分冊写真図版 214）　北尾根に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK127、278 に切られており、この遺構より古く、SK289 を切っており、この遺構より新しい。北側を SK127、南側を SK278 によって削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 265 ㎝、短軸 165 ㎝、底部で長軸 264 ㎝、短軸 172 ㎝（復元で底面積 3.56 ㎡）、深さ北側で 175 ㎝、南側で 167 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）がブロック土を含むにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（５層）が黒褐色極細砂混じりシルトと灰黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位（６・７層）が灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫および極細砂混じりシルトと明黄褐色シルトの互層である。廃絶当初の段階からブロック状の土が堆積していることから、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。なお、埋め戻す初期の段階において、土器を１個体投棄している（729）。遺物は、縄文土器（3,076.1 ｇ）が出土している。このうち土器１点（729）を掲載した。帰属時期は、この土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式古段階併行）に位置づけた。（河本）

SK280（第２分冊第 204 図、第４分冊写真図版 214）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。重複する遺構はない。東側は掘りすぎてしまったため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 135 ㎝と推定される。底部で長軸 163 ㎝、短軸 152 ㎝（底面積 1.78 ㎡）、深さ北側で 105 ㎝、南側で 115 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が灰白色シ

ルトブロック土を含む浅黄色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４・５層）が褐灰色～黒褐色極細砂混じりシルトブロック土と明黄褐色シルトブロック土の混合層、下位（６層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。中～上位についてはⅢ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積しており、上位はブロック土が含まれるから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK281（第２分冊第 204 図、第４分冊写真図版 214）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈する。規模は残存する開口部で長軸 233 ㎝、底部で長軸 253 ㎝、短軸 184 ㎝（底面積 3.73 ㎡）、深さは最深部で 117 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北側は底面から深く内傾して立ち上がる。南側は層序が乱れており壁面崩落した可能性が高い。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩粒を少量含む暗褐色～黄褐色砂質シルト主体で構成される。第５層は殆どが風化花崗岩粒で占められており、壁面崩落層と考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK282（第２分冊第 204 図、第４分冊写真図版 214）　北尾根の北斜面上位に位置している。Ⅳ層中で検出した。斜面下位にあたる南側はプランが失われている。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 63 ㎝、短軸 52 ㎝、底部で長軸 54 ㎝、短軸 46 ㎝（底面積 0.20 ㎡）、深さは最深部で 33 ㎝である。残存する北側の断面形はビーカー形を呈する。底面はⅣ層を掘り込み、ほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粒を少量含む暗褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK283（第２分冊第 204 図、第４分冊写真図版 215）　北尾根の北斜面上位に位置している。Ⅳ層中で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 75 ㎝、短軸 60 ㎝、底部で長軸 62 ㎝、短軸 50 ㎝（底面積 0.26 ㎡）、深さは最深部で 25 ㎝である。断面形はビーカー形を呈する。底面はⅣ層を掘り込み、ほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粒を少量含む暗褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK284（第２分冊第 202 図、第４分冊写真図版 215）　北尾根の南斜面上位に位置している。埋没沢範囲内のⅣ層中で検出した。南西側で SK274 と重複しこれより古い。平面形は楕円形を呈する。規模は残存する開口部で径 99 ㎝、底部で長軸 134 ㎝、深さは最深部で 87 ㎝である（残存で底面積 0.97 ㎡）。残存する北東側の断面形はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、上位に風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄色砂、中位に黄褐色砂質シルトと粗砂の混合土、下位に褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。重複する SK274 の時期から、本遺構の帰属時期を縄文時代中期中葉後半から後葉（大木 8b ～９式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK285（第２分冊第 204 図、第４分冊写真図版 215）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。図上では SK278 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 116 ㎝、短軸 113 ㎝、底部で長軸 120 ㎝、短軸 105 ㎝（復元で底面積 0.96 ㎡）、深さ北側で 75 ㎝、南側で 32 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側が浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色極細砂混じりシルトである。中位にブロック土を含み、総じて人為的に堆積したものと考える。遺物は、縄文土器（22.5 ｇ）がわずかに出土するのみで、示したものはない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。

（河本）

SK286（第２分冊第 205 図、第４分冊写真図版 215）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 141 ㎝、短軸 139 ㎝、底部で長軸 159 ㎝、短軸 143 ㎝（底面積 1.73 ㎡）、深さは最深部で 207 ㎝である。断面形は西半部がフラスコ形を呈し、底面からやや内傾して立ち上がる。東側断面は袋形で、丸みをもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、風化花崗岩粒を含むにぶい黄褐～暗褐色砂質シルト主体の互層堆積となる。遺物は、縄文土器（98.4 ｇ）、石器（753.4 ｇ）が出土している。このうち石器１点（2282）を掲載した。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。　（丸山）

SK287（第２分冊第 202 図、第４分冊写真図版 216）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。南側で SK273 と重複し、これより古い。平面形は、残存部の形状は円形を呈する。規模は残存する開口部で長軸 167 ㎝、底部で長軸 162 ㎝（復元で底面積 2.13 ㎡）、深さは最深部で 70 ㎝である。残存する北半部は断面形がフラスコ形を呈し、底面からやや内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粒を含む黄褐色砂の単層である。遺物は出土していない。重複する遺構の時期は不明のため、他に年代決定の証拠はない。したがって本遺構も時期不明とする。

（丸山）

SK288（第２分冊第 205 図、第４分冊写真図版 216）　北尾根に位置している。調査区外におよぶ土坑であり、東半部のみを検出した。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は検出範囲の形状としては半円形を呈し、規模は開口部で長軸 155 ㎝、短軸 47 ㎝、底部で長軸 150 ㎝、短軸 47 ㎝（残存で底面積 0.51 ㎡）、深さ北側は 198 ㎝、南側は 156 ㎝である。断面形はやや凹凸を持つビーカー形を呈するが、埋土下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅣ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）がにぶい黄橙色および褐灰色の極細砂混じりシルトブロックを含むにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（６～８層）が褐灰色～黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層、下位（９層）が浅黄橙色シルトと黄灰色細砂～細礫の互層である。廃絶当初は壁面の風化・崩落によって堆積が進むようだが、その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。　（河本）

SK289（第２分冊第 203 図、第４分冊写真図版 216）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK127、279 に切られており、この遺構より古い。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 122 ㎝、短軸 109 ㎝、底部で長軸 159 ㎝、短軸 156 ㎝（復元で底面積 1.97 ㎡）、深さ西側で 129 ㎝、東側で 114 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄橙色シルト、中位（２～５層）が灰黄褐色～褐灰色極細砂混じりシルト、下位（６層）がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進行する。中位については、Ⅲ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積していることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前と判断した。　（河本）

SK290（第２分冊第 205 図、第４分冊写真図版 216）　北尾根頂部に位置している。SI48 床面で検出した。SL13・SK250 に切られており、この遺構より古く、SK314 を切っており、この遺構より新しい。平面では重複する SK314 との埋土が区別できず、正確な平面形を把握することは困難だが、断面観察からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 160 ㎝と推定される。底部で長軸 173 ㎝、短軸 164 ㎝（底面積 2.21 ㎡）、深さ北西側で 243 ㎝、南東側で 217 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面

はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・３層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルト混じり細砂～細礫の互層、中位（６・７層）が暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトと灰黄色シルト混じり細砂～細礫の互層、下位（８・９層）が灰黄色～黄灰色細砂～細礫とにぶい黄褐色～黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。半分程度埋まってから後は、ブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。副穴などは検出されず、遺物も出土していない。帰属時期は、重複するSI48の時期から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK291（第２分冊第206図、第４分冊写真図版217）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸170㎝、短軸139㎝、底部で長軸210㎝、短軸179㎝（底面積2.70㎡）、深さは最深部で237㎝である。断面はフラスコ形を呈し、底面からやや内湾して立ち上がり、その後外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦で、西側に向かって低く傾斜する。堆積土は３層に細分され、上位は暗褐色砂質シルト、中位から下位にかけてはにぶい黄褐色～暗褐色砂質シルトと風化花崗岩粒の互層堆積で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK292（第２分冊第206図、第４分冊写真図版217）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。南半部は斜面下位にあたるため、プランを欠失している。他遺構との重複はない。平面形は、残存部の形状は略円形を呈する。規模は残存する開口部で長軸167㎝、底部で長軸170㎝（復元で底面積2.37㎡）、深さは最深部で66㎝である。残存する北半部の断面形はビーカー形を呈し、底面から丸みをもって立ち上がり、その後ほぼ直立して開く。底面はほぼ平坦であるが、斜面下位にあたる南半部を欠失している。堆積土は２層に細分され、上位は風化花崗岩粒を含む黄褐色砂質シルト、下位は暗褐色砂質シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（23.4ｇ）がわずかに出土した。このうち縄文土器１点（730）を掲載した。この遺物は縄文時代前期のものであるため、周囲の遺構の時期と余りにもずれが生じることから混入と考えた。そのため、遺構の時期は、ほかに年代決定の証拠がないため不明とする。（丸山）

SK293（第２分冊第206図、第４分冊写真図版217）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。南側でSK294と重複し、これより新しい。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸210㎝、短軸200㎝、底部で長軸204㎝、短軸195㎝（底面積3.05㎡）、深さは最深部で108㎝である。底面の中央部に長軸38㎝、短軸35㎝、深さ15㎝の小ピットが掘削されている。断面形はフラスコ形を呈する。西側の断面は、底面から丸みをもって内湾する。東側は一旦内傾したのち、やや外反して開く。底面はやや凹凸が認められる。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩粒を少量含む褐色～明黄褐色の砂質シルト主体で構成される。５層は副穴埋土で、炭化物粒を微量含むにぶい黄褐色砂が堆積する。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK294（第２分冊第206図、第４分冊写真図版217図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。北側でSK293と重複し、これより古い。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸220㎝、短軸192㎝、底面で長軸189㎝、短軸188㎝（底面積3.00㎡）、深さは最深部で128㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。西側の断面は、底面から丸みをもって内湾する。東側は一旦内傾したのち、やや外反して開く。底面はやや凹凸が認められる。堆積土は５層に細分され、風化花崗岩

粒を殆ど含まない黄褐色～明黄褐色の砂質シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（17 g）、石器（501 g）が出土しているが、示したものはない。。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK295（第２分冊第 207 図、第４分冊写真図版 218）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。他遺構との重複はない。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 238 ㎝、短軸 208 ㎝、底部で長軸 193 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.63 ㎡）、深さは最深部で 148 ㎝である。断面形はビーカー形を呈する。北西側の断面は、底面から多少膨らみながらほぼ直線的に立ち上がる。東側は階段状に立ち上がり開口部へ至る。底面はやや凹凸が認められる。堆積土は３層に細分され、上位は粗砂を斑状に含む明黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を少量含む黄褐色砂主体で構成される。遺物は、縄文土器（5,259.2 g）が出土した。このうち土器２点（731・732）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK296（第２分冊第 207 図、第４分冊写真図版 218）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。SK309 と重複し、それよりも新しい。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 155 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長軸 136 ㎝、短軸 124 ㎝（復元で底面積 1.41 ㎡）、深さは最深部で 90 ㎝である。底面の中央部に長軸 130 ㎝、短軸 25 ㎝、深さ 15 ㎝の小溝が掘削されている。断面形はフラスコ形を呈する。西側断面は、底面から直立したのち内湾し、その後外反する。東側は外反しながら開口部へ至る。底面は平坦である。堆積土は３層に細分される。２層はにぶい黄褐色砂と黄褐色砂質シルトが互層状に斜行堆積する。３層は明黄褐色砂質シルトの水平堆積層である。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK297（第２分冊第 207 図、第４分冊写真図版 218）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 201 ㎝、短軸 168 ㎝、底部で長軸 211 ㎝、短軸 192 ㎝（底面積 3.32 ㎡）、深さは最深部で 109 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。西側断面は、底面から内湾して立ち上がりその後外反する。東側は底面から一旦丸みを持って内傾した後、外反して開口部へ至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、風化花崗岩粒を含む明黄褐色～黄褐色の砂質シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK298（第２分冊第 190・191 図、第４分冊写真図版 219）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。北側で SK229、西側で SK299 と重複し、前者より新しく、後者より古い。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 231 ㎝、短軸 218 ㎝、底部で長軸 194 ㎝、短軸 185 ㎝（底面積 2.90 ㎡）、深さは最深部で 260 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。断面形は、底面からやや内傾して立ち上がりその後弱く外反する。北壁底面は 25 ㎝内側にオーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。堆積土は８層に細分される。風化花崗岩粒を含む黒褐色～明黄褐色の砂質シルト主体で構成される。102・201 層は人為の斜行堆積層である。遺物は、縄文土器（3,880.7 g）、石器（292.2 g）が出土している。このうち土器１点（733）、石器１点（2365）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式古段階併行）に位置づけた。（丸山）

SK299（第２分冊第 190・191 図、第４分冊写真図版 219）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。北側で SK229、東側で SK298 と重複し、これらより新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 307 ㎝、短軸 240 ㎝、底部で長軸 254 ㎝、短軸 211 ㎝（底面積 3.64 ㎡）、深さは最深部で 275 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。西側は底面からやや内傾して立ち上がり、上部で屈曲して開く。北東側底面は 15 ㎝内側にオーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。

堆積土は８層に細分される。風化花崗岩粒を含む黒褐色～明黄褐色の砂質シルト主体で構成される。104 層は人為の斜行堆積層、105 層は人為の水平堆積層である。遺物は、縄文土器（2,291.3 ｇ）が出土した。このうち土器１点（734）を掲載した。帰属時期は、掲載土器から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式古段階併行）に位置づけた。（丸山）

SK300（第２分冊第 190・191 図、第４分冊写真図版 219）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。東側で SK299 と重複し、これより古い。平面形は、残存部の形状は円形を呈する。規模は残存する開口部で長軸 145 ㎝、底部で長軸 229 ㎝（復元で底面積 3.68 ㎡）、深さは最深部で 222 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。底面から丸みを持って立ち上がり内傾したのち、外反して開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分される。上位は風化花崗岩粒を殆ど含まない黒褐色～暗褐色の砂質シルトの斜行堆積層である。４層は風化花崗岩粒を少量含む黄褐色シルトの水平堆積層である。遺物は、縄文土器（23 ｇ）がわずかに出土したのみで、図化したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半以前（大木 8b 式古段階以前）に位置づけた。（丸山）

SK301（第２分冊第 207 図、第４分冊写真図版 219）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。西側で SK210 と重複し、これより古い。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 224 ㎝、短軸 195 ㎝、底部で長軸 212 ㎝、短軸 197 ㎝（底面積 3.22 ㎡）、深さは最深部で 104 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。残存する北西側は底面から丸みを持って立ち上がり内傾したのち、外反して開く。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分される。花崗岩粒を含む明黄褐色～暗褐色の砂質シルト主体で構成される。１・２層は水平堆積層である。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK302（第２分冊第 208 図、第４分冊写真図版 219）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。東側で SK312 と重複し、これより古い。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 251 ㎝、短軸 228 ㎝、底部で長軸 270 ㎝、短軸 220 ㎝（底面積 4.81 ㎡）、深さは最深部で 107 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。残存する北西壁は底面からくの字に立ち上がり、その後外反して開く。底面は緩やかな凹凸が認められる。堆積土は４層に細分される。２層は黄褐色砂質シルトと風化花崗岩粒の斜行堆積層である。１層は風化花崗岩粒を含む褐色砂質シルトが水平堆積している。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK303（第２分冊第 208 図、第４分冊写真図版 220）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。平面図上では SI65 と重複するが、切り合い関係は存在しない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で径約 150 ㎝、底部で長軸 248 ㎝、短軸 236 ㎝（底面積 4.51 ㎡）、深さ西側で 164 ㎝、東側で 136 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～６層）が黒褐色シルトおよびにぶい黄褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルトと浅黄橙色～にぶい黄橙色シルトの混合層、中位（７・８層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層、下位（９・10 層）が黒褐色シルトと灰黄褐色シルトの互層および灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後、崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。半分程度埋まってから後は、ブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（河本）

SK304（第２分冊第 208 図、第４分冊写真図版 220）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 180 ㎝、短軸 171 ㎝、底部で長軸 192 ㎝、短軸 184 ㎝（底面積 2.50 ㎡）、深さは最深部で 120 ㎝である。南西側断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。北東側は斜面下方にあたっており壁の立ち上がりが不明である。底面はほぼ平坦であるが、北東側のみ階段状を呈する。堆積土は４層で構成される。上位は風化花崗岩粒を微量含む褐色砂、中位は水平堆積する風化花崗岩粒を微量含む褐色砂質シルト、下位は水平堆積する風化花崗岩粒を少量含む明黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、石器１点（59 ｇ）のみ出土し、この石器１点（2089）を掲載した。帰属時期は、年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK305（第２分冊第 209 図、第４分冊写真図版 220）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構のとの重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 150 ㎝、底部で長軸 136 ㎝、短軸 132 ㎝（底面積 1.43 ㎡）、深さは最深部で 120 ㎝である。断面形は大凡フラスコ形で、北西側は底面から内湾して立ち上がり、その後外傾して開口部に至る。南東側はビーカー形に直立気味に立ち上がった後外傾する。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層で構成される。上位は風化花崗岩粒を微量含む明黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒を多量に含むにぶい黄褐色砂、下位は風化花崗岩粒を多量に含む明黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK306（第２分冊第 209 図、第４分冊写真図版 220）　北尾根頂部に位置している。SI48 床面で検出した。SK316 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 296 ㎝、短軸 188 ㎝。底部は西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 221 ㎝、短軸 129 ㎝（残存で底面積 2.28 ㎡）、深さ 120 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側がビーカー形を呈するが、埋土下位に崩落または風化した壁面と考えられるⅤ層由来の堆積物が存在しており、当初は全体としてフラスコ形であった可能性が考えられる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～６層）が灰白色および褐色シルトブロック土を含むにぶい黄橙色～にぶい褐色極細砂混じりシルト、下位（７～９層）が浅黄橙色極細砂混じりシルトおよび灰白色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初から主に壁面の風化・崩落によって堆積が進む。その後は、ブロック土を含み、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SI48、SK316 よりも古いことや６階層（段階）の重複関係のうちもっとも古い遺構であることから縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）を想定することも可能であろう。（河本）

SK307（第２分冊第 210 図、第４分冊写真図版 221）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。平面図上では SK278 と重複するが、切り合い関係は存在しない。南西側を掘りすぎてしまったため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 70 ㎝と推定される。底部で長軸 109 ㎝、短軸 95 ㎝（底面積 0.80 ㎡）、深さ北西側で 58 ㎝、南東側で 46 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３～５層）が褐灰色極細砂混じりシルトにぶい黄橙色シルト、下位（６層）が浅黄橙色シルト。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進行するようだが、その後は一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、縄文土器（45.5 ｇ）がわず

かに出土するのみで、図化したものはない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。
（河本）

SK308（第２分冊第 210 図、第４分冊写真図版 221）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層中で検出した。北側で SK309 と重複し、これより古い。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 185 ㎝、短軸 183 ㎝、底部で長軸 180 ㎝、短軸 156 ㎝（底面積 2.26 ㎡）、深さは最深部で 95 ㎝である。底面の中央部に長軸 33 ㎝、短軸 27 ㎝、深さ 15 ㎝の小ピットが掘削されている。断面形は南側がビーカー形を呈する。南西側は 25 ㎝内側にオーバーハングし、フラスコ形となる。底面は中央部がやや窪む。堆積土は３層に細分される。上位は黄褐色砂質シルト主体、中位は風化花崗岩粒を少量含む明黄褐色砂質シルト、下位は褐色の砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（丸山）

SK309（第２分冊第 210 図、第４分冊写真図版 221）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層中で検出した。南側で SK308 と重複し、これより新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部の長軸 216 ㎝、短軸 208 ㎝、底部で長軸 205 ㎝、短軸 209 ㎝（底面積 3.57 ㎡）、深さは最深部で 139 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。底面から僅かに内湾して開口部に至る。底面はわずかに凹凸が認められる。堆積土は６層に細分される。４・５層には風化花崗岩粒と砂質シルトが互層状に堆積する。６層は一次埋没土で、凸レンズ状の堆積状況を示すものである。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（丸山）

SK310（第２分冊第 210 図、第４分冊写真図版 221）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層中で検出した。北西側で SK309、南西側で SK308、南東側で SK315 と重複し、これらより古い。北東側は攪乱を受け、一部のプランが欠失している。残存する平面形は円形基調と考えられる。規模は残存部の開口部で長軸 284 ㎝、底部で長軸 270 ㎝、深さは最深部で 114 ㎝である。残存する範囲からは断面形の形状は不明である。底面は凹凸が認められる。堆積土は３層に細分される。上位は褐色砂質シルト、下位は褐色シルトが共に水平堆積する。３層は木根による攪乱層の可能性もある。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。
（丸山）

SK311（第２分冊第 210 図、第４分冊写真図版 222）　北尾根の南斜面上位に位置している。沢範囲内のⅣ層中で検出した。他遺構との重複はない。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 120㎝、短軸 111 ㎝、底部で長軸 184 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.57 ㎡）、深さは最深部で 158 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。底面から深く内傾して立ち上がり、上部で外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦で、若干南東側に低く傾斜する。堆積土は上半部に人為的な攪乱が入る。堆積土は２層に細分され、上位は暗褐色の砂質シルト、下位はにぶい黄褐色砂質シルトで占められる。遺物は、縄文土器（25.8 ｇ）、石器（283.7 ｇ）が出土した。このうち土器１点（735）を掲載した。帰属時期は、出土遺物が少量であるがこれを根拠として、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。
（丸山）

SK312（第２分冊第 211 図、第４分冊写真図版 222）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層中で検出した。SK302 と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 195 ㎝、短軸 141 ㎝、底部で長軸 197 ㎝、短軸 117 ㎝（底面積 1.95 ㎡）、深さは最深部で 153 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は６層に細分され、上位は褐色～黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒をモザイク状に含む褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を少量含む明黄褐色砂で構成される。遺物は出土していない。重複する遺

構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（丸山）

SK313（第２分冊第 211 図、第４分冊写真図版 222）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 183 ㎝、短軸 163 ㎝、底部で長軸 187 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 2.72 ㎡）、深さは最深部で 111 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、上位は風化花崗岩粒を縞状に含む褐色～暗褐色砂質シルト、下位は暗褐色砂質シルトで構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。　（丸山）

SK314（第２分冊第 205 図、第４分冊写真図版 222）　北尾根頂部に位置している。SI48 床面で検出した。SK250、290 に切られており、この遺構より古い。SI48 による削平のため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 254 ㎝、短軸 235 ㎝、底部で長軸 204 ㎝、短軸 190 ㎝（復元で底面積 2.88 ㎡）、深さ北西側で 140 ㎝、南東側で 35 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形を呈し、南東側は SI48 による削平が大きく不明である。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は黄灰色細砂～細礫と暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫の互層および浅黄橙色～浅黄色シルト～極細砂混じりシルトが堆積する。壁面にみられるⅤ層由来の土で埋まっていることから、総じて自然に堆積していると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SI48 の想定される時期から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。　（河本）

SK315（第２分冊第 211 図、第４分冊写真図版 223）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複は SK310 とであり、本遺構の方が新しい。また、SK318 とも重複し本遺構の方が古いと判断したが、断面で確認しておらず、先後関係が逆転する可能性もある。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 269 ㎝、短軸 161 ㎝、底部で長軸 239 ㎝、短軸 219 ㎝（底面積 3.81 ㎡）、深さは最深部で 132 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面から深く内傾して立ち上がる。西壁底面は 55 ㎝オーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に細分され、上位は風化花崗岩粒と炭化物粒を微量含む褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含む褐色砂質シルトで構成される。２層は中央が凸レンズ状の堆積状況を示す。遺物は出土していない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（丸山）

SK316（第２分冊第 209 図、第４分冊写真図版 223）　北尾根頂部に位置している。SI48 床面で検出した。SK321 に切られており、この遺構より古く、SK306 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 200 ㎝、短軸 164 ㎝、底部で長軸 203 ㎝、短軸 192 ㎝（復元で底面積 2.97 ㎡）、深さ 155 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が明黄褐色～にぶい黄橙色シルトとにぶい黄褐色シルト混じり細砂～極粗砂およびにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、中位（４層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトと明黄褐色シルトの互層、下位（５～７層）が明黄褐色～にぶい橙色シルトおよび浅黄橙色～灰白色シルトの混合層。廃絶当初の段階からブロック状の堆積がみられ、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（16.3 ｇ）、石器（872.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土量が少ないが出土土器のうち文様が判別できる破片と重複関係から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。　（河本）

SK317（第２分冊第 211 図、第４分冊写真図版 223）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 155 ㎝、短軸 144 ㎝、底部で長軸 172 ㎝、短軸 143 ㎝（底面積 1.73 ㎡）、深さは最深部で 176 ㎝である。断面形はフラスコ

形を呈し、西壁は底面から内傾して立ち上がった後、外反して開口部に至る。東壁は直線的に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、上位は風化花崗岩粒を少量含む褐色～黄褐色砂質シルトが斜行堆積する。下位は風化花崗岩粒を微量含む黄褐色～暗褐色砂質シルトが水平堆積する層である。遺物は出土していない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK318（第２分冊第 212 図、第４分冊写真図版 223）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。西側で SK315 と重複し、本遺構の方が新しいと判断したが明確ではない。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 197 ㎝、短軸 167 ㎝、底部の長軸 184 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.67 ㎡）、深さは最深部で 204 ㎝である。断面はビーカー形を呈する。壁は底面から直線的に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、上位は暗褐色砂質シルトの斜行堆積層、中～下位は風化花崗岩粒を筋状に微量含む褐色シルトの水平堆積層で構成される。遺物は、縄文土器（39 ｇ）がわずかに出土するのみで、図示したものはない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK319（第２分冊第 212 図、第４分冊写真図版 224）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 187 ㎝、短軸 155 ㎝、底部で長軸 217 ㎝、短軸 195 ㎝（底面積 3.20 ㎡）、深さは最深部で 165 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。西壁・東壁とも底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分され、上位は風化花崗岩を少量含む褐色砂質シルトの斜行堆積層、中位は斜行する風化花崗岩粒少量含む黄褐色シルトと暗褐色シルトの互層、下位は水平に堆積する褐色シルトと暗褐色砂質シルトの互層からなる。遺物は、縄文土器（119 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK320（第２分冊第 185 図、第４分冊写真図版 224）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK214 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 161 ㎝、底部で長軸 181 ㎝、短軸 191 ㎝（底面積 2.68 ㎡）、深さ 105 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色および黒褐色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が黒褐色、灰黄色褐色、にぶい黄橙色シルトブロック土の混合層である。廃絶初期の段階から、ブロック土が堆積しており、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は縄文土器（13 ｇ）がわずかに出土するが、図示したものはない。重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK321（第２分冊第 209 図、第４分冊写真図版 224）　北尾根頂部に位置している。東側の一部が調査区外におよぶ。SI48 床面で検出した。SK316 を切っており、この遺構より新しい。平面形は方形を呈し、規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 189 ㎝、底部で長軸 201 ㎝、短軸 192 ㎝（復元で底面積 3.35 ㎡）、深さ 172 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土を含むにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色シルト混じり細砂～極粗砂、中位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトと明黄褐色シルトの互層およびブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄褐色～暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫とにぶい橙色～橙色シルトの互層である。廃絶当初は壁面に由来するブロック土の堆積が進むことから、壁面の崩落・風化によって埋まっていくが、1/2 程度埋まった段階からは、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。

遺物は出土していない。時期は、重複する遺構（SI48 と SK316）の時期からみると、縄文時代中期中葉前半から後葉（大木 8a～９式併行）の間に位置づけられよう。（河本）

SK322（第２分冊第 212 図、第４分冊写真図版 224）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 144 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 133 ㎝、短軸 107 ㎝（底面積 1.10 ㎡）、深さは最深部で 65 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北西壁・南東壁とも底面から内湾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南東側に向かいやや低く傾斜する。堆積土は２層に細分され、上位はにぶい黄褐色シルト、下位は風化花崗岩粒を縞状に少量含む褐色シルトで構成される。遺物は、縄文土器（138 ｇ）が出土しているが、文様が判別できる破片もなく図示したものはない。時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK323（第２分冊第 212 図、第４分冊写真図版 225）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。SK359 と重複し、この遺構よりも新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 169 ㎝、底部で長軸 223 ㎝、短軸 174 ㎝（底面積 3.15 ㎡）、深さは最深部で 177 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北壁・南壁とも底面から内傾して立ち上がり、その後やや外反して開口部に至る。底面は凹凸が認められる。堆積土は５層に細分され、上半は炭化物粒を微量含む暗褐色～褐色シルトの斜行堆積、下半は風化花崗岩粒を微量含む明黄褐色～暗褐色シルトの水平堆積で構成される。遺物は、縄文土器（27 ｇ）がわずかに出土するが、図示したものはない。直接重複する SK359 からは遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（丸山）

SK324（第２分冊第 213 図、第４分冊写真図版 225）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI49、SK331 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 182 ㎝、短軸 149 ㎝、底部で長軸 193 ㎝、短軸 183 ㎝（2.68 ㎡）、深さ北西側で 104 ㎝、南東側で 45 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がＵ字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が褐灰色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層、下位が淡黄色極細砂混じりシルトである。埋土の残りが悪く判断は難しいが、斜面下方からの流入が見られることから、主に人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK325（第２分冊第 213 図、第４分冊写真図版 225）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK160・326・327・345 に切られており、この遺構より古い。西側が SK326・327 によって削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 190 ㎝と推定される。底部で長軸 194 ㎝、短軸 154 ㎝（底面積 2.27 ㎡）、深さ北西側で 133 ㎝、南東側で 81 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色～黒褐色の極細砂混じりシルトがブロック状に入る。中位（３～７層）は明黄褐色シルトブロック土を含むにぶい黄橙色～黒色極細砂混じりシルト、下位（８・９層）は灰黄褐色～黒褐色極細砂混じりシルト。廃絶初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後大規模な崩落が生じ 2/3 程度が埋まる。その後はブロック土が目立つ土が堆積していることから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK326（第２分冊第 213 図、第４分冊写真図版 225）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK325・327 を切っており、この遺構より新しい。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 218 ㎝、短軸 182 ㎝、底部で長軸 250 ㎝、短軸 226 ㎝（底面積 4.31 ㎡）、深さ北西側が 190 ㎝、南東側が 125 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆

積土は上位（１～３層）がにぶい黄橙色シルト～極細砂混じりシルトで下部は灰黄褐色極細砂混じりシルトが互層状に入る。中位（４・５層）はにぶい黄橙色シルトブロック土を含む黄灰色シルト混じり細砂～極粗砂および灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（６・７層）は黒褐色、灰黄褐色、にぶい黄橙色極細砂混じりシルトの互層。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。1/3～1/2 程度が埋まってから後は、Ⅲ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積しており、中位はブロック土が顕著であることから、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。

（河本）

SK327（第２分冊第 214 図、第４分冊写真図版 226）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK326 に切られており、この遺構より古く、SK325 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 244 ㎝、短軸 221 ㎝、底部で長軸 257 ㎝、短軸 252 ㎝（底面積 4.90 ㎡）、深さ 204 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側がビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位がブロック土の目立つ褐色～黒褐色極細砂混じりシルト、下位が黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび褐灰色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。（河本）

SK328（第２分冊第 214 図、第４分冊写真図版 226）　北尾根に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SL14、SK160 に切られており、この遺構より古い。平面形は経年的な地表流出により、南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 125 ㎝、短軸 61 ㎝、底部で長軸 117 ㎝、短軸 34 ㎝（残存で底面積 0.26 ㎡、）、深さ 59 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形を呈し、南側は流失のため不明である。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ若干の凹凸があり、やや北へ下がる傾斜をもつ。堆積土は上位が黒褐色極細砂混じりシルト、中位がブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位がブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。ブロック土を含む層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。

（河本）

SK329（第２分冊第 214 図、第４分冊写真図版 226）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SI65 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 213 ㎝、短軸 196 ㎝、底部で長軸 278 ㎝、短軸 257 ㎝（底面積 5.26 ㎡）、深さ北西側で 232 ㎝、南東側で 162 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、底面は平坦である。堆積土は上位（１～７層）がにぶい黄橙色および黒褐色のシルトブロック土を含むにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（８～11 層）がにぶい黄橙色シルトおよび黒褐色シルト、下位（12 層）が褐灰色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行するが、その後ブロック土を含み、斜面下方からの流入が見られることから、総じて人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係より縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以降と考えられる。（河本）

SK330（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 226）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。

SK160、328、331 に切られており、これらの遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 162 ㎝、底部で長軸 231 ㎝、短軸 187 ㎝（復元で底面積 3.55 ㎡）、深さ 91 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄橙色シルト、中位（２～10 層）がブロック土を含む黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（11・12 層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後部分的に壁面の崩落を伴いつつも、ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。
（河本）

SK331（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 227）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI49 に切られており、これより古く、SK324・330・332 を切っており、これより新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 225 ㎝、短軸 184 ㎝、底部で長軸 250 ㎝、短軸 223 ㎝（底面積 4.33 ㎡）、深さ北西側で 147 ㎝、南東側で 111 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）が黒褐色～灰黄色褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの混合層、中位（５～９層）がブロック土を含む黒褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（10・11 層）がにぶい黄橙色シルトおよび黒褐色極細砂混じりシルト。廃絶後、若干外部からの風雨による堆積もみられるが、主として壁面の風化または崩落による堆積が生じ、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。
（河本）

SK332（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 227）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SI49、SK266・331・333・335 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 219 ㎝、短軸 170 ㎝、底部で長軸 237 ㎝、短軸 231 ㎝（底面積 3.74 ㎡）、深さ 112 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がブロック土の散見されるにぶい黄橙色および灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位が黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの混合層、下位がにぶい黄橙色～灰黄色極細砂混じりシルトである。廃絶後、若干外部からの風雨による堆積もみられるが、主として壁面の風化または崩落による堆積が進行する。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。
（河本）

SK333（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 227）　北尾根の南斜面上位に位置している。SI49 床面、Ⅲ層中で検出した。SI49、SK334 に切られており、この遺構より古く、SK332、335 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 138 ㎝、短軸 75 ㎝、底部で長軸 100 ㎝、短軸 60 ㎝（0.63 ㎡）、深さ 34 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ丸みを帯びる。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトと浅黄橙色極細砂混じりシルトの混合層である。ブロック土が目立つことから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。
（河本）

SK334（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 227）　北尾根南側斜面上位に位置している。

SI49 床面、Ⅲ層中で検出した。SK333・335 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 137 ㎝、短軸 98 ㎝。底部は西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 80 ㎝、短軸 55 ㎝（残存で底面積 0.33 ㎡）、深さ北東側で 43 ㎝、南西側で 27 ㎝である。断面形は北東側がフラスコ形、南西側が浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色極細砂混じりシルトの混合層が堆積している。ブロック状の構造がみられるため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（河本）

SK335（第２分冊第 215・216 図、第４分冊写真図版 228）　北尾根の南斜面上位に位置している。SI49 床面で検出した。SK333・334 に切られており、この遺構より古く、SK332 を切っており、この遺構より新しい。東側は SK333・334 により削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、残存する規模は開口部で長軸 75 ㎝、短軸 25 ㎝、底部で長軸 63 ㎝、短軸 44 ㎝（残存で底面積 0.24 ㎡）、深さ 33 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位がにぶい黄橙色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位が灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。埋土の残りが僅かなため、判断は難しいが、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、時期不明とする。　（河本）

SK336（第２分冊第 217 図、第４分冊写真図版 228 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層中で検出した。SK392 と重複しているが、これより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 170 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長軸 171 ㎝、短軸 161 ㎝（底面積 2.33 ㎡）、深さは最深部で 231 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈する。北壁は底面から深く内傾して立ち上がり、その後外反して開口部に至る。南壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に細分され、上位は黒褐色シルト、中位は風化花崗岩粒を含むにぶい黄褐色シルトの斜行堆積、下位は風化花崗岩粒を微量含む暗褐色シルトの水平堆積で構成される。遺物は、縄文土器（121.2 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。量的には少ないが、文様が判別できる破片から帰属時期を縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。　（丸山）

SK337（第２分冊第 217 図、第４分冊写真図版 228）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK338 に切られており、この遺構より古い。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸 140 ㎝、短軸 136 ㎝、底部で長軸 193 ㎝、短軸 188 ㎝（底面積 2.69 ㎡）、深さ西側で 156 ㎝、東側で 119 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、底面は平坦である。堆積土は上位（１～５層）が黒褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（６・７層）が黒褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色シルト、下位（８層）が灰黄褐色シルトである。廃絶後、若干外部からの風雨による堆積もみられるが、主として壁面の風化または崩落による堆積が生じ、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係にある遺構の中でもっとも新しい遺構が、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）であるため、それ以前の時期が想定される。　（河本）

SK338（第２分冊第 217 図、第４分冊写真図版 228）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK339 に切られておりこれより古く、SK337 を切っておりこれより新しい。西側が SK339 によって削平されているため、正確な平面形を把握することは困難だが、残存する輪郭からおよそ円形を呈し、規模は開口部で径約 85 ㎝と推定される。底部で長軸 122 ㎝、短軸 68 ㎝（底面積

0.65 ㎡）、深さ西側で 78 ㎝、東側で 59 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカーを呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が明黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルトブロック土を含む黒褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトとにぶい黄褐色極細砂混じりシルトの混合層である。廃絶当初から、ブロック状の構造がみられ、Ⅲ・Ⅳ層由来の土が上下逆転して堆積していることからも、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係にある遺構の中でもっとも新しい遺構が、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）であるため、それ以前の時期が想定される。（河本）

SK339（第２分冊第 217 図、第４分冊写真図版 229）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK338、340 を切っており、この遺構より新しい。平面形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 248 ㎝、短軸 189 ㎝。底部は南東側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 167×短軸 83 ㎝（復元で底面積 2.07 ㎡）、深さ西側で 83 ㎝、東側で 64 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１・２層）が炭粒および焼土粒を含む黒褐色極細砂混じりシルトおよび橙色極細砂混じりシルト、中位（３～５層）がにぶい黄橙色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（６・７層）が下部に黄橙色シルトブロック土を含む灰黄褐色～黒褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初からブロック土がみられ、その後も一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると考えられる。一度埋まってから後に、掘り返して平坦面を作り、火を焚いたようであり、焼土が形成されている。副穴などは検出されていない。土坑の二次利用がみられる。遺物は、縄文土器（1,416.8 ｇ）、石器（222.7 ｇ）が出土した。このうち土器２点（736・737）、石器１点（2283）を掲載した。遺構の帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK340（第２分冊第 217 図、第４分冊写真図版 229）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK339 に切られており、この遺構より古い。平面上では SK258 と重複するが、切り合い関係は存在しない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 132 ㎝、短軸 112 ㎝、底部で長軸 167 ㎝、短軸 131 ㎝（復元で底面積 1.71 ㎡）、深さ北側 115 ㎝、南側 89 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび黒褐色極細砂混じりシルト、中位（３層）がにぶい黄橙色および黒褐色のブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（４層）が黒褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色シルトの互層である。廃絶当初の段階から、ブロック状の構造がみられるため、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係にある遺構の中でもっとも新しい遺構が、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）であるため、それ以前の時期が想定される。（河本）

SK341（第２分冊第 218 図、第４分冊写真図版 229）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SK342 に切られておりこの遺構より古く、SI65、SK346 を切っておりこの遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 203 ㎝、短軸 186 ㎝、底部で長軸 239 ㎝、短軸 227 ㎝（底面積 3.83 ㎡）、深さ北西側で 151 ㎝、南東側で 122 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が黄橙色シルトおよびにぶい黄橙色シルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３～５層）がにぶい黄橙色や灰黄褐色のシルトブロック土を含む黒褐色極細砂混じりシルト、下位（６層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積

が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後、壁面に由来しないブロック土が入っていることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（74 g）がわずかに出土している。このうち土器１点（738）を掲載した。帰属時期は、出土遺物と重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式新段階）に位置づけた。（河本）

SK342（第第２分冊第 218 図、第４分冊写真図版 229 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。SI65、SK341・346 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 226 ㎝、短軸 179 ㎝。底部は南西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 187 ㎝、短軸 68 ㎝（残存で底面積 0.98 ㎡）、深さ 13 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はにぶい黄褐色極細砂混じりシルトが堆積する。埋土の残りが少ないため、人為的に埋め戻されたものか、自然に埋まったものか判断できない。遺物は、縄文土器（59 g）がわずかに出土するが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以降が想定される。（河本）

SK343（第２分冊第 218 図、第４分冊写真図版 230）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI65 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 113 ㎝、短軸 79 ㎝、底部で長軸 84 ㎝、短軸 76 ㎝（底面積 0.46 ㎡）、深さ北側で 62 ㎝、南側で 10 ㎝である。断面形は北側がＵ字形を呈し、南側は経年的な地表流出により不明である。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位が黒褐色極細砂混じりシルトブロック土を含むにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位がにぶい黄橙色シルト、下位が黒褐色極細砂混じりシルトブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初の段階からブロック状の構造がみられるため、部分的に崩落が生じているようだが、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以降が想定される。（河本）

SK344（第２分冊第 218 図、第４分冊写真図版 230）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI65 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 120 ㎝、短軸 76 ㎝、底部で長軸 89 ㎝、短軸 52 ㎝（底面積 0.35 ㎡）、深さ北側で 40 ㎝、南側で７㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はにぶい黄橙色シルトブロック土を含む暗灰黄色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック状の構造がみられるため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以降が想定される。（河本）

SK345（第２分冊第 219 図、第４分冊写真図版 230）　北尾根に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK160・325 を切っており、この遺構より新しい。ただし、検出当初は SK325 の方が新しいものと認識しており、先に掘削してしまっている。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 124 ㎝、短軸 109 ㎝、底部で長軸 105 ㎝、短軸 68 ㎝（復元で底面積 0.68 ㎡）、深さ北西側で 47 ㎝、南東側で 24 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ丸みを帯びる。堆積土は上位がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位がブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位がにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。ブロック土が目立つ層が存在することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。重複がもっとも新しいものの、重複する各遺構が時期不明のものが多いため、本遺構の帰属時期も不明とする。（河本）

SK346（第２分冊第 98・100 図、第４分冊写真図版 230）　北尾根の南斜面上位に位置している。SK342 の下面で検出した。SK341・342 に切られており、これより古い。残存する形状はやや歪な楕円

形を呈し、規模は開口部で長軸 81 ㎝、短軸 44 ㎝、底部で長軸 69 ㎝、短軸 30 ㎝（底面積 0.24 ㎡）、深さ 105 ㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、やや凹凸がみられる。堆積土は、ブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻されていると思われる。埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65の主柱穴と考える。遺物は出土していない。（河本）

SK347（第２分冊第 219 図、第４分冊写真図版 231）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 278 ㎝、短軸 223 ㎝、底部で長軸 272 ㎝、短軸 250 ㎝（底面積 5.08 ㎡）、深さ北西側で 280 ㎝、南東側で 228 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～14 層）がブロック状を呈する黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（15～21 層）が黒褐色シルトおよびにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（22～28 層）が暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルトである。廃絶当初の段階から、外部からの風雨による堆積と併行して壁面の風化または崩落による堆積が生じており、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（270 ｇ）、石器（437 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土上～中位の土壌を対象にフローテーションを実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK348（第２分冊第 220 図、第４分冊写真図版 231）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 228 ㎝、短軸 213 ㎝、底部で長軸 217 ㎝、短軸 204 ㎝（底面積 3.43 ㎡）、深さ北西側で 244 ㎝、南東側で 210 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～７層）が中位に比べ小さいブロック土からなる黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、中位（８～16 層）が上位に比べ大きいブロック土を含む黒色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（17・18 層）が黒褐色および明黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初の段階から、外部からの風雨による堆積と併行して壁面の風化または崩落による堆積が生じており、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK349（第２分冊第 220 図、第４分冊写真図版 231）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 94 ㎝、短軸 87 ㎝、底部で長軸 82 ㎝、短軸 79 ㎝（底面積 0.49 ㎡）、深さ北西側で 29 ㎝、南東側で６㎝である。断面形は南側の残りが悪いためやや不確かだが、フラスコ形を呈すると推定される。底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（２層）がにぶい黄橙色シルトブロック土を含むにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK350（第２分冊第 221 図、第４分冊写真図版 231 図）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 122 ㎝、短軸 106 ㎝、底部で長軸 139 ㎝、短軸 135 ㎝（1.48 ㎡）、深さ北西側で 79 ㎝、南東側で 51 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が灰黄褐色細砂～粗砂と灰白色細砂～細礫の互層、中位（２～４層）が暗灰黄色～黒褐色シルト混じり細砂～細礫および黄灰色細砂～極粗砂、下位（５層）が灰白色細砂～細礫。廃絶当初は壁面に見られるⅤ層由

来の砂礫からなることから、主に壁面の風化・崩落により堆積したと考えられる。その後、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（45.4 ｇ）がわずかに出土するが、図示したものはない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK351（第２分冊第 221 図、第４分冊写真図版 232）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK352 に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 172 ㎝、短軸 126 ㎝、底部で長軸 170 ㎝、短軸 117 ㎝（残存で底面積 1.58 ㎡）、深さ 11 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は灰白色極細砂ブロック土を含む黄褐色シルト混じり細砂～細礫が堆積する。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、帰属時期は不明とする。（河本）

SK352（第２分冊第 221 図、第４分冊写真図版 232）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK351 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 173 ㎝、短軸 151 ㎝、底部で長軸 201 ㎝、短軸 181 ㎝（底面積 2.79 ㎡）、深さ西側で 144 ㎝、東側で 118 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび厚さ１～２㎝のにぶい黄褐色極細砂混じりシルト層および浅黄橙色細砂～極粗砂層を介在させる灰黄褐色シルト混じり細砂～細礫、中位（３・４層）が浅黄橙色シルトおよび、灰黄褐色極細砂混じりシルト、暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、灰白色細砂～細礫の混合層、下位（５・６層）が若干シルトの混じる黄灰色～灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落が生じ、その後外部からの風雨による堆積が進行する。下 1/3 程度が埋まった段階より後は、壁面の崩落を伴いながらも、ブロック土が顕著であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。直接重複する遺構からも遺物の出土がなく時期決定の根拠がないため、帰属時期は不明とする。（河本）

SK353（第２分冊第 221 図、第４分冊写真図版 232）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 59 ㎝、短軸 50 ㎝、底部で長軸 44 ㎝、短軸 36 ㎝（底面積 0.12 ㎡）、深さ 20 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ、底面は丸みを帯びる。堆積土は暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫が堆積する。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK354（第２分冊第 221 図、第４分冊写真図版 232）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は経年的な地表流出により、南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 73 ㎝、短軸 28 ㎝、底部で長軸 66 ㎝、短軸 23 ㎝（残存で底面積 0.15 ㎡）、深さ 16 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ丸みを帯びる。堆積土は上位が黒褐色極細砂混じりシルト、下位が灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK355（第２分冊第 222 図、第４分冊写真図版 232）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK356、357 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 138 ㎝、短軸 118 ㎝、底部は南西側を掘りすぎてしまっており、残存部で長軸 137 ㎝、短軸

132 ㎝（復元で底面積 149 ㎡）、深さ北西側で 113 ㎝、南東側で 94 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が灰黄褐色～暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび灰黄色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（４・５層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトと浅黄色極細砂混じりシルトの混合層および暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（６～８層）が浅黄色シルト混じり細砂～細礫および黒褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（198.4 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる破片から、帰属時期は縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK356（第２分冊第 222 図、第４分冊写真図版 232・233）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK355 に切られており、この遺構より古く、SK358 を切っており、この遺構より新しい。形状は円形を呈し、規模は開口部で長軸 164 ㎝、短軸 144 ㎝、底部で長軸 189 ㎝、短軸 168 ㎝（復元で底面積 2.40 ㎡）、深さ北西側で 56 ㎝、南東側で 10 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１～４層）が黄褐色および灰黄褐色、にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（５層）が灰白色細砂～細礫ブロック土を含むにぶい黄色極細砂混じりシルト、下位（６層）が黄褐色およびにぶい黄橙色極細砂混じりシルト。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。副穴としては小さいが床面中央に、径約６㎝、深さ８㎝の何らか棒状のものが差し込まれたであろう痕跡が確認できた。遺物は、縄文土器（12 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK357（第２分冊第 223 図、第４分冊写真図版 233）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK355、438 に切られており、この遺構より古く、SK360、439 を切っており、この遺構より新しい。形状は円形を呈し、規模は開口部で長軸 172 ㎝、短軸 171 ㎝、底部で長軸 200 ㎝、短軸 182 ㎝（底面積 2.70 ㎡）、深さ北東側で 99 ㎝、南西側で 53 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１～６層）は、ブロック状が目立つ黒色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（７・８層）は、暗灰黄色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（９～12 層）は暗灰黄色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫および黒褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むが、それと併行して壁面の風化または崩落による堆積も生じており、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以降、中期中葉後半以前（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK358（第２分冊第 224 図、第４分冊写真図版 233）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK356、359、480 に切られており、この遺構より古い。残存する平面形からはおよそ円形を呈すると考えられ、規模は開口部で長軸 165 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 182 ㎝、短軸 174 ㎝（復元で底面積 2.42 ㎡）、深さ北側で 131 ㎝、南側で 104 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がブロック土を含むにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（３～５層）が黄褐色～灰白色シルト混じり細砂～細礫お

よび褐色極細砂混じりシルト、下位（６・７層）がにぶい黄色～灰白色シルト混じり細砂～細礫および明黄褐色シルト。壁面に由来するⅤ層のブロック土が多いことから、一見自然に堆積したものとも見えるが、壁面が崩落した割には本来のフラスコ形の形状が残っていることから、これらのブロック土は別の土坑を掘削した際の土によって埋められたものと考えられ、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は断面では副穴状の凹みが見えたが、平面では円形など明瞭な形を成さなかった。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK359（第２分冊第 224 図、第４分冊 233）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK480 に切られており、この遺構より古く、SK358 を切っており、この遺構より新しい。SK323 との先後関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 151 ㎝、短軸 132 ㎝、底部で長軸 179 ㎝、短軸 175 ㎝（復元で底面積 2.24 ㎡）、深さ北側で 95 ㎝、南側で 16 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）が暗褐色極細砂混じりシルトおよびオリーブ褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（５・６層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色極細砂混じりシルト、下位（７層）が淡黄色シルト混じり細砂～細礫と明黄褐色シルトである。廃絶当初は主に壁面の崩落による堆積が進むようだが、1/2 程度埋まってから後は多様なブロックが見られることから、人為的に埋め戻されているものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK360（第２分冊第 223 図、第４分冊写真図版 234）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK357、398、439 に切られており、この遺構より古く、SK476 を切っており、この遺構より新しい。SI75 とも重複するが、重複部分が限られていたため、直接の先後関係は判断できなかった。しかし、SK398 を介して間接的に重複し、結果的にこの遺構より新しいと判断した。残存する平面形からはおよそ円形を呈すると考えられ、規模は開口部で長軸 142 ㎝、短軸 92 ㎝、底部で長軸 130 ㎝、短軸 87 ㎝（復元で底面積 1.13 ㎡）、深さ北東側で 51 ㎝、南側で 12 ㎝である（現存値）。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が、暗灰黄色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（３層）が、黒褐色極細砂混じりシルト、下位（４層）が浅黄色シルト混じり細砂～細礫および灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。その後はブロック土が見られることから、人為的に埋め戻されているものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、直接重複する SK398、SI75 の帰属時期から推定すると、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前と想定できる。ただし、35 基の遺構が 10 階層（段階）にわたって複雑に重複するなかにあるため、判断が難しい。（河本）

SK361（第２分冊第 222 図、第４分冊写真図版 234）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SI65 に切られており、この遺構より古い。SK362 とも重複するが、そもそもの重複部分が少ない上に大部分を SI65 により削平されているため、その先後関係は不明である。残存する平面形からはおよそ円形を呈すると考えられ、規模は開口部で長軸 68 ㎝、短軸 13 ㎝、底部で長軸 64 ㎝、短軸 17 ㎝（残存で底面積 0.08 ㎡）、深さ 91 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）がブロック土を含む黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～10 層）がにぶい黄橙色～浅黄色極細砂混じりシルト、下位（11 層）が浅黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むが、

それと併行して壁面の風化または崩落による堆積も生じており、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（18 g）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK362（第２分冊第 222 図、第４分冊写真図版 234）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SI65 に切られており、この遺構より古い。SK361 とも重複するが、そもそもの重複部分が少ない上に大部分を SI65 により削平されているため、その先後関係は不明である。残存する平面形からはおよそ円形を呈すると考えられ、規模は開口部で長軸 76 ㎝、短軸 28 ㎝、底部で長軸 64 ㎝、短軸 25 ㎝（残存で底面積 0.12 ㎡）、深さ 54 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色～明黄褐色シルトが交互に堆積する。SI65 による削平を受け埋土の残りが少なく判断は難しいが、廃絶当初から外部からの風雨による堆積と併行して壁面の風化または崩落による堆積も生じていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK363（第２分冊第 225 図、第４分冊写真図版 234・235）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65、SK343・369 に切られており、この遺構より古い。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 209 ㎝、短軸 198 ㎝、底部で長軸 237 ㎝、短軸 208 ㎝（3.80 ㎡）、深さ北西側で 180 ㎝、南東側で 22 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄橙色～黄橙色シルト、中位（３～13）がブロック状の黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、下位（14・15 層）が黄灰色および明黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むようだが、その後は斜面下方側から流入するようにブロック土が堆積しているため、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK364（第２分冊第 225 図、第４分冊写真図版 235）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65、SK344 に切られており、この遺構より古い。残存する平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 51 ㎝、短軸 30 ㎝、底部で長軸 45 ㎝、短軸 26 ㎝（復元で底面積 0.09 ㎡）、深さ 28 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はにぶい黄橙色シルトおよび黒褐色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック土からなる埋土であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK365（第２分冊第 225・226 図、第４分冊写真図版 235）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65、SK367・449 に切られており、この遺構より古い。SK237・249 とも重複するが、先後関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸 205 ㎝、短軸 175 ㎝、底部で長軸 207 ㎝、短軸 201 ㎝（底面積 3.11 ㎡）、深さ北側で 164 ㎝、南側で 123 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層がブロック土を含む灰黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（４～11 層）がブロック土を含む黒褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色～明黄褐色シルト、下位（12～14 層）がにぶい黄橙色～明黄褐色シルトである。廃絶当初は壁面の崩落による堆積が進むようだが、その後ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻されているものと考えられる。遺物は出土していない。このほか埋土下位

の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK366（第２分冊第 225・226 図、第４分冊写真図版 235・236）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65 に切られており、この遺構より古く。SK367 を切っており、この遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 256 ㎝、短軸 231 ㎝、底部で長軸 244 ㎝、短軸 214 ㎝（底面積 4.02 ㎡）、深さ北側で 163 ㎝、南側で 135 ㎝である。断面形は南側がフラスコ形、北側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～７層）がブロック土を含むにぶい黄褐色～明黄褐色極細砂混じりシルト、中位（８～16 層）がブロック土の顕著な黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（17 層）が明黄褐色シルトと黒褐色極細砂混じりシルトの混合層である。下位は壁面に由来するⅣ層が多く、崩落によって堆積した可能性があるが、その後はブロック土が顕著なことから総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、石器（460.1 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土を対象に炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK367（第２分冊第 225・226 図、第４分冊写真図版 236）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65、SK366・368・449 に切られており、これらの遺構より古く、SK365 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 210 ㎝、短軸 160 ㎝、底部で長軸 253 ㎝、短軸 216 ㎝（4.27 ㎡）、深さ 120 ㎝である。断面形は西側がフラスコ形、東側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（３～13 層）がブロック土からなる黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、中位（14～18 層）が暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、下位（19・20 層）がにぶい黄橙色～明黄褐色シルト。廃絶当初は壁面の崩落による堆積が進み、東側からの土砂の流入がみられるが、その後はブロック土が目立つことから最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。底面に土留のためか、SK365 と重複する箇所に石を並べている。遺物は、縄文土器（82.2 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片から、縄文時代中期前葉（大木 7b 式併行）に遡る可能性がある。（河本）

SK368（第２分冊第 227 図、第４分冊写真図版 237）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65、SK369 に切られており、この遺構より古い。SK370 とも重複するが先後関係は不明である。平面形はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 125 ㎝、短軸 91 ㎝、底部で長軸 210 ㎝、短軸 154 ㎝（復元で底面積 2.52 ㎡）、深さ 95 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）がブロック土を含む灰黄褐色～暗灰黄色極細砂混じりシルト、中位（５～８層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、下位（９～15 層）は黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰黄色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。上位（１～４層）については、埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65 の主柱穴と考える。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。ちなみに、重複関係はもっとも古い。（河本）

SK369（第２分冊第 227 図、第４分冊写真図版 237）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検

出した。SI65 に切られており、この遺構より古く、SK363・368 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 115 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 93 ㎝、短軸 67 ㎝（復元で底面積 0.59 ㎡）、深さ 73 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、平坦である。堆積土は上位（１～３層）がブロック土を含む灰黄褐色またはにぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（４～６層）がブロック土を含む灰黄褐色～黄褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色シルト、下位（７層）がにぶい黄橙色シルトである。廃絶当初は壁面の崩落により堆積が進むが、その後ブロック土が目立つことから最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。上位（１～３層）については、埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65 の主柱穴と考える。遺物は、縄文土器（15 ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土の土壌を対象に炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK370（第２分冊第 227 図、第４分冊写真図版 237）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65・SK371 に切られており、この遺構より古い。平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 171 ㎝、短軸 140 ㎝、底部で長軸 190 ㎝、短軸 170 ㎝（復元で底面積 2.41 ㎡）、深さ 110 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色シルト、中位（３～９層）がブロック土を含む黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（10～12 層）がにぶい黄橙色～浅黄色シルトである。廃絶当初は壁面の崩落により堆積が進むが、その後ブロック土が目立つことから最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。上位（１～２層）については、埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65 の主柱穴と考える。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK371（第２分冊第 98・100 図、第４分冊写真図版 237）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SI65 に切られており、この遺構より古く、SK370 を切っており、この遺構より新しい。平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 108 ㎝、短軸 92 ㎝、底部で長軸 54 ㎝、短軸 41 ㎝（底面積 0.16 ㎡）、深さ 60 ㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はブロック土を含む黄灰色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄橙色～明黄褐色シルトが堆積する。ブロック土がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。当初、単独の土坑として捉えたが、埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65 の主柱穴と考える。遺物は出土していない。このほか、埋土の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、未検出であった。（河本）

SK372（第２分冊第 228 図、第４分冊写真図版 238）　北尾根の南斜面中位に位置する。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK377 と重複し、これより新しい。平面形は不整形である。規模は開口部で長軸 192 ㎝、短軸 144 ㎝、底部で長軸 203 ㎝、短軸 166 ㎝、（底面積 2.63 ㎡）、深さは最深部で 162 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北側は底面からやや深く内傾して立ち上がり、上半部で斜度を浅く変え開口部に至る。南側は弱く内傾して立ち上がった後、外反する。底面はほぼ平坦である。堆積土は９層に細分される。上位は褐色土ブロックをレンズ状に少量含む暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒主体の粗砂疑集ブロックのレンズ状堆積、下位は風化花崗岩ブロックを少量含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（50.6 ｇ）がわずかに出土するが、図示していない。文様が判別できる破片から、帰属時期を縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（丸山）

SK373（第２分冊第 229 図、第４分冊写真図版 238）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面

で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 218 ㎝、短軸 176 ㎝、底部で長軸 210 ㎝、短軸 192 ㎝（底面積 2.99 ㎡）、深さは最深部で 180 ㎝である。断面形は大凡フラスコ形で、北西側は底面からやや内湾して立ち上がり、一旦外側に膨らんだ後、再び括れて上端で開く。南東側は巨礫に阻まれ、詳細は不明であるが、底部から内湾して立ち上がった後、上半部で括れて開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は９層に細分される。上位は暗褐色砂質シルト、中位は黄褐色砂～小礫と風化花崗岩大ブロックの砂礫層、下位はにぶい黄橙色の風化花崗岩を主体とする砂層が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK374（第２分冊第 229 図、第４分冊写真図版 238）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。東側で SK386 と重複し、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 254 ㎝、短軸 242 ㎝、底部で長軸 208 ㎝、短軸 193 ㎝（底面積 3.02 ㎡）、深さは最深部で 220 ㎝である。断面形は大凡フラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり一旦括れた後、上半部で外反して開口部に至る。北側壁面上位はややビーカー形に近い形状となるが、埋土中位に地山の崩落による大ブロックが堆積することから、本来はフラスコ形を呈するものと考えられる。底面は凹凸が認められ、北側に向かい低く傾斜する。堆積土は 15 層に細分される。上位は褐色土ブロックを少量含む暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩ブロックを斑状に少量含む褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩・にぶい黄褐色シルトブロックをレンズ状に介在させる褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉～末葉（大木９～10 式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK375（第２分冊第 230・232 図、第４分冊写真図版 238）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI75、SK515 と重複し、その遺構よりも新しい。平面形は長楕円形である。規模は開口部径 37×120 ㎝、底部径 20×91 ㎝（底面積 0.10 ㎡）、深さは最深部で 39 ㎝である。断面形は皿状で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面は僅かに凹凸が認められる。堆積土は風化花崗岩粒を微量含む黒褐色極細砂混じりシルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK376（第２分冊第 230・232 図、第４分冊写真図版 239）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。北東側で SK400 と重複し、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 269 ㎝、短軸 233 ㎝、底部で長軸 246 ㎝、短軸 210 ㎝（底面積 4.04 ㎡）、深さは最深部で 244 ㎝である。南側断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり一旦括れた後、上半部で外反して開口部に至る。北側は皿状に近い形状を呈するが、埋土下位に地山の崩落層を含む堆積が認められることから、本来はフラスコ形を呈していたと考えられる。底面は中央が低く掘り込まれるが、北側壁際は掘り込みが浅く凹凸が認められる。堆積土は 20 層に細分される。上位は風化花崗岩と褐色土のブロックを少量含む暗褐色砂質シルト、中位は褐色土ブロックを斑状に少量含む暗褐色砂質シルト、下位は黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（1,378.6 ｇ）が出土した。このうち土器１点（739）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）前後に位置づけた。（丸山）

SK377（第２分冊第 228 図、第４分冊写真図版 239）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側で SK372、南側で SK385 と重複し、これより古い。平面形は略円形である。規模は残存する北東－南西方向で開口部径 163 ㎝、底部径 173 ㎝（復元で底面積 2.37 ㎡）、深さは最深部で 147 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から深く内傾して立ち上がり中程で一旦括れた後、上半部で外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は８層に細分される。上位は風化花崗岩

ブロックのレンズ状堆積を含む暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩と暗褐色土の水平な互層状堆積を含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩を主体とするにぶい黄橙色シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉（大木９式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK378（第２分冊第 228 図、第４分冊写真図版 239）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK385 と重複し、この遺構より新しい。また、南側で SI72 と重複し、この遺構より古い。平面形は長円形である。規模は開口部で長軸 242 ㎝、短軸 108 ㎝、底部は判明する東－西方向で径 150 ㎝（残存値）（復元で底面積 0.53 ㎡）、深さは最深部で 126 ㎝である。北側断面形はフラスコ形で、底面から丸みを持って立ち上がり、上半部で外反して開口部に至る。底面は多少の凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。堆積土は５層に細分される。上位は砂・小礫を微量含む暗褐色砂質シルト、中位は壁寄りに風化花崗岩ブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は砂・小礫を少量含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。このほか、底面の堆積土を対象に炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK379（第２分冊第 230・232 図、第４分冊写真図版 239 図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 199 ㎝、短軸 151 ㎝、底部で長軸 197 ㎝、短軸 187 ㎝（底面積 2.89 ㎡）、深さは最深部で 240 ㎝である。断面形はフラスコ形で、西側は底面からやや外傾して立ち上がり、その後内傾して一旦括れ、再び弱く外傾しながら開口部に至る。東側はやや外傾して立ち上がり、一旦内傾して弱く括れた後、外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は９層に細分される。上位は風化花崗岩大ブロックを多量に含む暗褐色砂質シルト、中位は褐色砂質シルト、下位はレンズ状の黄褐色土ブロック・細砂凝集ブロックをやや多く含む褐色の砂質シルトが堆積する。遺物は、石器（534.8 ｇ）が出土しているが図示したものはない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK380（第２分冊第 231 図、第４分冊写真図版 240）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK437 を切っており、この遺構より新しい。SI77 とも重複するが先後関係は不明である。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 245 ㎝、短軸 221 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 186 ㎝（底面積 2.78 ㎡）、深さ北西側で 239 ㎝、南東側で 128 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～８層）がブロックの顕著な黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（９～12 層）が暗灰黄色～にぶい黄橙色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（13 層）が黄褐色極細砂混じりシルトおよび暗灰黄色極細砂混じりシルトである。一部に崩落土もみられるが、全体としてブロック土が顕著なため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土上位（３層）より完形に近い土器が１点出土している（780）。遺物は、縄文土器（1,498.1 ｇ）、石器（1,009.9 ｇ）が出土している。このうち、土器１点（740）、石器３点（1931・2227・2284）を掲載した。このほか、堆積土を対象（フローテーション）に炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミの核などが少量検出されている（第Ⅵ章参照）。遺構の帰属時期は、不掲載土器と重複関係（30 基以上、10 階層に及ぶ複雑なもの）から、縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK381（第２分冊第 231 図、第４分冊写真図版 241）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SK382、383 を切っており、この遺構より新しい。上では SK311 と重なるが、切り合い関係

は存在しない。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 200 ㎝、短軸 157 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 210 ㎝（復元で底面積 3.78 ㎡）、深さ北西側で 166 ㎝、南東側で 113 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）がブロック土を含む黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（６～10 層）がブロック土を含む暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（11～19 層）が黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。総じてブロック土が見られ、埋土上位には完形土器がみられるなど、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土上位から完形の土器が１点（742）出土、当土器の内部には貝が含まれていた。また、埋土下位からも完形の土器が１点（741）出土した。遺物は、縄文土器（7,001.5 ｇ）が出土している。このうち土器３点（741～743）を掲載した。このほか、741・742 の土器内部の堆積土を対象に炭化種実同定と、骨・貝類同定を実施している。この結果、オニグルミ・クリ、貝類・硬骨魚綱片などが少量検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複がもっとも新しいものの、出土遺物から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK382（第２分冊第 231 図、第４分冊写真図版 241）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SK381 に切られており、この遺構より古い。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 165 ㎝、短軸 159 ㎝、底部で長軸 202 ㎝、短軸 152 ㎝（復元で底面積 2.73 ㎡）、深さ西側で 133 ㎝、東側で 75 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（４層）が黒色シルト、明黄褐色極細砂混じりシルト、にぶい黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位（５層）は黒褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後はブロック土が顕著なことから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（144 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK383（第２分冊第 231 図、第４分冊写真図版 242）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SK381 に切られており、この遺構より古く、SK435 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 180 ㎝、短軸 135 ㎝、底部で長軸 212 ㎝、短軸 180 ㎝（底面積 3.03 ㎡）、深さ北西側で 138 ㎝、南東側で 98 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～９層）が灰黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（10～13 層）が黒褐色極細砂混じりシルト、灰黄褐色極細砂混じりシルトの混合層下位（14 層）がにぶい黄褐色シルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落も生じるが、ブロック土が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK384（第第２分冊第 233 図、第４分冊写真図版 242）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SI71 に切られており、この遺構より古い。平面形状はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 194 ㎝、短軸 189 ㎝、底部で長軸 183 ㎝、短軸 171 ㎝（底面積 2.43 ㎡）、深さ西側で 238 ㎝、東側で 173 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１～３層）が橙色極細砂混じりシルトおよびブロック土を含む褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～９層）がブロック土を含む黒褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルト、下位（10～14 層）が灰黄色シルト～極細砂、灰白色細砂～細礫および灰黄褐色～にぶい黄褐色極細

砂混じりシルトである。廃絶当初、若干の土が投棄されたようだが、完全に埋め戻されることはなく、しばらく放置される。その後、再びブロック土を含むようになることから、約半分程度埋まった後に、再び人為的に埋め戻されていると考えられる。副穴などは検出されていない。遺物は、縄文土器（53.2 ｇ）、石器（482.1 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係や出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK385（第２分冊第 228 図、第４分冊写真図版 242）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側で SK377 と重複し、これより新しい。また、南側で SK378 と重複し、これより古い。平面形は円形基調である。規模は残存する東西方向で開口部径 195 ㎝、底部径 167 ㎝（復元で底面積 3.28 ㎡）、深さは最深部で 165 ㎝である。北側断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面は南側に向かって低く傾斜し、北壁から 130 ㎝付近で周囲より 20 ㎝程度深く掘り込まれる。堆積土は６層に細分される。上位は風化花崗岩粒を主体とするにぶい黄橙色シルト、中位は風化花崗岩粒とレンズ状を呈する暗褐色土ブロックとの互層、下位は暗褐色土ブロックと風化花崗岩粒の混合土層が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK386（第２分冊第 229 図、第４分冊写真図版 242）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。東側で SK374 と重複し、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 160 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 184 ㎝（底面積 3.09 ㎡）、深さは最深部で 207 ㎝である。断面形はフラスコ形で、南側は底面から内傾して立ち上がり、上半部で外反して開口部に至る。北側は緩やかに内傾したまま開口部へ至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は 13 層に細分される。上位は褐色土・風化花崗岩ブロックを斑状に少量含む暗褐色砂質シルト、中位は葉離状の暗褐色土を含む風化花崗岩主体のにぶい黄橙色シルト、下位は褐色砂質シルトと風化花崗岩主体のにぶい黄橙色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（15.3 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土量が少ないが、文様が判別できる破片から縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK387（第２分冊第 233 図、第４分冊写真図版 243）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。平面形状はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 159 ㎝、短軸 156 ㎝、底部で長軸 225 ㎝、短軸 218 ㎝（底面積 3.67 ㎡）、深さ北西側で 210 ㎝、南東側で 168 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１～14 層）がブロック土の顕著な黒色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（15～19 層）が黄灰色～暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび黒色極細砂混じりシルト、にぶい黄橙色シルトの混合層、下位（20～22 層）が黒色～にぶい黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進むが、それと併行して壁面の風化または崩落による堆積も生じており、その後ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は、縄文土器（277.1 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別する破片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式古段階併行）に位置づけた。（河本）

SK388（第２分冊第 234 図、第４分冊写真図版 243）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SI71、SK389 に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 231 ㎝、短軸 200 ㎝、底部で長軸 250 ㎝、短軸 229 ㎝（底面積 4.05 ㎡）、深さ 142 ㎝である。断面形は北西側がフラスコ形、南東側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）がブロック土の顕著な黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じり

シルト、中位（６層）がブロック土を含む灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（７・８層）が黒色、灰黄褐色、明黄褐色極細砂混じりシルトの混合層である。廃絶当初は主に壁面の崩落による堆積が進むようだが、約 1/3 程度埋まってから後は、ブロックが顕著なことから最終的には人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、縄文土器（421.7 ｇ）、石器（812.9 ｇ）が出土している。このうち土器１点（744）、石器１点（2285）を掲載した。帰属時期は、文様が判別できる破片や重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK389（第２分冊第 234 図、第４分冊写真図版 243）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅲ層で検出した。SI65 に切られており、この遺構より古く、SK388 を切っており、この遺構より新しい。平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 180 ㎝、短軸 152 ㎝、底部で長軸 195 ㎝、短軸 173 ㎝（底面積 2.71 ㎡）、深さ北西側で 157 ㎝、南東側で 104 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～６層）がブロック土を含む黒褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、中位（７・８層）が黒色、にぶい黄褐色、にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび灰黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（９層）が灰黄褐色極細砂混じりシルトと黒褐色極細砂混じりシルトの混合層である。若干壁面の崩落による堆積も見られるが、ブロック土が各層に含まれており総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）の間に位置づけた。（河本）

SK390（第２分冊第 234 図、第４分冊写真図版 244）　中尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層で検出した。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸 143 ㎝、短軸 134 ㎝、底部で長軸 118 ㎝、短軸 115 ㎝（底面積 1.03 ㎡）、深さ北西側で 67 ㎝、南東側で 19 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が灰白色細砂～細礫および灰黄褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルト、中位（４～６層）が黄灰色細砂～細礫および灰黄色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（７層）は黒褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落による堆積も進む。その後はブロック状にみえることから最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。（河本）

SK391（第２分冊第 235 図、第４分冊写真図版 244）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は経年的な地表流出により、南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は円形を呈し、規模は開口部で長軸 175 ㎝、短軸 134 ㎝、底部で長軸 162 ㎝、短軸 146 ㎝（復元で底面積 2.49 ㎡）、深さ 52 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよび灰黄色シルト混じり細砂～中砂と灰白色細砂～細礫の互層、中位（３層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（４・５層）が暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび浅黄色シルト混じり細砂～細礫と灰白色細砂～細礫の互層。壁面に由来すると考えられる細砂～細礫層以外に、顕著なブロック層が認められないため、総じて自然に埋没したものと考えられる。付属施設は底面中央に径約 40 ㎝、深さ 12 ㎝の副穴が存在する。遺物は、縄文土器（4.6 ｇ）がわずかに出土するが、図化したものはない。帰属する時期は、出土量がごくわずかだが、文様が判別できる破片から判断し、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけたい。（河本）

SK392（第２分冊第 235 図、第４分冊写真図版 244）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK336、393 に切られており、この遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 256 ㎝、短軸 171 ㎝、底部で長軸 259 ㎝、短軸 196 ㎝（復元で底面積 4.90 ㎡）、深さ 92 ㎝

である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が暗灰黄色極細砂混じりシルトおよび黄灰色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（４～９層）が灰白色細砂～細礫および黄褐色～浅黄色極細砂混じりシルト、下位（10層）が灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後、壁面の崩落による堆積が進む。埋没後、上位の層は植物による擾乱を受けている。顕著なブロック層が認められないため、総じて自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）以前に位置づけた。　（河本）

SK393（第２分冊第235図、第４分冊写真図版244）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK511に切られており、この遺構より古く、SK392を切っており、この遺構より新しい。平面形は南東側が流失しているが、およそ形状は円形を呈し、規模は開口部で長軸200㎝、短軸76㎝、底部で長軸213㎝、短軸167㎝（残存で底面積2.95㎡、復元で底面積3.69㎡）、深さ49㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が明黄褐色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の混合層、中位（２～５層）は黄灰色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄橙色～明黄褐色極細砂混じりシルト、下位（６層）は淡黄色シルトと明黄褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後、壁面の崩落と外部からの流入による堆積が繰り返される。顕著なブロック層が認められないため、総じて自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）以降を想定する。　（河本）

SK394（第２分冊第236図、第４分冊写真図版245）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK395に切られており、この遺構より古い。南東側が流失しているが、およそ平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸68㎝、短軸40㎝、底部で長軸153㎝、短軸67㎝（復元で底面積1.64㎡）、深さ29㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）が黄褐色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（３・４層）が細砂～細礫ブロック土を含むオリーブ褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（５層）が黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、ブロック土が目立ち、一定の厚みを持つも小規模な堆積単位に分けられる層が連続することから、人為的に埋め戻されていると思われる。付属施設は底面中央に幅10㎝、長さ71㎝、深さ４㎝の細溝が存在している。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。　（河本）

SK395（第２分冊第236図、第４分冊写真図版245）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK394を切っており、この遺構より新しい。南東側が一部流失しているが、およそ平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸116㎝、短軸104㎝、底部で長軸130㎝、短軸126㎝（復元で底面積3.51㎡）、深さ48㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はオリーブ褐色極細砂混じりシルトが堆積する。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。このほか、１層堆積土を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複もなく年代決定する根拠がないため、不明とする。　（河本）

SK396（第２分冊第236図、第４分冊写真図版245）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SL15に切られており、この遺構より古く、SI75を切っており、この遺構より新しい。SK397との先後関係は不明である。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸160㎝、短

軸 150 ㎝、底部で長軸 230 ㎝、短軸 203 ㎝（底面積 3.51 ㎡）、深さ北側で 253 ㎝、南側で 194 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が、にぶい黄色細砂～細礫および、黄褐色シルト混じり細砂～細礫、にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～７層）が、にぶい黄色細砂～細礫および灰白色細砂～細礫、にぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（８層）が灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落により堆積が進み、その後壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。ブロック土は目立たず、葉理状に見える堆積が進行していることから総じて自然堆積したものと考えられる。遺物は、埋土下位より土器が出土している。遺物は、縄文土器（979 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。文様が判別できる破片と重複関係から、帰属時期は、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK397（第２分冊第 236 図、第４分冊写真図版 245）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SL15、SI74 に切られており、この遺構より古く、SI75 を切っており、この遺構より新しい。SK396 との先後関係は不明である。残存する平面形からはおよそ円形を呈すると考えられ、規模は開口部で長軸 116 ㎝、短軸 47 ㎝、底部で長軸 97 ㎝、短軸 35 ㎝（残存で底面積 0.33 ㎡）、深さ 25 ㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は灰黄褐色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック土が目立たないことから自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）の間に位置づけた。（河本）

SK398（第２分冊第 237 図、第４分冊写真図版 246）　北尾根の南斜面上位に位置している。SI75 の下面で検出した。SI75 に切られており、この遺構より古く、SK360 を切っており、この遺構より新しい。平面形はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 189 ㎝、底部で長軸 195 ㎝、短軸 191 ㎝（復元で底面積 2.84 ㎡）、深さ 89 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）が暗褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、中位（14・16・17・21・23～26 層）が灰白色細砂～細礫、灰黄色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルト、下位（28～30 層）が灰白色細砂～細礫および黄褐色～灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進むが、この壁面の崩落により SK515 とは一続きとなり、以後両土坑は同時に堆積が進む。以後、葉理状の堆積が見られることから、総じて自然堆積したものと考えられる。埋土上位より土器が出土している。遺物は、縄文土器（329.1 ｇ）が出土している。このうち土器２点（745・746）を掲載した。このほか、埋土中位の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、トチノキの種子片が１点検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK399（第２分冊第 238 図、第４分冊写真図版 246）　北尾根の南側斜面中位に位置している。Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 209 ㎝、短軸 136 ㎝、底部で長軸 207 ㎝、短軸 194 ㎝（底面積 3.01 ㎡）、深さ北西側で 241 ㎝、南東側で 162 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～８層）がブロック土のみられる黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（９～14 層）がブロック土の見られる黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（15 層）が褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進行するが、1/4 も埋まり切らない内に

ブロック土や礫を含んだ土が堆積し始めることから、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（20.3 ｇ）、石器（1,653.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、ごく少量ではあるが文様が判別できる破片から、縄文時代中期前葉から中葉（大木 7a～8a 式併行）を想定した。（河本）

SK400（第２分冊第 230・232 図、第４分冊写真図版 246）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ層上面で検出した。南西側で SK376 と重複し、これより古い。平面形は南半部が新期の遺構に切られるため、プランの全容は不明であるが、円形基調を呈する。規模は残存する南－北方向で開口部径 135 ㎝、底部径 103 ㎝（底面積 0.34 ㎡）、深さは最深部で 68 ㎝である。断面形はおおよそフラスコ形で、底面から一旦内傾して立ち上がった後、僅かに外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は６層に細分され、全体に砂・小礫を少量含む。上位は褐色砂質シルト、中位は暗褐色砂質シルト、下位は褐色砂質シルトの堆積が見られる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以前に位置づけた。（丸山）

SK401～410 欠番

SK411（第２分冊第 238 図、第４分冊写真図版 246）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SI72 と重複し、これより古い。また、北側で SK419、東側で SK420 と重複し、これらより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 166 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 177 ㎝（底面積 2.77 ㎡）、深さは最深部で 157 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北側は底面から深く内傾して立ち上がり、次第に外反しながら開口部に至る。南側は直線的に立ち上がり、やや内傾しながら開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は 12 層に細分される。上位は風化花崗岩粒・炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、中位から下位にかけては褐色砂質シルトと風化花崗岩粒との混合土が堆積する。遺物は、縄文土器（266.9 ｇ）が出土している。このうち土器２点（747・748）を掲載した。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期前葉から中葉前半（大木 7b～8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK412（第２分冊第 239 図、第４分冊写真図版 247）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI72 の範囲内に位置し、これより古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 198 ㎝、短軸 189 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸で 183 ㎝（底面積 2.86 ㎡）、深さは最深部で 68 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり開口部に至る。底面は若干の凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。堆積土は９層に細分される。上位はにぶい黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒を少量含む褐色砂質シルト、下位はオリーブ褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（413.1 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別する土器片や重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK413（第２分冊第 240 図、第４分冊写真図版 247）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK478～480 に切られており、これらの遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 174 ㎝、短軸 141 ㎝、底部で長軸 178 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 2.40 ㎡）、深さ北側で 164 ㎝、南側で 118 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～９層）がブロック土の顕著な暗褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（10～14 層）が褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（15～21 層）がにぶい黄色～淡黄色極細砂混じりシルトである。廃絶当初に若干外部からの風雨による堆積が進行するが、以後ブロック土が顕著なことから総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。この遺構を含む周辺の遺構は、複雑な重複関係示す

（最大で 37 遺構が重複）。そのなかでもっとも古い遺構であること、間接的に重複する遺構（SK398 や SI75）などから、帰属時期は縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）に時期に位置づけた。さらに本遺構は、10 段階ある重複関係のうちもっとも古い遺構であることから、縄文時代中期初頭から前葉まで遡る可能性がある。（河本）

SK414（第２分冊第 239 図、第４分冊写真図版 247）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 205 ㎝、短軸 167 ㎝、底部で長軸 217 ㎝、短軸 198 ㎝（底面積 3.47 ㎡）、深さは最深部で 105 ㎝である。底面北寄りから長軸 83 ㎝、短軸 64 ㎝、深さ 24 ㎝の、副穴とみられる小ピットが１基検出されている。残存する西側の断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。東側は斜面下方に当たり、壁が残存していない。底面はほぼ平坦で、中央部が微かに窪む。堆積土は９層に細分される。上位は暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩ブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位はにぶい黄褐色砂質シルト～細砂と風化花崗岩ブロックが互層状に堆積する。出土遺物はない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK415（第２分冊第 239 図、第４分冊写真図版 247）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側で SK445 と重複し、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 179 ㎝、短軸 137 ㎝、底部で長軸 187 ㎝、短軸 160 ㎝（底面積 2.29 ㎡）、深さは最深部で 146 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に細分される。上位はにぶい黄褐色砂質シルト、中位はにぶい黄橙色砂質シルト、下位は褐色の砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため不明とする。（丸山）

SK416（第２分冊第 241 図、第４分冊写真図版 248）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 207 ㎝、短軸 181 ㎝、底部で長軸 210 ㎝、短軸 200 ㎝（底面積 3.25 ㎡）、深さは最深部で 145 ㎝である。断面形はフラスコ形である。底面はほぼ平坦であるが、東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は９層に細分される。上位は砂～小礫を少量含む褐色砂質シルト、中位は砂～小礫・炭化物粒を多く含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は砂～小礫・風化花崗岩ブロックを多量に含むにぶい黄橙色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（550.8 ｇ）が出土した。このうち土器１点（749）を掲載した。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK417（第２分冊第 241 図、第４分冊写真図版 248）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は両壁面が残存する北東－南西方向で開口部径 162 ㎝、底部径 161 ㎝（底面積 2.35 ㎡）、深さは最深部で 93 ㎝である。南東側は斜面下方に当たっており、壁面が残存していない。北半部の断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は３層に細分される。上位は砂～小礫を含む褐色砂質シルト、中位は砂～小礫を含む暗褐色砂質シルト、下位は砂～小礫・風化花崗岩ブロックを多量に含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK418（第２分冊第 241 図、第４分冊写真図版 248）　北尾根の南側斜面中位に位置している。Ⅲ層で検出した。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部で長軸 238 ㎝、短軸 233 ㎝、底部で長軸 225 ㎝、短軸 214 ㎝（底面積 3.68 ㎡）、深さ北西側で 263 ㎝、南東側で 151 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～８層）がブロック土を含む黒色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（９～17 層）が明黄褐色シ

ルトと黄灰色細砂～細礫の混合層および黒褐色～灰黄褐色極細砂混じりシルト、下位（18層）が黒褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は外部からの風雨による堆積が進行するが、まもなく壁面の崩落による堆積が進む。その後、ブロック土がみられることから最終的には人為的に埋め戻されているものと考えられる。遺物は、縄文土器（239.2 g）、石器（994.6 g）が出土した。このうち石器１点（2226）のみを掲載した。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は検出されなかった。出土土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期前葉から中葉前半（大木7b～8a式古段階）に位置づけた。（河本）

SK419（第２分冊第238図、第４分冊写真図版248図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南側でSK411と重複し、これより古い。この遺構に切られ、南半部プランは不明であるが、北半部平面形は円形基調を呈する。規模は残存する東－西方向で開口部径157㎝、底部径143㎝（復元で底面積1.70㎡）、深さは最深部で67㎝である。北半部の断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がる。底面は南側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は風化花崗岩ブロックを少量含む褐色砂質シルトの単層である。遺物は、縄文土器（179.1 g）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、判別できる土器片や重複関係からみると、縄文時代中期前葉から中葉前半（大木7b～8a式併行）が想定される。（丸山）

SK420（第２分冊第242図、第４分冊写真図版249）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側でSK419と重複し、これより新しい。西側でSK411と重複し、これより古い。東側でSK421と重複するが、これとの先後関係は不明である。これらの遺構に切られるため全容は不明であるが、残存部平面形は円形基調である。規模は残存する南北方向で開口部径188㎝、底部径165㎝（復元で底面積2.25㎡）、深さは最深部で48㎝である。中央部は径16㎝、深さ８㎝の範囲でピット状に低く掘り込まれる。副穴の可能性がある。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がり開口部に至る。底面は南側に向かい低く傾斜する。堆積土は10層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含む暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒と褐色砂質シルトの混合土が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期前葉から中葉前半（大木7b～8a式併行）が想定される。（丸山）

SK421（第２分冊第242図、第４分冊写真図版249）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側は調査区域外にかかり未調査である。また、先後関係は不明だが西側でSK420と重複する。平面形は他遺構との重複により、西側範囲は不明である。残存部平面形は不整な円形を呈する。規模は残存する南北方向で開口部径197㎝、底部径201㎝（復元で底面積3.48㎡）、深さは最深部で138㎝である。断面形は確認できる北側断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾して立ち上がった後、弱く外反しながら開口部に至る。底面は北半部が平坦で、南半部は全体的に凹凸が認められる。堆積土は10層に細分される。上位は風化花崗岩粒と黄褐色砂質シルトの混合土、中位は褐色シルト、下位は風化花崗岩粒と明黄褐色シルトの混合土が堆積する。遺物は、縄文土器（12 g）がわずかに出土しているが、図示したものはなく、文様を判別できる破片もない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期前葉から中葉前半（大木7bから8a式併行）以降が想定される。（丸山）

SK422（第２分冊第242図、第４分冊写真図版249）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東半部は調査区域外にかかり未調査である。残存部平面形は円形である。規模は南北方向で開口部径206㎝、底部径211㎝（復元で底面積3.56㎡）、深さは最深部で102㎝である。断面形はおおよそフラスコ形で、北側は底面から僅かに内傾して立ち上がった後、直立気味に開口部に至る。南側は僅かに内湾して立ち上がり、その後外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は

９層に細分される。上位は炭化物を微量含むにぶい黄褐色シルト、中位は風化花崗岩を斑状に少量含む褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒と褐色砂質シルトの混合土が堆積する。遺物は、縄文土器（498.8 ｇ）が出土するが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる土器片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK423（第２分冊第 243 図、第４分冊写真図版 249）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ～Ⅴ層上面で検出した。北側で SK428 と重複し、この遺構よりも古い。平面形は略円形である。規模は開口部径 281 ㎝（北東－南西方向推定）、底部で長軸 267 ㎝、短軸 254 ㎝（底面積 5.02 ㎡）、深さは最深部で 149 ㎝である。北側断面形はフラスコ形で、南側断面はビーカー形である。底面は南側に向かい低く傾斜する。堆積土は 16 層に細分される。上位は風化花崗岩粒・褐色地山ブロックを微量含む暗褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒微量含む灰黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒～礫を少量含む黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（1,810.2 ｇ）、石器（237.8 ｇ）が出土した。このうち、土器２点（750・751）を掲載した。このほか、埋土の炭化種実同定を行っている。その結果、オニグルミ・クリなどが少量検出された（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK424（第２分冊第 244 図、第４分冊写真図版 249・250）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。北西側で SK440 と重複し、これより古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 140 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 198 ㎝（底面積 3.25 ㎡）、深さは最深部で 154 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北西側は底面から短く外傾して立ち上がりその後内傾して開口部に至る。南東側は内傾して立ち上がり、その後外側に屈曲して開口部に至る。底面は若干の凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。堆積土は 35 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色シルト、中位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含む灰黄褐色砂質シルトが堆積する。土坑底面から埋土にかけて、土器と貝の一括廃棄が認められる。遺物は、縄文土器（5,514.6 ｇ）が出土した。このうち土器２点（752・753）を掲載した。このほか、埋土中位～再利用土坑底面周辺より採取した土壌の炭化種実同定および骨・貝類同定を実施している。結果、オニグルミ・クルミ、貝類片が検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK425（第２分冊第 243 図、第４分冊写真図版 250）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 174 ㎝、底部で長軸 198 ㎝、短軸 173 ㎝（底面積 2.54 ㎡）、深さは最深部で 162 ㎝である。断面形はフラスコ形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は７層に細分される。上位は砂～小礫を含むにぶい黄橙色砂質シルト、中位は砂～小礫・風化花崗岩ブロックを含む暗褐色砂質シルト、下位は砂～小礫を多く含む暗褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK426（第２分冊第 243 図、第４分冊写真図版 250）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南西側で SK434 と重複、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 95 ㎝、短軸 73 ㎝、底部で長軸 89 ㎝、短軸 67 ㎝（底面積 0.46 ㎡）、深さは最深部で 65 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北西側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は４層に細分される。上位は風化花崗岩を微量含む灰黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩を少量含む黒褐色砂質シルト、下位はにぶい黄橙色風化花崗岩（マサ土）が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないた

め、不明とする。（丸山）

SK427（第２分冊第 244 図、第４分冊写真図版 250）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 175 ㎝、短軸 148 ㎝、底部で長軸 173 ㎝、短軸 136 ㎝（底面積 1.92 ㎡）、深さは最深部で 197 ㎝である。断面形は東半部の断面形は歪なフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり、最大 25 ㎝オーバーハングする。西半部はビーカー形を呈する。底面は中央部が低く掘り込まれ皿状を呈する。堆積土は 10 層で構成される。上位は風化花崗岩の巨礫を含む黒褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩の崩落層、下位は風化花崗岩を含む黒褐色～にぶい黄褐色砂質シルトが凸レンズ状に堆積する。埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は、縄文土器（58.2 ｇ）、石器（456.1 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。出土量がわずかであるが、文様を判別できる土器片から、帰属時期は縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）を想定する。（丸山）

SK428（第２分冊第 243 図、第４分冊写真図版 251）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ～Ⅴ層上面で検出した。南東側で SK423 と重複し、これより新しい。南西側は流出等によってプランが不明瞭であるが、平面形は略円形を呈する。規模は残存する東西方向で開口部径 166 ㎝、底部径 153 ㎝（復元で底面積 1.48 ㎡）、深さは 36 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に短く立ち上がる。底面は南側に向かい 22° の勾配で低く傾斜する。堆積土は２層に細分される。上位は風化花崗岩粒と褐色地山ブロックを微量含む灰黄褐色砂質シルト、下位はにぶい黄褐色を呈する風化花崗岩の崩落土が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降を想定する。（丸山）

SK429（第２分冊第 245 図、第４分冊写真図版 251）　北尾根の南斜面中位に位置している。埋没沢付近のⅣ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 183 ㎝、短軸 153 ㎝、底部で長軸 194 ㎝、短軸 167 ㎝（底面積 2.49 ㎡）、深さは最深部で 234 ㎝である。断面形はフラスコ形である。北西側埋土中位に壁面の崩落によるとみられるブロックの堆積が確認できることから、本来はもっと歪みのないフラスコ形状であったと考えられる。南東側はやや内傾して立ち上がった後、中程から大きく外傾して開く形状を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は 28 層に細分される。上位は砂・小礫を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒・炭化物粒を少量含む黒褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒・褐色砂質シルトを少量含む灰黄褐色砂質シルトが堆積する。埋土中位より縄文時代中期の土器が出土している（754）。遺物は、縄文土器（692.4 ｇ）、石器（4,060.3 ｇ）が出土した。このうち、土器１点（754）、石器２点（1932・2251）を掲載した。遺構の帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK430（第２分冊第 245 図、第４分冊写真図版 251 図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。本土坑の埋没後に、SK430 の跡地を再利用した炉穴が掘削されている。それ以外の遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 213 ㎝、短軸 197 ㎝、底部で長軸 229 ㎝、短軸 209 ㎝（底面積 3.73 ㎡）、深さは最深部で 187 ㎝である。断面形はフラスコ形で、北西側は底面から直立気味に立ち上がり、一旦深く内傾したのち角度を変え、弱く内傾しながら開口部に至る。南東側は内傾して立ち上がり、一旦括れたのち外傾して開口部に至る。底面は弱い凹凸が認められ、南東側に向かい低く傾斜する。堆積土は 10 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含む黒褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒・褐色地山ブロックを少量含む黒褐色砂質シルト、下位は

風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（1,711.5 g）、石器（169 g）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、不掲載土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK431（第２分冊第 246 図、第４分冊写真図版 251）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 142 ㎝、短軸 125 ㎝、底部で長軸 112 ㎝、短軸 101 ㎝（底面積 0.89 ㎡）、深さは最深部で 158 ㎝である。断面形はおおよそビーカー形で、底面から僅かに外傾しながら立ち上がる。北西側のみ上端部付近で外反する。底面は凹凸が認められ、緩い弧状に掘り込まれる。堆積土は６層に細分される。上位は砂～小礫を含む褐色砂質シルト、中位は砂～小礫を少量含む暗褐色砂質シルト、下位は砂～小礫・風化花崗岩ブロックを含む黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK432（第２分冊第 246 図、第４分冊写真図版 252）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 115 ㎝、短軸 86 ㎝、底部で長軸 123 ㎝、短軸 119 ㎝（底面積 1.10 ㎡）、深さは最深部で 124 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面は全体的にやや丸みを帯びる。堆積土は７層に細分される。上位は風化花崗岩粒・褐色地山ブロックを少量含む灰黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒を少量含む黒褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒・褐色地山ブロックを微量含む黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK433（第２分冊第 246 図、第４分冊写真図版 252）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。近接して SK434 があるが重複関係はない。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 92 ㎝、短軸 88 ㎝、底部で長軸 84 ㎝、短軸 77 ㎝（底面積 0.50 ㎡）、深さは最深部で 39 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は３層に細分される。上位は灰黄褐色の崩落風化花崗岩層、中位は風化花崗岩粒を含む黒褐色砂質シルトとにぶい黄褐色崩落風化花崗岩との混合土、下位は灰黄褐色の風化花崗岩（マサ土）が堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK434（第２分冊第 243 図、第４分冊写真図版 252）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側で SK426 と重複し、これより古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 157 ㎝、底部で長軸 218 ㎝、短軸 211 ㎝（底面積 3.46 ㎡）、深さは最深部で 166 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北西側に向かい低く傾斜する。堆積土は 15 層に細分される。上位は風化花崗岩を含む灰黄褐色砂質シルト、中位は黒褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩を含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK435（第２分冊第 247・248 図、第４分冊写真図版 252）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK383、436 に切られており、これらの遺構より古い。平面形はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 172 ㎝、短軸 169 ㎝、底部で長軸 196 ㎝、短軸 178 ㎝（底面積 2.50 ㎡）、深さ北東側で 169 ㎝、南西側で 143 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～６層）が暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（７

～11層）が黒褐色～褐色極細砂混じりシルトと明黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位（12～14層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトと黒色～黒褐色極細砂混じりシルト、黄灰色～にぶい黄橙色細砂～細礫の互層である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後崩落はおさまり、再び外部からの風雨による堆積が進行するようで、総じて自然堆積したものと考えられる。遺物は、縄文土器（15ｇ）が出土するが、図示したものはない。また、SK436と一括して取り上げた土器が27ｇある。このほか、埋土中位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）以前と想定される。（河本）

SK436（第２分冊第247・248図、第４分冊写真図版253）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK435、437を切っており、これらの遺構より新しい。平面形は開口部がやや歪な隅丸方形を呈し、一辺206㎝、底部は円形を呈し、長軸205㎝、短軸189㎝（底面積2.92㎡）、深さ北東側で162㎝、南西側で125㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～７層）が暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（８～11層）が黒褐色～黄褐色極細砂混じりシルトおよび、明黄褐色シルト、浅黄色細砂～細礫、下位（12～17層）が黒褐色～明黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後崩落はおさまり、再び外部からの風雨による堆積が進行するようで、総じて自然堆積したものと考えられる。なお、断面観察の結果、東側にみられる18～21層は別遺構である可能性も考えられる。遺物は、縄文土器（41.5ｇ）が出土するが、図示したものはない。そのほかSK435と一括して取り上げた土器が27ｇある。帰属時期は、重複が新しいため、あまり時期を限定できない。可能性としては、重複関係から縄文時代中期中葉（大木8a式併行）以降が想定される。（河本）

SK437（第２分冊第247・248図、第４分冊写真図版253）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK380、436に切られており、これらの遺構より古く、SK475を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸171㎝、短軸128㎝、底部で長軸203㎝、短軸198㎝（復元で底面積3.14㎡）、深さ北側で162㎝、南側で99㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～15層）がブロック土の目立つ黒褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、中位（16～24層）が黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰白色細砂～細礫、下位（25・26層）がシルト混じり細砂～細礫、および褐色極細砂混じりシルトと明黄褐色極細砂混じりシルトの混合層である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後はブロック土が目立つことから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。このほか、埋土中位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木8a式併行）以前を想定する。（河本）

SK438（第２分冊第223図、第４分冊写真図版253）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK357を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸103㎝、短軸76㎝、底部で長軸120㎝、短軸34㎝（残存で底面積0.32㎡）、深さは北側で47㎝、南側で13㎝である（現存値）。断面形はやや歪な浅皿形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土はにぶい黄色～オリーブ黄色シルト混じり極細砂～細砂およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック状に見えることから人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木8a

式併行）以降を想定する。（河本）

SK439（第２分冊第 223 図、第４分冊写真図版 253）　北尾根の南側斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK357 に切られており、この遺構より古く、SK360 を切っており、この遺構より新しい。開口部の平面形・規模は断面からの推定となるが、およそ円形を呈し、径約 80 ㎝、底部は長軸 94 ㎝、短軸 85 ㎝（底面積 0.41 ㎡）、深さ東側で 96 ㎝、西側で 77 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄褐色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色～浅黄色極細砂混じりシルト、中位（３・４層）がにぶい黄褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルトおよび浅黄色シルト混じり細砂～極粗砂、下位（５層）が黄褐色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行する。その後も、葉理状の堆積をすることから総じて自然堆積したものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降を想定する。（河本）

SK440（第２分冊第 244 図、第４分冊写真図版 254）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。南東側で SK424 と重複し、これより新しい。また、北西側で SK441 と重複し、これより古い。平面形は略円形である。開口部規模は、判明する北東から南西方向で径 222 ㎝、底部は長軸 179 ㎝、短軸 116 ㎝（復元で底面積 1.90 ㎡）、深さは最深部で 87 ㎝である。中央部からは径 28～54 ㎝・深さ 20～30 ㎝の小ピットが２基確認されている。副穴の可能性がある。断面形はフラスコ形で、底面から丸みを持って立ち上がる。北西側の壁面上位は SK441 に切られ残存しない。また、南東側は斜面の流出等により残存していない。底面は丸みを帯びた皿状を呈する。堆積土は９層に細分される。上位は風化花崗岩粒・炭化物・地山ブロックを微量含む灰黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒・炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒・炭化物粒を微量含む黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（70.7 ｇ）がわずかに出土している。このうち土器１点（755）を掲載した。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、オニグルミ・クリが検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、重複関係や出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK441（第２分冊第 244 図、第４分冊写真図版 254）　北尾根の南斜面中位に位置している。埋没沢範囲のⅢ～Ⅳ層上面で検出した。南東側で SK440 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸方形である。規模は開口部で長軸 150 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 127 ㎝、短軸 78 ㎝（底面積 0.93 ㎡）、深さは最深部で 65 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面は南に向かい低く傾斜する碗状を呈する。堆積土は２層に細分される。上位は風化花崗岩粒と褐色地山ブロックを微量含む黒褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含む褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK442（第２分冊第 246 図、第４分冊写真図版 254）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 126 ㎝、短軸 121 ㎝、底部で長軸 133 ㎝、短軸 124 ㎝（底面積 1.21 ㎡）、深さ 31 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）が暗オリーブ褐色細砂～細礫混じりシルト、中位（２層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～極粗砂と明黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位（３・４層）が褐色細砂～細礫混じりシルトおよび黄褐色シルト混じり細砂～細礫である。壁面の崩落以外に由来を求めうるブロック土が目立たないため、総じて自然堆積したものと推

定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK443（第２分冊第 248 図、第４分冊写真図版 254）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK444 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 173 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 202 ㎝、短軸 187 ㎝（底面積 2.80 ㎡）、深さ東側で 125 ㎝、西側で 70 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）が灰白色細砂～細礫ブロック土を含む黄灰色～灰黄色細砂～細礫、中位（５～８層）が黄灰色～灰白色細砂～細礫および灰黄褐色極細砂混じりシルト、にぶい黄褐色～にぶい黄色シルト混じり細砂～粗砂、下位（９層）が黄褐色シルト混じり細砂～細礫。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後の堆積物は壁面に見られるＶ層由来の砂礫も伴うようになり、壁面の風化・崩落による堆積もみられるようになる。中位まで埋まったのち、一時期、外部からの風雨による堆積が進行するが、再び壁面の風化・崩落によって堆積が進む。壁面の崩落以外に由来を求めうるブロック土が目立たないため、総じて自然堆積したものと推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構からも遺物の出土がないことから不明とする。（河本）

SK444（第２分冊第 248 図、第４分冊写真図版 255）　中尾根の南斜面中位に位置している。Ｖ層上面で検出した。SK443 に切られており、この遺構より古い。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 153 ㎝、短軸 127 ㎝、底部で長軸 183 ㎝、短軸 170 ㎝（底面積 2.35 ㎡）、深さ北西側で 125 ㎝、南東側で 90 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１・２層）がにぶい黄褐色シルト混じり細砂～細礫および灰白色細砂～細礫、中位（３～６層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、黄褐色シルト混じり細砂～細礫、明黄褐色シルトの混合層、下位（７層）が灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初から、外部からの風雨による堆積と壁面の崩落による堆積が併行して進み、中位まで埋まった後、大規模な壁面の崩落により堆積する。壁面の崩落以外に由来を求めうるブロック土が目立たないため、総じて自然堆積したものと推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構からも遺物の出土がないことから不明とする。（河本）

SK445（第２分冊第 239 図、第４分冊写真図版 255）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ｖ層上面で検出した。平面上では SK415 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 206 ㎝、短軸 182 ㎝、底部で長軸 249 ㎝、短軸 239 ㎝（底面積 4.58 ㎡）、深さ東側で 126 ㎝、西側で 53 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はＶ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）が灰白色シルトブロック土を含むにぶい黄色～淡黄色細砂～細礫およびオリーブ褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（６・７層）が黄褐色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（８・９層）が明黄褐色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色極細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落も併行して生じるようになり壁面に由来するブロック土も堆積するようになる。上位の層にはブロック土が散見されることから、当初は自然による堆積が進むも、最終的には人為的に埋め戻されていると考える。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK446（第２分冊第 246 図、第４分冊写真図版 255）　中尾根の南斜面上位に位置している。Ｖ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 100 ㎝、短軸 78 ㎝、底部で長軸 82 ㎝、短軸 59 ㎝（底面積 0.39 ㎡）、深さ６㎝である。断面形は浅皿形を呈し、

底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、底面は平坦である。堆積土はにぶい黄褐色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫が堆積する。そもそもの残存厚が薄いため、自然堆積したものか人為堆積したものかの区別は難しい。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK447（第２分冊第 249 図、第４分冊写真図版 255）　中尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面上では SK448 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 184 ㎝、短軸 145 ㎝、底部で長軸 189 ㎝、短軸 172 ㎝（底面積 2.46 ㎡）、深さ東側で 71 ㎝、西側で 16 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、中位（２・３層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫層を間在させる黒褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（４・５層）が明黄褐色シルト混じり細砂～細礫および黄灰色細砂～細礫である。廃絶直後から大きく壁面の崩落が生じ、その後壁面の崩落と外部からの風雨による堆積が繰り返され、再度大きく壁面が崩落による堆積が生じる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK448（第２分冊第 249 図、第４分冊写真図版 256 図）　中尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。平面上では SK447 と重複するが、断面観察したところ切り合いは認められなかった。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 192 ㎝、短軸 169 ㎝、底部で長軸 199 ㎝、短軸 184 ㎝（底面積 2.80 ㎡）、深さ北西側で 177 ㎝、南東側で 106 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が明黄褐色ブロック土を含むにぶい黄褐色～褐色極細砂混じりシルト、中位（４～12 層）がにぶい黄色シルト混じり細砂～細礫および灰白色細砂～細礫および暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（13 層）がにぶい黄褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の互層である。廃絶当初から壁面の崩落による堆積と外部からの風雨による堆積が繰り返され、その中には 11 層のような大規模な壁面の崩落も見られる。上位はブロック土を含む土が堆積していることから、廃絶後しばらくは自然による堆積が進むが、中位まで埋まってから後は人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（河本）

SK449（第２分冊第 98・100 図、第４分冊写真図版 256）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層で検出した。SK365・367 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 101 ㎝、短軸 73 ㎝、底部で長軸 71 ㎝、短軸 46 ㎝（底面積 0.26 ㎡）、深さ 51 ㎝である。断面形はU字形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は明黄褐色シルトブロック土を含む褐色～黄褐色極細砂混じりシルトが堆積する。ブロック土がみられることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。当初、単独の土坑として捉えたが、埋土の類似性やその他の土坑との位置関係から、SI65 の主柱穴と考える。遺物は縄文土器（3.7 ｇ）が出土したが、図示したものはない。（河本）

SK450（第２分冊第 249 図、第４分冊写真図版 256）　北尾根の中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を呈し、規模は開口部で長軸 160 ㎝、短軸 153 ㎝、底部で長軸 204 ㎝、短軸 197 ㎝（底面積 3.11 ㎡）、深さ北西側で 121 ㎝、南東側で 79 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）が黄褐色～にぶい黄色細砂～細礫、中位（５～９層）が灰黄色～灰白色細砂～細礫および黄褐色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫、下位（10～12 層）がブロック土を含むオリーブ褐色～暗灰黄色シル

ト混じり細砂～細礫、および灰白色細砂～細礫。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進み、その後ブロック土が含まれることから、壁面の崩落を伴いつつも主に人為的に埋め戻されていると考えられる。埋土下位より１個体土器が出土している。遺物は、縄文土器（2,639.2 ｇ）が出土した。このうち土器１点（756）を掲載した。このほか、埋土下位出土の土器内部の土壌を対象として炭化種実同定を行ったが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a 式新段階～8b 式新段階併行）に位置づけた。（河本）

SK451 →欠番

SK452～454 第４節へ

SK455（第２分冊第 250 図、第４分冊写真図版 257）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。重複する他遺構はない。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 163 ㎝、短軸 144 ㎝、底部で長軸 183、短軸 142 ㎝（底面積 2.19 ㎡）、深さは最深部で 224 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり一旦窄まったのち、外反して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は８層に細分される。上位は褐灰～明黄褐色シルト、中位は黒褐色シルト、下位は黄灰色～オリーブ褐色シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（604 ｇ）が出土しているが、図示するものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片はなく、重複遺構もないことから不明とする。（丸山）

SK456（第２分冊第 250 図、第４分冊写真図版 258）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 199 ㎝、短軸 138 ㎝、底部で長軸 164 ㎝、短軸 132 ㎝（底面積 1.65 ㎡）、深さは最深部で 172 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は８層に細分される。上位は黄灰色～黄橙色シルト、中位は浅黄色細礫、下位は黒褐色極細砂混じりのシルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（185 ｇ）がわずかに出土したが、図示したものはない。文様が判別できる破片はなく、重複する遺構もないため、帰属時期は不明である。（丸山）

SK457（第２分冊第 250 図、第４分冊写真図版 258）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部で長軸 218 ㎝、短軸 126 ㎝、底部で長軸 200 ㎝、短軸 143 ㎝（底面積 2.31 ㎡）、深さは最深部で 168 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がった後、外反して開口部に至る。底面は多少の凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。堆積土は 10 層に細分される。風化花崗岩ブロックを少量含む褐灰～暗灰黄色シルトで構成される。全体的に締まりが弱いことから、短期間で埋没した可能性がある。遺物は、縄文土器（1,535.6 ｇ）が出土している。このうち土器１点（758）を掲載した。このほか、底面採取の土壌を対象に炭化種実同定を実施した。その結果、クリを主体として、オニグルミ・トチノキなどの堅果類が検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土遺物から、縄文時代中期末葉（大木 10 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK458（第２分冊第 250 図、第４分冊写真図版 258）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南東側は斜面下位にあたり、壁が残存していない。他遺構との重複はない。平面形は円形を呈する。規模は開口部径 90 ㎝、底部径 61 ㎝（底面積 0.36 ㎡）、深さは最深部で 53 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がった後、外側に屈曲して開口部に至る。底面はやや丸みを帯びる。堆積土は風化花崗岩ブロックを少量含む黄灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK459（第２分冊第 251 図、第４分冊写真図版 258）　北尾根の南斜面下位西側に位置している。Ⅴ層

上面で検出した。南西側でSK460、中央～南東側にかけてSK461・SK502・SK501と重複する。SK460に切られ、そのほかの遺構を切る。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸243㎝、短軸194㎝、底部で長軸215㎝、短軸179㎝（底面積2.93㎡）、深さは最深部で161㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり、中位で括れその後外傾して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は４層で構成される。にぶい黄褐色～褐色シルト主体で構成され、中位から下位にかけて黒褐色～明褐色ブロックを含む。遺物は、石器（922.8ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、直接重複する遺構からは遺物の出土がないことから不明とする。（丸山）

SK460（第２分冊第251図、第４分冊写真図版259）　北尾根の南斜面下位西側に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側でSK459と重複し、これより新しい。平面形は円形である。規模は開口部で長軸145㎝、短軸85㎝、底部で長軸124㎝、短軸88㎝（底面積0.78㎡）、深さは最深部で59㎝である。断面形は歪なフラスコ形で、南西側が底面から内湾しながら立ち上がり、上位で直立気味に開口部に至る。北東側は外傾しながら立ち上がる。底面は北東側に向かい僅かに低く傾斜する。堆積土は５層からなる。全体的に風化花崗岩の細礫を含む黒色～黒褐色シルト主体で構成される。遺物は出土していない。重複ではもっとも新しい遺構であるが、直接重複する遺構からは遺物の出土がない。そのため帰属時期は不明とする。（丸山）

SK461（第２分冊第251図、第４分冊写真図版258）　北尾根の南斜面下位西側に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK459と上下の重複関係にあり、これより古い。また、南東側でSK501・SK502と重複し、前者より古く、後者より新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸211㎝、短軸105㎝（底面積1.67㎡）、深さは最深部で20㎝である。断面は上部を新期の遺構に壊されているため全容は不明である。判明する断面形は皿形で、底面中央にむかい微かに凹んでいる。堆積土は２層からなる。黒褐色シルトブロック・地山ブロックを含む灰黄褐色細砂混じりシルト主体で構成される。遺物は出土していない。（丸山）

SK462（第２分冊第252図、第４分冊写真図版259）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK463と重複するが、断面での切り合いを確認できておらず、先後関係は不明である。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸187㎝、短軸169㎝、底部で長軸238㎝、短軸215㎝（3.84㎡）、深さ西側で223㎝、東側で101㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が根による擾乱を受ける暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫および黒褐色細砂～細礫混じりシルト、中位（４～９層）が灰黄褐色～暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫および灰黄色～灰白色細砂～細礫、下位（10～15層）が暗灰黄色シルト混じり細砂～細礫および灰白色細砂～細礫。廃絶当初は壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、その後、Ⅴ層に由来する土がみられることから、壁面に崩落による堆積も併行して進み、埋土上位については植物による擾乱を受けている。壁面の崩落以外に由来を求めうるブロック土が目立たないため、総じて自然堆積したものと推定される。遺物は、縄文土器（11ｇ）がわずかに出土するが、図示可能なものはない。文様を判別できる破片もなく、帰属時期は不明である。（河本）

SK463（第２分冊第252図、第４分冊写真図版259）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側でSK464と重複し、これより古い。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸168㎝、短軸149㎝、底部で長軸191㎝、短軸184㎝（底面積2.38㎡）、深さは最深部で123㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から緩く内湾して立ち上がり、その後内傾して開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は14層に細分される。上位は風化花崗岩粒を多く含む灰黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒と炭化物粒を微量含む黒褐色砂質シルトと灰黄褐色砂質シルトの混合層、

下位は風化花崗岩粒を含む灰黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（332.5 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、文様が判別できる土器片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK464（第２分冊第 252 図、第４分冊写真図版 259 図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南西側で SK463 と重複し、これより新しい。平面形は略円形を呈する。規模は開口部で長軸 130 ㎝、短軸 97 ㎝、底部で長軸 121 ㎝、短軸 100 ㎝（底面積 0.92 ㎡）、深さは最深部で 87 ㎝である。西側断面はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。東側は底面から丸みをもって立ち上がる。底面は皿状に窪み、やや凹凸が見られる。堆積土は５層に細分される。上位はにぶい黄褐色の崩落風化花崗岩粒、中位は風化花崗岩粒を少量含む灰黄褐色質シルト、下位は灰黄褐色の崩落風化花崗岩粒が堆積する。遺物は、縄文土器（12 ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK465（第２分冊第 252 図、第４分冊写真図版 260）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 181 ㎝、短軸 138 ㎝、底部で長軸 214 ㎝、短軸 196 ㎝（底面積 3.27 ㎡）、深さは最深部で 130 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、西側に向かい低く傾斜する。堆積土は 13 層に細分される。上位はにぶい黄褐色の崩落風化花崗岩粒、中位は風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄橙色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を少量含む灰黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。このほか、埋土上～下位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出である。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK466（第２分冊第 253・254 図、第４分冊写真図版 260）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK476 に切られており、この遺構より古く、SK467 を切っており、この遺構より新しい。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 152 ㎝、底部で長軸 197 ㎝、短軸 171 ㎝（表面積 2.57 ㎡）、深さ北側で 120 ㎝、南側で 86 ㎝である（現存値）。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が暗褐色～褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄色極細～細砂混じりシルト、中位（４～16 層）が灰白色細砂～細礫およびにぶい黄色極細砂混じりシルト、にぶい黄褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、下位（17～19 層）が暗褐色～黄褐色極細砂混じりシルトおよび灰白色細砂～細礫である。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後ブロック土が見られることから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係より、縄文時代中期前葉から中葉（大木 7b～8a 式併行）に位置づけた。（河本）

SK467（第２分冊第 253・254 図、第４分冊写真図版 260）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK466・468 に切られており、これらの遺構より古い。平面形は歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 188 ㎝、短軸 180 ㎝、底部で長軸 135 ㎝、短軸 49 ㎝（残存で底面積 0.48 ㎡）、深さ北側で 124 ㎝、南側で 87 ㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～５層）が暗褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（６～９層）が褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色極細砂混じりシルト、下位（10 層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行する。その後、ブロック土が見られることから総じて人為的

に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出である。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期前葉（大木 7b 式併行）以前に位置づけた。（河本）

SK468（第２分冊第 254 図、第４分冊写真図版 260）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅲ層中で検出した。SK467 を切っており、この遺構より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 176 ㎝、短軸 146 ㎝、底部で長軸 161 ㎝、短軸 158 ㎝（底面積 1.89 ㎡）、深さ北側で 146 ㎝、南側で 92 ㎝である。断面形は北側がフラスコ形、南側がビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～７層）が暗褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、中位（８～15 層）が暗褐色～褐色極細砂混じりシルトとにぶい黄褐色～黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、下位（16～24 層）が黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後崩落が生じ壁面に由来するブロック土が堆積する。その後はラミナ状の堆積が見られることから、自然堆積したものと考えられる。遺物は、縄文土器（421.1 ｇ）が出土している。このうち土器１点（759）を掲載した。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、未検出であった。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期前葉（大木 7b 式併行）に位置づけた。（河本）

SK469（第２分冊第 252・253 図、第４分冊写真図版 261）　北端の尾根、調査区最北端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側で SK470 と重複し、これより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 209 ㎝、短軸 166 ㎝、底部で長軸 192 ㎝、短軸 168 ㎝（底面積 2.44 ㎡）、深さは最深部で 188 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり括れた後、上半部で緩く外反して開口部に至る。西側の壁面上位が一部外側に張り出す形状の乱れは、木根による攪乱の影響を受けたものと考えられる。底面は中央部東寄りがやや低く窪むほかは、ほぼ平坦である。堆積土は 12 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄褐色シルト、中位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色シルトで、いずれも斜行堆積である。下位は風化花崗岩粒を微量含む暗褐色シルトで構成される。下半部は SK470 を切って本遺構を掘削した際に東側に積み上げた廃土に相当する埋没土で、東側（谷側）一方向からの堆積状況を示す。中位の壁面崩落層を介し、上半部は対照的に西側斜面上方（山側）からの流入土が堆積している。全体的に比較的短時間で埋没したものと推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK470（第２分冊第 252・253 図、第４分冊写真図版 262）　北端の尾根、調査区最北端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南西側で SK469 と重複し、これより古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 235 ㎝、短軸 186 ㎝、底部で長軸 195 ㎝、短軸 189 ㎝（底面積 2.82 ㎡）、深さは最深部で 194 ㎝である。断面形はおおよそフラスコ形と考えられるが、歪みが大きい。東側は底面から内傾して立ち上がり弱く括れた後、上半部で内湾して開きながら開口部に至る。西側は小さく内湾した後、直線的に立ち上がり、上位で内傾する。底面はほぼ平坦である。堆積土は 11 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色シルト、中位は風化花崗岩粒を少量含むにぶい黄橙色シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含むにぶい黄褐色シルトで構成され、一次埋没土に相当する 11 層以外はすべて斜行堆積となる。下半部の４～10 層は東側（谷側）一方向からの流入土、上半部の１～３層はこれとは対照的に西側斜面上方（山側）からの流入土であり、全体的に比較的短時間で埋没したものと推定される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する遺構からも遺物の出土がなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK471（第２分冊第 254 図、第４分冊写真図版 263・264）　北端の尾根、調査区最北端に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 182 ㎝、短軸 151 ㎝、底部で長軸 163 ㎝、短軸 158 ㎝（底面積 2.00 ㎡）、深さは最深部で 194 ㎝である。西側断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾して立ち上がり一旦括れた後、上半部でやや外反して開口部に至る。東側断面はビーカー形で、開口部まで直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は 10 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含む暗褐色シルト、中位は風化花崗岩粒を少量含む褐色シルト、下位は風化花崗岩粒を微量含む暗褐色シルトが堆積する。埋土下位の９・10 層が水平堆積するほかは、上位～中位にかけてすべて斜行堆積しており、比較的短期間で埋没したものと推定される。遺物は中層から下層にかけて完形品が多く出土している。いずれも底面よりは浮いた状態のため土坑の機能が停止後に廃棄された可能性がある。中層の 763 は深鉢の下半分の個体と合わせロの状態で出土している。遺物は、土器（26,411.7 ｇ）、石器（276.9 ｇ）が出土している。このうち土器 11 点（760～770）、石器１点（2252）を掲載した。このほか、埋土の土壌を対象として炭化種実同定を実施している。その結果、種類不明の炭化物片（堅果類？）が微量検出されている（第Ⅵ章分析参照）。帰属時期は、出土土器から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式古段階併行）に位置づけた。（丸山）

SK472（第２分冊第 255 図、第４分冊写真図版 265）　北端の尾根に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 174 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 174 ㎝、短軸 153 ㎝（底面積 3.61 ㎡）、深さは最深部で 180 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味にして立ち上がり、上半部でやや開く。底面は平坦である。堆積土は７層に細分される。上位は風化花崗岩粒・小礫を含む暗褐色シルトの斜行堆積、中位は風化花崗岩粒を多量に含む褐色シルトと暗褐色シルトの互層による斜行堆積、下位は風化花崗岩粒を多量に含む黄褐色シルトの水平堆積で構成される。遺物は、縄文土器（828.5 ｇ）が出土している。このうち土器１点（771）を掲載した。帰属時期は、不掲載土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK473（第２分冊第 251 図、第４分冊写真図版 266）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 193 ㎝、短軸 182 ㎝（底面積 2.70 ㎡）、深さは最深部で 123 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部が微かに高い。堆積土は 15 層に細分される。上位は風化花崗岩粒を少量含む灰黄褐色砂質シルト、中位は風化花崗岩粒と炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩粒を少量含む黒褐色の砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK474（第２分冊第 255 図、第４分冊写真図版 266 図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東半部は削平により残存しない。他遺構との重複はない。残存部の平面形は円形基調である。規模は判明する南北方向で開口部径 113 ㎝、底部径 102 ㎝（復元で底面積 0.77 ㎡）、深さは最深部で 16 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粒を少量含む黒褐色砂質シルトの単層である。遺物は、縄文土器（686.7 ｇ）が出土しているが、示したものはない。文様が判別できる破片もなく、無文土器が多くを占める。帰属時期は、重複する遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK475（第２分冊第 255 図、第４分冊写真図版 266）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面

で検出した。SK437 に切られており、この遺構より古い。平面形は地層観察用トレンチにより東半部を削平してしまったが、残存する形状からおよそ円形を呈するものと考えられ、規模は開口部で径約 155 ㎝、底部で径約 144 ㎝（復元で底面積 1.55 ㎡）、深さ北側で 86 ㎝、南側で７㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が黒褐色極細砂混じりシルトおよびにぶい黄褐色極細砂混じりシルト、中位（４～６層）が明黄褐色極細砂混じりシルトおよび黄褐色極細砂混じりシルト、下位（７層）が灰白色細砂～細礫層を間在させる暗褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後の堆積にはブロック土が見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）を想定する。（河本）

SK476（第２分冊第 253・254 図、第４分冊写真図版 266）　北尾根南側斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK360 に切られており、この遺構より古く、SK466、514 を切っており、この遺構より新しい。平面形はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸 127 ㎝、短軸 118 ㎝、底部で長軸 129 ㎝、短軸 106 ㎝（底面積 1.08 ㎡）、深さ東側で 52 ㎝、西側で 42 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～３層）が黄褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルトおよび暗褐色極細砂混じりシルト、下位（４・５層）が黄褐色極細砂混じりシルトと黄褐色～浅黄色極細砂～細砂混じりシルトの互層である。廃絶当初から壁面の風化・崩落と外部からの風雨による堆積が進行し、総じて自然堆積したものと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）を想定する。（河本）

SK477 欠番

SK478（第２分冊第 240 図、第４分冊写真図版 267）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK514 に切られており、この遺構より古く、SK413 を切っており、この遺構より新しい。図上では SK479 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 178 ㎝、短軸 147 ㎝、底部で長軸 182 ㎝、短軸 169 ㎝（2.26 ㎡）、深さ北西側で 138 ㎝、南東側で 70 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～８層）がブロック土のみられる暗褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（９～17 層）が黒褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、下位（18～28 層）はブロック土がみられる黒褐色～明黄褐色極細砂混じりシルト。ブロック土が散見されることから、壁面の崩落も一部見られるが、総じて人為的に埋め戻されたものと考えられる。付属施設は底面中央に 41×39 ㎝、深さ９㎝の副穴が存在する。遺物は縄文土器（6.8 ｇ）、石器（533.5 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）を想定する。11 段階ある重複のうち２段階目の古い階層にある遺構のため、縄文時代中期初頭や前葉前後にまで遡る可能性がある。（河本）

SK479（第２分冊第 240 図、第４分冊写真図版 267 図）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK413 を切っており、この遺構より新しい。上では SK478 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形は経年的な地表流出により、南側は失われてしまっていると考えられる。残存する形状は円形を呈し規模は開口部で長軸 96 ㎝、短軸 40 ㎝、底部で長軸 99 ㎝、短軸 48 ㎝（0.331 ㎡）、深さ北側で 25 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は明黄褐色シルトおよびにぶい黄褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトが

堆積する。埋土の残りが少ないため、人為的に埋め戻されたものか、自然に埋まったものか判断できない。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉（大木 8a 式併行）以降を想定する。ただし重複する SK413 は、10 段階ある重複のうちもっとも古い階層の遺構であるため、縄文時代中期初頭から前葉まで遡る可能性がある（貯蔵穴の形成が縄文時代前期に遡る可能性もあるが、遺物量からすると実質的には中期から始まるという前提のため）。（河本）

SK480（第２分冊第 224 図、第４分冊写真図版 267）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK358、359、413 を切っており、これらの遺構より新しい。平面形はおよそ楕円形を呈し、規模は開口部で長軸 245 ㎝、短軸 151 ㎝、底部で長軸 224 ㎝、短軸 213 ㎝（底面積 3.56 ㎡）、深さ北側で 197 ㎝、南側で 107 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～13 層）がブロック土の目立つ褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルト、中位（14～32 層）は灰白色シルト混じり細砂～細礫、暗褐色～にぶい黄褐色極細砂混じりシルト、下位（33～36 層）は灰白色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄橙色～明黄褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初から壁面の崩落による堆積が進み、その後、ブロック土が目立つ堆積をしていることから、人為的に埋め戻されているものと考えられる。遺物は出土していない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施したが、炭化種実は未検出であった。帰属時期は、重複する遺構が年代不詳であることから不明とするが、10 段階ある階層的な重複のうち上から２階層目にあることから、相対的に新しい時期が想定される。（河本）

SK481～490　欠番

SK491（第２分冊第 255 図、第４分冊写真図版 267）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK493 と重複し、これにより切られる。また、南東側で SI99 と重複し、これを切る。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 196 ㎝、短軸 139 ㎝、底部で長軸 163 ㎝、短軸 131 ㎝（底面積 1.39 ㎡）、深さは最深部で 82 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から緩やかに丸みを持って立ち上がる。底面はⅣ層まで掘り込まれる。堆積土は３層からなる。にぶい黄橙色シルト主体で構成され、下位に黒褐色ブロックが互層状に堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以降（大木９～10 式併行以降）が想定される。（丸山）

SK492（第２分冊第 256 図、第４分冊写真図版 268）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。平面形は略円形である。規模は開口部径 93 ㎝、底部径 58 ㎝（底面積 0.33 ㎡）、深さは最深部で 56 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から緩やかに内湾して立ち上がる。底面はやや丸みをおびる。堆積土は６層からなる。全体的に黄橙色ブロックを含むにぶい黄褐色砂混じりのシルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK493（第２分冊第 255 図、第４分冊写真図版 268）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK491 と重複し、これよりも新しい。平面形は円形である。規模は開口部径 220 ㎝、底部径 200 ㎝（底面積 0.61 ㎡）、深さは最深部で 58 ㎝である。断面形は皿形で、底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は丸みをおびる。堆積土は灰黄褐色の粗砂混じりシルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以降（大木９～10 式併行以降）が想定される。（丸山）

SK494（第２分冊第 256 図、第４分冊写真図版 268）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK495 と重複し、これらより新しい。また、南西側で SK532 と接するが先後関係は不明である。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 72 ㎝、短軸 44 ㎝、底部径 68 ㎝（底面積

0.16 ㎡）、深さは最深部で 32 ㎝である。断面形は皿形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面は皿状に湾曲する。堆積土は２層に細分される。上位は黄橙色シルトブロックを微量含むにぶい黄色シルト、下位は黄灰色シルトブロックを少量含む明黄褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（９ｇ）がわずかに出土するのみで、図示したものはない。文様を判別できる破片もない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半から後葉以降（大木 8b ～９式併行以降）を想定する。

（丸山）

SK495（第２分冊第 256 図、第４分冊写真図版 268）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI86 と重複し、これより古い。また、北側で SK524、南側で SK494 と重複するが、これらより古い。平面形は円形である。規模は開口部径 132 ㎝、底部径 95 ㎝（復元で底面積 0.54 ㎡）、深さは最深部で 60 ㎝である。断面形は皿形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面は丸みを帯びる。堆積土は３層からなる。全体的に黄橙色シルトブロックを含む褐灰から暗灰黄色シルトで構成される。遺物は、縄文土器（104 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。また、文様を判別できる破片はない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉後半から後葉以前（大木 8b ～９式併行以前）を想定する。（丸山）

SK496（第２分冊第 256 図、第４分冊写真図版 268）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK453 と重複し、これよりも古い。また西側で SK526、南側で SK533 と重複し、これよりも新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 142 ㎝、短軸 110 ㎝、底部で長軸 142 ㎝、短軸 114 ㎝（底面積 1.12 ㎡）、深さは最深部で 120 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり、一旦中位で括れ外反しながら開口部に至る。底面は丸みを帯びる。堆積土は３層で構成される。全体的に黄橙～暗褐色ブロックを含む。上位は黒色シルト、中位～下位は黄褐色～灰黄褐色の砂礫混じりのシルトが堆積する。遺物は、縄文土器（152.4 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様を判別できる破片から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK497（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 269）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK507 と重複し、これを切る。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 106 ㎝、短軸 68 ㎝、底部で長軸 113 ㎝、短軸 81 ㎝（底面積 0.94 ㎡）、深さは最深部で 58 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はやや凹凸が認められる。堆積土はにぶい黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期中葉前半から後半以降（大木 8a ～8b 式併行以降）が想定される。（丸山）

SK498（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 269）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI66 と重複し、これより古い。平面形は円形を呈する。規模は開口部で長軸 147 ㎝、短軸 137 ㎝、底部で長軸 217 ㎝、短軸 229 ㎝（底面積 3.39 ㎡）、深さは最深部で 133 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央部が僅かに低く掘り込まれる。堆積土は６層に分層され、全体的に少量の黄橙色シルトブロックを含む。上位は黒褐色シルト、中位は暗灰黄色シルト、下位は黄褐色シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（41.7 ｇ）と石器（1,272.8 ｇ）が出土した。このうち石器２点（2197・2198）を掲載した。帰属時期は、重複関係や出土土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK499（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 269）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK533、SK521 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長

軸 176 ㎝、短軸 134 ㎝、底部で長軸 160 ㎝、短軸 113 ㎝（底面積 1.43 ㎡）、深さは最深部で 85 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がり、上位でやや外傾して開口部に至る。底面はⅤ層まで掘り込んでおり、凹凸が認められる。堆積土は３層からなる。上～中位は黄橙色シルトブロックを少量含む黄褐から黒褐色粗砂混じりシルト、下位は黒褐色シルトブロックを少量含むにぶい黄褐色粗砂混じりシルトが堆積する。遺物は、縄文土器（751.8 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様を判別できる破片から、縄文時代中期中葉後半から末葉（大木 8b～10 式併行）を想定する。（丸山）

SK500（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 269）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI83 と重複しこれより古く、西側で SK516 と重複しこれより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 176 ㎝、短軸 104 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 90 ㎝（底面積 0.46 ㎡）、深さは最深部で 59 ㎝である。底面中央部に径 19 ㎝・深さ 19 ㎝の副穴を伴い、内部に土器が埋設されている。断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がり、上位で直立して開口部に至る。底面は緩い弧状を呈する。堆積土は４層からなる。全体に風化花崗岩粒をやや多く含む暗褐～にぶい黄褐色シルト主体で構成される。堆積土中に黄橙ブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、縄文土器（645.9 ｇ）が出土しており、このうち土器１点（772）を掲載した。このほか、底面の埋設土器内部および周囲の土壌を対象に炭化種実同定を実施している。その結果、トチノキが多量に検出されている（第Ⅵ章参照）。帰属時期は、出土土器のうち文様が判別できる破片から、縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK501（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 270）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SK459・SK454・SK502 と重複し、SK459 より古く、SK454・SK502 より新しい。また、南側で SK516 と重複し、これより新しい。平面形は円形である。規模は開口部で長径 182 ㎝、短径 173 ㎝、底部で長軸 145 ㎝、短軸 89 ㎝（底面積 0.92 ㎡）、深さは最深部で 109 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面は南側に低く傾斜する。堆積土は４層で構成される。上位は炭化物を微量含む黒褐色中砂混じりシルト、中位は黄褐灰色ブロックを少量含む褐灰色粗砂混じりシルト、下位は黄色シルトブロックを少量、炭化物を微量含む黒褐黄褐色の粗砂混じりシルトが堆積する。遺物は、縄文土器（49.1 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる土器片は縄文時代中期中葉前半を示すが、帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）を想定する。（丸山）

SK502（第２分冊第 251 図、第４分冊写真図版 270）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK461、南東側で SK501 と重複し、これらより古い。平面形は、楕円形である。規模は開口部径 232 ㎝、底部径 222 ㎝（復元で底面積 1.58 ㎡）、深さは最深部で 40 ㎝である。断面形は皿形で、底面から緩やかに立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれている。堆積土は黄色シルトブロックを微量含む明黄褐色粗砂混じりシルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）を想定する。（丸山）

SK503（第２分冊第 258 図、第４分冊写真図版 270）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SI99 と重複し、これにより切られる。また、東側で SI83 と重複し、これを切る。平面形は惰円形である。規模は開口部で長軸 179 ㎝、短軸 128 ㎝、底部で長軸 135 ㎝、短軸 90 ㎝（底面積 1.28 ㎡）、深さは最深部で 54 ㎝である。断面形は歪なビーカー形で、西側は底面から内傾しながら立ち上がり、東側は外傾して立ち上がる。底面は凹凸が認められ、斜面下方に向かい低く傾斜する。堆積土は３層からなり、風化花崗岩粒をやや多く含む黒褐色シルト主体で構成される。

遺物は、縄文土器（578.4 g）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様が判別できる破片や重複関係から、縄文時代中期後葉から末葉以降（大木９～10式併行以降）を想定する。（丸山）

SK504（第２分冊第258図、第４分冊写真図版270）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK507・517と重複しこれより古く、SK518と重複しこれより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸105㎝、短軸68㎝、底部で長軸98㎝、短軸59㎝（底面積0.50㎡）、深さは最深部で24㎝である。断面形は上部を削平されたビーカー形を呈し、底面から直立気味に立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれ、ほぼ平坦である。堆積土は風化花崗岩粗砂を多く含む黒色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半以前（大木8aから8b式併行以前）を想定する。（丸山）

SK505（第２分冊第257図、第４分冊写真図版270）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側でSK508、東側でSK509と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸113㎝、短軸76㎝、底部で長軸93㎝、短軸64㎝（復元で底面積0.52㎡）、深さは最深部で38㎝である。断面形は上部を削平されたビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれており、斜面下方に向かい低く傾斜する。堆積土は風化花崗岩細礫と粗砂をやや多く含む黄褐色シルトの単層である。遺物は、縄文土器（365.7 g）が出土しているが、図示したものはない。このほか、SK507と一括で取り上げた縄文土器（641.8 g）が出土しており、土器１点（773）を掲載した。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）と想定するが、年代幅をあまり限定できない。（丸山）

SK506（第２分冊第258図、第４分冊写真図版271）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI90と重複しており、先後関係は本遺構の方が古い。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸143㎝、短軸129㎝、底部で長軸165㎝、短軸154㎝（底面積2.01㎡）、深さは最深部で120㎝である。南西側断面はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。北東側は直立気味に立ち上がり開口部に至る。底面はほぼ平坦である。堆積土は12層に細分される。上位は黄橙色シルトブロックを微量含む暗灰黄色粗砂混じりシルト、中位は黄橙色シルトブロックを少量含む黒褐色極細砂混じりシルト、下位は黒褐色シルトブロックを微量含む黄橙色極細砂混じりシルトが堆積する。他遺構と異なり、本遺構は黒色系の堆積土主体で埋没していること、ブロック状の堆積土が多いこと、斜面の方向と異なる方向からの堆積が見られること、等から人為堆積によって埋没したと考えらえる。遺物は、縄文土器（68.3 g）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片があるが重複関係から、縄文時代中期後葉から末葉以前（大木９～10式併行以前）を想定する。（丸山）

SK507（第２分冊第258図、第４分冊写真図版272）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東から南側にかけてSK504・SK508・SK497と重複し、前２者より新しく、後者より古い。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸165㎝、短軸131㎝、底部で長軸132㎝、短軸86㎝（底面積0.95㎡）、深さは最深部で134㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり、中位で括れて外傾しながら開口部に至る。底面は凹凸が認められる。残存する堆積土は４層で構成される。上半部は風化花崗岩粒を少量含む褐色砂質シルト、下半部は褐色ブロック・風化花崗岩細礫を含む明黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、SK505と一括で取り上げてしまったもので、縄文土器（641.8 g）が出土している。このうち土器１点（773）を掲載した。掲載土器や文様が判別できる破片は、縄文時代中期中葉と中期後葉に２分できる。相対的に重複が新しいSK505を後者の帰

属時期にすると、本遺構の帰属時期は、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけることができるかもしれない。（丸山）

SK508（第２分冊第 258 図、第４分冊写真図版 272）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK507、南東側で SK505 と重複し、これらより古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 79 ㎝、短軸 76 ㎝、底部で長軸 64 ㎝、短軸 51 ㎝（底面積 0.20 ㎡）、深さは最深部で 46 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれており、弱い凹凸が認められる。堆積土は２層で構成される。上位は褐色から黄褐色ブロックを含む暗褐色シルト、下位は明黄褐色ブロックを多量に含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（1,522.6 ｇ）や石器（185.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる破片は、縄文時代中期前葉～中葉と中期後葉に２分される。重複関係をあわせると、帰属時期は、前者の時期、縄文時代中期前葉から中葉（大木 7b～8a 式併行）を想定する。（丸山）

SK509（第２分冊第 257 図、第４分冊写真図版 272）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK505 と重複し、これにより切られる。また、北側で SK518 と重複し、これを切る。北東～東側で SK510・SI22 と重複し、これらにより切られる。残存する平面形は円形基調である。規模は開口部径 145 ㎝、底部径 137 ㎝、（底面積 0.98 ㎡）、深さは最深部で 20 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒色～褐色ブロックを上位に含む暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK510（第２分冊第 259 図、第４分冊写真図版 272）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK518 と上下の重複関係にあり、これより新しい。また、南東側で SI22 と重複しており、これにより切られる。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 131 ㎝、短軸 92 ㎝、底部で長軸 72 ㎝、短軸 53 ㎝（底面積 0.31 ㎡）、深さは最深部で 78 ㎝である。断面形はＵ字形で、底面から丸みをもって立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれている。堆積土は明黄褐色ブロックを含む褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK511（第２分冊第 259 図、第４分冊写真図版 273）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK393、513 を切っており、これらの遺構より新しい。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 133 ㎝、短軸 117 ㎝、底部で長軸 158 ㎝、短軸 151 ㎝（底面積 1.83 ㎡）、深さ 104 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～４層）がブロック土の混じる褐色～にぶい黄橙色極細砂混じりシルトまたはシルト混じり細砂～細礫、中位（５～10 層）が浅黄色～淡黄色シルトおよび灰白色細砂～細礫、黄褐色シルト混じり細砂～細礫、下位（11 層）がにぶい黄褐色極細砂混じりシルトである。廃絶当初は主に外部からの風雨による堆積が進行し、その後壁面の崩落による堆積が進む。その後、壁面に由来しないブロック土を含む土が入っていることから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、縄文土器（35 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）以降に位置づけた。（河本）

SK512（第２分冊第 259 図、第４分冊写真図版 273）　北尾根の南斜面中位に位置している。SI77 の下面で検出した。SI77 に切られており、この遺構より古い。図上では SK380 と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は開口部で長軸 156 ㎝、短軸 137 ㎝、底部で長軸 189 ㎝、短軸 178 ㎝（復元で底面積 2.80 ㎡）、深さ 152 ㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底

面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１～11層）がブロック土を含む暗褐色～黄褐色極細砂混じりシルト、中位（12～19層）が黒褐色～明黄褐色極細砂混じりシルト、下位（20～27層）が黒褐色～明黄褐色極細砂混じりシルトおよび黄褐色～浅黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック土が目立つことから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は、縄文土器（12.3ｇ）がわずかに出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複するSI77も時期不詳のため、不明とする。（河本）

SK513（第２分冊第259図、第４分冊写真図版273）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK511に切られており、この遺構より古い。平面形は西側がSK511によって削平されているが、およそ円形を呈し、残存する規模は開口部で長軸94㎝、短軸72㎝、底部で長軸89㎝、短軸73㎝（残存で底面積0.36㎡）、深さ22㎝である。断面形はビーカー形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は上位（１層）がにぶい黄色極細砂混じりシルトと灰白色細砂～細礫の混合層、下位（２層）がブロック土を含むにぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。埋土の残りが少なく判断材料は乏しいが、壁面に由来する土以外のブロック土が埋土下位にみられることから、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）を想定する。（河本）

SK514（第２分冊第240図、第４分冊写真図版273）　北尾根の南斜面上位に位置している。SI76の下面で検出した。SI76、SK476に切られており、これらの遺構より古く、SK478を切っており、この遺構より新しい。形状はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸104㎝、短軸97㎝、底部で長軸127㎝、短軸115㎝（復元で底面積1.06㎡）、深さ北側で79㎝、南側で59㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ平坦である。堆積土は、上位（１層）は褐色極細砂混じりシルトと明黄褐色極細砂混じりシルトの混合層、中位（２～４層）は暗褐色極細砂混じりシルトおよび明黄褐色極細砂混じりシルト、下位（５層）は褐色極細砂混じりシルト。廃絶当初は主に壁面の風化と外部からの風雨による堆積が進行し、壁面の崩落も生じる。その後、ブロック状に見られることから、人為的に埋め戻されていると思われる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK515（第２分冊第237図、第４分冊写真図版274）　北尾根の南斜面上位に位置している。SI75下面およびⅣ層上面で検出した。SI75に切られており、この遺構より古い。上ではSK396と重なるが、切り合い関係は存在しない。平面形はおよそ円形を呈し、規模は開口部で長軸189㎝、短軸172㎝、底部で長軸201㎝、短軸184㎝（底面積2.88㎡）、深さ西側で189㎝、東側で87㎝である。断面形はフラスコ形を呈し、底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、平坦に構築される。堆積土は上位（６・７層）がブロック土を含む暗褐色～褐色極細砂混じりシルト、中位（８～15・18～23・25・27層）が灰白色細砂～細礫、灰黄色～にぶい黄色シルト混じり細砂～細礫およびにぶい黄褐色～にぶい黄色極細砂混じりシルト、下位（28・31層）が灰白色細砂～細礫およびにぶい黄褐色～灰黄色シルト混じり細砂～細礫である。廃絶当初は壁面の風化・崩落による堆積が進むが、この壁面の崩落によりSK515とは一続きとなり、以後両土坑は同時に堆積が進む。以後、葉理状の堆積が見られることから、しばらく自然堆積するが、上位はブロック土がみられることから人為的に埋め戻されているものと考えられる。副穴などは検出されていない。遺物は出土していない。このほか、埋土上位の土壌を対象として炭化種実同定を実施しているが、未検出であった。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）に位置づけた。（河本）

SK516（第２分冊第 260 図、第４分冊写真図版 274）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK517 と上下の重複関係にあり、この遺構より新しい。また西側で SK501、東側で SK500 と重複し、これらの遺構より古い。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 226 ㎝、短軸 161 ㎝、深さは最深部で 86 ㎝である（底面積 3.06 ㎡）。断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がり、上位付近で直立し開口部に至る。底面は凹凸を呈する。残存する堆積土は３層に分層できる。風化花崗岩細礫を含む褐色～にぶい黄褐色・暗褐色シルトで構成される。遺物は、縄文土器（117 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様を判別できる破片から、縄文時代中期後葉（大木９式併行）に位置づけた。（丸山）

SK517（第２分冊第 260 図、第４分冊写真図版 274）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側で SK516 と重複し、この遺構により古い。また、南側で SK504・SK510 と重複しこれらより新しい。そのほか間接的に重複する遺構が多数ある。平面形は不整形である。規模は開口部で長軸 243 ㎝、短軸 227 ㎝、深さは最深部で 73 ㎝である（底面積 4.15 ㎡）。断面形はフラスコ形で、底面から深く内傾して立ち上がり、上位で直立し開口部に至る。底面は僅かに凹凸が認められる。堆積土は５層で構成される。上位は風化花崗岩粗砂と細礫をやや多く含む黒褐色シルト、中位は褐色シルトブロックが帯状に堆積する黒褐色砂質シルト、下位は風化花崗岩細礫をやや多く含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（276.6 ｇ）、石器（377.8 ｇ）が出土したが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK518（第２分冊第 259 図、第４分冊写真図版 274）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SK517、東側で SI22、中央部で SK510 と重複し、これらにより切られる。そのほか多数の遺構と間接的に重複するが、相対的にはもっとも古い遺構である。平面形は不整形である。規模は開口部径 225 ㎝、底部径 218 ㎝、深さは最深部で 22 ㎝である（復元で底面積 1.79 ㎡）。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は黄褐色シルトブロックを多量に含む褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中様以前（大木 8a～8b 式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK519（第２分冊第 260 図、第４分冊写真図版 274）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK520・SI99 と重複し、これらに切られる。また、SI83 と上下に重複し、これにより上部を削平されている。また、東側で SK523・SI89 と重複し、これらを切っている。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 134 ㎝、短軸 112 ㎝、底部で長軸 78、短軸 115 ㎝（底面積 0.69 ㎡）、深さは最深部で 64 ㎝である。断面形は皿形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込んで構築されており、南東側に向かい低く傾斜する。堆積土は２層で構成される。上位は風化花崗岩粗砂をやや多く含む黒色砂質シルト、下位は黄褐色シルトブロックを多量に含む褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（557.5 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、出土土器のうち文様が判別できる破片や重複関係から、縄文時代中期中葉（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SK520（第２分冊第 260 図、第４分冊写真図版 275）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。東側で SI83 と重複しており、これらよりも新しい。また SI99 と上下に重複しており、これよりも古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 81 ㎝、短軸 80 ㎝、底部径 51 ㎝（復元で 0.32 底面積㎡）、深さは最深部で 40 ㎝である。断面形は皿形で、底面から丸みをもって立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれている。堆積土は２層で構成される。上位はにぶい黄褐色シルト、下位は黄褐色砂質シルトであり、いずれも黄色系の堆積土であり、砂粒が多く含まれる。遺物は出土し

ていない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉から末葉以降（大木９～10式併行）以降に位置づけた。（丸山）

SK521（第２分冊第260図、第４分冊写真図版275）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI83、SK499と重複し、この遺構よりも古い。残存する平面形は円形基調である。規模は開口部径120㎝、底部径112㎝（復元で底面積0.90㎡）、深さは最深部で42㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれ、ほぼ平坦である。堆積土の記録を欠く。遺物は、縄文土器（29ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、縄文時代中期中葉後半以前（大木8b式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK522（第２分冊第261図、第４分冊写真図版275）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北東側をトレンチにより欠失している。また、斜面下位にあたる南東側は壁面が残存していない。他遺構との重複はない。推定される開口部の元の形状は略円形である。規模は開口部長軸141㎝、底部長軸92㎝（いずれも残存値）（復元で底面積0.85㎡）、深さは最深部で63㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がる。底面はやや凹凸が認められる。堆積土は２層に分層され、全体に風化花崗岩を少量含む。上位は暗褐色砂質シルト、下位は黒褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、他遺構との重複もなく、年代決定の根拠がないため、不明とする。（丸山）

SK523（第２分冊第261図、第４分冊写真図版275）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI83・89、SK452・519と重複し、これらより古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸90㎝、短軸83㎝、底部で長軸82㎝、短軸72㎝（底面積0.44㎡）、深さは最深部で37㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がる。底面は南東側の掘り込みがやや浅い。堆積土は２層に分層され、全体に風化花崗岩を少量含む。上位は炭化物を僅かに含むにぶい黄褐色シルト、下位はしまりの弱い黄褐色砂質シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（48ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉前半以前（大木8a式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SK524（第２分冊第261図、第４分冊写真図版275）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北側でSK496、南側でSK495と上下に重複し、前者より古く、後者より新しい。平面形は円形基調である。規模は開口部径66㎝、底部径53㎝（復元で底面積0.21㎡）、深さは最深部で56㎝である。断面形はビーカー形を呈する可能性があるが、残存度が少ないため詳細は不明である。SK496精査中に発見したため、堆積土の記録を欠く。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期中葉後半以前から中期後葉までの間（大木8b式以前～９式併行）に位置づけた。（丸山）

SK525（第２分冊第261図、第４分冊写真図版276）　北尾根の南斜面下位に位置する。Ⅳ層上面で検出した。SI70（A・B・C）と重複し、それよりも古い遺構である。平面形は円形である。規模は開口部で長軸96㎝、短軸92㎝、底部で長軸203㎝、短軸180㎝（底面積2.69㎡）、深さは最深部で152㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり開口部に至る。底面は北側に向かって低く傾斜しており、中央部北側付近がピット状に最も低く掘り込まれる。堆積土は10層に細分される。上位は黄橙色シルトブロックを微量含む褐灰色細礫混じりシルト、中位は炭化物を微量含む黄灰色シルト、下位は黒褐色シルトブロックを含む明黄褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（1,395.2ｇ）が出土している。このうち土器４点（774～777）を掲載した。このほか、埋土中位の土壌を対象に炭化種実同定を実施しているが、未検出であった。帰属時期は、出土遺物や掲載土器か

ら、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a 式新段階～8b 式古段階併行）に位置づけた。　（丸山）

SK526（第２分冊第 261 図、第４分冊写真図版 276）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI66・86 と重複しており、これらよりも古い遺構である。平面形は略円形である。規模は開口部で長軸 143 ㎝、短軸 119 ㎝、底部で長軸 165 ㎝、短軸 159 ㎝、（底面積 2.04 ㎡）、深さは最深部で 98 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がり一旦弱く括れた後、上半部でやや外側に開きながら開口部に至る。西側はオーバーハングが強く、最大で 40 ㎝ほど内側に掘り込まれる。底面はほぼ平坦であるが、南西側が周囲より若干低く掘り込まれている。堆積土は９層に細分される。上位は黄橙色シルトブロックを微量含む黒色シルト、中位は黄橙色シルトブロックを少量含む黒褐色シルト、下位は黄橙色シルトブロックを少量含む黒褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（113.2 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様を判別できる破片はないが重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。　（丸山）

SK527（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 276）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI86 と重複し、これらより古い遺構である。形状は円形である。規模は開口部で長軸 117 ㎝、短軸 108 ㎝、底部で長軸 174 ㎝、短軸 141 ㎝（底面積 1.81 ㎡）、深さは最深部で 133 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。底面は礫が露出しており、やや凹凸が認められる。堆積土は９層に分層され、全体に黄橙色シルトブロックを少量含む。上位は黒褐～暗灰黄色シルト、中位は黄褐色シルト、下位は黄灰色～灰黄色シルト主体で構成される。最下層に黒褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（128 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片はないが重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。　（丸山）

SK528（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 276）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI66・86 と重複し、これらより古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 204 ㎝、短軸 179 ㎝、底部で長軸 230 ㎝、短軸 195 ㎝（底面積 3.36 ㎡）、深さは最深部で 109 ㎝である。断面形はフラスコ形で、底面から内湾して立ち上がる。底面は両端部と中央部がやや高く、凹凸が認められる。堆積土は 10 層に分層され、全体に黄橙色シルトブロックを少量含む。上位は黒褐～暗灰黄色シルト、中位は黄色シルト、下位は黒褐色シルト主体で構成される。遺物は、縄文土器（264.7 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。文様が判別できる破片は、すべて無文土器である。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。　（丸山）

SK529（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 277）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SI86 と重複し、これらより古い。平面形は円形である。規模は開口部で長軸 96 ㎝、短軸 81 ㎝、底部で長軸 95 ㎝、短軸 80 ㎝（底面積 0.54 ㎡）、深さは最深部で 74 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立して立ち上がる。南東側壁面は SI86 に切られ、ほとんど残存していない。底面はほぼ平坦である。堆積土は５層に分層され、上位は暗灰黄色シルト、中位は黄橙色シルト、下位は黒褐色シルト主体で構成される。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以前（大木９式併行以前）に位置づけた。　（丸山）

SK530（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 277）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南西半部は調査区域外にかかり未調査である。SI82、SK534 と上下の重複関係にあり、本遺構が古い。残存する平面形は円形である。規模は開口部径 219 ㎝、底部径 249 ㎝（復元で底面積 3.63 ㎡）、深さは最深部で 146 ㎝である。北西側断面はフラスコ形で、底面から内傾して立ち上がる。南東側断面はフラスコ形で内傾して立ち上って一旦括れた後、上半部が外傾して開く。残存する底面

はほぼ平坦である。堆積土は４層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含む黒褐色細礫混じりシルト、下位は黄橙色シルトブロックを含む黄灰色細砂混じりシルトが堆積する。遺物は出土していない。SI81 との直接の重複関係にはないが、SI82 と同様の規模であれば、本遺構の方が古い。したがって、帰属時期は、縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）に限定できる。　（丸山）

SK531（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 277）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。他遺構との重複はない。南東部は流失しており、平面形は不整な円形である。規模は開口部で長軸 139 ㎝、短軸 94 ㎝、底部で長軸 113 ㎝、短軸 78 ㎝（残存で底面積 0.82 ㎡）、深さは最深部で 55 ㎝である。断面形は、北西側断面はビーカー形で、底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は、風化花崗岩細礫やブロックを多量に含む暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構もなく年代決定の根拠がないため、不明とする。　（丸山）

SK532（第２分冊第 261 図、第４分冊写真図版 277）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。斜面の流出によって東半部が失われている。SK494 と重複関係にありそうだが、調査では確認できなかった。残存部の平面形は円形基調である。規模は開口部径 96 ㎝、深さは最深部で 20 ㎝である（復元で底面積 0.71 ㎡）。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。堆積土は２層で構成され、上位は風化花崗岩粒を含む褐色～暗褐色シルト、下位は褐色ブロックを含む黒色シルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、重複遺構も明確ではなく年代決定の根拠がないため、不明とする。　（丸山）

SK533（第２分冊第 256 図、第４分冊写真図版 278）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。西側で SK499、東側で SK496 と重複しており、これらにより切られる。平面形は楕円形である。規模は開口部で長軸 145 ㎝、短軸 90 ㎝、底部で長軸 125 ㎝、短軸 76 ㎝（残存で底面積 0.76 ㎡）、深さは最深部で 73 ㎝である。断面形は皿形で、底面から丸みを持って立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込まれ、東側に向かい低く傾斜する。堆積土は２層で構成される。上位は黄褐色ブロックを含むにぶい黄褐色シルト、下位は黄褐色ブロックを含む暗褐色シルトが堆積する。遺物は、縄文土器（218.8 ｇ）、石器（1,061.6 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。帰属時期は、文様が判別できる破片や重複関係から、縄文時代中期中葉前半から後半（大木 8a～8b 式併行）に位置づけた。　（丸山）

SK534（第２分冊第 262 図、第４分冊写真図版 277）　北尾根の南斜面中位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。南西半部は調査区域外にかかり未調査である。SI81・82、SK530 と上下の重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。ただし、SI81 とは直接重複しておらず、現状では先後関係は不明である。残存する平面形は円形である。規模は開口部径 170 ㎝、底部径 220 ㎝（復元で底面積 2.64 ㎡）、深さは最深部で 260 ㎝である。北西側断面はフラスコ形で、底面から深く内傾して立ち上がり、SK530 底面付近で一旦外傾して開く。上位の壁面は SK530 の掘り込みをそのまま再利用する形で構築されている。南東側断面はフラスコ形で深く内傾して立ち上り、一旦括れたのち上方で屈曲して大きく開く。残存する底面はほぼ平坦である。堆積土は９層に細分される。上位は風化花崗岩粒を微量含む黒褐色細礫混じりシルト、中位は風化花崗岩ブロックを多量に含む暗灰黄色粗砂混じりシルト、下位は風化花崗岩ブロックを帯状に含む黒褐色細礫混じりシルトが堆積する。遺物は出土していない。帰属時期は、SI81 との重複が本遺構の方が古いとすると、縄文時代中期中葉前半以前（大木 8a 式併行以前）に位置づけられよう。　（丸山）

（3）炉　・　焼　土

SL1 石囲炉（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 298）　南尾根に位置している。SK10 埋土上面で検出した。形状は、亜角礫を主体として方形に近い石組が構築される。また、南辺では礫が２重に配置される。石組内部は外側の床面より約 58 ㎝×68 ㎝、厚さ 23 ㎝の範囲で掘り込まれる。堆積土は、炭化物を少量含む褐色砂質シルト主体で構成され、明確な焼土は認められない。そのほか周囲から柱穴、周溝等は検出していない。石囲炉単独での検出であるが、本来は SK10 上面に存在した竪穴住居の炉施設である可能性が高いと判断される。遺物は縄文土器（234.9 ｇ）、石器（２点・1,654.7 ｇ）が出土している。このうち土器１点（778）、石器１点（2044）を掲載した。このほか、炉内埋土を対象として炭化種実同定を実施したが、未検出であった。帰属時期は、出土遺物や重複関係から、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に位置づけた。（丸山）

SL2　欠番

SL3 焼土（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 299）　南尾根に位置している。SI1 下層で検出した。平面形は、円形を呈し、長軸 57 ㎝、短軸 52 ㎝、厚さ９㎝の範囲に赤褐色の現地性焼土が形成されている。本遺構は SI1 床面プラン内、炉施設の周辺から検出されている。そのため、SI1 に伴う古期の炉跡、もしくは SI1 下層の別の住居に伴う炉跡であった可能性が高いと考えられる。遺物は出土していない。帰属時期は、重複から縄文時代中期中葉～後葉以前（大木 8b ～９式併行以前）に位置づけた。（丸山）

SL4・5　第４節へ

SL6 焼土（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 304）　北尾根の南斜面下位に位置している。SI66 の埋土中より検出した。平面形は、楕円形を呈し、長軸 54 ㎝、短軸 36 ㎝、厚さ 10 ㎝の範囲に焼土が形成されるものである。遺物は出土していない。帰属時期は、重複関係から、縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）と考えられる。位置的には SL4 と重なる部分もあるが、製鉄関連炉に関係する焼土の可能性がある。（丸山）

SL7～9　欠番

SL10 焼土（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 304）　北尾根の頂部に位置している。Ⅴ層上面で検出した。SK147 が一度ほぼ埋まりきった後で、掘り返して水平面を作りだし、にぶい黄褐色土で整地し、その上面に形成されている。平面形は、不正形で、長軸 70 ㎝、短軸 60 ㎝の規模である。遺物は出土していない。帰属時期は、重複する SK147 が縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）であることから、それ以降と考えられる。（河本）

SL11 焼土（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 304）　北尾根の頂部に位置している。SI46 埋土上面で検出した。平面形は、不定形を呈し、規模は長軸 75 ㎝、短軸 26 ㎝、厚さ９㎝である。遺物は出土していない。時期は、重複する SI46 の年代が縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）であることから、それ以降の近い時期と判断する。（河本）

SL12 焼土（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 304）　北尾根の頂部に位置している。SI46 埋土上面で検出した。平面形は、不定形を呈し、規模は長軸 58 ㎝、短軸 52 ㎝、厚さ 15 ㎝である。遺物は出土していない。帰属時期は、SL11 と同様に、縄文時代中期中葉後半（大木 8b 式併行）に近い時期と判断した。（河本）

SL13 炭溜まり（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 305）　北尾根の頂部に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI48、SK250・290・314 を切っており、これらの遺構より新しい。平面形は、不定形

を呈し、規模は長軸 194 ㎝、短軸 90 ㎝、深さ６㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、底面にはやや凹凸がみられる。底面には厚さ４㎝程度の小規模な焼土が形成されている。堆積土は、５㎜大の炭粒を多量に含む黒褐色極細砂混じりシルトが堆積している。遺物は、縄文土器（16.3 ｇ）が出土しているが、図示したものはない。時期は、重複関係からみて、縄文時代中期後葉以降（大木９式併行以降）に位置づけた。　（河本）

SL14 炭溜まり（第２分冊第 263 図、第４分冊写真図版 305）　北尾根の南斜面上位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SK328、330 を切っており、これらの遺構より新しい。平面形は、やや歪な方形を呈し、規模は長軸 121 ㎝、短軸 119 ㎝、深さ９㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、底面は凹凸がみられる。堆積土は、５～10 ㎜大の炭粒を多量に含む黒褐色極細砂混じりシルトが堆積している。遺物は出土していない。帰属時期は、周囲の重複遺構は時期不明の遺構が多いため、不明とする。　（河本）

第１表　ピット計測表

遺構名	位置	長径（㎝）	短径（㎝）	深さ（㎝）	備考
P1	南尾根	35	30	18	SI2 に伴う可能性
P2	南尾根	37	26	32	SI2 に伴う可能性
P3	南尾根	27	19	15	単独
P4	南尾根	26	22	23	単独
P5	南尾根	25	22	24	SI4 に伴う可能性は？（丸山）
P6	南尾根	26	26	18	SI4 に伴う可能性は？（丸山）
P7	南尾根	35	32	24	SI1（古期）に伴う可能性
P8	南尾根	32	25	21	SI1（古期）に伴う可能性
P9	南尾根	37	34	58	SI1（古期）に伴う可能性
P10	南尾根	40	35	41	SI1（古期）に伴う可能性
P11	南尾根	41	36	48	SI1（古期）に伴う可能性
P12	南尾根	42	39	61	SI1（古期）に伴う可能性
P13	南尾根	38	29	31	SI1（古期）に伴う可能性
P14	南尾根	25	20	25	SI1（古期）に伴う可能性
P15	北端の尾根下位	50	50	33	単独
P16	北端の尾根下位	(30)	(30)	22	単独
P19	南尾根	32	26	16	SI13 に伴う可能性は？（丸山）

※ P17・18 は欠番

（４）ピット群（第２分冊第 264 図、第４分冊写真図版 306～308）

調査区内より単独のピット 17 基を検出した。いずれも竪穴住居の集中する南尾根にまとまって分布している。これらピットの規模は、長径 25～50 ㎝、短径 19～50 ㎝、深さ 15～61 ㎝の範囲に収まるものである。P1・2 は SI2 と上下の重複関係にあり、床面より下位のレベルで検出されたことから単独のピットと判断して精査をおこなったが、本来は SI2 に伴う柱穴であった可能性もある。また、P7～14 についても SI1 の床面を掘り下げる際に検出されていることから、古期の SI1 に伴う柱穴の一部であった可能性も排除できない（個々の帰属の可能性については第１表に示した）。おおよその帰属時期については、検出層位・堆積土の状況から縄文時代と考えられる。　（丸山）

（５）遺 物 包 含 層

概要　遺物包含層とした遺物が集中して見つかる範囲は今回の調査で４箇所が存在する。南尾根の北斜面に包含層１が、北尾根の南斜面に包含層２・４が、谷部に包含層３が位置する。それぞれの位置関係をみると谷部を中心に隣接して存在していることがわかる。現状では、各包含層が分離しているが、包含層２と３の間の空白は、最近の削平によるもの、包含層１と包含層３の間の空白は、近世以降に埋没した沢跡（流出土）によるものと考えられる。そのため、各包含層は本来ひとつのまとまりであった可能性がある。この点と地形の様相を合わせて考えると、ここでいう遺物包含層は、北や南の尾根上や斜面にある遺構から崩落した（削り取られた）土砂が何度も底の谷部へ堆積したものであると想定される。ただし、傾斜の緩やかな包含層１などは、斜面の崩落土の堆積に加えて、土器捨て場としての機能もあったと考えられる（第Ⅵ章）。この両者の区別（自然堆積か人為堆積か）は、流出土の場合その成因から難しく、今回の調査では明確に区別できなかったため、ここではこれらが複

合した結果を遺物包含層と捉えた。また、本来は１つの包含層と想定しているため、各包含層とも層相的に類似した層には、層序を考慮しつつ共通する層名を付けたが、必ずしも対応していない場合がある。上述のように１つの包含層である可能性が高いものの、現状での位置や、地点ごとに様相が異なる可能性も考慮し、このまま４箇所を個別に説明する。

包含層１（第２分冊第 265～268 図、第４分冊写真図版 306～308）　南尾根の北斜面に位置している。南尾根では、遺構はおもに尾根線上に立地しており、包含層はその北側の斜面部にある。検出は、尾根上での遺構確認面であるⅣ～Ⅴ層面である。規模は、現状で、東西 25 ｍ、南北 14.5 ｍであり、尾根と北向き斜面の傾斜変換線に沿って広がっている。尾根上の遺構は調査区外の東側に広がっていることから、この包含層１も同様にさらに東側に続くと推定される。確認した厚さは、最大で２ｍ前後である。重複関係は、SI1・SI3・SI8 とで確認できる。SI1 の貼床は、Ⅲｃ層・Ⅲｄ層の上部に構築されていることから、包含層１よりも新しい（SI3 も同様）。SI8 は、包含層中に存在するがⅢｃ層の上位にあることから、層位的に SI1 等と同時期と考えられる。

グリッドは、遺跡共通のグリッドを使用している。６箇所のトレンチをグリッドごとに設定し（西からｒ・ｓ・ｔ・ｕ・ｖトレンチとする）、断面の観察を行った。このうちｒトレンチ以外の５箇所で断面図を作成し、掲載している。確認した各断面では、上位から、Ⅱ層、Ⅲａ、Ⅲｂ、Ⅲｃ、Ⅲｄ、Ⅲｅ、Ⅲｆ、Ⅲｇの各層を確認した。それより下位層は遺物を含まないⅣ・Ⅴ層である。Ⅲｂ層・Ⅲｃ層は層相が若干異なる層もあることからⅢｂ’層・Ⅲｃ’層として便宜的に区別している。Ⅲｂ・Ⅲｃ層は黄色系、Ⅲａ・Ⅲｄ・Ⅲｅ・Ⅲｇ層は黒色系の土層であり、ある程度交互に堆積している状況が確認できる。とくに黄色系の土層には風化花崗岩粒が多く含まれており、土器の出土量も多く、流出土（崩落土）の可能性が高い。いずれも斜面上方（南）からの流入が想定できる。Ⅲｆ層は黄色系で、黒色系のⅢｅ層とⅢｆ層に挟まれている。このⅢｆ層は、その特徴から十和田中掫火山灰の二次堆積層と想定される。Ⅲｆ層より下位では遺物の出土はなかった。北側の低い所を中心に径が１ｍを超えるような巨大な花崗岩の礫が多く存在している。上位層まで突き出ているが、Ⅲｆ層よりも下位にある。十和田中掫火山灰降下前に崩落した礫が集まったものと考えている。また、ｔトレンチの断面の一部は、堆積状況を調べるために切り取り、分析を依頼している（第Ⅵ章）。

遺物は、総計で約１トン（966,040.9 ｇ）が出土している。内訳は、縄文土器（917,788.7 ｇ）、石器（46,125.7 ｇ）、石製品（124.6 ｇ）、土製品（215.7 ｇ）、鉄滓（1,772.7 ｇ）、羽口（13.5 ｇ）である。そのうち土器 289 点（779～1060）、石器 36 点（1933～1941・2012～2014・2045～2049・2141・2160・2161・2199・2200・2228～2230・2253・2286～2289・2319・2351・2366～2369）、石製品 4 点（2472・2475・2485・2496）、土製品 11 点（2503・2530・2531・2532～2538・2557）を掲載した。時期は、土器の年代幅から縄文時代中期前葉から後葉の時期に形成されたと考えられる。

包含層２（第２分冊第 269～271 図、第４分冊写真図版 285～289）　北尾根と中尾根の南斜面にある埋没沢の最下端に位置する。北・中尾根から続く南向きの急斜面が、谷底付近で傾斜が弱まりゆるやかな平坦面を形成している。その平坦面に包含層２は位置する。結果的には、この平坦面は包含層２の各層が堆積することによって形成されていることがわかった。包含層下位面の本来の地形は、傾斜が上方に比べ緩やかにはなるが、傾斜地である。土器が多量に出土する範囲は、南西から北東方向に 27 ｍ、北西から南東方向に 18 ｍの間に広がる。堆積層の厚さは、Ⅲｅ層まで最大で２ｍある。隣接して東には包含層４が位置している。これを区別したのは立地に違いが認められるからである。すなわち、包含層２は埋没沢の範囲（低い地点）に立地するのに対し、包含層４は北尾根の南斜面上（高い地点）に立地する。包含層２の範囲内には、SI32・41・43・54～59 の９棟の竪穴建物がある。新

旧関係は、包含層との関係だけみれば、竪穴建物跡はいずれもⅢｃ層よりも下位にあり、SI55 を除きⅢｄ層よりも上位にある。包含層２の最初の堆積がⅢｄ層とするなら、SI55 は包含層２よりも古いことがわかる。そのほかの竪穴建物跡は包含層２が堆積している途中、Ⅲｃ層以前に構築されたと判断できる。断面をみると、Ⅲｃ層によってこれらの竪穴建物跡は削り取られたようである。包含層４とは含まれる層が類似しているため、時期的な差はないと考えられる。

グリッドは方位（座標）に合わせず、別グリッドを設定した（座標北より 44.195°東に振れる）。東西（南西－北東）方向の西端からア～ケ、南北（北西－南東）方向は、北端から１～６の番号を振り、東西番号と南北番号を組み合わせた４ｍグリッドを使用した。遺物の取り上げは、グリッド・層位ごとに行った。トレンチは、イ～キのラインに沿って６本を設定し、地山層まで掘り下げて、堆積状況を確認した。堆積土は、Ⅰ・Ⅱ層と地山であるⅣ・Ⅴ層の間には、Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ- １・Ⅲｃ- ２・Ⅲｃ- ３・Ⅲｄ- １・Ⅲｄ- ２・Ⅲｄ- ３・Ⅲｅ層を確認した。包含層２では、Ⅲｅ層から遺物は出土せず、竪穴建物跡はこの層を掘り込んで構築されることから、Ⅳ・Ⅴ層と同様の基盤層（地山）となる。包含層２の主要な堆積層は、Ⅲｃ層で、場所によっては 50～70 ㎝の厚さになる。黄色系のⅢｃ- ２層と黒色系のⅢｃ- １・Ⅲｃ- ３とが交互に堆積する。Ⅲｃ層の下位にはⅢｄ層が部分的に堆積する。Ⅲｄ- １～Ⅲｄ- ３層の３つに細分され、Ⅲｃ層と同じように黄色系と黒色系の層が交互に堆積する。とくにオトレンチでは、それらが細かな単位で堆積する状況が確認できる。人為的な盛土の可能性もあるかもしれない。

遺物は、合計で約 1.4 トン（1,400,001.9 ｇ）が出土している。内訳は縄文土器が１トン以上も出土している（1,230,806.9 ｇ）ほか、石器（120,270 ｇ）、石製品（24,115.4 ｇ）、土製品（171.5 ｇ）、鉄滓（24,638.1 ｇ）などがある。範囲が広いこともあり、包含層の中ではもっとも遺物量が多い。これらのうち縄文土器 432 点（1061 ～ 1492）、石器 120 点（1942 ～ 1956・2015 ～ 2021・2050 ～ 2059・2090 ～ 2096・2128 ～ 2132・2142 ～ 2151・2162 ～ 2165・2177 ～ 2180・2201 ～ 2209・2231 ～ 2235・2254 ～ 2262・2290 ～ 2298・2320 ～ 2325・2338 ～ 2341・2346・2347・2370 ～ 2375・2412 ～ 2418・2432）、石製品 17 点（2455 ～ 2457・2458 ～ 2463・2473・2476・2477・2486 ～ 2490）、土製品８点（2504 ～ 2506・2511・2512・2539 ～ 2541）を掲載した。このほか、包含層２と包含層４一括で取りあげた石器（４点・6,338 ｇ）があり、このうち２点（2166・2236）を図示した。そのほか、AMS 分析、炭化種実同定、動物遺存体同定、鉄滓分析を行っている（第Ⅵ章）。遺物の年代幅から、時期は縄文時代中期前葉から末葉にかけて形成されたと想定される。

包含層３（第２分冊第 272 ～ 274 図、第４分冊写真図版 290 ～ 295）　調査区南半にある北・中尾根の南斜面と南尾根北斜面の間に挟まれた谷部に位置している。立地的に谷部全体にこの包含層が広がっていると思われるが、実際には東端付近（包含層１・２よりも下側）に偏って存在する。調査で確認した規模は、東西（北東－南西）方向が 21.5 ｍ、南北（北西－南東）方向が 10.0 ｍである。包含層の厚さは、Ⅲｅ層まで含めると最大で２ｍ、Ⅲｄ層までだと最大で１ｍ前後である。北・中尾根の南斜面側（北西側）は、斜面に沿って幅４～５ｍ程削平された範囲がある。近年の畑の開墾のため削り取られたようである（地権者談）。そのため、本来は包含層２・４とつながり、ひとつのまとまりがあった可能性がある。また、南尾根側も、Ａ－Ａ’・Ｇ－Ｇ’断面の観察から谷部を、おそらく遺物から近世以降の沢（土砂流出）によって削り取られていた痕跡がある。したがって、この範囲についても包含層１とつながっていた可能性がある。包含層３の範囲内にある遺構は、すべて竪穴建物跡で、SI33 ～ 37・SI44・50・51 の８棟である。

包含層３の主体層であるⅢｃ層との関係をみれば、上位に SI33・34・36・50・51 が、下位に

SI35・37・44がある。前者は、Ⅲａ・ｂ層との関係は不明ながら、包含層３よりも新しい可能性がある。後者は、Ⅲｄ層よりは上位なので、包含層３の形成途中に構築されたと判断できる。こうした状況は包含層２と類似している。

グリッドは、方位（座標）に合わせずに、任意で設定した（座標北から西に57.1°振れる）。包含層３全体を囲むように南西端から北東方向にひらがなで「あ～く」、南西端から南東方向に１～６とし、これらを組み合わせてグリッド（４ｍ四方）とした。い～きのラインでトレンチを設定し断面の観察を行っている。Ⅱ層と地山であるⅣ・Ⅴ層の間に、Ⅲｂ・Ⅲｃ－１・Ⅲｃ－２・Ⅲｃ－３・Ⅲｄ・Ⅲｅ層を確認している。最下層は、巨礫が堆積する層であるため下層は確認できなかったが、おそらくⅣ～Ⅴ層にともなうと考えている。Ⅲｃ層が遺物包含層の主体層である。この層も包含層２と同様に遺構を壊して堆積することから、斜面上方からの流出土であると考えられる。また、包含層２と同様にⅢｅ層中から明確な遺物の出土はなかった。包含層の最下層は、様相はⅢｃ層とは異なるものの遺物がある程度出土するⅢｄ層とする。

遺物は、重量で１トン以上（1,054,408.5ｇ）が出土している。内訳は、縄文土器（920,700.7ｇ）、土製品（328.1ｇ）、石器（101,193.8ｇ）、石製品（15,370.2ｇ）、鉄滓（15,397.8ｇ）、羽口（1,417.9ｇ）である。これらのうち、縄文土器256点（1493～1748）、石器108点（1957～1975・2001～2003・2022～2030・2060～2066・2097～2111・2118・2119・2152～2155・2167・2181～2183・2210～2217・2237～2239・2263～2266・2299～2305・2326～2331・2342・2343・2352・2353・2376～2380・2419～2424・2433・2434）、石製品12点（2464～2467・2469・2470・2478～2480・2491・2495・2497）、土製品16点（2507・2508・2513・2514・2519・2542～2553）を掲載した。鉄滓はこのうち１点を分析している（第Ⅵ章）。また、包含層４と一括で取り上げた石器（239.9ｇ）があるが図示していない。鉄滓や羽口は、付近に製鉄炉が確認できないことから、SL4・5周辺から流れてきたものの可能性がある。また、骨・貝の同定分析も行っている。時期は、出土遺物の年代幅から、縄文時代中期前葉から後葉にかけて形成されたと想定される。

包含層４（第２分冊第269～271図、第４分冊写真図版296・297）　北尾根の南斜面の最下端に位置している。包含層２と近接しているが、埋没沢上にある包含層２よりは高い地点（Ⅴ層面）に立地する。包含層の範囲は、調査区内で東西９ｍ南北６ｍであり、調査区の外側に広がると想定される。重複する遺構には、SI45・52・53、SK60～62・66～69・71・73～75・77・78・205・206がある。各遺構とも上部にⅢｄ層（Ⅲｃ－２の可能性もある）が覆うことから、包含層４は、いずれの遺構よりも新しい。包含層１～４の層序が共通するなら、これらの遺構は最も古い段階の遺構といえる。

グリッドは包含層２と共通する。Ⅴ層が部分的に露出していたことからトレンチではなく、ケのラインにベルトを設定した。確認できる層は、Ⅰ層以下、Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ・Ⅲｄ層である。厚さは最大で1.4ｍである。

遺物は、縄文土器（100,022.0ｇ）、土製品（66.0ｇ）、石器（10,241.1ｇ）の総計110.33㎏（110,329.1ｇ）が出土している。これらのうち、縄文土器40点（1749～1788）、石器８点（1976・2067・2156・2240・2241・2306・2307・2332）、土製品１点（2515）を掲載した。このほか、上述の包含層２・４一括で取りあげた石器（6338.09ｇ）があり、このうち２点（2166・2236）を掲載した。また、同じく包含層３と一括で取り上げた石器がある。遺物の年代幅から、時期時期は、出土遺物の年代幅から、縄文時代中期中葉から後葉にかけて形成されたと想定される。

４　縄文時代以降の遺構

概要　縄文時代以降の遺構には、土坑４基、製鉄炉と工房と考えられる竪穴建物跡それぞれ２基、炭溜まり遺構としたもの１基がある。土坑には、馬を埋葬したものや製鉄炉に関連するもの、用途不明のものなどがあるが、一括した。これらの年代は、AMS 測定で計測された年代を元に設定したもので、平安時代（９世紀）や平安時代から鎌倉時代（12 世紀後半から 13 世紀後半）がある。高根遺跡の縄文時代以降の土地利用については、地形的に流出によって失われた可能性があるが、製鉄炉関連以外にはあまり利用されなかったことがわかる。

（１）土　　坑

SK38 土坑（第２分冊第 141 図、第４分冊写真図版 152）　南尾根の西側に位置している。Ⅳ層上面を掘り下げている時に骨が発見され遺構と判明したものである。重複する遺構はない。平面形は、ほぼ隅丸長方形を呈している。確認面での規模は長軸 189 ㎝、短軸 180 ㎝、深さ 26 ㎝である（底面積 1.03 ㎡）。断面形は、底面からゆるく内湾しながら立ち上がるものである。Ⅴ層まで掘り込んでつくられている。底面は凹凸があり壁際が浅皿状に高くなっているものである。堆積土は、暗褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、褐色砂質シルトの混合土である。人為的な堆積の様相を呈していると推定される。土坑は埋葬するために掘られたものである。実際の規模はさらに大きいものであった。遺物は出土していない。このほか、１層埋土中から動物の頭蓋骨や各部位の骨が発見されている。骨類同定の結果、ウマの骨であることが確認された（第Ⅵ章参照）。骨以外の遺物が出土せず年代は不明である。（光井）

SK452 土坑（第２分冊第 275 図、第４分冊写真図版 257）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅴ層上面で検出した。北西側で SI83・SK523 と重複し、これらより新しい。平面形は略円形である。規模は開口部 117×120 ㎝、底部 88×112 ㎝（底面積 0.96 ㎡）、深さは最深部で 79 ㎝である。断面形はビーカー形で、底面から直立気味に立ち上がる。底面はⅤ層まで掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。堆積土は３層で構成される。黒色～暗褐色シルト主体で、最下層に暗褐色ブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。検出面や重複関係が最上位でもあることから、製鉄炉である SL4・5 と同一時期と判断した。遺物の出土重量は土器 412.3 ｇであるが掲載したものはない。帰属時期は、AMS 測定（第Ⅵ章）から 13 世紀前後に位置づける。（丸山）

SK453 土坑（第２分冊第 275 図、第４分冊写真図版 257）　北尾根の南斜面下位西側に位置している。Ⅴ層上面で検出した。平面形は略円形である。規模は開口部 101×120 ㎝、底部 64×95 ㎝（底面積 0.43 ㎡）、深さは最深部で 38 ㎝である。断面形は皿形で、底面から緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が見られる。堆積土は黒褐色シルトの単層である。検出面や埋土の状況等から、製鉄遺構関連の土坑の可能性がある。遺物の出土重量は土器 77 ｇであるが、掲載したものはない。帰属時期は、AMS 測定（第Ⅵ章）から 13 世紀前後に位置づける。（丸山）

SK454 土坑（第２分冊第 275 図、第４分冊写真図版 257）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅳ層上面で検出した。東側で SI86・SK528 と重複、これらより新しい。形状は円形を呈する。規模は開口部 136×144 ㎝、底部 107×125 ㎝（底面積 0.99 ㎡）、深さは最深部で 73 ㎝である。断面形はＵ字形で、底面から外傾して立ち上がる。底面は南側に向けて低く傾斜している。堆積土は５層に細分され、

全体的に黒褐色シルト主体で構成される。２層には風化花崗岩細礫を少量含む黒色シルトが堆積する。検出面や重複関係が最上位でもあることから、製鉄炉であるSL4・5と同一時期と判断した。遺物の出土重量は土器445.2ｇであるが、掲載したものはない。時期は上述のとおり、SL4・5と同様の12世紀後半～13世紀後半と判断する。（丸山）

（２）製鉄関連遺構

SI67（竪穴建物跡）・SL4（製鉄炉）（第２分冊第276・277図、第４分冊写真図版105・300・301）北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅲ層上面（黒褐色土）で検出した。SI68と重複しており、切り合い関係から本遺構がSI68より新しい。平面形は東側から南側（斜面下側）にかけて崩落により欠失しているため判然としない。残存規模は、590×410㎝である。床面は斜面下方に向かって緩やかに傾斜する。残存する北西壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは北西壁で約21㎝である。本遺構の本来の堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。床面には黄褐色土の広がりを確認しており、固く締まるため貼床を行っていた可能性が考えられる。堆積土中にも同様の黄褐色土ブロックの混入を確認している。堆積状況から自然堆積の可能性が考えられる。

付属遺構には、製鉄炉（SL4）１基がある。なお、本遺構の残存範囲の周辺にピット３箇所（P1～3）を確認している。重複するSI68に伴う可能性も否定できないが、配置から本遺構に伴う可能性が高いと判断した。SL4の炉体は残存しておらず、炉床付近と考えられる還元色の焼土の広がりが確認できた面で検出した。精査は、残存する地下構造を主体に行った。地下構造の平面形は方形で、規模は約170×150㎝、深さ約52㎝である。壁はわずかに外側に開くように立ち上がり、底面はほぼ平坦に構築されている。周囲にはやや歪ではあるが、ほぼ同様の形状で、規模は約210×180㎝の地下構造の掘り方を確認している。北側に関しては地下構造に対して一周り大きく掘り込まれている。堆積土は44層に区分した。堆積土中には除湿を目的とした焼き締めを行ったと考えられる焼土とその上から充填した炭層の互層が複数確認できるため同一の場所で複数回の操業が行われていたと考えられる。また、堆積土中からは鉄滓及び、炉壁の出土が認められる。地下構造内に充填される材料は炭以外にも前回の操業時に使用済みとなった炉壁や鉄滓なども利用していたことが指摘されており、このことからも複数回操業の可能性はより高いものと推測する。また、本遺構の北側は黄色粘土で貼床し、硬化している範囲が顕著に認められ、周辺の床面直上から羽口が出土している。一般的に炉の周囲には送風のための羽口座が設けられることが多く、羽口座を設置するために貼床を行い、平坦面を構築する場合が確認されている。出土した羽口が原位置を留めているものとすれば、炉の北側に羽口座が設置された可能性が高いものと考えられる。なお、堆積土の上層～最下層に至るまでの炭層から各１点ずつ計５点の放射性炭素年代測定を実施し、いずれも12世紀後半～13世紀後半の範疇に収まるとの結果を得ている。ピットは北東～南側に分布する。平面形はいずれも楕円形で、規模はP1が71×46㎝、深さ９㎝、P2が46×28㎝、深さ７㎝、P3が67×48㎝、深さ５㎝である。堆積土はいずれも単層で、炭化物が含まれる黒褐色砂質シルトが主体である。

遺物は、SI67から縄文土器（13.4ｇ）、羽口（15,954.9ｇ）、鉄滓（2,340.8ｇ）が出土している。このうち羽口12点（2562～2573）を掲載した。また鉄滓のうち３点を分析している（第Ⅵ章）。SL4から縄文土器（９ｇ）、羽口（530.6ｇ）、鉄滓（3,600.8ｇ）が出土している。このうち鉄滓３点を分析している（第Ⅵ章）。また、このほかSL4・5周辺からも鉄滓（4,263.6ｇ）が出土しており、このうち２点も分析している。本遺構の性格としては製鉄炉（SL4）を伴うことから鉄生産を行っていた工房であることが考えられる。なお、本遺構内及びSL4より出土した鉄滓、炉壁の成分分析を実施

し、いずれも砂鉄製錬に伴う生成鉄である可能性が高いとの結果が得られている。このことからSL4は砂鉄製錬炉であることが考えられる。時期はSL4の地下構造より得られた炭化材の放射性炭素年代測定により、12世紀後半～13世紀後半の結果が得られており、本遺構も同時期に位置づけられるものと考えられる。（野中）

SI68（工房）・SL5（製鉄炉）（第２分冊第278・279図、第４分冊写真図版105・302・303）　北尾根の南斜面下位に位置している。Ⅲ層上面（黒褐色土）で検出した。SI67と重複しており、切り合い関係から本遺構がSI67より古い。SI67の構築の際と斜面の自然崩落等により壁が欠失しているため平面形は判然としない。残存規模は、710×660㎝である。床面は斜面下方に向かって緩やかに傾斜する。堆積土はマサ崩落土を含んだ黒褐色砂質シルトが主体である。床面はSI67の貼床層の下位に形成されており、SI67ほど明確ではないものの、同様に貼床を行っていた可能性が考えられる。付属遺構には、製鉄炉（SL5）１基がある。SL4と同様にSL5の炉体も残存しておらず、炉床付近と考えられる還元色の焼土の広がりが確認できた面で検出した。精査は、残存する地下構造を主体に行った。地下構造の平面形は方形で、規模は約150×130㎝、深さ約44㎝である。壁はわずかに外側に開くように立ち上がり、底面はほぼ平坦に構築されている。掘方に関しては明確に確認することができなかった。堆積土は33層に区分した。堆積土中には焼土と炭層の互層が複数確認できるため同一の場所で複数回の操業が行われていたと考えられる。なお、堆積土の上層から最下層に至るまでの炭層から各１点ずつ計４点の放射性炭素年代測定を実施し、いずれも12世紀後半～13世紀後半の範疇に収まるとの結果を得ている。SI68から遺物は出土していない。SL5から羽口（247.6ｇ）、鉄滓（7.3ｇ）が出土しているが、図示したものはない。このほか先述のようにSL4・5周辺からも鉄滓（4,263.6ｇ）が出土しており、２点を分析している。本遺構の性格としては製鉄炉を伴うことから鉄生産を行っていた工房であることが考えられる。SL4とほぼ同様の規模であり、堆積状況に関しても似通っている。時期はSL5の地下構造より得られた炭化材より12世紀後半～13世紀後半に位置づけられるものと考えられる。（野中）

（３）その他の遺構

SL15炭溜まり（第２分冊第275図、第４分冊写真図版305）　北尾根の南斜面上段に位置している。Ⅳ層上面で検出した。SI74、75、SK396、397を切っており、これらの遺構より新しい。平面形は、やや歪な方形を呈し、規模は長軸124㎝、短軸110㎝、深さ９㎝である。断面形は浅皿形を呈し、底面はⅣ層まで掘り込んでつくられ、底面は若干南に傾斜し、凹凸がみられる。堆積土は、５～10㎜大の炭粒を多量に含む黒色シルトが堆積している。遺物の出土はごくわずか（１ｇ）である。堆積土上位から検出した炭化物のAMS分析と炭化種子同定と炭化材の肉眼鑑定を行っている。AMS分析の結果、暦年較正年代は９世紀ごろとなっている。したがって、帰属時期は、古代に属する遺構と想定される。（河本）

Ⅴ 出 土 遺 物

1 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、合計で5.4トン（5,409,433.55 g）に達する。内訳は、縄文土器4.5トン（4,548,034.50 g）、石器655 kg（655,463.70 g）、石製品119 kg（118,704.28 g）、土製品1.4 kg（1,432.35 g）、鉄滓65 kg（65,138.50 g）、羽口21 kg（20,660.22 g）である。そのほか、正確な重量が計測できない炭化材、骨や貝などの動物遺存体、土壌サンプルなどがある。遺物の約３割は遺構内から出土し、包含層からは約７割、遺構外から１割以下の出土である。遺構外の出土遺物としたものはおもにトレンチ調査時や遺構検出中に出土したものであり、本来はいずれかの遺構に伴っていたと考えられるものがほとんどである。そのため、今回の調査では、遺構と包含層１～４以外からの遺物の出土は無いと考えておく。これは遺構の外側の層に包含するべき遺物多くは斜面下へ流出したものと考えられるからである。それらが最終的に集中・集積したのが包含層１～４である。そのためグリッドごとにおける出土遺物の重量分布の検討については行わなかった。以下では、種別ごとに掲載遺物を中心に説明する。土器については遺構ごとに、それ以外の遺物については種別・分類ごとにまとめて記載をしていくことにする。なお、不掲載遺物については、その分類別の重量を第３分冊第11表にまとめている。

2 遺 物 の 分 類

（1）縄 文 土 器

縄文土器の分類に当たっては、器形や施される文様を基準として行った。そのため、まず器形分類と文様の分類を行い、その上でそれらを組み合わせて土器群の設定を行って行きたい。掲載や分類に当たっては可能な限りの種類を網羅することをつとめたが、膨大な不掲載資料の中には、下記に含まれない種類の器形・文様が含まれている可能性がある。また、土器製作上の分類は今回行っていない。なお、検討に際しては掲載土器のうち器形や文様がある程度判明する土器を中心に行った。また、地文だけが施され、ほかの文様が施されない土器（いわゆる粗製土器）があるが、ここでは無文土器と呼称する（縄文時代中期の土器に限る）。無文土器の器形については、以下の器形と原則的には対応する。

器形分類 遺跡から出土した縄文時代の土器について、おもに口縁部の形状を指標として、以下の20種の器形に大別する。出土数の多い中期の土器が対象である。一定の出土例のあるものを中心に分類を行ったため、出土例の少ない器形は、類似する分類に含めたものやその他一括とした分類に含めた。また中期以外の土器については出土数が極めて少ないこともあり器形分類を行っていない。

器形０ 深鉢で、口縁部が外傾し、球胴形の胴部を有する器形である。胴部下半は残存していないが、筒形を呈する胴部形態が続くと想定される。ある程度器形復元できた例は１点のみである。そのほか、前期に含まれる器形を一括した。

器形１ 深鉢で、口縁部が大きく外傾し、大波状口縁を呈する器形である。外傾するＡ類と、やや内湾しながら立ち上がる形態のＢ類の２種類を含む。胴部の形態は底部にむかって窄まる形が多いが、小型品は胴部が膨らむものが多い。大波状を呈するものが多いが、平縁を呈する個体もある。完形に

復元できる例が少ない。

器形２　深鉢で、底部から直線的に開く口縁部をもつ形態である。全体的な形態は台形状を呈する。口縁部は平縁が多いが、突起が付されるものがある。波状口縁を呈する例もあると考えているが、出土数が少ない。

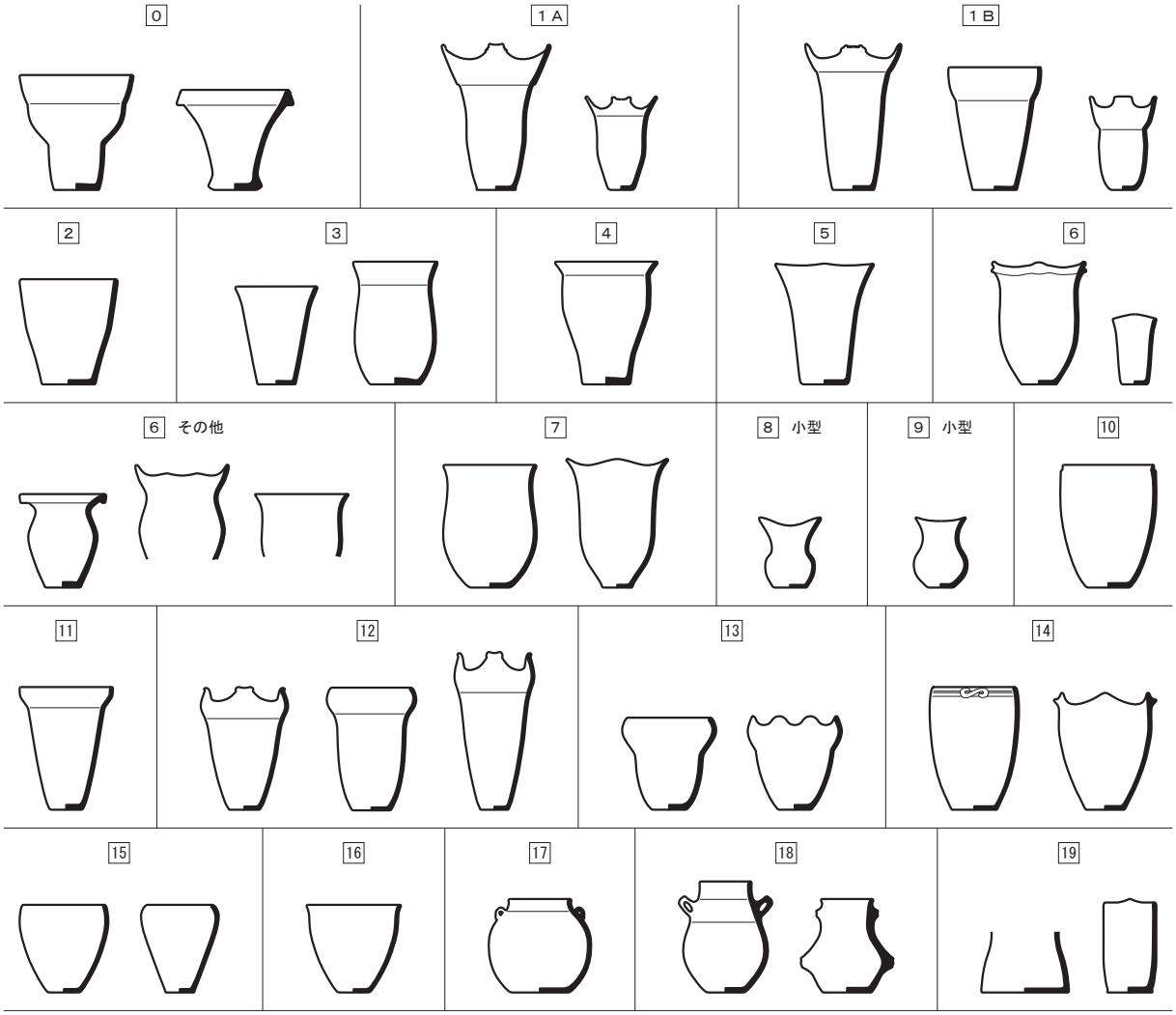
器形３　深鉢で、口縁部がわずかに外反するもので、ほぼ直口口縁に近い形態のものを一括した。後述の４類と比べ外傾度がゆるやかである。胴部は、窄まるものとふくらむものの２者がある。ほぼ平縁で占められる。また、口縁部が受け口状に屈曲する形態もこの類に含める。外傾度の違いなどからさらに細分可能な形態を含んでいる。

器形４　深鉢で、口縁部が短くかつ鋭く外傾する形態を呈する器形である。３類よりも屈曲が強い。胴部の形態は窄まるものと膨らむものの２者がある。

器形５　深鉢で、口縁部が大きく外反する形態を呈する器形のうち胴部形態が窄まるものに限定した。平縁のものと波状口縁がある。胴部が膨らむものは出土数も多いこともあり、次の６類とした。

器形６　深鉢で、口縁部が大きく外反する形態を呈し、胴部が膨らむものを一括した。文様構成が類似する５類とは胴部形態が異なるだけと想定した。そのほか、類似する条件を示す複数の形態も含めている（出土数が少ないため）。

器形７　深鉢で、口縁部が外反し、胴部が膨らむ形態を呈するもの。６類に類似した器形であるが、



第 25 図　器形分類図

屈曲部が６類に比べて相対的にゆるやかになり、間延びした形態を呈する。胴部が大きく膨らむものとあまり膨らまない形態を含む。施される文様から６類よりも後出的な器形である。また、同様の形態の小型品やより短寸化した形態（鉢類）もここに含めておく。

器形８　深鉢で、口縁部が大きく外反し、球胴状の胴部を有する器形である。深鉢としたが、相対的に小型であり、壺形に近い器形である。最大径が口縁部にある点で、９類とは区別したが同一の器形としてみてもよいかもしれない。相対的に口縁部が長く、口頸部と胴部との境の屈曲部は中位付近にある。

器形９　深鉢で、口縁部が外反し、球胴状の胴部を有する器形である。８類と同様に小型で有り壺形土器に近い器形である。最大径は胴部にある。そのため、口頸部と胴部との境は上位付近にある。８類と比べて口縁部が相対的に短い。大木 8b 式新段階に出現する器形であろう。

器形 10　深鉢で、口縁部が直口気味のものから内傾するものまで含む器形で、胴部は膨らむものや窄まるものを含む。外傾度の個体差によっては器形３との区別が難しいものがある。

器形 11　深鉢で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部が直口気味に立ち上がる形態を呈する器形である。器形 12 に比べて、端部が内湾しない形態である。胴部形態は、窄まるものと膨らむものの２種がある。口縁部が受け口状を呈し、器形３と類似する形態もあるが、器形 11 の方が外に広がり口縁部が長い傾向にある。

器形 12　深鉢で、口縁部が内湾する器形で、いわゆるキャリパー形を呈する。胴部形態は、窄まるものとふくらむものの２種がある。波状口縁のものと平縁のものがある。今回の出土土器の中ではもっとも多い器形である。

器形 13　深鉢で、口縁部が内湾する器形で、器形 12 と同様にキャリパー形を呈する。胴部は窄まるものと膨らむものの２種がある。器形 12 と同一器形であるが、屈曲部がよりゆるやかで、胴部が相対的に短いことや文様構成が異なることから別器形とした。

器形 14　深鉢で、底部から口縁部にかけて内湾する器形である。したがって口縁部は内湾するが、強く内湾するものから直口気味のものまでを含めている。胴部形態も中位に最大径をもつものや上位に最大径をもつものなど複数の形態を含めた。

器形 15　相対的に短寸な鉢形を呈するもので、器形 14 の中小型版である。したがって、形態的な特徴は器形 14 と同じである。

器形 16　深鉢で、口縁部がやや外反し、胴部が窄まる形態を呈する器形である。器形 14 の口縁部を外反形態になったものである。出土土器の中では全容が知れる例はないため、細部は異なる可能性がある。文様構成等も器形 14 と同じであることからそれに含めることも可能である。

器形 17　壺形で、口縁部がやや外反し、球胴状の胴部を有する器形である。最大径は胴部にある。口縁部が短いものが多いが、なかには長く伸びる形態もある。器形 18 と類似するが、それよりも相対的に短寸で横幅がある形態を区別した。

器形 18　壺形で、口縁部が内傾あるいは外反し、胴部が膨らむ器形である。器形 17 よりも細身で長寸の形態である。

器形 19　その他中期に認められる器形を一括した。台形状を呈する器種不明のもの、筒形の土器などを含めている。いずれも１点のみの出土であることから分類を行わず一括したものである。

文様の分類　土器の表面に描かれる文様について、種類と技（手）法を基準に分類する。

沈線文　今回の出土土器の中ではもっとも主要で使用率の高い技法である。おもに棒状工具やヘラ状工具によって施されるもので、文様構成や施文部位によって以下のＡ～Ｄ類に細分する。また類に

よってはさらに細分するものもある。なお竹管による沈線は別にする。

Ａ類　口縁部文様帯内に、沈線文で３～４単位の小区画（単位区画？）をつくり、その内部をさらに沈線文で充填する手法

Ｂ類　口縁部文様帯内全体を１つの区画（大区画）とし、沈線文で充填する手法。

Ｃ類　口縁部文様帯全体を１つの区画として施文する手法。区画内を充填するのではなく文様帯全体に展開する沈線文である。ただし、Ｂ類との区別に苦慮する個体もある。

Ｄ類　胴部に施文される沈線文である。区画文を除く沈線文は複数あり、型式認定に重要であることからさらに細分する。

①種　沈線文を使用し、平行文や波状文を組み合わせるもの。

②種　沈線文を使用し、比較的小さな渦巻文を１～２個配するもの。

③種　沈線文を使用し、相対的に大きな渦巻文を胴部の中心に配するもの。

④種　沈線文を使用し、弧線文、Ｙ字状懸垂文、胸骨文風の文様を描くもの。

④’種　沈線文を使用し、渦巻文に類似する円文や巻きの緩やかな渦巻文を呈するもの。

⑤種　沈線文を使用し、縦に長い楕円形区画文、逆Ｕ字文を描くもの。磨消縄文が伴う。

⑤’種　沈線文を使用し、幅広の逆Ｕ字文を配するもの。

⑥種　沈線文を使用し、閉鎖的な曲線状（アルファベット状の）の区画を描くもの。区画内は充填技法で地文を充填する。

⑦種　沈線文を使用し、曲線上の区画内が無文となり、主文様となるもの。地文は胴下半のものと連結する。

⑧種　沈線文を使用し、曲線上の区画内が無文となるもので、無文帯同士が重複するもの。施文範囲は上半部に限られる。

⑨種　沈線文を使用し、小型の楕円形区画を連続的に配するもの。磨消縄文は伴わない。

加飾隆帯　刻み目や刺突などが施される隆帯を加飾隆帯とする。おもに口縁部を中心に貼付される。貼付する方向によって以下の２種類に分けるが、実際は組み合わされるものが多い。

Ａ類　縦位・斜位に貼付するもので、多くは波状口縁の波頂部から垂下するもの。

Ｂ類　横位に貼付するもので、口縁部と頸部との境界に貼付される。多くは他の種類の文様と組み合わさって施文されるが、単独の場合もある。

竹管文　沈線文のうち半截竹管によるものを別分類とした。口縁部を中心に施文されるが、口縁部からそのまま胴部に施文が及ぶものもある。表裏面を使用したものが多いが、半截竹管による押引き文や刺突文なども含めている。

縄文原体押圧文　縄文原体の側面圧痕による文様を縄文原体押圧文とした。文様構成によって以下の４つに細分する。原則的に胴部には施文されない。

Ａ類　口縁部文様帯内に、縄文原体押圧文で３～４単位の小区画（単位区画？）をつくり、その内部をさらに原体押圧文で充填する手法。沈線文Ａ類と同様の手法である。

Ｂ類　口縁部文様帯全体を１つの区画として施文する手法。区画内を充填するのではなく文様帯全体に展開する縄文原体押圧文であり、比較的単純な文様構成である。沈線文Ｃ類と対応。

Ｃ類　隆線文など他の文様に沿って施文されるもの。

Ｄ類　隆帯（本書では、相対的に長さが短く（全周しない）かつ貼付するものを指し、隆線と区別する、以下の文中では同義）や隆線（本書では相対的に長さが長く施文されるものを指す。隆帯とも呼ぶが本書においては隆帯を別の意味に使用したため区別する。以下、文中では同義）上に縄文原体押

圧文を施文するもの。

隆線文　隆線を使用して文様を描くものを隆線文とする。多くの土器では、口縁部の文様帯区画に区画文として隆線を使用するが、厳密にはこれを含まず文様のみを取り上げる。施文位置や文様構成から３つに細分する。

Ａ類　口縁部文様帯内の小区画（単位区画？）を形成し、その内部をさらに隆線文で充填する手法。沈線文Ａ類と同様の手法である。

Ｂ類　口縁部文様帯全体を１つの区画として施文する手法。区画内を充填するのではなく文様帯全体に展開する隆線文であり、比較的単純な文様構成である。

Ｃ類　胴部に展開する隆線文はいくつかのモチーフがあるが、例数が少ないため一括する。

隆沈線文　隆線の両側に沈線を沿わせて一体となったものを隆沈線とし、それによって施される文様を隆沈線文とする。施文位置、文様の種類によって細分する。

Ａ類　口縁部文様帯内に施文される

Ｂ類　胴部文様帯内に施文される。文様の種類によってさらに細分する。

①種　大渦巻文を中心に連結するもの。

②種　隆沈線による縦長の楕円形区画文。①種と区別が難しい文様もある。

磨消縄文　おもに地文施文後に、沈線による縦長の区画文を施文し、その外部が磨り消されるものを示す。

充填縄文　おもに沈線による曲線上の区画内に地文が充填されるものを指す。

刺突文　おもに棒状やヘラ状工具による刺突であり、沈線間、交互刺突、刺突列として施文される。とくに頸部に施文される例が多い。多くは他の文様と組み合わさって施文されるが、単独で施文される場合がある。この場合所属する土器群の位置づけは困難である。

口縁部文様帯区画文　出土土器の大半を占める縄文時代中期の土器では、口縁部文様帯を上下におもに隆線文を使用して区画する例が多い。ここでは、こういったものを口縁部文様帯区画文とする。これについても分類を行っておく。

Ⅰ類　口縁部に口縁部文様帯区画文を有するもの。原則的に口縁端部と頸部との境（合わせて２箇所）に幅広の隆線を１条か２条貼付して、その内部を文様帯区画とする。そのほか隆線の部分が沈線と組み合わされるもの、沈線単独のもの、隆沈線のものがある。この区画文にはいくつかの種類が観察できることから、さらに細分する。

①種　口縁部文様帯が広いものである。多くは隆線による口縁部の上下区画となるが、この上下間が広いものを示す。口縁部に文様が展開可能な特定の器形に限定される。

②種　口縁部文様帯が狭いものである。口縁部自体も狭く製作され、隆線による上下間の間隔は非常に狭く、その間は無文である。文様としては、上下の隆線間に渦巻文や円文が施されるが、区画文だけの場合も多い。器形５・６や 14 などの器形に多い。

③種　②種と同様に口縁部文様帯区画が狭いものであるが、隆線間に沈線が施され、見かけ上２条の隆線に見えるなど①・②種が形骸化したものと捉えている。隆線間の沈線が相対的に広い場合は凹線状を示す。もしかすると、②種から派生したもので、文様との組み合わせからみると、より後出的な可能性がある。

④種　①～③種のように隆線で上下区画を形成するのではなく、口縁部と頸部の境界に、沈線や隆線を配して、口縁部文様帯区画を形成するものである。どの器形にも一定量が含まれる。

Ⅱ類　口縁部文様帯区画が無いもの。文様帯の位置づけによって以下の２種に細分する。

①種　文様が口縁部にのみ施文されるもので、区画文が無いが、口縁部に施文されるものでる。

②種　胴部に施文される文様が、口縁部まで展開するもの。胴部文様帯が口縁部まで拡大したものである。

群の設定　これまで文様や器形、口縁部文様帯区画を分類してきたが、これらを組み合わせて、時期的なまとまりを重視して、以下の土器群を設定する。設定に際しては、器形を優先する場合と文様を優先する場合の２通りがあるが、今回は文様（の組み合わせ）を優先している。文様の組み合わせと口縁部区画の組み合わせは約 200 通りにもなることから、時間的なまとまりを考慮して大まかに群設定した。各群内は、ある程度の文様や器形、口縁部区画の共通性からいくつかの類に細分する。そのため各群各類内は複数の異なる器形や文様構成のものを含むものが多い。群の設定にあたっては、既存の土器型式を参考にした（中野 2008、須原 2018・2019、阿部 2008、神原 2004 など）。なお、縄文時代中期に属するⅡ群～Ⅵ群については文様による分類を試みたが、それ以外の群については数が少なく文様による分類は行っていない。

Ⅰ群　縄文時代前期に帰属する土器を一括した。出土数はごくわずかであり、図示した土器は２点のみである。不掲載土器においても明確にこの時期のものは分別できなかった。出土数が極めて少ないため文様ではなく、時期別に以下の２類に細分する。

１類　前期前葉～中葉に位置づけられるもの。大木 2b 式と考えられる土器が出土しているが破片のみである。わずか数点しか出土していないため全容は不明である。

２類　前期後葉に位置づけられるもの。オオバコの回転文が施される深鉢のみである。小破片であり詳細は不明である。

Ⅱ群　縄文時代中期前葉に帰属する土器群としてまとめた。出土数が増加しある程度のまとまりとなる。加飾隆帯、竹管文、沈線文Ａ・Ｂ類（短沈線）、縄文原体押圧文やこれらの組み合わせによって施文される一群である。Ⅱ群は、文様の種類や組み合わせ、器形などから以下の３つに細分する。

１類　加飾隆帯Ａ・Ｂ、竹管文とこれらに沈線文を加えた組み合わせの文様を有する土器を１類とした。そのほか刺突列のみのものについては、ここに含めるか明確にしがたいものも少数含んでいる。また、沈線文Ｂ（短沈線）については位置づけが難しいが、ここでは１類に含めておく。おおよそ大木 7a 式に併行すると想定したまとまりである。含まれる器形には、器形１・２・３がある。

２類　加飾隆帯と原体押圧文の組み合わせ、原体押圧文Ａ、原体押圧文Ｂや沈線文Ａと原体押圧文の組み合わせを２類とする。およそ大木 7b 式に併行すると想定した一群である。含まれる器形は、器形１・２・３・４・10・11 の６種がある。

３類　円筒上層ｂ・ｃ式に相当する一群である。原体押圧を施した隆線が主体的に施文されるもので、隆線間には刺突文が施される。掲載した土器は同一個体を含む可能性がある。

４類　北陸系の土器群である。15 破片のみの出土である（12 点掲載）。細片が多く、不明な点が多いが３個体分ありそうである。いずれにしても少数のため搬入品と考えられる。

Ⅲ群　縄文時代中期中葉前半に帰属する土器群としてまとめたものである。原体押圧文と隆線文や沈線文との組み合わせ、隆線文や沈線文とその組み合わせを中心とする文様構成を有する土器をⅢ群とする。土器の出土量としては今回の調査ではもっとも多い。含まれる器形には、器形５・６・８・９・12・14・15 があり、Ⅱ群に認められた器形１～４・10・11 も継続して認められる（とくにⅢ群１類）。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－①～④、Ⅱ－①区画が含まれ、Ⅱ－②区画は含まれない。文様の組み合わせから以下の４種に細分する。

１類　原体押圧文Ｂと中途半端な隆線（小隆帯や低平な隆線）、原体押圧文Ｄ、沈線文Ｂを中心とす

る組み合わせを１類とする。いずれⅡ群の範疇に入るのかⅢ群に入るのか判断に迷う類である。想定では大木 7b 式から大木 8a 式古段階併行期のいずれか、あるいは中間期に位置づけられると考えた。器形は、器形１・２・３・４・10・11 が含まれる。

２類　原体押圧文（Ｃ類中心）と隆線文や沈線文が組み合わされるものである。前後の時期に比べて出土数が少ない。Ⅲ群１類は、文様の組み合わせの基本パターンが本類と同様であることを考慮すると、時期的に近い関係と考えられる。縄文原体押圧文と隆（沈）線文が組み合う文様構成は、大木 8a 式の古い段階と同様であることから、これと併行する時期を想定する。器形は、器形 11 と 12 が主体となる。

３類　隆線文Ｂや沈線文Ｃ、隆線文Ｂと沈線文Ｃの組み合わせ、口縁部に隆線による狭い文様帯区画を施すものの一部が含まれる（胴部に沈線文①・②が施されるもの、波状口縁で狭い口縁部区画を有し、胴部が地文のみのもの、Ｓ字隆帯貼付文が施されるもの）。分類別では、この類がもっとも出土数が多い。こうした文様等の特徴は大木 8a 式の新しい段階（須原 2019）と共通すると考えられ、これに併行すると想定している。

４類　口縁部に狭い文様帯区画（Ⅰ－②・③類）を有する土器群である。３類にも同様の文様を施す土器群を含めたが、そのうち時期が限定できなかったものをこの分類とした。前後の時期のどちらかに含まれるという過渡的な類ではなく、ある程度の期間存続する可能性が高いと想定するものである。文様は隆線による狭い口縁部文様帯区画のみでその間は無文のものや「し」の字、渦巻文、円文などの隆線文を貼付（区画隆線と一体となるが）したものが多い。胴部は地文のみのものが多い。胴部に文様が施されるものはある程度時期が限定でき、それは３類に含めている。文様の特徴から大木 8a 式の新しい段階を中心とすると考えられるが、8b 式の新しい段階にかけて存続する（併行する）可能性が高いと考えている。一部（口縁部文様帯区画がⅠ－③類のもの）は大木９式の古い段階まで残る可能性がある。

５類　胴部に沈線文④が施されるもののうち頸部区画がないものをまとめた。口縁部文様帯区画は４類と同様であり、Ⅰ－②やⅠ－③類の口縁部幅の狭いタイプとなる。胴部文様が弧線文を中心とするモチーフで描かれているのが特徴である。円筒上層ｅ式そのものかあるいはその影響を受けたものと想定している。大木 8a 式の新段階と重なる時期であろう。器形は、５・６・14 が中心であり、Ⅲ群４類と同じである。

Ⅳ群　縄文時代中期中葉後半に帰属する土器群としてまとめたものである。胴部に沈線文①と頸部区画の組み合わせ、隆線文Ｂと頸部区画の組み合わせ、隆線文Ｂ（有棘）、胴部に隆沈線文や沈線文③が施されるものをⅣ群とした。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－①～④までと、Ⅱ－②区画が確認できる。器形は、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 12・13、器形 17・18 が存在する。おおよそ大木 8b 式に併行する土器群である。

１類　文様はⅢ群（とくに４類）と同様（胴部に沈線文①）であるが、Ⅲ群には認められない頸部区画が出現することから別に分類した。過渡的な分類と考えられる。含まれる器形は、器形５・６・７・14 であり、このうち５・６・14 が主体である。併行する土器型式としては大木 8a 式新段階から大木 8b 式古段階にかけてとしておくが、頸部文様帯区画の出現は大きな変化であると思われることから、大木 8b 式古段階に限定できるかもしれない。

２類　隆線文Ｂや沈線文Ｃと頸部区画の組み合わせ、有棘の隆線文Ｂのもの、口縁部に隆沈線文、胴部に字文や沈線文①・②が施され、かつ頸部区画を有するもの、などを２類とした。含まれる器形は、器形 12 のみであり、したがって口縁部文様帯区画もⅠ－①類のみとなる。これら文様の特徴から大

木 8b 式を２細別した場合の古い方の段階に位置づけた（須原 2019）。またこの類は、単一の器形のまとまりとなり、他の類とは異なっており、Ⅳ群１類とは時期的に同じ位置づけとなるかもしれない。

３類　口縁部形態を問わず胴部文様が隆沈線文①や沈線文③が施されるものをまとめた。文様の特徴からみると、併行する土器型式としては大木 8b 式の新しい段階に位置づけられよう。

４類　胴部に沈線文④が施される土器のうち頸部区画が存在するものや沈線文④’が施されるものをまとめた。沈線文④’は、それ自体の設定もあいまいであるが、今回出土の渦巻文のなかで異なる様相をもったものや異なるモチーフをまとめたものである。含まれる器形は器形５・６、器形 14、器形９である。区画はⅠ－②が多く、ついでⅠ－④のみである。時期的には２類～３類と同じ時期を想定している。大木 8b 式の範疇に含まれる思われるが、榎林式土器そのものや榎林式の影響を受けた可能性がある。今後区別される可能性を期待して分けたものである。

Ⅴ群　縄文時代中期後葉に帰属する土器群としてまとめたものである。沈線文⑤、沈線文⑤’、沈線文⑨、隆沈線文②が施される土器群をⅤ群とした。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－③・④、Ⅱ－②区画で大半を占める。器形には、Ⅳ群と同様に、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 12・13、器形 17・18 が含まれる。およそ大木９式と併行する段階のまとまりである。

１類　おもに胴部に沈線文⑨が施文される土器群である。口縁部は、Ⅰ－③の狭いタイプやⅠ－④類が主体であり、Ⅲ群３・４類と同様の傾向である。含まれる器形は、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 13 と多様であるが、器形 14～16 が多い。沈線文⑨の文様特徴から大木 8b 式新段階から大木９式古段階の間、もしくはいずれかの時期に併行すると想定する。

２類　おもに胴部に隆沈線文Ｂ②種が施文される土器群である。概ね大木９式の古い段階を想定する。口縁部の文様帯区画は、Ⅱ－②区画が優勢となる。含まれる器形には、器形８・９、器形 14～16、器形 17・器形 18、器形 12・13 がある。このなかでは器形 14～16 が多い。

３類　おもに胴部に沈線文⑤が施文される土器群である。おおよそ大木９式の新しい方の段階を想定する。口縁部の文様帯区画は、ほぼⅡ－②区画となり、ほかはⅠ－④区画が少数のみとなる。含まれる器形には、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 13、器形 17・18 がある。このうち口縁部が外反する器形７が主体となる。

４類　おもに胴部に沈線文⑤’が施文される土器群をまとめた。それ以外にも、口縁部が無文で頸部に刺突列が施されるものや通常無文部となる口縁部に一箇所のみ文様が施されるものも含めた。最花式あるいはその影響を受けた文様の可能性を考えた。口縁部文様帯区画はⅡ－②区画が主体である。含まれる器形には、器形 14～16・７・13・17 がある。

Ⅵ群　縄文時代中期末葉に位置づけられる土器群をまとめたものである。文様は、沈線文⑥、⑦、⑧がおもに胴部に施文される。おおよそ大木 10 式に併行する時期の土器群と想定する。出土数が少なく完形品もほとんどないため全容がしれないが、文様の種類によって以下の３類に細分する。

１類　おもに胴部に沈線文⑥が施文される土器群である。Ⅵ群のなかではもっとも出土数が多い。高根遺跡で安定的に出土するのはこの類までとなろう。口縁部文様帯区画はⅡ－②が主体であり、Ⅰ－④がつづく。器形は、器形７・13・16・17・18 が確認でき、器形７が主体である。大木 10 式の古段階を想定する。

２類　おもに胴部に沈線文⑦が施文される土器群である。出土数が少ない。口縁部文様帯区画はⅡ－②、Ⅰ－③・④が確認できる。器形は１類と同様である。大木 10 式の中段階を想定する。

３類　おもに胴部に沈線文⑧が施文される土器群である。出土数はほとんどなく、数点程度である。詳細は不明である。とりあえず大木 10 式新段階を想定する。

Ⅶ群　縄文時代後期～晩期に位置づけられる土器群を一括した。この時期に位置づける土器は出土数がわずかのため一括している。一応時期的に以下の２つに細分する。

１類　後期前葉に帰属する土器群で、おもに沈線文による曲線文様が描かれるものや地文のみで頸部が無文になる大型の深鉢などがある。

２類　晩期に帰属する土器群である。掲載土器のようにほぼ大洞 C2 式に相当する土器が出土するのみである。

Ⅷ群　弥生時代に位置づけられる土器群を一括した。前期から中期にかけての破片がわずかに出土するのみである。

（２）縄文時代の石器・石製品

石器・石製品は合わせて、総重量 774.168 ㎏が出土している（詳細は後述）。製作工程や使用法、形態的な特徴から以下のように分類し（器種分類）、記述に際し使用している。磨石・敲石類など出土点数が多いものについてはさらに細分しているが、少ないものは器種分類で留まっているものが多い。なお、礫石器類の分類については上條（2015）によるところが大きい。

石鏃　扁平で２次加工により鋭角な先端部を作り出し、長さ５㎝以下のもので鏃形を呈したものである。形態的に、基部が平坦なもの、基部が凹部になるもの（凹部が浅いものと深いものがあるが一括）、基部が凸部になるものの３者がある。

石槍　形状は石鏃に類似するが、石鏃よりも大きく厚い傾向がある。両面加工され先端が尖る刺突具である。

石錐　剥片の端部に両側縁から小剥離の２次加工が施され尖った刃部を有するものである。形態的に大別すると①細長く棒状を呈するもの、②台形状の頭部を有するもの、③剥片の一端を突出させたもので、頭部と錐部の差が不明瞭なものの３種類に分けられる。

石匙　剥片の一端に摘まみ状の小突起を有し、側縁の一部に刃部を有するものである。形態的に大別すると、①横型と②縦型に２分できる。

不定形石器（刃部のある剥片）　剥片を素材とする石器のうち定形石器ではないもので、刃部を有する剥片を一括したものである。刃部の角度で機能的に細分できる可能性がある。

石核　剥片を得るための素材や剥片を得た残りの部分（残核）である。

楔形石器　いわゆる両極技法が確認できる剥片石器である。

石斧類　斧形の石器で、敲打や剥離などにより成形したものや（打製石斧）、その後に研磨を加えて仕上げられたもの（磨製石斧）を含めている。形態的に分類すると、①撥形を呈するもの、②短冊形（方形）を呈するもの③小型のもの、に分けられる。さらに形態とは異なる基準であるが④未成品を区別しておく。

磨石・敲石類　摩耗痕・敲打痕・凹痕などの使用痕が残る礫石器を一括したものである。形態差で分類したものでなく使用痕で分類し、磨石、敲石、凹石を含めた分類となる。使用痕の種類や位置などを指標として、Ａ～Ｇ類に分類する。基準が異なるが、形態的な特徴からいわゆる扁平石器や特殊磨石を含めている（Ｈ・Ｉ類）。

Ａ類は磨痕のみ、Ｂ類は磨痕と凹痕、Ｃ類は磨痕と敲打痕、Ｄ類は磨痕と凹痕と敲打痕、Ｅ類は凹痕のみ、Ｆ類は凹痕と敲打痕、Ｇ類は敲打痕のみが確認されるものである。Ｈ類は三角柱や四角柱などの厚みのある柱状礫の稜に磨痕を有する特殊磨石、Ｉ類は板状の素材を剥離や研磨によって半円形状に整えた石器である扁平石器である。

石皿・台石類　扁平な大型礫の片面、両面に使用痕としての擦り面や敲打痕が残るものを一括して石皿・台石類とした。石皿と台石は、形態的に区別が難しいことから分析では両者を一括して取り扱うことが多い。区別する必要がある場合は、使用痕で区別する。すなわち敲打痕のみが残るものを台石、擦り面を含むものを石皿とする。

砥石　溝状・帯状・平面状の砥面が認められる石器を砥石とした。

石製品

石棒　棒状に加工が施された石製品である。敲打と擦りによって成形されたもので、ほとんどは円棒のままの無頭形のものがほとんどである。石棒と分類したが、砥石として再利用されているものが多く、本質的に石棒なのか砥石なのかその区別が難しいものがある。

玦状耳飾　扁平な環の一箇所に切れ目がある耳飾りである。出土例は円形ではなく、台形に近い形状である。

サメ歯形石製品　サメ歯製の垂飾品に類似あるいは模倣した石製品である。一般的な用語ではないが、垂飾品の一種と考えられる。

垂飾品　首からぶら下げる装飾品を一括した。紐を通す孔が穿たれており、有孔石製品の一種であるが、重量が軽く比較的小型品を垂飾品として区別した。

石錘　扁平な楕円形の礫に縄紐をつける、切れ目や溝状のきざみを施したもの。

有孔軽石製品　軽石や安山岩製の孔が穿たれている製品を軽石製品とした。孔が穿たれないものは未成品と判断してこれに含めている。重量が非常に軽いため浮子として利用されていたと想定する。

有孔石製品　孔が穿たれる石製品のうち、垂飾品を除いたものを一括した。名称不明なものをまとめたものであり、用途も判然としない。孔が１つ、２つのものがある。

三角壕形石製品　三角柱を横向きに倒した状態のもので、側面が三角形、正面（裏面）が長方形状、底面も長方形状を呈するものである。

不明石製品　名称・用途等が不明のものである。加工されているが小破片のため器種不明となったものである。出土数が多い場合、別の分類名称に変更になる場合が多い。

（３）縄文時代の土製品

キノコ形土製品　菌類の茸の子実体を模したと想定される土製品をキノコ形土製品とした。これらが忠実に実際のキノコを模している場合、形態的な特徴から種類を同定することも可能であるが、ここでは一括した。

斧形土製品　扁平な板状で、先端がやや尖る形状で、磨製石斧に類似する短冊形の土製品である。

土製耳飾　土製の耳飾に類するものを一括した。耳栓も含む。

土器片円盤　土器片の周縁を打ち欠き、研磨を施して円形に整形したものを土器片円盤とする。

不明土製品　小型の紡錘形を呈する土製品である。貫通孔があれば土錘状のようであるが、地文も施され異なる点も多い。土錘状土製品とも言うべきものであるが、用途不明を重視して不明土製品とする。

（４）縄文時代の貝製品・骨角器

不明貝製品　全体的に研磨痕が観察されることから、何らかの製品の一部と判断したものである。種類を特定するまでに至らないため不明貝製品とした。

骨針　針状に加工された骨製品である。

（５）縄文時代以降の遺物

鞴羽口　鉄を溶かすために鞴から炉の中に風を送り込むための土製の管である。炉に装着された先端部分には凝結した鉄滓（溶着滓）が付着する。

鉄滓　砂鉄などの原料から鉄をつくりだす際に出る不純物であり、磁着・メタル反応の有無や表面の特徴などによって、鉄塊系遺物・含鉄鉄滓（炉内滓）・椀形滓・炉底滓・流出滓・鍛造剥片・粒状滓・炉壁・再結合滓の９種に細分する。

３　縄　文　土　器

縄文土器については、遺構ごとにある程度まとまって出土することや時期決定の主要な基準となるため、ほかの遺物とは異なり遺構ごとに記載する。掲載点数が多いため、要点のみ記述し、それ以外の属性については、第３分冊第１表に記載する。また、図示しなかった不掲載土器は、大半が胴部片に地文のみが施されるものであるが、文様が判別できる破片も多く、これについては大まかに分類し、重量で第３分冊第 11 表に記載している。本節は、掲載遺物を中心に記載しており、掲載土器のない遺構については記載していない。ただし掲載遺物がない遺構でも（不掲載の）遺物が出土している場合があるため、その場合は第３分冊第 10 表を参照されたい。

（１）竪穴建物跡出土土器

SI1 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第１～２図・第４分冊写真図版 309）　出土土器の総量は、22,092.2 ｇである。そのうち 10 点（図化率 34.2%・総重量に対する図化率のことで以下同様）を掲載した。１～10 まですべて深鉢である。器形が判別できるものでは、１・２・３が器形５に、５が器形７に、４が器形 13 にそれぞれ分けることができる。文様は、沈線が主体のもの（１・３）、沈線による曲線区画と充填縄文が主体のもの（５・６）、隆沈線による楕円区画文が主体のもの（４）、無文のもの（７・９・10）に分けられる。２・８は口縁あるいは底部のみの破片のため、文様は不明である。なお、10・７はそれぞれ埋設土器１、埋設土器２である。これらの土器は、無文土器が多いが、器形・文様の特徴から、第Ⅲ群～第Ⅵ群（中期中葉から末葉）の範疇に含まれる。なお、掲載していない破片土器（不掲載土器）は、145,27.2 ｇがあり、そのうち文様が判別できる破片は 3,022.5 ｇある。内訳は、Ⅲ群～Ⅴ群（大木 8a～９式併行）に相当する破片があり、比率的にはⅣ群（大木 8b 式併行）、Ⅲ群（大木 8a 式併行）で６割（不掲載土器のうち文様が判明する破片の中での割合であり、出土土器全体の中での割合ではない。以下の文章中はすべてこれと同義である）を占める。次いでⅤ群となる。本遺構の主体となる土器群（本遺構に伴う土器群＝遺構の帰属する時期、以下の文章はこれと同義）を決定したいが、出土遺物にはかなりの年代幅があり、埋設土器も無文土器のため判断が難しい（器形７を呈するためⅣ～Ⅵ群には限定できる）。堆積土の下層や床面からはⅥ群土器の破片が出土していることから、Ⅵ群（大木 10 式併行）とその前後の時期を主体とする土器群としたいがあまり確証はない。

SI2 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第２図・第４分冊写真図版 310）　土器出土量 3,924.1 ｇ、このうち２点（図化率 26%）を掲載した。11・12 は、いずれも口縁部がゆるやかに外反し、胴部が膨らむ器形７に該当する。11 は、地文のみであり、12 は沈線による楕円形区画と磨消縄文が施される。この文様の特徴から第Ⅴ群３類に分類した。床面と埋土出土分が接合している。不掲載土器片は、

2,918.3 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 478.3 ｇのみで、Ⅱ～Ⅳ群の土器片が出土している。出土割合の大きいものから順に、Ⅲ群（53％）、Ⅱ群（16％）、Ⅲ～Ⅳ群（13％）、Ⅳ群（９％）である。Ⅲ群土器を中心に多様な時期の土器が出土しているが、床面に近い出土土器を優先し、主体となる土器群をⅤ群（大木９式併行期）とする。

SI3 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第３～６図・第４分冊写真図版 310・311）　土器の総出土量は、45,265.6 ｇと多い。このうち、23 点（図化率 15％）を掲載した。文様をみると、①細い隆線と原体押圧が伴うもの（１点）、②沈線主体のもの（２点）、③隆沈線主体のもの（８点）、④磨消と沈線が伴うもの（７点）、⑤無文のもの（地文のみ、５点）の５つがある。①の文様は施されるものは１点のみで、13 は口縁部破片であるため、全容は不明であるが、器形１を呈する可能性がある。埋土からの出土で、Ⅲ群１類に位置づける。②の文様には、14・15 がある。器形はいずれも４であろう。14 は、口縁部に２条の平行文と波状文を沈線で施される。15 は、口縁部に１条ずつ平行線と波状文が施される。頸部にも同様の文様が施され、２段構成と考えられる。いずれも口径が 15 ㎝程度の小型品で、Ⅲ群１類に分類する。③の文様は８点であり、21～23（器形 12）、25（器形 13）・28（器形 14）、18・29・30（器形 15）、31（器形 16）である。隆沈線を用いて、口縁部から胴部全体を使用して大きな渦巻文を施すものが多い（第Ⅳ群）。30 や 21 は、楕円形の区画が縦方向に整っていることからより後出的な時期の可能性がある（第Ⅴ群）。31 はⅣ群に位置づけたが、破片のための全容が知れず、本遺跡内では類例がないめずらしい器形である。④の文様には、16・17・19・22・24・26・27 がある。ある程度全容が知れる 19・22 をみると、長さの短い楕円形区画が上段に、長い楕円形区画が下段の２段にわたって区画が繰り返される。26・27 は大きく幅広の楕円形区画が１段のみ施されており、Ⅴ群４類（最花式か）の可能性がある。16 はⅥ群１類の可能性がある。⑤には、20・32～35 がある。20 は長胴形の胴部片であることから、おそらく器形 12 に伴うものと推定される。その他は口縁部が内湾するものが多い。不掲載土器は 38,699.5 ｇがある。そのうち文様が判明する破片は 13,087.5 ｇがある。内訳は、Ⅳ群が 37％、Ⅴ群が 18％、Ⅲ群が 15％を占め、そのほかⅡ群が少量出土している。主体となる土器群は、出土量の多いⅣ群～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）としておく。

SI8 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第６～８図・第４分冊写真図版 312・313）　総重量 13,527.2 ｇが出土している。そのうち 19 点（図化率 41％）を掲載した。36～38 は、第Ⅱ群に位置づけられるものである。36 は波状口縁を有し、胴部がややふくらむ器形であり（器形１）、棒状工具による押捺、沈線文、交互刺突による弧線文、平行文が施されている。37 は小破片であるが、半截竹管状の工具による押し引き文が施される。38 は、口縁部に、RL 原体の押圧が施されている。これらの特徴からⅡ群１類ないしはⅡ群２類に位置づけられる。これらは貼床や床面から出土である。39・40～42・48・49 は、おもに沈線によって文様が描かれる。多くは波状文や平行文であるが（Ⅲ群）、48・49 は器形８を呈し、渦巻文が描かれる（第Ⅳ群）。42 は、胴部文様が欠けており不明確であるが、口縁部が無文となることからⅣ群１類かもしれない。43 は、細い隆線によって渦巻文が描かれる。Ⅲ群に位置づけたい。44～47・50 は、隆沈線によって文様が描かれる。44～46 は器形 12、47 は器形 13 の小型品であろう。その他は小破片のため器形不明である。これらはⅣ群に位置づけた。51～54 は、地文だけの無文土器である。底部片が多く全容は知れないものが多い。51 は口縁部が外反し、胴部がふくらむ形態である。不掲載土器は 7,992.7 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは 3,088.7 ｇである。内訳は、Ⅲ群のものが 50％を占め、次いでⅣ群、Ⅱ～Ⅲ群の順に出土量が多い。遺構が機能していた時期に近いと考えられる貼床や床面から出土した土器には、上述のⅡ～Ⅲ群土器のほか、Ⅳ群土器も出土している。埋土を含めてみると主体となるのはⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併

行）である。この遺構の下層が包含層であることを考慮するとⅡ群土器は下層の土器を巻き込んだ可能性があると考えた。

SI9 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第８・９図・第４分冊写真図版 313）　土器の総重量 9272.6 ｇで、このうち６点（図化率 28%）を掲載した。57 は器形 19 の壺型を呈する。文様は胴部で沈線により楕円形の区画を形成し、内側に縄文を充填する。口縁部はミガキが施され、無文となる。頸部と胴部中位には２個１対の橋状の把手を貼り付ける。Ⅵ群に位置づけられる。56 は 57 とは異なり区画内に磨消縄文が施されることからⅤ群に位置づけた。55 は口縁部に原体押圧が施されることからⅡ群２類、Ⅲ群１類の可能性がある。55・56 とも小破片のため器形不明である。58～60 は地文のみの無文土器である。60 は口縁部がゆるやかに外反する大型品、58・59 は小型品であり、前者は外反する口縁、後者は内湾する口縁を有する。不掲載遺物は 6,702 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 861.9 ｇである。内訳は、Ⅲ群の破片が 57%、Ⅳ群４%、Ⅱ群・Ⅳ～Ⅴ群がそれぞれ１%である。Ⅲ群土器の破片が多いものの、床面出土土器を重視して、主体となる土器群はⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）前後とした。

SI10 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第９図・第４分冊写真図版 314）　総重量 14,460.9 ｇが出土している。このうち７点（図化率６%）を掲載している。61 は口縁部がわずかに外反する形態である（器形３）。また口縁部を肥厚させ、棒状工具による刺突が施されている。62 はキャリパー形を呈する器形（器形 12）の口縁部片と想定した。隆線で文様を描くもので、波状文（渦巻風）を施す。63～67 は無文の土器である。63 は口縁部片で端部はナデられる。64～67 は、底部片である。65・66 の底面には木葉痕が、64 の底面には敷物の圧痕が残る。不掲載土器は 13,299.7 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 1,701.2 ｇである。内訳は半分以上がⅢ群土器である。次いでⅤ群、Ⅱ～Ⅲ群、Ⅳ～Ⅴ群であり、年代の幅が広い。そのほか SI11 と一括で取り上げた土器が 2,200 ｇあるが地文のみである。主体となる土器群は、出土量が多いⅢ群土器と考えたいが、重複する SI9（Ⅴ～Ⅵ群）よりも新しいこと、炉形態が複式炉の可能性が高いことからⅤ群（大木９式併行）以降と考えた方がよいかもしれない。

SI11 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第９・10 図・第４分冊写真図版 314）　総重量 6,260.6 ｇ出土している。そのうち２点（図化率 35%）を掲載した。68 は、地文のみの深鉢で、口縁部が外反する器形である。69 は地文のみの深鉢胴部片である。口縁部の形状や文様は不明である。不掲載土器は 4,050.3 ｇがあり、このうち文様が残る破片は 711.7 ｇである。内訳は約７割がⅢ群土器の特徴を示し、Ⅲ～Ⅳ群、Ⅳ群がつづく。そのほか SI10 と一括で取り上げた土器が 2,200 ｇあるが地文のみである。出土土器の年代幅は、Ⅲ～Ⅳ群の間にまとまっているが、重複関係からみると、SI9・10 等よりも新しいことから、Ⅴ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）の範疇で検討するほかはない。

SI13～16・SI18 竪穴建物跡出土土器　SI13～16・SI18 出土土器については、重複が激しく、各遺構の範囲が不明瞭であったことや、調査開始直後に試掘トレンチを設定してしまったことなどから個別の遺構出土土器を分離することが難しかった。ただし、遺物の取り上げ地点や出土層位により、調査後にある程度限定させることを試みた。その結果、SI13、SI14、SI18 と SI13・14、SI13・14・15、SI13・14・15・18、SI13・14・18、SI13・18 に分けることができたが、煩雑であり個別に分離できた土器以外は、実質 SI13～16・SI18 の５棟分一括と考えたほうがよいであろう。また、出土遺物の主体となる時期は、Ⅲ群とⅤ群に２分される。したがって、これらの遺構の時期はどちらかに帰属する。すなわち重複の古い遺構はⅢ群に、新しいものはⅤ群に帰属すると考えられる。出土遺物の傾向として、SI15・16 はⅢ群にそれ以外はⅤ群に分けられるかもしれない。ただし、相対的に新しい

SI18 でも炉は石囲炉である。以下では、この限定した遺構のまとまりごとに記載する。

SI13 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 10～12 図・第４分冊写真図版 314～316） SI13 として分離できた出土総重量は 14,180.4 ｇである。このうち 18 点（図化率 58%）を掲載した。70・71 は口縁部が外反する器形（器形５・６）である。70 は胴部が膨らむが、71 はすぼまっている。口縁部に２個１対の隆帯を貼付するが、胴部には地文のみである。72・73 は、口縁部が内湾するキャリパー形を呈する（器形 12)。隆線によって波状文から渦巻風の文様を施す。74 は口縁部が不明であるが胴部が膨らむ形態を呈し、器形６の可能性がある。沈線で胴部中位まで文様を描くもので、やや乱雑ながら渦巻風の文様が観察される。これらの土器は文様の特徴からⅢ群に含められよう。75～80 は、沈線で楕円形状の上下２段の区画を施す文様構成をもつⅤ群に属する。ただし 78 は、部分的にしか残存しないが、Ⅵ群の可能性がある。79・80 は刺突による区画内充填を上段の区画に行っている。75～78・80 は中型や小型の深鉢で、79 は浅鉢である。81～87 は地文のみの深鉢で、いずれも口縁部が外反するものが多い。82・83 は器形７であることから、Ⅴ・Ⅵ群土器に伴う可能性がある。84 は底部片であり、無文土器ではない可能性がある。底部には内面ほぼ中央部に穿孔がある。87 は小型の深鉢で、85 は底面に網代痕が残る。不掲載土器は、6,027.5 ｇが出土し、このうち文様が判別できるものは、2,668.1 ｇある。内訳は、Ⅳ群も少量出土しているものの、Ⅲ群（36%）とⅤ群（30.4%）に２分される。

SI13・14 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 13 図・第４分冊写真図版 316） SI13・14 に限定できた土器の総重量は、6,193.4 ｇである。掲載できたのは３点（図化率７%）である。88～90 はいずれも地文のみが施される無文土器である。90 は小型品の鉢である。88 は口縁部がゆるやかに外反する器形７で、89 は底部片である。不掲載土器は、5,766.8 ｇあり、このうち文様が判別できるものは、2,426.4 ｇである。文様が判断できる破片の中ではⅤ群土器が 49%、Ⅲ群土器が 28%を占め、Ⅲ群とⅤ群に２分される。

SI13・14・15 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 13 図・第４分冊写真図版 316・317） SI13～15 に限定できた土器の総重量は、6,936.3 ｇである。掲載したのはこのうち８点（図化率 15%）である。91・92 は、沈線による縦長の楕円形区画を有する文様が施される。いずれも波状口縁を呈する、91 は小型である。また 91 は、地文施文後に沈線で区画するが、92 は沈線区画後に地文を充填するようである。そのためこれはⅥ群の可能性がある。刺突はいずれも区画後であろう。93～98 は地文のみが施文される無文土器である。口縁部が外反するものが多いが、94・97 はやや外傾する口縁部である。また、97 は口縁部に指頭圧痕が施される。不掲載土器は 5,901.9 ｇあり、文様が判断できるものは、2,519.9 ｇある。このうち７割以上のⅢ群と１割のⅤ群とに２分される。

SI13・14・15・18 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 13・14 図・第４分冊写真図版 317） SI13～15・SI18 に限定できた土器の総重量は、1,256.0 ｇである。３点すべてを掲載している。99 は小型の深鉢で、口縁部が欠損しており、胴部には沈線による縦長の楕円形区画が、その周囲をミガキが施されている。Ⅴ群土器の特徴である。100・101 は、地文だけの無文土器で、口縁部が外反している器形である。不掲載土器はない。

SI13・14・18 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 14 図・第４分冊写真図版 317） SI13・14・18 に限定できた土器の総重量は、570.4 ｇである。２点すべてを掲載している。102 はいわゆるキャリパー形を呈する器形 12 の深鉢口縁部片である。２条の隆線と沈線から文様は構成されるが、隆線脇の沈線は凹みが薄く、隆沈線にはなりきれていないようである。しかし有棘文と観察できる文様もあることからⅢ～Ⅳ群の過渡期と位置づけた。103 は口縁部が欠損しており文様が不明である。胴部が膨ら

む器形である。不掲載土器はない。

SI13・18 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 14・15 図・第４分冊写真図版 317・318）　SI13・18 に限定できた土器の総重量は、28,927.8 ｇである。このうち９点（図化率 7.8%）を掲載した。104 は深鉢の口縁部片で、内湾しながら立ち上がる形態をもつ（器形 11）。もう少し内湾が強くなると器形 12 になろう。文様は隆線で描き、脇に原体押圧を伴う。この特徴はⅢ群の１～２類に位置づけられる。105 は口縁部が欠損する深鉢で、沈線主体で文様が施されている。胴下位まで施文されているが懸垂文や波状文が中心であることからⅢ群に含めた。106 は沈線による縦長の楕円形区画が施される深鉢である。ミガキによる磨消を伴うことからⅤ群に含めた。107～112 は地文だけの無文土器である。厳密には 110～112 の底部片は口縁部が欠損しており、無文か否か不明である。107 は内湾口縁、108・109 は外反する口縁部であり、いずれも胴部が膨らむ形態である。不掲載土器は 26,658.7 ｇあり、そのうち文様の判別ができる破片は 2,985.9 ｇある。Ⅴ群土器が 39.9%、Ⅲ群土器が 36.9%を占め、両者で２分される。

SI14 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 15・16 図・第４分冊写真図版 318）　総重量 4,009.1 ｇが出土した。そのうち４点（図化率 60.8%）を掲載した。113 は深鉢の口縁部片である。口縁部が内湾する器形 12 を呈する。文様は隆線と沈線によって平行文と弧線文が描かれている。頸部以下は地文のみのようである。Ⅲ群に属する。114 は浅鉢の破片であり、沈線による文様が描かれることからⅢ群に位置づけられる。115 は深鉢の胴部から底部片であり、無文土器の可能性がある。116 は口縁部がわずかに外反する無文土器である。不掲載土器は 1,572.3 ｇあり、そのうち文様が判別できるものは 819.7 ｇある。このうちⅢ群が 51.5%、Ⅴ群が 27.4%、Ⅳ～Ⅴ群が 12.6%と続く。この遺構もⅢ群とⅤ群にほぼ２分されることがわかる。

SI14・15 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 16 図・第４分冊写真図版 319）　SI14・15 に限定できた土器の総重量は、3,144.8 ｇである。このうち４点（図化率 19.2%）を掲載した。117・118 は深鉢で、いずれも破片である。118 は口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形６、117 は口縁部がわずかに外傾し、胴部の形状が不明だが器形５あるいは器形９の可能性がある。いずれも沈線が主体で文様が描かれている。118 は頸部にミガキが施され無文帯となっており、隆沈線が弱く微妙であるが、Ⅳ群に位置づけた。117 はⅢ群と考えられる。119 は浅鉢で、図上では完形に復元できる。Ⅲ群に位置づけられよう。120 は小型深鉢の胴部から底部にかけての破片である。無文土器の可能性がある。不掲載土器は、2,542.4 ｇが出土しており、そのうち文様が判別できるものは 1,106.9 ｇである。この内訳はⅢ群が 55%、Ⅳ群が８%、Ⅱ～Ⅲ群 5.7%。Ⅴ群が 5.5%と続く。Ⅴ群の割合が他の重複遺構よりも少ない傾向にある。

SI18 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 16・17 図・第４分冊写真図版 319）　総重量 3,395.60 ｇが出土している。このうち３点（図化率 87.8%）を掲載した。122 は壺形土器の胴部片である。口縁を欠損しているが器形 15 に復元できよう。胴部最大径の位置に把手がつく。胴部の文様は沈線による縦長の楕円形区画が描かれ、磨消技法が確認できる。Ⅴ群の範疇であろう。121・123 は無文土器で、121 は大きく外反する口縁、123 はわずかに外傾する口縁部をもつ。不掲載土器は、415.69 ｇ出土しており、文様が判別できる破片は 132.3 ｇある。そのほとんどがⅣ群である。しかしながら、出土量全体の割合でみると、無文土器を除き、Ⅴ群がもっとも多くなる。

SI19 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 17 図・第４分冊写真図版 319）　総重量 1718.8 ｇが出土している。このうち１点（図化率 22%）のみを掲載した。124 は、深鉢の底部片である。破片のため分類不明である。外底面には敷物圧痕が残る。不掲載遺物は、1342.7 ｇであり、このうち文様が判別す

る破片は 168.4 ｇのみある。多くがⅢ群で、Ⅳ群・Ⅴ群土器が続く。割合が多いのはⅢ群となるが、遺物数が少ないことや重複関係が新しいこともあり、Ⅴ群（大木９式併行）の年代を採用する。

SI20A・B 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 17 図・第４分冊写真図版 319） SI20A と 20B の２棟あるが、出土遺物は明確に分類できないため一括する。総重量 2,127.0 ｇが出土した。このうち１点（25%）を掲載した。125 は、大型の深鉢の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部の形状は、内湾しながら立ち上がる器形 11 を呈する。文様は、隆線と沈線から弧線文を描く。これらの特徴はⅢ群に位置づけられる。不掲載土器は 1596.8 ｇあり、このうち文様が判別する破片は 339.8 ｇである。内訳はⅢ群土器 68%、Ⅱ群～Ⅲ群土器 14%、Ⅳ群土器５％である（無文土器を除く）。Ⅲ群前後の時期に出土遺物の大半が集中することや重複がもっとも古いことからみて、主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）に位置づけた。

SI022A・B・C 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 17～20 図・第４分冊写真図版 319～321） SI22A・B・C の３棟あるが、ほぼ同位置に重複している遺構のため同時に調査を行った。そのためほとんどの遺物は一括して取り上げていることからまとめて記載する。３棟一括で取り上げた土器の総重量は 43,268.8 ｇである。なお、SI22A・SI22B の２棟については、出土土器のうち一部のみ限定できたため別に取り上げた。126～128 の３点は SI22A に限定できた土器である。126 は深鉢口縁部片で、内湾気味に立ち上がる形態である（器形 11）。隆線に沿って原体押圧が施されていること 127 は深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。胴部が膨らみ、口縁部が外反する形態と推定される（器形６）。文様は沈線で、波状文、平行文、渦巻風の文様が描かれている。この２点はⅢ群に含めた。128 は器形７を呈し、文様は、沈線で曲線状の区画を描き、内に充填縄文を施している。Ⅵ群の特徴であろう。129～155・157 は、SI22A～C のいずれかに含まれるが、明確に区別できなかったため一括した土器である。129・130 は、深鉢口縁部の小破片である。いずれも器形は不明だが、129 は竹管による沈線文が施され、130 は、隆帯に縄文原体圧痕が施される。それぞれⅡ群、Ⅲ群に分類した。131 は深鉢の胴部片で、沈線による渦巻文が施されており、Ⅳ群であろう。132～139・141 は、沈線による楕円形や曲線状の区画を描く文様が特徴的な土器（132・133 は隆沈線による）である。長楕円形区画が確認される 132～135 と、曲線状の区画である 136～139・141 に大別できる。前者はⅤ群に、後者はⅥ群に分類する。132・133 は破片であるため、あるいはⅣ群かもしれない。また 139 は、Ⅶ群に含まれる可能性もある。140・142～144・146～156 は、地文以外の文様を持たない無文土器である。口縁部が残る破片はすべてわずかに外反するものである。これらの口縁部は、端部を折り返し、ナデが施されるものが多い。地文には、単節の縄文のほか、単軸絡条体（142・148・150）、複節（144・152）などが確認され、縦回転ものものがほとんどである。146 は、ナデによる調整が施されており、もしかすると土師器の可能性もある。156 の底面には網代痕が残る。157 は、中空の容器である。朱やアスファルト容器に類似しているが、それらの痕跡は残っていない。145 はミニチュア土器である、胴部が膨らむ壺形を呈す。147 は弥生土器と想定した。158～162 は SI22B に限定できた土器である。158 は、刻み目を伴う隆線に縄文原体圧痕が伴う文様である。頸部片のため器形は不明であるが、Ⅱ群であろう。159 は深鉢口縁部片で、内湾する口縁部をもち（器形 12）、沈線による文様が施される。160 は、口縁端部に１対の隆線が貼付されるが、それ以外は地文のみが施される。２点はⅢ群の特徴をしめす。161・162 は地文だけの無文土器である。161 は口縁部がわずかに外反し、頸部が長い形態である。Ⅴ群以降に多い形態である。なお、遺構の所属が限定できた８点を除いた SI22A・B・C 出土土器の多くは、断面図の観察から遺構堆積土の大部分は重複関係がもっとも新しい SI22A に含まれることから、これに所属する可能性が高いと想定される。不掲載土器は SI22A・B・C の一括で

38,926.1 ｇ、SI22A で 378 ｇ、SI22B で 1,378.9 ｇがある。内訳は、無文土器を除き、Ⅴ～Ⅵ群が大半を占める。次いでⅢ群が続く。遺物の年代幅は、掲載土器とあわせるとⅡ群～Ⅵ群でありかなり広いが、主体となる土器群は、出土量を重視してⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）としたい。

SI23 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 20 図・第４分冊写真図版 321） 総重量 375.0 ｇが出土している。このうち２点（図化率 54%）を掲載した。163 は深鉢の胴部片、164 は胴部から底部片である。163 は沈線による縦長の楕円形区画に磨消縄文が施される。164 は沈線による曲線状の区画文が描かれ、区画内は無文である。それぞれⅤ群とⅥ群に分類した。不掲載土器は 172.7 ｇあるが、いずれも無文土器である。主体となる土器群は、出土量が少なく決定し難いが、掲載土器を指標にⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）とした。

SI24 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 20 図・第４分冊写真図版 321・322） 総重量 2,099.1 ｇが出土している。このうち２点（図化率 53%）を掲載した。165 は口縁部が内湾するいわゆるキャリパー形（器形 13）を呈する深鉢である。おそらく８単位の波状口縁で、胴部は底部に向かってすぼまる形態である。文様は、隆沈線や沈線による縦長の楕円形区画を上下２段に描く。区画外は磨り消されている。Ⅴ群２類であろう。166 は、深鉢胴部片で、地文のみが施される。不掲載土器は 996.3 ｇであり、そのうち文様が判明する土器片は 351.7 ｇである。内訳をみると隆沈線が施されるⅣ群土器、次いでⅢ群土器の割合が多い。いずれ連続するⅢ～Ⅴ群の範疇に含まれる。重複がもっとも新しいことから、この年代幅のうち新しい方のⅣ～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）に位置づけられる可能性が高い。

SI25 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 21 図・第４分冊写真図版 322） 総重量 3,078.0 ｇが出土している。このうち７点（図化率 23.7%）を掲載した。167 は深鉢口縁部片である。細片のため器形復元は難しいが、口縁部があまり外傾しない器形２の可能性がある。Ⅱ群であろう。169 は大型深鉢の胴部片である。隆沈線による渦巻文や分岐文が確認される。170 は胴部が球胴状に膨らむ器形８・９である。口縁部はミガキが施され無文となる。頸部には沈線による区画が、胴部には沈線で渦巻文が施される。これらはⅣ群に分類する。171 は、内湾する口縁部に端部のみが外反する形態である。隆線による区画からⅤ群（２類）であろう。172 も同様の文様であるが、沈線で区画する。同じくⅤ群（３類）である。168 は口縁部に隆線が貼付される深鉢の口縁部である。細片のため器形は不明であるが、内湾気味の口縁である。Ⅲ群４類に分類した。173 は無文土器である。168 は口縁部が内湾する大型の器形と想定され、口縁部に隆線（隆沈線）が貼り付けられる。173 は外反する口縁部をもつ。不掲載土器は 2,350 ｇがある。文様が判別できるものをみると無文土器を除き、Ⅲ群、Ⅲ～Ⅳ群、Ⅴ群土器の順で量が多い。重複がもっとも新しいことを考慮するとこの年代幅のうち、新しい方のⅣ～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）が主体となる可能性がある。

SI27 竪穴建物跡出土土器　総重量 438.3 ｇが出土しているが、図示した土器はない。そのほか SI60 とまとめて取り上げた遺物がある（SI60・27 の項に記載）。文様が判別できる破片は 241 ｇあり、大半をⅣ群で占める。そのほかⅡ群土器が出土している。重複する SI60 がⅢ群土器を出土していることから、これよりも新しい本遺構の主体となる土器群はⅣ群（大木 8b 式併行）と考えられる。

SI28 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 21 図・第４分冊写真図版 322） 総重量 4,120.8 ｇが出土している。このうち４点（図化率 43%）を掲載した。174 は底部から口縁部にかけてラッパ状に開く形態を呈する（器形５）。口縁部はミガキが施され無文となる。頸部には３条の沈線で区画され、胴部には沈線で渦巻文が描かれる。176 は直口気味の口縁部を有する深鉢片である。文様は隆沈線によって渦巻文が描かれている。全体が不明であるが、174・176 合わせてⅣ群である。175 は、深鉢の胴部片で、２～３条の沈線による懸垂文が確認できる。口縁部から胴部上位を欠損しているため全容は不明

であるがⅢ群の可能性がある。177 は口縁部にミガキが施される深鉢の口縁部片である。細片のため全容は不明である。不掲載土器は 2,364.7 ｇがある。無文土器も含め文様が判別する土器は 371.2 ｇである。Ⅲ群（38％）とⅣ群（58％）で大半を占める。このほか SI116 と同一に取り上げた土器（143 ｇ）が出土している。主体となる土器群は、重複関係や出土量からみてⅣ群（大木 8b 式併行）と考える。

SI29 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 21 図・第４分冊写真図版 322）　総重量 1,815.2 ｇが出土している。このうち３点（図化率 64％）を掲載した。179 は、深鉢の口縁部片であるが、内湾する形態である。細片であるため不確かだが、器形 12 あるいは 13 の可能性がある。文様は、隆沈線によって楕円形の区画が描かれており、Ⅴ群の特徴をもつ。178 は、口縁部に隆線をめぐらすもので、器形 13 の形態であろう。Ⅲ群４類である。180 は地文のみが施された無文土器で、口縁部は外反する。不掲載土器は 646.6 ｇと少ない。Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群の細片が主体である。主体となる土器群は、出土量が多いⅣ～Ⅴ群（大木 8b ～９式併行）となろう。

SI32 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 22 ～ 25 図・第４分冊写真図版 323・324）　総重量 23,733.8 ｇが出土している。このうち 10 点（図化率 54％）を掲載した。181 は大型深鉢で、一部欠損があるがほぼ完形である。器形は、口縁部が内湾し、胴がふくらみ、底部にむかってすぼまる形態である（器形 13）。口径が 32.5 ㎝、器高が 47.1 ㎝である。口縁部は波状口縁であり、大波状３単位と小波状３単位が組み合わさって６単位となる。文様は、隆沈線で大きな渦巻文を中心に描き（３単位）、その周囲を小さな渦巻文、そこから分岐する懸垂文などである。小さな渦巻文には棘状の突起が３面（単位）の大渦巻文のうち１面（単位）のみ確認できる。波状口縁と渦巻文から３単位を基本に施文しているようである。また文様は口縁部から底部まで器表全体を使用する。この個体は埋設土器として倒位で設置されており、外底面には破損が多いが、孔が穿たれている。182・183・185 は、いずれも深鉢であるが、いわゆるキャリパー形（器形 12）を呈する口縁部片である。184 は器形 11 である。文様は、主として 182 が隆線、183 が沈線。184 が隆線と沈線、185 が隆沈線によって描かれている。185 は口縁部が強く屈曲することや頸部が無文になるなどより後出的な特徴を示す。この 185 以外はⅢ群に、185 はⅤ群に分類される。184 は隆線文と沈線文の組み合わせであるが、隆線文の区画内を沈線文で充填しているようにも見えることからⅢ群１類とした。187 も口縁部片であるが、口縁部が直口し、半截竹管の押引き文が描かれるなど古い様相を示し、Ⅱ群に位置づけられるかも知れない。189 は大型の浅鉢で、口縁部にのみ隆線による区画と地文が施文されている。下位はミガキで無文となる。186 は、口縁部に隆線がめぐるタイプで、器形が樽状を呈し（器形 14）、胴部以下は地文のみである。この土器は、埋設土器２として倒位で設置されたものである。188 も地文のみの無文土器で、口縁端部にミガキが施される。190 は小型の鉢である。口縁部が欠損しており器形が不明であるが、大きく広がる口縁部をもつと推定される。文様は隆沈線を主体とし渦巻文が描かれることから、Ⅳ群に分類する。掲載土器ではⅣ群土器やⅡ～Ⅲ群土器の割合が多い。不掲載土器は 10,837.7 ｇあり、Ⅱ群～Ⅴ群までの破片が出土する。このうち７割がⅢ群、1.5 割がⅣ～Ⅴ群である。破片ではⅢ群が多いものの、この遺構では、埋設土器である 181 の年代が遺構の時期となろう。すなわちⅣ群土器（大木 8b 式併行）が主体となる。

SI33 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 25 ～ 27 図・第４分冊写真図版 324 ～ 326）　総重量 47,998.9 ｇが出土している。このうち 23 点（図化率 27％）を掲載した。191 ～ 199 はⅡ群に分類した深鉢の口縁部片である。いずれも破片であるが、192 ～ 194 は大波状口縁（器形１）、191 はやや内湾して立ち上がる口縁部を有することから器形 1B、195 は直口状もしくはやや内湾する口縁部（器形

２か 10）を有する器形、196・198 は器形 11、197・199 は器形２と推定される。文様は、192 が沈線を主体に曲線状の文様を描き、縄文原体押圧が伴う。193・194 はそれから沈線文を除き、縄文原体押圧文のみで渦巻や曲線状の文様が描かれる。197・199 は縄文原体押圧文による平行文のみである。191 は、細い隆線による波状文（交互刺突）や半截竹管による沈線文が、195 は口縁部の上下を隆線で区画し、内部を矢羽根状に短沈線、胴部にはＹ字状懸垂文が、それぞれ施されている。200 はⅢ群１類に分類した深鉢である。器形 11 を呈する。201 ～ 203 はⅢ群２類に分類した深鉢の口縁部片である。201 は器形３、203 は器形 11 を呈する。202 は細片のため不明である。文様は、縄文原体押圧文に沈線や隆線が伴う。205 は、内湾する口縁部を有する器形（器形 12）である。文様は、おもに沈線主体で描かれ、口縁端部には隆線による波状文、２重列の刺突（列点文）が施される。また、沈線による文様は口縁部内を区画するように隅丸方形に囲み、これはより古い様相を残しているかも知れないがⅢ群３類に分類した。204・207 はⅢ群３類や４類に分類した土器である。204 は胴下半以下を欠損しているが、口縁部が外反し、胴部がふくらむ器形を呈する（器形６）。204 は内湾する口縁をもち、胴上半が大きく膨らむ形態である（器形 14）。いずれも胴部は地文のみである。206・208 は胴部に隆沈線や沈線で文様が描かれるⅣ群としたが、破片が一部なので判然としないが、縦長の区画になりそうであるためⅤ群に含められるかもしれない。209・210 は円筒上層ｂまたはｃ式と想定した深鉢の口縁部片である。同一個体の可能性があるが希少のため掲載した。器形は口縁部が外反する形態を有し、文様は、縄文原体の押圧のある隆線によって描かれている。Ⅱ群に併行する。211 ～ 213 は口縁部に隆線を貼付して区画するもので、胴部は地文のみである。器形は、211 が器形６，212 が器形５、213 が器形 13 である。いずれもⅢ群４類である。不掲載遺物は 35,144.7 ｇあり、このうち文様が判別するものは無文土器を含めて 8,856.4 ｇある。内訳を見るとⅡ群～Ⅴ群までの破片が混在するが、量的に多いのはⅢ群（69％）であり、そのほかⅡ～Ⅲ群（９％）、Ⅲ～Ⅳ群（８％）、Ⅳ群土器（6.4％）、Ⅴ群土器（1.5％）などがつづく。このほか重複する SI34 と一括で取り上げた土器（605.1 ｇ）があるが、傾向は同じである。この遺構の時期は、Ⅲ群土器の占める割合が多いが、多様な土器の混在があること、遺構の重複関係を優先するともっとも新しいⅣ～Ⅴ群土器（大木 8b ～９式併行）前後の時期に当てはめるしかない。その場合、古相を示す土器は、斜面上方からの流入と解釈する。包含層３の範囲内にある谷底に立地する遺構は、すべて同じような傾向が確認できる。

SI34 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 27・28 図・第４分冊写真図版 326）　総重量 9,690.5 ｇが出土している。このうち７点（図化率６％）を掲載した。214・215 はⅢ群に含まれる深鉢片である。いずれも小破片であるが、器形はキャリパー形（器形 12）を呈すると想定される。215 は波状口縁であろう。文様はいずれも沈線で描かれる。216 は浅鉢の破片である。口縁部に縄文原体押圧文で文様が描かれる。Ⅲ群に含まれる。217 ～ 219 はⅣ群に含まれる。219 は体部が全体的に内湾する形態（器形 14）、217 はラッパ状に開く形態（器形５あるいは器形 16）である。218 は口縁部片であるが、おそらく胴部が球胴であろう（器形８・９）。これらの文様は隆沈線で渦巻文を中心に描かれている。220 は深鉢の底部片と想定される。外底面には網代痕が残る。このほか上述のとおり SI33 と一括で取り上げた土器（605.1 ｇ）がある。不掲載土器は 9,111.7 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 2,811 ｇである。内訳をみると、Ⅱ群土器からⅤ群土器が混在している。割合（重量）が多い方から順に並べると、Ⅲ～Ⅳ群（36.5％）、Ⅳ群（30％）、Ⅲ群（14％）、Ⅱ～Ⅲ群（10％）、Ⅴ群（１％）、Ⅱ群（0.5％）である。傾向としてはⅣ群土器前後の時期が主体を占める。時期は、この傾向と遺構の重複関係からⅣ～Ⅴ群土器（大木 8b ～９式併行）の時期とした。

SI35 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 28 図・第４分冊写真図版 326）　総重量 9,575.9 ｇが出土して

いる。このうち３点（図化率９％）を掲載した。221 は深鉢の破片で、底部を欠損している。器形は、口縁部が外反し、胴部が膨らむ形態である（器形６）。口縁端部は肥厚させ面をつくる。突起が５個、隆線による波状文が貼付される。頸部はミガキが施され無文帯となる。胴部には沈線で胸骨文風の文様が描かれる。Ⅲ群土器と思われるが、頸部が無文帯化することからⅣ群（１類あるいはⅢ群５類）としておく。222 は円筒上層ｃ式土器の深鉢である。口縁上半と底部が欠損している。原体押圧で刻まれた隆帯を口縁部に貼付する。223 は深鉢片で、器形は全体的に内湾する形態である（器形 14)。文様は隆沈線で描かれており、縦方向の区画が読み取れそうなため、Ⅳ群としたがⅤ群かもしれない。これら３点はいずれも円筒上層式や後続する榎林式の影響が読み取れる可能性がある。不掲載土器は 8,745 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 2,256.2 ｇである。内訳は、Ⅱ～Ⅴ群土器まで混在しており、割合（重量）が多い方から順に並べると、Ⅲ群（72.5％)、Ⅴ群（13％)、Ⅱ群（6.5％)、Ⅳ群（2.8％)、Ⅲ～Ⅳ群（0.8％）である。遺構の立地が、遺物を混在する包含層３のなかにあることから、時期を出土土器では決め難い。重複関係を優先すると、Ⅳ～Ⅴ群土器（大木 8b～９式併行）前後の時期が想定される。包含層３に立地するほかの遺構と同様にⅢ群以前の土器が斜面からの流入によるものと判断するならば、これを取り去った状況が本来の出土遺物を表すことになる。その場合、Ⅴ群とⅣ群が主要な割合を占めることになり、重複関係とは矛盾しない。

SI36 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 28・29 図・第４分冊写真図版 327）　総重量 23,751.4 ｇが出土している。このうち 15 点（図化率 30％）を掲載した。224 は大波状を呈する深鉢の口縁部片である（器形１)。文様は沈線や縄文原体押圧文、円形の刺突などで描かれる。原体押圧が多用されることからⅡ群に含めた。225～229 は深鉢の口縁部片である。いずれも縄文原体押圧文を施す土器である。226 は深鉢としたが小破片でもあり、口縁部がやや内湾する小型の鉢類の可能性もある。Ⅱ群からⅢ群に分類した。225・228・229・232 は、口縁部が内湾しながら立ち上がる形態を呈する（器形 11)。227 もこの器形の可能性がある。文様は、隆線に縄文原体押圧が伴うもの（225・228・229)、沈線のみのもの（232）の２者があり、前者はⅢ群２類に分類できる。231 は、ラッパ状に外反する口縁部を有する器形である（器形５)。口縁端部に隆線がめぐり、胴部上半にかけて沈線による平行文とゆるい波状文が描かれる。埋設土器１である。胴上半部が２段の文様帯区画となり、上の区画が地文のみとなることから、Ⅳ群の可能性も残るが、口縁直下に沈線が施されることを重視してⅢ群とする。230 は深鉢の胴部片である。口縁部が不明のため器形は不明であるがおそらく器形６か 14 と想定される。胴部に平行沈線による文様が描かれるのみであり、とりあえずⅢ群とした。埋設土器４である。233～235 は、隆沈線が文様の主体となるⅣ群土器である。233 の器形は全体が内湾する形態（器形 14)、234 は埋設土器３として埋設された深鉢で、いわゆるキャリパー形を呈する器形（器形 12）である。235 は大きく外反する口縁部を有する器形（器形５か６）である。233 は器形的に口縁部から胴部にかけて文様が広がる。234・235 は頸部にミガキが施され無文帯となる。237 は刺突文が施される深鉢の口縁部片である。細片のため難しいが、Ⅴ群～Ⅵ群に分類できようか。236・238 は、地文だけの無文土器で、238 は埋設土器２である。大きさは異なるがいずれも内湾する口縁部をもつ。不掲載土器は 16,623.7 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 3,245.3 ｇである。内訳は、Ⅱ群～Ⅴ群土器が混在しており、割合が多い方から順に並べると、Ⅲ群（74％)、Ⅳ群（12％)、Ⅱ～Ⅲ群（10.5％)、Ⅱ群（１％)、Ⅴ～Ⅵ群（0.5％）などである。時期は、出土割合の多いⅢ群としたいところであるが、床面から出土した土器や埋設土器３がⅣ群であること（埋設土器１・４はⅢ～Ⅳ群）と包含層３の範囲内にあるほかの遺構と同様に重複関係を優先させると、Ⅳ～Ⅴ群土器（大木 8b～９式併行）前後の時期となる。

SI37 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 30～46 図・第４分冊写真図版 328～334）　総重量 166,919.2 ｇが出土している。このうち 54 点（図化率 41％）を掲載した。239～242・248・252・256・263・264 は埋設土器・炉内埋設土器として設置されていた深鉢である。241 は埋設土器１として設置されていた深鉢である。胴部のみ残存していることから、設置方向は不明である。接合箇所がないため６破片に分かれているが、本来は同一個体と考えられる。図示したのはそのうちの１破片である。器形は胴部片のみであるが、体部の内湾状態から器形 14 の可能性がある。文様は、隆沈線によるもので、渦巻文や分岐文が中心である。文様の全体が不明であるが、Ⅳ群に分類できるであろう。239 は埋設土器２として倒位で設置されていた。器形は、全体的に内湾する形状で（器形 14）、底部の中央が欠損している。口縁部は６単位の波状口縁で、文様は隆沈線を使用して描かれる。文様構成は、上位に大渦巻文を４面（単位）に配し、そこから底部にむかって懸垂文が４条、大渦巻文と大渦巻文の間に４本の懸垂文が配置される。この間を中型と小型の渦巻文で連結している。小型の渦巻文には棘状突起が確認される。これらの文様は胴上半部のみで、下半部には上述の懸垂文のみが配置される。これらの特徴からⅣ群に分類されるが、縦長の区画が完成しつつあることからⅤ群に近い可能性もある。240 は埋設土器３として倒位で設置されていた。器形は全体的に内湾する器形 14 である。口縁部には横型のＳ字状突起が４単位あり、頸部にはミガキが施され無文帯となる。頸部と胴部の境には隆線が貼付されている。胴部には下位まで沈線による文様が描かれる。胴部上半部には、３条１単位の平行文が３箇所、その間を１条の沈線で波状文が施される。胴下半部には、２条１対の沈線で渦巻文と弧線文が横方向に施され、さらにそこから２条の直線と１条の波状文が１セットの懸垂文が６箇所に施される。Ⅳ群に分類しておく。242 は埋設土器３として倒位で設置されていた深鉢である。いわゆるキャリパー形を呈する口縁部をもつ（器形 12）。口縁部は山形の波状口縁である（４単位）。文様は口縁部のみで、２条１対の隆線を使用して渦巻文が描かれる。胴部は長いが、地文のみである。これらの特徴からⅢ群３類としたが、他の埋設土器の型式をみるとⅣ群の可能性がある。沈線を伴わないが、扁平に近い隆線が施されるからである。248 は埋設土器５として倒位で設置されていた。器形は、全体が内湾する形態（器形 14）である。口縁部は平縁で、２条の隆帯を貼付し肥厚させているものの、その他の文様はなく複節の地文のみである。Ⅲ群４類であろう。252 は埋設土器６として倒位で設置されていた。器形は、口縁部がいわゆるキャリパー形を呈し、胴部が膨らむ形態である（器形 12）。文様は、平縁の口縁部と胴部に描かれており、頸部は無文帯となる。おもに隆沈線を使用して、渦巻文を中心に描かれる。底部は欠損している。Ⅳ群に分類する。256 は埋設土器７として倒位で設置されていた。器形全体が内湾する器形 14 を呈する。口縁部端部には２条１対の隆線が貼付され、その直下に５条の沈線が、胴上位には３条の沈線で波状文が描かれる。地文は上半部と下半部で異なっており、前者が単軸絡条体、後者が複節（RLR）である。Ⅲ群３類に分類した。261 は、炉内埋設土器１（埋設土器８）として倒位で設置されていた。口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形である（器形６）。波状口縁を呈し、端部には２条１対の隆帯を貼付し、波状部で渦巻文として２条の隆線が結合する。頸部はミガキが施され無文帯となる。頸部と胴部の境には区画として隆沈線が配される。胴部全体を使用して隆沈線による文様が描かれる。渦巻文を中心とした区画が４面に配され、小さな渦巻文を配した分岐文で連結され、Ⅳ群に分類した。262 は炉内埋設土器２（埋設土器９）として倒位で設置されていた。器形は、いわゆるキャリパー形を呈する器形 12 の範疇に含めたが、頸部が長く、口縁端部（突起）が外反する。文様は口縁部のみに集中し、隆線による小さな渦巻文を配した平行線が目立つ。矢印文かあるいは有棘文が付随する。頸部は地文がそのまま残されておりミガキが施されていないが、頸部と胴部の境は２条の隆線で画される。胴部は地文のみである。Ⅳ群に分類した。

ここでは、埋設土器１～９までをこの遺構に伴うものとして捉えるが、別遺構に伴っている可能性も残している。それは数も多いことや土器型式に３型式（大木 8a（新）、8b（古）、8b（新）式）差を確認できることからである（もしかすると、こういう組み合わせが１つの時期を表しているかもしれない）。

次に埋設土器以外の出土遺物をみていく。243～245 は深鉢の口縁部片である。細片のため全容が不明であるが、大波状口縁を呈する器形（器形１）の波状部の破片であろう。文様は、243・244 が細い隆帯で渦巻文が貼付され、また 244 には波状文の間に刺突が入る（交互刺突文）。245 は交互刺突文、半截竹管による沈線文が施される。246 は器形１の平縁のタイプであろう。これらはいずれもⅡ群に位置づけられる。247・249・250 はⅢ群に分類した。器形は、247・250 が器形 11、249 が器形 12 の深鉢である。247 の口縁部には縄文原体押圧文が、250 には沈線文がそれぞれ施される。249 は隆線と沈線による曲線文が描かれ、端部には縄文原体の押圧が施される。251 は小型であるが口縁が外反し、胴部が膨らむ器形（器形６）を呈する。頸部が無文で、胴部には沈線による胸骨文風の文様が描かれる。Ⅴ群の可能性がある。253～255・257～260 は、Ⅳ群やⅤ群に分類した小型深鉢（壺）である。253 は口縁部が欠損しているが球胴状の胴部であり、器形８・９であろう。頸部には把手がつく。文様は、隆沈線を使用し渦巻文を主体とした文様を描く。明確な区画が形成されておらずⅣ群に含めた。254・292 は口縁部が大きく外反し球胴状の胴部を有する器形である（器形８・９）。文様は、隆沈線を主体に渦巻文や懸垂文が描かれる。これらの文様で縦長の区画が形成されつつあるようにみえる。そのためⅤ群とした。257 は器形 17 の小型品である。肩部（頸部）に把手が貼付され、口縁部は無文である。胴部には隆沈線による懸垂文が目立ち、区画的である。258・259 は、胴部片のため全容は不明であるが、器形７あるいは器形 14 の可能性がある。文様は部分的にしかわからないが縦方向の隆沈線が目立つ。260 は底部から口縁部まで外傾する器形（器形２）で、沈線による縦長の渦巻文が配される。いずれもⅣ群からⅤ群に含めた。263 は口縁部が欠損しているが、胴部から底部が残る。器形は球胴状の胴部を有することから器形 17 か 18 と想定される。文様は隆沈線で描かれる。小さな渦巻文を連結点におきながら、開放的な区画を配する。264～284 は、271・272 を除き、器形全体的に内湾する器形 14 あるいは器形 15 を呈する。中小型ものが多く、典型的な器形 14 よりも器高は低めである。口縁部は、突起（264）、平縁（266・267・270・278・281・282・284）、波状口縁（265・268・274～277・279・280）の３タイプがある。文様は、①隆沈線主体でおもに渦巻文を描くもの（264・270・273～277・282・284）、②隆沈線主体で、円文（円形区画）を描くもの（265～267・269・280・281）、③沈線主体で渦巻文を描くもの（268・279）、④縦方向の沈線文（278）の４タイプに分けられる。①のうち渦巻文が主体のものはⅣ群、縦方向の区画が確認できるものをⅤ群とする。②・③の中で渦巻文が円文に変化するものをⅤ群１類や２類とする。④は幅広の逆Ｕ字文にも見え最花式の可能性がある。271 は浅鉢である。272 は外反する口縁部を有する器形である（器形 16）。口縁部は無文、頸部と胴部を刺突列で区切り、胴部には隆沈線による縦位区画が形成されている。Ⅳ群であろう。285～292 は地文のみが施される無文土器である。292 以外は口縁部が内湾する器形である（器形 14）。292 は胴部全体が外傾する器形である（器形２）。290・291 は、口縁部に隆帯が貼り付けられる。この２点はⅢ群４類に分類する。施される地文には、単節（285・286・289・292）、複節（290）、単軸絡条体（287・288・291）があり、いずれも縦回転を主とする。283 は底部に敷物圧痕（網代痕）が残る破片である。不掲載土器は 98,274.1 ｇあり、そのうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 39,123.3 ｇある。内訳を見ると、重量割合が大きいものから順に、Ⅳ群（48.7％）、Ⅲ群（32.3％）、無文（８％）、Ⅲ～Ⅳ群（4.8％）、Ⅳ～Ⅴ群（3.4％）などである。主体

となる土器群は、出土割合の大きいのがⅢ～Ⅴ群で、埋設土器の多くがⅣ群であることと、重複関係がもっとも古いことなどから、Ⅳ群（大木 8b 式併行）としたい。

SI41 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 47～49 図・第４分冊写真図版 334・335）　総重量 31,739.4 ｇが出土している。このうち 21 点（図化率 24%）を掲載した。293～299・301 は、おもに沈線で文様が描かれる深鉢である。器形は、293 が内湾しながら立ち上がる口縁部を有する器形 11、それ以外は外反する口縁部と胴がすぼまる器形５と胴がふくらむ器形６である。沈線の単位は、２条１単位（294）、３条１単位（295～301）、１条のみ（293）の３者があるが、３条１単位のものがほとんどである。これらは 293・297～299・301 を除いてⅢ群に位置づけたが、293 はⅡ群に、293・297～299・301 はⅣ群の可能性もある。300 はいわゆるキャリパー形を呈する口縁部をもつ（器形 12）。口縁部には、隆線で文様を描くが、棘状突起が確認できることからⅣ群に分類した。302～305 はⅣ・Ⅴ群土器に分類した深鉢である。302 の器形は、内湾する口縁部に、ふくらむ胴部を有する器形である（器形 12）。頸部はミガキが施され、無文帯となる。胴部には沈線で小さな渦巻文が描かれる。303・304 は器形全体が内湾する器形 13 を呈する。隆沈線で渦巻文を中心とする文様を描いている。このうち 303 は縦方向の区画が形成されることを優先してⅤ群とする。305 は小型の壺ともいうべき器形である（器形８か 17）。306・308 は口縁部に２条１対の隆帯を貼付するもので、横向きのＳ字状や渦巻状の隆帯が４単位で貼付される。胴部以下は地文のみであり、Ⅲ群３～４類に分類した。307 は内湾する口縁部をもつ（器形 13）。文様は沈線で縦長の楕円形区画を描き、内部は刺突を充填した区画と磨消を伴う縄文区画が交互に並ぶ。Ⅴ群であろう。309～312 は地文だけの無文土器である。309 は小型であるが、その他は大型である。施される地文は、単節の縦回転（309・311）、複節の縦回転（310）、結節付の縦回転（311）である。313 は深鉢の口縁部片である。細片であるが、多段の結節回転文が残ることからⅠ群（縄文時代前期）に分類できるかもしれない。不掲載土器は、24,080.9 ｇあり、そのうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 6,164.4 ｇある。内訳は、重量割合の大きいものから、Ⅴ群（29%）、Ⅲ群（24%）、Ⅳ群（21%）、無文（21%）、Ⅲ群～Ⅳ群（４%）の順である。出土土器の割合が高いものを基準にするとⅣ～Ⅴ群前後となるが、埋設炉を優先すると、Ⅳ群２類（大木 8b 式古段階併行）前後の時期が主体となる。

SI43 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 49 図・第４分冊写真図版 336）　総重量 2,626.8 ｇが出土している。このうち１点のみを掲載した（図化率 17%）。314 は筒形を呈する器形（器形 19）であり、今回の出土例の中では１点のみの器形である。文様は沈線によって描かれる。縦長の楕円形区画に近い文様構成となっており、Ⅴ群に分類した。不掲載土器は 2,174.6 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 492.3 ｇある。割合が高いものから順に、Ⅳ群（45%）、Ⅲ～Ⅳ群（18%）、無文土器（12%）、Ⅲ群（９%）、Ⅴ群（６%）である。主体となる土器は、掲載・不掲載合わせて出土量の多いⅣ～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）となる。

SI44 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 49 図・第４分冊写真図版 336）　総重量 4,430.1 ｇが出土している。このうち、５点（図化率 11%）を掲載した。315 はⅡ群に、316～318 はⅢ群に分類した。315・317 は小型の鉢類であり、文様は沈線によって描かれる。頸部に半円状の連弧文が施される。316 は器形 11 を呈する深鉢の口縁部片である。楕円形状の隆帯に沿うように原体圧痕が押される。318 は底部片で沈線による懸垂文が確認できる。319 は器台と考えられ、円錐形状を呈する。不掲載土器は 3,953.2 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 1,649.6 ｇがある。割合の大きなものから順に並べると、Ⅲ群（52%）、Ⅲ～Ⅳ群（27%）、Ⅱ～Ⅲ群（13%）、Ⅴ群（7.5%）などである。包含層３の範囲内にある遺構であることから、Ⅲ群の割合が多いものの、重複関係から

Ⅳ群～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）が主体となる土器群である。したがって、図示した遺物はいずれも斜面上方からの流入の可能性がある。

SI46 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 50 図・第４分冊写真図版 336）　総重量 2,115.1 ｇが出土している。このうち３点（図化率 30％）を掲載した。320 は、把手がつく壺形を呈する器形（器形 15）でⅣ群に分類した。文様は隆沈線による渦巻文を主体とする。321・322 は無文土器で、321 が外反、322 が内湾する口縁部をもつ。321 の口縁部はナデが施され、無文となる。沈線が１条入り頸部との境界となす。322 は口縁端部に隆線を貼付し肥厚させる。不掲載土器は 1,472.0 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 319.7 ｇある。割合の大きなものから順に並べると、Ⅲ～Ⅳ群（34.5％）、Ⅲ群（34％）、Ⅳ群（21.5％）、Ⅴ群（７％）、Ⅱ群（３％）である。出土土器の割合が高いのはⅢ～Ⅳ群となる。したがって、主体となる土器群は、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。さらに、複数の重複関係の内もっとも新しいことを考慮すると、このうちⅣ群土器（大木 8b 式併行）を主体と考えた方がよいかもしれない。なお、このほか SI46～48 を検出作業中に出土した土器が 329.7 ｇある。

SI48 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 50 図・第４分冊写真図版 336）　総重量 10,014.4 ｇが出土している。このうち３点（図化率９％）を掲載した。323 は土器埋設炉として使用された深鉢片である。器形は、口縁部が外反し、胴部が膨らむ形態（器形７）である。口縁部はナデが施され無文帯となる。頸部に棒状工具による刺突が施され、胴部には沈線によるわらび文が描かれる。これらの特徴からⅤ群以降と考えられる。324 は、埋土中から出土した小型の深鉢で、沈線による曲線状の区画内に縄文が充填されており、Ⅵ群であろう。325 は地文だけの無文土器である。口縁部は外反し、地文は単節（RL）の縦回転である。不掲載土器は、9,144.8 ｇ出土し、そのうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 1,030.7 ｇである。内訳は、割合の大きなものから順に、無文土器（47％）、Ⅳ群（40％）、Ⅲ～Ⅳ群（７％）、Ⅲ群（５％）、Ⅴ群（１％）である。土器埋設炉に使用された土器から、主体となる時期はⅤ群（大木９式併行）といえよう。このほか上述のとおり SI46～48 一括で取り上げた土器がある。

SI49 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 50 図・第４分冊写真図版 336）　総重量 2,881.6 ｇが出土している。このうち１点（図化率５％）を掲載した。326 は、小型の壺である。器形は細身の器形８を呈する無文土器である。不掲載土器は 2,744.7 ｇである。すべてに文様がなく、詳細は不明である。したがって、主体となる土器群は不明となる。

SI50 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 50・51 図・第４分冊写真図版 336・337）　総重量 9,865.2 ｇが出土している。このうち 12 点（図化率 14％）を掲載した。327～329 はⅢ群に分類した深鉢の口縁部片である。327・328 の器形は、口縁部が内湾しながら立ち上がる形態（器形 11）、329 はいわゆるキャリパー形を呈する（器形 12）。文様は、沈線主体（328）と隆線主体のもの（327・329）がある。また、328 には縄文原体押圧文が施されることからⅡ群に含められる可能性がある。331 は口縁部が直口あるいはやや外傾する形態で（器形 16）、口縁部は無文、頸部には刺突、胴部には沈線による文様（渦巻ヵ）が施され、Ⅳ群であろう。330・332～334 は、器形全体が内湾する形態である（器形 14）。330・332 は隆沈線主体で渦巻文を中心とする文様が描かれる。330・332 はⅤ群に分類した。333・334 は、ほぼ地文だけの無文土器である。333 は、口縁部から胴部にかけ前面に地文が施される。334 の口縁部は無文帯で、頸部は沈線で胴部と画される。縦位の沈線文からみて文様が施されている可能性がある。いずれも地文は単軸絡条体である。335～338 は小型の土器である。338 以外は深鉢というより壺に近い形態である（器形８・９）。335・336 は隆沈線で、337 は沈線で文様が描かれ楕

円形の区画があるが、磨消技法はない。いずれもⅤ群に分類した。338は器形16を呈し、地文のみである。不掲載土器は8,474.3ｇがあり、そのうち文様が判別できる破片は無文土器も含めて2,846.4ｇある。内訳は、割合の多い方から順に、Ⅲ群（56％）、Ⅳ群（19％）、Ⅴ群（16％）、Ⅲ～Ⅳ群（４％）などである。遺構の時期は、Ⅲ群の出土量が多いが、包含層３の範囲内に位置することと重複関係を優先すると、Ⅳ群～Ⅴ群土器（大木8b～９式併行）の時期となる。

SI051竪穴建物跡出土土器（第３分冊第51～53図・第４分冊写真図版337・338）　総重量15,981.2ｇが出土している。このうち８点（図化率51％）を掲載した。339は、球胴を呈する胴部、キャリパー形の口縁部、口縁端部が外反する形態である（器形13）。文様は口縁部にミガキが施された後に、隆線による渦巻文が貼付される。胴部は隆沈線による楕円形区画を主体とする文様が描かれる。Ⅴ群２類土器の特徴であろう。340～342はⅤ群に分類した深鉢である。341・342は小型品である。340の器形は内湾する形態（器形15）、341・342は外反する形態（器形16）を呈する。文様はいずれも、沈線で縦長の楕円形区画を描くもので、区画内は磨消縄文が施される。いずれもⅤ群であろう。343は小型のコップ形の鉢で、地文のみの無文土器である。344～346は器形全体が内湾する形態を呈する（器形14）。いずれも口縁部に隆線が貼付される。344は、胴部に沈線による文様が施され、楕円形の区画が描かれる。磨消技法は観察できないが、縦位区画が形成されることからⅤ群１類であろう。345・346は胴部には地文のみで、Ⅲ群４類群に相当しよう。不掲載土器は7,856.7ｇあり、このうち文様が判別できる土器は無文土器も含めて2,913ｇある。内訳は、割合が多い方から順に、Ⅲ群（42％）、Ⅳ群（29％）、Ⅴ群（７％）、Ⅲ～Ⅳ群（５％）などである。Ⅲ群の土器が多いが、包含層３の範囲内に位置することや埋設土器の分類、重複関係（この区域ではもっとも新しい）を考慮すると、Ⅴ群（大木９式併行）がこの遺構本来の土器群となろう。

SI54竪穴建物跡出土土器（第３分冊第53～64図・第４分冊写真図版338～343）　総重量90,020.8ｇが出土している。このうち52点（図化率42％）を掲載した。347～349・351～353・378は、胴部から底部にかけてラッパ状に開く器形５を呈する。350も類似するが、胴部が若干膨らむことから器形６とし、354も同様の器形である。器形５の深鉢では、口縁部に隆線が貼付されるもの（347～349）と隆線が無いもの（351～353）の２者がある。文様は、沈線で平行文や波状文（縦方向）が描かれるものがほとんどであり、類似する意匠を採用する。355は細い隆線で波状文が描かれている。これらのなかで口縁部が無文となる350～352は、Ⅳ群１類に分類でき、他よりも若干新しいと判断した。それ以外はⅢ群３類であろう。354は、胴部文様からⅢ群３類としたが、口縁部区画Ⅰ－③類であることから、Ⅳ群の可能性がある。353は、胴部に渦巻文が展開すると復元したためⅣ群３類としたが、354と同様にⅣ群１類かもしれない。掲載位置が異なるが378も器形５を呈する。文様は前面に隆沈線で描く。大渦巻文を中心にして、小渦巻文を周囲に配し、懸垂文や短い隆沈線でそれらを連結する。Ⅳ群（３類）に分類できる。355～362は、いずれもキャリパー形の口縁部を呈する器形12である。文様は、隆線によって施文されるもの（355・361）と隆沈線によっておもに口縁部中心に渦巻文が描かれるもの（356～360、362）に分けられる。前者はⅢ群に、後者はⅣ群に分類する。後者のうち胴部に文様が描かれる360はⅣ群でも新しい段階の３類に、それ以外は古い段階の２類に分類する。頸部はミガキが施され、無文帯となるものが多い。また360のみは、隆沈線で描かれた区画内を縦位の短沈線で充填する。357は土器埋設炉に使用された土器の一つである。363・364・366～373・375は、器形全体が内湾する器形13の深鉢である。365のみは器形16のやや外反する口縁部である。口縁部には、隆線が貼付され口縁部文様となるが、369にはそれがなく別器形の可能性がある。365は隆線に刺突が施されている。類例があまりなくとりあえずⅣ群に分類する。異

系統の可能性がある。頸部に無文帯があるのは 366 のみである。胴部の文様は、沈線のもの（363・364）、隆沈線で大小の渦巻文を描くもの（366・367・371・372・375）、無文のもの（368・373）がある。このうち沈線のものは、弧線文やＹ字状懸垂文が描かれており、平行文と波状文の組み合わせが多い傾向があるなかで様相を異にする。Ⅳ群２類（大木 8b 式古段階）としたが判断が難しい。あるいは榎林式かその前段階型式の可能性がある。胴部に隆沈線で文様を描くものは、Ⅳ群（３類）に分類した。地文だけのものは、Ⅲ群４類に分類した。369 はⅣ群としたが、文様が他とは異なっておりⅡ群の可能性もある。370 も小破片であるが、隆線文がわずかに観察できることからⅢ群に相当しよう。374・376・377・379・380・381 は、深鉢というより小型の壺形土器である。胴部が球胴を呈し、口縁部が大きく外反する器形である。口縁部に最大径のある器形８（374）、胴部に最大径のある器形９（376～379）がある。口縁部は、いずれもミガキが施され無文帯となる。頸部と胴部境は隆線で画され、胴部は隆沈線のよる渦巻文を中心とした文様が描かれる。Ⅳ群に分類する。380・381 は口縁部を欠損しているが、同様の器形８・９に分類される。文様は、沈線が主体であるがⅣ群に含める。382～384 は深鉢の胴部片である。口縁部がわずかに残る 383 は器形 11 の可能性があるが、それ以外の器形は不明である。382 は、胴部に隆線を施文する数少ない深鉢である。Ⅲ群であろう。なお、382 は埋設土器１として設置されていたものである。383 は、Ⅳ群でも古い段階（２類）の深鉢である。なお、383 も土器埋設炉として設置された深鉢である。384 は、口縁部と底部付近が欠損しているが、土器埋設炉として設置されていたためと考えられる。385 は器形７を呈する深鉢である。口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形である。文様は、沈線によって曲線状の区画を描き、区画内に充填縄文を施す。Ⅵ群に分類した。386～395・397・398 は、地文以外の文様がない無文土器である。形態は、口縁部が内湾するもの（387・389・393・395）、外反するもの（390～392・394）に分けられる。397・398 はミニチュア土器に属するであろう。389 は小型の鉢である。地文は、短節の縦回転が多いが、複節（391）、無節（393）が少数含まれる。394 は、口縁端部のみ LR 横回転でそれ以外は LR の縦回転で施文する。392 にはナデが、389 にはミガキが、全面にわたって施される。386・388 は深鉢の底部片である。無文土器ではないのかもしれない。両者とも底面には敷物圧痕（網代痕）があり、386 の方は中央に孔が穿たれている。396 は器台の破片である。不掲載土器は 52,470.9 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは無文土器も含めて 18,466.7 ｇある。内訳は割合の大きいものから順に、Ⅲ群（42.3％）、Ⅳ群（39.1％）、Ⅲ～Ⅳ群（11.3％）、無文土器（６％）などである。Ⅲ群からⅤ群まである程度まとまって出土しているが、主体となる土器群は、出土量が多いことと埋設炉に設置された土器からⅣ群（大木 8b 式併行）としたいが、埋設土器１である 382 をⅢ群と判断したため、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a 式新段階～8b 式古段階併行）と幅をもたせる。これらの土器のほか、隣接する SI59 と一括で取り上げた土器（456.6 ｇ）がある。

SI55 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 64・65 図・第４分冊写真図版 343）　総重量 3,812.7 ｇが出土している。このうち９点を掲載した（図化率 37％）。399・404 はゆるやかに短く外反する口縁部を有する深鉢で、器形３を呈する。399 は口縁端部を肥厚させ、細い隆線を波状に貼付する。頸部以下には地文以外施文しない。Ⅲ群でも古い方であろう。404 も口縁端部を薄く肥厚させる。文様は、縄文原体押圧文のみで、Ⅱ群に分類した。400～403 はいわゆるキャリパー形を呈する口縁部である（器形 12 あるいは器形 11）。402 は頸部片であるが、この器形の可能性がある。文様は、沈線文が主体であるが、401 のように隆線に沈線が伴うものもある。全容が不明であるが、沈線による区画内（沈線文Ａ）に沈線文を充填しているように見える。そのためⅢ群１類とした。また、403 は小破片であり文様の全容がしれないが同様の可能性がある。405 は、深鉢の頸部付近の破片であるが、器形３の可

能性がある。沈線による文様が描かれ、Ⅲ群（１類）に分類した。406 は小破片であるが、404 と同様の器形・分類であろう。407 は浅鉢であるが、口縁部を欠損している。全面にミガキが施されており、無文である。不掲載土器は 2,405.3 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは 534.2 ｇである。内訳は、Ⅱ～Ⅲ群（74%）、Ⅲ群（26%）である。新しい段階の土器群が出土しないことから、主体となる土器群はⅡ～Ⅲ群の古い方（大木 7b～8a 式古段階併行）に限定できそうである。

SI56 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 65・66 図・第４分冊写真図版 343・344）　総重量 9,054.3 ｇが出土している。このうち 17 点を掲載した（図化率 34%）。408～413 は、ⅡやⅢ群の古い方に分類した深鉢の口縁部片である。413 は外反する口縁部を有し、端部が肥厚する形状である（器形４）。肥厚させた端部には刻み目が施される。Ⅲ群の古い方（１・２類）としたが、Ⅱ群に遡るかもしれない。411 は口縁部がわずかに外反する器形（器形３）である。410・408 は外傾する口縁部を有する器形１を呈すると判断したが、小破片のため定かではない 411 の文様は縄文原体押圧で平行文が施され、410 は刻み目を伴う隆線で文様が描かれる。両者は、Ⅱ群に分類した。408 は半截竹管で文様を描くもので、細片であるがⅡ群に分類した。409・412 は、器形３を呈すると思われる。外反した口縁端部を肥厚させて面を出し、上下に隆線を貼付し区画をつくる。区画内は、縄文原体圧痕文（412）やヘラ状工具による刺突（409）が施される。両者は同じ器形を呈することから、Ⅲ群の古い方（１・２類）に分類した。414～422 はⅢ群や一部Ⅳ群に分類した深鉢片である。415 は、器形 14 を呈する深鉢で、口縁部に２条１対の隆帯を貼付し、間に渦巻文を立体的に描く。胴部は地文のみである。Ⅲ群４類に分類した。414・420・421 は深鉢の胴部片である。器形は不明だが器形５～６のいずれかであろう。文様は、沈線が主体に描かれており、波状文や平行文が主体である。Ⅲ群３類としたが、榎林式の可能性がある。421 は渦巻風の文様かもしれないためⅣ群（２類）に分類した。417・418 は、キャリパー形の口縁部であることから器形 12、416・419 は器形６、422 は器形３であろう。416～419 の文様は隆線が主体に描かれる。416 は沈線による文様も認められるが頸部区画を有するように見えることからⅣ群かもしれない。422 の文様は、沈線主体で描かれることから、Ⅲ群３類に分類したが、器形的に少し古いかもしれない。424 は、キャリパー形の口縁部であることから器形 12 を呈するが、隆線に明瞭な沈線をともなわないためⅢ群に分類したが、Ⅳ群かもしれない。423 は地文だけが施される深鉢で口縁がやや外反する。不掲載土器は、5,963.3 ｇがあり、そのうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 1,035.5 ｇがある。内訳は、Ⅲ群土器が 90%を占め、そのほかはⅡ群（６%）、無文（３%）、Ⅳ群（１%）である。この遺構の主体はⅢ群土器（大木 8a 式併行）となる（一部はⅣ群（大木 8b 式）に重なるかもしれない）が、重複関係が類似する SI55 と同様であり、Ⅲ群でも古い方やⅡ群が一定量含まれることに注意したい。

SI58 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 66 図・第４分冊写真図版 344）　総重量 121.4 ｇのみが出土した。このうち１点（図化率 48%）を掲載した。425 は深鉢の口縁部片である。器形は、内湾する器形（器形 14）を呈する。細片のため文様の詳細は不明であるが、Ⅲ群４類に分類する。不掲載遺物は 63.2 ｇであり、Ⅲ～Ⅳ群の破片がある。出土土器が少ないが、出土している割合からみると主体はⅢ～Ⅳ群となろう。このうち重複関係を加えると、より新しいⅣ群（大木 8b 式併行）と限定しておきたい。

SI59 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 66 図・第４分冊写真図版 344）　総重量 3,192.8 ｇが出土している。このうち３点（図化率 43%）を掲載した。426 は大型の深鉢で、肩部が張る器形 14 を呈する。口縁部はミガキが施され、無文となる。胴部は隆帯で頸部と画され、隆沈線で渦巻文を中心とした文様が描かれることからⅣ群である。427・428 も深鉢の口縁部片である。器形は細片のため不確かで

あり不明とする。427は、口縁端部に隆帯を貼付し、頸部（胴部）に沈線で文様が描かく。胴部に沈線文が施されることからⅢ群に分類した。428は内湾する口縁部を有し、LRの縦回転の地文のみが施されている。不掲載土器は1,808.9ｇあるが、文様が判別できるものは無文土器を含めて290.1ｇしかない。一応内訳をみると、Ⅱ～Ⅲ群（42%）、Ⅲ群（35%）、Ⅴ群（16%）、Ⅳ群（３%）などである。出土遺物は各時期が確認でき限定できにくいが、相対的に古い土器が出土している。重複関係では、下位にあるSI55がⅡ～Ⅲ群、上位にあるSI32がⅣ群である。これらを総合すると、主体とする土器群は、その間をとってⅢ～Ⅳ群（大木8a～8b式併行）とする。これらの土器のほか、隣接するSI54と一括で取り上げた土器（456.6ｇ）がある。

SI60・27竪穴建物跡出土土器（第３分冊第66図・第４分冊写真図版645）　この遺構は重複する２棟を一括して取り上げたため、まとめて記載する。SI27単独で遺物の取り上げを行ったものについてはSI27の項に記載している。SI60として単独で取り上げた土器はない。総重量は355.2ｇのみ出土している（２棟一括分）。このうち２点（図化率20%）を掲載した。429は小～中形の深鉢口縁部片である。細片であるが、口縁部はミガキが施されたのち円形の刺突が施される。あまり明確ではないがⅣ群に分類した。430はミニチュアの土器である。全体がナデで調整された猪口形を呈する。不掲載土器は284.6ｇあり、文様が判別できるものはわずか11.5ｇである。すべてⅢ群である。遺物量が少ないが、重複するSI27がⅣ群土器しか出土しないためこれよりも古くなることから、Ⅲ～Ⅳ群土器（大木8a～8b式併行）が主体であるとしておく。

SI61竪穴建物跡出土土器（第３分冊第67図・第４分冊写真図版345）　総重量890.8ｇが出土している。このうち２点（図化率76%）を掲載した。432は深鉢で、口縁部から底部までそろう。器形は、いわゆるキャリパー形を呈する口縁部に、膨らむ胴部をもつ（器形12）。文様は口縁部のみに施され、隆線による曲線文が主体である。胴部は地文のみである。431は浅鉢である、文様は隆帯と縄文原体押圧文が主体である。いずれもⅢ群に分類した。不掲載土器は210.3ｇあり、すべてⅢ群である。出土遺物の主体はⅢ群土器（大木8a式併行）である。

SI62竪穴建物跡出土土器（第３分冊第67図・第４分冊写真図版345）　総重量4,898.0ｇが出土している。このうち３点（図化率62%）を掲載した。433・434は深鉢である。433は、底部から外側に開く形状を呈することから器形５である。口縁部は波状で、端部にミガキが施され無文となる。直下には波状部に合わせた沈線文が描かれる。胴部は地文のみである。434は口縁部を欠損しており文様の有無は不明である。器形はおそらく433と同様であろう。435は浅鉢で、内湾する口縁部を有する。文様は隆線が主体である。文様の特徴から３点はⅢ群に分類した。不掲載土器は1,883.5ｇあり、文様が判別できるものはわずか33.5ｇである。すべてⅢ群である。図示した土器はいずれも床面からの出土であることや出土土器のほとんどがⅢ群であることから、主体となる土器はⅢ群（大木8a式併行）となる。

SI64竪穴建物跡出土土器（第３分冊第67図・第４分冊写真図版345）　総重量1,540.0ｇが出土した。このうち３点（図化率12%）を掲載した。436～438は深鉢の口縁部片である。436は口縁部に隆線を貼付し肥厚させているが（Ⅲ群４類）、その他の文様はない。437・438はいずれも地文だけの無文土器である。不掲載土器は1,354.5ｇがある。このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて169.1ｇのみである。Ⅳ群（28%）、Ⅴ群（25%）、Ⅲ群（21%）などが含まれており、年代幅が広い。主体となる土器群は、出土割合がやや高いⅣ～Ⅴ群（大木8b～９式併行）としておく。

SI65竪穴建物跡出土土器（第３分冊第67・68図・第４分冊写真図版345・346）　総重量10,804.5ｇが出土している。このうち６点（図化率61%）を掲載した。439～441は器形14を呈する深鉢である。

文様は、いずれも隆沈線が主体である。439 は胴部片のため器形は不明だが、隆沈線が主体の文様が施されている。いずれもⅣ群に分類した。442 は器形 14 と同じであるが胴部は地文のみのためⅢ群４類である。443・444 は、深鉢であるが、地文だけの無文土器である。444 は土器埋設炉としたもので、破片は多いがもろくすべて接合できなかった。443 は、原位置を保っていると判断した深鉢である。２点の石製品（2493・2494）がその内部から出土したものである。不掲載土器は 4,196.2 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 901.9 ｇがある。内訳は割合の大きなものから順に、Ⅳ群（42％）、Ⅲ群（33％）、無文（14％）、Ⅴ群（９％）などである。主体となる土器は、出土土器（掲載・不掲載合わせて）のうち割合の大きいⅣ群（大木 8b 式併行）としたい。

SI66 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 68・69 図・第４分冊写真図版 346・347）　総重量 33,885.1 ｇが出土している。このうち 19 点（図化率９％）を掲載した。445・446 は深鉢の頸部・口縁部片である。器形はいずれも小破片であるが、器形 12 の可能性がある。文様は沈線主体の文様を描き、Ⅲ群に分類した。454 は浅鉢片とした。文様は３本１組の沈線で山形文を描くものでⅡ群としたが、Ⅲ群の可能性もある。447・448・450 ～ 453 は深鉢の胴部片で、器形は不明である。447 は隆沈線で渦巻文が描かれることからⅣ群に分類した。448・451 ～ 453 は沈線による区画文が施される深鉢である。いずれも胴部片である。450 は沈線が確認できないが同様の文様構成と想定される。区画内は、磨消縄文（451・452）、充填縄文（453）、刺突（448・450・452）が施されており、Ⅴ群やⅥ群の特徴である。449・455 ～ 458・462・463 は、地文以外の文様が施されない無文土器である。457 は、器形７を呈する。いずれも口縁端部はナデが施され、以下底部まで単節の縦回転で施文される。449・455・456・458・462 は中小形の深鉢である。口縁部が外反するもの（449・455・456）、内湾するもの（458）がある。462 は底部のみで敷物圧痕があるが、中央が凹むことから圧着度が少なく種類が読み取れない。地文の施文方向は縦方向がほとんどであるが、458 のみは横方向に施文される。463 は全体にナデ調整が施される小型土器である。この器形が縄文時代に存在する可能性もあるが、上位に重複する（古代以降の）遺構に伴う土師器の可能性もある。459 ～ 461 も無文土器と想定される深鉢の底部片である。460・461 の外底面には木葉痕、459 の外底面にはゴザ目組の痕跡が残る。不掲載土器は、30,736.1 ｇが出土しており、そのうち文様が判別できるものは無文土器をも含めて、2,838.4 ｇある。内訳は割合の大きな順に並べると、無文土器（43％）、Ⅴ群（32％）、Ⅲ群～Ⅳ群（10％）、Ⅳ～Ⅴ群（９％）、Ⅲ群（４％）、Ⅳ群（２％）である。主体となる土器群は、出土割合の大きなⅤ群（大木９式併行）となろう。

SI70A・B・C 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 70 図・第４分冊写真図版 347）　３棟が建て替えられたと考えている遺構であるが、出土遺物は一括して取り上げている。そのため、まとめて記載する。総重量は 12,829.0 ｇがある。このうち 12 点（図化率 35％）を掲載した。471 はⅢ群に分類した深鉢片である。沈線による文様が描かれている。器形は不明である。466 はⅣ群に分類した深鉢片である。器形はキャリパー形の口縁部であることから器形 12 を呈するであろう。文様は隆沈線で渦巻文が描かれており、棘状突起が確認できる。468・469 は、Ⅴ群に分類した深鉢片である。468・469 は口縁部片で、沈線による楕円形区画が描かれ、内部は磨消縄文（468）や刺突（469）が施される。464・465・467 は、Ⅵ群に分類したもので、曲線状の区画が沈線で描かれる。区画内は充填縄文が施される。467 は、口縁部から胴部にかけての破片で、沈線で逆Ｕ字文や縦長の楕円形区画が描かれる。区画内は刺突や充填縄文が施される。470・475 は深鉢胴部片である。とくに口縁部が欠損するため器形や文様の有無は不明である。475 は結節縄文が、470 は櫛歯状の痕跡が残る。472 ～ 474 は、地文だけの無文土器で、いずれも口縁部が外反し、端部はナデが施され、頸部以下は LR の単節縄文が縦回転で

施文される。不掲載土器は 8,305.0 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 1532.2 ｇである。内訳は、Ⅴ群（63%）、無文（22%）、Ⅲ～Ⅳ群（７%）、Ⅳ群（７%）、Ⅱ～Ⅲ群（１%）である。主体となる土器群は、出土割合の大きいⅤ群土器（大木９式併行）であろう。

SI71 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 71 図・第４分冊写真図版 347）　総重量 409.1 ｇのみ出土している。このうち１点（図化率 63%）を掲載した。476 は底部が欠損する深鉢である。器形は、全体が内湾する器形 14 を呈する。文様は沈線で幅広な楕円形区画を描くもので、Ⅴ群に分類した。不掲載土器は 52.8 ｇ出土しており、そのうち文様が判別できるものは 36.8 ｇである。すべてⅣ群土器である。主体となる土器群は、出土量が少ないこともあり明確にしがたいため、Ⅳ群～Ⅴ群土器（大木 8b～９式併行）と幅をもたせておく。

SI72 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 71 図・第４分冊写真図版 348）　総重量 1,843.2 ｇが出土している。このうち３点（図化率 54%）を掲載した。477・478 はⅣ群に分類した深鉢である。477 は口縁部片で、頸部に３条の沈線が斜め方向に施されている。細片のため器形は不明である。478 は胴部片で、隆沈線による文様が描かれる。479 は、器形 14 を呈する深鉢で、口縁部に隆帯が貼付され肥厚する。胴部以下は地文のみで LR の単節縄文が縦回転で施文される。Ⅲ群４類に分類される。不掲載土器は 848.2 ｇがあり、このうち文様が判別できるものは 185.3 ｇがある。内訳はⅣ群（70%）、Ⅲ～Ⅳ群（20%）、Ⅲ群（10%）である。主体となる土器群は、出土割合の大きなⅣ群（大木 8b 式併行）となろう。

SI76 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 71 図・第４分冊写真図版 348）　総重量 507.7 ｇが出土している。このうち１点（図化率 77%）を掲載した。480 は深鉢の底部片である。口縁部が不明のため器形や分類は不明である。不掲載土器は 118.2 ｇがあり、そのうち文様が判別できる破片は 80.5 ｇあり、すべてⅤ群土器である。出土遺物が少なく決定的でないが、主体となる土器群はⅤ群（大木９式併行）とする。

SI81・82 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 71 図・第４分冊写真図版 348）　重複する２棟を同時に調査したため遺物は一括して取り上げており、一部はそれぞれの遺構に限定した。２棟分あわせて総重量 832.6 ｇが出土している。このうち２点（図化率 16%）を掲載した。481・482 は深鉢の口縁部片である。482 は小破片のため定かではないが器形１の平縁タイプを呈する可能性がある。口縁端部を折り返し肥厚させる。文様は原体押圧した細い隆線を配する。そのほか地文の上に縄文原体押圧文が施される。地文は横回転での施文である。Ⅱ群に分類した。481 は地文だけの無文土器で、口縁部が外反する器形である。地文は横回転で施文される。不掲載土器は、SI81・82 一括分が 272.7 ｇ、SI81 単独分が 123 ｇ、SI82 単独分が 300 ｇである。文様が判別できる破片は、合わせて 84.7 ｇであり、Ⅲ群（62%）、Ⅳ～Ⅴ群（22.4%）、Ⅴ群（12%）の破片がある。遺物量が少なく主体となる土器群の認定は難しい。現状の出土遺物だけからみると、Ⅲ群前後の時期とⅣ～Ⅴ群前後の２時期が読み取れる。重複を考えると、古い SI81 がⅢ群（大木 8a 式併行）前後の時期に、新しい SI82 がⅣ～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）の時期にとりあえずしておきたい。

SI83 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 71 図・第４分冊写真図版 348）　総重量 997.6 ｇが出土している。このうち３点（図化率 73%）を掲載した。483 は深鉢の胴部片である。沈線で曲線状の区画を描くもので、区画内に充填縄文を施す（Ⅵ群）。484 ・485 は無文土器の深鉢である。いずれも口縁端部にナデが施され、それ以下を縦回転の地文で施文する。総重量のうち不掲載土器は 265.3 ｇがあるが、文様が判別できるのはⅢ群の 3.4 ｇのみである。遺物量が少なく主体となる土器群の認定は難しいため、判別した土器からⅢ群～Ⅵ群の幅でみておく。さらに、下位に重複する SI89 がⅤ～Ⅵ群

の可能性があるため、本遺構の主体となる土器群も限定してⅤ～Ⅵ群（大木９～10式併行）のなかで捉えておく。

SI85竪穴建物跡出土土器（第３分冊第71図・第４分冊写真図版348）　総重量248.0ｇが出土している。このうち１点（図化率14%）のみを掲載した。486 は深鉢の口縁部片で、地文だけの無文土器である。口縁端部はナデが施され、それ以下は縦方向の複節の地文が施文される。不掲載土器は214.5ｇあり、すべて無文土器か、無文の胴部片である。遺物量が少なく、主体となる土器群は不明である。重複関係からみると、Ⅴ～Ⅵ群（大木９～10式併行）以前か近接した時期とすることができる。

SI86竪穴建物跡出土土器（第３分冊第72図・第４分冊写真図版348）　総重量4,209.0ｇが出土している。このうち１点（図化率93%）を掲載した。487は、器形７を呈する。いずれも口縁端部はナデが施され、以下底部まで単節の縦回転で施文される。底部には木葉痕が残る。不掲載土器は296.1ｇあり、すべて無文土器か地文だけの胴部片である。主体となる土器群は、無文土器の割合が大きく認定しがたいが、487の器形がⅣ群以降にしか確認できないことからⅣ群～Ⅵ群の間とすることができる。さらに重複する（上位にある）SI66がⅤ群であることからⅣ～Ⅴ群（大木8b～９式併行）とすることができる。487が設置されていた土器埋設炉の直上にSI66の焼土がのることから両者の時期差はあまりないことが窺える。

SI89竪穴建物跡出土土器（第３分冊第72図・第４分冊写真図版349）　総重量737.0ｇが出土している。このうち１点（図化率69%）を掲載した。488は、深鉢で底部付近が欠損する。器形は、外反する口縁部を有し、胴部が余り膨らまない形態である（器形７）。文様は胴部にあり、沈線、微隆線で曲線状の区画を描く。内部は充填縄文が施される（Ⅵ群）。不掲載土器は229.7ｇであり、文様が判別できるものは無文土器を含めて49.7ｇしかない。無文土器とⅤ群のみである。よって、主体となる土器群は、Ⅴ～Ⅵ群（大木９～10式併行）とした。

SI90竪穴建物跡出土土器（第３分冊第72・73図・第４分冊写真図版349）　総重量3,924.8ｇが出土している。このうち７点（図化率20%）を掲載した。489・490はⅤやⅥ群に分類した深鉢の破片である。490は胴部片、489は口縁部片である。文様はいずれも沈線で曲線状の区画を描くもので、内部は磨消縄文（489）、充填縄文（490）である。491～494は地文だけの無文土器である。いずれも深鉢の口縁部片である。口縁部にはナデが施され無文となる。それ以下は地文のみが施されている。いずれも縦方向に施文される。495はⅢ群に分類した深鉢の同下半部の破片である。筒状の胴部であり、沈線で懸垂文が描かれる。文様が観察できるのは一部のみのため別分類の可能性もある。不掲載土器は3,141.7ｇあり、そのうち文様が判別できるものは無文土器も含めて218ｇである。少量だが内訳を見ると、無文（62%）、Ⅴ群（20%）、Ⅲ群（11%）、Ⅳ群（７%）である。無文土器の割合が大きいが、文様が判別できるものの主体を占めるのはⅤ～Ⅵ群となること、重複関係がもっとも新しいことから、本遺構の主体となる土器群はⅤ～Ⅵ群（大木９～10式併行）となる。

SI91竪穴建物跡出土土器（第３分冊第73・74図・第４分冊写真図版349）　総重量4,429.5ｇが出土している。このうち５点（図化率45%）を掲載した。496はⅣ群に分類した深鉢の胴部片である。器形は口縁部が内湾する器形14か外反する器形６の可能性がある。文様は隆沈線が主体であり、大きな渦巻文が中心に描かれる。497・498は口縁部が内湾、直口気味になる深鉢の口縁部片である。器形14を呈すると想定される。口縁部には隆帯を貼付する。小破片であるがⅢ群４類であろう。499は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片である。器形はいわゆるキャリパー形を呈する口縁部であることから器形12となる。文様は隆線が主体であるが、隆線が幅広であることからⅣ群とした。500

は壺形というべき小型の土器である。口縁部が外反し、胴部が球胴状に膨らむことから器形８を呈する。文様は沈線が主体で渦巻文が描かれており、Ⅳ群に分類する。不掲載土器は 2,440.5 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器も含めて 979 ｇある。内訳は割合の大きなものから順に、Ⅳ群（71％）、Ⅲ群（26％）、無文（３％）である。主体となる土器は、割合の大きなⅣ群土器（大木 8b 式併行）となる。

SI92 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 74 図・第４分冊写真図版 349）　総重量 2,884.6 ｇが出土している。このうち３点（図化率７％）を掲載した。501 は深鉢の胴部片である。器形は不明である。文様は隆沈線が主体であり、小渦巻文とそれに続く懸垂文がみえることからⅣ群に分類した。502・503 は器台とした脚部片である。両者に接合箇所はないが、胎土や焼成具合から同一個体の可能性がある。不掲載土器は 2,671.7 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて、771.7 ｇある。内訳は、割合の大きなものから順に、Ⅳ群（56％）、Ⅲ群（39％）、無文（４％）、Ⅲ～Ⅳ群（１％）である。主体となる土器群は割合の大きなⅣ群（大木 8b 式併行）であろう。

SI93 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 74～80 図・第４分冊写真図版 349～352）　総重量 30,766.2 ｇが出土している。このうち 37 点（図化率 48％）を掲載した。504～515 は、いわゆるキャリパー形を呈する口縁部を有する深鉢片である。文様は、隆線文主体のもの（505・506・510・512・513・515）、隆沈線文主体のもの（507～509・511・514）、沈線文主体のもの（504）がある。また、これらのうち頸部が無文帯となるものには、504・510・512・514 の４点がある。隆線文が主体のものはⅢ群に分類したが、頸部が無文帯になる 504・510・512 があるためⅣ群の可能性がある。隆沈線文が主体のものは渦巻文の一端が棘状に尖るものが多くⅣ群に分類した。516～518 は、器形 12 につく橋状把手と想定されるが、別器形に取り付く可能性もある。Ⅲ～Ⅳ群であろう。519・520 は、器形全体が内湾する器形 14 を呈する深鉢である。文様は沈線文が主体となる。519 は３条１単位の波状文や平行文、直線と波状を組み合わせて懸垂文が施される。520 も３条１単位の沈線で波状文（弧線文）と平行文、懸垂文は２条の波状文が施される。懸垂文は波状口縁に対応し４単位である。この 520 は埋設土器１として倒位で設定されており、底部には孔が穿たれている。いずれもⅢ群に分類したが、これらの文様から円筒上層ｅ式（あるいはそれ以降）の可能性もある。521～523・530・531 は、口縁部が大きく開く器形５を呈する深鉢片である。文様は、ほとんどの破片で沈線文が主体である。これらの多くはⅣ群に分類した。524・525 は、壺形を呈する小型品である。破片であるが、球胴形状であることから器形８・９を呈する。525 が隆線による渦巻文、524 が沈線による渦巻文が主体となる文様である。いずれもⅣ群に分類した。526～529・532・533 は、口縁が外反し、胴部が膨らむ器形６を呈する深鉢片である。文様は、隆線に縄文原体押圧文が伴うもの（528）、沈線文が主体のもの（526・529）、隆線が主体のもの（533）、不明のもの（527・532）が確認できる。いずれも小破片のため、破片以外では複数の種類の文様が施文されている可能性がある。この文様の特徴からほとんどがⅢ群に分類した。534～538 は、地文以外に文様をもたない無文土器である。口縁部が外反するもの（534～536）と内湾（直口）するもの（537・538）の２者がある。537 と 538 は口縁部に隆帯が貼付される。535 は歪みが大きく、胴部が扁平に近いくらいつぶれている。539・540 は浅鉢である。540 は口縁部に隆帯の貼付による装飾があるが、539 は地文のみであり、いずれも装飾性に乏しい。不掲載土器は 15,855.7 ｇあり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 4,320.1 ｇある。内訳はⅢ群（81％）、Ⅳ群（17％）などで、この２者でほとんどの割合を占める。主体となる土器群は、出土割合が大きいことや埋設土器から、Ⅲ群土器（大木 8a 式併行）となる。加えてⅣ群の古い方（１・２類）が含まれる可能性もある。

SI94 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 80 図・第４分冊写真図版 352）　総重量 1,001.9 ｇが出土している。このうち１点（図化率 42%）を掲載した。541 は深鉢で、ほぼ完形である。床面に倒れた状態で出土している。器形 14 を呈しており、沈線による楕円形区画が描かれる。区画内は磨消縄文が施文される。Ⅴ群土器に分類した。不掲載土器は 580 ｇ出土しているが、文様を判別できる破片はなかった。図示した土器は床面に近い状態であり、ほぼ原位置を保っていると判断したことから、主体となる土器群はⅤ群（大木９式併行）とした。

SI95 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 80 図・第４分冊写真図版 352）　総重量 1,092.1 ｇが出土している。このうち２点（図化率８%）を掲載した。542・543 は深鉢の口縁部片である。542 の器形は、いわゆるキャリパー形の口縁部であることから器形 12、543 は直口から内湾する口縁部であることから器形 14 を呈する。文様は、542 が沈線文主体、543 は口縁部の隆帯以外は無文である。このことから前者はⅢ群に、後者は器形の特徴からⅢ群４類に分類した。不掲載土器は 1,599.3 ｇが出土し、文様が判別できるものは 44.2 ｇのみである。Ⅲ群が主体を占め、Ⅲ～Ⅳ群の破片もある。主体となる土器は、出土量が少なく確証的ではないが、主体を占めるⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SI96 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 81・82 図・第４分冊写真図版 352・353）　総重量 5,902.1 ｇが出土している。このうち７点（図化率 73%）を掲載した。544・546・548～550 は深鉢の口縁部片である。545・547 は深鉢胴部片・底部片である。破片であるが、器形を想定すると 544 はキャリパー形の口縁部であることから器形 12、549 は外反口縁に胴部が膨らむことから器形６、546・548 は外反口縁に胴部が膨らまないことから器形５、550 は内湾する口縁部をもつことから器形 14 であろう。545・547 の器形は不明である。文様は、隆線が主体のもの（544・550）、沈線が主体のもの（545・547～549）、口縁部に隆帯のみで無文（地文のみ）のもの（546）の３者がある。これらの多くは文様の特徴からⅢ群に分類した。549 は頸部区画を有しミガキが施され無文となることからⅣ群に含めた。不掲載土器は 1,587.2 ｇがあり、そのうち文様が判別できるものは無文土器も含めて 278.1 ｇである。少量であるが内訳をみると、Ⅲ群（89%）、Ⅲ～Ⅳ群（６%）、Ⅳ群（５%）である。掲載土器も含めてもっとも割合の大きなⅢ群（大木 8a 式併行）が主体となる土器群であろう。

SI97 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 82 図・第４分冊写真図版 353）　総重量 2,879.1 ｇが出土している。このうち１点（図化率 80%）を掲載した。551 は深鉢の底部片である。口縁部がなく器形や分類は不明である。不掲載土器は 582.1 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 106.8 ｇである。内訳をみると、無文土器以外はⅤ群土器の破片のみである。主体となる土器群はⅤ群とするが、下位の遺構がⅤ～Ⅵ群であることを踏まえると、Ⅴ～Ⅵ群（大木９式～10 式併行）とする。

SI98 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 82 図・第４分冊写真図版 353）　総重量 666.3 ｇが出土している。このうち４点（図化率 48%）を掲載した。552 は深鉢の胴部片である。器形は細片のため不明である。文様は、沈線による曲線状の区画を描くもので、区画内は充填縄文が施される。Ⅵ群であろう。553～555 は地文のみが施される深鉢の口縁部片である。いずれも単節の縦回転で施文される。不掲載土器は 347.7 ｇが出土し、このうち文様が判別できるものは無文土器も含めて 80.3 ｇである。内訳は、無文（40%）、Ⅲ群（35%）、Ⅴ群（25%）である。無文土器の割合が多く、出土量も少ないことから判断が難しい。Ⅲ群とⅤ群前後の２時期に分けられるが、周囲の同じような立地（Ⅲ群時期の遺構はより深い所に立地）の遺構との関係から後者の時期をこの遺構の時期とする。すなわちⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）である。

SI99 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 82 図・第４分冊写真図版 353）　総出土量 330.4 ｇのみが出土している。このうち１点（図化率 55%）を掲載した。556 は、口縁部が外反する深鉢で、地文だけの

無文土器である。口縁部はナデが施され無文となり、胴部は０段多条の原体で施文される。不掲載土器は 147.9 ｇあるが、地文だけの胴部片である。出土土器は量が少なく主体となる時期を決定し難い。重複関係では、下位にある遺構がⅤ～Ⅵ群であることから、本遺構の主体もⅤ～Ⅵ群（大木９～10式併行）前後の時期としておきたい。

SI101 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 82 図・第４分冊写真図版 353・354）　総重量 1,374.2 ｇが出土している。このうち４点（図化率 60%）を掲載した。557・558 は深鉢の口縁部片である。口縁部の形状から推定すると、557 が器形 12 を呈し、558 が器形 14 を呈する。文様は 557 が隆線を主体とし、渦巻文が描かれる。Ⅲ群３類としたが、この類の隆線はⅣ群の可能性もある。558 は、口縁部に隆帯が貼付されるのみで、胴部以下は地文のみであり、Ⅲ群４類であろう。560 は小型の土器で壺形を呈する（器形８）。沈線を主体に文様を描くが、器形と文様構成からⅣ群に分類した。559 も小型土器であり器形８を呈する。地文は、無節の原体で縦回転に施文する。不掲載土器は 555.2 ｇであり、このうち文様が判別できるものは無文土器を含めて 83.1 ｇのみである。内訳をみると、Ⅲ群（80%）、無文（20%）である。出土量が少なく確証はないが、出土遺物の割合からこの遺構の主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）かその次段階とする。

SI116 竪穴建物跡出土土器（第３分冊第 83 図・第４分冊写真図版 354）　総重量 5,418.2 ｇが出土している。このうち 13 点（図化率 54%）を掲載した。561 は深鉢口縁部片で器形５か６の可能性がある。口縁部のみ隆帯の貼付がある。Ⅲ群に分類した。562 は深鉢胴部片であるが、器形６の可能性がある。文様は沈線による波状文と平行文の組み合わせであり、Ⅲ群であろう。口縁部が欠損する 563 は器形６の可能性がある。564・565 は小型の壺形を呈する器形（器形８）である。564・565 の口縁部はいずれもミガキが施され無文となる。頸部は沈線で区画され、胴部は渦巻文や曲線文が沈線主体で描かれる。Ⅳ群に分類した。566・567 は器形８を呈する無文土器である。小型であり、地文は縦回転で施文される。568～570 は器形 12 を呈する深鉢片である。568 は口縁部の文様は隆線を主体とするが、胴部は沈線が主体で文様が描かれる。頸部区画を有すると考えられるためⅣ群とする。570 は口縁部片で、隆帯による区画内に沈線で文様が描かれる。569 は頸部片で、隆線と沈線による区画のみ確認できる。いずれもⅢ群であろう。571 は、器形 14 を呈する深鉢片で、口縁部に隆帯貼付、胴部は３条１単位の沈線が施される（Ⅲ群）。小破片のため全容は不明であるが、頸部区画がありⅣ群の可能性もある。572 は、器形 17 を呈する深鉢片である。口縁部はミガキが施され無文である。頸部（肩部）には把手が４単位分取り付けられる。胴部文様は隆線によって渦巻文が描かれ、Ⅳ群に分類した。573 は浅鉢片である。口縁部からナデが施される。不掲載土器は 2,473.5 ｇあり、このうち文様が判別できるものはほとんど（99%）がⅢ群土器である。主体となる土器群は、出土割合の大きなⅢ群が主体となるが、原位置を保つ土器（563・565・568・572）はⅣ群土器がほとんどである。このほか SI28 と同一に取り上げた土器（143 ｇ）がある。この遺構は、重複関係はもっとも古い遺構である。したがって、主体となる土器群はⅣ群（大木 8b 式併行）と考えた。

（２）土坑出土土器

土坑から出土した土器は、竪穴建物跡に比べて相対的に少ない。またわずかな破片のみの場合が多く、原位置を保つ例も少ない。そのため各土坑の時期は、重複関係も加味しながら決定することになるが、必然的に年代幅が広くなることが多い。出土遺物や重複関係など何らかの根拠がある場合は、ある程度年代幅広くてもそのまま遺構の時期として記載する。

SK2 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 224.1 ｇが出土している。こ

のうち２点を掲載した（図化率 13%）。574・575 はいずれも深鉢の口縁部片である。小破片であるが、おそらく器形はキャリパー形（器形 12）の口縁部と想定される。文様は、いずれも隆線や沈線が施されることからⅢ群に分類した。そのほか不掲載土器は 194.7 ｇあり、そのうち文様が判別できる破片は 34.7 ｇのみである。Ⅴ群、Ⅲ～Ⅳ群、無文土器がある。出土土器の量が少なく判断しがたいため、主体となる土器はⅢ～Ⅴ群（大木 8a～９式併行）とする。

SK3 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 148.9 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 19%）。576 は深鉢の口縁部片である。小破片だが器形は全体が内湾する器形 14 を呈すると想定される。口縁部に隆帯が貼付され、頸部以下は地文のみの可能性が高い。Ⅲ群４類に分類した。不掲載土器は 121.1 ｇあり、そのうち文様が判別できたもの（21.1 ｇ）には、Ⅲ～Ⅳ群の破片のみである。主体となる土器はⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする

SK4 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 652.5 ｇが出土している。このうち１点のみを掲載した（図化率４%）。577 はいわゆるキャリパー形を呈する深鉢の口縁部片である。隆線で文様が描かれることから、第Ⅲ群に分類した。このほか不掲載土器の破片にはⅢ群、Ⅳ～Ⅴ群の２時期の破片がある。主体となる土器は、出土量の多いⅢ群（大木 8a 式併行）としておく。

SK5 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 335）　総重量 1,610.4 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率９%）。578・579 は深鉢の胴部片である。器形は不明だが、文様は沈線による曲線状の区画文が描かれる。区画内は磨消縄文が施されると思われるが、579 は摩滅のため十分観察できない。いずれもⅤやⅥ群に分類した。不掲載土器は 1,460.4 ｇあり、そのうち文様が判別できるものは 259.6 ｇである。割合の多い順に並べると、Ⅲ群（49%）、Ⅲ～Ⅳ群（32%）、Ⅴ群（12%）、Ⅱ～Ⅲ群（７%）である。主体となる土器は、年代幅が広く限定できない。重複する SK11 がⅢ群の時期の可能性が高いため、それ以降のⅣ群～Ⅵ群（大木 8b～10 式併行）に限定できるかもしれない。

SK6 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 6,192.0 ｇが出土している。このうち８点を掲載した（図化率８%）。581～584 は深鉢の口縁部片である。器形は、584 が内湾する口縁部であることから器形 14、582・583 はいわゆるキャリパー形の口縁部であることから器形 12、581 は外反する口縁部であることから器形５か６であろう。文様は、沈線文主体（584）、隆線主体（582・583）、口縁部隆帯のみ（581）の３様がある。これらはいずれもⅢ群に分類した。580 も深鉢の口縁部片であるが、文様が他とは異なり、原体押圧された隆線を口縁部に１対で貼付するものである。これもⅢ群に分類した。585・586 は、Ⅴ群に分類した深鉢や壺の破片である。585 は胴部片で、沈線による楕円形区画が描かれ、内部は磨消縄文が施される。586 は頸部片で、沈線間の地文は磨り消されている。587 は地文以外の文様がない無文土器である。口縁部は外反する器形である。不掲載土器は 5,676.8 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 1,076.6 ｇある。割合の高いものから順に、Ⅲ群（44%）、Ⅳ群（20%）、Ⅲ～Ⅳ群（16%）、無文（11%）、Ⅴ群（５%）などである。主体となる土器群は、出土土器の年代幅があるが、多くの割合を占めるⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK7 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 914.3 ｇが出土している。このうち１点のみを掲載した（図化率４%）。588 は、深鉢の口縁部片である。器形はキャリパー形を呈する器形 12 であろう。文様は隆沈線を主体に施されることから、Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 882.1 ｇあり、このうち文様が判別できるものは 212.1 ｇである。Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）のみで占められることから、主体となる時期をこれとする。

SK8 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 240.8 ｇのみが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 48%）。589 は深鉢の胴部片である。小破片のため詳細は不明であるが、沈線で文様が描かれる。とりあえずⅡ群に分類したが、もしかしたらⅢ群の可能性もある。590 も深鉢の胴部から底部にかけての破片である。口縁部を欠損しており定かではないが器形７を呈するかもしれない。隆沈線で胴部全体を通して渦巻文が描かれており、Ⅳ群であろう。不掲載土器は 124.4 ｇあり、文様が判別できる破片はわずか 57.1 ｇのみである。Ⅲ群からⅣ群のみであることから、本遺構の主体となる土器群もⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK9 土坑出土土器（第３分冊第 84 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 1,526.9 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率８%）。591～593 はいずれも深鉢の口縁部から頸部片である。591 は内湾する口縁部を有することから器形 14、592 は外反する口縁部をもつことから器形５か６である。593 は口縁端部が欠損しているため不明である。591・592 は口縁部に隆線が貼付され、591 は頸部には沈線が施される。593 は蛇行する隆帯を十字に貼付するもので、脇に製作時の爪痕が残る。いずれもⅢ群に分類した。不掲載土器は 1,397.7 ｇあり、このうち文様が判別できるも含めて 562.7 ｇである。大半をⅢ群で占めることから、この遺構の主体はⅢ群土器（大木 8a 式併行）とした。

SK10 土坑出土土器（第３分冊第 85 図・第４分冊写真図版 355）　総重量 5,931.3 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 87%）。594 は大型の深鉢である。底部を欠損しているが、おおむね全容がわかる。底面に接して出土した。器形は、全体が内湾する器形 14 である。口縁部は大波状３単位、小波状３単位の波状口縁で、頸部に刺突列が施される。わずかに残る口縁部は無文である。胴部には隆沈線を主体に文様が描かれる。構成は大渦巻文が３面に配され、その間を中形の渦巻文２面に配される（５単位の渦巻文）。それらは小渦巻文で連結され、胴下半には渦巻文からのびる懸垂文が施される。これらの特徴からⅣ群に分類した。不掲載土器は 767.5 ｇあり、このうち文様が判別できるものは 217.5 ｇがある。このうち多くはⅢ～Ⅳ群（50%）、Ⅳ～Ⅴ群（34%）である。Ⅲ群～Ⅴ群の土器の出土があるが、底面から出土した掲載土器から、主体となる土器はⅣ群（大木 8b 式併行）とする。

SK11 土坑出土土器（第３分冊第 86 図・第４分冊写真図版 356）　総重量 121.4 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 16%）。595 は深鉢胴部片で、器形は不明である。地文が横回転であることから口縁部片の可能性もある。文様は隆線を主体に描かれており、Ⅲ群に分類した。不掲載遺物は 102.3 ｇであり、Ⅲ～Ⅳ群の破片である。主体となる土器は、出土量が少ないもののこれ以外出土していないためⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK13 土坑出土土器（第３分冊第 86 図・第４分冊写真図版 356）　総重量 1,582.7 ｇが出土している。このうち４点を掲載した（図化率 13%）。４点とも深鉢の口縁部片である。596・598 は小破片のため不確かだが、キャリパー形の口縁部と想定している。文様は、いずれも隆線を主体とする。597 は外反する口縁部を呈することから、器形５か６と想定され、Ⅲ群に分類した。599 は無文土器であり、地文は単節の縦回転で施文される。不掲載土器は 1,371.8 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 371.8 ｇである。内訳はⅢ群（42%）、Ⅲ～Ⅳ群（26%）、Ⅳ群（14%）、無文（13%）、Ⅴ群（20%）である。主体となる土器は、出土数の多いⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK14 土坑出土土器（第３分冊第 86 図・第４分冊写真図版 356）　総重量 5,773.3 ｇが出土している。このうち９点を掲載した（図化率 11%）。600～602・604 は器形 12 を呈する深鉢の口縁部片である。600 のみは波状口縁で、そのほかは平縁である。文様は、隆線によって描かれるものが多く（600～602）、ほかに沈線主体のもの（604）がある。文様の特徴からⅢ群に分類した。603・605～607 も深

鉢の口縁部や胴部片である。多くが細片のため器形は不明だが、606 は器形 18 であろう。文様は沈線主体で描かれるもの（605・606）、隆沈線主体で描かれるもの（603・607）がある。606 はⅤ群に、それ以外はⅣ群に分類した。608 は器高が５㎝程度のミニチュア土器である。不掲載土器は 5,145.1 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 1,293.8 ｇがある。内訳は、Ⅲ群（35％）、Ⅴ群（27％）、Ⅳ～Ⅴ群（23％）、Ⅳ群（９％）などである。主体となる土器群は、各群の割合に顕著な差が認められず、他に時期を限定できる根拠もないため、Ⅲ～Ⅴ群土器（大木 8a ～９式併行）の幅で捉えておく。

SK17 土坑出土土器（第３分冊第 86 図・第４分冊写真図版 356）　総重量 1,039.1 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率４％）。609・610 はいずれも深鉢の口縁部片である。609 はキャリパー形の口縁部であることから器形 12、610 は直口気味の口縁であることから器形 14 と想定される。いずれも口縁端部を中心に隆線が貼付される。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 1,001.7 ｇがあり、文様が判別できる破片は 311.5 ｇある。内訳は、Ⅲ群（50％）、Ⅴ群（28％）、Ⅳ群（15％）などであり、半数をⅢ群が占める。重複関係がもっとも古いこととあわせて、最多数を占めるⅢ群土器（大木 8a 式併行）が主体となろう。

SK19 土坑出土土器（第３分冊第 86・87 図・第４分冊写真図版 356）　総重量 3,229.7 ｇが出土している。このうち９点を掲載した（図化率 20％）。611 ～ 613 はⅣ・Ⅴ群に分類した深鉢の口縁部片である。611・612 は器形５か６、613 は器形 12 を呈する。614 ～ 617 はⅣ・Ⅴ群に分類した深鉢の破片である。614 が器形 14、615 が器形５・６、616 が浅鉢、617 の器形は不明である。文様はいずれも隆沈線が主体となるものである。614 の沈線はかなり幅広になることからⅤ群の可能性がある。618 は器形７を呈すると推定される。沈線による楕円形区画文が施されることからⅤ群に分類した。619 は無文土器の口縁部片で、地文は RL 縄文の縦回転で施文される。不掲載土器は 2,576.9 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 776.9 ｇがある。内訳は、Ⅲ群（39％）、Ⅳ～Ⅴ群（27％）、Ⅳ群（23％）、Ⅲ～Ⅳ群（６％）、無文（３％）、Ⅴ群（２％）である。年代幅があり、時期をあまり限定できないためⅣ～Ⅴ群（大木 8ab ～９式併行）が主体となる土器群とする。

SK20 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 420.6 ｇが出土している。このうち２点（図化率５％）を掲載した。620・621 はいずれもⅢ群に分類した深鉢片である。小破片であるが 620 は器形６に、621 は器形 12 を呈すると想定した。文様は隆線が主体となる。不掲載土器は 401 ｇあり、文様が判別できる破片は 91 ｇのみである。内訳は、Ⅲ～Ⅳ群（47％）、Ⅲ群（23％）、Ⅱ～Ⅲ群（17％）、Ⅴ群（13％）である。出土土器の年代幅はⅡ（Ⅲ）～Ⅴ群となる。重複する SI6 の時期も明確ではないことから、主体となる土器群は、出土数の多いⅢ群～Ⅴ群（大木 8a 式～９式併行）とする。

SK22 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 2,962.0 ｇが出土している。このうち５点を掲載した（図化率 35％）。622 はⅢ群に分類した深鉢の口縁部片である。口縁部の形状からいわゆるキャリパー形を呈する（器形 12）。文様は隆線によって弧線文（半円）が描かれる。626 は深鉢の胴部片である。器形は不明で、胴部には隆沈線を主体とする文様が描かれる。623・624 は深鉢というより壺形土器である。球胴に近い胴部に最大径をもつことから器形８を呈する。胴部文様はいずれも隆沈線により渦巻文が描かれている。623 の口縁部はミガキが施され無文となる。頸部との区画は隆沈線、624 の頸部区画線は、刺突のある隆線である。これら３点はいずれもⅣ群に分類した。不掲載土器は 1,932.8 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 532.8 ｇである。内訳は、Ⅳ群（75％）、Ⅲ群（17％）、Ⅴ群（８％）であり、Ⅳ群の占める割合が高い。図示した土器とあわせて

もⅣ群（大木 8b 式併行）がこの遺構の主体となる土器群であろう。

SK27 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 1,831.4 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率７％）。629 は小破片であるが壺形の頸部片と想定する（器形 15）。628 も小破片であり器形復元は難しいが、大型の深鉢で、キャリパー形の口縁部と想定した（器形 12）。文様は隆線で描く。627 は器形 14 を呈し、口縁部に隆帯の貼付のみが確認できる。629 はⅣ群、625・628 はⅢ群に分類した。不掲載土器は 1,699.1 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 299.1 ｇがある。内訳をみると約７割がⅢ群であり、残りがⅣ群やⅢ～Ⅳ群である。出土土器を重量比でみた場合、Ⅳ群土器が主体を占めるが、Ⅲ群が一定程度出土することから、主体となる土器群はⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とすることができよう。

SK36 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 372.6 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 25％）。630 は器形９か 13 を呈する深鉢の口縁部片である。口縁部には上下に２条の隆線が貼付される。隆線間には、円文あるいは渦巻文が施される。胴部は地文のみと考えられる。Ⅲ群４類に分類した。不掲載土器は 280.3 ｇがあり、Ⅲ群からⅣ群土器が大半を占める。したがって、主体となる土器群は、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～９式併行）となる。

SK43 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 611.6 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率３％）。631 は深鉢の口縁部片で、器形はキャリパー形を呈する（器形 12）。文様はわずかながら隆線で描かれる。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 593.6 ｇがあり、文様が判別できる破片は 56.7 ｇのみである。ほぼⅢ群である。遺物数が少ないものの主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となる。

SK47 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 218.2 ｇが出土しており、このうち１点（図化率 91％）を掲載した。632 の器形は内湾しながら立ち上がる形態を呈する（器形 11）。文様は口縁部に集中し、原体押圧文が主体である。一部に押圧が施された隆線が貼付される。Ⅲ群の可能性が高い。不掲載土器は 20 ｇあるが、文様を判別できる破片はない。したがって主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）とするほかはない。

SK48・49 土坑出土土器（第３分冊第 87 図・第４分冊写真図版 357）　調査時に、重複する２遺構分を一括して取り上げたためまとめて記載する。総重量 136.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 16％）。633 は深鉢の口縁部片で、内湾する口縁部を呈することから器形 14 と想定できる。文様はわずかしか残存しないが、隆沈線が主体であろう。また器表には焼け弾けによる凹みがある。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 114.4 ｇがあり、このうち文様が判別できる土器は 34.4 ｇである。Ⅴ群が大半を占める。したがって、本遺構の主体となる土器群はⅣ～Ⅴ群（大木 8b～９式併行）とする。

SK55 土坑出土土器（第３分冊第 88 図・第４分冊写真図版 357）　総重量 720.6 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率 33％）。634・635 は深鉢の口縁部や頸部片である。器形はいずれもキャリパー形を呈する形状で、器形 12 を呈する。634 の文様は、隆線や沈線で渦巻文を描くもので、635 は頸部との区画である隆線のみ確認できる。636 は深鉢の胴部片である。器形は不明ながら沈線による胸骨文風の文様が描かれる。これら３点ともⅢ群に分類した。不掲載土器は 483.4 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 133.4 ｇである。内訳は、Ⅲ群が大半を占め（68％）、Ⅲ～Ⅳ群（17％）、Ⅴ群（８％）などがある。ⅣやⅤ群土器も出土するが、大半をⅢ群土器でしめることから、主体となる土器群をⅢ群（大木 8a 式併行）とした。

SK60 土坑出土土器（第３分冊第 88 図・第４分冊写真図版 357・358）　総重量 7,453.0 ｇが出土して

いる。このうち３点を掲載した（図化率 83%）。637 は器形５を呈する深鉢で完形品である。２単位の波状口縁である。文様は幅広の隆線を口縁端部に貼付するもので、波頂部に渦巻文を描く。胴部は地文のみである。639 も完形の深鉢である。地文以外の文様をもたない無文土器である。地文は単節（LR）の原体による縦回転で施文される。底面には敷物圧痕（ゴザ目組み）が残る。638 は浅鉢で、口縁部が一部欠けているがほぼ完形品である。地文以外の文様がない無文土器で、地文は単節（RL）の原体の横回転で施文される。底面には敷物圧痕（網代痕）が残る。これら３点は貝類が廃棄された層中から一括で出土した土器であり、同時期のものと考えられる。637 の文様の特徴からⅢ群に分類できることから、ほかの２点も同様に位置づけた。不掲載土器は 1,298 ｇが出土しており、このうち文様が判別できる破片は 788 ｇである。内訳は、Ⅳ群（47%）、Ⅲ～Ⅳ群（31%）、Ⅲ群（20%）、無文（２%）である。Ⅲ～Ⅳ群土器が大半を占めることから、主体となる土器はⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK61 土坑出土土器（第３分冊第 89 図・第４分冊写真図版 358）　総重量 1,610.2 ｇが出土している。このうち３点掲載した（図化率 53%）。640～642 はいずれも深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。640 の器形は受け口状に内湾しながら立ち上がる口縁部を有する器形 11、641 は、口縁部が外反し胴部がふくれる器形６、642 は器形全体が内湾する器形 14 であり、いずれもこの時期に典型的な器形である。640 の文様は、隆線を貼付し直下に原体で連続刺突するもので、Ⅲ群の古い方（１・２類）に分類した。口縁部の地文は複節の横回転、胴部以下が単節の縦回転が施される。641・642 は口縁部に２条の隆帯を貼付するのみで胴部は地文のみである。いずれもⅢ群に分類した。不掲載土器は 764.6 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 258.4 ｇある。すべてⅢ群土器の破片である。642 のような器形 14 の土器はⅣ群の時期にも含まれるが、大半がⅢ群土器であることから、主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK62 土坑出土土器（第第３分冊第 89 図・第４分冊写真図版 358）　総重量 3,870.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 39%）。643 は深鉢の胴部から底部にかけての破片である。口縁部が欠損しており、器形、文様の有無は不明である。底面には敷物圧痕（網代痕）が残される。不掲載土器は 2,357.7 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 957.7 ｇある。内訳は、Ⅲ群（73%）、Ⅲ～Ⅳ群（14%）、Ⅳ群（９%）などである。主体となる土器群は、それ以外の土器の出土があるものの出土量のもっとも多いⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）土器とする。

SK66 土坑出土土器（第３分冊第 89 図・第４分冊写真図版 358）　総重量 733.9 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 71%）。644 は深鉢の口縁部片で、いわゆるキャリパー形を呈する器形 12 を呈する。文様は口縁部に隆線を主体に渦巻文を描く。645 も深鉢口縁部片で、直口気味の口縁部であることから器形 14 と想定した。口縁端部に２条の隆線を貼付する。胴部には沈線で描かれた文様の一部が認められる。645 がⅣ群に含まれる可能性もあるが、いずれもⅢ群に分類した。不掲載土器は 211.4 ｇがあり、このうち文様が判別する破片は 60.4 ｇのみである。すべてⅢ～Ⅳ群の破片である。主体となる土器群は、Ⅳ群を含む可能性があるため、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）としておく。

SK67 土坑出土土器（第３分冊第 90 図・第４分冊写真図版 359）　総重量 4,432.0 ｇが出土している。このうち４点を掲載した（図化率 10%）。646～648 は深鉢の口縁部付近の破片である。器形は大きさの大小があるがいずれも器形 12 のキャリパー形の口縁部を呈する。文様は、646・648 が隆線主体、647 が沈線主体である。これらは文様の特徴からⅢ群に分類したが、大型のキャリパー形土器である 647・648 はⅣ群の可能性もある。649 は浅鉢である。底部は平底で内湾する器形である。文様は隆沈

線が主体であり、渦巻文や懸垂文が描かれる。文様の特徴からⅣ群に分類した。不掲載土器は3,969.5ｇあり、このうち文様が判別できる破片は893.9ｇである。内訳は、Ⅲ～Ⅳ群（50％）、Ⅲ群（45％）、Ⅳ群（５％）である。重複するSK205がⅣ群古段階（１・２類）のため、主体となる土器群をⅢ群（大木8a式併行）に限定する。

SK68土坑出土土器（第３分冊第90図・第４分冊写真図版359）　総重量4,889.1ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率54％）。650・651は深鉢である。651は２部位に分かれているが同一個体である。口縁部が鋭く内湾することから器形12を呈する。口縁部の文様は、隆沈線を主体として渦巻文が描かれる。頸部はミガキが施され無文帯となる。頸部の上下は隆線で画される。胴部の文様は沈線が主体で、渦巻文や懸垂文が描かれる。文様の特徴からⅣ群に分類した。650は、外反口縁と膨らむ胴部の器形６を呈する。文様は沈線主体で波状文や平行文、懸垂文が描かれる。文様の主な特徴からⅢ群と考えられるが、頸部が無文帯であることからⅣ群に含まれる可能性もある。652は壺形土器で、器形18を呈する。口縁部は無文で、頸部と胴中位に把手がつく。文様は隆沈線主体で小型渦巻文が中心に描かれる。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は2,238.3ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は838.3ｇである。内訳は、Ⅲ～Ⅳ群（50％）、Ⅲ群（36％）、Ⅳ群（14％）である。主体となる土器群は、出土量の多いⅣ群（大木8b式併行）土器と判断する。

SK69土坑出土土器（第３分冊第91図・第４分冊写真図版359）　総重量1,401.4ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率17％）。653は深鉢の胴部下位から底部にかけての破片である。器形は不明である。文様は隆沈線が主体に渦巻文が描かれる。ある程度区画ができている可能性がある。一応Ⅳ群に分類した。不掲載土器は1,163.6ｇあり、このうち文様が判別できる破片は476.6ｇである。内訳は、Ⅲ～Ⅳ群（64％）、Ⅳ群（25％）、Ⅴ群（11％）である。主体となる土器群は、割合の大きいⅢ～Ⅳ群（大木8a～8b式併行）であろう。

SK80土坑出土土器（第３分冊第91～94図・第４分冊写真図版360～362）　総重量20,870.1ｇが出土している。このうち７点を掲載した（図化率98％）。654・655・658は器形14を呈する深鉢である。654・655は完形である。口頸部は上下に隆線を貼付し区画とする。その上に６の字形（渦巻？）、円形の隆帯を４単位程度に貼付する。胴部以下は地文のみである。655の胴下半は粗いミガキが施され無文となる。これらはⅢ群４類に分類した。658は口縁部に２条の隆線が貼付され、その間は無文となる。胴部には文様があり、沈線主体に文様が描かれている。口縁直下に沈線文がなく、頸部区画を有することからⅣ群に分類した。656も同様の器形と想定されるが、胴下半部のみの破片である。文様は隆沈線で描かれることからⅣ群に分類した。659・660は無文土器の深鉢である。いずれも完形に復元できる。659は波状口縁を呈し、やや焼け歪みがある。口縁端部と底部にはミガキが施され無文となる。660は口縁部が外反する器形で、口縁端部にはミガキが施され無文となる。底面から出土したものである。657は、浅鉢の破片である。口頸部に複数の平行沈線が入り、平行に刻み目が施される。文様の特徴からⅦ群２類に分類した。完形品の割合が多いが、底面から出土したのは660のみで、そのほかは廃棄された層からの出土である。不掲載土器は354.1ｇあり、このうち文様が判別できる破片は64.1ｇのみである。Ⅲ群（39％）、Ⅳ群（17％）である。主体となる土器群は、掲載土器のようにⅢ～Ⅳ群の間に含まれる土器群が多く、後者に重点がありそうである。したがって、主体となる土器群はⅣ群（大木8b式併行）とする。

SK82土坑出土土器（第３分冊第94図・第４分冊写真図版362）　総重量239.7ｇのみ出土している。このうち２点を掲載した（図化率90％）。661は深鉢の胴部片である。器形復元は小破片で難しいが、器形７か８の可能性がある。文様は隆沈線で渦巻文が描かれることからⅣ群に分類した。662は浅鉢

片である。口縁端部に隆線が貼付されるが、それ以外は地文のみである。分類は不明である。不掲載土器は 25 ｇのみで、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群は、出土量が少ないものの他に根拠がないことから、Ⅳ群（大木 8b 式併行）としておく。

SK84 土坑出土土器（第３分冊第 94 図・第４分冊写真図版 362）　総重量 1,783.8 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 86％）。663 はいわゆるキャリパー形の口縁部をもつ器形 12 を呈する深鉢である。口縁部の上下端には隆線が貼付され、文様帯区画となる。区画内の文様は隆線文が主体である。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 246.8 ｇあり、文様が判別できる破片は 66.8 ｇのみである。すべてⅢ～Ⅳ群の破片である。したがって、この遺構の主体となる土器群は出土割合の高いⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK87 土坑出土土器（第３分冊第 94 図・第４分冊写真図版 362）　総重量 189.4 ｇのみ出土している。１点のみですべて掲載した。664 は深鉢の破片で、器形は、器形９（あるいは器形２か５）を呈する。文様は、沈線が主体であり、２条１単位の波状文、３条１単位の平行文が施される。Ⅲ群に分類した。この土器以外になく、主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となる。

SK105 土坑出土土器（第３分冊第 95～98 図・第４分冊写真図版 362～364）　総重量 17,058.3 ｇが出土している。このうち８点を掲載した（図化率 99％）。665～672 はいずれも堆積土の下層から底面にかけて出土した深鉢である。出土状況からみて一括性が比較的高いと考えられる。668・671 以外は完形品が多く、底面から出土した個体もある。665 は器形 14 を呈する。口縁部には２条の隆線を貼付し口縁部区画とする。その間には４単位のＣ字状の隆帯を貼付する。胴部には３条１単位の平行文と波状文が交互に施文される。胴下半には２条の沈線による懸垂文が２組で１単位となり、口縁部のＣ字状隆線に対応した箇所４面に施される。さらに口縁部の文様とは対応しない位置に２条分の懸垂文が余分に施文されている。666 は器形 12 を呈する深鉢である。２単位の波状口縁をもつ。口縁部の文様は、上下にある隆線によって区画された内部に描かれる。隆線を主体に、渦巻風の文様や十字文が描かれる。胴部は３条１単位の沈線により平行文と懸垂文が描かれる。667 も胴部が膨らむが 666 と同じ器形である。文様は、口縁部上下の２条の隆線による区画内に描かれる。隆線による波状文のみである。胴部は地文のみである。これらはいずれもⅢ群に分類するが、とくに 666 は隆線の扁平さからⅣ群であってもよい。668・671 は深鉢で口縁部が欠損している。地文のみが施される。細身で長い胴部を呈するのは、器形 12 の深鉢が多いことからこれらの口縁部もキャリパー形を呈すると予想される。口縁部がないため定かではないがⅢ群に分類した。670・672 は口縁部に２条の隆帯が貼付されるのみで、ほかは地文以外ない。670 の口縁部は内湾、672 の口縁部は外反する。Ⅲ群４類に分類したが、670 はⅠ－③区画のためⅣ群の可能性もある。669 は地文だけが施される無文土器で、器形は６を呈する。分類は行っていない。不掲載土器は 30 ｇのみであるが、文様を判別できる破片はない。破片土器もほとんど無く、一括性が高いことがわかる。主体となる土器群は、掲載土器からⅢ群（大木 8a 式併行）であろう。

SK111 土坑出土土器（第３分冊第 98 図・第４分冊写真図版 364）　総重量 2,201.9 ｇが出土した。このうち２点を掲載した（図化率 81％）。673 は底面から出土した深鉢である。底部が欠損するがそれ以外は残る。波状を呈する口縁部に２条の隆線を貼付するのみで、それ以外は地文のみである。Ⅲ群に分類した。674 は堆積土上層から出土した深鉢の底部片である。この面に形成された焼土に伴う可能性がある。不掲載土器は 410 ｇであり、すべて地文のみの胴部片である。主体となる土器群は、底面から出土したⅢ群（大木 8a 式併行）となる。

SK112 土坑出土土器（第３分冊第 98 図・第４分冊写真図版 364）　総重量 717.0 ｇが出土している。

このうち１点を掲載した（79%）。675 は深鉢であり底部を欠損する。器形は、キャリパー形を呈する器形 12 である。文様は、口縁部の上下を隆線によって区画し、その内部に隆線による波状文を中心とした文様が施される。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 150 ｇであり、すべて地文だけの胴部片である。出土量が少ないが、主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK113 土坑出土土器（第３分冊第 99 図・第４分冊写真図版 365）　総重量 2,646.4 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 98%）。676 は、いくつかの破片が欠損するが、ほぼ完形に復元できる深鉢である。器形は全体的に内湾する器形 14 を呈する。口縁部には隆線を２条貼付し、口縁部とする（口縁部区画）。内部は無文であるが、Ｓ字状の突起（隆帯）を貼付する。胴部以下は地文のみである。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 43.2 ｇのみ出土している。主体となる土器はⅢ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK119 土坑出土土器（第３分冊第 99 図・第４分冊写真図版 365）　総重量 1,547.3 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 99%）。677 は深鉢でありほぼ完形に復元できる。口縁端部に２条の隆線を貼付するもので、胴部以下は地文のみが施文される。Ⅲ群４類（大木 8a 新段階～大木 8b 新段階併行）に分類した。不掲載土器はわずか 16 ｇがある。地文だけの胴部片である。主体となる土器群は、出土量が少ないが 677 からⅢ群とするが、Ⅲ群４類は存続期間をあまり限定できない分類であるため、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とした。

SK132 土坑出土土器（第３分冊第 100 図・第４分冊写真図版 366）　総重量 3,160.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 58%）。678 は深鉢であり、図上でほぼ完形に復元できる。口縁部は４単位の大きな波状口縁を呈する。器形は、いわゆるキャリパー形を呈する器形 12 である。文様は口縁部に限定される。口縁部の上下に隆線を貼付し口縁部区画とし、その内部を複節（RLR）の縄文原体の横回転によって地文を施文し、その後隆線によって波頂部に対応した位置に渦巻風の文様が描かれる。胴部は口縁部と同じ原体による縦回転の施文（地文）のみである。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 1,337 ｇあるが、文様が判別できる破片は 196.9 ｇのみである。判別できる文様はⅢ群土器のみである。したがって主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式併行）となる。

SK133 土坑出土土器（第３分冊第 101 図・第４分冊写真図版 365）　総重量 3,230.3 ｇが出土している。そのうち１点を掲載した（図化率 94%）。679 は、地文以外の文様をもたない無文土器の深鉢である。土坑埋没後に埋設された土器である。したがって厳密にはこの土坑の時期を表しているわけではないが、便宜的にこの土坑に含めた。直口気味の口縁部を有し、器形 14 を呈する。口縁端部はナデが施され無文だが、頸部以下は複節の原体による縦回転の地文が施される。不掲載土器は 200 ｇであるが、文様が判別できる破片はない。無文土器の占める割合が大きいが、器形 14 はⅢ群にはじまり、Ⅴ群の主要な器形であることから、主体となる土器群はⅢ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）の可能性がある。

SK134 土坑出土土器（第３分冊第 101 図・第４分冊写真図版 366）　総重量 512.8 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 88%）。680 は深鉢で、２破片に分離しているが同一個体である。器形は筒形の胴部から大きく外反する口縁を有する器形５を呈する。文様は、口縁端部に２条の隆線が一体化した隆線を貼付し波頂部に対応させた渦巻文を配す。胴部は３条の平行文と２条の波状文が施される。また胴部下位には、波頂部に対応した２条の沈線を垂下させる。頸部区画が存在することから、Ⅳ群（１類）土器に分類した。681 は深鉢の口縁部片で、おそらく器形 14 を呈する。口縁部の上下に２条の隆線を貼付するもので、胴部は地文のみであろう。Ⅲ群４類に分類した。不掲載土器は 60 ｇのみであり、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群は、掲載土器からⅣ群１類（大木 8a 式新段階～8b 式古段階併行）やⅢ群４類（大木 8a 式新段階～大木 8b 式新段階併行）とする。

SK143 土坑出土土器（第３分冊第 101・102 図・第４分冊写真図版 366）　総重量 3,457.1 ｇが出土している。このうち３点を図示した（59%）。682 は口縁部が欠損する深鉢である。器形は、器形５あるいは器形 12 を呈するかもしれない。文様は、頸部あるいは胴部上位に沈線を主体とする平行文（３条１単位）、波状文（２条１単位）が組み合わされている。胴部下位は３条１単位の懸垂文が施される。Ⅳ群（１類）であろう。683・684 は器形 14 を呈する深鉢である。文様は口縁部に隆線を２条貼付するもので、頸部以下は地文のみである。Ⅲ群４類に分類した。不掲載土器は 1,414.8 ｇがあり、そのうち文様が判別できる破片は 14.8 ｇしかない。684 のような口縁部片である。数少ない文様が判別できる土器から主体となる土器はⅣ群（大木 8b 式併行）とする。

SK144 土坑出土土器（第３分冊第 102 図・第４分冊写真図版 367）　総重量 5,582.6 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率 99%）。685・686 は地文以外の文様がない無文土器の深鉢である。685 は口縁部が欠損していることから、文様があるかもしれない。地文はいずれも単節の縦回転で施文されている。687 は深鉢であり、器形は５あるいは６を呈する。口縁部と頸部の境に隆線が貼付され区画とする。頸部以下は地文のみである。Ⅲ群４類に分類できようか。この分類の土器は、存続期間が長いと考えられ、時期をあまり限定できない。不掲載土器は７ｇのみであり、文様は判別できない。主体となる土器群は、掲載土器以外に根拠はないため、Ⅲ群４類（大木 8a 新段階から９式古段階併行）としておく。

SK147 土坑出土土器（第３分冊第 103 図・第４分冊写真図版 367）　総重量 1,453.3 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率 78%）。688～690 はほぼ底面から出土した深鉢である。688 の器形は、器形 11、690 は器形 12、689 は器形５であろう。文様は、688 の文様は、口縁部の上下に隆線を貼付し、その間におそらくＳ字文を添付する。頸部以下は地文のみである。690 は口縁部の上下に２条の沈線で区画する。区画内は２条１単位の沈線で山形文を描く。また、頸部との境は沈線に加えて隆線も貼付される。胴部は沈線により文様が描かれるが、２条を１単位としている。689 の器形は古いが、器形 11 の可能性もある。全体的に摩滅しているが、口縁端部に薄い隆帯を貼付し、下に２条の沈線をめぐらせるようである。その上から４単位のＳ字状隆帯を貼付する。胴部は２条１単位の沈線による波状文を垂下させているようにみえる。３点ともⅢ群に分類した。不掲載土器は 320.1 ｇあるが、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式併行）であろう。

SK154 土坑出土土器（第３分冊第 103 図・第４分冊写真図版 367）　総重量 47.7 ｇが出土している。全１点を掲載した。691 は深鉢の口縁部片である。器形は、口縁部がやや外反する器形３であろう、文様は、口縁部に半截竹管による刺突文が施される。隆線が貼付された痕跡が残るが定かではない。Ⅱ群としたが、刺突文だけの文様は、ここでは明確に位置づけが難しかったため別の分類に位置づけられる可能性がある。主体となる土器はこの１点のみのため確証はない。本遺構は、重複関係からみると、重複が６階層以上あるうちの新しい方に位置する。そのため、あまり古い年代（出土土器の大半を占める縄文時代中期前葉から後葉にかけての年代幅の中で）を示すと重複関係と齟齬を来す可能性がある。そのため掲載土器は混入の可能性がある。したがって、本遺構の主体となる土器群は不明とする。

SK163 土坑出土土器（第３分冊第 103 図・第４分冊写真図版 368）　総重量 920.3 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 96%）。692 はいわゆるキャリパー形を呈する深鉢である（器形 12）。文様は、口縁部に限定され、隆線が主体に描かれる。口縁部区画は１条ずつの隆線によってなされ、内部は２条１単位の隆線によって渦巻風の文様が描かれる。頸部以下は地文のみである。Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 40 ｇのみあり、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、Ⅲ

群（大木 8a 式併行）となる。

SK167 土坑出土土器（第３分冊第 104 図・第４分冊写真図版 368）　総重量 3,475.4 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 99%）。693・694 は深鉢である。693 の器形は、器形 14 であろうか。口縁部は４単位の波状であり、２条の隆線が貼付される。この間が区画とするなら、口縁部は非常にせまい。波頂部に対応して、渦巻風の隆帯を貼付する。頸部以下は沈線による文様が主体で、波頂部に対応して小渦巻文を伴うＹ字状の沈線が、その横には２条１単位の波状の懸垂文が配されている。Ⅲ群５類（円筒上層ｅ式？）に分類した。694 は地文以外の文様をもたない無文土器の深鉢である。器形は、口縁部が外反する器形（器形６）で、文様は、口縁部にナデが施され無文となり、胴部は地文のみである。不掲載土器は 29.9 ｇのみがあり、すべてⅢ群の破片である。したがって主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となる。

SK185 土坑出土土器（第３分冊第 105 図・第４分冊写真図版 368）　総重量 824.9 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 36%）。695 は深鉢の底部片である。器形は不明で、文様は地文だけが確認できる。底面には敷物圧痕が外縁中心に残っている。不掲載土器は 524.4 ｇであり、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、明確な証拠がなく不明である。

SK187 土坑出土土器（第３分冊第 105・106 図・第４分冊写真図版 368・369）　総重量 9,897.1 ｇが出土している。このうち５点を掲載した（図化率 95%）。696 は深鉢で、器形 11 を呈する。口縁部はナデが施され無文となり、その上に波状の隆線が貼付される。頸部の基本的にナデが施されるが、一部地文が残っている。胴部は地文のみである。Ⅲ群に分類した。698 は深鉢の底部片である。地文部のみであり全容は不明である。697・699・700 はいずれも微妙に形状が異なるが器形 14 を呈する深鉢である。文様構成も同じで、口縁部の上下を隆線によって区画するもので、頸部以下は地文のみとなる。700 は堆積土中に正位状態で出土しており土坑埋没後の埋設されたものである。697・699 は底面からの出土である。３点ともⅢ群（４類）に分類した。不掲載土器は 529.9 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 78.9 ｇである。内訳はすべてⅢ群である。時期を限定できる土器がないため、主体とする土器群は掲載土器からⅢ群（４類を含むため大木 8a～8b 式併行）とする。

SK191 土坑出土土器（第３分冊第 107 図・第４分冊写真図版 369）　総重量 2,299.0 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 80%）。701 はいわゆるキャリパー形を呈する深鉢で、器形 12 を呈する。文様は口縁部に集中する。口縁部の上下はそれぞれ２条の隆沈線が貼付され、その間が口縁部区画となる。区画内は隆沈線による渦巻文が描かれる。この形態で特徴的な有棘文が確認できなかったが隆沈線による文様であるため、Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 469.1 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 31.1 ｇのみである。すべてⅢ群である。主体となる土器群は、Ⅲ群～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK194 土坑出土土器（第３分冊第 107・108 図・第４分冊写真図版 369）　総重量 1,256.6 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 92%）。702 は器形 14 を呈する深鉢である。やや内湾する口縁部に隆線が２条貼付され、その間が口縁部区画となるが無文である。頸部以下は地文のみである。Ⅲ群（４類）であろう。703 は器形５あるいは９を呈する深鉢の破片である。文様は、口縁部に隆線が２条貼付され、口縁部区画とする。区画内はミガキが施され無文となるが、Ｓ字状の突起が貼付される。頸部以下は沈線による文様が主体であり３条単位の平行文（頸部）や波状文（胴部）が施される。Ⅲ群であろう。不掲載土器は 105.9 ｇであり、このうち 82.9 ｇの破片の文様が判別できる。内訳はⅢ群が多くの割合を占める。702 がⅢ群４類のため存続期間が長く考えられるが、703 が底面からの出土であることから、この遺構の主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK198 土坑出土土器（第３分冊第 108 図・第４分冊写真図版 370）　総重量 4,390.8 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 99％）。704 は、深鉢の口縁部以外の破片である。口縁部を欠損しているが、おそらく器形 12 を呈するであろう。文様が集中する口縁部がないため詳細は不明である。不掲載遺物は 43.8 ｇのみであり、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群は不明であるが、掲載土器が器形 12 を呈するのであれば、Ⅲ群（大木 8a 式併行）の可能性がある。

SK205 土坑出土土器（第３分冊第 109 図・第４分冊写真図版 370）　総重量 453.8 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 89％）。705 は深鉢の口縁部片である。残された形状から復元すると器形 11 あるいは 12 を呈する。口縁部は、上下を２条の隆線によって区画され、内部は隆線主体で文様が描かれる。頸部はミガキが施され無文帯となる。これらの特徴からⅣ群に分類した。不掲載土器は 51 ｇのみで、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群はⅣ群（大木 8b 式併行）とした。

SK209 土坑出土土器（第３分冊第 109 図・第４分冊写真図版 370）　総重量 2,049.2 ｇが出土している。このうち６点を掲載した（図化率 80％）。706・707・709 は深鉢の破片で器形 14 を呈すると思われる。707 の文様は隆沈線が主体である。709 は頸部から底部までの破片で、胴部を中心に隆沈線による渦巻文が描かれている。707 の口縁部片と同一個体の可能性があるが、接合点がないためとりあえず別にした。Ⅳ群に分類した。706 は口縁部の上下に隆線が貼付される口縁部区画のみ残存する。Ⅲ群（４類）であろう。708 は深鉢あるいは壺の口縁部片であるが器形は不明である。文様は沈線の痕跡がわずかに残るのみである。これはⅢ～Ⅳ群に分類した。710・711 は深鉢の胴部片である。文様は隆沈線によって渦巻文が描かれており、Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 414.5 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 121.5 ｇである。少ないが割合をみると、Ⅳ群（61％）、Ⅴ群（22％）、無文（９％）、Ⅲ～Ⅳ群（８％）である。Ⅳ群を中心にその前後の土器が出土している様相である。したがって、主体となる土器群はⅣ群（大木 8b 式併行）であろう。

SK229 土坑出土土器（第３分冊第 110・111 図・第４分冊写真図版 370・371）　総重量 11,763.9 ｇが出土している。このうち 10 点を掲載した（図化率 95％）。多くは完形に復元できる個体を中心に底面からまとまって出土したものである。712～716・718・720 は中型・大型の深鉢である。器形をみると、714・715 は器形５に（714 は器形 16 の可能性もある）、712・713 は器形６に、716・720 は器形 12 に、718 は器形 14 に復元した。714・715 の口縁部は波状であり、２条の隆線によって区画されている。区画内は無文であるが、隆線のよる渦巻文が連結している。頸部以下は、714 は地文のみであるが、715 は３条単位の沈線によって、平行文、縦位沈線文が描かれている。Ⅲ群に分類した。713 の口縁部は、714 と同様であるが、712 には隆線の貼付がなく弱い面が形成されているのみである。713 の頸部以下は地文のみで、Ⅲ群に分類した。716 は口縁部のみに文様が集中する。隆線によって区画された口縁部内は２条単位の隆線によって渦巻文が描かれている。隆線は隆沈線との区別が難しいくらい発達していることからⅣ群の可能性もある。720 は口縁部が欠損しており、厳密には器形 12 ではないかもしれない。胴部は地文のみである。718 は口縁部に２条の隆線を貼付し口縁部区画とするもので、頸部以下は地文のみである。Ⅲ群（４類）に分類した。721 は器形８を呈する壺形土器である。いずれも頸部は無文となり、胴部には沈線による渦巻文が描かれる。Ⅳ群に分類した。717 は、深鉢の口縁部片で、端部を折り返して肥厚させる。Ⅱ群に分類した。719 は深鉢口縁部片であるが、小破片のため詳細は不明であるが、器形 12 を呈する可能性はある。文様の種類からⅢ群の範疇であろう。不掲載土器は 530.9 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 25.9 ｇのみである。Ⅳ群、Ⅴ群、Ⅲ～Ⅳ群の破片がある。主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式新段階併行）であり、Ⅳ群の古い方（大木 8b 式古段階併行）も含むであろう。

SK230 土坑出土土器（第３分冊第 111 図・第４分冊写真図版 372）　総重量 1,346.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 33%）。722 は器形 14 を呈する深鉢である。口縁部に２条の隆線を貼付し区画とするもので、頸部以下は地文のみである。Ⅲ群（４類）に分類した。不掲載土器は 905.5 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 541.5 ｇである。内訳は、Ⅲ群 89%、無文 11%である。主体となる土器群はⅢ群４類（大木 8a から 8b 式併行）となろう。

SK235 土坑出土土器（第３分冊第 112 図・第４分冊写真図版 372）　総重量 1,977.3 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 55%）。723 は器形 12 の深鉢である。大波状口縁を呈する内湾気味の口縁部を有す。文様は隆線と沈線による口縁部区画内に施され、沈線文が主体である。口縁部と頸部との境は隆帯が２条（１条の隆帯の中央に沈線が入り見かけ上２条にみえる）。頸部以下は地文のみで、Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 881.5 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 81.5 ｇのみである。すべてⅢ群である。主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式併行）となる。

SK244 土坑出土土器（第３分冊第 112 図・第４分冊写真図版 372）　総重量 1,082.2 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 59%）。724 は、器形 12 を呈する深鉢である。大波状口縁を呈し、胴部はすぼまりそうである。底部は欠損する。文様は、口縁部の上下に隆線２条ずつを貼付し区画とする。区画内は２条１単位の隆線による渦巻文が描かれる。頸部以下は地文のみで、Ⅲ群に分類した。不掲載土器は 447.5 ｇあり、すべてⅣ群の破片である。このほか SK219 と一括で取り上げた縄文土器（2.5 ｇ）があるが図示したものはない。主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK248 土坑出土土器（第３分冊第 112 図・第４分冊写真図版 372）　総重量 1,069.9 が出土している。このうち２点を掲載した（図化率 79%）。725 はいわゆるキャリパー形を呈する深鉢である（器形 12）。底部を欠損している。文様は、口縁部の上下に１条ずつの隆線を貼付し区画とし、区画内は隆線による文様が施される。頸部以下は地文のみで、Ⅲ群に分類する。726 は深鉢の口縁部片である。長い口縁部は全体が肥厚され、頸部との境に段差がある。さらに口縁端部は折り返され肥厚する。この端部には横回転の LR 原体が施文され、他は縦回転である。また、口縁部下位には幅広の把手状の隆帯が貼付される。Ⅱ群に属するであろう。不掲載土器は 225 ｇあるが、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、Ⅱ群とⅢ群に分かれており判断が難しい。Ⅱ群土器の時期の可能性も残しつつ、周辺の土坑と同様にⅢ群（大木 8a 式併行）としておく。

SK272 土坑出土土器（第３分冊第 113 図・第４分冊写真図版 372）　総重量 3,514.5 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 99%）。727・728 は底面に残されていた深鉢である。727 の器形は器形 14 を呈し、728 の器形は不明である。727 の文様は、口縁部に集中し、隆線による口縁部区画内にある。隆線を主体とした波状文と平行文が施されている。Ⅲ群であろう。728 は、口縁部を欠損しており、文様の有無は不明である。不掲載土器は 49 ｇのみ出土し、文様が判別できる破片はわずか６ｇのみである。主体となる土器群は、文様が判別できる土器からⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK279 土坑出土土器（第３分冊第 113 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 3,076.1 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 96%）。729 は、器形 14 を呈する深鉢である。文様は、幅広の隆線による区画内に集中する。区画の隆線の上にＣ字状の隆帯を背中合わせ（結果的にＸ字状）に貼付し、隆線の脇に縄文原体押圧文が施される。頸部以下は地文のみで結節の羽状縄文が施されている。Ⅲ群でも古い方に分類できるであろう。不掲載土器は 123.4 ｇのみであり、いずれも文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式古段階併行）となろう。

SK292 土坑出土土器（第３分冊第 113 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 23.4 ｇのみ出土し、１点すべてを掲載した。730 は深鉢の口縁部片である。わずかに外反する口縁部である。文様は口縁端部

に刻み目が、それ以外は結節回転文が施される。文様の特徴からⅠ群に分類した。周辺の遺構からは時期的に離れた遺物であるため混入と考えられる。このほかに土器は出土しておらず、主体となる土器群は不明である。

SK295 土坑出土土器（第３分冊第 113・114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 5,259.2 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 95％）。731・732 は２点とも深鉢である。731 は口縁部が欠損しており器形は不明である。地文のみが確認できる。732 は器形 14 を呈する。口縁部は隆帯が１条ずつ貼付され、その間が口縁部区画となる。区画内は無文である。頸部以下は、沈線による文様が主体で、３条１単位の平行文や波状文が施される。胴部下半は地文のみである。Ⅲ群に分類した。不掲載土器 242.2 ｇがあり、そのうち文様が判別できるものは 112.2 ｇである。すべてⅢ群の破片である。主体となる土器群は、出土土器の大半を占めるⅢ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK298 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 3,880.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 16％）。733 は大型の浅鉢片としたものであるが、器形 14 の深鉢の可能性もある。口縁部は太めの隆線２条で区画される。区画内はＣ字状の隆帯が貼付される。頸部とした範囲はミガキが施され無文となる。胴部との境界は２条の隆沈線が貼付される。胴部は２条１単位の波状文と３条１単位の平行文が施される。文様的にはⅢ群の可能性もあるが、頸部が無文帯になることからⅣ群とする。不掲載土器は 3,272 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 1,618 ｇある。内訳は、Ⅳ群（94％）、Ⅲ～Ⅳ群（３％）などである。主体となる土器群はⅣ群（大木 8b 式併行）であろう。

SK299 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 2,291.3 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 14％）。734 は器形６を呈する壺形土器である。口縁部は狭く、隆線による波状文が貼付される。頸部は無文であり、胴部には波状の懸垂文が施される。頸部の特徴からⅣ群に位置づけた。不掲載土器は 1,979 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 374.2 ｇである。Ⅲ群（79％）が多くの割合を占める。主体となる土器群はⅢ群～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）であろう。

SK311 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 25.8 ｇのみが出土している。１点すべてを掲載した。735 は深鉢の口縁部片である。細片のため定かではないが、厚さがあることから器形 14 の可能性がある。文様は隆沈線を主体とし、Ⅳ群に分類した。不掲載土器はない。主体となる土器群は、出土量が少ないが、Ⅳ群（大木 8b 式併行）としておく。

SK339 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 1,416.8 ｇが出土している。このうち２点を掲載している（図化率２％）。736・737 はいずれも深鉢の口縁部片である。736 の器形はおそらく器形２あるいは３を、737 は器形 11 か 12 を呈すると推定される。文様は、736 が縄文原体押圧文、737 が隆線を主体とする文様である。736 はⅡ群に、737 はⅢ群に分類した。不掲載土器は 1,382.9 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 446.7 ｇである。内訳はⅢ群（61％）、Ⅲ～Ⅳ群（26％）、無文（13％）である。Ⅱ群の出土もあるが、量的に主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）となろう。

SK341 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 373）　総重量 74.0 ｇのみが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 43％）。738 は器形 14 あるいは 12 を呈する深鉢の口縁部片である。端部を欠損しており、文様構成は不明であるが、隆線による文様帯区画が確認できる。胴部は地文のみのようである。Ⅲ群（４類）に分類した。不掲載土器は 42.5 ｇあるが、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、出土量が少ないため異なる可能性があるが、Ⅲ群４類（大木 8a

～8b 式併行）となる。さらに重複する SI65 がⅣ群土器を主体とすることから、Ⅲ群４類のなかでも後半の時期に限定できるであろう。

SK376 土坑出土土器（第３分冊第 114 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 1,378.6 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 15%）。739 は深鉢である。口縁部を欠損しており、文様構成は不明である。頸部付近に沈線による文様の一部が確認できる。判別できる範囲ではⅢ群に分類した。不掲載土器は 1,171.3 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 175.8 ｇである。Ⅲ群（56%）、Ⅲ～Ⅳ群（37%）、Ⅱ～Ⅲ群（７%）である。主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）前後と判断した。

SK380 土坑出土土器（第３分冊第 115 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 1,498.1 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 49%）。740 は地文以外の文様をもたない無文土器の深鉢である。口縁部は直口気味で、胴部が膨らむ形状である。口縁部はナデが施され無文となり、頸部以下は単節縄文（LR）の縦回転で施文される。不掲載土器は 758.1 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 48.1 ｇのみである。一応内訳を見ると、Ⅲ～Ⅳ群（40%）、Ⅱ～Ⅲ群（30%）、無文（20%）、Ⅲ群（10%）である。群をまたぐ土器が多いが、いずれもⅢ群土器を含むことから、主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK381 土坑出土土器（第３分冊第 115・116 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 7,001.5 ｇが出土している。このうち３点を掲載した（図化率 90%）。741～743 はいずれもⅢ群に分類した深鉢である。741 の器形は器形 12、742・743 は器形 14 を呈する。741 の文様は、２条の隆線で口縁部を区画し、内部は２条の隆線で波状文が描かれる。742 では、口縁部は１条ずつの隆線で区画するもので、内部は無文である。頸部以下は、沈線文が主体で、３条１単位の平行文と２条１単位の波状文が交互に描かれる。743 の口縁部は、２条１単位の隆線で区画されるが、頸部以下は、４条１単位の平行文と１条の波状文が交互に描かれる。不掲載土器は 724.0 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は 214 ｇである。Ⅳ～Ⅴ群（91%）が多くの割合を占める。主体となる土器群は、Ⅳ群以降の土器片も含むものの、底面に近い位置から出土した 741 から、Ⅲ群（大木 8a 式併行）とした。

SK388 土坑出土土器（第３分冊第 116 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 421.7 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 35%）。744 は小型の壺形土器である。器形 18 であろう。口縁部の一部が残存しており、文様はミガキが施され無文である。頸部には大型の把手が取り付けられる。胴部は隆線による文様が施されているが、摩滅が激しい。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 274.3 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 115.3 ｇである。内訳は無文（72%）、Ⅲ群（28%）である。主体となる土器群は、出土遺物が少なく変動する可能性があるが、広くみて、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）としておく。

SK398 土坑出土土器（第３分冊第 116 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 329.1 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 81%）。745 は浅鉢である。全体的に内湾する形状である。文様は、口縁部に隆線を貼付し区画とするが、内部は無文となり形式的である。頸部以下は沈線により文様が描かれ、Ⅲ群に分類した。746 は、深鉢で口縁部がやや外反する無文土器である。口縁部にはミガキが施され、無文となる。不掲載土器は 63.3 ｇあり、文様が判別できる破片はわずか 28.3 ｇのみである。すべてⅢ群である。主体となる土器群は、Ⅲ群（大木 8a 式併行）とする。

SK411 土坑出土土器（第３分冊第 116 図・第４分冊写真図版 374）　総重量 266.9 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率 33%）。747・748 はいずれも深鉢の口縁部片で、地文以外の文様をもたない無文土器である。747 は口縁部全体を薄く肥厚させ、その上を結節の羽状縄文を横回転で施

す。その上に２条の原体押圧文が施される。胴部は同じ原体の縦回転である。Ⅱ群に分類した。748も結節の羽状縄文を地文とする。不掲載土器は179.3 ｇあるが、文様が判別できる破片はない。当遺跡の傾向として、結節縄文が施される土器は、Ⅱ、Ⅲ群の古い方に多く確認される地文である。したがって主体となる土器群はⅡ～Ⅲ群（大木7b～8a式併行）の可能性がある。

SK416土坑出土土器（第３分冊第116図・第４分冊写真図版375）　総重量550.8 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率78%）。749は器形６を呈する深鉢の口縁から胴部にかけての破片である。口縁部は、隆線によって区画されており渦巻状の文様が貼付される。頸部以下は地文のみであり、Ⅲ群に分類した。不掲載土器は123 ｇあるが、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群は、出土量が少ないものの、割合の大きなⅢ群土器（大木8a式併行）とする。

SK423土坑出土土器（第３分冊第116・117図・第４分冊写真図版375）　総重量1,810.2 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率58%）。750は深鉢の胴部以下の破片である。口縁部が欠損していることから器形は不明であるが、器形５の可能性がある。文様は沈線を主体に描かれる。頸部付近には３条（？）の平行沈線文、胴部は、３条１単位の縦方向の直線文（垂下文）、対向する弧線文が施される。751は器形14を呈する深鉢片である。頸部との境には隆帯が１条貼付され口縁部区画とする。内部はナデが施され無文となる。頸部以下は沈線文が主体である。頸部には２条１単位の平行文などが描かれる。これら２点ともⅢ群に分類した。また、これらの文様は円筒上層ｅ式（あるいはその後続型式）の影響を受けた可能性がある。不掲載土器は766 ｇあり、文様が判別できる破片は232 ｇである。すべてⅢ群の破片である。主体となる土器は、出土割合の大きいⅢ群（大木8a式併行）とする。

SK424土坑出土土器（第３分冊第117図・第４分冊写真図版375）　総重量5,514.6 ｇが出土している。このうち２点を掲載した（図化率20%）。752は、深鉢の胴部から底部にかけての破片である。口縁部を欠損しており、器形は不明であるが、器形６の可能性がある。胴部から底部にかけて沈線による文様が施されている。３条１単位の沈線で、垂下文（縦方向の直線文）、弧線文が描かれる。753は浅鉢片である。内湾する口縁部は、隆線によって区画される。頸部以下は隆線による渦巻風の文様が描かれる。これら２点とも、文様の特徴からⅢ群に分類したが、752は円筒上層ｅ式（あるいはその後続型式）の影響を受けた可能性がある。不掲載土器は4,399.9 ｇがあり、このうち文様が判別できる破片は1,799.9 ｇある。内訳は99%の割合がⅢ群土器である。そのほかⅤ～Ⅵ群の破片がわずかである。したがって、主体となる土器群は出土量の多いⅢ群土器（大木8a式併行）とする。

SK429土坑出土土器（第３分冊第117図・第４分冊写真図版375）　総重量692.4 ｇが出土する。このうち１点を掲載した（図化率18%）。754は器形５を呈する深鉢である。緩やかな波状口縁で、口縁部は無文である。頸部以下の区画、文様は隆沈線が主体である。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は567 ｇがあり、文様が判別できる破片は189 ｇである。内訳は、ほぼⅢ～Ⅳ群のみで、Ⅳ群に近い方が多くを占める。したがって、掲載土器、不掲載土器から、本遺構の主体となる土器群は、Ⅳ群（大木8b式併行）とする。

SK440土坑出土土器（第３分冊第117図・第４分冊写真図版375）　総重量70.7 ｇのみ出土している。このうち１点を掲載した（図化率91%）。755は深鉢の口縁部片である。器形は、波状口縁の器形12を呈する。文様は隆線が主体に描かれている。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は6.4 ｇのみがあり、文様が判別できる破片はない。主体となる土器群は、出土数が少ないものの、Ⅳ群（大木8b式併行）とするほかはない。

SK450土坑出土土器（第３分冊第117図・第４分冊写真図版375）　総重量2,639.2 ｇが出土している。

このうち１点を掲載した（図化率 91%）。756 は、器形６を呈する深鉢である。文様は口縁部に集中する。２条の隆線で口縁部区画とするもので、内部はC字状の隆帯を貼付する。丁寧にナデつけられており、区画の隆線と一体化している。Ⅲ群４類に分類した。不掲載土器は 234 ｇのみがあるが、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、Ⅲ～Ⅳ群（大木 8a～8b 式併行）とする。

SK457 土坑出土土器（第３分冊第 118 図・第４分冊写真図版 376）　総重量 1,535.6 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 22%）。758 は深鉢の胴部片である。器形は不明である。沈線による曲線状の区画内に充填縄文が施される。Ⅵ群であろう。不掲載土器は 1,196 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 236.0 ｇである。内訳は、無文（91%）、Ⅴ～Ⅵ群（９%）である。主体となる土器群は掲載土器からⅥ群（大木 10 式併行）とする。

SK468 土坑出土土器（第３分冊第 118 図・第４分冊写真図版 376）　総重量 421.1 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 99%）。759 は深鉢の口縁部片である。山形の波頂部の破片で、大きく外傾する口縁部であることから器形１と想定される。波頂部から垂下する縄文原体押圧文を起点に、沈線文が配される。また、口縁端に沿って原体押圧文と原体押圧された波状の隆線が貼付される。これらの特徴からⅡ群に分類した。不掲載土器は 3.7 ｇのみであり、文様を判別できる破片はない。主体となる土器群は、ほぼ掲載した１破片のみの出土のため混入の可能性もあるが、便宜的にⅡ群（大木 7b 式併行）とする。

SK471 土坑出土土器（第３分冊第 118～124 図・第４分冊写真図版 376～379）　総重量 26,411.7 ｇが出土している。このうち 11 点を掲載した（図化率 94%）。760 は堆積土の上層から中層にかけて出土した深鉢である。底部が欠損しているが、器形 14 を呈する。細かな波状口縁を呈し、口縁部は無文となる。頸部以下は、沈線文が主体で、３条１単位の直線文と波状文が描かれる。堆積土上層から出土したものである。Ⅳ群とした。761～763 は器形 12 を呈する深鉢である。761・762 は長い胴部を有するなど形状が類似する。文様は、渦巻文をモチーフとするが、761 が隆沈線主体、762 が隆線主体に施文されるなど微妙に異なる。761 はⅣ群に、762 はⅢ群に分類したが、共伴することからいずれもⅣ群なのかもしれない。763 は 761・762 よりも小さく、２単位の変則的な波状口縁（突起）を有する。文様は、隆沈線主体であり、口縁部区画内に隆沈線で渦巻文を描く。頸部はミガキが施され無文となる。胴部は３条１単位の直線文、１条の波状文を配す。胴下半には、３条１単位の縦方向の直線文と両脇に縦方向の波状文を組み合わせたものを５単位に配置する。Ⅳ群に分類した。なお、763 は堆積土下層からまとまって出土した土器群のなかでもやや浮いた状態（より上層）で出土したもので、深鉢の下半部（764）と合わせ口状に設置されていたものである。764 は、深鉢の胴部下半部である。口縁部は欠損しており、分類は不明である。767 は器形 14 を呈する深鉢である。口縁部はミガキが施され無文となる。頸部との区画は隆線によってなされ、胴部以下は地文のみである。Ⅲ群４類であろう。765・766・768～770 の５点はいずれも器形６を呈する深鉢である。766 のみは小型品である。いずれの口縁部も２条の隆線で区画するが、766 のみは別である。頸部以下の文様は、沈線文が描かれるもの（765・766）と地文だけのもの（768～770）がある。沈線文は、３条１単位の平行文、２条１単位の波状文、２条と３条１単位の垂下文が施される。768～770 はⅢ群４類、それ以外はⅣ群（１類）に分類した。合わせ口の土器もあり、単なる一括廃棄であるか疑問であるが、まとまって出土する点は重要と思われる。不掲載土器は 1,668.0 ｇあり、このうち文様が判別できる破片は 384.1 ｇである。いずれも口縁部区画の隆線が確認できるもので、Ⅲ～Ⅳ群である。これらの土器は、Ⅲ群かⅣ群のいずれかに分類するか迷うものが多い。掲載土器では、ほぼ大木 8b 式古段階併行にまたがる土器が多いことから、主体となる土器群は、Ⅳ群（１・２類）（大木 8b 式古段階併

行）とする。一括性が高いこともあわせ、この状況が、Ⅳ群の古い段階の様相を示しているかもしれない。

SK472 土坑出土土器（第３分冊第 124 図・第４分冊写真図版 379）　総重量 828.5 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 28%）。771 は器形５を呈する深鉢である。口縁端部に隆線を貼付するが、それ以外は地文のみである。不掲載土器は 594.3 ｇ、このうち文様が判別できる破片は 98.3 ｇである。すべてⅣ群の破片である。文様が判別できる破片が少ないが、判別できるものはⅢ群であることから、主体となる土器群はⅢ群（大木 8a 式併行）とする。

SK500 土坑出土土器（第３分冊第 124 図・第４分冊写真図版 379）　総重量 645.9 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 85%）。772 は深鉢の胴部片である。口縁部が欠損するため器形は不明である。不掲載土器は 97.8 ｇ、このうち文様が判別できる破片は 33.6 ｇのみである。内訳はすべてⅤ～Ⅵ群土器の破片である。出土量が少ないが、主体となる土器群はⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）としておく。

SK505・507 土坑出土土器（第３分冊第 124 図・第４分冊写真図版 379）　近接する SK505 と SK507 の検出作業中に出土した土器で、各遺構に分離できなかったため一括したものである。総重量 641.8 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率５%）。773 は深鉢の口縁部片である。小型の器形 14 を呈する可能性がある。口縁部には隆線による区画が施される。Ⅲ群（４類）に分類した。不掲載土器は 608.4 ｇ、このうち文様が判別できる破片は 290.3 ｇである。内訳は、Ⅴ～Ⅵ群（57%）、無文（24%）、Ⅲ～Ⅳ群（17%）、Ⅲ群（２%）である。SK505 単独で出土した土器もⅢ群前後とⅤ群前後の土器に２分される。このうち出土量の多い方であるⅤ～Ⅵ群（大木９～10 式併行）を主体とする土器群とする。

SK525 土坑出土土器（第３分冊第 124 図・第４分冊写真図版 379）　総重量 1,395.2 ｇが出土している。このうち４点を掲載した（図化率 69%）。774 は器形５の深鉢で、口縁部は隆線で区画される。頸部以下は地文のみである。Ⅲ群であろう。775 は深鉢の胴部片である。口縁部が欠損しているが、器形６を呈する可能性がある。胴部の文様は沈線文を主体とし、２条１単位の波状文、３条１単位の平行文、渦巻文が描かれる。Ⅳ群に分類したがⅢ群の可能性もある。776 は器形 12 を呈する小型の深鉢片である。口縁部は隆沈線によって区画された内部に文様が描かれる。頸部はミガキが施され無文となる。頸部と胴部の境には４条の沈線による平行文、胴部には隆沈線による渦巻文の一部が確認できる。Ⅳ群に分類した。777 は浅鉢である。口縁部は波状で隆線による口縁部区画を有す。頸部以下は隆沈線による文様が施されることからⅣ群としたいが、区画文風であることからⅤ群に含まれるかも知れない。Ⅳ～Ⅴ群とする。不掲載土器は 437.5 ｇ、このうち文様が判別できる破片は 195.5 ｇである。すべてⅢ群である。主体となる土器群はⅢ～Ⅳ群土器（大木 8a～8b 式古段階併行）とする。

SL1 炉出土土器（第３分冊第 124 図・第４分冊写真図版 379）　総重量 234.9 ｇが出土している。このうち１点を掲載した（図化率 13%）。778 は深鉢の口縁部片である。器形 14 を呈する可能性がある。口縁部は隆線により区画され、内部は無文である。頸部以下は隆沈線による文様が施されている。Ⅳ群に分類した。不掲載土器は 203.6 ｇあり、無文土器の口縁部 23.6 ｇ以外は地文だけの胴部片である。主体となる土器群は、出土量が少ないがⅣ群（大木 8b 式併行）としておく。

（３）包含層出土土器

包含層１出土土器（第３分冊第 125～171 図・第４分冊写真図版 380～402）　総重量 917,788.7 ｇが出土している。このうち 289 点を掲載した（図化率 14%）。779～782 は器形１を呈する深鉢である。

以降、器形ごとに記載する。779・780 は口縁部片で、大きく外傾する形状である。文様はいずれも半截竹管を使用して描かれており、波状文や弧線文、刺突文が施される。779 は２破片に分かれているが接合しない。幅広の隆帯が縦方向に貼付され、指頭圧痕（爪形）が残る。781 は小破片であるが、同様の形態を呈すると想定したが、器形３のようにわずかに外反する口縁部かもしれない。782 は深鉢の胴から底部の破片である。かなりの大型品で、底径で 26 ㎝ある。胴中位付近に縦方向に隆帯が貼付され、竹管による押し引き文が施される。地文は羽状縄文である。いずれもⅡ群（１類）であろう。783～788・794 も口縁部が外傾する器形１を呈するもので、Ⅱ群（２類）に分類した。口縁部片である 783～785 は山形の大波状を呈し、沈線で細長く囲まれた内部に刺突が施される。785 の文様は簡略化されており、新しい時期のものかも知れない。785 は底部まで完形に残る。787・788 は胴上半部まで残存する。文様は口縁部に集中し、縄文原体押圧文が主体である。785 は隅丸三角形状の区画内に弧線文をはじめとする文様が描かれる。787 は破片であり、全体の文様構成は不明である。788 は器形２の可能性もある。794 はⅡ群（２類）に分類した浅鉢であろう。789～793・795～798 は、器形 1B を呈する。口縁部が、器形１とは異なり、内湾しながら立ち上がる形状である。792 以外はすべて口縁部片である。文様は、①沈線文が主体のもの（789～791・797）、②縄文原体押圧文が主体のもの（792・798）、③沈線文と縄文原体押圧文が組み合わさるもの（793）、④隆線（加飾隆帯）と縄文原体押圧文が組み合わさるもの（795・796）の４種がある。これらの口縁部は大波状だが、いずれも台形状を呈する。①～④ともⅡ群（２類）に分類した。このうち①の破片には全体の文様構成が不明のため、あるいはⅢ群のものが含まれる可能性がある。799～809 は、器形２を呈する深鉢で、Ⅱ～Ⅲ群に分類した。器形２は、底部から口縁部まで直線的に開く形状であるが、微妙に屈曲する場合もあり区別が難しい個体がある。文様は口縁部に集中し、いずれも類似した構成である。①２条の縄文原体押圧文（平行文）のみを施すもの（801～805）、②口縁部は２条の原体押圧文（平行文）にＣ字状隆帯や突起を貼付し、頸部には１条の直線文や波状文を押圧するもの（807・808）、③先述②の原体押圧文が沈線に置き換わったもの（800・806・809）、④刺突文列が施されるもの（799）の４種がある。これらは、文様構成が単純であり、Ⅲ群の古い段階と区別することは難しいが、器形で区別できるかもしれない。分類が難しいもののうち、809 は沈線文で渦巻風の円文を描くもので、頸部には刺突列が施される。器形１と区別が難しく、とりあえず器形２としたが異なるかもしれない。また④の刺突文のみが施される場合、どの分類に属するか判断が難しい。799 はとりあえずⅡ群の範疇に含めた。810～817 は、Ⅱ～Ⅲ群に分類した深鉢で、器形３を呈する。口縁部がやや外反する器形であり、この部分を中心に施文される。文様は、竹管文が主体のもの（810）、原体押圧文が主体のもの（811・814・816）、口縁部を隆線で区画し、その内部に原体押圧文が施文されるもの（813・817）、沈線文が主体のもの（812）、口縁端部に原体押圧文が施された隆線を貼付するもの（815）の５種がある。これらのうち頸部に文様が確認できるものには 812・813・816 があり、沈線や原体押圧文で波状文や懸垂文が施される。胴部は地文のみである。文様構成は、器形２・３のものと同様のものがある一方で、沈線文主体のものや隆帯による口縁部区画が施されるものなどが新たに確認できる。そのため基本はⅡ群に分類したが、Ⅲ群の古い段階（１・２類）のものを含んでいると考えた。818～833 は、Ⅱ～Ⅲ群に分類した深鉢で、器形４を呈する。口縁部が短く外方へ屈曲する形状である。821 は器形２か３の可能性もある。文様構成は、器形３と類似するものが多い。①横位の縄文原体押圧文が主体のもの（819・820・831）、②沈線文主体のもの（818・821・824・826・832）、③原体押圧文と沈線文（隆線文）が組み合わさるもの（822・823・825）、④口縁部を隆線２条で区画するもの（827・828・833）、⑤刺突列が施されるもの（829・830）がある。②には、沈線で口縁部を区画する

ものに 818・821 などがある。区画内は波状文（818）や斜位短沈線文（821）がある。821 のような短沈線はⅡ群１類の可能性がある。頸部には、沈線による波状文が施される例がある（818・824・826）。また、823 の頸部は沈線による細長い区画内に原体押圧による三日月文が連続で押圧される。半截竹管による押引文を置き換えたようである。口縁部を隆線で区画した 827・828・833 のうち、833 は原体押圧文が確認できないことからⅢ群でも新しい段階かもしれない。827 は外反した口縁部を肥厚させて面を形成し、そこに逆Ｃ字状の隆帯を貼付し、LR 原体の押圧を連続して施文するようである。826 は口縁部を欠損した深鉢のため詳細は不明だが、器形３あるいは４を呈する可能性がある。834～838 は、Ⅱ～Ⅲ群に分類した深鉢で、器形 10 を呈する。口縁部がやや内湾するもので、文様はこの部分を中心に施文される。横向きの縄文原体押圧文が主体であり、834・836 の頸部には、波状の押圧文、胴部には１条や２条の原体押圧による懸垂文が施文される。文様構成は先述の器形２の土器と同様である。840～842 は器形５を呈する深鉢である。842 の口縁部は地文のみ、頸部は３条１単位の横位沈線文で区画されているが、内部は地文のみである。胴部は３条１単位の沈線による渦巻文や１条や２条単位の懸垂文が描かれる。沈線主体であるが胴部に文様が展開することからⅣ群に分類した。840・841 は口縁部が狭く、２条の隆線によって区画される。840 は頸部と胴部の境を３条の横位沈線で区画するのみで、それ以外は地文のみである。841 は頸胴部に隆線による懸垂文や渦巻文が描かれる。Ⅲ群に分類した。839・843・844 は器形６（その他）を呈し、Ⅱ～Ⅲ群に分類した深鉢である。口縁部が外反し、胴部が膨らむため器形６の範疇であるが、この３点は口縁が肥厚し端面が形成されている点が異なっている。その面に隆線を波状に貼付する。843・844 はこの隆線に原体押圧を施すが、839 は波状隆線に原体押圧を施さない。その他の文様は、844 はそれ以外の文様をもたず地文のみである。839 は頸部に、隆線と原体押圧文の組み合わせで弧線文などの文様を描く。843 は沈線で重層弧線文を描くが原体押圧文はない。843 や 844 は円筒上層式土器（上層ｃやｄ式）の影響を受けている可能性がある。845 は異なる器形を呈する（器形３や４）と想定されるが、口縁部には原体圧痕をともなった隆帯が波状に貼付されており、839・843・844 と同様に円筒上層ｃ～ｄ式の影響を受けた可能性がある。846～848・850～863・865～873 は器形６を呈する深鉢片である。口縁部のみの破片の場合は別器形の場合がある。このうち 861・869・870 は、小型で細身のタイプである。また、860・868・873 は器形６を間延びした形状である器形７かもしれない。これらは、口縁部の上下を各１条ずつの隆線で文様帯区画を行うものと行わないものの２者に大別でき、前者が多数を占める。前者には、847・848・850～857・859・860・862・863・866・868・870・872 がある。848 以外は２つの隆線の間隔（口縁部区画）が狭く、波頂部に対応した渦巻文以外の文様はもたない。848 は口縁部の間隔がやや広いが地文のみと判断したが、頸部の可能性もある。854・855 のように見かけ上２条の隆線で区画しているように見えるが、幅広の隆線の中央に凹部を設けて２条に見せかけるなど簡略化が進んでいると思われる。後者には、858・861・865・867・869・873 があり、871 は不明である。多く（861・865・867・869）の口縁部はミガキが施され無文となる。858 の口縁部は地文のみである。胴部文様は、沈線文が主体のもの（846・847・850・851・853・854・856・858・860～863・866～870・872）、地文のみのもの（848・852・855・857・859）、隆沈線が主体のもの（865・873）の３種があり、沈線文主体のものが多い。沈線文が主体の土器は、３条１単位の沈線を使用するものが多く、それ以外は２条１単位、１条のみ、それらの組み合わせで文様が描かれる。描かれる文様は平行文、波状文、懸垂文、渦巻文などである。隆沈線による文様は、渦巻文を中心として描かれる。これら器形６を呈すると想定した深鉢は、いずれもⅢ群やⅣ群（隆沈線主体のもの）に分類したが、とくに頸部が無文帯となる土器については、Ⅲ群かⅣ群か区別しがたく、ここではとりあえず

Ⅳ群に含めた。また、胴部に文様が展開しているが、沈線文主体のものも判断が難しくⅢ～Ⅳ群としたものが多い。849・864も器形６を呈する深鉢である。864の口縁部は、２条の隆線によって区画された狭い範囲であると判断した。区画内は渦巻文が描かれる。胴上部は３条の横位沈線（平行文）で上下を区画し、内部には３条１単位の渦巻文が描かれる。胴下部も３条１単位の波状文や２条１単位の懸垂文が描かれる。Ⅲ群（３類）に分類した。849は口縁端部を肥厚させたもので、刻みの施された隆線を波状に貼付する。頸部には対向する弧線文が刻み隆線で描かれる。胴部は沈線による胸骨文風の文様が描かれる。Ⅲ群（２～３類）に分類したが、円筒上層ｄ・ｅ式の影響を強く受けた土器、あるいは円筒土器そのものと考えられる。

874～892は器形11を呈する深鉢で、Ⅱ～Ⅲ群に分類したが、Ⅲ群の方が多い。また、器形12と区別が難しい個体もある。口縁部の形状は、内湾しながら立ち上がり、端部が直口気味を呈するもので、キャリパー形口縁部になる前の段階の器形と思われる。文様は口縁部に集中し施される文様には、①原体押圧文のみのもの（874・877・878）、②口縁部を隆線２条で区画するもの（891）、③原体押圧文と隆線や沈線と組み合わさるもの（875・880・882・883・885）、④沈線文のみのもの（879・881・884・886・888～890）、⑤隆線文主体のもの（887）、⑥隆線文と沈線文が組み合わさるもの（892）、⑦刺突文が施されるもの（876）の７種がある。文様のモチーフは、菱形文や弧線文などの三角形文系（886・889・892）、クランク状文（887）、波状文（879・881・884・890）、楕円形文と三角形文の組み合わせ（888）がある。また、891は隆線による区画文のみで区画内は無文である。胴部は、多くの個体で地文のみであるが、879や889は波状や直線の懸垂文が一部に施される。①・⑦はⅡ群に、②・③・⑤・⑥はⅢ群に、④はⅡやⅢ群に分類した。器形３や４と共通する文様構成をもつものが多いが、隆線や沈線が組み合わさる割合が高くなっている。また、沈線文のみが施される879・881・884は、文様のやや複雑さや器形からⅡ～Ⅲ群の古い段階（１・２類）に位置づけたが、Ⅲ群の新しい段階（３類）の可能性がある。893～962は器形12を呈する深鉢である。これらのうち、923・926・932・938～947などは反転復元できない口縁部の波頂部付近の破片である。この器形は、器形別にみるともっとも数が多い。大きさには大・中・小の３種類がある。口縁部片の場合は除き、大型には912・927～929・949などがあり、小型には913～916・922・924・961などがある。それ以外は中型である。口縁部の形状は大きく平縁と波状がある。また、平縁の中には突起を有する（916・922）ものがある。胴部形状は、底部にむかってすぼまるものと、ふくらむものの２種がある。文様は、ほとんどの場合口縁部に集中する。また、口縁部には隆線や沈線によって、その上下を文様帯区画するものが多い。口縁部区画内の文様は、①沈線主体のもの16点（893・895～897・899・902・906・909～911・927・931・933・937・938・943）、②隆線主体のもの23点（898・904・905・907・908・913・914・917～921・924・926・934～936・939・941・944・945・948・952）、③隆線と沈線の両方組み合わさるもの21点（894・900・901・903・912・915・916・922・923・925・928～930・932・940・942・946・947・950・955・956）、④隆沈線のもの10点（949・951・953・954・957～962）など大別４種がある。各種類のとも山形文、弧線文、波状文、渦巻文、楕円形文、Ｃ字文、矢印文、クランク文などの文様が単独あるいは組み合わせて描かれる。胴部は大多数が地文のみとなるが、一部でも文様が描かれるものが９点（922・926・930・933・948～950・961・962）のみある。このうち頸部文様帯として区別できるものが10点（922・924・933・947～950・955・961・962）あり、これらはⅣ群に分類できる。隆沈線文主体のものと頸部にミガキが入り無文帯となるものはⅣ群に、それ以外のものの多くはⅢ群に分類した。963～986は器形14を呈する深鉢である。Ⅲ群、Ⅳ群に分類したものである。24点があり、すべての口縁部に隆線による文様帯区画が存在する。また、

その区画内は無文のものが多いが、隆線による文様が貼付される個体がある。横向きＳ字文（964・968～971・981）、渦巻文（977・980）、円文（963・967・979・982・986）、細い波状文（966）、蕨文（965）の５種 15 点である。胴部文様は、①地文のみのもの９点（964・979～986）、②沈線文が描かれるもの８点（963・965～971）、③隆沈線で描かれるもの５点（974～978）、④口縁部破片で不明のもの２点（972・973）の４種がある。②の文様には、２条や３条の平行文（区画文）、波状文、渦巻文、懸垂文があり、③の文様には渦巻文、方形区画文、懸垂文がある。①はどちらか限定できないためⅢ群やⅣ群（１類）に、②はⅢ群（966 は無文部を有するためⅣ群とした）に、③はⅣ群に分類した。987～989 は器形 16 を呈する深鉢である。この器形は、器形 14 と胴部形態や文様構成が類似するが、口縁部のみ外傾する点で区別した。989 は口縁部に隆線を貼付して区画を有するもので、４単位ほどの渦巻文やＳ字状の隆帯を貼付する以外は無文である。頸部以下は地文のみである。Ⅲ群に分類する。987・988 はやや小型で、口縁部はナデが施され無文であるが幅が極端に狭い。頸部から胴部にかけた沈線文が主体に文様が描かれる。988 は、器形 16 に含めたが、小破片のため判断が難しいが、器形２を呈するⅡ群の可能性が高い。987 はⅢ～Ⅳ群であろう。990～993 は、胴部が球胴状を呈する器形８・９を呈する壺形の土器である。いずれも全容が知れる個体はない。990・991 は外反する口縁部にはミガキが施され、無文帯となっている。胴部の形状は欠損しており明確ではないが、口縁部の特徴からⅣ群であろう。992・993 は胴部以下の破片であるが球胴状を呈する。文様は胴部下半まで沈線主体の文様が描かれる。Ⅳ群に分類したがⅢ群の可能性もある。996 は器形 17 を、994・995・997 は器形 18 を呈する壺形土器である。996 は球胴状の胴部にやや外反する口縁部をもつ。頸胴部に文様帯を有するが無文で、把手がつく。胴部は縦位の小渦巻文をともなった隆沈線文が描かれる。縦方向の区画ができつつあるため、Ⅵ群の可能性もある。994・995 は小型、997 は大型の壺形土器で器形 14 よりは細長い（縦に長い）形状である。いずれも頸部に把手を有する。995 は胴部に隆線による渦巻文、994 は頸部に隆沈線による渦巻文が描かれる。997 は全面にミガキが施され、ウルシが塗布されている可能性がある（未分類）。998～1001・1007・1008 はⅤやⅥ群に分類した深鉢である。998 は器形 15、1001 は器形７、999 は器形 15、1000 は器形 14 を呈する。1007・1008 は胴部片のため器形は不明である。999 は沈線による楕円形区画が上下２段にわたって描かれる。区画外はミガキによって磨り消される。998 は剥落が大きく、文様の詳細は不明であるが、口縁部には尖った隆線による楕円形区画文が貼付される。1000 は隆沈線による縦長の楕円形区画文が描かれる。1001 はおそらく器形 14 を呈する。尖り気味の隆沈線によって渦巻文が大きく描かれる。残存する区画内には充填縄文が施される。1007 は沈線による縦長の楕円形区画文、1008 は曲線状の区画文がそれぞれ施される。1002～1006 は高さ 10～15 ㎝程度の小型の土器である。口縁部を欠損するものが多く、器形の全容は知れないが外反する口縁部が多そうである。胴部はふくらむものやすぼまるものの２種類がある。胴部に描かれる文様は、沈線文（1002・1004・1006）、地文のみ（1003・1005）の２種類がある。1003 は口縁部（頸部）に隆線文が描かれる。1002 の底部は穿孔された可能性がある。いずれもⅢ群に分類した。1009～1016 は、深鉢の胴部片である。いずれも口縁部が欠損するため器形は不明である。文様で分けると、①縄文原体押圧文が主体のもの（1009・1010）、②沈線文主体のもの（1011～1013・1016）、③隆線文主体のもの（1014）、④隆線と沈線文が組み合わさるもの（1015））となる。①をⅡ群に、それ以外をⅢ群に分類した。1017～1024 は地文のみが施される無文土器である。1017・1018 はやや内湾する口縁部を、1019 はやや外反する口縁部を、1021 はキャリパー風の口縁部をそれぞれ有す。1020・1022・1024 は胴部片である。1023 は小型の深鉢である。1025～1051 は、浅鉢である。1025～1035 はⅡ～Ⅲ群の古い方の文様をもつ浅鉢である。底部から口

縁部までの形状が、直線的に開く形のもの（1025・1027・1031・1034）と内湾傾向にあるもの（1026・1028～1030・1032・1033・1035）の２つがある。文様は大別すると、隆線に縄文原体圧痕文が伴うもの（1026・1034・1035）、縄文原体圧痕文にＣ字状や懸垂文状の隆帯が貼付されるもの（1025・1029・1030）、原体圧痕文のみのもの（1027・1028・1030・1033）、無文のもの（1031）の４種に分けられる。1035 は口縁部の傾斜度、文様構成（頸部に施文）などから浅鉢と判断した大型品である。1036～1048 は、Ⅲ群の新しい方～Ⅴ群に分類した浅鉢である。器形は、口縁部の内湾が強いものがほとんどであり、1048 のみ口縁部が外傾傾向である。文様は、文様帯区画文を含め隆線文が主体のもの（1036～1045）、隆沈線文が主体のもの（1046・1047）、沈線文が主体のもの（1048）があり、隆線文主体のものが多い。隆線文が主体のものはⅢ群に、隆沈線文が主体のものはⅣ群に、沈線文が主体のものはⅤ群に分類した。1043 はⅢ群としたが、胴部にミガキが施されており、1046・1047 と類似する特徴からⅣ群の可能性もある。1049～1051 は無文土器の浅鉢である。1051 以外はミガキが施され、地文もない。1051 は浅鉢というよりも皿形に近い。1052～1054 は器台の破片である。完形に図上復元できるものは 1052 のみである。高さが低いものが多いが、1054 はやや高い形状である。また 1054 は円形の透かしが穿たれている。1055 は底部片である。木葉痕が残っている。1056～1060 は北陸系の土器と考えられる深鉢である。15 破片が出土しており、そのうち小破片を除く 12 点を図示した。掲載した土器についても破片であり全容は不明である。想定として、接合はしないが５個体に復元（分類）した。1056 は５破片が同一個体と想定される（別に不掲載の２小破片あり）。筒形の胴部に皿形の口縁部が載るような形態である。半截竹管による半隆起線や半截竹管による格子文などが施される。1057 は深鉢の頸部付近の破片で、２破片が同一個体と推定した（このうち１点は小破片のため不掲載）。口縁部はキャリパー形のように内湾するであろう。頸部には、半隆起線文による横位の平行文とその間を蓮華文状の文様（楔形刻目文）が沈線により施される。1058 は１破片のみで、口縁部がやや外反する円筒形を呈する深鉢と予想される。頸部は半隆起線文、口縁部はミガキが施される。1059 は２破片が同一個体と推定した。器形は 1058 と同様であろう。半隆起線文２条で口縁部の文様帯区画とし、その間に蓮華文状の沈線（楔形刻目文）が施される。1060 は３破片が同一個体と推定した深鉢である。いずれも底部片であるが接合しない。その形状から 1056 と同様器形を呈するが、器表の状態が異なることから別個体とした。これら５点は、その文様の特徴から北陸地方の中期前葉の土器群である新保・新崎式の範疇に含められると想定している。

不掲載土器は 786,503.8 ｇ（約 787 kg）あり、このうち文様が判別できる破片は 244,352.0 ｇである。内訳は、割合の高いものから順に、Ⅲ群（64％）、Ⅳ群（11％）、無文（８％）、Ⅲ～Ⅳ群（7.2％）、Ⅱ～Ⅲ群（3.8％）、Ⅴ群（2.3％）、Ⅱ群（大木 7b 式併行）（1.4％）、Ⅱ群（大木 7a 式併行）（0.7％）、Ⅲ群（大木 8a 古段階併行）（0.7％）、Ⅱ～Ⅲ群（0.3％）、Ⅳ～Ⅴ群（0.2％）、Ⅳ群４類（0.1％）、Ⅵ群である。包含層１から出土した土器の主体はⅢ群（大木 8a 式併行）となる。次いで多いⅣ群をあわせると９割近くになる。掲載土器を含めて概観すると、Ⅱ～Ⅳ群（大木 7b～8b 式併行）までで、Ⅴ群以降（大木９式併行）が少ないという特徴がある。

包含層２出土土器（第３分冊第 172～223 図・第４分冊写真図版 403～432）　総重量 1,230,806.9 ｇが出土している。このうち 432 点を掲載した（図化率 12％）。1061～1076 は器形１を呈する深鉢である。破片資料が多く、全形がわかる個体が少ないため、いくつかの別器形を含む可能性がある。1063 は器形４の可能性があり、1066・1067・1075・1076 は器形１の中型品である。それ以外は大波状口縁を呈する比較的大型の深鉢と考えられる。多くが外側に大きく広がるが、そのなかでも 1069・1070 はあまり外に開かない口縁部形状である。分類は、Ⅱ群としたが、一部Ⅲ群も含まれる可能

性がある。文様はいずれも口縁部に集中して描かれている。この文様には、①沈線による山形や楕円形区内に沈線文や刺突文で充填するもの（1064～1066・1068・1072・1074・1075）、②地文や原体押圧、刺突や刻みの施された隆線を貼付文とするもの（1061・1062・1069～1071・1073）、③原体押圧文のみが施されるもの（1076）、④頸部に刺突列が施されるもの（1067）、⑤竹管文（1063）の５種類がある。1077～1088は、器形２を呈する深鉢である。基本的に底部から口縁部にかけて直線的に開く器形であるが、後述の器形３と区別が難しい個体も多い。わずかに胴部が膨らむ1082や1079・1084などは器形３の可能性もある。文様は比較的単純なものが多く、①縄文原体押圧文が主体のもの（1078～1086）、刻みの施された隆線を貼付するもの（1077）、③沈線文が施されるもの（1087・1088）の３種類がある。①は口縁部に２条ないし３条の平行文を描くもので、頸部に波状文（連続弧線文）が施されるものもある。原則的にはⅡ群に分類した。③はその原体押圧文が沈線文に置き換わったもので、Ⅲ群の可能性がある。②もⅡ群の可能性がある。1089～1101は、器形３を呈する深鉢である。器形２に比べて口縁部がやや外反する。外反度が少ない個体は器形２との区別が難しい。1095・1098は小型で内湾気味のため別器形の可能性がある。描かれる文様は、①縄文原体押圧文が主体のもの（1089～1092・1097）、②沈線文主体のもの（1093～1095・1098～1101）、③刻みの施された隆線を貼付するもの（1096）の３種類がある。このうち1097・1098・1100には主体文様に加えて隆線文が施される。このため、これらはⅢ群の古い段階（２類）と想定される。それ以外のものはⅡ～Ⅲ群に分類した。1102～1121は、器形４を呈する深鉢である。器形４は器形３よりも外反度が強くより外方へ広がる口縁部を有する。胴部形状は、筒形に近いものやふくらむものの大きく２種類がある。1111・1115などは外方に開いたあとに直線的に立ち上がる形状の口縁部であり、この器形に含めたが、口縁部を肥厚することによって面を形成し、文様帯としている。文様は、口縁部に集中し、描かれる文様には以下の４種がある。①原体押圧文が主体のもの（1104～1106・1108・1111・1113・1115）、②沈線文が主体のもの（1103・1107・1112・1114・1116・1117・1120）、③刻みや原体押圧文が施された隆線を貼付するもの（1102・1109・1110・1118・1119）、④隆線文が主体のもの（1121）である。このうち②の沈線文主体のものはⅢ群としたいが、文様構成的にやや古いものがふくまれることから、ⅡやⅢ群とした。1107は、沈線による区画内を刺突文などで充填することからⅡ群とした。①は器形２や３と同様Ⅱ～Ⅲ群に、③はⅡ群（１類を含む）に、④は隆線が貼付されていることからⅢ群に分類した。1122～1143は、器形５と６を呈する深鉢である。器形５と６は基本的に胴部形態のみ異なっており、胴部がすぼまるものが器形５、ふくらむものが器形６であり、本質的には同一器形であろう。Ⅲ群からⅣ群にかけて確認できる器形である。器形５には1122～1128・1139がある。おもに隆線によって口縁部の上下を区画し、口縁部文様帯とするもの（Ⅰ－①・②・③類）と、上下区画せず無文のままのもの（Ⅰ－④類）の２者がある。前者には1122・1125・1139が、後者には1123・1124・1126～1128がある。前者は２条の隆線の間を口縁部文様帯とするが、C字状の隆帯を貼付するのみで原則無文である。口縁部区画がないものも、地文のみかあるいは、ナデやミガキが施されて無文帯となる。文様はおもに頸胴部に施される。施される文様には、①沈線文主体のもの（1123・1124・1126～1128）、隆線文主体のもの（1125）、③隆沈線文主体のもの（1139）、④地文のみのもの（1122）の４種があり、沈線文主体のものが多い。Ⅲ群やⅣ群の特徴を示していよう。

器形６には1129～1138・1140～1143がある。口縁部の開き具合や胴部の膨らみ具合によって形態的にばらつきがあるものを含む。1131・1132は器形６とは雰囲気が異なることから器形6Bとし区別する。器形６は、器形５と同様に、口縁部の上下を隆線によって区画するもの（1133～1137・1140・

1141）と、区画しないもの（1129・1130・1138・1142・1143）に分けられる。後者は、小型のものが多く、また1142は胴部が若干ふくらむことから器形６としたが、器形５の範疇に含めてもよいかもしれない。そうすると、口縁部区画の無いものは小型のものに限定できるかも知れない。したがって、器形６は原則口縁部区画を有する可能性がある。文様は、頸部から胴部にかけて施されている。施される文様は、①沈線文主体のもの（1130・1133～1135・1137・1138・1142・1143）、②地文のみ（1136）、③隆沈線文主体のもの（1140・1141）、④隆線文主体のもの（1129・1131・1132））の４種がある。①がもっとも多い。④の1131・1132は、大きく膨らむ胴部と外反する口縁部を有する。①はⅢ群とⅣ群に、②・⑤はⅢ群に、④はⅢ群（1129）とⅡ群（1132）、Ⅲ群１類もしくは、５類（1131）に分類した。1131は原体押圧が施された隆線を口縁部に貼付し、頸部から胴上位にかけて隆線で弧線文を描く。1132も口縁部と頸部から胴上位にかけて隆線と沈線による対向の弧線文を描く。ⅡもしくはⅢ群に属するが、1131は円筒上層ｃ式の影響を受けたものであろうか。1144～1162は器形８・９を呈する深鉢あるいは壺である。口縁部に最大径がある器形８と胴部に最大径がある器形９に細分したが区別が困難な個体もある。器形８には1144～1151がある。口縁部から底部まで残存する破片が少ないため、想定で含めたものもあり、Ⅳ群やⅤ群の中におさまる。隆沈線文が主体のもの（1144～1148・1150～1151）と沈線文と磨消縄文が伴うもの（1149）の２種類がある。器形９を呈するものは器形８よりも口縁部が短い傾向にあり、球胴状の胴部を有する。口縁部はナデやミガキが施されて無文帯となるものが多く、文様は胴部に描かれる。沈線文が主体のもの（1152・1153・1155・1156・1159・1162）と隆沈線が主体のもの（1154・1157・1158・1161）、沈線文と磨消が施されるもの（1160）の３種がある。1163～1178の16点は器形11を呈する深鉢である。口縁部が一旦外側に広がり、そのまま垂直に立ちあがる形状を呈する。端部が直口状にならず内湾状になると器形12へ変化すると予想される。そのため、この両者は特徴が類似しており、また分類が困難な個体もある。文様はおもに口縁部に集中する。一部頸部に文様が施される例（1163・1165・1169～1171）もあるが、胴部はすべて地文のみである。施される文様は、①縄文原体押圧文のみが施されるもの（1164・1166・1168・1171）、②縄文原体押圧文に隆線文または沈線文が組み合わさるもの（1170・1172・1173）、③沈線文主体のもの（1163・1167・1169・1174～1176）、④隆線文主体のもの（1177）、⑤隆線文と沈線文が組み合わさるもの（1165・1178）の５種類がある。基本的には、①・②がⅡ群やⅢ群の古い段階（１・２類）、③～⑤はⅢ群の新しい段階（３類）に分類したいが、このなかで1163～1167は施される文様の種類は異なるが、口縁部内にいくつか区画をつくり、その内部を文様で充填していることからⅡ群２類やⅢ群１類の可能性がある。1179～1231は器形12を呈する深鉢である。もっとも数が多い器形である。平縁と波状口縁の２者があり、平縁の方が多い傾向にある。この器形では、ふくらんだ口縁部に対応して、口唇部と頸部との境に隆線や沈線を配し文様帯区画（口縁部全体を）として画するものが多い。口縁部の上下を画するものが主体であるが、頸部の境のみ配するものもある。この区画された内部に集中して施文される。施される文様は以下の５つに大別できる。①隆線と縄文原体押圧文を組み合わせるもの（1180～1182）、②隆線文と沈線文を組み合わせるもの（1179・1183・1185・1187・1190～1192・1200・1201・1203・1204・1208・1210・1213・1215）、③沈線文主体のもの（1186・1188・1194・1195・1198・1205・1209・1212・1214・1216）、④隆線文主体のもの（1184・1189・1193・1196・1202・1206・1207・1211・1217・1220・1221・1223・1224）、⑤隆沈線文主体のもの（1197・1199・1218・1219・1222・1225～1231）である。文様のモチーフとしては、山形文（三角形区画状文）、渦巻文、方形文、波状文、楕円形文、クランク状文などがあり、これらが単独あるいは複合して施文されている。①は基本的にⅢ群の古い段階（１・２類）、②～④

はⅢ群（３類）、⑤はⅣ群に該当するが、次の頸部区画を有する個体は別である。頸部以下の文様は、地文のみが多いが、隆線や沈線で頸部区画が形成されるもの（1217～1222・1224～1227・1230・1231 など）がある。ミガキが施されるものが多いが、地文のままのものもある。これら頸部区画の形成はより後出的と捉え、Ⅲ群の終わりあるいはⅣ群と考えた。胴部は原則地文のみである。沈線文が施される場合もあるが、包含層２ではⅣ群に限られる。以上の点から見ると器形 12 では、古くはⅡ群～Ⅲ群の古い段階からはじまって、Ⅲ群でもっとも数が増える傾向にある。その後Ⅳ群まで続く器形といえる。1232～1263 は器形 14 を呈する深鉢である。この器形は、いずれも口縁部文様帯区画の幅は狭く、文様の中心は胴部となる。平縁と波状口縁の２種類があり、また内湾や内傾する口縁部の傾き度合いもいくつかの種類がありそうである。胴部に施文される文様は、以下の４種類がある。①沈線文主体のもの（1232・1235～1237・1240・1248・1251・1257）、②隆線文主体のもの（1233・1234）、③隆沈線文主体のもの（1238・1239・1241～1247・1249・1250・1252～1256）、④地文のみのもの（1258～1263）である。①の文様モチーフは、波状文が多いが、連結する渦巻文をモチーフとするもものがある。原則的に、前者をⅢ群、後者をⅣ群に分類した。②は数が少ないが、Ⅲ群やⅣ群に分類した。また 1232 は、胴部文様を①にしたが、口縁部内に隆線による波状文が貼付される。③は数多く出土する。おもに渦巻文が中心に描かれる。これらはⅣ群に分類したが、一部Ⅴ群も含むかもしれない。1264～1270 は器形 16 を呈する深鉢である。器形 14 に類似するが、口縁部が外傾するものである。文様構成や文様の種類など器形 14 と同様であり、その器形の含めてもよいかもしれない。口縁部の幅が狭いもので、隆線２条によって区画されているものがほとんどである。1268 のみこれがなく、頸部との境を沈線で画す。小型品であり、別の器形かもしれない。文様は胴部に描かれている。隆沈線文主体のものが多いが、沈線文（1268）、地文のみ（1264）も存在する。ほぼⅣ群に分類される。1271～1295 は、器形７を呈する深鉢である。この器形は、器形６から継続する（派生する）器形と想定している。器形６よりも屈曲部がゆるやかでふくらみが強い器形である。口縁部や頸部などの区別がつきにくい形態であり、文様も器面全体にわたって施されている。描かれる文様は、①沈線による縦長の楕円形区画文（1272～1279・1281）と②沈線による曲線状の区画文（1280・1282～1294）の２者に大別される。区画内の施文方法には、前者は磨消技法が、後者には充填技法が伴う。前者をⅤ群、後者をⅥ群に分類した。区画内には棒状工具による刺突で充填する場合もある。そのほかの文様③として、沈線文や刺突列がともなうもの（1271・1285・1295）がある。刺突文のみの場合分類は難しい。また、1271 や 1285 は最花式の可能性もある。1296～1299 は器形 13 を呈する深鉢である。器形 12 が変容し、屈曲部がゆるやかな形状に変化したものと想定する。Ⅴ群以降に確認できる器形である。口縁部と胴部の境界はなく、器面全体に文様が描かれる。施される文様は、①沈線による縦長の楕円形区画文に磨消技法が伴うもの（1296）と②沈線による曲線状の区画文に充填技法が伴うもの（1297～1299）の２者がある。①はⅤ群、②はⅥ群に分類した。1300～1307 は、器形 17・18 を呈する深鉢である。口縁部が短い方を器形 17（1300～1303）、長い方を器形 18（1304・1306・1307）としたが、本質的には同じかもしれない。1305 は胴部片のため不明である。文様構成は、口縁部にはミガキが施され無文となるもの（1300～1303・1306・1307）と隆線で口縁部区画を形成するもの（1304）の２者がある（1305 は不明）。頸部（口縁部と胴部の境）は、隆線を施すもの（1300・1302・1307）、刺突文列（1301・1306）、把手（1303）、不明（1304・1305）がある。胴部文様には、①地文のみのもの（1301）、②沈線文（1300）、③隆沈線文（1302・1304・1305）、④沈線による楕円形区画文（1303・1306）、⑤沈線による曲線状の区画文（1307）がある。①～③はⅣ～Ⅴ群、④はⅤ群、⑤はⅥ群に分類した。1308～1314 は、器高 10 ㎝以下の小型深鉢・壺類（ミニチュア）で

ある。器形はそれぞれ大型の器形の相似形である。器形５（1308）、器形７（1311）、器形 18（1312～1314）、器形 19（1310）、器形９（1309）がある。文様構成も元の器形に類似している。いずれもⅣ群～Ⅵ群の間に分類した。1315～1333 は深鉢の胴部片である。器形は口縁部がないため不明であり、一括して掲載した。胴部（一部頸部）に描かれる文様には以下の５種類がある。①隆線文主体のもの（1315・1320）、②沈線文主体のもの（1316・1317・1319）、③隆沈線文主体のもの（1318・1321～1325）、④縦長の楕円形区画文と磨消が伴うもの（1326～1329）、⑤曲線状の区画文と充填状文が伴うもの（1330～1333）。①はⅢ群、②～③はⅣ群、④はＶ群、⑤はⅥ群に分類した。1334～1363・1365・1367・1368 は、浅鉢である。器形は、底部から口縁部までの形状が、Ａ類：直線的に開く形のもの（1347・1356・1357・1359）とＢ類：内湾傾向にあるもの（Ａ以外）の２者がある。文様は、口縁部の多くが集中する。描かれる文様の種類には、①縄文原体押圧文が主体のもの（1337・1339）、②原体押圧文に隆線が付加されるもの（1334～1336・1338・1340～1342）、③沈線文主体のもの（1343）、④隆線文に刺突文が組み合うもの（1344・1346・1358）、⑤隆線による口縁部区画を有するもの（1345・1347～1352・1356・1357）、⑥隆沈線文が主体のもの（1353～1355・1359・1360）、⑦無文（胴部文様と一体）のもの（1361～1363・1365・1367・1368）がある。浅鉢の場合、頸・胴部に文様が施されるものと無文（地文のみも含めて）のものに分けられる。前者には、縄文押圧文主体のもの（1335）、沈線文主体のもの（1336・1338・1341・1344・1349・1350・1353・1355）、隆沈線主体のもの（1351・1356・1357・1359）、楕円形区画文が主体のもの（1361～1363・1365・1367・1368）がある。①がⅡ群、②がⅢ群の古い段階（１・２類）、③・④がⅢ群の新しい段階（３・４類）、⑤がⅢ～Ⅳ群、⑥がおもにⅣ群、⑦がＶ・Ⅵ群にそれぞれ分類した。

1364・1366 は注口土器の破片である。いずれも細片のため器形は不明であるが、Ｖ～Ⅵ群に分類できるであろう。1369～1400 は、地文だけが施される無文土器の深鉢である。器形は有文土器と共通するものが多いが、異なるものも含まれる。大きく外反口縁と内湾口縁に分けると、前者には、1369～1395 の 27 点がある。後者には、1396～1400 の５点があり、掲載土器では口縁部が外反する器形の方が多い。地文は単節（LR）の縦回転が主体であり、複節や無節、単軸絡条体なども少数ながら確認できる。また、ナデやミガキのみの個体もある。口縁端部はナデが施され、無文となるものがほとんどである。1401～1405 は器高が 10 ㎝以下のミニチュア土器（無文）である。多くがナデのみや地文のみであるが、1405 は頸部に刺突列の施された隆線を貼付する。1406～1415 は無文土器の浅鉢である。1406 は口縁部が欠損しているため、この中に含めたが、本来は有文の可能性がある。1413 も同様で、ミガキのあと朱の付着が確認できる。器形は有文と同様に、口縁部は屈曲（内湾）するものと外傾するものの２者がある。施される地文は単節（LR）が多い傾向にある。1416 は深鉢の胴部片である。細片であるが縄文時代前期の深鉢片と推定した。1417～1420 は器台片である。細片であるが、数が少ないため同一個体の可能性もあるものも含めて掲載した。1421～1492 は、縄文土器の底部拓本類である。接合しない底部片であるが、外底面に網代痕や木葉痕、調整痕が確認されることから、その部分のみ掲載した。このほか、痕跡が残るが細片のため図示しなかった破片もある。1421～1467 は、網代痕跡が残存する底部片である。底面全体に痕跡が残る例、中央部がナデ消される例（凹む場合）、外縁部が消される例など痕跡が残る範囲も３種類ある。網代痕には、いわゆる１本越え２本潜り１本送りと呼ばれるもっとも簡単な組み方のものが多い。そのほか１本越え２本潜りのものがある。1462～1463 はナデの痕跡が明瞭に残存する。1467 は痕跡が読み取りにくいが、もじり編み痕の可能性がある。1458 は LR 縄文の回転文が施されている。1468～1490 は木葉痕が残存する底部片である。多くは主脈から左右に細い脈が出ている 1491・1492 はナデで痕跡が滑れている羽

状脈であるが、1487 は平行する葉脈痕が、1488 は根元から放射状に伸びる葉脈痕（掌状脈）である。不掲載土器は 1,080，520.3 ｇ（約 1.08 トン）あり、このうち文様が判別できる破片は 377,348.7 ｇである。内訳を割合の大きなものから順に並べると、Ⅲ群（36.3％）、無文土器（26.5％）、Ⅳ群（12.6％）、Ⅴ群（11％）、Ⅲ～Ⅳ群（5.4％）、不明（２％）、Ⅱ～Ⅲ群（1.9％）、Ⅳ～Ⅴ群（１％）、Ⅵ群（0.9％）、Ⅱ群（大木 7b 式併行・0.8％）、Ⅱ群（大木 7a 式併行・0.4％）、Ⅳ～Ⅵ群（0.3％）、Ⅱ群（大木 7a～7b 式・0.2％）。Ⅲ群（古段階・0.2％）である。そのほか、Ⅰ群や青森県域を中心とする土器（円筒上層式、榎林式、最花式など）は合わせて、0.5％程である。このような内訳をみると、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群までが多くの割合を占める。とくにⅢ群の出土量が多い。Ⅱ群は、３つに細分したが一括すると 1.4％となることから一定の割合を占めている可能性がある。Ⅲ群土器の割合が多いとはいえ、各分類（各時期）の土器がほぼすべて揃っている。包含層２とした範囲は、今回の調査区では遺構数がもっとも集中する北尾根の南側斜面の下部に位置する。しかも、かなりの急傾斜地に立地する。したがって、この年代の幅広い土器群は、これらの遺構から経年的な崩落にともなって流出したものが蓄積したものと判断することが可能であろう。

包含層３出土土器（第３分冊第 224～254 図・第４分冊写真図版 433～453）　総重量 920,700.7 ｇが出土している。このうち 256 点を掲載した（図化率９％）。1493～1525 は、器形１を呈する深鉢である。この器形は、口縁部の形態からさらに２つに細分できる。器形 1A は口縁部が外傾するもので、大波状口縁を呈するもの（1493・1494・1496・1498～1502・1519）がほとんどであるが平縁のもの（1497）もある。器形 1B は口縁部がやや内湾しながら開く形態を呈し、波状口縁のもの（1503・1504・1509・1511～1514・1517）、平縁のもの（1505・1507・1508）がある。このほか、器高がおおよそ 30 ㎝以下の中型品には、1510・1515・1516・1518・1520～1525 がある。器形的には器形 1B である。破片が多く全形が不明のため、さらにいくつかの形態を内包している可能性がある。この器形１の深鉢は、今回の調査では出土量が少ないが、包含層３からはある程度まとまって出土している特徴がある。描かれる文様は、おもに口縁部に集中しており、大きく４種類がある。①刻み目の施された隆線（帯）を貼付文とするもの（1493・1494・1496・1497・1499・1503・1505・1509・1510・1514）、②沈線文が主体（まれに隆線が伴う）のもの（1495・1498・1500・1502・1504・1506・1511・1512・1517・1519～1522・1524・1525）、③縄文原体押圧文（と隆線文）が主体のもの（1501・1513・1515・1516・1518・1523）、④半截竹管文が主体のもの（1507・1508）である。①は、波頂部から刻み目を伴った隆帯を縦位に貼付するもの（1494・1499・1503・1514）が特徴的である。また、①・②のなかには隆線の貼付の代わりに沈線文を波頂部から垂下させるもの（1495・1500・1504・1509・1511・1517・1519）や 1518 のように原体押圧文を伴った隆線が垂下するものなどがある。平縁ものは５点のみであるが、1518 以外は半截竹管文が施される点が共通する。②には、上述の波頂部から続く垂下文のほかに、楕円形区画（波頂部の形状に合わせた三角形状区画）内に（多くは４単位）、沈線文で充填するものの２者がある。③は小型品が多く含まれ、原体押圧文による菱形状の区画内に原体押圧文を充填するものが多い。これらの多くはⅡ群に分類したもので、器形と合わせてこの遺跡でもまとまって出土する土器の中では最も古い。また、1514 はⅡ群１類とするが、原体押圧文が多用されることや円筒上層 a 式の可能性もあり、分類が難しい。

1526 は、器形０を呈する深鉢である。破片であり全形は不明であるが、上半部の形状から筒形の脚部がつく器形を想定した。文様は口縁部に集中し、２段の平行沈線内に、１段ずつ沈線による波状文が施されている。また口縁部には把手が取り付けられている。Ⅱ群に分類した。この器形は１点のみである。1527～1540 は器形２を呈する深鉢である。Ⅱ群～Ⅲ群の古い段階までを含む。口縁部が

外反（傾）せず、底部からそのまま外側に開く器形である。1540 は形態的にこの器形に分類したが、文様の特徴から器形６に分類すべきかもしれない。また、口縁部破片が多いため、実際にこの分類に当てはまらない個体の可能性もある。この器形は基本的に平縁を有すると考えられるが、小突起を有する例が多い（1529～1535）。文様は、器形的に口縁部や頸部・胴部との境界が不明であるが、文様が描かれるのは口縁部に集中している。施される文様は、以下の４種類がある。①竹管文が主体のもの（1527・1528）、②刻みが施された隆線（帯）を貼付するもの（1531）、③縄文原体押圧文が主体のもの（1529・1532～1536・1537・1539・1540）、④沈線文が主体のもの（1530・1538・1540）である。①は沈線（竹管）による細長い区画内に、押引き文や波状文を施した区画を幾何学的に配置することを特徴とする。Ⅱ群１類に分類した。②はⅡ群２類に分類したが、１類の可能性もある。③は８例ある。平行に２条押圧した文様のものが多く、Ⅱ群（２類）に含まれよう。また、③には隆線が伴う例（1529・1539）があり、後出的な可能性がある。④は、③の原体押圧文を沈線に置き換えたもの（1538）や交互刺突と組み合うもの（1530）などがある。Ⅱ群やⅢ群に含まれる。1540 は、文様構成がⅢ群でも新しい段階以降のものであり、この器形ではほとんど組み合わされることがない。そのため、別器形の可能性がある。1541～1561 は器形３を呈する深鉢である。口縁部がわずかに外側に出るものを一括しているため、口縁部の形態には外反・外傾・内湾しながら立ち上がるなどわずかな差がある。1560 は器形 11 の可能性もある。文様は口縁部に集中しており、３種に大別できる。①平行沈線間を沈線で充填するもの（1541・1542・1545～1548・1554・1556・1560）、②竹管文が主体のもの（1543・1544）、③縄文原体押圧文が主体のもの（1543・1549・1553・1555・1557～1559・1561）である。①のうち短沈線によるものは１段のものや２段のもの、矢羽根状などいくつかの種類がある（1541・1542・1546～1548・1554）。1545 は山形文で充填する。これらはⅡ群に分類した。1556・1560 は、平行線と波状文の組み合わせであり、文様構成自体はⅡ群と思われるが、沈線に置き換わっているため後出的かもしれずⅢ群の可能性もある。②は口縁部の細片のみであるため文様構成全体が不明であり、別の文様に包括される可能性がある。Ⅱ群に分類した。③には、隆線文を伴うもの（1561）が含まれる。Ⅱ群とⅢ群の古い段階に分類した。1558 は器形的にここに分類したが、無文土器の可能性がある。1562～1579 は、器形４を呈する深鉢である。器形３より外側に開く口縁部である。鋭く屈曲するものと緩やかに屈曲するものを一括している。文様は、口縁部を中心に描かれるが、胴部に文様が描かれる例もある（1562・1565・1567）。文様の種類には大きく４つがある。①隆線（あるいは沈線）文に縄文原体押圧文が伴うもの（1563～1565・1567～1571・1575～1579）と②縄文原体押圧文のみが施されるもの（1562・1566・1572・1573）、③沈線文が主体のもの（1574）、④原体押圧が施された隆線を貼付するもの（1571）である。①には、ａ隆線による口縁部文様帯区画（口縁部の上下を隆線によって画す）を施すもの（1575・1578）、ｂ隆線によって区画された（小区画）内を縄文原体押圧文で充填するもの（1563・1565・1567・1577・1579）、ｃ押圧文の施された隆線を貼付するもの（1569～1571）、ｄ単なる隆線を貼付するもの（1576）、ｅ沈線を伴うもの（1564）が含まれる。①・②とも縄文原体押圧文が主体となりⅡ群やⅢ群の古い段階に分類した。①のうちｂについてはⅡ群に限定できる可能性がある。また①のうちｃは円筒上層式の影響が及んでいると思われる。③は文様構成的にⅢ群の古い段階に分類したが、新しい段階の可能性もある。1580・1581 は器形 10 を呈する深鉢である。沈線文主体のもの（1580）と縄文原体押圧文のみ（1581）が施されるものの２つがある。前者は横方向の楕円形区画文内に刺突文で充填する。後者は、縄文原体押圧文を２条平行に施すものである。両者ともⅡ群の新しい段階（２類）に分類した。1582～1586 は、器形５や器形６を呈する深鉢である。胴部がすぼまる形態が器形５、膨らむ形態が器形６である。破片資料

が多く、不確かだが、1582・1584 が器形５、それ以外が器形６を呈するであろう。文様は口縁部に集中するものが多いが、1584～1586 は胴部に文様が展開する。口縁部文様帯は、すべてが口縁部の上下を隆線によって文様帯区画するもので、頸部無文帯が構成されるもの（1584～1586）と構成されないもの（1582・1584）に分けられる。前者は胴部に隆沈線による文様が描かれ、Ⅳ群に分類した。後者の胴部は地文のみで、Ⅲ群に分類した。1587～1596 は、器形 11 を呈する深鉢である。この器形は、口縁部が内湾するように外側に広がるが端部が直口気味になるものである。端部がさらに内湾すると器形 12 となる。この器形と組列になると考えられる。この器形は平縁のものが多いが突起を有するものがある（1587・1591）。1594 は一部しか残存していないが波状口縁の可能性がある。描かれる文様は口縁部に集中し、次の３種類がある。①縄文原体押圧文を主体するもの（1587・1588）、②縄文原体押圧文と隆線文が組み合わさるもの（1589・1595・1596）、③沈線文主体のもの（1590～1594）である。①のうち 1588 は口縁部の上下端に隆線を貼付し、口縁部文様帯区画とするものである。③は、個別の区画はなく口縁部全体が１つ区画として文様が施される。①はⅡ群、②はⅢ群に分類した。③はⅡ～Ⅲ群のいずれかに含まれるが、ここではⅢ群の古い段階（１類）に含めた。1597～1605 は、器形 12 を呈する深鉢である。遺跡全体ではもっとも数が多く出土する器形だが、包含層３からは少ない。文様は口縁部を中心に展開するが、1602・1604・1605 は胴部にも展開するようである。文様は、①隆線文主体（1597）、②沈線文主体（1599・1600）、③隆線文と沈線文の組み合わせ（1601）、④隆沈線文主体（1602～1605）、⑤無文のもの（1598）があり、個体によって様々である。④はⅣ群に、それ以外はⅢ群に分類した。1606～1630 は、器形 14 を呈する深鉢である。大型のものが多いが、器高 20 ㎝以下の小型品もある（1606～1608・1613・1616・1624・1626）。口縁部文様帯は存在するが、非常に狭くなる。口縁部の上下を隆線によって区画する手法は、1606・1608・1610・1611・1616・1620・1629・1630 などで確認できるが、これ以外は胴部との境（口縁部の下）には、沈線や隆沈線、刺突列などで区画するが、口縁部の上（口唇部）の隆線は無くなるか、あっても強くナデつけられ、わずかにふくらむ程度となる。この口縁部は、ナデやミガキで無文となるものがほとんどである。そのため文様が描かれるのは胴部となる。描かれる文様は４種類があり、①隆沈線によって大渦巻文を中心に描くもの（1606～1608・1610～1612・1614）、②隆沈線によって縦方向の区画に小渦巻文を描くもの（1609・1613 ・1615～1621 ）、③沈線によって縦長の楕円形区画文を描き、磨消技法が確認できないもの（1622～1628）、④無文のもの（1629・1630）である。①の口縁部には隆線による上下区画を有するものが多く、次いで②の中にも若干数がある。①はⅣ群、②・③はⅣ群とⅤ群の間、④はⅢ群４類に分類した。1631～1639 は、器形８・９を呈する深鉢（壺）である。図示した９点はほぼ口縁部に最大径がある器形８であるが。1637 は器形９の可能性がある。また、1640～1643 は、この器形の胴部片と想定した。胴部のふくらみが球胴状を呈するものを集めたが、器形７との区別が難しい個体がある。口縁部の文様帯区画は、胴（頸）部との境には沈線や隆線によって画されるもの（1631～1634 など）と画されないもの（それ以外）がある。後者においては、ナデやミガキによる無文部と胴部の地文部との差で表すこともある。文様は胴部を中心に描かれる。文様は４種類に分けられる。①沈線による大渦巻文が中心に描かれるもの（1631）、②隆沈線による縦長の区画文が施されるもの（1634・1635・1637・1638・1640～1642）、③沈線による縦長の区画文が施されるもの（1632・1633）、④沈線による縦長の区画文と磨消技法が伴うもの（1636・1639）である。①はⅣ群、②・③はⅤ群１・２類、④はⅤ群３類に分類した。1643 はミニチュアでこの分類には相当しないと思われる。時期も不明であるが、中期から後期のものと推定される。1644～1652 は、器形７を呈する深鉢である。器形６よりも屈曲部がゆるやかになる方向に変化したもので、それ

と組列をなすと考えている。掲載した土器はいずれも口縁部の小破片が多く、本来は別器形の可能性があるものを含むかも知れない。とくに 1651・1652 は小破片や小型品であるためこの器形とは異なる可能性もある。口縁部の文様帯区画は、1649（隆線２条を貼付し口縁部文様帯区画とする）を除いてほとんどがなく、そのため文様は胴部が中心である。大きく①隆沈線による区画文と磨消し技法が伴うもの（1646）、②沈線による区画文が主体のもの（1644・1645・1647～1650）、③刺突列が施されるもの（1651・1652）の３種に分けられる。このうち②は区画内の地文の在り方によって細分できる。ａ磨消し縄文（1645・1647・1648）、ｂ充填縄文（1650）、ｃ磨り消されて無文となるもの（1649）、ｄ磨り消されず地文が残るもの（1644）の４種である。①は、Ⅴ群２類、②ａはⅤ群３類、②ｂ・ｃはⅥ群、②ｄがⅤ群１類に分類した。③の刺突文の位置づけは難しいがⅥ群の可能性がある。1653～1655 は、器形 13 を呈する深鉢である。いずれも口縁部の文様帯区画はない。文様は口縁部まで広がった胴部に描かれており、①隆沈線による縦長の楕円形区画を施すもの（1653・1654）と②沈線による楕円形区画を施すもの（1655）の２者がある。いずれもⅤ群に分類したが、①の方が古い様相を示すであろう。1656～1658 は、器形 17 を呈する深鉢（壺）である。次の器形 18 に比べて口縁部が短い。口縁部と胴部との差は、器形の段差をもって行っている。口縁部はミガキやナデが施され無文となり、文様は胴部に集中する。①隆沈線による文様をもつもの（1656・1658）と②沈線による文様をもつもの（1657）の２種類がある。①には 1658 が縦方向の懸垂文が施されて区画をなすが、1656 はそこまで縦方向を意識していないようである。Ⅳ群やⅤ群に分類した。1659～1664 は、器形 18 を呈する深鉢（壺）である。口縁部はいずれもナデかミガキが施され無文帯となる。頸部には把手が付す例（1659・1660・1661）もある。文様は胴部が主体となり、次の３種類がある。①隆沈線による大渦巻文が主体のもの（1659）、②沈線による縦長の区画文（+ 磨消し縄文）が主体のもの（1662・1663）、③沈線による曲線状の区画文（アルファベット文）が主体のもの（1664）。1660・1661 は胴部が欠損しているが、①の可能性がある。②のうち 1663 は一部に隆沈線文による区画が残る。①はⅣ群、②はⅤ群、③はⅥ群に分類した。1665～1669 は、この遺跡の主体である大木系土器とは異なる異系統と考えられる土器をまとめた。1665 は円筒上層ｂ式、1666・1667 は円筒上層ｃ式、1668・1669 は東北南部の縄文土器と推定した。1670～1685 は、浅鉢である。各分類を一括した。器形は、口縁部が外傾するＡ類と内湾するＢ類の２者がある。Ｂ類が多く、Ａ類は 1672・1680 の２点のみである。文様は、口縁部に集中するが、胴部に展開するもの（1680～1682）もある。口縁部から胴部まで合わせて文様の種類は、①竹管文が主体のもの（1670）、②原体押圧文が主体のもの（1671・1676）、③原体押圧文と隆線による区画があるもの（1672～1675・1677・1678）、④隆線文と沈線文が組み合うもの（1681）、⑤隆沈線文が主体のもの（1679・1680・1682～1684）の４種類がある。また 1685 は浅鉢であるがミニチュアと考えられる。③は隆線によって横長の区画がいくつかあり、その内部を原体押圧文で充填するものが多い。1672 は平行する隆線を上下２条貼付し、さらにＸ字状の隆線をその間に貼付する。これは横長の区画が簡略化したものと推定される。①～③はⅡ群～Ⅲ群の古い段階（２類）まで、④がⅢ群、⑤がⅣ群、一部Ⅵ群に分類できる。1686～1711 は、地文だけが施される無文土器である。このうち 1686～1692 は口縁部が外反する深鉢である。1692～1708 は口縁部が内湾する深鉢である。また 1709～1711 は浅鉢である。施される地文は、LR 原体の縦回転が多く、次いで LR の斜・横回転、複節の RLR の縦回転がつづく。使用される原体は単節の LR 原体が主体となろう。このほか単軸絡条体などの原体が使用されている。1712～1714 は、Ⅶ群に分類した深鉢である。1712・1713 は、沈線で文様が描かれる。1714 は頸部が無文となる大型の深鉢である。1715～1717 は器台である。いずれも破片で全容は知れない。1715 は脚部に円形の透かしが穿たれる。

1718～1722はミニチュア形の土器である。1721は器形５と相似形で、それ以外は手づくねで成形されたものであろう。1723は注口土器である。全体をナデやケズリによって調整されている。Ⅴ～Ⅵ群であろう。1724は弥生土器である。沈線による変形工字文の一部が残る。1725から1748の24点は敷物圧痕が残された縄文土器の底部片である。多くは深鉢と考えられるが、他器種も含まれていよう。時期も様々であるが、この遺跡の主体である中期のものが多くを占めると考えられる。残された敷物圧痕は、大きく網代痕（17点）と木葉痕（７点）に分けられる。網代痕は、ほとんどが１本越え１本潜り１本送りのいわゆるゴザ目組のもので、ほかにもじり編み痕などがある。木葉痕も主脈から交互に側脈がでる羽状脈のもののみである。

不掲載土器は833,873.5ｇ（約834㎏）あり、このうち文様が判別できる破片は340,523.4ｇである。内訳は、割合の高いものから順に、Ⅲ群（61.4％）、無文（11.4％）、Ⅳ群（5.7％）、Ⅴ群（５％）、Ⅱ～Ⅲ群（４％）、Ⅲ～Ⅳ群（3.3％）、Ⅱ群（大木7b式併行・2.9％）、Ⅳ～Ⅴ群（2.5％）、不明土器群（1.5％）、Ⅱ群（大木7a式併行・0.7％）、Ⅵ群（0.6％）、Ⅱ群（大木7a～7b式併行・0.3％）、円筒上層式（ｂ～ｅ式・0.2％）、Ⅲ群（２類・0.2％）、Ⅶ群（0.2％）、Ⅳ～Ⅵ群（0.1％）となる。主要な土器群はⅢ群であり、Ⅳ群、Ⅴ群がつづく。Ⅲ群を除けば、相対的に新しい土器群が多い傾向が目立つが、４箇所の包含層の中ではⅡ群の割合がもっとも高い特徴がある。このようにみると、包含層３出土土器は、比較的古い型式の土器群を多く含むことがわかる。掲載土器では、Ⅱ群とⅤ～Ⅵ群のものが多い傾向にあったが、不掲載土器のなかでは半数以上がⅢ群である。この包含層３が重なる遺構（SI33～37など）はこの時期のものがなく、むしろ最も新しい時期（Ⅳ～Ⅴ群）の遺構の方が多い。このことから、Ⅳ～Ⅴ群の土器は、包含層３からの出土が多くても問題はないが、古相を示すⅡ～Ⅲ群の土器群は、該当する遺構がこの範囲に存在しないことになる。本来この谷底にこの時期の遺構があったがⅣ群の時期以降の遺構によって破壊された可能性もあるが、やはり斜面上方（の未調査範囲も含めて）からの流入かつ土器群が示す年代よりも新しい時期での流入の可能性が高いといえる。

包含層４出土土器（第３分冊第255～260図・第４分冊写真図版454～456）　総重量100,022.0ｇが出土している。このうち40点を掲載した（図化率15％）。出土量も少なく調査区外に広がることが予想されることから、掲載土器は、一部の様相を示しているに過ぎないと考えられる。

1749は器形６を呈する小型の深鉢である。口縁部の上下を２本の隆線によって文様帯区画されている。1750・1751は器形10を呈する深鉢である。文様は口縁部に集中し、隆線文主体（1751）と隆線文と原体押圧文を組み合わせるもの（1750）がある。前者がⅢ群３類、後者がⅢ群２類であろう。1752は器形12を呈する深鉢である。隆沈線よる渦巻文が口縁部に描かれている。頸部文様帯は形成されていない。Ⅳ群に分類したが、Ⅲ群の可能性もある。1753～1756は器形14を呈する深鉢である。胴部に文様が展開する器形で、①隆沈線による渦巻文が主体のもの（1756）、②隆沈線による縦長の区画があるもの（1753・1755）、③沈線による縦長区画に磨消し技法が伴うもの（1754）の３つの種類がある。①はⅣ群、②はⅣ～Ⅴ群、③はⅤ群に分類した。1757・1758は器形15あるいは16を呈する深鉢である。この器形も胴部に文様が展開する。文様の種類は①隆沈線による渦巻文が主体のもの（1757）と②沈線による縦長区画に磨消し技法が伴うもの（1758）がある。①がⅣ群、②がⅣ～Ⅴ群に分類した。

1759・1760は器形17を呈する深鉢（壺）である。いずれも隆沈線による連結する小渦巻文が主体であることからⅣ群に分類した。1761・1762は器形18を呈する深鉢（壺）である。いずれも口縁部片であるため胴部以下の様相は不明である。２点とも口縁部の上下を隆線によって文様帯区画を形成

するもので、1761 は無文、1762 は渦巻文や刺突が施される。頸部も隆線によって区画され文様帯が形成されるが無文となる。胴部以下は隆沈線による文様が展開していると推定され、Ⅳ群に分類した。

1763・1764 は器形８・９を呈する深鉢（壺）である。胴部に文様が展開するが、1763 の方は縦型の区画が形成されることからⅤ群に、大渦巻文が主体となる 1764 はⅣ群に分類した。1765～1770 は器形７を呈する深鉢である。口縁部に文様帯区画はなく、胴部文様帯が口縁部付近まで拡張する。描かれる文様は、①沈線による縦長の楕円形区画に磨消技法が伴うもの（1765～1768）と②沈線による曲線状区画（アルファベット文か）に充填縄文が伴うもの（1769・1770）の２種がある。①をⅤ群、②をⅥ群に分類した。1771・1772 は器形 13 を呈する深鉢である。口縁部文様帯と胴部文様帯が一体となる。隆沈線による縦長の楕円形区画文（1771）と沈線による楕円形区画文（1772）に分けられる。後者は低い隆沈線の可能性もある。いずれⅤ群の範疇であろう。1773、1774 は深鉢の胴部片である。朱の痕跡が残されたため掲載した。細片のため器形や分類は不明である。1775 は浅鉢で、口縁部に横位の隆沈線による楕円形区画が描かれる。胴部はミガキが施され無文である。Ⅳ群に分類した。

1776～1783 は、地文だけが施される無文土器の深鉢である。1776・1777 は口縁部が外反する器形、1778～1780・1782 は口縁部が内湾する器形である。1781・1783 は胴部から底部にかけての破片である。施される地文は、単節の LR 原体や、複節の RLR 原体による縦回転で施文されるものがほとんどである。LR 原体が多用される。1785～1788 は敷物圧痕や調整痕の残る縄文土器の底部片である。1785・1787 はわずかしか残っていないが網代痕（いわゆるゴザ目組か）であり、1788 は木葉痕である。1786 はヘラナデが丁寧に施されている。1784 はⅦ群に分類した深鉢である。沈線による文様が描かれる。

不掲載土器は 85,246.2 ｇ（約 85 ㎏）あり、このうち文様が判別できる破片は 35,651.1 ｇである。内訳は、割合の高いものから順に、Ⅳ群（31.4％）、無文（30％）、Ⅲ群（14.2％）、Ⅴ群（13.5％）、Ⅲ～Ⅳ群（5.6％）、Ⅱ群（大木 7b 式併行・1.6％）、Ⅵ群（1.5％）、不明（1.4％）、Ⅳ～Ⅴ群（0.5％）、Ⅱ群（大木 7a～7b 式併行・0.2％）、Ⅱ～Ⅲ群（0.1％）である。Ⅳ群土器と無文土器で６割を占める。不掲載土器の中をまとめると、Ⅲ群以前の土器群は２割、Ⅳ群以降は５割を占める。そのため包含層４の範囲では、Ⅳ群以降が主体となる比較的新しい遺物包含層と考えられる。

遺構外（包含層以外）出土土器（第３分冊第 261～269 図・第４分冊写真図版 457～462）　各遺構や包含層以外から出土した土器は総量 258,992.7 ｇがあり、このうち 97 点を掲載した（図化率８％）。表採したものや検出中に出土したものがほとんどであり、本来はいずれかの遺構に所属した可能性がある。

1789 は器形０を呈する深鉢である。器形０は、出土数が少ないため類型化せず古相を示す器形を一括したものである。口縁部から胴部上半の破片であるが、器形は大きく広がる口縁部と筒形に近い胴部を呈すると想定される。口唇部は欠損しているが、肥厚部が取り付いていたと考えられる。文様は竹管文で対向する半円文が描かれる。口唇部付近には横位の押引文が施される。地文は、オオバコの花茎を回転したものでめずらしい。Ⅰ群２類に分類できよう。1790 は器形１を呈する深鉢である。口縁の波頂部のみの破片である。文様は、沈線文が主体であり、山形の区画内を弧線文や渦巻風の文様で充填しているようである。Ⅱ群に分類した。1791～1801 は、器形３を呈する深鉢である。この器形は口縁部破片のものが多く全形をわかる資料が少ないため、わずかに外傾した口縁部を一括している。そのため複数の器形が混在していると思われるが概して古相を示す器形である。文様は口縁部を中心に描かれており次の５種類に分けられる。①原体押圧文のみが施されるもの（1793～1796・1798）、②原体押圧文に隆線文が組み合わされるもの（1792・1799・1800）、③原体押圧文に隆線文と

沈線文が組み合わされるもの（1801）、④沈線文のみが施されるもの（1797）、⑤折り返した口縁部に刺突文が施されるもの（1791）。①のなかに 1795・1796 などのように口縁部をナデなどによって無文となったところに原体押圧文を施す例があり、Ⅱ群としたが別の可能性がある。また、①には 1793・1794 など縄文原体押圧文で楕円形の区画をつくり、その内部を縄文原体押圧文で充填するようでありⅡ群とした。残りはⅡ群からⅢ群の古い段階（１類）であろう。②・③は、Ⅲ群の古い段階に含まれるかもしれない。④はⅢ群１類に分類したが、３類の可能性がある。⑤はこの遺跡ではあまり類例がなくⅠ群の可能性がある。1802～1805 は器形５を呈する深鉢である。口縁部が欠損するものが多く得られる情報が少ない。1802 は、口縁部に隆線による文様帯区画が施されるが、それ以外は地文のみである。Ⅲ群に分類したがあまり根拠は無い。1803・1806 は胴部に沈線で文様が施される。文様の全体が不明であるが、1804 は大型の渦巻文が施されることからⅣ群に、1803 は、クランク文が確認されることからⅢ群に分類した。1805 は頸部に沈線で平行文が施され、口縁部にミガキが施され無文となるものである。胴部は垂下文と波状文が縦方向に施される。文様自体はⅢ群であるが、頸部が形成され、口縁部が無文となるため、Ⅳ群の古い段階（１類）とした。1806～1808 は器形６を呈する深鉢である。口縁部が欠損するものが多く得られる情報も少ない。胴部文様でみると、無文のもの（1806・1807）と隆線文が主体に描かれるもの（1808）に分けられる。1807 は口縁部の一部に隆線文が確認できる。胴部が無文のものはⅢ群、隆線文が描かれるものはⅣ群に分類した。1809 は器形 10 を、1810 は器形 11 を呈する深鉢である。1809 は沈線で２条の平行文、下位に波状文を施す。Ⅲ群としたが、文様構成はⅡ群に類似する。1810 の口縁部には、原体押圧文による区画文が施される。区画文としたが、一端が閉塞しておらず区画として認識されていない可能性もある。Ⅱ群に分類した。1811～1821 は器形 12 を呈する深鉢である。多くは口縁部に文様が集中する。描かれる文様には４種類がある。①隆線文が主体のもの（1811・1815・1816・1818）、②沈線文が主体のもの（1812）、③隆線文と沈線文が主体のもの（1813・1814）、④隆沈線文が主体のもの（1817・1819～1821）。頸部文様帯が形成されるものは、1818～1821 がある。胴部に文様が展開するものは 1821 のみ確認できる。これらは④の文様が描かれることが多いことからⅣ群に、それ以外はⅢ群に分類した。1822～1825・1828 は器形 14 を、1826・1827 は器形 16 を呈する深鉢である。1824 は隆沈線による渦巻文が連結する文様構成であり、Ⅳ群である。1823・1822 は口縁部に隆線による文様帯区画があるのみで、胴部は地文のみである。Ⅲ～Ⅳ群であろう。1827 は刺突が施された隆線を口縁部に貼付するのみで胴部の様相は不明である。1826・1828 は沈線による楕円形区画が、1825 は沈線による曲線状の区画が確認でき、区画内は無文となる。前者はⅤ群、後者はⅥ群である。1828 は半分のみに文様が描かれるが、残りには沈線による菱状の文様が描かれるのみである。地文も施されず様相が他とは異なる。1831・1832 は器形 17 を、1829・1830 は器形 18 を呈する深鉢（壺）である。①隆沈線による渦巻文が描かれるもの（1829）、②隆沈線による縦方向の区画文を施されるもの（1832）、③沈線による楕円形区画文が施されるもの（1830・1831）がある。①がⅣ群、②・③はⅤ群に分類した。1833～1836 は器形８・９を呈する深鉢（壺）である。いずれの口縁部もナデやミガキが施されて無文となる。1835 は欠損のため不明である。頸部は沈線や隆帯、刺突などで胴部と画される。おもに胴部に文様が描かれるが、沈線による渦巻文（1833・1834）、隆線（隆沈線）によって渦巻文が描かれるもの（1835・1836）の２種類がある。いずれもⅣ群（３類）であろう。1837～1840 は器形７を呈する深鉢である。口縁部破片が多いが口縁部がやや外反する器形である。口縁部の文様帯区画はなく胴部と一体になって文様が描かれる。1840 以外の文様は、沈線による縦長の楕円形区画が施され、外側は地文が磨り消される。Ⅴ群であろう。1840 は沈線による曲線上の区画で、区画内を地文で充填する。Ⅵ群に分

類した。1842 は内湾する器形 15 を呈する深鉢である。文様は、沈線による楕円形区画文を主とするが、一部隆沈線による区画も残っている。Ⅴ群であろう。1841 は深鉢の胴部片である。沈線による曲線状区画文を主とし、区画内が磨り消されている。Ⅵ群であろう。1843・1844 は円筒上層ｃ式と想定した深鉢の口縁部片である。細片のため詳細は不明である。２点は同一個体かもしれない。1845～1850 は、浅鉢である。口縁部が外傾するＡ類は 1846・1850 のみで、残りは口唇部が内湾（内傾）するＢ類である。文様は同部を中心に描かれる。①隆沈線による大渦巻文が主体のもの（1846～1849）と②無文のもの（1845・1850）の２種類がある。①の 1846 は頸部にミガキが施され、胴部に隆沈線の文様のごく一部が程される。この文様帯の組み合わせは深鉢に多いことから、深鉢の可能性もある。②の 1850 は口縁部も無文である。①の文様を有するものはⅣ群、無文のうち 1845 はⅢ群に分類した。1851～1854・1856 は、地文のみが施される無文土器のうち口縁部が外反する器形である。多くは、屈曲部が弱い器形７と同様の器形を呈す。Ⅵ群前後と想定できる。527 は口唇部が折り返され（肥厚し）やや厚くなる。1855・1857・1858・1860 は口縁部が内湾する深鉢である。口唇部にはナデが施され無文となる。1860 は器高 10 ㎝以下の小型品である。1861 は器形８・９のような球胴状の壺である。口縁部が欠損しているが、器形８・９と同様の器形であろう。施される地文は、LR 原体が多く、RLR、LRL 原体も一定量使用される。1859・1862～1875 は深鉢の底部片である。底面に敷物圧痕や穿孔など痕跡が残るものを掲載した。1859・1862～1866・1868～1870・1873 は網代痕である。1873 以外は一本越え一本潜りのいわゆるゴザ目組の痕跡である。1873 は２本越え２本潜り１本送りの網代痕である。1867 は製作時の痕跡か、内底面中央が凹んでいる。。1874 はヘラナデの痕跡かも知れない。1871・1872・1875 は木葉痕が残る。いずれも羽状脈の葉痕である。1876～1884 は深鉢の破片で、沈線文が施されるもので、Ⅶ群に位置づけられるものを集めた。器形や文様の全容は不明である。縄文時代後期前葉前後の時期のものと考えられる。1885 はⅦ群２類の鉢片である。大洞 C2 式に同定できよう。1886 はⅧ群に分類した甕である。頸部から胴上半に沈線による重菱形文が施される。弥生時代中期末～後期初頭前後の時期のものと考えられる。

不掲載土器は、237,313.4 ｇ（約 237 ㎏）が出土している。このうち文様が判別できる破片は、58,931.6 ｇある。内訳は、割合の大きな方から順に、Ⅲ群（37％）、Ⅳ群（17％）、無文（15％）、Ⅴ～Ⅵ群（8.9％）、Ⅴ群（8.1％）、Ⅳ～Ⅴ群（５％）、Ⅲ～Ⅳ群（4.3％）、Ⅱ～Ⅲ群（3.5％）となり、Ⅱ群、Ⅵ群、Ⅶ群が 0.2％以下のごく少量の出土となる。遺構外は、各包含層とは異なって、調査区全体からの出土であることから、各土器群にわたり広く出土する。もっとも出土量が多いのはⅢ群で、包含層と共通する傾向である。各包含層と遺構外出土土器の不掲載土器は、各地点によっては出土傾向や様相が異なっている部分もあるが、全体的にはⅢ群、Ⅳ群、無文土器が上位３位までを占めるなど共通する傾向を示している。（西澤）

4　石器・石製品

概要　今回の調査から出土した石器・石製品類は、合計 769,170.36 ｇ（約 769 ㎏）に及ぶ。これらの時期は、石器単体で時期決定を行うのは難しいが、確率的に土器の主体時期である縄文時代中期中葉前後の時期の石器が多くを占めると想定している。しかしながら、少量でも土器の出土がある縄文時代前期や後期、晩期に所属する石器も、出土例のなかに含まれている可能性があり、この点は注意を要する。出土した石器・石製品の点数は、石器 1,329 点、石製品 78 点の合計 1,407 点である。内訳をみると、石鏃 129 点、石槍４点、石匙 53 点、石錘 41 点、不定形石器 137 点、楔形石器３点、石

核 14 点、石斧類 107 点、磨石類 685 点、石皿・台石類 136 点、砥石 19 点、礫器１点である。そのほか、剥片・チップ類がある。石製品では、石棒 44 点、三角壕形石製品２点、有孔石製品３点、有孔軽石製品 11 点、石錘１点、垂飾品７点、サメ歯形石製品３点、玦状耳飾２点、不明石製品３点、コハク２点である。種別では磨石類がもっとも多数を占め、高根遺跡で使用される石器の主体といえる。掲載した石器類は 548 点であり、磨石類・石皿・台石類以外はおおよそ 60％以上図化しているが、磨石類、石皿・台石類は図化率 30％程度にとどめた。図化した石製品は 63 点であり、図化率 82％である。

ここでは、これらのうち掲載した石器を中心に説明していく。個別的な説明ではなく、器種ごとにまとめて記載するものである。図版も種別ごとに並べており、各種別内は遺構順である。掲載していない石器類については総量のみ第３分冊第 10 表に記載しているのであわせて参照されたい。

（１）石鏃（第３分冊第 270 ～ 273 図、第４分冊写真図版 463 ～ 466）

形態的な特徴から石鏃としたものは、合計 129 点が出土している。掲載したのはそのうち 113 点である（図化率 88％）。石鏃の大まかな形態差（分類）は、３種ある。基部が、平坦なもの（①）、基部が凹部になるもの（凹部が浅いものと深いものがあるが一括・②）、基部が凸部になるもの（③）がある。①には、1889・1892・1896・1898・1908・1910・1912・1914・1917・1918・1931・1943・1946・1950・1954・1958・1977・1980・1981・1990・1995 の 21 点がある。③は、1909・1915・1929・1939・1962・1992・1994・1997 の８点がある。②は、①と③以外すべての 75 点である。そのほか、欠損や未製品により不明なものが９点（1916・1921・1922・1926・1956・1972・1973・1986・1989）がある。時期的な問題はおくが、主体となる形態は②の基部が凹部になるものとなる。使用された石材のほとんどが、にぶい黄橙色から黒褐色を呈する頁岩である。図示した 113 点のうち 110 点が頁岩で、残りは２点が黒曜石、１点が流紋岩である。にぶい黄褐色を呈する頁岩の中では、黒曜石や流紋岩の緑色は色調的にも目立っている。採取される地点は、頁岩は北上山地であることから遺跡付近で採取されたと考えられる。黒曜石はより遠くで採取あるいは交換されたものであろう。ちなみに、黒曜石製の 1979 は分析の結果、北上系とされ、北上川流域のいずれかの地を原産とする（第Ⅵ章参照）。流紋岩は、松山・立丸峠・浄土ヶ浜が産地であるため、頁岩とは採取地点が異なるかもしれない。石鏃の大きさ（計測値）は、最大長 1.7 ㎝～２㎝、最大幅１～２㎝の間におさまるものがほとんどであり、これがこの遺跡の平均的な大きさといえる。最大長が４㎝を超える個体も３点ある（1940・1941・1948）。もしかすると別器種（たとえば石槍）の可能性もあるが、厚さが後述する石槍に比べ薄い造りになっていることから、石鏃の範疇に含めた。全体的な形状は長三角形を呈するものが多く、長さと幅の比率が３：２程度である。少数ながら、長さと幅の差が１㎝以内のもの（２：1.5 程度）は、形状的に正三角形状を呈する。出土した中で最小の石鏃は、1894 で長さ 1.19 ㎝、幅 0.86 ㎝である。これを含む小型品は、長さが１㎝～1.5 ㎝、幅が 1.5 ㎝以下に含まれる（６点）。付着物は、アスファルトが主で、５点が確認できる（1911・1944・1972・1975・1997）。付着箇所は、いずれも矢柄の装着が想定される箇所である。未製品としたものは 11 点あり（1908・1910・1916・1921・1922・1926・1931・1969・1972・1977・1986）、側縁に微少剥離を施す前のものや自然面を残すものなどから判断したが、別器種が混じる可能性もある。出土地点は各遺構内や包含層、遺構外などから出土している。１点のみを出土する遺構が多く、１～５点のものがほとんどであるが、SI66 からは９点が出土している。

（２）石槍（第３分冊第 273・274 図、第４分冊写真図版 466・467）

形状は石鏃に類似するが、石鏃よりも大きく厚い。両面加工され先端が尖る刺突具を石槍とした。４点が出土しており、全点掲載した（2000～2003）。基部が凸型になるもの（2000～2002）と平らになるもの（2003）の２種類がある。2001 の基部は摘まみ状を呈することから石匙の可能性があるが、両面に加工されていることと厚さがあることから石槍に分類した。いずれも基部に付着物の痕跡は確認できなかった。石材はすべて頁岩で、北上山地産と鑑定された。付近で入手できる石材である。大きさは、数が少なく本来の数値ではないかもしれないが、長さ 5.5～7.5 ㎝、幅２～3.4 ㎝、厚さ 0.8～1.4 ㎝の間におさまる。おおむね長さ５㎝、幅２㎝、厚さ１㎝以上のものが平均的な大きさである。出土地点は、竪穴建物から出土した 2000 以外は包含層３からの出土である。

（３）石錐（第３分冊第 274・275 図、第４分冊写真図版 467・468）

剥片の端部に両側縁から小剥離の２次加工が施され尖った刃部を有するものを石錐とした。穿孔する機能を有すると想定される石器である。刃部の断面系は菱形を呈するものが多い。この刃部が欠損するものが多く、本来の形状が不明のものが多い傾向にある。41 点が出土し、このうち 33 点（2004～2036）を掲載している（図化率 80％）。形態的に３種類に大別できる。①細長く棒状を呈するもの、②台形状の頭部を有するもの、③剥片の一端を突出させたもので、頭部と錐部の差が不明瞭なもの、である。①・②は相対的に錐部が長く、③の錐部は太く短めである。①には、2018・2025・2029・2036 が、②には 2004・2006・2008～2017・2019・2020・2022～2024・2026～2028・2030～2032 が、③には 2005・2007・2021・2033～2035 がある。②の形態のものがもっとも数が多い（図示遺物の 70％）。使用される石材は、すべて頁岩である。付着物の痕跡が残る個体はない。大きさは、長さ 2.3～5.29 ㎝、幅 0.72～3.56 ㎝、厚さ 0.35～1.1 ㎝の間に収まる。欠損しているものが多く、長さ５㎝前後が最大となる。平均値は 3.4 ㎝程度となる。形態的に細長い①が、幅狭く、不定型な剥片を使用する③が幅広い傾向にある。②はその中間の大きさである。出土地点別でみると、遺構からの出土は 11 点と少ないが、この中で SI14・37・66 からは複数点出土している。包含層１～３からは 24 点、遺構外からは６点が出土している。このなかでは包含層３からの出土が 11 点ともっとも多い。

（４）石匙（第３分冊第 276～279 図、第４分冊写真図版 469～472）

剥片の一端に摘まみ状の小突起を有し、側縁の一部に刃部を有するものを石匙とした。原則片面からの微少剥離により刃部が形成されるが、両側からの微少剥離（結果的にか）も一定数確認できる。53 点が出土し、このうち 42 点（2037～2078）を掲載した（図化率 79％）。図示した石匙は、①横型と②縦型に２分できる。①には、2038・2042・2051～2053・2060・2063～2066・2074・2078 があり、②はそれ以外の 30 点が該当する。図示した中では、②の縦型の方が多数を占める。なお①には、刃部が摘まみに対して斜行うするもの（2038）も含めている。2049 は摘まみを欠損と判断したが別器種かもしれない。また 2061 は摘まみ部の製作途中（未成品）の可能性がある。使用する石材は、ほぼ頁岩（51 点）である。そのほか黒曜石、凝灰岩製のものが１点ずつ確認できる。大きさは、長さ２～7.1 ㎝、幅 1.63～7.5 ㎝、厚さ 0.47～1.45 ㎝の範囲内にある。縦型・横型ともに、長さが７㎝前後のものが最大となる。平均値は長さ 4.9 ㎝、幅 3.3 ㎝である。付着物の痕跡が残るものには、2037・2049・2050・2055 がある。いずれもアスファルトの油分と考えら、摘まみ部付近に痕跡が残る例がほとんどである。摘まみが何かを接着する部位として機能していたことを示していよう。出土

遺構は、遺構内からは 10 点、包含層や遺構外から 43 点が出土している。遺構の内訳は、竪穴建物から７点、土坑から２点、炉から１点である。包含層の内訳は、包含層１が７点、２が 12 点、３が 11 点、４が１点である。包含層以外では 12 点となる。

（５）刃部を有する剥片（いわゆる不定形石器）（第３分冊第 280～283 図、第４分冊写真図版 473～475）

2079～2114 は、いわゆる不定形石器で、ここでは刃部を有する剥片とした。これは剥片を素材とする石器のうち定形石器ではないもので、刃部を有する剥片を一括したものである。いわゆるスクレイパーや掻器・削器などの機能を有する石器や２次加工や使用痕の認められる剥片、礫器のような厚みのある石器（2111：石核の可能性もある）や三日月形を呈するやや大型の石器（2114）も含められる。また、定形石器の未成品や折損品も含まれる可能性がある。出土数は 138 点であり、このうち 36 点（図化率 26％）を掲載した。形態は様々であり、素材の剥片も縦長のものや横長のもの、剥片の形態が、方形のもの、台形のもの、円形のもの、半円状や三日月状など多様である。こういった平面形態や刃部の形態で分類可能であろうが、ここでは分類を行わず一括している。使用される石材は、133 点（96％）が頁岩である。そのほか、凝灰岩が３点、ホルンフェルス、メノウがそれぞれ１点ずつである。大きさは、長さ 2.28～10.19 ㎝、幅 1.78～8.75 ㎝、厚さ 0.68～2.62 ㎝の間におさまる。形態が不定形であるため大きさにはばらつきがある。平均値は、長さ 4.5 ㎝前後、幅 3.2 ㎝前後、厚さ１㎝前後となる。付着物が確認できるのは 2079 のみで、アスファルトが側面の刃部上に付着している。出土地点別にみると、遺構内からは 54 点が出土している。遺構別にみると竪穴建物跡が 16 箇所、土坑が４箇所となる。他の器種に比べて遺構からの出土が多く、とくに竪穴建物からの出土が多い傾向にある。その他各包含層から 76 点、遺構外から８点が出土している。

（６）楔　形　石　器

いわゆる両極技法が確認できる剥片石器である。３点が出土しているが、図示していない。石材はすべて頁岩であり、竪穴建物跡から１点、包含層から２点が出土している。

（７）石核（第３分冊第 284～287 図、第４分冊写真図版 476）

剥片を得るための素材や剥片を得た残りの部分（残核）である。剥片石器の製作工程や素材獲得の方法を調べる上では重要な資料となる。遺跡からは 14 点が出土し、このうち６点（2115～2120）を掲載した（図化率 43％）。石核はいずれも１面以上に自然面を残すもので、①断面が方形に近く扁平なもの（2117・2119）と②断面が半円や三角形状を呈し、丸みのあるもの（2115・2116・2118・2120）の２つに分けられる。そのほか③として、図示していないが、両極技法が確認できる石核もある。大きさは、①では、４～６㎝×５～７㎝、厚さ２～６㎝の間に、②では、２～７㎝×４～10 ㎝、厚さ 3.5×8.2 ㎝の間におさまる。②のほうが厚みがあり、一回り大きい傾向にある。石材は頁岩が 11 点、凝灰岩・黒曜石・花崗斑岩がそれぞれ１点ずつであり、頁岩がほとんどを占める。出土地点は、竪穴建物から６点、包含層から７点、遺構外から１点である。包含層３やそれと重複する竪穴建物跡からの出土が多い傾向にある。

（８）石斧類（第３分冊第 288～293 図、第４分冊写真図版 477～481）

敲打や剥離などにより成形したのちに、研磨を加えて仕上げられた斧形の石器である。折損するも

のが多いことから機能的にも斧として使用されたと考えられる。高根遺跡から出土した石斧類については、磨製石斧のみである。2123・2128 は打製石斧の可能性もあるが、ここでは磨製石斧の未成品と判断した。107 点が出土し、うち 64 点（2121～2184）を掲載した（図化率 60%）。

形態的に分類すると、①撥形を呈するもの（2134～2157）、②短冊形（方形）を呈するもの（2158～2170）、③小型のもの（2171～2184）、に分けられる。さらに形態とは異なる基準であるが④未成品（2121～2133）を区別しておく。④のうち 2127・2129・2130 などは厚さが扁平であり、石斧とは異なるかもしれない。また、2122・2131 などは磨石の可能性もある。大きさは、①・②・④では、長さ 4.62～16.44 ㎝の間にあり、平均 9.3 ㎝である。幅は 3.66～7.76 ㎝の間にあり、平均 4.9 ㎝である。厚さは 1.65～3.9 ㎝の間にあり、平均 2.6 ㎝である。③では、長さが 3.08～9.9 の間にあり、平均 5.6 ㎝、幅が 1.15～4.94 ㎝の間にあり、平均 2.6 ㎝、厚さが 0.57～1.46 ㎝の間にあり、平均 0.95 ㎝である。石材としては（不掲載も含めて）、蛇紋岩（21 点）、頁岩（15 点）・花崗閃緑岩（16 点）、花崗岩（１点）、ヒン岩（14 点）・砂岩（15 点）・かんらん岩（７点）・はんれい岩（６点）・閃緑岩（６点）・デイサイト（２点）・凝灰岩（２点）・流紋岩（１点）・ホルンフェルス（１点）がある。石斧に利用される石材は 12 種類もあり、高根遺跡出土石器の中では多様な構成を示す。多くは近在から採取できる石材であるが、いわゆるアオトラ石と判断できる石斧（2141・2175）も含まれており、遠隔地からの搬入も想定できる。

出土地点をみると、遺構からは 35 点、包含層からは 59 点、遺構外から 13 点が出土している。遺構は竪穴建物が 30 点、土坑から５点で、竪穴建物跡のうち SI65 からは５点とまとまって出土している。包含層では包含層２から 34 点ともっとも多く出土している。

（９）磨石・敲石類（第３分冊第 294～329 図、第４分冊写真図版 482～509）

摩耗痕・敲打痕・凹痕などの使用痕が残る礫石器を一括した。従来の磨石、敲石、凹石を含めた分類となる。多くは自然礫をそのまま使用したものであるが、加工を施したものもある。特殊磨石と扁平石器（半円状扁平打製石器）については、この分類のなかに入れておく。なお、分類や分析に当たっては、高橋保雄（1992）や上條信彦（2015）を参考にした。遺跡から出土する磨石・敲石類は、合計 685 点になる。このうち 215 点（図化率 31.3%）を掲載した（2185～2385）。石器の中でももっとも出土数が多い種類である。多くの出土土器が縄文時代中期前葉から後期前葉までの間におさまることから、これらの石器についても同様の時期を想定している。磨石・敲石類は、おもに使用痕の種類や組み合わせによって分類する。ただし、特殊磨石と扁平石器についてはこの限りではない。第３分冊・第３表では、不掲載分も含めて使用痕の観察を行っている。表の項目である①表裏面の磨痕、②側縁の磨痕、③表裏面の凹痕、④側縁の敲打痕、⑤端部の敲打痕ついては、以下のような基準で観察した。①表裏面にある磨痕が両面にある場合◎、片面の場合○、ない場合×、②側縁にある磨痕で両側縁にある場合◎、片側縁の場合○、ない場合×（また磨痕には触感がツルツル、ザラザラの２者があることから判断できるものはツル・ザラを併記）、③表裏面にある凹痕（表裏面にある敲打痕は凹痕とする）で両側縁にある場合◎、片面の場合○、ない場合×、④側縁にある敲打痕で両側縁にある場合◎、片側縁の場合○、ない場合×、⑤上下の端部にある敲打痕で両端にある場合◎、一端の場合○、ない場合×とした。⑤にある磨痕と敲打痕の判断が困難な場合が多く、多くは敲打痕に統一したが、ある程度面をなす場合は磨痕と判断したものもある。その場合の表記は×スリである。なお、小破片のため判断できない項目については「－」を記入している。また、H類は、稜線に摩耗面が限定される使用法であるが、他の使用痕も同時に確認できるものがある。その場合はH類を優先してい

る。分類別をみると（不掲載分含む）、Ａ類は磨痕のみが確認できるもので 122 点（うち掲載分は、1285～2220）、Ｂ類は磨痕と凹痕が確認できるもので 49 点（うち掲載分は、2221～2241）、Ｃ類は磨痕と敲打痕が確認できるもので 149 点（うち掲載分は、2242～2267）、Ｄ類は磨痕と凹痕と敲打痕の３種類すべてが確認できるもので 201 点（うち掲載分は、2268～2312）、Ｅ類は凹痕のみで 24 点（うち掲載分は、2313～2334）、Ｆ類は凹痕と敲打痕の２種類で 12 点（うち掲載分は、2335～2344）、Ｇ類は敲打痕のみが確認でき７点（うち掲載分は、2345～2347）がそれぞれ出土する。Ａ・Ｃ・Ｄ類が 100 点以上出土し、この遺跡の主流をなす。三角柱や四角柱などの厚みのある柱状礫の稜に磨痕を有する特殊磨石（Ｈ類）は 32 点（うち掲載分は、2348～2355）、板状の素材を剥離や研磨によって半円形状に整えた石器である扁平石器（Ｉ類）は 89 点（うち掲載分は、2356～2385）が出土している。使用痕別にみると（Ｈ・Ｉ類を除く 564 例）、まず磨痕であるが、表裏面に磨痕が確認できる例が 45 点（８％）、側縁に確認できる例が 512 点（91％）であり、圧倒的に側縁を使用する傾向がある。またＨ類は特殊磨石と呼ばれるもので、断面の角の部分（稜）にのみ集中して摩滅痕を残すものであり、主たる使用痕がこの側面稜部に限られる（上條 2015）。Ｉ類はいわゆる半円状扁平打製石器と呼ばれるものである。詳細な分類は行っていないが、使用面である側縁１つを加工するのみで、ここを主たる磨面とする。これらＨ・Ｉ類を合わせてみても、この遺跡の磨石・敲石類は側面を使用するものが多いという特徴がみえる。凹痕は、546 点中約半数の 286 点で確認できる。このうち両面ともが 145 例、片面が 141 例であり、ほぼ同数である。敲打痕は、側縁が 247 点、端部が 270 点であり、側縁と端部ともあまり差はない。端部の敲打痕は、両端ともに確認される例が 92 点、一端のみに確認される例が 178 例であり、一端を使用する例が多い傾向にある。大きさは、長さ３㎝～19 ㎝、幅３㎝～12 ㎝の間にそれぞれおさまる。もっとも数が多いのは、長さ８㎝～17 ㎝、幅４㎝～10 ㎝のものである。重量は平均で 567.4 ｇであり、もっとも重いもので 1,624 ｇである。分類別に平均重量（完形品、略完形品に限定した 490 点）をみると、Ａ類が 518.3 ｇ、Ｂ類が 750.3 ｇ、Ｃ類が 434.9 ｇ、Ｄ類が 603.8 ｇ、Ｅ類が 781.5 ｇ、Ｆ類が 567.3 ｇ、Ｇ類が 497.1 ｇ、Ｈ類が 852.0 ｇ、Ｉ類が 546.8 ｇである。Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｈ類では、平均値よりも重い傾向がある。とくにＢ・Ｅ・Ｈ類は 180～280 ｇも平均より重い。これらの分類に共通点を見いだすとＨ類以外は、凹痕が残る。この痕跡が残る使用方法にはやや重い石材が必要であった可能性がある。また、Ｈ類については形状からみても他の分類よりは大きめの石が選択されていたと考えられる。一方で平均よりも軽いものはＣ類とＧ類である。平均よりも 100 ｇ前後軽い。共通点となる使用痕は敲打痕である。敲打痕のように上下運動を伴う作業にはより軽い石材が選択されていた可能性がある。使用される石材は多様である。不掲載分を含めた 685 点でみると、22 種類が確認できる。このうち花崗岩（334 点・49％）、流紋岩（116 点・17％）、細流花崗閃緑岩（52 点・８％）、砂岩（48 点・７％）、デイサイト（31 点・５％）の５種で全体の 86％を占める。多様な岩種が使用されているものの、多く使用される種類はある程度限定しているようである。そのほかの 17 種類の石材については 10 数点以下の使用数であり、詳細は第３分冊第３表を参照されたい。出土地点は、不掲載分も含む 686 点でみると、竪穴建物跡から 160 点、土坑（フラスコ状土坑）から 38 点、包含層から 430 点、遺構外から 58 点である。分類別にみた場合でも、分類ごとに顕著な差はない。また、遺構内では、竪穴建物からそれぞれ各分類の中で２割から３割が出土している一方で土坑からはほとんど出土しないが、使用法を考えれば妥当であろう。

（10）石皿・台石類（第３分冊第 330～340 図、第４分冊写真図版 510～518）

扁平な大型礫の片面、両面に使用痕としての擦り面や敲打痕が残るものを石皿・台石類とした。使

用の結果として、あるいは製作時に使用面が凹むものが多い。形態的に石皿と台石の区別は難しいことから、便宜的に使用痕で区別する。敲打痕のみが残るものを台石とし、擦り面を含むものを石皿とした。ただし、ここでは一括して石皿・台石類として検討を加えることの方が多い。遺跡から 136 点が出土し、このうち石皿を中心に 42 点（2386～2427）を掲載した（図化率 30.6%）。形状は多様であるため、加工か無加工かに２大別する。無加工品はさらに使用面が凹むもの（①）とほぼ平らのもの（②）に細分する。加工されるものは、縁が付くものがほとんどであり、脚付のもの（③）とそれ以外のもの（④）に分けた。なお、石皿・台石類では、③・④に確認できる製作時の敲打痕については、使用痕と区別できないため後者を優先して図化している。図化したものの中では、①に 2386・2392・2395・2396・2398・2399・2404・2409・2414・2418・2421・2423・2425、 ② に 2390・2394・2397・2406・2410・2419・2424・2427、 ③ に 2401・2402・2393・2405・2411・2416・2417、 ④ に 2387～2389・2391・2400・2403・2407・2408・2412・2413・2415・2420・2422・2426 がある。その他の特徴として、擦り面のほかに砥石状の溝状の凹み痕跡が残る例が多い（2388・2391～2393・2395・2396・2400・2401・2403・2407・2411～2413・2417・2420・2421・2426)。多くは底面にその痕跡が残るが、2388 など表裏面に痕跡が残る例もある。また擦り面のほかに敲打痕が残る例には、2395・2397・2415・2416・2418・2427 などがある。このようにみると、石皿・台石類は多様な使用方法が想定される。大きさは、完形品が少なく全体の様相は不明であるが、2410・2417・2427 などほぼ完形と考えられる個体からみると、長さ 22 ㎝～51 ㎝、幅 19～36 ㎝までのものがある。使用される石材は多様である。不掲載分も含めて数が多い順に並べると、流紋岩（55 例)、砂岩（38 例)、凝灰岩（10 例)、安山岩（７例)、花崗閃緑岩（６例)、凝灰岩（４例)、デイサイト（４例)、礫岩（３例)、玄武岩（３例)、ヒン岩（２例)、花崗岩（２例)、閃緑岩（１例)、花崗斑岩（１例）である。石材の種類は多様であるが、流紋岩と砂岩で全体の 68%を占めるなどある程度選別して獲得したと想定される。出土遺構は、半数以上が遺構からの出土である。竪穴建物跡から 79 点が出土し、もっとも多い。このなかには炉石として転用された例も一定数ある。包含層を含む遺構外からは 51 点が出土している。とくに包含層２からは 22 点、包含層３から 18 点が出土している。

（11）砥石（第３分冊第 341 図、第４分冊写真図版 519）

溝状・帯状・平面状の砥面が認められる石器を砥石とした。19 点出土し、このうち７点（2428～2434）を掲載した（図化率 37%)。砥石には小破片のものが多いため石皿（砥石としての使用痕も認められる）などの破片も含まれている可能性がある。掲載したなかでは、①溝状の凹みを伴うもの(2430・2432・2433)、②擦痕のみが確認できるもの（2428)、③擦痕のほかに敲打痕が確認できるもの（2432～2434）の３種があり、このうち敲打痕が認められる③は石皿の破片の可能性がある。大きさは、長さ５～12 ㎝、幅 4.5 ㎝～14 ㎝の間におさまる。破片が多いが、砥石としての機能は有するため、完形であるか判断できない。図示したものは手に持てる程度の大きさのものが多い。使用する石材は、砂岩（12 点)、流紋岩（６点）の２種類のみであり、選択性がかなり高い。出土地点は、竪穴建物跡から４点、土坑から２点、ピット（小穴）から１点であり、それ以外は包含層を含む遺構外からの出土である。

（12）石棒（第３分冊第 342～352 図、第４分冊写真図版 520～525）

棒状に加工が施されたものを石棒とした。今回の調査では、先端を男性器様に成形したものは少なく、ほとんどは円棒のままの無頭形のものがほとんどである。砥石として再利用されているものが多

く、その区別が難しいものがある。また磨石類と区別が難しい場合は大型のものを石棒に分類した。そのため、石棒としたものには、砥石や磨石類が含まれている可能性がある。44 点が出土し、このうち 34 点（2435～2468）を掲載した（図化率 77%）。敲打による成形痕が全面に及び、その後研磨による仕上げが施されているものがほとんどである。先端に加工が施された有頭のものは 2445 のみである。断面形が、円形基調のもの（①）と方形基調のもの（②）に大別できる。①には、2435～2439・2444～2446・2448～2452・2458・2459・2462～2465・2467・2468 があり、②には、2440～2443・2447・2453～2457・2460・2461・2466 がある。②の断面が方形基調のものは、2454 などのように平面形も方形を呈するものがある。こういったものは砥石の可能性もあるが、成形痕や使用痕等の特徴が①と共通するため、便宜的に石棒に含めた。いずれ類例を集成し、出土状況なども考慮して検討しなければならない課題である。この遺跡（地域）の石棒の特徴は、石棒本体に凹面が形成されることである。形成される面は４種類がある。１面のみ凹部が形成されるもの（2435・2437・2442・2444・2451・2457・2459・2462・2468）、２面のもの（2440・2447・2450・2467）、３面のもの（2461）、４面のもの（2441・2453・2454・2460・2466）である。これらの凹面には砥石で確認される溝状の凹みが伴うことが多い。また 14 など凹部が浅いものがあり、これをみると使用に伴い凹部が形成された可能性がある。その場合、この凹部は再利用の結果なのかもしれない。実際にこの幅のある凹みは磨製石斧を研磨する砥石に類似している。①や②に共通してこの特徴が認められるため、当初からこの凹みがあったのか、それとも再利用の際に付加されたものか判断が難しくなる。大きさは、破片のものが多いが、ほぼ完形と考えられる 2438・2446・2450・2454～2456・2465 からみると、長さ 50 ㎝以上の大型、長さ 30～40 ㎝前後の中型、長さ 20～25 ㎝前後の小型に分けられる。使用される石材は、不掲載分を含めて砂岩が圧倒的に多く 44 例中 28 例（64%）を占める。そのほか流紋岩（６例）、ヒン岩（２例）、花崗岩（２例）があり、かんらん岩・デイサイト・花崗閃緑岩・凝灰岩・閃緑岩・礫岩が各１例ずつある。砂岩や流紋岩が選ばれる点は砥石と共通点がある。出土地点は、不掲載分を含めてみると、竪穴建物から 24 点、包含層２から 11 点、包含層３から８点、包含層を除いた遺構外から１点が出土しており、竪穴建物跡からの出土が多い。

（13）玦状耳飾（第３分冊第 352 図、第４分冊写真図版 526）

2469・2470 の２点のみが出土している。２点とも掲載した。いずれも約半分が残存しているのみである。2469 は先端に貫通孔が穿たれていることから垂飾品の可能性もある。約５ミリの厚さで均一に薄く研磨によって仕上げられている。内側は表裏面側とも面取りが施されている。2470 も同様に薄く仕上げられ、厚さも均一である。いずれも破片のため本来の大きさは不明であるが、長さは現存値に近い６㎝程度と推定される。幅は、現存値のほぼ倍の大きさとすると、５㎝程度である。石材はいずれも流紋岩である。いずれも包含層３からの出土である。

（14）サメ歯形石製品（第３分冊第 353 図、第４分冊写真図版 526）

2471～2473 の３点が出土しており、すべて掲載した。サメ歯製の垂飾品に類似あるいは模倣した石製品と想定したためサメ歯形石製品という名称とした。いずれ垂飾品の一種であろう。形状は長三角形状を呈し、２つの長辺（側縁）を面取り（縁取り）を片側から施しているのが特徴である。欠損部があることからいずれも完形品ではない。したがって孔が穿たれているか不明である。敲打と研磨によって仕上げられており、2472 は未成品の可能性がある。大きさは、長さ 5.14～5.14 ㎝、幅 3.43～4.04 ㎝とまとまりがあることがわかる。厚さは 0.64～2.08 ㎝とやや幅があるが、2472 が未成品

だとすると１㎝前後の厚さにまとまる。使用される石材は、砂岩２点、頁岩１点である。出土地点は、竪穴建物跡から１点、残り２点は包含層からの出土である。

（15）垂飾品（第３分冊第 353 図、第４分冊写真図版 526）

有孔のもので、装飾品と想定されるものを一括した。７点出土し、全点掲載した（2474～2480）。それぞれが定形化した形状ではないため、別器種を含んでいる可能性もある。原則有孔のものだが、破片が多く、孔が無いものも一部含んでいる。

形態的な特徴によって以下の４つに大別する。①玉状のもの（2474・2475）、②輪状のもの（2476）、③棒状のもの（2479・2480）、④扁平状のもの（2478）の４つである。2477 は小破片のため⑤不明とした。大きさは、形態的に多様であるため、多様である。また破片資料が多く正確な数値は出せないが、概ね長さ２～５㎝、幅１～４㎝程度の大きさである。使用される石材は、滑石４点、頁岩２点、流紋岩１点である。出土地点は、竪穴建物跡から１点、残り６点は各包含層からの出土である。

（16）石錘（第３分冊第 354 図、第４分冊写真図版 527）

2481 は、扁平な石の表裏面に溝が施されており、有溝の石錘としたものである。石錘はこの１点のみである。破片資料であることや、研磨による丁寧な仕上げが施されており、別器種（垂飾品）の可能性がある。石材は蛇紋岩製である。現存の大きさは、長さ 2.46 ㎝、幅 3.55 ㎝、厚さ 1.17 ㎝である。遺構外（試掘トレンチ）からの出土である。

（17）有孔軽石製品（第３分冊第 354～356 図、第４分冊写真図版 527・528）

2482～2492 の軽石製品は有孔軽石製品として登録した。2482・2483 は有孔ではないが未成品あるいは欠損部にその存在が想定されるためここに含めた。また 2484 は安山岩製であるがその軽石的な性質からここに含めている。合計 11 点が出土し、全点掲載した。このほか製品ではないが軽石製の素材１点がある。形状は①滴形を呈するものと②円形のものに分けられる。①がほとんどであり、上下端のいずれかが一方よりも細くなっている。穿孔は中心では無く、中心よりもやや上下のいずれかに偏って穿たれている。浮子としての機能が予想される。②は扁平な円形から楕円形を呈し、ほぼ中央に孔が穿たれる。2484 は、両側縁に抉れが入ることから紐をかけて使用されていたと考えられる。①と同様に浮子として使用されていた可能性がある。石材は白っぽい色調の軽石製のものがほとんどであり、黒っぽい安山岩製は１点のみである。大きさは、長さ 4.26～7.36 ㎝、幅 2.58～5.68 ㎝、厚さ 1.4～3.71 ㎝の間におさまる。平均値は、長さ 5.8 ㎝、幅 3.9 ㎝、厚さ 2.4 ㎝であり、ある程度のまとまりがある。出土地点は、素材とした１点を含めて、竪穴建物から３点、包含層から６点、包含層以外の遺構外からは１点が出土している。

（18）有孔石製品（第３分冊第 356・357 図、第４分冊写真図版 528・529）

石製品のうち、ほかに分類されないもので有孔のものを一括した。貫通孔を前提としたが、貫通しないものも含めている。これらは点数が増えれば別器種になり得るものを含んでいる。

2493～2495 の３点がありすべて掲載している。2493 は長さ 13.45 ㎝、幅 2.91 ㎝、厚さ 2.64 ㎝の細長い形状を呈している。断面は上端付近が四角形状、下端付近が扁平状を呈する。それぞれ１個ずつ孔が穿たれている。凝灰岩製で 2494 と同じ SI65 からの出土である。2494 は長さ 4.31 ㎝、幅 7.87 ㎝、厚さ 1.66 ㎝の扁平な楕円形を呈する。長辺の一端付近に孔が２個穿たれている。研磨によ

る擦り痕が残存する。凝灰岩製で、2493と同じSI65からの出土である。2495は、長さ16.58㎝、幅4.95㎝、厚さ2.6㎝の扁平な長楕円形を呈する。長軸を３分割する位置の両側縁に抉れが両側に施される。付近には敲打の痕跡のあとに擦痕が残るため使用の結果かも知れない。表面には抉れ付近に凹部が２箇所確認できる。対応する裏面には敲打痕が残る。貫通を意図したのか、使用に伴うものか判断が難しい。装飾品ではなく磨石・敲石類などの道具の一種と想定される。石材はホルンフェルスで、包含層３からの出土である。

（19）三角壕形石製品（第３分冊第357・358図、第４分冊写真図版529・530）

三角壕形石製品は、三角柱を横向きに倒した状態のもので、側面が三角形、正面（裏面）が長方形状、底面も長方形状を呈するものである。今回の調査で２点（2496・2497）が出土しており、全点掲載した。2496は、長さ8.9㎝、高さ6.6㎝、幅が残存で3.4㎝である。裏面すべてを欠損している。側面形は二等辺三角形状を呈し、内側が一段低く作られる。境界には線刻が施されるようである。また、下部には孔が穿たれており、底面にかけて斜めに貫通している。正面形は上端が丸みを帯びた形状をしており、石冠状を呈する。下端（底面際）は段差があり縁状にまわっている。底面は台形状を呈し、一端（穿孔とは逆方）が先細りになっている。擦痕が各面に残存しており、研磨で仕上げされた状況が窺える。石材は珪藻土であり、この１点のみである。包含層１から出土している。2497は、長さ8.3㎝、高さ5.4㎝、幅は残存で4.2㎝である。正面から底面にかけて一部が欠損している。正面形は一端が高く一端が低い台形状､つまり上端が右下がりに傾斜する形状を呈する。一方の正（裏）面には凹みがある。反対面は欠損でその有無は不明である。側面形は正三角形に近い形状である。側面は内側がわずかに下がっており低く整形されている。下端寄りに凹みがあり、穿孔部と対応すると思われるが貫通していない。底面は台形状を呈し、内側が一段低く整形される。すなわち外側が幅0.7～1.5㎝程度の縁がまわる形態である。石材は凝灰岩製で、包含層３からの出土である。

（20）そ　の　他

そのほか不明石製品として１点が出土しているが図示したものはない。加工が観察できるものの小破片のため不明とした。また、コハクが２地点で出土している。１点は分析を行っており、詳細はⅥ章に記載する。もう１点は、SI1の埋設土器内の土壌をフローテーションしたところ出土したものである。コハクかどうか鑑定しておらず、別の石質の可能性もある。

５　縄文時代の土製品

縄文時代に属する土製品には、キノコ形土製品、斧形土製品、土器片円盤、土錘状、土製耳飾、土製垂飾品がある。ミニチュア品については、縄文土器に含めて記載した。土器の総重量約4548㎏に対し土製品は約1.3㎏である。土器の出土量に対して土製品の割合は非常に少ないのが特徴といえる。以下、種別ごとに記載する。

（１）キノコ形土製品（第３分冊第359図、第４分冊写真図版531）

菌類の茸を模したと想定される土製品をキノコ形土製品とした。柄部分のみのものも含めて13点（2498～2510）が出土しすべて掲載している。キノコ形土製品は、傘部と柄部に２分される。残存状態別にみると、傘と柄部両方が残存するもの（2504・2507・2508・2510）、傘部のみ残存するもの

(2498・2499・2500・2503・12508)、柄部のみ残存するもの（2501・2502・2505・2509）がある。おもに傘部の形状から、①傘部が山形（凸形）を呈するもの（2504・2506・2507・2510)、②傘の頂部が平らなもの（2498・2499・2503・2508）があり、出土品の中では２種類が確認される。そのほか柄がＬ字型に曲がる 2510 や傘部と柄部が斜めに接合する 2502・2503・2504 などがある。とくにＬ字に曲がる柄をもつ 2510 などは本物の茸に良く類似している。①や②の形態差は元となる茸の種類差を表す可能性がある。

大きさは、傘部の直径が４㎝前後のもの（2510)、５㎝前後のもの（2503・2504・2506・2508)、６㎝前後のもの（2499）の３つに分けられそうである。出土地点は、竪穴建物跡からは５点、包含層から６点、遺構外から２点である。竪穴建物跡から出土した５点は、遺構の時期をみると、Ⅵ群土器の時期（大木９～10 式期）のものが３点、Ⅴ～Ⅵ群（大木 8b～10 式併行）が１点、Ⅳ群（大木 8a 式併行）が１点（この遺構の検出中のため混入の可能性大）である。従来この土製品は中期末葉から後期前葉までに出土すると考えられている（工藤・鈴木 1998)。今回の出土例をみると大きく異ならないが、やや古い傾向にありそうである。

（２）斧形土製品（第３分冊第 360 図、第４分冊写真図版 532）

扁平な板状で、先端がやや尖る形状で、磨製石斧に類似する短冊形の土製品である。端部に貫通孔があることから吊り下げて使用されていた可能性がある。遺跡からは破片も含めて８点が出土し、すべて掲載している（2511～2518)。完全な形状を残すのは 2516 のみで、頭部片（2514・2518)、刃部片（2511～2513・2515・2517）など破損品がほとんどである。頭部片残る破片をみると、頭部形態は円筒形の１種類のみのようである。貫通孔は表裏面から穿たれている。施される文様は、破片が多いが、残された範囲からは地文のみものがほとんどである。完形品である 2516 をみると貫通孔周辺に沈線による文様が施される。貫通孔を意匠にいれつつ、表面・側面・裏面にかけて沈線をめぐらせる。2517 では、刃部付近に沈線による文様が描かれるが全容は不明である。

大きさは、完形の 2516 をみると、長さ 15.5 ㎝、幅 4.2 ㎝、厚さ 1.9 ㎝であり、この辺りの数値が１つのまとまりを示していよう。幅でみると４㎝前後の大きさとなる。17 は幅が 4.7 ㎝もあり、５㎝前後のまとまりが、2514 は幅が 3.5 ㎝であり３㎝前後のまとまりがそれぞれ存在する可能性がある。出土地点をみると、包含層から５点、遺構外から３点が出土するのみで、竪穴建物跡のような遺構からの出土はない。時期は、包含層や遺構外からの出土のため時期を限定することは難しい。これまでの研究では、大木９式古段階から大木 10 式古段階にかけて存在する（阿部 2015）と考えられている。本遺跡例も同様の時期を想定しても矛盾はない。

（３）土製耳飾（第３分冊第 361 図、第４分冊写真図版 533）

土製の耳飾りに類するものを一括した。２点のみが出土し、すべて掲載した（2519～2520)。円盤状の 2520 と耳栓型の 2519 である。2520 は円形を呈した扁平な形状で、側面に溝（装着部）を有する。直径 4.8 ㎝、厚さ 0.9 ㎝、重さ 20 ｇの大きさである。試掘トレンチ 26 からの出土である。薄く作られていることから耳飾りではない可能性もある。2519 は先端部を欠損する耳栓と考えられる。頭部の直径は 3.5 ㎝で、長さは現存で 2.7 ㎝である。くびれ箇所の幅（着装部の径）は 1.9 ㎝である。重さは 19.4 ｇであり、2520 とほぼ同じ重量である。

（４）土器片円盤（第３分冊第 361・362 図、第４分冊写真図版 533・534）

土器片の周縁を打ち欠き、研磨を施して円形に整形したものを土器片円盤とする。孔が穿たれるものも存在する。36 点が出土しておりすべて掲載した（2521～2556）。元となる土器片は、文様の配置状況や湾曲度から胴部片が多用されているようである。なかには 2552 のように敷物圧痕が残されるものがあり、これは底部片を再利用している。2546・2550 は孔が穿たれている。2546 の孔は一般的な大きさよりも径が小さく、もしかすると元の土器の補修孔である可能性がある。分類は大きさ以外にはあまり属性に違いはない。３～５㎝前後、６㎝前後、７㎝前後、９㎝前後の４つのまとまりに分けられるが、大半が３～５㎝の範囲に収まる。出土地点は、竪穴建物跡（９点）、包含層（24 点）、遺構外（３点）から出土している。時期は、竪穴建物跡の帰属時期からみると、Ⅴ群～Ⅵ群（大木 8b～10 式併行期）のものがほとんどである。

（５）不明土製品（第３分冊第 362 図、第４分冊写真図版 534）

2557 は、小型の紡錘形を呈する土製品である。貫通孔があれば土錘状のようであるが、地文も施され異なる点も多い。何かを模写と考えられるがここでは不明土製品とした。先端部を欠損しており、断面系は円形である。長さは残存で 6.2 ㎝、幅 2.25 ㎝、厚さ 2.4 ㎝、重さ 24.3 ｇである。

６　縄文時代の貝製品・骨角器

貯蔵穴である SK60 を中心に貝や骨が廃棄された層がいくつか存在する。その中に、貝や骨を加工したと想定される製品がある。いずれも小破片であり、具体的な器種として判明するものは少ない。

（１）不明貝製品（第３分冊第 362 図、第１分冊第 52 図）

１点が出土している。2558 は全体的に研磨痕が観察されることから、何らかの製品の一部と判断したものである。しかしながら、具体的な器種は不明である。貝種も研磨が及ぶことから不明である。SK60 からの出土である。

（２）不明骨角器（第３分冊第 362 図、第１分冊第 52 図）

骨角器として判断したものは３点が出土している。そのうち製品名が不明なもの１点を不明骨角器とした（残り２点は骨針）。2559 は、長さ 2.43 ㎝、幅 1.15 ㎝の骨で、剥離痕や研磨痕が確認できる。人為的な加工痕が観察されるものの小片のため器種を同定できなかった。種は特定できないが哺乳綱の骨で部位は不明である。SK60 からの出土である。

（３）骨針（第３分冊第 362 図、第１分冊第 52 図）

針状に加工された骨製品である。２点出土している（2560～2561）。2560 は両端を欠損している骨針である。径は 0.4 ㎝である。2561 は骨針の先端部の細片である。径は 0.4 ㎝と 2560 と同じである。両者はいずれも種までは特定できないが、哺乳綱の四肢骨と鑑定された（第Ⅵ章参照）。SK67 からの出土である。（西澤）

7　中世以降の遺物

中世以降の遺物は、製鉄関連遺構（SI67・68・SL4・5）に伴うものが主体である。種類としては、鞴の羽口と鉄滓がある。製鉄関連以外の遺物としては、調査区中央にある沢や表採した陶磁器類があるがわずかであり図化していない。

（1）羽口（第３分冊第 363・364 図、第４分冊写真図版 535・536）

羽口は破片も含めて 20,660.2 ｇが出土している。このうち 12 点（12,553.4 ｇ）を掲載した（図化率 61％）。2562 ～ 2573 の形状はいずれも円筒状を呈し、先端がやや細くなる。基部の方は台形状に幅広くなる。断面形は円形で、孔も円形である。完形は 2563 のみで、破片の割合が圧倒的に多い。先端には溶着滓などが付着し、還元している範囲がある。

大きさは、完形である 2563 をみると、長さ 33.3 ㎝、幅 9.5 ㎝、基部の最大幅 14 ㎝、内径 3.7 ㎝、外径９㎝である。内径の大きさで分類してみると、①内径が４㎝前後のもの（2562・2563・2566 ～ 2573）、②内径が３㎝前後のもの（2564・2565）に２分できそうである。①の方は完形の 2563 やほぼ完形の 2562 などから、長さが 30 ～ 33 ㎝程度になることが予想されるが、②の場合は不明である。

出土地点は、SI67 や SL4・5 など製鉄関連遺構からは全体の 81％が出土している。次いで多いのは包含層３で全体の７％である。包含層３は、位置的に製鉄関連遺構（SI67・68 周辺）から流出したものが、沢に落ち、さらに沢下へ流れ着いた場所と想定できる。したがって、出土地点の９割をこの製鉄関連遺構周辺から出土したことがわかる。一方で、包含層１や遺構外から出土した鉄滓は１割程度であるが、先述の製鉄関連遺構とは位置的に関わらない地点からの出土もある。そのため、調査区の近在にはまだ製鉄関連の遺構が存在している可能性がある。この点については、次の鉄滓の出土状況とも対応する。

（2）鉄　　滓

遺構や調査区各地から出土した鉄滓は合計 65,138.5 ｇが出土している。これらを出土地点にかかわらず一括し、村木（2015）を参考にして以下のように分類した。手順としては、まず肉眼観察によって塊系の鉄滓と炉壁・流出滓など形態的な特徴のあるものに分ける。その後、前者を磁着・メタル反応の有無によって細分した。なお、各分類の中で一部を選んで科学分析を行っている（第Ⅵ章）。

鉄塊系遺物　1,904.6 ｇが出土している（全重量のうち３％）。磁着し、メタル反応するもので、暗赤褐色を呈している。表面は鉄錆に覆われ、比較的凹凸が少なくなめらかである。第Ⅵ章で科学分析を行っている。

含鉄鉄滓（炉内滓）　5,262.6 ｇが出土している（全重量のうち８％）。磁着するが、メタル反応はない。分析試料（TKN- ２）をみると、赤褐色を呈し、比較的表面がなめらかなものと黒色系の色調を呈し、付着物が多く凹凸が顕著なものの２者がありそうである。

椀形滓　2306.7 ｇが出土している（全重量のうち４％）。磁着し、メタル反応が無く、断面形が半円状のものである。色調は暗赤褐色を呈する。分析は行っていない。

炉底滓　6,739.9g が出土している（全重量のうち 10％）。磁着・メタル反応とも無く、断面形が半円状のものである。椀型滓と類似する。色調は暗褐色を基調とし、錆がほとんどない。また断面の気泡が細かい特徴がある。第Ⅵ章で分析を行っている。

流出滓　47,867.5 ｇが出土している。全出土量のうち73％を占める。磁着・メタル反応はない。形状的に、「流れ」が観察できることから区別しやすい。表面がなめらかで、青灰色や青黒色を呈する色調である。また、赤褐色を呈し、発砲している種類も含まれそうである。

鍛造剥片　今回の調査では確認できない。

粒状滓　今回の調査では確認できない。

炉壁　1,057.2 ｇが出土している（全重量のうち２％）。粘土を主成分としているが、表面には融解した鉄滓やスサあるいは炭化材の痕跡が残っている。色調は橙色を呈するものが多い。第Ⅵ章で分析を行っている。

再結合滓　今回の調査では確認できない。

これらの分類ごとに分析を行った結果、これらを排出した遺構（SI67・68・SL4・5）では、砂鉄から鉄を造り出す製鉄が行われたと判明している。詳細については第Ⅵ章を参照されたい。なお、椀形滓に分類した鉄滓も存在していることから鍛冶炉の存在も想定されるが分析は行えず、詳細は不明である。

出土地点別に出土量をみると、①製鉄関連遺構（SI67・68・SL4・5）からは、10,212.5 ｇ、②包含層２・３からは40,035.9 ｇ、③製鉄炉周辺の遺構（SI10～18、54・59・66・70とSI33など）からは440.7 ｇ、④北尾根の南向き斜面（SI81・82・98）から55.6 ｇ、⑤包含層１など南尾根周辺から1,772.7 ｇ、⑥調査区南端の沢付近から112.3 ｇ、⑦出土地点不明から12,508.8 ｇが出土している。包含層２は製鉄関連遺構の東側、包含層３は斜面下の谷底に位置することから、①に関連した出土地点と想定している。そのため①～③を含めた地点の合計は50,689.1 ｇとなり、これらの鉄滓が今回調査した製鉄関連遺構から排出されたものと考えられる（２次的な移動も含めて）。一方で、距離や位置・高さ（標高）などを考慮しても、④・⑤・⑥から出土する鉄滓は、①から排出されたとは考えにくい。そのため、調査区内からは発見されなかったが、④～⑥の付近にはそれぞれ別の製鉄関連遺構が存在することが予想される。（西澤）

Ⅵ　自然科学分析

１　分析の概要

今回の調査では、いくつかの自然科学分析を行った。ここで各分析の意図や結果を分析項目ごとにまとめておく。

（１）放射性炭素年代（AMS 測定）

24 点の試料を分析した。年代決定の根拠と年代試料の蓄積を目的として分析依頼したものである。分析した遺構では、大木 8b～９式前後の放射性炭素年代を与えることができた。遺構が検出される層より下位層の年代もトレンチで確認した炭化物から分析を行っている（P291～297)。この結果をみると沢の埋没は縄文時代の開始期に遡ることが判明した。また、製鉄関連遺構から９点を分析した。出土遺物の乏しい遺構であるため、この年代が帰属年代の根拠となる。12 世紀後半から 13 世紀前半の放射性炭素年代が想定される。（株）加速器分析研究所の分析である。

（２）琥珀産地同定

遺跡からは２地点からコハク片が出土しており、このうち SI49 の埋土から出土したコハク３片を分析に供した。産地同定を目的とし、近隣の遺跡や久慈市から産出したサンプルと比較を通じて分析したものである。その結果、どのサンプルの領域とも一致しなかったため、厳密には産地を特定できなかった。領域的に近いのは久慈市内の上山氏所有の鉱山からのコハクに近いという。株式会社第四紀地質研究所の分析である。

（３）ヒスイ化学分析

新潟県糸魚川市にあるフォッサマグナミュージアムにおいて３点を鑑定した。ヒスイの鑑定と産地同定を目的とした。これら３点とも白色を呈する範囲が大きいが、緑色と混ざり合った色調を呈している。３点のうち２点は穿孔されており、垂飾品と考えられる。肉眼観察的にはヒスイと思われたが、鑑定の結果は１点のみがヒスイ（おそらく糸魚川産)、残り２点は在地でも採取できる石英と蛇紋岩であることがわかった。フォッサマグナミュージアム（宮島宏氏）の分析である。なお、ヒスイ以外の２点については、台湾の中央研究院の飯塚義之先生による携行型ハンドヘルド蛍光エックス線分析技術（ｐ -XRF）による分析も行っている（結果は、第３分冊第４表に記載)。

（４）炭　化　種　実

調査した竪穴建物跡には炉が伴うことが多く、焼土が明瞭に残存する。今回の調査では炉などの焼土や埋設土器内の土壌について可能な限りすべての遺構から採取し、フローテーションを行っている。焼土から検出される種実類は実際に食用とした可能性が高いことから植物利用の解明を目的とした。試料は、炭化物を多く含む焼土直上層はもちろん、焼土である赤褐色を呈する土壌も採取した。多くは後者での採取となったが、これにも各種の炭化種実が含まれていることが判明した。分析試料は、フローテーション後に採取した炭化物のうち、木の根など炭化していない有機物を除去後に残存した

ものである。マツ属の種子、オニグルミ、ミズナラ、コナラ、クリ、トチノキ、クワ属、キハダ、ウルシ属、イネ科、タデ属、ツルマメ、ゴキヅルなどが検出された。検出結果から導かれる検討については今回行わなかったが、試料の蓄積が進むことを期待する。なお、炭化していない種実もいくらか含まれており、それらの同定を行っているが、掲載はしていない（データは保管）。パリノ・サーヴェイ株式会社の分析である。

（５）動物遺存体・貝類の同定

SK60 内の堆積土中に廃棄したと考えられる貝層を中心に分析した。これらの貝や骨類の同定を目的としたものである。そのほか先述のフローテーションによって採取できた骨片類もあわせて同定に供した。また、動物を埋葬した SK38 の骨類も含める。同定結果から、動物遺存体では、シカ、ウサギ、イノシシ、スズメ、カラス、キジ、ネズミ、カエル、ヘビなどのほ乳類やは虫類、サケ、カタクチイワシ、ウナギ、ニシン、ブリ属、サバ属、カツオ、カレイ、ヒラメ、タラ科、スズキ属、アジ類、ウナギ属などの魚類、クボガイ、イガイ、ムラサキインコ、コハクガイ、ヤマトシジミ、イソシジミ、タマキビ、チヂミボラ、エゾチヂミボラ、マガキなどの貝類、ウニ等の棘皮動物が同定された。SK38 ではウマが埋葬されていた。SK60 以外はあまり良好な量ではなかったが、豊富な海資源を利用していたことがわかる。炭化種実同定とあわせて、当時の資源利用の一端を垣間見ることができる。パリノ・サーヴェイ株式会社の分析である。

（６）黒曜石の産地同定

遺跡から黒曜石製の石器製品はほとんど出土しなかったが、チップ類が数点出土している。このうち３点を分析した。黒曜石も産地が限定されるため、遠隔地との交流が判明できる資料のひとつである。分析の結果は、北上系や湯ノ倉産と同定された。パリノ・サーベイ株式会社の分析である。

（７）樹　種　同　定

SI37 竪穴建物の柱穴である P1 と貼床内から木材が２点出土した。前者は出土位置から柱材として利用されていたと考えられる。端部には加工が確認できる。このため当時の建築部材の樹種を知るべく分析を依頼した。結果、柱材はトチノキ、貼床からのものはクリと同定された。パリノ・サーベイ株式会社の分析である。

（８）堆積物微細形態分析

調査では、多量の遺物を包含する包含層が４地点で確認された。調査時には、これらの層が盛土遺構のように人為的に堆積しているようにも考えられた。そのため、これらの包含層が自然堆積なのか人為によって堆積したのかを分析によって明らかにしたいと考えた。そのため、土層をＸ線写真による分析を行った。試料は包含層１の断面であり、検出面から地山面までの高さ約 150 ㎝を柱状に採取して、分析に供した。その結果、自然堆積の部分と人為堆積の部分の両方が含まれることがわかった。層準４・５・６において人為的な営力で形成された可能性が指摘された。これらの層はⅢｂ～Ⅲｄ層前後に相当すると考えられ、遺物を多量に包含する層でもある。また、隣接するトレンチではⅢｂ層とⅢｃ層の間に竪穴建物（SI08）が構築されており、分析結果とも矛盾しない。遺物の出土状態も捨て場状を呈することからもこれを裏付ける。問題は、意図的に地面をかさ上げ（盛土）したのか、捨て場として利用したため結果的に土砂が堆積したのかの違いである。この点は難しい問題であるが、

包含層１の出土遺物を見る限り、中期前葉から末葉にかけて長い期間（複数の型式）の土器が出土する。このことから包含層の形成にはある程度の期間が想定されることから、後者の可能性を考えてみたい。また、包含層１は傾斜が緩い南尾根の斜面部に形成される。これに対し包含層２～４は、急斜面である南向き斜面の下位にあり、斜面上方からの流出土の堆積が想定される。これらの包含層では同様の分析を行っていないため定かではないが、包含層１とは形成要因が異なっていた可能性がある。パリノ・サーベイ株式会社の分析である。

（9）鉄 滓 の 分 析

製鉄関連遺構周辺で出土した鉄滓について、先述の記載のように分類した。その各分類のなかから１～２点ずつ選び分析に供した。検出した炉が製鉄に関わるどの工程かを調べる目的である。その結果、砂鉄を原料とする製鉄作業と鍛冶原料鉄を生成する製錬作業も行われていることがわかった。株式会社古環境研究所の分析である。

（10）そ　の　他

ヒスイ分析の項で一部記載したが、中央研究院地球科学研究所の飯塚義之氏による p -XRF 分析をおこなった（飯塚・小野 2020）。いわゆるアオトラ石を検出する目的である。コロナ禍のため十分な分析数やデータを得ることができなかった。途中経過として分析した一部の試料については観察表（第３分冊第２～４表）中に記載する。詳細なデータは提示できないが、数点のアオトラ石を確認している。（西澤）

２　高根遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（１）測定対象試料

高根遺跡は、岩手県宮古市山口第 11 地割（北緯 39° 39’24”、東経 141° 55’39”）に所在する。測定対象試料は、住居跡や製鉄炉、遺物包含層等から出土した炭化物、木炭、フラスコ状土坑の中で出土した埋設土器内から採取された土壌の合計 24 点である（第２表）。

（２）測定の意義

試料が採取された遺構、遺物包含層等の年代を明らかにする。

（３）化学処理工程

炭化物、木炭の化学処理

①メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

②酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001 Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未

第２表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-142416	P01	南沢跡　埋土	炭化物	AAA	−28.93 ± 0.23	130 ± 20	98.42 ± 0.30
IAAA-142417	P02	包含層２　４エ　トレンチ Ⅲｃ～Ⅲｄ層	炭化物	AAA	−23.93 ± 0.29	130 ± 20	98.44 ± 0.28
IAAA-142418	P03	SL04　(IA11m)　Ⅲ層	炭化物	AAA	−26.98 ± 0.27	800 ± 20	90.50 ± 0.26
IAAA-142419	P04	包含層２　ⅠA17～18ｓ トレンチ　Ⅲｃ層	炭化物	AAA	−25.75 ± 0.27	4,300 ± 30	58.55 ± 0.20
IAAA-152269	P05	SI33　埋土下層	炭化物	AaA	−25.42 ± 0.19	4,500 ± 30	57.13 ± 0.20
IAAA-152270	P06	SI37　埋土下層	炭化物	AAA	−22.08 ± 0.34	4,180 ± 30	59.45 ± 0.21
IAAA-152271	P07	SI48　３層	炭化物	AAA	−24.37 ± 0.30	4,080 ± 30	60.14 ± 0.23
IAAA-152272	P08	包含層２ ３ウグリッド　Ⅲｃ層	炭化物	AAA	−24.66 ± 0.33	4,160 ± 30	59.60 ± 0.22
IAAA-152273	P09	SI49　Ⅲ層	炭化物	AAA	−26.06 ± 0.32	4,120 ± 30	59.87 ± 0.22
IAAA-161885	P10	SI76　炉内埋設土器堆積土	炭化物	AAA	−28.06 ± 0.23	4,040 ± 30	60.49 ± 0.19
IAAA-161886	P11	SK187　埋土中位 埋設土器内充填土（下層）	土壌	HCl	−23.67 ± 0.32	3,920 ± 20	61.39 ± 0.18
IAAA-161887	P12	SL15　埋土最上位（１層）	炭化物	AAA	−25.31 ± 0.28	1,190 ± 20	86.27 ± 0.22
IAAA-161888	P13	下層確認トレンチ１　６層	炭化物	AAA	−27.06 ± 0.23	6,220 ± 30	46.07 ± 0.16
IAAA-161889	P14	下層確認トレンチ４　７層	炭化物	AAA	−25.31 ± 0.25	10,510 ± 40	27.03 ± 0.12
IAAA-161890	P15	下層確認トレンチ４　８層	炭化物	AAA	−25.31 ± 0.18	10,500 ± 40	27.06 ± 0.12
IAAA-161891	P16	SL04　地下構造 下層	木炭	AAA	−27.76 ± 0.27	780 ± 20	90.71 ± 0.22
IAAA-161892	P17	SL04　地下構造 ３層中	木炭	AAA	−22.68 ± 0.26	820 ± 20	90.26 ± 0.24
IAAA-161893	P18	SL04　地下構造 10 層中	木炭	AAA	−22.17 ± 0.27	810 ± 20	90.36 ± 0.22
IAAA-161894	P19	SL04　地下構造 12 層中	木炭	AAA	−25.08 ± 0.29	790 ± 20	90.68 ± 0.24
IAAA-161895	P20	SL04　地下構造 17 層中	木炭	AAA	−26.01 ± 0.20	810 ± 20	90.39 ± 0.24
IAAA-161896	P21	SL05　地下構造 上層	木炭	AAA	−23.60 ± 0.26	820 ± 20	90.31 ± 0.25
IAAA-161897	P22	SL05　地下構造 上層	木炭	AAA	−25.84 ± 0.21	810 ± 20	90.36 ± 0.23
IAAA-161898	P23	SL05　地下構造 最下層	木炭	AAA	−26.22 ± 0.21	810 ± 20	90.36 ± 0.24
IAAA-161899	P24	SL05　地下構造 最下層	木炭	AAA	−24.09 ± 0.19	800 ± 20	90.55 ± 0.23

［#7030, 7715, 8341］

満の場合は「AaA」と第２表に記載する。
③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
④真空ラインで二酸化炭素を精製する。
⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
⑥グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

土壌の化学処理

①メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。
②酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１㏖/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用い、第２表に「HCl」と記載する。
以下、炭化物、木炭の化学処理③以降と同じ。

（４）測　定　方　法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（５）算　出　方　法

①$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第２表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
②^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第２表に、補正していない値を参考値として第３表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。
③pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第２表に、補正していない値を参考値として第３表に示した。
④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下１桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに

依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第３表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

第３表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-142416	190 ± 20	97.63 ± 0.30	127 ± 24	1683 calAD – 1707 calAD（12.3%）* 1719 calAD – 1735 calAD（ 8.3%）* 1806 calAD – 1826 calAD（ 9.2%）* 1832 calAD – 1885 calAD（29.3%）* 1913 calAD – 1930 calAD（ 9.1%）*	1678 calAD – 1765 calAD（33.7%）* 1773 calAD – 1776 calAD（ 0.5%）* 1800 calAD – 1894 calAD（46.4%）* 1905 calAD – 1940 calAD（14.8%）*
IAAA-142417	110 ± 20	98.66 ± 0.28	126 ± 23	1684 calAD – 1707 calAD（12.7%）* 1719 calAD – 1734 calAD（ 8.1%）* 1807 calAD – 1825 calAD（ 7.8%）* 1833 calAD – 1883 calAD（30.6%）* 1914 calAD – 1929 calAD（ 9.0%）*	1679 calAD – 1765 calAD（33.1%）* 1801 calAD – 1894 calAD（47.6%）* 1905 calAD – 1940 calAD（14.7%）*
IAAA-142418	830 ± 20	90.13 ± 0.26	801 ± 23	1222 calAD – 1258 calAD（68.2%）	1193 calAD – 1197 calAD（ 0.8%） 1205 calAD – 1273 calAD（94.6%）
IAAA-142419	4,310 ± 30	58.46 ± 0.19	4,300 ± 26	2917 calBC – 2893 calBC（68.2%）	3010 calBC – 2980 calBC（ 5.5%） 2940 calBC – 2881 calBC（89.9%）
IAAA-152269	4,500 ± 30	57.09 ± 0.20	4,496 ± 27	3333 calBC – 3265 calBC（28.9%） 3241 calBC – 3213 calBC（12.9%） 3188 calBC – 3155 calBC（14.9%） 3132 calBC – 3105 calBC（11.6%）	3343 calBC – 3097 calBC（95.4%）
IAAA-152270	4,130 ± 30	59.81 ± 0.20	4,177 ± 27	2877 calBC – 2858 calBC（12.6%） 2810 calBC – 2750 calBC（40.9%） 2723 calBC – 2700 calBC（14.6%）	2884 calBC – 2835 calBC（20.8%） 2817 calBC – 2668 calBC（74.6%）
IAAA-152271	4,070 ± 30	60.22 ± 0.23	4,084 ± 31	2836 calBC – 2816 calBC（11.0%） 2670 calBC – 2573 calBC（57.2%）	2859 calBC – 2809 calBC（17.5%） 2752 calBC – 2722 calBC（ 5.2%） 2701 calBC – 2565 calBC（66.6%） 2525 calBC – 2496 calBC（ 6.1%）
IAAA-152272	4,150 ± 30	59.65 ± 0.22	4,156 ± 29	2871 calBC – 2839 calBC（14.3%） 2814 calBC – 2802 calBC（ 5.6%） 2779 calBC – 2676 calBC（48.3%）	2878 calBC – 2831 calBC（18.9%） 2821 calBC – 2631 calBC（76.5%）
IAAA-152273	4,140 ± 30	59.74 ± 0.21	4,120 ± 28	2856 calBC – 2812 calBC（21.2%） 2747 calBC – 2725 calBC（ 9.8%） 2698 calBC – 2624 calBC（37.2%）	2866 calBC – 2804 calBC（25.6%） 2774 calBC – 2770 calBC（ 0.5%） 2764 calBC – 2579 calBC（69.3%）
IAAA-161885	4,090 ± 30	60.11 ± 0.19	4,038 ± 25	2581 calBC – 2559 calBC（21.0%） 2536 calBC – 2491 calBC（47.2%）	2623 calBC – 2478 calBC（95.4%）
IAAA-161886	3,900 ± 20	61.56 ± 0.18	3,919 ± 23	2469 calBC – 2435 calBC（28.6%） 2421 calBC – 2404 calBC（14.7%） 2379 calBC – 2349 calBC（24.9%）	2475 calBC – 2338 calBC（93.7%） 2320 calBC – 2310 calBC（ 1.7%）
IAAA-161887	1,190 ± 20	86.21 ± 0.22	1,186 ± 20	778calAD – 792calAD（12.8%） 803calAD – 843calAD（34.3%） 857calAD – 881calAD（21.1%）	773calAD – 889calAD（95.4%）
IAAA-161888	6,260 ± 30	45.88 ± 0.16	6,224 ± 28	5291calBC – 5251calBC（18.7%） 5230calBC – 5206calBC（18.6%） 5163calBC – 5136calBC（12.6%） 5131calBC – 5119calBC（ 5.1%） 5108calBC – 5079calBC（13.2%）	5299calBC – 5201calBC（50.4%） 5176calBC – 5069calBC（45.0%）
IAAA-161889	10,510 ± 40	27.01 ± 0.12	10,508 ± 36	10593calBC – 10564calBC（19.1%） 10548calBC – 10473calBC（49.1%）	10628calBC – 10441calBC（95.4%）
IAAA-161890	10,510 ± 40	27.04 ± 0.12	10,501 ± 36	10584calBC – 10472calBC（68.2%）	10626calBC – 10437calBC（94.0%） 10316calBC – 10296calBC（ 1.4%）
IAAA-161891	830 ± 20	90.19 ± 0.21	783 ± 19	1225calAD – 1232calAD（14.3%） 1244calAD – 1266calAD（53.9%）	1220calAD – 1273calAD（95.4%）
IAAA-161892	790 ± 20	90.69 ± 0.23	823 ± 21	1209calAD – 1255calAD（68.2%）	1170calAD – 1174calAD（ 1.8%） 1180calAD – 1261calAD（93.6%）
IAAA-161893	770 ± 20	90.88 ± 0.22	814 ± 19	1218calAD – 1253calAD（68.2%）	1189calAD – 1264calAD（95.4%）
IAAA-161894	790 ± 20	90.66 ± 0.23	786 ± 21	1224calAD – 1265calAD（68.2%）	1219calAD – 1272calAD（95.4%）
IAAA-161895	830 ± 20	90.19 ± 0.23	811 ± 21	1219calAD – 1254calAD（68.2%）	1190calAD – 1266calAD（95.4%）
IAAA-161896	800 ± 20	90.56 ± 0.24	819 ± 22	1213calAD – 1255calAD（68.2%）	1170calAD – 1174calAD（ 1.3%） 1180calAD – 1263calAD（94.1%）
IAAA-161897	830 ± 20	90.19 ± 0.22	814 ± 20	1218calAD – 1254calAD（68.2%）	1186calAD – 1265calAD（95.4%）
IAAA-161898	830 ± 20	90.13 ± 0.23	814 ± 21	1217calAD – 1255calAD（68.2%）	1185calAD – 1265calAD（95.4%）
IAAA-161899	780 ± 20	90.72 ± 0.23	797 ± 20	1224calAD – 1257calAD（68.2%）	1214calAD – 1270calAD（95.4%）

［参考値］

*Warning! Date may extend out of range
Warning! Date probably out of range
（この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。）

（６）測　定　結　果

測定結果を第２・３表に示す。

試料 24 点の年代値はかなりの幅を持つため、年代値が縄文時代に属する試料、古代に属する試料、中世に属する試料、近世以降に属する試料に分けて記述する。

年代値が縄文時代に属する試料は、P04～P11、P13～P15 の 11 点で、竪穴住居跡、遺物包含層等から出土した炭化物 10 点と、土坑内で出土した土器の中から採取された土壌１点がある。試料の ^{14}C 年代は、10510±40yrBP（P14）から 3920±20yrBP（P11）の間にある。暦年較正年代（１σ）を検討すると、最も古いのは下層確認トレンチ４の７、８層から出土した炭化物２点で、P14 が 10593～10473 cal BC（12542～12422 cal BP）の間に２つの範囲、P15 が 10584～10472 cal BC（12533～12421 cal BP）の範囲で示され、縄文時代草創期（多縄文土器の時期頃）に相当する。次に古いのは下層確認トレンチ１の６層から出土した炭化物 P13 で、5291～5079 cal BC（7240～7028 cal BP）の間に５つの範囲で示され、早期末葉から前期初頭頃に相当する。なお、以上３点については特に古い年代であるため、cal BP の値も併記した。これらに後続するのは中期の値を示す炭化物７点（P4～P10）で、^{14}C 年代は、4500±30yrBP（P05）から 4040±20yrBP（P10）の間にある。暦年較正年代（１σ）は、７点の中で最も古い P05 が 3333～3105 cal BC の間に４つの範囲、最も新しい P10 が 2581～2491 cal BC の間に２つの範囲で示される。全体として中期前葉から末葉頃に相当し、中でも中期中葉から後葉頃の試料（P06～P09）が目に付く（小林編 2008）。最も新しいのは、フラスコ状土坑 SK187 内の埋設土器の中から採取された P11 の土壌で、^{14}C 年代は 3920±20yrBP、暦年較正年代（１σ）は 2469～2349 cal BC の間に２つの範囲で示され、後期初頭頃に相当する（小林編 2008）。

年代値が古代に属する試料は、炭溜まり SL15 から出土した炭化物 P12 で、^{14}C 年代は 1190±20yrBP、暦年較正年代（１σ）は 778～881 cal AD の間に３つの範囲で示される。

年代値が中世に属する試料は、Ⅲ層出土炭化物 P3、製鉄炉 SL4 出土木炭 P16～P20、SL5 出土木炭 P21～P24 の 10 点で、^{14}C 年代は、820±20yrBP（P17、P21）から 780±20yrBP（P16）の狭い範囲に集中する。暦年較正年代（１σ）は、最も古い P17 が 1209～1255 cal AD の範囲、最も新しい P16 が 1225～1266 cal AD の間に２つの範囲で示される。年代値が重なり合い、ほぼ同年代を示す。

年代値が近世以降に属する試料は、SD01 出土炭化物 P01 と、包含層２出土炭化物 P02 の２点で、^{14}C 年代は、P01、P02 ともに 130±20yrBP である。暦年較正年代（１σ）は、P01 が 1683～1930 cal AD、P02 が 1684～1929 cal AD の間に各々５つの範囲で示される。なお、P01、P02 の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する（第３表下の警告参照）。

試料の炭素含有率を確認すると、炭化物、木炭はすべて 60％を超える十分な値である。土壌 P11 は 2.2％で、土壌として特に低くない値となっている。

（（株）加速器分析研究所）

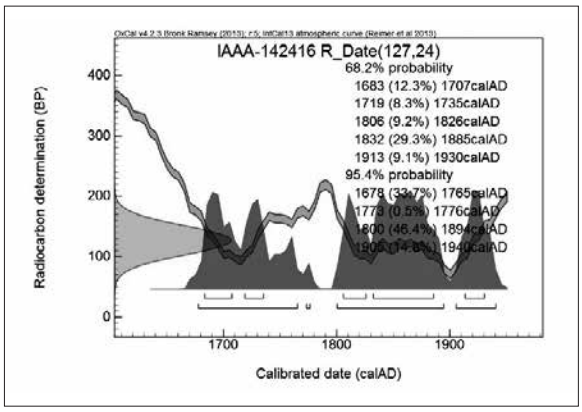
文献

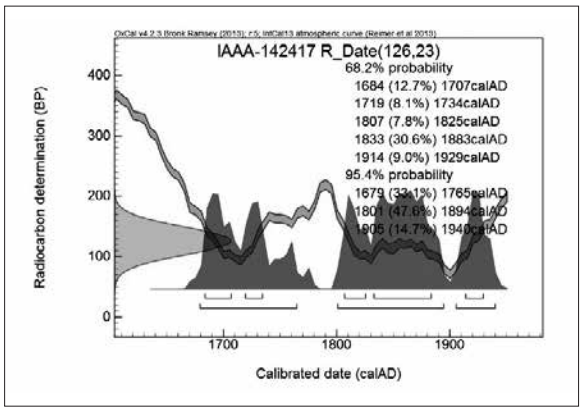
Bronk Ramsey, C.　2009　Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

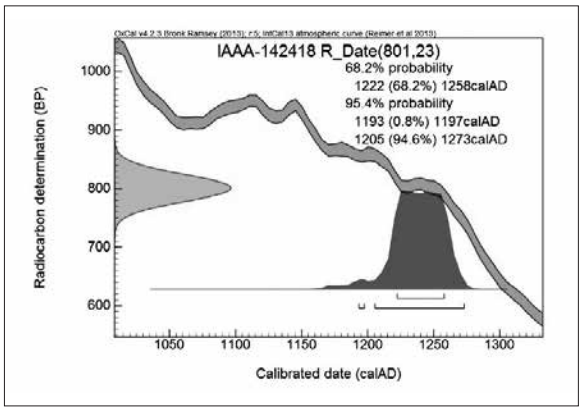
小林達雄編　2008　総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

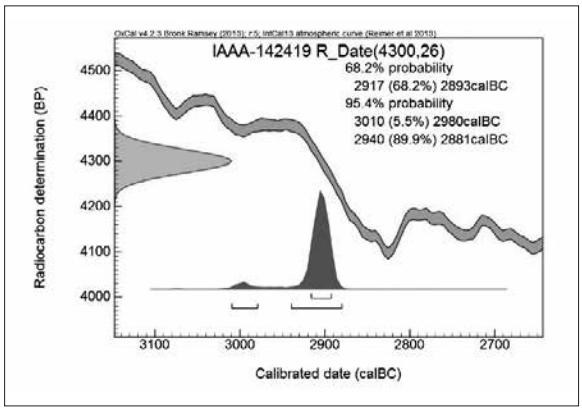
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887

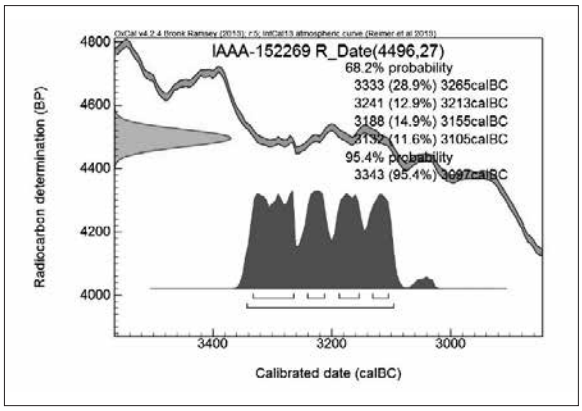
Stuiver, M. and Polach, H.A.
1977　Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

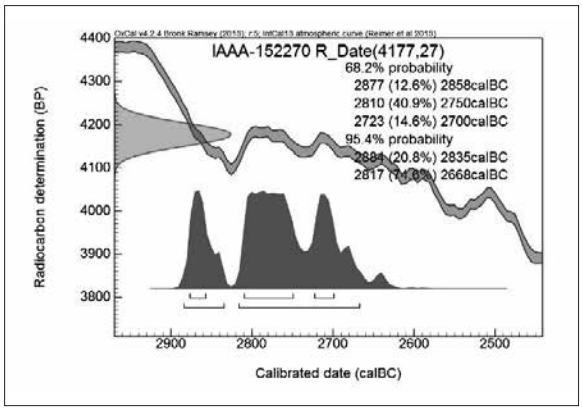


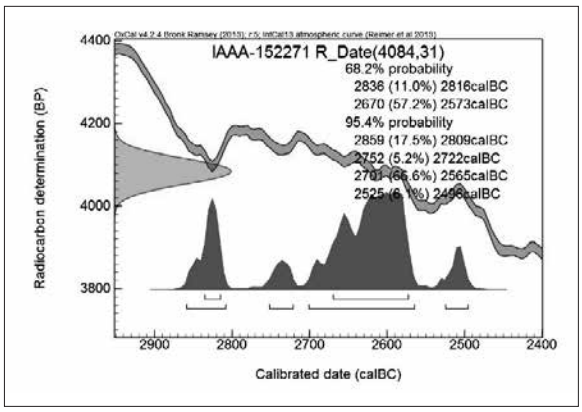


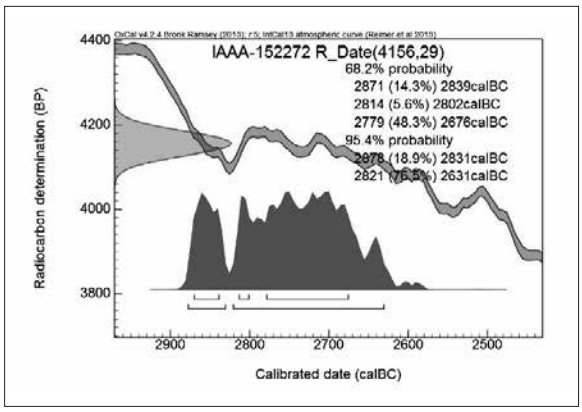




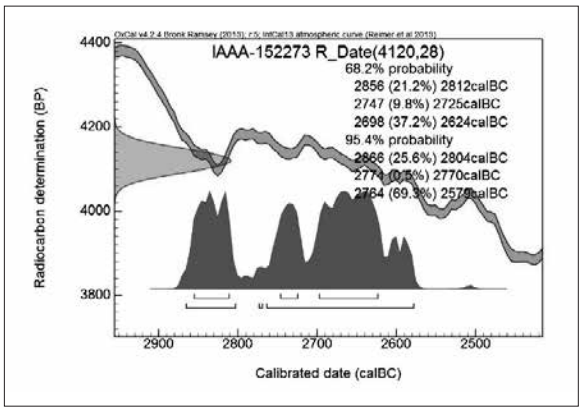


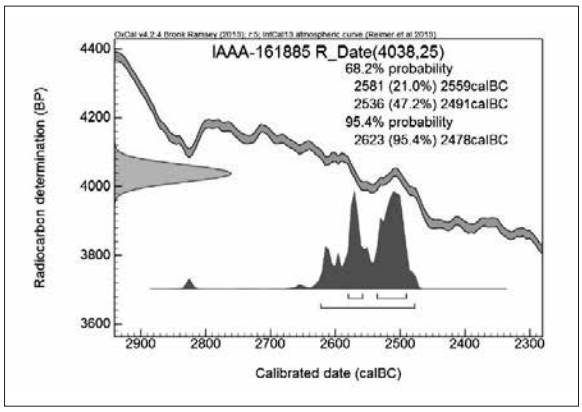


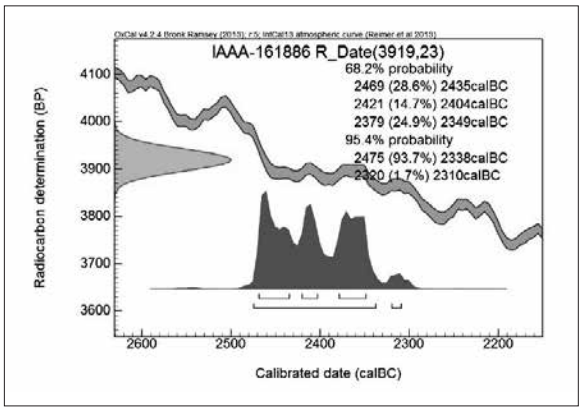


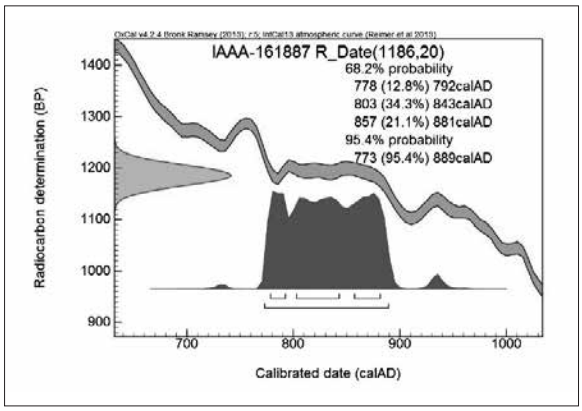


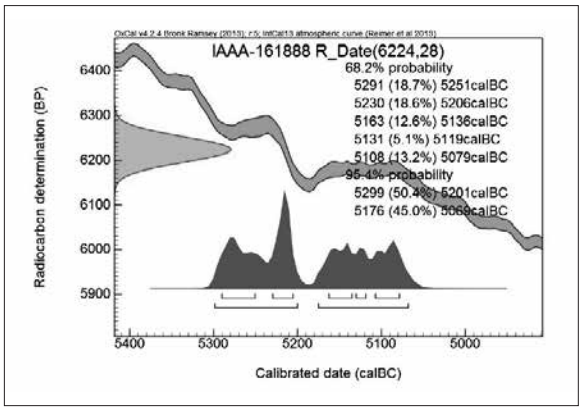
第 26 図　暦年較正グラフ（1）

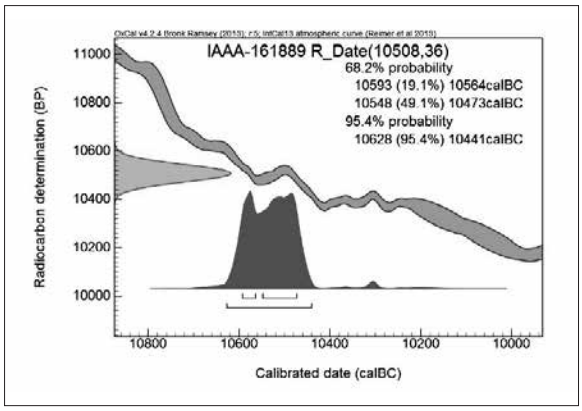


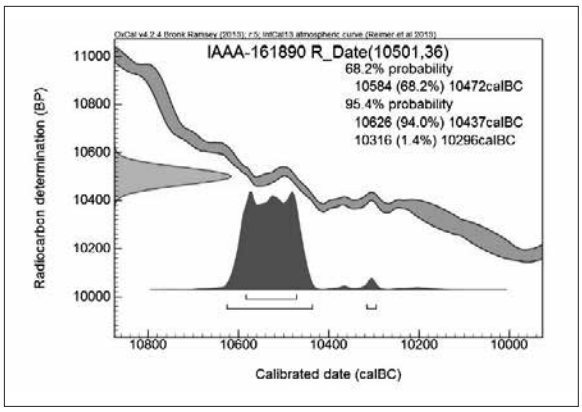


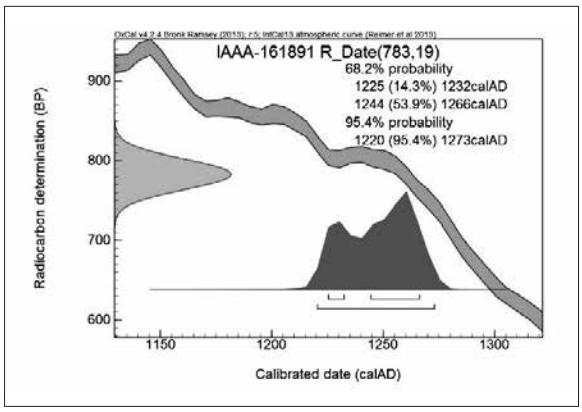




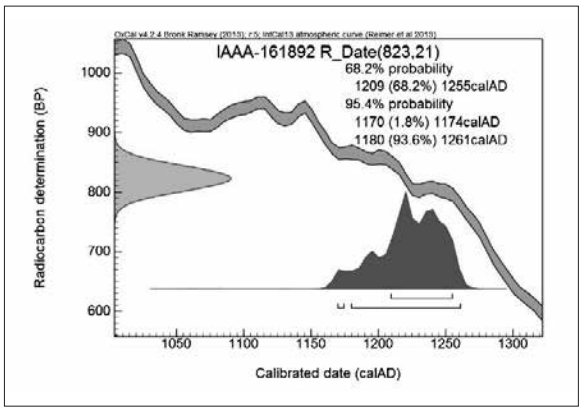


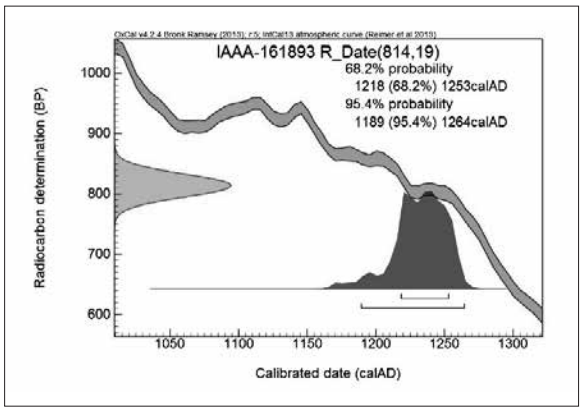


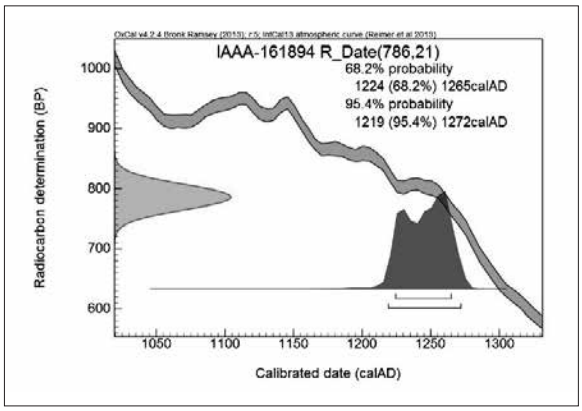


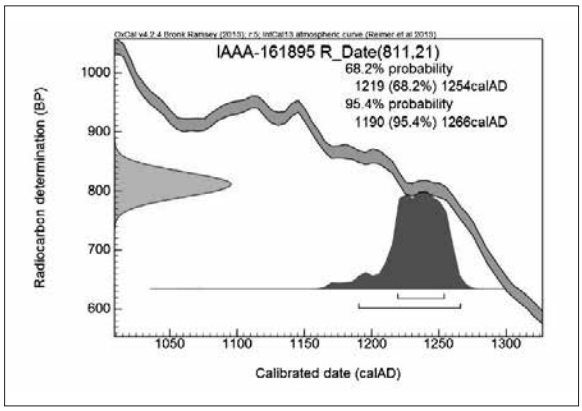


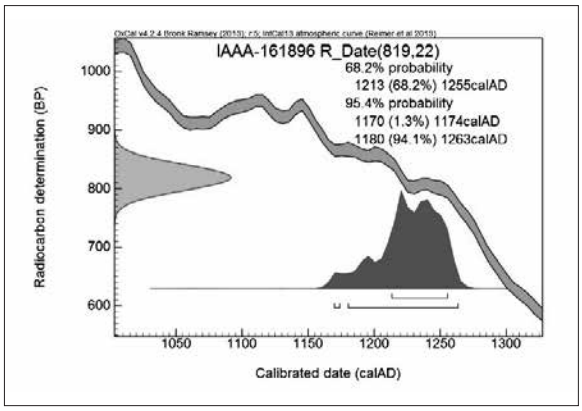
第 27 図　暦年較正グラフ（２）

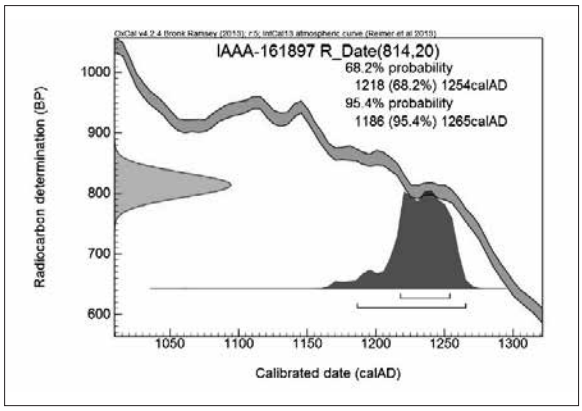


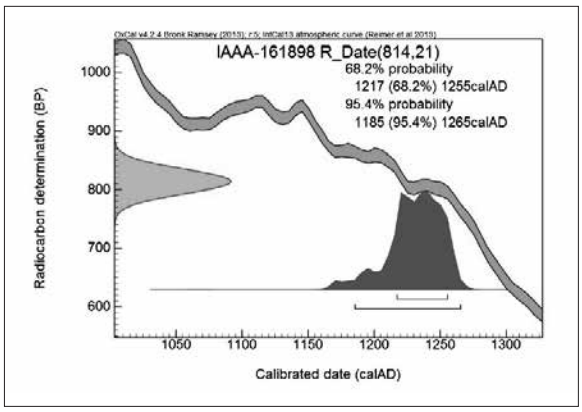


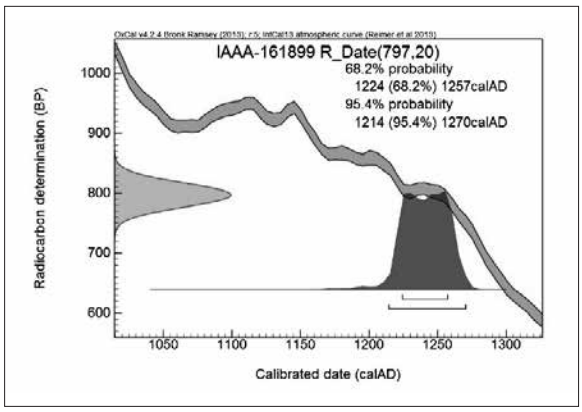












［図版］暦年較正年代グラフ（参考）

第 28 図　暦年較正グラフ（3）

３　高根遺跡出土の琥珀産地同定

（１）実　験　条　件

分析はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による自動定量計算システムが採用されており、$_{6}$Ｃ～$_{92}$Ｕまでの元素分析ができ、ハイパワーＸ線源（最大 30 kV、４mA）の採用で微量試料～最大 290 ㎜φ×80 ㎜Ｈまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では 16 試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルク FP 法でおこなった。FP 法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、Ｘ線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

実験条件はバルク FP 法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、Ｘ線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30 kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200 秒（有効分析時間）である。

分析対象元素は Al. Si. S. K. Ca. Cr. Mn. Fe. Cu. As. Os. Au. Hg. Pd の 14 元素、分析値は試料の含水量＝０と仮定し、元素の重量％を 100％にノーマライズし、表示した。分析対象元素は自動定性でおこなった。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下２桁で表示することになっているが、微量元素の Rb, Sr, Ｙ, Zr は重量％では小数点以下３～４桁の微量となり、小数点以下２桁では０と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下４桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素の濃度（重量％）で Si-Al、Ｓ -Si、Ｋ-Ca の３組の組み合わせで図を作成した。

（２）分　析　試　料

分析に供した試料は第４表化学分析表に示すように間木戸Ｉ遺跡より出土した琥珀遺物と現地に赴き採取した久慈市琥珀博物館・琥珀、久慈市琥珀神社・琥珀、提供していただいた琥珀は久慈市滝沢（滝沢地区の滝沢氏）、久慈市・上山昭彦氏からは上山氏所有の琥珀鉱山、野田村・琥珀海岸の琥珀、いわき市・アンモナイトセンターの鈴木直氏よりいわき市琥珀である。

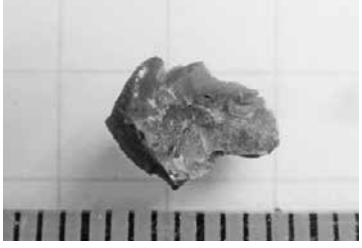
（３）分　析　結　果

Si-Al の相関について

第 30 図 Si-Al 図に示すように琥珀類は Si-１～Si-６の６つの領域に分かれる。

高根遺跡１

高根遺跡２



高根遺跡３

第 29 図　高根遺跡琥珀写真

第４表　琥珀元素化学分析表

試料名	Al	Si	S	K	Ca	Cr	Mn	Fe	Cu	As	Os	Au	Hg	Pb	Total	備考
AM-１	14.0507	15.2384	52.7255	3.4040	8.1349	0.5316	0.3988	1.4460	0.2766	0.6985	1.8367	0.0000	1.2583	0.0000	100.0000	間木戸Ⅰ遺跡・琥珀
AM-２	16.5763	19.0268	50.0476	2.4426	10.0603	0.0000	0.0000	1.5647	0.1300	0.0000	0.0000	0.1517	0.0000	0.0000	100.0000	間木戸Ⅰ遺跡・琥珀
AM-３	8.4392	10.4809	69.8419	3.7131	5.1509	0.0000	0.3619	0.8711	0.2461	0.2241	0.0000	0.6055	0.0000	0.0651	99.9998	間木戸Ⅰ遺跡・琥珀
AM-４	11.7665	31.3272	43.8582	0.5526	3.8442	0.0000	0.0734	6.3170	0.3276	0.0000	0.1170	0.9837	0.6699	0.1627	100.0000	久慈市琥珀博物館・琥珀
AM-５	2.5535	6.2442	81.9707	1.4345	2.1174	0.0000	0.0000	0.0774	0.5930	0.3101	0.0000	1.8777	1.0354	0.6434	1.1427	100.0000	久慈市琥珀博物館・琥珀
AM-６	7.0312	24.1593	49.0651	2.4924	3.8898	0.0000	0.0000	0.0000	2.4478	0.4408	0.0000	1.9975	0.9618	5.1568	2.3575	100.0000	久慈市琥珀博物館・琥珀
AM-７	6.2006	15.3451	36.8141	1.3630	1.0261	0.0000	0.1345	36.8043	0.8762	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	1.4362	100.0001	久慈市滝沢・琥珀
AM-８	1.4130	4.0905	88.2884	1.2743	1.4523	0.0000	0.2473	1.0918	0.0000	0.2014	0.0000	0.7369	1.2040	0.0000	99.9999	久慈市滝沢・琥珀
AM-９	6.7613	12.4819	68.9139	1.5681	7.2198	0.0000	0.3306	1.9902	0.0775	0.1723	0.4845	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	いわき市・琥珀
AM-10	3.7726	12.9652	64.6498	2.8156	10.2215	0.3602	0.1459	3.2478	0.9009	0.0000	0.0000	0.4276	0.0000	0.4928	99.9999	いわき市・琥珀
AM-11	2.4258	4.1704	82.1241	1.8157	5.0777	0.0350	0.1717	1.6862	0.6888	0.2801	0.3110	0.5806	0.5843	0.0486	100.0000	いわき市・琥珀
AM-12	4.6867	11.0545	62.3392	3.1056	14.2242	0.4149	0.2971	2.8051	0.1051	0.0000	0.5771	0.0000	0.3905	0.0000	100.0000	いわき市・琥珀
AM-13	5.0298	7.8843	65.0486	3.5537	14.3874	0.0000	0.4311	2.1541	0.0763	0.1479	0.1814	0.7051	0.2354	0.1649	100.0000	いわき市・琥珀
AM-14	8.2746	18.4077	58.2751	3.4682	8.2850	0.0000	0.2724	1.3507	0.2416	0.0000	0.0000	1.1328	0.2919	0.0000	100.0000	いわき市・琥珀
AM-15	1.1999	4.7653	84.6569	2.5471	5.2303	0.0041	0.0598	0.7784	0.0000	0.0000	0.0000	0.7581	0.0000	0.0000	99.9999	いわき市・琥珀
KOH-１	3.6325	14.2030	49.1248	8.7114	9.3636	0.0000	2.3770	2.1363	0.7003	1.0212	0.8423	1.9868	0.0000	5.9008	100.0000	玉川琥珀海岸
KOH-２	1.2729	1.0382	81.7198	3.5588	4.1093	0.0000	0.0199	4.7465	0.1745	0.7826	1.0248	1.3436	0.2090	0.0000	99.9999	玉川琥珀海岸
KOH-３	4.1406	0.0000	80.0343	1.4377	3.3910	0.2981	0.0000	2.8605	0.0000	0.0000	5.7653	0.0000	0.0000	2.0725	100.0000	玉川琥珀海岸
KOH-４	4.9518	19.6530	58.1012	5.6093	9.0750	0.1928	0.0000	1.9930	0.0000	0.0000	0.0000	0.4239	0.0000	0.0000	100.0000	玉川琥珀海岸
KOH-５	3.7583	3.4546	53.3376	8.3738	24.6310	1.5317	0.0000	1.0921	1.5631	0.0000	1.8252	0.0000	0.2422	0.1905	100.0001	玉川琥珀海岸
KOH-６	2.4991	6.3737	81.6672	0.3369	1.9009	0.0000	0.0000	5.4015	0.5335	0.1308	0.0000	0.2957	0.0000	0.8607	100.0000	上山琥珀・黄金色
KOH-７	1.2793	0.0000	93.5118	2.1290	0.3131	0.0000	0.1489	1.4666	0.6286	0.3278	0.1948	0.0000	0.0000	0.0000	99.9999	上山琥珀・黄金色
KOH-８	1.5948	12.1700	76.7613	1.7059	2.1689	0.0000	0.0000	2.3692	0.0176	0.0000	1.5931	0.0824	1.5367	0.0000	99.9999	上山琥珀・黄金色
KOH-９	0.8170	1.3523	91.5964	1.3134	2.0096	0.8117	0.1254	1.5521	0.1905	0.0000	0.2315	0.0000	0.0000	0.0000	99.9999	上山琥珀・黄金色
KOH-10	0.5829	11.8794	82.3039	1.4125	0.9165	0.1112	0.0000	2.2975	0.2553	0.0000	0.0000	0.0000	0.2200	0.0207	99.9999	上山琥珀・黄金色
KOH-11	0.4349	1.0675	89.3723	2.3126	3.6745	0.3200	0.0705	1.8067	0.6003	0.0000	0.1524	0.0000	0.1884	0.0000	100.0001	上山琥珀・黒色
KOH-12	0.2644	10.8509	71.3827	1.1381	11.1906	0.0000	0.0624	4.3539	0.2008	0.0827	0.1903	0.1223	0.1294	0.0317	100.0002	上山琥珀・黒色
KOH-13	0.0000	0.0000	88.1062	1.5121	8.0349	0.0000	0.0647	1.3779	0.4683	0.1279	0.0000	0.0000	0.0000	0.3080	100.0000	上山琥珀・黒色
KOH-14	1.4111	4.8495	89.0018	1.7784	1.2969	0.0000	0.1306	1.0101	0.3366	0.0000	0.1454	0.0000	0.0000	0.0397	100.0001	上山琥珀・黒色
KOH-15	3.4059	7.0469	74.7557	2.3044	3.3903	0.1667	0.0000	8.0133	0.6336	0.0298	0.0000	0.1205	0.0000	0.1329	100.0000	上山琥珀・黒色
KOH-16	0.0025	15.8011	53.2936	1.7291	4.1812	0.2469	0.7838	21.3365	0.6790	0.1226	1.2036	0.0000	0.0000	0.6200	99.9999	琥珀神社
KOH-17	9.1929	48.4409	11.9984	3.1010	6.8646	0.1422	1.0795	17.5211	0.3847	0.0000	0.0000	0.0000	0.5925	0.6822	100.0000	琥珀神社
KOH-18	4.9490	14.8453	49.7582	5.0083	9.6580	0.0000	0.5918	13.2895	0.5313	0.0000	0.5704	0.1854	0.7128	0.0000	100.1000	琥珀神社
KOH-19	26.6349	31.4746	26.9174	3.2634	2.5523	0.1126	0.3169	7.4646	0.3911	0.1210	0.5592	0.1920	0.0000	0.0000	100.0000	間木戸Ⅰ・床直
KOH-20	20.4665	26.7716	41.3959	3.6644	3.7617	0.0044	0.0000	3.3390	0.2469	0.0000	0.0000	0.1088	0.0572	0.1835	99.9999	間木戸Ⅰ・床直
KOH-21	28.7139	37.2463	23.6042	2.9289	2.6417	0.1604	0.3191	3.9479	0.3174	0.0746	0.0456	0.0000	0.0000	0.0000	100.0000	間木戸Ⅰ・床直
KOH-22	5.8028	6.8024	72.2621	3.5924	5.7815	0.1411	0.0370	2.5801	0.8902	0.5304	1.5801	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001	間木戸Ⅰ・埋土下位
KOH-23	12.0254	10.1119	60.6523	3.8007	5.7615	0.4722	1.3140	3.3675	0.0710	0.2919	1.7988	0.3326	0.0000	0.0000	99.9998	間木戸Ⅰ・埋土下位
KOH-24	6.3742	7.0114	73.5401	4.6182	2.6476	0.0367	0.3715	0.9648	0.3455	0.0834	0.8030	2.7808	0.4228	0.0000	100.0000	間木戸Ⅰ・埋土下位

試料名	Al	Si	S	K	Ca	Cr	Mn	Fe	Cu	As	Os	Au	Hg	Pb	Total	備考
T-１	26.1833	24.1521	37.9909	1.9698	3.6388	0.5630	0.0000	3.1268	0.8035	0.0000	0.0000	0.0000	1.4002	0.1715	99.9999	高根遺跡
T-２	23.8487	15.2749	33.3246	7.5315	5.8604	0.1784	0.2610	11.6611	0.3260	0.0000	1.3080	0.0000	0.4255	0.0000	100.0001	高根遺跡
T-３	19.7609	2.7082	60.0141	5.4529	6.8252	0.6707	0.1082	2.1410	0.1074	0.0000	0.0000	1.1907	0.1122	0.9085	100.0000	高根遺跡

Si－１の領域には久慈市・上山琥珀、久慈市・琥珀博物館、久慈市滝沢琥珀が集中する。
Si－２の領域にはいわき市の琥珀が集中する。
Si－３の領域には間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物が集中する。
Si－４の領域には間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物（床直）が集中する。
Si－５の領域には久慈市琥珀神社・琥珀が集中する。
Si－６の領域には高根遺跡・琥珀が集中する。
各領域には原産地琥珀や遺物琥珀が集中し、組成的違いで分類できることが分かる。
高根遺跡の琥珀はどの領域にも属さずSi－６の領域を形成しており、どちらかというと上山琥珀・黄金色の領域に近い。

S-Si の相関について

第31図Ｓ-Si 図に示すように琥珀類はＳ－１～Ｓ－４の４つの領域に分かれる。
Ｓ－１の領域には間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物（床直）と上山琥珀（黒）が共存する。
Ｓ－２の領域には間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物と琥珀神社・琥珀が共存する。
Ｓ－３の領域にはいわき市琥珀が集中する。
Ｓ－４の領域には久慈市琥珀博物館・琥珀、久慈市滝沢・琥珀、上山琥珀、野田村・琥珀海岸が集中し、間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物が共存する。
高根遺跡・琥珀は上山琥珀・黄金色の領域に近い。

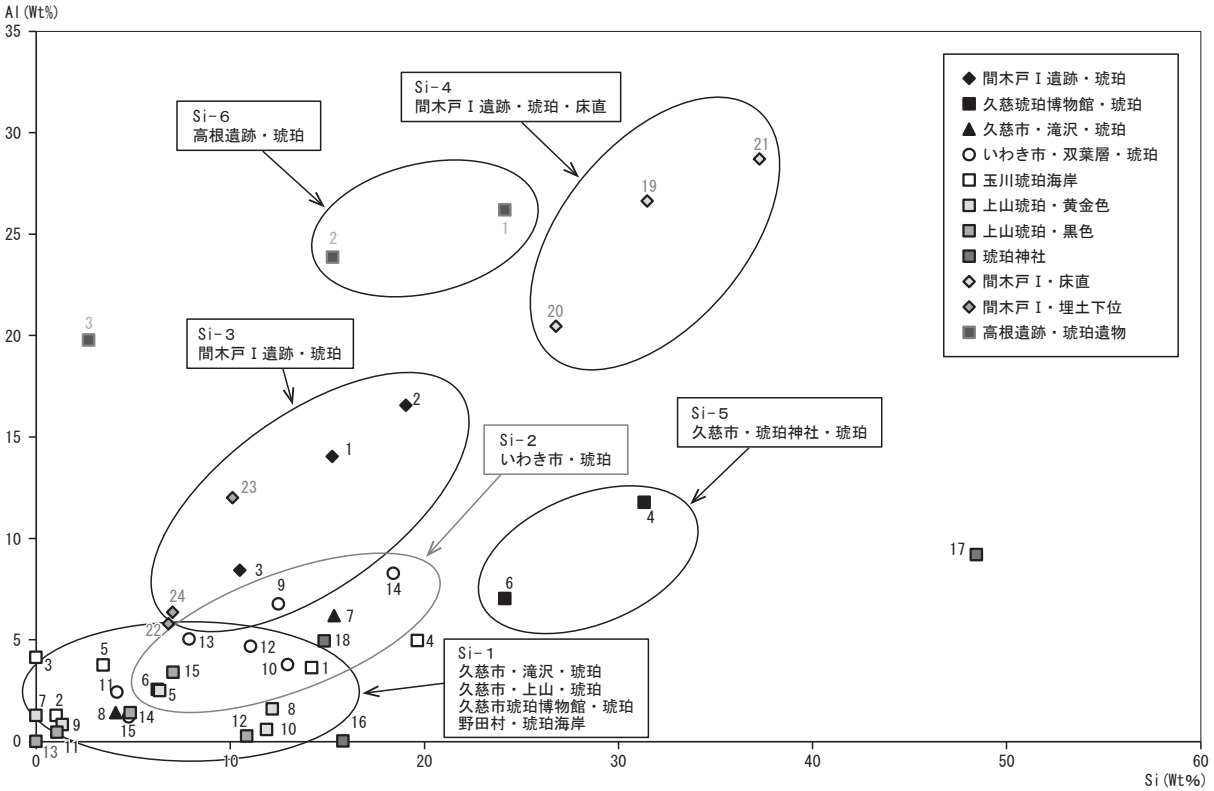
K-Ca の相関について

第32図K-Ca 図に示すようにK－１～K－４の４つの領域に分かれる。
K－１の領域には久慈市の原産地琥珀である琥珀博物館・琥珀、上山琥珀、久慈市滝沢・琥珀が集中する。
K－２の領域にはいわき市琥珀が集中する。
K－３の領域には間木戸Ⅰ遺跡・琥珀と琥珀神社・琥珀共存する。
K－４の領域には野田村・琥珀海岸の琥珀が集中する。
分析結果では高根遺跡・琥珀は分散しており、その一部である高根遺跡１は上山琥珀・黄金色の領域に近い。

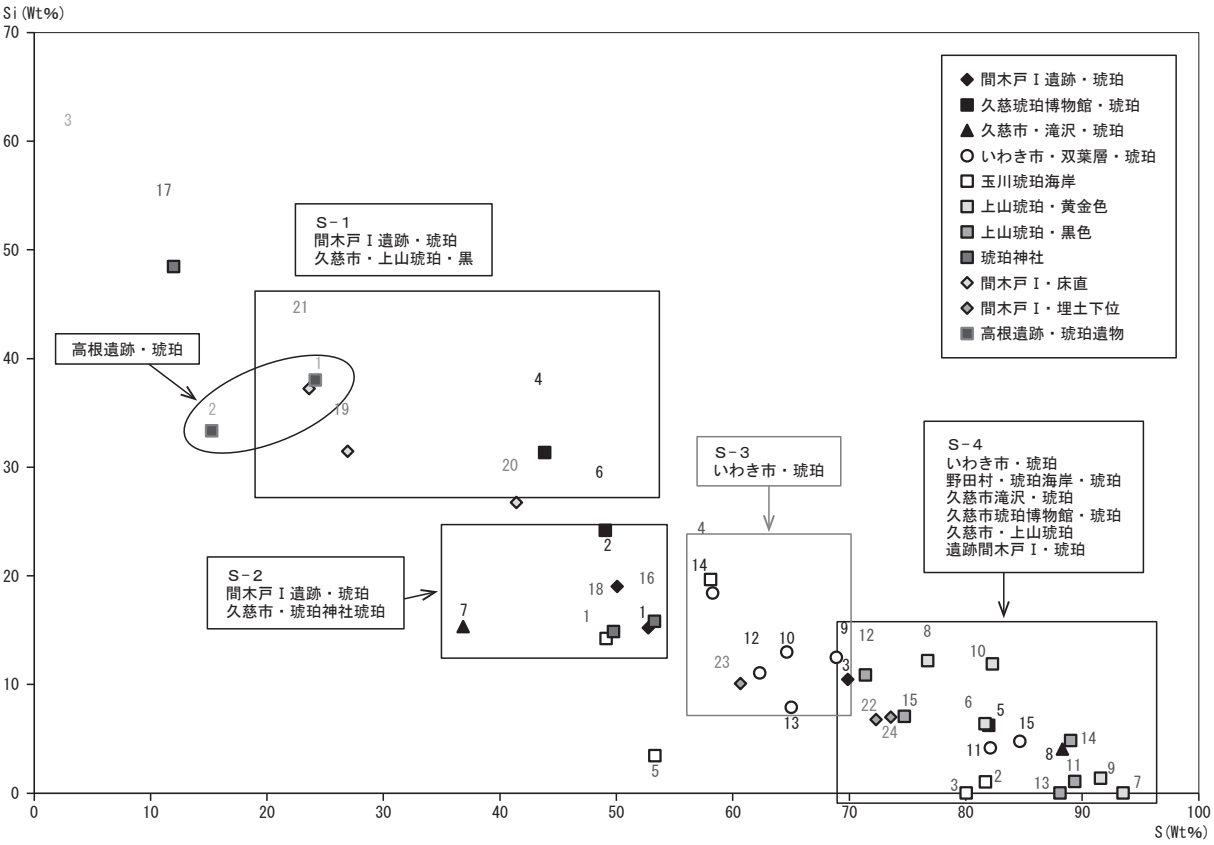
（４）ま　と　め

①琥珀は木の樹液が地中に樹木とともに埋没して形成されたもので、地層の続成作用の過程でゲル状の SiO_2 や Al_2O_3　及びその他の元素が樹液にしみこみ固化していったものと推察され、その時間経過と続成作用の過程が異なれば化学組成も異なるものであると考えられる。
② Si-Al の相関では間木戸Ⅰ遺跡・琥珀遺物のうち、床直の琥珀と埋土下位の琥珀は異なる領域にある。久慈市、野田村、いわき市の原産地琥珀との関連はなく久慈市の異なる原産地琥珀と推察される。
③いわき市・琥珀と久慈市の原産地琥珀、野田村・琥珀海岸・琥珀は各元素による分別では異なる領域にあり、分別される。
④高根遺跡・琥珀は第１図と第２図の関連からすると上山琥珀・黄金色の領域に近い。

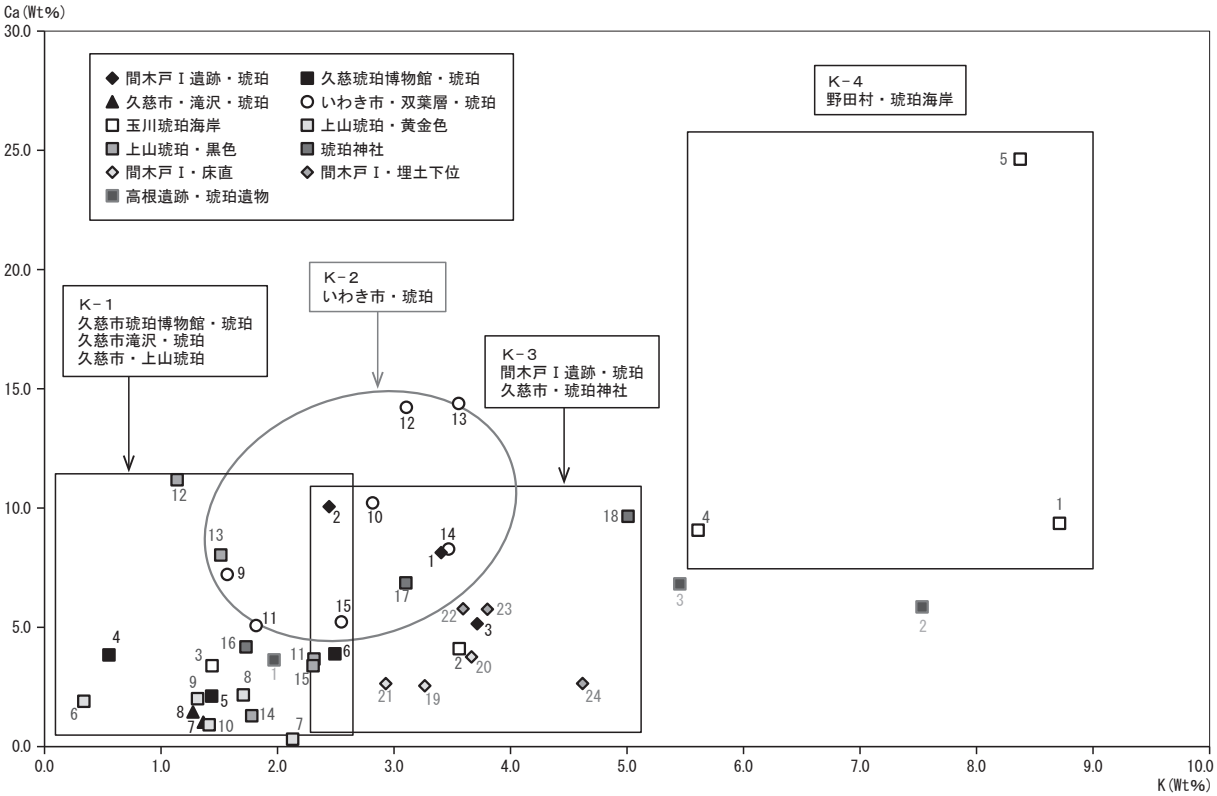
（株式会社　第四紀地質研究所）



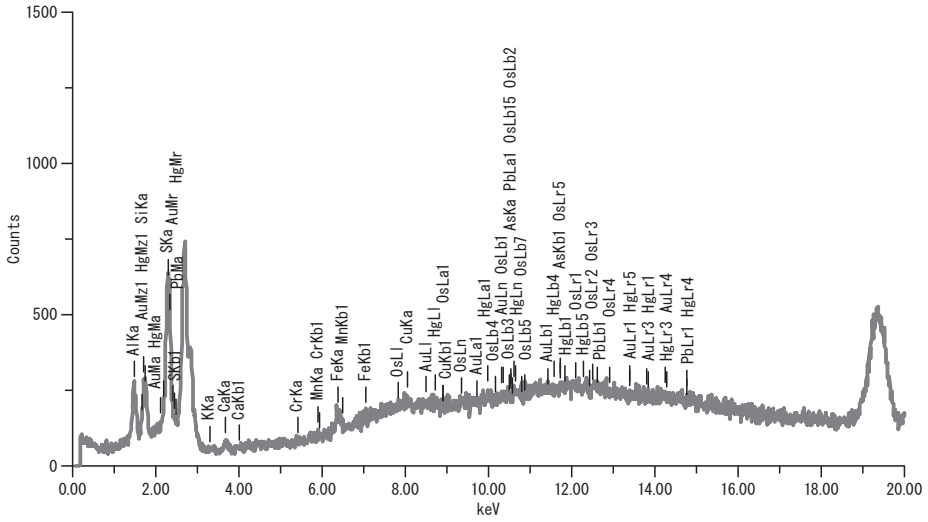
第 30 図　Si-Al 図



第 31 図　S-Si 図



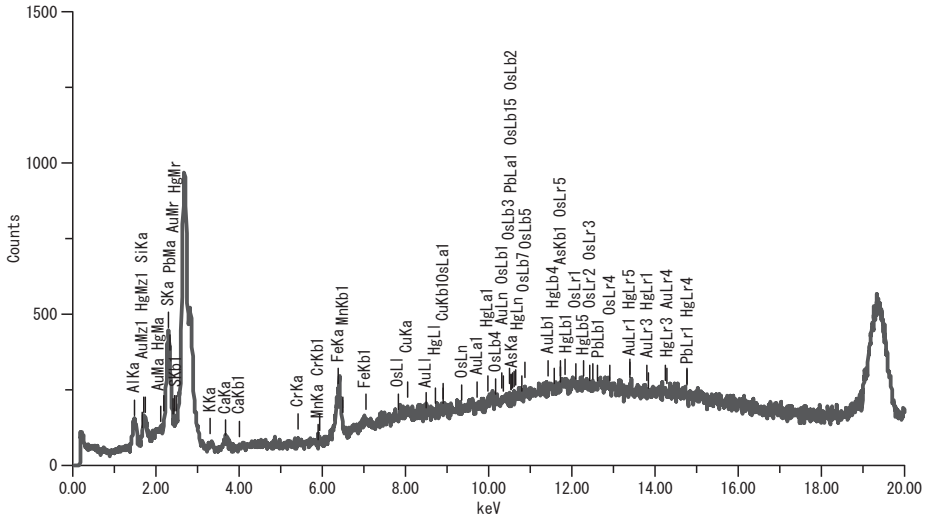
第 32 図　K-Ca 図



ファイル名　：C:¥JSX3200¥DATA¥T-1.SPC　　測定日時：2016 年 12 月 15 日 11 時 13 分 18 秒
試料名　：琥珀遺物
メモ　：28 高根遺跡
測定条件　：電圧：30.0 kV　電流：0.960 mA　ライブタイム：200.00 sec　パス：Vac
分析元素　：Al, Si, S, K, Ca, Cr, Mn, Fe, Cu, As, Os, Au, Hg, Pb

Num	元素 ／ 化学式		wt (%)	at/mole (%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	13	Al	26.1833	29.9172	0.0020270	1756	1.6789
2	14	Si	24.1521	26.5116	0.0021743	1975	1.4638
3	16	S	37.9909	36.5286	0.0027338	5827	0.9324
*4	19	K	1.9698	1.5531	0.0001754	137	2.0484
5	20	Ca	3.6388	2.7990	0.0003399	381	1.5065
*6	24	Cr	0.5630	0.3338	0.0000578	155	0.6867
*7	25	Mn	nd				
*8	26	Fe	3.1268	1.7261	0.0003847	1189	0.5497
9	29	Cu	0.8035	0.3898	0.0001314	454	0.4305
*10	33	As	nd				
*11	76	Os	nd				
*12	79	Au	nd				
*13	80	Hg	1.4002	0.2152	0.0005517	655	1.1146
*14	82	Pb	0.1715	0.0255	0.0000743	88	0.9914

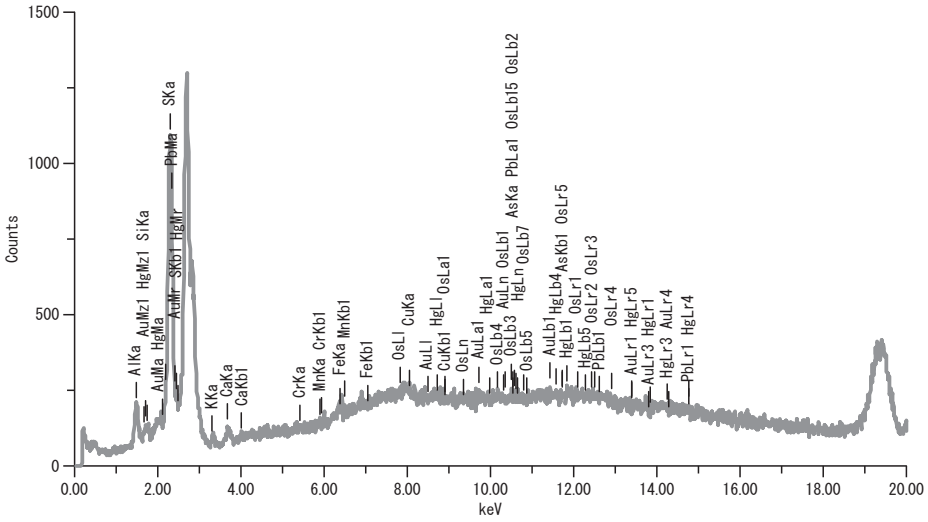
第 33 図　T－1　琥珀遺物



ファイル名　：C:¥JSX3200¥DATA¥T-2.SPC　　測定日時：2016 年 12 月 15 日 11 時 17 分 44 秒
試料名　：琥珀遺物
メモ　：28 高根遺跡
測定条件　：電圧：30.0 kV　電流：1.260 mA　ライブタイム：200.00 sec　パス：Vac
分析元素　：Al, Si, S, K, Ca, Cr, Mn, Fe, Cu, As, Os, Au, Hg, Pb

Num	元素 ／ 化学式		wt (%)	at/mole (%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	13	Al	23.8487	29.1036	0.0008279	941	3.8878
2	14	Si	15.2749	17.9079	0.0006788	809	3.1548
3	16	S	33.3246	34.2219	0.0013099	3665	1.7649
4	19	K	7.5315	6.3422	0.0003635	374	3.9063
5	20	Ca	5.8604	4.8145	0.0002730	401	3.1231
6	24	Cr	0.1784	0.1130	0.0000088	31	1.4869
7	25	Mn	0.2610	0.1564	0.0000140	51	1.3854
8	26	Fe	11.6611	6.8754	0.0006455	2619	1.2635
9	29	Cu	0.3260	0.1689	0.0000204	92	1.1707
10	33	As	nd				
11	76	Os	1.3080	0.2264	0.0002538	287	3.3774
12	79	Au	nd				
13	80	Hg	0.4255	0.0698	0.0000648	101	2.9825
14	82	Pb	nd				

第 34 図　T－2　琥珀遺物



ファイル名　：C:¥JSX3200¥DATA¥T-3.SPC　　測定日時：2016 年 12 月 15 日 11 時 22 分 9 秒
試料名　：琥珀遺物
メモ　：28 高根遺跡
測定条件　：電圧：30.0 kV　電流：1.560 mA　ライブタイム：200.00 sec　パス：Vac
分析元素　：Al, Si, S, K, Ca, Cr, Mn, Fe, Cu, As, Os, Au, Hg, Pb

Num	元素／化学式		wt (%)	at/mole (%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	13	Al	19.7609	23.8083	0.0009863	1388	2.6538
2	14	Si	2.7082	3.1346	0.0001770	261	2.0542
3	16	S	60.0141	60.8460	0.0035392	12259	1.3784
4	19	K	5.4529	4.5334	0.0002992	381	3.3864
5	20	Ca	6.8252	5.5359	0.0003739	680	2.6173
6	24	Cr	0.6707	0.4193	0.0000387	169	1.2500
7	25	Mn	0.1082	0.0640	0.0000071	32	1.1064
8	26	Fe	2.1410	1.2463	0.0001490	749	0.9903
9	29	Cu	0.1074	0.0549	0.0000103	58	0.7494
10	33	As	nd				
11	76	Os	nd				
12	79	Au	1.1907	0.1965	0.0004008	557	1.9902
13	80	Hg	0.1122	0.0182	0.0000263	51	1.9113
14	82	Pb	0.9085	0.1425	0.0002337	449	1.7022

第 35 図　T－3　琥珀遺物

４　高根遺跡出土ヒスイ化学分析

（１）概　　要

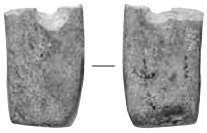
遺跡から出土した石製品のうち、肉眼観察的にヒスイと想定した３点について分析を行った。分析は、調査担当者が、新潟県糸魚川市に所在するフォッサマグナミュージアムに持参した試料を、同館宮島宏氏に依頼し分析・同定したものである。分析方法はＸ線マイクロアナライザーを使用し、元素組成の同定、定量分析を行った。Ｘ線マイクロアナライザーは、電子線を試料に照射し、その際に発生する特性Ｘ線を用いて試料表面の定量分析を行う方法で、鉱物学、岩石学では一般的に使われる方法である。

（２）分　析　試　料

SI22A・B・C（2474）、包含層２（2477）、包含層３（2480）から出土した垂飾品３点である。いずれも白色と緑色が混在した色調を呈している。

（３）分　析　結　果

分析結果を同定すると、2474 が石英、2477 が蛇紋岩、2480 がヒスイと同定された。分析データについては以下の図を参照されたい。なお、ヒスイ以外の 2474、2477 については別の方法でも分析を行っている。結果については第３分冊第４表石製品観察表に記す。



第 36 図　2480　包含層３出土

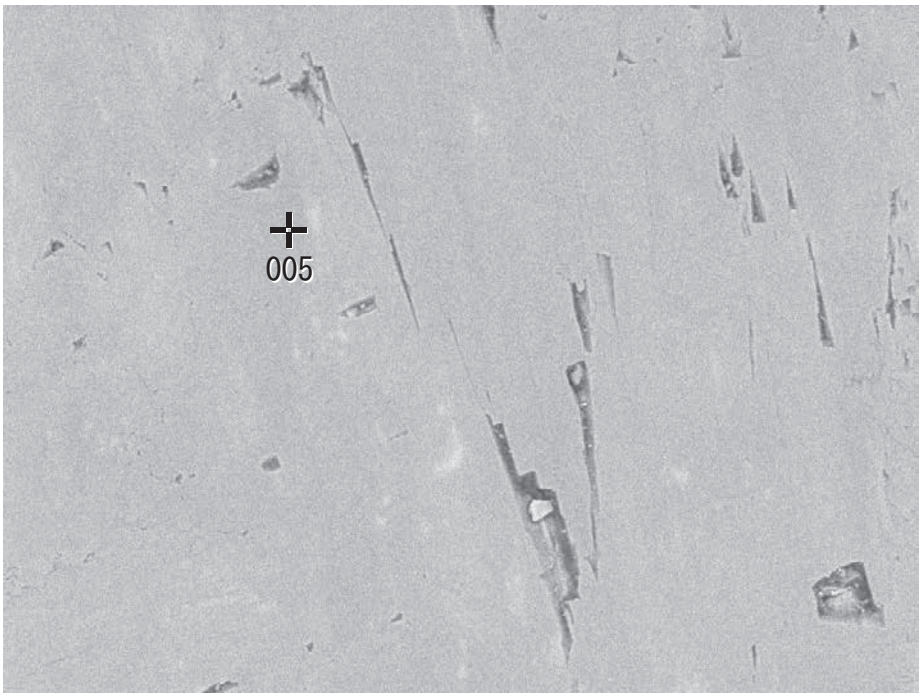
第 37 図　2474　SI22A～C 出土

第 38 図　2477　包含層２出土

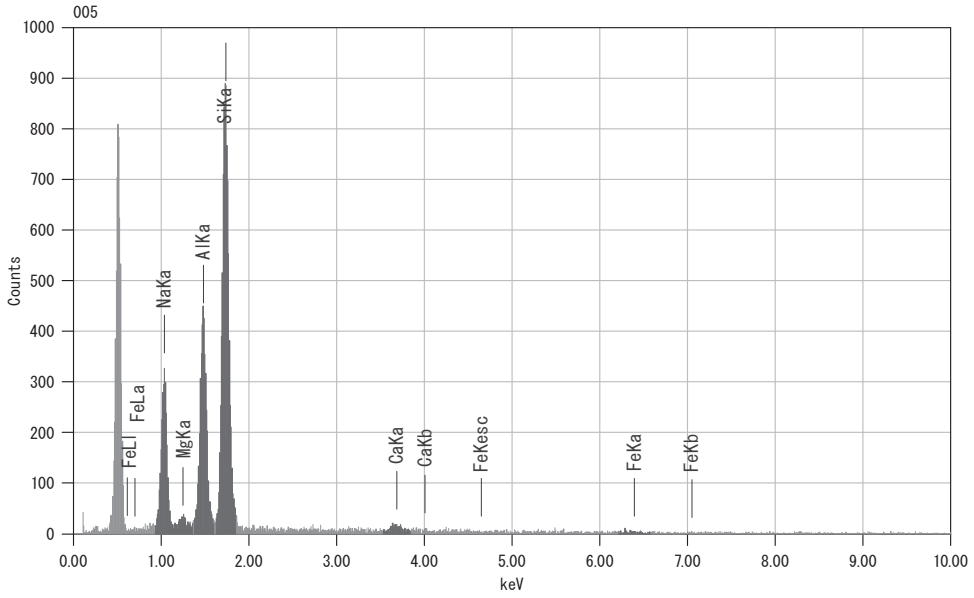
0　1:1　1 cm

資料の半定量科学分析について

使用した機械	分析走査電子顕微鏡（SEM-EDS）に日本電子製エネルギー分散型 エックス線スペクトロメーターをつけた走査型電子顕微鏡 JSM-6510LV
分析条件	低真空モード
炭素蒸着	な し
加速電圧	15 kV
分析時間（リアルタイム）	120 秒
ワーキングディスタンス	10 ㎜
分析範囲	面分析　0.25 ㎜×0.2 ㎜
施設名	糸魚川市フォッサマグナミュージアム
分析年月日	2015 年 12 月 13 日
分析者	宮島　宏　（館長補佐）



タイトル	: IMG1
装置	: 6510(LA)
加速電圧	: 15.00 kV
倍率	: ×500
測定日時	: 2014/02/08
画素数	: 1024×768



測定条件

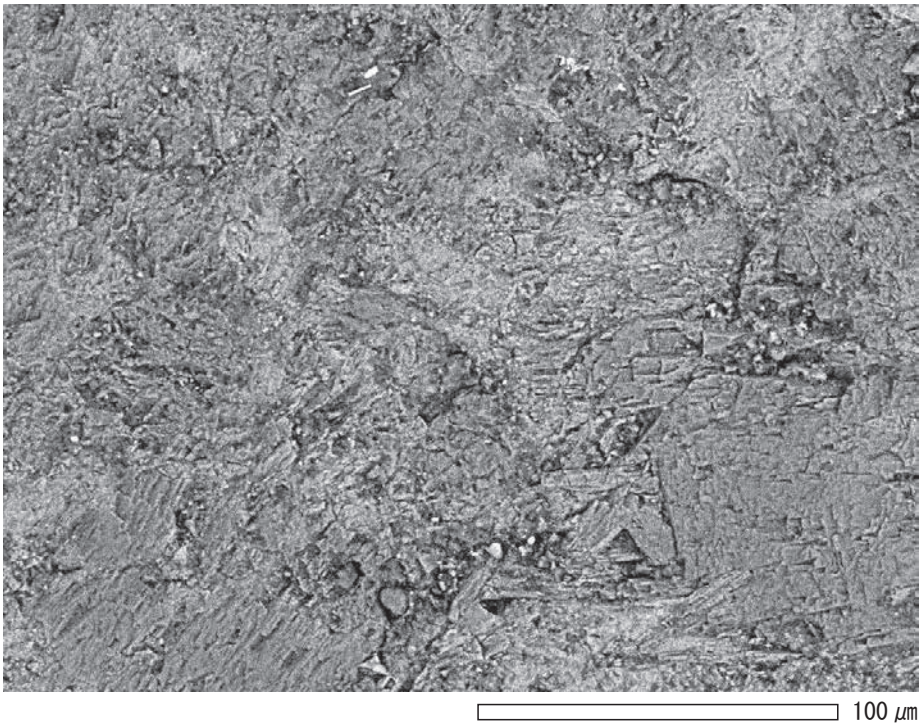
装置名	: 6510(LA)
加速電圧	: 15.0 kV
照射電流	: 0.18625 nA
PHA モード	: T4
経過時間	: 54.41 sec
有効時間	: 35.61 sec
デッドタイム	: 34%
計数率	: 4602 cps
エネルギ範囲	: 0－20 keV

ZAF 法　簡易定量分析（酸化物）
フィッティング係数 : 0.5168
全酸素数 : 6.0

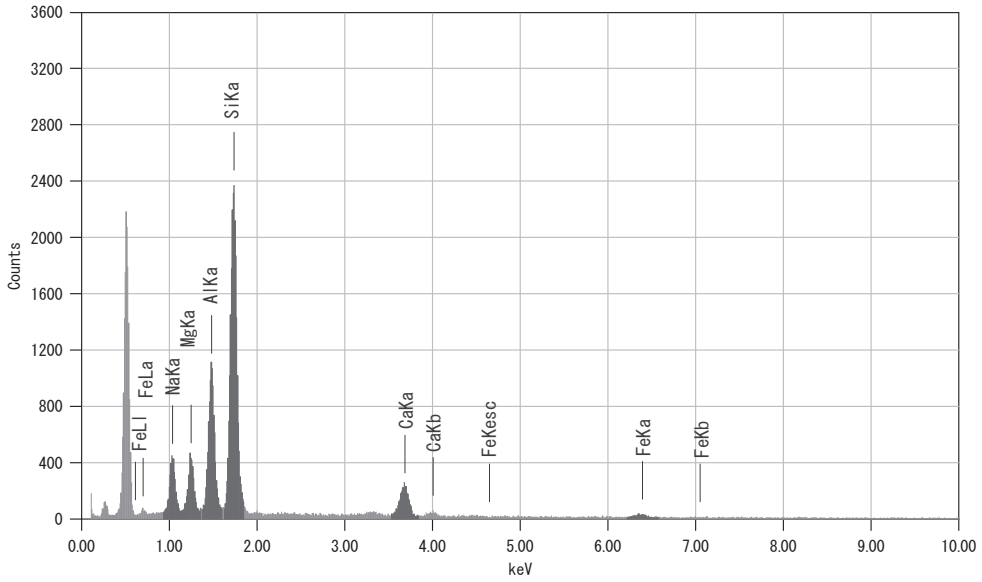
元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		47.51						
Na K	1.041	10.44	0.77	15.06	Na2O	14.08	0.92	20.3306
Mg K	1.253	0.43	0.91	1.18	MgO	0.72	0.04	0.6967
Al K	1.486	12.00	1.04	14.74	Al2O3	22.67	0.90	22.1682
Si K	1.739	28.55	1.37	67.39	SiO2	61.07	2.05	54.3012
Ca K*	3.690	0.76	1.77	1.26	CaO	1.07	0.04	1.8598
Fe K	6.398	0.31	4.65	0.37	FeO	0.40	0.01	0.6434
合計		100.00		100.00		100.00	3.96	

第 39 図　ヒスイ輝石参考データ

出土遺構名：包含層３　３え　南北トレンチ　Ⅱ層



タイトル	: IMG1
装置	: 6510(LA)
加速電圧	: 15.00 kV
倍率	: ×500
測定日時	: 2015/12/13
画素数	: 1024×768



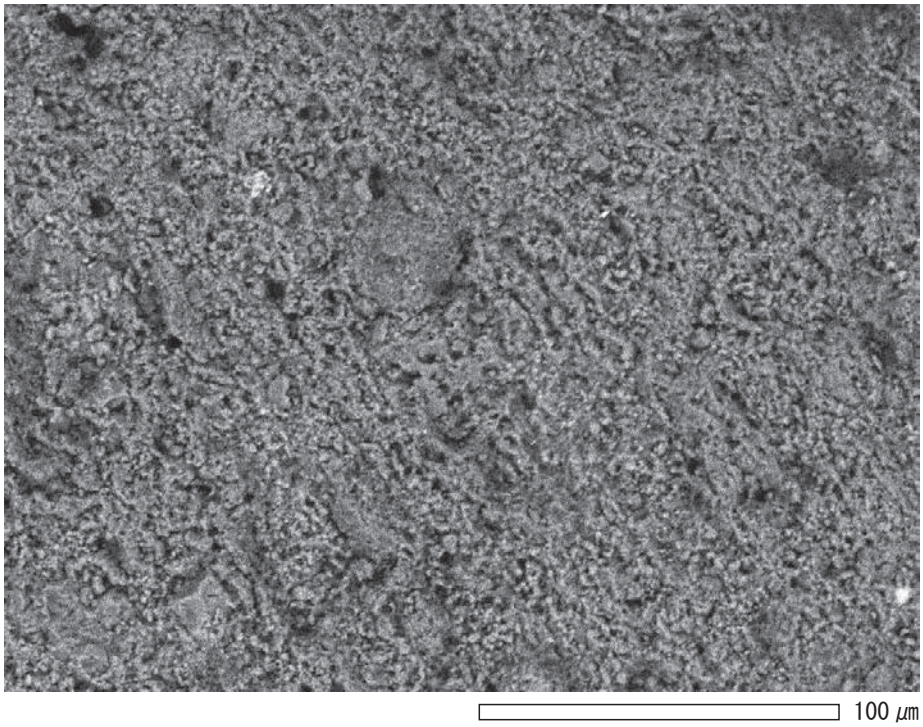
測定条件	
装置名	: 6510(LA)
加速電圧	: 15.0 kV
照射電流	: 0.18625 nA
PHA モード	: T4
経過時間	: 255.04 sec
有効時間	: 120.00 sec
デッドタイム	: 52%
計数率	: 7758 cps
エネルギ範囲	: 0－20 keV

ZAF 法　簡易定量分析（酸化物）
フィッティング係数 : 0.5004
全酸素数 : 6.0

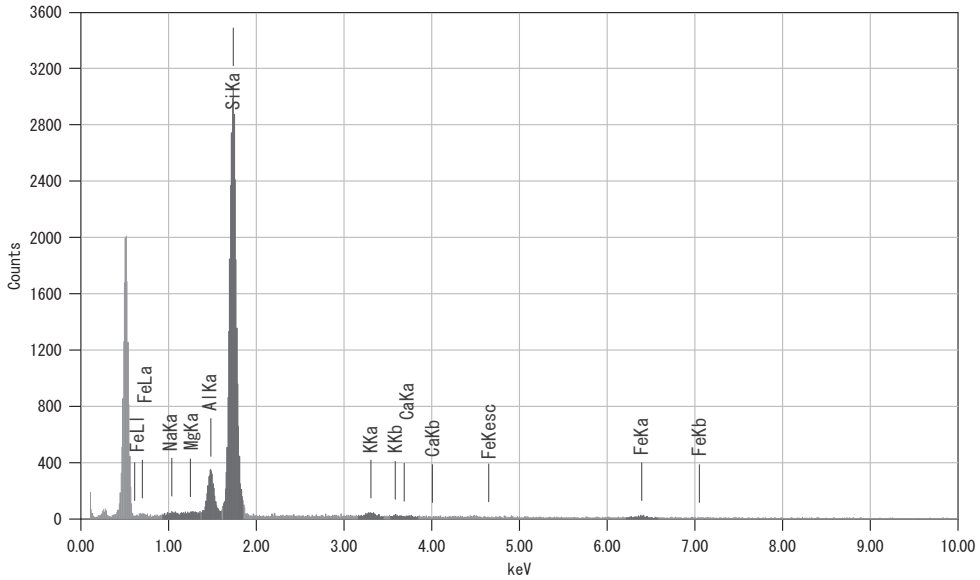
元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		46.75						
Na K	1.041	5.14	0.76	7.08	Na2O	6.93	0.46	9.3239
Mg K	1.253	4.10	0.83	10.65	MgO	6.79	0.35	6.6467
Al K	1.486	10.65	0.99	12.48	Al2O3	20.12	0.81	18.8986
Si K	1.739	26.57	1.28	59.81	SiO2	56.83	1.94	49.4617
Ca K	3.690	5.12	1.65	8.08	CaO	7.17	0.26	12.2921
Fe K	6.398	1.67	4.36	1.89	FeO	2.15	0.06	3.3770
合計		100.00		100.00		100.00	3.88	

第 40 図　高根遺跡石製品（2480）

出土遺構名：SI22A・B　床面



タイトル	：IMG1
装置	：6510(LA)
加速電圧	：15.00 kV
倍率	：×500
測定日時	：2015/12/13
画素数	：1024×768



測定条件

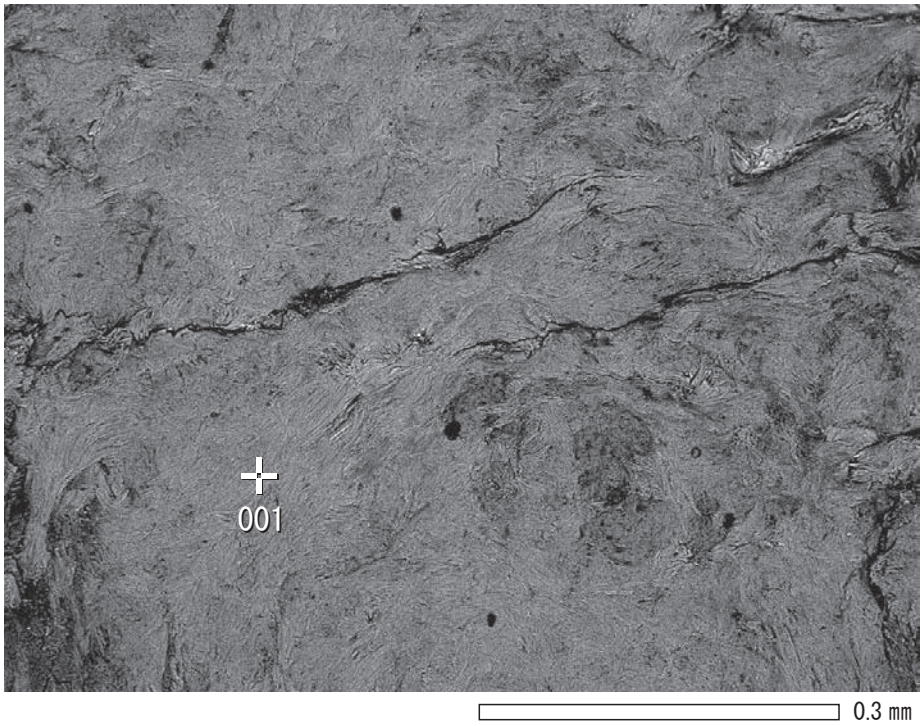
装置名	：6510(LA)
加速電圧	：15.0 kV
照射電流	：0.18625 nA
PHA モード	：T4
経過時間	：254.77 sec
有効時間	：120.00 sec
デッドタイム	：52%
計数率	：7760 cps
エネルギ範囲	：0－20 keV

ZAF 法 簡易定量分析（酸化物）
フィッティング係数 ： 0.5292
全酸素数 ： 6.0

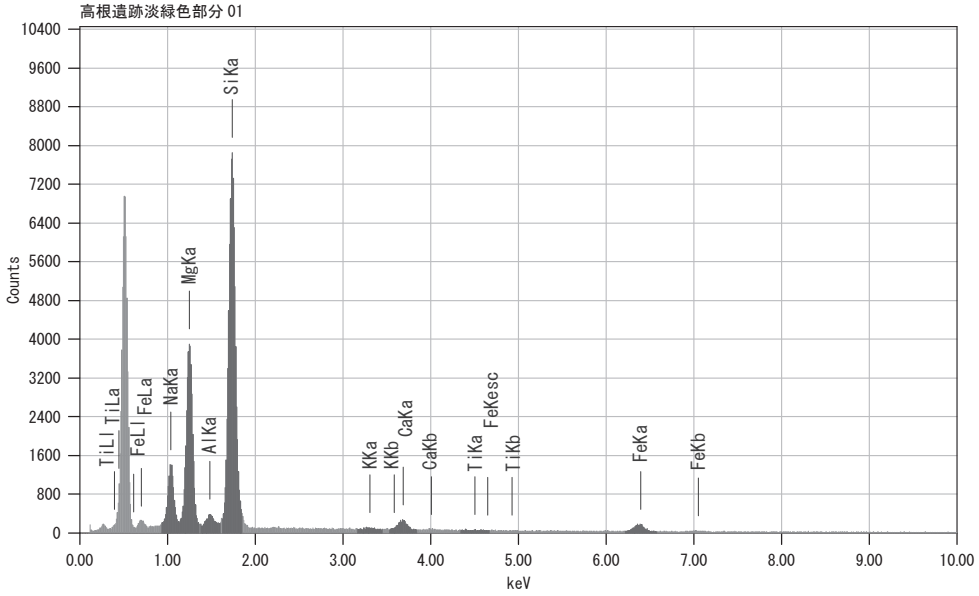
元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		51.78						
Na K	1.041	0.18	0.98	0.25	Na2O	0.25	0.01	0.3246
Mg K	1.253	0.09	1.00	0.22	MgO	0.14	0.01	0.1466
Al K	1.486	3.94	1.16	4.56	Al2O3	7.45	0.27	7.6104
Si K	1.739	41.75	1.45	92.68	SiO2	89.32	2.76	87.2268
K K*	3.312	0.72	1.54	0.57	K2O	0.86	0.03	1.5888
Ca K	3.690	0.03	2.13	0.04	CaO	0.04	0.00	0.0664
Fe K	6.398	1.51	5.56	1.68	FeO	1.94	0.05	3.0363
合計		100.00		100.00		100.00	3.13	

第 41 図　高根遺跡石製品（2474）

出土遺構名：５ウ 北斜面トレンチ　黄褐色土層より上



タイトル	：IMG1
装置	：6510(LA)
加速電圧	：15.00 kV
倍率	：×100
測定日時	：2017/03/17
画素数	：1024×768



測定条件

装置名	：6510(LA)
加速電圧	：15.0 kV
照射電流	：0.18625 nA
PHA モード	：T3
経過時間	：161.83 sec
有効時間	：100.00 sec
デッドタイム	：38%
計数率	：11037 cps
エネルギ範囲	：0－20 keV

ZAF 法 簡易定量分析（酸化物）
フィッティング係数 ： 0.4769
全酸素数 ： 24.0

元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		45.85						
Na K	1.041	5.52	0.79	6.61	Na20	7.44	2.01	10.0673
Mg K	1.253	13.36	0.87	30.25	MgO	22.16	4.60	21.6853
Al K	1.486	0.84	1.15	0.86	Al203	1.59	0.26	1.3598
Si K	1.739	28.58	1.33	55.99	Si02	61.13	8.52	54.2782
K K	3.312	0.29	1.25	0.20	K20	0.35	0.06	0.6611
Ca K	3.690	1.59	1.73	2.18	CaO	2.22	0.33	3.8351
Ti K								
Fe K	6.398	3.97	4.55	3.91	FeO	5.10	0.59	8.1132
合計		100.00		100.00		100.00	16.39	

第 42 図　高根遺跡石製品淡緑色部分（2477）

５　高根遺跡出土炭化種実同定

（１）は　じ　め　に

高根遺跡は岩手県宮古市山口第 11 地割 71 ほかに所在し、山地の尾根～斜面にかけて位置する。縄文時代中期を中心とする集落跡で、発掘調査の結果、住居跡や貯蔵穴などの遺構および土器や石器などの遺物が多く検出されている。本報告では各遺構から出土した炭化種実の同定を実施し、当時の植物利用に関する資料を作成する。

（２）試　　料

試料は各遺構覆土の洗浄済の試料 288 点（O -072～233、248～373）である。試料は全て乾燥した状態でポリ袋に入っており、炭化材や砂礫・土粒等が混在している。各試料の詳細は、結果とともに第５表に示す。

（３）分　析　方　法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。なお、O -322 は、泥主体のため、全量 241 ｇを粒径 0.5 ㎜の篩で水洗、乾燥後、拾い出す。また、堅果類の微細片が多量確認される試料は、主に粒径２㎜以上を同定対象としている。

炭化種実の同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。状態は、半分以下を破片、半分を上回る残存を完形としている。その他、オニグルミの破片は、粒径別の個数の他に、多量確認された試料の重量を表示する。

同定された分類群は、写真を添付して同定根拠とする。堅果類の微細片および不明は、個数または重量を表示する。分析残渣は、確認される種類（炭化材や植物片等）を一覧表に併記する。

次に、クリの完形子葉等の主な炭化種実を対象として、デジタルノギスで長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れ、分析残渣を袋に戻して保管する。

（４）結　　果

炭化種実出土状況

炭化種実同定結果を第５表、炭化種実の遺構別出土状況を第６表に示す。

分析に供された全 288 試料を通じて、裸子植物１個（マツ属）、被子植物 13 分類群（オニグルミ、コナラ節（ミズナラ？）、コナラ節、コナラ属？、クリ、クワ属、キハダ、ウルシ属、トチノキ、イネ科、タデ属、ツルマメ？、ゴキヅル）62,035 個、計 62,036 個の炭化種実が同定された。この他、堅果片 492 個＋127.5 ｇ、堅果類の子葉の破片 48 個、双子葉類の種子？の破片１個、不明果実の破片２個、不明種実８個、不明 115 個＋4.68 ｇが確認された。分析残渣は、炭化材を主体とし、砂礫、土粒や土器片、岩片（剥片類含む）、骨片、二枚貝類、巻貝類、貝殻片、ウニ類の棘、昆虫類、植物片が確認された。このうち、植物片には、スギナ類の地下茎や、常緑針葉樹のスギの枝葉・葉・種子・球果・枝（こぶ病）、落葉広葉樹のクワ属の核、マタタビ近似種の種子、モモの核、キイチゴ属の核、タラノキの核、草本のエノコログサ属の果実、メヒシバ類の果実、イネ科の果実、テンナン

ショウ属？の種子、ギシギシ属の花被、ミズヒキ属の果実、サナエタデ近似種の果実、ナデシコ科の種子、アカザ属の種子、ヒユ属の果胞・種子、タケニグサの種子、キジムシロ類の核、ハギ属の種子、カタバミ属の種子、エノキグサの種子、スミレ属の種子、ウドの核、キランソウ属の果実、ナス科の種子、キク科の果実などが確認され、栽培種のモモの核１個（包含層２；O -302）を含む。ただし、いずれも良好な保存状態で炭化していないことから、後代の混入と判断されるため、考察より除外している。

炭化種実群は、木本 10 分類群 62,029 個、草本４分類群７個から成り、圧倒的な堅果類主体の組成を示す。

木本は、常緑針葉樹で高木になるマツ属の種子が１個（SI22A・Ｂ）、落葉広葉樹で高木になるオニグルミの核の破片が 57,553 個（40 遺構）、オニグルミ？の核の破片が 473 個（19 遺構）、コナラ節（ミズナラ？）の子葉の破片が２個（SI70）、コナラ節の果実の破片が１個（SI70）、コナラ属？の子葉の破片が２個（SI83）、クリの果実の破片が 1,399 個（34 遺構）、子葉が 254 個（９遺構）、クリ？の果実が 58 個（SI66、SK183、SK424）、子葉？が 63 個（SI66、SI90、包含層２）、クワ属の核が１個（SI90）、キハダの種子が６個（SI90、SI93、SK183）、トチノキの幼果が１個（SI22A・B）、種子が 1,232 個（21 遺構）、子葉が２個（SI70）、トチノキ？の種子が 979 個（13 遺構）、高木～籐本のウルシ属の核が２個（SI77）同定された。オニグルミが最も多く、炭化種実全個数の９割以上を占める。次いでクリ、トチノキが多く、いずれも全個数の３～４％である。草本は、イネ科の胚乳が１個（SI32）、タデ属の果実が１個（SI93）、ツルマメ？の種子が２個（SI32、SK183）、ゴキヅルの種子が３個（SI70）同定された。

炭化種実の遺構別出土個数は、SI93 と SI94 が圧倒的に多く、２遺構で約９割を占める。SI93（O -197,214～216,333～335）は、29,298 個と最も多く、全個数の 47％を占め、ほぼオニグルミから成る（99.8％）。次いで SI94（O -217～225,336）は 25,584 個（全個数の 41％）で、SI93 と同様にほぼオニグルミから成る（99.6％）。２遺構に次いで、SI70（O -146～162,325）が 3,030 個（全個数の５％）であり、オニグルミとトチノキがほぼ同率である。その他、SI66、SI83、SI90、SK457 はクリの果実が多く、SI66 はクリの子葉も多い。SK500 はトチノキのみから成る。

炭化種実の記載

炭化種実各分類群の写真を第 43・44 図に、主な炭化種実の計測値を第７表に示して同定根拠とする。以下、各分類群の形態的特徴等を述べる。

・マツ属（*Pinus*）マツ科

種子は炭化しており黒色。長さ 4.3 ㎜、幅 2.2 ㎜、厚さ 1.8 ㎜の三角状倒卵体で基部はやや尖る。種皮は木質で表面は粗面（第 43 図１）。尾根や岩上など生育するゴヨウマツ（*P. parviflora* Sieb. et Zucc.）に由来する可能性がある。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis*（MiyabeetKudo）Kitamura）クルミ科クルミ属核は炭化しており黒色。完形ならば、高さ３～４㎝、径 2.5～３㎝程度の広卵体で頂部が尖り、１本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。縫合線に沿わずに割れた破片や、縫合線周囲を欠損し、打撃痕の可能性がある破片（第 43 図２）、縫合線周囲が波状に削れ、リス類の食痕と考えられる破片がみられる。SI93 と SI94 では、径８㎜以上の大型片を含む破片が極めて多産する。

・コナラ節（*Quercus* sect. *Prinus*）ブナ科コナラ属

果実・子葉は炭化しており黒色。完形ならば、狭卵状楕円体で頂部は尖り、基部は切形。SI70 出土子葉は、２枚からなる子葉の合わせ目に沿って割れた半分未満の破片で、長さ 15.31 ㎜、残存幅 9.25 ㎜、残存厚 8.34 ㎜を測る。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で頂部に楕円状の孔（主根）がある（第 43 図４）。コナラ（*Q. serrata* Thunb. ex Murray）よりも果実が大型であるミズナラ（*Q. crispula* Blume）に由来すると考えられる。また、同定が難しい破片をコナラ属？　としている。

SI70 出土果実破片は、基部の着点部で径 8.22 ㎜の円形。木質で外面はやや丸みを帯び、外縁は維管束の穴が輪状に並ぶ。内面は粗面（第 43 図５）。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

果実・子葉は炭化しており黒色、三角状広卵体で頂部は尖り、基部は切形、一側面は偏平で反対面は丸みがある。果皮は薄く（0.5 ㎜程度）、表面はやや平滑で、浅い微細な縦筋がある。果皮内面は粗面で粗い縦筋（種皮）がある（第 43 図５～７）。基部全面を占める着点は別組織で、粗く不規則な粒状紋様があり、果皮との接線は波打つ（第 43 図５，６）。

果実内に１個入る子葉は、硬く緻密で、表面には種皮（渋皮）の圧痕の縦筋が粗く波打つ（第 43 図８～15）。２枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた面は平滑で、正中線はやや窪み、頂部には小さな孔（主根）がある（第 43 図 10b，15b）。一部表面には不規則な円形の孔が確認され、虫類による食痕と考えられる（SI66；第 43 図９）。

長さ（高さ）と幅がほぼ完全な出土炭化子葉 12 個の計測値より、「クリの大きさ指数（√((炭化子葉の高さ＋1.85)/0.76)×(炭化子葉の幅＋4.86)/0.86))」（吉川，2011）を求めた結果、最小 11.37（SI66；第 43 図 12）～最大 27.81（SI66）；第 43 図９）であった（第７表）。長さ（高さ）と幅が完全な出土炭化子葉９個から求めたクリの大きさ指数の平均値は 20.93 である。

・クワ属（*Morus*）クワ科

核は炭化しており黒色。径 1.3 ㎜の三角状広卵体。一側面は狭倒卵形、他方は稜になりやや薄い。頂部一端に爪状突起がある。表面には微細な網目模様がある（SI90；第 44 図 16）。

・キハダ（*Phellodendron amurense* Rupr.）ミカン科キハダ属

種子は炭化しており黒色。完形ならば長さ３～4.5 ㎜、幅 1.8～３㎜、厚さ１～1.5 ㎜のやや偏平な半横広卵体。種皮表面には浅く微細な縦長の網目模様が配列する。出土最大種子は残存長 2.8 ㎜（SI90；第 44 図 17）。

・ウルシ属（*Rhus*）ウルシ科

核（内果皮）は炭化しており黒色。SI77 出土核破片は、長さ 2.76 ㎜、残存幅 2.63 ㎜を測るやや偏平な横楕円体で、背腹両面の中央が凹み、繭状。腹面中央にある長楕円形の臍を欠損する。内果皮表面はやや平滑で、断面は柵状構造を呈す（第 44 図 18）。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属

種子（種皮・子葉）・幼果は炭化しており黒色。種子は径 0.6～３㎝の偏球体（第 44 図 19）。種皮表面は、ほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い上部と、粗面で光沢のない下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、不規則に割れる（第 44 図 20～23）。種皮内部の子葉も不規則に割れ、クリよりも粗面である。出土子葉破片は最大 12.89 ㎜を測る（図版番号 25）。幼果は長さ 5.7 ㎜、残存径 3.0 ㎜の歪な倒卵体で頂部は尖り、基部は切形。出土幼果は基部と頂部を結ぶ３本の溝に沿って割れた破片である（SI22B；第 44 図 24）。

・イネ科（Gramineae）

SI32 出土胚乳は炭化しており黒色。長さ 1.26 ㎜、幅 0.96 ㎜、厚さ 1.6 ㎜のやや偏平な卵状楕円体で、背面は丸みがあり腹面は平らである。背面基部正中線上にある馬蹄形の胚の窪みは不明瞭である（第 44 図 26）。栽培種のヒエ（*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno）を含むヒエ属に似るが、小型で保存状態が不良であることから、イネ科までの同定にとどめている。

・タデ属（*Polygonum*）タデ科

SI93 出土果実は炭化しており黒色。残存長 1.7 ㎜、幅 1.8 ㎜のやや偏平な広卵状２面体で上半部を欠損する。基部は切形で萼が残る。果皮表面は粗面（第 44 図 29）。

・ツルマメ（*Glycine max* subsp. *soja*（Sieb. et Zucc.）Ohashi）？　マメ科ダイズ属

種子は炭化しており黒色。SK183 出土種子は、長さ 3.32 ㎜、幅 2.18 ㎜、厚さ 1.81 ㎜の偏平な楕円体。腹面一端に幼根が突出し、幼根に隣接する楕円形の臍を欠損する（第 44 図 28）。「簡易楕円体積（長さ/２×幅/２×厚さ/２×４/３×π）」（那須ほか，2015）は 6.86 ㎣となり、「40 ㎣以下の野生型」（那須ほか，2015）に該当し、現生の野生種のツルマメに類似する小さいサイズであることから、ツルマメ？としている。その他、SI32 出土種子破片は幼根部で、残存長 1.97 ㎜を測る（第 44 図 29）。

・ゴキヅル（*Actinostemma lobatum*（Maxim.）Maxim.）ウリ科ゴキヅル属

種子は炭化しており黒色。SI70 出土種子は、長さ 9.0 ㎜、幅 5.0 ㎜のやや偏平な広倒卵体。基部は切形で、臍と発芽口がある。腹面はやや平ら。背面は丸みを帯び、表面は粗面で不明瞭な大型網目模様を欠損する（第 44 図 30）。

（５）考　　察

炭化種実同定の結果、各遺構からは木本８分類群（常緑針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のオニグルミ、コナラ節（ミズナラ？）、クリ、クワ属、キハダ、ウルシ属、トチノキ）、草本４分類群（イネ科、タデ属、ツルマメ？、ゴキヅル）から成る炭化種実群が得られ、圧倒的な堅果類主体の組成を示した。

特に、SI93、SI94 では炭化種実が極めて多産し、両遺構の出土個数が全体の約９割を占め、大半がオニグルミから成る組成であった。SI93、SI94 に次いで SI70 がやや多く、オニグルミとトチノキがほぼ同率の組成を示した。その他、SI66、SI83、SI90、SK457 はクリの果実、SI66 はクリの子葉が多産し、SK500 はトチノキのみから成るなど、遺構間における出土堅果類の組成の違いも認められた。

河畔林要素のオニグルミ、トチノキ、キハダや、二次林要素のコナラ節（ミズナラ？）、クリ、林縁などの明るく開けた場所に生育するクワ属、ウルシ属、尾根沿いなどに生育するマツ属は、当時の高根遺跡周辺域の河畔林（閉伊川水系）や二次林等に生育していたと考えられる。特にトチノキは、成熟種子の他に未熟種子や幼果も確認されたことから、遺跡近辺に生育していたことが示唆される。

今回多量に確認されたオニグルミをはじめ、クリ、マツ属は子葉が食用可能で、コナラ節（ミズナラ？）、トチノキは灰汁抜きを施すことで子葉が食用可能となる。これらの堅果類は、収量も多く、長期保存も可能な有用植物であることから古くより植物質食料として利用され、縄文時代の遺跡出土例も多い（渡辺，1975 など）。今回の出土堅果類も、当時の遺跡周辺の落葉樹林から遺構内に持ち込まれ利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。さらに、食用にならない果皮や種皮の破片を主体とすることから、可食部の子葉を取り出した後に廃棄された食料残滓と考えられる。炭化材とともに出土した状況を考え合わせると、燃料材として利用された可能性もある。特に、SI93、SI94 より極めて多産したオニグルミは、径８㎜以上を含む大型片が多い。遺構内では大型片の形状を保持した状態で多数出土した状況が推測される。なお、出土核は縫合線に沿わずに割れた破片や打

撃痕の可能性がある破片がみられることから、人が食用のために割った可能性がある。

一方、コナラ節（ミズナラ）やクリ、トチノキの可食部である子葉は、食用されずに火を受けた可能性がある。このうち、クリの子葉は表面に深い皺が刻まれ、焼き膨れや発泡等が殆ど確認されない状況を考え合わせると、十分に乾燥した状態で火を受けたとみなされる。また、計測値より「クリの大きさ指数」（吉川，2011）を求めて比較した結果、最小 11.37～最大 27.81、平均値は 20.93 が得られ、小型である傾向が得られた。

堅果類を除いた分類群は、SI90 より出土したクワ属は果実が食用可能である。SI90、SI93、SK183 より出土したキハダは果実や樹皮が薬用に利用可能である。

SI77 より出土したウルシ属について、現在の本地域には籐本のツタウルシ、小高木のヌルデ、ヤマウルシの他に、古くより利用の可能性が指摘される高木のウルシが分布する。近年の研究では、縄文時代以降の遺跡から漆製品やウルシの木材や核（内果皮）、花粉化石の出土が確認されている。今回の出土核は破片のため、記録保存を優先したが、今後は走査型電子顕微鏡による表面および壁構造の観察が望まれる。草本は、中生植物のイネ科、タデ属、ツルマメ、湿生植物のゴキヅルが確認された。調査区周辺域の草地や湿った場所に生育していたと考えられる。

このうち、SI32 より出土したイネ科は、栽培される雑穀類のヒエを含むヒエ属に似る。ヒエは、縄文時代に栽培された可能性が指摘されており、縄文時代前期～中期に北海道・東北での出土例が集中しているが、近年、年代測定値等より検討の余地があるとされている（小畑ほか，2011 など）。今回出土した胚乳も利用された植物質食糧に由来する可能性があるが、１個のみの出土で保存状態が不良であるため、イネ科までの同定にとどめている。今後の資料蓄積を待ち、当時の利用を慎重に検討する必要がある。

SI32、SK183 より出土したツルマメ？を含むダイズ類の種子は、近年の土器圧痕調査や炭化種実の研究で縄文時代以降の栽培やサイズの大型化が検討されている（那須ほか，2015 等）。今回、SK183 出土種子のサイズ範囲は「野生型」（那須ほか，2015 等）に該当し、現生の野生種のツルマメに類似する小さいサイズであることがわかった。出土種子が当時の栽培やサイズの大型化を支持するには至らないが、堅果類の共伴や、同遺構（SI32）よりヒエ属に似るイネ科が共伴する出土状況を考慮すると、当時利用された可能性は充分に考えられる。今後の出土種子資料蓄積により、遺跡周辺における栽培やサイズの大型化の検討が課題である。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

石川茂雄　1994　原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2010　日本植物種子図鑑（2010 年改訂版）．東北大学出版会，678p.

那須浩郎・会田進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石甫　2015　炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用．資源環境と人類，第５号，明治大学黒耀石研究センター，37-52.

小畑弘己　2011　東北アジア古民族植物学と縄文農耕．同成社，309p.

鈴木庸夫・高橋冬・安延尚文　2012　ネイチャーウォッチングガイドブック草木の種子と果実―形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種―．誠文堂新光社，272p.

渡辺誠　1975　縄文時代の植物食．雄山閣出版，187p.

吉川純子　2011　縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化．植生史研究，第 18 巻第２号，57-63.

第５表　炭化種実同定結果（１）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実					合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ					クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実・子葉		子葉			子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉		胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実				
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片			備考
0-072	SI1	埋設土器内 土①	－	4	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	11	－	－	－	－	－	3	
0-073	SI1	炉内焼土	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-074	SI1	旧炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-075	SI9		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-076	SI9		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-077	SI10	焼土直上	－	4	－	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	－	－	－	－	－	－	
0-078	SI18	炉、焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-079	SI18	炉、焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-080	SI19		－	57	－	－	－	－	2	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	54	－	－	－	－	－	－	－	－	－	118	－	5	－	－	－	－	
0-081	SI19	炉、焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-082	SI19	炉、焼土	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-083	SI22A・B		1	3	－	－	－	－	6	15	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	1	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	39	15	－	－	－	－	－	クリ子葉：長さ 12.74 ㎜，幅 11.45 ㎜，厚さ 8.02 ㎜
0-084	SI22A・B	炉、焼土	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	
0-085	SI22A・B	炉石付近	－	6	－	－	－	－	3	18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	30	4	2	－	－	－	－	
0-086	SI22A・B		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-087	SI22B	炉５　埋土最下層	－	13	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	24	10	－	－	2	－	1	
0-088	SI22B	炉５	－	50	－	－	－	－	4	25	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	25	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	104	87	1	－	－	－	－	
0-089	SI22B	炉５	－	53	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	56	3	－	－	－	－	－	
0-090	SI22B		－	1	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	
0-091	SI22B	炉１	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	
0-092	SI22B	炉１	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-093	SI22B	炉	－	15	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15	－	－	－	－	－	－	
0-094	SI22B	炉５	－	6	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	1	－	－	－	－	－	
0-095	SI22B	石囲部　炉	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-096	SI22A・B		－	1	－	－	－	－	7	22	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	44	4	－	－	－	－	－	
0-097	SI22B	炉４	－	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	
0-098	SI23	炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-099	SI24	炉	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-100	SI25	炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-101	SI28		－	3	－	－	－	－	2	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	－	－	－	－	－	－	
0-102	SI28		－	2	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	4	
0-103	SI28		－	8	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	18	6	－	－	－	－	－	
0-104	SI28		－	－	1	－	－	－	－	5	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	4	

第５表　炭化種実同定結果（２）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																					草本種実						不明						
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ			トチノキ？	トチノキ	イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル		堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実・子葉		子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子		種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子			子葉	種子？	果実			
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	合計	破片	破片	破片	破片			備考
0-105	SI28		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-106	SI29	炉外	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-107	SI29		－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	
0-108	SI29		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-109	SI30		－	3	－	－	－	－	1	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	1	－	－	－	－	－	
0-110	SI32	旧炉１	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-111	SI32	旧炉２	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-112	SI32		－	14	－	－	－	－	1	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	1	－	－	1	－	23	－	1	－	－	－	18	トチノキ：１個完形 5.69 ㎜，ツルマメ？　幼根；残存長 1.97 ㎜，イネ科：長さ 1.26 ㎜，幅 0.96 ㎜，ヒエ属に似る
0-113	SI32		－	17	－	－	－	－	7	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	31	7	－	1	－	－	4	双子葉類：残存長 1.64 ㎜，残存幅 2.71 ㎜，残存厚 0.96 ㎜，アズキ類に似る
0-114	SI32		－	8	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15	6	－	－	－	－	1	
0-115	SI32		－	4	－	－	－	－	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	1	－	－	－	－	1	
0-116	SI32		－	1	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	
0-117	SI32		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-118	SI37		－	74	71	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	148	－	－	－	－	－	－	オニグルミ主体：最大 19.11 ㎜
0-119	SI37	炉内灰	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-120	SI37	炉内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-121	SI37		－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	2	－	－	－	－	－	
0-122	SI37		－	2	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	
0-123	SI37	炉灰	－	18	－	－	－	－	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	24	－	－	－	－	－	－	オニグルミ１個縫合線残存
0-124	SI39		－	18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	17	41	－	－	－	－	－	－	76	－	－	－	－	3	－	不明種実：双子葉類？
0-125	SI39	炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-126	SI41		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-127	SI41		－	22	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	29	7	－	－	－	－	－	
0-128	SI54		－	5	－	－	－	－	1	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	12	－	－	－	－	－	－	
0-129	SI54	埋設炉（左）	－	14	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	－	2	－	－	－	－	
0-130	SI54	埋設炉	－	8	－	－	－	－	－	40	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	48	3	－	－	－	－	－	
0-131	SI54	炉	－	25	74	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	47	69	－	－	－	－	－	－	217	－	1	－	－	－	－	
0-132	SI58		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-133	SI58		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1.77 g	不明炭化物 1.77 g
0-134	SI98	炉 焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-135	SI59	炉 焼土	－	6	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	5	－	－	－	－	－	クリ子葉：頂部

第５表　炭化種実同定結果（３）

登録№	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実					合計	不明					備考
			マツ属	オニグルミ		オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核		核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実・子葉		子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実				
			完形	破片		破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片				破片	破片	破片	破片			
0-136	SI59	炉 焼土	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず*
0-137	SI66	北西部 埋土上位	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	1	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	クリ１個完形未満；長さ 13.22 ㎜，残存幅 14.14 ㎜，厚さ 6.87 ㎜
0-138	SI66	炉内埋土 最下層	－	1		－	－	－	－	5	32	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	41	0.35 g	－	－	－	－	－	微細堅果片主体
0-139	SI66	炉内埋土 最下層	－	6		－	－	－	－	2	20	－	－	－	65	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	93	21	4	－	－	－	－	クリ主体
0-140	SI66	炉内	－	24		－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	36	2	－	－	－	－	2	
0-141	SI66	炉焼土 埋設土器	－	33		－	－	－	24	59	－	－	－	－	54	－	－	－	－	－	－	21	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	191	0.49 g	－	－	－	－	－	クリ子葉・オニグルミ主体
0-142	SI66	埋設土器	－	21		17	－	－	－	7	9	－	－	－	1	3	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	60	21	－	－	－	－	－	クリ１個完形小型長さ 5.15 ㎜，幅 7.22 ㎜，厚さ 6.05 ㎜
0-143	SI66	焼土	－	－		－	－	－	－	8	42	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	54	9	2	－	－	－	－	トチノキ：種子ライン確認
0-144	SI66	埋設土器内	－	－		1	－	－	－	－	12	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15	6	－	－	－	－	－	
0-145	SI66	pit47.46	－	－		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	8	
0-146	SI70	炉	－	110		83	－	－	－	3	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	147	216	－	－	－	－	－	－	－	－	－	567	0.93 g	－	－	－	－	－	トチノキ種皮片・オニグルミ主体（主に２㎜以上を抽出同定）
0-147	SI70	炉	－	68		65	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	129	146	－	－	－	－	－	－	－	－	－	410	0.83 g	－	－	－	－	－	トチノキ種皮片・オニグルミ主体（主に２㎜以上を抽出同定）
0-148	SI70		－	176		4	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	128	168	－	－	－	－	－	－	－	－	－	477	0.68 g	－	－	－	－	－	トチノキ種皮片・オニグルミ主体（主に２㎜以上を抽出同定）
0-149	SI70	第２石囲部	－	78		－	－	－	－	1	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	25	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	110	0.12 g	－	－	－	－	－	トチノキ種皮片・オニグルミ主体（主に２㎜以上を抽出同定）
0-150	SI70	炉右下 第１石囲部	－	－		1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-151	SI70	炉 第１石囲部	－	5		－	－	－	－	1	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	20	16	－	－	－	－	－	
0-152	SI70	炉 第２石囲部	－	119		－	－	－	－	2	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	63	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	204	0.28 g	－	－	－	－	4	微細堅果片主体
0-153	SI70	第１石囲炉内	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	
0-154	SI70	炉 第２側	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-155	SI70	炉外側	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず*
0-156	SI70	炉	－	15		－	－	－	－	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	26	6	－	－	－	－	－	
0-157	SI70	炉	－	－		3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	
0-158	SI70	炉	－	26		－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	40	－	－	－	－	－	－	
0-159	SI70	炉　第２石囲側	－	2		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	－	－	－	－	－	－	
0-160	SI70	炉２	－	10		－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	22	－	－	－	－	－	－	
0-161	SI70	炉３	－	4		－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	－	－	－	－	－	－	
0-162	SI70	炉内埋土	－	504		－	－	－	－	15	77	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	277	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	876	6.74 g	－	－	－	－	－	オニグルミ・トチノキ種皮片主体，ゴキヅル：１個体分
0-163	SI71		－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず*

第５表　炭化種実同定結果（４）

登録№	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実					合計	不明					備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ					クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ			トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実	果実・子葉		子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子		種子	子葉		胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実				
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片			
0-164	SI77	ベルト 埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	－	－	－	－	－	ウルシ属：長さ 2.76 ㎜，残存幅 2.63 ㎜，断面柵状
0-165	SI99		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-166	SI83	焼土	－	18	－	－	－	－	11	52	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	－	－	89	46	－	－	－	－	微細堅果片主体
0-167	SI83	焼土	－	15	－	－	－	－	6	44	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	67	13	－	－	－	－	
0-168	SI83		－	29	－	－	－	2	－	6	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	43	－	7	－	－	－	10	
0-169	SI89		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-170	SI90	下層	－	－	－	－	－	－	－	13	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	－	1	－	－	－	
0-171	SI90	埋土中　焼土	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	
0-172	SI90	埋土中	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	3	－	－	－	－	
0-173	SI90		－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	
0-174	SI90	炉１	－	2	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	2	－	－	－	－	クリ子葉：完形 11.08 ㎜，9.75 ㎜，4.28 ㎜
0-175	SI90	炉１内　第２囲部内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-176	SI90	炉１内 第２囲部内	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-177	SI90	炉１ 第２石囲部内	－	1	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	
0-178	SI90		－	3	－	－	－	－	2	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	
0-179	SI90	埋土下層	－	－	－	－	－	－	1	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	
0-180	SI90	炉２	－	－	17	－	－	－	7	35	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	68	35	－	－	－	－	6	クリ多い
0-181	SI90	炉１ 前 底部	－	32	23	－	－	－	30	122	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	18	35	－	－	－	－	－	－	－	263	0.19 g	－	－	－	－	11	クリ子葉：背面；長さ 9.79，幅 11.00＋， 厚さ 5.72＋㎜，クリ果皮・トチノキ種皮主体
0-182	SI90	第１石囲部　焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-183	SI90	炉２、焼土	－	－	－	－	－	－	1	18	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	20	9	－	－	－	－	－	
0-184	SI90	炉１	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-185	SI90	第２石囲部	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-186	SI90	埋土中	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	
0-187	SI90		－	－	1	－	－	－	1	10	－	－	－	－	－	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15	5	－	－	－	－	－	
0-188	SI91	②	－	69	1	－	－	－	3	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	79	13	－	－	－	－	－	
0-189	SI91	焼土１ ③	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-190	SI91	焼土２ ②	－	125	14	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	－	148	－	－	－	－	－	
0-191	SI91	焼土２ ⑥	－	69	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	69	4	－	－	－	－	
0-192	SI91	焼土２ ⑦⑩	－	157	5	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	167	－	－	－	－	－	
0-193	SI91	焼土２	－	70	31	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	108	3	－	－	－	－	
0-194	SI91	焼土２	－	145	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	－	－	－	－	－	－	－	158	－	－	－	－	－	オニグルミ主体
0-195	SI92	炉 焼土上埋土	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	

第５表　炭化種実同定結果（５）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実					合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実・子葉		子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実				
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片				破片	破片	破片	破片			
0-196	SI92		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-197	SI93	炉	－	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	4	－	－	－	－	－	
0-198	SI93		－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	
0-199	SI93	炉土、埋土	－	44	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	48	1	－	－	－	－	－	
0-200	SI93		－	798	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	800	－	－	－	－	－	－	オニグルミ多量
0-201	SI93	炉２	－	13	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	14	1	－	－	－	－	－	
0-202	SI93	炉２	－	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	－	－	－	－	－	－	
0-203	SI93	炉２	－	5	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	4	
0-204	SI93	炉２	－	3	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	4	－	－	－	－	－	
0-205	SI93	炉２	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-206	SI93		－	38	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	38	－	－	－	－	－	－	
0-207	SI93		－	319	7	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	327	6	2	－	－	－	－	
0-208	SI93		－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	2	－	－	－	－	－	
0-209	SI93	真砂土上	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-210	SI93	マサド上	－	2631	2	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2634	6.02 g	－	－	－	－	－	オニグルミ多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-211	SI93	３層	－	3887	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3892	5.38 g	－	－	－	－	－	オニグルミ多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-212	SI93	埋土層（６層）	－	9485	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9487	9.20 g	－	－	－	－	－	オニグルミ多量，大型片含む（主に２㎜以上を抽出同定）
0-213	SI93	埋土下層（６層）	－	6707	－	－	－	－	1	18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	6727	23.61 g	－	－	－	－	－	オニグルミ多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-214	SI93		－	3	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	
0-215	SI93	伏カメ内埋土	－	8	3	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	12	－	－	－	－	－	－	
0-216	SI93		－	18	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	25	－	－	－	－	－	－	
0-217	SI94	炉	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	1	－	－	－	－	－	
0-218	SI94	床直土器②内上	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-219	SI94	床直土器②内上	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-220	SI94	炉、焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-221	SI94	炉、焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-222	SI94		－	4795	－	－	－	－	1	17	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4813	11.60 g	－	－	－	－	－	オニグルミ微細片多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-223	SI94		－	3785	－	－	－	－	1	32	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3818	14.54 g	－	－	－	－	－	オニグルミ微細片多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-224	SI94		－	15452	－	－	－	－	1	19	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	15472	22.65 g	－	－	－	－	－	オニグルミ微細片多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-225	SI94		－	1451	－	－	－	－	1	22	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1474	9.36 g	－	－	－	－	－	オニグルミ微細片多量（主に２㎜以上を抽出同定）
0-226	SI97	埋設土器　土器内埋土１層目	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	炭化種実確認されず

第５表　炭化種実同定結果（６）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																												草本種実					合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実	果実・子葉	子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実					
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片			破片	破片	破片	破片			
0-227	SI97	土器内埋土２層目埋設土器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-228	SI99	炉内埋土	－	2	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	5	－	－	－	－	－	
0-229	SI101		－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	2	－	－	－	－	－	
0-230	SI106		－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-231	SI106		－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-232	SI116	炉内焼土	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-233	SI117		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	
0-248	SK22	土器内土サンプル埋土上層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-249	SK60	貝の中から	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-250	SK60	貝の中から	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-251	SK60	貝の中から	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず，テンナンショウ属？：径2.78-4.19㎜
0-252	SK67	貝の中から	－	73	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	77	－	－	－	－	－	－	
0-253	SK183	最下層埋土	－	－	2	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	2	－	－	－	－	1	－	－	10	15	－	－	－	3	－	ツルマメ？：長さ3.32㎜，幅2.18㎜，厚さ1.81㎜，臍欠損
0-254	SK347	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-255	SK366	埋土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-256	SK366		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-257	SK371	埋土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-258	SK380		－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	1	－	－	－	－	－	
0-259	SK381	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-260	SK381	土器１内堆積土②（上位の貝を含まない土）	－	3	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	1	－	－	－	1	－	
0-261	SK381	土器１内堆積土下位の貝含有層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-262	SK381	土器内堆積土（上位の貝を含まない土）	－	－	2	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	
0-263	SK381	埋土下位完形土器内堆積土西半分一括	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-264	SK381	埋土下位完形土器内堆積土（東半分一括）	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-265	SK395	１層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-266	SK398	埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	

第５表　炭化種実同定結果（７）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																									草本種実						合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ					クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ			トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実	果実・子葉		子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子		種子	子葉		胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実				
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片			
0-267	SK418	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-268	SK423	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-269	SK423	埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-270	SK423	埋土下位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-271	SK423	炭層１回目	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	
0-272	SK424	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-273	SK424	埋土中位再利用土抗底面周辺	－	46	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	47	5	－	－	－	－	1	
0-274	SK424	埋土中位貝ブロック除去後	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-275	SK424	埋土中位遺物ポイント５～８②（下）土器内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-276	SK424	埋土中位	－	6	－	－	－	－	1	12	33	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	52	－	－	－	－	－	
0-277	SK427	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-278	SK430	埋土上部	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-279	SK430	埋土上位，壁際	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-280	SK430	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-281	SK440	埋土上位	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-282	SK440	埋土上位	－	1	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	
0-283	SK440	埋土上位炭層１回目	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-284	SK450	埋土下位出土土器内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-285	SK457	底面	－	－	－	－	－	－	15	45	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	60	0.09 g	－	－	－	－	－	
0-286	SK457		－	7	－	－	－	－	10	92	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	113	0.27 g	1	－	－	－	－	
0-287	SK463	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-288	SK465	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-289	SK465	埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-290	SK465	埋土下位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-291	SK471		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	2.52 g	炭化種実確認されず，不明炭化物主体，発泡
0-292	SK471		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0.40 g	炭化種実確認されず，不明炭化物主体，発泡，一部表面植物片付着
0-293	SK480	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-294	SK500	埋設土器埋土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	36	98	－	－	－	－	－	－	－	－	134	－	－	－	－	－	トチノキ主体
0-295	SK500	埋設土器内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	66	143	－	－	－	－	－	－	－	－	209	－	－	－	－	－	トチノキ主体
0-296	SK515	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず

第５表　炭化種実同定結果（８）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実					合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実	果実・子葉		子葉	子葉？	核	種子	核	幼果	種子		種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子						子葉	種子？	果実				
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片			
0-297	SK525	埋土中位（写しあり）定形土器	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-298	SI6		－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-299	SL15		－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-300	包含層２	３ウグリッドⅢｂ層（Ⅲｃ－１より上）	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	オニグルミ：接合し半分未満
0-301	包含層２	４ウグリッド	－	4	2	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	4	3	－	－	－	－	
0-302	包含層２	５～６アグリッドⅠ～Ⅱ層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
0-303	SI13	埋土（４層）（北東）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-304	SI49	埋土最下層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	
0-305	SI51	埋土	－	3	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	2	－	－	－	－	
0-306	SI54	埋設炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-307	SI54	埋設炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-308	SI54		－	12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	12	2	－	－	－	－	－	
0-309	SI58		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-310	SI61	石囲炉１埋土１層	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-311	SI63	石囲炉１埋土１層	－	5	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	6	－	－	－	－	－	
0-312	SI65	炉 焼土 埋設土器内	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-313	SI65	石囲炉２層	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	3	－	－	－	－	－	
0-314	SI65	石囲炉４層，北側上位	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-315	SI65	石囲炉４層，北側下位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-316	SI65	石囲炉４層，南側下位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-317	SI66	埋土北ベルト	－	－	－	－	－	－	－	4	－	1	2	－	7	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	24	－	－	－	－	－	－	クリ果実・子葉：完形基部虫類食痕；長さ 18.81 ㎜，幅 19.61 ㎜，厚さ 9.80 ㎜，子葉：長さ 14.67 ㎜，幅 13.00 ㎜，残存厚 6.00 ㎜
0-318	SI66	埋土１	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-319	SI66	埋土２ 西ベルト	－	－	－	－	－	－	－	－	12	－	2	1	6	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	31	－	－	－	－	－	－	クリ子葉：長さ 16.47 ㎜，幅 16.93 ㎜，厚さ 9.99 ㎜
0-320	SI66	埋土３ 西ベルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-321	SI66	埋土２ 東ベルト	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	クリ子葉：長さ 13.85 ㎜，幅 16.67 ㎜，厚さ 8.52 ㎜／長さ 13.92 ㎜，幅 17.00 ㎜，残存厚 3.54 ㎜／長さ 12.63 ㎜，幅 15.86 ㎜，残存厚 3.11 ㎜
0-322	SI66	南東部 異色，埋土中	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	10	34	－	－	－	－	－	

第５表　炭化種実同定結果（９）

登録No.	出土遺構	層位，地点	木本種実																										草本種実						合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？	クリ				クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明		
			種子	核	核	子葉	果実（基部）	子葉	果実（基部）	果実	果実	果実	果実・子葉	子葉		子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉	胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実					
			完形	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片				
0-323	SI66	北東部 埋土下層，壁出し	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	56	38	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	94	－	－	－	－	－	－	
0-324	SI67	床面直上	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-325	SI70		－	193	－	1	1	－	－	3	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	48	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	249	－	6	－	－	－	17	オニグルミ主体，クリ子葉：残存長 6.51，幅 8.82，厚さ 2.60 ㎜，トチノキ子葉：12.89 ㎜，ミズナラ？：長さ 15.31，残存幅 9.25，残存厚 8.34 ㎜，コナラ節：8.22 ㎜
0-326	SI93/70	炉２，埋土	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	1	－	－	－	－	
0-327	SI71	炉	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	
0-328	SI75	埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-329	SI76	土器内蓄積土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-330	SI82	炉	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-331	SI90	炉１ 第一石囲部 焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-332	SI90	炉１ 第一石囲部	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-333	SI93	炉 焼土	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-334	SI93	埋土下層（６層）	－	5238	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5238	14.12 g	－	－	－	－	－	オニグルミ微細片主体，主に２㎜以上を対象
0-335	SI93	Pit11 埋土中	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-336	SI94	炉 埋土灰	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	
0-337	SI96	炉焼土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-338	SI106		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-339	SK05	埋土一括	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-340	SK155	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-341	SK167	上位埋土中 埋設土器内	－	5	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	2	－	－	－	－	－	
0-342	SK183	最下層埋土	－	－	－	－	－	－	7	5	13	－	－	－	11	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	36	－	7	－	－	－	7	
0-343	SK198	上位土器内 充填土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	炭化種実確認されず
0-344	SK235	埋土上位 土器の中の土	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	
0-345	SK260	埋土下位 底直上の暗色土	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-346	SK347	埋土上位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-347	SK347	埋土中位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-348	SK365	埋土下位	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-349	SK369		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-350	SK378	底面	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず

第５表　炭化種実同定結果（10）

登録№	出土遺構	層位，地点	木本種実																									草本種実					合計	不明						備考
			マツ属	オニグルミ		オニグルミ？	コナラ節（ミズナラ？）		コナラ節		コナラ属？	クリ		クリ？	クリ					クリ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	トチノキ				トチノキ？	トチノキ		イネ科	タデ属	ツルマメ？		ゴキヅル			堅果片	堅果類	双子葉類	不明	不明種実	不明	
			種子	核		核	子葉		果実（基部）		子葉	果実（基部）	果実	果実	果実・子葉		子葉			子葉？	核	種子	核	幼果	種子			種子	子葉		胚乳	果実	種子		種子				子葉	種子？	果実			
			完形	破片		破片	破片		破片		破片	破片	破片	破片	完形	破片	完形	破片		破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片		破片	破片		完形	破片	完形	破片	破片			破片	破片	破片	破片			備考
0-351	SK381	土器１内 蓄積土内	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-352	SK381	埋土下位	－	5		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	5		－	－	－	－	－	－	
0-353	SK396	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-354	SK423	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-355	SK424	埋土上部	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-356	SK424	埋土下位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-357	SK430	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-358	SK430	埋土中部	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-359	SK430	炭化物層	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-360	SK430		－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-361	SK435	埋土中位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-362	SK440		－	1		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	1		3	－	－	－	－	－	
0-363	SK450	埋土下位出土	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-364	SK467	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-365	SK468	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-366	SK437	埋土中位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-367	SK500		－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	12	－		－	－	－	－	－	－	12		－	－	－	－	－	－	
0-368	SK515	埋土上位	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-369	SL1	埋土	－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-370	SL15		－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	炭化種実確認されず
0-371	SL15		－	－		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	1	－	
0-372	包含層２	３エトレンチⅢｃ層	－	10		－	－		－		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	10		－	－	－	－	－	－	
0-373	包含層２	Ⅲｃ層	－	－		－	－		1		－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	1		－	－	－	－	－	－	
		合計	1	57553		473	2	1	2	222	1177	58	1	4	6	243	63	1	6	2	1	1	1231	979	2	1	1	1	1	3	62036	492	48	1	2	8	115	
			－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	127.5 g	－	－	－	－	4.68 g	

注）0-322：試料は泥主体のため、全量 241 g を水洗乾燥後拾い出している。

第６表　炭化種実出土状況（１）

出土遺構	堅果類														他の木本			草本				合計			不明	登録No.
	マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	ミズナラ？	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？		トチノキ			トチノキ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	イネ科	タデ属	ツルマメ？	ゴキヅル	堅果類	その他木本種実	草本種実		
	種子	核	核	子葉	果実	子葉	果実	子葉？	果実	子葉？	幼果	種子	子葉	種子	核	種子	核	胚乳	果実	種子	種子					
SI1	－	4	1	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	12	－	－	－	0-072～74
SI6	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	0-298
SI9	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-075, 076
SI10	－	4	－	－	－	－	3	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	－	－	－	0-077
SI13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-303
SI18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-078, 079
SI19	－	58	－	－	－	－	7	－	－	－	－	54	－	－	－	－	－	－	－	－	－	119	－	－	－	0-080～082
SI22A・B	1	11	－	－	－	－	71	3	－	－	1	27	－	－	－	－	－	－	－	－	－	114	－	－	－	0-083～086, 096
SI22B	－	151	－	－	－	－	38	－	－	－	－	39	－	－	－	－	－	－	－	－	－	228	－	－	2	0-087～097
SI23	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-098
SI24	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-099
SI25	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-100
SI28	－	13	1	－	－	－	34	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	50	－	－	－	0-101～105
SI29	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	2	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	0-106～108
SI30	－	3	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	－	－	－	0-109
SI32	－	45	－	－	－	－	32	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	1	－	1	－	82	－	2	1	0-110
SI37	－	105	71	－	－	－	7	－	－	－	－	3	－	1	－	－	－	－	－	－	－	187	－	－	－	0-118～123
SI39	－	18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	17	－	43	－	－	－	－	－	－	－	78	－	－	3	0-124, 125
SI41	－	22	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	29	－	－	－	0-126, 127
SI49	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-304
SI51	－	3	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	0-305
SI54	－	64	74	－	－	－	46	－	－	－	－	48	－	71	－	－	－	－	－	－	－	303	－	－	－	0-128～131, 306～308
SI58	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-132, 133, 309
SI59	－	6	－	－	－	－	3	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	0-135, 136
SI61	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-310
SI63	－	5	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	0-311
SI65	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	0-312～316
SI66	－	85	18	－	－	－	228	228	12	59	－	24	－	12	－	－	－	－	－	－	－	666	－	－	－	0-137, 138, 317～323
SI67	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-324
SI70	－	1310	156	2	1	－	168	1	－	－	－	838	2	549	－	－	－	－	－	－	3	3027	－	3	－	0-146～162, 325
SI71	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-163, 327
SI75	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-328
SI76	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-329
SI77	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	－	－	0-164
SI82	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-330
SI83	－	62	－	－	－	2	119	1	－	－	－	15	－	－	－	－	－	－	－	－	－	199	－	－	－	0-166～168
SI89	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-169
SI90	－	39	43	－	－	－	259	6	－	3	－	25	－	35	1	1	－	－	－	－	－	410	2	－	－	0-170～187, 331, 332
SI91	－	635	60	－	－	－	10	－	－	－	－	9	－	16	－	－	－	－	－	－	－	730	－	－	－	0-188～194
SI92	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-195, 196
SI93	－	29226	30	－	－	－	33	－	－	－	－	4	－	1	－	3	－	－	1	－	－	29294	3	1	－	0-197, 214～216, 333～335
SI93・70	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	0-326
SI94	－	25487	2	－	－	－	95	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	25584	－	－	－	0-217～225, 336
SI96	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-337
SI97	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-226, 227
SI98	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-134
SI99	－	3	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	0-165, 228
SI101	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	－	－	－	0-229
SI106	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	0-230, 231, 338
SI116	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	0-232
SI117	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	0-233
SK5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-339
SK22	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-248
SK60	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	0-249～251
SK67	－	73	1	－	－	－	1	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	77	－	－	－	0-252
SK155	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-340
SK167	－	5	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	0-341

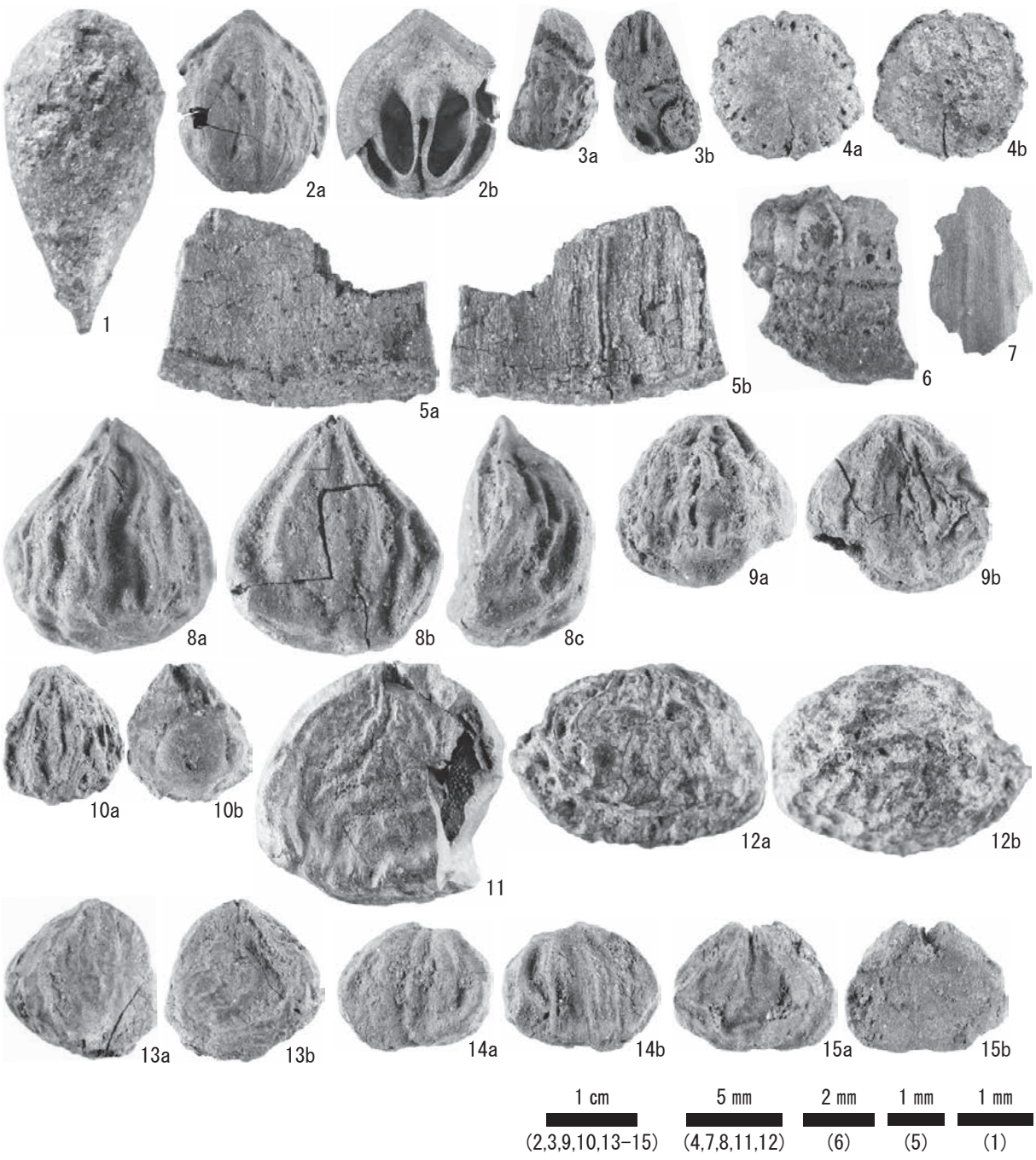
第６表　炭化種実出土状況（２）

出土遺構	堅果類														他の木本			草本				合計			不明	登録No.
	マツ属	オニグルミ	オニグルミ？	ミズナラ？	コナラ節	コナラ属？	クリ		クリ？		トチノキ			トチノキ？	クワ属	キハダ	ウルシ属	イネ科	タデ属	ツルマメ？	ゴキヅル	堅果類	その他木本種実	草本種実		
	種子	核	核	子葉	果実	子葉	果実	子葉？	果実	子葉？	幼果	種子	子葉	種子	核	種子	核	胚乳	果実	種子	種子					
SK183	－	－	2	－	－	－	15	11	13	－	－	2	－	－	－	2	－	－	－	1	－	43	2	1	3	0-253, 342
SK198	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-343
SK235	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	0-344
SK260	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-345
SK347	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-254, 346, 347
SK365	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-348
SK366	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-255, 256
SK369	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-349
SK371	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-257
SK378	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-350
SK380	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	0-258
SK381	－	11	2	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	17	－	－	1	0-259～264, 351, 352
SK395	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-265
SK396	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-353
SK398	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	0-266
SK418	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-267
SK423	－	2	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	0-268～271, 354
SK424	－	52	－	－	－	－	14	－	33	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	99	－	－	－	0-272～276, 355, 356
SK427	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-277
SK430	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-278～280, 357～360
SK435	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-361
SK437	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-366
SK440	－	4	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	0-281～283, 362
SK450	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-284, 363
SK457	－	7	－	－	－	－	162	2	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	173	－	－	－	0-285, 286
SK463	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-287
SK465	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-288～290
SK467	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-364
SK468	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-365
SK471	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-291, 292
SK480	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-293
SK500	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	114	－	241	－	－	－	－	－	－	－	355	－	－	－	0-294, 295, 367
SK515	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-296, 368
SK525	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-297
SL1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	0-369
SL15	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	1	0-299, 370, 371
包含層２	－	16	2	－	－	－	2	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	21	－	－	－	0-300～302, 372, 373
合計	1	57544	469	2	1	2	1389	254	58	63	1	1230	2	979	1	6	2	1	1	2	3	61995	9	7	11	

第７表　主な炭化種実の計測値

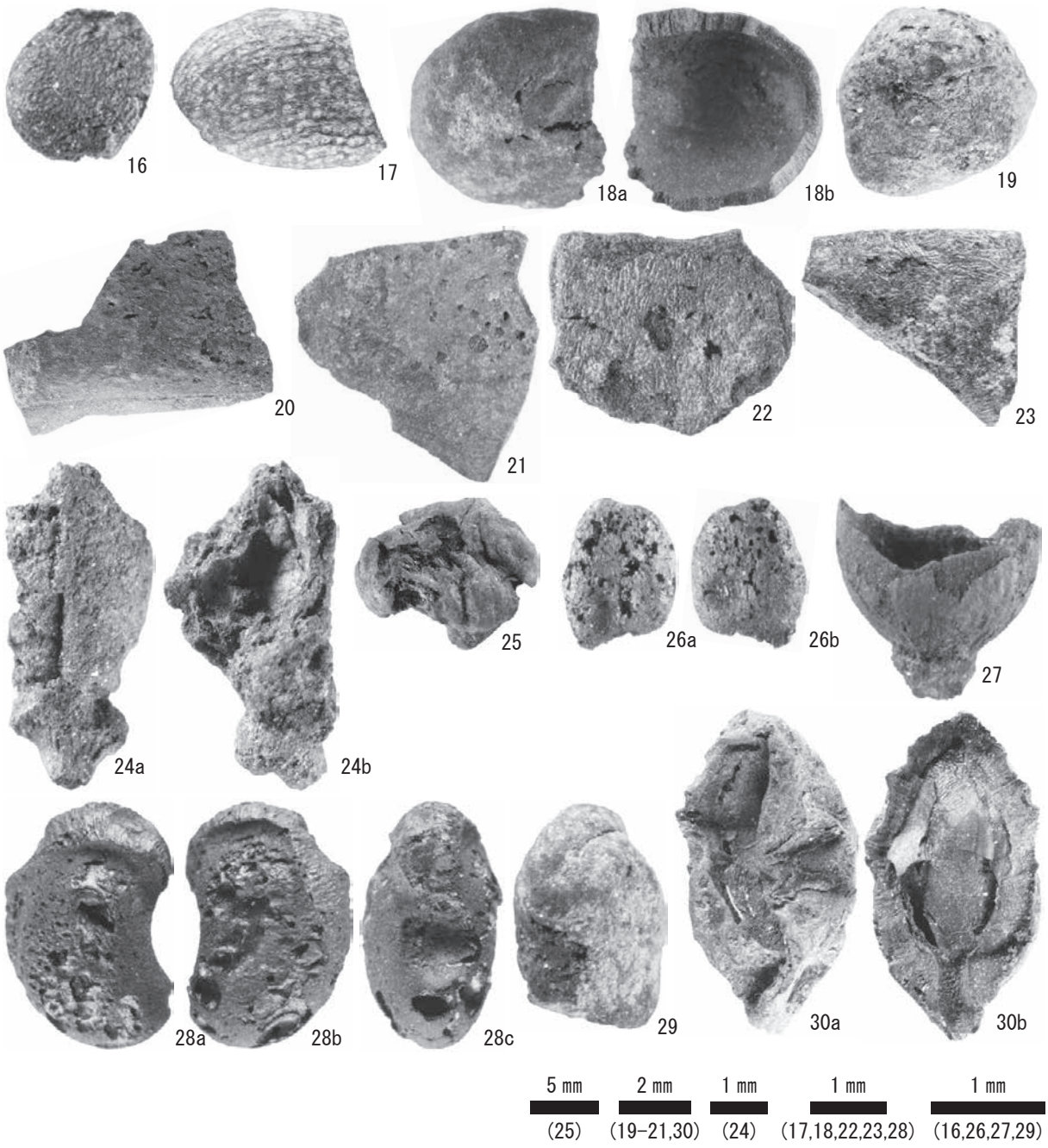
登録No.	出土遺構	層位，地点	内容	分類群	部位	状態	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	クリの大きさ指数	簡易楕円体積(㎣)	図版番号	備考
0-325	SI70		炉内埋土サンプル②(炭まじり)	ミズナラ？	子葉	破片	15.31	9.25＋	8.34＋	－	－	3	
0-325	SI70		炉内埋土サンプル②(炭まじり)	コナラ節	果実	破片	－	8.22	－	－	－	4	基部着点
0-142	SI66	埋設土器	掘方埋土焼土サンプル	クリ	子葉	完形	5.15	7.22	6.05	11.37	－	12	小型
0-325	SI70		炉内埋土サンプル②(炭まじり)	クリ	子葉	破片	6.51＋	8.82	2.60	13.23＋	－	－	
0-181	SI90	炉１　前底部		クリ	子葉	破片	9.79	11.00＋	5.72＋	16.81＋	－	－	背面
0-174	SI90	炉１	サンプル	クリ	子葉	完形	11.08	9.75	4.28	17.00	－	－	
0-083	SI22A･B		焼土炭化物サンプル	クリ	子葉	完形	12.74	11.45	8.02	19.08	－	8	
0-137	SI66	北西部埋土上位		クリ	子葉	完形	13.22	14.14＋	6.87	20.93＋	－	11	側面欠損
0-317	SI66	埋土北ベルト	炭化物サンプル	クリ	子葉	破片	14.67	13.00	6.00＋	21.25	－	10	
0-321	SI66	埋土２東ベルト	炭化物サンプル	クリ	子葉	破片	12.63	15.86	3.11＋	21.43	－	－	
0-321	SI66	埋土２東ベルト	炭化物サンプル	クリ	子葉	完形	13.85	16.67	8.52	22.74	－	14	
0-321	SI66	埋土２東ベルト	炭化物サンプル	クリ	子葉	破片	13.92	17.00	3.54＋	22.97	－	15	
0-319	SI66	埋土２西ベルト	炭化物サンプル	クリ	子葉	完形	16.47	16.93	9.99	24.71	－	13	
0-317	SI66	埋土北ベルト	炭化物サンプル	クリ	果実・子葉	完形	18.81	19.61	9.80	27.81	－	9	基部虫類食痕
0-164	SI77	ベルト埋土中位	炭	ウルシ属	核	破片	2.76	2.63＋	－	－	－	18	断面柵状
0-112	SI32		伏せガメ①	トチノキ	種子	完形	－	5.69	－	－	－	19	小型（未熟）
0-325	SI70		炉内埋土サンプル②(炭まじり)	トチノキ	子葉	破片	－	12.89	－	－	－	25	
0-112	SI32		伏せガメ①	イネ科	胚乳	完形	1.26	0.96	－	－	－	26	ヒエ属に似る
0-253	SK183	最下層埋土	炭化物含有土	ツルマメ？	種子	完形	3.32	2.18	1.81	－	6.86	28	臍欠損
0-112	SI32		伏せガメ①	ツルマメ？	種子	破片	1.97＋	－	－	－	－	29	幼根残存
0-113	SI32		伏せガメ①土器内１層	双子葉類	種子？	破片	1.64＋	2.71＋	0.96＋	－	－	－	アズキ類に似る

注）計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値にプラス「+」で示す。
注）クリの大きさ指数（吉川，2011)＝√((炭化子葉の長さ(高さ)＋1.85)/0.76)×幅「(炭化子葉の幅＋4.86)/0.86))
注）マメ類の簡易楕円体積（那須ほか，2015)＝長さ/２×幅/２×厚さ/２×４/３×π



1．マツ属 種子（SI22A・B;0-083）
2．オニグルミ 核（SI93;0-212）
3．コナラ節（ミズナラ？）子葉（SI70;0-325）
4．コナラ節 果実（基部）（SI70;0-325）
5．クリ 果実（基部）（SI22A・B;0-096）
6．クリ 果実（基部）（SK424;0-276）
7．クリ 果実（SK183;0-342）
8．クリ 子葉（SI22A・B;0-083）
9．クリ 果実･子葉（SI66;0-317）
10．クリ 子葉（SI66;0-317）
11．クリ 子葉（SI66;0-137）
12．クリ 子葉（SI66;0-142）
13．クリ 子葉（SI66;0-319）
14．クリ 子葉（SI66;0-321）
15．クリ 子葉（SI66;0-321）

第 43 図　炭化種実（１）



16. クワ属 核（SI90;0-170）
17. キハダ 種子（SI90;0-187）
18. ウルシ属？ 核（SI77;0-164）
19. トチノキ 種子（SI32;0-112）
20. トチノキ 種子（SI22A・B;0-083）
21. トチノキ 種子（SI70;0-162）
22. トチノキ 種子（SI22B;0-088）
23. トチノキ 種子（SI22B;0-088）
24. トチノキ 幼果（SI22A・B;0-083）
25. トチノキ 子葉（SI70;0-325）
26. イネ科 胚乳（SI32;0-112）
27. タデ属 果実（SI93;0-213）
28. ツルマメ？ 種子（SK183;0-253）
29. ツルマメ？ 種子（SI32;0-112）
30. ゴキヅル 種子（SI70;0-162）

第 44 図　炭化種実（２）

６　高根遺跡出土の動物遺存体・貝類について

（１）は　じ　め　に

高根遺跡（岩手県宮古市山口 11 地割ほかに所在）は、山地斜面部に位置し、縄文時代中期の竪穴住居跡、尾根上に位置する多数のフラスコ状土坑、伏せ甕、古代の製鉄炉などの遺構、縄文時代中期の土器、石鏃・石匙・石錐・敲石・凹石・石斧・石皿・石棒・耳飾などの石器・石製品が検出されている。本遺跡では、尾根上で検出された縄文時代中期のフラスコ状遺構内部から出土した骨貝類の他に、古代の遺構・包含層などから出土した骨・貝類について、３年次にわたり調査してきた。本報告は、これらの成果をまとめたものである。

（２）試　　料

試料は、SI1・SI18・SI32・SI37・SI41・SI54・SI59、SK22・SK38・SK60・SK67・SK208・SK381・SK424、SI32 埋設土器、包含層２・包含層３・包含層４から出土した骨貝類と、南半 IA22m で表採された骨である。SK38 埋土および南半 IA22m 表採された試料は、土壌が付着する骨である（以下、骨試料と表記する）。SK60 は、試料の量が極めて膨大で、土壌中に骨貝類が混入する（以下、土壌試料と表記する）ものと、１㎜のフルイで水洗が行われて多数の貝類と土壌が混在する（以下、水洗試料と表記する）ものがある。合計では、土壌試料が湿重 14.02 kg、水洗試料が乾燥重量 54 kg以上ある。

また、SK67、SK208 は、試料が複数点に分けられていたが、ここでは一括して取り扱う。

（３）分　析　方　法

SK38 埋土および南半 IA22m 表採された骨試料は、乾燥状態にあることから、骨に付着したシルト・泥分を乾いた筆・ブラシ・竹串等で除去した上で観察する。

土壌試料は、試料を一昼夜水に浸漬して泥化させた後、0.25 ㎜のフルイで水洗して骨貝類を抽出し、抽出した骨貝類を自然乾燥させる。土壌試料および水洗試料のいずれも、４㎜、２㎜のフルイを通過させ、２㎜のフルイ上に残った試料から、貝類（腹足綱については殻口が残存するものを、二枚貝綱については殻頂部が残存するもの）、骨類、植物遺体、炭化物、砂・礫を抽出する。また、２㎜のフルイを通過したものは、実体顕微鏡下で観察し、骨、完形の貝を抽出する。

なお、SK60、SK67、SK208 では、２㎜のフルイを通過した試料は、一部を抽出して状況を確認したものの、基本的には対象外とした。

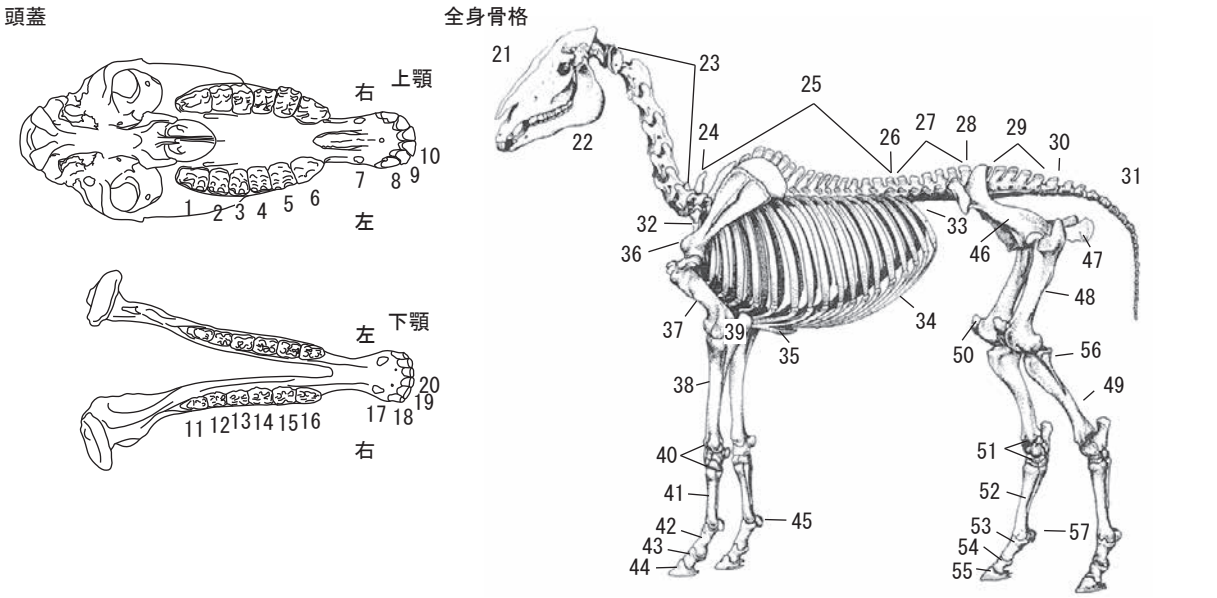
抽出した骨貝類を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種類・部位を同定する。また、哺乳類に関しては、Drieach（1976）に基づき、必要に応じて計測する。なお、貝類の生態等については、奥谷ほか（2000）、奥谷編著（2004）を参考とする。哺乳綱の骨格各部の名称は第 45 図に示す。

（４）結　　果

今回、検出された種類は、ウニ綱（ウニ類）、多板綱（ヒザラガイ類）、腹足綱 30 種類、二枚貝綱 15 種類、顎脚綱２種類、硬骨魚綱 18 種類、両生綱（カエル類）、爬虫綱（ヘビ類）、鳥綱３種類、哺乳綱６種類である（第８表）。同定結果を第９表に示す。以下、地点ごとに産状の概略を示す。

SI1

SI1 炉内焼土で確認されたのは、種類・部位ともに不明の小破片である。中には焼けているものが



1．上顎第３後臼歯	2．上顎第２後臼歯	3．上顎第１後臼歯	4．上顎第４前臼歯	5．上顎第３前臼歯
6．上顎第２前臼歯	7．上顎犬歯（雄のみ）	8．上顎第３門歯	9．上顎第２門歯	10．上顎第１門歯
11．下顎第３後臼歯	12．下顎第２後臼歯	13．下顎第１後臼歯	14．下顎第４前臼歯	15．下顎第３前臼歯
16．下顎第２前臼歯	17．下顎犬歯（雄のみ）	18．下顎第３門歯	19．下顎第２門歯	20．下顎第１門歯
21．頭蓋	22．下顎骨	23．頚椎	24．第一胸椎	25．胸椎
26．最後位胸椎	27．腰椎	28．最後位腰椎	29．仙骨	30．第一尾椎
31．尾椎	32．第一肋骨	33．最後位肋骨	34．軟肋骨	35．剣状軟骨
36．肩甲骨	37．上腕骨	38．橈骨	39．尺骨	40．手根骨
41．中手骨	42．指骨（基節骨）	43．指骨（中節骨）	44．指骨（末節骨）	45．種子骨
46．腸骨	47．坐骨	48．大腿骨	49．脛骨	50．膝蓋骨
51．足根骨	52．中足骨	53．趾骨（基節骨）	54．趾骨（中節骨）	55．趾骨（末節骨）
56．腓骨	57．種子骨			

第 45 図　ウマ骨格各部の名称
（全身骨格は、加藤・山内，2003 に加筆）

含まれる。旧炉の埋土および焼土では、貝類の破片、哺乳類の焼けた破片、種類・部位ともに不明の焼けた破片などの細かい破片が少量みられる程度である。

SI18

炉焼土では、硬骨魚綱の鰭棘等、種類・部位ともに不明の破片などが少量検出される程度である。いずれも焼けている。

SI32

SI32 の旧炉１・２および焼土１では、硬骨魚綱の椎骨や鰭棘等、種類・部位ともに不明の破片などが少量検出される程度である。いずれも焼けている。

焼土３は SI32 の中では多くの骨がみられる。ニシン亜科の腹椎、サケ属の椎骨片、硬骨魚綱の椎骨・鰭棘等・部位不明破片などがみられる。いずれも焼けている。この他、ハタネズミ亜科の歯牙やネズミ科の犬歯片もみられる。これらネズミ科の歯牙は焼けてない。

SI37

炉内埋没土器１では、焼土・灰から試料が採取されている。カタクチイワシ科の尾椎、サケ属の椎骨、硬骨魚綱の前上顎骨／歯骨・椎骨・鰭棘等・部位不明破片、カエル類の仙骨・左上腕骨・左右腸骨、スズメ目の左右足根中足骨、鳥類の足根中足骨・四肢骨・末節骨、哺乳綱の四肢骨・部位不明破片、種類・部位ともに不明の破片などがみられる。焼けている骨が多い。

炉内埋没土器２では、サケ属の椎骨、硬骨魚綱の椎骨・鰭棘・部位不明破片など、種類・部位ともに不明破片などがみられる。

第８表　検出分類群一覧

棘皮動物門　Phylum　Echinodermata
　ウニ綱　Class　Echinoidea
　　ウニ類　Ord. et. fam. indet.
軟体動物門　Phylum　Mollusca
　多板綱　Class　Polyplacophora
　　新ウスヒザラガイ目　Order　Neoloricata
　　ヒザラガイ類　Fam. et. gen. indet.
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　前鰓亜綱　Subclass　Prosobranchia
　　カサガイ目　Order　Patellogastropoda
　　ヨメガカサガイ亜目　Suborder　Nacellina
　　ヨメガカサガイ科　Family　Nacellidae
　　ヨメガカサ　*Cellana toreuma*
　　エンスイカサガイ亜目　Suborder　Acmaeoidea
　　ユキノカサガイ科　Family　Lottiidae
　　ユキノカサガイ　*Niveotectura pallida*
　　ヒメコザラ　*Patelloida pygmaea*
　　コガモガイ　*Lottia kogamogai*
　　古腹足目　Order　Vetigastropoda
　　ニシキウズガイ科　Family　Trochidae
　　クボガイ　*Chlorostoma lischkei*
　　ヘソアキクボガイ　*Chlorostoma turbinatum*
　　コシダカガンガラ　*Omphalius rusticus*
　　エゾチグサ　*Cantharidus jessoensis*
　　サザエ科　Family　Turbinidae
　　サンショウガイ　*Homalopoma nocturnum*
　　エゾサンショウ　*Homalopoma amussitatum*
　　中腹足目　Order　Mesogastropoda
　　ヤマキサゴ科　Family　Helicinidae
　　ヤマキサゴ　*Waldemaria japonica*
　　盤足目　Order　Discopoda
　　ウミニナ科　Family　Batillariidae
　　ウミニナ？　*Batillaria multiformis*?
　　タマキビ科　Family　Littorinidae
　　タマキビ　*Littorina (Littorina) brevicula*
　　クロタマキビ　*Neritrema sitchana*
　　リソツボ科　Family　Rissoidae
　　タマツボ　*Alvania (Alvania) concinna*
　　カワザンショウガイ科　Family　Assimineidae
　　クリイロカワザンショウ　*Angustassiminea castanea*
　　ムカデガイ科　Family　Vermetidae
　　ムカデガイ科　Gen. et. sp. indet.
　　タマガイ科　Family　Naticidae
　　タマガイ科　Gen. et. sp. indet.
　　新腹足目　Order　Neogastropoda
　　アッキガイ科　Family　Muricidae
　　ヨウラクガイ亜科　Subfamily　Ocenebrinae
　　オウウヨウラク　*Ceratostoma inornatus*
　　チヂミボラ　*Nucella lima*
　　エゾチヂミボラ　*Nucella freycinetti*
　　レイシガイ亜科　Subfamily　Rapaninae
　　レイシガイ　*Thais (Reishia) bronni*
　　イボニシ　*Thais (Reishia) clavigera*
　　ムシロガイ科　Family　Nassariidae
　　クロスジムシロ　*Reticunassa fratercula*
　　有肺亜綱　Subclass　Pulmonata
　　柄眼目　Order　Sylommatophora
　　キセルガイ科　Family　Clausiliidae
　　キセルガイ科　Family　Clausiliidae
　　ナタネガイ科　Family　Punctidae
　　パツラマイマイ　*Discus pauper*
　　コハクガイ科　Family　Zonitidae
　　コハクガイ科　Family　Zonitidae
　　ベッコウマイマイ科　Family　Helicarionidae
　　ウラジロベッコウマイマイ　*Urazirochlamys doenitzi*
　　オナジマイマイ科　Family　Bradybaenidae
　　オオケマイマイ　*Aegista (Plectotropis) vulgiraga*
　二枚貝綱　Class　Bivalvia
　　翼形亜綱　Subclass　Pteriomophia
　　フネガイ目　Order Arcoida
　　フネガイ科　Family　Arcidae
　　フネガイ　*Arca avellana*
　　イガイ目　Order　Mytiloida
　　イガイ科　Family　Mytilidae
　　イガイ　*Mytilus coruscus*
　　ムラサキインコ　*Septifer virgatus*
　　ヒバリガイ？　*Modiolus nipponicus*?
　　カキ目　Order Ostreoida
　　イタヤガイ亜目　Suborder　Pectinina
　　イタヤガイ科？　Family　Pectinidae?
　　イタヤガイ科？　Gen. et. sp. indet.
　　カキ亜目　Suborder　Ostreina
　　イタボガキ科　Family　Ostreidae
　　マガキ　*Crassostrea gigas*
　　弁鰓亜綱　Subclass　Eulamellibranchia
　　イシガイ目　Order　Unionoida
　　イシガイ科　Family　Unionidae
　　イシガイ科　Family　Unionidae
　　異歯亜綱　Subclass　Heterodonta
　　マルスダレガイ目　Order Veneroida
　　チリハギガイ科　Family　Lasaeidae
　　チリハギガイ　*Lasaea undulata*
　　トマヤガイ科　Family　Carditidae
　　トマヤガイ　*Cardita leana*
　　バカガイ科　Family　Mactridae
　　バカガイ科　Gen. et. sp. indet.
　　ニッコウガイ科　Family　Tellinidae
　　ニッコウガイ科　Gen. et. sp. indet.
　　シオサザナミ科　Family Psammobiidae
　　イソシジミ　*Nuttallia japonica*
　　シジミ科　Family　Corbiculidae
　　ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
　　マルスダレガイ科　Family　Veneridae
　　コタマガイ　*Gomphina melanegis*
　　ウチムラサキ　*Saxidomus purpurata*

節足動物門　Phylum　Arthropoda
　甲殻亜門　Subphylum　Crustacea
　　顎脚綱　Class　Maxillopoda
　　鞘甲亜綱　Subclass　Thecostraca
　　無柄目　Order　Sessilia
　　フジツボ亜目　Suborder　Balanina
　　ムカシフジツボ科　Family　Archaeobalanidae
　　チシマフジツボ亜科　Subfamily　Semibalaninae
　　チシマフジツボ　*Balanus cariosus*
　　フジツボ科　Family　Balanidae
　　アカフジツボ亜科　Subfamily　Megabalaninae
　　アカフジツボ　*Megabalanus rosa*
脊椎動物門　Phylum　Vertebrata
　硬骨魚綱　Class　Osteichthyse
　　条鰭亜綱　Subclass　Actinopterygii
　　ウナギ目　Order　Anguilliformes
　　ウナギ亜目　Suborder　Anguilloidei
　　ウナギ科　Family　Anguillidae
　　ウナギ属　*Anguilla* sp.
　　ニシン目　Order　Clupeiformes
　　ニシン科　Family　Clupeidae
　　ニシン亜科　Subfamily　Clupeinae
　　ニシン亜科　Gen. et. sp. indet.
　　カタクチイワシ科　Family　Engraulidae
　　カタクチイワシ科　Gen. et. sp. indet.
　　コイ目　Order　Cypriniformes
　　コイ科　Family　Cyprinidae
　　ウグイ亜科　Subfamily　Leuciscinae
　　ウグイ属　*Tribolodon* sp.
　　サケ目　Order　Salmoniformes
　　サケ科　Family　Salmonidae
　　サケ属　*Oncorhynchus* sp.
　　タラ目　Order　Gadiformes
　　タラ科　Family　Gadidae
　　タラ科　Gen. et. sp. indet.
　　ボラ目　Order　Mugiliformes
　　ボラ科　Family　Mugilidae
　　ボラ　*Mugil cephalus cephalus*
　　カサゴ目　Order　Scorpaeniformes
　　カサゴ亜目　Suborder　Scorpaenoidei
　　フサカサゴ科　Family　Scorpaenidae
　　フサカサゴ亜科　Subfamily　Scorpaeninae
　　フサカサゴ亜科　Gen. et. sp. indet.
　　スズキ目　Order　Perciformes
　　スズキ科　Family　Moronidae
　　スズキ属　*Lateolabrax* sp.
　　ハタ科？　Family　Serranidae?
　　ハタ科？　Gen. et. sp. indet.
　　アジ科　Family　Carangidae
　　ブリ属　Genus　*Seriola*
　　アジ類　Gen. et. sp. indet.
　　タイ科　Family　Sparidae
　　マダイ亜科　Subfamily　Pagrinae
　　マダイ　*Pagrus major*
　　ウミタナゴ科　Family　Embiotocidae
　　ウミタナゴ科　Gen. et. sp. indet.
　　サバ科　Family　Scombridae
　　サバ属　*Scomber* sp.
　　ソウダガツオ属　Genus　*Auxis*
　　カツオ　*Katsuwonus pelamis*
　　カレイ目　Order　Pleuronectiformes
　　ヒラメ科　Family Paralichthyidae
　　ヒラメ　*Paralichthys olivaceus*
　　カレイ科　Family　Pleuronectidae
　　カレイ科　Gen. et. sp. indet.
　両生綱　Class　Amphibia
　　無尾目　Order　Anura
　　カエル類　Fam. et. gen. indet.
　爬虫綱　Class　Reptilia
　　有鱗目　Order　Squamata
　　ヘビ亜目　Suborder　Serpentes
　　ヘビ類　Fam. et. gen. indet.
　鳥綱　Class　Aves
　　スズメ目　Order　Passeres
　　カラス科　Family　Corvidae
　　カラス科　Gen. et. sp. indet.
　　ツバメ科　Family　Hirundinidae
　　ツバメ類　Gen. et. sp. indet.
　　キジ目　Order　Galliformes
　　キジ科　Family　Phasianidae
　　キジ科　Gen. et. sp. indet.
　哺乳綱　Class　Mammalia
　　ウサギ目　Order　Lagomorpha
　　ウサギ科　Family　Leporidae
　　ノウサギ　*Lepus brachyurus*
　　ネズミ目（齧歯目）　Order　Rodentia
　　ネズミ科　Family　Muridae
　　ネズミ亜科　Subfamily　Murinae
　　ネズミ亜科　Gen. et. sp. indet.
　　ハタネズミ亜科　Subfamily　Arvicolinae
　　ハタネズミ亜科　Gen. et. sp. indet.
　　ウマ目（奇蹄目）　Order　Perissodactyla
　　ウマ科　Family　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　　ウシ目（偶蹄目）　Order　Artiodactyla
　　イノシシ科　Family　Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　　シカ科　Family　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*

第９表　動物遺存体・貝類同定結果

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SI1	旧炉 焼土	貝類	殻		破片	1			
		貝類？	殻		破片	1			
		不明	不明		破片	0.00 g			
					破片	0.16 g	○		
		礫・砂				0.09 g			
	旧炉 埋土	哺乳綱	不明		破片	2	○		
		不明	不明		破片	0.41 g	○		
		礫・砂				0.13 g			
	小炉 焼土	不明	不明		破片	0.00 g	○		
	炉内 焼土	植物遺体				0.00 g			
		礫・砂				0.01 g			
		不明	不明		破片	0.00 g			
SI18	炉 焼土	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	0.00 g	○		
		不明	不明		破片	0.03 g	○		
		礫・砂				0.01 g			
SI32	旧炉１ 焼土	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	0.01 g	○		
		不明	不明		破片	0.00 g	○		
	旧炉２ 焼土	硬骨魚綱	椎骨		破片	1	○		
			鰭棘等		破片	0.01 g	○		
		不明	不明		破片	0.02 g	○		
		礫・砂				0.02 g			
	焼土１	硬骨魚綱	鰭棘等		破片	0.00 g			
		不明	不明		破片	0.01 g	○		
		礫・砂				0.01 g			
	焼土３	ニシン亜科	腹椎		破片	1	○		
		サケ属	椎骨		破片	9	○		
		硬骨魚綱	椎骨		破片	3	○		
			鰭棘等		破片	0.04 g	○		
			不明		破片	0.01 g	○		
		ハタネズミ亜科	歯牙		破片	6			
		ネズミ科	犬歯		破片	2			
		不明	不明		破片	0.09 g	○		
		礫・砂				0.03 g			
SI37	焼土１ 灰	硬骨魚綱	椎骨		破片	3	○		
			鰭棘等		破片	0.06 g	○		
			不明		破片	0.01 g	○		
		不明	不明		破片	0.12 g	○		
		礫・砂				0.10 g			
	炉内 焼土・灰	ウナギ属	尾椎		破片	2	○		
		ニシン科	腹椎		破片	1	○		
		サケ属	椎骨		破片	47	○		
		ブリ属	腹椎		破片	1	○		
		サバ属	方骨	右	破片	1	○		
		硬骨魚綱	椎骨		破片	37	○		
			鰭棘等		破片	0.00 g			
					破片	0.57 g	○		
			不明		破片	0.15 g	○		
		カエル類	前上顎骨		破片	3	○		
			上腕骨	左	遠位端	1	○		
			橈尺骨	左	近位端	1	○		
				左	近位端欠	1	○		
				右	近位端	2	○		
			尾骨		破片	1	○		
			指骨		破片	1	○		
		スズメ目	脛足根骨	左	遠位端	1	○		
				右	遠位端	1	○		

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SI37	炉内 焼土・灰	スズメ目	足根中足骨	左	遠位端	2	○		
				右	遠位端	1	○		
		鳥類	足根中足骨		遠位端片	2	○		
			四肢骨		破片	9	○		
			基節骨		略完	2	○		
					近位端	2	○		
			中節骨		略完	4	○		
					遠位端欠	1	○		
			末節骨		破片	2	○		
					略完	1	○		
		ネズミ亜科	歯牙		破片	1	○		
		小型哺乳類	基節骨／中節骨		近位端欠	1	○		
			末節骨		略完	1	○		
		哺乳綱	不明		破片	13	○		
		鳥類／小型哺乳類等	四肢骨		破片	1	○		
			指趾骨等		破片	11	○		
		不明	不明		破片	0.11 g			
					破片	1.51 g	○		
		残渣				0.04 g			
		礫・砂				0.79 g			
	炉内埋没 土器１ 炉内 灰・焼土	カタクチイワシ科	尾椎		破片	1	○		
		サケ属	椎骨		破片	11	○		
		硬骨魚綱	前上顎骨／歯骨		破片	1	○		
		カエル類	仙骨		破片	1	○		
		カエル類	上腕骨	左	遠位端	1	○		
		カエル類	腸骨	左	破片	1	○		
		カエル類	腸骨	右	破片	1	○		
		スズメ目	足根中足骨	左	近位端	1	○		
		スズメ目	足根中足骨	右	遠位端	2	○		
		鳥類	足根中足骨		遠位端片	1	○		
		鳥類	四肢骨		破片	2	○		
		鳥類	末節骨		破片	2	○		
		哺乳綱	四肢骨		破片	5	○		
		哺乳綱	不明		破片	4	○		
		鳥類／小型哺乳類等	指骨		近位端	1	○		
		鳥類／小型哺乳類等	指趾骨等		破片	27	○		
		不明	不明		破片	0.02 g			
		不明	不明		破片	0.59 g	○		
		礫・砂				0.47 g			
	炉内埋没 土器２ 灰	サケ属	椎骨		破片	1	○		
		不明	不明		破片	0.00 g			
		不明	不明		破片	0.07 g	○		
		礫・砂				0.10 g			
SI41	炉	硬骨魚綱	椎骨		破片	3	○		
	焼土	不明	不明		破片	0.01 g	○		
	礫・砂					0.00 g			
SI54	P39	ニホンジカ	中手骨	左	近位端破片	1	○		
			中手骨／中足骨		破片	2	○		
		哺乳綱	不明		破片	21	○		
		不明	不明		破片	0.64 g	○		
		礫・砂				0.01 g			
SI59	炉 焼土	硬骨魚綱	椎骨		破片	2	○		
			鰭棘等		破片	0.07 g	○		
			不明		破片	0.03 g	○		
		哺乳綱	不明		破片	22	○		
		不明	不明		破片	0.20 g	○		
		植物遺体				0.01 g			スギ（葉）

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SI59	炉焼土	礫・砂				0.42 g			
SK22	埋土上層土器内	不明	不明		破片	0.00 g	○		
SK38	埋土	ウマ	下顎骨	右	破片	1 +			
			肩甲骨	右	破片	1			
			中手骨	左	略完	1			
			基節骨		略完	1			
			中節骨		破損	1			
			末節骨		破片	1			
			不明		破片	3			
		残渣				91.01 g			
SK60		ウニ類	棘		破片	7			
					破片	5	○		
		ヒザラガイ類	殻		破片	2			
		ヨメガカサ	殻		略完		1		
		ユキノカサガイ	殻		破片	2			
		ヒメコザラ	殻		略完		11		
						破片	1		
		コガモガイ	殻		略完		7		
		クボガイ	殻		略完		2		
					破片	2			
		ヘソアキクボガイ	殻		略完				
		コシダカガンガラ	殻		略完	2			
		コシダカガンガラ？	殻		破片	3			
		クボガイ類	殻		破片	16			
		エゾチグサ	殻		略完	1			
		サンショウガイ	殻		破片	1			
		エゾザンショウ	殻		略完	3			
		ウミニナ？	殻		破片	1			
		タマキビ	殻		略完	50			
					破片	1			
		クロタマキビ	殻		略完	1			
		タマツボ	殻		略完	1			
		クリイロカワザンショウ	殻		略完	3			
		タマガイ科	殻		破片	1			
		オウウヨウラク	殻		略完	3			
					破片	1			
		チヂミボラ	殻		略完	30			
					破片	3			
		エゾチヂミボラ	殻		略完	49			
					破片	8			
		エゾチヂミボラ？	殻		破片	5			
		ヨウラクガイ亜科？	殻		破片	1			
		レイシガイ	殻		略完	4			
		イボニシ	殻		略完	1			
		クロスジムシロ	殻		略完	9			
		キセルガイ科	殻		略完	25			
					破片	16			
		パツラマイマイ	殻		略完	25			
					破片	1			
		パツラマイマイ？	殻		破片	1			
		コハクガイ科	殻		略完	12			
		ウラジロベッコウマイマイ？	殻		破片	1			
		オオケマイマイ	殻		略完	1			
		マイマイ類	殻		破片	1			
		腹足綱	殻		破片	118			
		腹足綱	殻		破片	13	○		
		フネガイ	殻	左	略完	1			

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SK60		イガイ	殻	左	破片	790			
				右	破片	895			
		ムラサキインコ	殻	左	略完	720			
				左	破片	3388			
				右	略完	671			
				右	略完	1	○		
				右	破片	3250			
		ムラサキインコ？	殻	左	破片	1			
				右	破片	1			
		ヒバリガイ？	殻	左	破片	1			
		イガイ科	殻	左	破片	1744			
				右	破片	1428			
				右	破片	1	○		
		マガキ	殻	左	破片	4			
				右	破片	2			
		イタボガキ科	殻	左	破片	2			
		イシガイ科	殻	右	破片	1			
		チリハギガイ	殻	左	略完	43			
				右	略完	40			
		トマヤガイ	殻	右	略完	1			
		バカガイ科	殻	左	破片	1			
		ニッコウガイ科	殻	右	破片	1			
		イソシジミ	殻	左	略完	121			
				左	破片	248			
				右	略完	103			
				右	破片	266			
		ヤマトシジミ	殻	左	略完	107			
				左	破片	20			
				左	破片	1	○		
				右	略完	114			
				右	破片	25			
				右	破片	1	○		
		コタマガイ	殻	右	破片	1			
		ウチムラサキ	殻	左	略完	1			
		二枚貝鋼	殻		破片	1790.00 g			
		貝類	殻		破片	9431.34 g			二枚貝主体残渣
		貝製品？			破片	1			
		チシマフジツボ	殻		破片	1137			
					破片	83.16 g			
					破片	10	○		
		アカフジツボ	殻		略完	4			
					破片	13			
		フジツボ類	殻		破片	204			
					破片	2.01 g			
					破片	1	○		
		ウナギ属	角骨	左	破片	1			
				右	破片	1			
		ニシン亜科	腹椎		略完	5			
		ニシン科	尾椎		略完	7			
			角骨	右	破片	1			
		ウグイ属	咽頭骨	右	略完	1			
			咽頭歯		破片	2			
		ウグイ属	第２椎骨		破片	1			
			腹椎		略完	7			
					破片	5			
		コイ科	角骨	左	破片	1			
			咽頭歯		破片	3			

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SK60		コイ科	腹椎		略完	2			
					破片	1			
			尾椎		略完	17			
					破片	1			
		サケ属	腹椎		略完	1			
			尾椎		略完	2			
			椎骨		破片	19			
		タラ科	前上顎骨	右	破片	1			
			後側頭骨	右	破片	2			
		タラ科？	前上顎骨		破片	2			
		ボラ	主上顎骨	右	破片	1			
			角骨	左	破片	1			
			角舌骨	左	破片	1			
			角舌骨・上舌骨	左	略完	1			
			上舌骨	左	略完	1			
				右	略完	1			
			方骨	左	破片	2			
				右	破片	2			
			後側頭骨	右	破片	1			
			上擬鎖骨	左	破片	3			
				右	破片	2			
			後擬鎖骨	左	略完	1			
				右	破片	2			
			肩甲骨	左	破片	2			
				右	破片	2			
			主鰓蓋骨	左	破片	1			
				右	破片	1			
			腹椎		略完	1			椎体長 3.58
			尾椎		略完	5			椎体長 9.82-15.64
					破片	1 +			
			終尾椎		略完	2			
			胸鰭	左	略完	6			
				右	略完	2			
		ボラ？	主上顎骨	右	破片	1			
			角骨	右	破片	1			
			後側頭骨	右	破片	1			
			主鰓蓋骨	右	破片	1			
			椎骨		破片	4			
			終尾椎		破片	2			同一個体？
		スズキ属？	方骨	左	破片	1	○		
		ブリ属	肩甲骨	右	破片	2			
		アジ類	腹椎		略完	1			
		アジ類？	歯骨	左	破片	1			
		ウミタナゴ科	上擬鎖骨	右	破片	1			
		サバ属	主上顎骨	右	破片	1			
			歯骨	右	破片	1			
			後側頭骨	右	破片	1			
			腹椎		略完	2			
		サバ属	尾椎		略完	1			
		サバ属？	腹椎		破片	1			
		ソウダガツオ属	尾椎		略完	1			
					破片	2			
		カツオ？	主上顎骨	左	破片	1			
		カレイ科	角骨	左	破片	1			
			尾椎		略完	3			
		硬骨魚綱	前上顎骨	右	破片	1			
					破片	3			

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SK60		硬骨魚綱	主上顎骨	左	破片	2			
				右	破片	1			
			角舌骨	左	破片	1			
			上舌骨	右	破片	1			
			方骨	右	破片	1			
			副蝶形骨		破片	4			
			基底後頭骨		破片	1			
			咽頭骨		破片	5			
			下尾骨		破片	1			
			前鰓蓋骨		破片	3			
			主鰓蓋骨？		破片	1			
			上擬鎖骨		破片	1			
			肩甲骨		破片	3			
			尾椎		略完	4			
			椎骨		破片	47			
					破片	6	○		
			終尾椎		略完	2			
					破片	5			
			鰭棘等		破片	85.31 g			
					破片	36	○		
			鱗		破片	39.39 g			
			不明		破片	39.99 g			
					破片	0.34 g	○		
		ヘビ類	椎骨		略完	1			
		カラス類	手根中手骨	左	略完	1			
		キジ科	手根中手骨	左	遠位端	1			
		鳥類	四肢骨		破片	2			
			末節骨		略完	1			
			不明		破片	1			
		ノウサギ	踵骨	左	略完	1			
		ノウサギ？	脛腓骨		破片	1			
		ネズミ亜科	上顎第１後臼歯	左	破片	1			
		ハタネズミ亜科	下顎第２後臼歯	左	破片	1			
		ネズミ科	上顎骨	左 右	破片	1			
			犬歯		破片	3			
			頚椎		破片	3			
			腰椎		略完		2		
			肋骨		破片	1			
			肩甲骨	左	破片	1			
		ネズミ科	上腕骨	左	破片	1			近位端未化骨外れ
			橈骨	左	略完	1			
				右	近位端欠	1			
			尺骨	右	略完	1			
			脛骨	左	遠位端欠	1			
				右	両端欠	1			
			中足骨		破片	1			
			指趾骨		破片	2			
		イノシシ	犬歯		破片	1			
		小型哺乳類	四肢骨		破片	1			
		中型哺乳綱	肋骨		破片	9			
					破片	1		○	
			中節骨		略完	1			
		大型獣類	四肢骨		破片	1			
			尾椎		略完	1			
		中型／大型哺乳綱	四肢骨		破片	1			
		哺乳綱	頭蓋骨		岩様骨	1			
			肋骨		破片	11			

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SK60		哺乳綱	肋骨？		破片	1			
			四肢骨		破片	3			
					破片	2			スパイラル
			末節骨		略完	1			
			指趾骨		近位端欠	1			
			不明		破片	10			
					破片	2	○		
					破片	1			未化骨骨端
					破片	1			摩耗（加工品？）
		鳥類／中型哺乳綱	肋骨		破片	1			
		不明	不明		破片	5.28 g			
		植物遺体				10.84 g			
		炭化物				1.86 g			
		礫・砂				634.29 g			
		残渣				5616.10 g			
		分析対象外				32288.00 g			
SK67		パツラマイマイ	殻		略完	1			
		イガイ	殻	左	破片	3			
		イガイ科	殻	右	破片	1			
		コタマガイ	殻	右	破片	1			
		貝類	殻		破片	83.56 g			二枚貝主体
		チシマフジツボ	殻		破片	6			
		ウグイ属	腹椎		破片	1	○		
		コイ科	尾椎		破片	1			
		タラ科	上擬鎖骨	左	破片	1			
		フサカサゴ亜科	方骨	右	破片	1			
		スズキ属	主上顎骨	左	破片	1			
		ハタ科？	上擬鎖骨	左	破片	1			
		マダイ	前上顎骨	右	破片	1			
		タイ科	歯牙（犬歯状）		破片	1			
			肩甲骨	左	破片	1			
		サバ属	上舌骨	左	破片	1			
				右	破片	1			
			舌顎骨	左	破片	1			
			方骨	右	破片	1			
		サバ属？	角舌骨	右	破片	1			
		サバ科	前上顎骨／歯骨		破片	3			
		カツオ	尾椎		略完	9			
					破片	1			
			尾鰭椎前椎体		破片	2			
		カツオ？	前上顎骨	左	破片	1			
				右	破片	1			
			尾鰭椎前椎体？		破片	2			
		ヒラメ	舌顎骨	右	破片	1			
			主鰓蓋骨	右	破片	2			
			尾椎		略完	4			
		カレイ科	尾椎		略完	2			
		硬骨魚綱	鋤骨		破片	1			
		硬骨魚綱	前上顎骨／歯骨歯骨		破片	1			
			咽頭骨		破片	2			
			椎骨		破片	12			
			終尾椎		破片	2			
			鰭棘等		破片	4.85 g			
					破片	0.05 g	○		
			鱗		破片	0.03 g			
			不明		破片	3.21 g			
		カエル類	腸骨	右	破片	1			

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
SK67		ツバメ類	手根中手骨	右	略完	1			
		鳥類	四肢骨		破片	3			
		ニホンジカ	角		破片	1		○	切断（骨角器？）
		哺乳綱	四肢骨		破片	1		○	骨針状加工品
					破片	1		○	骨針状加工品
		不明	不明		破片	1.52 g			
		植物遺体				0.01 g			
		炭化物				0.09 g			
		礫・砂				2.44 g			
		残渣				109.72 g			
		分析対象外				4268.00 g			
SK208		ヤマキサゴ	殻		略完	1			
		ムカデガイ科	殻		破片	1			
		パツラマイマイ	殻		破片	1			
		ムラサキインコ	殻	右	破片	1			
		イタヤガイ科？	殻		破片	1			
		マガキ	殻	左	破片	35			
				右	破片	13			
		貝類	殻		破片	489.76 g			
		フジツボ類	殻		破片	1			
		硬骨魚綱	鰭棘等		破片	0.01 g			
			鱗		破片	0.06 g			
		不明	不明		破片	0.01 g			
		植物遺体				0.00 g			
		礫・砂				0.01 g			
		残渣				97.57 g			
		分析対象外				1392.00 g			
SK381	土器１内 下位堆積土 (貝含有層)	腹足綱	殻		破片	2			
		イガイ	殻	左	破片	4			
				右	破片	4			
		イガイ科	殻	左	破片	8			
				右	破片	5			
		ムラサキインコ	殻	左	破片	10			
				右	破片	8			
		チシマフジツボ	殻		破片	1			
		硬骨魚綱	不明		破片	0.09 g			
		二枚貝綱	殻		破片	54.61 g			
		残渣				17.14 g			
SK424	埋土中位 再利用土坑 底面周辺	ムラサキインコ	殻	右	破片	2			
		二枚貝綱	殻		破片	33.36 g			
		チシマフジツボ	殻		破片	3			
		残渣				5.25 g			
SI32 伏せ甕①	土器内１層	不明	不明		破片	0.00 g	○		
	土器内２層	不明	不明		破片	0.05 g	○		
	土器内３層	礫・砂				0.01 g			
	内の土	腹足綱	殻		破片	1			
		礫・砂				0.01 g			
		植物遺体				0.00 g			
包含層２	焼土３	貝類	殻		破片	1			
		ニシン亜科	腹椎		略完	1	○		
		サケ属	椎骨		破片	2	○		
		硬骨魚綱	前上顎骨／歯骨		破片	1	○		
			椎骨		破片	3	○		
			終尾椎		略完	1	○		
			鰭棘等		破片	0.28 g	○		
			不明		破片	0.19 g	○		
		鳥類	四肢骨		破片	1	○		

遺構名	地点・層位等	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	CM	備考
包含層２	焼土３	哺乳綱	不明		破片	3	○		
		鳥類／小型哺乳類等	指趾骨		破片	4	○		
		不明	不明		破片	0.15 g			
		不明	不明		破片	2.07 g	○		
		礫・砂				0.48 g			
包含層３	３かグリッド	マガキ	殻	右	破片	1			
	Ⅲｂ層	礫・砂				0.02 g			
包含層４	４ケ	イノシシ	脛骨	左	両端欠	1			
	Ⅲｃ～ｄ層	哺乳綱	肋骨		破片	1			
南半	IA22m 表採	ウマ／ウシ	四肢骨		破片	1 +	○		

炉内では、ウナギ属の尾椎、ニシン科の腹椎、サケ属の椎骨、ブリ属の腹椎、サバ属の右方骨、硬骨魚綱の椎骨・鰭棘等・部位不明破片、カエル類の前上顎骨・左上腕骨・左右橈尺骨・尾骨・指骨、スズメ目の左右足根中足骨・左右脛足根骨、鳥類の足根中足骨・四肢骨・基節骨・中節骨・末節骨、鳥類ないし小型哺乳類等の四肢骨・指骨等、ネズミ亜科の歯牙、小型哺乳類の基節骨／中節骨・末節骨、種類・部位ともに不明破片などがみられる。これらの中には焼けている骨片が多く含まれる。

焼土１では、硬骨魚綱の椎骨や鰭棘等、種類・部位ともに不明の破片などが少量検出される程度である。いずれも焼けている。

SI41

炉焼土では、硬骨魚綱の椎骨片、焼けた種類・部位ともに不明の破片などが少量検出される程度である。

SI54

P39 では、ニホンジカの左中手骨・中手骨／中足骨片、哺乳綱の部位不明破片、種類・部位ともに不明の破片などが検出される。いずれも焼けている。

SI59

硬骨魚綱の椎骨・鰭棘等・部位不明破片、焼けた哺乳綱の部位不明破片などが少量みられる程度である。

SK22

種類・部位不明の種類・部位ともに不明の焼けた小破片が検出される。

SK38

ウマの右下顎骨・右肩甲骨・左中手骨・基節骨・中節骨・末節骨等が検出される。右下顎骨は右下顎第３前臼歯が臼歯高 19.41 ㎜、右下顎第１後臼歯が臼歯高 24.87 ㎜、後臼歯列長 80.71 ㎜を測る。下顎体高は、第３後臼歯で 95.1 ㎜、第１後臼歯で 67.3 ㎜を計る。左中手骨は、完存する。ただし、部分的に破損するため正確な計測値でないが、全長 196 ㎜前後、近位端幅 41 ㎜前後となる。

SK60

土壌試料、水洗試料がみられるが、ここでは一括して取り扱う。最も多くの貝類、骨類が出土する。中には、焼けた骨貝類も含まれるが全体的な数量に比べると少ない。全体的な傾向をみると、二枚貝綱のイガイ・ムラサキインコが最も多く、次いでイソシジミ・ヤマトシジミなどが検出される。これらの中でイソシジミ、ヤマトシジミは、比較的完形が多く、イソシジミは殻長 30～40 ㎜、殻高 25～30 ㎜のサイズが、ヤマトシジミは殻長 25～35 ㎜、殻高 20～30 ㎜のサイズが多い（第 10 表・第 11 表，第 46 図）。腹足綱では、タマキビ、チヂミボラ、エゾチヂミボラなどがみられるが、二枚貝綱に比べると数量的には少ない。

貝類以外では、ウニ類、チシマフジツボ、アカフジツボ、硬骨魚綱（ニシン亜科・ニシン科・ウグイ属・コイ科・サケ属・タラ科？・ボラ・スズキ属？・ブリ属・ウミタナゴ科・サバ属・カツオ？・カレイ科）、カエル類、ヘビ類、鳥綱（カラス類・キジ科）、哺乳綱（ノウサギ・ネズミ亜科・ハタネズミ亜科・イノシシ）、植物遺体、炭化材などがみられるが、数量的には少ない。

カラス科は、最大長 35.08 ㎜、大中手骨長 32.85 ㎜、近位端幅 10.08 ㎜、遠位端関節面最大幅 6.51 ㎜を測る。また、ネズミ科の左上腕骨の近位端が未化骨で外れ、種類不明であるが哺乳綱の未化骨骨端が検出される。

人為的な痕跡が残るものとしては、ウニ類、ムラサキインコ、ヤマトシジミ、フジツボ類、魚類の中には、被熱したものが含まれる。また、中型哺乳綱肋骨片に解体に伴うカットマークがみられ、貝製品の可能性がある破片、摩耗し加工品の可能性がある哺乳綱の破片（11.1×23,8 ㎜）、スパイラル状に割れた四肢骨片もみられる。

SK67

パツラマイマイ、イガイの左殻、イガイ科の右殻、コタマガイの右殻、チシマフジツボの破片、ウグイ属の腹椎、コイ科の尾椎、タラ科の左上擬鎖骨、フサカサゴ亜科の右方骨、スズキ属の左主上顎骨、ハタ科の可能性がある左上擬鎖骨、マダイの右前上顎骨、タイ科の左肩甲骨・歯牙、サバ属の右方骨・左右上舌骨・左舌顎骨、サバ属の可能性がある右角舌骨、サバ科の前上顎骨／歯骨、カツオの尾椎・尾鰭椎前椎体、カツオの可能性がある左右前上顎骨・尾鰭椎前椎体？、ヒラメの右舌顎骨・右主鰓蓋骨・尾椎、カレイ科の尾椎、硬骨魚綱の鋤骨・前上顎骨／歯骨歯骨・咽頭骨・椎骨・終尾椎・鰭棘等・鱗、カエル類の右腸骨、ツバメ類の右手根中手骨、鳥類の四肢骨片、ニホンジカの角、哺乳綱の四肢骨、部位不明破片などがみられる。

ニホンジカの角は切断され、現長 146 ㎜を計り、切痕がみられる。また、哺乳綱の四肢骨片は、骨針状に削られた加工品が２点みられる。１点は長さ 34.9 ㎜、直径 4.2 ㎜を計り、もう１点は長さ 23.7 ㎜、直径 3.5 ㎜を計るが、それぞれ接合関係にある。

SK208

ヤマキサゴ、ムカデガイ科、パツラマイマイ、ムラサキインコの右殻、イタヤガイ科？、マガキの左右殻、フジツボ類の破片、硬骨魚綱の鰭棘等、種類・部位不明破片などがみられる。

SK381

土器１内下位堆積土（貝含有層）では、腹足綱の破片、イガイの左右殻、ムラサキインコの左右殻、チシマフジツボの破片、硬骨魚綱の部位不明破片などがみられる。

SK424

埋土中位再利用土坑底面周辺では、ムラサキインコの右殻、二枚貝綱の破片、チシマフジツボの破片が検出される。

SI32 伏せ甕①

土器内１層、２層、３層、内側の土から試料が採取されている。土器内１層・２層が種類・部位ともに不明の焼けた小破片、内側の土が腹側綱の破片である。なお、土器内３層は骨でなく、礫・砂であった。

包含層２

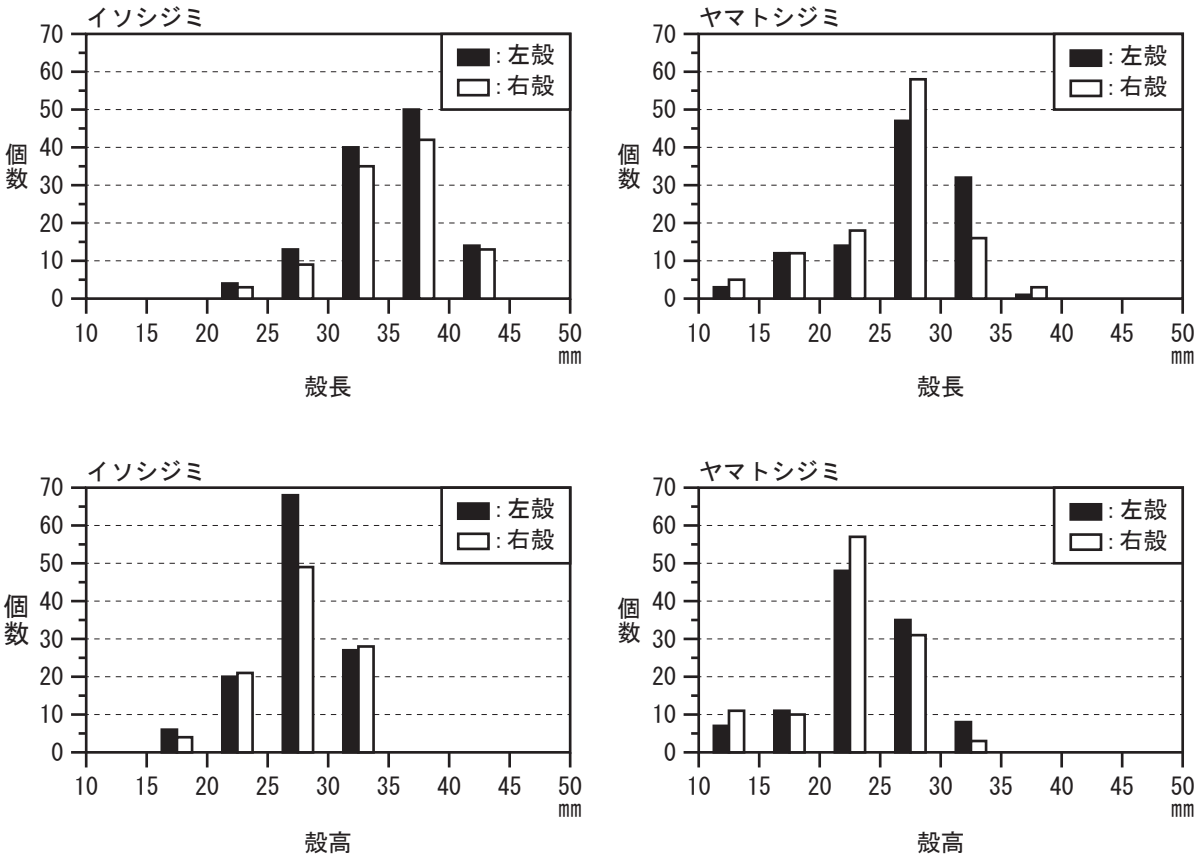
焼土３では、貝片、ニシン亜科の腹椎、サケ属の椎骨、硬骨魚綱の前上顎骨／歯骨・椎骨・終尾椎・鰭棘等・部位不明破片、鳥類の四肢骨、鳥類ないし小型哺乳類等の指骨、哺乳綱の部位不明破片、種類・部位ともに不明破片などが検出される。焼けている骨が多く含まれる。

第 10 表　SK60 出土イソシジミ計測結果

部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）
左殻	22.58	18.36	左殻	35.52	28.83	右殻	23.57	18.86	右殻	36.88	28.80
	23.95	18.32		35.58	27.97		24.49	18.79		36.97	29.28
	24.63	19.39		35.59	30.21		24.73	18.99		37.17	29.87
	24.71	19.63		35.82	27.33		25.17	20.31		37.21	30.46
	25.56	19.72		35.83	27.90		25.45	19.69		37.31	29.06
	26.03	20.85		35.85	28.44		26.43	20.52		37.38	29.44
	26.04	19.12		35.87	27.82		26.56	20.04		37.56	30.55
	26.31	20.51		35.94	29.72		27.93	22.15		37.69	29.99
	26.49	20.82		36±	28.69		28.09	21.76		37.75	29.27
	26.92	20.52		36.01	29.26		28.29	22.67		37.76	30.01
	28.52	22.71		36.01	28.66		28.38	22.44		37.84	29.29
	28.59	23.09		36.28	28.73		28.96	21.58		38.21	29.12
	29.16	24.23		36.37	29.00		30.13	22.69		38.56	29.80
	29.71	23.42		36.40	28.24		30.19	23.28		38.65	31.31
	29.85	23.59		36.52	28.31		30.24	23.44		38.65	29.22
	29.87	24.48		36.57	29.65		30.52	24.14		38.72	30.67
	29.97	24.46		36.63	28.60		30.54	24.06		38.91	30.96
	30.05	22.80		36.82	28.72		30.74	22.96		38.93	31.19
	30.56	24.07		36.90	29.36		30.77	24.51		38.94	30.21
	30.88	25.01		36.91	27.96		30.88	24.71		39.03	29.53
	31.20	24.34		36.93	29.91		31.14	25.50		39.04	30.41
	31.60	24.65		37.21	28.01		31.37	24.55		39.21	30.97
	31.67	24.25		37.26	29.41		31.57	24.32		39.35	31.07
	31.68	23.71		37.35	29.83		31.61	25.58		39.53	31.30
	31.96	25.56		37.54	28.76		31.65	24.74		39.94	29.66
	32.03	25.62		37.60	29.60		31.74	25.23		39.96	32.80
	32.20	25.46		37.98	29.83		31.76	25.18		39.98	30.67
	32.21	24.12		38.14	31.01		31.77	25.49		40.01	30.69
	32.38	23.52		38.21	30.47		31.85	25.34		40.02	31.05
	32.41	26.29		38.24	29.58		31.89	24.73		40.18	32.99
	32.53	25.98		38.25	30.38		31.94	24.97		40.19	31.12
	32.56	25.53		38.33	30.33		31.97	25.03		40.24	30.80
	32.61	25.53		38.61	30.35		32.23	27.05		40.52	31.71
	32.67	26.27		38.64	29.08		32.49	25.62		40.63	32.79
	32.67	25.93		38.66	32.01		32.97	25.10		40.64	30.81
	32.81	26.04		38.68	30.12		33.27	26.56		40.68	31.71
	32.85	25.57		38.71	32.04		33.30	26.98		40.71	30.11
	33.32	25.89		38.80	30.21		33.58	26.22		40.88	32.86
	33.58	26.69		38.81	29.19		33.65	25.95		41.42	32.64
	33.58	27.23		38.84	29.15		33.74	25.19		41.53	32.53
	33.66	26.37		38.87	31.32		34.10	26.56			
	33.69	24.76		39.05	30.48		34.37	26.23			
	33.89	27.10		39.06	29.77		34.40	27.51			
	34.00	25.51		39.12	27.96		34.57	27.27			
	34.07	27.16		39.54	30.46		34.59	26.57			
	34.11	26.34		40±	31.09		34.77	27.31			
	34.15	26.92		40.00	31.67		34.81	26.59			
	34.24	26.15		40.02	32.20		35.01	27.47			
	34.31	27.50		40.08	31.24		35.01	27.60			
	34.33	29.06		40.13	31.70		35.05	28.34			
	34.74	27.70		40.19	31.34		35.26	27.74			
	34.83	26.26		40.49	32.84		35.32	26.75			
	34.86	28.12		40.53	30.72		35.35	27.75			
	34.86	27.28		40.70	30.84		35.55	30.32			
	34.89	27.38		40.86	32.86		35.55	29.97			
	34.98	27.52		40.88	33.37		35.77	27.24			
	34.98	28.49		40.89	32.11		35.98	27.79			
	35.01	27.69		41.48	31.15		36±	29.03			
	35.33	29.83		44.68	33.63		36.08	29.10			
	35.41	27.68					36.30	28.91			
	35.41	27.22					36.47	28.16			
	35.45	28.26					36.49	29.57			
			最小値	22.58	18.32				最小値	23.57	18.79
			最大値	44.68	33.63				最大値	41.53	32.99
			平均	34.76	27.38				平均	34.78	27.33
			標準偏差	4.26	3.39				標準偏差	4.43	3.54

第 11 表　SK60 出土ヤマトシジミ計測結果

部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）	部位	殻長（㎜）	殻高（㎜）
左殻	14.02	12.70	左殻	27.14	24.55	右殻	13.98	12.77	右殻	26.33	24.76
	14.40	13.32		27.25	24.02		14.02	12.65		26.42	24.28
	14.55	13.04		27.35	24.11		14.23	12.78		26.42	22.95
	15.25	13.04		27.55	24.58		14.37	13.15		26.51	24.78
	15.38	13.97		27.60	25.13		14.47	13.43		26.52	24.80
	15.60	14.26		27.60	24.75		15.48	14.06		26.53	24.34
	16.81	15.68		27.67	24.40		15.65	14.28		26.54	24.87
	16.82	15.09		27.79	24.96		15.68	14.39		26.58	24.12
	16.98	14.98		27.80	24.95		16.18	14.66		26.73	23.36
	17.60	16.71		28.32	24.76		16.31	14.61		26.90	24.40
	17.95	16.30		28.51	25.53		16.80	15.44		26.91	24.23
	18.07	15.81		28.58	24.29		16.92	14.93		26.94	24.07
	18.11	16.97		29.06	25.36		17.34	16.09		26.97	24.87
	18.61	17.06		29.20	27.26		17.70	15.84		27.01	24.59
	19.79	18.38		29.21	26.08		17.76	16.91		27.18	26.28
	20.58	18.01		29.42	26.20		18.23	16.12		27.27	25.23
	21.52	19.86		29.55	27.73		19.62	18.35		27.28	23.96
	21.67	19.61		29.58	27.00		20.41	18.27		27.43	25.17
	21.95	20.20		29.65	25.93		20.52	19.54		27.46	24.67
	22.67	20.00		29.98	28.28		21.41	19.51		27.51	24.32
	22.80	21.23		30.05	27.93		22.68	19.66		27.58	25.14
	22.97	20.70		30.17	26.68		23.05	20.92		27.61	24.30
	22.99	20.84		30.21	26.44		23.26	21.92		27.63	24.72
	23.47	22.46		30.25	27.63		23.41	22.01		27.72	24.77
	23.55	21.72		30.27	26.13		23.51	21.33		27.88	24.32
	24.05	21.10		30.41	27.98		23.70	22.15		27.93	24.80
	24.58	22.88		30.49	26.47		23.70	21.58		28.08	25.12
	24.60	22.39		30.68	27.82		23.72	20.75		28.16	26.19
	24.75	23.00		30.71	27.37		23.78	22.60		28.64	24.86
	25.05	23.82		30.87	29.77		24.02	21.44		28.85	25.34
	25.22	23.84		30.95	26.99		24.18	22.89		29.02	25.97
	25.33	22.95		30.99	26.34		24.42	22.66		29.12	26.82
	25.34	23.73		31.14	27.49		24.70	23.15		29.47	27.66
	25.61	23.06		31.19	28.74		24.76	23.98		29.62	27.65
	25.64	23.92		31.19	27.37		24.84	22.57		29.66	26.95
	25.84	23.82		31.26	28.62		25.04	23.19		29.95	28.22
	25.91	23.69		31.38	26.87		25.05	23.61		29.99	26.58
	25.95	24.13		31.59	26.70		25.15	23.68		30.23	28.01
	25.96	23.07		31.83	28.81		25.36	22.90		30.26	29.06
	26.28	23.71		31.89	28.18		25.37	23.97		30.50	27.00
	26.48	22.71		31.94	27.29		25.37	23.49		30.55	27.79
	26.52	24.54		32.05	31.25		25.38	23.99		30.66	27.64
	26.53	24.62		32.11	29.64		25.38	23.61		30.67	26.88
	26.54	23.15		32.56	29.37		25.42	23.17		30.77	27.94
	26.55	24.56		33.04	30.11		25.50	24.30		30.91	27.90
	26.59	24.56		33.19	31.23		25.51	23.01		31.01	28.30
	26.80	24.41		33.44	30.52		25.74	23.55		31.21	26.30
	26.80	24.44		34.01	29.39		25.76	23.53		31.35	27.00
	26.83	24.61		34.12	31.55		25.94	23.35		31.57	28.71
	26.85	24.82		34.22	28.58		25.96	23.63		31.76	27.63
	26.88	24.39		34.64	30.80		25.98	22.99		31.86	27.79
	26.95	24.38		34.68	31.12		25.99	23.66		32.79	27.76
	26.95	24.60		35.61	30.12		26.18	23.60		33.06	28.80
	26.98	24.69					26.20	24.01		35.41	31.05
	27.05	24.09					26.24	25.28		36.97	30.61
	27.09	24.98					26.29	23.32		37.41	33.25
最小値				14.02	12.7	最小値				13.98	12.65
最大値				35.61	31.55	最大値				37.41	33.25
平均				26.65	24.05	平均				25.6	23.23
標準偏差				5.09	4.51	標準偏差				4.97	4.34



第 46 図　SK60 出土イソシジミ・ヤマトシジミの殻長・殻高分布

包含層３

マガキの右殻の破片が検出される。

包含層４

イノシシの両端が欠損した左脛骨、哺乳類の肋骨片である。

南半 IA22m 表採

ウマないしウシの四肢骨である。複数の破片がみられるが、一部接合が可能であり、本来は１つの骨であったとみられる。白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなど、被熱の特徴を示す。

（５）考　　察

遺構ごとに各種類の最小個体数を求め第 12 表・第 13 表に示す。それによると、SI1、SI18、SI41、SI59、SK22、SI32 伏せ甕①は、焼けた微小な骨片が少量含まれる。焼けた状態の骨が破棄された、あるいは周辺の土壌中に含まれていたものが混入したなどが考えられる。とくに陸産貝類のヤマキサゴ・キセルガイ類・パツラマイマイ・コハクガイ類は、周辺からの混入と考えられる。また、ネズミ亜科、ハタネズミ亜科なども遺跡内および周辺に棲息していたものが死後、遺構内に流れ込んだのであろう。

遺構別の量比では SK60 が最も多くの骨貝類が出土し、その他に SK208・SK381・SK67・SI37 などで多く検出される。種類構成をみると、SI32 と SI37 が焼けた魚類を中心、SK67 が魚類を中心、SK60・SK381 がイガイ・ムラサキインコを中心、SK208 がマガキを中心とする。

特に最も多くの骨貝類が出土したフラスコ状土坑の SK60 について、最小個体数から各種類の出現率を求めてみると、ムラサキインコが約半数、次いでイガイ・イガイ科が多く検出されており、これ

第 12 表　遺構別貝類最小個体数

	SI01	SI18	SI32	SI37	SI41	SI54	SI59	SK22	SK38	SK60
ウニ綱										
ウニ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
多板綱										
ヒザラガイ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
腹足綱										
ヨメガカサ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ユキノカサガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
ヒメコザラ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	12
コガモガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	7
クボガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
ヘソアキクボガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
コシダカガンガラ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
エゾチグサ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
サンショウガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
エゾサンショウ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
ヤマキサゴ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウミニナ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
タマキビ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	51
クロタマキビ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
タマツボ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
クリイロカワザンショウ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
ムカデガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タマガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
オウウヨウラク	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
チヂミボラ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	33
エゾチヂミボラ・エゾチヂミボラ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	62
レイシガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
イボニシ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
クロスジムシロ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9
キセルガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	41
パツラマイマイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	27
ウラジロベッコウマイマイ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
オオケマイマイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
コハクガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	12
二枚貝綱										
フネガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
イガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	895
ムラサキインコ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4108
ヒバリガイ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
イガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1744
イタヤガイ科？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マガキ・イタボガキ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4
イシガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
チリハギガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	43
トマヤガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
バカガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ニッコウガイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
イソシジミ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	369
ヤマトシジミ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	140
コタマガイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ウチムラサキ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1

	SK67	SK208	SK381	SK424	SI32 伏せ甕①	包含層２	包含層３	包含層４	南半 IA22m 表採
ウニ綱									
ウニ類	－	－	－	－	－	－	－	－	－
多板綱									
ヒザラガイ類	－	－	－	－	－	－	－	－	－
腹足綱									
ヨメガカサ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ユキノカサガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヒメコザラ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
コガモガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クボガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヘソアキクボガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
コシダカガンガラ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
エゾチグサ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
サンショウガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
エゾサンショウ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヤマキサゴ	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ウミニナ？	－	－	－	－	－	－	－	－	－
タマキビ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クロタマキビ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
タマツボ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クリイロカワザンショウ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ムカデガイ科	－	1	－	－	－	－	－	－	－
タマガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
オウウヨウラク	－	－	－	－	－	－	－	－	－
チヂミボラ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
エゾチヂミボラ・エゾチヂミボラ？	－	－	－	－	－	－	－	－	－
レイシガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
イボニシ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
クロスジムシロ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
キセルガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
パツラマイマイ	1	1	－	－	－	－	－	－	－
ウラジロベッコウマイマイ？	－	－	－	－	－	－	－	－	－
オオケマイマイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
コハクガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
二枚貝綱									
フネガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
イガイ	3	－	4	－	－	－	－	－	－
ムラサキインコ	－	1	10	2	－	－	－	－	－
ヒバリガイ？	－	－	－	－	－	－	－	－	－
イガイ科	－	－	8	－	－	－	－	－	－
イタヤガイ科？	－	1	－	－	－	－	－	－	－
マガキ・イタボガキ科	－	35	－	－	－	－	1	－	－
イシガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
チリハギガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
トマヤガイ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
バカガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ニッコウガイ科	－	－	－	－	－	－	－	－	－
イソシジミ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヤマトシジミ	－	－	－	－	－	－	－	－	－
コタマガイ	1	－	－	－	－	－	－	－	－
ウチムラサキ	－	－	－	－	－	－	－	－	－

第 13 表　遺構別貝類以外の最小個体数

	SI01	SI18	SI32	SI37	SI41	SI54	SI59	SK22	SK38	SK60
顎脚綱										
チシマフジツボ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
アカフジツボ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
フジツボ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
硬骨魚綱										
ウナギ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
マイワシ・ニシン亜科・ニシン科	−	−	1	1	−	−	−	−	−	1
カタクチイワシ科	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
ウグイ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
サケ属	−	−	1	1	−	−	−	−	−	1
タラ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2
ボラ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3
フサカサゴ亜科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
スズキ属・スズキ属？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ハタ科？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ブリ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
アジ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
マダイ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウミタナゴ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
サバ属・サバ科	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
ソウダガツオ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
カツオ・カツオ？	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ヒラメ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カレイ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
両生綱										
カエル類	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
爬虫綱										
ヘビ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
鳥綱										
カラス科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
スズメ目	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
ツバメ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キジ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
哺乳綱										
ノウサギ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ネズミ亜科	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1
ハタネズミ亜科	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1
ウマ	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
イノシシ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1
ニホンジカ	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ウマ／ウシ	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

	SK67	SK208	SK381	SK424	SI32 伏せ甕①	包含層２	包含層３	包含層４	南半 IA22m 表採
顎脚綱									
チシマフジツボ	1	−	1	1	−	−	−	−	−
アカフジツボ	−	−	−	−	−	−	−	−	−
フジツボ類	−	1	−	−	−	−	−	−	−
硬骨魚綱									
ウナギ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マイワシ・ニシン亜科・ニシン科	−	−	−	−	−	1	−	−	−
カタクチイワシ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウグイ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−
サケ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−
タラ科	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ボラ	−	−	−	−	−	−	−	−	−
フサカサゴ亜科	1	−	−	−	−	−	−	−	−
スズキ属・スズキ属？	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ハタ科？	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ブリ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アジ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マダイ	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ウミタナゴ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
サバ属・サバ科	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ソウダガツオ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カツオ・カツオ？	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ヒラメ	2	−	−	−	−	−	−	−	−
カレイ科	1	−	−	−	−	−	−	−	−
両生綱									
カエル類	1	−	−	−	−	−	−	−	−
爬虫綱									
ヘビ類	−	−	−	−	−	−	−	−	−
鳥綱									
カラス科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
スズメ目	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ツバメ類	1	−	−	−	−	−	−	−	−
キジ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
哺乳綱									
ノウサギ	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ネズミ亜科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ハタネズミ亜科	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウマ	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イノシシ	−	−	−	−	−	−	−	1	−
ニホンジカ	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ウマ／ウシ	−	−	−	−	−	−	−	−	1

らの種類で全体の９割近くを占める（第 47 図）。このように遺構により出現傾向がやや異なるが、利用した期間や用途の違いなどを意味する可能性がある。

貝類および魚類の組成からみると、二枚貝綱のイシガイ科、硬骨魚綱のウナギ属・ウグイ亜科（コイ科）は淡水性であり、遺跡近傍の河川、沼地、湖沼などで採取・狩猟され、持ち込まれたとみられる。また、硬骨魚綱のサケ属は海洋生活で成熟するが、産卵期になると河川を遡上する。ボラやスズキ属も基本的には海水魚で河口や内湾の汽水域に多く生息するが、時に淡水域に遡上することもある。これらサケ属やボラについては河川で捕獲された可能性もある。また、河口付近の汽水域などでは二枚貝綱のマガキやヤマトシジミが採取されたと考えられる。

それ以外の腹足綱、二枚貝綱、ウニ綱、顎脚綱（フジツボ類）、硬骨魚綱は、いずれも海産性である。ただし、生態性や大きさなどをみると、ヒザラガイ類、コガモガイ、ヨメガカサ、ユキノカサガイ、ヒメコザラ、タマツボ、クロスジムシロ、クリイロカワザンショウ、ムカデガイ科、フネガイ、チリハギガイなどは、１㎝前後ないしそれ以下と極めて小さな個体であり、これらが選択的に採取されたとは考えにくく、他の貝類や岩石などに付着していたものが持ち込まれた可能性がある。それ以外の貝類は、食料資源等として、岩礁域（クボガイ・ヘソアキクボガイ・コシダカガンガラ・サンショウガイ・エゾサンショウ・タマキビ・クロタマキビ・タマツボ・チヂミボラ・エゾチヂミボラ・オオウヨウラク・レイシガイ・イボニシ・イガイ・ムラサキインコ・アカフジツボ・チシマフジツボ）、岩礁ないし砂礫底（ウニ綱・イタヤガイ科）、砂泥底に棲息する種類（ウミニナ？・タマガイ科・クロスジムシロ・バカガイ科・ニッコウガイ科・イソシジミ・コタマガイ・ウチムラサキ）などが採取されたと考えられる。

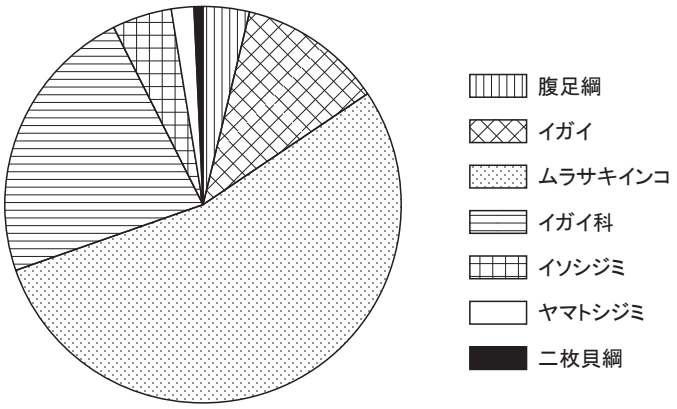
硬骨魚綱では、沿岸部の岩礁域に棲息するフサカサゴ科・ハタ科？、海岸近くから沖合までの表層を回遊するニシン亜科・カタクチイワシ科・ブリ属・マダイ・サバ・ソウダガツオ属・カツオ、海底に付近に棲息するタラ科・ヒラメ・カレイ科などが漁猟対象となっていたとみられる。なお、淡水魚のウグイ亜科、海水魚のニシン亜科やカタクチイワシ科など、比較的小型の魚類が検出されることから網などの漁法が用いられていた可能性がある。

ヘビ類は、SK60 で焼けてない椎骨が検出されるものの、数量的に少ない。カエル類は、SK67 で焼けてない右腸骨、SI37 で焼けている骨が出土する。鳥類では、SK60 でカラス科・キジ科が、SK67 でツバメ類が、SI37 でスズメ目を含む焼けた骨が、包含層２で焼けた四肢骨片が検出される。いずれも小型である。

ニホンジカは、SK67、SI54 で出土する。SK67 では切断された角が検出され、骨角器の素材として利用されていたことが伺える。なお、SK67 では種類不明であるが、骨針状に削られた加工品も出土する。緻密質部分を削り、磨いて作成している。また、SI54 では、ニホンジカの左中手骨・中手骨／中足骨の焼けた破片が検出されている。このほか、イノシシが SK60 と包含層４、ノウサギおよびノウサギ？が SK60 で検出される。これらの種類は、遺跡周辺で狩猟され、利用後に廃棄されたと考えられる。

SK38 埋土で検出された骨はウマであり、右下顎骨・右肩甲骨・左中手骨・基節骨・中節骨・末節骨などが確認される。頭蓋だけでなく、四肢骨・指趾骨が確認される点を考慮すると、本来は全身の骨格が存在していたと思われる。検出されたウマは、西中川ほか（1991）を参考に右下顎第３前臼歯と右下顎第１後臼歯の歯牙計測値からみた推定される年齢は 15～16 歳程度と高齢馬とみられる。また、西中川ほか（1991）、林田・山内（1957）の計算式に基づくと、体高 117～126 ㎝程度となり、小型～中型馬と推定される。ウマは、物資やヒトを運ぶ役割、軍用、農耕用など、多様な用途が考え

られる。その利用状況までは推定できないが、高齢馬であることを考慮すると病死などの自然死であった可能性があり、死後に本土坑内に遺骸が埋納されたと考えられる。ウマは、４世紀末～５世紀にかけて普及するとされており（松井, 2008）、古墳時代以降に埋められた可能性が高い。南半 IA22m 表採とされる骨は、大きさからみてウマないしウシの四肢骨に由来するとみられるが、被熱し、破片であるため詳細不明である。土中に埋まっていたものが、攪乱等によって地表に現れた可能性がある。



第 47 図　SK60 貝類出現頻度

以上、本遺跡で検出される動物遺体の傾向をみると、沿岸の岩礁域では、イガイ・ムラサキインコを中心に採取する活動を展開しており、湾奥部に広がる砂浜でイソシジミ、それに注ぎ込む河川でヤマトシジミや淡水魚類のウナギ属・ウグイ亜科・サケ属、沿岸水域などでのニシン亜科・カタクチイワシ科・サバ属・ソウダガツオ属・ヒラメ・カレイ科などの漁猟活動が行われ、周辺に棲息するイノシシやニホンジカも捕えられていた。これらが食料資源となっていたと考えられる。また、獣骨の一部が骨角器の素材として利用されており、食用以外の用途も想定される。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

林田重幸・山内忠平　1957　馬における骨長より体高の推定法．鹿児島大学農学部学術報告書，6, 146-156.

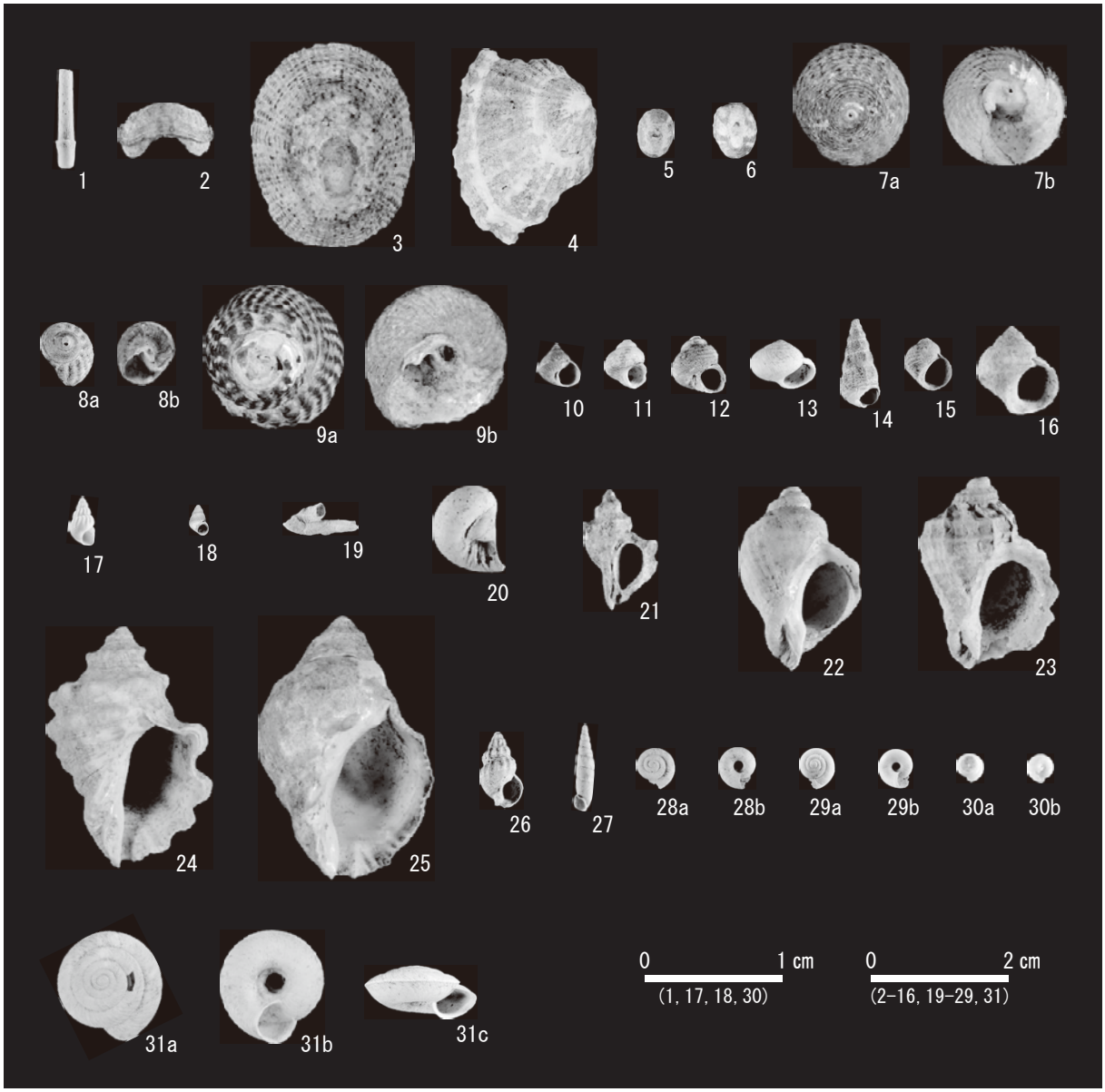
加藤嘉太郎・山内昭二 2003 新編家畜比較解剖図説上巻．養賢堂，315p.

松井章　2008　動物考古学．京都大学学術出版会，312p.

西中川駿・本田道輝・松元光春　1991　古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書，99p.

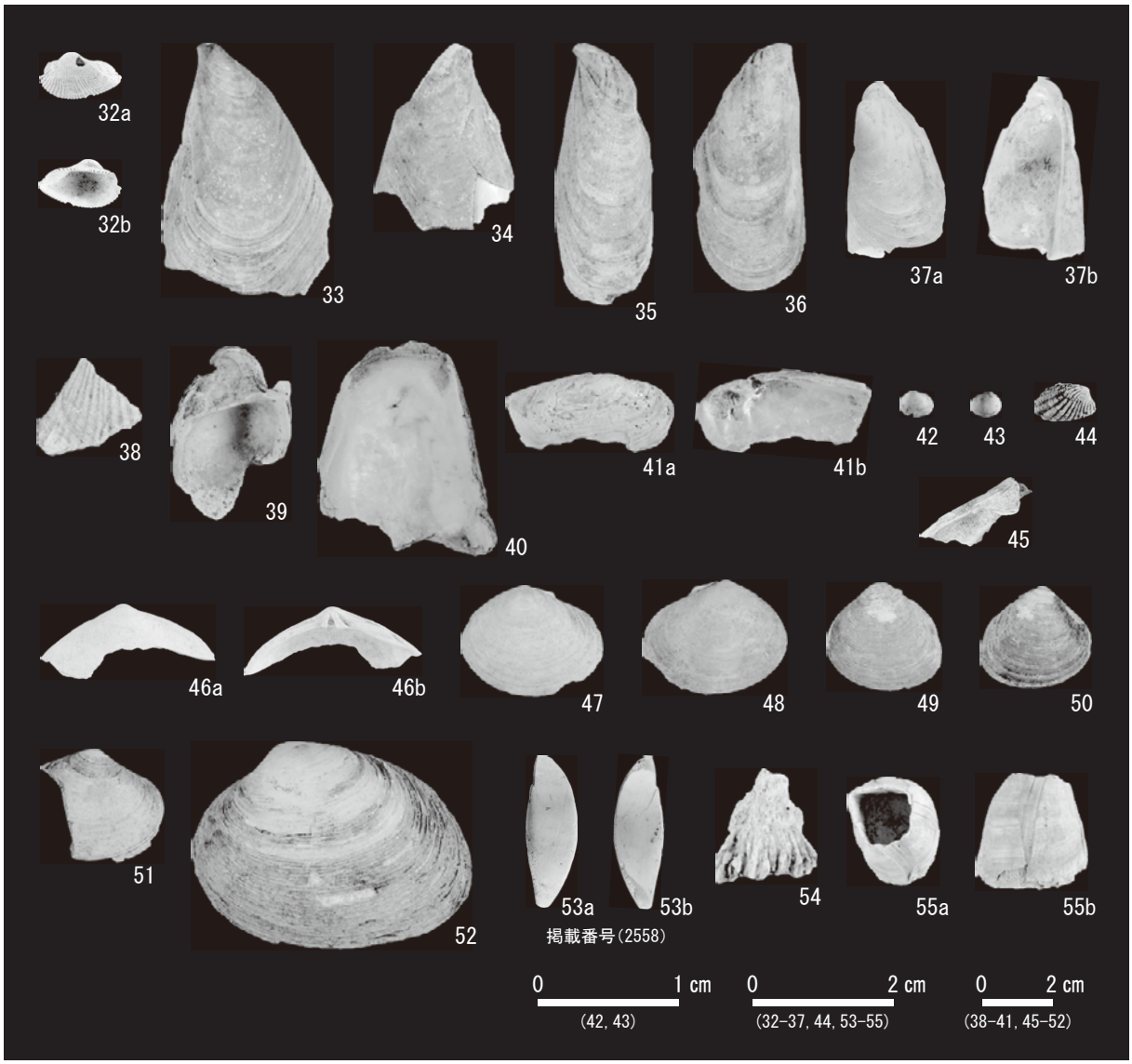
奥谷喬司編著　2004　改訂新版世界文化生物大図鑑貝類．株式会社世界文化社．399p.

奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷巌・速水格・堀成夫・松隈明彦　2000　日本近海産貝類図鑑．奥谷喬司編，東海大学出版会，1173p.



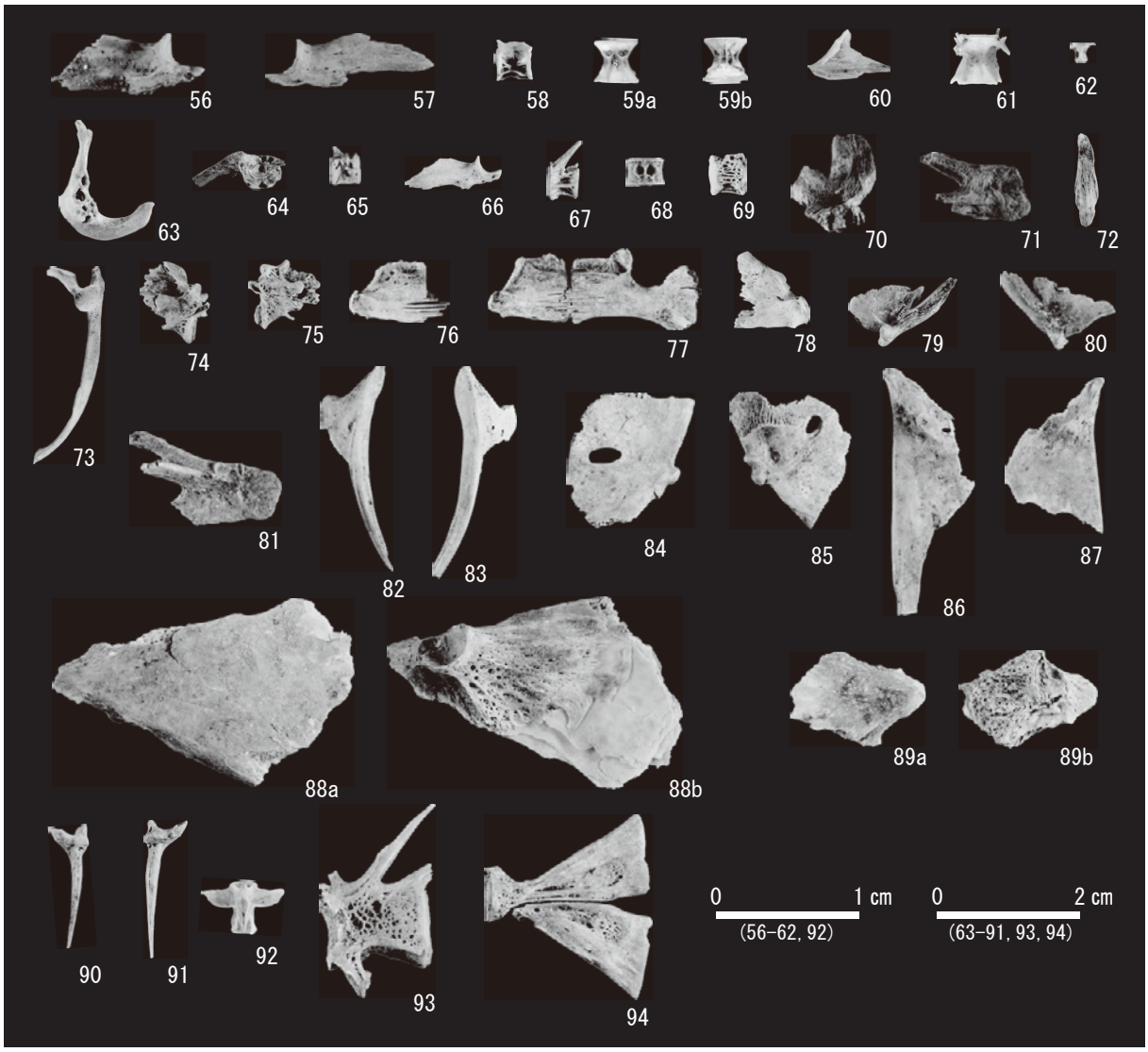
1．ウニ類棘（SK60）
2．ヒザラガイ類殻（SK60）
3．ヨメガカサ殻（SK60）
4．ユキノカサガイ殻（SK60）
5．ヒメコザラ殻（SK60）
6．コガモガイ殻（SK60）
7．クボガイ殻（SK60）
8．ヘソアキクボガイ殻（SK60）
9．コシダカガンガラ殻（SK60）
10. エゾチグサ殻（SK60）
11. サンショウガイ殻（SK60）
12. エゾザンショウ殻（SK60）
13. ヤマキサゴ殻（SK208）
14. ウミニナ？ 殻（SK60）
15. タマキビ殻（SK60）
16. クロタマキビ殻（SK60）
17. タマツボ殻（SK60）
18. クリイロカワザンショウ殻（SK60）
19. ムカデガイ科殻（SK208）
20. タマガイ科殻（SK60）
21. オウウヨウラク殻（SK60）
22. チヂミボラ殻（SK60）
23. エゾチヂミボラ殻（SK60）
24. レイシガイ殻（SK60）
25. イボニシ殻（SK60）
26. クロスジムシロ殻（SK60）
27. キセルガイ科殻（SK60）
28. パツラマイマイ殻（SK60）
29. コハクガイ科殻（SK60）
30. ウラジロベッコウマイマイ？殻（SK60）
31. オオケマイマイ殻（SK60）

第 48 図　ウニ綱・腹足綱



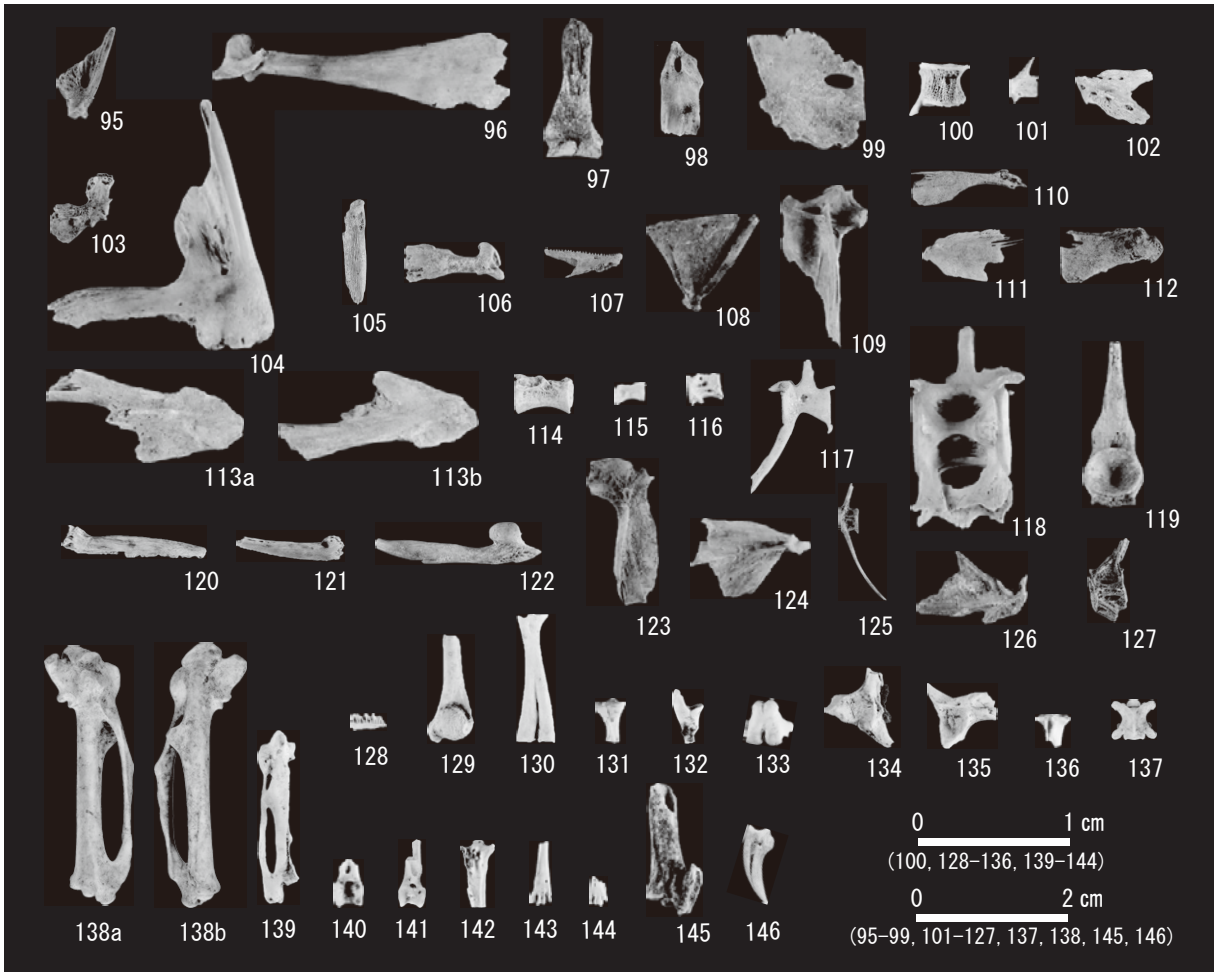
32. フネガイ左殻（SK60）
33. イガイ左殻（SK60）
34. イガイ右殻（SK60）
35. ムラサキインコ左殻（SK60）
36. ムラサキインコ右殻（SK60）
37. ヒバリガイ？ 左殻（SK60）
38. イタヤガイ科？ 殻（SK208）
39. マガキ左殻（SK208）
40. マガキ右殻（SK208）
41. イシガイ科右殻（SK60）
42. チリハギガイ左殻（SK60）
43. チリハギガイ右殻（SK60）
44. トマヤガイ右殻（SK60）
45. バカガイ科左殻（SK60）
46. ニッコウガイ科右殻（SK60）
47. イソシジミ左殻（SK60）
48. イソシジミ右殻（SK60）
49. ヤマトシジミ左殻（SK60）
50. ヤマトシジミ右殻（SK60）
51. コタマガイ右殻（SK60）
52. ウチムラサキ左殻（SK60）
53. 貝製品？（SK60）
54. チシマフジツボ殻（SK60）
55. アカフジツボ殻（SK60）

第 49 図　二枚貝綱・顎脚綱



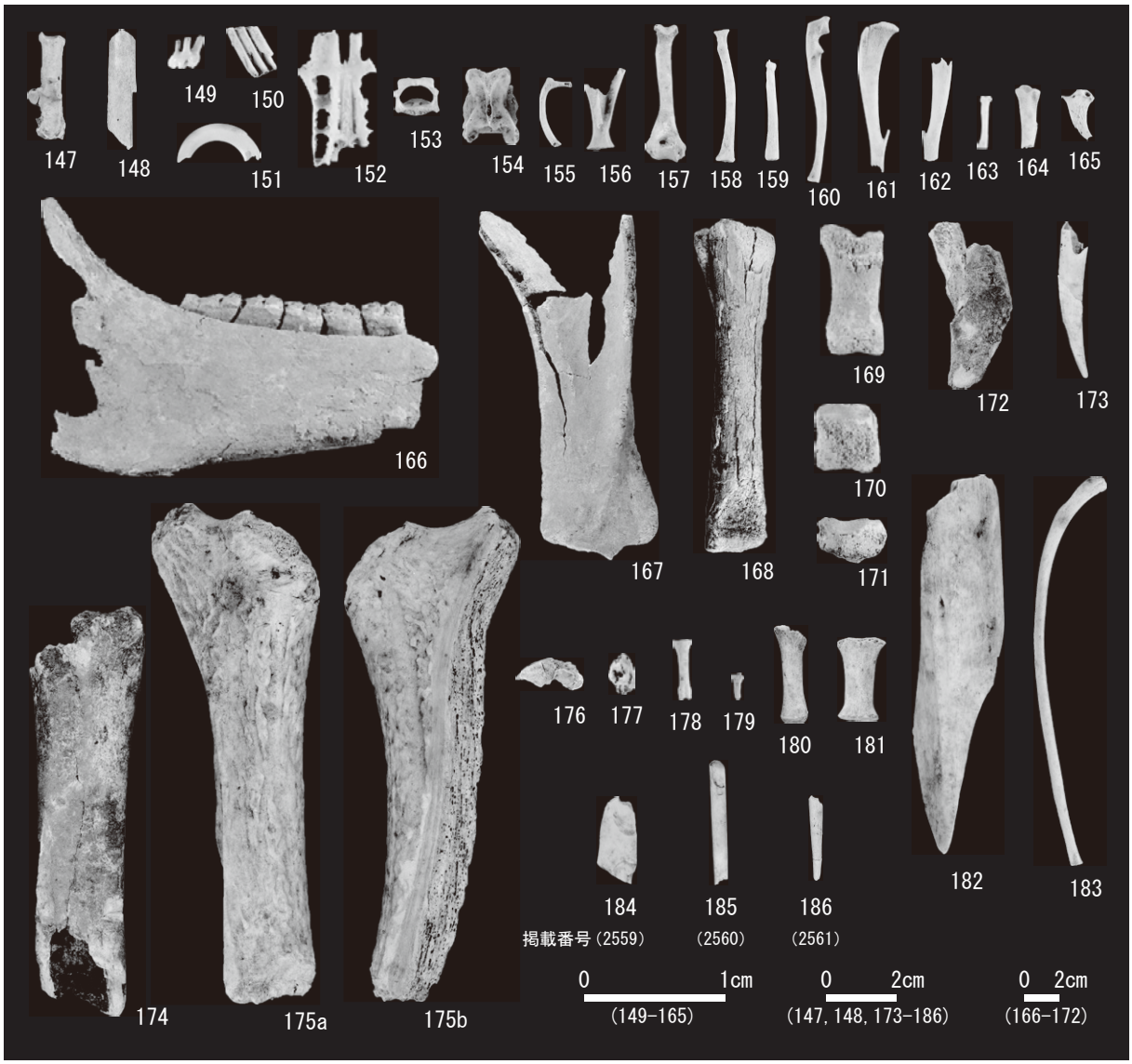
56. ウナギ属左角骨（SK60）
57. ウナギ属右角骨（SK60）
58. ウナギ属尾椎（SI37）
59. ニシン亜科腹椎（SK60）
60. ニシン科右角骨（SK60）
61. ニシン科尾椎（SK60）
62. カタクチイワシ科尾椎（SI37）
63. ウグイ属右咽頭骨（SK60）
64. ウグイ属第２椎骨（SK60）
65. ウグイ属腹椎（SK60）
66. コイ科咽頭歯（SK60）
67. コイ科尾椎（SK60）
68. サケ属腹椎（SK60）
69. サケ属尾椎（SK60）
70. タラ科右前上顎骨（SK60）
71. タラ科右後側頭骨（SK60）
72. タラ科左上擬鎖骨（SK67）
73. ボラ右主上顎骨（SK60）
74. ボラ左角骨（SK60）
75. ボラ？ 右角骨（SK60）
76. ボラ左上舌骨（SK60）
77. ボラ左角舌骨・上舌骨（SK60）
78. ボラ右上舌骨（SK60）
79. ボラ左方骨（SK60）
80. ボラ右方骨（SK60）
81. ボラ右後側頭骨（SK60）
82. ボラ左上擬鎖骨（SK60）
83. ボラ右上擬鎖骨（SK60）
84. ボラ左肩甲骨（SK60）
85. ボラ右肩甲骨（SK60）
86. ボラ左後擬鎖骨（SK60）
87. ボラ右後擬鎖骨（SK60）
88. ボラ左主鰓蓋骨（SK60）
89. ボラ右主鰓蓋骨（SK60）
90. ボラ左胸鰭（SK60）
91. ボラ右胸鰭（SK60）
92. ボラ腹椎（SK60）
93. ボラ尾椎（SK60）
94. ボラ終尾椎（SK60）

第 50 図　硬骨魚綱（１）



95. フサカサゴ亜科右方骨（SK67）
96. スズキ属左主上顎骨（SK67）
97. スズキ属？ 左方骨（SK60）
98. ハタ科？ 左上擬鎖骨（SK67）
99. ブリ属右肩甲骨（SK60）
100. ブリ属腹椎（SI37；炉内）
101. アジ類腹椎（SK60）
102. アジ類？ 左歯骨（SK60）
103. タイ科左肩甲骨（SK67）
104. マダイ右前上顎骨（SK67）
105. ウミタナゴ科右上擬鎖骨（SK60）
106. サバ属右主上顎骨（SK60）
107. サバ属右歯骨（SK60）
108. サバ属右方骨（SK67）
109. サバ属左舌顎骨（SK67）
110. サバ属左上舌骨（SK67）
111. サバ属右上舌骨（SK67）
112. サバ属？ 右角舌骨（SK67）
113. サバ属右後側頭骨（SK60）
114. サバ属腹椎（SK60）
115. サバ属？ 腹椎（SK60）
116. サバ属尾椎（SK60）
117. ソウダガツオ属尾椎（SK60）
118. カツオ尾椎（SK67）
119. カツオ尾鰭椎前椎体（SK67）
120. カツオ？ 左前上顎骨（SK67）
121. カツオ？ 右前上顎骨（SK67）
122. カツオ？ 左主上顎骨（SK60）
123. ヒラメ右舌顎骨（SK67）
124. ヒラメ右主鰓蓋骨（SK67）
125. ヒラメ尾椎（SK67）
126. カレイ科左角骨（SK60）
127. カレイ科尾椎（SK67）
128. カエル類前上顎骨（SI37）
129. カエル類左上腕骨（SI37）
130. カエル類左橈尺骨（SI37）
131. カエル類左橈尺骨（SI37）
132. カエル類右橈尺骨（SI37）
133. カエル類仙骨（SI37）
134. カエル類左腸骨（SI37）
135. カエル類右腸骨（SI37）
136. カエル類尾骨（SI37）
137. ヘビ類椎骨（SK60）
138. カラス類左手根骨中手骨（SK60）
139. ツバメ類右手根中手骨（SK67）
140. スズメ目左脛足根骨（SI37）
141. スズメ目右脛足根骨（SI37）
142. スズメ目左足根中足骨（SI37）
143. スズメ目左足根中足骨（SI37）
144. スズメ目右足根中足骨（SI37）
145. キジ科左手根中手骨（SK60）
146. 鳥類末節骨（SK60）

第 51 図　硬骨魚綱（２）・両生綱・爬虫類綱・鳥綱



147. ノウサギ左踵骨（SK60）
148. ノウサギ？ 脛腓骨（SK60）
149. ネズミ亜科左上顎第１後臼歯（SK60）
150. ハタネズミ亜科左下顎第２後臼歯（SK60）
151. ネズミ科犬歯（SK60）
152. ネズミ科左右上顎骨（SK60）
153. ネズミ科頚椎（SK60）
154. ネズミ科腰椎（SK60）
155. ネズミ科肋骨（SK60）
156. ネズミ科左肩甲骨（SK60）
157. ネズミ科左上腕骨（SK60）
158. ネズミ科左橈骨（SK60）
159. ネズミ科右橈骨（SK60）
160. ネズミ科右尺骨（SK60）
161. ネズミ科左脛骨（SK60）
162. ネズミ科右脛骨（SK60）
163. ネズミ科中足骨（SK60）
164. ネズミ科指趾骨（SK60）
165. 小型哺乳類末節骨（SI37）
166. ウマ右下顎骨（SK38）
167. ウマ右肩甲骨（SK38）
168. ウマ左中手骨（SK38）
169. ウマ基節骨（SK38）
170. ウマ中節骨（SK38）
171. ウマ末節骨（SK38）
172. ウマ／ウシ四肢骨（南半 IA22m 表採）
173. イノシシ犬歯（SK60）
174. イノシシ左脛骨（包含層４）
175. ニホンジカ角（SK67）
176. ニホンジカ左中手骨（SI54）
177. 哺乳綱頭蓋骨（SK60）
178. 中型哺乳綱中節骨（SK60）
179. 哺乳綱末節骨（SK60）
180. 哺乳綱指趾骨（SK60）
181. 大型獣類尾椎（SK60）
182. 大型獣類四肢骨（SK60）
183. 中型哺乳綱肋骨（SK60）
184. 哺乳綱不明（骨角器）（SK60）
185. 哺乳綱四肢骨（骨針状加工品）（SK67）
186. 哺乳綱不明（骨針状加工品）（SK67）

第 52 図　哺乳綱

7　高根遺跡の黒曜石産地推定

（1）は　じ　め　に

高根遺跡（岩手県宮古市山口に所在）は、縄文時代中期を中心とする集落跡である。調査地は山の斜面地にあたり、住居跡や貯蔵穴などの遺構、土器や石器が多く検出されている。今回は、遺跡から出土した黒曜石製遺物の石材産地に関わる情報を得ることを目的とし、蛍光Ｘ線分析装置による測定を行う。

（2）試　　料

分析に供された試料は、遺跡より出土した石器３（No.１～３）である。なお、各試料の詳細は結果ともに一覧表に記す。

（3）分　析　方　法

本分析の特徴は、試料の非破壊による測定が可能であり、かつ多元素を同時に分析できることが利点として挙げられる。一方、非破壊分析である以上、測定は試料表面のみが対象となることから、表面が汚れた試料や風化してしまっている試料については試料の洗浄あるいは測定面の選択が必要となる。本分析では試料が貴重な遺物であることから、汚れが少なく、風化が進んでいない面を選択して測定を行っている。ただし、表面の風化、汚れが目立つ場合は、メラミンスポンジを用いて洗浄したあと分析を実施している。

本分析で使用した装置は、セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA2120L）であり、Ｘ線管球はロジウム（Rh）、検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、励起電圧50kV、管電流自動設定（μA）、測定時間600秒、コリメータ（照射径）φ10.0㎜、フィルターなし、測定室雰囲気は真空である。測定元素は、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、Ｋ（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Ｙ（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の11元素であり、測定試料全てにおいてマイラー膜（PE,2.5μm；ケンプレックス製CatNo107）を介して元素Ｘ線強度（cps）を測定した。

産地推定は、望月（2004など）による方法に従い、測定結果（元素Ｘ線強度（cps））から、５つの判別指標値を求める。５つの判別指標値は、Rb分率{Rb×100/(Rb＋Sr＋Ｙ＋Zr)}、Sr分率{Sr×100/(Rb＋Sr＋Ｙ＋Zr)}、Zr分率{Zr×100/(Rb＋Sr＋Ｙ＋Zr)}、Mn×100/Fe、Log(Fe/Ｋ）である。

一方、産地推定に必要な原産地の資料に関しては、望月（2004）で用いられている原産地試料（第14表）の分析データーを使い、原産地判定用資料を作成する。今回産地推定に用いた黒曜石原産地を第53図に示す。

原産地試料のデーターを、Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率とLog（Fe/Ｋ）についてグラフ化する。また、グラフを元に作成した二次元正規密度分布、ならびに判別指標値から作成した多次元密度分布の結果から、原産地を元にした判別群を設定する。その名称ならびに判別群と原産地との関係を第14表に示す。

Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率とLog（Fe/Ｋ）のグラフ中に、各判別群の重心より２σ（約95%）の範囲を示す楕円を書く（原産地試料の各分析データーは図が煩雑になるため割愛する）。これに、遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせることにより、産地推定の指標の一つとなる。

第 14 表　黒曜石原産地試料一覧

大分類	中分類	判別群	記号	該当する原産地
北海道	白滝	白滝１群	白滝１	明石山頂、八号沢、白滝山頂、明石山頂
北海道	白滝	白滝２群	白滝２	八号沢、ホロカ、黒曜の沢、でんぷん沢、あじさいの滝
北海道	赤井川	赤井川	赤井川	赤井川、土木川、曲川
北海道	豊浦	豊浦	豊浦	豊泉
北海道	置戸	置戸１群、２群	置戸１，置戸２	置戸山系
北海道	十勝	三股	三股	十勝三股、十三の沢、タウシュベツ川、中阿寒
北海道	名寄	名寄	名寄	名寄布川
北海道	旭川	旭川	旭川	高砂台・雨粉台・春光台
北海道	ケショマップ	ケショマップ	ケショ	ケショマップ川
東北	深浦	深浦	深浦	岡崎浜、深浦公園、日和見、六角沢、八森山
東北	岩木山	出来島	出来島	出来島
東北	男鹿	男鹿１群	男鹿１	金ヶ崎、脇本
東北	男鹿	男鹿２群	男鹿２	脇本
東北	月山	月山１群	月山１	西川町志津、朝日町田代沢など
東北	月山	月山２群	月山２	鶴岡市今野川、鶴岡市大網川
東北	北上	北上１群	北上１	水沢折居、花泉日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上２群	北上２	水沢折居、花泉日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上３群	北上３	水沢折居
東北	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉
東北	秋保	秋保１群	秋保１	秋保土蔵
東北	秋保	秋保２群	秋保２	秋保土蔵
東北	色麻	色麻	色麻	色麻町根岸
東北	塩竈	塩竈港群	塩竈	塩竈市塩竈漁港
東北	小泊	小泊	小泊	青森小泊村折腰内
関東	天城	柏峠１群、２群	柏峠１，柏峠２	天城柏峠
関東	箱根	畑宿	畑宿	箱根畑宿
関東	箱根	鍛冶屋	鍛冶屋	箱根鍛冶屋
関東	箱根	黒岩橋	黒岩橋	箱根黒岩橋
関東	箱根	上多賀	上多賀	箱根上多賀
関東	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯	箱根芦ノ湯
関東	神津島	恩馳島	恩馳島	恩馳島、長浜
関東	神津島	砂糠崎	砂糠崎	砂糠崎、長浜
関東	高原山	高原１群	高原１	甘湯沢、桜沢
関東	高原山	高原２群	高原２	七尋沢
信州	霧ヶ峰	男女倉１群	男女１	ぶどう沢、牧ヶ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	男女倉２群	男女２	ぶどう沢、牧ヶ沢
信州	霧ヶ峰	男女倉３群	男女３	ぶどう沢、牧ヶ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	鷹山系	鷹山	星糞峠、鷹山
信州	霧ヶ峰	西霧ヶ峰系	星ヶ塔	星ヶ塔、星ヶ台
信州	霧ヶ峰	和田峠１群	和田１	古峠、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠２群	和田２	丁子御領、芙蓉パーライト、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠３群	和田３	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋東、18 地点、24 地点、26 地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠４群	和田４	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋西、土屋橋東、18 地点、24 地点、26 地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠５群	和田５	24 地点、25 地点、26 地点、小深沢
信州	霧ヶ峰	和田峠６群	和田６	小深沢、芙蓉パーライト、24 地点、25 地点、26 地点、土屋橋西、土屋橋東
信州	霧ヶ峰	和田峠７群	和田７	東餅屋、芙蓉パーライト、古峠、丁子御領、鷲ヶ峰、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠８群	和田８	25 地点、26 地点、土屋橋東
信州	北八ヶ岳	横岳系双子池	双子池	双子池
信州	北八ヶ岳	横岳系亀甲池	亀甲池	亀甲池　擂鉢池
信州	北八ヶ岳	冷山・麦草系	麦草系	冷山、麦草峠、双子池、渋ノ湯、八ヶ岳７、八ヶ岳９、長門美しの森
信州	北八ヶ岳	中ツ原	中ツ原	中ツ原（遺跡試料）
東海・北陸	新潟	新発田	新発田	新発田板山
東海・北陸	新潟	新津	新津	新津金津

第 53 図　黒曜石産地一覧（淡色の産地は今回の判定対象外の地域）

第 15 表　スペクトル強度と判別指標値

No.	注記等	強度（cps）											判別指標				
		Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn* 100/Fe	log (Fe/K)
1	D006 KN-14.4.22 T18 の２（仮称）Ⅱ層	61.654	548.056	42.333	30.906	5.869	7.819	181.595	7.363	10.264	7.104	20.941	16.12	22.47	45.85	4.31	0.632
2	D073 KN-14 7/2 IA20S 検出 Ⅱ～Ⅲ層	53.823	452.335	38.194	27.394	5.211	6.889	164.466	7.520	10.132	6.553	21.259	16.54	22.29	46.76	4.19	0.634
3	D607 KN-15 5.21 頂上試掘トレンチ 52 試掘中	52.861	418.976	19.229	43.549	5.517	7.640	251.081	2.976	14.867	3.558	22.979	6.71	33.50	51.78	3.04	1.116

第 16 表　黒曜石判定結果

No.	４成分									５成分									推定される産地
	第１候補			第２候補			第３候補			第１候補			第２候補			第３候補			
	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	
1	北上１	2.7	TRUE	北上２	36.9	FALSE	高原１	93.8	FALSE	北上１	4.0	TRUE	北上２	37.1	FALSE	高原１	95.1	FALSE	北上系
2	北上１	4.4	TRUE	北上２	42.6	FALSE	高原１	75.5	FALSE	北上１	4.4	TRUE	北上２	43.5	FALSE	高原１	75.6	FALSE	北上系
3	湯ノ倉	5.3	TRUE	鍛冶屋	65.9	FALSE	畑宿	83.0	FALSE	湯ノ倉	7.1	TRUE	鍛冶屋	70.4	FALSE	畑宿	115.2	FALSE	湯ノ蔵系

距離：マハラノビス平方距離　判定はχ二乗検定（３σ）の結果

各判別群の５つの判別指標値について、それぞれの基本統計量（平均値や分散、共分散など）を求める。この値をもとに、遺跡出土試料と各判別群とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は、先に述べた５つの判別指標値を使う方法（望月，2004 など）と、基本的に Zr 分率を除くグラフに使った４つの判別指標値を使うが、群間の判別が難しい場合に Zr 分率を加える方法（明治大学古文化財研究所，2009，2011、明治大学文学部、2014ａ，ｂ）がある。今回は、４成分、５成分双方の結果を掲載する。測定試料と各判別群全てについて、４成分、５成分のマハラノビス平方距離を求め、測定試料に近いものから３判別群を表に示す。これらについてカイ二乗検定を行い、99.5%の範囲に入った場合を「True」、入らなかった場合を「False」とする。

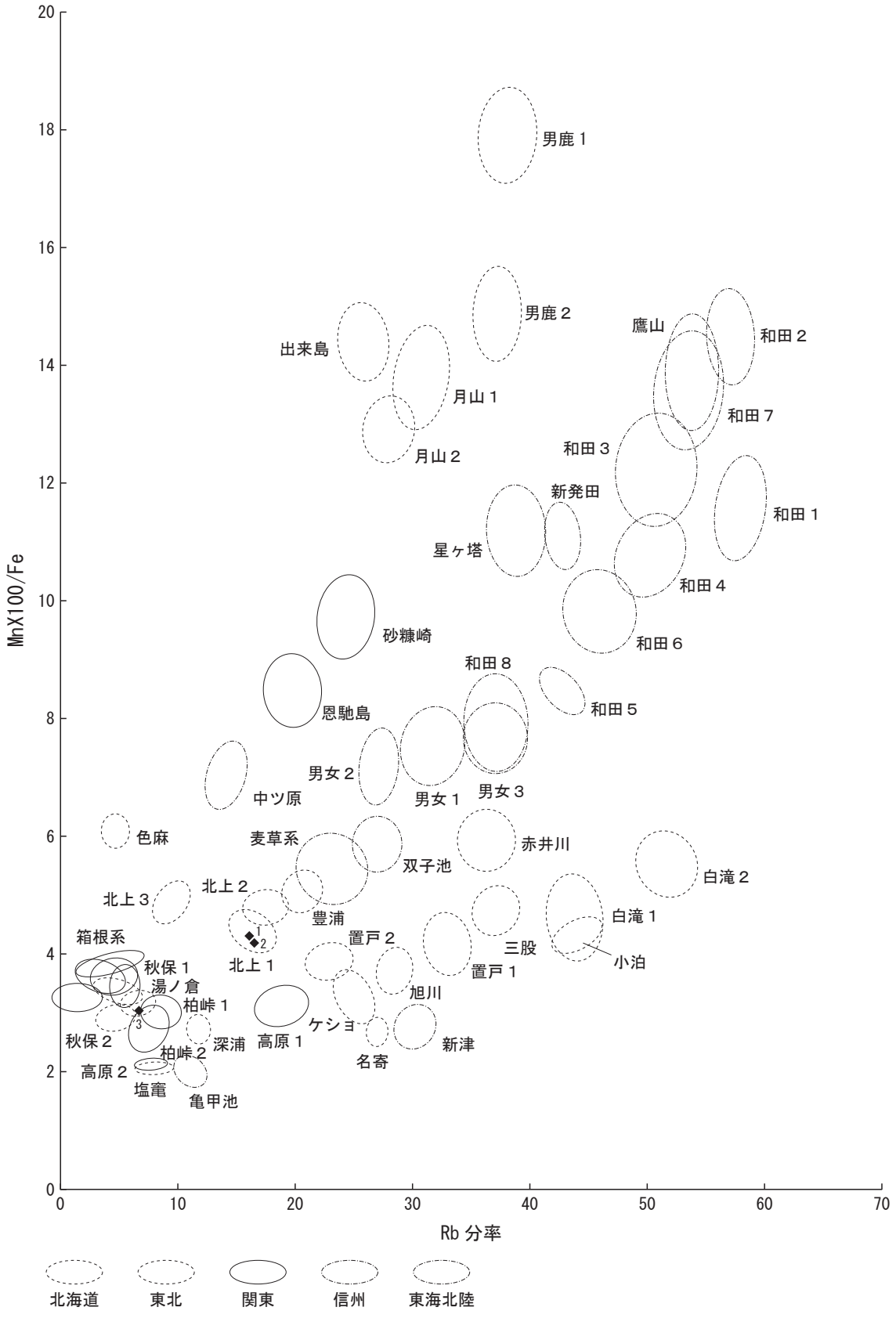
（４）結果および考察

元素Ｘ線強度（cps）および判別指標値を第 15 表に示す。また、Rb 分率と Mn×100/Fe、Sr 分率と Log（Fe/ K）について、原産地試料の重心から２σ（95%）の範囲を記したグラフに、各試料の結果を重ね合わせた結果を、第 54・55 図に記す。第 16 表には、測定試料に近いものから３原産地分のマハラノビス平方距離を示し、これらについてカイ二乗検定を行なった結果を示す。

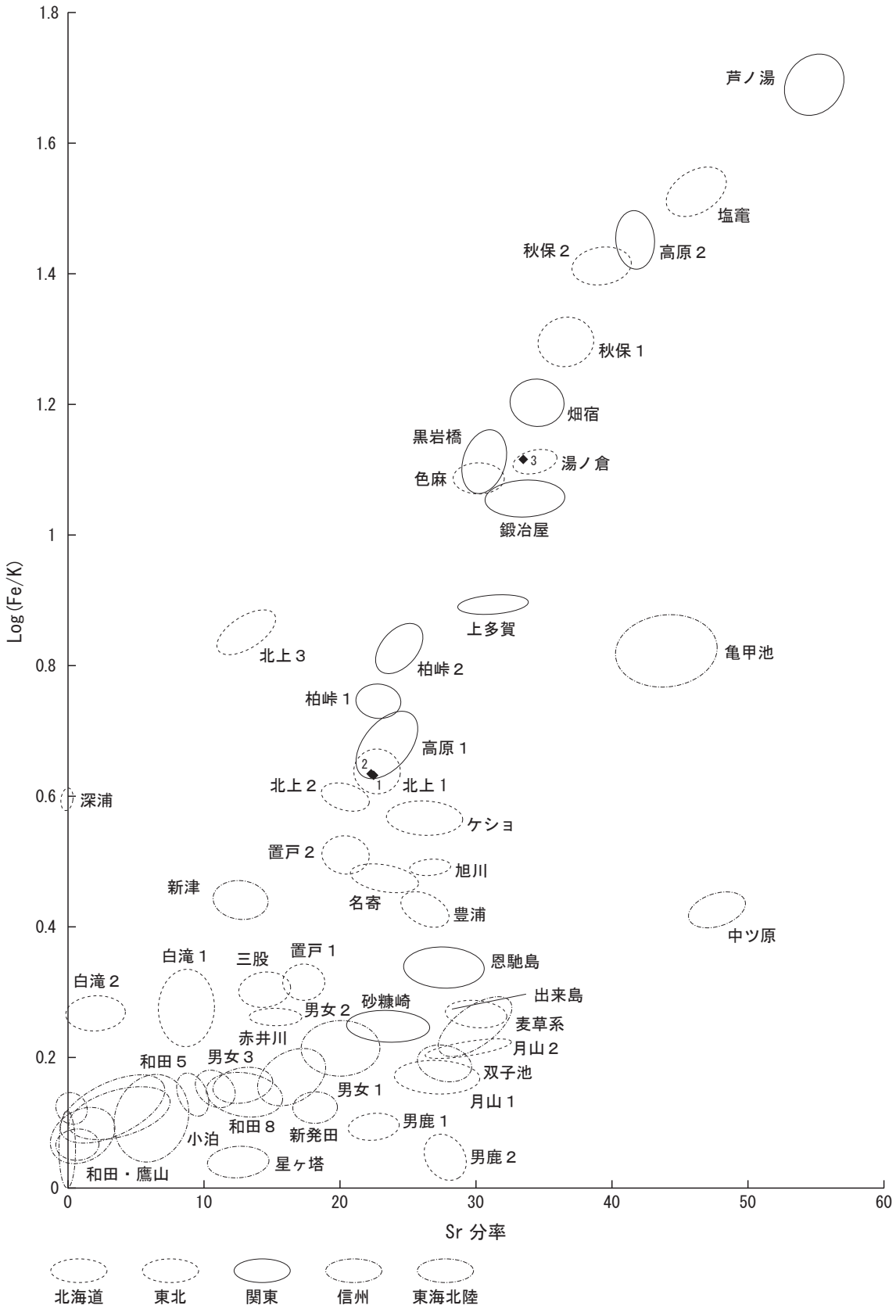
分析の結果、D006 KN-14.4.22 T18 の２（仮称）Ⅱ層（No. １）と D073 KN-14 7/2 IA20S 検出 Ⅱ～Ⅲ層（No. ２）の２試料が北上系、D607 KN-15 5.21 頂上試掘トレンチ 52 試掘中（No. ３）の１試料が湯ノ倉系と判明した。

岩手県内遺跡の産地推定結果は金成（2014）付属の CD-ROM に納められているが、今回と同様北上系が多く、湯ノ倉など近隣の黒曜石山地の石材を伴う組成になっており、これまでの研究成果と調和的な結果といえる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）



第 54 図　黒曜石産地推定結果（１）



第 55 図　黒曜石産地推定結果（２）

引用文献

明治大学古文化財研究所
2009　蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　－基礎データー集１－．明治大学古文化財研究所，294p.

明治大学古文化財研究所
2011　蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　－基礎データー集２－．明治大学古文化財研究所，294p.

明治大学文学部　2014a　蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　－基礎データー集３－，杉原重夫編，森 義勝監修，明治大学文学部，170p.

明治大学文学部　2014b　日本における黒曜石の産状と理化学分析－資料集－，75，杉原重夫編，森 義勝監修，明治大学文学部，170p.

望月明彦　2004　第５節　和野Ｉ遺跡出土黒曜石製石鏃の石材原産地分析，岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 452 集　和野Ｉ遺跡発掘調査報告書，476-480.

８　高根遺跡の炭化材同定

（１）は　じ　め　に

高根遺跡（岩手県宮古市山口に所在）は、縄文時代中期を中心とする集落跡である。調査地は山の斜面地にあたり、住居跡や貯蔵穴などの遺構、土器や石器が多く検出されている。今回は、遺跡から出土した炭化材について樹種同定を実施し、当時の植物利用に関する検討を行う。

（２）試　　料

炭化材同定は、SI37 の P1 および貼床から出土した木材２点である。

（３）分　析　方　法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

（４）結　　果

樹種同定結果を第 17 表に示す。木材は、広葉樹２分類群（クリ・トチノキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３−４列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１−15 細胞高。

第 17 表　樹種同定結果

遺構	位置	樹種
SI37	P1	トチノキ
SI37	貼床（P1 の残り）	クリ

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または２−３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１−15 細胞高で層階状に配列する。

（５）考　　察

SI37 の P1 出土材はトチノキ、貼床出土材はクリに同定された。クリは、二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。トチノキは、河畔・渓畔に生育する落葉高木で、木材は軽軟な部類に入り、強度と保存性は低い。各試料の用途等の詳細は不明であるが、この結果から SI37 では少なくとも２種類の木材が利用されていたことが推定される。クリとトチノキは材質が正反対であり、材質によって用途・機能などが異なっていた可能性もある。この点は、出土状況や用途・機能の解明と併せて検討する必要がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

林　昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181．

伊東隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176．

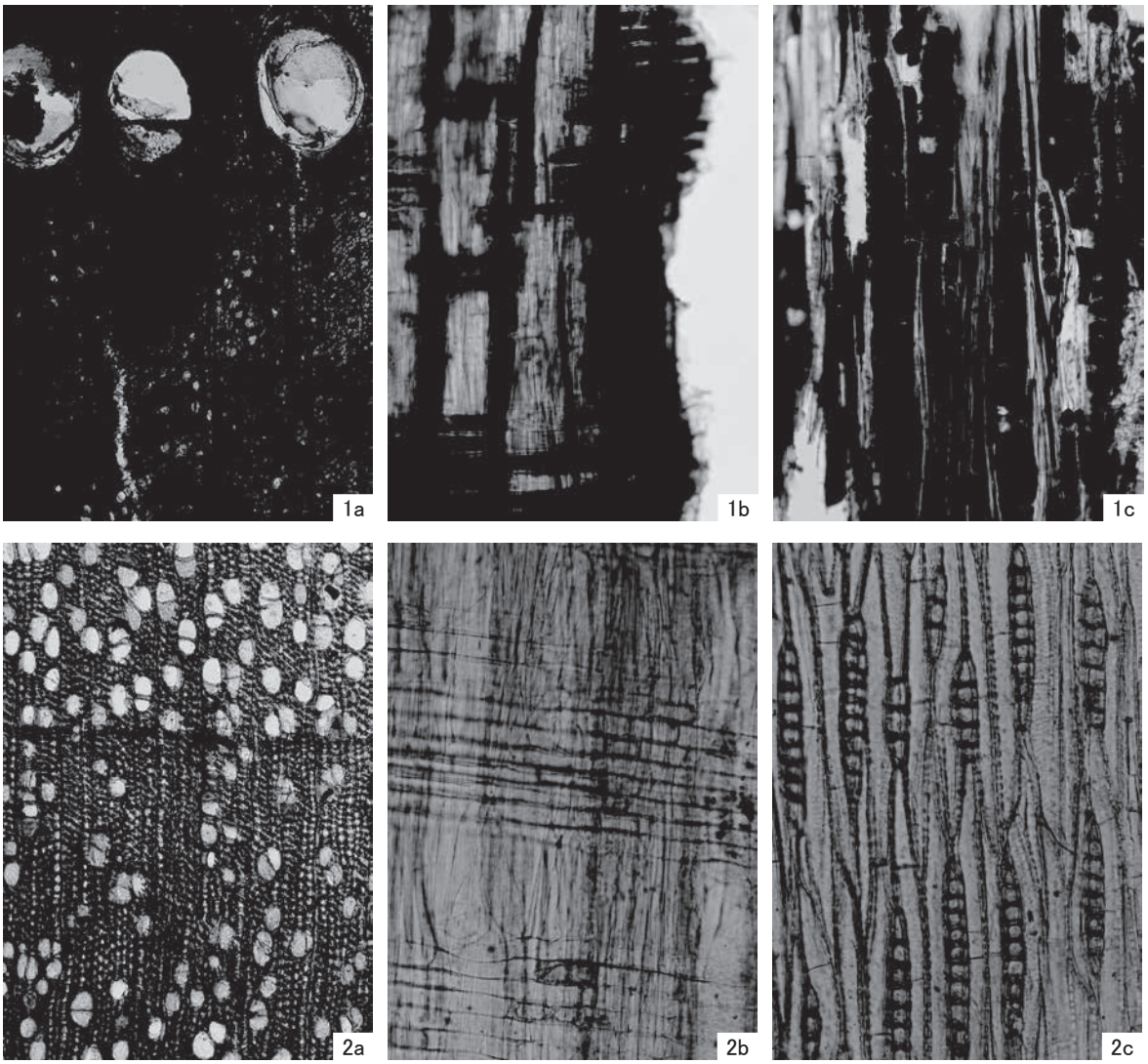
伊東隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201．

伊東隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166．

伊東隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216．

島地　謙・伊東隆夫 1982　図説木材組織．地球社，176p．

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）
1998　広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1．クリ（SI37；貼床）
2．トチノキ（SI37；P1）
　a：木口，b：柾目，c：板目

第56図　木材

９　高根遺跡における堆積物の微細形態分析

（１）は　じ　め　に

高根遺跡（岩手県宮古市山口 11 地割ほかに所在）は、海岸段丘の尾根筋から斜面部にかけて位置し、縄文時代中期の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、伏せ甕などの遺構が検出されている。本分析調査では、調査区の断面より採取された不攪乱柱状試料について、肉眼およびＸ線写真による層相観察を行い、堆積物の成因や堆積環境について検討する。

（２）試　　料

試料は、調査区堆積断面より、発掘調査担当者により採取された、層厚約 150 ㎝の不攪乱柱状試料である（第 57 図）。試料下部は泥質砂泥堆積物、上半部は砂質堆積物からなり、下部および上部に 30～40 ㎝程度の巨礫が混じる。また、上部は非常に脆い状態である。

（３）方　　法

試料の層相について、肉眼およびＸ線写真による観察記載を行う。試料表面を刃物を使用して、平面整形後、肉眼による層相観察と、写真撮影を行う。その上でＸ線写真撮影試料を採取し、厚さ１㎝まで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧 50 kvp、電流３㎃、照射時間 270 秒のＸ線強度条件においてＸ線写真撮影を実施する。撮影は公益財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、今回の試料は礫を多く含み脆いため、Ｘ線写真撮影は第 57 図に示す位置より分割採取した試料について実施する。

（４）結果および考察

調査地点の試料断面には、現生の植物痕を含む、土壌生成作用により生じた孔隙・間隙が密に分布する。このうち明瞭なものを第 58 図に示すが、それ以外の領域もその影響が及んでいる。そのため、初生の堆積構造などが著しく乱れている。試料観察時にはこの影響を考慮しながら層序区分を行った。

試料の肉眼およびＸ線写真観察の結果、下位より層準１～６の６層に区分した（第 59・60 図）。なお、図中のＸ線写真のコントラストは、礫や酸化鉄など密度の高い物質が明色（白色）を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。今回の場合、孔隙・間隙や擾乱が著しい層準、腐植が集積している層準が暗色を呈している。以下に各層準の観察結果について下位より記載する。

＜層準１＞

細粒サイズの中礫、細礫、泥混じり細粒～中粒砂から泥質細粒砂からなる。基本的には上方細粒化する。層全体が生物擾乱の影響を受けている。そのため、初生の堆積構造が乱れているものの、不連続な葉理構造および細礫・砂粒の配向性が確認され、細礫～粗粒砂を多く含む層準と細粒砂～中粒砂を主体とする堆積物が層状に積層しているようにみえる。

本層準は上部で土壌構造の発達が顕著で、上部に向けて腐植の集積が顕著となる。土色は下部から上部にかけて灰褐から暗褐～黒褐色と漸移的に変化する。土壌構造は、下部は亜角塊状構造を呈し、上部にむけて漸移的に団粒状構造が確認されるようになる。なお、亜角塊状構造とは、普通５～10 ㎜の大きさの丸みをおびたペッドをもち、ペッド間の面状孔隙は水平垂直方向に連続し、細・中

粒質土の下層にみられるとされる（波田野，1997）。また、団粒状構造とは、普通２㎜程度の球状の柔らかい多孔質なペッドをもち、ペッド間孔隙の連続性はきわめてよく（パッキング孔隙）、適潤な表層にみられるとされる（波田野，1997）。

孔隙・間隙に画された領域は亜角から角塊状を呈している。これら集合体ないし粒団構造の発達度は上部にむけて強くなっているものの、中～弱で孔隙によって部分的に囲まれている場合が多い。粒団の互いの接合性は下部で部分的に接合し、上部では非接合のものが主体となる。また、２～10㎜程度の孔隙が散在する。現在の植物の根も確認される。

Ｘ線写真では、孔隙・間隙部分や密度の低い部分が暗色に写っており、肉眼観察によって確認された土壌構造がより明瞭に確認される。上部ほど、孔隙・間隙の密度が高く、小粒状の粒団構造が確認される。通常Ｘ線写真では孔隙・間隙の多い土壌生成層準は密度が低いため、暗色を呈するが、本層準ではそのような傾向は確認されない。これは、本層準直上の層準２とした巨礫の堆積に伴う、圧密の影響とみなされる。この巨礫の累重の応力によって生じたとみられる地割れが試料断面で確認される。

以上の層相から、本層準は、谷斜面の崩落など（例えば雨水の影響による地表流など）によって形成された堆積物の堆積と、堆積後に土壌生成が進行するような堆積場で形成されたと推定される。また、周辺からの流入土砂の堆積は、上部に向けて減少する。これとは逆に上部では腐植の集積が顕著となる。これらのことから、上部層準形成期には、堆積環境が静穏化し、比較的長期にわたる土壌生成が進行する、植生に覆われた場所に変化したことが推定される。

＜層準２＞

大きさ30㎝以上の亜角形を呈する巨礫からなる。礫の堆積成因については柱状試料のみから判断することは難しいが、層準１を変形させていることから、斜面上方からの崩落移動した礫の可能性がある。この礫層を覆う層準３で堆積環境が変化していることから、その成因を把握することは重要であり、発掘調査時の所見を踏まえた評価が今後必要である。

＜層準３＞

層準２の礫層を覆う暗褐～黒褐色を呈する細礫・極粗粒～中粒砂混じり腐植質細粒砂質泥からなる。今回の試料中で最も細粒な砕屑物からなる。著しく擾乱されており、見かけ上は塊状構造を呈する。ただし、下部に不明瞭ながら側方に断続的に連続する細粒砂からなる葉理状の構造が確認される。また、本層準には炭片が混じる。

土壌構造は、壁状構造をなしているが、仔細にみると、上部では３～５㎜程度の亜円を呈する粗粒砂～泥の凝集領域（集合体）が確認される。これら集合体は基質と同じ物質からなり、基質との境界には明瞭な間隙・孔隙はほとんど確認されない。腐植の集積は上部ほど顕著である。湿性土壌の土壌構造とみなされる。なお、壁状構造とは、土層全体が緊密に凝集し、ペッドが認められず、通常湿潤な細粒質土の下層にみられるとされる（波田野，1997）。

Ｘ線写真は、今回の試料中で最も暗色を呈している。比較的均質で最上部にむけて漸移的に暗色化する。下部では細礫・粗粒砂が側方に断続的に連続する葉理状の構造を形成している。

以上のような層相から、層準３形成期の調査地点は、斜面上方など周辺からの地表物質の移動堆積が減少し、土壌生成が進行する堆積場に変化したことが推定される。この変化が局所的なのか、広い範囲に起こっているのか、調査時の所見を踏まえた評価が必要であるが、後者の場合、調査地点一帯の水分条件が変化し、地下水位が上昇していることになる。また、本層準には炭片が混在するようになることから周辺において人間活動が行われていた可能性がある。

＜層準４＞

中礫・細粒砂混じり泥質中粒砂～細礫混じり泥質細粒砂からなり、上方細粒化する。生物擾乱が著しく、上部ほど腐植が集積している。初生の堆積構造は著しく乱れているが、中下部では細礫～粗粒砂といった粗粒砕屑物を主体とする層準と細粒砂～中粒砂を主体とする層準が層状に積層しているようにみえる。上位層準から連続する根成孔隙や棲管などの発達が顕著であり、数㎜程度の炭片が比較的多く混じる。下位の層準３とは比較的明瞭で、凹凸のある層理面をなす。

土壌構造は、亜角塊状構造を呈し、その大きさは上部に向けて小さくなる。全体的に腐植が集積しており、上部で増加する。

Ｘ線写真では、下位の層準３に比較して明色を呈するが、相対的に暗色を呈している。肉眼観察で確認される砂礫の配向や、孔隙・間隙に対応する明暗のコントラストが比較的明瞭に確認される。また、最上部は層準内で最も暗色を呈する。

以上の層相から、層準４形成期は斜面上方など周辺からの堆積物の移動があり、堆積後に土壌生成が進行する堆積場へと変化したと推定される。本層準は著しく擾乱されており、初生の堆積構造が不明瞭なため、堆積成因を特定できないが、流出土砂の堆積が進行するような環境変化、例えば周辺植生の衰退や降水量の増加などが起こっている可能性がある。また、堆積物中には炭片が多く混じることから、調査地点の擾乱が植生以外にも人為的擾乱の影響が及んでいる可能性もある。さらに最上部では土壌生成作用による腐植の集積が顕著であることから、上位層準形成期までの間には比較的長期にわたる堆積休止期を挟在していると推定される。

＜層準５＞

大礫、炭片、腐植質泥混じり細粒砂～粗粒砂、灰褐色泥質中粒～粗粒砂といった由来の異なる堆積物・土壌由来の偽礫が不規則に分布する。下位層準との層界は比較的明瞭で、不明瞭な下凸の層界をなす（第 59 図拡大ｃ）。層準内の偽礫の輪郭は不鮮明であるが、下面側は下凸をなしているものが多い。炭片は偽礫内、偽礫間の双方に存在し、大きさは１㎝程度のものも含む。生物擾乱が著しく、初生の堆積構造は乱れている。

土壌構造は上位層から連続する根成孔隙や棲管などの間隙・孔隙が確認されるものの、基本的には未発達である。ただし、最上部では孔隙・間隙の密度がやや増加しているようにみえる。

Ｘ線写真では、下位の層準４に比較して相対的に明色を呈する。最上部でやや暗色化する。また層準内は斑状に明暗のコントラストが生じている。明色を呈する領域は肉眼観察で偽礫と確認される領域である。

以上の層相から、本層準は人為的に生産された偽礫堆積物・土壌からなる盛土、もしくはそのような堆積物が重力移動した崩壊堆積物の可能性が考えられる。

＜層準６＞

明褐～褐灰色を呈する礫混じり細粒砂～極粗粒砂からなる。大礫、中礫、土器片、炭片が混じる。現生植物を含む、後世の生物擾乱の影響を強く受けているため、堆積・土壌構造は不明瞭であるが、部分的に不明瞭な輪郭をなす偽礫が散在する。また、構成する砕屑物の粒径やＸ線写真による明暗のコントラストが層位的に多少変化することから、層準６－１～６－５に細分した。なお、各層準には葉理構造など砕屑物の配向は認められない。

層準６－１は明褐～灰褐色を呈する大礫、中礫、泥混じり細粒砂～粗粒砂からなる。下位の層準５との層理面付近では、２～５㎝程度のブロック状の偽礫が押し込まれており、凹凸のある層理面をなしている。偽礫の輪郭は不明瞭で、隣接する偽礫は接合している。Ｘ線写真では、明色を示す。ただ

し明色部分のコントラストは一様ではなく、著しく明色を呈する部分が確認される。この明色部分の形状は、根成孔隙により擾乱ないし切断されているものの亜角を呈しているものが多く、人為的に生産された偽礫に由来する可能性が高い。試料写真右側の中礫は、長軸方向の配向が垂直方向を示す。

層準６－２は、層準６－１に比較して、砕屑物の粒径がやや細粒で、均質である。孔隙・間隙の発達が顕著であり、やや暗色を呈する。Ｘ線写真では、層準６－１に比較して暗色を呈する。部分的に明色を呈する部分が確認されるが、全体的に均質である。また、上部に向けて暗色化している。本層準は上位層準から連続する根成孔隙が密に分布する層準であり、その擾乱の影響ともみなせるが、土壌生成作用が進行している可能性もある。

層準６－３は、褐色を呈する大礫、中礫、泥混じりの細粒～粗粒砂からなる。大礫～細礫の分布は不規則である。また、下位の層準６－２との層界は、輪廓が不鮮明な偽礫の圧密によって生じた凹凸をなす。Ｘ線写真では、層準６－２に比較してやや明色を呈する。ただし明色部分のコントラストは一様ではなく、著しく明色を呈する部分が確認される。混在する礫は不規則な配向を示す。

層準６－４は、褐色を呈する大礫、中礫、泥混じりの細粒～粗粒砂からなり、基本的には層準６－３に類似するが、層界付近の偽礫の輪廓が比較的鮮明であったことから、層準６－４として細分した。下部に混在する大礫は長軸方向の配向は鉛直方向を示すが、最上部の大礫は水平方向をなしている。また、この大礫直上２㎝程度は間隙・孔隙が多く、やや暗色を呈している。Ｘ線写真では、中下部は層準６－３と類似するコントラストをなし、明色を呈するが最上部はやや暗色を呈する。

層準６－５は、褐色を呈する大礫、中礫、土器片、泥混じりの細粒～極粗粒砂からなる。輪廓不鮮明な偽礫からなるようにみえる。土器片や礫の配向は不規則である。Ｘ線写真は明色を呈する。明色部分のコントラストは一様でなく、著しく明色を呈する部分が確認される。写真右側の土器片は偽礫堆積物中に挟在していることが確認される。

以上、層準６は現生および後世の植生による擾乱の影響を強く受け、初生の構造が変化しているため、特定はできないものの、その影響の少ない部分の構造から人為的営力による盛土堆積物の可能性が高いと推定される。本来は基質支持の不明瞭な輪廓の偽礫からなる。偽礫の硬度や耐水性が低いことにより、運搬中や堆積後に変形、崩壊していると考えられる。また、圧密のため偽礫どうしが癒着、変形し、接しているとみられる。これら偽礫は掘削して生産された土塊に由来すると考えられる。近傍の生産地点が想定されるが、遠隔地から選択的に運搬されている可能性もある。また、層準６－２上部および層準６－４最上部については、今回の試料を見る限り、短期間にせよ土壌生成が進行する期間を挟在している可能性があり、そうだとすると、各層準の上位層準形成期までに多少の休止期が存在したことになる。この点については、発掘調査時の所見を踏まえて再評価する必要がある。

（５）ま　と　め

上述の層相観察結果に基づいて、調査地点の堆積環境の変化を整理すると、次のようになる。

・層準１形成期

雨水の影響による地表流などにより土砂の堆積が進行した後、植生に覆われるようになり、土壌生成が進行するようになる。この間も間欠的な土砂流出はあるものの、基本的には静穏化している。この背景としては斜面地の植生が再生し、表層物質の移動が起こり難くなったなどの可能性がある。

・層準２・３形成期

斜面上方より崩落した巨礫の堆積後、調査地点は、何らかの原因によって、調査地点の水位が上昇していた可能性もあり、土壌生成が進行する堆積場に変化する。

・層準４形成期

再び流出土砂の堆積後、土壌生成が進行する堆積場に変化する。この土砂流出の背景には人間活動が関係している可能性があり、谷内でも人間活動がみられるようになった可能性がある。

・層準５形成期

人為的営力で形成された盛土堆積物の形成期、あるいは、そのような成因の堆積物が重力移動し堆積する時期である。いずれの可能性に起因するかは発掘調査時の調査成果を踏まえた評価が必要である。

・層準６形成期

現生植物の根などにより著しく擾乱されているため、特定には至らないが、擾乱の影響の少ない部分の構造から、人為的営力による盛土堆積物の可能性が高い。そうだとすると、調査地点が位置する周辺の土地利用とともに検討する必要がある。

（6）今 後 の 課 題

調査地点の堆積物は、堆積物と土壌からなる。堆積物は単純には「層（地層）」をなして下から上に累重するが、土壌は性質の異なる「土壌層位」をつくって、上から下に形成される。そのため、堆積物と土壌は性質の異なる層序（岩相層序、土壌層序）をなす。層序区分は、このほか年代層序、生層序、文化層序がある。文化層序についてStein（1987）は遺物・遺構を生物化石と同等に扱い、特定の文化的・編年的特徴をもつ遺物・遺構の組成を含む垂直範囲を「ethnozone」と呼んでおり、訳語として遺物・遺構帯（松田，1996）が利用されている。今回の調査では岩相層序・土壌層序に関する検討を行ったが、年代層序や文化層序との複合的検討はできておらず、今後の課題とされる。また、上記の検討結果は、試料観察範囲内での記載であり、調査地点が位置する斜面堆積物の累重状況を踏まえた再評価も必要である。

遺跡における、人間活動を反映する遺物、遺構、自然遺物の三次元空間的配置は、埋没前、埋没中、埋没後の物理的・化学的・生物的な擾乱等により再配置することが知られている（松田ほか（訳），2012）。今回の堆積物は、試料最下部まで現在および埋没後の植生や動物による擾乱の影響が及んでおり、堆積後作用の影響を強く受けている。木村（2015）が指摘しているように、本来の堆積状況が生物擾乱により著しく乱れてしまうことは多々あり、当時の状態を復元する方法の検討も必要であり、出土遺物のタフォノミーの検討においても重要な課題である。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

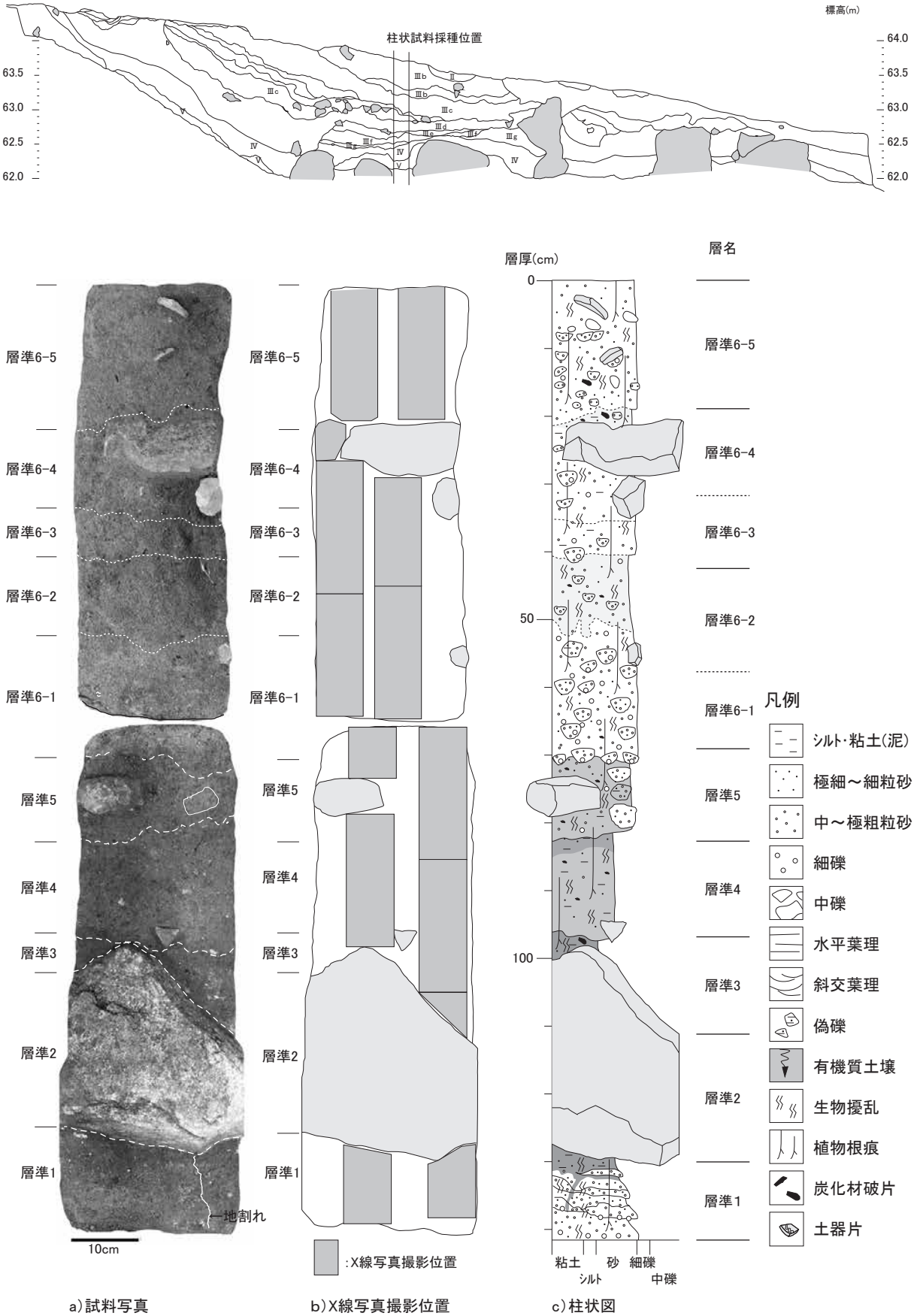
波田野隆介　1997　土壌の物理性.「最新土壌学」，久馬一剛編，朝倉書店，96-118.

木村淳一　2015　考古資料における擾乱作用の一試論．青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要第 20 号，17-26

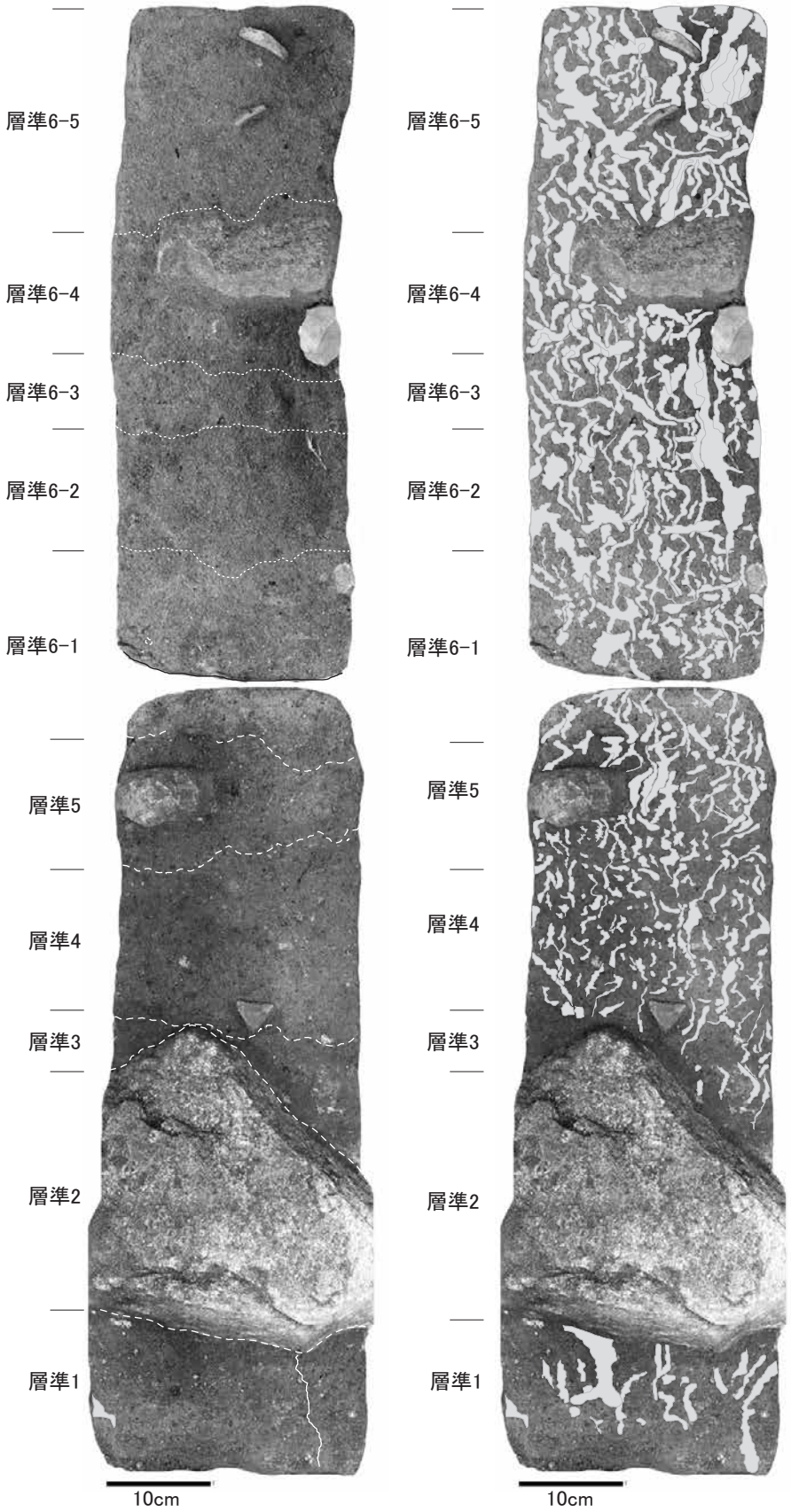
松田順一郎　1996　「北島遺跡の耕作地と古環境―寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書―」，（財）東大阪市文化財協会，157p.

Stein,J.K.　1987　Deposits for Archaeologists.In Schiffer,M.B.（ed.）Advances in Archaeological Method and Theory，AcademicPress,337-395.

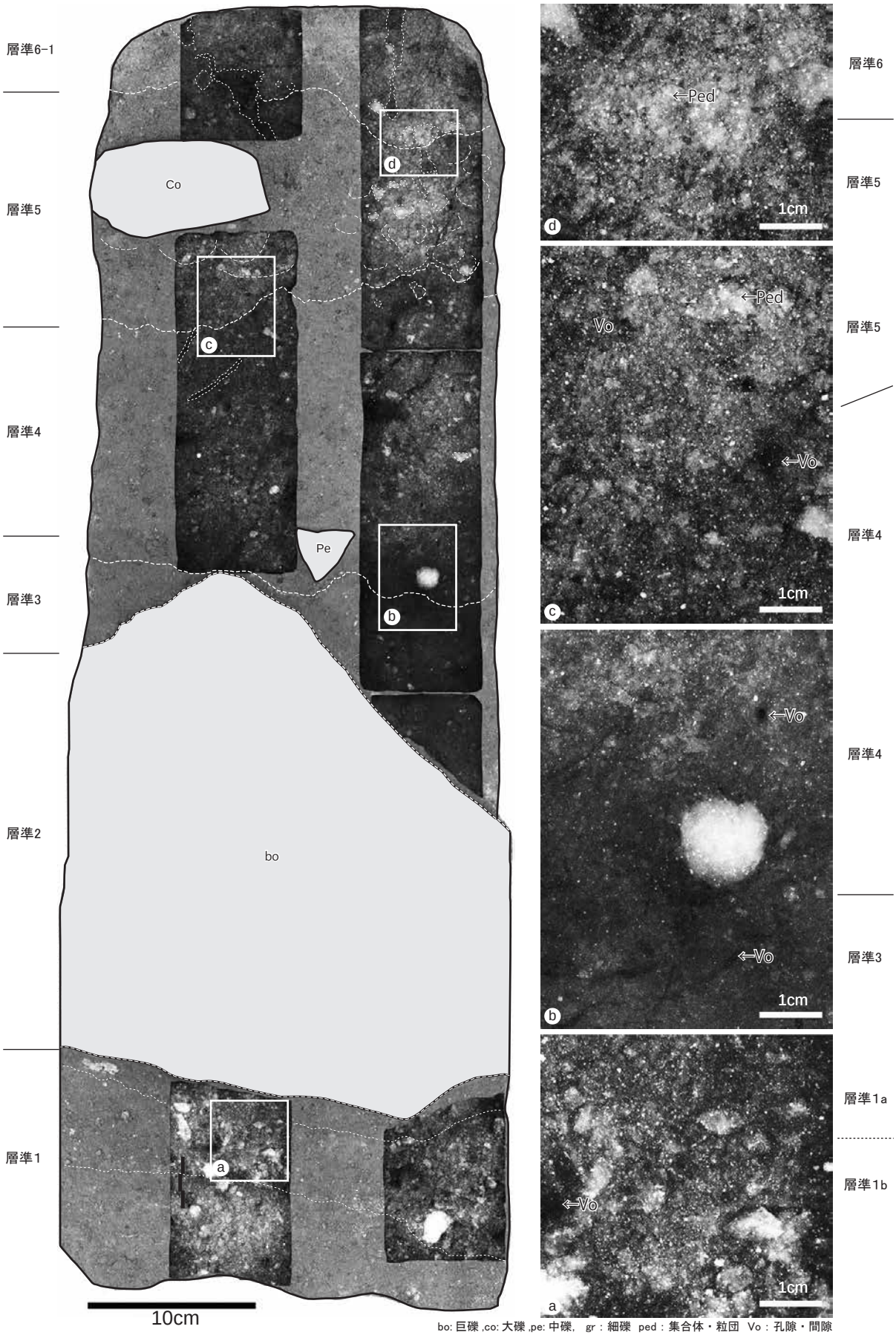
Waters，M. R.，　1992　Principles of Geoarchaeology: A North American Perspective: Tucson，University of Arizona Press，398 p.（松田順一郎・高倉純・出穂雅実・別所秀高・中沢祐一訳，2012，ジオアーケオロジー：地学にもとづく考古学．朝倉書店，326p.）



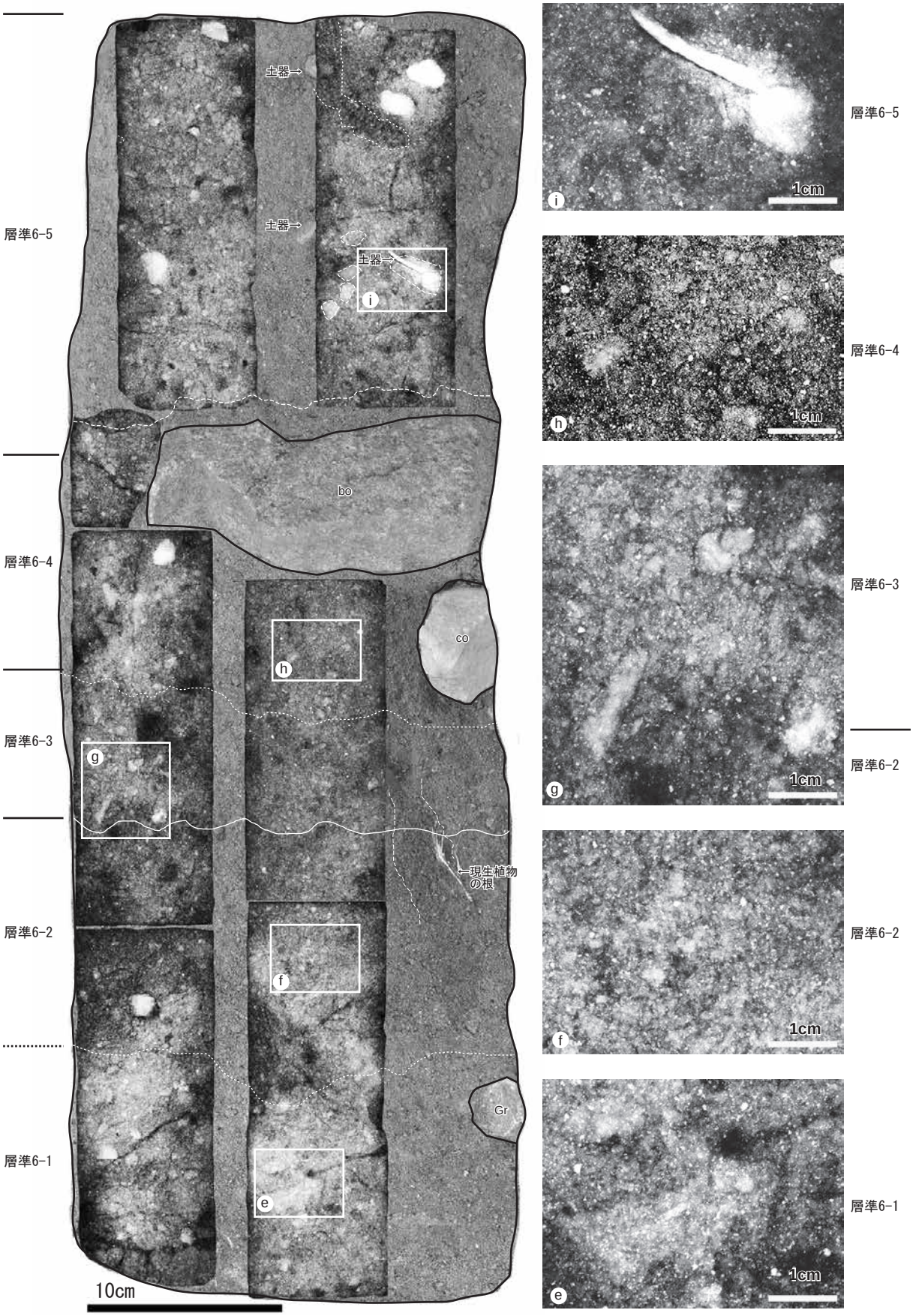
第 57 図　調査地点および試料採取位置



第 58 図　試料断面の主な孔隙・間隙



第 59 図　試料および X 線写真（1）



bo：巨礫，co：大礫，pe：中礫，gr：細礫　ped：集合体・粒団　Vo：孔隙・間隙

第 60 図　試料および X 線写真（２）

10　高根遺跡出土鉄滓等遺物化学分析

（1）は　じ　め　に

高根遺跡は岩手県宮古市山口第 11 地割 71 ほかに所在する。発掘調査区からは古代の製鉄炉２基が検出された。そこで、当遺跡での製鉄技術等の鉄生産の様相を検討する目的で、出土した製鉄関連遺物の調査をすることとなった。

（2）試 料 と 方 法

試料

出土製鉄関連遺物 12 点について調査を行った。分析試料の詳細と調査項目を第 18 表に示す。便宜上、試料に TKN-１～12 の符合を付した。

第 18 表　供試材の履歴と調査項目

符合	遺跡名	出土地点	遺物名称	時期	計測値		金属探知器反応	外観写真撮影	化学成分分析	顕微鏡組織観察	X線回折測定	備考
					大きさ（㎜）	重量（g）						
TKN-１	高根	包含層２　IA12r	鉄塊系遺物	古代	57.4×42.4×25.5	97.8	L（●）	○	○	○	○	
TKN-２		SI4･5(ⅠA11m)周辺 製鉄炉周辺	含鉄鉄滓		84.1×50.2×47.8	132.6	L（●）	○	○	○	○	
TKN-３		SI67　床面直上	鉄塊系遺物		51.7×47.8×32.0	90.7	L（●）	○	○	○	○	
TKN-４		SL4　地下構造	流動滓		95.4×49.8×39.3	109.3	なし	○	○	○	○	
TKN-５		SI67　床面直上	炉内滓		54.6×41.2×28.2	62.2	なし	○	○	○	○	
TKN-６		SL4　地下構造	炉壁（含鉄）		80.7×69.9×17.8	60.2	銹化(△)	○	○	○	○	
TKN-７		SL4　地下構造	流動滓		54.0×50.8×30.7	112.7	なし	○	○	○	○	
TKN-８		SI67　床面直上	流動滓		144.6×83.2×47.2	730.0	なし	○	○	○	○	
TKN-９		包含層３ ３イグリッドⅡ層中	炉壁		145.7×104.8×68.0	455.9	なし	○	○	○	○	
TKN-10		包含層２ ５イⅢａ～Ⅲｂ層	炉壁		73.8×50.2×26.0	55.8	なし	○	○	○	○	
TKN-11		表土	炉壁		59.2×41.2×27.6	37.9	なし	○	○	○	○	
TKN-12		SL4･5(ⅠA11m)周辺 製鉄炉周辺	鉄塊系遺物		44.2×35.2×26.7	24.6	L（●）	○	○	○	○	

調査項目

①肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

②顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定して切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３㎛と１㎛で鏡面研磨した。観察には反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の組織観察には腐食に３％ナイタール（硝酸アルコール液）を用いた。

③Ｘ線回折測定

試料を粉末化してＸ線を照射し回折パターンを実測した。さらに既知物質の回折パターンと比較することにより、結晶相を同定した。

④化学成分分析

出土鉄滓の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法 ―誘導結合プラズマ発光分光分析

（3）調　査　結　果

TKN－1：鉄塊系遺物

①肉眼観察：やや偏平な椀状の鉄塊系遺物（97.8 g）である。表面は全体が黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆に覆われる。上面には一部暗灰色の滓が観察されるが、広い範囲で金属探知器反応(注1)があり、内部にまとまった金属鉄が存在すると推測される。

②顕微鏡組織：第61図①～③に示す。暗灰色は製錬滓である。淡褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。明白色～淡褐色部は金属鉄である。鉄中の炭素含有率は部位によるばらつきが大きい。①の左側はやや炭素量の低い亜共析組織（C＜0.77％）であった。②の上側はその拡大である。層状部分はパーライト（Pearlite）、白色部はフェライト（Ferrite：α鉄）で、中央には粒状または不定形の燐化鉄共晶（α＋Fe_3P）が確認された。これに対して、①右側は中央の褐色部分は共析～過共析組織（C≧0.77％）、上下の白色部は亜共晶組成白鋳鉄組織（C＜4.26％）であった。③の左上はほぼ層状のパーライトの共析組織、右下は蜂の巣状のレデブライト（Ledebulite）が晶出する亜共晶組成白鋳鉄組織の拡大である。

③X線回折測定：第62図上段に示す。滓部の主要鉱物は、マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）であった。砂鉄（含チタン鉄鉱(注2)）を原料とする製錬滓によくみられるウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった〔後述する製錬滓のチタン含有率（TiO_2：2.87～4.87％）をみると、マグネタイトにはチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性は考えられる〕。さらにゲーサイト〔Goethite：α－FeO(OH)〕、レピドクロサイト〔Lepidocrocite：γ－FeO(OH)〕、アカガネイト〔Akaganeite：β－FeO(OH)〕などの水酸化鉄、および金属鉄（Iron：Fe）も強い回折強度を示している。

④化学組成分析：第19表に示す。金属鉄部を供試材とした。炭素（C）は2.2％、燐（P）は0.20％、硫黄（S）0.013％であった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源のチタン（Ti）は0.10％、バナジウム（V）0.06％であった。

当遺物は表面に低チタン砂鉄製錬滓が付着しているが、比較的まとまりのよい鉄塊（製錬鉄塊系遺物であった。また化学分析の結果をみると、炭素量は鋳鉄（C＞2.1％）の範囲内であるが、鉄中の炭素含有率は部位によるばらつきが大きく、亜共析組織から亜共晶組成白鋳鉄組織が確認された。

TKN－2：含鉄鉄滓

①肉眼観察：製鉄炉の周辺から出土した含鉄鉄滓（132.6 g）である。黄褐色の土砂または茶褐色の鉄錆で覆われた金属探知器反応が強い部分と黒色ガラス質滓（炉壁粘土の溶融物）部分とが混在する。

②顕微鏡組織：第61図④～⑥に示す。④⑤の上側の暗灰色部はガラス質滓である。滓中の微細な淡褐色多角形結晶はマグネタイト、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄

鉱と推測される。また、明白～淡褐色は金属鉄である。ガラス質滓と接触する部分はやや炭素含有率が低く、亜共析組織を呈する。⑤の下側はその拡大である。一方⑥は過共析組織～ねずみ鋳鉄組織部分の拡大である。内部には微細な粒状のステダイト（Steadite:Fe－Fe_3C－Fe_3P）も点在する。

③Ｘ線回折測定結果：第62図下段に示す。滓部の主要鉱物は、マグネタイト（Magnetite：FeO・Fe_2O_3）、ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。マグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる〕。また石英（Quartz：SiO_2）、灰長石〔Anorthite：$CaAl_2Si_2O_8$〕が確認された。これらの無色鉱物は、炉材粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）によるものと考えられる。さらにゲーサイト〔Goethite：α－FeO(OH)〕、レピドクロサイト〔Lepidocrocite：γ－FeO(OH)〕などの水酸化鉄、および金属鉄（Iron：Fe）も強い回折強度を示している。

④化学組成分析：第19表に示す。全鉄分（Total Fe）54.24％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は11.23％、酸化第１鉄（FeO）21.40％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）39.51％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）26.59％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は4.22％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は2.12％、バナジウム（Ｖ）が0.21％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.22％、銅（Cu）は＜0.01％と低値であった。

当遺物は滓中にチタニアを少量（TiO_2：2.12％）含むことから、低チタン砂鉄を製鉄原料とした含鉄鉄滓と推定される。顕微鏡観察した範囲では、滓部はガラス質であったため、炉壁内面に近い位置で生成した可能性が考えられる。また金属鉄部の炭素含有率は部位によるばらつきが大きく、亜共析組織～ねずみ鋳鉄組織が確認された。

TKN－３：鉄塊系遺物

①肉眼観察：塊状の鉄塊系遺物（90.7ｇ）である。表面は全体が黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆に覆われる。土砂中には微細な木炭破片が複数混在する。広い範囲で金属探知器反応があり、鉄主体の遺物と推定される。

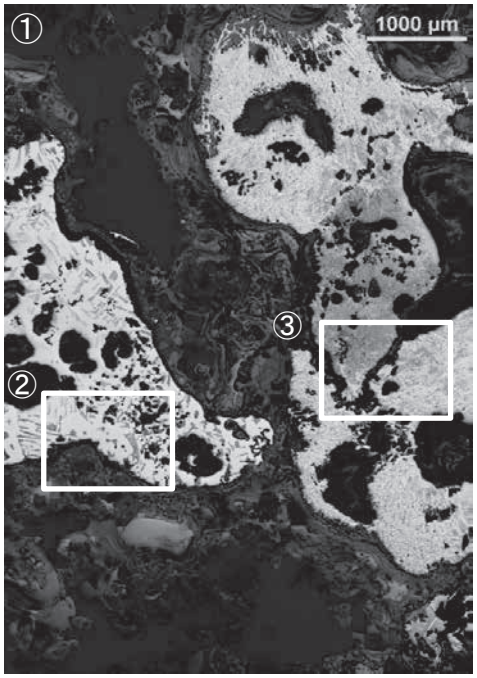
②顕微鏡組織：第63図①～③に示す。①の表層に薄く付着する暗灰色部は製錬滓である。滓中の微細な淡褐色多角形結晶はマグネタイト、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。また、明白色～淡褐色部は金属鉄である。鉄中の炭素含有率は部位によるばらつきが大きい。②は炭素量の高い過共析組織～亜共晶組成白鋳鉄組織、③はやや炭素量の低い亜共析組織～共析組織部分の拡大である。

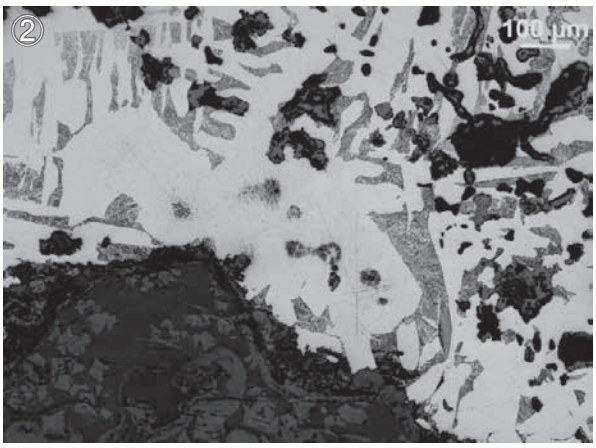
③Ｘ線回折測定結果：第64図上段に示す。滓部の主要鉱物は、マグネタイト（Magnetite：FeO・Fe_2O_3）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。マグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる〕。さらにゲーサイト〔Goethite：α－FeO(OH)〕、レピドクロサイト〔Lepidocrocite：γ－FeO(OH)〕などの水酸化鉄、および金属鉄（Iron：Fe）も強い回折強度を示している。

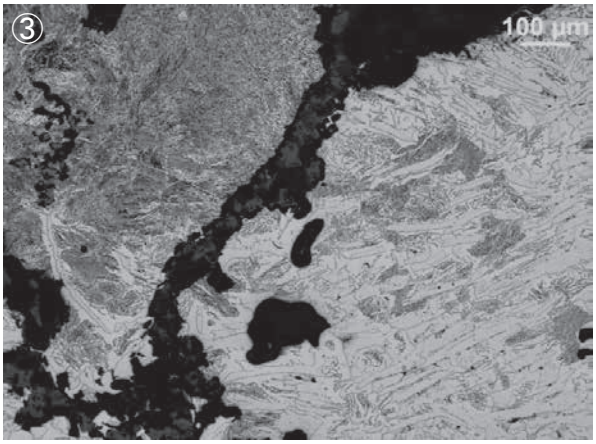
④化学組成分析:第19表に示す。金属鉄部を供試材とした。炭素（Ｃ）は1.2％、燐（Ｐ）は0.16％、硫黄（Ｓ）が0.018％であった。また、製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源のチタン（Ti）は0.04％、バナジウム（Ｖ）0.03％であった。

当遺物は表面に低チタン砂鉄製錬滓が付着しているが、比較的まとまりのよい鉄塊（製錬鉄塊系遺物）であった。炭素量はTKN－１よりもやや低く（Ｃ：1.2％）、高炭素鋼の範疇に入る。ただし断面

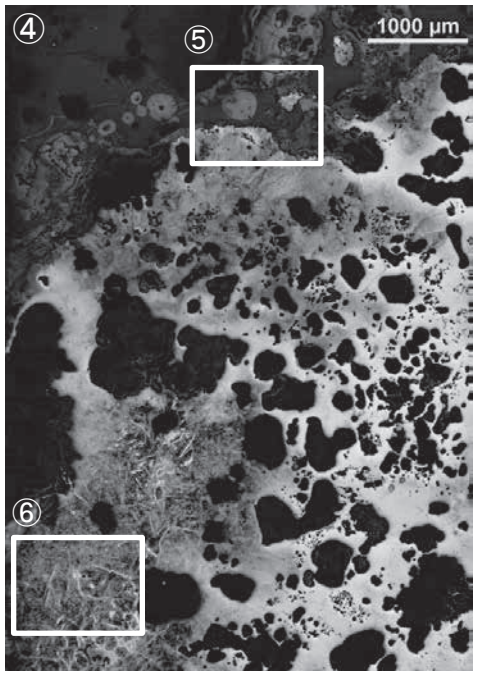
TKN-1 鉄塊系遺物
①～③金属鉄部：亜共析組織～亜共晶組成白鋳鉄組織、滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱）

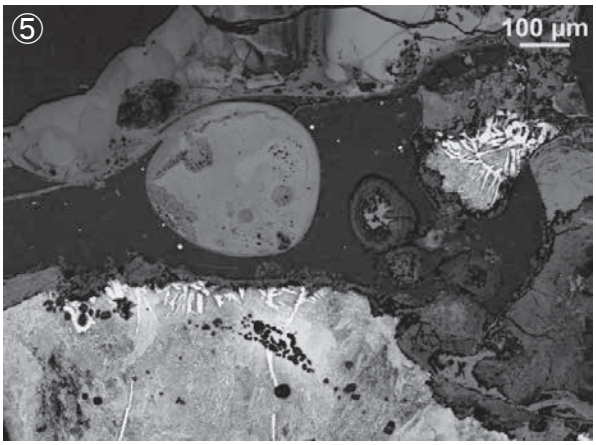


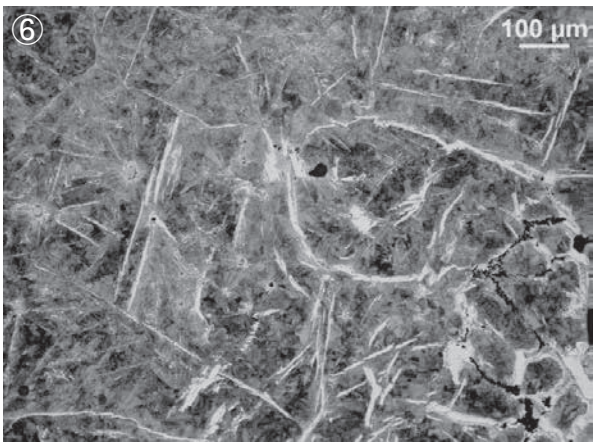




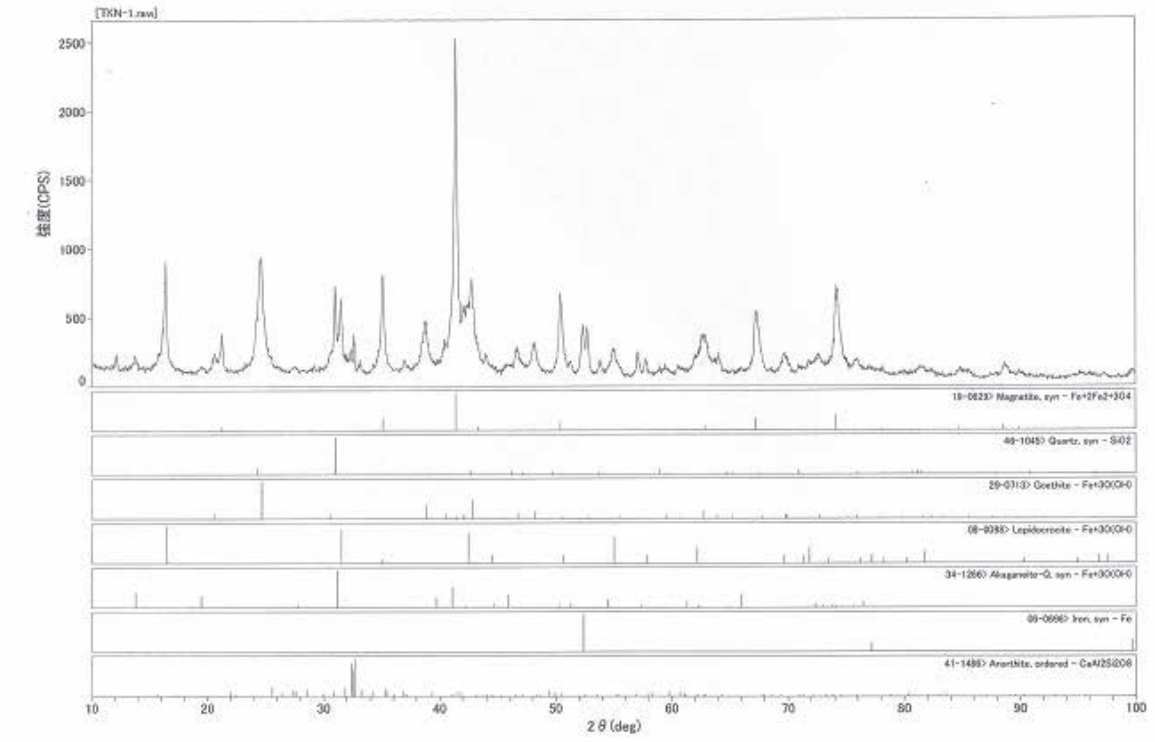
TKN-2 含鉄鉄滓
④～⑥滓部：ガラス質滓（マグネタイトまたはチタン磁鉄鉱）、金属鉄部：亜共析組織～ねずみ鋳鉄

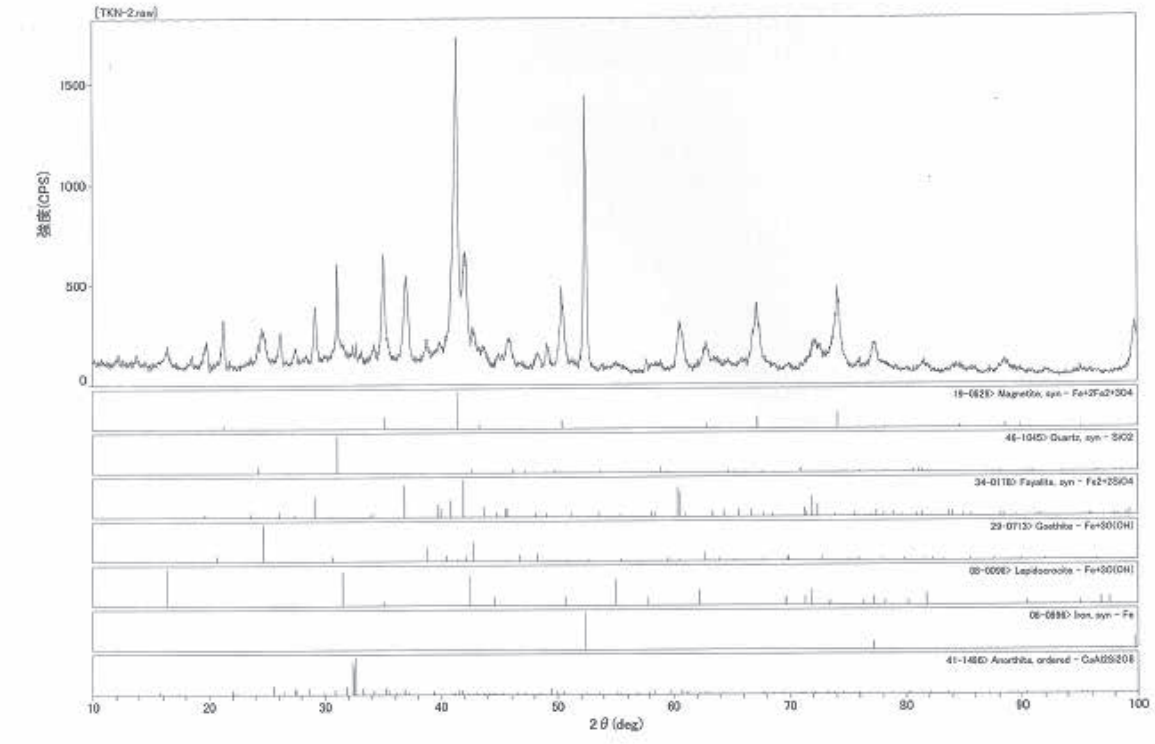






第 61 図　鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の顕微鏡組織





第 62 図　Ｘ線回折結果（TKN－１、TKN－２）

第 19 表　供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土地点	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	ヴァナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
TKN-2	高根	SL4・5（ⅠA11m）周辺　製鉄炉周辺	含鉄鉄滓	古代	54.24	11.23	21.40	39.51	15.44	5.26	1.81	2.41	1.22	0.45	0.22	2.12	0.10	0.005	0.46	0.49	0.21	＜0.01	0.09	26.59	0.490	0.039
TKN-4		SL4　地下構造	流動滓		36.67	0.23	40.96	7.79	25.03	7.69	4.35	3.93	0.90	0.46	0.64	4.87	0.17	0.019	0.48	0.22	0.50	＜0.01	0.23	42.36	1.155	0.133
TKN-5		SI67　床面直上	炉内滓		34.15	0.31	40.64	4.36	29.26	9.68	3.83	3.24	1.00	0.59	0.51	3.86	0.15	0.018	0.42	0.14	0.40	＜0.01	0.20	47.60	1.394	0.113
TKN-6		SL4　地下構造	炉壁(含鉄)		27.94	0.38	29.36	7.71	34.78	11.02	3.68	3.03	1.50	0.96	0.44	3.33	0.11	0.023	0.48	0.19	0.30	＜0.01	0.21	54.97	1.967	0.119
TKN-7		SL4　地下構造	流動滓		40.76	0.37	47.81	5.96	24.13	7.25	3.81	3.36	1.05	0.54	0.51	3.79	0.17	0.029	0.50	0.02	0.38	＜0.01	0.14	40.14	0.985	0.093
TKN-8		SI67　床面直上	流動滓		41.16	0.12	49.40	5.15	25.85	7.72	3.30	2.79	0.86	0.62	0.38	2.87	0.13	0.016	0.43	0.04	0.30	0.01	0.10	41.14	1.000	0.070
TKN-9		包含層３　３イⅡ層中	炉壁		5.24	0.07	2.44	4.85	58.39	22.11	2.15	2.60	2.02	1.81	0.08	0.98	0.07	0.005	0.22	0.47	0.04	＜0.01	0.04	89.08	17.000	0.187
TKN-10		包含層２　５イⅢａ～Ⅲｂ層	炉壁		15.58	0.24	10.70	10.55	46.68	17.36	3.00	2.58	2.15	1.21	0.24	1.69	0.12	0.024	0.39	0.32	0.10	＜0.01	0.08	72.98	4.684	0.108
TKN-11		表土	炉壁		14.78	0.28	12.26	7.59	47.82	17.28	3.38	2.94	2.52	1.48	0.22	1.65	0.14	0.014	0.33	0.29	0.08	＜0.01	0.10	75.42	5.103	0.112
TKN-12		SL4・5（ⅠA11m）周辺　製鉄炉周辺	鉄塊系遺物		22.26	1.48	13.49	15.46	33.00	12.11	5.15	3.87	3.36	0.97	0.60	4.61	0.18	0.077	0.39	0.34	0.43	＜0.01	0.33	58.46	2.626	0.207

符号	遺跡名	出土地点	遺物名称	推定年代	炭素 (C)	珪素 (Si)	マンガン (Mn)	燐 (P)	硫黄 (S)	銅 (Cu)	ニッケル (Ni)	コバルト (Co)	アルミニウム (Al)	バナジウム (V)	チタン (Ti)	クロム (Cr)	モリブデン (Mo)
TKN-1	高根	包含層２　IA12r	鉄塊系遺物	古代	2.2	0.11	＜0.01	0.20	0.013	＜0.01	＜0.01	＜0.01	0.10	0.06	0.10	0.02	＜0.01
TKN-3		S167　床面直上	鉄塊系遺物		1.2	0.08	＜0.01	0.16	0.018	＜0.01	＜0.01	＜0.01	0.05	0.03	0.04	0.01	＜0.01

第 20 表　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称（調査結果）	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
TKN-1	高根	包含層２　IA12r	鉄塊系遺物	古代	滓部：M、 金属鉄部：亜共析組織～亜共晶組成白鋳鉄組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：低チタン砂鉄）、炭素量は部位によるばらつきが大きい（C：0.3～2%強）
TKN-2		SL4・5（ⅠA11m）周辺　製鉄炉周辺	含鉄鉄滓		滓部：ガラス質滓、微細M、 金属鉄部：亜共析組織～ねずみ鋳鉄組織	54.24	39.51	4.22	2.12	0.21	0.22	26.59	＜0.01	滓部：製錬滓（原料：低チタン砂鉄）、金属鉄部の炭素含有量は部位によるばらつきが大きい（C：0.6～2%強）
TKN-3		SI67　床面直上	鉄塊系遺物		滓部：M、 金属鉄部：亜共析組織～亜共晶組成白鋳鉄組織	－	－	－	－	－	－	－	－	製錬鉄塊系遺物（原料：低チタン砂鉄）、炭素量は部位によるばらつきが大きい（C：0.7～2%強）
TKN-4		SL4　地下構造	流動滓		滓部：M＋F、 微小金属鉄粒：亜共析組織	36.67	7.79	8.28	4.87	0.50	0.64	42.36	＜0.01	製錬滓（原料：低チタン砂鉄）
TKN-5		SI67　床面直上	炉内滓		滓部：M＋F、被熱砂鉄、 錆化鉄粒：過共析組織痕跡	34.15	4.36	7.07	3.86	0.40	0.51	47.60	＜0.01	製錬滓（原料：低チタン砂鉄）
TKN-6		SL4　地下構造	炉壁（含鉄）		錆化鉄部：亜共析組織～過共析組織痕跡、 滓部：M＋F、ガラス質滓（石英・長石混在）	27.94	7.71	6.71	3.33	0.30	0.44	54.97	＜0.01	製鉄炉の炉壁内面表層の剥離片の可能性が高い（原料：低チタン砂鉄）
TKN-7		SL4　地下構造	流動滓		滓部：M＋F、 微小金属鉄粒：フェライト単相	40.76	5.96	7.17	3.79	0.38	0.51	40.14	＜0.01	製錬滓（原料：低チタン砂鉄）
TKN-8		SI67　床面直上	流動滓		滓部：M＋F、被熱砂鉄、 微小金属鉄粒：亜共析組織～共析組織	41.16	5.15	6.09	2.87	0.30	0.38	41.14	0.01	製錬滓（原料：低チタン砂鉄）
TKN-9		包含層３ ３いグリッドⅡ層中	炉壁		滓部：ガラス質滓、一部F、被熱砂鉄、 微小金属鉄粒・錆化鉄	5.24	4.85	4.75	0.98	0.04	0.08	89.08	＜0.01	砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片
TKN-10		包含層２ ５イⅢａ～Ⅲｂ層	炉壁		滓部：ガラス質滓（石英・長石混在）、被熱砂鉄、 微小金属鉄粒・錆化鉄	15.58	10.55	5.58	1.69	0.10	0.24	72.98	＜0.01	砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片
TKN-11		表土	炉壁		滓部：ガラス質滓（石英・長石混在）、被熱砂鉄、 微小金属鉄粒	14.78	7.59	6.32	1.65	0.08	0.22	75.42	＜0.01	砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片
TKN-12		SL4・5（ⅠA11m）周辺　製鉄炉周辺	鉄塊系遺物		滓部：Ⅰ，金属鉄部：過共析組織	22.26	15.46	9.02	4.61	0.43	0.60	58.46	＜0.01	製錬鉄塊系遺物（原料：砂鉄）、金属鉄部：高炭素鋼（C：1.5%前後）

M：Magnetite（$FeO \cdot Fe_2O_3$）、F：Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、Ⅰ：Ilmenite（$FeO \cdot TiO_2$）

の金属組織をみると、部位によるばらつきが非常に大きく、亜共晶組成白鋳鉄組織部分も確認されている。

TKN-４：流動滓

①肉眼観察：細長い小形の流動滓（109.3 ｇ）である。滓の地の色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。上面は比較的平滑な箇所と、木炭痕などによる不規則な凹凸のある箇所がある。側面から下面にかけては細かい凹凸が目立つ、また、淡褐色の炉壁粘土が薄く付着する。

②顕微鏡組織：第63図④～⑥に示す。淡褐色樹枝状結晶はマグネタイト、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。淡灰色柱状結晶はファヤライトである。また、滓中の微細な明白色粒は金属鉄で、亜共析組織が確認された。

③Ｘ線回折測定結果：第64図下段に示す。主要鉱物は、マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。マグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる〕。また金属鉄（Iron：Fe）も強い回折強度を示している。

④化学組成分析：第19表に示す。全鉄分（Total Fe）36.67％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.23％、酸化第１鉄（FeO）が40.96％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）7.79％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は42.36％と高く、塩基性成分（CaO＋MgO）も8.28％と高めであった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は4.87％、バナジウム（Ｖ）が0.50％であった。また、酸化マンガン（MnO）は0.64％、銅（Cu）＜は0.01％と低値であった。

当鉄滓は後述の被熱砂鉄を含む製錬滓（TKN-５、８）よりも、製鉄原料（含チタン鉄鉱）起源のチタニア（TiO_2）の割合が高い。また熱間での鍛打加工時の吹き減り（鉄素材の酸化に伴う損失）で生じる、発達したウスタイト結晶も確認されなかった。これらの特徴から、当鉄滓は砂鉄製錬滓と推定される。

TKN-５：炉内滓

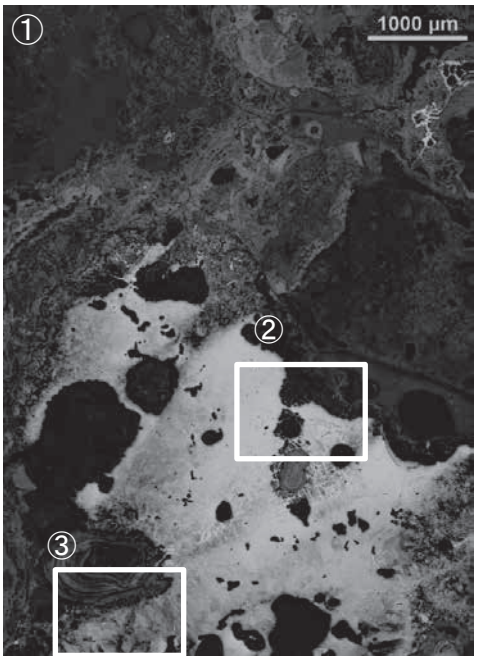
①肉眼観察：製錬滓（炉内滓）の小破片（62.2 ｇ）と推定される。色調は灰褐色で着磁性はごく弱い。下面の一部が本来の表面で、他は全面破面である。破面には細かい気孔が密にみられる。

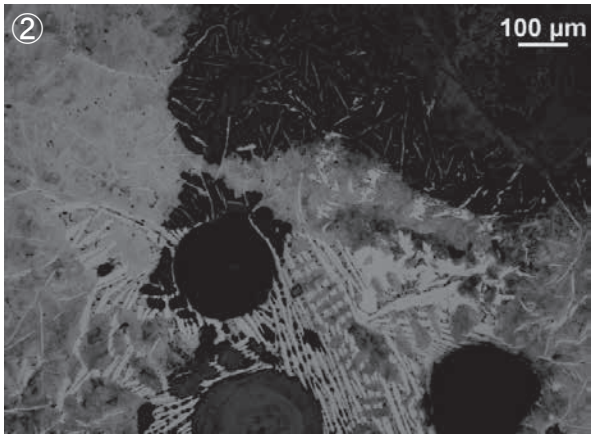
②顕微鏡組織：第65図①～③に示す。滓中の淡褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。淡灰色柱状結晶はファヤライトである。②中央の青灰色粒は錆化鉄で過共析組織の痕跡が残存する。素地は層状のパーライト、暗灰色部はセメンタイト（Cementite：Fe_3C）の痕跡である。また、③中央は熱影響を受けた砂鉄（含チタン鉄鉱）で、外周には微細なマグネタイトが晶出する。

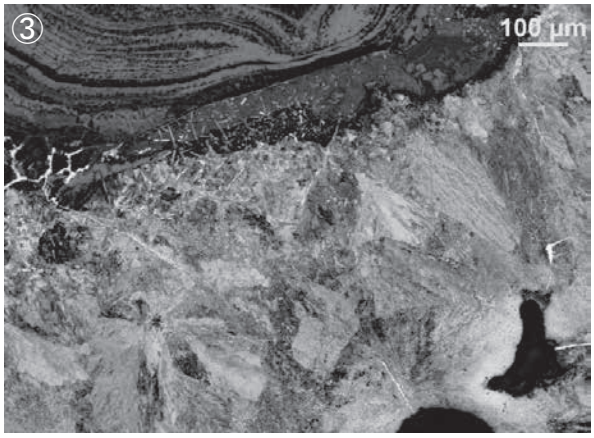
③Ｘ線回折測定結果：第66図上段に示す。主要鉱物はファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。マグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる〕。

④化学組成分析：第19表に示す。全鉄分（Total Fe）34.15％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.31％、酸化第１鉄（FeO）が40.64％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）4.36％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は47.60％と高く、塩基性成分（CaO＋MgO）7.07％と高めであった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は3.86％、バナジウム（Ｖ）

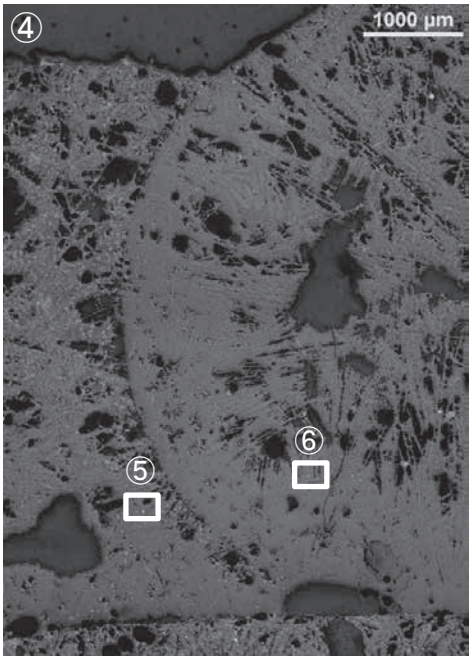
TKN-3 鉄塊系遺物
①～③金属鉄部：亜共析組織～亜共晶組成白鋳鉄組織、滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱）

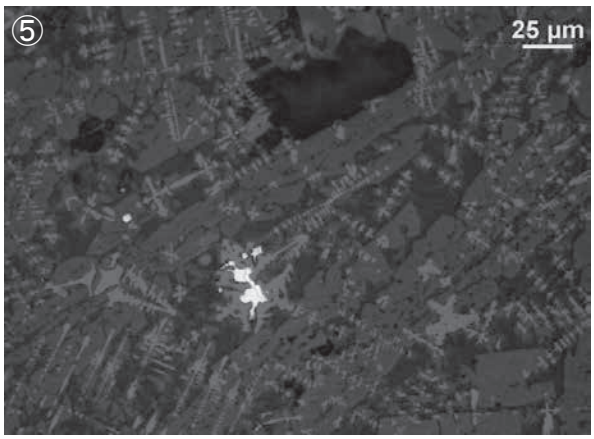


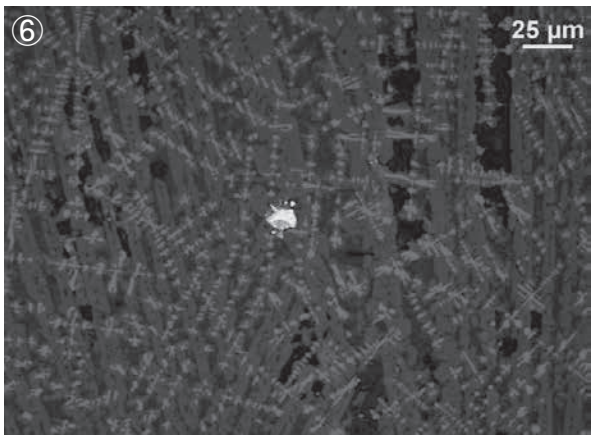




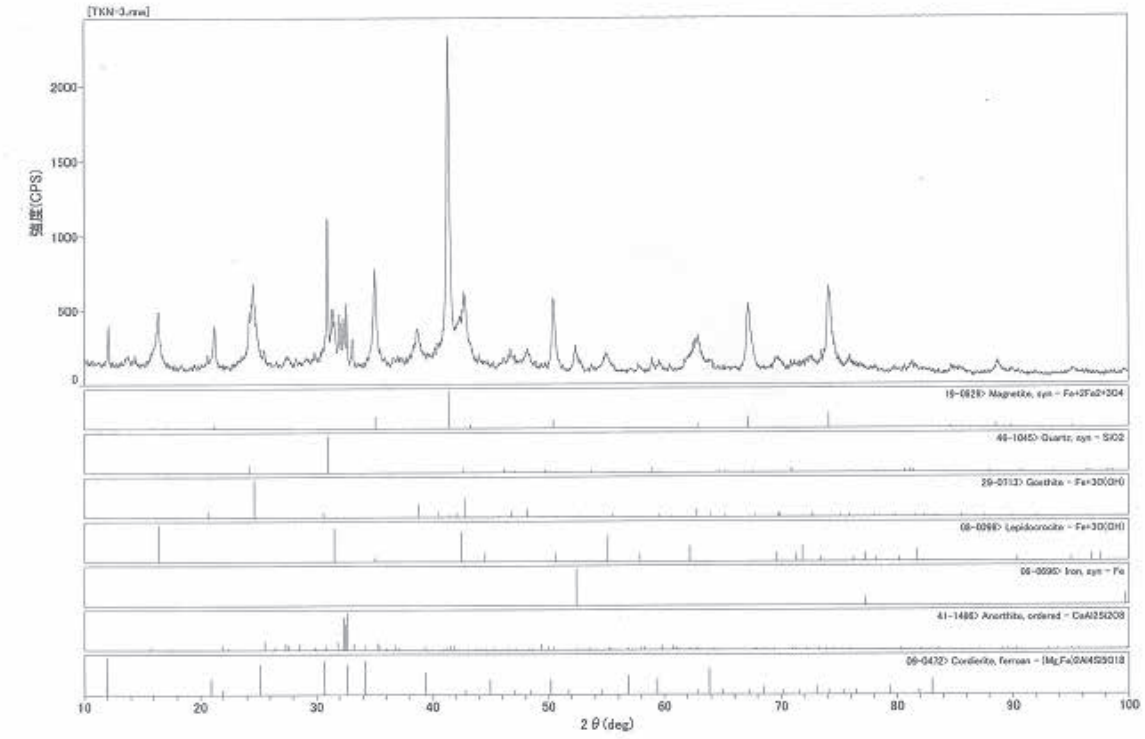
TKN-4 流動滓
④～⑥滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱）・ファヤライト、微小明白色粒：金属鉄、亜共析組織



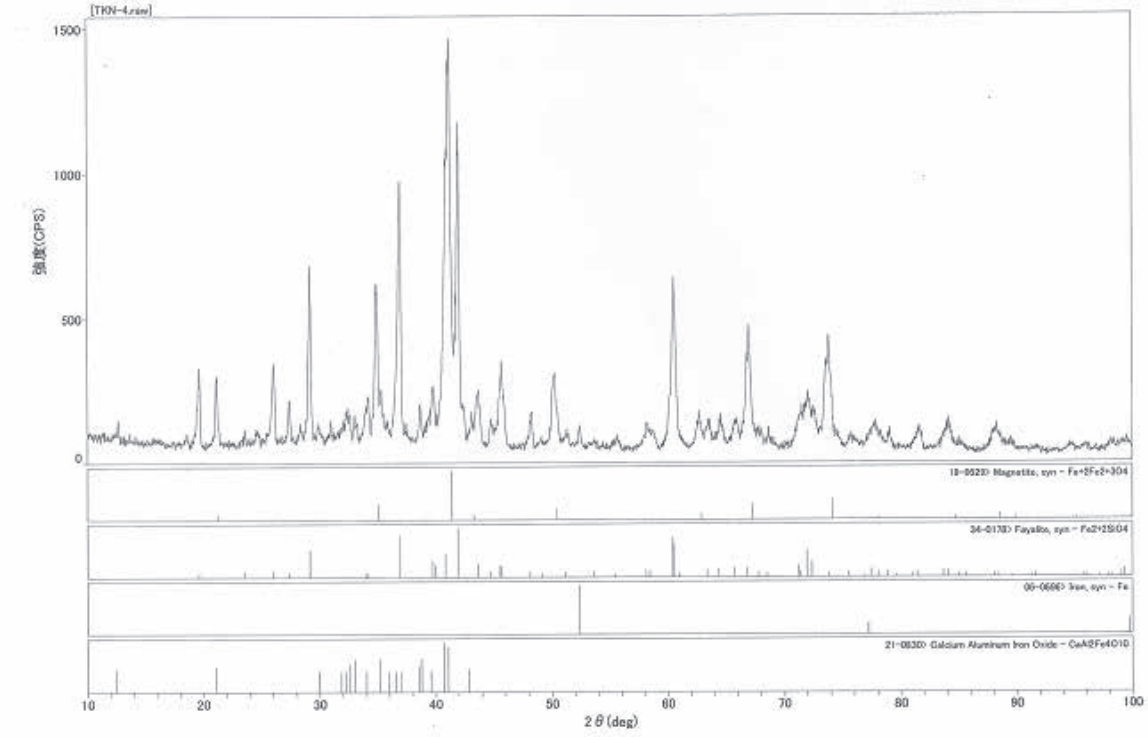




第 63 図　鉄塊系遺物・流動滓の顕微鏡組織



Nippon Steel & Sumikin Technology



Nippon Steel & Sumikin Technology

第 64 図　Ｘ線回折結果（TKN-３、TKN-４）

が 0.40％であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.51％、銅（Cu）は＜0.01％と低値であった。

当鉄滓も流動滓（TKN-４）と類似した鉱物・化学組成であった。また内部に非熱砂鉄が確認されたことから、低チタン砂鉄を原料とした製錬滓と推定される。

TKN-６：炉壁（含鉄）

①肉眼観察：非常に薄手の炉壁破片（60.2 ｇ）である。素地は灰褐色の被熱粘土と推定される。粘土中には石英、長石類などの微細な砂粒が多量に混和されている。また部分的に茶褐色の錆化鉄が点在する。着磁性が強い箇所もあるが金属探知器反応はなく、金属鉄は残存しない可能性が高いと考えられる。

②顕微鏡組織：第 65 図④～⑥に示す。④の上側の青灰色部は錆化鉄で、⑤はその拡大である。表層（右側）に亜共析組織、内部（左側）に過共析組織の痕跡が残存する。⑥は滓部の拡大である。淡褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。淡灰色柱状結晶はファヤライトである。一方、④の下側の暗灰色部はガラス質滓中の小礫である。これは炉壁粘土中に混和された真砂（花こう岩の風化砂）と推定される。

③Ｘ線回折測定結果：第 66 図下段に示す。滓部の主要鉱物はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）は回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった〔マグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる〕。また石英（Quartz：SiO_2）、灰長石〔Anorthite：$CaAl_2Si_2O_8$〕が確認された。これらの無色鉱物は、炉材粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）によるものと考えられる。

④化学組成分析：第 19 表に示す。全鉄分（Total Fe）27.94％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 0.38％、酸化第１鉄（FeO）が 29.36％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）7.71％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は 54.97％と高く、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は 6.71％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 3.33％､バナジウム（Ｖ）が 0.30％であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.44％、銅（Cu）＜ 0.01％であった。

当炉壁の内面に付着した滓の鉱物組成は、製錬滓（TKN-４、５）と共通しており、砂鉄製錬に用いられた炉壁内面の剥離片と推定される。また錆化鉄部には亜共析組織～過共析組織の痕跡が残存しており、鋼ができていたことも確認された。

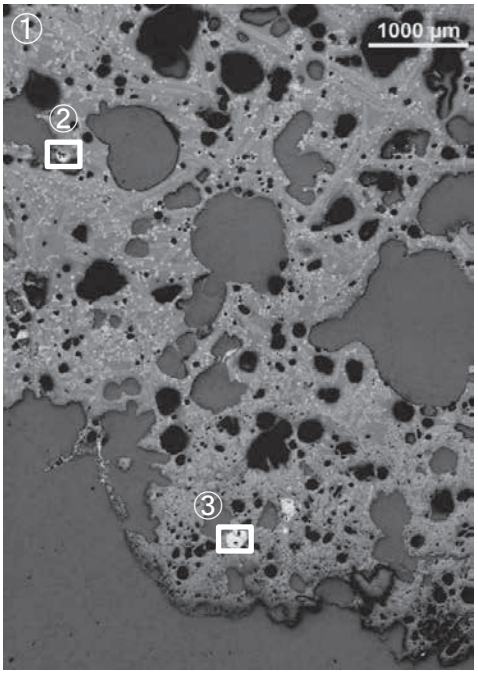
TKN-７：流動滓

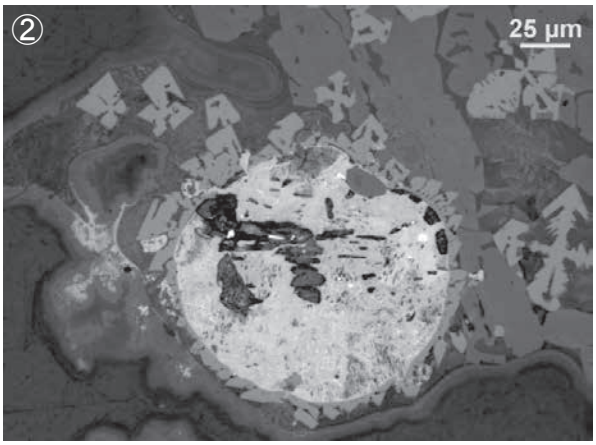
①肉眼観察：やや小形で不定形の流動滓の端部破片（112.7 ｇ）である。色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。上面は平滑で、僅かに皺状の凹凸がある。側面から下面にかけては細かい粉状の炉壁が付着する。側面１面は破面で、細かい気孔が多数点在するが緻密である。

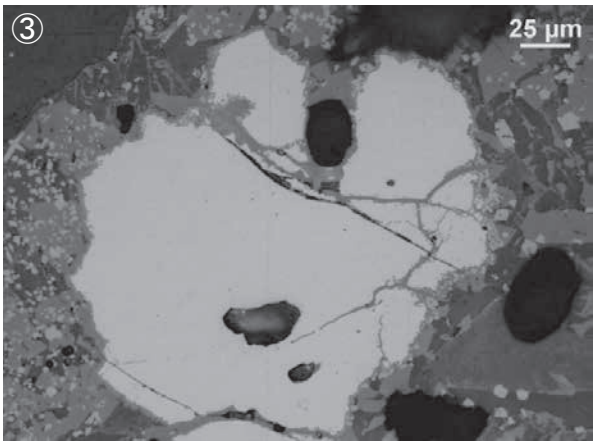
②顕微鏡組織：第 67 図①～③に示す。滓中の淡褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。淡灰色柱状結晶はファヤライトである。②の滓中に点在する微細な明白色部は金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。また③の灰褐色粒は被熱砂鉄である。

③Ｘ線回折測定結果：第 68 図上段に示す。主要鉱物はマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）は回折

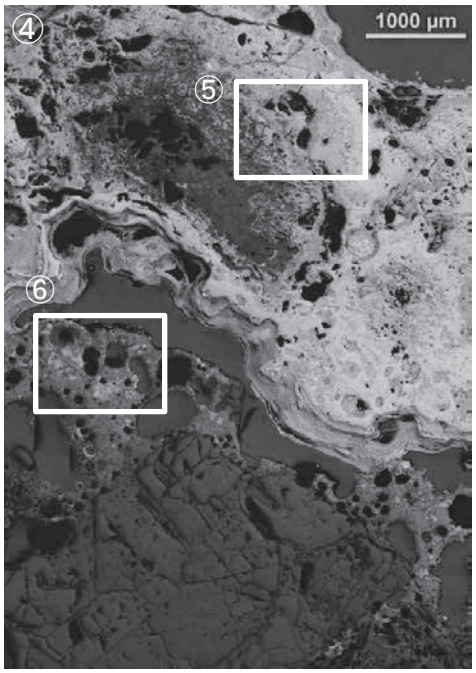
TKN-5 炉内滓
①滓部:マグネタイト(またはチタン磁鉄鉱)・ファヤライト、②中央：錆化鉄、過共析組織痕跡、③中央：被熱砂鉄

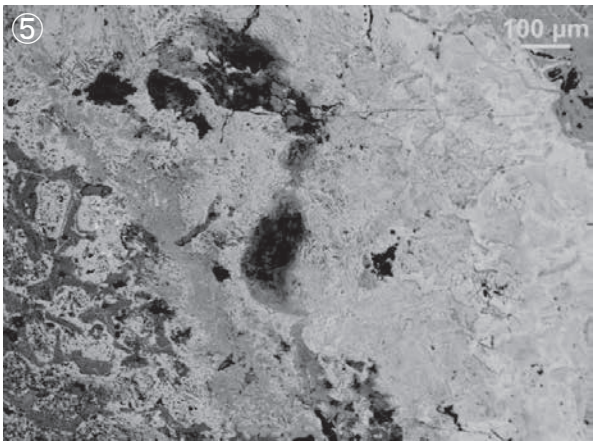


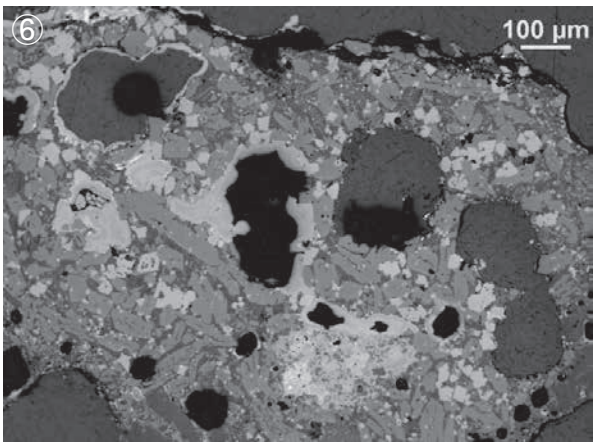




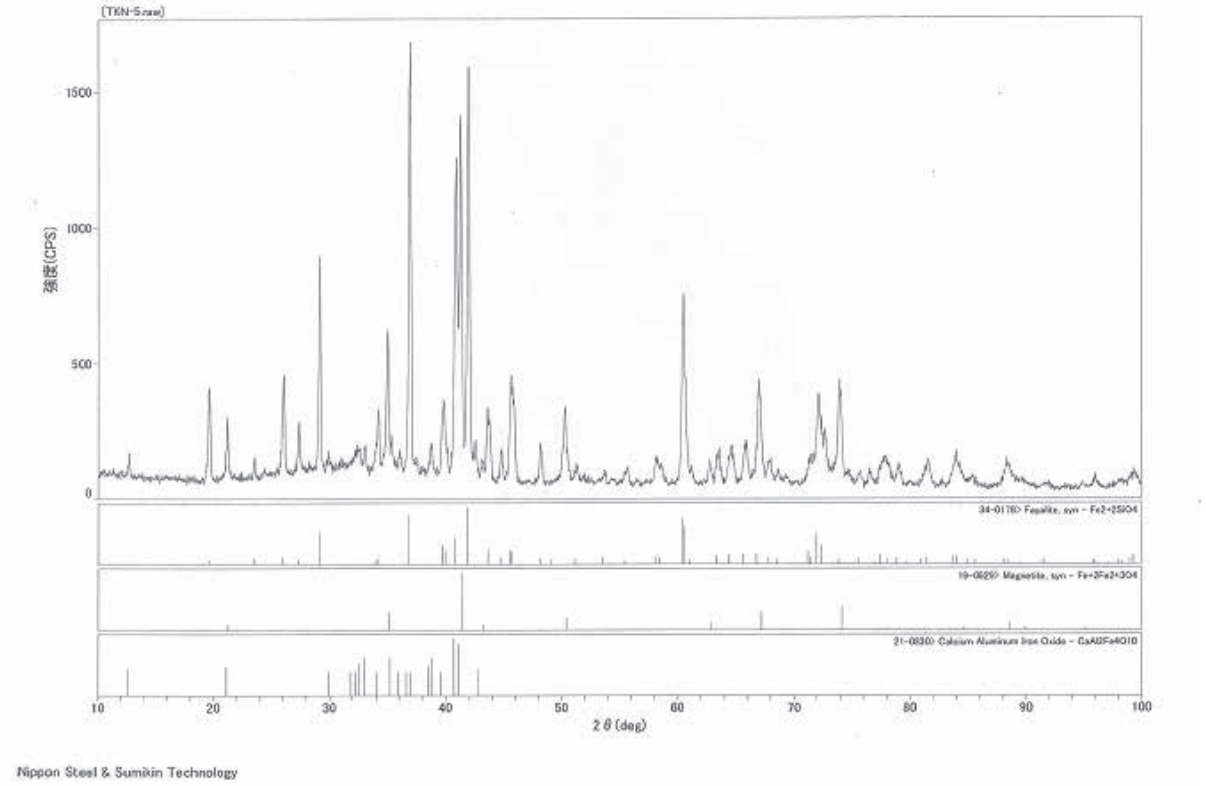
TKN-6 炉壁（含鉄）
④上側：錆化鉄、下側：砂鉄製錬滓～ガラス質滓、⑤錆化鉄部拡大、亜共析組織～過共析組織痕跡、⑥滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱)・ファヤライト

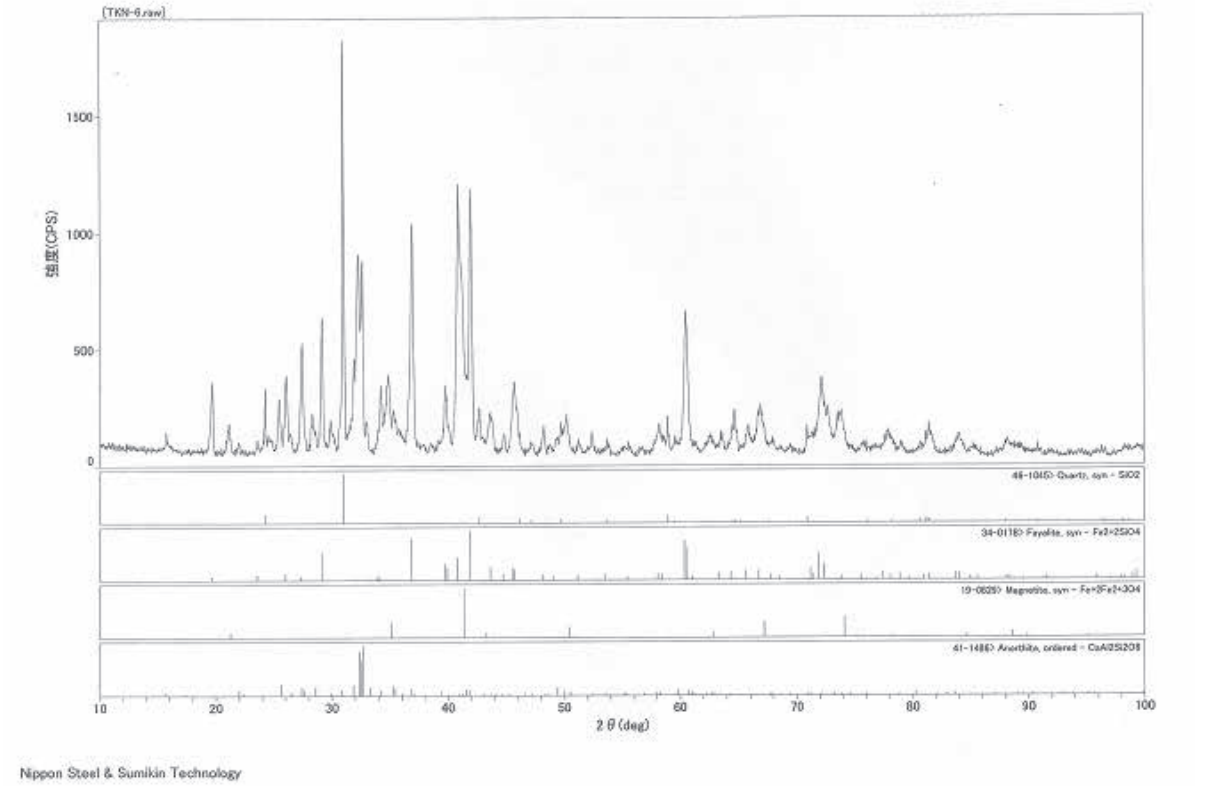






第 65 図　炉内滓・炉壁（含鉄）の顕微鏡組織





第 66 図　Ｘ線回折結果（TKN-５、TKN-６）

ピークの存在は確認されず、検出限界以下であったマグネタイトにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる。〕
④化学組成分析：第19表に示す。全鉄分（Total Fe）40.76％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.37％、酸化第１鉄（FeO）が47.81％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）5.96％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は40.14％と高く、塩基性成分（CaO＋MgO）も7.17％と高めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は3.79％、バナジウム（Ｖ）が0.38％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.51％、銅（Cu）は＜0.01％と低値であった。

当鉄滓も製錬滓（TKN－４、５）と類似した鉱物・化学組成で、内部には非熱砂鉄が確認された。低チタン砂鉄を原料とした製錬滓と推定される。

TKN－８：流動滓

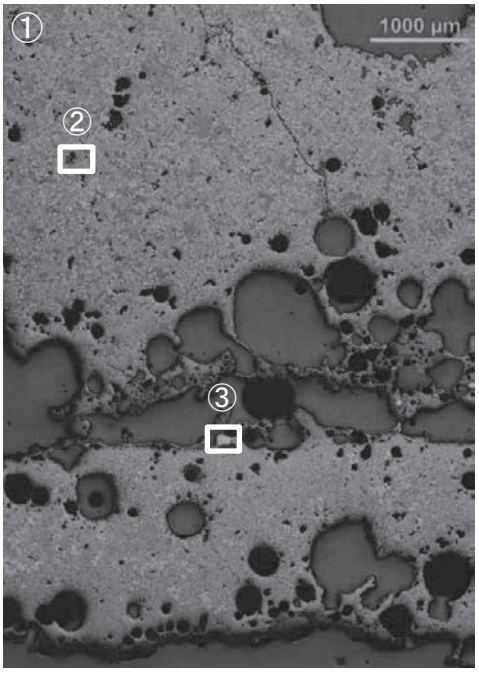
①肉眼観察：やや大形で厚手の流動滓の破片（730.0ｇ）である。色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。上面は１～５㎝幅の流動滓が残る部分と気孔の密な破面がある。下面も比較的平滑な部分と気孔が密な部分があり、微細な炉壁片が点々と付着する。側面は全面破面で、滓と滓が重なった面に沿って多くの気孔が分布する。
②顕微鏡組織：第67図④～⑥に示す。滓中の淡褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe_2O_3）、またはマグネタイトに少量チタニア（TiO_2）を固溶するチタン磁鉄鉱と推測される。淡灰色柱状結晶はファヤライトである。⑤中央の青灰色粒は錆化鉄で、ほぼ全面に層状のパーライト組織痕跡が残存する。また⑥中央は金属鉄粒である。素地は白色のフェライトで、少量黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織が確認された。
③Ｘ線回折測定結果：第68図下段に示す。主要鉱物はマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe_2O_3）、含鉄スピネル〔Spinel,ferrian：$Mg(Al,Fe)_2O_4$〕、ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）であった。〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO_2）は回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。マグネタイトまたは含鉄スピネルにチタニア（TiO_2）が少量固溶している可能性も考えられる。〕
④化学組成分析：第19表に示す。全鉄分（Total Fe）41.16％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.12％、酸化第１鉄（FeO）49.40％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）5.15％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は41.14％と高く、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）も6.09％と高めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）が2.87％、バナジウム（Ｖ）は0.30％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.38％、銅（Cu）は0.01％と低値であった。

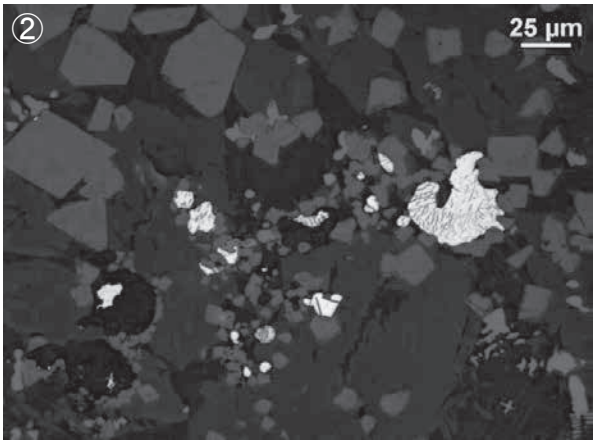
以上の鉱物・化学組成から、当鉄滓も低チタン砂鉄を原料とした製錬滓と推定される。

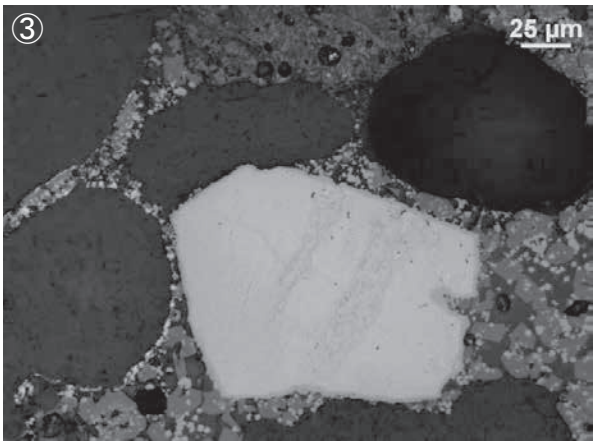
TKN－９：炉壁

①肉眼観察：大形の炉壁破片（455.9ｇ）である。内面表層は強い熱影響を受けてガラス質化している。表面には部分的に茶褐色の鉄錆が付着するが、まとまった鉄部はみられない。また長さ６㎝程の大形の木炭痕が１箇所残存する。外面側の炉壁胎土部分は淡褐色で、ごく短く切ったスサや砂粒が多量に混和されている。
②顕微鏡組織：第69図①～③に示す。①の素地の暗灰色部は、炉壁内面表層のガラス質滓である。不定形の明灰色部は錆化鉄で、②の左側はその拡大である。微細な明白色粒は金属鉄である。また、滓中には部分的に淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。②の右側はその拡大である。③の灰褐色粒は内面表層に付着した被熱砂鉄である。

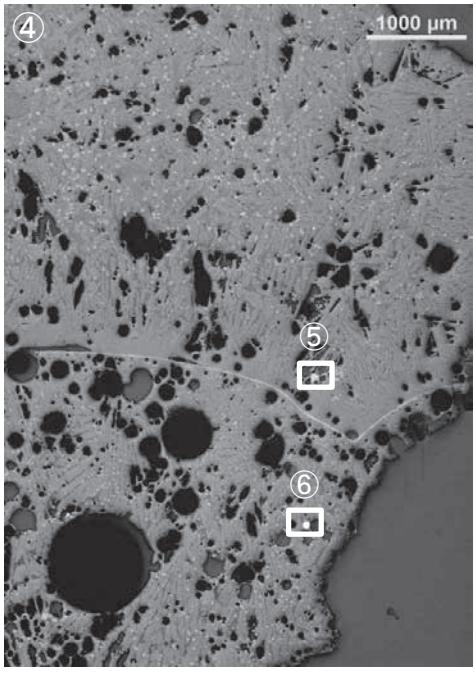
TKN-7 流動滓
①～③滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱）・ファヤライト、②明白色部：金属鉄（フェライト単相）、③被熱砂鉄

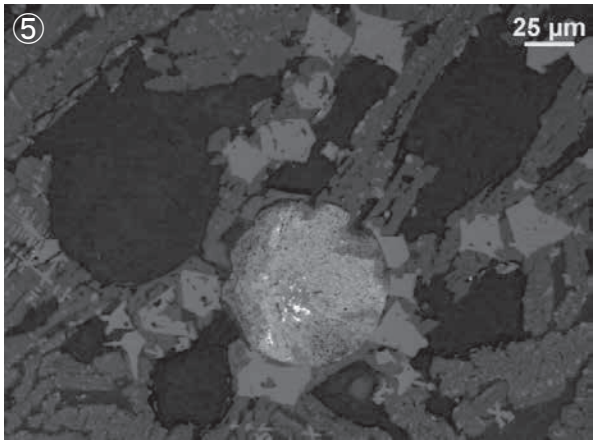


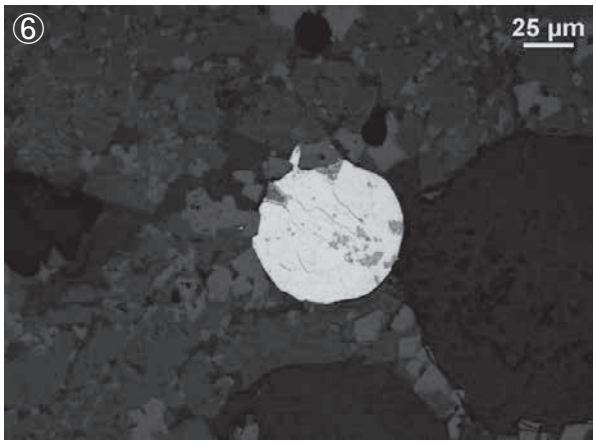




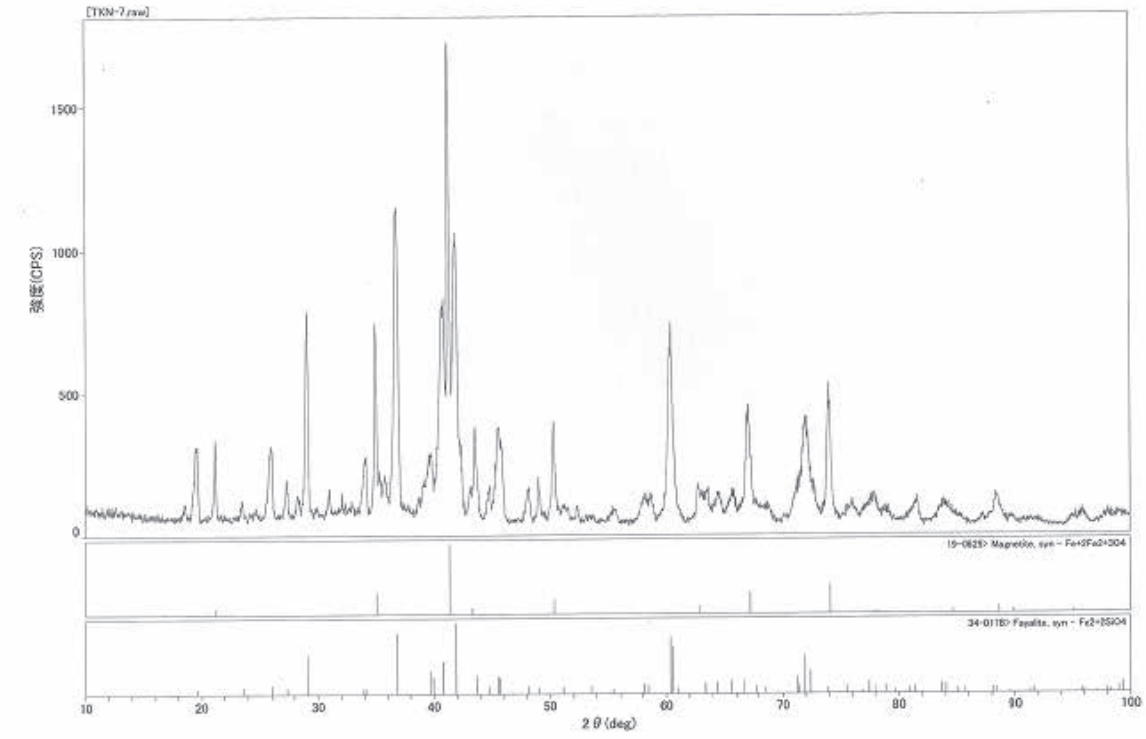
TKN-8 流動滓
④～⑥滓部：マグネタイト（またはチタン磁鉄鉱）・ファヤライト、⑤中央：錆化鉄粒、共析組織痕跡、⑥中央:亜共析組織

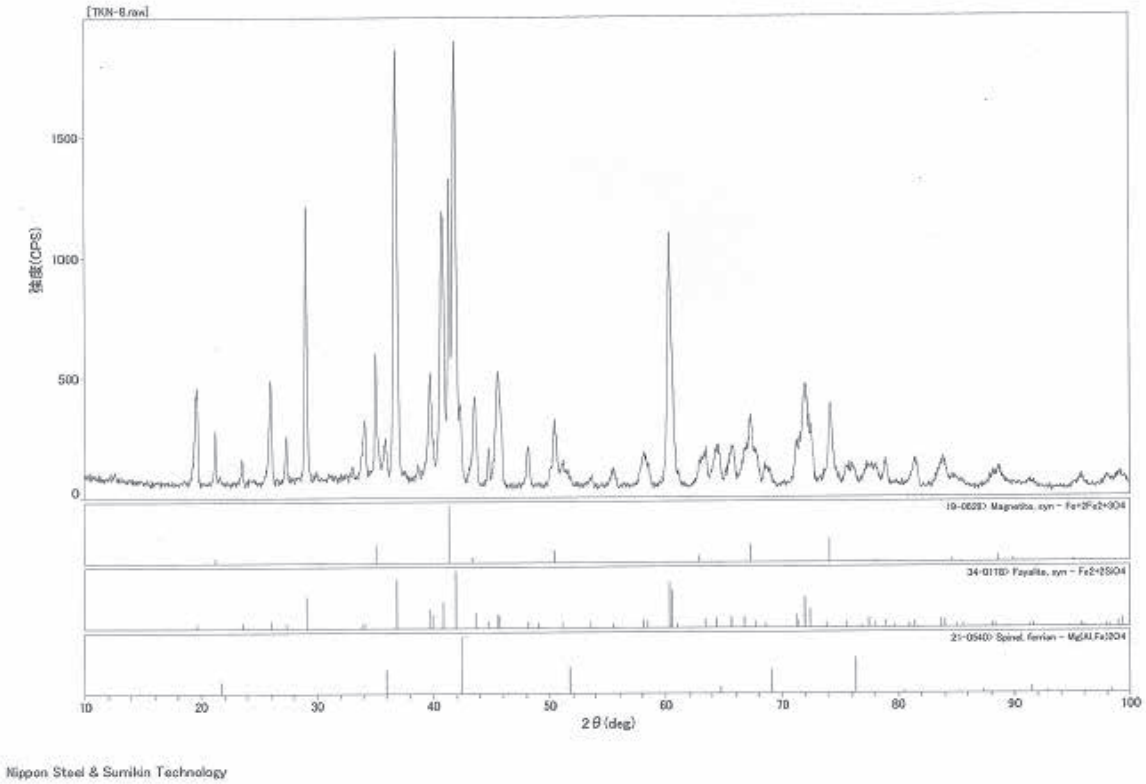






第 67 図　流動滓の顕微鏡組織





第 68 図　Ｘ線回折結果（TKN-７、TKN-８）

③Ｘ線回折測定結果：第 70 図上段に示す。炉壁粘土部分を供試材とした。主要鉱物は石英（Quartz：SiO_2）、コーディエライト〔Cordierite,ferroan：$(Mg,Fe)_2Al_4Si_5O_{18}$〕、ムライト（Mulite：$Al_6Si_2O_{13}$）、灰長石〔Anorthite：$CaAl_2Si_2O_8$〕であった。なお、ムライトが検出されたことから、当炉壁は 1000℃以上の高温に曝されたと推測される。

④化学組成分析：第 19 表に示す。炉壁粘土部分を供試材とした。軟化性成分の鉄分（Total Fe）は 5.24％と高めで､塩基性成分（CaO＋MgO）も 4.75％と高めであった。耐火性に有利なアルミナ（Al_2O_3）も 22.11％と、通常の粘土（約 15～18％）よりも高い割合を示した。

当炉壁の内面表層には、熱影響を受けた砂鉄粒子が付着する。砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片と推定される。

TKN-10：炉壁

①肉眼観察：炉壁の内面表層側の小破片（55.8 ｇ）である。強い熱影響を受けてガラス質化が進んでいるが、外面側には薄く淡褐色～茶褐色の炉壁粘土が付着する。

②顕微鏡組織：第 69 図④～⑥に示す。素地の暗灰色部はガラス質滓で、内部には石英・長石類などの砂粒（無色鉱物）が点在する。これらは炉壁粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）と推測される。

内面表層には、熱影響を受けて分解・滓化しかけた砂鉄粒子が付着する。⑤はその拡大である。また⑥の明白色部は金属鉄、青灰色部は錆化鉄である。

③Ｘ線回折測定結果：第 70 図下段に示す。主要鉱物は石英（Quartz：SiO_2）、コーディエライト〔Cordierite：$Mg_2Al_4Si_5O_{18}$〕、灰長石〔Anorthite：$CaAl_2Si_2O_8$〕であった。さらにゲーサイト〔Goethite：α－FeO(OH)〕（水酸化鉄）も強い回折強度を示している。

④化学組成分析：第 19 表に示す。鉄分（Total Fe）の割合は 15.58％であった。これは炉壁粘土部分を分析した TKN-９と比べると非常に高く、ガラス質滓表層の付着砂鉄や、金属鉄（またはその錆化物）の影響が大きいと考えられる。また塩基性成分（CaO＋MgO）も 5.58％と高めであった。一方耐火性に有利なアルミナ（Al_2O_3）は 17.36％と、通常の粘土（約 15～18％）の範囲内であった。

当炉壁の内面表層には、炉壁（TKN-９）と同様、熱影響を受けた砂鉄粒子が付着する。砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片と推定される。

TKN-11：炉壁

①肉眼観察：ごく小形で薄手の炉壁破片（37.9 ｇ）である。強い熱影響を受けてガラス質化が進んでいるが、外面側には薄く淡褐色～茶褐色の炉壁粘土が付着する。

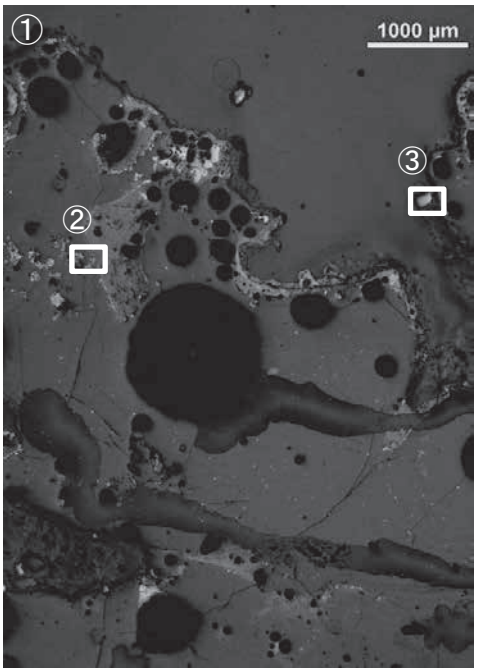
②顕微鏡組織：第 71 図①～③に示す。素地の暗灰色部はガラス質滓で、内部には石英・長石類などの砂粒（無色鉱物）が点在する。これらは炉壁粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）と推測される。

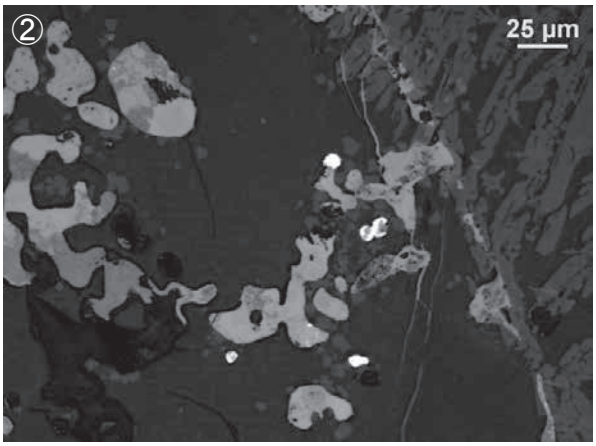
内面表層には、熱影響を受けて分解・滓化しかけた砂鉄粒子が付着する。②はその拡大である。また③の明白色粒は金属鉄である。

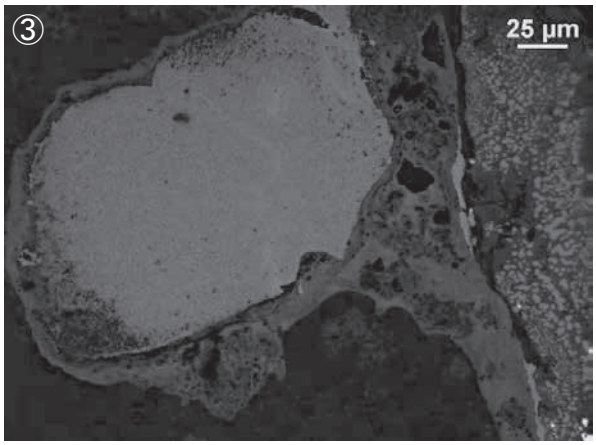
③Ｘ線回折測定結果：第 72 図上段に示す。主要鉱物は石英（Quartz：SiO_2）、灰長石〔Anorthite：$CaAl_2Si_2O_8$〕であった。

④化学組成分析：第 19 表に示す。鉄分（Total Fe）の割合は 14.78％であった。ガラス質滓主体の調査となった炉壁（TKN-10）と同様に、付着砂鉄や金属鉄（またはその錆化物）の影響が大きいと考

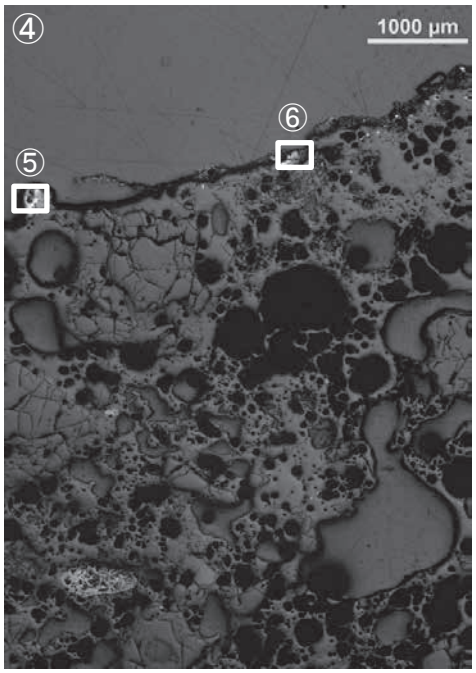
TKN-9 炉壁
①素地：炉壁粘土溶融物（ガラス質滓）、②微小明白色粒：金属鉄、青灰色部：錆化鉄、滓部：ファヤライト、③被熱砂鉄

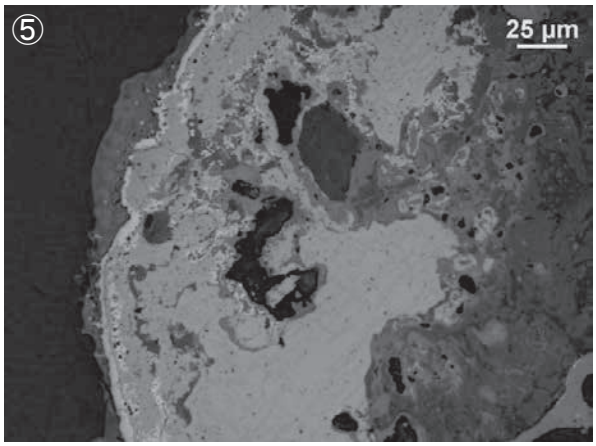


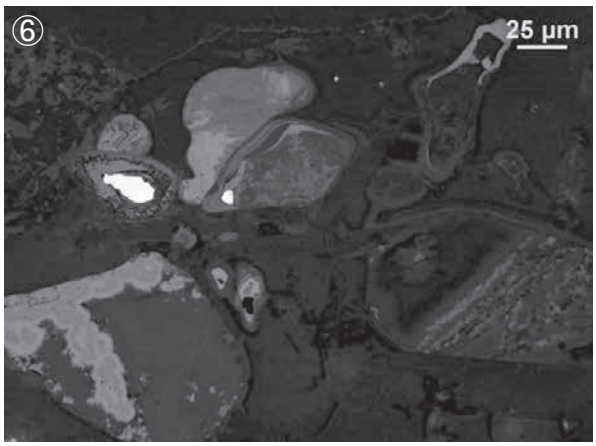




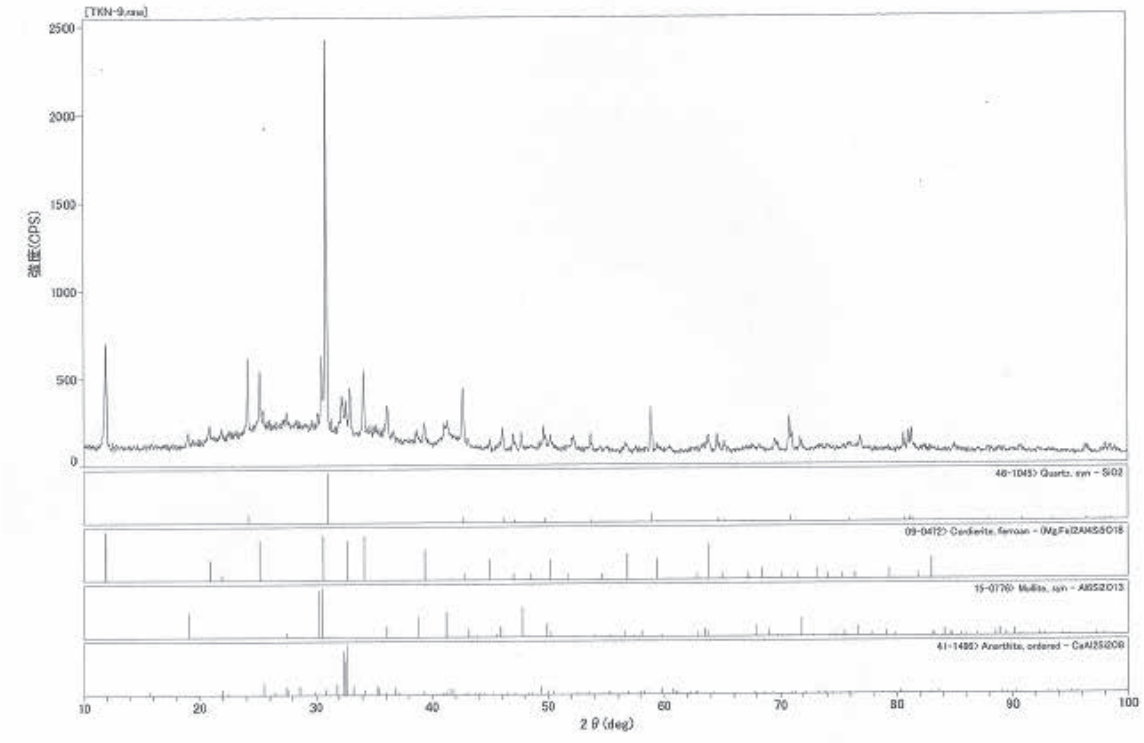
TKN-10 炉壁
④素地：炉壁粘土溶融物（ガラス質滓、石英・長石類混在）、⑤被熱砂鉄、⑥微小明白色粒:金属鉄、青灰色部：錆化鉄

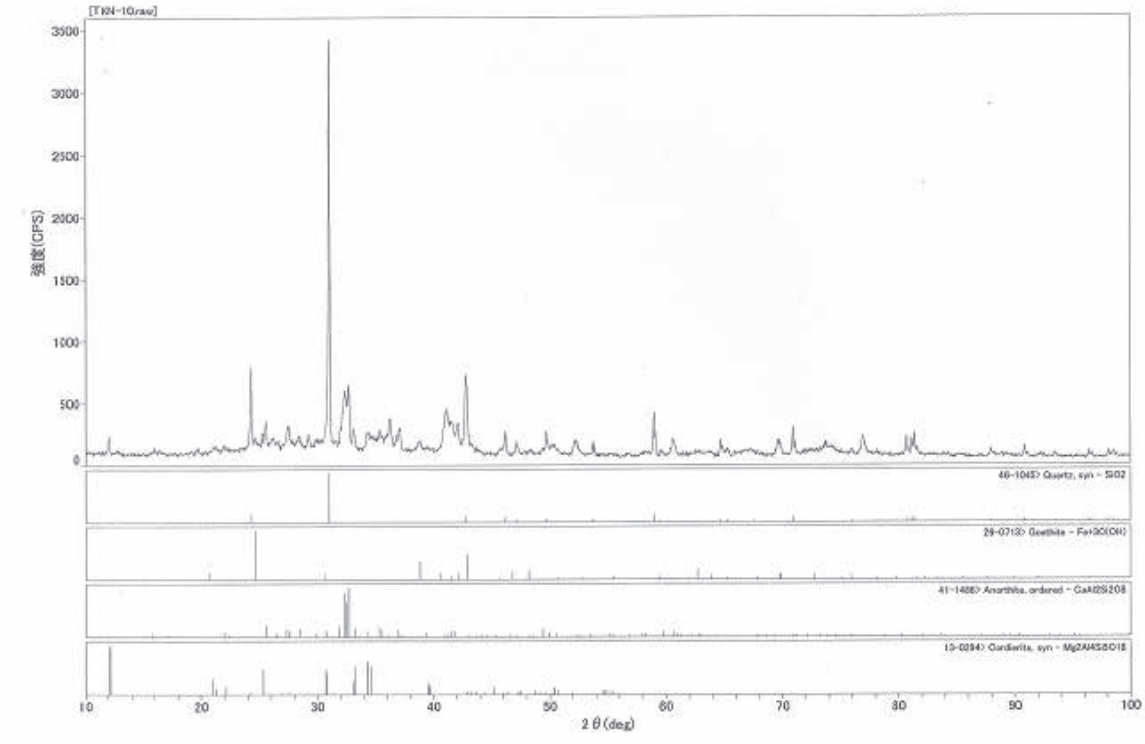






第 69 図　炉壁の顕微鏡組織





第 70 図　X 線回折結果（TKN-９、TKN-10）

えられる。また塩基性成分（CaO＋MgO）も 6.32％と高めであった。一方耐火性に有利なアルミナ（Al_2O_3）は 17.28％と、通常の粘土（約 15～18％）の範囲内であった。

当炉壁の内面表層には、炉壁（TKN-９、10）と同様、熱影響を受けた砂鉄粒子が付着する。砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片と推定される。

TKN-12：鉄塊系遺物

①肉眼観察：小形で不定形の鉄塊系遺物（24.6 ｇ）である。表面には広い範囲で黒色ガラス質滓が付着する。炉壁内面に近い位置で生成した遺物の可能性が考えられる。これに対して、表面が茶褐色の鉄錆で覆われた部分は金属探知器反応があり、内部にまとまった金属鉄がある可能性が高いと考えられる。

②顕微鏡組織：第 71 図④～⑥に示す。④の明白色～淡褐色部は金属鉄である。⑤はその拡大で、網目状にセメンタイトが析出する。素地部分も不完全球状セメンタイト化している。またセメンタイトの周辺に点在する黄褐色粒は硫化鉄（FeS）と推定される。一方、⑥は表面に付着する滓部の拡大である。淡褐色針状結晶はイルメナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）と推測される。

③Ｘ線回折測定結果：第 72 図下段に示す。金属鉄部は組織観察を優先したため、供試材は滓部と錆化鉄部の割合が高い。滓の主要鉱物は、マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、イルメナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）などの鉄チタン酸化物の回折ピークの存在は確認されず、検出限界以下であった。また、石英（Quartz：SiO_2）が確認された。これは炉材粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）影響と推定される。さらにゲーサイト〔Goethite：α－FeO(OH)〕、レピドクロサイト〔Lepidocrocite：γ－FeO(OH)〕アカガネイト〔Akaganeite：β－FeO(OH)〕などの水酸化鉄、および金属鉄（Iron：Fe）も強い回折強度を示している。

④化学組成分析：第 19 表に示す。金属鉄部は組織観察を優先したため、供試材は滓部と錆化鉄部の割合が高い。全鉄分（Total Fe）22.26％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 1.48％、酸化第１鉄（FeO）が 13.49％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）15.46％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は 58.46％と高く、塩基性成分（CaO＋MgO）も 9.02％と高めであった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 4.61％、バナジウム（Ｖ）が 0.43％であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.60％、銅（Cu）は＜ 0.01％と低値であった。

当遺物は付着滓の鉱物組成から、砂鉄を製錬してつくられた鉄塊と推定される。金属鉄部は高炭素鋼であった。

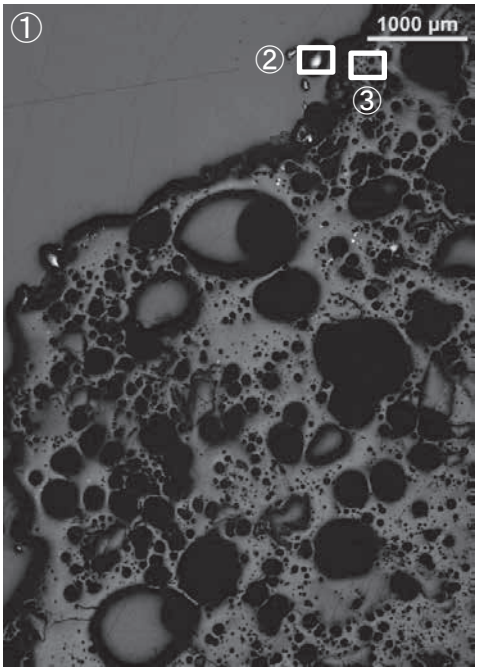
（４）ま　と　め

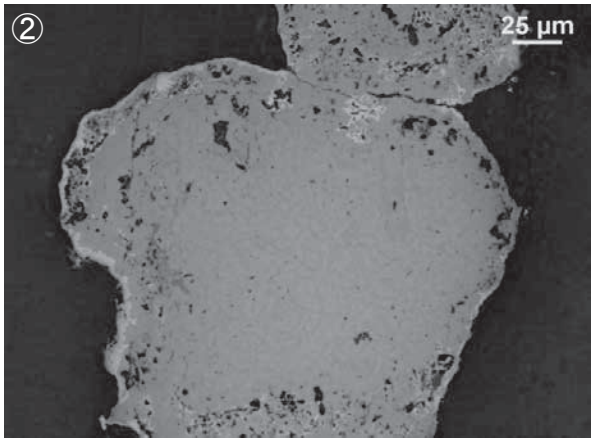
高根遺跡から出土した遺物を調査した結果（第 20 表）、当遺跡では周辺地域に分布する低チタン砂鉄を原料として、鉄生産が行われていたことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。

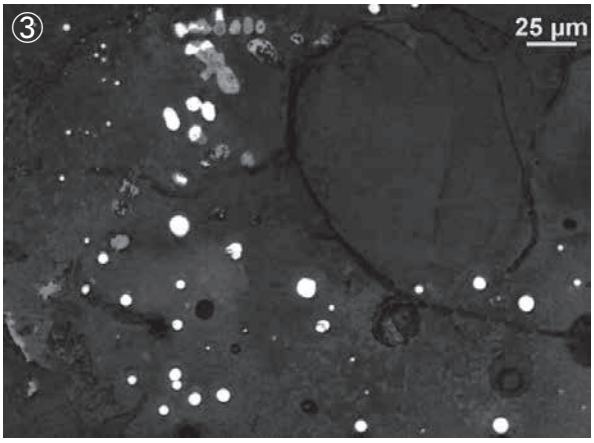
①炉壁４点（TKN-６、９～11）には、内面に熱影響を受けた砂鉄粒子または製錬滓が付着しており、砂鉄製錬に用いられた製鉄炉の炉壁片と判断される。

②鉄滓４点（TKN-４、５、７、８）は、いずれも砂鉄製錬滓と推定される。このうちの２点（TKN-５、７）は滓中に熱影響を受けた砂鉄粒子が確認された。チタニアの割合は砂鉄製錬滓としては低めであった（2.87～4.87％ TiO_2）。同じ宮古町に所在する島田Ⅱ遺跡でも、出土した砂鉄・製錬滓ともチ

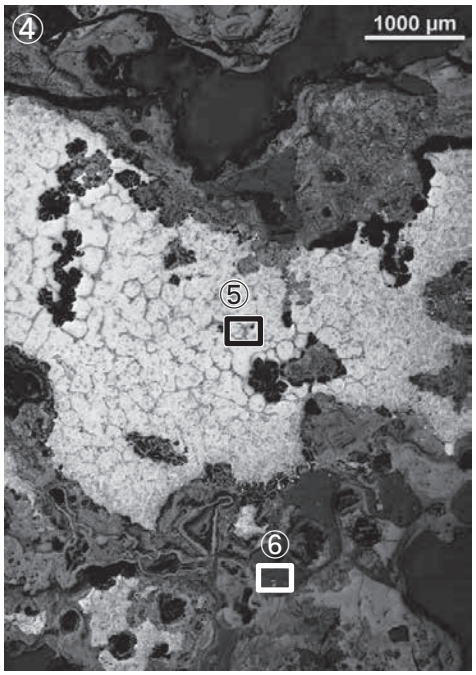
TKN-11 炉壁
①～③素地：炉壁粘土溶融物（ガラス質滓、石英・長石類混在）、②被熱砂鉄拡大、③明白色粒：金属鉄

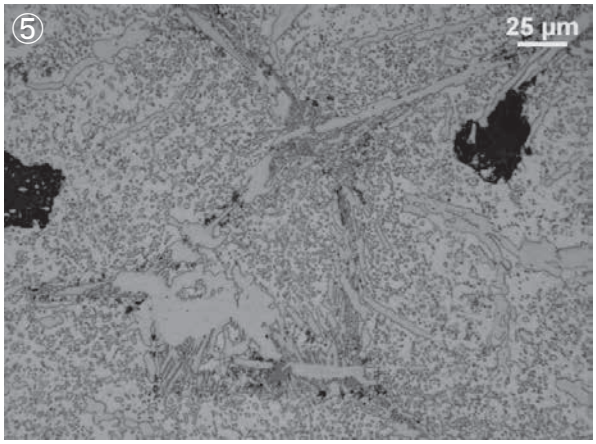


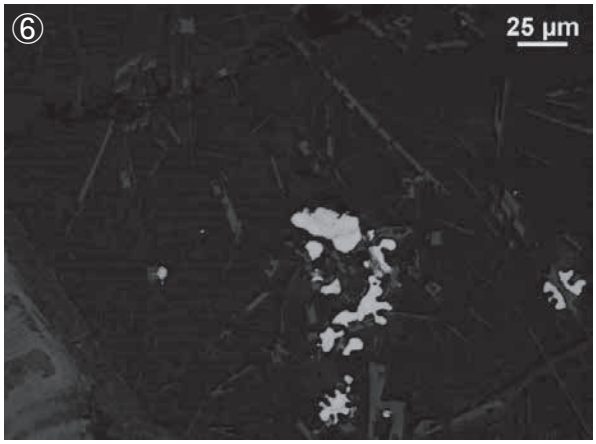




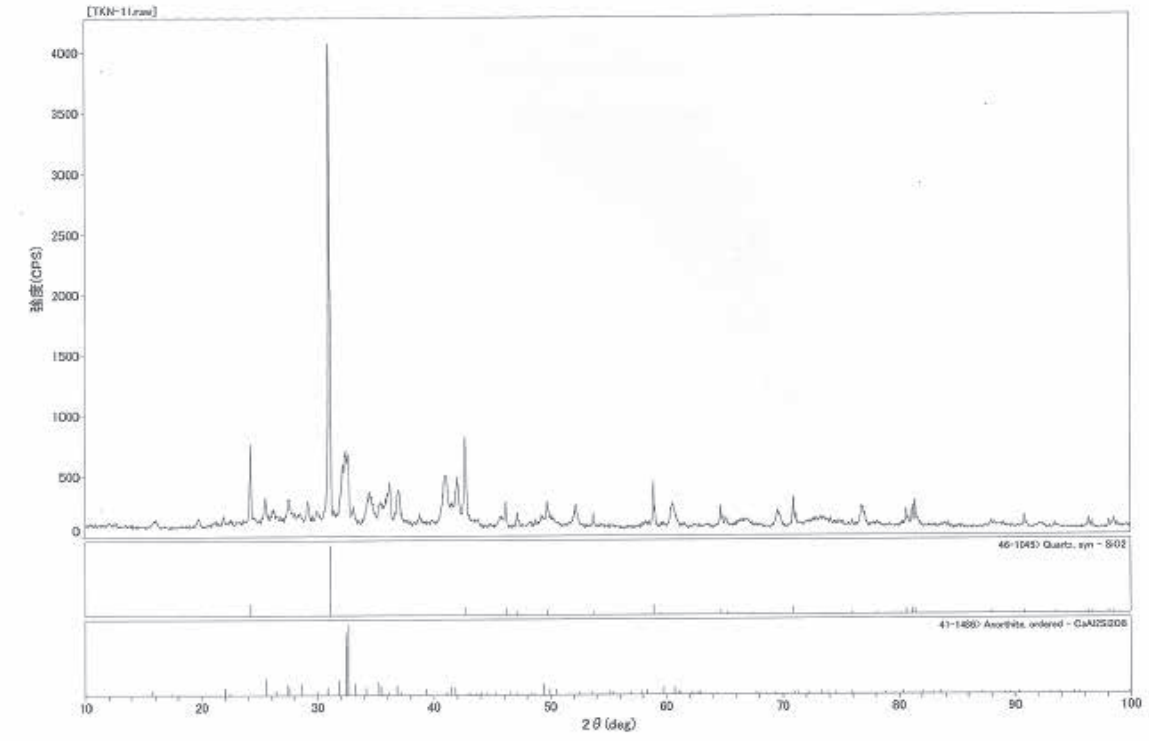
TKN-12 鉄塊系遺物
④金属鉄部:過共析組織、⑤金属鉄部拡大、粒状黄褐色部：硫化鉄（FeS）、⑥付着滓：イルメナイト

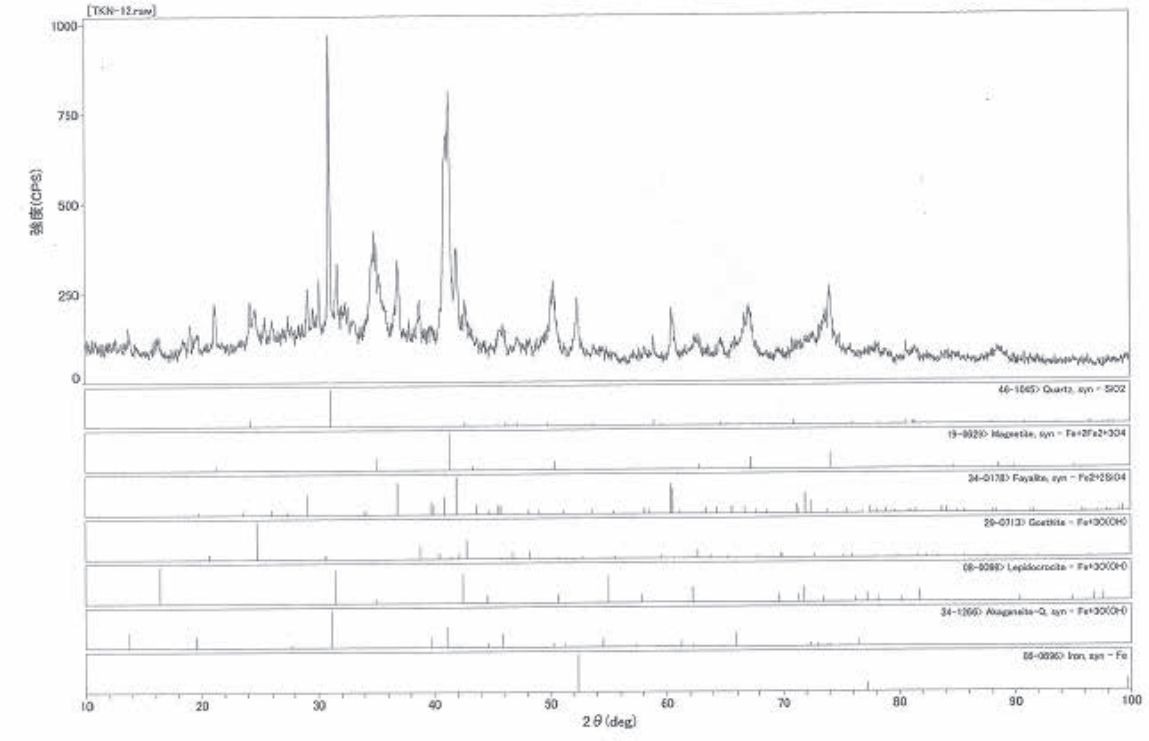






第 71 図　炉壁・鉄塊系遺物の顕微鏡組織





第 72 図　Ｘ線回折結果（TKN-11、TKN-12）

タニアの割合が低い（砂鉄：0.60～2.52% TiO_2、製錬滓：2.04～7.62% TiO_2）ことが明らかになっている(注3)。当遺跡でも地域周辺で砂鉄を採取して、鉄生産が行われていたと考えられる。

③含鉄鉄滓・鉄塊系遺物４点（TKN-１～３、12）は、砂鉄製錬による生成鉄と推定される。全面鋳鉄組織を呈する銑はみられなかったが、（一部鋳鉄組織を含む）高炭素鋼が複数確認された。焼き入れ硬さが要求される利器の刃部先端等に向いた鍛冶原料鉄といえる。

（株式会社　古環境研究所）

注１）穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題―鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について―」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史―その技術と文化―」フォーラム　鉄関連遺物分析評価研究グループ　2005

特殊金属探知機の感度は三段階〔H：high（○）、M：middle（◎）、L：low（●）〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

注２）木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社　1995

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。（中略）チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものとがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものとがある。（中略）このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

注３）『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター　2004

Ⅶ　総　　括

１　出土土器について

出土土器の主体であるⅡ群～Ⅴ群土器について、群ごとに判断基準やその特徴をまとめ、若干の問題点を指摘しつつまとめていくことにする。

（１）各土器群の分類とその特徴

先に（第Ⅴ章）おいて、縄文時代中期に属する土器を分類したが、ここではその分類の特徴や分類の詳細について整理する。なお、分類の基準となるような多くの遺物を出土した包含層１～３は、あまり層位的に有効な状況とは言い難い。おそらく規則的な堆積ではなく、通常の堆積に加え斜面上方からの不規則な堆積が重なっていると考えられる。その斜面上方からの流出土には斜面上にある各遺構の遺物を含んでいる。従って包含層では、年代ごとに各層が累重していない可能性が高い。上下の層で土器型式が逆転、あるいは混在する状況が認められるのである。その状況が実際の土器型式の在り方に合致する可能性もあるが、上述の理由により不規則な堆積の存在が想定されるため、包含層出土遺物の層位的な裏付けは有効ではないと判断した。従って、以下では既存の型式を優先して分類している。遺構出土遺物については、通常通り遺構の重複を優先するものの、隔てた型式間（例えば、大木 8a 式と大木 10 式のような大きい単位の時間差）の重複が確認できたのみである。

縄文土器の総重量は約 4.2 トンに及ぶが、そのうち、地文だけの胴部破片（有文土器の胴部破片と無文土器の胴部破片を含む）が 53%、無文土器（地文だけの口縁部破片、無文土器に限定）が 8.4%であり、分類不明が約６割を占めることとなる。そのため実際は、残りの約４割の土器について分類・検討を行ったにすぎない。出土量を分類ごとにみると、Ⅲ群（18.8%）、Ⅳ群（7.5%）、Ⅴ群（３%）、Ⅱ群（1.8%）、Ⅵ群（0.5%）の順となる。従って、今回の調査地点に限ってみるとⅡ群から土器がまとまって出土しはじめ、Ⅲ群でピークを迎え、Ⅳ群～Ⅵ群に向けて徐々に出土量が減少していく過程が読み取れる。

（２）Ⅱ群土器（第 73～78 図）

加飾隆帯、竹管文、沈線文Ａ・Ｂ類（短沈線）、縄文原体押圧文やこれらの組み合わせによって施文される土器群をⅡ群とした。その特徴から縄文時代中期（初頭から）前葉に帰属すると考えられる土器群をまとめた群である。Ⅰ群に比べて出土数量が増加、しある程度の出土量となっている（約 99.5 ㎏の出土量）。出土土器全体の中で占める割合は 2.3%であり、文様が判明する土器の中では４番目に出土量が多い。Ⅱ群全体では、器形１～４、10・11 が確認できるが、出土量が多いのは器形１・３・11 である。口縁部の文様帯区画は、Ⅱ－①類が大半を占めることから、これがⅡ群土器の特徴ともいえる。原則、施文される文様のまとまりや器形などを加味して４つに細分したが、３・４類については既存の土器型式を使用したまとまりである。

Ⅱ群１類は、加飾隆帯Ａ・Ｂ類、竹管文が文様の主体となる土器群である。これらの文様に加えて沈線文を加え組み合わせた文様を有するもので、その文様の組み合わせは第 21 表のとおりである。そのほか刺突列のみのものについては、ここに含めるか明確にしがたいものも少数含んでいる。器形０～３があるが、器形１や２が主体となる。文様帯としては口縁部が中心であるが、一部口縁部から

の延長で胴部にも文様が及ぶ場合がある。大波状口縁を呈する器形１の破片が多く目立つが、平縁のものも一定数確認できる。大波状口縁部の形態は、単純に外傾するもの（器形 1A）とやや内湾してから立ち上がる（器形 1B 類）の２種に分けている。短沈線が主体となる文様はこの類に含めたが、２類の可能性がある。とくに木目状撚糸文（単軸絡条体第 1A 類）が胴部に施された 1541 以外は判断が難しい。

これらの類は、既存の土器型式に当てはめると大木 7a 式の特徴と類似する。宮城県を中心とする東北南部の大木式土器の範疇に含まれると想定されるが、細部においては異なっている点も多いと考えられる。そのため広義には大木式土器に含まれるかもしれないが、ここではそれと併行する型式（異なる型式ではなく地域性のひとつ）として位置づけたい（本書ではこの意味でこの大木式を使用する）。

Ⅱ群２類は、加飾隆帯と原体押圧文の組み合わせ、原体押圧文Ａ、原体押圧文Ｂや沈線文Ａと原体押圧文の組み合わせた一群である。原体押圧文（Ａ・Ｂ類）が組み合わされる文様が主体をなす土器群と考えた。文様の種類と組み合わせは第 21 表に記すが、約 20 種類にも及ぶ。後述する器形の多様さと合わせてみると、いくつかの型式が混在している可能性がある。さらに整理できると思われるが、今回はそこまで行っていない。含まれる器形は、１類に比べて器形４・10・11 の３種類が増え、器形１・２・３・４・10・11 の６種となり多様である。掲載した土器（のうち文様と器形が判別できる一部）は 160 点あり、器形１、３、11、２、４、10 の順に多い。器形１と３で約６割を占め、器形 11 が２割、器形２・４・10 が約１割ずつとなる。この類の主体となる器形は１・３・11 であろう。

原体押圧文によって波状口縁にあわせた半円形や三角形状、楕円形状の区画を形成し、その内部をさらに原体押圧文で充填するように施文するもの（原体押圧文Ａ）やこの原体押圧文を沈線文に置き換えたもの（沈線文Ａ）が多く確認できる。加飾隆帯が施される個体であれば組み合わされる文様に原体押圧文が施されるものをこの類とした。これらは器形１に対して多く施文される構成である。器形２や３に施文される例では、比較的単純な文様が多い。口縁部に原体押圧文を２～３条を併行に施文するものが多く、波状文と組み合わせた例もある。分類上の問題点として次のものがある。小隆帯貼付や隆線文が組み合わされる例があるが、Ⅲ群１類と区別が難しいものがある。ここでは、主文様である原体押圧文がＡ類やＢ類の場合に限ってこの類に含めた。また、原体押圧文Ｄが施される土器はⅡ群３類（円筒上層式）かⅢ群１類に含めたが、このなかで組み合わされる文様が沈（隆）線文Ａの場合はこの類に含めた。沈線文Ｂ（短沈線）に分類した短かい沈線が施される文様は、田代遺跡（大船渡市）の RA006 竪穴住居跡出土例（大船渡市教育委員会 2020）からみると、この類に含めておきたいが、ここでは、Ⅱ群１類に含めた。この文様も年代的な位置づけが難しい。このような特徴を持つ土器群は、大木 7b 式に併行すると想定している。

Ⅱ群３・４類は、縄文時代中期初頭から前葉に位置づけられる異系統の土器群を便宜的に分類したものである。他の分類とは基準が異なる。この３・４類については、それぞれ円筒上層ｂ・Ｃ・（ｄ）式、新保・新崎式と認識したもので、在地とは異なる異系統の土器群である。これらについては、ここでは分類を行っておらず、それぞれ一括している。また、同様の時期の関東系の土器群（今回は明確に位置づけていない）についてもこれらの類に含めておく。したがって、年代的な位置づけはⅡ群２類とⅢ群１類の間にあるものではなく、おおよそⅡ群全体に併行する。

（３）Ⅲ群土器（第 79～92 図）

原体押圧文と隆線文や沈線文との組み合わせ、隆線文または沈線文、その両者の組み合わせを中心

第 21 表　文様の組み合わせ一覧（１）

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅰ-④	加飾隆帯Ａ＋沈線文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅰ-④	加飾隆帯Ａ＋竹管文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	加飾隆帯Ａ	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	加飾隆帯Ａ＋竹管文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅰ-④	加飾隆帯Ｂ	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅰ-④	加飾隆帯Ｂ＋沈線文Ａ	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	加飾隆帯Ｂ	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	加飾隆帯Ｂ＋竹管文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	竹管文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	竹管文＋沈線文	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅱ-①	沈線文Ｂ（短沈線）	地文	×	Ⅱ群１類	7a
Ⅰ-④	沈線文Ｂ（短沈線）	地文	×	Ⅱ群１類	7a ？
Ⅱ-①	沈線文Ｂ（短沈線）	地文	×	Ⅱ群１類	7a ？
Ⅱ-①	刺突列	地文	×	Ⅱ群１類	６～7a、7b～8a（古）？
Ⅰ-④	加飾隆帯Ａ＋原体押圧文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	加飾隆帯Ａ＋原体押圧文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	加飾隆帯Ａ＋原体押圧文＋沈線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	加飾隆帯Ｂ＋原体押圧文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	加飾隆帯Ｂ＋沈線文Ａ＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	原体押圧文Ａ＋隆線文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ａ＋隆線文（低平）	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ａ＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	原体押圧文Ｂ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ＋沈線文Ｂ（短沈線）	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-①	沈線文Ａ＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	沈線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	沈線文Ａ＋隆線文＋原体押圧文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	沈線文Ａ＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	沈線文Ａ＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ＋原体押圧文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ＋原体押圧文＋隆線文	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	沈線文Ａ＋隆線文Ａ	隆線文Ａ+沈線文Ａ	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅰ-④	無文＋刺突文（交互刺突）	地文	×	Ⅱ群２類	7b
Ⅱ-①	原体押圧文Ｄ	地文	×沈線文Ａ	Ⅱ群２類	7b～円筒上層ｃ

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅱ-①	原体押圧文Ｄ	隆線文	×沈線文Ａ	Ⅱ群２類	7b～円筒上層ｃ
Ⅱ-①	原体押圧文（刺突）＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文（刺突）＋隆線文（低平）	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文（刺突）	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅰ-④	原体押圧文Ｂ＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ＋隆線文（低平）	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ＋刺突	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｂ＋沈線文	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅰ-①	原体押圧文Ｂ（刺突）	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅰ-①	原体押圧文Ｂ（刺突）＋小隆帯貼付	沈線文＋刺突文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｃ＋隆線文Ｂ（低平）	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	刺突列＋小隆帯貼付	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	刺突列＋隆線文Ａ	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅱ-①	沈線文Ｂ	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）
Ⅰ-④	原体押圧文Ｄ	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）/ 円筒上層ｃ
Ⅱ-①	原体押圧文Ｄ	地文	×	Ⅲ群１類	7b～8a（古）/ 円筒上層ｃ
Ⅰ-①	原体押圧文Ｃ＋隆線文Ｂ＋沈線文Ｃ	地文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅰ-①	原体押圧文Ｃ＋隆線文Ｂ	地文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅰ-④	原体押圧文Ｃ＋隆線文Ｂ	地文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅱ-①	原体押圧文Ｃ＋隆線文Ｂ	地文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅰ-④	原体押圧文Ｄ＋沈線文Ｃ	地文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅰ-②	隆線文（波状文）	隆線＋原体押圧文	×	Ⅲ群２類	8a（古）
Ⅰ-①	沈線文Ｃ	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-①	沈線文Ｃ	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-①	無文	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文②	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	無文（波状）	地文のみ	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	無文（波状）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	無文（波状）	隆線＋沈線文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	無文（平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	無文（平縁）	隆線文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	無文（平縁）	隆線文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆線文（波状文）	地文のみ	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆線文（波状文）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	隆線文（波状文）	地文のみ	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	隆線文（波状文）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-①	隆線文Ｂ＋沈線文Ｃ	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）

第 21 表　文様の組み合わせ一覧（２）

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅰ-①	隆線文B	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-①	隆線文B	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-①	隆線文B	隆線文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-④	隆線文B＋沈線文C	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（S字文・平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（S字文・平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（S字文・平縁）	沈線文②	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（S字文・平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（し字文・平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文②	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	隆線＋沈線文	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・平縁）	沈線文①	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（突起）	地文のみ	×	Ⅲ群３類	8a（新）
Ⅱ-①	小隆帯貼付のみ／隆線文（波状）貼付のみ	地文	×	Ⅲ群３類	8a（新）？
Ⅰ-④	無文	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	無文（平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（し字文・平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（楕円区画）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～8b（新）
Ⅰ-③	無文（波状）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～9（古）
Ⅰ-③	無文（平縁）	地文のみ	×	Ⅲ群４類	8a（新）～9（古）
Ⅰ-②	無文（波状）	沈線文④	○ 地文	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文④	×	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文④	×	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-④	隆線文（キザミ）	沈線文④	○ 隆線文A	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-②	隆帯貼付文（S字文・波状）	沈線文④	×	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文④	×	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文④	×	Ⅲ群５類	8a（新）/ 円筒上層ｅ
Ⅰ-③	隆線文（波状文）	沈線文④	○ ミガキ	Ⅲ群５類	8a（新）～8b（古）/ 円筒上層ｅ

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅰ-①	無文	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-④	無文	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-④	無文	沈線文①	○ 沈線文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	無文（波状）	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	無文（平縁）	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付（楕円区画）	隆線文	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-③	隆帯貼付（楕円区画）	沈線文②	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（し字・波状）	沈線文①	○ 無文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（し字文・平縁）	隆線文	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・平縁）	沈線文①	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-①	沈線文C	地文	○ 無文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-①	隆線文C	地文	○ 地文	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-①	隆線文C	地文	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-①	隆線文C	沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群１類	8a（新）～8b（古）
Ⅰ-①	隆線文C（有棘）	地文	×	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆線文C（有棘）	地文	○ 地文	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆沈線文A	地文	○ 無文	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆沈線文A	地文	×	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆沈線文A	沈線文①	○ 無文	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆沈線文A	沈線文②	○ 無文	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅰ-①	隆沈線文A	隆線文	○ 無文	Ⅳ群２類	8b（古）
Ⅱ-②	無文	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	無文	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文③	○ 刺突列	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	隆沈線文①	○ 刺突	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-④	無文	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	無文（波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）

第 21 表　文様の組み合わせ一覧（３）

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅰ-③	無文（波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	無文（平縁）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	無文（平縁）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	無文（平縁）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（し字文・平縁）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・平縁）	隆沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・波状）	隆沈線文①	○ 刺突	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（円文・波状）	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（楕円区画）	隆沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（突起）	沈線文③	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅱ-①	隆沈線文①	無文	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅱ-②	無文	隆沈線文①	×	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-①	隆沈線文Ａ	沈線文③	○ 無文	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-①	隆沈線文Ａ	隆沈線文①	○ ミガキ	Ⅳ群３類	8b（新）
Ⅰ-②	隆線＋刺突	地文のみ	×	Ⅳ群３類	8b（新）？
Ⅰ-③	刺突文	沈線文	○ 無文	Ⅳ群３類	8b（新）？ or10 ？
Ⅰ-③	刺突文	隆線文	○ 無文	Ⅳ群３類	8b（新）？ or10 ？
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文④	○ ミガキ	Ⅳ群４類	8b（古）/ 榎林式？
Ⅰ-④	無文	沈線文④’	○ 刺突列	Ⅳ群４類	8b（新）/ 榎林式？
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文④’	×	Ⅳ群４類	8b（新）/ 榎林式？
Ⅰ-②	隆帯貼付文（円文・波状）	沈線文④’	×	Ⅳ群４類	8b（新）/ 榎林式？
Ⅱ-②	無文	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）

口縁区画	口縁部文様	胴部文様	頸部区画	分類	型式
Ⅰ-④	無文	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）
Ⅰ-④	無文	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）
Ⅰ-②	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	沈線文⑨	×	Ⅴ群１類	8b（新）～９（古）
Ⅰ-④	無文	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅰ-③	無文（波状）	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅰ-③	無文（平縁）	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（渦巻文・波状）	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅰ-③	隆帯貼付文（円文・波状）	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅱ-②	無文	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅱ-②	無文	隆沈線文②	×	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅰ-④	隆沈線文Ａ	隆沈線文②	○ 無文	Ⅴ群２類	９（古）
Ⅱ-②	無文	沈線文⑤	×	Ⅴ群３類	９（新）
Ⅱ-②	無文	沈線文⑤＋磨消縄文	×	Ⅴ群３類	９（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文⑤	×	Ⅴ群３類	９（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文⑤’	○ 刺突列	Ⅴ群４類	９（古）/ 最花式？
Ⅰ-④	無文	地文のみ	○ 刺突列	Ⅴ群４類	９（古）/ 最花式？
Ⅱ-②	無文	沈線文⑤’+磨消縄文	×	Ⅴ群４類	９（新）/ 最花式？
Ⅰ-③	無文（平縁）	沈線文⑤’	×	Ⅴ群４類	９（新）/ 最花式？
Ⅰ-④	無文	沈線文⑥充填	×	Ⅵ群１類	10（古）
Ⅱ-②	無文	沈線文⑦＋充填縄文	×	Ⅵ群２類	10（中）
Ⅰ-③	無文	沈線文⑦	×	Ⅵ群２類	10（中）
Ⅰ-④	無文	沈線文⑦充填	×	Ⅵ群２類	10（中）
Ⅱ-②	無文	沈線文⑥＋充填縄文	×	Ⅵ群１-３類	10（古）～（新）
Ⅱ-②	無文	沈線文⑥～⑧充填	×	Ⅵ群１-３類	10（古）～（新）
Ⅰ-④	無文	沈線文⑥～⑧充填	×	Ⅵ群１-３類	10（古）～（新）
Ⅰ-③	無文（波状）	沈線文⑥⑦⑧	×	Ⅵ群１-３類	10（古）～（新）

とする文様構成をもつ土器群をⅢ群とする。土器の出土量としては今回の調査ではもっとも多く、掲載土器も 400 点以上と最多である。含まれる器形には、器形５・６・８・９・12・14・15 があり、Ⅱ群に認められた器形１～４・10・11 も継続して認められる（とくにⅢ群１類）。しかし、主体となるのは新たに加わった前者であり、後者の割合は掲載土器の中では２割ほどである。出土数全体の中ではもっとも多い出土数である（出土土器の中で約 19%を占める）。文様の組み合わせから以下の４種に細分する。

Ⅲ群１類は、おもに原体押圧文と中途半端な隆線（小隆帯や低平な隆線）、原体押圧文Ｄ、沈線文Ｂを中心とする組み合わせをまとめたものである。Ⅱ群の範疇に入るのかⅢ群に入るのか判断に迷う類である。ここで小隆帯と呼ぶものは、細い粘土紐をＣ字状や把手状などにして貼付したもの（104・808・827・1113 など）を指す。“低平な”隆線とは、一般的な隆線文とは異なり、器表と隆線の境界が不明瞭であるものの、器表よりもわずかに盛り上がっているものである（880・883・885 など）。両側から原体押圧を加えたため盛り上がった可能性もある。実測図でも表現が難しいものであるが、縄文原体押圧文がそのわずかな盛り上がりを意識して施文されることから、一応隆線文の範疇の可能性を考えた。しかし、次の段階であるⅢ－２類は、原体押圧文Ｂと明瞭な（一般的な）隆線文や沈線文が組み合わされるものであるが、小隆帯や低平な隆線は、この２類の明瞭な隆線文とは異なっているため、隆線文とはするが、「低平」や「小隆帯」を付してこれと区別した。原体押圧文Ｄのみが施文される土器（第 80 図下段～第 81 図上段）については、円筒上層（ｃ～ｄ）式の影響を受けた文様の可能性があるが、それのみの施文の場合の位置づけが難しい。円筒上層（ｃ～ｄ）式の年代幅としてⅡ群２類とⅢ群２類までの時間幅としてとりあえずこの類に含めた。沈線文Ｂが施文される例では、おもに沈線による平行文と波状文の組み合わせが多い。先述したようにこれと同様のモチーフを縄文原体押圧文で施文した例がⅡ群２類に多く認められる。この縄文原体押圧文が沈線文に置き換わったものが、この類の沈線文Ｂと考えた。しかし、この置換が同時期のバリエーションなのか後出的なのか判断がつかないため、１類に含めたものである。このように１類に含まれる文様の組み合わせは、前後にある土器群のいずれかに位置づけるのか判断が難しい一群となる。いずれⅡ群２類かⅢ群２類のどちらかに含められると考えている。文様帯区画は、掲載した（土器の中で全容がある程度判明する資料）69 点のうち、器形Ⅱ－①類が 64 点、Ⅰ－④類が４点、Ⅰ－①類が１点である。９割以上がⅡ－①類となる。器形はⅡ群２類と同様の器形１・２・３・４・10・11 が含まれるが、器形１・２の割合が少なくなり、器形３・４・11 の割合が高くなっている。器形をみても中間的な様相を示している。このような特徴を持つこの類は、大木 7b 式から大木 8a 式古段階のいずれか、あるいはそれらの中間期に位置づけられると想定している。

Ⅲ群２類は、原体押圧文（Ｃ類中心）と隆線文や沈線文が組み合わされるものである。分析対象となる掲載土器は 30 点ほどしかなく、前後の時期に比べて数が少ない。組み合わされる文様の組み合わせは第 21 表のとおりである。組み合わせは６種類しかない。原体押圧文に隆線や沈線が伴うものが本類であるが、原体押圧文は隆線文や沈線文の両側に沿うように施文されることが多くなる（原体押圧文Ｃ）。原則的に口縁部に施文されるが、わずかに胴部のみ施文される例がある。器形は、器形 11 と 12 が主体となる。Ⅲ群１類に比べ、器形１・２・10 が確認できなくなり（出土しても少数）、器形３・４が減少する。器形 11 の割合が増加し、新たに器形 12 が登場するなど含まれる器形は大きく変化し始める。口縁部文様帯区画は、Ⅱ－①類が少なくなり、Ⅰ－①類が増加し、主体となっている。Ⅰ－④類は多少の増減はあるが、一定量確認できる。原体押圧文と隆線あるいは沈線文が組み合う文様構成は、大木 8a 式の古い段階（須原 2019）と同様であることから、これと併行する時期を想

定する。また、本類は、分類数や文様の組み合わせが前後に時期に比べて少ない。文様の組み合わせの基本パターン（原体押圧文と隆（沈）線との組み合わせで、その隆線がはっきりしているか中途半端かの違いのみ）は、Ⅲ群１類と同様であることを考慮すると、このⅢ群１類は、本類に含めることが可能かもしれない。

Ⅲ群３類は、隆線文Ｂや沈線文Ｃが施されるもの、隆線文Ｂと沈線文Ｃが組み合わされるもの、口縁部に隆線による狭い文様帯区画（Ⅰ－②区画）を有するもの（の一部）をまとめたものである。詳細な組み合わせは第 21 表のとおりである。分類別でみると、この類がもっとも出土数が多い。口縁部文様帯区画は、これまで主流であったⅡ－①類が無くなり、Ⅰ－①類（70％）、Ⅰ－②類（20％）、Ⅰ－③類（６％）、Ⅰ－④類（４％）の割合の順に変化する。Ⅰ－①類・Ⅰ－②類が主体となる。文様構成が大きく変わると考えられる。器形は、Ⅲ群２類の器形に加え、器形５・６・14・15 が新たに増え、割合も大きく変わる。器形５・６・12・14 の４種で８割以上を占め、その他の器形は数％程度となる。Ⅱ群から継続して確認できた器形１～４・10・11 の器形はこの類以降ほとんど確認できなくなる。こうした文様や器形の特徴は大木 8a 式の新しい段階（須原 2019）と共通すると考えられ、これに併行すると想定している。もっとも数多く出土するのが器形 12 を呈する器形で、口縁部に文様を施文するものである（第 82～85 図）。ほとんどの個体で口縁部の上下を隆線で区画するⅠ－①類である。文様のモチーフとしては、山形文（三角文）、渦巻文、方形文、波状文、楕円形文、クランク文、矢印文、十字文、Ｃ字文、わらび手文、平行文などが確認できる。波状口縁と平口縁の２種あり、前者は４単位が基本であろう。次に出土数が多い器形５・６や 14 を呈する深鉢は、口縁部（文様帯区画）が狭いⅠ－②・③類のものがほとんどである（第 86～91 図）。このⅠ－②・③区画の土器は出土数も多いが今回時期をあまり限定できず、次の４類として別に分類したものも多い。これは、この種の器形や文様帯は次のⅣ群（大木 8b 式併行）にも確認できることからこの分類（時期）に限定できないためである。そのなかで胴部に沈線文①・②が施されるものについては３類に限定した。胴部が地文だけのものについては、波状口縁で区画内が無文のもの、区画内にＳ字隆帯貼付文が施されるもの、区画内に突起が貼付されるもの、区画内を区切って分割するもの（区画文とする）、波状の隆線文が付されるものの５種については、この類に含めた（限定した）。それ以外の文様については４類に含めた。これらのⅠ－②・③区画を有する土器は、隆線を上下に区画することによって口縁部文様帯区画を形成するもののうち、その上下幅が狭いものを指す。区画内には隆線文（隆帯）によって円文・渦巻文・Ｓ字文・し字文・突起・波状文、区画文、無文などが組み合わされる。無文のものは、ミガキなどによって地文も含めて消すもので、有文と比べても一定数確認できる。胴部には、地文のみ、沈線文①～④、隆線文、隆沈線文がおもに施文される。この胴部文様は、他の文様との組み合わせによって口縁部形態にかかわらず、それのみで時期（分類）を限定できると考えたため（胴部文様が分類基準となっているものが多いため）、これと口縁部文様との対応関係を検討した。例えば口縁部区画内の文様が、渦巻文であれば、それに組み合わされる胴部文様には、地文のみ、沈線文①、沈線文②、沈線文③、沈線文④、隆沈線文①が確認できる。この場合、胴部文様が沈線文①・②はⅢ群３類、沈線文③・隆沈線文①がⅣ群３類に分類されるが、地文のみのものは時期を限定できない（対象を複数の遺跡に拡大すれば限定できる可能性はある）ことになる。そのため、このⅠ－②・③区画を有し、渦巻文が付される土器が存続する期間は、Ⅲ群３類からⅣ群３類（大木 8a 式新段階から大木 8b 式新段階）までと捉えた。そのため渦巻文の場合は時期があまり限定できず、次の４類に含めることになる。これに対しＳ字文の場合は、胴部文様は地文のみ、沈線文①、沈線文②のみしか確認できない。この場合は、時期をⅢ群３類（大木 8a 式併行期）に限定できると考えた。こ

のような検討の結果、胴部が地文だけのものについては、時期を限定できないものが多い中において、Ｓ字文、波状口縁で区画内無文、突起、区画文、波状隆線のものについては、この分類に限定できそうであることがわかった。それ以外のⅠ－②・③区画の土器については、胴部文様で判断できないものについては４類に含めている。もっともこういった検討をほかの（遺跡の）資料では行っておらず、あくまで今回の出土品に限定した内容である。

Ⅲ群４類は、口縁部に狭い文様帯区画（Ⅰ－②・③類）を有する土器群である。３類にも同様の文様を施す土器群を含めたが、そのうち今回時期が限定できなかったものを別の分類とした。前後の時期のどちらかに含まれるという過渡的な類ではなく、ある程度存続期間が長いと想定するものである。文様は隆線による狭い口縁部文様帯区画のみでその間は無文のものや「し」の字、渦巻文、円文などの隆線文を貼付（区画隆線と一体となるが）したものが多い。胴部は地文のみのものが多い。胴部に文様が施されるものはある程度時期が限定できるため３類に含めた。文様帯区画は（分析対象 80 点）、区画間が狭いⅠ－②類（76％）、Ⅰ－③類（19％）でほとんどを占め（９割以上）、Ⅰ－④類（５％）が一定数存在する。器形は、器形５・６・14 が大半を占める。文様の特徴から大木 8a 式の新しい段階から 8b 式の新しい段階にかけて併行する可能性が高いと考えている。一部（口縁部文様帯区画がⅠ－③類のもの）は大木９式の古い段階まで残る可能性がある。今後さらに出土例が増加すれば時期を限定できる可能性はある。したがって、Ⅲ群３～４類、Ⅳ群１～４類とは一部併行していることとなる。

Ⅲ群５類は、胴部に沈線文④が施されるもののうち、頸部区画のある土器（221・2010）を除いたものをまとめたものである。円筒上層ｅ式、あるいはこれに影響を受けたとものと想定したものである。厳密に円筒上層ｅ式とする個体は無いと思われるが、その影響を受けたと想定した土器は存在する。沈線文④には、Ｙ字状懸垂文（364・693）、弧線文（519・520・854・868・1133・1135 など）、胸骨（風）文（849・1152 など）がある。これらが施文される個体は、円筒上層ｅ式の可能性も残るが、ここでは明確に判断つかなかった。時期的には、Ⅲ群３・４類や次のⅣ群１・２類と重なる部分があるかもしれない。また、榎林式も一部含まれる可能性もある。

（４）Ⅳ群土器（第 93～101 図）

原則、隆沈線文が施される土器をⅣ群とした。そのほか、隆線文Ｂ（有棘）、胴部に隆沈線文や沈線文③が施されるものをⅣ群とした。また、隆沈線文が施されないが、胴部の沈線文①と頸部区画の組み合わせや隆線文Ｂと頸部区画の組み合わせ、つまり文様はⅢ群であるが頸部区画を有するものをⅣ群として分類した。文様としては、隆沈線や沈線による渦巻文が特徴となる。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－①～④までと、Ⅱ－②区画が確認できる。器形は、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 12・13、器形 17・18 が存在する。出土土器全体の中で 7.5％占め（約６割が地文のみの破片で占めるため数字が小さくなってしまう）、Ⅲ群に次いで２番目に出土数が多い。おおよそ大木 8b 式に併行する土器群である。

Ⅳ群１類は、文様は、Ⅲ群と同様（おもに胴部に沈線文①）であるが、Ⅲ群には認められない頸部区画が出現することから別に分類したものである。また、器形５・６・14 の多くに認められた隆線による文様帯区画（Ⅰ－②・③区画）を取り去ったもので（Ⅰ－④区画となる）、口縁部が無文となるものもこれに含めた。過渡的な分類と考えられる。先のⅢ群３類や４類に含められる可能性があるが、頸部が文様帯区画を有する点や口縁部文様帯区画が消失し口縁部が無文帯になる点は比較的新しい様相と捉えたため、Ⅳ群に含めた。含まれる器形には、器形５・６・７・14 があり、このうち５・

６が８割ほどを占め、残りは１割ずつである。器形５・６・14 が主体となることはⅢ群３・４類と同様である。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－④類がもっとも多く（61％）、次いでⅠ－②類（32％）、Ⅰ－③類（７％）の順となる。Ⅰ－④類は、Ⅰ－②類から隆線による文様帯区画を除去したようなものである。胴部に沈線文①が施されるものが中心であるが、沈線文①は原則２から３条１単位の沈線による平行文＋波状文＋平行文の組み合わせが胴上位に、同様の単位の懸垂文が胴下位に施されるものである（第 87 図下段）。Ⅲ群３類に含めた沈線文①では口縁部直下に胴上位の文様である平行文が施される（口縁部文様帯区画に沿って）。Ⅳ群１類に分類したものは同じ文様でも口縁部直下には空間ができる（第 97 図下段）。これを頸部文様帯と判断した。同じ文様におけるこの施文位置の差は一定数認められることから別に分類したものである。併行する土器型式としては大木 8a 新段階から大木 8b 式古段階にかけてとしておきたいが、頸部文様帯区画の出現するとはいえ使用される文様はⅢ群３類と同じであることから大木 8a 式新段階に含めることも可能ではあろう。逆に頸部区画の創出を重要視するとⅣ群２類に含めることもできると思われる。層位的な裏付けも無く、何を指標として型式を分けるのかあまり定かではない現段階では、こういった特徴をもつ一群の土器があるとだけ提示しておきたい。いずれにせよこれらの文様を有する土器群は、Ⅲ群かⅣ群、つまり大木 8a 式か 8b 式に併行するか判断が難しい一群である。こういった点は他遺跡の資料との比較検討を進めればいずれ明らかとなる可能性がある。

Ⅳ群２類は、口縁部に隆線文Ｂが施されるもののうち頸部区画を有するもの、隆線文Ｂだが有棘文が確認できるもの、口縁部に隆沈線文、胴部に沈線文①・②が施され、頸部区画を有するもの、などの文様の組み合わせをまとめたものを２類とした（第 21 表）。基本的に、口縁部に隆沈線文が施されるが、胴部は地文のままのもの、すなわち文様は口縁部が主体のものを２類とした。新しい文様の種類として隆沈線文はこの類以降に使用される。含まれる器形は、器形７と 12 のみが確認でき、９割以上が器形 12 である。そのため口縁部文様帯区画はⅠ－①類がほぼすべてとなる。文様の組み合わせの種類が少なく、まだ他の組み合わせを含む可能性があるが、ここではこれのみとする。いずれにも頸部文様帯区画を有しており、地文のみのものとミガキが施されて無文となる。大木 8b 式の古段階（須原 2019）に対応すると想定する。

Ⅳ群３類は、口縁部の形態に関わらず、胴部文様が隆沈線文①や沈線文③のものをまとめた分類である。施文位置が胴部主体となるため胴部文様中心の分類となる。文様の組み合わせ自体は種類が多いが、おもに口縁部文様の違いだけであり、胴部文様のみを取り上げると単純な構成である。比較的出土数が多く、分析対象（掲載土器のうち比較的残存率の高い土器）を分類別にみた場合、Ⅲ群３類、Ⅱ群２類に並んで多い。含まれる器形には、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形 12、器形 18 などの器形のまとまりがある。器形８・９など比較的小型で壺状を呈する器形が新たに加わるのがこの類の特徴であろう。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－②・③の口縁部幅の狭いものが多く、次いでⅠ－④区画、Ⅰ－①区画、Ⅱ－②区画などが続く。Ⅰ－②・③区画は、口縁部が無文のものが多く、施文主体は胴部となることから、この３類は胴部を中心に施文される。しかし、Ⅰ－①区画が少数ながら残ることから口縁部に文様を施すものも残存する。このように新たな器形の登場のほか、文様の施文位置が大きく変化することがこの段階以降の大きな特徴となる。これまで口縁部が施文主体であったが、この段階以降胴部が施文位置の中心となる。Ⅳ群２類に新たに登場した隆沈線文が、文様の主体となり、施文位置が口縁部から胴部に広がるのである。そして、口縁部文様帯が省略され、胴部が施文位置の主体と変化していくと考えられる。隆沈線文①や沈線文③は、文様の種類が異なるもののおもに大型の渦巻文が中心に配置される文様である。大渦巻文は単体ではなく、その周囲に小型の渦

巻文が複数配置され、それらを連結する。胴下半は連結する文様が垂直に垂れ下がって懸垂文となるものが多い。沈線文の場合も大型の渦巻文が中心に配置され、他の渦巻文と連結するものや平行文や懸垂文、クランク文など大木 8a 式段階に確認された文様と連結する場合が多い。この沈線文主体の文様の位置づけも難しく層位的に並存することを確認したわけではないが、文様の展開方法が隆沈線文のそれと類似することから、同時に存在すると想定したものである。その場合、隆沈線文が数量的には多いものの、沈線文も一定数存在することから大きく２系統の文様が存在すると考えられる。前段階からつづく沈線文の系統も存続するのであろう。おおむね大木 8b 式の新段階（須原 2019）に対応する。

Ⅳ群４類は、胴部に沈線文④が施される土器のうち頸部区画が存在するもの、胴部に沈線文④’が施されるもの、榎林式に相当するものを一括した（第 103 図下段）。榎林式そのものと判断した個体はないが、胴部に施される文様の趣がほかとは異なるものを集めたものである。沈線文④’は、分類としては曖昧であるが、整然と巻いた渦巻文が多いのに対し、巻きがゆるやかで渦巻になっていないものや円文に相当するもの（1143・1159・1240・1251・1257）である。整然と巻かれた渦巻文と比較すると少し変わったという程度であり、明確な線引きは難しい。このほか沈線文④のうち頸部区画を有するものとして、弧線文（363）、胸骨（風）文（221・251）が施されるものなどが榎林式の影響を受けた可能性のある土器である。このように榎林式の明確な内容が不明であるため、ここでは分離できなかったが、その可能性を残すものを別にした分類である。分類しない場合は、多くはⅣ群３類に相当する。また、Ⅱ群３類（大木 8a 式新段階）やⅣ群１類（大木 8a 式新段階～8b 式古段階）の中に含めたが、平行沈線と波状沈線の組み合わせ（230・231・650・658・664・665・703・732・742・846・850・858・862・867・872・899・968・1012・1016・1134 など）、あるいは沈線文Ｃの中には、榎林式に含まれるべきものがあるかもしれない。今回は、それを明確に区別することができなかった。

（５）Ｖ群土器（第 102～105 図）

胴部に、沈線文⑤、沈線文⑤’、沈線文⑨、隆沈線文②が施される土器群である。新たな文様の技法として磨消技法が導入され、縦方向の区画が顕著になる。構成される文様の種類が少なくなり、文様の組み合わせも単純化する。口縁部文様帯区画は、Ⅰ－③・④区画とⅡ－②区画が大半を占める。器形には、Ⅳ群と同様に、器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 12・13、器形 17・18 が含まれる。出土土器全体の中では約３％であり（全体の約６割を地文のみの破片が占めるため数値が小さくなってしまう）、Ⅲ群、Ⅳ群についで３番目に多い。およそ大木９式と併行する段階のまとまりである。文様の組み合わせを基準に４つに細分する。

Ｖ群１類は、おもに胴部に沈線文⑨が施文される土器群である。口縁部は、Ⅰ－③の狭いタイプやⅠ－④類が主体であり、器形も器形５・６、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 13 などⅣ群３類と類似する傾向である。沈線文⑨は、沈線による小型の楕円形区画を複数連結させて文様を構成するもので、縦位方向に連結する例が多いが、左右とも連結しているものも一定数存在する。不整形な楕円形のほかに渦巻文や円文も含まれる。Ｖ群２類に類似する文様であるが、沈線文でありかつ磨消縄文が伴わないものである。磨消縄文の有無の違いがあるが、２類と並列的な関係にある可能性がある。含まれる沈線文⑨の文様特徴から大木 8b 式新段階から大木９式古段階の間、もしくはいずれかの時期に併行すると想定する。沈線文のみの文様の種類のため、実際は次の２類に包摂される可能性がある。

Ｖ群２類は、胴部に隆沈線文②（Ｂ－②種）が施文される土器群である。口縁部の文様帯区画は、

Ⅱ－②区画が優勢となる。含まれる器形には、器形８・９、器形 14～16、器形 17・器形 18、器形 12・13 がある。このなかでは器形 14～16 が多い。おおむね大木９式の古い段階を想定する。これも１種類の文様の組み合わせであるが、口縁部文様帯が残る個体にはいくつかの種類がある。隆沈線によって縦位の楕円形区画を有するものをこの分類の指標としたが、沈線間は地文が磨り消されるのが、１類との違いである。しかし、磨り消されるものの次の３類とはその範囲が大きく異なり、沈線間の幅の狭い範囲のみである。典型的なものは縦位の楕円形を基調とする区画が整然と並ぶが、そうでない場合はどちらに含めればいいか区別が難しい。とくにⅣ群３類（大木 8b 式新段階）でも新しいものとは区別が難しいものが多い。Ⅴ群１類とは文様構成が類似する点が多いことから、同一の時期になる可能性がある。Ⅳ群３類で想定したような隆沈線文と沈線文の２系統があるとすれば、Ⅴ群１・２類にそれぞれ対応（型式変化）するかもしれない。

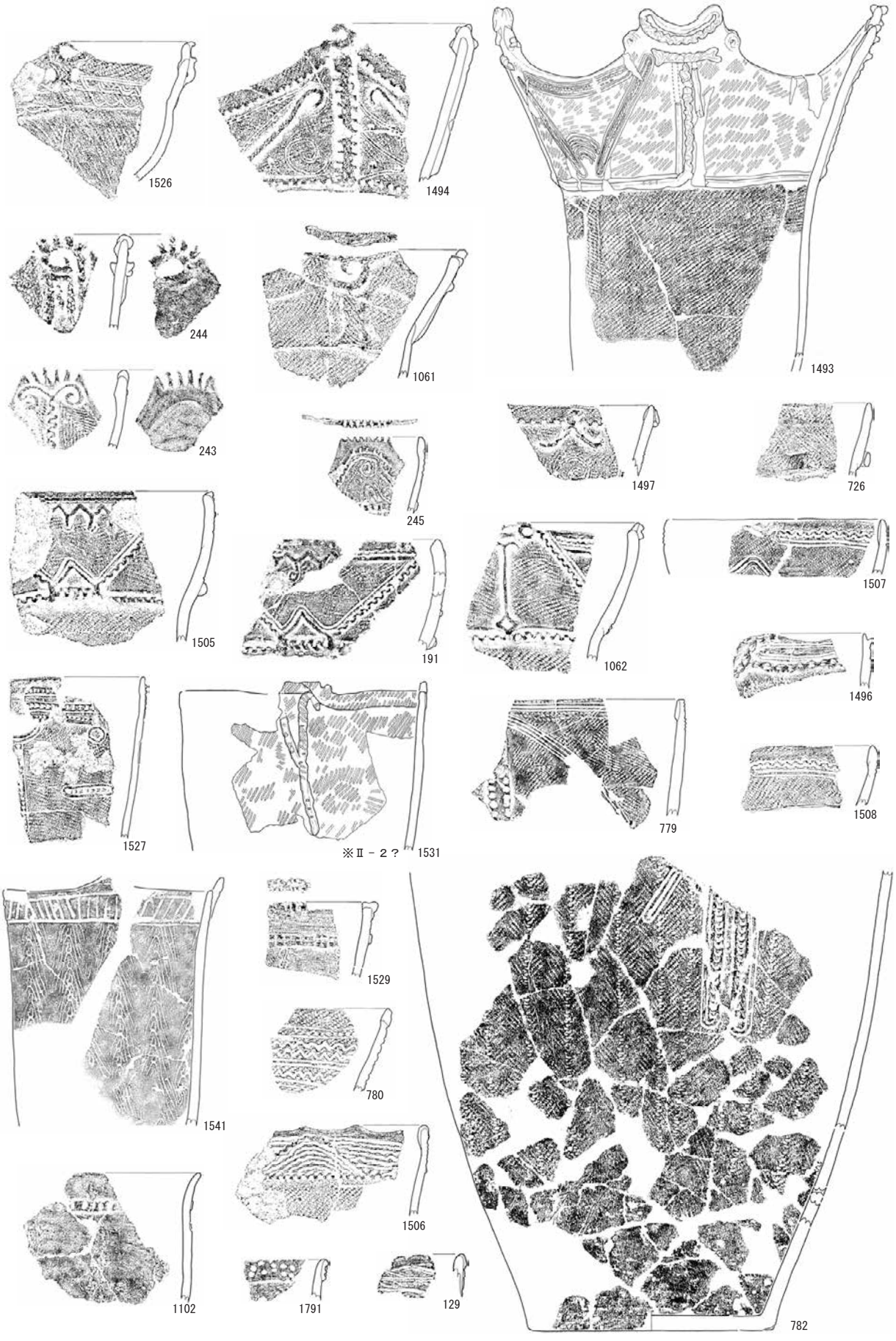
Ⅴ群３類は、おもに胴部に沈線文⑤が施文される土器群を３類とした。沈線による細長い楕円形区画や逆Ｕ字文で細長く縦方向に区画をつくるもので、区画の外の地文が磨り消されることが多い。区各区内は地文のみの場合が多いが、刺突を充填する場合がある。胴上位と胴下位の２段に楕円形区画が並ぶほか、器高が高くても１段構成の場合がある。おおよそ大木９式の新しい方の段階を想定する。口縁部の文様帯区画は、ほぼⅡ－②区画となり、ほかはⅠ－④区画が少数のみとなる。含まれる器形には、器形８・９、器形 14～16、器形７、器形 13、器形 17・18 がある。このうち口縁部が外反する器形７が主体となる。器形７や器形 13 はそれぞれ器形６、器形 12 から変化したと想定している。後者よりも屈曲がゆるやかに間延びしたように成形される。

Ⅴ群４類は、おもに胴部に沈線文⑤’が施文される土器群を分類した。口縁部文様帯区画はⅡ－②が多く、また含まれる器形には、器形 14～16・７・13・17 がある。沈線文⑤’は、沈線による幅が広い逆Ｕ字文が施されるものを主体としたが、口縁部が無文で頸部に刺突列が施されるものや通常無文部となる口縁部に文様が施されるものも含めた。これらは、Ⅴ群３類の文様とはやや異なったものを集めたもので、単なる施文時のくせやバリエーションの一つかもしれない。最花式の特徴と類似していると想定したが、最花式と判断した個体はない。したがって、この４類は最花式の可能性を考えるが、大木９式の範疇の可能性もあり、ここでは明確に最花式を分離できなかった。

（６）Ⅵ群土器（第 106 図）

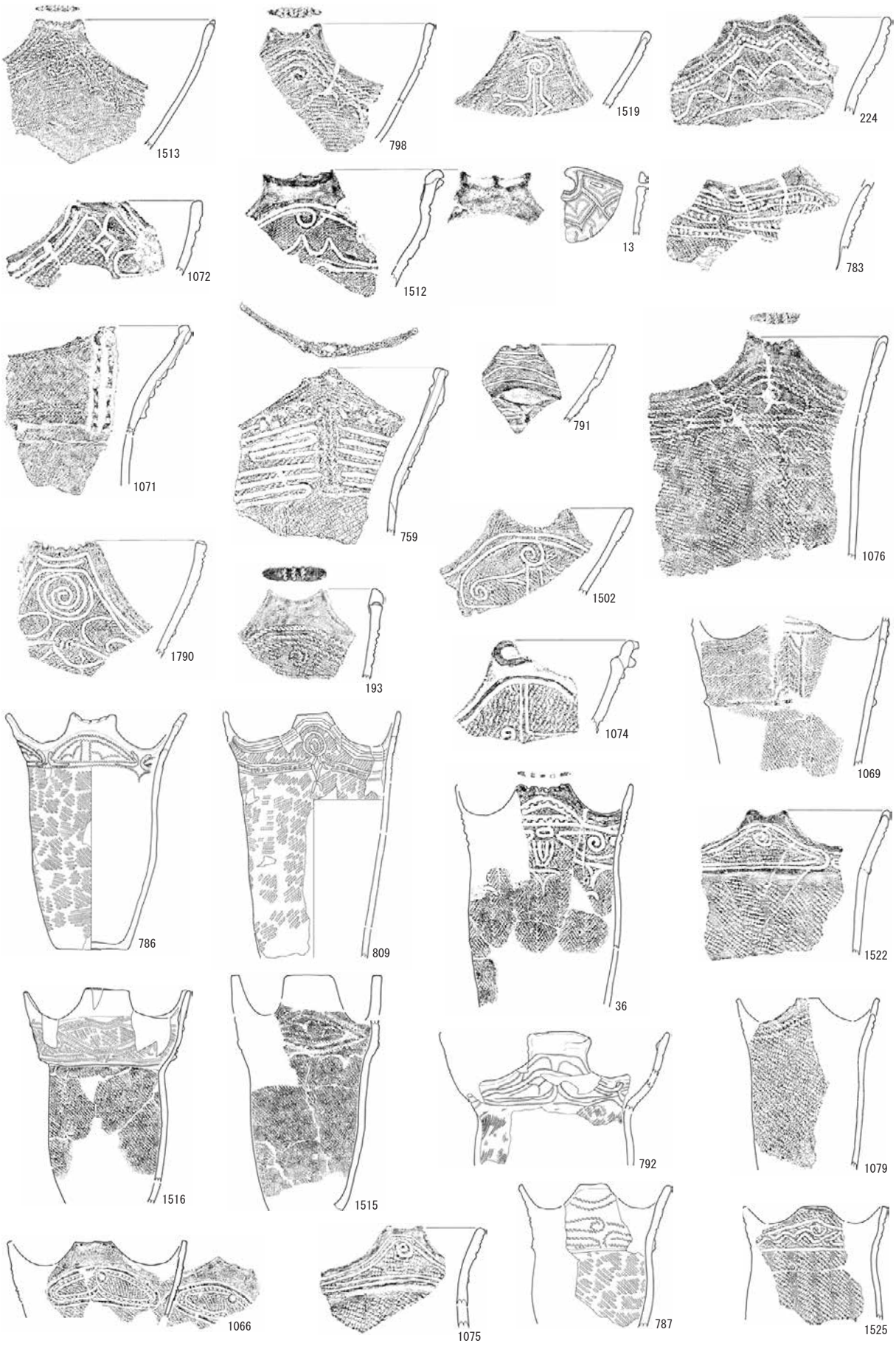
Ⅵ群は、沈線による曲線上の区画が描かれ、区画内に地文を充填するものを集めたものである。胴部に、沈線文⑥・⑦・⑧が施されるものである。全体の出土量は１％にも満たず、0.5％程度である。縄文時代中期の土器群であるⅡ群～Ⅵ群のなかではもっとも少ない出土量である。そのため、完形の個体も少なく、ほとんどが破片資料であるため文様全体の把握ができなかった。沈線文⑥～⑧を便宜上分けたが、破片資料の場合一括して判断したものが多い（第 21 表）。編年は、阿部昭典（2008）に基本的に拠ったが全体の文様が不明のため必ずしも対応していない可能性がある。施される沈線文の種類によって３種に細分している。

Ⅵ群１類は、胴部に沈線文⑥が施されるものである。いわゆるアルファベット文が描かれるもので、沈線によるアルファベット状の区画内に充填縄文が施される。これらの特徴は大木 10 式古段階（阿部 2008）の特徴に類似するため、これに対応すると想定している。Ⅵ群のなかでは出土量が多いが、Ⅱ～Ⅴ群に比べて圧倒的に数が少ないため不明な点も多い。沈線によるアルファベット状の閉じた区画内に充填技法で地文が施されるものをこの分類としたが、破片の場合区画が閉じているの開放しているのか不明なものが多かった。Ⅵ群２類は、胴部に沈線文⑦が施されるものである。破片の場合区

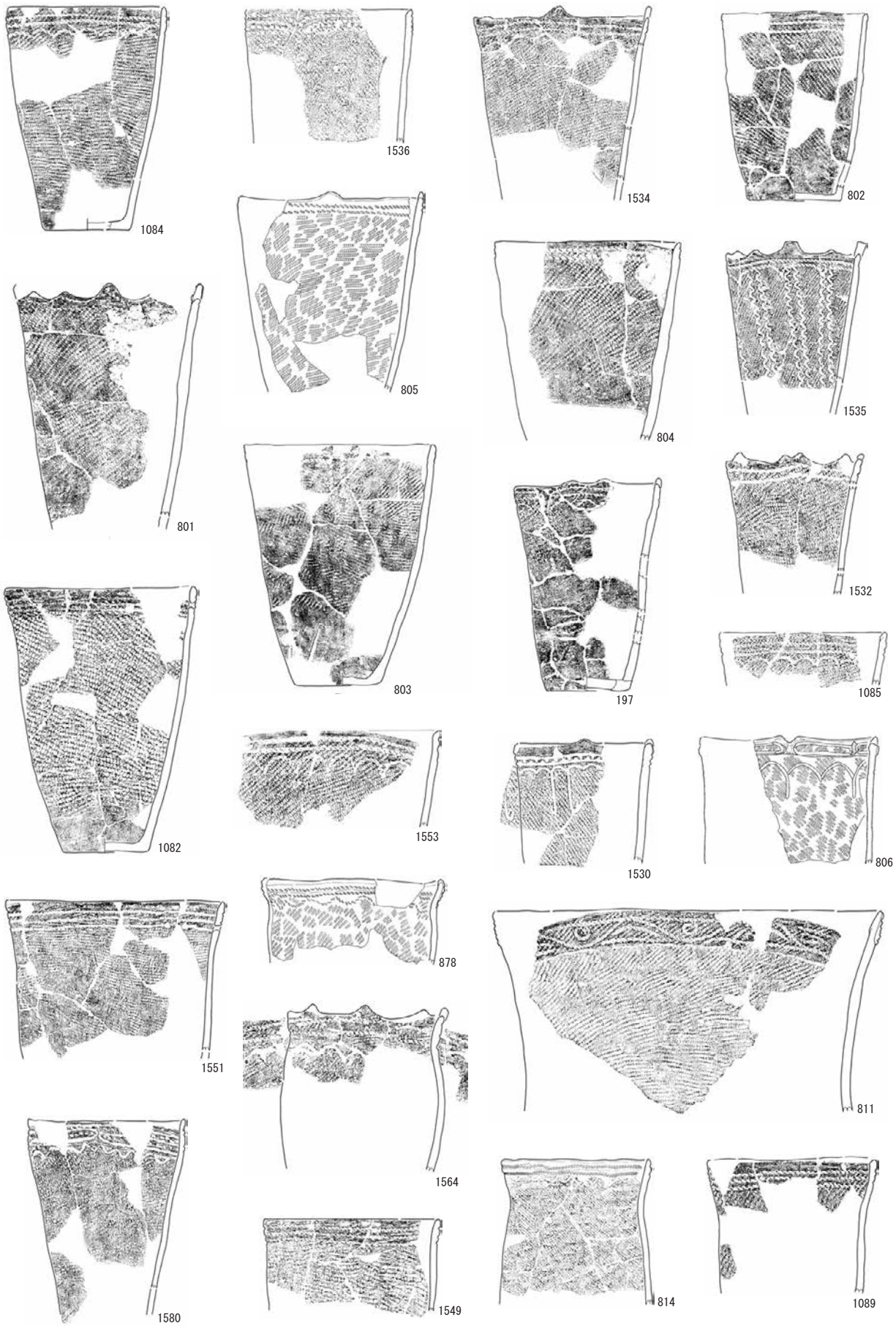


第 73 図　縄文土器集成図（１）　Ⅱ群１類　S=1/6

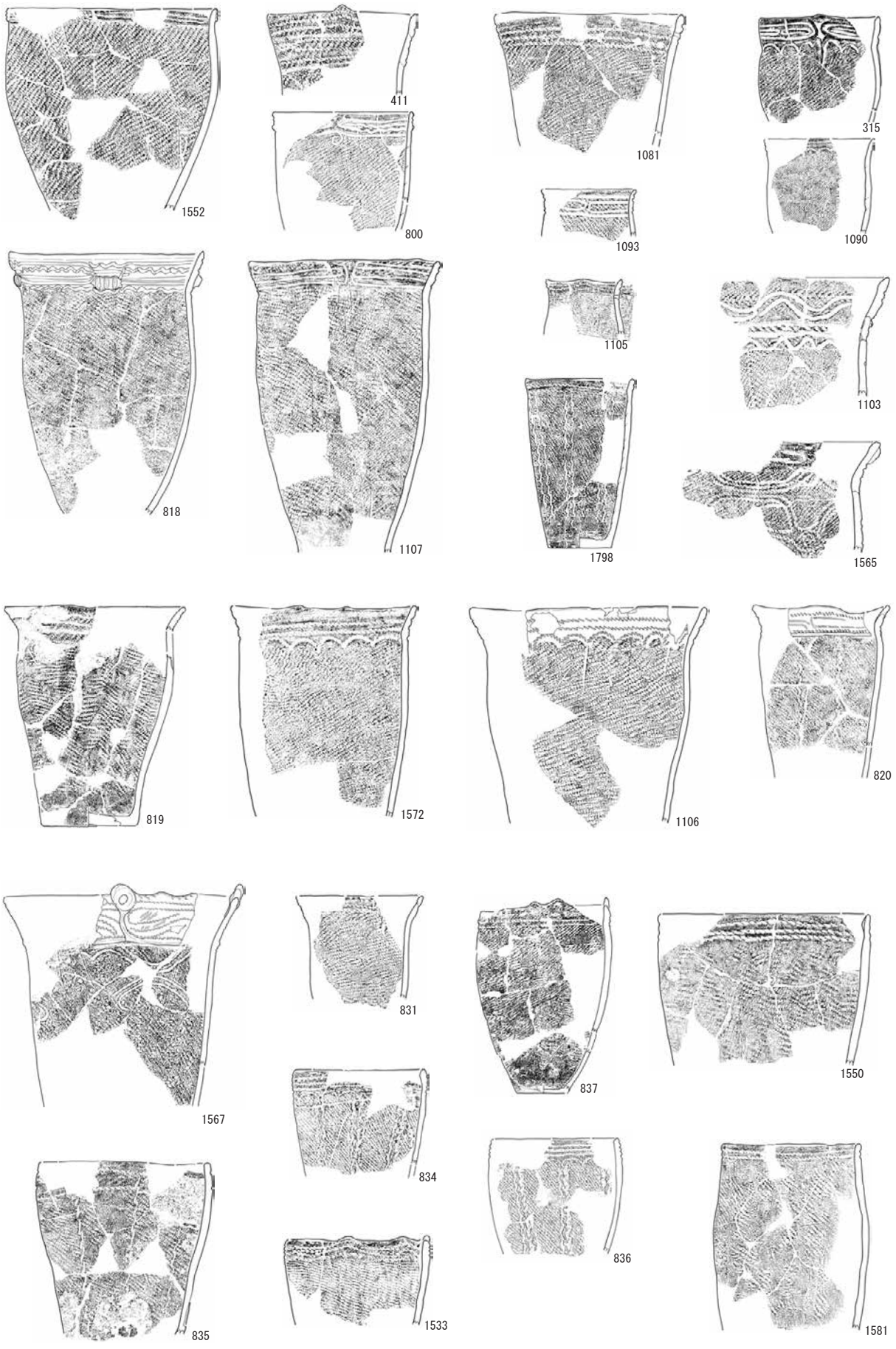
第 74 図　縄文土器集成図（２）　Ⅱ群２類　S=1/6



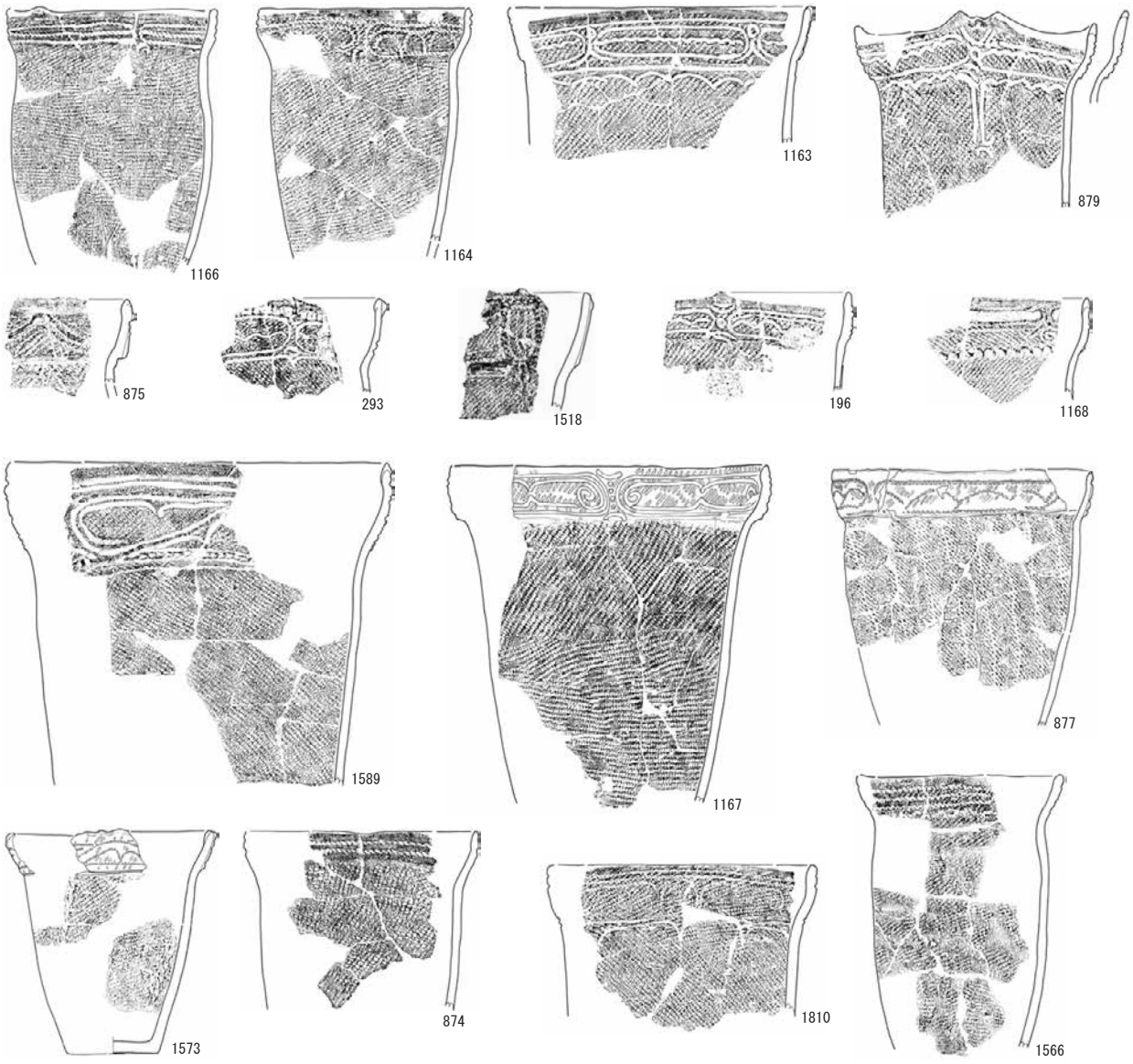
第 75 図　縄文土器集成図（３）　Ⅱ群２類　S=1/6



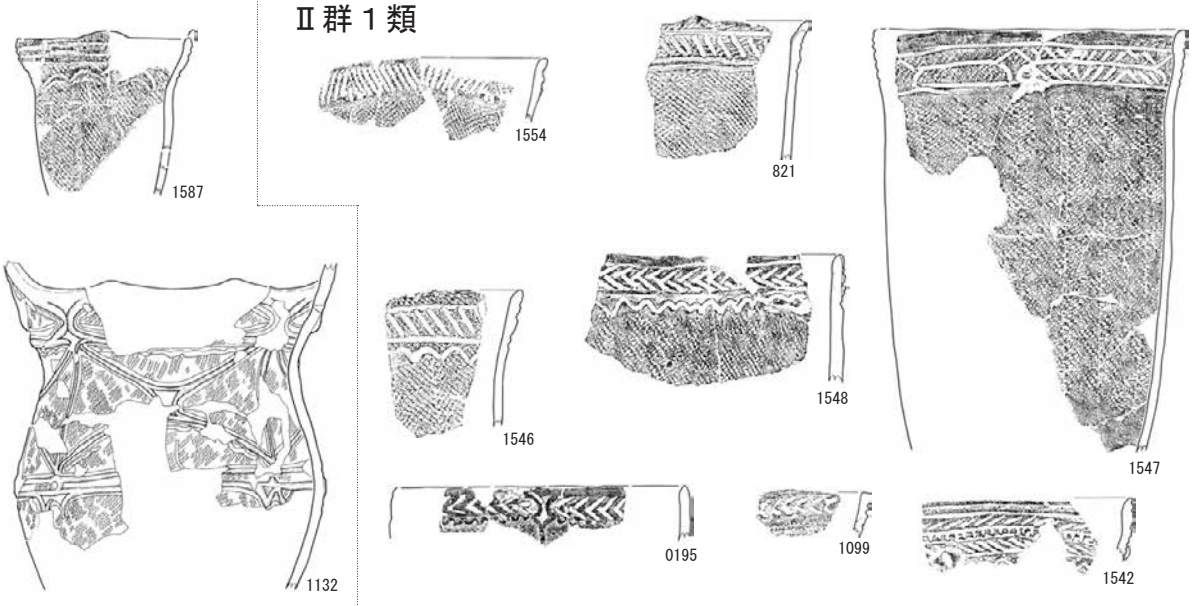
第 76 図　縄文土器集成図（４）　Ⅱ群２類　S=1/6



第 77 図　縄文土器集成図（５）　Ⅱ群２類　S=1/6

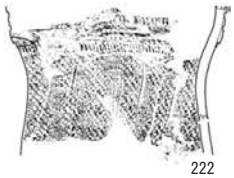


Ⅱ群１類

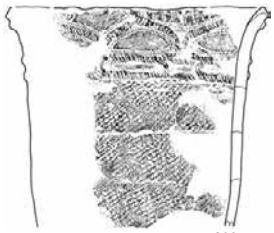


第 78 図　縄文土器集成図（６）　Ⅱ群１類・２類　S=1/6

Ⅱ群３類


222

210

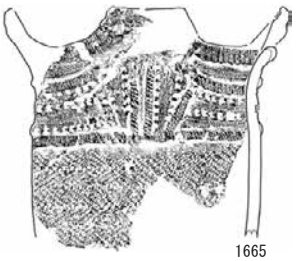

209

1666

1667

1843

1844


1665

Ⅲ群１類

808

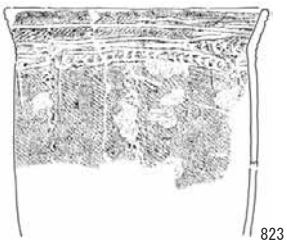
1113

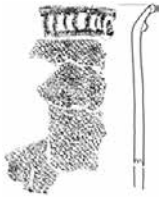
813

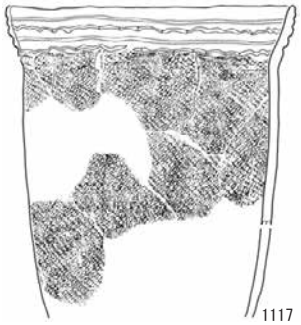
1111

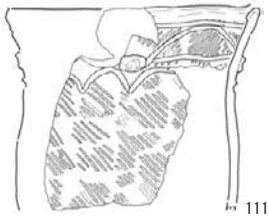
827

413


823


1575


1117

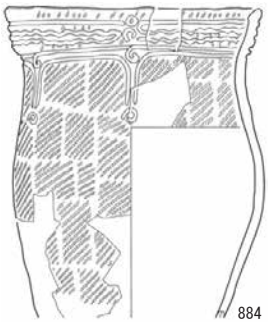

1116

1579

1577

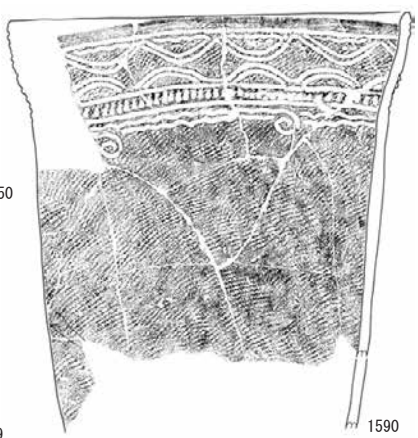
829

832

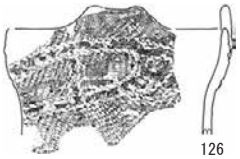

884

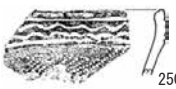
1574

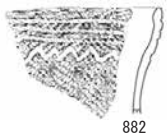
830


1590

1568

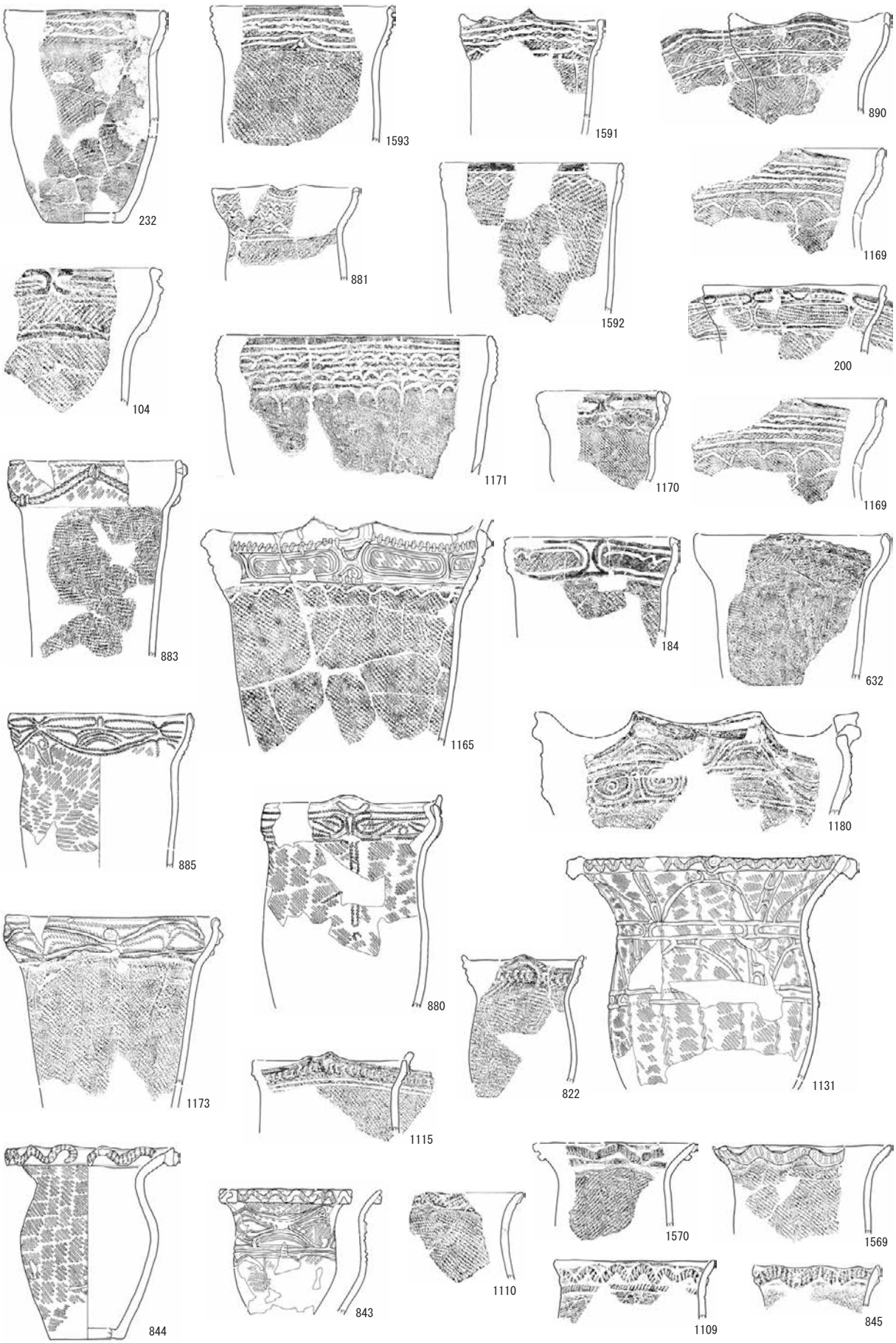

126


250

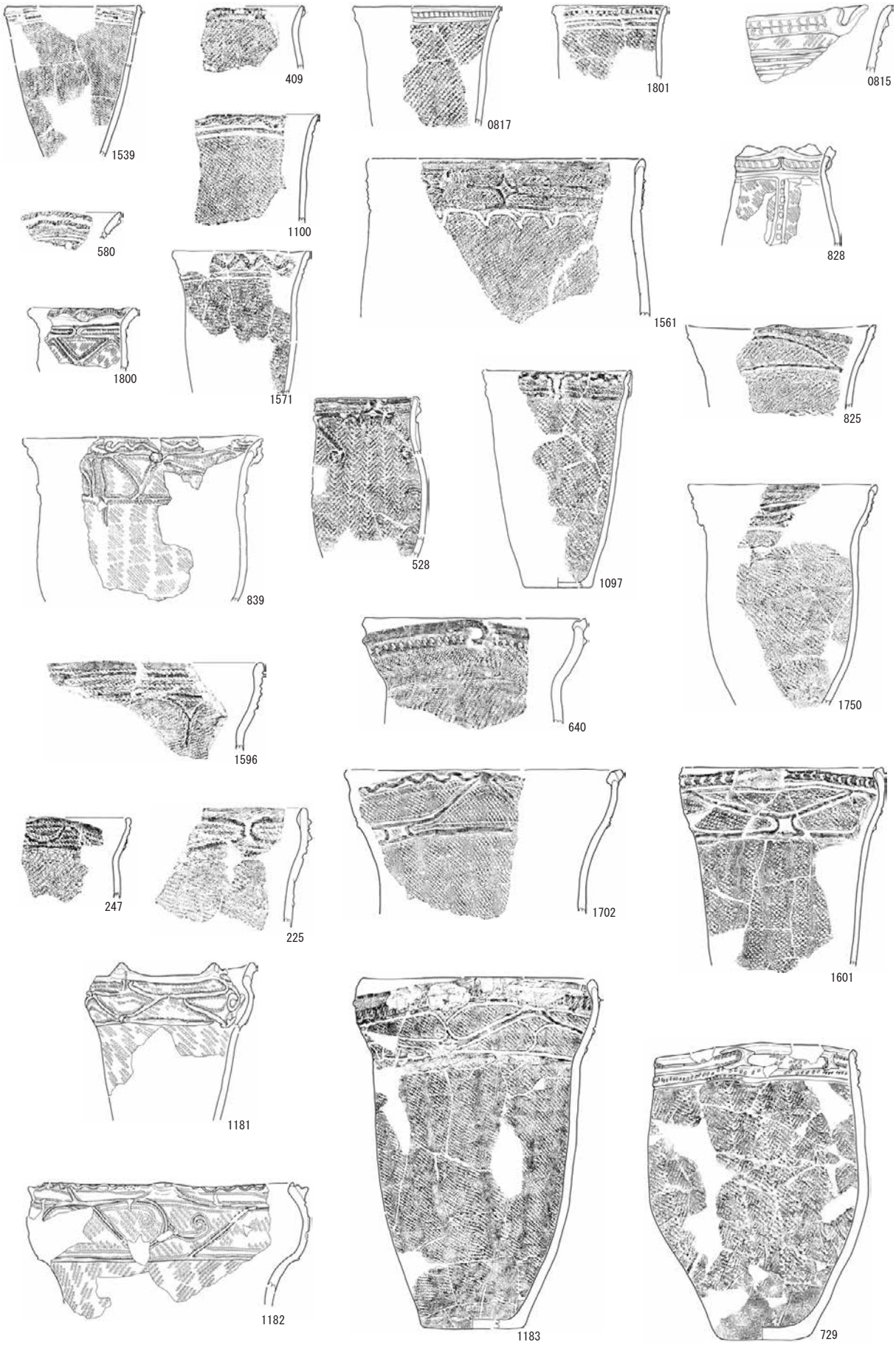

882

1809

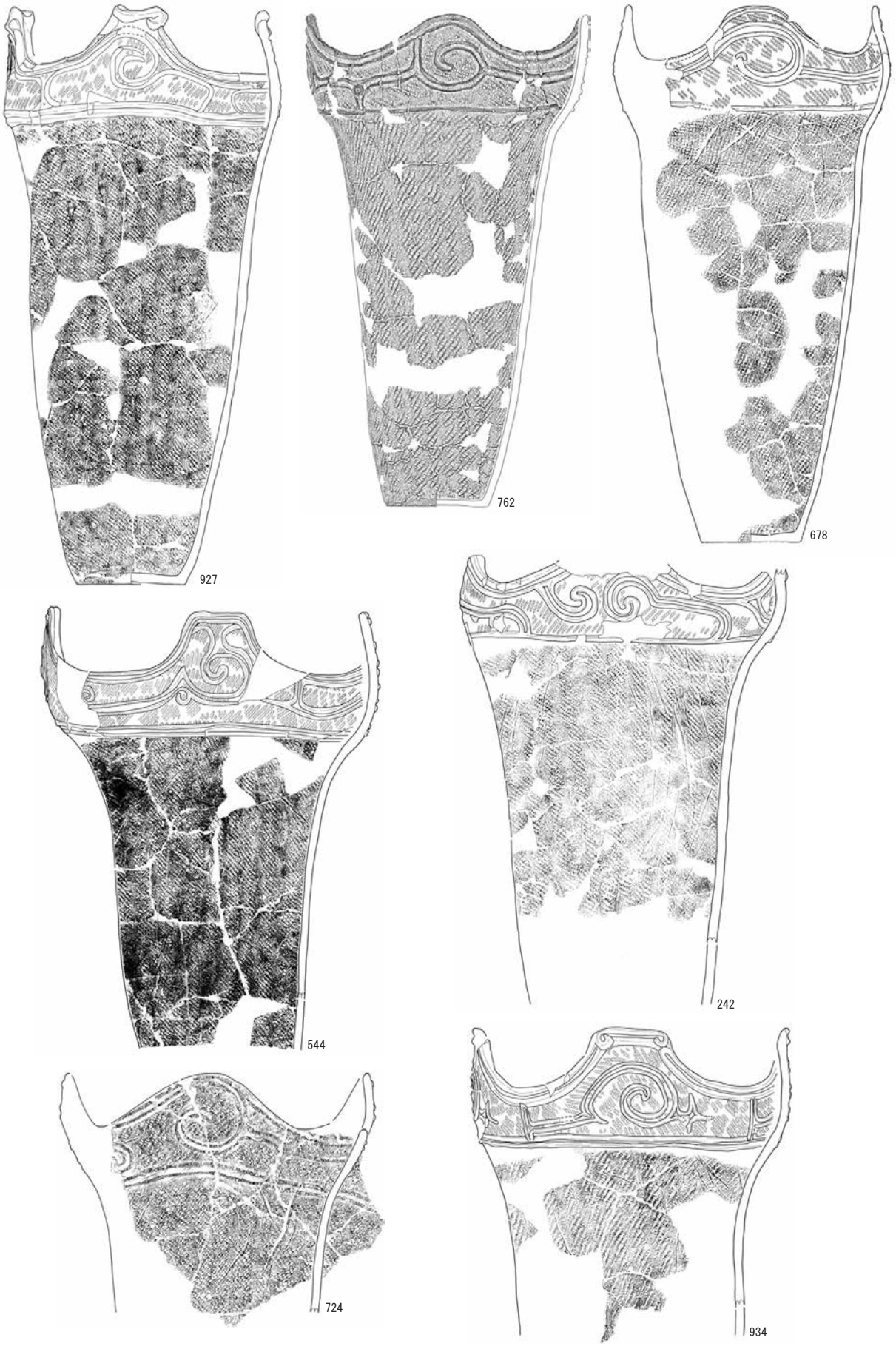
第 79 図　縄文土器集成図（７）　Ⅱ群３類／Ⅲ群１類　S=1/6



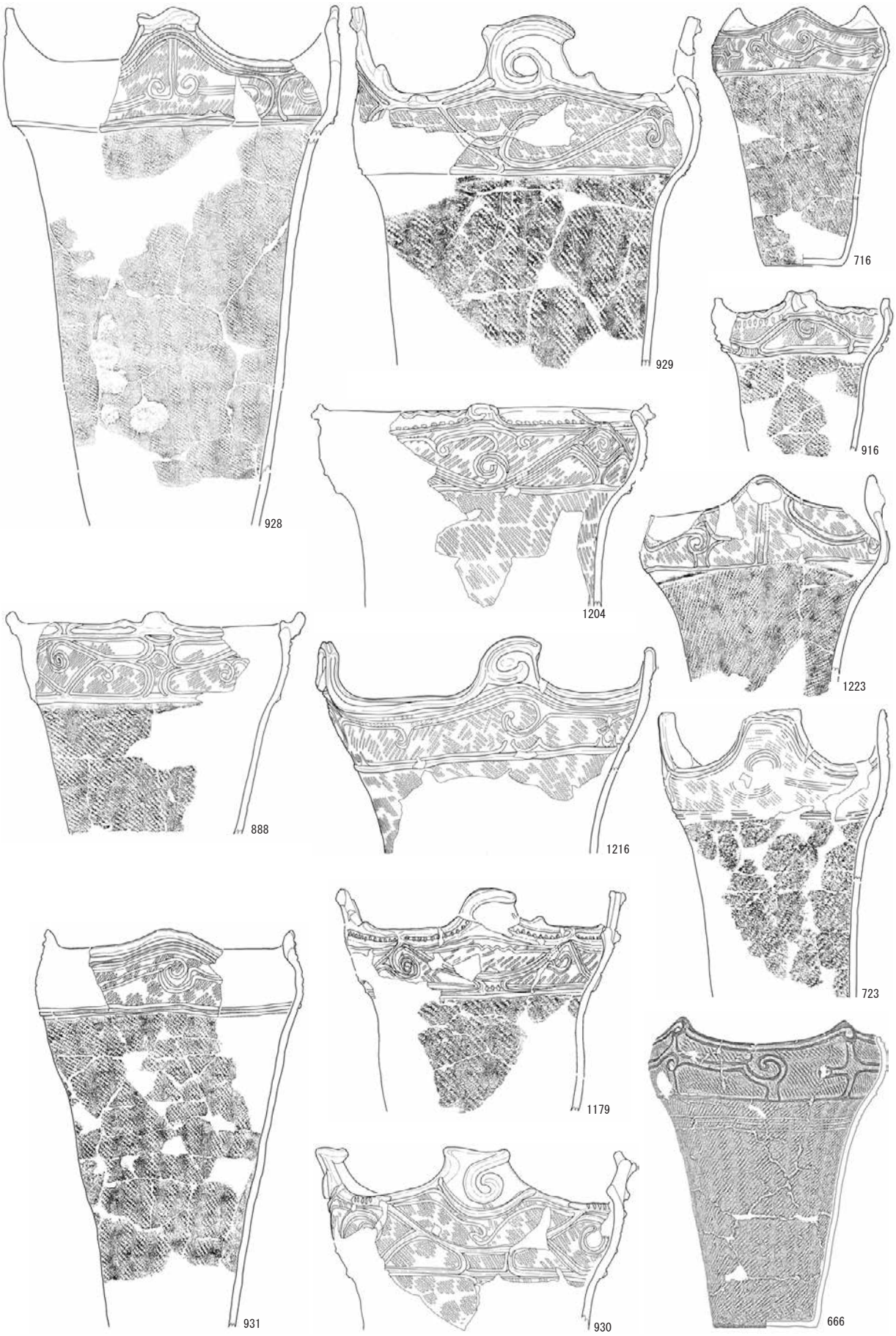
第 80 図　縄文土器集成図（８）　Ⅲ群１類　S=1/6



第 81 図　縄文土器集成図（９）　Ⅲ群２類　S=1/6

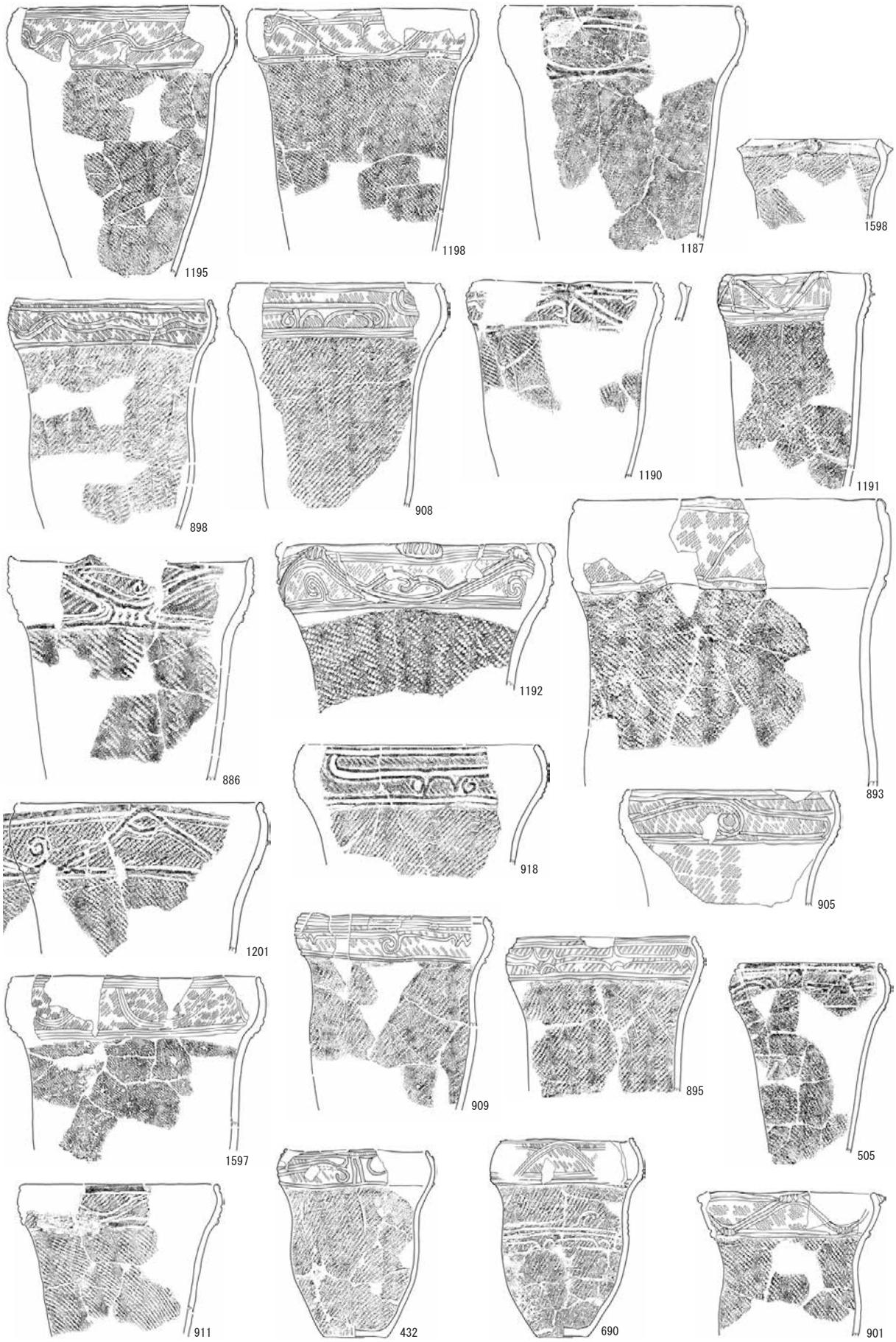


第 82 図　縄文土器集成図（10）　Ⅲ群３類　S=1/6

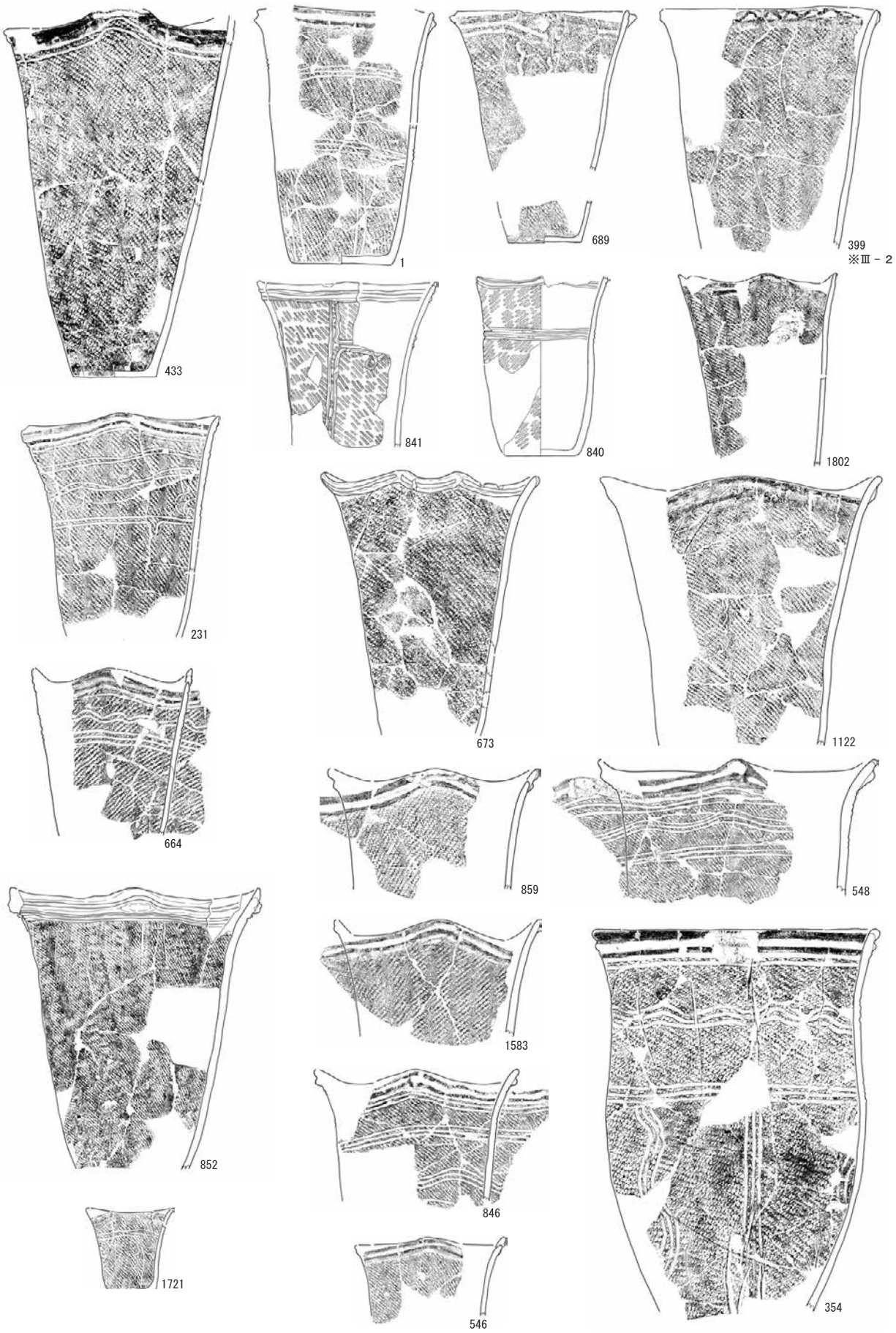


第 83 図　縄文土器集成図（11）　Ⅲ群３類　S=1/6

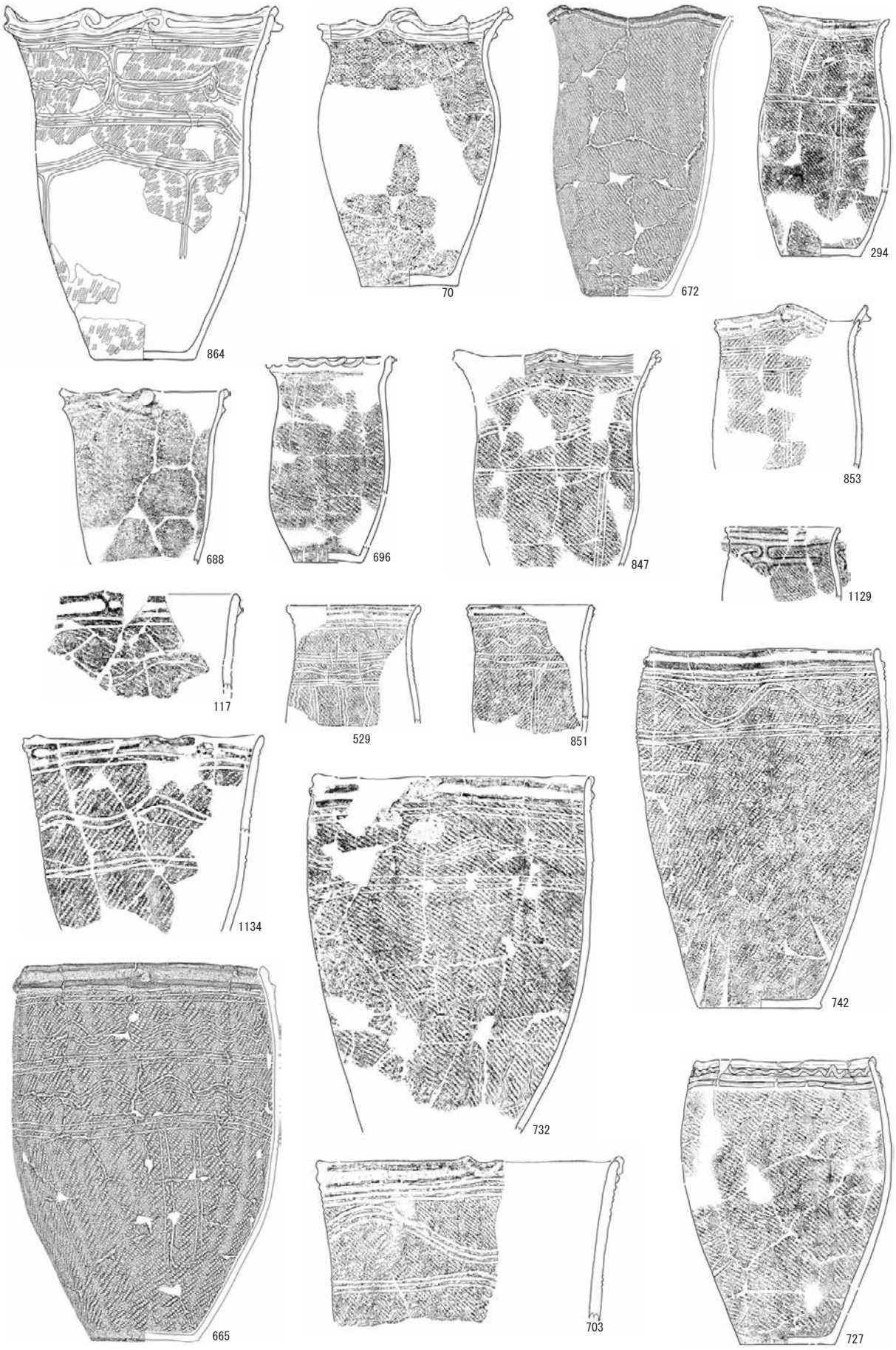
第 84 図　縄文土器集成図（12）　Ⅲ群３類　S=1/6



第 85 図　縄文土器集成図（13）　Ⅲ群３類　S=1/6

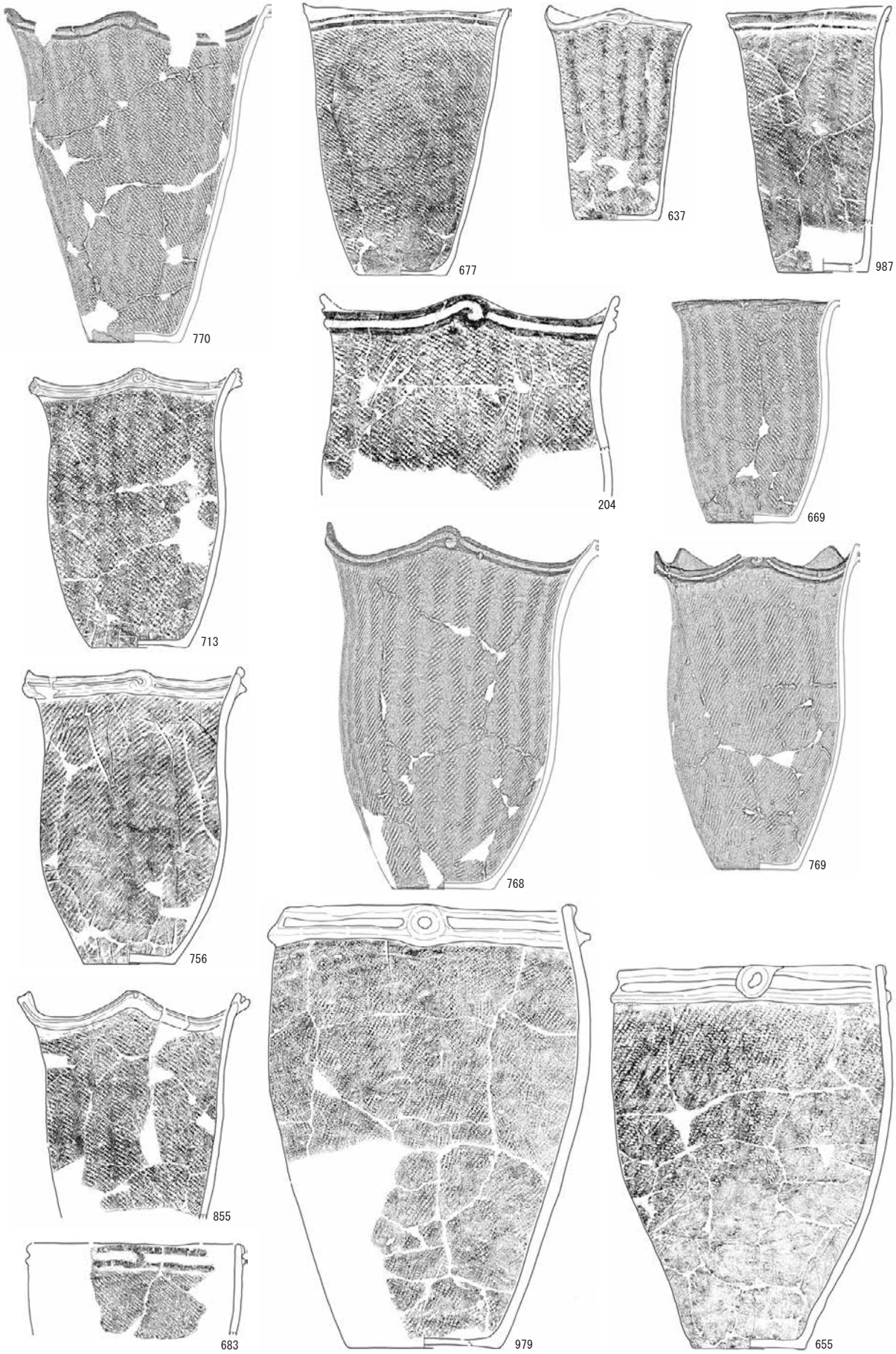


第 86 図　縄文土器集成図（14）　Ⅲ群３類　S=1/6

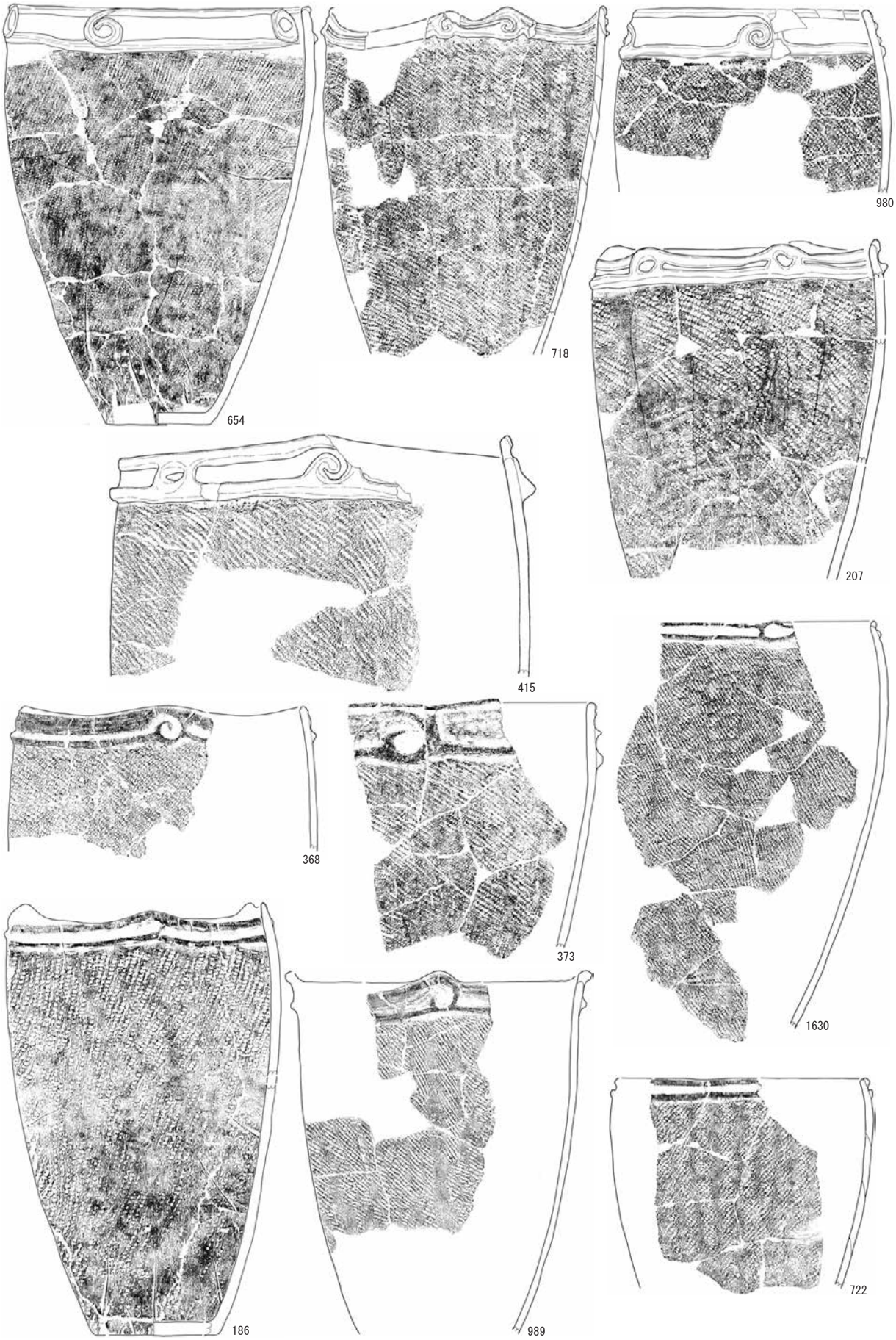


第 87 図　縄文土器集成図（15）　Ⅲ群３類　S=1/6

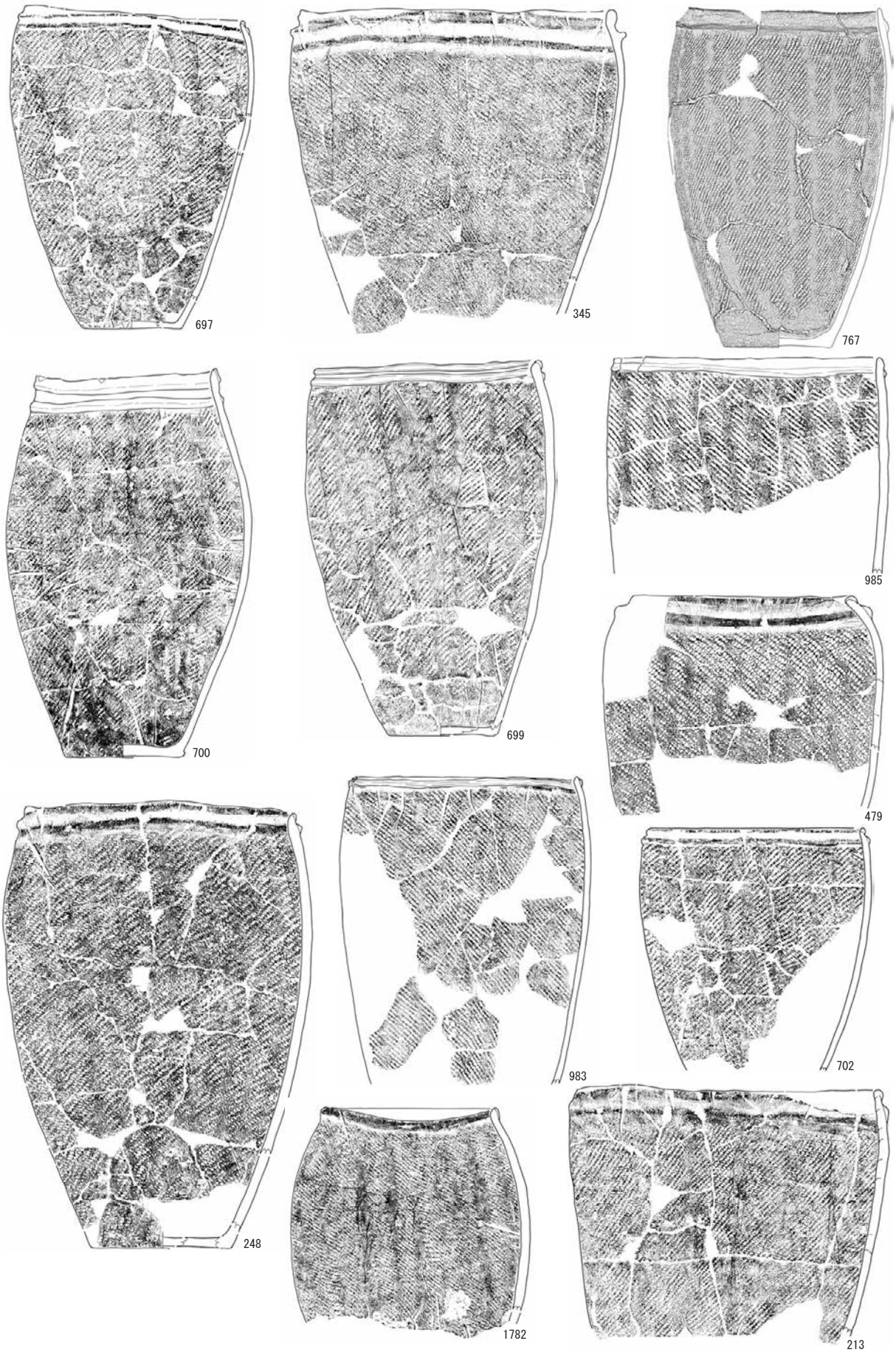
第 88 図　縄文土器集成図（16）　Ⅲ群３類　S=1/6



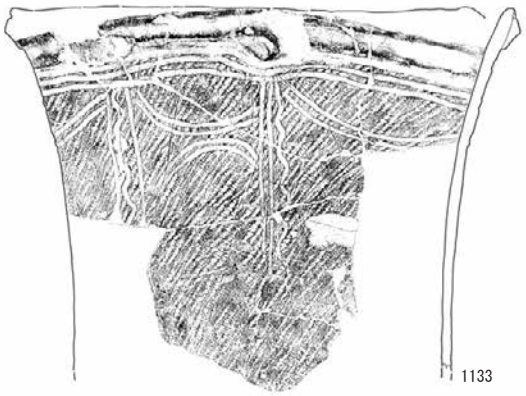
第 89 図　縄文土器集成図（17）　Ⅲ群４類　S=1/6

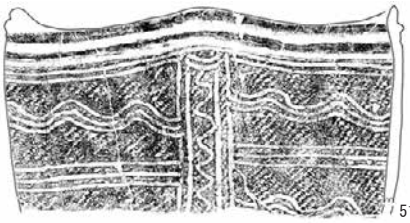


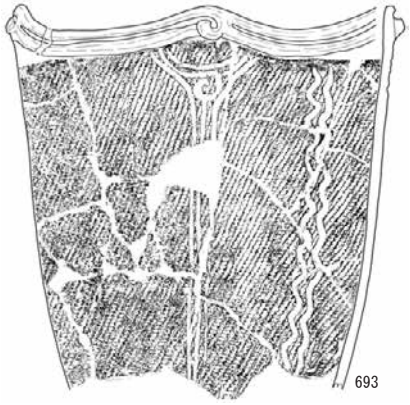
第 90 図　縄文土器集成図（18）　Ⅲ群４類　S=1/6

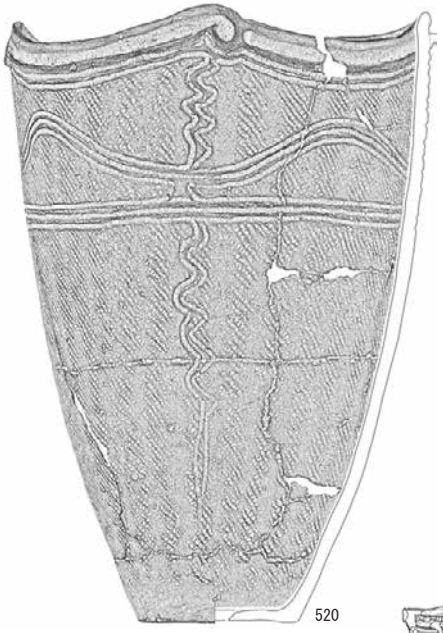


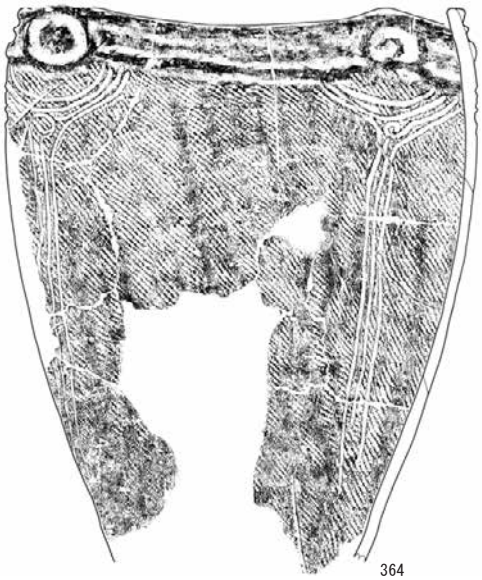
第 91 図　縄文土器集成図（19）　Ⅲ群４類　S=1/6

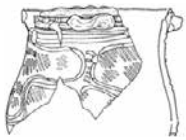


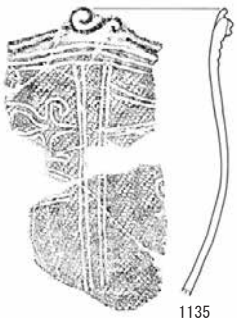




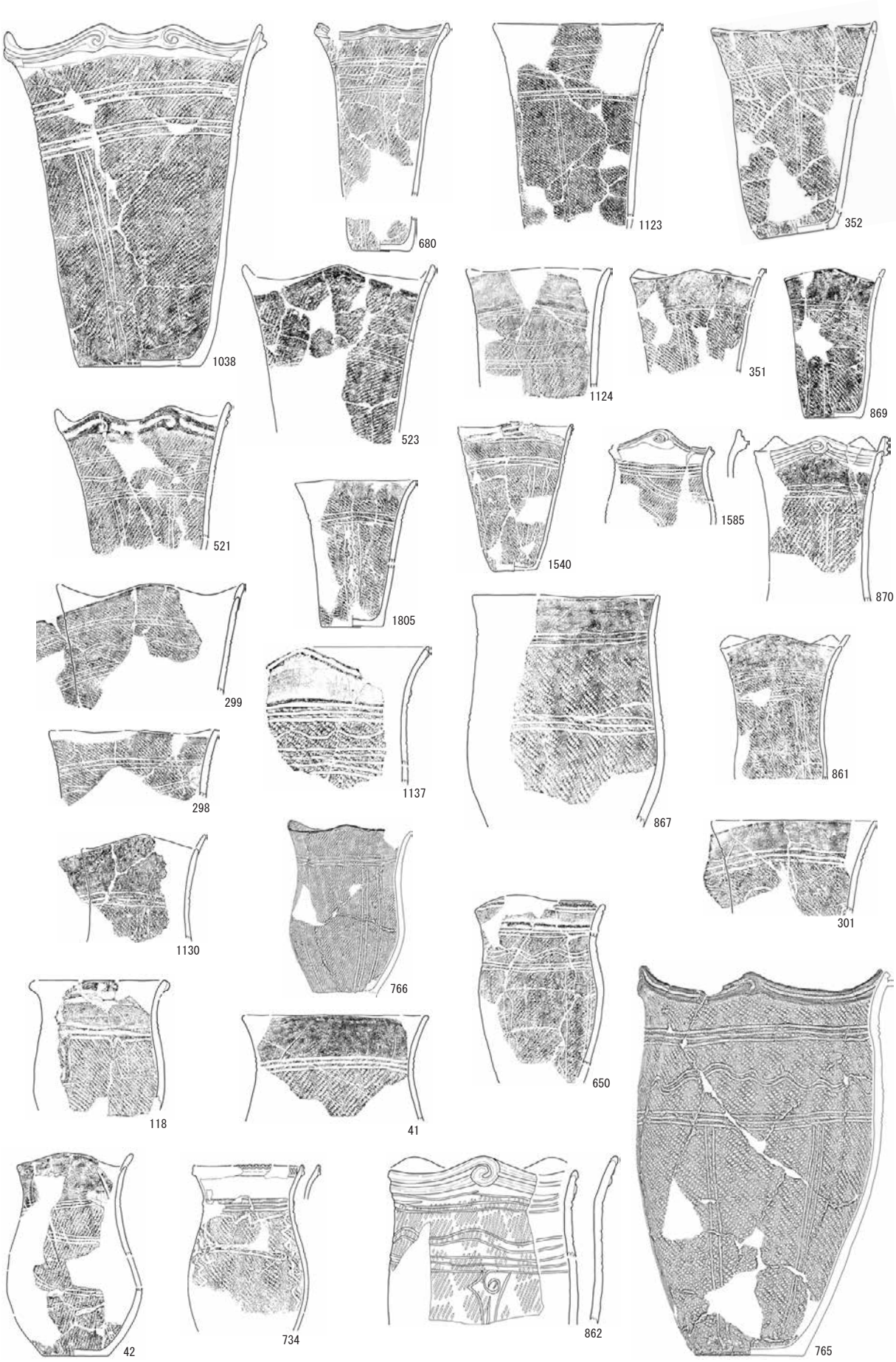






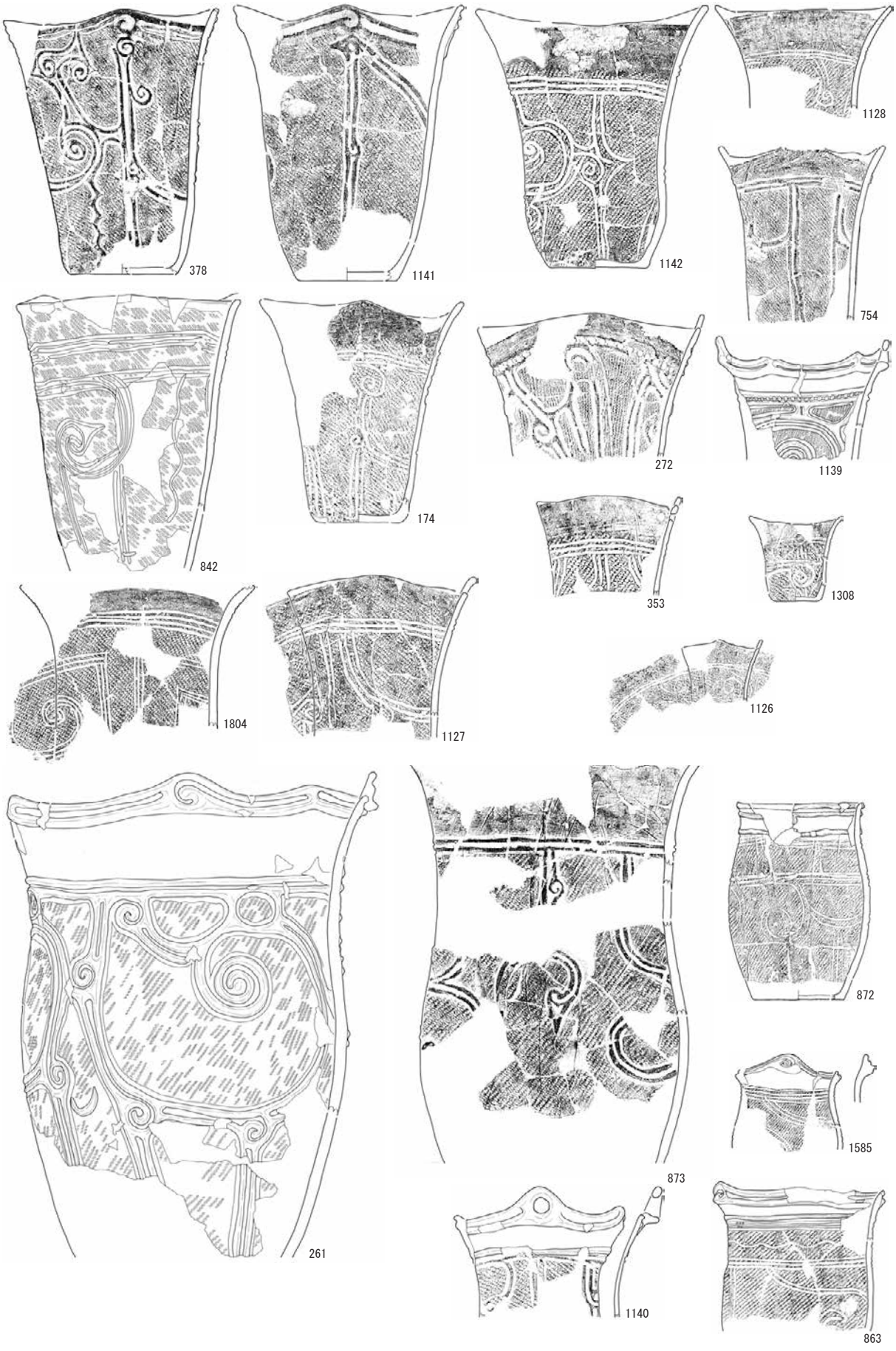


第 92 図　縄文土器集成図（20）　Ⅲ群５類　S=1/6

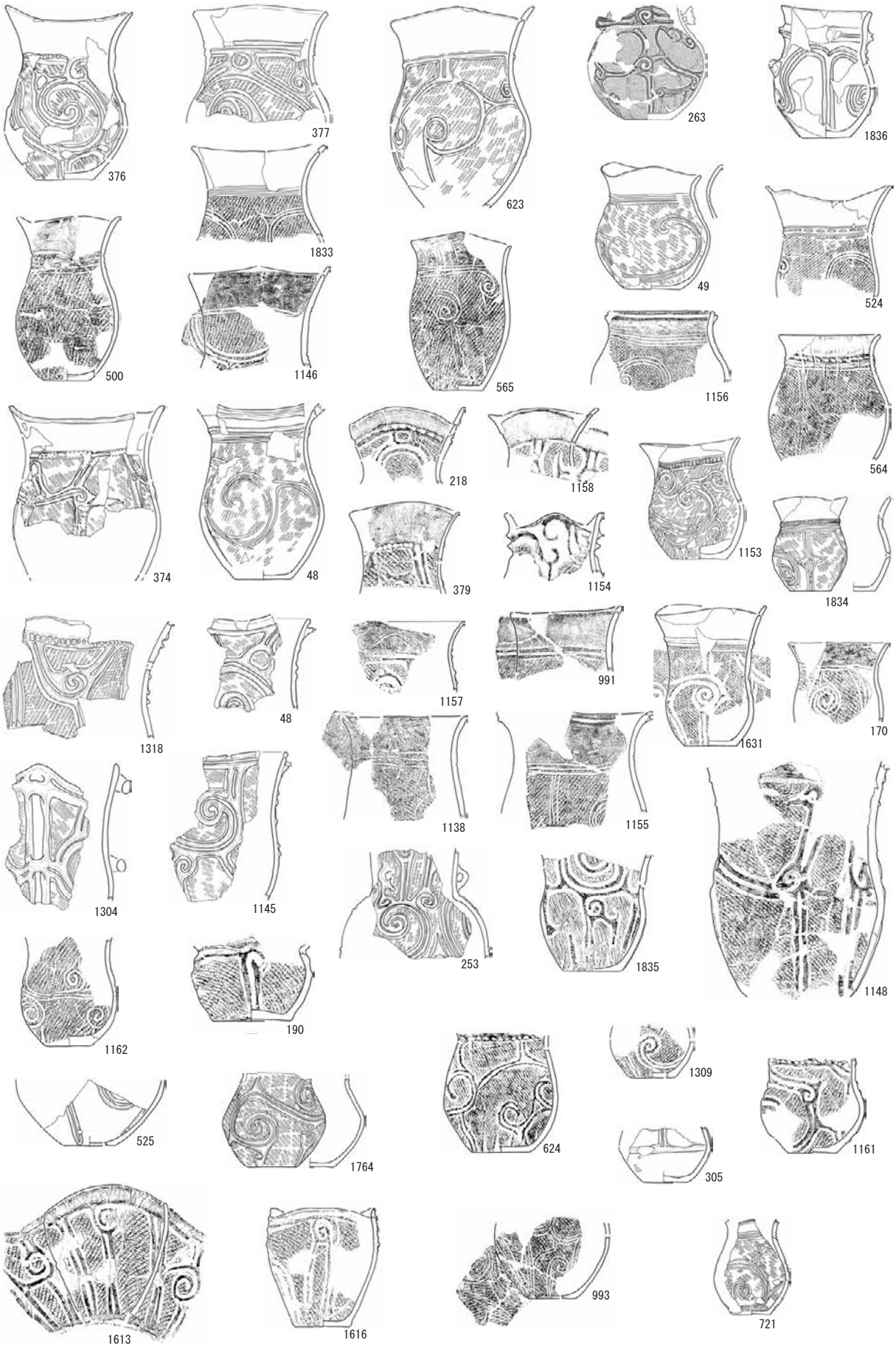


第 93 図　縄文土器集成図（21）　Ⅳ群 1 類　S=1/6

第 94 図　縄文土器集成図（22）　Ⅳ群２類　S=1/6

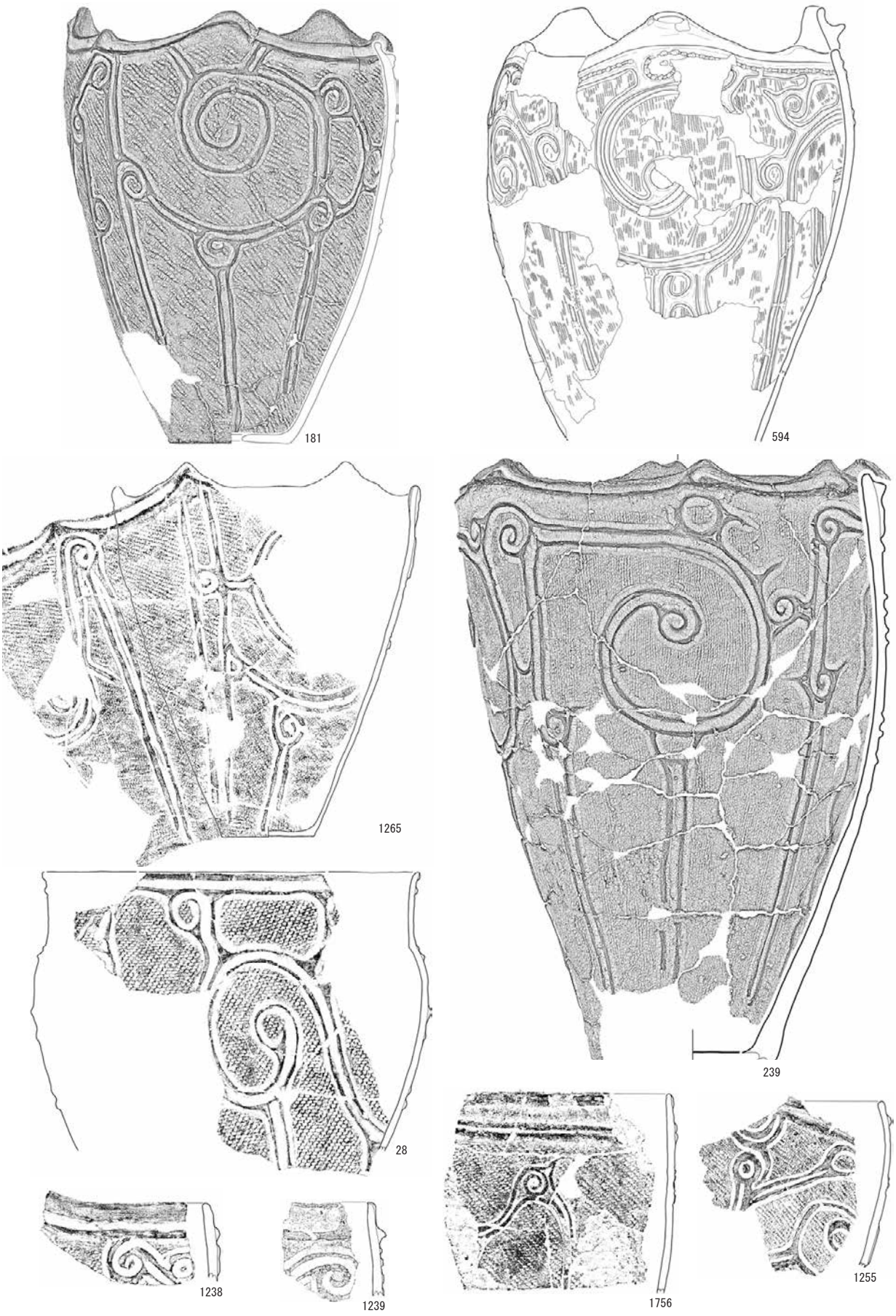


第 95 図　縄文土器集成図（23）　Ⅳ群３類　S=1/6

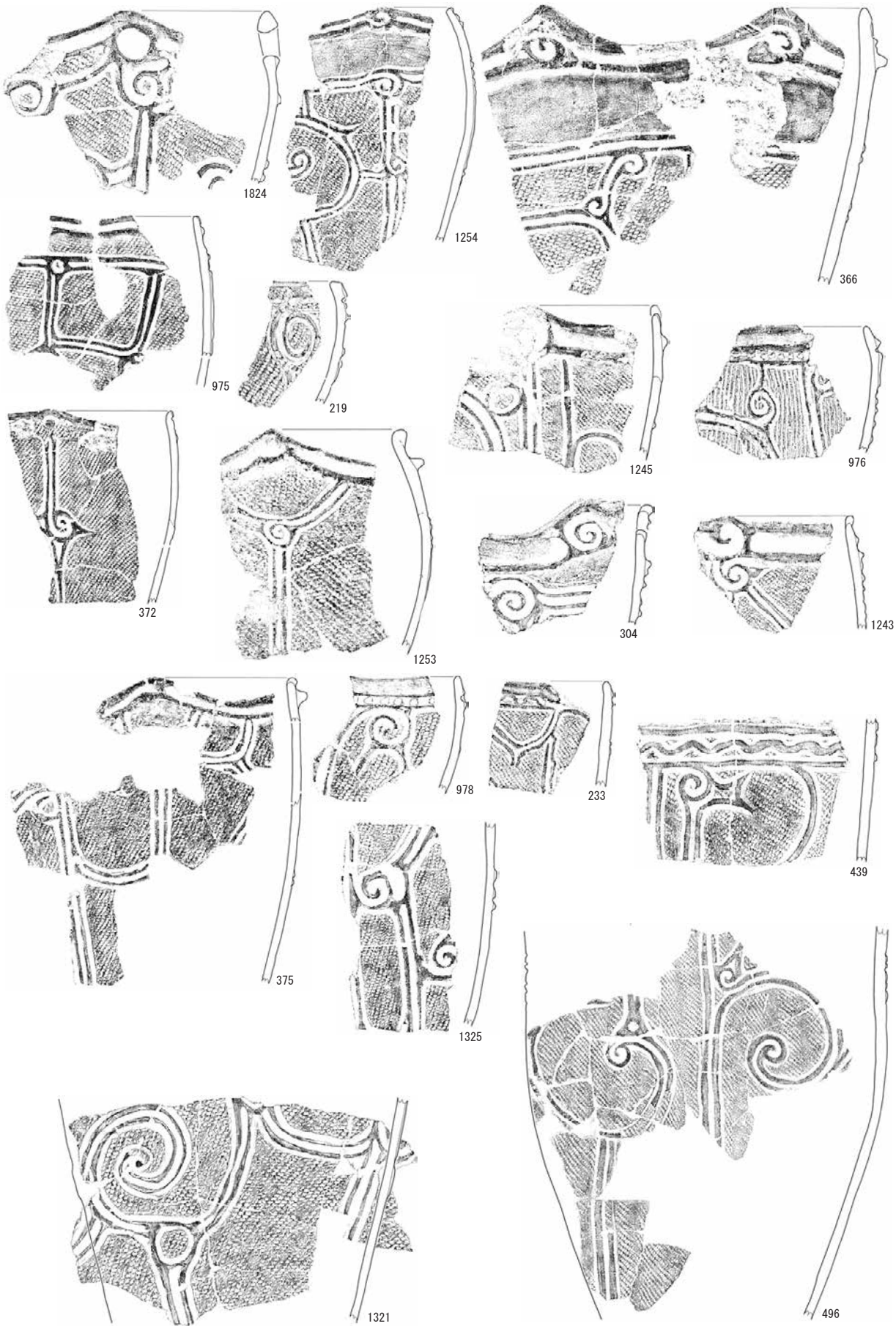


第 96 図　縄文土器集成図（24）　Ⅳ群３類　S=1/6

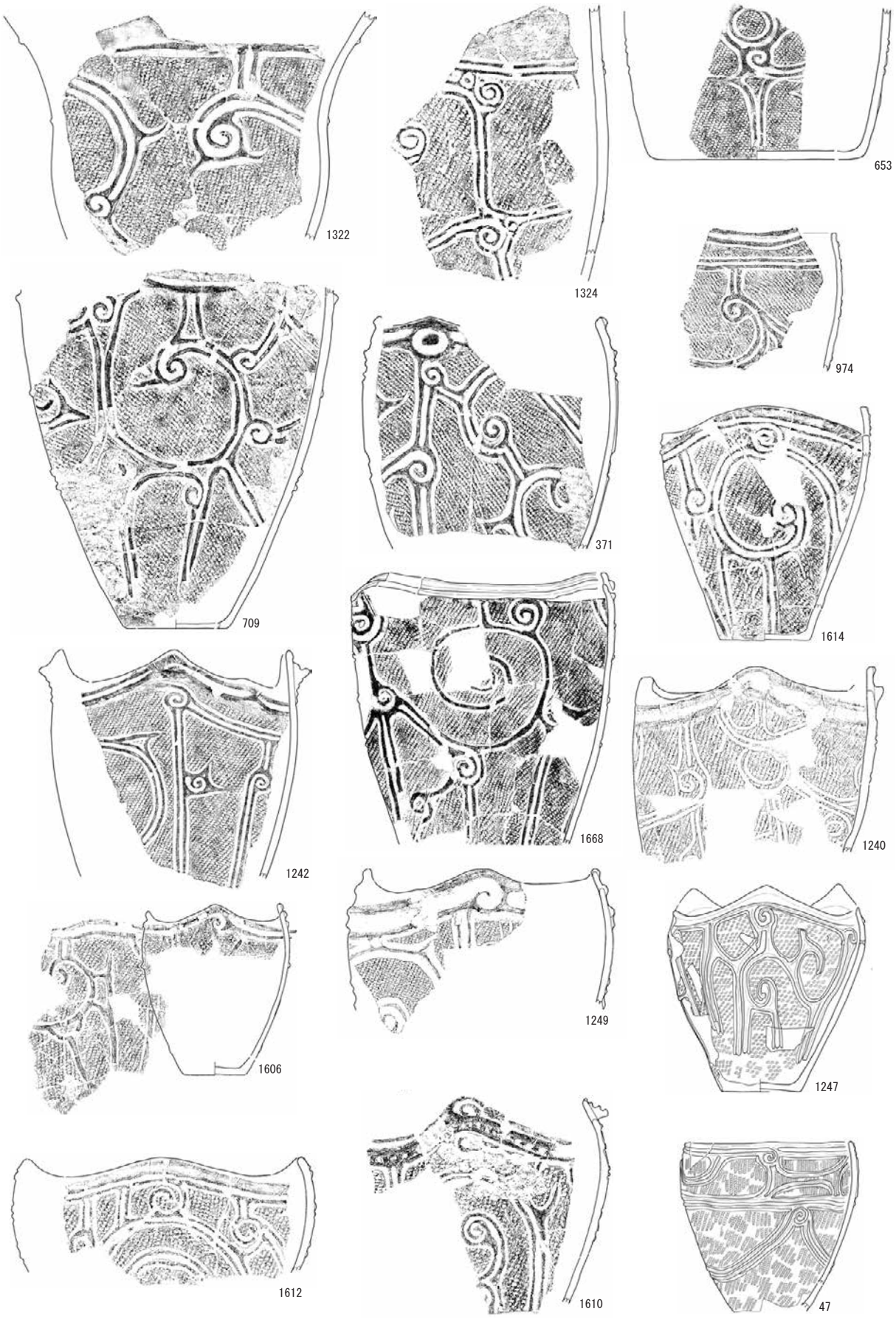
第 97 図　縄文土器集成図（25）　Ⅳ群３類　S=1/6



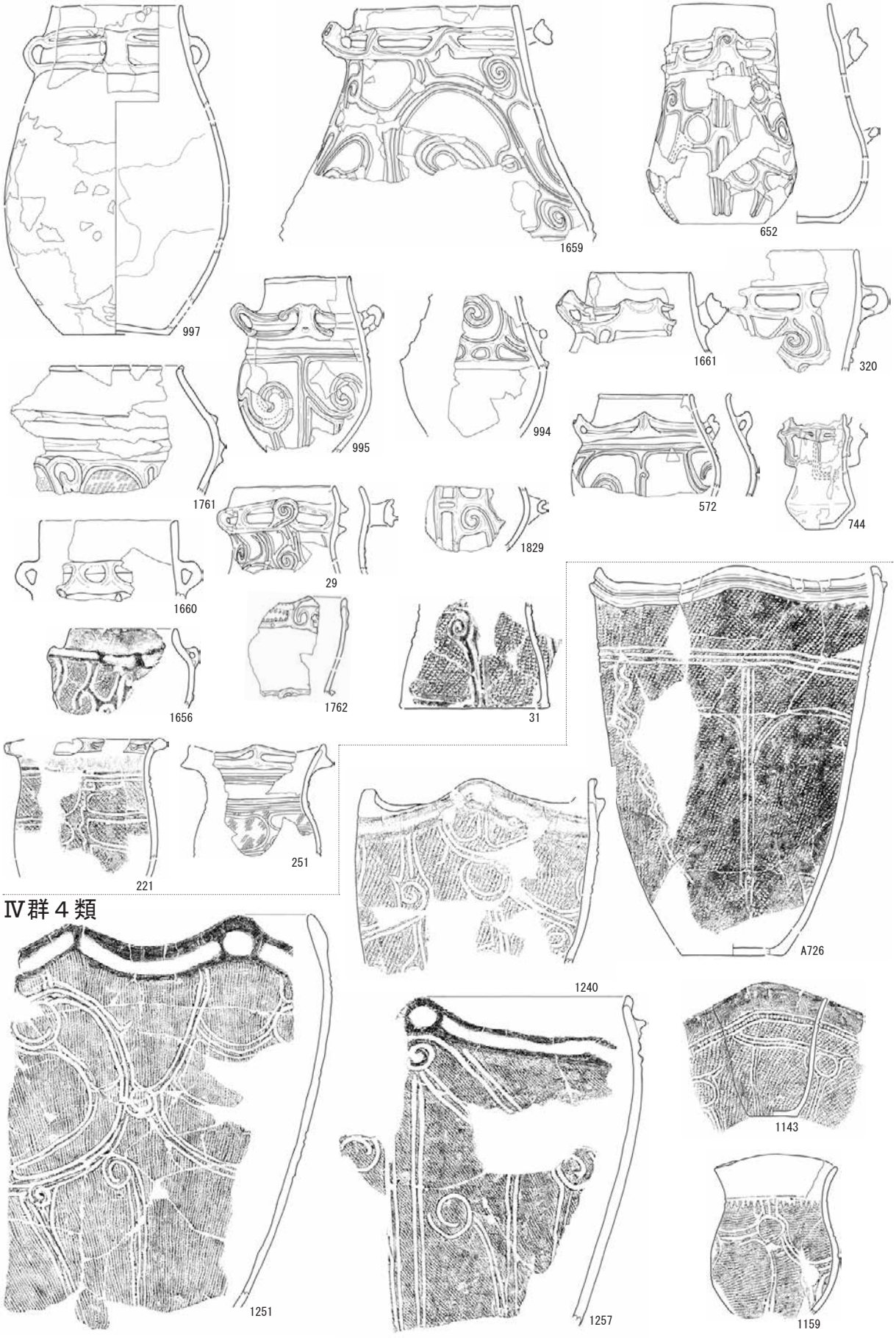
第 98 図　縄文土器集成図（26）　Ⅳ群３類　S=1/6



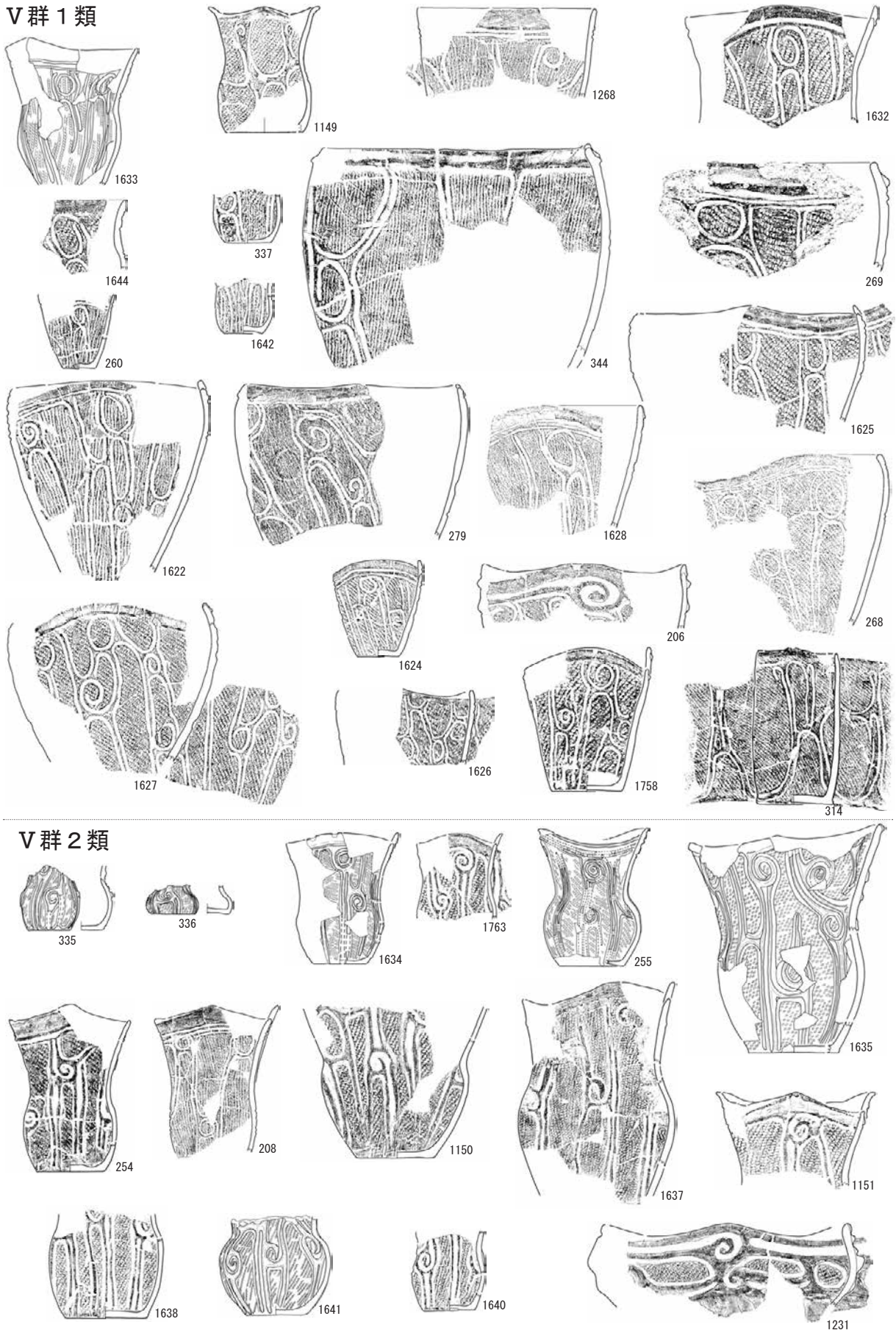
第 99 図　縄文土器集成図（27）　Ⅳ群３類　S=1/6



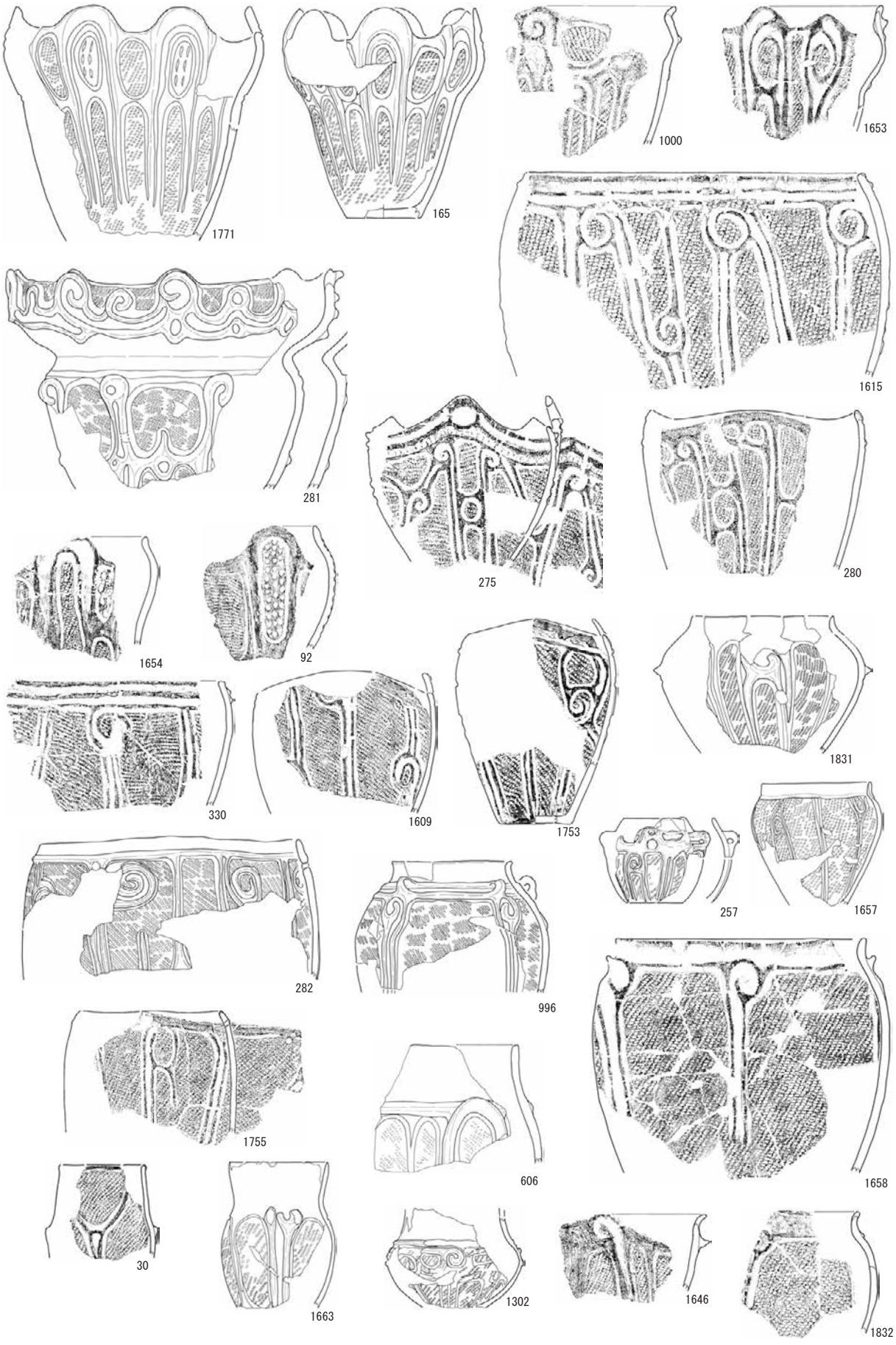
第 100 図　縄文土器集成図（28）　Ⅳ群３類　S=1/6



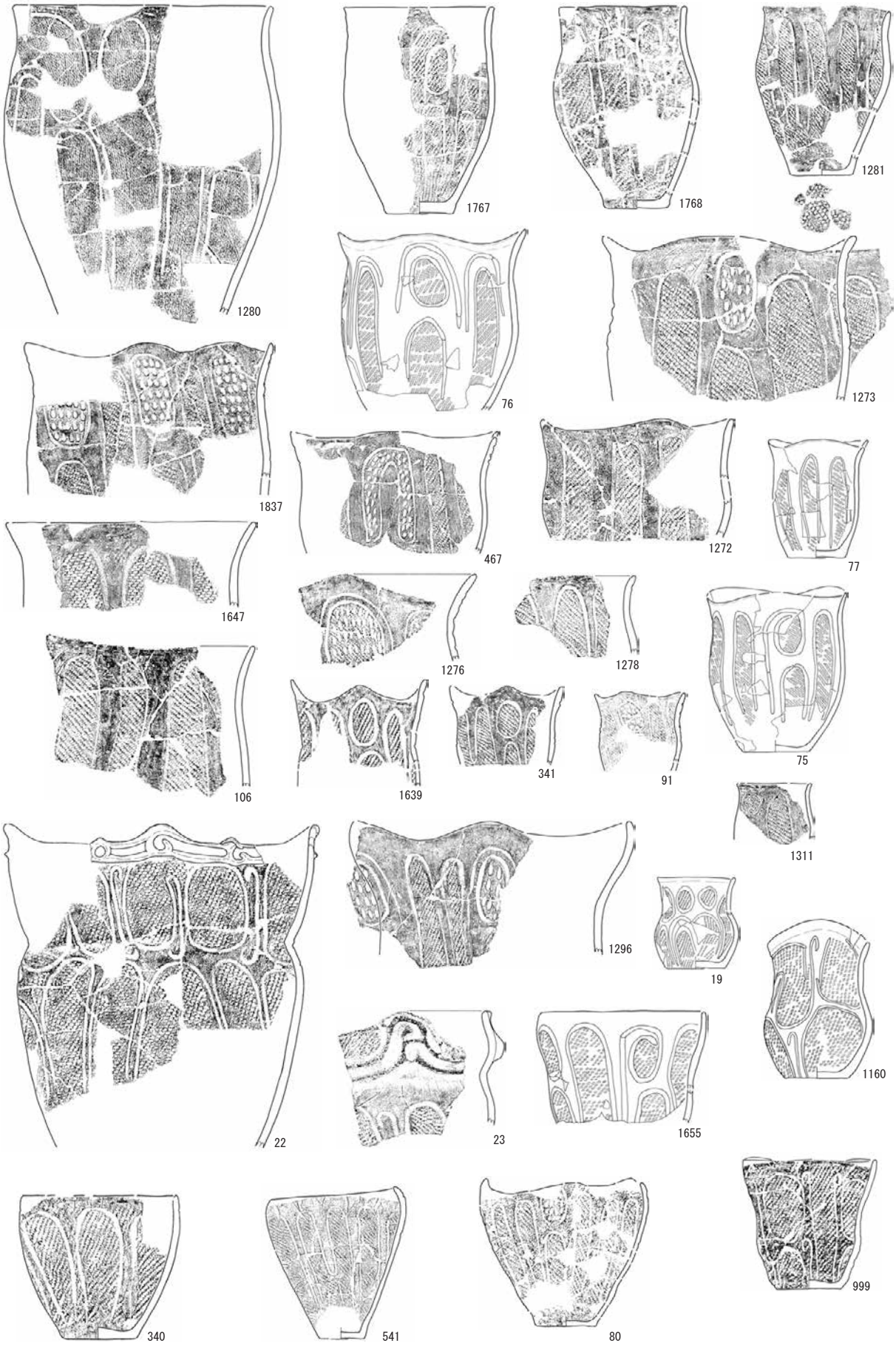
第 101 図　縄文土器集成図（29）　Ⅳ群３・４類　S=1/6



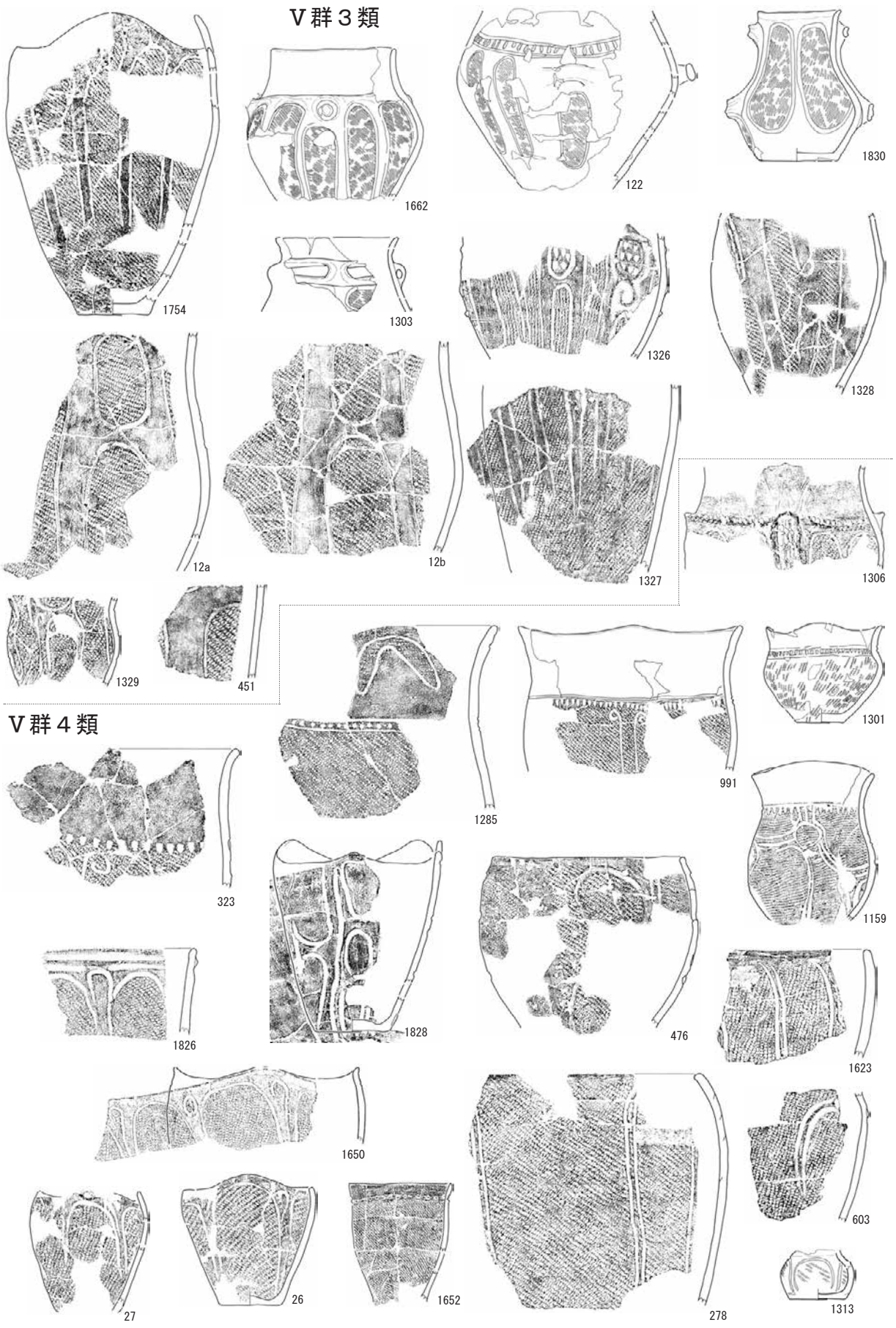
第 102 図　縄文土器集成図（30）　Ⅴ群１・２類　S=1/6



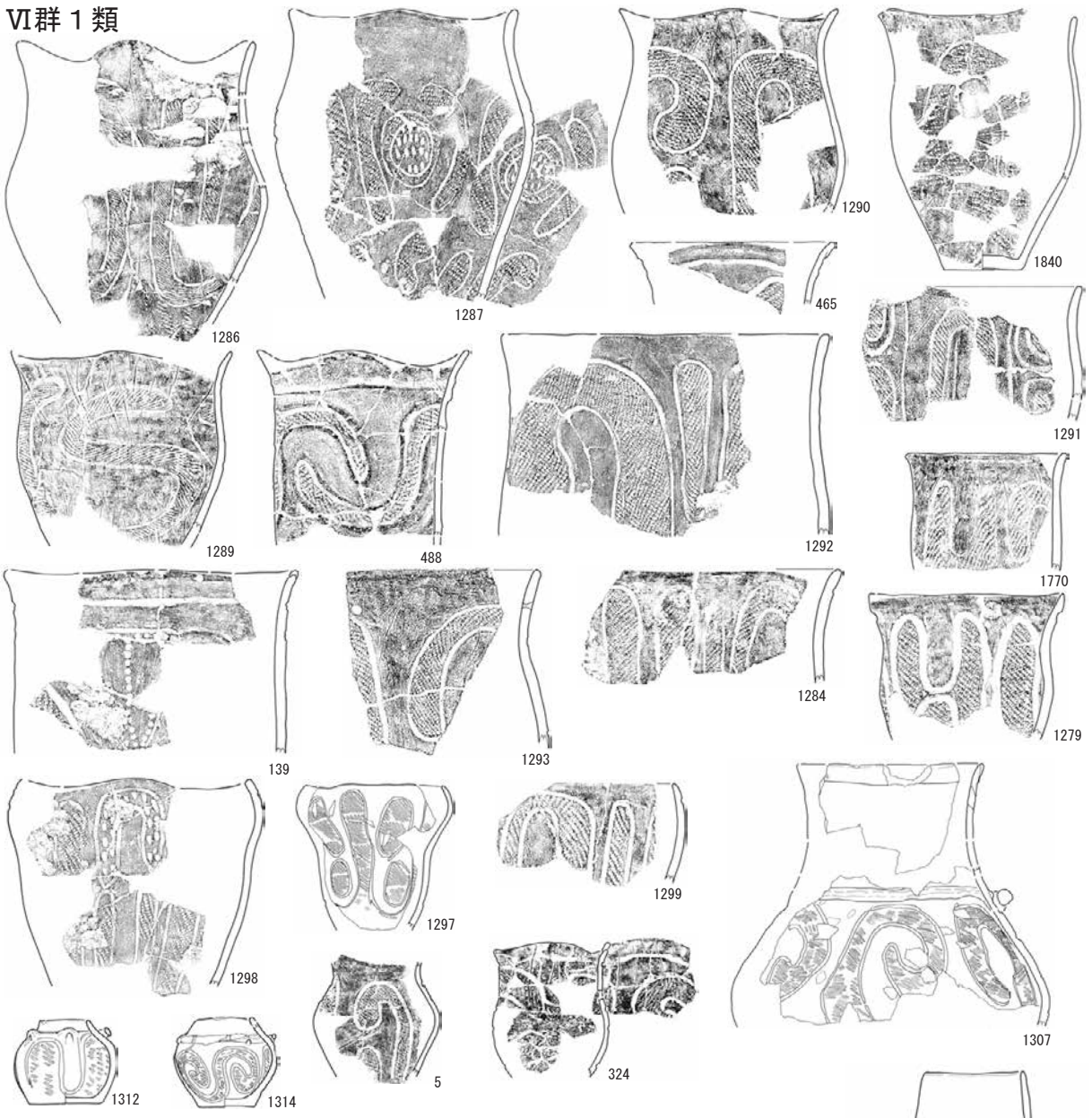
第 103 図　縄文土器集成図（31）　Ⅴ群２類　S=1/6



第 104 図　縄文土器集成図（32）　Ⅴ群３類　S=1/6



第 105 図　縄文土器集成図（33）　Ⅴ群３・４類　S=1/6



第 106 図　縄文土器集成図（34）　Ⅵ群１・２・３類　S=1/6

別が難しい個体があるが、沈線による曲線上の区画内を無文帯とするもので、地文部が区画とならず開放的となるものである。これらの特徴から大木 10 式中段階（阿部 2008）に対応すると想定している。Ⅵ群３類は、沈線文⑧が施されるもので、曲線的なＬ字状の区画（区画内は無文帯）を横方向に連続して配するもので、区画同士が重複するものである。図示したものは１点のみのため全容は不明である。わずかな特徴から類推すると大木 10 式新段階（阿部 2008）に対応する可能性がある。

（７）小　　結

以上、おもに文様の組み合わせによって分類を試み、それぞれ既存の編年に対応させてみた。土器の出土層位に恵まれておらず、文様の特徴を重視した分類となった。そのため分類に曖昧な点を残すが、この分類に従って遺構の年代を決定したものである。今回は土器の出土量が膨大であったため他遺跡の資料との比較は行えなかった。また、ある程度器形が判明する土器が多く出土しており、今後この地域の土器編年に良好な資料を提供できたのではないかと考えている。

２　遺構について

今回の調査では、竪穴建物跡 97 棟、フラスコ状土坑 444 基、その他土坑 64 基、焼土遺構と製鉄関連炉とその付属施設（工房）などを調査している。製鉄関連遺構や獣骨が埋葬された土坑を除けば、ほぼ縄文時代中期に属する遺構である。これらの各遺構の帰属時期については、先述の通りであるが、再度時期ごとにまとめて、変遷過程を検討する。

（１）竪穴建物跡

全体的な特徴　縄縄文時代に帰属するものは 95 棟（計 97 棟のうち２棟は製鉄関連の遺構）となる。これら竪穴建物の立地をみるため、調査区内を地形にあわせて６区分した（第５図参照：①南尾根、②谷、③北尾根と中尾根の南向き斜面、④北尾根、⑤北端の尾根、⑥中尾根）。このうち竪穴建物は、①南尾根上、②谷、③の下位、④のうち頂部のみ、⑤の下位付近に集中している。平坦面がある④の北尾根上は頂部を除き立地するものはない。③や④などでは、ある程度傾斜がゆるやかな地点を選地しているとはいえ、斜面地に立地する例も多いことが大きな特徴といえる。とくに③は、北尾根と中尾根の間には埋没沢があり、この部分が周囲よりも凹んでいるため傾斜が緩やかになっている。ここを中心として、竪穴建物やフラスコ状土坑が密集している。立地する傾斜角度は、ゆるやかな場合でも 15°～19°程度である。このため竪穴建物の斜面下側は流出しているものがほとんどである。また、傾斜角度が 30°前後の場所に立地する竪穴建物もある（この場合、竪穴建物は一部の壁を残して床面のほとんどが流出している）。数は少ないもののあまり安定しない場所に立地する点も含めると竪穴建物の占有する立地がある程度限定（使い分け）されていた可能性が考えられる。また、フラスコ状土坑と重複する場合、すべてではないが竪穴建物の方が新しい傾向がある。この点も時期により場所を使い分けている証左のひとつとなろう。

時期の設定　第Ⅴ章で縄文時代の土器をⅠ群～Ⅷ群に分類したが、既存の土器型式とおおよそ対応するものである。そのためこれらは時期区分に変換することができる。ここではⅠ～Ⅷ群の土器群を、Ⅰ期～Ⅷ期という時期区分に変換して使用する。既存の土器型式との対応からⅢ期が縄文時代中期中葉前半（大木 8a 式併行）、Ⅳ期が中期中葉後半（大木 8b 式併行）、Ⅴ期が中期後葉（大木９式併行）、Ⅵ期が中期末葉（大木 10 式併行）の時期に相当する。それ以外の時期については明確にその時期の

遺構が確認されていないためここでは触れない。以下では上記のような年代観で記載する。

時期別分布　今回調査した縄文時代の竪穴建物は、すべて中期に帰属する。もっとも帰属時期の決定はある程度の推定を含んでいるため、それ以外の時期の可能性も残す。第 22 表に時期を示す。あまり時期を限定できない（想定する時期幅が広い）例も多いが、Ⅲ～Ⅵ期までのものがほとんどである。ある程度土器がまとまって出土するⅡ期やⅦ期の遺構は今回の調査区内では検出できなかった。次に時期別に、竪穴建物の立地をみていく（第 111～112 図）。Ⅲ期は③南向き斜面のとくに最下位に位置するものが多い（③・⑤の下位）。そのほか①や②の一部に存在する可能性がある。これらはいずれも今回の調査区では相対的に低い場所であり、南斜面上位や北尾根付近など相対的に高い地点には、この時期の竪穴建物が確認できない。またフラスコ状土坑と重複する例が少ないことが特徴としてあげられる。次のⅣ期になると、Ⅲ期と同様の場所に立地する（重複がある）点に加え、それまでにはなかった南斜面上位にも立地が広がるようになる。今回の調査区が細長いため、周囲の状況が把握しづらいが、少なくとも調査区内ではそのようにみえる。また、フラスコ状土坑と重複する例が多いこともⅢ期とは異なる特徴である。つづくⅤ期でも同様の傾向を示す。Ⅵ期は、該当遺構が少ないが、Ⅴ期と同様の可能性がある。したがってⅢ期とⅣ期の間には立地の点において大きな差があることが現時点ではわかる。

炉の形態　調査した竪穴建物の多くには炉が伴う（第 22 表）。流出したものが多いが、残された炉の形態には、石囲炉と複式炉がある。石囲炉の平面形は、円形を基調とするものが多いが、方形を基調とするものもある。大きさは、直径が 40～70 ㎝のものと 80～110 ㎝の２つがある。前者を小型、後者を大型とし、それにも平面形も円形と方形基調のものがある。もっとも一般的な石囲炉は、小型で円形を基調とするものである。そのほか、土器埋設が炉内と炉外に隣接するものがある。また、地床炉と考えられる痕跡もいくつかの竪穴建物に存在するが、床面が流出しているものが多く、それが単独で存在するのか、石囲炉などの炉がほかにあるのか不明である。時期別では、Ⅲ期の竪穴建物にある炉はすべて石囲炉である。小型で円形のもののみで占められる。Ⅳ期にも同様の傾向を示すが、大型の石囲炉、外側に埋設土器が設置されるものが加わるようである。Ⅴ期になると複式炉が採用されるが、石囲炉も一定数存在しているようである。もちろん帰属時期の決定が不確かな部分もあるため一概に言えないが、複式炉はⅤ期の中に伴うようである。

規模　規模については、これまで触れてきたように大部分の竪穴建物が斜面下に流出しているため規模が完全に判明できるものはない。谷に立地する建物についても後世の土砂流出により大部分が破壊されている。そのため、これらの残された痕跡から（弧状に残存する壁から復元）、推定した数値で比較してみる。第 22 表をみると、今回調査した竪穴建物の規模は４つに分けることができる。①径が２～4.5 ｍの間にあるもの（小型１）、② 4.6～6.5 ｍの間にあるもの（小型２）、③ 6.6～9.5 ｍの間にあるもの（中型）、④ 10 ｍ以上のもの（大型）である。もっとも数が多いのは①で 41 棟、次いで②が 22 棟、③が９棟、④が２棟である。なお計測不能は 21 棟である。この規模の差は、時期別では有為な差がないため、機能差や社会的な差があった可能性がある。また、立地の違いも影響していると考えられる。②以上の大きさの竪穴建物は、北尾根頂部や南斜面の下位、最下位、谷、南尾根など平坦地や比較的傾斜の緩い場所に立地することが多い。これに対し②以下の竪穴建物は、斜面に立地するものが多い傾向にある。ただし、そこに立地する動機については不明である。機能差や社会的な差があった可能性は残る。

第 22 表　竪穴建物一覧表

(m)

遺構名	立地	時期	炉の形態	竪穴規模
SI1	南尾根	大木 10	複式炉	径 6.4
SI2	南尾根	大木 9	複式炉	4.5×2.7(残)
SI3	南尾根	大木 8b～9	石囲炉 / 複式炉？	6.3×4.8(残)
SI4	南尾根	大木 8a～8b	不明	(径 4.5)
SI5	南尾根	大木 8b～9以前	不明	不明
SI6	南尾根	大木 10 以前	不明	径 7
SI7	南尾根	大木 9 以前	不明	4.7×1.5(残)
SI8	南尾根	大木 8a～8b	石囲炉（小型・円形）	不明
SI9	南斜面下位	大木 9～10	不明	(3.9×3.7)
SI10	南斜面下位	大木 9～10	複式炉	(4.1×3.7)
SI11	南斜面下位	大木 9～10	不明	(4.2×3.2)
SI12	南斜面下位	大木 9～10	不明	(径 2.4)
SI13	南斜面最下位	大木 9	石囲炉？(小型・円形)	一辺 5.4
SI14	南斜面最下位	大木 9	複式炉？	(5.4×4)
SI15	南斜面最下位	大木 8a	不明	不明
SI16	南斜面最下位	大木 8a	石囲炉（小型・円形）	(径 5.4)
SI17	南斜面最下位	大木 8a	不明	2.7×2.1
SI18	南斜面最下位	大木 9	石囲炉（大型・方形）？	4.6×3
SI19	南斜面下位	大木 9	石囲炉(小型・円形)？	(径 3～4)
SI20A	南斜面下位	大木 8a	不明	(径 4.5)
SI20B	南斜面下位	大木 8a	不明	(径 3.5)
SI22A	南斜面下位	大木 9	複式炉	6.9×6.2
SI22B	南斜面下位	大木 9	複式炉	7.4×7
SI22C	南斜面下位	大木 9	複式炉？	6.1×5.8
SI23	南斜面下位	大木 9～10	石囲炉(小型？・方形)	(径 3.0)
SI24	南斜面下位	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）？/ 複式炉？	(径 3.6)
SI25	南斜面下位	大木 8b～9	石囲炉？（小型・円形）	(径 3.2)
SI26	南斜面下位	大木（8b～9）	不明	不明
SI27	南斜面下位	大木 8b	不明	不明
SI28	南斜面下位	大木 8b	不明	(径 4.4)
SI29	南斜面下位	大木 8b～9	石囲炉？（小型・円形）	(径 4.6)
SI30	南斜面下位	大木 8b～9	不明（地床炉）	(径2.2～2.4)
SI32	南斜面最下位	大木 8b	石囲炉（小型・円形）	8.7×5.3
SI33	谷部	大木 8b～9	石囲炉(大型・円形)	(径 5.9)
SI34	谷部	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）	(径 4.5)
SI35	谷部	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）	(7.2×6.5)
SI36	谷部	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）+土器埋設炉	(径 7.2)
SI37	谷部	大木 8b	石囲炉(大型・方形)	(径 12)

(m)

遺構名	立地	時期	炉の形態	竪穴規模
SI39	南斜面下位	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）	不明
SI40	南斜面下位	大木 8b～9	不明	不明
SI41	南斜面最下位	大木 8b（古）	土器埋設炉	不明
SI43	南斜面最下位	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）	不明
SI44	谷部(包3)	大木 8b～9	石囲炉？（小型・円形）	(径 3.5)
SI45	南斜面最下位	不明	不明	不明
SI46	北尾根頂部	大木 8b	石囲炉？	径 6.1
SI47	北尾根頂部	不明	石囲炉(小型・円形)	径 3.1
SI48	北尾根頂部	大木 9	石囲炉（大型・円形）+土器埋設炉（外側）	(径5.3～5.6)
SI49	南斜面上位	大木 8b?	石囲炉（大型・円形）	径 3.7
SI50	谷部(包3)	大木 8b～9	石囲炉（小型・円形）	(5.1×4.9)
SI51	谷部(包3)	大木 9	不明	(5.5×4.4)
SI52	南斜面最下位	大木 8b～9	不明	不明
SI53	南斜面最下位	大木 8a～8b	不明	不明
SI54	南斜面最下位	大木 8a(新)～8b(古)	石囲炉（小型・円形）、土器埋設炉	(径 9.6)
SI55	南斜面最下位	大木 7b～8a	不明	4.6×1.7(残)
SI56	南斜面最下位	大木 8a（～8b）	不明	4.2×1.7(残)
SI57	南斜面最下位	大木 8a	不明	5.2×2.8(残)
SI58	南斜面最下位	大木 8b	石囲炉？	不明
SI59	南斜面最下位	大木 8a～8b	石囲炉（小型・円形）	(径 6.0)
SI60	南斜面下位	大木 8a～8b	不明	不明
SI61	北端の尾根	大木 8a	石囲炉（小型・円形）	(径 2.9)
SI62	北端の尾根	大木 8a	石囲炉(小型・円形・内部に土器)	(径 2.8)
SI63	北端の尾根	大木 8a 以降	石囲炉（小型・円形）	不明
SI64	南斜面上位	大木 8b～9	不明	一辺 2.7
SI65	南斜面上位	大木 8b	石囲炉（大型・円形）+土器埋設炉（外側）	7.4×6.8
SI66	南斜面下位	大木 9	複式炉	6.4×6.1
SI67	南斜面下位	中世		
SI68	南斜面下位	中世		
SI70A	南斜面下位	大木 9	複式炉	(径 6～6.5)
SI70B	南斜面下位	大木 9	複式炉	(径 5.0)
SI70C	南斜面下位	大木 9	複式炉	(径 4.1)
SI71	南斜面上位	大木 8b～9	石囲炉(小型・方形)	(径 4.0)
SI72	南斜面中位	大木 8b	石囲炉（小型・円形）	3.0×1.9(残)
SI73	南斜面中位	不明	不明	不明
SI74	南斜面上位	大木 8b～9	不明	(径 2.2)
SI75	南斜面上位	大木 8a	不明	(径 3.0)
SI76	南斜面上位	大木 9	石囲炉(小型・円形・内部に土器)	(一辺 2.3)

（m）

遺構名	立地	時期	炉の形態	竪穴規模
SI77	南斜面上位	不明	不明	2.7×2.3
SI81	南斜面中位	大木 8a	不明	不明
SI82	南斜面中位	大木 8b～9	不明	不明
SI83	南斜面下位	大木 9～10	不明、地床炉	3.5×2.2
SI85	南斜面下位	大木 9～10	不明	（径2.5～3.0）
SI86	南斜面下位	大木 9	土器埋設炉	7.8×7.5
SI89	南斜面下位	大木 8a 以前	石囲炉？	2.2×1.4（残）
SI90	南斜面下位	大木 9～10	複式炉	4.8×3.8（残）
SI91	南斜面下位	大木 8b	不明、地床炉	（径 3.7）
SI92	南斜面下位	大木 8b	石囲炉（小型・円形）	4.1×3.0
SI93	南斜面下位	大木 8a～8b（古）	石囲炉（小型円形）、石囲炉（大型・円形）	径 11.3
SI94	南斜面下位	大木 9	石囲炉（小型・円形）	（径 2.4）

（m）

遺構名	立地	時期	炉の形態	竪穴規模
SI95	南斜面下位	大木 8a	不明	不明
SI96	南斜面下位	大木 8a	石囲炉（小型・円形）？	不明
SI97	南斜面下位	大木 9～10	不明	（径 3.4）
SI98	南斜面下位	大木 9～10	石囲炉？（小型・円形）	（径 3.0）
SI99	南斜面下位	大木 9～10 以降	石囲炉（小型・円形）	一辺 2.4
SI101	南斜面中位	大木 8a	不明、地床炉	（径 2.5）
SI106	南斜面下位	大木 8a	石囲炉（小型・円形）	不明
SI116	南斜面下位	大木 8b	石囲炉（小型・方形）	（径 5.4）
SI117	南斜面下位	不明	石囲炉（小型・円形）	（径 3.6）

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（１）

①南尾根、②谷部、③北尾根南斜面、④北尾根、⑤北端の尾根、⑥中尾根

（㎡）　（cm）　（cm）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積	開口部径	深さ
SK2	①	大木 8a～9	フラスコ形	1.91	140×155	156
SK3	①	大木 8a～8b	フラスコ形	1.67	140×102	134
SK4	①	大木 8a	ビーカー形	2.41	190	198
SK5	①	大木 8b～10	フラスコ形	2.09	157×170	126
SK6	①	大木 8a～8b	フラスコ形	4.31	170×185	180
SK7	①	大木 8a～8b	フラスコ形	1.45	108×120	108
SK8	①	大木 8a～8b	フラスコ形	2.95	195×205	195
SK9	①	大木 8a	フラスコ形	2.21	106	155
SK10	①	大木 8a～8b	フラスコ形	1.62	170×201	150
SK11	①	大木 8a	フラスコ形	3.11	205	37
SK12	①	大木 8a～9	フラスコ形	1.97	120×144	56
SK13	①	大木 8a～8b	フラスコ形	2.06	165×195	61
SK14	①	大木 8a～9	フラスコ形	2.50	111×127	223
SK15	①	大木 8a～8b 以降	フラスコ形	2.13	202	106
SK16	①	不明	フラスコ形	2.30	166	41
SK17	①	大木 8a	フラスコ形	1.90	125×195	154
SK18	①	大木 8a 以前	フラスコ形	2.77	76×93	146
SK19	①	大木 8b～9	フラスコ形	3.48	236×210	151
SK20	①	大木 8a～9	フラスコ形	2.15	135×150	104
SK22	①	大木 8b	フラスコ形	1.89	136×178	92
SK23	①	大木 8a～8b	フラスコ形	1.66	125×195	180
SK24	①	大木 8a～8b	ビーカー形	2.96	200×222	86
SK26	①	不明	フラスコ形	0.72	102	27
SK27	①	大木 8a～8b	フラスコ形	2.93	147×152	80
SK29	①	大木 8b～9 以降	フラスコ形	1.27	121×129	150
SK35	①	大木 8a～9	ビーカー形	1.97	165×171	42
SK40	①	不明	フラスコ形	2.24	152×164	115

（㎡）　（cm）　（cm）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積	開口部径	深さ
SK41	①	不明	フラスコ形	3.99	230×190	102
SK42	①	不明	フラスコ形	0.91	99×108	86
SK43	①	大木 8a	フラスコ形	2.74	156	68
SK46	①	大木 8a～9	フラスコ形	1.39	120×137	110
SK47	①	大木 8a	フラスコ形	2.60	130	63
SK48	①	大木 8b～9	フラスコ形	3.37	271×156	96
SK49	①	大木 8b～9	フラスコ形	3.40	135×191	79
SK60	③最下位	大木 8a～8b	ビーカー形	1.05	130×110	170
SK61	③最下位	大木 8a	フラスコ形	1.31	107×135	157
SK62	③最下位	大木 8a～8b	フラスコ形	1.04	169×183	186
SK65	③下位	大木 9？	フラスコ形	2.96	180×202	240
SK66	③最下位	大木 8a	ビーカー形	0.92	104	120
SK67	③最下位	大木 8a	フラスコ形	2.02	134×120	98
SK68	③最下位	大木 8b	フラスコ形	1.58	122×88	140
SK69	③最下位	大木 8a～8b	フラスコ形	1.65	166×136	170
SK70	③中位	不明	フラスコ形	1.74	175×153	110
SK72	③下位	大木 8b	フラスコ形	2.70	155×161	215
SK75	③最下位	大木大木 9 以前	フラスコ形	0.64	128×61	60
SK76	①	大木 9 以前	フラスコ形	2.85	160	60
SK77	③最下位	大木 8a～8b	フラスコ形	0.73	153×137	142
SK78	③最下位	大木 8a～8b	フラスコ形	1.64	98×34	72
SK79	③中位	大木 8a～8b	フラスコ形	3.03	131×173	220
SK80	⑤	大木 8b	ビーカー形	2.63	170×200	220
SK81	⑤	大木 8b 以前	フラスコ形	2.88	210×230	120
SK82	⑤	大木 8b	ビーカー形	2.26	160×180	110
SK83	⑤	不明	フラスコ形	1.74	137×155	140
SK84	④頂部	大木 8a	フラスコ形	4.40	272×313	187

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（２）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK85	④頂部	不明	フラスコ形	1.30	164×176	90
SK86	④頂部	不明	ビーカー形	2.99	214×243	109
SK87	④頂部	大木 8a	ビーカー形	2.06	211×188	146
SK90	④頂部	不明	ビーカー形	3.89	196×221	175
SK91	④頂部	不明	フラスコ形	1.58	89×89	42
SK93	④頂部	不明	フラスコ形	4.04	233×145	145
SK94	④頂部	不明	フラスコ形	3.78	200×195	173
SK95	④頂部	不明	ビーカー形	2.69	226×201	145
SK96	④頂部	不明	ビーカー形	1.22	138×145	103
SK97	④	不明	フラスコ形	2.10	200	171
SK98	④頂部	不明	フラスコ形	2.51	167×175	102
SK99	⑤	不明	ビーカー形	2.89	193×178	262
SK100	⑤	大木 8a～9	フラスコ形	3.74	215×262	117
SK101	④頂部	不明	ビーカー形	3.96	212×234	181
SK102	④	不明	ビーカー形	2.90	205×213	166
SK103	④頂部	不明	フラスコ形	3.55	143×215	75
SK104	④頂部	大木 9 以前	フラスコ形	3.82	(89)×124	77
SK105	④	大木 8a	ビーカー形	1.58	170×179	154
SK106	④	不明	ビーカー形	0.89	81×146	140
SK107	④	不明	ビーカー形	2.91	172×252	106
SK108	④	不明	ビーカー形	2.79	244×182	119
SK109	④	不明	フラスコ形	4.54	236×250	158
SK110	④	不明	フラスコ形	3.13	180×223	157
SK111	④	大木 8a	フラスコ形	2.73	187×207	222
SK112	⑤	大木 8a	ビーカー形	3.44	205×241	112
SK113	④	大木 8a	フラスコ形	3.54	170×187	128
SK115	④頂部	不明	ビーカー形	0.65	98×106	63
SK116	⑤	不明	フラスコ形	3.53	206×260	145
SK117	④	不明	フラスコ形	1.83	137×170	157
SK118	④	不明	フラスコ形	2.47	155×159	123
SK119	④	大木 8a～8b	フラスコ形	2.98	160×190	136
SK120	④	不明	ビーカー形	2.41	159×197	89
SK121	④	不明	ビーカー形	1.85	191×196	126
SK124	④	不明	フラスコ形	2.62	191×203	131
SK125	④	大木 8a 以降	ビーカー形	2.77	204×215	133
SK128	④	不明	フラスコ形	3.22	183×198	82
SK129	⑤	不明	フラスコ形	3.20	162×184	172
SK130	④	不明	フラスコ形	3.64	204×210	200
SK131	④	不明	フラスコ形	3.41	196×212	63
SK132	④	大木 8a	ビーカー形	2.84	195×216	88
SK133	④	大木 8a～8b	フラスコ形	2.55	187×239	160
SK134	④	大木 8a（新）～8b（新）	フラスコ形	2.49	178×198	185
SK135	④	不明	フラスコ形	1.06	95×137	36
SK136	④	不明	フラスコ形	3.36	221×252	187
SK137	④	不明	フラスコ形	2.54	136×180	134
SK138	④	不明	フラスコ形	2.40	162×184	85
SK140	④	不明	フラスコ形	2.42	176×182	143
SK141	④	不明	ビーカー形	3.32	210×233	201
SK142	④	不明	フラスコ形	2.69	150×161	106
SK143	④	大木 8b	フラスコ形	3.19	146×181	118
SK144	④	大木 8a（新）～9（古）	フラスコ形	3.16	163×201	137
SK145	④	不明	フラスコ形	3.54	199×256	140
SK146	④	不明	フラスコ形	3.65	217×219	125
SK147	④頂部	大木 8a	フラスコ形	3.44	253×278	149
SK150	④頂部	不明	フラスコ形	2.33	156×177	54
SK151	④	不明	フラスコ形	1.92	135×178	109
SK152	④	不明	フラスコ形	3.03	104×156	160
SK153	④	不明	フラスコ形	3.62	221×224	160
SK154	③上位	不明	フラスコ形	5.31	205×224	227
SK155	③上位	不明	フラスコ形	5.06	301×177	185
SK156	③上位	不明	フラスコ形	3.11	182×227	171
SK157	③上位	不明	フラスコ形	3.21	199×224	206
SK158	③上位	不明	フラスコ形	3.97	173×235	121
SK159	③上位	不明	フラスコ形	5.18	250×266	221
SK160	④	不明	フラスコ形	2.44	144×174	100
SK161	④	不明	フラスコ形	0.45	69×88	25
SK162	④	不明	フラスコ形	3.81	227×244	245
SK163	④	不明	フラスコ形	3.46	201×237	69
SK164	③上位	不明	フラスコ形	2.95	192×176	113
SK165	④	不明	フラスコ形	1.27	142×(111)	67
SK166	④	不明	フラスコ形	1.79	162×138	84
SK168	④頂部	大木 10 以前	フラスコ形	2.80	171×241	133
SK169	④頂部	大木 10	フラスコ形	3.50	204×174	177
SK170	④	不明	フラスコ形	2.77	240×206	131
SK171	④	不明	ビーカー形	0.72	121×107	89
SK172	④	不明	フラスコ形	1.86	169×135	129
SK173	⑥	不明	フラスコ形	4.10	204×195	140
SK174	③上位	不明	フラスコ形	3.70	252×235	150
SK175	④	不明	フラスコ形	1.94	164×145	65
SK176	④	不明	フラスコ形	1.97	150	135
SK177	④	不明	フラスコ形	1.12	90×75	98
SK179	⑥	不明	フラスコ形	1.99	178×168	102

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（３）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK180	④	不明	フラスコ形	3.76	250	186
SK181	④	不明	フラスコ形	4.98	175	261
SK182	④	不明	フラスコ形	3.21	235×161	133
SK183	④	不明	フラスコ形	0.78	111×147	59
SK185	④	不明	フラスコ形	5.14	274×335	133
SK187	④	大木 8a（新）～8b（新）	ピーカー形	3.11	185	116
SK188	⑥	不明	フラスコ形	2.02	149×138	128
SK189	④	不明	ピーカー形	2.49	190×223	147
SK190	④	不明	フラスコ形	3.08	207×181	91
SK191	④	大木 8a	フラスコ形	2.58	172×198	88
SK193	⑥	不明	フラスコ形	4.20	271×235	125
SK194	⑥	大木 8a	フラスコ形	4.28	244×238	200
SK195	⑥	不明	ピーカー形	0.69	112×108	32
SK197	⑥	不明	ピーカー形	4.54	295×242	253
SK198	③上位	大木 8a ？	ピーカー形	2.77	190	86
SK199	③上位	不明	フラスコ形	1.46	135	67
SK200	③中位	不明	フラスコ形	0.65	79×102	61
SK201	③中位	不明	フラスコ形	1.56	117×140	178
SK202	③中位	不明	フラスコ形	1.51	121×163	63
SK204	③中位	不明	フラスコ形	0.79	151×152	214
SK209	③中位	大木 8b	フラスコ形	2.47	179×187	247
SK210	③上位	不明	フラスコ形	4.02	223×172	148
SK211	④頂部	大木 8b	フラスコ形	2.96	249×205	46
SK212	④頂部	大木 8a～8b	フラスコ形	3.17	200×180	90
SK213	③上位	不明	フラスコ形	3.85	255×218	159
SK215	③上位	不明	ピーカー形	1.14	148×132	48
SK216	④頂部	大木 8a～8b	ピーカー形	1.50	162×152	38
SK217	③上位	不明	フラスコ形	2.43	152×180	110
SK218	④	不明	フラスコ形	3.82	170×145	212
SK219	④	大木 8a	フラスコ形	2.46	193×170	167
SK220	③上位	不明	フラスコ形	1.99	115	218
SK221	③上位	不明	ピーカー形	4.48	225×203	171
SK222	③上位	不明	フラスコ形	1.58	156×137	50
SK223	③上位	不明	ピーカー形	1.06	123×131	56
SK224	③上位	不明	フラスコ形	4.38	213×224	179
SK225	③上位	不明	フラスコ形	2.83	188×216	113
SK226	③上位	不明	フラスコ形	1.40	125×141	97
SK227	③上位	不明	フラスコ形	2.94	198×208	175
SK228	③上位	不明	フラスコ形	3.50	185×249	149
SK229	③上位	大木 8a（新）～8b（古）	フラスコ形	4.55	〈245〉	295
SK230	③上位	大木 8a～8b	フラスコ形	2.21	175×181	225
SK231	④頂部	不明	ピーカー形	1.46	168×124	69
SK234	④	大木 8a 以降	フラスコ形	1.99	181×161	85
SK235	③上位	大木 8a	フラスコ形	5.03	254×273	77
SK236	⑥	不明	フラスコ形	2.16	163×155	116
SK237	③上位	大木 8b ？	フラスコ形	3.16	197×225	118
SK238	③上位	不明	フラスコ形	2.11	141×183	133
SK239	③上位	不明	フラスコ形	1.59	116×134	89
SK240	③上位	不明	フラスコ形	2.31	146×150	153
SK241	③上位	不明	フラスコ形	3.35	179×195	135
SK242	③上位	不明	フラスコ形	5.45	250×256	172
SK243	③上位	不明	フラスコ形	3.91	175×195	211
SK244	④	大木 8a（新）	フラスコ形	2.34	194×157	112
SK245	③上位	不明	フラスコ形	1.97	121×148	122
SK246	③上位	大木 9 ？	フラスコ形	3.23	160×170	168
SK247	③上位	不明	フラスコ形	3.17	180×212	226
SK248	③上位	大木 8a	フラスコ形	1.98	135×170	133
SK249	③上位	大木 8b 以降	フラスコ形	2.11	155×156	146
SK252	③上位	不明	フラスコ形	3.97	210×250	24
SK255	③上位	不明	フラスコ形	1.91	109×81	103
SK256	③上位	不明	フラスコ形	0.83	71×67	84
SK257	③上位	不明	フラスコ形	0.63	65×74	70
SK258	③上位	不明	フラスコ形	2.28	120×160	160
SK259	③上位	不明	フラスコ形	3.59	150×180	210
SK260	③上位	不明	フラスコ形	1.92	123×85	113
SK261	③上位	不明	フラスコ形	3.30	170×207	115
SK262	④	不明	フラスコ形	3.47	263×215	120
SK263	④	不明	フラスコ形	2.33	127×120	124
SK264	④	不明	フラスコ形	2.09	200×111	212
SK265	④	不明	フラスコ形	2.91	160×130	86
SK269	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	3.05	156×87	100
SK270	③上位	大木 8a～8b	ピーカー形	3.47	190×250	140
SK271	③上位	大木 8a	フラスコ形	4.11	170×200	150
SK272	③上位	大木 8a	フラスコ形	2.50	162×217	198
SK273	③上位	不明	フラスコ形	2.71	〈238〉	147
SK274	③上位	大木 8b～9 以降	フラスコ形	4.17	182×220	124
SK275	⑤	大木 8a	フラスコ形	2.21	127×166	174
SK276	⑤	不明	フラスコ形	1.77	141×151	117
SK277	⑤	大木 8b	フラスコ形	2.48	119×152	182
SK278	④	大木 8a 以降	フラスコ形	4.67	252×196	165
SK279	④	大木 7b～8a（古）	フラスコ形	3.56	265×165	175
SK280	③上位	不明	フラスコ形	1.78	135	115

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（４）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK281	③上位	不明	フラスコ形	3.73	〈233〉	117
SK285	④	不明	フラスコ形	0.96	113×116	75
SK286	③上位	不明	フラスコ形	1.73	139×141	207
SK287	③上位	不明	フラスコ形	2.13	〈167〉	70
SK288	④	不明	フラスコ形	1.95	155×47	198
SK289	④	大木 8a 以前	フラスコ形	1.97	122×109	129
SK290	④頂部	大木９以前	フラスコ形	2.21	160	243
SK291	③上位	不明	フラスコ形	2.70	139×170	237
SK292	③上位	不明	ビーカー形	2.37	〈170〉	66
SK293	③上位	不明	フラスコ形	3.05	200×210	108
SK294	③上位	不明	フラスコ形	3.00	192×220	128
SK295	③上位	大木 8a	ビーカー形	2.63	208×238	148
SK296	③上位	不明	フラスコ形	1.41	135×155	90
SK297	③上位	不明	フラスコ形	3.32	168×201	109
SK298	③上位	大木 8b（古）	フラスコ形	2.90	218×231	260
SK299	③上位	大木 8b（古）	フラスコ形	3.64	240×307	275
SK300	③上位	大木 8a	フラスコ形	3.68	〈145〉	222
SK301	③上位	不明	フラスコ形	3.22	195×124	104
SK302	③上位	不明	フラスコ形	4.81	228×251	107
SK303	③上位	不明	フラスコ形	4.51	150	164
SK304	③上位	不明	フラスコ形	2.50	171×180	120
SK305	③上位	不明	フラスコ形	1.43	150×204	120
SK307	④	不明	フラスコ形	0.80	70	58
SK308	③上位	不明	ビーカー形	2.26	183×185	95
SK309	③上位	不明	フラスコ形	3.57	208×216	139
SK311	③上位	大木 8b	フラスコ形	2.57	111×120	158
SK312	③上位	不明	フラスコ形	1.95	141×195	153
SK313	③上位	不明	フラスコ形	2.72	163×183	111
SK314	④頂部	大木９以前	フラスコ形	2.88	254×235	140
SK315	③上位	不明	フラスコ形	3.81	161×269	132
SK316	④頂部	大木 8a	フラスコ形	2.97	200×164	155
SK317	③上位	不明	フラスコ形	1.73	144×155	176
SK318	③上位	不明	ビーカー形	2.67	167×197	204
SK319	③上位	不明	フラスコ形	3.20	155×187	165
SK320	③上位	不明	フラスコ形	2.68	178×161	105
SK321	④頂部	大木 8a～９	フラスコ形	3.35	204×189	172
SK322	③上位	不明	フラスコ形	1.10	104×144	65
SK323	③上位	不明	フラスコ形	3.15	169×204	177
SK324	③上位	不明	フラスコ形	2.68	149×182	104
SK325	④	不明	フラスコ形	2.27	190	133
SK326	④	不明	フラスコ形	4.31	218×182	190
SK327	④	不明	フラスコ形	4.90	221×244	204
SK329	③上位	大木 8b 以降	フラスコ形	5.26	213×196	232
SK330	④	不明	フラスコ形	3.55	181×162	91
SK331	③上位	不明	フラスコ形	4.33	225×184	147
SK332	③上位	不明	フラスコ形	3.74	170×219	112
SK336	③上位	大木 8a	フラスコ形	2.33	135×170	231
SK337	③上位	大木 8a 以前	ビーカー形	2.69	140×136	156
SK338	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	0.65	85	78
SK339	③上位	大木 8a	ビーカー形	2.07	248×189	83
SK340	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	1.71	132×112	115
SK341	③上位	大木 8b（新）	フラスコ形	3.83	203×186	151
SK347	③上位	不明	フラスコ形	5.08	278×223	280
SK348	③上位	不明	フラスコ形	3.43	228×213	244
SK349	③上位	不明	フラスコ形	0.49	94×87	29
SK350	③上位	不明	フラスコ形	1.48	122×106	79
SK352	③上位	不明	ビーカー形	2.79	173×151	144
SK355	③上位	大木 8b	フラスコ形	1.49	138×118	113
SK356	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.40	164×144	56
SK357	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.70	172×171	99
SK358	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.42	165×104	131
SK359	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.24	151×132	95
SK360	③上位	大木 8a 以前	ビーカー形	1.13	142×92	51
SK363	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	3.56	209×198	180
SK365	③上位	大木 8b 以前	ビーカー形	3.11	205×175	164
SK366	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	4.02	256×231	163
SK367	③上位	大木 7b	フラスコ形	4.41	210×160	120
SK368	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.52	125×91	95
SK369	③上位	大木 8b 以前	ビーカー形	0.59	115×104	73
SK370	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	2.41	171×140	110
SK372	③上位	大木９	フラスコ形	2.63	144×192	162
SK373	③上位	不明	フラスコ形	2.99	176×218	180
SK374	③上位	大木９～10	フラスコ形	3.02	242×254	220
SK376	③上位	大木 8a	フラスコ形	4.04	233×269	244
SK377	③上位	大木９以前	フラスコ形	2.37	163×173	147
SK378	③中位	大木 8b 以前	フラスコ形	0.53	108×242	126
SK379	③上位	不明	フラスコ形	2.89	151×199	240
SK380	③上位	大木 8a	フラスコ形	2.78	245×221	239
SK381	③上位	大木 8a	フラスコ形	3.78	200×157	166
SK382	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	2.73	165×159	133
SK383	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	3.03	180×135	138
SK384	③上位	大木 8a	フラスコ形	2.43	194×189	238

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（５）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK385	③上位	大木 8b 以前	フラスコ形	3.28	195	165
SK386	③中位	大木 9 ～ 10	フラスコ形	3.09	160×196	207
SK387	③上位	大木 8a（古）	フラスコ形	3.67	159×156	210
SK388	③上位	大木 8a ～ 8b	フラスコ形	4.05	231×200	142
SK389	③上位	大木 8a ～ 8b	フラスコ形	2.71	180×152	157
SK390	③上位	不明	ビーカー形	1.03	143×134	67
SK391	③上位	大木 8b	フラスコ形	2.49	175×134	52
SK392	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	4.90	256×171	92
SK393	③上位	大木 8a 以降	フラスコ形	3.69	200×76	49
SK394	③上位	不明	フラスコ形	1.64	68×40	29
SK395	③上位	不明	フラスコ形	1.22	116×104	48
SK396	③上位	大木 8a ～ 8b	フラスコ形	3.51	160×150	253
SK398	③上位	大木 8a	フラスコ形	2.84	196×189	89
SK399	③上位	大木 7a ～ 8a	フラスコ形	3.01	209×136	241
SK411	③中位	大木 7b ～ 8a	フラスコ形	2.77	166×181	157
SK412	③上位	大木 8a ～ 8b	フラスコ形	2.86	189×198	68
SK413	③上位	大木 7b ～ 8a	フラスコ形	2.40	174×141	164
SK414	③上位	不明	フラスコ形	3.47	167×205	105
SK415	③上位	不明	フラスコ形	2.29	137×179	146
SK416	③上位	大木 8a	フラスコ形	3.25	181×207	145
SK417	③上位	不明	フラスコ形	2.35	162	93
SK418	③上位	大木 7b ～ 8a（古）	ビーカー形	3.68	238×233	263
SK419	③中位	大木 7b ～ 8a	フラスコ形	1.70	157	67
SK420	③中位	大木 7b ～ 8a	ビーカー形	2.25	188	48
SK421	③中位	大木 7b ～ 8a 以前	フラスコ形	3.48	197	138
SK422	③上位	大木 8a	フラスコ形	3.56	206	102
SK423	③中位	大木 8a	フラスコ形	5.02	281	149
SK424	③中位	大木 8a	フラスコ形	3.25	140×178	154
SK425	③中位	不明	フラスコ形	2.54	174×204	162
SK426	③中位	不明	ビーカー形	0.46	73×95	65
SK427	③中位	大木 8b	フラスコ形	1.92	148×175	197
SK428	③中位	大木 8a	ビーカー形	1.48	166	36
SK429	③中位	大木 8b	フラスコ形	2.49	153×183	234
SK430	③中位	大木 8a	フラスコ形	3.73	197×213	187
SK431	③中位	不明	ビーカー形	0.89	125×142	158
SK432	③中位	不明	フラスコ形	1.10	86×115	124
SK433	③中位	不明	フラスコ形	0.50	88×92	39
SK434	③中位	不明	フラスコ形	3.46	157×181	166
SK435	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	2.50	172×169	169
SK436	③上位	大木 8a 以降	フラスコ形	2.92	206	162
SK437	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	3.14	171×128	162

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK439	③上位	大木 8a 以降	フラスコ形	0.41	80	96
SK440	③中位	大木 8b	フラスコ形	1.90	222	87
SK441	③中位	大木 8a 以降	フラスコ形	0.93	150×104	65
SK442	③上位	不明	フラスコ形	1.21	126×121	31
SK443	③上位	不明	フラスコ形	2.80	173×147	125
SK444	③上位	不明	フラスコ形	2.35	153×127	125
SK445	③上位	不明	フラスコ形	4.58	206×182	126
SK447	③上位	不明	フラスコ形	2.46	184×145	71
SK448	③上位	不明	フラスコ形	2.80	192×169	177
SK450	④	大木 8a（新）～ 8b（新）	フラスコ形	3.11	160×153	121
SK452	③下位	大木縄文時代以降	ビーカー形	0.96	117×120	79
SK455	③中位	不明	フラスコ形	2.19	144×163	224
SK456	③中位	不明	ビーカー形	1.65	138×199	172
SK457	③中位	大木 10	フラスコ形	2.31	126×218	168
SK458	③中位	不明	フラスコ形	0.36	90	53
SK459	③中位	不明	フラスコ形	2.93	194×243	161
SK460	③中位	不明	フラスコ形	0.78	85×145	59
SK462	③中位	不明	フラスコ形	3.84	187×169	223
SK463	③中位	大木 8a	フラスコ形	2.38	149×168	123
SK464	③中位	大木 8a 以降	フラスコ形	0.92	97×130	87
SK465	③中位	不明	フラスコ形	3.27	138×181	130
SK466	③上位	大木 7b ～ 8a	フラスコ形	2.57	196×152	120
SK468	③上位	大木 7b	フラスコ形	1.89	176×146	146
SK469	⑤	不明	フラスコ形	2.44	166×209	188
SK470	⑤	不明	フラスコ形	2.82	186×235	194
SK471	⑤	大木 8b（古）	フラスコ形	2.00	151×182	194
SK472	⑤	大木 8a	ビーカー形	3.61	147×174	180
SK473	③中位	不明	フラスコ形	2.70	147×178	123
SK474	③中位	不明	ビーカー形	0.77	113	16
SK475	③上位	大木 8a 以前	ビーカー形	1.55	155	86
SK476	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	1.08	127×118	127
SK478	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	2.26	178×147	138
SK479	③上位	大木 8a 以降	フラスコ形	1.60	96×40	25
SK480	③上位	不明	フラスコ形	3.56	245×151	197
SK491	③中位	大木 9 ～ 10 以降	フラスコ形	1.39	139×196	82
SK496	③下位	大木 9 ～ 10	フラスコ形	1.12	110×142	120
SK497	③下位	大木 8a ～ 8b 以降	フラスコ形	0.94	68×106	58
SK498	③下位	大木 8a	フラスコ形	3.39	137×147	133
SK499	③下位	大木 8b ～ 10	ビーカー形	1.43	134×176	113
SK500	③下位	大木 9 ～ 10	フラスコ形	0.46	104×176	59
SK501	③下位	大木 9 以降	ビーカー形	0.92	173×182	109

第 23 表　土坑（貯蔵穴）一覧表（６）

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK503	③下位	大木９～10 以降	ビーカー形	1.28	128×179	54
SK504	③下位	大木 8a～8b 以前	ビーカー形	0.50	68×105	24
SK505	③下位	大木９以前	ビーカー形	0.52	76×113	38
SK506	③下位	大木９～10 以前	フラスコ形	2.01	129×143	120
SK507	③下位	大木 8a～8b	フラスコ形	0.95	131×165	134
SK508	③下位	大木 7b～8a	ビーカー形	0.20	76×79	46
SK509	③下位	大木９以前	ビーカー形	0.98	145	20
SK511	③上位	大木 8a 以降	フラスコ形	1.83	133×117	104
SK512	③上位	不明	フラスコ形	2.80	156×137	152
SK514	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	1.06	104×97	79
SK515	③上位	大木 8a 以前	フラスコ形	2.88	189×172	189
SK516	③下位	大木９	フラスコ形	3.06	161×226	86
SK517	③下位	大木９以前	フラスコ形	4.15	227×243	73
SK518	③下位	大木９以前	ビーカー形	1.79	225	22

遺構名	位置	時期	断面形	底面積（㎡）	開口部径（cm）	深さ（cm）
SK519	③下位	大木 8a～8b	ビーカー形	0.69	112×134	64
SK521	③下位	大木 8b 以前	フラスコ形	0.90	120	42
SK522	③中位	不明	フラスコ形	0.85	141	63
SK523	③下位	大木 8a 以前	フラスコ形	0.44	83×90	37
SK525	③下位	大木 8a（新）～8b（古）	フラスコ形	2.69	92×96	152
SK526	③下位	大木９以前	フラスコ形	2.04	119×143	98
SK527	③下位	大木９以前	フラスコ形	1.81	108×117	133
SK528	③下位	大木９以前	フラスコ形	3.36	179×204	109
SK529	③下位	大木９以前	ビーカー形	0.54	81×96	74
SK530	③中位	大木 8a 以前	フラスコ形	3.63	219	146
SK532	③下位	不明	ビーカー形	0.71	96	20
SK534	③中位	大木 8a 以前	フラスコ形	2.64	170	260

※大木 7 →Ⅱ期、大木 8a →Ⅲ期、大木 8b →Ⅳ期、大木 9 →Ⅴ期、大木 10 →Ⅵ期

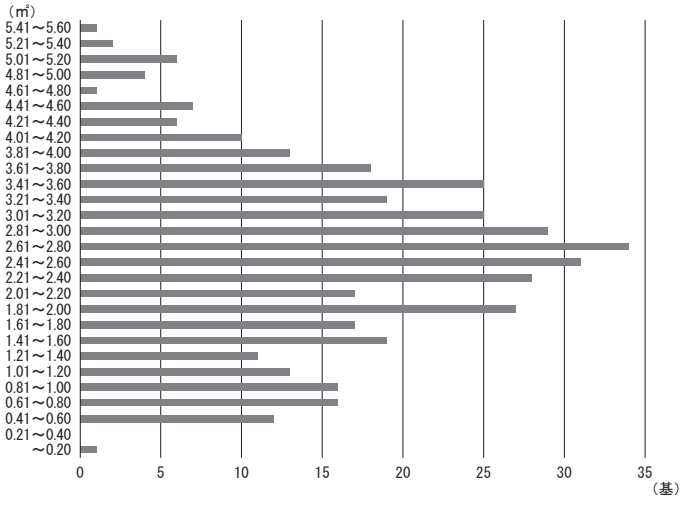
（2）貯　蔵　穴

概要　今回調査した土坑 508 基のうち、貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑は 444 基となる。深さがある程度あり、断面形がフラスコ形やビーカー形を呈する土坑をフラスコ状土坑（以下貯蔵穴と呼ぶ）とした。貯蔵穴という機能を具体的に表す証拠は、今回の調査では数少ないが、これまでの研究から想定したものである。調査では、あまり遺物が出土せず時期不明のものが多かった。遺物の出土や重複関係から時期が想定できるものは約半数の 255 基のみとなる。それらを含めてここで若干の検討を行う。

分布　先述の６区分の地点でみると、①南尾根上、③南斜面、④北尾根、⑤北端の尾根、⑥中尾根に立地しており、②の谷部以外の調査区全域に分布する。とくに④の全域と③の斜面上位に集中するようである。竪穴建物が集中するような③の下位や②においては、貯蔵穴は立地しない、立地しても少ない点が対照的である。貯蔵穴全般の傾向としては、竪穴建物よりも上方の位置（より標高の高い地点）に立地するものが多いという特徴が読み取れる。①の南尾根についても、遺構が展開する範囲が狭いものの、この原則が適用できそうである。

規模　貯蔵穴の規模の大小を判断するには、開口部の径や深さ、容量が主要な属性となる。しかし、今回の調査では多くの遺構で複雑な重複関係がみられることから、一部を破壊されたものが大半を占める。そのため多くの貯蔵穴では、正確な容積や開口部径を計測することができなかった。とくに前者では、それに変わる属性として底面積を取り上げた。底面積のみであればある程度の範囲が残存していれば復元することが可能であり計測数が容積よりも確保できるからである。

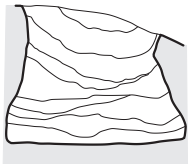
底面積を計測できたのは 408 例である（第 23 表・第 107 図）。計測可能は 444 例であるが、このうち 39 例は遺存状態が悪いため除外した。底面がほぼ円形であるという前提で復元可能な 96 基は 408 例に含めている。最小は SK508 で 0.2 ㎡であるが、重複の中にある遺構のため削平を受け本来の形状を呈していないかもしれない。形状をよく呈するものでは SK307 があり、0.8 ㎡である。一方最大は、SK242 で 5.45 ㎡である。底面積の分布をみると（第 107 図）、① 0.2～1.4 ㎡まで、② 1.41～4.6 ㎡、③ 4.61～5.60 ㎡の３つのまとまりが読み取れる。②がもっとも数が多く普遍的な大きさと考えられる。そのなかでも 2.61～2.80 ㎡のものが最多である。したがって、①の 0.6～1.4 ㎡が小型（69 例）に、③の 4.61 ㎡以上が大型（14 例）に相当するであろう。深さについては、削平が及んでおり実際の数値が判明する例は少ないが、調査時の数値では、16 ㎝～295 ㎝の範囲にある。50 ㎝以下のものは 40 例程あるが、削平が大きく及んでいると思われる。深さ別では、これを除くと、50 ㎝～100 ㎝が 111 例、101～150 ㎝ が 149 例、151～200 ㎝が 94 例、201 ㎝～250 ㎝が 40 例、251～300 ㎝が 10 例である。現状での深さが 101 ㎝～150 ㎝のものが最多となり、その前後である 50～200 ㎝までが中心的な範囲と考えられる。深さが 200 ㎝を超える例は 50 例もあり、その中で底面積がピークである 2.8 ㎡より大きなもの



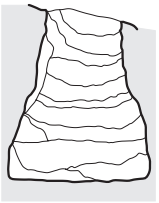
第 107 図　底面積分布

①レンズ状

ＳＫ０６

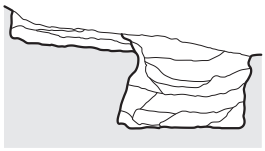


ＳＫ１４

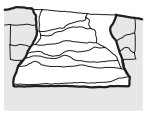


②水平

ＳＫ０５

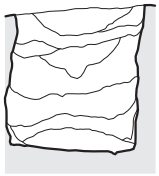


ＳＫ２５５

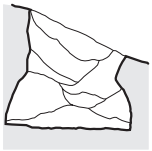


③中央凸形

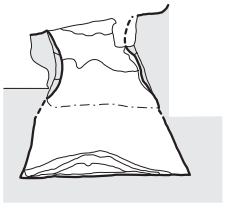
ＳＫ０４



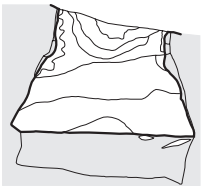
ＳＫ１１７



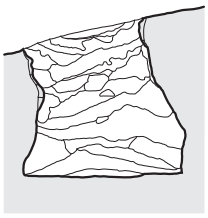
ＳＫ２６０



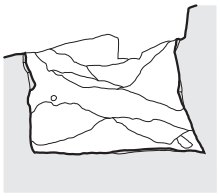
ＳＫ３０３



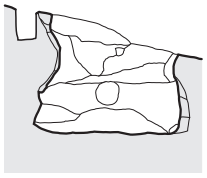
ＳＫ３８７



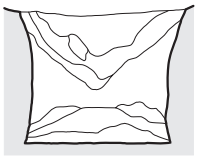
ＳＫ３８８



ＳＫ３８９

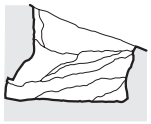


ＳＫ４７２

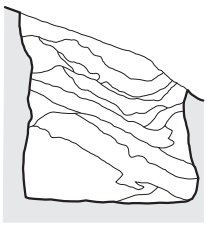


④左右どちらかから流入

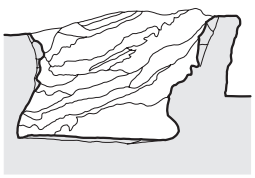
ＳＫ１１８



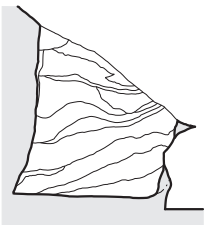
ＳＫ１６２



ＳＫ３６６

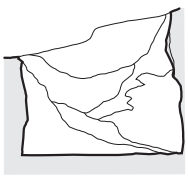


ＳＫ４６２



⑤カベ崩落

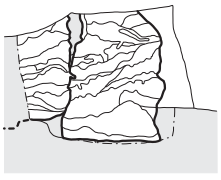
ＳＫ１１２

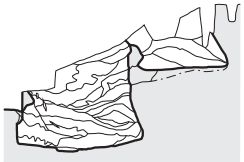


ＳＫ３７０

⑥細かな単位で堆積

ＳＫ４１３・４７８





第 108 図　堆積状況の推類

が約半数もある。とりわけ巨大な容量をもつ例が存在することになり、その内容物がどのようなものになるか興味深い。

堆積パターン　貯蔵穴とした土坑の堆積状況をみると、大きく６パターンに分けることができる（第108図）。①三角堆積からレンズ状堆積に移行するもの、②ほぼ水平に堆積するもの、③最初の堆積が凸形を呈するもの。④左右どちらから一方向に堆積するもの、⑤大きな縦方向の塊で堆積するもの、⑥細かな単位で堆積するもの、である。①・②については、貯蔵穴に限らずどの遺構にも普遍的に観察できるもので、前者が自然堆積、後者が人為堆積を示す確率が高いものである（もっとも人為か自然堆積かの判断は、層中の偽礫などの層相の観察が不可欠である）。③は貯蔵穴に特有に認められる。上部に開いた小さな穴から周囲の土がこぼれ落ち続けた結果の堆積状況であろう。④はとくに斜面に位置する貯蔵穴に認められる。自然堆積か否かは層相によるが、斜面の上方から一方的かつ継続的に流入し続けた結果と考えられる。⑤は壁面の崩落がもたらす堆積であろう。これが単独で存在することはなく多くは別のパターンの堆積と組み合うものがほとんどである。⑥は、人為堆積の可能性が高い堆積状況と想定する。どこまでを細かな堆積と判断するか難しい点がある。これらの堆積状況は、実際には単純化した１つの堆積パターンを示すものは少なく、①～⑥が複数組み合わされた状態で堆積するものが多い。貯蔵穴に特有に認められる③のパターンは、上部に蓋のようなものがあったことが想定される。開放的な開口部であれば、①や②などのような堆積を示すであろう。それに対し③のような堆積を示すためには、開口部がある程度閉じた状態でなければならないと考えられる。そのため蓋が存在すると想定した。これに劣化等により穴が開くとそこから少しずつ堆積土が堆積し、凸形を呈することになる。ちなみに底部穿孔深鉢を倒位に埋設している場合では、その内部の堆積状況は③を呈する例を観察することができている。

時期別傾向　竪穴建物と同様に時期別に貯蔵穴の動向をみていこう。その際両方の時期にまたがる時期については、Ⅱ～Ⅲ期は、Ⅱ期に、Ⅲ～Ⅳ期はⅢ期に、Ⅳ～Ⅴ期はⅣ期に、Ⅴ～Ⅵ期はⅤ期にそれぞれ含めた。Ⅱ期では、Ⅱ期（Ⅱ期以前を含めて）が３基、Ⅱ～Ⅲ期（Ⅲ期かもしれないがⅡ期の可能性もあるもの）が９基の合計13基のみ確認できる。立地は、③の南斜面の上位付近（標高79～84ｍ前後）に集中する。そのほか少数であるが、北尾根の頂部付近にも存在することから、北尾根の南斜面の上位付近にまとまって分布する状況が窺える。今回の調査では、確実にⅡ期前半（大木7a式併行）以前の貯蔵穴は確認できなかった。したがって、Ⅱ期後半（大木7b式併行）以降に貯蔵穴が形成され始めると想定する。Ⅲ期になると、数が急激に増加する。ある程度帰属時期を特定できたものは89基ある。このⅢ期の間にピークに達するようである。分布域は、①の南尾根上、③南斜面（とくに上位から中位にかけて）、④北尾根（頂部を含めて）、⑤北端の尾根に広がることから、谷部を除きほぼ全域に広がることがわかる。⑥の中尾根上は時期不明のものが多いが、おそらくこの時期の分布域に含まれるであろう。このようにみると、相対的に高い地点に貯蔵穴が集中して形成されていることがわかる。もっとも分布域を広げかつ数量が多い時期となる。出土土器の割合がこの時期にもっとも高いことと対応する。つづくⅣ期は、分布域はⅢ期と類似するようであるが、数が少なくなるようである。特定できたのはⅣ期、Ⅳ～Ⅴ期分を含めて22基である。もっとも時期不明の貯蔵穴が多く、これらがこの時期の可能性もあることから不確かな部分がある。もう一つの特徴としては、同時期の竪穴建物と重複することやそれと近接した地点に形成される可能性があげられる。これは前のⅢ期段階では認められなかった特徴である。次のⅤ～Ⅵ期においても、Ⅳ期と同様の傾向がみてとれるが、Ⅳ期にもまして検出例が少なくなっている。Ⅴ期、Ⅵ期、Ⅴ～Ⅵ期、Ⅴ期以降、Ⅴ～Ⅵ期以降を含めて17基程度である。分布域は、Ⅳ期と類似しているが、とくに③の斜面下位に多く分布す

る。また、④の北尾根頂部付近にも少し分布するようである。竪穴建物との距離もⅣ期に類似し、近接した位置に構築されるようである。このように時期ごとに変遷をみると、帰属時期が特定できない貯蔵穴が大多数を占めるため確かなことは言えないが、時期が判明できる貯蔵穴からは、Ⅲ期に帰属するものが多く、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵと新しくなるにつれ数が減少することがわかる。また、竪穴建物との距離感、ひいては空間利用の方式がⅢ期とⅣ期以降では異なる可能性がある。もっとも調査区の西側や東側など未調査部分が多いため、これらの区域に新しい時期の貯蔵穴が移動する可能性もあり、調査範囲が今後広がれば異なる見解になる可能性はある。

その他の特徴　貯蔵穴のなかには、底面に何らかの痕跡を残る例がある。①副穴などのピット（小穴）があるもの（SK138・174・159・165・199・225・227・246・293・308・391・478・414・500など）。単純に底面に１個の穴が穿たれているものが多いが、底面や側面（壁面）に穴が掘られているものもある。これらはどのような機能を持つものか今回明らかにできないが、梯子などの昇降施設を設置した痕跡などが想定される。また陥し穴状遺構も混在している可能性もある。それ以外の痕跡として、②溝状の掘り込みがみられるもの（SK296・394など）がある。これについても現時点では何を意味するものかまでは検討できないが、いずれ類例を集成して検討しなければならない。

そのほか、貯蔵穴内から、クリやトチ、オニグルミなどの堅果類が出土した例がわずかにある。SK60・67・183・380・381・423・424・440・457・500からは、何らかの堅果類が出土している。SK60・67から出土した堅果類は、貝層から出土したもので、廃棄に伴う可能性がある。SK423・424・440では、堆積土からの出土であり、同様であろう。SK183・457は最下層からの出土であることから貯蔵されていた可能性がある。SK381・500は底面の土器内からの出土であり、いずれも土器内に収納されていたと考えられる。このようにわずかな例であるが、貯蔵されていた内容物の一端を知ることができ、また貯蔵穴として利用されていた可能性を示す。

（３）時期別に見た空間構成

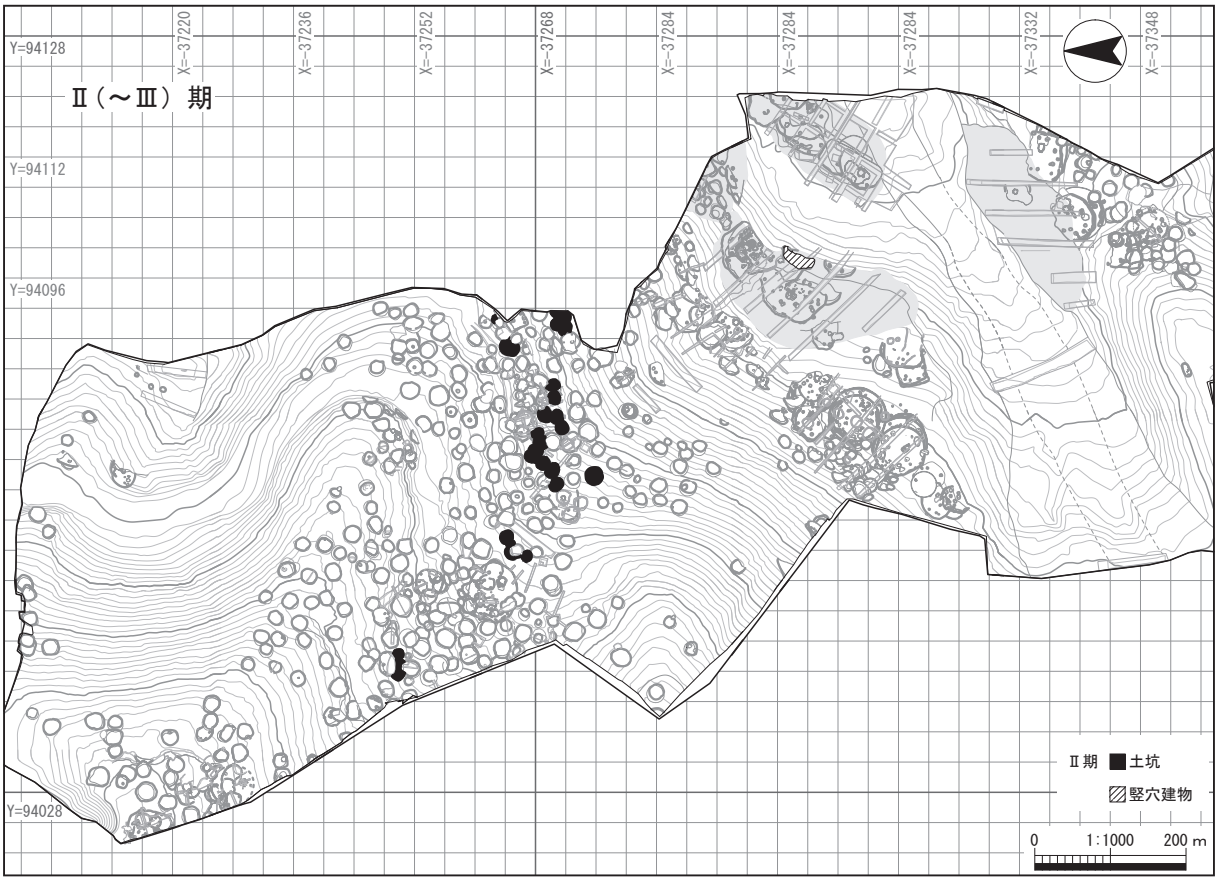
これまで検討してきた内容を、繰り返しになる部分もあるが、①縄文時代中期前葉（Ⅱ期）、②縄文時代中期中葉前半（Ⅲ期）、③縄文時代中期中葉後半（Ⅳ期）、④縄文時代中期後葉～末葉（Ⅴ～Ⅵ期）の４時期にまとめておく。

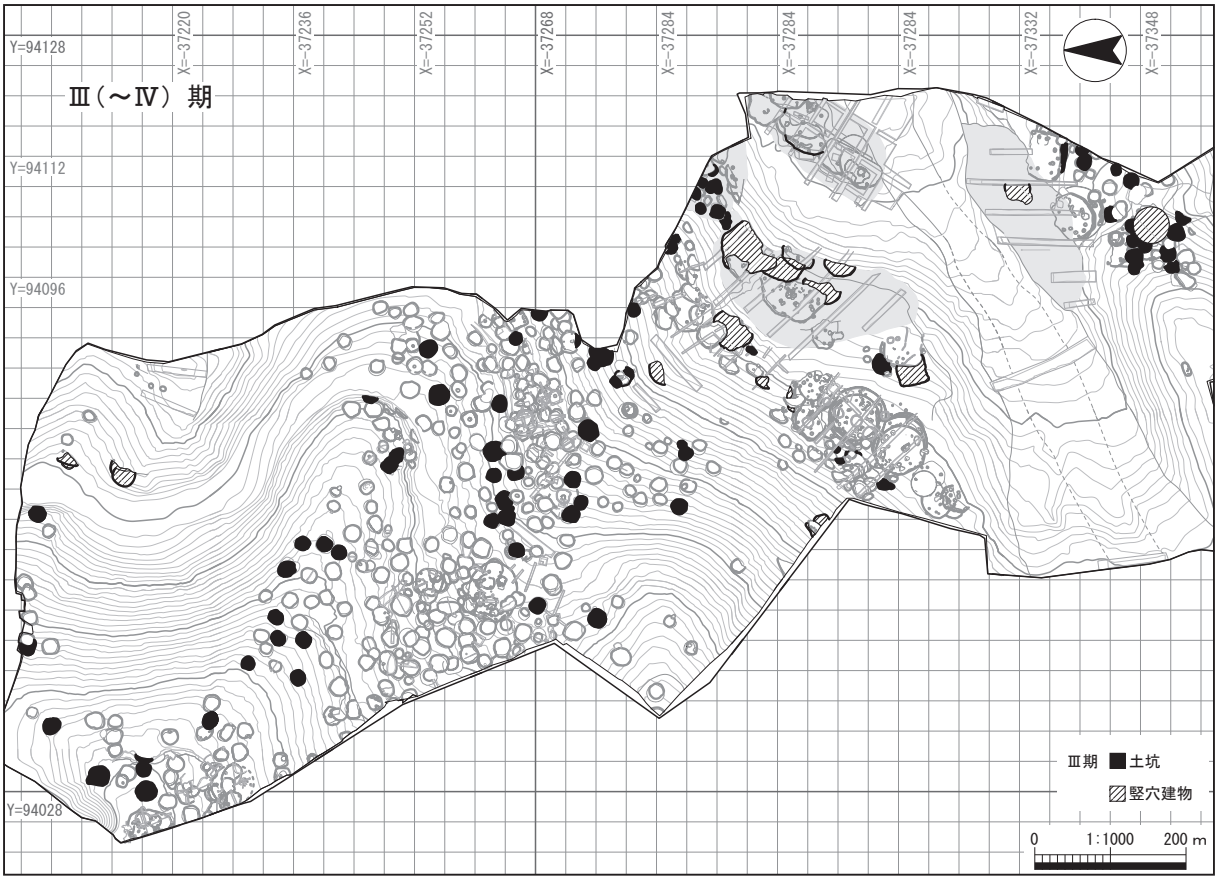
中期前葉（Ⅱ期）　北尾根の南側、南斜面上位付近に貯蔵穴がまとまる。竪穴建物は調査区内では確認できない。とくに調査区外（東側）にその存在が予想される。この時期の土器はこれら周辺に加えて、包含層１からも出土している。遺構の存在は確認できないが、南尾根周辺にも存在すると予想される。実際隣接地点では、この時期の竪穴建物が発見されている（宮古市の調査）。

中期中葉前半（Ⅲ期）　竪穴建物は③南斜面の下位、最下位を中心に分布する。斜面の上方には、北尾根も含めて今のところ確認できない。貯蔵穴は、②を除いた全域（斜面上方）に分布する。竪穴建物跡と貯蔵穴は重複する例が少なく、一定の距離が保たれていることから、土地利用にある程度の規制があった可能性がある。居住域、貯蔵域ともに調査区外へ広がっている（とくに北尾根・中尾根）ことは確実である。

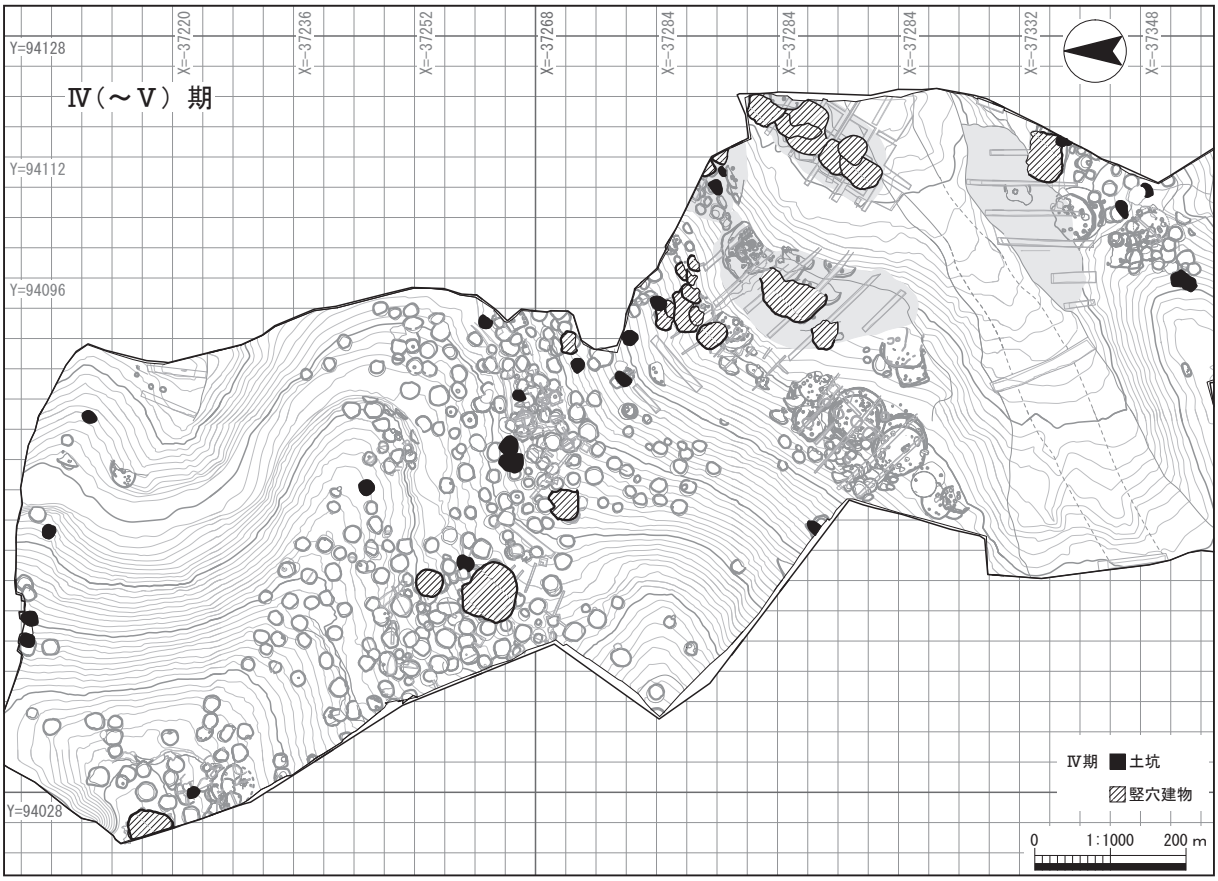
中期中葉後半（Ⅳ期）　竪穴建物の立地は前半と同じであるが、斜面上方にも広がることになる。居住域が拡大したことになる。このこともあってか、貯蔵穴と重複する例が多くみられるようになる。また、竪穴建物に近接して貯蔵穴が構築されるようにみえる。これまで両者には一定の間隔があったが、この時期以降はなくなりそうである。貯蔵穴の数は減る可能性がある。

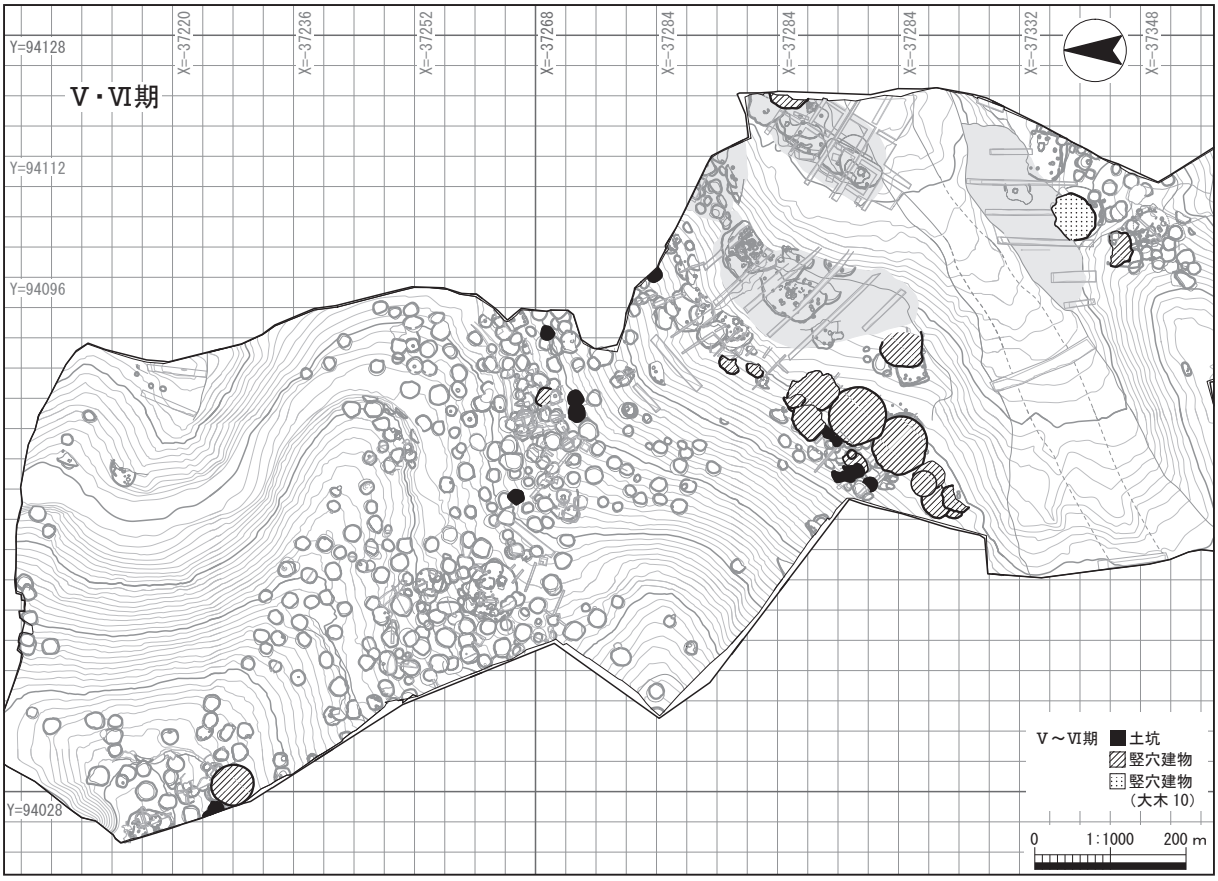
中期後葉から末葉（Ⅴ～Ⅵ期）　傾向としては中葉後半と同様である。時期を特定できる遺構が少な



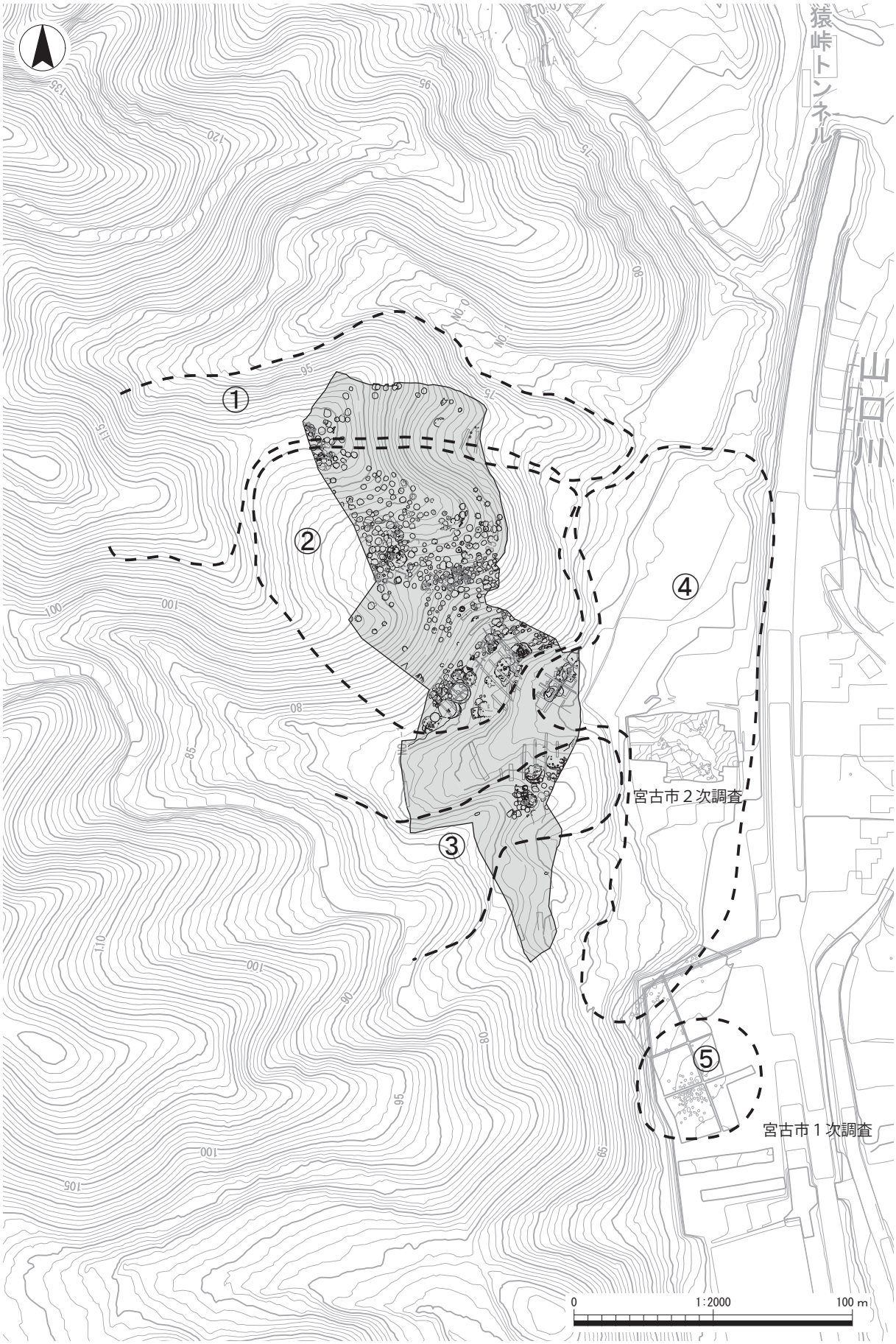


第 109 図　時期別変遷図 1





第 110 図　時期別変遷図２



第 111 図　高根遺跡の空間構成想定図

くなる。実際の遺構数も少なかった可能性がある。

全体の構成　これまでの調査を総合すると、高根遺跡は、多数の遺構から構成される縄文時代中期中葉を中心とした大規模な集落であることがわかった。これまでは、山口川に面した相対的に標高の低い地点が遺跡として認識されていたが、今回の調査によってさらに奥側（西の山側）に広がることが判明した。これまでの検討を遺跡全体に広げた場合の空間構成を第 111 図のように想定した。現在確認できる地形による遺構のまとまりは、以下の５つである。①北尾根頂部から北端の尾根を中心とした範囲。大部分が調査していない北側や西側にある。細い尾根であるが、高い所から低い所まで遺構が立地するが、数は少ない。②北尾根と中尾根に挟まれた範囲。原則斜面となる。遺構がもっとも集中する地点である。斜度 15°～20°前後に立地するものが多いが、30°以上の急傾斜地にも立地する遺構もある。これは場所がなくて押し出されたようにもみえる。この地形は、調査区の外側（西と東）にも広がっていることから、この遺構の集中範囲はまだ広がると予想される。③南尾根を中心とした範囲。南尾根西側の標高の高い地点では遺構を発見できなかったが、低い地点から下は遺構が密集する。さらに東側に遺構が広がることは確実である。④山口川に面した相対的に低い範囲（標高 50～60 m）である。２次調査や、今回の谷部がこれに含まれると想定する。過去の調査などからより古い時期の遺構が存在する可能性がある。中期前葉（Ⅱ期）の居住域はこの地点かもしれない。その場合は、中期前葉（Ⅱ期）には④を中心に居住域があったものが中期中葉前半（Ⅲ期）になると、より標高の高い西側に居住域が移動した可能性がある。先述のように中期中葉後半（Ⅳ期）はさらに斜面上方へ居住域が広がることから、時期が降るにつれより標高の高い地点に移動している（集落の範囲が広がる）と考えられる。今回の調査の谷部は③南尾根の延長上にも位置するが、２次調査では土砂流出痕跡が確認されているため、尾根上というより④の範囲に含めた。⑤遺跡の南側はもっとも標高の低い（40～43 m前後）地点で、１次調査で墓域が発見された範囲である。遺跡の想定範囲はさらに南側に広がるが、現時点では調査が行われておらず様相は不明である。そのため、集落の広がりが⑤の墓域で限られる場合や墓域が集落の中心と考える場合（その場合さらに集落が南側に広がる）などが想定できるが、現時点では不明である。また、遺構の広がりが広範囲に及ぶことから複数の集落から構成される可能性もある。③と⑤の間も不明な範囲である。１次調査では墓域のほかにも斜面上に貯蔵域が発見されており、④の範囲に含めたが、対応する居住域やその広がりが③の南側まで広がるのか、現時点では不明である。いずれにせよ、調査を行っていない西側（山側）と南側がどれだけ広がるのかを見極めなければならず、今後周辺の調査が望まれる。現時点では、⑤より北側の区域において、尾根や谷などの地形を中心に遺構のまとまりが確認できることがわかっており、これが今回の調査成果のひとつとなろう。

以上、概略的に遺構の状況についてまとめてきた。本書ではデータの提示を中心にまとめたため、詳細な検討まで至らなかった。今回の調査によって派生する様々な課題が多く残ると思われるが、今後の課題としつつ、本書の活用を期待する。

＜引用・主要参考文献＞

安達香織　2016 『縄紋土器の系統学』慶應義塾大学出版会

阿部昭典　2015 「縄文時代の斧状土製品の研究」『縄文の儀器と世界観』知泉書館

阿部昭典　2008 『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書６　アム・プロモーション

阿部勝則　2004 「縄文時代中期の三角壕形土製品・三角壕形石製品」『(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』23

飯塚義之・小野章太郎　2020　「完全非破壊化学分析による宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の石材研究」『宮城考古学』第 22 号
岩田貴之　2004　「大木８式土器小考」『岩手考古学』第 16 号　岩手考古学会
岩田貴之　2015　「樺山遺跡の脚付石皿に関する若干の考察」『北上市立博物館研究報告』第 20 号
小笠原雅行　2008　「円筒上層式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
小保内裕之　2008　「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木 10 式併行土器）」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
加藤三千男　1988　「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観３』
加藤三千男　2008　「新保・新崎式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
上條信彦　2015　『縄文時代における脱穀・粉砕技術の研究』六一書房
神原雄一郎　2004　「渦巻文様の展開」『縄文の彩華―中期の技と美―』盛岡市遺跡の学び館
北田勲・平野祐　2007　「県内出土土器底部にみられる網代痕跡」『岩手県における縄文文化の諸相』岩手考古学会第 38 回研究大会資料集
北田　勲　2012　「東北地方と近隣における編組技術の様相」『考古学ジャーナル』636
工藤伸一・鈴木克彦　1998　「キノコ形土製品について」『研究紀要　第３号』青森県埋蔵文化財調査センター
熊谷常正　1989　「北上川中流域における大木 8a 式土器」『岩手県立博物館研究報告』第７号
斎藤　岳　2016　「北日本の緑色擦切磨製石斧の石材名と製作技法・流通について」『研究紀要』第 21 号　青森県埋蔵文化財センター
坂口隆　2003　『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書５　アム・プロモーション
鈴木克彦　1998　「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第３号　青森県埋蔵文化財調査センター
須原　拓　2019　「岩手県沿岸地域の大木８a 式土器について」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』
七ヶ浜町歴史資料館　2018　『大木式土器の世界』大木囲貝塚国指定 50 周年記念　企画展図録
高橋憲太郎　1982　「縄文時代の遺物について」『柿ノ木平遺跡―昭和 50・51 年度発掘調査報告―』盛岡市文化財調査報告第 23 集
高橋保雄　1992　「石器類」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 57 集
中野幸大　2008　「大木 7a～8b 式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
丹羽　茂　1989　「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１』小学館
早瀬亮介　2008　「前期大木式土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆　2006　「東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料―山内清男編年基準資料―」『研究紀要』第５号　東北大学総合博物館
吉田泰幸　2003　「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』第 19 号
［発掘調査報告書］
秋田県教育委員会　2003　『和田Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第 350 集
大船渡市教育委員会　2020　『田代遺跡　平成 25 年度緊急発掘調査報告書』
岩手県教育委員会　1980　『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（西田遺跡）』岩手県文化財調査報告書第 51 集
岩手県教育委員会　1980　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』岩手県文化財調査報告書第 54 集
岩手県教育委員会　1982　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ-2（江釣子村鳩岡崎遺跡　遺物・要約・分析鑑定結果編）』岩手県文化財調査報告書第 70 集
須原　拓ほか　2018　『浜川目沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 689 集
星　雅之　2008　『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 510 集
星　雅之　2019　『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 694 集
北上市教育委員会　1983　『滝ノ沢遺跡（1977～1982 年度調査）』北上市文化財調査報告第 33 集
村木　敬ほか　2015　『払川Ⅱ遺跡・払川Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 643 集
盛岡市教育委員会　2008　『柿ノ木平遺跡・堰根遺跡―浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こうねいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	高根遺跡発掘調査報告書
副 書 名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査
巻　　次	第１分冊～第４分冊
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 724 集
編 著 者 名	西澤正晴（編） 丸山直美　河本純一　光井文行　中島康佑　佐藤　剛　久保友咲　野中裕貴
編 集 機 関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地　TEL（019）638-9001
発行年月日	2021 年 3 月 12 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
高根遺跡（こうねいせき）	宮古市（みやこし）山口（やまぐち）11 地割（ちわり）	03202	LG23-1253	39° 39′ 34.4″	141° 55′ 45.3″	2014.04.09 ～2014.11.14 2015.04.17 ～2015.12.11 2016.04.07 ～2016.10.17	10,460 ㎡	三陸沿岸道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高根遺跡	集落	縄文時代中期	貯蔵穴（フラスコ状土坑）　444 基 土坑　60 基 竪穴建物跡　95 棟 炉・焼土　８基 ピット（小穴）　17 個	縄文土器（北陸系土器を含む） 石器（石鏃・石匙・石槍・石錘・不定形石器・磨石類・石皿・台石類）、石製品（石棒・垂飾・玦状耳飾・軽石製品・サメ歯形石製品・有孔石製品・三角壔形石製品）、土製品（キノコ形・土器片円盤） 骨角器・貝製品（針など）、コハク	縄文時代中期の大規模な貯蔵穴（フラスコ状土坑）群の調査。約 450 基の貯蔵穴が急な斜面上に立地するのが今回調査の最大の特徴。 ヒスイ、アオトラ石、北陸系土器など遠方から持ち込まれた遺物も出土。
	散布地	縄文時代前期、後期、晩期、弥生前期～中期		土器類	
	製鉄	古代～中世	製鉄炉　２基 竪穴建物　２棟 土坑　４基 炉・焼土　１基	羽口、鉄滓	

要約	高根遺跡の３回目の調査となる。１・２回目は宮古市教育委員会の調査。調査の結果、縄文時代中期の大規模な集落であることが判明。約 450 基のフラスコ状土坑（貯蔵穴）が急な斜面上に展開する。竪穴建物跡は、比較的低い地点に立地。フラスコ状土坑（貯蔵穴）は、中期前葉に形成しはじめ、中期後葉から末葉までの間に構築され続ける。ピークは中期中葉であろう。これまでの調査も含めると、居住域、貯蔵域、墓域など尾根ごと（空間ごと）に分けられていることがわかる。また、時期ごとにもその空間配置が変化していることが判明した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 724 集

高根遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

（第１分冊）　本文編

印刷　令和３年３月１日
発行　令和３年３月12日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話　(019)638-9001

発　行　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029　岩手県宮古市藤の川４番１号
電話　(0193)62-1711
(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸 13 番１号
電話　(019)654-2235

印　刷　川嶋印刷株式会社
〒029-4194　岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原 21
電話　(0191)46-4161

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2021